

マンガ版GXしか知らない遊戯王プレイヤーが、アニメ版GX世界に跳ばされた話。なお使えるカードはロボットミー縛りの模様

黒月天星

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

事故で死ぬ直前、“元”神様と名乗る者に暇つぶしの相手として命を一時的に救われる主人公久城遊児くじょうゆうじ。

課題をクリアすれば助けてあげると唆されて、跳ばされたのは遊戯王GXに限りなくよく似た世界。

餓別だとはかりに知らないカテゴリのカードデッキを渡され、ここのデュエルアカデミアで卒業出来たら脱出できると無理難題を押し付けられる始末。

挙句の果てに「あれ? ……何か皆デッキの内容違くないか? それにこんな性格だったっけ?」と妙な違和感を覚える久城。

それもそのはず。久城の知っているのはマンガ版のGXだけで、アニメ版は見たことがなかったのだ。

筋書きは、分からないから面白い。

この作品は、ピクシブにも投稿しています。

十代対翔。翔の抱えるもの — 163

十代対カイザー — そして迫る転換点

積もる違和感。そして辿り着いた答え

—— 188

たとえ流れが分からずとも — 197

制裁タッグデュエルに向けて出来るこ

と — 207

タッグデュエル 遊児・隼人对十代・翔

その一 — 216

タッグデュエル 遊児・隼人对十代・翔

その二 — 226

タッグデュエル 遊児・隼人对十代・翔

その三 — 236

タッグデュエル 遊児・隼人对十代・翔

その四 — 246

ランク差別と憤る俺 — 260

ランク入れ替え戦前夜 三沢との対談

—— 270

ランク入れ替え戦前夜 万丈目に喝を

入れろっ！ — 280

入れ替え戦 万丈目対三沢 彼なりの

ケジメ — 288

エネルギーの消費は計画的に — 298

“元” 神と蝶頭の哀悼者の静かな飲み

	十代対サイコショッカー……そして	312	一	V S 遊戯デッキ 遊児対神楽坂	その	404
322	遊児対もう一体の精霊	333	二	V S 遊戯デッキ 遊児対神楽坂	その	413
	遊児対ダーク・ネクロフィア	その一	三	V S 遊戯デッキ 遊児対神楽坂	その	423
	遊児対ダーク・ネクロフィア	その二	四	V S 遊戯デッキ 遊児対神楽坂	その	433
	事後処理とお説教	352	五	V S 遊戯デッキ 遊児対神楽坂	その	444
	調査依頼と拾った人形	361		ぬいぐるみと編入生	その一	459
	伝説のデッキ特別展示	373		ぬいぐるみと編入生	その二	470
	遊戯デッキ盗難事件	382		ぬいぐるみと編入生	その三	482
	V S 遊戯デッキ 遊児対神楽坂	その		ぬいぐるみと編入生	その四	494

代表決定戦と怪しい男 その六

652

ジャーナリストとプロデュエリスト

663

クロノス先生危うし！ 迫る罰と審判

の時

もけもけパニック！ 語られる三鳥の

過去

もけもけパニック！ 重すぎる罰には

異議申し立てを

もけもけパニック！ 逆転判決

705

もけもけパニック！ 森に集う三鳥

716

突撃！ 茂木君の寮 その一

突撃！ 茂木君の寮 その二

閑話 幻想体紹介 その一

閑話 幻想体紹介 その二

閑話 模倣、再現、そして…… その一

閑話 模倣、再現、そして…… その二

閑話 模倣、再現、そして…… その三

閑話 模倣、再現、そして…… その四

閑話 模倣、再現、そして…… その四

閑話 模倣、再現、そして…… その四

閑話 模倣、再現、そして…… その四

閑話 模倣、再現、そして…… その四

724

733

748

766

その一

778

その二

787

その三

796

その四

805

	学園対抗戦	稲妻の帰還	814
	学園対抗戦	対峙する兄弟	823
	学園対抗戦	決戦前の対談	834
	学園対抗戦	マイクパフォーマンスと	
	最初の駆け引き		845
	学園対抗戦	アームド・ドラゴンの猛	857
	攻		
866	学園対抗戦	敵は目の前に在らず	
	学園対抗戦	決着	878
	挑むための一步		889
899	精霊が見える者達の団欒	その一	
908	精霊が見える者達の団欒	その二	
918	精霊が見える者達の団欒	その三	
929	閑話	ある人形の日常	その一
938	閑話	ある人形の日常	その二
947	閑話	ある人形の日常	その三
	課外授業は危険がいっぱい		958
969	課外授業	絶望を刺し貫く騎士	

	課外授業	星の名を持った騎士	979
	課外授業	微睡みの中でやってくる漁師	988
	閑話	課外授業 試練を乗り越えた者	998
	課外授業の後始末	その一	1010
	課外授業の後始末	その二	1019
	課外授業の後始末	その三	1030
	気遣ってくれる者達		1039
1051	接続話	ペストマスクを着けた男	
第二章	潜入!	セブンスターズ編	

	闇に集う者達と一人の代理	1060	
	入団試験	遊兎対ダークネス その一	1069
	入団試験	遊兎対ダークネス その二	1078
	入団試験	遊兎対ダークネス その三	1089
	入団試験終了	そしてセブンスターズの初戦	1098
	十代対ダークネス	そして明かされる	1107
	ダークネスの素顔		1117
	見舞いと貢物	そしてコウモリは見ていた	1117

スパイが素顔を晒す時

1129

アマゾネスは婿を探す

1138

遊兎対タニヤ その一 拳を交えて

1147

遊兎対タニヤ その二 軽率さの代償

1156

遊兎対タニヤ その三 変わる拳

1167

遊兎対タニヤ その四 決着

1177

閑話 案内人と森の中

1188

タニヤ対三沢 強かなれど一途な女

1197

甘い葛藤と買収騒ぎ

1208

迫る戦い一度に二つ

1217

井戸の底の再会

1228

想いと悩みとリターンマッチ

1239

再戦 タニヤ対三沢 知恵比べ

1250

再戦 タニヤ対三沢 想いを繋げる双

1261

竜

ある一つの想いの結末

1271

万丈目対長作 落ちこぼれの意地

1280

兄の心弟知らず

1294

読み聞かせも楽じゃない

1304

新たなセブンスターズと思わぬ事実

1341

	1314	黒蠍盗掘団と七精門の鍵奪取作戦		アビドス3世とデュエル馬鹿	1396
		の一		王様の学園の日々	1406
		――		王様とお別れ会	1413
		黒蠍盗掘団と七精門の鍵奪取作戦	そ	閑話 十代と（生涯）無敗	1423
		の二	そ	アビドス3世対カイザー	1434
		――		学園最強 その一	1434
		黒蠍盗掘団と七精門の鍵奪取作戦	そ	アビドス3世対カイザー	1443
		の三		――	
		――		学園最強 その二	1443
		万丈目対ザルーグ 名探偵と黒蠍		アビドス3世対カイザー	1453
	1355	――		――	
		白々しい偶然は良くあること	1366	学園最強 その三	1453
		――		アビドス3世対カイザー	1463
		バランスーと負けさせてもらえなかつ		――	
		た王	1377	学園最強 その四	1463
		――		――	
		協力者は多い方がよい	1387	閑話 幻想体だって遊びたい	1474
		――		――	

仮面の巨漢は光に感謝する | 1483

きれいなタイタンとコスプレ構想

1492

皆で悩む俺の服

罰は忘れた頃にやってくる

15101501

クロノス対タイタン 機械対悪魔

1518

クロノス対タイタン 闇に躍る闘牛士

クロノス対タイタン 闇を穿つ鳥と拳 | 1530

仮面の巨漢は闇へと消える | 1541

後日談と学園祭前夜。くせ者達の集う

15521541

夜

閑話 とある学園祭の一コマ |

15721561

学園祭開幕。宣伝は幻想体と共に

1579

縁日で消える人形と現れる光球

1589

閑話 魔法少女がやってきた |

1600

閑話 十代対紅葉 その一 小手調べ

閑話 十代対紅葉 その二 融合対融

合 | 1621

閑話 十代対紅葉 その三 削り合い

そして暗躍する人形 | 1630

閑話 十代対紅葉 その四 相棒

プリマ

1699

1638

閑話 十代対紅葉 その五 ジ・ア

明日香対カミューラ その三 扉は既

にその手の中に

1710

ス

探す遊児。見つけたカミューラ

1648

次に託された

明日香対カミューラ その四 願いは

1721

1657

閑話 幻想体紹介 その三

計画始動と集結する人外達

1731

女吸血鬼は頭を悩ませる

1743 計算は偶然に敗れ、七星は城に集う

1743

閑話 女吸血鬼のギスギスしたお茶会

一日限りの共同戦線

1753

明日香対カミューラ その一 女の戦

風雲カミューラ城攻略戦。そして辿り

1764

い

明日香対カミューラ その二 二人の

1690

魔法少女同士の戦い

1786

憎しみと対峙するは絶望

1776

決戦当日。餞別に“怪物”はいかが？

1950

閑話 役者は揃い、そして消える

1959

真名看破と決闘開始

1968

balanサー対万丈目 その一 始まり

のトランペット

1977

balanサー対万丈目 その二 読み合

い出し合い削り合い

1985

balanサー対万丈目 その三 審判鳥

対XYZ そして突然の……

1993

飛び去る鍵を追いかけるっ！

2004

閑話 語られる理事長の目的と、奮起

するクロノス先生

2013

クロノス対影丸 第一の幻魔

2014

クロノス対影丸 第二の幻魔

2033

クロノス対影丸 究極巨人対三幻魔

2033

2046

クロノス対影丸 絶望を与える魔拳

2046

2055

クロノス対影丸 決着 そして顕現す

2055

る黒翼

2065

戦うのは一人。しかし支えるのは皆で

2076

死闘の裏。駆け付けた者達

2086

賢者の石が導く奇跡

2094

賢者の石が導く奇跡

2094

- 夜はまだ終わらない ————— 2105
- 対峙する者達 ————— 2115
- 閑話 女吸血鬼の回想 ————— 2124
- 覚悟と妥協 そして仕込まれた罠 2134
- 逃げる者と追う者 立ちはだかる者と挑む者 ————— 2142
- 閑話 渋々進撃の幻魔とそれを阻む魔法少女 ————— 2153
- 万丈目対吹雪 その一 デツキから漂う闇 ————— 2161
- 万丈目対吹雪 その二 死者の世界 堕ちた黒竜 ————— 2169
- 万丈目対吹雪 その三 蘇る黒竜 2179
- 万丈目対吹雪 その四 目覚める意思 2188
- 万丈目対吹雪 その五 爆炎の決着 2196
- 閑話 信頼された男 ————— 2205
- 誇りある夜の貴族は見上げない 2214
- 遊児対悪霊 その一 死者と呪われた生者 ————— 2222
- 遊児対悪霊 その二 扉と門 ————— 2230
- 遊児対悪霊 その三 黒い森の怪物 2230

	遊児対悪霊	その四	対峙する幻魔と	2240
怪物	――			2253
	遊児対悪霊	その五	闇の黄昏を越え	2263
た者	――			2278
	夜明けの別れ	――		2289
	閑話	傍観者との短き邂逅	――	2299
の一	――			2308
	幻想体ドリームツアーにようこそ	――		2316
の二	――			2334
	幻想体ドリームツアーにようこそ	――		2349
の三	――			

	幻想体ドリームツアーにようこそ	その	2325
の四	――		
	閑話	幻想体ドリームツアーの裏話	2334
	戦いの代償。	そして事件の顛末	その
一	――		2340
	戦いの代償。	そして事件の顛末	その
二	――		2349

幻想体以外のオリカ紹介

『ロボットミューコーポレーション』

ファイールド魔法

効果

- ① 1ターンに1度、自分のスタンバイフェイズ時、デッキから三枚カードをめくる事が出来る。その中に幻想体カードがあれば一枚選択し手札に加える。
- ② このカードがある限り、幻想体の召喚に必要な生け贄は1体少なくなる。
- ③ 幻想体が場を離れる時、乗っていたPEカウンターは全てこのカードに置かれる。
- ④ このカードが破壊された時、場の幻想体に乗っているクリフトカウンター、PEカウンターを全て取り除く。

『エンサイクロペディア』

永続魔法

効果

- ① 1ターンに1度、場のPEカウンターを任意の数取り除くことで発動できる。

- ・ 2つ 手札のレベル4以下の幻想体を特殊召喚する。
- ・ 3つ 自分の墓地のレベル4以下の幻想体を1体、攻撃表示で特殊召喚する。
- ・ 5つ デッキのレベル4以下の幻想体を特殊召喚する。

『クリフオート暴走』

永続罠

効果

①1ターンに1度、フィールド上のカード1枚を選択し、乗っているクリフオートカウンターを全て取り除く事が出来る。

『人ならざるモノからのギフト』

通常魔法

効果

①手札の幻想体カードを1枚捨てる事で発動。カードを3枚ドロース、1枚を公開する。公開したカードが星2以下の幻想体だった場合、場に特殊召喚することが出来る。

そのカードが幻想体以外だった場合、手札を全て捨てる。

『鎮圧行動』

速攻魔法

効果

①場に幻想体カードがある時発動可能。場のモンスター1体を選択し、効果を次のターンまで無効にする。

『幻想体脱走』

通常魔法

効果

①メインフェイズ1にLP1000を支払う事で発動可能。自分の場の幻想体モンスターを1体選択し、そのカードより2つまでレベルの高い幻想体をデッキから攻撃表示で特殊召喚する。発動ターン、相手への戦闘ダメージは0になる。

『管理人の弾丸 シールド弾』

速攻魔法

効果

①場の幻想体モンスターを1体選択して発動。そのカードは1度だけ破壊を無効に出来る。

『幻想体再抽出』

通常魔法

効果

①自分の墓地の幻想体モンスターを1体特殊召喚する。

『業務終了』

永続罫

効果

①魔法・罨・モンスター効果の発動時、場のPEカウンターを5つ取り除く事でその効果を無効にし、破壊する。

『魔法少女の誓い』

通常魔法

効果

①場に“幻想体 魔法少女”が存在し、墓地にそれとは異なる魔法少女が2種類以上存在する時に発動可能。墓地から2枚選択し、1枚を手札に加え、1枚を場に特殊召喚する。このターン、魔法少女以外で攻撃宣言が行えない。

『階層移動』

通常罨

効果

①幻想体モンスターが攻撃対象になった時に発動可能。以下の効果を1つ選んで適用する。

・攻撃されたモンスターを手札に戻し、手札のレベルが1つ上か下のモンスターを特

殊召喚する。

- ・ 攻撃対象を自分の場の別の幻想体モンスターに変更する。

『幻想体解放』

速攻魔法

効果

①場の幻想体を任意の数墓地に送る。その後、その数×3以下のレベルの幻想体をデッキから特殊召喚する。

『非常事態警報』

速攻魔法

効果

①自分が一度で2000以上のダメージを受けたターン発動可能。デッキ・墓地から幻想体と名の付くカードを1枚選択し手札に加える。その後自分の場に幻想体モンスターが居ない場合、手札から幻想体モンスターを一体特殊召喚できる。

プロローグ

胡散臭い〃元〃神様に会った日

「バトルだ！ 『E・HEROフレイルム・ウィングマン』で、翔にダイレクトアタック！」
「うわあああつ!?!」

栗色の髪の少年が召喚したモンスターが、丸眼鏡の少年に直撃する。これにて丸眼鏡の少年のLPは0となり、そのまま立っていられずに尻もちをついてしまう。

「ガツチャ、楽しいデュエルだったぜ！ 翔」

「あいたたた。やっぱり強いっすよアニキは」

決闘^{デュエル}が終わり、二人の少年は互いの健闘を讃え合いながらがっしりと握手をする。こ
ういう風景は見ていて微笑ましい。

栗色の髪の少年は遊城十代。丸眼鏡の少年は丸藤翔。どちらも世界的に有名なカー
ドゲームの原作、遊戯王シリーズという物語の重要人物だ。

「お〜い遊児^{ゆうじ}！ そんなとこで見てないで、お前もデュエルやろうぜ！」

「そうっすよ久城君。一緒にやりましょうよ」

二人がオシリス・レッド寮の二階から眺めていた俺に声をかけてくる。

ここで疑問に思った人が居るかもしれないな。何故物語のキャラクターである二人に声をかけられるなんてことをされるのかと。

答えは簡単。俺は今その物語の中、正確に言うところを元に創られた限りなく本物に近い世界の中に居るのだ。

「そうだな。それじゃあちよつとだけやるとするかっ！」

やはりゲームは見てるだけでなく実際にやってこそだろう。今日は身体の調子も良いし、少しだけならやるのも良いかもしれない。俺はそう二人に返事をして階段を下りていく。

カタカタ。カタカタ。

「……ああ。分かっているよ『罪善さん』。羽目を外しすぎないようにするって」

俺は隣で宙に浮いている、半透明で十字架に貫かれた頭蓋骨にそう声をかけた。彼は恐ろしい見かけに反してとても優しく慈悲深いのだが、少し心配性の気があるのが玉に瑕だ。

もうこの世界に来てしばらく経つが、このような不可思議な存在にも少しは慣れてきたように思う。俺を呼んでいる二人の方に走り出しながら、ふとこの世界に来ることになった日のことを思い出した。

事の始まりは大分前にさかのぼる。



突然だが、神様転生という言葉聞いたことがあるだろうか？ それはライトノベルでもはやお約束となっている導入のパターンの一つだ。

主人公が何らかの形でその一生を終えるものの、これまた何らかの形で通称神様と呼ばれる超越者に出会い、新しい人生を別の世界で送ってみないかと誘われる。

そうして転生特典という何かしらの能力なり加護なりを携えて、その数多くは意気揚々と別の世界に赴くわけだ。

さて、何故急にこんな話をしたかというのだ。……俺が今まさにそんな状況に陥っているからだよコンチキショウっ!!

『正確に言うともまだ死んではないんだけどね。地面に激突するまで現実世界においてあと一秒も無いつて所だねこれはアツハツハ』

「笑い事じゃないつてのっ！ あとずつと落ちつばなしの体勢で喋るのキツイんで何とかしてほしいんだけど。頭に血が溜まっていく」

俺の今の体勢は、頭を下にして地面から少し浮いたところで静止している。このまま行けば頭がグシャツとなつてスプラッターな事態になること請け合いだ。

それをギリギリで阻止しているのが、俺の目の前で他人事みたいに笑う自称“元”神

様。出てくるなりいきなり『君は異世界転生という奴を信じるかい?』なんて言い出すので凄まじく胡散臭いのだが、実際にこいつが現れた瞬間俺を含めた視界の全てがピタツと静止しているのだから只者じゃない。

『別に逆さまでも僕は気にしないよ』

「俺が気にするのっ! この状態じゃ話すのにも差し障るから早く頼む」

『はいはい。それじゃあ話しやすくなるように……ホイっ』

目の前の自称「元」神様は、どこか子供っぽい仕草で指をパチリと鳴らす。すると俺の視点がそのままクルリと上下が入れ替わった。というか本当に子供じゃないかこいつは?

背丈はざつと百五十くらいで小柄だし、声も中性的だがどこかエコーがかかったような不思議な感じがする。体型は白いローブのような物を纏っているのでよく分からないうが、一番印象に残るのは顔の上半分を覆う仮面だ。どこぞのオペラ座にでも行くのだろうか?

「ふう。……あの、ありがとうございました。先ほどは命の恩人に対し、異常事態のため口調が荒くなつてしまったことをお許しくださいたい。え〜つと神様?」

『別に良いよ。あと「元」神様ね。口調もさっきのままで良い。さっきの方が素でしよう? それにこんな見た目だから敬語というのもなんかアレだしね』

「そ、そうか？ ……じゃあ改めて、助けてくれてありがとうな。どうやったのか全く分からないが」

やや胡散臭い所があるが恩人は恩人だ。頭を下げようとしたところ、

『あく……実はまだ助かってなくてね。ちよつと後ろを見てみなよ』

「後ろ？ 後ろつて………俺じゃんっ!？」

見ればまださつききの体勢のままの俺の身体がつ！ じゃあ今の俺はどうなってるの？

『逆さまで話しづらいという事だから、ひとまず意識だけスポットと……これなら話しやすいだろう?』

「だからってこんな幽霊みたいなのは嫌じゃあああつ!!」

なんかさつききから叫んでばつかな気がする。俺はツツコミキャラじゃないんだぞつ

!

『ひとまず落ち着いたかい?』

「はあ。はあ。……一応はな。ひとまずじたばたしてもどうにもならないってことは分かっちゃった」

どうにか元の身体に戻れないかと頑張ってみたこと数分。いくら力を込めても意識が身体に戻ることはなかった。だが同じく身体の方もピクリとも動いていなかったの
で、差し当たってこのまま落下死する心配は今はないと判断。

ならこの事態を引き起こしている目の前の何者かと話した方が賢明だろう。そう腹
をくくって意識だけ目の前のこいつに向き直る。

『落ち着いたんなら助かるよ。……じゃあ本題だけど、現在君の意識だけ思いつき引き延ばしている。だけど実際は時間はしつかり流れているから、このまま放っておくと
いつか地面に墜落して君は死んじゃうね』

「それは見たら分かる。つまりこれは走馬灯みたいなもんか」

流星に頭からじゃ助かりそうにない。足からでも助かる確率は低そうだけどな。人
間死ぬ直前に一秒が数十秒ぐらいに感じることもあると聞いたことがあるけど、俺のこ
れはやたら長いな。

『……言葉だけじゃなく予想以上に落ち着いているね。普通は死が目の前にあつたら
もつと慌てふためくと思うんだけど』

「そうは見えないだけで内心慌てまくってるよ。だけど現在進行形でこんな事態になっ
てたら、もう何が有っても受け入れるしかないだろうが」

『切り替えが早いのは良いことだよ。まあ個人的には慌てふためく姿を見るのも嫌い

じゃないんだけどね。割と面白いから』

「…………お前性格悪いだろ?」

『何故かは知らないけどよく言われる』

俺が目の前の奴への警戒を強めると、こいつはどこからともなく一冊の本を取り出した。その本をパラパラとめくり、途中のページで指を止める。

『え〜つと…………氏名は久城遊児くじょうゆうじ。二十四歳独身。家族は両親と妹二人の五人家族で住まいは…………』

「わあっ!! 待った待ったっ! 何それ闇魔帳っ!? 個人情報をばらすんじゃないよっ!」

『別に周りの人は聞いちゃいけないから大丈夫だよ。肝心なのはここからさ。…………君は今日仕事中、足を滑らせてビルの七階から落下した。間違いないかい?』

「……………ああ」

その通りだ。俺は会社で仕事中、うっかり書類を窓から飛ばしかけてしまった。外枠に引つかかった書類を取ろうとして身を乗り出した瞬間、ひととき強い風が吹いてバランスを崩し、それから今に至るって訳だ。俺は質問に頷いて応える。

『間違いない…………と。故意にでも作作的にでもなく、あくまで偶然による死。…………結構。じゃあ久城君。単刀直入に聞くけど…………君はまだ生きたいかい?』

「そりゃあ……死にたくはないな」

『生きたいと死にたくないはちよつと違うんだけど、まあ良いさ。なら君に、これから二つの選択肢を挙げよう』

そう言うのと、自称「元」神様は大仰に両手を広げる。

『一つ目は、このまま流れに身を任せること。当然君はそのまま死んじゃうね』

「死んじゃうね……じゃないよっ！ さつきの前振りはっ!? なんか助けてくれる流れだったじゃん」

『まあまあ慌てない。そのまま死んじゃうけど、君の魂をちよつと弄って別の世界に送る。今流行りの異世界転生って奴だよ。何なら適当なチートをあげるから無双しても良いし、可愛い女の子を侍らせてハーレムを作ったって良い。こちらからは特に強制もしないし、自由にやってくれて良いよ』

ライトノベルはこれでも時々読むから、異世界転生というのも大まかには知っている。何か話を聞く限りでは結構良い待遇だ。

『二つ目は僕の暇つぶしに付き合ってもらおう事。こつちの場合は課題を出すからクリアして欲しい。無事クリア出来たら……そうだね。この状況から君が死なないように上手いこと助ける。奇跡的に強風が吹いて植え込みに投げ出されたとかね。課題に失敗したらそれまでだ』

「……二つ目の方はそれだけか？」

『それだけだよ。助かったらそのまま君は普通にまた人生を送る。チートやなんかとは無縁の人生だ』

えらくかけ離れた二択だ。どちらか一つを選べと言われたら……まあ考えるまでもないけどな。

明暗を分けるマンガ本

「選ぶ前にいくつか聞いて良いか？　まず……え〜つと何て呼べば良い？　『元』神様って呼ぶのもなんか妙というかしっくりこないというか」

『色んな人が色んな呼び名で僕を呼んだからねえ。神とか悪魔とか魔王とか化け物とか……まあここ最近ではディーと名乗っているね。フィーリングで決めた名前だけど結構気に入っているんだ』

神はまだ良いとして悪魔とか魔王って……まるつきり正反対だな。

「何か物騒な呼び名ばっかだけど今は置いとこう。……じゃあディー。まず二つ目の方の課題って何だ？」

『それは選ぶまで内緒さ！　その方が面白そうだろう？』

「面白い面白くないの問題じゃないんだけどな。……次だ。何でこんな事を？　いやまあ選択肢を貰えるだけでありがたいとは思うんだけどさ。俺なんかしたっけ？　そんなに信心深くも無いぞ」

『正直な話……適当に選んだよ』

「適当かよっ！」

またアツハツハと笑うこいつに、もうなんだかツツコミ疲れて来たよ俺は。まともに相手をすると疲れるタイプだ。

『実を言うと、最近いくつもの世界の神様がうっかりミスをして、死ぬはずのない人を死なせてしまうなんて事案が多発していてね。ミスをなかつたことにするべくこつそりその死者を別の世界に送ったりしている訳なんだけど、そうなるとその世界の魂の勘定が合わなくなるんだよ。だから緊急措置として、ひとまず別の死ぬはずの人間を代わりに延命させたり、魂が足りない世界に多い世界から送ったりするわけだね』

そんなうっかりミスが多発するというのは考えたくないな。どこの世界か知らないが神様ちゃんと仕事しようよ。

「なるほどな。……じゃあ俺は元々これで死ぬはずだったのか？」

『そうだね。だけどそもそもこの話は、近々死ぬ運命にある人にしかしないことにしているんだ。この世界でもさつき言ったようなことが起きていてね。今なら生者の枠が空いているんだよ。助かるチャンスって訳さ！』

「……ちよつと待った。じゃあ何でまた異世界転生の選択肢もあるんだ？ 余計勘定が合わなくなるんじゃないか？」

『そつちは完全に僕の趣味。送った人の人生を観察するのがマイブームでね。それにどのみちこの世界には声をかけるべき人は沢山いる。今更数人追加したって帳尻を合わ

せるのは簡単なのさ。ただ、君以外にもこれまで何人か声をかけたんだけど、誰も彼も皆して異世界転生を選んだよ。趣味がはかどるのは良いんだけど……そんなに自分の育ってきた世界が嫌なのかね』

自分の趣味で人を異世界に送るとのたまったデイーに心の警戒アラートが鳴りまくるが、その後の言葉には少しだけ寂しげな感じがした。

「そりゃあ単純に考えたら、異世界転生の方が割が良いだろうな。……でだ。ひとまず今までのことを考えた上で選択肢を選ばせてもらうとだけど」

そこで俺は一拍おいた。デイーも口を閉じて俺の答えを静かに見守る。と言っても最初から答えなんてほぼ決まっているが。

片や今までの人生を手放して、異世界にて新しい人生を送る。何らかのチートを貰い、金、女、名誉にはほぼ困らない、成功のほぼ約束された人生。

もう一つは課題の内容すら分からない。課題に失敗したらそれまでで、成功したとしても命が助かるだけ、それ以外に何か貰えるという訳でもなく、この世界でまたこれまで通りの人生を送ることになる。

やはり考えるまでもないな。

「……二つ目だ。お前の暇つぶしに付き合うよデイー。俺は生きるために動く」

『……少し意外だな。なんで一つ目を選ばなかったの?』

「デーは少し驚いた様子だった。自分で選択肢を出しておいて驚くなよ。」

「何でってシンプルな話だよ。転生も何も、そういうのは死んでから考えるもんだろ。助かるチャンスがあるならまずそこからつかかるのが筋だ。死後のことは人生をしつかり生き抜いてからでも遅くは無いっての」

『……………アツハツハツハ。なるほどなるほど。確かに君の言う通りだ。君はまだ死にかけているだけで死んではないんだものね。……この状況になっても生きることを選択めないか』

「当たり前のことと言ったはずなのに何故か笑われた。そんなに大笑いするようなことだろうか？ まあ良いけど。」

「それじゃあ選んだという事で、早いところ課題の内容を教えてください。こうなったらさっさと終わらせて無事奇跡の生還を果たしてやるよ。新聞に載るくらい派手な奴をな」

『その意気は大いに結構。実に期待が持てるね』

「デーがひとしきり笑い終わるのを見計らい、俺は早速課題の催促をする。とはいうものの課題とはいったい何をやらされるんだ？ 目の前で口元だけニヤニヤと笑う

デーが、簡単な課題を出してくれるというのは楽観的過ぎるだろうな。

『では君に出す課題だけど……実はまだ決めてないんだ!』

「決めてないんかいっ!?!」

俺はバランスを崩してずっこけそうになる。こらそこの「元」神様。おどけてテハペロしたつて駄目だからな。

『元々今回の件はかなり辻褃合わせな所があるからねえ。ぶっちゃけた話タダで人を延命させても良いんだけど、それじゃあ流石に神としての威厳やら何やらに関わる。だから各自に適当な課題と言うか試練を与えて、成功したら助けてあげようってことなんだよね。多分その方がありがたみを感じて信仰に繋がるとか思ったんじゃないのかな?』

僕は「元」神様だから関係はないんだけどね」

「そりやまた微妙に恩着せがましいことで。じゃあここは一つほどほどに簡単な奴にしてくれよ。八十日間世界一周とかどうだ?」

『昔ならともかく今じゃ金さえあれば簡単だからねそれ。そういうのじゃなくてもっと僕が楽しめそうな……おやつ?』

微妙に難題と言えない難題を提案するも却下され、じゃあどうしたものかと思案する中、ふとデーが止まっている俺の身体を見て何かに気づくと、そのまま動けない俺の服の中に手を入れる。

「わっ!? ちよ、ちよつとやめろっ!」

俺意識だけだから動けないのにつ! そしてそのままゴソゴソとまさぐると、服の内ポケットからマンガ本を取り出した。さっき休憩の時に読み終わった遊戯王GX最終巻だ。

『おやおやく? いけないヒトだね久城君は。仕事中にこくんなのを持つてくるなんて』

「……別に良いだろ。休憩中に本を読んだって」

実を言うと、俺はこう見えて子供の頃遊戯王カードゲームにはまっていた。きつかけは5D's編をテレビで見た時だったかな。レースしながらカードをやるといふつとんだ話に、子供心に憧れたものだ。

そこから小遣いをカードに費やし、近所の友人達とよく家で決闘に勤しんだ。ここ数年はあまりやれていなかったが、最近久しぶりに近くのカードショップに顔を出して遊戯王熱が再燃した。

『久々に昔のデッキを引っ張り出して勝負を挑んでみたが、やはり数年のブランクは大きくボロ負け。ブランクを埋めるためにひとまずマンガ版をまとめ買いしなんと一日で読破と。ちなみに無印とGXのみ買ったのは何故?』

「その二つはアニメで見たことが無かったから予習がてらな。ショップで最後に戦った

のはHERO軸だったのもあるし、無印とGXは密接に繋がっているというのも小耳に挟んで……って、自然に途中から人の考えを読むんじゃないっ！」

今にして思えば、その一気読みがたたって足を滑らせたのかもしれない。流石に休みだからって合わせて40冊以上だったからな。疲れが残ったんだ。次からは控えめにして。

『いやあゴメンゴメン。ってことはカードデッキも持ってきているのかい？』

「流石にそれは家の自室にある。会社でやる相手もないしな」

居たら休憩時間にやるくらいはあるかも知れないが、生憎そういう相手は居なかった。残念だ。

『……………よし。良いこと考えた。君への課題はそれでいこう！』

「それでって……まさか公式大会に出て優勝しろとも言うつもりか？ 言つとくけどブランクを差し引いても難しいぞそれは」

シヨップの大会ですら昔に比べてハイレベルになっているんだ。今の公式大会はまさしく人外魔境か何かだと言える。そんなとこに俺が出ても一回戦で多分負けろぞ。良くて二回戦がやつとだ。

『いやいやそんな事は頼まないよ。今から君にやつてもらうのは……一種のシミュレーションだ』

「シミュレーション？」

『そう。なくに心配しないでよ。ブランクが消し飛ぶくらいにカード漬けの毎日を体験してもらおうから』

「カード漬けて……何か嫌な予感しかなかったけど」

『まあ百聞は一見に如かず。習うより慣れる。という事で……じゃあさっそく行ってみようっ！』

「ちよつと待……」

何か不吉な感じがして咄嗟に止めようとしたが、止めるための手も足も動かない。そして制止するより早くデイーが指をパチリと鳴らしたかと思うと、俺の意識は暗闇に包まれた。

そして次に気がついた時、

「な、なんじゃこりやあぁっ!？」

目の前に頭蓋骨が浮かんでいた。俺は地獄に来てしまったのだろうか？

第一章 やってきましたGX世界

うちの精霊は骸骨でした

「なっ!!? ななっ!!?」

俺は驚いて尻もちをつき、そのまま謎の頭蓋骨から距離を取るべく後ずさりする。だが頭蓋骨はカタカタと音を鳴らすだけで、その場にふよふよと浮いたまま動こうとはしなかった。

ひとまずは襲ってこないと判断するが油断はできない。何せ宙に浮く頭蓋骨ってどんなホラーだよまったくもう。……って、俺の身体動くじゃん!!? だけど何か違和感があるような。

『やあやあ無事に着いたみたいだね。良かった良かった』
「デイーか? どこに居るんだ?」

どこからか声はすれども姿は見えず。俺は目の前の頭蓋骨に軽く注意しながらも周りを見渡す。

ここは……どこかの室内だろうか? 見える範囲ではやや年代物のブラウン管テレビに三段ベッド。壁際に設置された机が二つに本棚、流しやコンロもあるな。試しに

弄って見るとちゃんと水も火も出る。あとは窓と外に通しているらしき扉。何となく
大学時代の学生寮を思わせるな。

そんな風に思っていると、頭蓋骨の後ろからフワフワと白い光の球が飛んできた。何
だこれ？

『ふっふっふ。僕だよ僕！ こつちには直接は入れないからね。代わりにこの格好で失
礼するよ。それと良い勘してるね。その通り。そこはオシリスレッド寮の一室だよ』

光の球からデイーの声がする。なんか蚩みたいだな……って!?

「オシリスレッドって……あのオシリスレッドかつ!? GXの十代とかが所属している
あのっ!？」

さらつとまた考えを読まれたのは置いておいて、聞き覚えのある言葉が出たことに驚
きを隠せない。あと知らない人が見たら完全に独り言をブツブツ言っている危ない人
だよな俺。大丈夫かな。

『その通り。要点だけ説明すると、君は今遊戯王GXの世界に居る。……と言っても本
物に限りなく似たシミュレーションの世界だけどね』

「シミュレーションって……これがか？」

俺は机に手を乗せてみる。この滑らかな木の感触……とてもシミュレーションとは思
えない。しかし思い返してみると、確かに以前読んだ中にこのような室内の様子が描

かれていた記憶もある。

『こんなことを考えたことはないかな？　もしあの時、あの場所であんなことがあったらとか。君は言わばそういうI Fの世界を体験しているのさ。ちなみに今回の条件付けは、もし遊戯王GXの世界に君という異分子が存在したら』というものだよ』

どこぞの青い猫型ロボットがそういう道具を持っていた気がするな。

「まあシミュレーションだというのは信じよう。前提として信じなきゃ何も始まらないものな。……それで？　俺はここで何をすれば良いんだ？」

『まあ僕としては今の君を観察できればそれで良いんだけど……分かりやすい目標は確かに必要だね。ではここはシンプルに、このデュエルアカデミアを卒業する』としておこうか。あくまでここを卒業なので退学や転校は失敗扱い。留学や留年なら状況によつて判断する……といった所でどうだい？』

また無茶苦茶なことを言ってきたよコイツは。

「あのなあ。俺は二十四歳。今年で二十五だぞ。おじさんとは言わないけど学校に通うにはちよつと年がいつてないか？」

『おやおや〜！　気付いてないのかな？　今の君は二十四なんかじゃないとも！』

「えっ？　……まさかっ?!」

鏡っ！　鏡は無いかっ！　ざっと探したが見つからないのでブラウン管テレビで代

用。見づらけれど一応は分かる。……それに映っていたのは、明らかに少し若くなっている俺の姿だった。

軽く毛先が跳ねた黒色の癖つ毛に、丸みを帯びてやや童顔と言われていた顔。背も少し縮んでいるようで百六十いかなないくらいか。成長期が遅くて、百七十近くまで伸びたのは高校三年くらいだったからな。もうちよつと早く伸びてほしかつたと当時は思っただものだ。

『シミュレーションだといったろ？ 流石に肉体年齢くらい弄ってあるさ。おおよそ十五歳くらいに設定してある』

「……まいった。一気に十歳近く若返るとかそんなのアリか？」

『若返るくらい死の運命を変えるのに比べたらなんてことはないと思うんだけどね。さあ。次に行こうか。机の引き出しを開けてほしい』

もう少し呆然自失の状態で居たかったのだが、ディーにせっつかれてふらふらと引き出しを開ける。そこには一つのデツキケースが入っていた。……俺の使っていた奴に似ているのはディーの配慮だろうか？ 中を開けてカードを確認する。

俺の使っていたのはジャンク系を中心としたシンクロ主体のデツキ。昔作ったのを最近の環境に合わせて改良したものだ。シミュレーションとは言え自分のデツキを使えるものだと考えていたのだが。

「……俺の使っていたデツキじゃないな。何だこれ？ ……
//アブノーマリティ
幻想体//？」

『君が使っていたシンクロ系はちよつと未来のものだからね。今下手に使うと問題になる。なので代わりにデツキを用意したよ』

中に入っていたのは俺の知らないカテゴリのデツキだった。まあ俺もブランクが長いから、知らないカテゴリが有つても不思議じゃないが。

しかしエクストラデツキが一枚もない所を見ると、余程古いか専用構築が必要なデツキか？ 帝デツキのようにむしろエクストラデツキがない方が強い場合もあるしな。

『知らないのは当然だね。だってそれは別の世界のキャラクターを元にしたデツキだもの。いわゆるオリテーマという奴さ。君にはそれを使つてもらおう』

「なるほど……つてそれはそれでマズいんじゃないか？ 未来のカードと別の世界のカードでどつちがマズいかは別として、つまりはこの世界でこれだけしかないレアカードつてことだろ？ 色々と問題なんじゃ？」

『そこに関しては問題ないよ。実際作品内で世界に数枚しかないカードが出てきても、強盗に力づくで盗られるなんてことはほとんどなかっただろう？ この場所はそれだけセキュリティがしっかりしているつてことさ』

確かにマンガで読んだ限りでは、GXの主要メンバーの何人かが持っていたプラネットシリーズなんかはそれぞれ世界で一枚のはずなのに普通に使われていた。無印では

大規模なカード強盗集団が居たが、それも基本はアンティールによるものだったからな。だけど、

「デュエルで奪われそうになるってのは多々あった気がするけどな。……じゃなくて、俺が言いたいのは目を付けられるんじゃないかってことっ！ 卒業するだけなら別に目立たなくても良いだろうに」

奪われたりはしないかもしれないが、奇異な目で見られたり噂になることは充分あり得る。目立つのが嫌って訳じゃないが、誰かに纏わりつかれるのは御免だ。

『心配性だね君も。大丈夫。ただ珍しいカードを持っているだけじゃ問題にはならないよ。まあ卒業するためにはデュエルは必須だから、嫌でも周りに注目されるけどね』

「デイー。……楽しんでるだろ」

『まあね！』

……いかん。コイツが性格が悪い愉快犯なのは、これまでの言動から分かり切っていたことじゃないか。気を落ち着けなければ。

「……ちなみに新しくデツキを作ってそっちを使う事は？」

『汎用カード数枚の入れ替え程度ならともかく、別のカテゴリを使う事は認められないなあ。こっちの方が面白……ゲフンゲフン。いや、こちらの方が課題としてふさわしいからね』

今面白そうって言わなかったかこの野郎っ！ 現実でも相手によって微妙なデッキの調整が必要になるってのにデッキ縛りとか。

『まあまあ落ち着いて。前向きに考えようよ。これでどんな相手にも対応できるようになったら、その技術は現実世界に戻っても役に立つんじゃないかな？』

「ここでもしか使えないオリテーマだけだな。……それはそうと、そろそろ放っておくのも限界だから聞くけどさ。この頭蓋骨はいつたい何なんだ？」

さつきから話している最中も、じくつと俺の方を見つめている。特に何かしてくるわけではないが、見た目が見た目なのでどうにも気になる。

『そうだった。まず彼を紹介しないとね。彼の名前は『幻想体 アブノーマリテイ たった一つの罪と何百もの善』。通称罪善つみぜんさん。君のカードの精霊さ』

「カードの精霊……ってこれがっ!？」

カードの精霊っていうとアレだろっ！ GX世界で言うなら十代にはハネクリボー。万丈目には光と闇の竜だろ。いわゆる物語の重要なキーカードだ。だというのに。俺は一度じっくりとその罪善さんを見つめる。

宙に浮かぶ頭蓋骨。一言で表すとそれだが、よく見れば意匠は割と細かい。下部の折れた十字架に磔……というか貫かれていて、額の辺りには赤い茨のような冠が巻き付いている。あと骸骨なのだから瞳が無いのは当然だが、その中を覗き込んでも全く奥が見

えない。暗闇そのものと言っても良い。

「これがカードの精霊って……ちよつとキワモノ過ぎないか？」

『そうかな？ 見た目はともかく幻想体の中では一、二を争うほど優しく安全だよ彼は。その証拠に、君は彼と会ってすぐに落ち着きを取り戻したろう？ 彼の近くに居るだけで、ある程度精神を落ち着かせる力があるんだよ』

そう言えば最初こそ警戒したが、すぐに見られていても気になる程度に落ち着いた。普通は宙に浮く頭蓋骨なんて見たらそれだけでパニックものなのに。今もひどく落ち着いているのはどうやらこの罪善さんの力らしい。

『それに罪善さん一人でパニックを起こしてたらこの先やっていけないよ。何しろ幻想体の大半は精霊化できるんだからね』

「……………ホントか？」

『ホントホント。そしてほとんどが罪善さんみたく優しくはないね』

「……………なんてこつたい」

カードの精霊って物語のキーカードだろ。それが何で何十枚も俺の所に集まってるんだよっ!! 俺は衝撃の事実で愕然とする。

『まあ一つずつ紹介するのも手間だからね。……どうだろう？ ここは紹介も兼ねて、腕慣らしに一つやってみるといっうのは？』

「やってみるって……何を？」

『ここまでできたらやることは決まっているだろう？ ……デュエルだよ！』

その言葉と共に、デッキケースに入っていたカードがふわりと浮かび上がって俺の下に飛んできた。

どうやらこの世界での初戦の相手は “元” 神様になったらしい。

デイーとのチュートリアルデュエル その一

『では早速やってみよう。そこに座って』

「ああ。……とところで時間は大丈夫か？ さっきから時計が全然動いていないんだけど」

机は壁際なのでデュエルに使いづらく、代わりに床に胡坐をかいてデツキを置いたのだが、壁にかかっている時計を見ると針が一切動いていない。壊れているのかと思っただが、すぐに目の前の奴が多少時間を操作できることを思い出す。

『今は言わばチュートリアルだからね。その扉を開けた瞬間からシミュレーションはスタートする。その前にじっくりデツキの調整をしようじゃないか』
「あんまりじっくりはしたくないけどな」

俺はデツキを手に取り、内容をざっと確認した後シャッフルする。……しかし見ては見たものの、かなりややこしいデツキだぞこれは。

デイーの光球の前にも不意にデツキが出現した。……というかその状態でデュエルすんのっ!?

『今回はチュートリアルという事で、こちらと同じデツキを用いたミラーマッチだ。た

だあくまでコピーだから、精霊として実体化できるのはそっちのカードだけだね』
つまり俺の横で浮いている罪善さんが二体も三体も現れたりはしないってことか。
もうあまり怖くはないけど、インパクトのある顔が多いのは心臓に悪いので助かる。

「ミラーマツチか。ルールは？」

『基本はGX世界に準拠する。つまり』

「……LP4000で表側守備表示もアリってことか」

現実では無理だが、作中ではモンスターを表側守備表示で出すシーンが多々見られた。それが可能となると、モンスターを出す際の戦略が少し変わってくる。

『普通に裏側守備で出すのも当然アリだ。他にもGX世界ならではのルールがあるので注意してね。じゃあ……始めようか』

そうディーが言った瞬間、背筋を一瞬寒気が襲う。どうやらやる気になったってことか。……最近まともにカードに触れていなかった俺だが、それでもこれだけは分かる。

目の前にいる奴は、紛れもなくヤバい奴だと。

「デュエル!!」

遊児 LP4000

ディー LP4000

作中よろしくノリでデュエル宣言したが結構楽しいな。ちなみに今回のデュエルは立休映像ではなく普通のテーブル（床だけど）デュエルだ。ちよつと残念。

『先手は僕がもうよ！ 当然GX世界準拠なので初手ドローは有りだ。ドロー！』

光球の前にデッキから五枚、加えてさらに一枚浮かび上がる。あつ！ そういうやり方なのね。

『僕は手札から『幻想体 キュートちゃん』を攻撃表示で召喚するよ』

キュートちゃん 星2 獣族 地 ATK1000 DEF800

場に出されたのは、白いモフモフとした可愛い子犬だ。絵柄だけだがさぞ映像で出たら愛らしいのだろうな。

『キュートちゃんの効果発動。召喚、特殊召喚、リバースした時、このカードにクリフオトカウンターを二つ乗せる』

見るからに禍々しい色のカウンターが二つ、キュートちゃんのカードの上に乗せられた。

『さつきデッキをざつと確認したから分かんと思うけど、 “幻想体” の大半はフィール

ドに出た時このクリフォトカウンターが幾つか乗る。カウンターはカード毎に特定条件で減少し、自分のターン終了時にカウンターが無いと効果が発動。大概是デメリットだね』

「全てそう……つて訳でもなさそうだけだな」

『その通り。まあ戦いながら説明しよう。……さらに僕はフィールド魔法『ロボトミーコーポレーション』を発動するよ！』

次に場に出されたのは、逆さまの生命の樹セフィロトを模した形の巨大な施設だった。セフィロトの小径の部分はそれぞれまたいくつかの部屋に分かれ、全体ではどれだけの部屋があるのか分からない。

『このカードは四つ効果がある。まあ最後の一つは実質デメリットなんだけどね』

「だがこのデュエルはミラーマッチ。つまり俺の幻想体もそのフィールド魔法の影響を受ける」

『そういう事！ 当然君のデツキにも同じカードがある。これから上手く使つてね！

……僕はカードを二枚伏せてターン終了』

ターン終了と同時にキュートちゃんのクリフォトカウンターが一つ減る。どうやら自分のターン終了毎に一つ減るらしいな。

キュートちゃん CC2↓1

ディー LP4000 モンスター1 ロボトミーカーポレーション 伏せ2 手札2

『さあ。君のターンだ』

「言われるまでもないさ。俺のターン。ドロー！ そしてここで『ロボトミーカーポレーション』の一つ目の効果を発動する」

『おや。よくテキストを見てたね。一つ目の効果は自分スタンバイフェイズにデッキから三枚めくり、その中に幻想体があれば一枚手札に加えることが出来る効果。これは僕が使うタイミングを間違えたかな？』

よく言うよ。さっきからの動きは皆、俺に教えるためのプレイングだろうに。そうでもなかったらわざわざキュートちゃんを攻撃表示で出すかつての。表側守備でも出せるつてのに。

フィールド魔法だって、俺が効果に気づいて使うか試してたんだろう。まったく白々しい。

「俺はカードを三枚めくり……これだ。『幻想体 雪の女王』を手札に加える。そして『ロボトミーカーポレーション』の二つ目の効果。このカードがある限り、幻想体の召喚に必要なリリースは1体少なくなる。よって星5の雪の女王をそのまま攻撃表示で召喚する」

雪の女王 星5 ATK1900 DEF2000 魔法使い族 水

俺のフィールド上に、黒いドレスの上に白いローブを纏った女性らしきモンスターが召喚される。らしきというのは絵柄的にその肉体は透明で見えず、顔の部分には仮面と王冠が浮かんでいただけだからだ。これ映像で出たらどんな風になるんだろうか？

『一応言っておくけど、この世界ではリリースではなく生け贄だからね』

「そうだった。次から気を付ける。ちなみにこのカードにはクリフオートカウンター云々は記載されていない。……幻想体の全てがクリフオートカウンター持ちって訳じゃないみたいだな」

『あくまで大半だからね。それでどうする？ そのまま攻撃するかい？』

「いや。ここで雪の女王の効果を発動だ」

雪の女王は1ターンに1度、相手フィールド上のこのカード以下の攻撃力のモンスター1体を除外し、このカードの攻撃力を300上げる効果がある。ただし、

「俺はキュートちゃんを指定する。ただしこの効果は、相手は1000LPを払う事で無効にできる。どうする？」

『止められるけど……雪の女王が戦闘で破壊された場合効果で除外されたモンスターは帰ってくる。それを狙って今回は止めないでよくよ』

「分かった。では効果によりキュートちゃんを除外。その後雪の女王の攻撃力は300

アップだ」

雪の女王 ATK1900 ↓ 2200

「バトルフェイズ。雪の女王でダイレクトアタックだ」

『ほうっ！ 普通に殴ってきたね。では……こちらも普通に受けようかな』
「なにつ!？」

ディーはダイレクトアタックを受け、一気にLPが半分を切る。

ディー LP4000 ↓ 1800

「二枚も伏せてあるから何かしら仕込んでいると思つたが」

『いやいや。深読みしないでよ。僕もそんなにカードが強い訳じゃないんだから』

明らかに怪しい。実際ディーの声にはまだ余裕が感じられる。

「まあ良いさ。こっちはこっちで手を進めるだけだ。雪の女王の効果。このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを3個乗せる」

雪の女王のカードに、黄色と緑の配色のカウンターが乗る。

『PEカウンター。これも幻想体特有のカウンターだね。幻想体共通の効果で、戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカウンターを得る。数は幻想体によって違うけどね。そしてPEカウンターを消費することで使えるカードもある』

「説明どうも。……メインフェイズ2。俺は手札から永続魔法『エンサイクロペディア』

を発動。効果は使うPEカウンターの数によって変わるが、俺は二つ使って効果発動。1ターンに1度、手札のレベル4以下の幻想体を特殊召喚する。俺は手札の『幻想体宇宙の欠片』を準備表示で特殊召喚だ」

雪の女王のPEカウンターが二つ減り、代わりに手札から子供が描いた落書きのような不定形のモンスターを特殊召喚する。

姿をあえて例えるなら、黒い球体に四本の触手のような手足があり、身体にハートのような模様が幾つか散りばめられているといった所か。ぴよこんと上部に突き出ているハート形の付属物が何とも微妙だ。

宇宙の欠片 星2 ATK1000 DEF1200 天使族 光

「これも場に出た時クリフォトカウンターを二つ乗せる。そしてカードを二枚伏せ、ターン終了だ。ターン終了時に効果により、宇宙の欠片のクリフォトカウンターは一つ減る」

よし。ブランクの割には良い流れだ。後攻2ターン目で相手のLPを半分以下に削り、フィールドもこつちの方が優勢。宇宙の欠片は戦闘時に相手に500の効果ダメージを与える効果があるし、相手も下手には攻撃できない。

向こうが教えながらだから全力じゃないのは分かるけど、次のターンもこのまま一気に、

『このまま一気に押し切ろう……とか思っていないかな?』

ディーにまさに今思っていたことをズバリ言い当てられ、心でも読まれたかと一瞬ゾワツとする。

『別にインチキはしてないよ。ゲームでそういうズルは興が削がれるからね。ただ……次のターンのことを考えるのはまだ早いんじゃないのかな?』

それはどういう事かと聞き返す前に、ディーの場の伏せカードがオープンされる。

『宇宙の欠片の効果にチェーンして永続罫。『クリフオート暴走』を発動。1ターンに1度、フィールド上のカード1枚を選択し、乗っているクリフオートカウンターを全て取り除く。僕が選択するのは宇宙の欠片だよ』

その瞬間、宇宙の欠片のカウンターが全て消失する。マズイっ! このタイミングは。

『そしてターン終了時にカウンターが無いため、当然宇宙の欠片の効果が強制的に発動する』

宇宙の欠片の効果。自分のターン終了時、このカードにクリフオートカウンターが乗っていない場合、互いのプレイヤーに800ダメージを与え、その後またクリフオートカウンターを二つ乗せる。

遊兎LP4000↓3200

デイルLP1800↓1000

『ダメだよ久城君油断しちゃ。幻想体にとってターン終了時こそが一番危ない時なんだから。当然このタイミングで自身の効果でカウンターが0になっても効果が発動する訳だからね。気を付けるように』

「くっ！……ああ。確かにデメリットには気を付けないとな。だけど800くらいまだまだ余裕だな。むしろそっちの方がもう後がないんじゃないか？」

デイルの残りLPは1000。もう下手をすると効果ダメージか何かで倒れるんじゃないかってぐらいの瀬戸際だ。だというのに、

『1000あれば充分さ。僕のターン。ドロー！ 久城君こそ折角のチュートリアルなんだ。……このターンで終わってくれないでよね』

目の前の“元”神様は、自身が負ける気などまるで無いようにふふんと笑ってみせた。

ディィーとのチュートリアルデュエル その二

遊児 LP3200 モンスター 雪の女王 宇宙の欠片 魔法・罾 エンサイクロ

ペディア 伏せ2 手札2

○ディィー LP1000 モンスター なし 魔法・罾 ロボトミーコーポレーション

ン クリフオト暴走 伏せ1 手札3

さつきまでずっと静かに浮いていた罪善さんが、まるで警戒しろとばかりにカタカタと骨を鳴らしている。油断したらやられるなこりや。

『さて。僕のターンだけど、まずフィールドの『ロボトミーコーポレーション』の効果を発動。デッキから3枚めくり、幻想体があれば手札に加えることが出来る』

ディィーはそう言つてデッキから3枚めくり……何も言わずデッキに戻してシャッフル。何も出なかつたらしい。

『まあそういうこともたまにはあるさ。これは君も使っていたら稀に起こり得ることだからね。気を付けるように』

「気を付けるって……こればかりは運だろうよ」

『こほん。え〜つと、僕は手札から魔法『人ならざるモノからのギフト』を発動。これは手札の幻想体1枚を捨てることでカードを3枚ドロウする。そしてドロウしたカードの中に星2以下の幻想体があった場合、それを公開することで1体まで特殊召喚できる。……まあもし1枚も幻想体が無かった場合、そのまま手札を全て捨てるデメリットがあるんだけどね』

デイーは光球なのに軽く咳払いをした後、魔法カードで手札補充に加えてモンスター展開を狙う。しかしフィールド魔法といいこれといい、やや運に左右されるところはあるけどかなり強力なカードだ。

『僕は手札の『幻想体 輝く腕輪』を捨て、カードを3枚ドロウ……今度は来たね。今引いた『幻想体 蓋の空いたウエルチアース』を公開し、守備表示で特殊召喚だ』

フィールドに出されたのは、派手な装飾のされた自動販売機の前に立つ、2体のエビの頭をした魚人のカードだった。何故かエビなのに漁師の格好をしている。……突っ込みたい所は多々有るが、むしろ獲られる側では？

蓋の空いたウエルチアース 星1 ATK700 DEF400 魚族 水

『さあ次だ。僕は手札から永続魔法『幻想体 ラ・ルナ』を蓋の空いたウエルチアースを対象にして発動！ 自分フィールドにラ・ルナトークンを攻撃表示で特殊召喚し、ラ・ル

ナ本体にはクリフオトカウンターを3個乗せる』

次に場に出されたのは、古いピアノと椅子に座った老婦人の描かれたカード。おそらく選択したカードがピアノを弾くとかそういう流れなのだろうけど……あのエビが弾くのか？ 想像したらシユールだ。

ラ・ルナ C C 3

ラ・ルナトークン 星6 ATK2200 DEF1700 天使族 光

『ラ・ルナで選択したモンスターは攻撃が行えない。そして選択したモンスターがフィールドから離れた時ラ・ルナは破壊され、トークンも消える。本体は意外に軟なんだよね』

「だけどほぼデメリットなしで攻撃力2200をタダ出しかよ!? 割と強くないか」

『驚くのはまだまだこれからさ。さらに僕は伏せてあった永続罫『幻想体 1. 76

M H Z』を発動。効果によりモンスター扱いで守備表示で特殊召喚だ』

まだディーの展開は終わらない。開始からずっと伏せてあったカードがリバースし、ノイズのような絵柄のカードがモンスター扱いで現れる。

1. 76 M H Z 星2 ATK0 DEF1700 雷族 光

「こいつをさっきのターン壁にしなかったってことは……生け贄要員か!」

『そういうこと! ただこのカードには他にも効果があつてね、1ターンに1度、互いに

モンスターの置かれていない自分のモンスターゾーンの数×200ダメージを受けるのさ。

「くっ！ こっちの使っていないゾーンは三つだ」

『こちらには二つ。よって互いに600ダメージと400ダメージだ』

遊児 LP3200↓2600

デー LP1000↓600

『そしてお待ちかね。いよいよ上級モンスターのお目見えだ！ 覚悟は良いかい？』

「良くないって言っても勝手に来るんだろっ！」

『まあねっ！ 僕は1.76 MHzを生け贄に、『幻想体 三鳥 審判鳥』を攻撃表示

で召喚だ』

ノイズのようなカードを生け贄にして場に出されたのは、どこか不気味な姿のカードだった。無理に例えるなら非常に？ せこけた黒いダチヨウとでも言おうか。

頭部を白い包帯のような何かでグルグルと覆い、両側面からは先だけ赤い白い羽が伸びている。今にもぽつきりと折れそうな細い首には名前の由来だろうか、黄金の天秤がぶら下がっている。ただ、天秤は最初から片方に傾いているようだった。傾いているんじゃないや公平ではなさそうだ。

三鳥 審判鳥 星8 ATK2800 DEF2300 鳥獣族 光

『審判鳥はレベル8だけど、ロボットミューコーポレーションの効果で生け贄は1体で済む。そして審判鳥の召喚時効果。クリフォトカウンターを二つ乗せる』

審判鳥 CC2

「……地味に召喚を補助するカードが多いな。コストを少なくしたり生け贄要員をモンスター扱いの魔法や罠で確保したり、動き的には帝デッキに近いか？」

『まあね。ただあつちはどちらかというと速攻型だけど、こちらはどちらかという立場に長く居ることで効果が発動するものが多いかな。……ゲームを続けよう。審判鳥の効果発動！ 1ターンに1度、相手フィールド上の守備表示モンスターが裏側表示のカードを全て破壊する。僕は裏側表示のカードを選択』

「げっ!？」

俺の場の伏せカードが2枚とも破壊される。どちらも攻撃反応型だったからこのタイミングじゃ使えない。

『さあて。大分厳しくなってきたんじゃないのかな?』

「確かにな。正直かなりしんどい」

盤面はかなり不利だ。だけど向こうのLPは残り僅か。このターンを防ぎ切れれば何とか。

『じゃあそろそろバトルといこうか。バトルフェイズ。審判鳥で雪の女王を攻撃だ!』

遊児 LP2600↓2000

雪の女王が破壊され、攻撃力の差である600ダメージを受ける。……まずい。雪の女王が戦闘破壊されたことは。

『雪の女王が戦闘破壊されたことで、効果で除外されたキュートちゃんがそのままの表示形式で場に戻る。戻ってこいキュートちゃん。そしてラ・ルナトークンで宇宙の欠片を攻撃』

「ぐっ！ だけど宇宙の欠片の効果により、戦闘を行う時相手に500ダメージだ」

宇宙の欠片は破壊されるが、デーの残り少ないLPをさらに削る。

デー LP600↓100

『ではこちらに残ったキュートちゃんをダイレクトアタック。……互いに満身創痍って感じだねえ』

「よく言うよ。こっちは終始掌の上って感じだぞまったく」

遊児 LP2000↓1000

『バトルフェイズ終了時。戦闘を行った幻想体はそれぞれPEカウンターが乗る。キュートちゃんは2つ。ラ・ルナトークンはラ・ルナ本体に3つ。審判鳥は4つだ』

キュートちゃん PE2

ラ・ルナ PE3

審判鳥 PE4

『そしてメインフェイズ2。僕は手札から永続魔法『幻想体 何でも変えて差し上げます』を発動する』

最後の手札を使ってデイーが出したのは、内側にびつしりと鋭い棘の生えた人形のよ
うな容器だった。どこぞの拷問器具かこれは？

『何でも変えて差し上げますの効果発動。1ターンに1度、自分フィールドのモンスターを墓地に送ることで、その攻撃力分のLPを回復する。僕はキュートちゃんを墓地に送る』

デイー LP100↓1100

動きに無駄がないな。これでLPを回復した上に、キュートちゃんが居なくなつたから残りは攻撃力の高いモンスターと守備表示のエビ頭だけだ。余計攻めづらくなつた。……カードが強くないって絶対嘘だろアレ。

『そこでロボットミーカーポレーションの三つ目の効果が発動。幻想体が場を離れる時、乗っていたPEカウンターは全てロボットミーカーポレーションに収集される。僕はこれでターン終了だ』

ロボットミーカーポレーション PE2

審判鳥 CC2↓1

ラ・ルナ CC3↓2

ターン終了と共に、それぞれのカウンターが一つずつ減る。しかし先ほどまでのこっちの優勢は何だったのか。たった1ターンでLPもフィールドも一気にひっくり返された。唯一勝っているのは手札の枚数のみだ。

『一つヒントを出そうか。審判鳥はターン終了時にクリフトカウンターが0の場合、フィールド上の守備表示モンスター、又は裏側表示のカードを全て破壊してその数×800ダメージを互いに受ける効果がある。がっちり守備を固めて持久戦に持ち込めば、次の僕のターンに効果ダメージで引き分けもあり得るね』

「持久戦に持ち込めば……だろ?」

そもそも持ちこたえることが難しい。こっちの場には永続魔法『エンサイクロペディア』のみ。

対して向こうのフィールドはモンスターだらけ。ただでさえ攻撃力2000越えのモンスターが2体も居る上に、守備表示か裏側でセットしたカードを問答無用で根こそぎ破壊するという凶悪さだ。防御に回った時点で引き分けより先に押し切られる。

つまり次のターンで攻めて勝負を決めないといけない。……だけど。俺は手札を確認する。今の手札にこの状況を打破するカードはない。

『まあ久城君もブランクがあるにしてはよくやったよ。この敗戦を機にこれからデッキ

調整を』

「ちよつと待った。……まだ負けるって決まった訳じゃないぞ」

俺は今のディィーの言葉を聞き逃せず待ったをかける。

『へえ。この状況でまだ勝つことを諦めないと？ この敗色濃厚の場面で？』

「敗色濃厚だけどまだ負けてはいないだろ。それに忘れてないか？ 俺は死ぬ直前でも

生きること考える男だぜ」

俺はそこで、前のターンのディィーへの意趣返しとして、同じようにふふんと不敵な笑

みを浮かべて見せた。

「ギリギリまで勝利に向けて粘ってやるよ。この状況で逆転したら……最高に面白いだ

ろ！」

デューとのチュートリアルデュエル その三

○遊児 LP1000 モンスター なし 魔法・罨 エンサイクロペディア 手札

2

デュー LP1100 モンスター 審判鳥 蓋の空いたウエルチアース ラ・ルナ
 トークン 魔法・罨 ロボトミーコーポレーション ラ・ルナ 何でも変えて差し上げ
 ます 手札0

しかし、啖呵を切ったもののどうしたものか。

場は圧倒的に劣勢。手札にこの状況をどうにか出来るカードはない。となればあとはこのドロー次第。

「俺のターン……ドローっ！」

せめて勢いだけは負けまいと、力を入れてカードを引く。逆転のカードよ来てくれっ！

そうして引いたカードに視線を合わせ、まだ勝負を捨てるには早いと自身に活を入れ

る。

「スタンバイフェイズにフィールド魔法ロボットミーコーポレーションの効果を発動。カードを3枚めぐり、幻想体があれば1枚選んで手札に加える。……来たっ！俺は『幻想体 死んだ蝶の葬儀』を手札に加える」

これで勝ち筋が見えてきた。あとは流れを引き寄せられるかどうか。

「俺はエンサイクロペディアの効果発動！二つフィールド上のPEカウンターを消費することで、手札の『幻想体 死んだ蝶の葬儀』を攻撃表示で特殊召喚してクリフトカウンターを二つ乗せる。使うのはロボットミーコーポレーションに乗せられた分だ」

手札から特殊召喚されたのは、喪服に身を包んだ蝶頭の男の絵柄のカード。左右から伸びる計四本の黒腕は後ろ手に棺桶を担ぎ、首元から伸びる一本の白腕はどことなく障に胸元に手を当てている。

死んだ蝶の葬儀 星4 ATK1500 DEF1300 昆虫族 光 CC2

『あくらら。またもやこちらのカードの効果を利用してしまったよ』

「利用させたくせによく言うよ。死んだ蝶の葬儀の効果。1ターンに1度、相手フィールド上の表側表示モンスター全ての攻撃力、守備力を500エンドフェイズまで下げ」

審判鳥 ATK2800↓2300

蓋の空いたウエルチアース DEF400↓0

ラ・ルナトークン ATK2200↓1700

『残念ながら、まだ審判鳥には攻撃力は及ばないね。それとも手札にまだ攻め手があるのかな?』

「あるぜ。とっておきがな。……俺は死んだ蝶の葬儀を生け贄に、手札から『幻想体 魔法少女 憎しみの女王』を攻撃表示で召喚し、クリフォトカウンターを二つ乗せる」

腰まで伸ばした水色の髪。クリつとした黄色の瞳にピンクを基調として可愛らしくフリフリの付いたスカートとジャケット。胸元にあるリボンとハート形の髪飾りをアクセサリーに、極めつけは星とハートを両端にあしらった独特の形の羽の生えたステッキ。

俺が蝶を生け贄にして場に出したのは、物騒な名前とは裏腹にどこまでも魔法少女らしい絵柄のカードだった。まあ魔法少女って書いてあるから当然といえば当然なのだけだ。

憎しみの女王 星7 ATK2300 DEF2300 魔法使い 光 CC2

『これはまた……厄介なものが来たものだね』

「行くぞ。バトルフェイズ! 憎しみの女王で、ラ・ルナトークンを攻撃だ!」

勝利への道筋は既に見えている。あとはそこまで突っ走るのみ!

『おっとそれは困るな。僕は蓋の空いたウエルチアースの効果を発動』

「それにチェーンして手札から速攻魔法『鎮圧行動』を発動！ フィールドに幻想体が居る時発動可能で、フィールド上のモンスター1体の効果を次のターンまで無効にする。俺はウエルチアースを選択。……そいつの効果は使わせないぞ」

『バレていたか』

ウエルチアースはモンスターの攻撃宣言時、プレイヤーにデッキトップを確認させ、モンスター以外だったら攻撃したモンスターを除外する効果がある。下手したら憎しみの女王が除外されるところだ。

「攻撃続行！ ラ・ルナトークンを攻撃する。」

憎しみの女王の攻撃が炸裂し、ラ・ルナトークンを破壊する。

ディー L P 1 1 0 0 ↓ 5 0 0

『やるねえ。……だけど、この後はどうするのか？ まだこっちは審判鳥が残ってる。次のターンで攻撃力が元に戻り、再び憎しみの女王を上回るよ』

「だったらこのターンで決めるまでだ。憎しみの女王の効果発動！ カードを1枚ドロースする」

憎しみの女王は1ターンに1度、戦闘で相手を破壊した時カードを1枚ドロースする効果がある。そしてその引いたカードが幻想体モンスターだった場合、攻撃力を500

アップしてもう一度攻撃が出来る。だが、

『なるほど。しかしそう都合よく引けるかな?』

「どうだろうな。正直今このデッキにあとモンスターが何枚入ってるかなんて覚えてないしな。……だけど、ここで引いたら間違いなく面白いよな」

この言葉を聞いて、目の前のデーイーが何故か笑ったように感じられた。それは決してバカにしたようなものではなくて、

「じゃあ行くぜ……ドローっ!」

俺は力強くカードをドローする。勿論どんなに気合を入れても引くカードが変わるわけじゃないし、こんなの暑苦しいって思う人もいるかもな。

ただ……少なくとも目の前の相手には。暇つぶしのために人にこんな課題をさせるような相手には。こんなやり方の方が燃えるだろう?

「……ありがとよ罪善さん。俺の引いたカードは『幻想体 たった一つの罪と何百もの善』。モンスターカードだっ! これにより、憎しみの女王は攻撃力が500アップし、追加攻撃が出来る」

憎しみの女王 ATK2300↓2800

「憎しみの女王で、審判鳥に攻撃っ!」

『……お見事』

ディール LP500 ↓ 0

デュエル終了。遊兎WIN！

『いやあ負けた負けた。チュートリアルとは言え初めてこのデッキを使う相手に負けるとは。中々やるね久城君』

「なんで負けたのにどことなく嬉しそうなんだよ……あとあれだけ教わりながら勝ったってあんまり嬉しくないぞ。それとありがとうな罪善さん。罪善さんを引けたおかげで勝てた」

罪善さんは言葉を発することは出来ないようだが、どこか嬉しそうにカタカタと歯を鳴らしている。あくまで俺の主観だから正しいとは限らないけどな。

しかし勝ったとはいえギリギリだったし、そもそもディールは勝つことよりも説明、教えることを重視してプレイングしていた節がある。

フィールド魔法を使った時もそうだし、永続罫クリフト暴走の時もそうだ。わざわざ自分のLPを削ったり不利になってまでこのデッキの動きを実践してみせた。

同じデツキなのだから、今デイーがやった動きはそのまま俺がするかもしれない動き。勝つても負けてもいずれば俺のためになるような内容。

「次は教えるとかそういうのは無しで普通にやろうなデイー。……まあ次も俺が勝っちゃうけどな」

『おつ！ 言ってくれるじゃないか久城君。じゃあ今から早速やつてみるかい？ まだ時間はたつぷりあるよ！』

「やったろうじゃないか」

まだこつちも完全にデツキの動きを把握したわけじゃない。どのみちこの世界ではデュエルは必要不可欠だし、出発前にこのデツキを慣らしておくのも悪くはない。

俺は自分のデツキをシャツフルして次の戦いに備える。こうなりやとことん付き合つてやるよ！

??時間後。

「だからと言ってこんなにやることになるとは思わなかったよこの野郎っ!!」

『いやあゴメンゴメン。予想以上に楽しめたからついね。……それにしても良くここまで付き合ってくれたものだよ』

結局俺とディーはとことんまでデュエルをやりまくった。戦績は四十三勝五十二敗五分けで俺の負け越し。やはりデツキに慣れるまでの最初の方の連敗が響いたな。途中からはほぼ五分五分だったんだけど。

幸いなことというか何とと言うか、時間が止まっている（ディー曰く完全な時間停止はシミュレーションだからこそ可能とか）ので休憩も取り放題。

何度かやつて疲れたら休み、デツキを見直し、それまでの動きを思い返してまた戦う。最後の方なんかかなりデツキの中身を弄ったので、完全なミラーマッチとは言えなくなっていたな。

そんなこんなで計百戦戦い抜き、最後のデツキ調整と休憩を終えて遂に出発ということになった。

『じゃあ簡単な流れをもう一度説明しよう。この世界において今日は入学式の翌日だ。君は家庭の事情があつて一日遅れで到着したという設定だね。書類などはこちらで出してあるし、別枠で式も済ませてある』

「自分でやってないのにやったことになってるのも何か落ち着かないな」

『まあそこは許してよ。……君の部屋はこの部屋。本来は部屋は二人か三人で使うけど、手違いで一人部屋になっているという贅沢な状態さ。まあ数日もすれば誰か入ってくるかもしれないけどね』

「それは構わないけどな。俺の大学時代もそんな感じだったし」

まあ同居人が余程すごい相手じゃない限りは問題ないだろう。これでも身体はともかく中身は一応社会人だ。相手を尊重するくらいは出来る。……デイーは出会いがアレだったから別としてな。

「……さて。用意も済んだしそろそろ行くか」

『そうだね。その扉を開いたらシミュレーション開始だ。一度そうなったらもう過度の干渉は出来ない。こちらから出来るのは軽くちよっかいをかけるぐらいのことさ』

「普通にちよっかいはあんまりかけないで欲しいけどな」

『えっつ!? 良いじゃないか少しくらい!』

良くないって! 俺は椅子から立ち上がり、扉の方に向かって歩き出す。

「……つとそうだ。最後にもう一度だけ聞いておくけど、この世界は何もしなければほぼ原作通りに動くんだな?」

『そうだね。基本的には決められた道筋を辿るだろうね。君という異分子が周りに影響

を与えなければだけれど』

俺の問いかけに、ディーはどこか意味深な答えを返す。

これから三年間、俺はこのデュエルアカデミアの生徒として卒業を目指す。だがこの遊戯王GXという話は、一つ間違えば卒業どころかバッドエンドがあり得る物騒な話だ。何せ闇の決闘^{デュエル}なんてものがあるからな。

実際まだ最初の方はどこかコメデイチックな作風だったのに、途中から一気にシリアス一直線だ。負けたら意識不明になるデュエルなんてやりたくはない。

では主要キャラと関わらなければいいかというところも違う。何せ俺のデッキにはカードの精霊である罪善さんと、カードの精霊になり得る予備軍がわんさかいる。どう考えても向こうから接触してくる可能性が高い。

だが幸いなことにこっちは原作知識がある。作中では一年も描写されていなかったが、それでも未来のことが多少分かるのは大きなアドバンテージだ。

唯一の懸念はどうやら俺の行動で多少流れが変化するようだけど、流石にたった一人の行動で大筋が変わるなんてこともないだろう。

基本的に本筋は主人公である十代達に任せるとして、俺は事件の予兆を見つけたらすぐに避けるなり備えるなり対策を練るとしよう。まずは生き残ることを優先だな。

「じゃあ、行ってくるよ」

俺はそのまま扉に手をかけ、

『あつ！ ちよつと待った』

扉を開ける直前、ディーに呼び止められる。今度は何だ？

『本当はこのまま行かせるつもりだったけど……少し気が変わったよ。折角ここまで付き合ってもらったからね。その分のちよつとしたプレゼントをあげよう。……この中から3枚選んで』

突如目の前に、俺のデッキとはまた別のカード群が出現して空中で広がる。こっちらだと裏面で何か分からないな。

「プレゼント？」

『そう。それと一種の占いも兼ねてるかな。1枚目は現在、2枚目は近い未来、3枚目はちよつと遠い未来って感じかな。そのカードをあげる訳じゃないけど、それぞれにちなんだプレゼントをあげる』

「占いはよく分からないけど、くれるって言うなら貰っておくか。それじゃあこれとこれと……これだな」

こういうのはあまり考えても仕方ない。何となく直感で選んだものを手に取って

ディーに見せる。

『どれどれ………あつはつはつはつ!! これは凄いな! まさかこれを同時に選ぶとはね。偶然にしても出来過ぎてる!』

「何だよ! 何が出たんだ? もしかしてメツチャマズい奴を引いたか? ちよつと見せてくれよ」

ディーはカードを見るなり突然大爆笑しだし、それにただ事ではない雰囲気を感じた俺はカードをじっくり見る、……だが、

「知らないカードがあるぞ。どうして今まで出してくれなかったんだよ」

『つはつは……ああこれね。ちよつと使いどころが難しいから敢えて出さなかったんだ。まあ他にもそういうのはあるし、機を見て渡そうと思つてね』

俺の選んだカードは、3枚目以外はどちらもさつき戦っている時に見たことのある物だった。1枚目から順に『たつた一つの罪と何百もの善』『魔法少女 絶望の騎士』そして、

『『ペスト医師』……医師つてことは回復系かね? 出すとLPを回復してくれるとか?』

『あく……間違っちゃいないね。回復というか救済? これだけだったら破滅フラグ待ったなしだけど、まあ一緒に罪善さんを引いているから何とかなるでしょ!』

ちよつ!! 何か不穩な単語が混ざってただけどつ!! 破滅フラグって何さつ!!

『それじゃあこれらにちなんだプレゼントを………よし出来たつ! ほらつ』

「おわつと!?!」

デイーの言葉と共に、光球から何かが飛んできたのをキャッチする。見るとそれは、鞘に入った小さな剣を模ったペンダントだった。首から提げられるよう上部に紐が通してあつて、よく見ると表側には罪善さんの顔が、裏には翼のような意匠が彫り込まれている。というか今造つたのかこれつ!?! 凄いな。

『お守りだよ。〃元〃 神様の手作りだからね。ご利益あるよ〜!』

「考えてみたら確かに凄そうだな。じゃあありがたくもらつておくよ!」

そのペンダントを首から提げ、今度こそ扉に手をかける。

『じゃあね。良い学園生活を! どうせなら最後まで課題をクリアしておくれよ!』

「分かつてるつて。せいぜい退屈させないように頑張つてみるさ。……期待してろよ!」

後ろから聞こえる声に片腕を挙げて応えながら、俺は扉を開いてこの世界への第一歩を踏み出した。

初遭遇は変な語尾の先生でした。

さて、この世界への第一歩を踏み出した俺だが、すぐに立ち止まることになった。扉の横に誰か立っていたからだ。

「どうだったにや？ 今日から君が3年間暮らす部屋の感想は？」

「えくつと……貴方は？」

「ぼくはこの寮長を務めている大徳寺という者だにや。君は久城遊児君……でいいか
にや？ ちなみに違ったら不審者ってことになるにや」

そう冗談めかしている目の前の人。腰まで伸びた長髪を一本にまとめ、柔らかい表情に糸のような細い瞳。そして眼鏡をかけて独特の語尾で喋る様子はどことなく飄々としたイメージを抱かせる。この人がオシリスレッドの寮長か。

俺が自分が久城遊児だと言うと、大徳寺さんはどこかホツとした様子で話してくれた。実は俺のことは事前に連絡が来ていたという。一日遅れの新生入生。体調不良により実技テストを欠席したものの、筆記テストが優秀な成績だったので滑り込みでオシリスレッドに配属された異例の生徒として。

ってデイーの奴一体どういう設定にしてんだよっ!? デュエルの学校なのにデュエ

ルなしで合格って、余程成績優秀じゃないと無理だぞ。ハードル上げるんじゃないよ！俺が勝手に部屋に入っていたことは、事前に部屋の場所を聞いて、逸る気持ちを抑えられなくてということとで何とか説明が付いた。

「しかし来るとは聞いてたけど、ここまで一人で来るのは意外に大変だったんじゃないかにかや？ 案内も無しで」

「ははは。ある程度は説明してもらいましたから。……ちよつと体力的にはしんどそうですが」

「にかや？」

マンガ版で見たことは有るが、少し先ほど周りを見ただけでもこのデュエルアカデミアが広大な敷地を誇っているのは分かる。

何せ本棟と思われる場所まで目測でもかなりの距離があるし、寮の近くに普通に森や海が見えるのだ。自然に囲まれているといえれば聞こえは良いが、一つ間違えば寮の近所で遭難という事態にもなりかねないな。

「……さて。本来なら自宅に制服や教科書を届けるんだけど、君の場合は現地で直接受け取りという話だったにかや。諸々はぼくの部屋で預かっているから取りに来てほしいにかや。それにしても変わってるにかや」

自宅も何も、戸籍が捏造したものだから届けられないんだよ。内心大徳寺さんの言葉

に苦笑しながらも、俺はこの寮長さんに着いていった。

「ここだよ」

大徳寺さんの部屋はどこもなく和風な雰囲気の部屋だった。ちゃぶ台もあって、その上には湯呑みなんかもある。生活感と清潔感を両立出来ている感じだな。

ちゃぶ台の横には堂々と昼寝している縞模様の猫が居た。大徳寺さんが言うにはフアラオという名前らしい。飼猫かな？

「君の荷物は……あつたあつた。これにや！」

大徳寺さんは隅に置かれていた段ボール箱を持ってきた。かなり重いのか少しふらついている。危ないから素早く段ボール箱を受け取る。

「おっと。大丈夫ですか？」

「ああ。これはすまないにや。この中に君に渡す分が入っているから、早速部屋で確認して欲しいにや。君は初日だから、午後から授業に参加してもらおうので焦らなくても良いのにや」

「これはどうも。何から何までありがとうございます！」

デリーの差し金かもしれないが、細やかな配慮をしてもらって俺は大徳寺さんに頭を下げる。

「じゃあぼくはこの部屋に居るから、中身の確認と着替えが終わったらまた声をかけて

ほしいのにな」

「分かりました！ では……失礼します」

俺は意気揚々と段ボール箱を抱え、先ほどの自分の部屋に戻った。箱はそこそこ重かったが、学生時代に戻ったみたいで気分は上々。階段を上るのも気にならなかったな。

「……やっぱりいないよな」

自室に戻った俺だが、そこにはもうあの賑やかな「元」神様は居なかった。時計の針はもう時を刻み始めていたし、完全にチュートリアルは終わったという事だろう。一度始まったらもう過度の干渉は出来ないと言っていたしな。

カタカタ。カタカタ。

「大丈夫だよ罪善さん。どうせ今頃デイーのことだから、こっちのオロオロしてる顔を見て笑ってるぞ」

適当に考えたことだが、割と良い線いっていると思う。一瞬でも感傷的な気分になつて損した気がするな。

あと不意に現れた罪善さんに内心ドキッとしたのは内緒だ。普段はカードの中に居

るらしいのだけど、こんな感じに急に実体化されるとまだ慣れない。

俺は静かに箱を下ろして中身を確認する。目録に載っている通り教科書や筆記用具等、授業で使うであろう品々に、通信機能やその他諸々の機能が付いた小型のタブレット。後は運動用のジャージと、それにマンガで見たのと同じオシリスレッドの制服。……やはりというか想像以上に真つ赤だ。

俺はこれまで着ていた服（何故か俺の私服の一つ。ディーが用意しておいたらしい）を脱ぎ捨て、制服に身に着ける。……うん。サイズはピッタリ。動きやすいし丈夫そうで悪くない。

他にもこまごまとした物を確認し、最後に一際嚴重に梱包されているそれを確認し腕に装着する。ここの生徒の必需品とも言えるデュエルディスクだ。十代達も腕に着けていた。

「……意外に軽いな。しかしこれを着けたまま動き回るとなるとやっぱり重いかな」
デカイ見た目や展開機能がある割に、そこまで重くはない感じだ。せいぜいちよつとしたダンベルぐらいってところかな？　しかし短時間ならともかく、長いこと着けてたら腕が疲れそうだ。

こりやあ勉強だけじゃなく体力を付けることも必須になるぞ。……まあそつちはこんな自然に囲まれた場所で生活してたらそれだけで普通に鍛えられそうだけだ。

「……よし。記載漏れは無しと」

確認は出来たし問題ないだろう。俺は再び大徳寺さんの部屋に行く。

「うんうん。問題はなさそうだよ。じゃあ午前中の中に、簡単にこの学園の案内をするにや。ちなみに午後一番の授業はぼくの担当する錬金術だからよろしくにや!」

「よろしくお願いします……って錬金術?!」

こうして俺は午前中いっぱい、大徳寺さん改め大徳寺先生の学園案内に費やしたのだった。

俺は大徳寺先生に大まかに学園内の案内をしてもらった後、午後からの授業に普通に参加した。と言っても今日は全寮合同の授業が多く、おまけに入学したばかりということもあって互いの顔もろくに覚えていない生徒が多い。

なので事前に連絡の行っていた教師陣はともかく、俺がしれっと紛れ込んでいても他の生徒からは特に反応はなかった。まあたかだか一日遅れの新入生ってだけで注目されるはずもないよな。

そうして一日授業を受けてみた感想は、デュエルのことと一部の授業(錬金術とか)を除けばいたって普通の学校だったという事だ。内容とかも俺の高校時代とそこまで変わらなかったな。

あと肝心要のデュエルに関する授業だけど、やはりまだ二日目（俺に至っては初日）なので実戦の類はなく、どちらかといえば基礎的な説明が多かった。魔法や罫の種類とかな。

そうして今日の授業は終わり、自室に戻ったところで大徳寺先生からお呼びがかかった。どうやら寮の生徒が集まる夕飯時に食堂で、皆に俺のことを紹介するらしい。

「じゃあ久城君。ぼくが先に行つて簡単な連絡事項を伝えた後で合図するから、それと同時に入つて来てくれにゃ」

「はい。……でも、今さらですけどどこまでしていただかなくても」

「気にしない気にしない！ 一日遅れだけど歓迎会は大切にや。……じゃ。先に行くにゃ」

大徳寺先生はそう言つて席を立った。俺一人のために歓迎会というのも気恥ずかしいが、折角紹介してくれるというのだから素直に受け取ろう。

食堂の場所は分かっているし、特に準備することもない。明日の用意なんかは食事の後でも出来る。俺はすぐに大徳寺先生の後を追つた。

「……という訳で、二日目にもなると少しずつ肩の力が抜けて、周りを見る余裕が出てきた生徒もいるかも知れないにゃ。だけど肩の力を抜きすぎないように。まだまだ学園生活は始まつたばかりなのだからにゃ」

食堂の扉の前で様子を伺うと、大徳寺先生が寮生に向けて何やら話しているのが聞こえた。ちなみに俺に至ってはまだ初日だからな。肩の力を抜くどころの話じゃない。

だけど先生の言いたいことも何となく分かる。要するに力を入れ過ぎても抜きすぎてもダメだと言っている訳だ。締める所はビシツと締めないとな。

「じゃあ最後に、事情により一日遅れでこの寮に入ることになった生徒を紹介するにや。

……入ってきてほしいにや」

合図だ。俺ははいと返事をして食堂の扉を開けた。中の生徒の視線が俺に集中する。好奇心の目。興味ありげな目。どこか憐憫するような目。様々な視線を受けながら俺は大徳寺先生の横まで歩いていく。

「彼が新入生の久城遊児君にや。皆さん仲良くしてくださいにや」

「久城遊児です。一日遅れですが、皆さんと同じ新入生のつもりです。これから3年間の間、よろしくお願いしますっ！」

俺はそう言っただけで深く頭を下げる。こういうのは第一印象がとても大事だ。礼儀正しく言っておいて損はない。

少し経って頭を上げると、俺は寮生の中に見知った顔を見つけた。それは、

「おうっ！ よろしくな遊児！ これから3年間仲良くしようぜ」

「ちよつとアニキ……そんな大声で言うもんじゃないっすよ。皆呆れてるじゃないっす

か」

それはこの物語の主人公。持ち前の明るさと正義感を武器に、HEROと共に闇の決闘を戦い抜いたデュエリスト。遊城十代が原作そのままの姿でそこに居た。

隣に座っているのは同じく原作キャラの丸藤翔。それともう一人同じテーブルに居るのは……誰だろうか？ 一瞬カードのデス・コアラを想像させたがあれは人間だ。

まあ原作キャラ以外でも、一緒に食事をする友人くらい居るだろう。単に描写されなかつただけかもしれないしな。

とにかく。とにかくだ。物語の主人公が目の前で動いて話していることに、俺は何となく不思議な感覚を覚えた。感動……に近いのかもしれないな。

それと同時に心の中の何処かではつきりと自覚した瞬間だった。ああ。やはりここはどんなに良く出来ていても現実ではなく、俺の居た世界ではないのだろうと。

余談だけど、オシリスレッドの食事は中々に美味かった。ちよつと品数が少ないのが欠点だったけどな。皆ももつと食べれば良いのに。

月一テストと違和感 その一

こうして俺は、デュエルアカデミアの生徒として日常を過ごし始めた。課題のことは抜きにして、二度目の高校生活と考えると中々に楽しい。勉強も一般教科については特に問題は無かったな。

問題なのはそれ以外の教科だ。デュエルアカデミアなのでデュエルの勉強をするのは分かるのだけど、錬金術って何だ錬金術って!?! こればかりは今でも時々ツツコミを入れたくなる。まあよくよく聞いてみると、現代の科学などにも通じる学問であるので面白くはあったけど。

それと、授業中にまた原作キャラの姿を見かけた。十代のライバル的存在だったオベリスクブルーの生徒万丈目準と、同じく十代と親交のあるオベリスクブルーの天上院明日香。そして基本的に実技担当教師であるクロノス先生だ。

ただ少し不思議だったのは、生徒の二人共が原作では見かけなかった取り巻きを連れていたことだ。特に万丈目の方は、作中ではどこか孤高のイメージがあったので少し驚いた。

まあ十代達にも原作で出てこなかった友人が居たし、こちらも似たようなものだろう。友人が多いこと自体は悪いことじゃないしな。

そうそう。その十代達とだが、今の所あくまで同じ寮の生徒であり、それ以上でも以下でもないというスタンスで居る。話しかけられれば普通に返すけど、自分から積極的に話したりはしない。そんな具合だ。

これは下手に一緒に居すぎて原作の流れを壊さないためと、離れすぎて原作の事件の予兆を見逃さないためだ。距離感が難しいのだが、まあそこは何とかやっている。

そんなこんなで日々を過ごしていたのだが、明日は少しばかりこれまでとは毛色の違う日になりそうだ。何せ明日は大半の生徒にとって大切な日、月一テストの日なのだから。

このテストの結果如何によっては昇格も降格も充分あり得る。なので一部の圧倒的自信家や日ごろからコツコツやっている努力家、はなっからやる気のない生徒を除いては、明日に備えて最後の追い込みをしていると思う。

勿論俺もその一人だ。夕食も終わり、相変わらず何故か住人の決まらない自室にて、一心不乱に机に向かってノートにペンを走らす。

課題はあくまでこの学園の卒業なので、極論すれば落第しない程度の学力があればそれで良い。しかしそれはそれとして、良い成績を取っておいた方が何かと教師陣の心証が良くなるのも間違いない。なので気合を入れて明日のテストに臨むつもりなのだが、『……そう言えば前に話したっけ？ 僕の主催なんだけど、今これとは別にあるゲームを神様連中としていてね。それが今中々に面白くなってきた所なんだよ』

カリカリ。カリカリ。

『参加する神様がそれぞれ適当な誰かを見繕ってさ。こちらで用意した異世界に時間差で放り込む。それぞれ個別に加護と課題を与えておいて、それを達成した時間と内容を競うんだ』

カリカリ。カリカリ。

『両立できない課題は与えないルールだからやろうと思えば共闘も可能だし、当然敵対するのも自由。一番にクリアした参加者にはボーナスもあるしね。それで少し前にやっと全ての参加者が出揃ったんだ。最初の参加者から二十年ほどかかったけど、いよいよ本格的に始まったと言えるね。……ところで話は変わるけど、その神様連中の中にアンリエッタという娘が居てね。その娘がまた何とも』

カリカ………ボキッ！

「ああもううるさいってのっ！ 勉強中なんだから静かにしてくれよっ！」

『あつはっは。ゴメンゴメン！ ついねつい』

さて、ここで少し説明をしなくてはいけないだろう。まだこの部屋には俺一人しかないはずなのに、一体誰と話しているのかと。それは、

「まったく。チュートリアルが終わったから、もうこっちには干渉できないんじゃないのかよデュー？」

『少し違うね。過度の干渉は出来ないだけだよ。こうして君とお喋りをするくらいなら何の問題もないさ』

いつの間にか戻ってきた“元”神様の光球が、俺の周りをクルクル飛び回って勝手にペラペラ喋りまくるものだから、さつきから全然勉強が進まない。

罪善さんも出てきてどうやら注意してくれているのだが、デューときたらどこ吹く風だ。

「と言うか、そんなゲームを同時進行してるのに、こっちに意識を向ける暇があるのかよ？」

『ずっと引っ付いている訳じゃないよ。それに参加者が全員出揃っただけで、接触したのはまだ僅かだからね。あとでそれぞれどう動いたかを見るのも楽しい物さ』

「そんなもんかねえ。……えくつと以下の手札とフィールドで、1ターンで勝利する手順はと」

暇つぶしは多ければ多いほど、長ければ長いほど良いものさと笑いながら言うデューを尻目に、俺は再び勉強に集中する。詰めデュエルの問題集は結構頭の体操になるな。

『……そう言えば、いよいよ明日はそのデツキの初の実戦だね。自信のほどはどうかかな？』

デューの言葉通り、この世界に来てまだこの幻想体デツキを使ったことはない。デュエル自体は授業で何度か行つたが、その時は授業という事で決められたテーマを使って戦つたからな。

「そこそこかな。相手にもよるだろうし……まあやれることをやるさ。そういうのもまたお前が見たいものなんだろう？」

『まあね！ 個人的にはなるべく派手な展開が望ましいけど、じっくりジワジワ攻めるというのも玄人好みで良いと思うよ！ ……それでさつきも話したアンリエツタなんだけど、彼女がまた実に遊びがいいのある娘でねえ』

「分かつたからもう静かにしてくれよっ！」

結局その日は夜遅くまでデューが喋り倒し、俺は半ば無理やりその別口でやっているゲームについて聞かされるはめになった。俺以外の異世界転移者について気にならない訳じゃないが、今はそれどころじゃないんだよ。もう少し罪善さんのように寡黙であつてほしい。

そうして話が終わったのがなんと夜中の二時過ぎ。それから何とか準備を整え、倒れこむようにベッドの中へ。

気がついた時には……授業開始十五分前だったのは俺のせいじゃないと思う。

「マズイっ!?! 遅刻だっ!?!」

飛び起きた俺は慌てて荷物を引つ掴み、おやつ代わりに昨日購買で買っておいいたパンを口にくわえて走り出す。今日は……タマゴ味か。毎回中身が違うのだけど、どこか黄金に近い色合いのタマゴだ。縁起が良いと言えば良いな。

しかし急がなくては。このままでは遅刻ギリギリだ。毎日の登下校で少しずつ体力が付いてきた身だが、それでも全速力で行かないとちよつと危ない。

「はあっ!?! はあっ!?!」

全速力で、それでいて本棟にちゃんとたどり着けるよう配分しながら俺はひた走る。……よし。この調子なら何とか間に合うな。

最悪の事態は避けられそうだと安堵した俺だが、走る先にとんでもないものが写り込んだ。本棟に行く途中のやや急な坂道。その途中で、一人の生徒と購買の人らしき誰かが車を押していた。……そう。押していたのである。

チラリと見えた運転席には誰も乗り込んでおらず、見たところ車の故障か何かで動かなくなったので、仕方なく人力で押しているといった所か。

顔は距離があつて良く見えないが、あの服はオシリスレッドのものだ。俺と同じく遅刻ギリギリだというのに、こんなことをして良いのだろうか？

先に述べておくが、俺は自分のことを打算的な人間だと思っている。周りの人が困っているからつてむやみやたらに手を差し伸べたりはしない。その上今は非常時だ。助けている暇もない。だから手助けする気などこれっぽっちも……。

「うおっとっ!?!」

「危ないっ!」

少し力が緩んだのだろう。バランスを崩して車が下に滑り落ちそうになったのを、咄嗟に後ろから支える。この車が小型で助かったな。……じゃなくて! しまった。ついでに身体が動いてしまった。この忙しい時に。

「悪い。助かった……つて、同じ寮の遊児じゃないか!」

げっ!?! 遊城十代。何故こんな所に原作主人公がっ!?!

「丁度良いや。助けてもらつて悪いんだけど手を貸してくれよ。見ての通り車が動かないとなつたらしくくてさ」

「ちよつと悪いよ。あんた達テストなんだろう?」

「困っているおばちゃんを見過ぎせないぜ！ 先のことなら何とかなる。俺に任せろよ！」

購買部の人（よく見たら何度か見たことのあるおばさんだ）は止めようとしているが、十代はそんなことを言いながら笑っている。流石主人公。良い奴だ。

「……仕方ないか。手伝いますおばさん。それと十代。手伝うからには何か後で奢れよな」

「ありがとな遊児。さあおばちゃん。もうひと踏ん張りだぜ！」

「すまないねえ。二人共」

「なあに。苦しい時はお互い様さ」

もうこうなったらやるしかない。一度関わってしまったわけだし、どのみち今から急いでもギリギリ遅刻だろうしな。だったらせめて遅刻の大義名分ぐらいは作っておいた方がまだマシだ。

それとただで手伝うのもなんか嫌なので、すっかり後で十代にその分を請求しないと。今日消費したドローパンの補充でも頼むか。

こうして俺達は車を押して坂を上り、無事目的地まで送り届けた後、その足で慌てて筆記テストの場所へ乗り込んだ。

テスト開始から二十分も過ぎてしまっていたが、途中入室が認められたのは不幸中の

幸いだ。何とか終了ギリギリまでペンを走らせ、とりあえず埋められるだけの空欄を埋めていく。……見直しが一切できなかったのが痛い。これは筆記テストは期待できないかもしれない。

終了時にアナウンスが響き渡り、次の実技テストの場所と時間を告げる。次の実技テストは午後二時から体育館か。

……んっ!? 昼休みを挟むのでまだ時間が有るはずなのに、教室の生徒が皆バタバタと慌てて出ていった。どういう事だ?

「えっ!? カードの大量入荷っ!」

そんな大声がガラガラになった教室の一画から聞こえてくる。見れば毎度おなじみの十代と翔、それと……あれは原作キャラの三沢大地か! 三人で何やら話しているな。

耳をそばだててみると、どうやら購買部に新しくレアカードが入荷されるようだ。他の生徒は実技テストに向けてデッキを補強すべく買いに行ったらしい。

俺のデッキは制限が掛かっているので入れ替えはほとんどできない。しかし、どんなカードが売っているかを見たらデュエルの参考にはなるだろう。ということだ、

「興味ある！　どんなカードがあるのか見たくっつてしようがねえ！　行こうぜ翔！」
「おっと。俺も混ぜてもらおうかな」

さっきの謝礼を貰う良い機会だ。さっさと奢ってもらって次の実技テストに備えなくては。俺は走り出そうとする十代を呼び止める。

「おっ！　遊児！　さっきはありがとうな！」

「あつ！　同じ寮の久城君。こんにちは」

「やあ！」

「こんにちはは丸藤君。そちらのライイエローの人もこんにちは。……それで十代。礼は良いんだが、さっきの約束は忘れていないよな？」

俺は一応初対面である三沢にもちゃんと挨拶し、十代にしっかりとくぎを刺す。

「おおそうだった。遊児も一緒に来いよ！　カードを見に行くついでに昼飯を奢るぜ。てなわけで今度こそ行こうぜ！」

「うん。行きましようっす！」

三沢は自分のデッキを信じているからと購買部へは行かず、オシリスレッドの三人で連れ立って購買部に行くことになったのだが。

「もうこれだけなのよ」

なんとカードが売り切れという事態が発生していた。何でも一人の生徒がほとんど買い占めていったという。ホントに生徒かそいつは？ 買い占めるって簡単に言うけど、レアカードともなるとかなりの額だぞ。

購買の店員（さつきとは違う人）に出されたパック一つを見て悩む二人。だが十代はためらうことなく翔に最後の一つを渡そうとする。

「譲ってくれるの!? 最後の1パックだよ？ それに久城君にも悪いし」

「俺は別に構わないよ。カードを買うつもりは無かったし、あくまで十代には食事を奢ってもらおうつもりだったしな。……よし。このドローパーンをつくごさい。お代は彼持ちで」

「ありがとな遊児！ 翔。実技の時間までまだ時間がある。早くデツキを組み立てに行こうぜー！」

こうして会計を済ませて早速向かおうとした時、誰かから声をかけられた。

「あつ！ 今朝のおばちゃん!?!」

「おばちゃんじゃないわよ！ トメって呼んで。ト、メー！」

なんとパックを取りおいてくれたようだった。お礼という事らしいが、俺はデツキを変えることは出来ない。なのでパックは十代達に譲り、俺は当初の予定通りドローパーン

を奢ってもらう事に。二人には何故か感謝された。別に良いのだけどな。

さて。色々とあったがやっと実技テストだ。昼休みの間に奢ってもらったドローパーンも食べたし、デツキの最終調整も済んだ。

体力と気力は共に充分。あとは対戦相手の発表を待つのみ。なのだが、途中のアナウンスでそれどころではないことが判明した。それは、

遊城十代 対 万丈目準

この対戦カードが発表されたからだ。この二人の対決が遂に始まるのかっ！ これは是非とも見なければ！

……でも初対決ってこのタイミングだったっけ？

月一テストと違和感 その二

十代対万丈目。この二人の戦いは原作において二度行われている。

一度目は時期こそ不明だが授業中の実技として。二度目は確か、留学していたカイザーこと丸藤亮が帰還したことを祝ったデュエル大会の決勝戦においてだ。

しかし、今回のこれはどちらのケースにも当てはまらない。となるとこれは原作で描写されなかった戦いか？ しかし時期的にどうもちぐはぐなような。

まあこれが何度目の戦いかは分からないが、原作キャラ同士の戦いとなれば見ごたえがあることは間違いない。デッキの内容を見れば多少の推測は出来るかもしれないし、自分の実技テストまでまだ時間があるようだ。それまでじっくりと見させてもらおう。

俺が観客席に移動すると、見れば近くに翔や三沢の姿があった。あちらもまだテストまで間があるようだ。俺はそんなことを気楽に考えながら、二人のデュエルを見守ることにした。

「どうなっているんだ？」

俺はついそんな事を呟く。何故なら、二人のデュエルは俺の想像していたものと大分違う展開を見せていたからだ。

「万丈目がVWXYZを使うなんて聞いたことないぞ。『光と闇の竜』はどうしたんだ？」

現在万丈目のフィールド上に居るのは、出すのに専用の構築が必要とされる強力モンスターVWXYZ。五体のモンスターを合体させて召喚するという中々にロマンあふれるモンスターだ。俺には向かないけどな。

しかし原作では、万丈目の使うデッキはドラゴン主体のデッキだった。機械族とのシナジーもなさそうだし、いくら何でもデッキが違いすぎる。

万丈目はVWXYZにより十代の場にプレッシャーをかけていくが、十代はその猛攻を巧みに凌いでいく。そして、

「俺は手札二枚をコストに『進化する翼』を使用。『進化する翼』によりハネクリボーが進化」

おっ！ さつき購買で買ったパックのカードか。さつそくデッキに投入していたらしい。

進化したハネクリボーの効果によりVWXYZは破壊。その攻撃力分のダメージを与え、返しのターンでがら空きになった万丈目にE・HEROフェザーマンのダイレク

トアタックが決まり、見事十代の勝利となった。

戦いの流れは大きく異なっていたが、十代が勝ったという事はこれは十代対万丈目戦の一戦目という事になるのだろうか？

その後また予想外なことに、十代のラーイエローに昇格というアナウンスが流れた。おいおいどうなっているんだ!? またもや話が変わってきたぞ！

周りは十代の昇格という発表に賛辞の声を送っているが、俺は内心頭の中で考えがグルグルと渦巻いていた。

……まさかこれがデリーの言っていた、俺という異分子が周りに影響を与えた結果と言うんじゃないだろうか？

ただでさえどんどん話の展開が変わってきているというのに、これ以上変わったら本気で先の予想がつかなくなる。デリーとしては予測がつかなくて面白がるかも知れないが、俺としてはある程度は原作知識を活かして進めたいところだ。

そうやって悶々していると、次の対戦グループが発表される。そこで自分の名前が挙がったので、頭を振って悩みをひとまずあとにおく。今は目の前の一戦に集中しなくては。だというのに、

久城遊児 対 丸藤翔

こんな対戦カードが決まった。何でお前なんだよ翔っ!?

「え〜つと。さつきぶりだね久城君」

「……ああ。そうだな」

ますます頭が痛い状況になってきたが、悩む間もなく対戦フィールドに移動することに。反対側には翔がデュエルディスクを装着して構えている。

隣のフィールドではまた別の組がデュエルを行っているようで、先ほどから立体映像が激しく動き回っているな。

「頑張れよ〜っ！ 翔！ 遊児！」

「アニキイ……こういう時は僕だけを応援してくださいっすよ」

観客席に戻った十代からのエールに、翔はどこかガツクリした感じで返す。まあ無理もないか。翔からしてみれば、俺は実技テストのライバルだ。自分ではなくライバルを応援されては立つ瀬がないだろう。

しかしどうしたものか。本来翔が誰と戦うはずだったかは知らないが、間違いなく俺ではない。つまり俺という異分子がもうこんな所にまで影響を与えている訳だ。そして本来の流れで翔が勝つのか負けるのかも分からない。まあ原作キャラだし勝つていた可能性の方が高いが。

「ただこれらは月一テストだ。この結果次第で俺も翔も多少はこれからの影響が出る。仮に本来翔が勝つ流れだった場合、俺が勝つたらその流れを壊すことになる。ただでさえ今俺の知っている話からずれてきているのに、これ以上変わったらどうなることか。俺はどうすれば良い？ 勝つべきか？ 負けるべきなのか？ そう思い悩んでいると、

「同じレッド寮だから当たるかもって思ってたけど、本当に当たっちゃうなんて。……でも、アニキはラーイエローに昇格する。僕だって負けてられないんだ。だから、僕も本気で行くよっ！」

翔はどこか覚悟を決めた顔でデュエルディスクを展開し、俺に向かって闘志を燃やす。……そうか。そうだな。俺はこんな時に何を考えていたんだか。

俺はバカだ。勝つべきか負けるべきかだつて？ そんなもの勝てる保証もないのに考えるべきことじゃない。戦う前からそんな事を考えるだなんて傲慢にもほどがあるって話だ。

流れだつてこの時点じゃよく分からない。俺が関わることでなお読めなくなるかもしれない。それでも、目の前の覚悟を決めた相手に対してこんな煮え切らない態度じゃ失礼つてものだ。デイーが見たらさぞ今の俺を笑うだろう。だから、

「ああ良いとも。俺もこんな所で負けるつもりは無いんでね。全力でやり合おうぜっ

！」

俺も戦意を漲らせながらデュエルディスクを展開する。常時こんなテンションは得意じゃないのだけど、相手がそれだけの本気で来るのならそれに合わせないと。この前のディーとの勝負もこんな感じだったし。

「では各自構えて……試験開始!!」

審判役の先生が定位置に付き、実技試験開始を宣言する。では、こちらもお決まりの言葉で始めよう。

「デュエル!!」

遊児 LP4000

翔 LP4000

「先手は俺がもらうぞ。……ドロー!」

引いた瞬間、慣れ親しんだカタカタと歯の鳴る音が聞こえてきた。……いきなりか。じゃあ、頼むぜ罪善さん!

「俺は『幻想体 たった一つの罪と何百もの善』を守備表示で召喚だ」

俺の場に、どこか神々しくも恐ろしいな頭蓋骨が出現する。……立体映像ソリットレジョンでは初めて出したけど、普段から見てるから新鮮味は薄いな。

たった一つの罪と何百もの善 星1 ATK300 DEF200 天使族 光

「ひえ〜っ!!? が、骸骨っ!!?」

「幻想体? アブノーマリティ 聞いたことの無いモンスターだ」

出現した罪善さんを見て、観客席がざわつき始める。やはり珍しいらしい。まあ珍し
いだけなら大丈夫だとデイーは言っていたが……大丈夫だよな?

クリクリ〜!

「うお〜すっげ〜っ! どうした相棒? あのカードに何か感じるのか?」

何かハネクリボーが反応している。うちの罪善さんも精霊だからな。その辺りで感じたことがあるのかもしれない。十代に感づかれたらややこしくなりそうだな。

「長い名前なんで、俺は罪善さんと呼んでいるよ。罪善さんの効果発動! このカードは1ターンに1度、自分の手札か自分フィールドのモンスター、どちらかの数×300 LPを回復できる。俺は手札の数を選択する」

罪善さんから光が溢れだし、俺の身体を包み込んでLPを回復させる。ありがとう罪善さん。

遊児 LP4000↓5500

「いきなりLPが5500に！」

「次だ。俺は手札から魔法カード『幻想体脱走』を発動！ LP1000をコストに、自分フィールドの幻想体を1体選択し、そのカードより二つまでレベルの高い幻想体をデッキから攻撃表示で特殊召喚する。俺はデッキから『幻想体 三鳥 罰鳥』を攻撃表示で特殊召喚！」

遊児 LP5500↓4500

俺がデッキから呼び出したのは、手に乗るサイズの白い小鳥。だが何故か腹部だけ、純白ではなく血のような赤い模様をしている。

罰鳥 星2 ATK100 DEF100 鳥獣族 風

「可愛い〜！」

罰鳥が出るなり観客の女性陣からそんな声が響く。……見た目によらず結構能力エグイよコイツ。

「えっ!? 骸骨の次は小鳥? しかも攻撃力100を攻撃表示って」

「ちなみに『幻想体脱走』を使ったターンは相手に戦闘ダメージを与えられない。まあ1ターン目だから関係はないけどな。そして罰鳥の効果発動! 場に出た時、クリフオートカウンターを4つ乗せる」

罰鳥 CC4

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ。そして罰鳥は効果により、自分のターンエンドごとにクリフオートカウンターを1つ失う」

罰鳥 CC4↓CC3

「アツハツハ！ 何だアレは！ たかだか攻撃力1000のモンスターを攻撃表示で場に出すなんて、流石はオシリスレッド。落ちこぼれらしい戦術だなっ！」

「そうだそうだ！ 雑魚モンスターはさっさと引つ込めっ！」

観客席からヤジが飛んでくる。……あれは青色の制服だからオベリスクブルーの生徒だな。カードを攻撃力だけでしか見ないとは、勉強不足という奴じゃないか？

しかしそんなのがエリートとは、マンガでは明日香や万丈目、カイザーがそうだったからレベルが高いと思っていたが、エリートと言ってもピンキリだったかな？

「待たせたな丸藤君。そっちのターンだ。……周りのヤジは気にするなよ！ 俺は今の手札からこの手が良いと判断してコイツを出した。油断しないことだ」

「う、うん。僕のターン。ドロー！ よし！ 僕は手札から魔法カード『融合』を発動！

僕は手札のスチームロイドとジャイロイドを融合して『スチームジャイロイド』を攻撃表示で融合召喚だ！」

フィールドに現れたのは、大きなプロペラの付いた機関車のようなモンスター。……

やるな。いきなり攻めに来たか！

スチームジャイロイド ATK 2200

「さらに僕は手札から『ジェット・ロイド』を攻撃表示で召喚！ バトルだ！ ジェット・ロイドでたった一つの罪と何百もの善に攻撃！」

ジェット・ロイド ATK 1200

続いてフィールドに現れたのは、赤い戦闘機のようなモンスター。そしてそのモンスターのジェットから吹き出す熱気が罪善さんに襲い掛かる。……だけど防御用のカードくらい用意してあるぞ！

「リバーズカードオープン！ 『幻想体 3月27日のシエルター』を発動。効果により1ターンに1度、自分のモンスター1体を選択。俺は罪善さんを選択する！」

突如として現れた避難シエルターが罪善さんを覆い、ジェット・ロイドの攻撃を弾き返す。

「効果により選択したモンスターはこのターン戦闘で破壊されず、受ける戦闘ダメージも0。そしてシエルター以外の効果を受けない。……まあ攻撃できないデメリットがあるけど、それも相手ターンなら関係はないな」

「な、なら罰鳥の方だ。スチームジャイロイドで罰鳥を攻撃！ 『ハリケーン・スモーク！』」

技名と共にスチームジャイロイドが大量の煙を噴出して近づき、死角から罰鳥に強襲をかける。

なるほど。罪善さんを破壊できずダメージも与えられないならこつちを狙うのは分かる。だけどな……それこそ一番やつちやいけないことなんだよなあ。

「罰鳥が攻撃を受ける時、俺への戦闘ダメージは0となる。そして、自分を攻撃したモンスターに罰を与える！」

スチームジャイロイドの攻撃は罰鳥に直撃した。しかしその瞬間、罰鳥の腹部の赤い模様が体中に広がり、裂けた。

それはくちばしだった。自らの身体を裂いてまで広がる大きな大きなくちばし。そのくちばしは瞬く間にスチームジャイロイドよりも大きくなり、一口でかみ砕くとそのままもろとも消滅してしまう。

「えっ……あっ!？」

その光景に翔は驚きを隠せず、観客席も少しショッキングだったかヤジが収まる。俺も事前にディーから聞いてなかったら固まってたかもな。あと女性陣には少し気の毒だったかもしれない。

「罰鳥は自分が攻撃された時、そのモンスターを破壊する。触るな危険って奴だ。……言ったろ？ 油断するなってさ」

さあ。まだまだ勝負はこれからだぜ。

月一テストと違和感 その三

遊児 LP4500 モンスター 罪善さん 魔法・罾 シェルター 伏せ1 手札
2

翔 LP4000 モンスター ジェット・ロイド 魔法・罾 無し 手札2

罰鳥のカウンターでスチームジャイロイドを破壊したが……何やら翔の様子がおかしいな。

「……やっぱ駄目だったんだ。……僕なんかじゃ、アニキみたいには」

ポツリポツリと聞こえるその言葉に、どうやら翔が今の攻防で戦意を失いかけていると感ずる。だが、

「頑張れ翔！ まだ一回失敗しただけだろ。勝負はこれからだぜ！」

観客席の十代の声が翔を叱咤する。仮にもテストなので口出しは良くないと思うのだが、こういった激励にどこか心が温かくなるのも事実だ。試験官もあくまで応援だと

判断してか黙認しているし、俺もここで口を挟むほど無粋じゃない。

「そ、そうだよ。うん。僕はまだ負けてない!」

「ああその通りだ。それで次はどうする? まだそちらのターンだぞ丸藤君。ちなみに幻想体が戦闘したバトルフェイズ終了時、そのカードにPEカウンターが乗る」

罪善さん PE1

戦意を何とか取り戻した翔に、俺はさりげなく手を進めるよう進言する。

「……僕はメインフェイズ2に、手札からカードを2枚伏せてターンエンドだ」

おっと。手札全部を伏せて来たか。

翔 LP4000 モンスター ジェット・ロイド 魔法・罠 伏せ2 手札0

「ターンエンド時に、3月27日のシエルターの効果だ。このカードの効果を使ったターンのエンドフェイズ時、自分フィールドの幻想体1体のクリフォトカウンターを全て取り除くか、又は2000ダメージを受ける。……俺の場には取り除くカウンターは無いので、2000ダメージを選択だ」

遊児 LP4500↓2500

「……は。はっはっは。オイ見ろよ! アイツ明らかなプレミスをしゃがった! さっき罰鳥をカードで護っていれば、カウンターを払ってダメージを受けることもなかったのになあ!」

また観客席からヤジが飛んできた。そっちは立ち直らなくて良いってのに。……正直この手は俺も少し悩んだんだよな。

罰鳥のクリフォトカウンターが無い時のエンドフェイズ時、フィールドの最も攻撃力の高いカードを破壊する。シエルターと合わせれば、相手のジェット・ロイドを破壊することも可能だったろう。

さて。この選択がどう響くか。

「俺のターン。ドロロー！ 罪善さんの効果発動！ 手札の数×300、合計900のLPを回復する。そして更に永続罨『幻想体 テレジア』を発動！」

罪善さんが光り輝くのと同時に、俺の場に小さなバレリーナの人形の乗ったオルゴールが出現する。

「このカードは、〃LPを回復する効果が発動した時〃発動できる罨カード。LPを500回復し、フィールドの魔法・罨カードを1枚破壊する。俺から見て右側の伏せカードを破壊だ」

オルゴールが回り始め、その音が俺の身体を癒すと共に翔の伏せカードを破壊する。「うっ！ 『魔法の筒』が!？」

やはり攻撃反応型の罨があつたか。けどこの場合伏せない方が良かったかもな。

遊児 LP 2500 ↓ 3000 ↓ 3900

「やるな。たった一つの罪と何百もの善を残したのは、相手が伏せカードを出してきた場合に確実に除去するため。おまけに3月27日のシエルターで受けたダメージもほぼ回復している」

観客席の三沢が冷静に分析しているな。流石原作で十代を苦しめた男。

「……そして俺は手札から魔法カード『人ならざるモノからのギフト』を発動！ 手札の『幻想体 巨木の樹液』を捨て、デッキから3枚ドロウする。そしてその中に星2以下の幻想体があれば、特殊召喚が出来る」

「な、なにその効果。インチキだ！」

確かに強いけど、これはちよつと賭けの要素が強い。1枚も幻想体と名の付くカードを引けなければ、それまでの手札と一緒に全て捨てることになる。失敗したら一転して大ピンチだ。

このデッキは大半が幻想体だが、名前に幻想体と入っていないものも僅かにある。それを引くんじやないかと少しドキドキしながらドロウし、目当ての物を引いて少しホツとする。

「来たぜ！ 俺はドロウした『幻想体 宇宙の欠片』を攻撃表示で特殊召喚。次に俺は手札からフィールド魔法、ロボトミーコーポレーションを発動！ このカードが場にある限り、幻想体を召喚する際の生け贄が一つ減る」

フィールドが変化し、生命の樹を模した施設が顕現する。……へえ〜！ 立体映像だとこんな感じになるのか。俺が今いるのは、上から見たら一番上部の辺りかね？

「そして、俺は罪善さんを生け贄に捧げ、手札から『幻想体 魔法少女 憎しみの女王』を攻撃表示で召喚だ！」

消える罪善さんの代わりに手札から現れたのは、デーとの最初のデュエルでフィニッシャーとなったカード。……やはりカードの絵柄通り可愛らしい。これが何で憎しみの女王なんて物騒な名前と呼ばれているのか実に不思議だ。

憎しみの女王 ATK2300

「か、かつわいい〜っ！」

おい翔君。仮にも戦っている相手にそんな声を出すのはどうかと思うけどな。……可愛いのは否定しないが。

パチンっ！

うおっ！ 今一瞬憎しみの女王がこっちに向けてウインクしなかったかっ!? まさか罪善さんと同じ……いや待て。今はデュエルに集中だ。

「……はっ!? 危なかった。こんな可愛いモンスターを出して僕をメロメロにしようだなんて、なんて奴だ久城君」

「いや、それは狙っていないかったんだけど。メロメロになったのは丸藤君が勝手に」

「だけどそうはいかないぞ。リバースカードオープン！『リミッター解除』！」
えっ!? ここまで？

「このカードの効果により、ターン終了時までジェット・ロイドの攻撃力は倍になる。これで憎しみの女王ちゃんの攻撃力を上回るよ」

ジェット・ロイド ATK1200↓2400

「……それは良いんだが、どうしてこのタイミングで使ったんだ？ こつちのモンスターが攻撃する時に使えば、そのままカウンターでダメージを与えられたのにな？」

「えっ!? ……それは、その……」

翔はそこでちよつと顔を赤くして押し黙る。……その様子だとテンパって間違えたな。まあどのみちそれでもまだ足りないが。

「俺は手札から装備魔法『幻想体 行動矯正』を発動して憎しみの女王に装備。このカードを装備したモンスターは攻撃力が1000上がり、代わりに守備力が1000下がる」

中央に白い瞳の絵が描かれた黒い円盤状の物体が、憎しみの女王の胸元に装着される。すると憎しみの女王がどこことなくきりつとした表情になる。

憎しみの女王 ATK2300↓3300 DEF2300↓1300

「攻撃力3300っ!？」

「バトルだっ！ 憎しみの女王で、ジェット・ロイドに攻撃！」

攻撃宣言と共に、憎しみの女王がそのキラキラしたステッキを構える。すると、ステッキから星型のエネルギー弾が飛び出してジェット・ロイドに直撃、そのままボンッという音を立てて爆発させた。可愛い見た目の割に恐ろしい攻撃だな。

翔 LP4000↓3100

「くっ!? だけど、まだLPは残ってる。もう一体の攻撃を受けても耐えきれない！」

「ここで憎しみの女王の効果発動！ 相手を戦闘で破壊した時カードを1枚ドロウする。そのカードが幻想体モンスターだった場合、攻撃力を500アップしてもう一度攻撃が出来る！」

そこで俺はデッキトップに手を伸ばす。その瞬間、憎しみの女王の詠唱と共に持っていたステッキが浮かび上がり、持ち主が構えると同時に前方にハートの模様の魔法陣が幾重にも展開される。

これは砲身だ。これから放たれるであろう特大の一撃の。そしてその引き金は俺のドロウ次第。

「ドロウっ！ ……俺の引いたカードは『幻想体 今日はずかしがり屋』。よって、憎しみの女王は攻撃力をアップしてもう一度攻撃が出来る。憎しみの女王で翔にダイレクトアタックっ！」

「う、うわあああつー！」

ステッキから放たれたチーム砲は魔法陣を一つ通るごとに強大になり、遂には身の丈ほどになって翔を飲み込みLPを削り取った。

翔 LP3100↓0

デュエル終了。遊兎WIN！

デュエルが終わり、俺達は他のまだデュエル中の生徒の邪魔にならないよう静かに壁際まで移動する。

「試験終了。お疲れ様。見事なデュエルだった。次のグループが始まるまでまだ少し時間がある。ここで他のデュエルを観戦するのも良いし、すぐに退出しても良い」

「はい。ありがとうございますー！」

一礼すると、試験官はそのまま去っていった。次の準備もあるのだろう。……さて。残る問題は。

「……………はあ」

横でどんよりとしたオーラを醸し出している翔をどうしたものか。

「丸藤君。……勝った俺が言う事ではないかもしれないけど、そう落ち込まないで欲しい」

「……うう。僕なんてどうせ底辺なんだ。干からびかけたミミズの方がまだマシかももうダメダメだよ〜っ」

何か無茶苦茶言ってる。早いところ十代か三沢、もしくは同室のコアラ……前田隼人だったか？ とにかくその辺りに励ましてもらいたいところだが、いつまで経ってもやってこない。人が多くて手間取っているのかもな。

「たった3ターンで倒されちゃったし、結局僕は自力で1ダメージも与えられなかった。やっぱり僕は弱いんだ。……こんなんじや、お兄さんに認めてもらうのなんて」

後の方の呟きは、意図して出したものではないようだった。翔の兄はあのカイザー。原作でも凄まじい実力を見せつけたからな。兄弟としてはコンプレックスの一つもあるのだろう。だが、

「君は弱いというか、ただプレイングミスが多いだけじゃないかな？ 現にさっきのデュエルだって、そうだったし」

「リミッター解除のこと？ だけどあれを使っても結局」

「いや、俺の言いたいのはその前。折角ジェット・ロイドがあつたのに、手札を全伏せしてしまったろ？ あれさえなかったらまだ勝負は分からなかった」

「えっ!? どういう事?」

翔は本気で分からないようだ? もしや効果テキストをよく読んでいないのだろうか。

「ジェット・ロイドは攻撃を受ける時、手札から罠を発動することが出来る。あの時魔法の筒を取って伏せずに手札に持っていれば、テレジアの効果で破壊することが出来ず、憎しみの女王の攻撃を跳ね返すことも出来ただろうに」

もちろんその後リミッター解除の効果でジェット・ロイドは破壊されるため、手札0でフィールドがら空きという危機的状況には変わりなかったが、それでも大ダメージを与えた上で次のドローに繋げることは出来た。

攻撃力1200のジェット・ロイドを、手札の罠を警戒してわざわざ効果で破壊しに動くのはあんまりないだろうしな。俺が罰鳥を攻撃表示で出したのと同じ。低攻撃力のモンスターを、取って攻撃しないという判断を下せる者は意外と居ない。

「ジェット・ロイドにそんな効果が。……僕、いざって言う時になるとあがつちやつて。時々テキストの内容を忘れてしまうんだ」

「他のもそうだけど、時間がある時は落ち着いて効果をよく読むこと。そうすれば少しは活路が開けるかもしれない。……とまあ偉そうに言ったけど、俺もよくテキストを読み間違えてひどい目に遭うんだけどな。幻想体ときたら複雑な効果ばかりだし」

「……うん。ありがとう久城君。なんだか話してたら、少しだけ気分が楽になった気がするよ」

それは良かった。……さりげなく罪善さんが、翔に向かって何か光を当てていたことは見なかったことにしよう。

それから少しして、十代が翔を励ましに来たのを見届けると、俺は静かに自室に戻った。なんだかんだ負けた相手から励まされるっていうのはきついだろうし、やはりこういうのはアニキの仕事だと思おうしな。

その日の夜、部屋で明日の準備をしていると、外まで響くような大声で翔が喜んでた。どうやら十代がオシリスレッドに残る決断をしたらしい。結局ライイエローに上がつて原作からずれるという展開はなくなったようだ。十代には悪いが少しだけホツとする。

しかし、今日は予想外のことが多すぎた。

「まず万丈目の使うデツキが違う。十代も主力のはずのジ・アースは結局使わなかったし、あわやライイエローに昇格だ。翔とデュエルすることにもなったし……デー。本当に原作通りに進んでいるのか？」

『勿論さ！ 君が居ることでも多少の差異はあるけど、基本的には原作通りに進んでいるとも！』

本当かよ!? どうにもその多少の差異っていうのが気になる。

カタカタ。カタカタ。

罪善さんがどこか落ち着かせるようにこちらを見ている。ありがとうな。……：そう言えば、ふと今日の憎しみの女王のことが気になり、試しにこんなことを聞いてみる。「なあディー？ 以前幻想体の大半は精霊化できるって言ってたよな。今罪善さんみたいに自分で出てこれそうな奴っているのか？」

『そうだねえ。……自力でも何とかかなりそうなのが数枚。と言ってもカードを媒介にして、あくまで君の周りに出てこれるってだけだけど。何なら呼んでみる？』

「今は良いよ。テストが終わったばかりで疲れてるしな。それにどうせ自分で出てくるんだろ？」

『そりやあ気が向いたら出てくるんじゃないかな。気が向いたらね』

ディーはまた意味深なことを言うが、やっと罪善さんの顔を夜中見ても驚かなくなってきた所だからな。今またそんなのがまとめてやってきたら心臓に悪い。せめて来るなら比較的落ち着いた奴に来て欲しいところだ。

数日後。筆記テストの答案が戻ってきたのだが、結果は酷いものだった。俺としたことが慌てていて、途中から解答がずれていたのだ。

ずれた部分がほとんど正解だっただけにとても悔しい。……次からはデイーに何言われても早めに寝てやるからなっ！

特待生寮に潜む闇 その一

ある日の夜、少し小腹が空いたのだがタイミング悪くパンも菓子も買い置きはない。これは食堂に何かないかと探しに行くと、そこではお決まりの十代達三人組が一つのテーブルに集まっていた。

「よお遊児！ 俺とデュエルしようぜ！」

「いきなりだな十代！ 今はやめとく。その内な！」

テストの翌日から、何故か十代にロックオンされた。幻想体という珍しいカテゴリだからな。デュエル好きの十代からすれば一度戦ってみたいたいというのは分かる。だが原作主人公とのデュエルなどのくらい影響を与えることやら。

その上毎回会うなり挑まれてはたまったものではない。何かと理由を付けてのらりくらりと躲しているが、その内逃げきれなくなりそうだな。

あとハネクリボーが毎回俺に……というより俺のデツキに反応してるんだけど！ 頼むから十代に告げ口しないでくれよな。

そうして向こうから絡んでくる以上避け続けるのは難しく、いつの間にか時々つるむようになっていた。一緒に食事したりとか、時折十代達の部屋にお邪魔したりとかな。

流石にそれくらいなら本筋に影響を与えることにはならないだろう。

「あつ！ 久城君くんばんは！」

「くんばんはなんだな！」

翔やコアラ……隼人とも、その縁で話すようになっていった。まあ翔には最初テストの時の相手つてことで少し気を遣っていたのだが、今では普通に接している。

隼人はなにぶん原作で描写されていないので性格が良く掴めなかつたのだが、どうやら留年しているらしくデュエルに対して熱を失っている節が有る。ただデュエル馬鹿の十代が四六始終一緒に居るからな。何かしらの影響は受けるかもしれない。

「二人共くんばんは。ところでどうしたんだ？ こんな暗い中で電気も点けずに」

明かりときたらロウソクの火のみ。それがテーブルの上に置かれたカードを照らす様は、どこことなく幻想的な雰囲気醸し出す。

「ああこれか！ 順番にカードを引きあつてさ、引いたカードのレベル分だけ怖い話と言いつつさ。さつき隼人が言った所で、今は翔の番。遊兎もやるか？」

「つまりは怪談か。……いや。俺はやめとく。急に怪談と言われても持ち合わせがないしな。聞かせてもらうだけにしておくよ。それより何か摘まむものは無いか？ どうにも小腹が空いちやつてな」

不思議体験なら現在進行形で起きてるが、流石にそれは話すわけにはいかないしな。

罪善さんも空気を読んで十代の前では出てこないし。

「それなら僕のをあげるよ。食べかけで悪いんだけど」

「悪くなんてあるもんか。ありがとうな。大事に頂くよ」

翔から中身の半分ほど無くなった菓子の小袋をもらい、中身を一口に放り込みながら一緒のテーブルに座る。……グミだなこれは。手が汚れなくて良い。

「では失礼して。……この島の北の断崖に、その洞窟はあるんす」

そんな語り口で始まった翔の怪談話。簡単に言うところ、その奥には小さな入り江があって、月の出ている夜に入り江の底を覗くと水底に自分の欲しいカードが映る。それに手を伸ばすと腕が伸びてきて海に引き込まれるという話だ。

「行ってみて〜！ その入り江！」

十代は怖がるどころか興味津々だ。隼人なんかビビりまくっているというのに。しかし怪談話までカードが絡むとは流石デュエルアカデミア。全然怖がりもしない十代に対し、翔はどこか呆れ顔だ。

「まあレベル4の話だったらそんなもんだらうな。……よし！ 俺の番」

そう言って十代が引いたのはレベル1のキラースネーク。それで十代が語りだしたのは、自分の小さい頃に夜になるとモンスターの声が聞こえたという話。

「でもさあ最近、また聞こえることがあるんだよなあ」

「モンスターの声……か」

ふむ。原作では小さな頃怪我をして入院中、プロデュエリストの響紅葉からデツキと一緒にハネクリボーのカードを託されて、その時初めて精霊の声が聞こえたという描写になっていたが、素養自体はその前からあったのかもしれないな。

「みなさ〜ん。何してるんですかにゃ?」

そこに急に現れたのはレッド寮長大徳寺先生。引いたカードの分怖い話をしていると翔が答えると、先生も面白そうとばかりにカードを引く。引いたカードは……レベル12。

とっておきのものを言われ、大徳寺先生が語ったのは島の奥に使われていない寮があるということ。そこは以前特待生寮と言われ、なんでも何人もの生徒が行方不明になったとか。

「なんでも、その寮では闇のゲームに関する研究をしていたらしいのにゃ」

闇のゲームっ!? 俺はその言葉に全神経を集中させる。原作無印においては千年アイテムを使用して行われ、GXの方では諸悪の根源ことトラゴエディアの力が注ぎ込まれたアイテムによって行われていた。

まさかいよいよそこら辺の本筋が大きく動く前兆か?

「千年アイテムねえ。でもそんなの迷信だろ?」

「真実は私も知らないのにや。私がこの学園に来た時には、あの寮は立ち入り禁止になつてたにや」

そしてこれを最後に怪談話はお開きに。だが十代はえらく興味を惹かれたらしく、明日の晩にその寮に行つてみようと言ふと皆を誘う。

「遊児。お前は どうする？」

「うーん。……やめとくよ。そこは一応立ち入り禁止なんだろう？ それには何かしらの理由があるはずだ。闇のゲーム云々というより、ぼろくなつて危ないとかさ」

と言つてはみたが、実際こういうのは本当にそういう何か起きた可能性が高い。物語のお約束という奴だ。

ならば本筋に絡みそうな話に俺が下手に絡むと、それはそれでロクな目に遭いそうになる。原作主人公達は無事でも、それ以外のモブがヒドイ目に遭うというのは良くある話だ。

事情は十代達が戻ってきてから聞けば良いだけだし、俺は明日は寮でのんびり過ごさしよう。

「ああ。まあどつちにしても明日の話だけだな。今日はもう解散だ。それじゃあお休み」

「おう！ お休み」

「お休みなさい」

「お休みなんだな」

それでその日は解散となった。翔にはまたその内グミの礼をしないと。何が良いかな？

翌日。昼間は特に何事もなく過ぎていった。今日の夜に出発する都合上か、十代と翔は授業中に堂々と居眠りしている。そこはもう少し何とかならないかねまったく。実技は良くてもこれじゃあ色々マズいだろうに。

そして授業も終わり、日も落ちた頃合いにいざ出発と意気込む十代。

「じゃあ俺達だけで行ってくるぜ！ 土産話を期待しといてくれ」

「あつ!? 一応立ち入り禁止の場所だからな。あんまり派手に騒ぐんじゃないぞ。先生にバレたら大目玉だ」

「そ、そうだった！ 今からでもやめようよアニキ」

「今更何言ってるんだよ翔。派手に騒がなきゃ良いんだろ？ それじゃあな遊児！」

「行ってくるんだな！」

そうして十代一行は懐中電灯片手に特待生寮に向かって行った。隼人なんか何故か

デュエルディスクまで持っていったぞ。もしや現地でやるの!？」

まあ俺は部屋でデッキの調整でもしようかね。地味に幻想体は上級モンスターが多
いから、誰を主軸にするかで毎回悩むんだよな。

『へえ〜。結局行かなかったんだ。言わなくても分かると思うけど、これは割と重要な
イベントだよ』

「それは分かるけどな、どう考えたって厄介ごとの香りもブンブンしてるんだよな。ど
のみち俺が関わらなければ変に流れが変わることはないはずだし、流れが変わらなけれ
ば十代が何とかするだろ。主人公なんだし」

「ディーの光球が俺の周りを浮遊しながらそんなことを言う。毎回デッキ調整をして
る最中にやってくるのももう慣れたもんだ。だから俺も敢えて注意を逸らすこともな
く、デッキ調整に集中する。」

「安全第一。俺は基本闇のゲームだのデュエルだのはなるべく関わらない方向で行きた
いからな。あくまで十代達の近くに居るのは、そういうヤバい何かの予兆を早めに掴む
ためだ」

『そこは十代達に関わらないという選択肢ではないんだね』

「向こうから勝手に関わってくるんだからしょうがないだろう。……つまらない選択で悪いけどな」

『いやいや。そんなことはないさ。最後まで見てみないことには選択の是非は分からないからね。……それに、どうやらそんなことも言っていられないようだよ』

「ディーがどこか楽しげにそんな事を言うのを、それはどういう事だと問い返そうとした時、

「……うおっ!？」

突如として罪善さんのカードが光り輝き、茨を被った頭蓋骨が出現する。よくディーを窘める時や俺の身を案じてくれる時に出てくるが、今回はどちらとも違う感じだ。

「どうした罪善さん? 何か伝えたいことがあるのか?」

カタカタ。カタカタ。ガシツ。

何と罪善さんが俺の服の袖を噛んで引つ張ろうとしてくる。というか触れるのっ!?

『精霊によつては短時間であれば実体化化できるからね。実体化してる間は当然触れるし、素養の無い人でも場合によつては薄っすらと見える。まあそれなりのエネルギーが必要になるけどね。……どこか疲れたりとかしてない?』

「いや。至つていつも通りだけど」

『となると今君から吸ってるんじゃないなくて、これまで無意識に君から流れていたエネルギー

ギーを貯蓄しておいて、それを使って実体化しているって所かな?」

無意識でエネルギー流れてんのっ!? まあそれは驚いたが今肝心なのはそこじゃない。

「その貯めたエネルギーを使ってまで俺に伝えたいことがあるってことか?」

カタカタ。

罪善さんは袖を放し、コクコクと頷いた。そしてそのまま外に向かって移動していく。その方向は十代達が先ほど向かった廃寮の方だ。このタイミングで罪善さんのこの行動。これはおそらく、

『十代達の方で何かあったんだろ? ……どうする? このまま放っておくかい?』

放っておいても依り代たるカードはここにあるから、時間が経てば勝手に帰ってくると思うよ?』

「……聞かなくても分かるだろ。……行くしかないじゃんこんなのっ!」

考えてみよう。このまま実体化した罪善さんが廃寮に向かったとする。こんな時間だが、一人や二人外を出歩いている生徒が居ないとも限らない。それが空に浮かぶ光る頭蓋骨を目撃したらどうなるか? たちまち新しい怪談話の出来上がりだ!

おまけに罪善さんは、この前の月一テストで顔が割れている。ただでさえ珍しいカテゴリのカードの怪談話。どう考えたって俺の方に話が来て面倒なことになる。

この状況をどうにかするには、即行で罪善さんに追いついて実体化を解除してもらい、罪善さんが伝えたがっている何かを確認してとつと戻る。それしかない！

俺は慌てて身支度を整え、念のためデュエルディスクも持って罪善さんの後を追いかけたのだった。

特待生寮に潜む闇 その二

「お〜い罪善さん。ちよつと速いつ！ 速いつて?！」

俺は懐中電灯片手に暗い森の中を走っていた。行く手を罪善さんが発光しながら浮遊しているが、意外に速い上に見通しの悪い森の中。追いかけるのも一苦労だ。

時折途中で止まってこちらを待つてくれてなかったら、光つてなくてもとつくに見失っていただろう。

『おやおや。苦労しているようだね』

「こつちはディーや罪善さんみたいに空が飛べるわけじゃないんでねっ！ というかこんな所に出てきて大丈夫なのか?」

『誰か来たらまた姿を消すから大丈夫さ』

ディーの光球も俺の後を付いてくる。これまでずっと自室でしか姿を見せなかったから、部屋にしか出られないと思っていたが違うようだ。

『お急ぎなら幻想体の実体化でもして連れてってもらうかい？ 精霊化一步手前ものなら君がエネルギーを注げば出てくるかもよ？ ちなみにこんな暗い暗い森の中なら……そのカードなんかがお勧めかな』

その言葉と共に、デツキケースからカードが一枚ふわりと浮かび上がって目の前に現れる。どれどれ……『幻想体 三鳥 大鳥』か。

今と同じような暗い森の中を、ランタンを持った黒い毛玉のような何かが歩く絵柄だ。確かにシチュエーションとしてはピッタリかもな。ランタンも明かりとしては良さそうだし。……だけど、

「遠慮しとくよ。どうせ出すことは出来ても制御できないとかそういうオチが付くんじゃろ?」

『バレた?』

お俺が歩きながらそう聞くと、デイーはそう悪びれない様子で答えた。だと思つたよ。

『まあ一応の担い手である君が死んだらマズいから、君に直接手を出すようなことはあんまりないとは思うけどね。言う事を聞く聞かないは別問題だよ』

「罪善さん一人でもこんな状況だぞ! それなのにポンポン増やしても面倒見切れるかいっ!」

幻想体はどう見たって人外が中心のカード群だ。たまには人間らしいカードも居るが(魔法少女とか)、圧倒的に見た目からしてヤバい奴らが多い。そんなのが何体も実体化してきたらとても抑えきれぬ自信はないぞ。

「ということで実体化は無し。せめて人畜無害な奴か、こっちの言う事を素直に聞くカードじゃないとダメだ」

『罪善さん並みに安全なカードとなると難しいよ。どれも使い方によつては人に危害を加えるなんて朝飯前のもものばっかりだし、言う事を素直に聞くかどうかどうかも相手次第だからね。まあそこはこれから君が手綱を握れるようになるしかないね。……そして、そろそろ目的地に着いたみたいだよ！』

言われてみれば、どうやら森を抜けたらしく目の前に古びた建物が見えてきた。……古びちやいるけど、きちんと整備すればオシリスレッド寮よりしつかりしてそうだぞ。入口にはしつかり立ち入り禁止の看板と鎖が付いている。こんなところ堂々として入っていったのか十代達は。原作主人公無茶苦茶だな。

罪善さんは当然気にも留めず、俺をチラリと一瞥するとそのまま中に入っていく。……えらい仕方ない！俺は周囲に誰も居ないことを確認すると、素早く鎖の隙間を縫って突入した。

『おやおや。何ともボロボロだね』

内部は大分荒れ果てていた。家具は倒れ、ガラスは割れ、天井からぶら下がっているシャンデリアはどこことなく物悲しげだ。

「人が使わない建物なんてそんなもんだ。手入れしないとすぐに家具は傷むし埃も溜まる。……ただ、少し前に誰かがここを通ったみたいだ」

懐中電灯で照らすと、床に複数人の足跡が見つかった。それもまだ新しい。十中八九十代達だろう。

『ねえねえ。これを見てみなよ！ 面白いものがある』

「何だよデュー……ってこれは!? 千年アイテムっ!？」

デューの言葉にその方向を照らし出すと、壁に千年アイテムのような絵があった。わざわざ無印で出た古代の言葉らしきものが横に描かれていることから、現地の石板か何かを模写したものかも知れない。

確か無印では、最終回で千年アイテムは全て地割れに呑まれて地の底で眠っているはず。そう簡単には掘り出せないと思うが、一つ二つ何かのはずみで見つかってもおかしくはないか。トラゴエディアの石板の例もあるしな。

「ここが千年アイテム、ひいては闇のゲームのことを調べてたつてのは間違いなさそうだな」

『そのようだね。……ところで良いの？ 罪善さんを追いかけて』

忘れてたっ!? 気がつくときから罪善さんが何も言わずこつちを見る。……普段みたく歯をカタカタ鳴らすこともなく、ただ静かにこつちをその瞳の無い眼窩でじ

くつと。

いやゴメン！ ホント悪かったって！ 俺が平謝りすると、罪善さんは機嫌を直したのかそのままスツと部屋の奥に向かっていく。……考えてみたら、ここに来る羽目になったのは罪善さんのせいだよな。それなのにこれじゃあちよつと釈然としない。

俺とデューは罪善さんを追って洋館の奥へ奥へと進んでいった。

「で、どういう状況だこれは？」

『何やら面白いことになってるみたいだねえ』

罪善さんについていくことしばらく、何か明らかに普通の寮には必要ないだろつて地下通路を抜け、辿り着いた広間らしき場所。そこでは少し妙なことになっていた。

十代がこんな所で、仮面を被った明らかに怪しい巨漢とデュエルを行っていたのだ。デューといいコイツといい仮面を被るのが流行っているのだろうか？ あと無駄に声が渋いなこの人。

どうやら罪善さんが知らせたかったのはこれのようで、俺は様子を見るために通路の陰に身を隠す。十代達とは途中から別の通路で来たらしく、俺の場所は謎の男側。場所取りが悪かったな。出来れば向こうの翔や隼人と一緒にのんびり観戦したかった。

あと何故か部屋の隅で、明日香が変な棺の中に横たわっていた。流れるに人質かね？
助けたいところだがちよつと距離がある。駆け寄る途中でバレるな。

『ほうほう。あの仮面の男……名前はタイタンって言うらしいんだけどね。割とやるじゃないか！』

「ああ。確かに良い腕してる。だけどそれ以上に十代の方が何か変だな。調子でも悪いのか？」

途中までは仮面の男の操るデーモンデッキの猛攻、そして謎の不調に苦しめられる十代だが、モンスター効果で場のパンデモニウムを破壊したことで一気に状況が動く。

「こいつの闇のゲームはインチキだ」

十代が言うには、どうやらこの仮面の男はデュエル中に十代達に幻覚を見せてプレイ妨害をしていたようだ。確かに本当の闇のゲームでもそんな描写があったが、催眠術でそれを再現するとは考えたな。

「何をほざく。私は本当に闇のゲームを」

「なら当然知ってるよな？ アンタが持つ千年アイテム。それが幾つあるのか？」

千年パズル（のような物）を持ってこれでもかと主張する男に対し、十代は試しにカマをかけた。結果男は口を滑らし、これがインチキであるという事を看破される。……
というかあの千年パズルよく見たら違和感あるだろ？ 無印の描写ではもつと迫力が

あつたぞ！

仕掛けを見破られた仮面の男は、なんと地面に煙球を投げつける。デュエルを放棄して逃げる気か!? しかもこつち側に来るんじゃないよ!?

だがその時、広間を囲むように施されていた蛇のような装飾の目が光輝き、床に妙な瞳の模様が浮かび上がる。そして

漂う煙幕がまるで意思を持ったかのように形を取り、広間の中央近くに居た十代とタイタンを包み込んだ。……そして、

「何で俺もなんだよおっ!？」

どさくさで俺まで包み込まれた。……勝負をもう少し近くで見ようと近づいたのがマズかったらしい。

煙に吞まれたと思ったら、次の瞬間俺はやけに暗い空間に居た。狭いのかも広いのかもよく分からない。確かに立っているはずなのに、脚の感覚もあやふやだ。妙な所だな。

『あゝっはっはっは! 大ピンチだね久城君!』

「笑ってる場合じゃないっ! こんなのだうしろっつてんだっ!」

それにさつきから、小さな黒いスライムみたいなやつが大挙して寄ってくる。よく見たら細い手のような物を伸ばしているのがまた微妙に不気味だ。

「うわっ!!? 寄ってくるなっ!」

一匹顔に飛びかかってきたので咄嗟に払いのける。その瞬間、首から提げていたペンダントがぼんやりと光を放ち始めた。

「……うんっ!? 急にこいつらの動きが鈍くなったぞ」

『そりゃあ、元々、神様である僕のお手製だからね。ちよつとした邪気や低級モンスター程度なら追い払えるさ。……言わなかったっけ?』

「聞いてないっ!。そういう事は早く言えよっ!」

その言葉を聞き、俺はペンダントを手を持ってかざす。すると黒スライムの近寄ってくる速度がハッキリと遅くなった。それでも僅かに纏わりついてくる奴が居るのだが、一匹や二匹ぐらいなら何とか払いのけられる。

カタカタ。カタカタ。

そこへ俺の近くに罪善さんが歯を鳴らしながらやって来た。罪善さんも呑み込まれていたのか。こんな場所でも罪善さんが居ると少し明るく感じるから不思議だ。

そして罪善さんが来るなり黒スライム達がパタリと寄ってこなくなった。……どうやら罪善さんが怖いらしい。見た目だけならおっかないもんな罪善さん。

「ありがとう罪善さん。助かるよ。ところで、先に吞まれた十代達は？」

カタカタ。

『あつちだつて！ ……どうやら向こうでデュエルをしているみたいだね！ 行ってみる？』

「流石にこんな状況じゃ影響云々は言つてられないな。一回合流しよう」

このままでは誰にも知られずにこんな所で遭難だ。そうなるぐらいならまだ原作主人公と一緒に居た方が安全な気がする。 ……俺達は罪善さんの先導で十代達の方に向かった。

特待生寮に潜む闇 その三

「スパークマンで、デスルークデーモンを攻撃！」

その言葉と共に電気を操るE・HEROの雷撃が、チェスの駒のようなデーモンを吹き飛ばす。

なんとどうやらこんな状況でも十代はデュエルをしていたらしい。どんなところでもデュエルで切り抜けるというその一貫した行動はある意味尊敬するよ。

どうやら十代の周りにも黒スライムが居るようだが、ハネクリボーが実体化して食い止めているようだ。

対戦相手はさっきのタイタンか。……逃げなかったんだなタイタン。目なんか赤く光っていてちよつと様子がおかしいけど。

『どうやらタイタン君ったら、さっきの奴らに憑りつかれているみたいだね。闇のゲームでデュエル放棄は無しってことみたいだ』

えっ!? さっきのスライム人に憑りつくのっ!? これはますますさっさと逃げねばヤバイ!

俺は慌ててペンダントをかざし、黒スライムを払いのけながら十代に駆け寄る。ちな

みにディーは急にフツと姿を消した。……さつき言った通り人に自分の姿を見られたくないようだ。

「お〜いっ！ 十代。無事かっ！」

「えっ!? 遊児お前なんでこんなところに!? 来ないんじやなかったのか!」

「いや、それが後から色々あつて追いかけてきたんだ。……それでさつき追いついたら十代が変な相手とデュエルしてるし、おまけに変な煙に吞まれたと思つたらこんなところにいるも何が何だか」

素直に罪善さんを追いかけてという訳にもいかないしな。その辺りは少しぼかしながらこれまでのことを説明する。

「そうだったのか……って遊児後ろっ！」

十代の声に振り向くと、またさつきの黒スライム達が押し寄せてきた。マズイっ！
クリクリ〜！ カタカタ。

だがそれに合わせてハネクリボーがインターセプト。黒スライム達を押し止めると同時に罪善さんが光を放ち、奴らはザッと距離をとった。

「ふう。……遊児。そのモンスターひよつとして！」

「あ〜。罪善さんの話はあとだ！ 何だか知らないけど、このデュエルを終わらせたなら早いところこんな場所から出ようぜ。……勝てよ！」

「当然だろっ！ 待たせたなタイタン。デュエル再開だ！」

十代はそう力強く宣言した。……大丈夫だとは思うけど頑張ってくれよ十代！

その後の流れは半ば予定調和と言えた。場も手札もがら空きにされた状況で、十代はバブルマンをドロローして特殊召喚。さらにバブルマンの効果によりさらに二枚ドロローと怒涛の引きを見せ、さらに土壇場でエッジマンを特殊召喚。

こうして主人公らしい凄まじい逆転劇を見せつけた。……というかあの状況でよくドロロー一枚でひっくり返したな。俺にはとても出来ない芸当だね。

しかし問題はこれからだ。デュエルの決着がついた瞬間、それまで周りを取り囲んでいた黒スライム達が敗者であるタイタンに群がったのだ。

「な、何をするっ!? バカな。本当に闇のゲームが、あると言うのかあっ……」

そのまま黒スライム達に？み込まれていくタイタン。闇のゲームを騙ったとは言え、この末路は何とも不憫だ。俺は心の中で合掌する。

「うお。すっげ。どうなってるんだあれ？」

どうやら十代は、この状況をまだマジックか何かと判断しているようだ。それならそれで良い。下手にこういうのを掘り下げるとロクなことにならないからな。

「そんな事言ってる場合じゃないぜ。デュエルは終わったんだから、早いところこんな所からおさらばだ」

「分かった」

どうやらハネクリボーが出口を見つけたらしい。この空間に現れた小さな裂け目。そこに向かつて俺達はひた走る。

後ろから再び大挙して押し寄せる黒スライムの群れ。もうタイタンは消化されてしまったのだろうか？ いや、そんなことを考えている場合じゃない。走れ走れっ!!

「一度に入ったらつかえる。先に行け十代っ!」

「おうっ!」

まず最初にハネクリボー。次に十代が裂け目から外に出る。そして、

「……で、そろそろ良いんじゃないか罪善さん。ここに来た本当の目的を教えてください」
もっ!」

俺は裂け目の直前で足を止め、ここに連れてきた元凶である光り輝く頭蓋骨を見つめる。ハネクリボーも十代も先に行った。他に聞いている者はいない。

『おや。鋭いね。気付いていたかい?』

「そもそもほっといても原作通りに進むのであれば、俺が介入する意味は無いからな。だから罪善さんが連れてくるとすれば、何かしらの意味があると思っただけさ」

いつの間にか再び出現したデイーの光球にそんなことを言いながら、俺はいつ何時でも裂け目に飛び込めるように構える。だってもう黒スライム達が間近に迫ってるんだぞ！ 内心ビビってるんだ。

そんな中、もはや津波のような勢いで迫りくる黒スライム達の前に罪善さんはふわりと浮かぶ。……そして、

『目的を一言で表すなら……救済かな？ まあもしかしたら補給ってだけかもしれないけどね』

罪善さんから物凄い光が放たれ、俺の目が一瞬眩む。そして再び目を開けた時、そこにあつたのは白い粒子状になって罪善さんに吸い込まれていく黒スライム達の姿だった。

「な、なんだこれはっ!？」

『実は罪善さんは他者の“罪”を糧にして活動している。君から少しずつ供給されているエネルギーとはまた別にね。そしてこの察には、人にとつてとても良くないモノが溜まっていた。人の罪の形とも言えるさっきのような何かが。……罪善さんはそれに反応したんだろうね』

「人の罪の形……か」

確かに千年アイテムと関わるなら、闇だの何だのは切り離せない要素だ。なにかしら

の実験の結果、こいつらが出てきてしまったという事であればそれは人の罪の形と言えるかもしれない。

黒スライム達は、何となく穏やかな顔をしながら罪善さんに吸い込まれていった。あくまで俺がそう感じたただけだから、もしかしたらそんな事全然思つてなかつたかもしれないけどな。

そしてあらかた吸い込み終わった罪善さんは、最後にまた軽く発光して実体化を解いた。何か前より神々しさが増したような気がするな。

「なあディー。もうその良くないモノは完全に無くなつたのか？」

『いや全然。ひとまずここに溜まっていた分を吸いきつたっただけ。それに放つておけばまたいつか溜まるだろうね。……それが一年後になるか十年後になるかは知らないけど』

「そっか。……それじゃそろそろ出るとするか。十代達も待つてるだろうしな」

さっきの良くないモノのこともあるし、とにかくこの寮はヤバいという事が判明した。今回はどうやら原作の流れ的に必要だったようだけど、もうこの寮には金輪際近づかないからな。

俺はそう決意を固め、静かに裂け目の中に入っていくのだった。

「遊児！ 無事だったか!？」

「えっ！ 久城君つ!？」

「遊児も来てたんだな？」

裂け目から出た瞬間、先に出ていた十代と呑まれなかつた翔達が駆け寄ってくる。そしてそのままさつきまで俺達が居た闇の空間が一気に収縮し、凄い風を巻き起こしながら消滅した。

「おっっ！ 今度はタネがまるで分からねえ！」

十代が拍手しながらそんな事言ってる。まあ知らない方が良いこともあるよな。

結局タイタンは、デュエルに負けて大規模なマジックで逃げたという扱いになった。実際はまだあの闇の中だが、罪善さんが良くないモノを吸収したから少しはマシになったかもしれない。気休めだがそう思う事におこう。

その後、眠らされていた明日香を起こし、十代が何かを手渡していたようだけど、俺はこれからのことで頭がいっぱいでそれぞれどころではなかった。

だって十代にはばっちり罪善さんのことを見られてるしな。正直に話したら絶対これからの流れに影響を与えるし、どう言えば原作の鍵になる精霊について誤魔化せるか。

コケコッコー!

「やばっ!? おい。皆が起き出す前に戻ろうぜ!」

「そうだった! もう朝じゃないか! まだ授業の用意もしてないんだぞ!」

一番鶏の音が響く中、オシリスレッドの面々は明日香に挨拶をすると慌てて走り出す。……こりやあ今日は寝不足で授業を受けることになりそうだ。

「そう言えば遊児。さっきのことだけだな」

十代が走りながらこっさり俺に耳打ちする。やっぱり忘れてなかったか。

「さっきのカード。……罪善さんだっけか? あのことはその内話してもらおうからな。ひとまず帰ったらぐっすり寝ようぜ!」

「……ああ。そうだな」

「何々? 何の話っすか?」

「内緒だ! さあ急ぐぞ」

翔も話に混ざってきたが、そこは上手いこと誤魔化す。よし。これで少しは時間が稼げた。その間にどうにか言い訳を考えるぞ。

そうして俺達はレッド寮に帰りつき、せめて授業開始ギリギリまで寝るべく挨拶もそこそこに自室に入る。そして疲れ切った俺が倒れこむようにベッドに飛び込もうとした時、

「……………何だ？」

布団の中に妙な膨らみがあるのが見えた。しかもその膨らみは微かに動いている。………何か居るっ!?

俺は慌てて身構え………少し考えて構えを下ろす。さてはまた大徳寺先生の愛猫のフアラオだな！ フアラオは神出鬼没でこの寮のあちこちに出没する。一度なんか寮の屋根裏を伝って部屋に入ってきたことがあったのだ。

このところ少しづつ寒くなってきたし、暖を取るためにどこぞの部屋の布団に潜り込むことは十分あり得る。丁度部屋の住人が居なかったこともあって入りやすかったのだろう。

ゆっくり寝かせてあげたいところだが、俺ももう眠くて仕方がない。一番上の段は上るのがしんどいし、二段目の段は荷物置きにしてから片付けるのが面倒だ。

中に居るであろう縞柄猫をベッドから追い出すべく、俺は布団を勢いよく引っぺがす。だが、

「という訳でちよいと退いてくれよフアラ………オ？」

「……………すう……………すう」

布団の中に居たのはあの縞柄猫フアラオではなく、静かに寝息を立てる一人の小柄な少女。そして、その姿には見覚えがあった。

デーに渡されたカードの一枚『幻想体 小さな魔女 レティシア』。目の前の少女はその絵柄にそっくりだった。それが意味するところはつまり、

「……なんで実体化してんだよレティシア」

俺の苦悩をよそに、目の前の少女はとても気持ちよさそうに眠り続けていた。

小さな魔女とお手伝いさん その一

「おいディーっ！ ちょっと出てこいっ！」

俺は「元」神様を小さな声で呼びつけた。下手に大きな声を出したらこの子が起きかねない。だというのに、

『はいはくい。久城君の方から僕を呼び出してくれるなんて、実に嬉しい限りだねえ。今日はお祝いだっ！ それでどうしたのかな？』

「声が大きいっ！ ……これを見ろ」

『これ？ ……久城君。これは事案という奴じゃないかい？ いくら幻想体とは言えこんな小さな子を手籠めにするなんて』

「違うわいっ!! ……つと、俺をそんな変態に仕立て上げようとするんじゃない。俺が部屋に戻ったら、いつの間にか布団に潜り込んでいたんだ」

俺は現れた光球に一瞬声を荒げ、すぐにまた声を抑えて反論する。……よし。目を覚ましてはいないようだ。ひとまず布団を静かにレティシアに掛け直す。下手に起こして機嫌を悪くしたらマズイ。

『冗談冗談！ 分かってるって。……これは間違はなくレティシアだね。今彼女のカードはどこに？』

「ここだ。……今日はデッキ調整の時に入りきらなかったから外して部屋に置いていた」

俺は引き出しの中からそのカードを取り出して見せる。流石に数が多くて全ての幻想体はデッキに入りきららないからな。毎回調整して入れるカードを決めて、残りは引き出しに入れてある。

『どれどれ……なるほど。原因が分かったよ。簡単に言うとききの罪善さんが引き金だね』

「罪善さんが？」

カタカタ？

カードを少し調べ、何か分かったように言うディーの言葉に罪善さんも実体化して首を傾げる。

『さつき罪善さんが特待生寮で良くないモノを吸収したことで、相当量のエネルギーが蓄積されている。それこそ実体化だけには過剰なぐらいにね。結果本来久城君から送られるエネルギーは罪善さんに入りきららず、他の精霊化一步手前のカードに流れ込んだ。それで一気に精霊化、実体化したんじゃないかな？』

うゝむ。よく分からん。

『一度精霊化したらエネルギーさえあれば割と簡単に実体化できるからね。他にも罪善さんみたくちよこちよここれから出てくるかもよ』

「まあ精霊化自体は、ディーが前から言っていたから仕方ないで済ませるけどな。問題はここからだ。……正直レティシアってどんな子なんだ？」

背丈からして人間で言うなら歳は十いかないくらいか？ 首元に赤いリボンの付いたフリフリが多いドレスを着込み、頭には赤い帽子……ボンネットというんだったか？ それを被っている。

全体的に赤が基調のようだが、軽く左右を縛った髪の毛は灰色だ。そして髪飾りというか何というか、両耳の後ろに少し大きめの鈴がそれぞれ付いている。

正直こんな見た目ではあるが、どんなに可愛らしくても幻想体である。起きるなり辺りをやたらめつたら破壊するという事もあり得るのだ。

『そうだねえ。……レティシアはとても良い子だよ。いつも明るく笑顔だし、滅多なことが無い限り人に悪意を持つようなことはない』

「本当か？ ああ見えて凄い怪力で、ちよつとじゃれただけで骨が折れるとかそんなことはないか？」

『それはまあ幻想体だし、見た目よりは強いだろうけどね。それにしたって彼女の身

体能力はせいぜい大人と同じくらいだよ』

まあそのくらいならちよつと強い子供つてぐらいで済むか。なんか微妙に引つかかる言い方だが……マズイ。疲れと眠気で頭が回らない。

「そ、そうか。……ふわあ〜」

『おやおやお眠かい？ まあ無理もないけど。……ひとまずそのベッドで寝たらどうか？ レティシアと一緒に添い寝とか』

「だから俺を変態扱いするなつての。第一レティシアを放つておいてこのまま寝られるか」

大きく欠伸をするとディーがそんな事を言ってくる。俺個人としては可及的速やかに寝たいのだが、レティシアが自然に起きるまで目を放すわけにもいかない。

『その点なら心配ないさ。……さつきも言つたけど、レティシア自身は自分から悪さをする子じゃない。誰かにちよつかいを出されない限りはね。……それでも心配なら、僕が代わりに見ておいてあげるよ。それならどうだい？』

ふむ。そこまで言うなら頼んでも良いだろうか？ どのみちこのままでは眠くて途中で落ちる可能性もある。それならまだディーが自分から見張りを買って出たという点を有効活用するべきだ。

「……分かった。じゃあ俺は上のベッドで寝るから、何かあつたらすぐに叩き起こして

くれ。すぐにだぞ！」

『いいとも！ ゆっくりお休み！』

俺はしっかりと授業の時間に向けて目覚ましもセットし、よろよろと一番上の段のベッドに転がり込む。

そのまま目を閉じて眠りにつこうとするのだが、身体は疲れているのにレティシアの……というより幻想体のが気になって目が冴えてしまう。

レティシアがここに出てきた理由はおおよそ分かる。依り代たるカードがこの部屋に在ったからだ。……このことから、持ち主である俺よりもカードが優先されるというのが推測できる。

つまり何らかの理由でカードがばら撒かれるとかそんな事になったら、それだけで幻想体を制御するのが格段に難しくなるという事だ。これからは余りとは言えカードを下手に放置するのは危険かもしれない。

そうして悶々と考えていると、突如柔らかな光が俺を照らし出した。何事かと薄目を開けると、そこには罪善さんが静かに発光しながら浮かんでいた。……この光を浴びていると、どこかもやもやした頭が少しだけ落ち着いていくように感じる。

「心配してくれてありがとうな罪善さん。……それと、こうなつたのは罪善さんのせいじゃないって」

何となくだが、さっきから罪善さんがしょんぼりしているように思えた。もしこれが、レティシアが出てくることになったきっかけが自分が良くないモノを吸収したためだと思ってるためならそれは違う。

「特待生寮でのことは先に説明しておいてくれれば良かったとは思うけど、まあアレはアレで……良かったんじゃないか？　だって、アイツらはどことなく……穏やかな顔で……消えていったんだから」

それにレティシアのこともそうだ。確かに一気に精霊化したのは罪善さんのせいかもしれない。だけどそれは切っ掛けであって、それがなくてもいつかはそうなっていただろう。

俺がそんな事をウトウトしながら途切れ途切れに語って、いつの間にか意識が無くなる直前、罪善さんがほんの少しだけ嬉しそうに見えた。

『……城君。久城君ってば。ちよつと起きてくれないかい』

「……うう……何だ？」

デイーの呼ぶ声に、俺は心なしスッキリした頭でそう応える。時間は……うん。目覚ましの時間まであと5分。睡眠時間が少なかつた割にはスッキリしているのは、罪善さ

んのおかげかなとぼんやり考える。

「モーニングコール代わりか？ 気が利くな」

『まあそんなところさ。……ほらっ！ 寝起きだと頭が回らないだろう？ コーヒーでもどうだい？』

「コーヒー？ ああ。そうだな。最近飲んでなかったたまにはいいか。……だけどコーヒーなんて買ってあったっけ？」

元の世界では時々飲んでいたが、この身体になつてからはカフェインの摂り過ぎを避けるべく控えている。だが折角用意してくれると言うならありがたく受け取ろう。

『そう来なくっちゃ！ ああ、買ってはいないけど大丈夫。丁度コーヒー作りの名手が居るから。……ヘルパー君。美味しいコーヒーを淹れておくれ』

〈了解。クッキングプロセスを開始します〉

……今なんか変な声が聞こえたんだけど。電子音声的な。俺は嫌な予感を憶えてベッドから下を覗き込む。すると、

〈コーヒー抽出完了。美味しいコーヒーをどうぞ！〉

「……ああ。ありがとう。……美味しいなこれ！」

目の前に伸びた金属製のアームから、紙コップに入った熱いコーヒーを受け取る。火傷しないよう少しづつズズツと口に含み、その深い味わいに俺はつい感嘆の声をあげ

た。

そこらのインスタントとはまるで違う味わいだ。これは一日何杯って制限しておかないとついつい飲んでしまうな。そうして紙コップの中のコーヒーが半分くらいに減った頃、

「……それで気になってたんだけど、君は何かな?」

俺は目の前の謎の白い物体に声をかけた。それは卵を横にしたような白い楕円形で、つぶらな赤い瞳と笑顔を浮かべたような口が付いている。

その身体からは二本の薄い金属の脚部が伸び、地面に接した車輪で器用に移動していた。見様に依っては結構愛嬌のある見た目だ。

「あなたのお供、ヘルパーロボットだよ! 何をお手伝いしようかな?」

「……また幻想体かよ」

この姿にも見覚えがあった。『幻想体 オールアラウンドヘルパー』。どう見ても生き物ではなく機械だが、他にも無機物っぽい奴はいるので今さらか。

『少し前に急に実体化してね。名前の通りなんでも手伝えるのかと思って、軽く機能チェックをさつきまでしていたのさ。今のコーヒーがひとまず最後のチェックだったけど……どうだった?』

「コーヒーに関しては何句なしに美味しいな。毎朝でも寝起きに飲みたいくらいだ。……

そつちは他に分かったことは？」

『掃除以外なら大抵の家事は可能だね。レシピさえ教えれば調理だってお手の物だし、泥棒除けの防犯機能も付いている。一家に一台ヘルパー君をつてね！』

「デイーはヘルパーに淹れてもらったコーヒーに、同じく用意してもらったミルクと砂糖をたつぷりを入れて飲みながら返す。

「掃除がダメつてのは？ そんな壊滅的に下手なのか？」

『ヘルパー君の掃除は生き物も掃除の対象になるよ。下手すると掃除する前より汚れるかもしれないね。……血の海的な意味で』

「……掃除だけは頼まないようにしておこう」

やはりこんな見た目でも幻想体。とても物騒だ。ヘルパーの目の前では掃除の類はタブーだな。

「あなたのお供、ヘルパーロボットだよ！ 何をお手伝いしようかな？」

「あく。そうだな。今はもう頼むことが無い。だから何かあるまで待機していてくれ」
「了解。スタンバイモードに移行します。お手伝いが必要なら呼んでね」

「ずっとヘルパーを稼働させておいて、下手なことを言ったら何が起こるか分からない。なので待機を命じると、ヘルパーはそのまま実体化を解いて姿を消した。……素直で大いに結構だ。」

俺はコーヒーを片手にゆつくりとベッドから下りていく。……うん？ 何で一番上のベッドで寝たんだったっけ。

『ああ。そう言えば久城君。もう一つ言っておかなくちやいけないことがあるんだけど』

「何だよ急に。今の俺は美味しいコーヒーを飲んでかなり機嫌が良いからな。大抵のことなら許しちやうぞー！」

もう一度コーヒーをズズツと口に含む。……うん！ 味もそうだけど香りも良い。

『それは実に太っ腹だね！ じゃあ正直に言う……実はヘルパー君の機能チェック中にレティシアが目を覚ましてね』

ああそうだったそうだった。ヘルパーのインパクトで忘れていたが、元々そのせいで俺は一番上のベッドを使ってたんだった。

『それでそのお……気がついたらいつの間にかいなくなってたんだ。ゴメンね！』

俺はその言葉に飲みかけのコーヒーを吹き出した。そう言う事はもっと早く言えよっ!!

小さな魔女とお手伝いさん その二

俺は慌ててレティシアが眠っていた一番下の段を確認する。中はもぬけの殻だ。ならばカードの方はと引き出しを開けて中身を確認するが……無いっ！ レティシアのカードが無い。昨日は確かにここに入れたのに。

『どうやら持っていたみたいだね。カードがここに在るんじや、実体化してもあまり離れられないから』

「マズイぞっ！ いくら無害だつて言っても、下手に誰かに見られたらややこしいことになる。急いで探しに行かないと」

俺は急いで服を着替え、念のためカードデッキと余りのカードをポケットに突っ込んで部屋を出る。

『ねえねえ。授業はどうするんだい？ このままじや遅刻するんじやないのかな？』

後ろからディーがどこか面白がるようにそんなことを言う。そもそもお前のせいだろと言ってやろうかと思つたが、眠気に負けて任せたのは自分だからグツとこらえる。

「非常事態だっ！ 授業は……後で行く」

課題の関係上、授業の遅刻・欠席は問題だ。しかしここでレティシアを放っておく訳

にもいかない。一瞬葛藤するが、一日ぐらいならまだ仕方ないと割り切る。……早めに見つけて後で出よう。

「とは言ったものの、一体どこまで行ったんだよ」

慌てて外へ出て、ひとまず本棟に向かって探し始めたは良いものの、手掛かりが何もないことに俺は頭を抱えていた。

最初はあの見た目だから遠くまではいかないと踏んでいたが、考えてみればディーが言うには大人くらいの体力はあるという。部屋を出てからそう時間は経っていないはずだが、どこまで歩いたか分かったもんじやない。

そしてこのレッド寮の周りは自然に囲まれている。近くには森もあるし、少し歩けば海岸だ。あてどなく探すのは骨が折れる。

「おまけにさつきはやたらゴツイ車がオシリスレッド寮に向かって行ったし、一体何がどうなっているんだ？」

レティシアを探している途中、妙な車とすれ違ったのだ。どちらかといえば軍か何かで使いそうな車で、一瞬チラリと見えた荷台にはこれまた物々しい格好の人達が乗り込んでいた。

レティシアの件で何かあったかと一瞬思ったが、いくら何でもさっきの今で急すぎる。となると別件だけど、何かレッド寮であったかな？ 流石に昨日特待生寮に忍び込んだだけであそこまで大事にはならないだろうし。……初犯だし精々目を付けられて嚴重注意くらいだろう。

「誰かに手を借りるか？ ……しかしこんな状況をまともに話して取り合ってくれる人なんて」

俺の頭に十代の顔が浮かぶ。十代なら精霊のことも知っているから、話したら普通に手伝ってくれそうな気がする。だがその場合、こつちの事情についても洗いざらい話さなきゃいけない。そんな事をすればもう原作がどう転ぶか全く分からない。

「十代に話すのは最後の手段か。となると後は……」

『おい！ ちよつと待っておくれよ！』

俺を追って、デイーの光球がふよふよと飛んできた。何だよデイー。今こつちは悩んでいるんだ。

『いや、僕もこれでもちよつとは責任を感じているんだよ。だから、何か上手い方法はなにかと考えたわけさ！』

「本当か？ また場をひつかきまわそうとか思ってるんじゃないだろうな？」

そこまで長い付き合いではないが、少なくとも目の前の相手が暇つぶしに色々やら

すような奴だというのは分かる。嘘はあまり言わないが、全面的に信じるとロクな目に合わないという類だ。

『まあまあそういう言わずに。例えばそうだねえ。……丁度出てきたお手伝いさんをお願いするというのはどうだい?』

「あのなあ。幻想体を見られたくないから探しているのに、余計幻想体を出してどうするんだよ! そもそも……ヘルパーに人探しなんて出来るのか?」

へあなたのお供、ヘルパーロボットだよ! 何をお手伝いしようかな?」

会話の中で名前を呼んだためか、俺のデツキからヘルパーが再び実体化してこちらに問いかける。だから今は出てこなくて良いって。誰かに見られたらどうするんだ。

しかし、このままではらちが明かないのも事実だ。他に手立てがない以上、少しでも可能性があるなら試してみるべきか?

「……ヘルパー。一つ聞くけど、人探しなんて出来るか? 出来ないなら出来ないで良いんだけど」

へ人探し?」

ヘルパーはそれを聞いて小刻みに顔を動かす。……やはりダメかな?

へ了解。サーチプロセスを開始します。対象の情報を入力してください」

……意外にいけるみたいだ。

俺は出来る限り正確にレティシアの姿かたちをヘルパーに伝えた。

似顔絵も一応描いて渡したのだが、『……何これ？ 新種の幻想体？ こんなの出たらヘルパー君がエラーを起こすかもしれないから止めといた方が良いよ』とディーに止められた。失礼だな。レティシアだよこれでも。……少し下手かもしれないが。

〈情報確認。周辺のサーチを開始します〉

ヘルパーはそう返事すると、頭頂部からパラボラアンテナのような物を出して辺りを調べ始める。

『なるほど。元々ヘルパー君は万能型家事ロボットとして造られたけど、当然その家の子供に関わることも想定されている。子供が居なくなつた時のための搜索プログラムも入っていた訳だね』

「それは助かる。しかし、ぼんやりとした情報だけしかないけどこれで探せるのかね？」
実際にレティシアを見たわけではなく、あくまで俺からの又聞きだ。まあこのデュエルアカデミアで、小学生低学年くらいの美少女とか美少女とかそんな子はそうは居ないと思うが。

『……そうだ！ ヘルパー君。条件追加！ その子は彼に近いエネルギーを発してい

る』

「デイーは急に思いついたように、俺の周りをクルクルと回ってヘルパーにそう言った。……そうか！ 幻想体は俺から供給されたエネルギーで実体化している。今回のレイシアに関してでは罪善さんのエネルギーが多いかもしれないが、それでも俺の分がない訳ではないはずだ。」

〈条件追加。……探索中……探索中……ヒットしました。〉

「本当かつー！」

ヘルパーのアンテナがクルクルと動き、特定の方向でピタリと止まって反応する。この方向は……俺がさっきまで居たオシリスレッド寮だ！

「もしかして反対側の方向に行ったのか？ ……とにかく一度戻るぞ！ ヘルパー。レイシアの所まで案内してくれ！」

〈了解。案内を開始します〉

その言葉と共に、ヘルパーはオシリスレッド寮の方角に向かって走り出した。あの車輪結構速いな。俺達も急いで後に続く。

「……うんっ!？」

寮に向かう途中、また先ほどの車とすれ違った。もう用は済んだのだろうか？ 少し気になる所ではあるが、今はこっちの方が優先だ。

そうして走ることしばらく。オシリスレッド寮まで戻ってきたのだが、なんとヘルパーは俺の部屋の前で停止する。

「サーチプロセスを終了します。……ここだよ。ここだよ」

「……もしかして、俺達が出た後で戻ってきたのか？」

『そうかも知れないね』

静かに扉を開けて中に入る。だがそこは俺達が出た時と同じで誰も……いや待て。ベッドの二段目の布団が丸く膨らんでいる。

そこは普段荷物置きに置いて俺がそこで寝ることは出来ない。だが身体の小柄なレティシアならどうだ？ 俺はそつとその布団をめくる。

「……すう……すう……むにゃ!? ……おはよう。お兄ちゃん」

「……ああ。おはよう。レティシア……で良いのか？」

「うん！ 私はレティシアだよ！」

大きくくりくりとした赤い目をこすりながら挨拶をする目の前の子供に、俺はなるべく怖がらせないよう笑いかけた。

仕事を終えたヘルパーに待機命令を出して実体化を解かせた後、俺達はレティシアに

これまでのことを訊ねた。

「……つまり、レティシアは一度目を覚まして軽く外を散歩し、そのまままたこの部屋に戻ったんだな？」

「うん。お外に出れるようになってとっても嬉しかったの！」

レティシアはややぎこちない動きで頷いた。その動きや瞳がクルクルと回る様は、どこかからくり人形を思わせる。

この場合の外は、部屋の外というよりカードの外と言うべきかもな。仮にカードそれぞれに意識があるとしたら、ずっとこの部屋に置かれたままではさぞ退屈だろう。子供なら尚更だ。

「あく。なるほどな。だけど外に出る時は、誰でも良いから一声かけてくれると嬉しいな。急にいなくなったから驚いた」

「私言ったよ。そのピカピカさんに、お外にお散歩に行つてくるねって」

何っ?! レティシアが指さすディーの方を見ると、ギクツという感じで身体を震わす。……どういう事だディー？

『いやあ……その、ヘルパー君の機能チェックに夢中で……そう言えば途中で誰かにそんなことを言われたような気がするようないような』

「つまりこのドタバタはお前のせいか」

『そ、そうなるねえ。はっはっは………ゴメンナサイ』

「ゴメンで済むかこの野郎っ！」

とりあえずディーの奴はあとで説教として、まずはこのレティシアをどうするかだ。このまま実体化しっぱなしというのもマズイ。何とか宥めすかしてカードに戻ってほしいところだが。

「お兄ちゃん。私、お外に出ちゃダメだった？」

「いや。そんなことはないさ」

レティシアがどこか寂しげな顔で俺を見る。子供だからこそこういった他者の機微、相手の表情を読み取る力が強いのかも知れない。俺は咄嗟にレティシアの言葉を否定する。

「いつもはちよつとマズいけど、あんまり他の人が居ない時なら外に出ても構わないよ。……だけど、行く前には必ず俺か……この罪善さんに一声かけること。約束できるかい？」

実体化はマズいが、人には見えない精霊化なら別段他の人に迷惑をかけない限り止めるつもりは無い。というか止められない。

そして俺の言葉とともに罪善さんが実体化する。レティシアは一瞬驚いたものの、すぐに気を取り直した。同じ幻想体だけあって怖い見た目には耐性があるみたいだ。

「うん！ 約束する！」

「……よし。良い子だ」

俺はレティシアの頭を帽子越しに軽く撫でる。……はっ!? つい昔妹にしていた時のように! 慌てて手を離すが、幸いレティシアは嫌がってはいないようでホツとする。

『自然にそんなことが出来るなんて……もしかして久城君つて天然ジゴロなのかな?』

……あと何で声をかける相手にこの僕が入っていないんだい?』

「お前に言っても不安だからだよ。うっかりの意味で」

『しょんぼり』

わざわざ口でそう言える分まるで落ち込んでいないだろ。そういうトコも不安なんだよ。

「じゃあ……はい! これ」

「これは……レティシアのカードか。良いのか?」

「うん! お兄ちゃんはまだ笑顔だけど、もっと笑顔になってほしいから。これは私からの贈り物!」

『へえ。贈り物……ねえ』

自分で持っていないかという意味で聞いたのだが、レティシアはニッコリ

笑って自身のカードを差し出してくる。何やらデーイが変なことを言っているが……贈り物というなら断るのも失礼だよな。

「そっか。じゃあありがたく頂くよ」

俺はカードを受け取ると、無くさないようにそっとポケットに仕舞い込む。

「じゃあお兄ちゃん。私はしばらくお休みするね！ さつきは沢山お外に出て楽しかったよ！」

「ああ。また外に出たくなったら言いなよ」

まだ寝足りなかったのか、それとも長く実体化したことでエネルギーを消費したためか、レティシアはそう言って実体化を解いた。その瞬間、小さなハートが一瞬ポーンと浮き出たようなエフェクトが出る。……去り方も結構凝ってるな。流石小さな魔女って名前に付いてるだけあるな。

「……ふう。朝から慌ただしいことになったなまったく。まあ何とか話が通じる相手で良かった」

『そうだねえ。僕個人としてはもつと拗れてくれても良かったんだけど。……まあ面白くなりそうなモノは見れたんだけどね』

「何をごちゃごちゃ言ってるんだ。……そう言えば説教がまだだったな！」

『えっ!? 忘れてなかったの?』

忘れるかつての！ この「元」神様にはたまにはガツンと言ってやらねばならない。

??分後。

「……よし。今日はこんなもんで許してやる」

俺はこれまでの鬱憤も込めて、たつぷりとデーイーに説教を食らわせてやった。なにぶんこれまでたつぷりと説教のネタが溜まっているからな。

『長かったねえ。……僕に説教できるなんて神様連中かリームぐらいのものだよ。あつ！ リームっていうのは僕の秘書をしている子でね』

「そっちの身内の話は良いよ。何ならまた追加でしてやろうか？ 毎回話が脱線するんだからお前は！」

『おつと！ もう説教は勘弁だよ。……それより良いのかい？』

デーイーも少し堪えたのか、どこかよろよろと飛びながらそう返した。……良いって何か？

『授業。……もう大分時間が経っちゃったけど？』

俺はその言葉にハツと部屋の時計を見る。……げっ?! もう一限目どころか二限目も終わりかけじゃないかっ!?

「だからそう言う事は早く言えつてのっ！ 今日の朝と同じじゃないかっ！」

また説教のネタが増えたぞコンチキショウっ！ こうなったらせめて三限目だけでも出てやるっ！ 俺は慌てて授業の用意をし、本棟に向かって走り出した。そして、

「こんな時にどこ行ってたんだなあ遊児！ 十代と翔が退学になるかも知れないんだなあ！」

「えっ!? 退学っ!?!」

本棟に着いた俺を待っていたのは、先に行っていた隼人からの驚きの言葉だった。

十代対翔。翔の抱えるもの

十代と翔が退学っ!?

慌てた隼人からのその言葉聞いて、真っ先に思い浮かんだのは原作のとある場面。十代が自らのデツキを、翔が自身の退学をかけて本気で戦った序盤の山場だ。

その時は十代が勝ったが、翔の退学の理由がクロノス教諭の早とちりにあったことで退学を免れるという流れだった。

もしやその時がついに来てしまったのかと最初は考えたのだが、よくよく話を聞いてみると少し事情が違っていた。

まず事の発端は今日の朝、十代達の部屋にこの学園の倫理委員会が乗り込んできたことから始まる。倫理委員会っていうと……あれかっ! 朝レティシアを探していた時にすれ違ったゴツイ車っ! どうやらあれがその倫理委員会だったらしい。

そうして査問委員会に出頭させられた十代と翔だったが、その罪状は昨日立ち入り禁止の特待生寮に入って内部を荒らしたこと。それによって当初退学させられそうになったが、学園側の用意した選手との制裁タッグデュエルに勝てば退学は取り消しになるという。

「流石デュエルアカデミアというか、生徒の処分までデュエルで決めるか普通？」
「それがこの学園なんだな。……それで俺はその処分が納得いなくて、さつき校長先生の所に直談判しに行ったんだな」

意外と友達思いの所があるな隼人！ だが、隼人と途中から来た明日香が校長に直談判したものの、結局査問委員会で決まったことなので処分は変えられないと断られたらしい。

二人して自分が十代とタッグを組むと言ったらしいが、翔そこまで弱いかね？ もしろんタッグと個人戦は勝手が違うが、翔もうっかりミスさえ何とかすれば結構強いと思うんだけどな。

さて、ここまで話を聞いてみた所、俺の中にいくつかの違和感が浮かび上がる。

一つ目は連行されたのが十代と翔の二人だけだったという点。寮の中に入ったというのなら、隼人や明日香、一緒にではないが俺もそうだ。なのに十代と翔だけというのはどうにも腑に落ちない。

次にいくら何でも昨日の今日で対応が早すぎるということ。寮に入ったのは夜中、ことが片付いたのは実質今日だ。つまり入った時点で誰かから連絡がいくぐらいじやな

いとこんな早い対応は出来ない。

しかし、寮に入る所を目撃しているぐらいならそのまま乗り込んで注意の一つでもすれば良い話だ。それにむしろ侵入者であるタイタンの方が連絡がいきそうなものだ。

三つ目はいくら何でも罪に比べて罰が重すぎるといふ事。無論立ち入り禁止地区に入ったのだからペナルティがあるというのは納得できる。しかし問答無用で退学というのはいくら何でも重すぎる気がする。

そして最後はもう言うべくもないが、こんな流れ俺は知らないという事だ。

原作では十代と翔が戦う流れのはずなのに、なんで二人のタッグデュエルって話になってるんだよっ!?

最近本当に俺の知らない流れが多い。元々描写されていない事件が多かったのか、もしくは俺の存在が本筋に影響を与えているというのだろうか？ この調子だと原作知識がまるで当てにならないくなりそうだ。

とにかく二人の様子を見に行くべく、俺は授業を早めに切り上げて隼人と共に部屋に向かった。

「僕なんかじゃダメだあ〜っ！ 絶対負けて退学だ。隼人君。僕と変わってくれよお」

そして扉を開けるなりこれだよ。翔は戦う前からこの調子で、隼人に選手は代えられないと論されている。

「ふむ。俺が少し朝の散歩で出ている間に、随分とまあ厄介なことになったな」

「ホントつすよ！ ……今からでも遊児君と代わってもらえたりしないかな？」

「さつき隼人も言ったけど、選手自体は十代と丸藤君に決められてて変更は不可らしい。

こっちは応援くらいしか手が出せないな」

「そんなあ」

翔は隼人にくつついたまま悲痛な表情を浮かべる。隼人がコアラだとしたらくつつかれる側じゃないかいそれは？

「心配すんな。勝ちやあ良いんだろ？ 勝ちやあ？」

対して十代は平常運転。いつもの調子でデッキを見直している。もしやタッグデュエルの経験でもあるのかと思つたが、経験は無いけど無いから面白いんじゃないかと素で返してきた。

「まだお前のデッキの特性何にも知らないからな、まずは腕試しにデュエルといこうじゃねえか！」

単にお前がデュエルしたいだけだろと言いたかつたが、まあタッグパートナーのことを知るために一試合するのは間違っていない。

こうしてまだ翔はどこか浮かない顔ながらも、早速寮の裏手の海岸で二人でデュエルする事になった。これは一応原作通りになった……と言うべきなのだろうか？

「……また翔のうっかりが出たっばいな」

二人のデュエルが始まった訳だが、いつの間にかやって来た明日香とフアラオも加えて三人と一匹で観戦。ただし俺だけは別の離れた所から観戦だ。何故なら、

『そうみたいだねえ。今のタイミングなら、パトロイドの効果で十代の伏せカードを確認してから攻撃した方が良かったかもね。……結果は変わらないにしても、相手の行動が分かっているかどうかは気持ちに差が出るから』

カタカタ。カタカタ。

『よく分からないけど、あのモンスターさんは赤くピカピカ光ってて可愛いと思うの』
俺の傍で、ディーと幻想体達と一緒に観戦しているからだよっ！ ヘルパーだけはおとなしくカード状態で待機しているが、ついいつもの調子で喋りかける所を誰かに見られたら完全に不審者だからな。少し離れた所から二人のデュエルを見守る。

しかし前に戦った時もそうだけど、今日は特に翔の動きが悪いな。

翔の攻撃を罠で回避した後、返しのターンで十代が反撃。パトロイドを破壊され、な

おかつ直接攻撃を受けただけで翔が戦意喪失しかける。

何とか隼人からの声援で気力を取り戻したものの、次のターンに強欲な壺で2枚ドロ―した瞬間動きが急に止まった。

『おやおやく？ 何か思い入れのあるカードでも引いたみたいだね』

「さてな。……おっ！ 長考はそろそろ終わりみたいだな」

翔が発動したのは融合のカード。俺に月一テストでやったように、手札のジャイロイドとスチームロイドを融合し、スチームジャイロイドを融合召喚して十代のモンスターを撃破する。良い感じだぞ！

しかし、翔の善戦はここまでだった。十代の出したサンダー・ジャイアントによってスチームジャイロイドは破壊。モンスターの総攻撃を受けてLPを削り切られてしまふ。

「ガツチャ！ 翔。面白いデュエルだったぜ」

「やっぱ僕ダメだ。タッグデュエルに勝つなんて無理だよ」

そう言つて落ち込む翔に歩み寄ると、十代は先ほどのドロ―が少し気になったのか翔の手札を勝手に見てしまう。終わったからといって他人の手札を勝手に見ないようにな十代。

どうやら翔の手札にはパワー・ポンドがあつたらしい。これを使えば召喚されたモン

スターの攻撃力は2倍となる。勿論反動は大きいが、上手く使えば場を制圧できるカードだ。何故これを使わなかったのかと問う十代だが、

「やつちやダメなんだ！ お兄さんから封印されているカードなんだ。……やつぱり、僕じゃアニキとタッグを組むなんて無理なんだよお」

そう言葉を残して、翔はどこかへ走り去ってしまふ。隼人も翔を追って走り出した。

『うくん！ こういうのは見ていて実に良いよね！ 成長途中だからこそこの葛藤。』

これは子供過ぎてても大人過ぎてても見れないモノさ！ ……そうは思わないかい？』

「俺はお前ほど悪趣味じゃないんでね。……さて、どうしたもんか」

俺はデイーにびしやりと言いながら少し考える。

これが描写されていないけど原作に沿った流れなら、俺がわざわざ何か言わなくても勝手に翔はどうにかなって立ち直るだろう。もうどんどん流れが変わり始めている以上、これ以上首を突っ込んで流れを変えない方が良い。

ただ、もしとつくに修正しないとヤバイレベルで流れが変わっている場合、その時はむしろ積極的に動かないとどうにもならなくなる。今はどっちだ？

『ねえ。遊児お兄ちゃん』

「……うんっ!!? どうしたレティシア」

ふと気づくと、レティシアが精霊の状態で話しかけてきた。

『あの人、なんだか暗い顔してた。行ってあげようよ』

「えっ!? だ、だけどなあ」

『あの人お友達なんでしょう? なら行った方が良いよ。……私は皆が笑顔でいてほしいの』

「……………そうだね」

俺としたことが、こんな肝心なことを忘れていたなんてな。

流れ云々じゃない。翔は同僚のメンバーで友人だ。一緒に食事もしたし、笑いあつてバカな話もした。この前はグミも分けてもらったしな。そんな奴を放っておくわけにはいかないか。

カタカタ。カタカタ。

罪善さんは何も言わず（もともと口は利けないが）コクコクと頷く。

「ありがとなレテイシア。罪善さんも。じゃあここは一つ。翔を追いかけるとしますかっ!」

『へえ〜! 関わっちゃうんだ? まあそれはそれで面白そうだ!』

『ディーは相変わらず観客気分ですんな事を言ってる。観客だつていうのなら、少しはこつちにヒントぐらい教えてくれるとも良いのにな。』

翌日。

コンコン。コンコン。

「……久城だ。入っても良いかい？」

「久城君っ!!? ……どうぞ」

「失礼するよ」

授業が終わった後、俺は静かに部屋の扉を開けて中に入る。翔は……居た！ 自分のベッドの中で、布団にくるまっとうずくまっとうしているな。

結局昨日、翔はあのまま自室に入ったつきり出てこなかった。後を追った隼人が言うには、ひどく落ち込んでいて今はそつとしておいた方が良いとのこと。なので一日おいて様子を見に来たのだ。

「調子は……良くなさそうだな」

一目見て分かるほど翔は落ち込んでいた。夢見も良くなかったのだろう。目の下にうつすらとクマが出来ている。

俺は机の上に置かれている物をチラリと見て、そのままゆつくりと椅子に座った。

「まあ調子が悪い日もあるさ。今日はゆつくり休むと良い。……ほらっ！ ドローパンだ」

「あ……つと」

昨日の夕食も今日の朝食にも翔の姿は見えなかった。あれから何も食べていないとすれば、そろそろ腹が減っていると思い見舞いのドローパーンを投げ渡す。翔は軽くお手玉しながらもしつかりキャッチした。

「……わっ!? これ、黄金のタマゴパンつすよ！ 本当に貰っても良いの？」

「それは縁起が良いな。タマゴなら栄養もあるだろう。……この前分けてもらったグミの礼だ。しつかり食べておきなよ」

「あ……ありがとう」

翔は最初は遠慮がちに一口、そしてそのままガツガツと食べ始める。やはり腹が減っていたらしい。聞けば黄金のタマゴパンは珍しいらしいが、黄金だろうが普通だろうがタマゴはタマゴだ。そこまでの差はないと思うのだが。あくまで縁起物だな。

翔は食べ終わると、何も言わず俺に深々と頭を下げた。これはべつにこの前のグミの借りを返したただけなんだけどな。

「あの……アニキ達の様子はどう？」

「ああ。十代は何やら張り切っているようだった。誰とかは知らないがデュエル申請書を用意してたな。隼人は……何やら気合の入った目でカードを見つめていたな」

ちなみに二人は当初翔と一緒に授業を休もうとしていたが、付き添いで休むというの

は流石に認められない。翔が一人になりたがっていたということもあって、あまり授業に出ない隼人もほぼ無理やり出席させた。

「先に言っておくが、あの二人は二人なりに何かの行動を起こそうとしている。無理やり授業に行かせたのも俺だしな」

「……そっか。アニキ達は頑張っているんだな。……僕と違って」

「翔も頑張っているように思えるけどな」

俺が疑問に思っただけで、翔はどこか自嘲するように笑った。

「やめてよ。……久城君も昨日のデュエル見てたんでしょ？ 僕には才能が無いんだ。

……だからお兄さんは、パワー・ボンドを」

「昨日もそんなことを言っていたな。良ければ……どうしてそんな事になったのか、話してもらえないか？」

今の翔の状態は、タツグデュエルによる退学の危機が発端だろう。しかしそれとは別に、昨日のあのパワー・ボンドのこともまた影響していると勝手に推測する。それぐらいいあの時の十代に対しての翔の態度は尋常じゃなかった。

「……分かった。久城君には黄金のタマゴパンのお礼もあるしね。その分だけ話すよ」

そうして翔は、過去にパワー・ボンドを封印されることになった事件をポツリポツリ

と話し始めた。

十代対カイザー そして迫る転換点

「なるほど。大体の経緯は分かった」

翔から大まかに聞き終えた内容はこうだ。

翔は小学生の頃、某いじめっ子とデュエルをした。しかしラストターン、翔は兄から貰ったパワー・ボンドを使って一気に勝利しようとするが、ギリギリの所で兄が勝負に割って入って強制終了。

しかし相手の伏せていたカードを兄に見せられ、このまま続けていけばパワー・ボンドの効果で自分がダメージを受けて負けていたことを知らされる。

「お前には、このカードを使う資格はない」

そう言い残し、兄は翔がパワーボンドを使うことを禁じた。……まあ大体こんな所だろうか。

「それでまだこのカードは封印されたままなんだ。あの時僕がもつと強かったら」

「……………それはどうだろうな」

「えっ!? どういう事?」

俺の言葉に、翔はどこか戸惑うような返事をする。

「確かに聞いたところでは、翔がもつとよく相手のフィールドを見ていれば。つまり翔風と言えどもつと強かつたら勝てた勝負だったかもしれない。……だけど、本当にそれだけのことで丸藤君のお兄さんはカードを封印したのだろうか？」

「でも……でもっ！ あの状況じゃそれ以外に理由なんて」

「勿論聞いた話だけじゃ俺もよく分からない。今のことだつて何となく感じただけだから。だからここから先は丸藤君が……いや、翔が考えるしかないんだ。……さて、説教臭く長々と話し込んでしまったけど、そろそろ自分の部屋に戻るか」

俺はそう言うのと、ゆつくりと椅子から立つて軽く伸びをする。少し骨が鳴るくらい時間経ってしまったか。

「……翔がやろうとしていることを俺は止めない。それが本当に必要なことだと思うのならするべきだ。……お大事にな」

「あつ……久城君」

扉を開けて部屋を出ようとする俺に、後ろから声が掛かった。

「……ありがとうね。あの時のこと……もう少しだけ考えてみるよ」

「ああ。その方がよい。……じゃあな」

俺はゆつくりと部屋を出て、そのまま自分の部屋に戻る。

『良いのかい？ このままだと翔君……逃げ出しちゃうかもしれないよ！』

部屋に入った瞬間、ディーがまたふらりと現れて俺の周りを飛び回る。

さつき翔の机の上に手紙のようなものがあつた。チラリと見ただけだったが、あれは十代に対する書き置きだ。つまり翔は思い余つて寮を出ようとしていたことになる。だけど、

「……いや、多分そうはならない。あんな書き置きがあつたつてことは、翔はいつ部屋を出てもおかしくなかつたつてことだ。だけど俺とあんな長話をしたことで、確実に部屋を出るタイミングが少しは遅れるはず。その頃には十代達も戻るだろうから、そうなたらあととはじっくり話し合えば良い。それに」

俺はどつかりと椅子に座つてディーにニヤリと笑つてみせる。

「細かくは知らないが、折角主人公^{十代}が動き回つてゐるんだ。あんまり横から手を出すのも野暮つてもんだろ？」

『つてカツコつけてた割に……全然帰つてこないね！』

「どこか嬉しそうな声で言うなつ！」

もうすぐ夕方だ。あれからしばらく経つのに一向に十代も隼人も帰つてこない。つ

いさつき翔が部屋から思いつめた顔で出てしまったというのにつ！

〈サーチプロセス実行中……実行中〉

『とは言っても、念の為ヘルパー君にあらかじめ翔君の居場所を探させているんだから
実に抜け目ないよね』

「当たり前だ。最低限の保険くらいは掛けておくさ」

俺の傍で、ヘルパーが定期的に身体を振動させながらサーチプロセスを実行している。可能性は低いのが、何らかの理由で十代達が間に合わないことも考えて、部屋に戻ってからヘルパーに翔の居場所を確認させているのだ。

『お兄ちゃん。頭良いの！』

「別にヘルパーが居たからこそ出来る手だから、俺はあんまり関係はないよ」

レティシアが目をキラキラさせて言ってくれるが、実際ヘルパーが居なかつたらさっきのように悠長には構えていられなかつただろうな。

今の所、翔はどうやらこの島の灯台付近に居るようだ。……このまま船でも使つて逃げるともりか？

『……おつ!? 二人が帰ってきたみたいだよ!』

その言葉に窓から見ると、十代と隼人が連れ立って歩いてくるのが見えた。何故か十代はずぶ濡れで頭にタオルを被っている。こんな時に水遊びか？ ……とにかく、戻つ

てきた以上書き置きのこととは伝えておくか。

話を聞いた十代の行動は早かった。急いで隼人の手を引つ張つて翔を探しに出たのだ。一応俺は灯台の方に向かっただけと伝えて部屋で待つつもりだったのだが、流れで一緒に連れて行かれてしまう。

「翔っ！ どこだ？」

「翔く。出てくるんだなあ」

「おしい。居ないのか？」

しかし大まかな場所は伝えることが出来ても、細かい位置までは伝えられない。どうしてそこまで知っているのかという話になるからだ。なので灯台近辺からは地道に皆で声を張り上げて探すしかない。

クリクリっ！

「相棒っ！ 何だ？ ついて来いつてか？」

あっ!? 突如現れたハネクリボーが十代を導いている。十代はこつちだと一声かけて、ハネクリボーを追つていった。……こういう時主人公は理由もなく行動出来て良いなあ。

「まただ。クリクリってあの声が。……待てよ十代！」

隼人も十代を追いかける。……何か隼人もハネクリボーの声が聞こえてないか？

意外に精霊の声が聞こえる人は多いらしい。これから幻想体を呼ぶ時は注意した方が
良いかもな。

そんなことを考えながら、俺も二人の後を追った。

やつと二人に追いついた時、そこでは浅瀬で何やらばちやばちややつている十代と翔の姿が。……後から隼人が飛び込んで、そこでやつと浅瀬だつて気付いたようだ。

よく見るとその周囲に、バラバラになつた丸太とロープが浮かんでいる。……まさか翔。こんな簡単に壊れるようなイカダで島から出ようとしていたのか？ それは勇気を通り越して無謀だぞ。しかもどうやら翔は泳げないようだし。

「けほつ。けほつ……このまま行かせてくれよアニキ。僕のことの良いから、別のパートナーを探して、アニキだけでも退学を免れておくれよ」

「つべこべ言うんじゃないやねえ！俺は決めたんだ。パートナーはお前だ！」

十代はいつものように熱く引つ張つていこうとするが、翔は落ち込んだまま動こうとしない。

……ここは一度寮に戻つてじっくり話をさせるべきか。そう思つて話に割り込もうとした時、

「不甲斐ないな。翔」

上から聞いたことの無い男の声がした。誰だと思いいその声の方を向くと、そこには二つの人影があつた。

一人は明日香。それは良い。後から書き置きを見て追つてきた可能性もあるし、偶然居合わせたでもある程度は納得しよう。だがもう一人、明日香と並んであり得るはずのない人が居た。……それは、

「お、お兄さんっ!？」

「……嘘だろっ。どうしてカイザーがここに？」

俺は知らぬ間にそう呟いていた。そこに居たのは丸藤亮。生徒からはカイザーと呼ばれるほどの圧倒的実力を誇る生徒であり、アメリカ・アカデミアに留学しているはずの男だつた。

「行つちまうつてよ。アンタの弟。だつたらよ。せめて餞別でもあげてやらねえか？俺とカイザー、アンタのデュエルで！」

「君とデュエルを? ……良いだろう。上がってきたまえ。遊城十代」
「そうこなくっちゃ!」

そうして灯台の傍に移動し、目の前で遊城十代とカイザー亮というビッグマッチが行われようとしている中、俺の頭はパニック寸前だった。

おかしい。いくらなんでもこの状況はおかしいっ!?

原作においてカイザーは、開始当初からアメリカ・アカデミアに留学していた。そしてカイザーが戻ってきたことよって開催される帰還記念デュエル大会が、物語においてとても大きな役割を果たす。

何せカイザーと一緒にやってくる交換留学生の二人が、それぞれ闇のゲームに関わっているのだから。それもこの前のタイタンとは違って二人共本物だ。

つまりカイザーの登場が物語の重要な転換点という訳だが、帰ってくる予兆なんてこの瞬間まで影も形もなかった。原作では帰ってくるだけでお祭り騒ぎになるような出来事だ。予兆が一切無いなんてことはあり得ない。

じゃあ目の前のカイザーはいったいどういう事だ?

『考えることは大いに結構なんだけどね……始まったよ。デュエルが』

「えっ!?! ……ああ。そうだな」

デューに促されて気がつく、もう二人のデュエルは始まっていた。

これがどういう事かはまるで分からないが、目の前のこれは原作では無かった勝負の一つ。マンガを読んだ身としてはどうなるのか見てみたいと言わざるを得ない。今はこちらに集中するでしょう。

勝負は中々に白熱した。初手は十代。お約束のフェザーマンを攻撃表示で出し、カードを一枚伏せて出方を窺う。

対してカイザーは代名詞とも言うべきサイバードラゴンを効果で召喚。サイクロンで伏せカードを確実に除去し、フェザーマンを撃破。そしておまけとばかりにタイムカプセルを発動して次への布石を打つ。これぞ王道と言わんばかりの展開だ。

「俺のターン！　手札から融合を発動！　サンダー・ジャイアントを召喚！」

十代も負けじと十八番の融合でサンダー・ジャイアントを召喚して反撃するが、次のターンカイザーのサイバードラゴンによって窮地に立たされる。

「面白れえ！　面白れえよカイザー。このデユエル！」

「ああ。俺もだ」

明らかに劣勢だというのに、十代は瞳を輝かせてどこまでも楽しげに言い、そしてカイザーもまた、表情こそあまり変えていないがどこか楽しそうだった。

なんとなくカイザーのイメージが見かけと違ってきた。言葉少なで表情もあまり変わらないから威圧感があるが、実際はちゃんとデュエルを楽しめる人なんだろうな。

十代は守備力3000のマッドボールマンを出して守りを固める。これならサイバーツインでも突破は出来ない。だが、

「十代。いよいよ大詰めかな？ 君は君の持てる全力を出し切っている。そんな君に対して俺も全力を出すことが出来る。……君のデュエルに敬意を表する」

そのカイザーの言葉に、横で聞いていた翔は何か思うところがあるようだった。もしかしたら、過去にあった出来事に何か思い当たるものがあつたのかもしれない。

そしてカイザーは融合解除でサイバードラゴンを揃えると同時に、なんと翔の因縁のカードであるパワー・ボンドを発動。蘇生させたサイバードラゴンを加え、攻撃力8000となったサイバーエンドドラゴンを融合召喚。

そのままマッドボールマンを貫通し、十代のLPを一気に削り切った。

「……楽しいデュエルだったぜ」

力尽きて膝をつきながらもいつものセリフを言う十代に、カイザーは何も言わずに軽く笑みを浮かべ、最後にチラリと翔の方を見て去っていった。……何だかんだ弟のことが気になっているんだろうな。

「すげえ兄さんだな」

「うん！ アニキもね！」

十代がそう翔に言うのと、翔はどこか晴れ晴れとした顔でそう返した。そして二人はどちらともなく笑い出す。……良かった。翔の方もどこかこのデュエルを見て吹っ切れたみたいだ。俺も十代達に近づくと。

「よお。惜しかったな十代。だけど良いデュエルだった」

「ああ！ 次は負けないぜ！ ……さてと、帰ってデッキでも組むか？ 今度はパワー・ボンドが使えるように考えて組むんだぜ翔！」

「分かった。必ず封印を解いて見せる！」

翔もどこか前向きだ！ これならこの先のタッグデュエルも何とかなるかもしれないな。

「でも寮の食堂は封印されてしまったんだな」

そこで腹の虫と共に隼人のオチが付く。それに続くように十代に翔、俺の腹の虫もついでに鳴き喚いた。確かにもう辺りは真っ暗だ。だけど、

「いや、まだ間に合うかも！」

「そうだな。寮まで走ろうぜ！」

そうして腹の虫を宥めるべく、俺達は笑いながら寮の食堂に向けて進撃を開始した。これも青春って奴かも知れないな。

ちなみに食堂の封印の結果は………言わないでおこうか。

『いやあ実に良いね青春！ 見ている分には中々に面白い娯楽だよ。今日もまた僕は実に満足さ。という訳でそろそろ失敬を』

「させると思ったのかこの野郎」

自室に戻ったあと、俺はこっそり逃げ出そうとしたディーをがっしりと掴み取る。最近気づいたのだがなんとこの光球は触れるのだ。

「ディー。今から大事な質問をするから気合を入れて正直に答えろよ。……さもないと俺のアイアンクローが炸裂することになるぞ」

『アイアンクローも何も握り潰されそ……あたたっ!? 分かったっ！ 分かったよっ!? 正直に答えるから落ち着いて』

どうせここでプチリと潰れても、少ししたらまた素知らぬ顔で再登場しそうな奴だからな。軽く力を込めてやるとわざと大げさに痛がつてみせる。そういう芝居がかった所は今が良いっての！

カタカタ。カタカタ。

罪善さんが横から心配そうにこちらを見つめる。レティシアやヘルパーは空気を読んだのか出てこない。まあその方が好都合ではあるけどな。

「……分かつてる罪善さん。何も本気でプチつとやったりはしないから安心してくれ」
 『ふう。助かったよ罪善さん。いやあ久城君も酷いことをするよねえ。〃元〃とは言え神様にアイアンクローをしてくるなんて。……いきなり拳骨を落としてきた人は居たけどね』

「その人には思いつきり同意するよ。……本題だが、今の所この世界はどのくらい原作通りに進んでる？」

俺のその言葉に、デイーは一瞬だけ考えてこう返した。

『……そうだね。おおよそ原作通りに進んでいるよ』

「……………そうか」

デイーは正直に答えると宣言してからこう言った。つまりこれは……少し調べてみる必要があるかもな。

積もる違和感。そして辿り着いた答え

十代とカイザーの戦いから数日。俺はディーとの会話の中で考えたことの確証を得るため、これまで感じていた違和感を一つずつ調べていくことにした。まずは手近な所から行くか。

『E・HEROジ・アース?』

「ああ。HERO使いの十代なら持つてもおかしくないかなあって思ってたさ」

制裁タッグデュエルがもう数日に控えているというのに、のんきに寮の近くの木陰で昼寝していた十代に世間話風に聞いてみる。

これまで十代のデュエルを何度か見てきたが、原作にてデッキのエースとして使っていたジ・アースを一度も使用していなかった。偶然にしては毎回影も形もないというのはややおかしい。

そして代わりに主力として使っているのは、フレイム・ウイングマンやサンダー・ジャイアントといったHERO達。これは原作では、十代がハネクリボーを託される前のデュエルで使っていたモンスター達だ。

では何故今とそんなにもデッキが違うのか? 例えば考えられるのは持っていない

からとか。

「うくん。……そんなカード有ったか？ 俺HEROのカードは結構知ってるつもりだけど、そんな名前のカードは記憶にないぜ」

「そっか。……いや。俺の勘違いって奴だ。忘れてくれ」

持っていないではなくそもそも知らないか。……となると、

「そういえば、十代っていつもハネクリボーを使ってるよな？ あれってどこで手に入れたんだ？」

「ハネクリボーか！ 聞いて驚くなよ。これはなんと、あの武藤遊戯さんに貰ったんだ！」

「えっ！ 遊戯って……あの武藤遊戯っ!？」

予想外の十代の答えに、俺は内心叫び出したい衝動に駆られる。遊戯と言えば無印の主人公だ。無印とGXの世界は繋がっているとは知っていたが、まさか主人公同士のそんな出会いがあったとは。ぜひ見てみたかった。

「この入学試験の日、会場に向かっている途中で偶然会ったんだ。その時俺にラッキーカードだって渡してくれたんだぜ！」

「そういう事だったのか。確かにこれまで何度も十代のピンチを救っている訳だし、ラッキーカードと呼ぶにふさわしい活躍をしているな」

「ああ！ 今じゃ大事な俺の相棒だぜ。……なあ？ 相棒」
クリクリ〜！

十代のその言葉と共に、半透明のハネクリボーが十代の傍らに出現して返事をする。しかしハネクリボーが十代の手に渡る経緯も違うか。

俺がこの世界に来てからならともかく、来る前の出来事まで違うとなると……これはちよつとマズイことになったかもしれないな。

「あつ！ そうだ！ そろそろ話してくれても良いだろ遊児。そつちも相棒のことを紹介してくれよ！」

十代がどこかワクワクしたような表情で言う。相棒？ ……ああなるほど。結局タッグデュエルの件もあつて話が立ち消えになっていたが、罪善さんについて話すことになっていた。

話の本筋に関わることになるかも知だが、もし俺の予想が正しければここから先の原作知識はもう当てにならない。

なら多少関わつてでも、主要メンバー達と友好的な関係を築いておく方が良さそうだな。後々のためにもな。

「……まあ丁度良い機会かもな。出てきてくれ罪善さん」
カタカタ。

俺の呼びかけに呼応して、罪善さんもその姿を現す。まだ日中だからそこまで怖くはないが。やはりハネクリボーと並ぶとどうしても違和感がある。見た目がホントどうにかならないものかね。

「うおっ！ ……すっげえ。やっぱり罪善さんも精霊だったんだな！」

「ああ。俺も驚いたよ。カードの精霊なんてものが本当にいるとは思っていなかった。見えるようになったのもごく最近なんだ」

十代は罪善さんをまじまじと見つめる。よくこの見た目にビビらないな。流石十代だ。

クリクリっ！ カタカタ。

ハネクリボーが陽気に翼を広げて挨拶をすると、罪善さんも軽く光を放って反応する。地味にこの二体って攻守属性レベル種族全部同じなんだよな。だから相性が良いのかもしれない。

「まあ見た目こそおっかないが、近くに居るだけで心が落ち着くし、悪い奴つてわけでもないんだ。ハネクリボーとも相性が良いみたいだし、これからも仲良くしてくれよ」

「おう！ もちろんだぜ。よろしくな罪善さん！」

その十代の言葉に、どこか罪善さんも嬉しそうに見えた。 ……他の幻想体はまたそのうち紹介するでしょうか。

聞きたいことをあらかた聞いた俺は十代と別れ、今度は本棟の図書室に向かった。そこに備え付けられているパソコンの方が、生徒各自で持たされている小型の奴より性能が良いからな。俺の調べ物にはこつちの方が良い。

「……………あつた！ 流石カイザー。名前で検索したら普通にヒットしたな」

まず調べるのは、カイザーこと丸藤亮のデュエルアカデミアでの記録。成績などは調べられないが、実績などは普通に載っている。彼のことだから原作以前から何かやっていると思つたがやっぱりだ。

それを読んで分かつたのは二つ。カイザーは以前からアカデミア主催での様々な大会において優勝していること。そして……留学なんか一切していないってことだ。

一緒に明日香の兄である天上院吹雪についても検索したが、こちらは原作と同じく留学しているようだった。ただし留学先までは不明。……もし原作通りならアメリカ・アカデミアだが、こつちももしかしたら変わっているかもしれないな。

次に調べたのは二人の人物。俺が知る原作において重要人物である『響紅葉』と『響

みどり』の姉弟だ。正直この二人の検索結果によつてはとんでもないことになるのだが……。

「二人共健在……か。これはどう捉えるべきだろうか」

まず弟の紅葉は原作と同じくプロデュエリストとして活動している。しかし記録によると、5年前に突然謎の病で入院している。これは俺の知っている原作の流れで言えば、おそらく闇の決闘の後遺症だ。

紅葉は闇の決闘で敗北し、相手に「本気のドロウをする度に自身の命をすり減らす」という呪いをかけられる。確かそれが元で長期入院したはずだ。

だが、驚くべきことに記録によると、紅葉はそれから4年後。つまり去年復調して退院している。現在はまたプロデュエリストとして活動中だ。

……なんでこうなっているのかは分からないが、まあ原作より良い流れになっているのは間違いないな。

そして姉のみどりは原作において、デュエルアカデミアのオシリスレッド1年の担任をしていた。だが、俺は考えてみれば一度も姿を見ていない。

最初はたまたまタイミングが合っていないだけかと思っていたが……。

「こちらは教師として在籍はしているけど、現在長期休暇中か。それじゃあ会わない訳だよ」

これは紅葉が復調したことと関係があるのだろうか？ どうにも分からないな。

他にもいくつか違和感の心当たりを調べた後、大分暗くなってきたので、手に入れた情報をまとめるべく一度寮に戻ることにした。すると、

「大変だよおっ！ 隼人君が……退学させられちゃうかもしれないんだ！」

寮に帰るなり待ち構えていた翔に泣きつかれた。十代と翔の次は隼人かよっ!? オシリスレッドの面子はなんでこう崖っぷちばかりなんだっ!?

『……で、その隼人君の父親が成績の悪い息子を連れ戻しに来たけど、隼人君自身はまだこの学園に居たい。だから何とかならないかと交渉したところ、明日隼人君と父親のデュエルで決着をつけることになったと』

「そういうことだ。それで今は十代達の部屋で作戦会議をしている。……話を聞く限りでは、その父親はかなりの腕らしいからな。今の隼人でもここまでやれるか」

俺は自分の部屋でデイーの光球と話している。十代達には少し用があるので後から合流すると言っておいた。

ちなみに今罪善さんに精霊化して十代達の方に行ってもらっている。まずないと思うが、何かあれば知らせてくれる手はずだ。

それと十代にはこっそり知らせているので問題ない。罪善さんが居るだけで周囲の人を落ち着かせる力があると聞くと「その力は無くても大丈夫さ！俺は隼人を信じてるからな。まあ何かあつたら呼ぶぜ」と返された。実に心強いな。

『事情は分かったけど、久城君はどうして行かないんだい？隼人君とも縁があるんだらう？』

「ああ。ちよつと確かめたいことがあつてな。それが済んでから行くさ。……ちなみに聞くんが、今起きていることも流れの内か？」

『そうだねえ。ここもほぼ原作通りに進んでいるね。……まさか罪善さんを行かせるとは思っていなかったけど』

そりゃあ俺や幻想体の動きは流れにはないだろうな。だけどそれでもほぼ原作通りか。つまり隼人の退学騒ぎも流れの内。……ここまで来るともう確定かな。

『どうしたんだい？そんなに考えこんじゃって？』

「いやなに。俺としたことが、最初から前提を間違えていたんだなあとちよつと黄昏れていただけだよ」

『ほうほう。何を間違えていたんだい？聞かせておくれよ』

「デーはどこか楽しげにそう口にする。答え合わせをしようってか？良いだろう。」

「なに。簡単な話だ。……ここ俺の知ってる原作とは違う世界だろ？ 多分マンガ版じゃなくてアニメ版。……違うか？」

正直当たってほしくない結論だ。だから俺はほんの少し、ほんの少しだけ外れてほしいという期待を込めて目の前の光球を見つめ、

『……大・正・解っ!! やくつと気がついたね!』

そのどこまでも楽しげな声で語られる言葉に軽くため息をついた。そのくらいは許されるだろう？

たとえ流れが分からずとも

『いやあ正直言つて、いつになったら気がつくかなあと楽しみにしていたんだよ。……と言つても気がつかないなら気がつかないで面白かつただけどね!』

「まあ結構最初の方から違和感があったんだけどな、当たつてほしくないからって深く考えないようにしてた。……だけど流石にここまで違和感が重なったらそういう訳にもいかないだろ」

俺はガシガシと髪をかきむしる。考えてみたら、目の前のコイツはこれまで嘘は言っていない。この世界に連れてきた時も、遊戯王GXの世界としか言っていないしな。

そもそも俺がマンガ版の世界と考えたのは、最初の出会いの時に俺の持っていたマンガ本を見てディーが課題を決めたから。流れる的にマンガ版の世界だと思つたが、マンガ版の世界に連れて行くとは一言も言っていない。

「まあ細かい違いくらいなら、俺がこの世界に居ることだど起きたことだと理由づけることも出来た。実際カイザーと会うまではそう考えていたしな」

『じゃあ何が決定打になつたんだい?』

「いくつかあるが、俺が来る以前の流れまで食い違っていたことかな。十代がジ・アースの存在を知らなかったことや、ハネクリボーを貰う経緯の違い。留学していないカイザーに響紅葉の復調、これだけ違うともうはなつから別の流れだと考える方が自然だよ」

一つ一つ違和感を挙げていく度に、デューはフムフムと頷くように上下に動く。ここまでは合ってるってことか。

「まあ他にもマンガ版のキャラクターを何人か検索したけど、どれも大筋は同じだけど微妙に異なっていた。デツキ構成とか所属する学校とかな。おそらくスターシステムという奴だ」

『同一のキャラクターを別作品に違う役割で登場させる手法だね』

「そういうこと。まあ俺はアニメ版は見たことが無いから確証はないが、わざわざ一から世界を創るよりは既存の物を基にした方が簡単だろ？ だからマンガ版の世界でないのなら、ここはアニメ版の可能性が高い……という結論になった訳だ」

俺がそう言い終えると、デューは「素晴らしい。ここまではほぼバツチリだよ」と嬉しそうに言った。しかし、そこで急にデューは声の調子を変えて続ける。

『ただし問題は、分かったところでどうするのってことさー！』

「……その通りだ。俺が唯一持っていた原作知識はマンガ版のみ。アニメでGXも無印

も見ていない以上、知っていることと言えば登場キャラクターの簡単な設定だけ。それも正直どこまであてになるかってぐらいに寂しいものだ」

手持ちのアドバンテージはほぼ無くなったと言っても良い。先の流れの分からない中でデュエルアカデミアを。マンガ版だと一年も満たないうちに何度も闇のデュエルが発生するような学園を卒業しなければならぬ。

それもこの世界がアニメ版なら、後半につれてより特大のヤバい何かが発生するのはほぼ確定している。そうじゃないとアニメが盛り上がらないからだ。

最終的には十代がなんやかんや敵を倒して終わるかもしれないが、それ以外にどんな被害が出るか想像がつかない。

マンガ版のトラゴエディアの一件も、詳しく描写こそされなかったが確実に闇のデュエルで死者の何人かは出ているはずだ。その一人に俺が入っていないなんて誰が断言できる？

おまけに使ってる幻想体だってそうだ。今はまだ罪善さんやレティシア、ヘルパーなんかの比較的 안전한面子だけだが、この先どんなおつかないのが出てきてもおかしくない。

俺も含めてこれらは完全にこの世界からしたらイレギュラーだ。最悪流れが完全に変わってしまう可能性もある。自分の行動で登場人物の誰かが傷つくこともあるかも

知れない。……だけど、

「だけど……先が分からないなんて人生で普通のことだろ？」

自分の行動で誰かが損を被るかも知れない。けどもしかしたら、逆に助かる人もいるかもしれない。確かに先のこと分からないこと道のは楽ではなくなつた。しかし先のこと分からないのなら、せめて少しでも良くなるように行動するだけだ。

『……………フフツ！ その通り。その様子なら、先の見えない流れに押しつぶされて動けない……なんてことはなさそうだね』

「ああ。第一目標は俺が最後まで生きて元気に卒業することだけだな。そのためにやるだけのことをやるつもりだ。……良いのかよ止めなくて？ 結果もしかしたら原作の流れがとんでもないことになるかもよ？」

『良いとも！ むしろ大いにやっておくれよ！ そのためのシミュレーションなんだから。僕は君の選択を面白おかしく見物するだけさ』

デーは一瞬真摯な様子で話したと思つたら、すぐにいつもの面白がるような態度に戻る。

コイツにとっては本当にどちらに転んでも良いのだろう。原作通りに進んでも、原作が破綻したとしても、どっちにしろ「中々に面白かったよ」と言つてのけるのだろう。そ

ういう所は苦手だが、そんな奴だからこそこんな課題を思いついたのかもしれない。

デイーとの話も終わり、俺はその足で十代達の部屋に移動した。扉の前に立った瞬間、罪善さんがヌツと扉をすり抜けて現れるので少し驚く。

カタカタ。

この様子からすると、どうやら特に何も起きていないようだ。俺は静かに罪善さんに礼を言うと、そのまま軽くノックして十代達の部屋に入る。

「ごめん。遅れた。……どんな具合だ？」

「もお。遅いつすよ久城君。今隼人君のデツキを見せてもらっている所つす」

見ると床にカードを並べて十代と隼人が難しい顔をしている。そんなにデツキがマズかったのか？

「なんだよ。隼人のカードコアラばっかりだな」

「コアラデツキなんだな」

「コアラデツキってこんなんで勝てんのかよ？」

どれどれと俺も覗いてみる。……うくん。メインはビッグコアラとして、それをサポートするカードが幾つか。テーマがはつきりしているのは良いが、やや火力不足な気

がするな。

「あつ！　じゃあこれあげるよ。この間買ったパツクに入ってたんだけど、僕使わないし」

翔が何かに気づいたように、持っていたデス・カンガルーのカードを差し出す。

「俺にくれるのか？」

「ほらっ！　コアラにカンガルーが加われば、オーストラリアアデツキになるじゃない？」
その言葉に隼人は少し涙ぐんでいる。分かるぞ。こういう温かい心遣いはピンチの時こそ身に沁みるもんな。

「よしっ！　それじゃあ……ちよつと待ってろ。じゃあ俺はこれをやるよ。攻撃力4200ポイント。コイツを上手く使いりゃ絶対勝てるぜ！」

それに合わせるように、十代がマスター・オブ・OZのカードを取り出して隼人に差し出した。おお！　この流れは、おそらくいざという時にこのカードが大活躍する流れだな！　このくらいなら原作を知らなくても想像できる。

「そんな凄いカードを俺にくれるのか!？」

「俺な、お前に勝ってほしいんだよ。折角友達になれたのにさ、国に帰っちゃうんじゃ寂しいもんな」

うゝむ。美しい友情……なんだけど、俺も何かあげた方が良い感じになってきた。か

と言つて俺はパツクなんてあんまり買わないから、幻想体以外のカードあんまり持つてないんだよな。

それと罪善さんがこつそり教えてくれたんだが、ドアの外から隼人の父らしき人がこちらを伺っているみたいだ。連れ戻しに来るぐらいだから、息子の様子が気になるみたいだな。

そんな中で俺だけ何もしていないっていうのは何とも居心地が悪い。どうしたものか。

「……俺は二人みたいに渡せるカードはないが、明日に備えてデツキ調整のスペーリングくらいなら付き合おう。戦いの中で問題点が見つかったら指摘できるかもしれない」「ありがとう。……ありがとうなんだな皆」

隼人が割と本気で感涙している。……俺の場合渡せるカードが無いつてだけなんだけどな。

「さあ。そうと決まれば早速デツキ調整だ！ 明日に向けて隼人が納得できるデツキが出来るまで付き合おうぞ！」

「「おう！」」

こうして隼人を退学させないため、明日の戦いに向けての準備が始まった。

翌日。

『結局、負けちゃったねえ』

「ああ。ただ……良い勝負だった」

俺は椅子に座って頬杖をつきながら、今日の隼人のデュエルを振り返っていた。

出来る限りの準備をし、決戦場である本棟の武道場にて行われた隼人と隼人の父（前

田熊蔵）の一戦。

始まりは隼人がデス・コアラを攻撃表示で出すという波乱の展開から始まった。

「このバカタレが！ デス・コアラはリバーズモンスター。それをみすみす攻撃表示で出すとは、ろくに勉強してない証拠」

そう熊蔵さんは叱責するが、隼人の眼はプレイングミスをしたという眼ではなかった。それもそのはず、そのポカは昨日すでに注意している。

同じことを俺とのスパリングでやり、十代達からも注意されたのだ。普通に考えて同じ失敗はしない。それでもやるといふことは、何か狙いがあるってことだ。

十代達もそれが分かっているからか何も言わない。隼人のことを信じているからだ。そして次のターン、熊蔵さんのモンスターによりデス・コアラが破壊された時、隼人の狙いが明らかになる。

「魔法カード。コアラの行進発動！」

隼人の繰り出したカードは、墓地のレベル4以下のコアラを特殊召喚し、さらに同名カードを手札から特殊召喚するカード。隼人はこれにより一気に2体のデス・コアラを場に揃え、それを生け贄にビッグコアラを召喚して一気に反撃に転じる。

つまり隼人はデス・コアラの効果でダメージを与えることよりも、わざと破壊させて次のターン攻撃力の高いビッグコアラを出すことを優先したわけだ。悩ましい選択ではあるが、けっして間違いじゃない一手と言える。

その後は熊蔵さんのカード、ちゃぶ台返しの効果でビッグコアラを破壊されるものの、十代達から託されたデス・カンガルーとビッグコアラを融合してマスター・オブ・O乙を融合召喚。あと一步の所まで追い込んだが、僅かな差で熊蔵さんの勝ちとなった。

「……なあディー。この流れも原作通りか？」

『まあね。ただ隼人君はポカではなく、ちゃんと狙いがあってあの動きをした。そうになったのは間違いなく君の行動の結果だよ。……だからこそ面白い』

「どつちにせよ、隼人はこれで退学か。……少し寂しくなるな」

長い付き合いではなかったが、それでも共に学んだ学友が居なくなるっていうのは心に来るものがある。今頃は隼人も帰り支度を終えた頃だろう。出発前に最後の見送りというか。

『あゝ。そのことなんだけどね。……いや、言わなくてもすぐに分かることか。行って

らっしやい!』

何かディーが言いかけたが、一体何だろうか? まあ隼人を見送ってからでも聞くとするか。

そして、

「普通に退学は取り消しになったじゃないかっ! なんで先に言っておいてくれなかったんだよっ!」

『いや、つい君の黄昏れる姿が興に乗って! 結構見ものだったよ』

素直に喜ぶべきか、目の前の光球にチョップを食らわせてやるべきか悩みどころだな。

まあ、隼人がここに残ったのは喜ばしいことなただけだな。

制裁タッグデュエルに向けて出来ること

「うん。やはり多いな」

俺はその日、授業が終わってから図書室に籠っていた。机にいくつかの本と地図を開き、交互に見ながら軽くため息をつく。

『ねえねえお兄ちゃん？ 何の本を読んでのの？』

「うんっ？ レティシアか。……この島のことやデュエルアカデミアのことを調べていたんだよ」

俺の傍らから半透明の姿でレティシアが現れる。幸い今図書室を利用してる人は居ないようだ。なので少し声を抑えながら普通に答える。

「この学校は島一つを丸々使ってるだけあって、やたら施設やら何やらが多いんだよ。今も島の地図を見ながら確認している所だ」

マンガ版を読んだ時はフィクションだからと流していたが、常識的に考えてこの島は割と滅茶苦茶である。

どこぞの無人島に建てられているまではまだ良いとしよう。ヘリや船を使わないと行き来出来ないのは不便だが、それだけなら規模は違えど似たような学校はある。全寮

制だから長い合宿と考えても良い。

だがそもそも学校の近くに活火山があることからまずおかしい。火山灰とかが降ってくる可能性もあるし、日常生活を送るには結構不便だ。

他にも灯台に送電施設、港なんかはまだ分かるのだが、島の奥地には何かの研究所らしき物まである。学業メインならそんなのは要らないだろう。……こつそり変な研究でもしてんじやないのかね？

他にもどうやら、本棟から軽いハイキング気分で行ける場所に妙な遺跡まであるのだから本当に分からない。何でこんな場所に学校を造ろうと思ったのか。考えた人の顔が見てみたい。

「さらにこの前やった怪談話みたいに、島のあちこちにいわくつきの場所があるみたいでな。ざっと確認するだけでも一苦労だ」

アニメの世界が基になっているのなら、他愛ない噂話が普通に本当だったという流れは良くある。

前に翔が怪談で語った北に断崖にある洞窟の件や、実際に闇のデュエルの研究をしていたらしき特待生寮。他にもさつき調べた弱小カードの墓場とされている枯れ井戸の話なんかもある。

他にもそれらしい噂話なら数えきれないほどだ。全てが本当ではないだろうが、他に

も一つ二つ本物が混じっている可能性は高い。

『ふくん。なんだか分からないけど、大変なんだね』

「まあな。でも、どのみちこの島のことを知っておくのは悪いことじゃないし、いずれやることを今先にやっておくってだけさ」

『……うん。分かった。笑顔を忘れずに無理しないでね』

レティシアはそこでニッコリ笑って姿を消した。やはりデイーの言葉通りレティシアは良い子らしい。こんな子が何故幻想体として存在しているのだろうか？

……おつといけない。今はこの島のことを調べるのに集中集中つと。

大雑把にだがこの島の立地を頭に入れ、時間もそれなりに経って暗くなってきたので俺は図書室を出る。

そう言えば、明後日は十代達の制裁タッグデュエルの日だったな。それに向けて、今頃十代達は追い込みをかけている頃だろうか？ ……たまには購買に行つて何か差し入れでも買ってきてやるかな。ドローパーンとか。

ちなみにこの学園内において、生徒は学園側から定期的にDPというポイントが支給される。これは生徒のランクやテスト、実技の成績などで額が増減し、購買などで現金

の代わりとして使用できる。言わば学園側から支給される小遣いだ。

寮の食事はそれぞれ無料だが、購買でカードや嗜好品を買う際は貧乏学生にとって必須となる。俺の場合はオシリスレッドなので額がやや少なめだが、カードをほとんど買わないため結構溜まっている。たまには奮発してあいつらに奢っても良いだろう。

という訳で自分とアイツらの分のドローパーンと、軽く摘まむための菓子などをいくつか買っていく。

「毎度あり〜。いつもありがとうね!」

「こちらこそすみませんトメさん。俺はあんまりカード買わなくて」

「良いんだよおそれくらい。遊児ちゃんオシリスレッドだろ? ポイントだってカツカツだろうし、その代わりによくドローパーンなんかを買って行ってくれるしね!」

以前のテストの時の縁もあって、購買に行く時はよくトメさんと話す。よく一緒に居る店員のセイコさんは今は居ないようだな。

「そうだ丁度良かった! ちよつとこれを見ておくれよ」

「何ですか?」

トメさんは何か思い立ったような顔をして、カウンターの奥からチラシのような物を取り出す。

「これは……明日の購買部主催タッグデュエル大会のお知らせですね」

このチラシ自体は購買部の掲示板にも張つてある。こうした小規模な大会は、授業とは別に時々開催されているのでそこまで珍しくはない。

腕試しには悪くないし、優勝者や上位入賞者には少額ではあるがDPが授与されるので意外と人気がある。元の世界のシヨップ大会のようなものだ。

「そうなんだよ。いやね、じつは明日だつていうのに参加人数が振るわなくてねえ。良かったら遊児ちゃんも参加しないかなつて」

「……折角誘つてもらつて申し訳ないんですが、俺はあんまりこういうたデュエル大会には興味ないんですよ」

実際こういう小規模なデュエル大会は、学園主催ならともかく学校の成績とは特に関係がない。あくまで自由参加だからだ。

実際オシリスレッドや一部のライエローと言つた、DPにあまり余裕のない層からは高い人気があるが、それ以外であまり参加するものは居ない。デッキ調整のためや腕試しといった理由で参加する者も居るが少数だ。

俺は元々使えるカードが幻想体縛りなのでカードを買う必要があまりないし、嗜好品なんかを買うだけなら今の支給DPで充分賄える。腕試しに興味がない訳じゃないが、それなら学園主催でやる大会の方を優先するしな。

なのでこれまでこういうた大会には一度も参加していなかつたのだ。

「しかもタツグデュエル限定ですからね。パートナー選びは重要ですし、意外に敷居が高かったのかもしれない」

「うーん。たまにはいつもと違うやり方にしようってセイコちゃんと相談して決めたんだけど、やっぱり次からは元のルールに戻そうかしら」

「ただタツグデュエルも決して参加者が居ない訳じゃないんですよ？　なら次からは限定じゃなくて、部門ごとに分けたらどうでしょうか？　それならまったくの企画倒れにはならないと思います」

トメさんがどことなく落ち込んでいるように感じたので、フォローにならないかもしれないがそう言っておく。

「そうだねえ。一度にやるとなるとちよつと難しいかもしれないけど、次からはちよつと考えてみようかね。……ありがとうね遊児ちゃん」

「いえ。参加は確か大会30分前まで受け付けてましたよね。俺も暇そうな知り合いが居たら一声かけてみますよ。じゃあこれで失礼します！」

と言つてもそんな暇そうな奴居たかな？　まあ寮に戻ったら聞いてみるか。俺は一応チラシをトメさんから一枚もらい、購買部を後にした。

「そうして俺は寮に戻り、差し入れを持って十代達の部屋に突撃した。……したのだが、」

「普段とまるで変わらないじゃないかっ！ もう明後日制裁タッグデュエルだつていうのに」

「そう。十代達ときたら、普段通りソロのデュエルばかりでほとんどタッグの練習を
していなかったのだ。」

「まあそう怒るなつて！ やったことはないけど何とかなる。あつ！ ドローパン一つ
もくらいっ！」

「こらっ！ 十代だけ勝手に取るんじゃないつてのっ！ ……つたく。翔や隼人も食う
か？」

「あ、ありがとう久城君！」
「ありがとうなんだな遊児」

「内心こんなので明後日大丈夫かと不安に思いながらも、とりあえず皆でドローパンを
パクつく。……今日は甘栗パンか。これはこれで嫌いじゃない。」

「こうして頭に栄養を行き渡らせたところで、これからのことについて話し合うことに
する。」

「十代が強いのはよく分かっている。しかしそれはあくまでソロの話だ。制裁タッグデュ

エルの相手が誰になるかは知らないが、ペナルティなんだから向こうもそれ相応の相手を出してくるに決まってる。それに対して何の準備も無いってのはマズいだろう」

「そうだよね。アニキ。久城君の言う通りつすよ！」

「その通りなんだな！俺だつて父ちゃんやんと戦う時には入念に準備をしたんだな。……それでも負けちゃったけど、あれはきつと無駄じゃなかったんだなあ」

翔と隼人が俺の言葉に追随する。自信家の十代と違って翔は準備をしつかりするタイプだからな。大方十代に付き合つて練習しなかったが、やはり不安ではあったのだろう。

以前のパワー・ボンドの一件からは大分立ち直つてきているが、それにしたつてまだ完全に吹っ切れたわけじゃなさそうだ。それをいきなり使えるようになれというのはしんどいし、慣れないタッグデュエルでとなれば尚更だ。

隼人もそうだったけど、時間があるのなら練習して何が悪いという話だ。準備不足で負ける方がよっぽぼマズいからな。

「……そうだな。何が来ても全力で楽しむだけだけど、楽しみ方は人それぞれだもんな。よし！そうと決まればさっそく練習だ！翔！お前の今のデッキを見せてくれよ」

「うん！もちろんだよアニキ」

こうして十代もタッグデュエルの練習に意欲的になり、さっそく互いのデッキの内容

を確認し合う。何が入っているのか？　こんな状況になったら互いにどう動くか？　話すことは沢山有るからな。これはもうしばらくかかるかもしれない。……そうだ！

「そう言えば皆、明日の授業のあとの予定はどうなってる？」

「えっ!?　僕は特に決めてないよ」

「俺もなんだな」

「俺もない。なんだよ遊児。何かあんのか？」

よおし。都合の良いことに全員空いているな。……普段なら明後日に迫った制裁タッグデュエルの方に集中させるべきだが、偶然にもこつちもタッグデュエル形式。それなら本番前の調整も兼ねて誘わない手はない。

「いやなに。タッグデュエルの練習なら、丁度明日こんなものがあるからさ。練習を兼ねて試しに出てみないかって話だ！　まあこれで勝てないようじゃ明後日の本番どうするのって話だけだな」

俺はチラシを取り出して皆に見えるように広げると、軽く挑発する様にニヤリと笑ってみせた。

タツグデュエル 遊児・隼人对十代・翔 その一

「いやありがたいがとうね遊児ちゃん。それにあなた達も。おかげで何とか開催できそうだしわ！」

トメさんが喜びながら手を取ってくる。別に上手くいったのは偶然だから良いんだけどな。

「いえいえ。丁度暇してた奴が何人かいて助かりました。いつもお世話になってますからね。お役に立てて良かったです」

「気にすんなよトメさん！ 困った時はお互い様ってな」

購買部主催タツグデュエル大会当日。俺達は授業後に購買部に向かい、この大会の参加申請を終えた。トメさんによると開催できるかどうかギリギリの人数だったそうで、この参加がちょうど決め手になったという。

ちなみにチーム分けだが、明日の制裁タツグデュエルの練習を兼ねているので当然十代と翔で一チーム。……あと何故か俺と隼人もチームで参加となった。

俺は当初横で見てるだけのつもりだったんだが、「横で見てるだけなんてつれないこ

と言うなよ。折角だから遊児と隼人も参加な！」と十代に強引に押し切られた。

あくまで第一の目的は十代と翔にタッグデュエルの経験を積ませること。そして第二にトメさんに協力して大会の参加者を引っ張ってくるのだ。参加した時点でトメさんへの義理は果たせたことになるが……。

「遊児。折角だし頑張ろうなんだな！」

「えっ!? ……あ、ああ。頑張ろう！」

隼人が珍しくやる気を見せている。この前の父親との一件からまたデュエルに前向きに取り組み始めたのは良いが、俺はそこまでやる気じゃないんだよなあ。……まあ出るからには大いに楽しむつもりではあるが。

「はあくいお集まりの皆様！ 長らくお待ちいたしました。これより購買部主催タッグデュエル大会を開催いたします！」

「うおおおっ!!」

店員のセイコさんの開催の合図とともに、ここに集まった生徒たちの雄叫びが響き渡る。ノリが良いのは大変結構だ。

と言っても参加者自体はそこまで多くなく、俺や十代のチームを含めて8チームの計

16人。それ以外はたまたま来ていた客や、俺が声をかけたけど参加はしなかった暇な奴らだ。

「ルールは簡単！ それぞれLPはパートナーと共通で8000。最初のターンは全員モンスターの攻撃は行えません」

本番前のセイコさんの説明を、参加者は全員集中して聞いている。ここを怠って、実戦で聞いていなかったは通らないからな。

「パートナーのフィールドも自分のフィールドとして扱えますが、伏せカードの確認や発動は行えません。相談も無しです」

「なあ遊児。つまりはどういう事だあ？」

「そうだな。……ざっくり言うと、パートナーのモンスターを生け贄やコストに使うことは出来ても、パートナーの伏せているカードを勝手に使ったり使つたりは出来ないってことだ。相談がダメっていうのは多分味方のカードの確認防止のためだろうな」

横から隼人が小さな声で話しかけてきたので、自分なりにまとめて説明する。十代達を見ると、どうやら翔もよく分からなかったらしく十代に訊ねている。

……よし。今の内に聞いておけば、明日の本番に失敗するという事はないだろう。少しずつ身になっているようで何よりだ。

他にもこまごまとした説明はあったが、残りはタッグデュエルというよりも店での

注意事項の面が多かったので省略する。

デュエル中に飲食しちやダメって……普通にそんな奴そうそう居る訳ないじゃないか！

どこぞのシリーズでそんな主人公が居た気もするが、少なくともGXの世界でそんな人は居ないはずだ。……居ないよな？

説明も終わり、対戦相手をくじ引きで決定する。十代達のチームとは……ふむ。場所が離れているから当たるとしたら決勝戦か。何ともお約束だな。

「こりゃあ燃える展開じゃねえか！ 遊児！ 隼人！ 決勝で会おうぜ！」

「その意気込みは良いんだが、まずはタッグデュエルの経験を積むことを第一にな！」

……翔も最悪ここでもミスしても挽回が効く。思い切つてやって見な！」

「うん。ありがとうね久城君。まずは初戦、アニキの足を引つ張らないように頑張るよ……隼人君も、決勝でね！」

「おう！ 約束なんだな！」

こうして十代達と決勝で戦うという熱い約束を交わし、俺達はそれぞれのデュエルスペースに赴くのだった。

一時間後。

「さあ皆様！ いよいよこれより購買部主催タッグデュエル大会、決勝戦を開始します。まずはこちらのタッグ。オシリスレッド所属、遊城十代君と丸藤翔君ペア！」

「いえ〜い！ どうもどうも！」

「ど、どうもつす」

セイコさんの合図とともに、これまでの試合を勝ちあがった猛者が二人、決勝用のデュエルスペースに歩み出る。

これまでは場所の都合によりソリッドビジョン無しのテーブルデュエルだったが、決勝戦のみはそれが出来るだけのスペースが取れるのだ。

「続きまして……これは意外っ！ なんと決勝戦の対戦相手も同じオシリスレッドの生徒です！ 久城遊児君と前田隼人君、どうぞ！」

「す、凄いいんだな！ 俺がこんな場所まで来られるなんて……遊児のおかげなんだな！」
「いや。隼人がよく自分と相手の場を見ながら動けたからさ。俺のやったことなんてそれに乗っかっただけだ」

多少ご都合主義の流れは有るが、どうにか俺達のチームも決勝まで駒を進めることが出来た。と言っても実力だけで勝ち上がったとは流石に思っていない。ちゃんと理由もある。

一つは今言ったように、隼人が予想以上に奮戦したこと。以前のやる気のなかった頃
に比べ、確実に隼人も成長している。

二つ目は俺のデッキが対処しづらいという事だ。幻想体という珍しいカテゴリーのた
め、戦闘記録が少なく対処法も確立されていないのだろう。

一応三つ目の理由として、参加者の大半はオシリスレッドの生徒だったことも挙げら
れるか。数少ないライイエローの生徒は十代達が倒したしな。

兎にも角にも、こうしてなんとか約束通り決勝まではこぎつけたわけだ。俺と隼人、
十代と翔でそれぞれ所定の位置に移動する。

「へへっ！ やっぱり来たな遊児。隼人。待ってたぜ！」

「ああ。なんとかここまで辿り着いたぞ。そっちはちゃんとタッグデュエルの経験は積
めたのか？」

「うん！ 少しずつだけど、なんとなくタッグデュエルのことが分かってきた気がする
よ。……ここまで来たんだ。負けないよ二人共！」

「おう！ 俺も負けないんだな！」

鼻を掻きながらいたずらっ子のように笑う十代は当然として、翔も少しではあるが自
信が付いてきたようだ。これなら明日の制裁タッグデュエルも大丈夫だろう。

本来なら、さらに調子を上げるべくこちらがわざと負けるといいうのも選択肢の一つと

して挙げられるかもしれない。だが、

「遊児。そう言えばお前とはこれまで一度も本気でデュエルしたことなかったよな。……全力でデュエルを楽しもうぜっ！」

「これまで何度もアドバイスに乗ってもらったけど、アニキと一緒に戦う以上僕も負けられない！ 今日には勝たせてもらうよ！」

「思えば俺がここまで来られたのも、皆のおかげなんだな。だからこそ……俺はお前達に勝ちたいんだなっ！」

十代も、翔も、隼人も、この中の誰一人として、相手が友人だから手を抜こうなどと思っているものは居ない。いや、友人だからこそ全力でぶつかろうとしている。

こんな熱い奴らの心意気を、わざと負けるなんてことで穢すというのは明らかに無粋。という訳で、

「……上等だ。最後の最後で敗北の味を教えてやる。かかってこいやっ!!」

熱い奴らには熱いノリで！ 俺は軽くクイツと指を曲げ、不敵な笑みを浮かべながら挑発してみせたのだ。

今俺は、原作主人公に挑む。

「「デュエルっ!!」」

遊児・隼人 LP8000

十代・翔 LP8000

順番 翔↓隼人↓十代↓遊児

「まずは僕からだ。ドロロー! ……僕はパトロイドを攻撃表示で召喚! カードを1枚伏せてターンエンドだ」

翔の場に、パトカーのような形のモンスターが出現する。相手の場のセットされたカードを確認出来るモンスターか。ピーピングは地味に強いんだよな。

「俺のターンなんだな。ドロロー! 俺はモンスターを裏側守備表示でセット。カードを1枚伏せて……ターンエンドなんだな」

モンスターをセットして隼人は守りの構えだ。

パートナーのセットしたカードは味方であっても覗くことは出来ない。なのでタッグ戦において、裏側守備は味方に対してもブラフとなる。それでもやるといふ事は、俺の予想が正しければおそらくあれは……。

隼人は視線をこちらにチラリと向けて一度こくりと頷く。……ここまで信じられているとあっては、確証があるうがなかるうが関係ないか。出来る限りやってみるだけだ。

「俺の番だな……ドローっ！俺はフェザーマンを守備表示で召喚！カードを2枚伏せて……ターンエンドだ」

十代の場に翼持つ緑のヒーローが出現する。ふむ。流石の十代も最初のターンは様子見か。まあ皆最初のターンは攻撃できない以上、どう仕掛けられても良いように守りを固めるのが定石だよな。

「最後は俺だな。ドロー。……俺は手札から『幻想体 空虚な夢』を守備表示で召喚」

俺の場に現れたのは、白くてもこもこの宙に浮かびながら眠る羊だった。目を閉じて眠る様は中々に愛らしい。

ただ宙に浮いているだけで普通ではないのだが、体毛の下の地肌はどうやら紫色。そして同じく薄い紫の頭部から伸びる二つのクルリと巻いた角に、体毛の中からぎよろりと覗く緑と紫の瞳が何とも言えない不気味さを醸し出している。

ソリッドビジョンでは初めて見たけどこんな感じなのか。……うむ。もふもふもこもこで、枕にして昼寝でもしたらさぞ気持ちよさそうな気がするのだが、それと同時に何故か絶対に寝たらマズイという感じもする。不思議な羊だ。

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

こうして攻撃の出来ない一巡目は、各自ほとんど動きのない静かな滑り出しから始まった。

そして、
激動の二巡目が始まる。

タツグデュエル 遊児・隼人对十代・翔 その二

遊児・隼人 LP8000

十代・翔 LP8000

翔 パトロイド 伏せ1 手札4

隼人 裏守備1 伏せ1 手札4

十代 フェザーマン 伏せ2 手札3

遊児 空虚な夢 伏せ2 手札3

「行くぞっ！ 僕のターン。ドロロー。……僕はパトロイドの効果発動！ 隼人君のセットしたモンスターを確認するよ」

翔の場のパトロイドに付いた回転灯から伸びる光が、隼人の場にセットされたモンスターを照らし出す。よしよし。ちゃんと効果を忘れずに使えてるみたいだな。

この場合、カードの内容を知ることが出来るのは翔のみ。パートナーである十代や俺には詳細は分からない。

「……よし。なら僕は手札から魔法カード発動！ 『シールドクラッシュ』！ 隼人君の

裏守備モンスターを破壊だ」

「ぐうっ！」

守備表示モンスターを破壊するシールドクラッシュにより、隼人の裏守備モンスター、デス・コアラが破壊される。……やっぱりデス・コアラだったか。

「手札の数だけダメージを与えるデス・コアラ。普通に攻撃したら危ないからね。破壊させてもらったよ！」

「流石に読まれてたか。普通に攻撃はしてこないんだな」

「行くよ！ 僕は『ドリルロイド』を攻撃表示で召喚。行けっ！ 僕のモンスター達。隼人君にダイレクトアタックだ！」

翔の号令と共に、パトロイドとドリルロイドが隼人に向かって突撃する。このままでは合計2800のダメージだ。……だが、俺が居ることを忘れてもらっちゃ困るな。

『幻想体 空虚な夢』の効果発動！ 1ターンに1度、相手の攻撃宣言時に相手モンスターを1体守備表示に変更できる。ドリルロイドは守備表示に変更だ！」

不思議な羊から雲のような物体がドリルロイドに飛んでいき、それに当たったドリルロイドはそのまま動きを止める。……というかあれ機械なのに眠ってないか？ 機械まで眠るとは凄い羊だ。

「だけどまだパトロイドの攻撃が残ってる。シグナルアタック！」

隼人にパトロイドのパンチが直撃し、1200のLPを削っていく。

遊児・隼人 LP8000↓6800

「良いぞ翔！ まず先制パンチが決まったな！」

「うん！ 僕はこれでターンエンド」

あちやく。最初の一撃は向こうに取られたか。流れを掴むためにも最初のダメージはこつちが与えておきたかったんだがな。

「済まない隼人。1体防ぎきれなかった」

「気にしないで欲しいんだな。こんなの掠り傷なんだな」

隼人はまだまだどうってことないとはかりに笑ってみせる。……そうだな。勝負はまだまだ始まったばかりだ。

「今度はこつちの番なんだな！ ドロー」

隼人はドローカードを確認し、よしとばかりに一度領く。仕掛ける気か。

「俺は手札のコアラの行進を発動！ 墓地のデス・コアラを1体攻撃表示で特殊召喚！」

さらに手札から、同名カードがあれば特殊召喚できるんだな。もう1体手札から特殊召喚！」

隼人の墓地から先ほど破壊されたモンスターが復活し、そして手札からもう1体同じモンスターが並ぶ。……この流れは隼人の十八番だ。

「そして俺は2体のデス・コアラを生け贄に、『ビッグ・コアラ』を召喚するんだな！」

ビッグ・コアラ ATK2700

隼人の場に、もはやお馴染みとなった上級モンスターが現れる。よくし。行つたれ隼人！

「さっきのお返しなんだな！ ビッグ・コアラで翔のパトロイドを攻撃！」

「やらせるか！ 毘発動。ヒーローバリア！ 場にHEROが居る時、一度だけ相手の攻撃を無効にする」

十代の伏せカードによりパトロイドの前にバリアが出現し、ビッグ・コアラの攻撃を弾き返す。やるな十代。タッグ戦の醍醐味である、パートナーとのコンビネーションがしっかりと出来ている。

「まだまだ！ 伏せカードオープン！ 『キャトルミューティレーション』。ビッグ・コアラを手札に戻し、再びビッグ・コアラを手札から特殊召喚するんだな！」

隼人の攻撃は終わらない。まだバトルフェイズ中なので、一度手札に戻ってから再び場に出たビッグ・コアラはまた攻撃が出来る。連続攻撃だ！

「もう一度、ビッグ・コアラで翔のパトロイドに攻撃なんだな！ ユーカリボム！」

「うわあっ!？」

今度はパトロイドを守る壁はなく、ビッグ・コアラがパトロイドを地面に叩きつけて粉砕する。

十代・翔 LP8000↓6500

「やったぞ! その調子だ!」

「どうだ! 俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドなんだな」

隼人はどこか嬉しそうだ。それもそうかも知れない。

ついこの前まで、隼人は完全に挫折し、部屋に閉じこもる毎日だったという。それが今はどうだ。こうして堂々と戦い、十代達に一矢報いるまでになった。これは間違いなく成長だ。

ただ……それは向こうも同じみたいだけだな。

「ごめんアニキ。折角1回防いでもらったのに」

「気にすんなって! 今のは隼人が一枚上手だっただけさ。お前のせいじゃない」
さあて。問題はこつちだ。……十代がどう動くか、じっくり見させてもらおうか。

「……今度は俺が行くぜ! 俺のターン。ドロ〜っ! 俺は手札から『融合』を発動!」

早速来たか。十代のデッキの中核を成すカードが。

「俺は手札のスパークマンとクレイマンを融合。来いっ！ 『E・HEROサンダー・ジャイアント』っ！」

サンダー・ジャイアント ATK2400

十代の場に、雷を纏った巨人が姿を現す。……マズイっ！ こいつの効果は！

「サンダー・ジャイアントの効果発動！ 召喚時、元々の攻撃力がこのカードより低いモンスターを1体破壊する。攻撃する度に眠らされちゃあたまらないからな。空虚な夢を破壊だ！」

巨人の掌から放たれた電撃が羊に降り注ぎ、そのまま丸焼きにする。マズいな。壁が居なくなった。

それとサンダー・ジャイアントの効果はどうやらマンガ版と同じらしい。実際は手札を捨てることで任意のタイミングで使える効果だからな。どちらが良いかは一長一短だ。

「フェザーマンを攻撃表示に変更！ バトルだ！ フェザーマンで遊児に攻撃！」

「遊児っ!？」

「大丈夫だ隼人。俺は罠カード『幻想体 歌う機械』を発動！ このカードをモンスター扱いで、攻撃表示で特殊召喚し、クリフオートカウンターを1つ置く」

歌う機械 星5 ATK2000 DEF2000 機械族 闇 CC1

俺の場に出現したのは、デカイ肉挽き機のような四角い機械だった。四隅から伸びる小さな脚で自らを支え、上部には小さなパイプが伸びている。

側面には切れ込みのような線があることから、どうやらこれは上下に開閉するらしい。カードの絵柄だけではよく分からなかったが、実際はこういう風になっているか。

「くっ！ ならフェザーマンの攻撃を中止に」

「だがフェザーマンの攻撃は止まらない。歌う機械の効果。このカードが表側表示で存在する限り、このカードより低いレベルのモンスターは、攻撃可能ならこのカードに攻撃しなければならない。フェザーマンのレベルはこのカードより低いのでそのまま続行だ」

フェザーマンは止まることなく、そのまま歌う機械に突っ込んでいく。その時、ギギイ。

どこか不気味な音を立てながら、歌う機械が切れ込みに沿って上下に開閉する。そして露わになったのは、その内部に隠された幾つもの棘や刃。

用途は見ただけで一目瞭然。中に入ったモノを切り裂き、磨り潰し、粉碎するためのモノだ。

歌う機械はまるで意思があるかのようにつ突つ込んできたフェザーマンを飲み込み、そのまま中の刃が作動して獲物を粉碎するとともにバタリと元のように閉まる。

そしてその間に上部のパイプからは、どこかもつと聞いていたいと思わせるメロディが流れていた。歌う機械つてそういう事かよ。……なんともまあ悪趣味な。

十代・翔 LP6500↓5500

「済まないフェザーマン。だが敵は取るぜ。サンダー・ジャイアントで、歌う機械に攻撃しな！」

「やらせない。俺は伏せていた速攻魔法『管理人の弾丸 シールド弾』を歌う機械を対象に発動！ 幻想体カードが破壊される時、一度だけ無効にできる」

歌う機械に薄い膜が張られ、それはサンダー・ジャイアントの電撃を弾くと共に消滅する。このカードは便利なんだが、幻想体にしか使えないってのがネックなんだよな。

さっきの羊を守るべきかはかなり悩んだが、場をがら空きにすれば十代ならフェザーマンも攻撃に参加させると踏んで歌う機械の方を選んだ。正直ちよつと賭けだったが、上手くいって良かった。

「だがダメージは受けてもらおうぜ」

「分かってる」

電撃の余波が俺にまで届く。衝撃だけだからそこまで痛くはないが、軽い痺れを感じ

るな。

遊児・隼人 LP68000↓6400

「バトルフェイズ終了時、戦闘を行った歌う機械にPEカウンターが3つ置かれる」

歌う機械 PE3

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。……へへっ！ やっぱやるな遊児。今のは完全に決まったと思っただけだな。デュエルはこうじゃなくっちゃ！」

「まあ今のは少し危なかったな。だけどそっちも大分きついんじゃないか？ 今の手札を全部使いきっただろ？」

元々手札消費の激しいのが融合デッキの弱点だ。最近はそうでもないが、GXの頃からリカバリーの手段はそこまで多くないだろう。だというのに、目の前の十代はむしろ笑みを深めている。流石と言うべきか。

「なあに勝負はこっからだ。それに翔も今回は調子が良いみたいだしな」

その言葉に翔の方を見ると……なるほど。アニキである十代の攻撃が躲されたというのに、その目に映る闘志はまだ消えていない。十代頼みでここまで来た訳じゃないってことか。

「それを言うならこっちの相方だって気合が入ってる。まあ確かに、まだまだ勝負は分らないってことだけだな」

隼人の方も調子は悪くない。場で最も攻撃力が高いのは、何と言っても隼人のビッグ・コアラだ。このプレッシャーは地味に十代達にも効いているはず。

このまま押し切れれば良いが、そう簡単にいかないのがデュエルだ。なので、

「じゃあ今度は、俺も一つ場を抑えにかかるとするかね。俺のターン。ドロー！」

俺は勢いよくカードをドローする。さて、隼人に任せっぱなしにしないで、俺も暴れるとしますかね。

タツグデュエル 遊兎・隼人对十代・翔 その三

遊兎・隼人 LP6400

十代・翔 LP5500

翔 ドリルロイド 伏せ1 手札3

隼人 ビッグ・コアラ 伏せ1 手札1

十代 サンダー・ジャイアント 伏せ2 手札0

遊兎 歌う機械 伏せ0 手札4

さてどうやって進めるか。俺はたった今ドロートしたカードを見る。『幻想体 魔法少女 貪欲の王』。攻撃力だけで見れば間違いなく場で一番だ。このカードを出せば一気に場を制圧することが出来る。

ただこのカードの厄介な点として、効果でこのカードより攻撃力の低いモンスターをエンドフェイズ時に全て破壊してしまう。これは敵味方問わずなので、隼人のモンスターまで一緒に破壊されてしまう訳だ。

そうなれば次のターン隼人の場はから空き。返しのターンで手痛い反撃を受ける可

性能が有る。

「……………ここはサポートに回るとするか。俺は永続魔法『エンサイクロペディア』を発動！これは1ターンに1度、場のPEカウンターを任意の数使用することで効果が変わる。俺は歌う機械のPEカウンターを3つ消費して効果発動！」

俺の場にタブレットののような物が出現し、その画面に何かが映し出される。

「3つ使用時の効果。俺の墓地のレベル4以下の幻想体を1体、攻撃表示で特殊召喚する。俺は墓地の『幻想体 空虚な夢』を特殊召喚する」

タブレットに空虚な夢が映し出されたかと思うと、そのまま俺の場に特殊召喚される。だがこのままでは終わらない。

「そして、俺は歌う機械と空虚な夢を生け贄に、『幻想体 魔法少女 絶望の騎士』を守備表示で召喚する」

絶望の騎士 星7 ATK1900 DEF2600 魔法使い族 闇

音楽を奏でる肉挽き機と、他者を夢に誘う羊。その2体を生け贄に現れたのは、どこか悲しみを漂わせた異形の少女だった。

髪のが黒く染まった青色の長髪。そして髪と同色のドレスにはどこか星空を思わせる装飾がされていてとても美しく、背中には白く透き通ったマントを靡かせている。

頭部にはスパーードの形を組み合わせたようなティアラを着け、ドレスの胸元には同じ

くスピードの意匠が施されている。

瞳を閉じて祈るように両手を合わせる様子は、そこだけ見れば持ち前の美しさと相まって、聖女と見間違えるほどの神聖さを醸し出していた。

だが、顔の左半分と両腕の前腕部を覆う刺々しい黒き闇と、残った右半分の眼の下にある涙の形の痣。そして絶え間なく流れる黒い涙が、神聖さを打ち消すほどの悲哀を感じさせる。

「……これが、絶望の騎士か」

このカードもテールブルデュエルはともかく、こうして立体映像で見るのは初めてだ。その姿に俺はどこか悲しみを感じると共に、何故か無条件にこのカードは味方であると思える何かがあった。

そう言えばこの世界に來た最初の日に、ディーに選ばされたカードの一枚に入っていたな。今着けているペンダントの意匠の一つにもなっているしそのせいだろうか？

「俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ。……隼人。サポートはこつちに任せて、ガンガン攻めてくれ！」

「分かったんだな遊児！」

さあて。後は向こうがどう動くかだな。

「僕のターン。ドロロー」

翔がデッキからドロローし、そのまま引いたカードを見て動きを止める。この様子だと、どうやらあのカードを引いたみたいだな。

「……翔」

隼人も勘づいたのか、小さく翔の名を呟く。決勝戦までの戦いの中で、俺が見た限り翔は一度もあのカードを使っていない。ここが正念場だぞ。

「……アニキ。僕は」

「おっと翔。相談は無しだぜ！ ルール説明でもあつただろ」

翔が十代に何か尋ねようとしたが、あの十代がそれを拒む。……十代も当然分かつているのだろう。今翔を助ければ、これからも同じようなことになる。誰かの許可が無くてはカードが使えないなんてことじゃいけない。

「だけど、俺から言えることは一つだ。……翔。お前の思う通りに全力でぶちかませ！

それでどんな結果になったって、最後は笑ってデュエルを楽しもうぜ！」

「アニキ………うん！ 分かったよ！ 僕はもう迷わないっ！」

……はあ。十代の奴め。なんだかんだ甘いんだから。ただ、これで翔も覚悟を決めたみたいだな。

「僕は手札から魔法カード『パワー・ボンド』を発動！ 手札のスチームロイドとジャイロイドを融合して、スチームジャイロイドを融合召喚っ！」

手札の2枚を融合して翔の場に現れたのは、以前俺と戦った時に見た大きなプロペラの付いた機関車のようなモンスター。だが、あの時とは違うのは、

「パワー・ボンドの効果。このカードの効果で融合したモンスターの攻撃力は、元々の攻撃力分上がる」

スチームジャイロイド ATK2200↓4400

「よっしやー！ 良いぞ翔！」

「攻撃力4400っ!? やったんだな翔！」

十代は笑顔で、隼人は驚きながらも翔のことを称賛する。やはり二人とも同室という事で気にかけていたからな。……ただこれで一気に形勢が向こうに傾いた。

「おいおい。パワー・ボンドのデメリットを忘れてないか翔？ このターンのエンドフェイズ時、効果で上がった分のダメージを受けることを」

「分かっているさ。だけど、僕とアニキのLPはまだ5000以上有る。LPに余裕のある今ならデメリットも耐えられる！」

俺がちよつと意地悪に聞くと、翔はちゃんと冷静に答えを返した。……よしよし。ただ考え無しに出したってわけじゃなさそうだな。

このデュエルはタッグパートナーとの共通LP制。その分LPは多く設定されている。つまりそれだけデメリットに耐えられる訳だ。

加えて今は中盤。まだLPに余裕が有り、なおかつ一気に押し込める程度にこっちのLPが減りつつある。つまり今が出すには絶好のタイミング！

「さらに、僕は伏せていた魔法カード『サイクロン』を発動！ 隼人君の伏せカードを破壊する！」

「うわっ！」

今の今まで翔の場に伏せてあったカード『サイクロン』が、隼人の伏せカード『リビングデッドの呼び声』を破壊する。

ずっと伏せていたのは先にこっちが壊そうとするタイミングにチェインする為だろうが、ここで使ったってことは一気に仕掛ける気か！

「そしてドリルロイドを攻撃表示に変更。行くぞっ！ 僕はスチームジャイロイドで、隼人君のビッグ・コアラを攻撃！」

スチームジャイロイドが翔の号令を聞き、巨大なコアラに向かって突撃する。

確かに今の隼人の場にはビッグ・コアラのみ。伏せカードも潰して攻撃を防ぐものもなく、ビッグ・コアラを倒せばドリルロイドでさらなる追撃も可能だろう。一対一だったらほぼ間違いない最善手だ。

だが、一つ忘れちゃいけないか？ タツグデュエルだからこそそっちもデメリットが減ったように、タツグデュエルだからこそこっちもやれることがあるってことをさ。

「俺はその瞬間、絶望の騎士の効果発動！」

「えっ!？」

「なにっ!？」

翔と十代が驚いた表情を見せる。隼人は意外に落ち着いているな。味方も驚かすつもりだったんだが……まあ良いさ。

「相手の攻撃宣言時、このカード以外の場のモンスター1体を選択できる。そのカードは次のターンまで攻撃力と守備力が500アップし、1度だけ破壊されない」

「なんだって!？」

ビッグ・コアラ ATK2700↓3200

その瞬間絶望の騎士の傍らから数本の剣が突如出現し、そのままビッグ・コアラを守るように円陣を組んで展開される。

スチームジャイロイドが突撃を仕掛けるも、剣に阻まれビッグ・コアラまで届かない。

「くっ! 絶望の騎士にそんな能力があつたなんて。だけど、ダメージは受けてもらおうよ」

「うあっ!？」

ビッグ・コアラは無事だったものの、スチームジャイロイドを受け止めた剣の1本が弾き飛ばされ隼人に直撃。映像ではあるが肩口を切り裂いていく。

遊児・隼人 LP6400↓5200

「なら今度は絶望の騎士を倒すだけだ。ドリルロイドで絶望の騎士を攻撃！」

今度はドリルを横した機械が絶望の騎士目掛けて突っ込んでくる。確かドリルロイドの効果は、守備表示のモンスターとバトルする時その相手を効果で破壊するもの。それなら。

「リバースカードオープン！ 『鎮圧行動』！ 幻想体が場に居る時、場のモンスター1体の効果を次のターンまで無効にする。ドリルロイドの効果は無効だ！」

しかし効果が無くなってもドリルロイドの攻撃は止まらない。そのまま絶望の騎士を貫こうとするが、再び騎士の傍らに現れた剣に行く手を阻まれ逆に全身を傷だらけにされてしまう。

十代・翔 LP5500↓4500

カードの封印を解けたは良いが、ちよつと勝負を焦ったな翔。効果を知らなかったとはいえ、絶望の騎士のことが頭から抜けていたのは良くなかった。

そして翔のバトルフェイズが終わったことにより、戦闘を行った絶望の騎士にPEカウンターが4つ乗る。

絶望の騎士 P E 4

「……僕はこれでターンエンド。この瞬間、パワー・ボンドのデメリット、スチームジャイロイドの上がった攻撃力分のダメージを受ける」

十代・翔 LP 4500 ↓ 2300

「うう。ゴメンよアニキ。折角パワー・ボンドを使ったのに、ほとんどダメージを与えられなかったばかりかLPも大きく削られて」

「いや。確かにちよつとだけピンチになったけど、それ以上に翔。お前がパワー・ボンドの封印を解いてここぞという所で使えるようになったのは大きいぜ！ それにまだ攻撃力4400の強力モンスターだって場に残ってる。まだまだ勝負はこれからだぜ！」

「アニキ……ありがとう」

翔は少し気落ちしかけたようだが、十代の言葉に再び立ち直ったようだ。まだやや十代が精神的支柱になっている感が有るが、これなら明日の制裁タッグデュエルも何とかなるかもしれないな。

ただ、落ち着いて考えてみると決して今の状況は良いとは言えない。

LPこそ一気に差をつけたが、翔の場には相変わらず攻撃力4400のモンスターが居座っている。さつきは何とか防げたとは言え、あれの攻撃をまともに受けたら一気に形勢がまたひっくり返る。

「よし。次は俺の番なんだな！」

だというのに、隼人は気合十分にデツキからドローするべく指を伸ばす。その態度には一切の恐れがないように見える。

「なあ隼人。そつちの場はビツグ・コアラのみ。手札もたった一枚。相手の方がフィールドだけで見たら思いっきり優勢だ。それなのに怖くないのか？」

「怖くない訳じゃないんだな。でも」

そこで隼人は少しだけ考え、俺に向かって力強く腕をあげて見せる。

「遊児が宣言通り俺をサポートしてモンスターを守ってくれた。なら俺に出来ることは、気合を入れてガンガン攻めることだけなんだな！」

……俺の相方が予想以上に頼もしくて嬉しい限りだ。

タツグデュエル 遊児・隼人对十代・翔 その四

遊児・隼人 LP4500

十代・翔 LP2300

翔 スチームジャイロイド ドリルロイド 伏せ0 手札1

隼人 ビッグ・コアラ 伏せ0 手札1

十代 サンダー・ジャイアント 伏せ2 手札0

遊児 絶望の騎士 エンサイクロペディア 伏せ0 手札1

ビッグ・コアラ ATK3200↓2700

隼人のターンになったことで、ビッグ・コアラの攻撃力は元に戻る。だがそれはあまり問題じゃなさそうだな。

「行くぞー！ 俺のターン。ドローク！ 俺は魔法カード『融合』を発動！」

隼人はドロークしたカードを確認すると、そのまま一気に押し切るべく行動を始める。

この状況で融合召喚を行うとすれば出す奴は決まっているな。

「俺はビッグ・コアラと、手札のデス・カンガルーを融合！ 『マスター・オブ・OZ』を融合召喚するんだな！」

マスター・オブ・OZ ATK4200

場の巨大なコアラと手札のボクサーチックなカンガルーを融合して呼び出されたのは、以前父親との一戦の前に十代から託された攻撃力4200の強力モンスター。

先のデス・カンガルーと合わせて、十代・翔との絆を象徴するカードでもある。

「このカードは……」

「ああ。そうなんだな翔。燻ってた俺がここまで来られたのも、全部お前達のおかげなんだな。だからこそ、これまでの感謝を込めてこのカードで決めるんだな！ 俺はマスター・オブ・OZでサンダー・ジャイアントに攻撃」

オーストラリアの覇者が雷の巨人に突進する。そして、

「そこで俺は絶望の騎士の効果発動！ もう効果は言わなくても分かっているよな？ 対象は当然マスター・オブ・OZ」

その瞬間、絶望の騎士から放たれた剣の加護が、マスター・オブ・OZを強化する。

マスター・オブ・OZ ATK4200↓4700

おまけに1度だけ破壊耐性も付いているので、仮に十代がミラーフォースか何か伏せ

ていたとしても防ぐことが出来る。

そしてサンダー・ジャイアントの攻撃力は2400。これが通ればダメージは十代達のLP2300をピッタリ削り切る。俺達の勝ちだ。

「行けえ隼人！ これで決めろっ！」

「うおおおっ！ エアーズ・ロッキーフ！」

マスター・オブ・OZの必殺の右ストレートがサンダー・ジャイアントの目前に迫り……そのまま見えない何かに動きを止められた。これはっ!?

「俺は罠カード『攻撃の無力化』を発動していたのさ。攻撃宣言時に絶望の騎士の効果と同時にな。……悪いけど、こっちも弟分の前で簡単にやられるわけにはいかないんでね」

「アニキ！ 良かった！」

十代が軽く冷や汗を拭いながらニヤリと笑い、翔がほっと安堵の息を漏らす。やはり原作主人公。ここまで来てまだまだ粘るか。

「俺はこれでターンエンドなんだな。……ゴメンな遊児。決めきれなかったんだな」

「隼人。最後の最後でロマンに走ったろ？ 今の攻撃はドリルロイドに攻撃すればより確実だったろうに、俺のサポートも見越してわざわざLPピッタリのサンダー・ジャイアントの方に。向こうが攻撃力を増減するカードとかだったら少し危なかったぞ！」

「それも含めてゴメンなんだな。でも……こうして防がれたけど、なんか嬉しいって感じなんだな」

隼人は謝りながら、それでいてどこか楽しげに言う。その気持ちは分からないでもない。俺達は今、思いつきりデュエルを楽しんでいる。できるならもつと戦っていたいとも。

「十代っ！ 翔っ！ 一つ聞くけどな、そつちは今デュエルを楽しんでるか？」

「おうっ！ もちろんだぜ！ こんなワクワクするデュエルは久しぶりだ。なあ翔？」

「えっ!? ……そうだね。僕も、多分楽しいって思ってる」

俺が声をかけると、二人は思い思いの反応を返す。十代は当然として、翔も負けるかもという不安はあるけど確実に楽しいという気持ちもあるみたいだ。

闇のデュエルだのなんだのという物騒な物じゃなく、純粹にゲームとして楽しむ戦い。やはりデュエルはこうじゃないと！

「こんな楽しいデュエルだが、そろそろ終わりに近づいてきたみたいだ。さつきは決めきれなかったけど次で決める！」

「それはどうかな？ デュエルつてのはLPが1でも残っている限りまだ分からないんだぜ！」

隼人の場にはマスター・オブ・OZが居る。そして俺の場には、自分以外のモンスター

の攻撃力を上げて破壊から守る絶望の騎士が控えている。

対して十代の場にはサンダー・ジャイアントと伏せカードが1枚。翔の場には攻撃力4400のスチームジャイロイドとドリルロイド。

互いの手札もほぼ底をついた状況。だが、次の十代のターンを凌げれば、絶望の騎士のPEカウンターを使つて一気にモンスターを展開、手札の貪欲の王を召喚してさらにプレッシャーをかけられる。ドロークカードによつてはそのまま決められるかもしれない。

つまり次の十代の行動が、このデュエルの勝敗を大きく左右する。

そして、運命の十代のターン。

「俺のターン……ドローク!! 俺は魔法カード『強欲な壺』を発動! カードを2枚ドロークし、このカードを破壊する」

このタイミングで強欲な壺?! 流石十代。ギリギリで厄介なカードを引いてきたな。……あと引いた後壺が破壊されるのは確か古いテキストだったかな。アニメ版だとそつちが優先されるらしい。

「……翔。お前のモンスターを使わせてもらうぜ!」

「うん！ やつちやえアニキ！」

「俺は翔の場のスチームジャイロイドとドリルロイドを生け贄に、E・H・E・R・Oエツジマンを攻撃表示で召喚するぜ！」

エツジマン ATK2600

十代の場に、黄金に輝く全身に鋭い刃を纏ったヒーローが出現する。だが、

「どういふつもりなんだな？ エツジマンの攻撃力は2600。今生け贄にしたスチームジャイロイドより攻撃力は低いんだな。なのになんでわざわざ」

十代の顔を見れば、何か仕掛けてこようとしているのは分かる。しかしエツジマンだけじゃマスター・オブ・OZどころか絶望の騎士も突破は出来……いや待てよ！ エツジマン？

俺は十代の場の伏せカードを見る。デュエル開始からずっと伏せられたままだったあのカード。ずっと使わないから温存しているのかと思っていたが、もしそれが条件が満たされていないから使えなかっただけだったら？

「俺は魔法カード『受け継がれる力』を発動！ サンダー・ジャイアントを墓地に送り、その攻撃力をエツジマンに加える！」

エツジマン ATK2600↓5000

「攻撃力5000っ!？」

エッジマンがサンダー・ジャイアントの雷光を身に纏い、より輝きを強くする。……これはマズイな。

「行くぜ！ エッジマンで、絶望の騎士を攻撃！ パワー・エッジ・アタック！」

「ぐっ!? 絶望の騎士は誰かを守ることは出来ても、自分自身を守ることは出来ない。だが、それでも効果は使わせてもらう！ マスター・オブ・OZの攻撃力をアップし、破壊耐性を付ける」

マスター・オブ・OZ ATK4200↓4700

加護を与えた後、剣を飛ばして絶望の騎士も迎撃するものの、エッジマンもまた全身が刃。飛来する剣をもともせず、そのまま絶望の騎士をすれ違いざまに切り裂いた。

絶望の騎士は黒い涙を流しながら、軽く天を仰ぎ見る様に消滅する。……なんか演出が他のより凝ってるのは気のせいだろうか？

「エッジマンには貫通効果がある。守備力を超えた分の戦闘ダメージを受けてもらうぜ」

遊兎・隼人 LP4500↓2100

「……だけど、もうこれで十代の場に攻撃できるモンスターは居ない。翔の場もがら空きになったし、次のターン遊兎がモンスターを出せばまだ勝負は分からないんだな！」

隼人が俺を鼓舞する様に言う。だが、もし俺の読みが正しければ……。

「俺はこれでターン終了だ。この瞬間エッジマンの攻撃力は元に戻る」

エッジマン ATK5000↓2600

「そして俺のターン。この時絶望の騎士の加護が消え……マスター・オブ・OZは破壊可能になる」

「そう。俺はその瞬間を待っていたんだ！ 罨カード発動！ 『エッジハンマー』っ！」

何でわざわざ攻撃力の劣るエッジマンを召喚したのか。答えは至極簡単。エッジマンじゃないと使えないカードがあつたからだ。

「エッジハンマーは、エッジマンを生け贄に捧げることで発動できる罨カード。相手の場のモンスターを破壊する。対象にするのはマスター・オブ・OZ！」

「ま、マスター・オブ・OZがっ!？」

纏った雷光は失われたが、代わりに黄金のハンマーを握りしめたエッジマンが捨て身の突撃を仕掛けてマスター・オブ・OZを破壊する。そして、

「その後、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える」
「うわああっ!？」

エッジマンの持っていたハンマーが、持ち主が居なくなつてもなお回転しながら俺達に向かって飛んできて、そのまま衝撃と共に俺達のLPを削り切った。

遊児・隼人 LP2100↓0

デュエル終了。十代・翔WIN！

「……長く激しい戦いでしたが、遂に決着ですっ！ 購買部主催タッグデュエル大会。優勝は、遊城十代君と丸藤翔君のペアですっ！」

「うおおおっ!!」

デュエルが終わり、セイコさんの締めと共に、成り行きを固唾をのんで見守っていた観客達が一斉に歓声を上げる。それだけの激闘だったのだから当然だな。むしろ良くこんなノリの良い奴らが試合中に静かにしていたもんだ。

「ガツチャっ！ すっつげえ楽しいデュエルだったぜ！ 遊児！ 隼人！」

「ああ。こつちも久々に燃えるデュエルだった」

「こつちもなんだな！ 負けたのは少し悔しいけど、それでも力を振り絞って戦えたんだな！」

「僕もだよ！ このデュエルで、パワー・ボンドの使い方が少しは分かったような気がする」

俺達は互いの健闘を讃え合う。互いに全力で戦った後は、中々に清々しい気分になるもんだ。

「今のデュエル凄かったぜ！」

「お前からホントにオシリスレッドかよ!? この調子ならライイエラーに上がれんじやないの?」

「幻想体なんて見たことねえ。金なら出すから俺に譲ってくれっ！」

「おい。デュエルしろよ！」

観客達から思い思いにそんな賛辞（後半はなんか違う気がするが）を受けながら、俺達はデュエルスペースから下りてトメさんの所に向かう。優勝者と上位入賞者（この大会では準優勝まで）には賞品が送られるのだ。

「おめでどうねあんた達。はいっ！ このコードを各自のタブレットに入力すれば、それぞれDPが入るからね」

「ありがとうございます！ トメさん！」

俺個人としてはあまり使わないが、有って困るような物でもない。ありがたく賞品のDPを頂いておく。

「うわあ！ どうしようアニキ。何に使おうか？」

「ここはやっぱり新作パックに突っ込もうぜ！ 何が出るか楽しみじゃねえか！」

「俺は……ひとまず貯めておくんだな！」

皆それぞれ使い道を考えているようで結構な話だ。俺も使い道が思いつくまでは貯

金かな。……つと、忘れる所だった。

「それで十代、翔。明日の制裁タッグデュエルに向けて経験はしっかり積めたのか？」

「……多分だけどね。これなら少しは緊張せずに済みそうだよ」

「おう！ ばつちりだぜ！」

さっきの動きを見ているからあまり心配はないが、肝心の目的が出来てなかったらシャレにならないからな。これで一安心だ。

「よし。じゃああとは明日に備えてしっかり休むだけだな。早いとこ寮に帰ろう」

「あつ！ ちよつと待って遊児！ ……見ろよ周りを」

十代の言葉に周囲を見回すと……なんとさつきまで観客だった奴らが手に手にデュッキを持って俺達を取り囲んでいる。

「どうやら皆、今の俺達のデュエルを見て火が付いちまったみたいだぜ」

「うわあ……どうするのアニキ!? この状況？」

翔は流石にこの人数に囲まれると怖いのか十代の後ろに隠れる。隼人も軽く後退り。俺も一応身構えてみるが、これはどうしたもんか。

そんな中、翔が十代に状況打開の策を訊ねると、十代は俺に任せるとばかりに胸を張る。何か手があるのか十代！

「決まってるだろ……皆まとめてデュエルだ！」

えくっ!? 結局力技かよっ!? 相手は少なくとも20人は居るぞ。さつき予選で戦った奴も何人が居るじやないか。お前らまたやるのかっ!

「はあ。……分かった。やるよやりますよ。それでもしないと収まらないって言うなら受けて立つよまったくもう」

俺も仕方なく一歩前に出てデッキを構える。流石にこれだけの人数はソリッドビジョンでやるだけのスペースはない。テールデュエルになるな。

「そうこなくっちゃ! 翔と隼人はどうする? 疲れたなら休んでるか?」

「うん。ちよつと休んでる。少ししたら僕もまた戦うから」

「俺も少し休憩なんだな。というか、今あれだけデュエルしてまだ戦える十代と遊児が普通じゃないんだな」

俺をこのデュエル馬鹿と同じカテゴリに加えないでくれるか隼人! 俺だって結構疲れてるっての。……ただな、

「正直な話、デュエルが楽しかったのとはまた別に、やっぱり負けて悔しいってのも確かにあるんだよ。なので……丁度憂さ晴らしをしたかったところだこの野郎っ! どいつもこいつもかかってこいやっ!」

こんなもの、デーイとのチュートリアルデュエル百連戦に比べればどうってことはないっ!

「おっしやく！ 行くぜ遊児っ！」

「おうとも！ 先に倒れるんじゃないぞ十代！」

俺と十代は、購買部大会第二ラウンドへ突入した。

翌日。

「何でこんな時に限って皆爆睡してんだよっ！」

「仕方ないだろうっ！ 結局昨日タツグの次はソロのデュエル大会になるくらい盛り上がった、そのまま寮に戻って倒れるように寝たんだから！」

「はあっ。はあっ。……とにかく急いで！ このままじゃ不戦敗になっちゃうっすっ！」

「い、急ぐんだなあ！」

俺達は最大の敵（遅刻寸前）と直面していた。……ちつくしよう！ だから早く帰ろうって言ったんだ！ 次にこういう事があつたら絶対余裕もって休んでやつからなく！

ちなみに何とか時間ギリギリで間に合い、無印のマンガで見たことあるようなカン
フリー兄弟を無事に十代と翔が撃破して退学の話は無しになった。

まあ十代が代わりにレポートを大量に提出する羽目になったのは些細なことだな。
うん。

ランク差別と憤る俺

制裁タッグデュエルからしばらく経ったある日。

「あらっ!? アナタは確か……久城君だったかしら?」

「どうも。天上院さん。この前の特待生寮以来かな?」

たまには十代達とではなく一人で昼休みに購買に行くと、そこで偶然明日香にバッタリ出くわした。向こうもいつもの取り巻き（ジユンコともえだったか?）が居ない。

「私達だっていつも一緒に居る訳じゃないのよ。アナタだってそうでしょ?」

明日香が俺の思っていることに気づいたように言う。考えが読まれたかな。

「まあね。たまには一人で居たい時もある。……丁度良いか。一つ聞くけど今空いてるか? 一度じっくり話がしたいと思ってたんだ」

「アナタと? ……そうね。たまには良いかもね」

明日香は少し思案して了承した。よし。情報源ゲット!

「OK。じゃあ場所を変えようか。……とこでもう食事はしたか? してないなら話代として奢らせてもらうよ」

「昼食はまだよ。奢ってくれるのは良いけど……フツ。私の話代は安くないわよー」
「なあに。一食ぐらいなら多分なんとかなるさ。幸い懐は少々暖かいんでね」

この前手に入れたDPもあるし、言ってもあくまで食事だ。明日香がそこまで大食いなんてことはないだろうし、無茶苦茶値段が張るといふ事もないだろう。俺は明日香を伴って購買部のイトインスペースに向かった。

食事（明日香の頼んだメニューはそこまで高い物ではなかったが、デザートにケーキなんかの甘いものをたっぷり注文された）を終え、食後のコーヒーで一服しながら軽く雑談。

何故か微妙に周囲から嫉妬の視線が飛んできたが、明日香は慣れっこなのかあまり気にしない。流石マンガ版でミス・アカデミアに選ばれただけのことはある。……俺は少しダメージが来たんだだけだな。

それと少し話した程度だが、どうやら明日香は十代に興味を持っているようだった。ヒロイン枠という事で、アニメ版では十代とそういう関係になつていくのだろうか？ただあのデュエル馬鹿が恋愛関係に傾くとはとても思えないのだが。

そんなこんなでコーヒーも残り僅かになった頃、いよいよ話の本題に入ることにし

た。

正直言って聞きたいことは多々有る。カイザーのこと、吹雪のこと、マンガ版とは違っている、これからの展開に参考になるかもしれない知識は大いに越したことはない。

だけど、俺が最初に訊ねたのはそのどちらのことでもなかった。

「えっ!? 万丈目君のこと?」

「ああ。同じオベリスクブルーの生徒ってことで何か知らないか?」

万丈目準。オベリスクブルー所属の1年生。性格はクールかつ孤高な男。

マンガ版では、子供の頃に精霊の宿るカード『光と闇の竜』を手に入れたことがきっかけでカードを始め、『光と闇の竜』と共に数々のジュニア大会に出場して優勝している。

その後その実力と経歴から、アカデミアで高校入学では異例のオベリスクブルーに配属。しかし万丈目財閥の出身であることから金の力だの家柄のおかげだのと陰口をたたかれ、敢えて『光と闇の竜』を封印して自分自身の力を証明しようとする。

その後十代に敗北するが、再び『光と闇の竜』と共に戦う事を決めて十代と再戦。僅差であるが十代に勝利している。

最終決戦でも十代とタッグを組み、ラスボスであるトラゴエディアと戦うなど、ライ

バルでありながらも一人の主人公とも言える活躍をしてみせた。

実を言うとマンガ版において十代と同じくらい……部分部分においては十代よりも好きなキャラクターだ。……だというのに。

「この前十代と翔の制裁タッグデュエルを見に行った時、万丈目の姿を見かけたんだけどな。その……何と言うか」

「荒れていた……という事かしら？」

明日香の言葉に俺は静かに頷く。デュエルをしていた十代を見る目。あれはどこか憎悪とか恨みとかそういうものを感じさせるものだった。

この世界がマンガ版ではなくアニメ版だという事は分かっていたが、まさかここまで変わっていたとは知らなかった。少なくともマンガ版ではあんな描写は一度たりともなかったからな。

月一テスト以来姿を見ていなかったが、あれだけの男が本編に、つまりは十代に関係しないはずがないと思いきちちからの接触は避けていた。いずれは向こうから接触してくると。……それが仇になったかもしれない。

「そうね。万丈目君は前からあまり性格の良い生徒とは言えなかったけど、ここ最近は特に酷いかもしれないわ。……切っ掛けになったのは、おそらく十代とのデュエル」

あの時かっ！ マンガでは十代に敗北したことから『光と闇の竜』を再び手に取る決

心をしたが、どうやらアニメ版では悪い方向に話が進んだみたいだ。

「それにこのところクロノス先生とも折り合いが悪いって話だし、追い詰められているのかもしれないわね」

クロノス先生か。マンガでもそうだったが、あの人結構エリート志向が強い所があるからな。その上今のこの学校はランクが全てという風潮がマンガ版より強い。

それなのに、エリートであるオベリスクブルーがランクが最底辺であるオシリスレツドの生徒に負けたとあっては、万丈目も多少肩身の狭いことになっているのかもしれない。それも原因かな。

「そっか。……ありがとう。参考になった」

「そう。なら良かったわ」

丁度そこで昼休み終わり間近のチャイムが鳴った。……俺は残ったコーヒーをグイッと飲み干し、そのままゆっくりと席を立つ。

「今日は色々と聞けたし楽しかったよ。また話そうな！ まあ次は流石に奢りかどうかは分からないが」

「……ねえ。一つ聞かせて」

「うんっ!? なんだい?」

次の授業に向かおうとする時、後ろから明日香に呼び止められた。

「アナタと万丈目君って面識は無いつて話よね？ それなのに、どうしてそこまで気にするの？」

そう言えばどうしてだろうな？ 確かに主要キャラの一人なので、関わっておけば何かと良さそうというのはある。しかしそれを言うなら、目の前の明日香やカイザーに声をかけても良いはずだ。

俺は少し考えて、自分なりの結論を出す。

「……そうだな。俺と万丈目に直接の面識は無い。だけど、俺はアイツが実は凄い奴だと知っている。今はどこか歪んでいるかもしれないけど、いずれ必ず立ち直る。そう信じているから……かな」

マンガ版とアニメ版が違うっていうのはよく分かっている。それでも、その人物の本質が違うっていうのはそうそうない筈だ。

ならマンガ版で見たあの面も確かに有るはずだ。真つすぐ『光と闇の竜』と共に戦い抜いたあのプライドと輝きも。

「そう。……アナタって少し変わってるわね」

「一応誉め言葉として受け取っておくよ。じゃあな天上院さん」

俺は軽く明日香に手を振りながら、次の授業に向かったのだ。えくと、次は体育だったかな？

ふいふ。まだ身体が重い。俺は講堂の机に突っ伏していた。先ほどのレッド・イエロー合同の野球の試合中に、久々に思いつき身体を動かしたので心地よい疲労が残っている。

「しかし十代め。最後の最後で三沢との勝負を選んで逆転負けとは」

レッドチームの投手を務めた十代だったが、なんと最終回ツーアウトからわざと連続でフォアボールをするという暴挙に出る。それもそうしないと三沢と当たらないからという無茶苦茶な理由で。

そして見事に三沢に逆転満塁サヨナラホームランをかつ飛ばされてゲームセットである。勝負自体は構わないが、せめて勝ってほしかった。それでも俺は負けず嫌いなんだ。

おまけにホームランボールが運悪くグラウンド近くを歩いていたクロノス先生に直撃。おかげで治療のため授業開始が少し遅れている。十代と翔は何やら三沢に連れられてライイエローの寮に行ってしまったし、色々と予定が狂ってしまったぞ。

「なんだとっ!? 席替えっ!? しかも……あんな隅っこに?」

何やら上の方の席が騒がしい。何があつたかと視線をあげてみれば……そこにはな

んと丁度気にしていた万丈目の姿が！

どうやら自身の席が勝手に変更されていたようだ。おまけに待遇もやや悪くなっていたようで、同じくブルーの生徒が何やらひそひそ話している。

「クロノス教諭。これはどういう事です？ ボクがどうしてあんな席につ！」

「それはシニョールがオシリスレッドの生徒に負けたからデウス。そしてそれだけではありません。シニョールは明日、ライイエローの三沢大地と、寮の入れ替えを賭けたデュエルをしなければなりません」

万丈目がようやく来たクロノス先生に確認を取るが、クロノス先生はすげなくそう告げる。

そんな無茶苦茶な。いくらなんでも一度負けただけだろっ！ それに負けこそしたが、デュエルの内容自体は見事なものだった。

出すのが難しいVWXYZを見事召喚し、終始場を制圧し続けていた。あれは十代だから逆転できたのであって、俺が同じ状況になったら逆転できるかどうか分からない。むしろ出来る奴の方がおそらく少ない。

それに寮の入れ替えというのなら、オベリスクブルーの生徒でも成績の悪い生徒からのはず。万丈目のどこが成績が悪いと言うのかっ！ テストの結果が勝ち負けだけで決まるなら、とつくにもつと多くの者が変更になっているはずだ。特にレッド寮の生徒

とか。十代とかつ！

「それじゃあ、負ければ俺はラーイエローに格下げっ!?」

「さあさあ早く席に着くノ〜ネ自分の席に」

憤慨する万丈目に、クロノス先生は無慈悲にも手をパンパンと叩いて急かす。この場合の自分の席が席替え後の席なのは明白だ。

その様子を見て周囲の生徒、オベリスクブルーどころかラーイエロー、オシリスレッドの生徒の一部までもがクスクスと嗤う。

「……………くっ!」

万丈目はその空気にいたたまれなくなつたのか、席には座らずそのまま講堂を走り去つてしまう。だというのに、嘲笑うような声は小さくもまだ止むことが無い。

……………今なんとなく分かつたような気がする。万丈目が変わつたのは負けが直接の原因じゃない。根本にあるのはこの学園の行き過ぎたランク至上主義の風潮だ。

「……………ああもうっ! 先生っ! ちよつと用事が出来ましたので早退しますっ!」
「なっ! どころ行くノ〜ネその……………なんだ。オシリスレッドならどうでも良いノ〜ネ。ご自由にどうぞナノ〜ネ」

クロノス先生は手をパタパタと振つて授業の準備を始める。このオシリスレッドなぞ生徒ではないと言わんばかりの態度にムカツとくるが、それはひとまず呑み込んで俺

は万丈目を追って走り出した。

原作の流れなんかはよく分からないが、これはどう考えてもマズイ流れだ。ただでさえ精神的にごちやごちやしている今の万丈目に追い打ちを掛けたら、一体どんなことになるか分かったもんじゃない。

何をどうすれば良いかは具体的によく分からないが、こういう時は一人にしないことが肝要だ。待てて万丈目！ 話くらいなら聞くからさっ！

ランク入れ替え戦前夜 三沢との対談

その後、結局万丈目を追ったものの捕まえることは出来なかった。もしやブルー寮に戻ったかと向かってみたが、ここはオシリスレッドなんかの来るところじゃないとばかりに門前払いにされた。おのれこんな所にまでランク差別がつ!

けれど何とか食い下がって万丈目のことを聞いたところ、ちゃんと寮には戻っているようだった。それなら一人つてことはないだろうし、一応取り巻きの奴らだつていたはずだ。ひとまずは安心と考えてブルー寮を離れる。

しかしこれからどうしたもんか。今さら授業に戻るのは時間が半端だし、何より非常に気分が悪い。

ちゃんとした理由があるならまだしも、理不尽な理由かつ大勢に一推しの人物を貶されたのだ。少し時間をおいてからでないと授業に出る気にはなれない。

幸い一度や二度休んだ所で大丈夫なように出席している。あとはクロノス先生の心証の問題だが、向こうがオシリスレッドなど眼中にないのはこういう時は都合だ。さらに言えば良くも悪くも十代の方が目立つからな。俺のことなどすぐに忘れるだろう。

「……そうだ！ イエロー寮に行ってみるか！」

十代達が三沢に呼ばれて行っているはずだし、時間潰しにはなるだろう。イエロー寮なら流石にブルー寮のような門前払いとまではいかないだろうしな。

そうと決まれば善は急げ。早速イエロー寮に向かい、三沢の部屋をイエロー寮長の……なんてったかなあの人。やや影が薄いけどどこかカレーの香りがする……そうだ、榊山先生だ！ その榊山先生に教えてもらい、早速乗り込んでいく。その結果、

「……………何やってんだお前達は？」

「ナハハ。いやその……三沢の部屋のビッグバンの手伝いをさ」

「そ、そう。ビッグバン」

部屋の住人である三沢を含め、身体中壁の塗り替えビッグバンに使うペンキ塗れになった十代と翔を目の当たりにした。……こっちがシリアスモードだったのに楽しそうだなお前はっ!!

「ははっ！ 悪いな三沢！ 罰のはずなのに、ご馳走にまでなっちまって」

「凄いご馳走つすよ！」

「なんだか悪いな。後から来た俺までこんな」

ペンキ塗れの十代達を手伝って、数式だらけの壁の塗り替えをした後、俺達は三沢にイエロー寮の食事をご馳走になっていた。レッド寮より断然種類も多く量も豊富だ。これだけでもランクの差が如実に表れている。

「ジャンジャン食ってくれ！いくらでもご馳走するぜ」

そう言いながら三沢が用意したのは、大きな大きなロブスターの蒸し焼き。こんなもの誕生日にも出してもらったことねえと素直に大喜びする十代。……確かにロブスター丸々一匹とは珍しい。

「そう言えば、さつきクロノス教諭と何話してたの？」

「ああ。寮の入れ替えテストのことさ」

翔の何気ない一言に出した三沢の答えに、俺はちよつと気になってフォークを動かす手を止める。

「三沢お前……ついにオベリスクブルーに昇格か！入試の時だつてお前、抜群に強かったもんな。オベリスクブルーに入るのは当然だぜ！良かったな三沢！」

「ま、まあな」

良かった良かったと喜びながら再び食事を続ける十代達。二人は友人の昇級を心から喜んでいて。さつきの奴らとの違いに、少しだけささくれていた心が落ち着いていく。

だが、何故か三沢は少しだけ浮かない顔だった。……待てよ。入れ替えてことは。「なあ三沢君。入れ替えてことは当然相手はブルーの誰かなんだろ？　もう相手は分かっているのか？」

「ああ。万丈目だよ。オベリスクブルー一年。万丈目準」

「万丈目っ!?! あいつとデュエルすんのかよ!」

「やっぱりか! 嫌な予感が的中した。十代も以前戦った相手という事でしつかり反応している。」

「あいつは強いぜ。そう言えば最後に俺がデュエルしたのはこの前の月一テストの時だったな。それと入れ替えて何か関係あんなのかな」

「それは分からない。だが、実力だけで言ったら万丈目はかなり上位の生徒だ。……それなのに入れ替え戦というのがどうにも不思議だな」

「どうしたものか。このままだと明日三沢対万丈目の入れ替え戦が始まる。」

マンガ版でも二人は戦っているが、その時はギリギリ万丈目が読み合いで勝って勝利を収めた。しかし今の精神が乱れまくった万丈目では正直勝てるか微妙だ。

「まあ三沢君なら大丈夫だよ!　そうだよねアニキ!」

「う〜んどうだろうな。まつ!　デュエルは時の運ってな!　明日に備えてまずは飯だ!　三沢も持ってきてばかりじゃなくて自分でも食べるよ!」

「……そうだな。何事も身体が資本だからな」

十代に促され、三沢も十代達に混ざって食事を始める。……三沢はこれなら問題ないだろう。ただ真つすぐにデュエルに臨むはずだ。

あとは万丈目の状態次第か。入れ替え戦は避けられないにしても、どうせなら万全の態勢で臨んで欲しい。アニメ版の流れは知らないが、結果はどうあれどうせなら良いデュエルが見たいからな。

「遊兎食べないのか？ なら俺が貰っちゃうぜ！」

「なっ!? しつかり食べるっての！ 折角のご馳走をみすみす手放せるかいっ！」

三沢の言う通り身体は資本だ。俺も食べられる時に食べないと。俺の分も狙って目を光らせる十代を牽制しながら、俺は猛然と目の前のロボスターに挑みかかった。

「あく食った食った！ もう腹いっぱいだ！」

「まったく。いくらお代わり無料だからって食べ過ぎつすよアニキ。……久城君も」

「いやあ。今日を逃すと食べられないんじゃないかと思つてつい食い溜めをな。おかげで腹が苦しい。……ありがとうな三沢君」

服の上からでも分かるほどに膨れた腹をさすりながら、俺は満足げに三沢に礼を言

う。

「構わないって。それにこちらで一晩泊めてもらう訳だしな。お礼の先渡しという奴だよ」

三沢は何でもなしのように笑う。……そう。夕飯も終わり暗くなってきた頃、俺達は三沢を連れてオシリスレッド寮に向かっていた。

壁の塗り替えで今日は三沢の部屋を使えない。なので話し合いの結果、一晩三沢を部屋に泊めるという流れになったのだ。

現在一人だけの俺の部屋に止めるといふ流れも考えていたのだが、三沢本人がたまには部屋で雑魚寝というのをやってみたいという希望もあつて十代達の部屋となった。隼人にまだ了承を取っていないけど大丈夫だろうか？

まあダメという事になったら俺の部屋に移れば良いし、ディー達も一日くらいなら大人しくしてくれるだろう。……見えないのを良いことにイタズラする可能性は否めないが。

そうしてレッド寮に向けて、話しながらぶらぶらと歩いていた時だった。

『……ちゃん。お兄ちゃん』

急にどこからか声が聞こえた。きよろきよろと辺りを見渡すと、傍らに半透明になったレティシアの姿が。精霊化状態なので他の人（十代を除く）には見えていないようだ。

「レティシアか。どうした？」

『あのね。……近くから、とつっても笑顔じゃない人の気配がするの』

「笑顔じゃない人？」

一応声を潜めてはいるが、傍から見たら突然何も無い所で独り言を始めたのだから周りはさぞ驚くだろう。言った後で気がついてハッとするが、

「あく。遊児は癖で考えをまとめる時独り言を言うんだ。あんまり気にしないでやってくれよ」

レティシアが見えている十代は、咄嗟に俺へのフォローを入れる。……まああんまりフォローにはなっていない気がするけどな。流石にこれは疑われる気が、

「そう言えば時々考え事してるもんね。了解っす！」

「俺もよくやるなそれ。つい考えついた数式をそこらにメモしてしまったりとかな」

普通に納得するんかいっ！ お前達それで良いのか？ あと十代のどうだってドヤ顔が何とも言えない。

「こほん。……だけどレティシア。その笑顔じゃない人がどこにいるのか分かるのか？」

『大丈夫！ 私は色んな術が使えるんだよ！ だからお兄ちゃん。……その人を助けてあげて欲しいの。暗い顔なんかより、笑っていた方が良いに決まってるもの！』

レティシアがその大きな瞳を潤ませて上目遣いでこちらを見つめる。……参ったなもう。適当に何か理由を付けて断るつもりだったけど、こんな顔をされたら断れないじゃないか。

「……分かったよ。俺にどこまで出来るかは分からないけど、一応やってみよう。案内を頼めるかい？」

『うん！ こつちだよ！』

レティシアはぱあつと花が咲くように笑い、どこかに向かつてその足で駆け出す。精霊なんだから飛んでいけば良いというのは野暮だろう。飛べない俺が追ってこられるように気を遣ったのかもしれないな。……さてと、

「……あく。皆、俺は野暮用というか、腹ごなしに夜の散歩をしてるので先に行つてくれ。ちよつとそこらをぶらつとしたら後から帰るから」

「えくつ!? それは良いけどもう結構暗いよ。危なくない?」

「大丈夫大丈夫! すぐ戻るし、そこまで遠くは行かないさ」

翔が心配そうに言うが、最悪罪善さんに出てもらえば明かりはばつちりだ。……目立ち過ぎて怪談にならないだけで。

「遊児。……あとでさっきの子の話も聞かせろよ」

「分かつてるつて。あとでちゃんと説明する。じゃあな!」

十代にすっかり約束すると、俺は急いでレティシアの向かった方へ走り出した。

『早く早く!』

「分かつてるって。……はあ、はあ。食べたばかりで全力疾走は横っ腹が痛い!」

小さな外見とは裏腹にかなり足の速いレティシアを追って走ること数分。俺は海岸の辺りまで来ていた。近くには船の荷卸に使われる栈橋がある。

カタカタ。カタカタ。

幸いこの辺りは夜はあまり人が来ない。なので罪善さんにやや光量抑え目で実体化してもらっている。ライト代わりにして済まないな。

『結構走ったね久城君。今日の野球でもそうだったけど、地味に体力があつたり?』

「今頃出てきて何言つてんだよデュー。体力なんか嫌でも学校への登下校で付くつての! レティシア。ここで間違いないのか?」

『うん。最初はさつきまでお兄ちゃん達が居た所だったけど、今はこの辺りに居るよ!』

いつの間にかふらりと出てきたデューに呆れながらも、俺はレティシアにその人の居場所を確認する。……最初はさつきまで俺達の居た場所? つまりイエロー寮からこんな人気のない場所に……どういう事だ?

『おやつ？ あれじゃないかなレティシアの言う人は？ ほらっ！ 棧橋の所に』

デーが何かに気づいたように声をあげる。えっ!? どこだどこだ？ 俺はそのまま視線をずらして棧橋の方に目を凝らす。するとそこには、暗くてよく分からないが誰か立っているようだった。

こんな時間にこんな場所で、一体何をやっているのだろうか？ ……まさか身投げっ!? 早まるんじゃないよっ！ 俺は慌ててその人の元へ駆け寄った。

そこで俺が見たのは、今にもカードの束を海に投げ捨てようとする万丈目の姿だった。

ランク入れ替え戦前夜 万丈目に喝を入れるっ！

「ちよつと待ったああっ！」

今にもカードを投げ捨てようとする万丈目に、俺は慌てて叫びながら駆け寄った。

こんな夜に周りには誰も居ないと思つていたのだろう。万丈目は一瞬俺の声を聞いて固まり、その隙にカードを投げようとする手首をがっしりと掴む。

「は、放せっ！」

「誰が放すかつての！ 何だか知らないが、デュエリストがカードを捨てるなんてただ事じゃないだろうがっ！」

『おっ！ 面白くなってきたね！ どっちも頑張つて〜！』

『お兄ちゃんガンバレっ！』

……囃し立てるように周りをウロウロするディーはなんか腹立つが、レテイシアからの応援は素直に元気百倍だ！

そのまま二人で倒れこむように棧橋に転がり、奇襲だったのが功を奏して何とかカードの束をもぎ取ることに成功する。

「……はあ……はあ。何をやるお前っ!」

「……はあ。それはこっちのセリフだ! デュエリストにとってカードは大切なものだろうがっ! ……それをいきなり海に捨てようとなんてしてたら止めるのが当たり前だ」

互いに息を切らしながら睨み合う。……というか、どうやら万丈目にはディー達の姿は見えていないようだ。さつきから視線が俺にしか行っていない。

マンガ版では確か小学生くらいでカードの精霊の『光と闇の竜』が見えたはずなんだが、これもアニメ版とマンガ版の違いだろうか?

「……チツ。俺のカードをどうしようが俺の勝手だ。オシリスレッドの分際で邪魔をするんじゃないっ!」

「お前の? このカードがか?」

ランク云々を言われたことはひとまず置いておいて、顔を歪めてそっぽを向く万丈目を前に、俺はもぎ取ったカード群を軽く手の中で広げて確認する。……なるほど。

「どんな理由があるかは知らないが、確かにどうしても捨てたいって言うなら俺が止める筋合いはない。……だけど、それはこれがお前のカードならの話だ」

俺はカードの束から一枚を抜き出して万丈目に突き付けた。

『ブラッド・ヴォルス』。このカード自体はそれなりに出回っているカードだし、お前が

持つてても何の不思議もない。……だけどこんな数式の書いてあるブラッド・ヴォルスはそうそうないと思うけどな」

そのカードには見覚えのある数式の一部が書いてあった。そう。ついさつき三沢の部屋でビッグバンの時にあつたものの一つと同じだ。

ペンキのこともあつて家具を部屋の外に出してあつたから、うっかりその中に三沢がデッキを入れっぱなしにしたのだろう。それを万丈目が持ち出したというところか。

「俺は三沢と知り合いでね。三沢は時々思いついた数式をそこらにメモしてしまう癖があるんだ。……これ三沢のカードだろ？　なんでそれを捨てようとしてんだ？」

俺の問いかけに、万丈目は顔を俯かせて答えようとしなない。

「……明日の入れ替え戦に勝つためか？」

「くっ！　……どうしてそれを？」

万丈目は苦々しげに俺を睨みつける。……まいった。まさかこんなことをするまで思いつめていたなんてな。

「デッキが無ければ三沢だつて戦えない。だから対戦相手のデッキを捨てて出られないようにしたつてどこか。……それで良いのかよ？」

「うるさいっ！　お前に何が分かるっ！　俺は負けられない。……負けられ、ないんだ」
万丈目はどこか悲痛な感じで叫び、そのままどこか疲れたように崩れ落ちて膝立ちに

なる。

「俺の肩には万丈目一族の未来が掛かっている。兄さん達二人と俺で政界、財界、カードゲーム界のトップに君臨し、万丈目一族で世界を制覇するために。……なのに、なのに今の俺はトップなどではなくて、格下げになりそうだなんて兄さんたちには言えなくて……俺は……俺はっ！」

そこに居たのは、只々家族からの重圧を受け続けた男の姿だった。トップであり続けることを強要され、負けを許されず、遂にはこんなことをやらかした。

カタカタ。カタカタ。

先ほどから罪善さんが光を当てて落ち着かせようとしているが、あまり効き目は出ないようだ。それだけ精神が不安定だとも言える。

そんな奴に俺が出来ることは一つだ。俺はゆっくりと万丈目に近づいていく。黙ったまま俺を敵意むき出しの眼で見据える万丈目。そして、

「なあ。万丈目。……この馬鹿野郎っ！」

パァン!

とりあえず平手打ちをかました。グーだと明日の対戦に響くかもしれないからな。万丈目は頬を押さえながら呆然とした顔でこっちを見る。

「な、何を？」

「何をじゃないっ！ お前がみすみす勝てる勝負を棒に振ろうとしているから活を入れてやったまでだ」

「勝てる、だと？」

そこで肝心のお前が不思議そうな顔をするんじゃないよ万丈目。どんだけメンタルが弱ってんだ。

「あのな。確かに三沢はラーイエローの生え抜きで成績優秀だよ。だけど、それならばルーで上位の万丈目だって決して負けてないだろうが！」

もちろんブルーが無条件でイエローやレッドより強いとは口が裂けても言わない。しかし、それでもエリートが集まりであるブルーの中で上位を張れる。それだけでも万丈目が努力しているとはつきり分かる。

「俺が見たところ万丈目と三沢の実力は伯仲している。ならば後は互いの運と気合の勝負だ。……だってのに、戦う前からこんな小細工をしてちゃ、まともにやったら勝てないと自分の心が負けているって気づけよっ！」

「……っ!？」

万丈目が唇をかみしめる。……やっぱり自分で気付いてなかったか。こういう勝負はメンタルがかなり影響する。いくら実力が伯仲してたって、最初に心が負けてちゃどうしようもない。

「なら、なら俺にどうしろと?」

「簡単だ。……胸を張れよ!」

俺は万丈目に向かって拳を突き出し、そのまま自分の胸をドンと叩く。

「俺はお前が凄いい奴だつて知ってるぜ。相手が誰だろうが、どんな手強くてヤバイ相手だろうが、いつも自信満々に胸を張つてき、俺は強いんだぞつて顔して不敵に笑つてみせる。……それが俺の知つてるお前だよ」

もちろんそれはマンガ版の万丈目の話だ。それを目の前のアニメ版の万丈目に押し付けるのは筋違いかもしれない。だけど、それでも、今のしよぼくれた顔のままよりはマシなはずだ!

俺達の間少しの間沈黙が漂う。万丈目は瞳を閉じ、何か考えているようだった。

「……お前。何故こんなことをする? 三沢と知り合いだと言うなら、俺にそんな忠告などしない方が三沢の勝率が上がるだろうに」

「簡単なことだ。……お前に憧れているからだよ。憧れの人には万全の状態で戦つてほしいと思うのがファンの心意気つて奴だろ!」

万丈目はそれを聞いて啞然とした顔をする。俺そんなに変なことを言つたかな?

「……じゃ、俺はそろそろ行くよ。今からイエロー寮に行くのは面倒だから、これは万丈目が返しておいてくれ」

「ま、待てっ!」

俺はそつと三沢のデッキを万丈目の前に置き、そのまま踵を返して立ち去ろうとする。後ろから万丈目が声をかけてくる。

「……お前、名前は?」

「オシリスレッド1年。久城遊児。……ただのファンだ」

「久城か……フツ。覚えておく」

そう言った万丈目の声は、ほんの少しだけさつきよりマシな感じがした。

『おやおや。あれで良かったのかい? 三沢君のデッキをそのまま渡してしまつて。また最初みたいに海に捨てようとするかもよ?』

寮への帰り道。罪善さんの明かりを頼りに歩く中、ディーがどこからかうような試すような言い方をする。何だそんな事か。

「多分もうそんな事はしないな。さつき罪善さんがまた落ち着かせていたし、それに俺は万丈目を信じてる。……もしそれでもカードを捨てようと思つたのなら、それはその後を受ける罰も万丈目なりに考えた結果だ。それ以上は何も言うつもりは無い」

その場合三沢のカードが無くなったことはすぐにバレるだろうし、一番得をする万丈

目が最重要容疑者だ。倫理委員会とかの追及を受けたらとても逃げ切れるとは思えない。

それに一度はこれで勝てるとしても、不正をしなければ負けるという意識が染みつくので結局は次も同じことの繰り返しになる。

まあ他にも色々言いたいことは有るが、単純に悪いことなのでやってほしくはないな。

『へえ〜！ 結構ドライなんだね君。もつと構うかと思つてた』

「これは単に筋の問題だ。最悪の場合三沢には少し悪いけどな。……まあそうなったらそうなつたで、推しだからこそ次はグーでぶん殴つてでも止めるけどな」

『でも、もうさつききの人は大丈夫だと思うよ！ あの人、少しだけ最後に笑えてたもの！

お願いを聞いてくれてありがとう。お兄ちゃん！』

レティシアがニコツと笑う。……礼を言うのはこちらの方だ。これで少しは万丈目も元気になれば良いんだけどな。

入れ替え戦 万丈目対三沢 彼なりのケジメ

入れ替え戦当日。

「遅いノ〜ネ。シニョール三沢」

「とつくに尻尾を巻いて逃げ出したのかと思ったぜ」

三沢の入れ替え戦に付き添う形となった俺や十代達が会場に着くと、そこには対戦相手である万丈目と立会人のクロノス先生が既に待っていた。

「すみません。ギリギリまでデッキを調整していたら遅くなってしまっ」

三沢の使うデッキは昨日のものではない。しかしそれはデッキが無くなったからではなく、元々あのデッキは調整用のもので三沢本来のデッキは別にあるからだ。

俺も三沢が制服の下のベストに六つも各属性のデッキを仕込んでいたのには驚いた。どれで行くかは万丈目に会ってから決めると、最後まで全てのデッキを調整していたのだから遅れそうになるのは当然だ。

「ふん。お前達も来たのか。まあ良い。そこで黙って見ているがいい。俺様が完膚なきまでに三沢を叩きのめすその瞬間をな」

どうやら万丈目の調子は元に戻ったようだ。自信満々に胸を張って不敵な笑みを浮

かべる様は、まさしく主人公のライバルと言うにふさわしい風格だ。

……まあそれは、今日の朝三沢の調整用デツキが元の場所に戻っていた時点で分かっていたことだけだな。

万丈目は一瞬俺の方をチラリと見て、そのまま何も言わずに三沢の方に向き直る。目の前の相手に集中しているようで結構だ。

「それで三沢君。結局あの六つのデツキのどれで戦うか決まったの？」

「六つのデツキだと？ そんな虚仮脅し。この俺の地獄の炎で焼き尽くしてくれるわ！」

翔が三沢に投げかけた言葉に反応し、自らのデツキを勢いよく掲げる万丈目の瞳は、三沢を自身の立場を奪おうとする恨むべき敵ではなく、純粹に力を競うべき相手として見ていた。

「ふっ。決まった。お前を倒すデツキは……これだっ！ これが虚仮脅しのデツキなのか、すぐに分かるぜ万丈目」

三沢はそう言って制服の前を開くと、ベストからデツキの一つを取り出して自分のデュエルディスクにセットする。こっちも準備万端つてとこか。

「間に合ったようだな」

「そのようね。……万丈目君は昨日の夜のことでもあったから少し不安だったけど、杞憂

だつたみたい」

あとから明日香とカイザーも観客としてやってくる。二人の会話を聞くに、どうやら昨日の万丈目の様子を見ていたらしい。もし俺が止めていなかったら、万丈目はこの二人に止められていたのかもしれない。……余計なことをしたかな？

『いよいよだねえ。ポップコーンでも用意すればよかつたかな？』

「映画見るんじゃないんだから。……良いのかよ？ 十代もそこに居るぞ？」

『大丈夫。ほらっ！ 皆三沢君達に集中しているから。騒がなければ問題ないよ。……ハネクリボーも反応しないギリギリの出力にしているしね』

やや下がったところから見物していると、ディーがそんなお気楽なことを言いながらふよふよと浮いている。他の幻想体達も空気を読んで出るのを控えているというのにまつたく。

『おやつ！ そろそろ始まるみたいだよ！』

ディーの言葉通り、三沢と万丈目はそれぞれ所定の位置に着いた。互いにデュエルディスプレイを展開して油断なく構えている。……すると、急に万丈目が構えを解いた。何かあつたのかな？

「……先に言っておく。この試合、俺は勝てなかつたらこの学園を去る覚悟だ」

「なっ!？」

突如飛び出した万丈目の発言に一同騒然。というか何言ってんだ万丈目はっ!?

「おいこの馬鹿! 自棄でも起こしたのかっ! 負けたってあくまでイエローに落ちるだけなんだぞ。わざわざ学校を辞める必要なんて」

「フツ。別に自棄など起こしていい。……これは俺なりのケジメだ」

一瞬自暴自棄にでもなったかと外から声をかけたが、静かに返す万丈目の声は冷静だった。

「俺はこの学園のトップに上り詰める。そのためには相手が三沢だろうが、十代だろうが……そこに居るカイザー亮だろうが、俺は負けるつもりは無い」

万丈目は自分の越えるべき相手、現学園最強のカイザーを指差す。カイザーはそれを無礼だと怒ることもなく、強者としての余裕でそれを迎える。

「だというのに、こんな所で負けるようであればトップになどなれはしない。……心配するな。俺は負けん! 特に俺のファンの前ではな。……待たせたな三沢」

「ほう。俺はカイザーの前の障害物扱いか? そう簡単に勝てると思うなよ!」

再び気迫タツプりに構え直す万丈目。三沢も今の言葉でむしろ手加減などする気もないとばかりに闘志が漲っている。

「おい遊児。この戦いどう見る?」

「……さあな。ただ、今の万丈目は確実に昨日より強いぞ」

十代の問いに、俺が今言えるだけのことを返す。この戦い、どっちが勝つてもおかしくない。

「ではこれより、シニョール三沢とシニョール万丈目によるデュエルを始めるノ〜ネ！」
「行くぞ三沢っ！」

「来いっ！ 万丈目っ！」

「デュエルっ!!」

三沢対万丈目の戦いは熾烈を極めた。

万丈目が自身の受けたダメージを相手にも与える地獄戦士ヘルソルジャーを軸に、効果ダメージでじわじわと三沢にダメージを蓄積させていくのに対し、三沢はどうやら水デツキを選んだらしくハイドロゲドンやオキシゲドンといったモンスターを展開して迎え撃つ。

そしてデュエルもいよいよ終盤。互いのLPが1000を切った頃、一気に勝負を決めるべく先に動いたのは万丈目の方だった。

「俺のターン。……俺はカードを1枚伏せ、攻撃力2000の地獄戦士と残った手札全

てを生け贄に、『火炎魔人ヘル・バーナー』を召喚する！ フハハハハッ！

万丈目が高笑いと共に多大なコストを払って呼び出したのは、攻撃力2800の上級モンスター。さらに相手モンスターの数だけ攻撃力を上げるという効果により、攻撃力3400まで跳ね上がる。

ヘル・バーナーか。だけどあれって確か名前は炎獄魔人じゃなかったっけ？ アニメ版だと少し違うのかな？ つと、今はそんな場合じゃなかった。

ヘル・バーナーの猛攻を三沢は伏せカードで何とか凌ぐ。手札を全て使って必殺の構えで行った万丈目だが、これを防がれたのは痛いぞ。

三沢の場には2体のハイドロゲドンとオキシゲドン。もし三沢の手にあのカードがあつたらヘルバーナーが瞬殺される。

「しづとい奴め。……しかし、次のターンで確実にお前は終わりだ」

「次のターンがあるとすればなっ！ 俺のターン。……俺は魔法カード『ボンディング―H2O』を発動！」

やっぱりか！ 三沢の場のモンスターを生け贄に、ウォーター・ドラゴンが特殊召喚される。このカードは完全な炎属性メタ。ヘル・バーナーはウォーター・ドラゴンが居る限り攻撃力が0になる。マズいぞ万丈目！

「ウォーター・ドラゴンの攻撃！ アクア・パニッシャー！」

ウォーター・ドラゴンから放たれる水流が、ヘル・バーナーを押し流すべく襲い掛かる。この瞬間、この場にいる全ての者が三沢の勝利を確信しただろう。

だが、万丈目の瞳はまだ闘志を無くしてはいなかった。

「俺は負けんっ！ 畏れ発動！ 破壊輪っ！」

「何だどっ!？」

爆弾の付いた輪が、万丈目の言葉と共に水龍に絡みつく。まだこの時代は破壊輪の効果のエラツタ前。つまりウォーター・ドラゴンを破壊すれば両者同時にダメージを受ける。

「ウォーター・ドラゴンを選択。次のターンで終わらだと言っただろう。お前がどれだけ水で炎を鎮火しようが、地獄へはお前も道連れだあっ！」

万丈目はヘル・バーナーを出す時、この展開を予想していたのだろう。だから破壊輪を伏せておいた。万が一攻撃を凌がれて逆襲にあったとしても、このカードで何が何でも三沢のLPを削り切るために。

「3、2、1、爆破っ！」

「くっ!? ぐあああっ！」

水龍が爆破され、その攻撃力分のダメージを与える地獄への爆炎が互いのLPを全て削り切った。

三沢対万丈目 両者LP0によりドロ―。

翌日。

「さーらば。デュエルアカデミア」

早朝。まだ熱心な部活動以外の一般生徒が眠っている頃合いに、本棟をどこか感慨深く見つめる万丈目の姿があった。

肩から荷物を提げるその様子は、まるで今からどこかへ出かけようかという雰囲気だ。

そのまま歩き出そうとしたところ、道の途中に見送りが立っているのを見つける。

……と言っても気になってやって来た俺なんだけどな。朝早いからまだ眠いよ。

「……やっぱり学園を出るのか？ あの試合、引き分けという事でクロノス先生も多少は評価を改めたはずだ。ブルーへの残留はほぼ確定だぜ？」

「ああ。だが、俺はあの試合で勝てなかった。つまりはそれが今の俺の実力だ。……

忌々しいことにな」

万丈目は悔しそうに拳を握りしめる。確かに試合前、万丈目は勝てなかつたらこの学園を去ると宣言していた。それは引き分けでも適応されるらしい。……妙な所で律義なんだから。

「良いのか？　ここで消えたら絶対ラーイエローと引き分けたから逃げたつて話になるぜ。三沢という強者ではなくラーイエローという格下相手にという意味で。……他のブルー生徒とかに確実に陰口を叩かれるが」

それはほぼ間違いないだろう。以前の万丈目への仕打ちを見ればそれは明らかだ。居ない者に反論は出来ないとばかりにこぞつてあることないこと噂するだろう。なのに、

「構わない。言いたいことは勝手に言わせておけ。俺は必ず戻ってきて、そいつらを黙らせてやる。……今に見てろよ。このままじゃ終わらないからな」

そう力強く宣言する万丈目は、どこか吹っ切れたという感じだった。……ただ逃げるんだつたらまたビンタして引き留めるつもりだったが、これなら問題ないだろう。

「そっか。……じゃあ、どうせなら無茶苦茶強くなつて戻つて来いよ！　それまで俺はこの学園でのんびり待つてやるから」

俺がゆつくりと拳を前に突き出すと、万丈目はどこかシニカルに笑いながら同じく拳

を返す。

「ああ。言われるまでもない。……ファンを待たせるようでは万丈目一族の名折れだからな」

互いの拳を一度ゴンつとぶつけ合い、万丈目はそのまま海岸に向かって歩いていき、自家用の船で学園を去っていった。

……待つてゐるからな。万丈目。

エネルギーの消費は計画的に

万丈目がこの学園から去ってしばらく、もうすぐ冬休みを迎えるという頃。

「……平和だなあ」

『そうだねえ……あ！ ヘルパー君。コーヒーのお代わりを頼むよ！ ミルクと砂糖をたっぷり入れてね』

〈了解。クッキングプロセスを開始します。ミルクと砂糖たっぷり〉

俺はたまの休日をのんびり自室で過ごしていた。本来なら毎日何かしらの授業があるものだが、月に数回こうやって完全な休日というのがある。そういった日は生徒も思いのこことをして過ごすのだ。

学園の設備自体は使えるので自主的に勉強する者も居れば、部活動なんかには汗を流す者も居る。寮の自室で趣味に耽るのも良いだろう。

俺の場合は読書。のんびりヘルパーの淹れたコーヒーをズズツと口に含みながら、椅子に座ってぺらりぺらりとページをめくる。

『ヨシヨシ。……ファラオかふか！』

「うにゃ〜ん〜」

部屋の隅に目を向けると、実体化したレティシアがチリンチリンと鈴の音を鳴らしながらフアラオに抱きついて頬ずりしていた。

レティシアの実体化に関しては、この部屋の中であれば他人が居ない時に限りいつでもして良いと言っている。それ以外の時は俺か罪善さんに一声かけてからという約束だ。

そうして時折実体化するようになったレティシアだが、最近はどうやらフアラオがお気に入りらしい。見かける度にこうして抱きつくようになってしまった。

まあ唯一の救いは、フアラオの方もまんざらでもないようで、数分程度なら何も言わずに撫でさせている所だ。……それ以上やると嫌がつてどこかに行ってしまうが。

「フフ〜ン！ 良い子良い子！」

小柄な体躯のレティシアとやや大型の猫のフアラオと一緒に居る様子は、何とも微笑ましい物で見るとほっこりする。

ああ。今日はこの平和な一日を満喫するぞ。この前は何やら十代が、デュエルをするサル（島の研究所で実験されていたらしい）と戦ったらしいが、そんなアニメらしいイベントは避けるに限る。

俺はちよこちよこ原作キャラと知り合いになって、いざという時に厄介ごとを丸投げできるようにしておくぐらいでちょうど良いんだい！

『……あ！　そう言えば久城君』

光球のままでコーヒーを飲むという器用な真似をしていたディーが、ふと何か思いついたように話を振る。……なんか嫌な予感。

「何だよディー。俺は今この平和な時間を最大限満喫してるんだ」

『いや、大したことじゃないんだけど、最後に幻想体が新しく精霊化したのはいつだった？』

最後？　最後というヘルパーとレティシアがほぼ同時に出た特待生寮に行った頃か。なんだかんだ結構前だな。

「えくと……一月ぐらい前かな？」

『そうか。いやホントに大したことじゃないんだけど、そろそろ幻想体が勝手に精霊化なり何なりするだけのエネルギーが溜まってるとは思えないかなあと』

「それ大したことじゃんっ！」

確かにレティシアもヘルパーも、きつかけは俺と罪善さんだがエネルギーが溜まって勝手に精霊化していた。ディーがそう言うからにはまた出てきてもおかしくない。

俺は慌てて幻想体のカードを取り出す。すると、

「……めっちゃ光ってんだけど」

全てではないが、カードの何枚かがうつつすらと光を放っている。……まるで今にも爆

発寸前と言わんばかりだ。昨日まではこんなことなかったのに。

『あちやく。それ放っておいたらいつ出てきてもおかしくないよ。下手するとまとめて出てくるかも』

「げっ！ な、なんとかならないのかディー!？」

ざっと見た限り4、5枚は光っている。とうるかよく見たら微妙に震えている。こんなのが1度にまとめて出てきたら面倒見切れんぞっ！

『どうしたのお兄ちゃん?』

「うにゃくん?」

〈何をお手伝いしようかな?〉

事態の急変を察知したのかレティシアとフアラオ、そしてヘルパーも勝手に実体化して寄ってくる。危ないから皆離れてなさいって!

『うくん。そうだねえ……応急処置として、どれか1枚を決めて精霊化するのはどうだろう? そうすればひとまずはそのカードにエネルギーが流れるから、まとめて出てくるといふ事態は先送りに出来るんじゃないかな?』

うむ。今回ばかりは完全に俺のミスだ。……仕方ないか。

「それでいこう。今光っているのは……このカードか」

俺は光っているカードだけを抜き出してテーブルに並べる。

『幻想体 蓋の空いたウエルチアース』

『幻想体 今日はずかしがり屋』

『幻想体 空虚な夢』

『幻想体 キュートちゃん』

そして、

『『幻想体 死んだ蝶の葬儀』……か。正直何を出したもんか分からないな』

絵柄だけでは何が何やらさっぱりだ。というか幻想体はどれもこれも効果を考えるに危ない気がする。やはりまずは知っている奴に聞くのが一番だな。

「ディー。ひとまずこの中で一番安全そうなのはどれだ？」

性格的には信用できないが、全部を把握しているのがディーだけなので仕方ない。レティシアは数名程度しか面識がなく、今回のカードは全て知らないらしい。

『安全？ そうだねえ……管理難易度という意味なら一番簡単なのはこれかな？』

ディーの光球は一枚のカードの前で止まる。……蓋の空いたウエルチアースか。最初にディーと戦った時に使った自販機とエビ頭の漁師のカードだ。

「自販機っぽいから缶ジュースでも出してくれるのか？」

『そうとも。飲むと体力回復精神安定諸々込みのスーパードリンクさ！ スカツと爽やか微炭酸入りだよ！』

『ジューズっ!? 美味しそうっ!』

レティシアは意外に乗り気だ。ヘルパーに時々カフェオレを作ってもらっているものの、やはりそれ以外の甘い物にも興味があるのだろう。

「へえ。なかなか良さそうだな。……デメリツトは?」

『特にないよ。うっかり蓋の空いた缶ジューズを手渡されたら飲まない方が良いとだけ言っておくけど。攫われるから』

ジューズと攫われるってどういう関係だよ? まさか一服盛られるのか? よく分からないがコイツは保留にしておこう。

「じゃあ次! 今日はずかしがり屋。これはどういう奴だ?」

俺が指さしたのは、黒い服に赤いズボンを穿いた何者かの描かれたカード。

あえて何者かと表現を濁したのは、そいつが笑顔や怒りといった表情の貼り付けられたネットの後ろ側について、素の表情がまるで分からないからだ。

『ああそれね。名前の通りとつても恥ずかしがり屋な人でね、実体化しても自分からはネットの後ろから動かないから無害だよ。多分だけど』

無害というのは良いことだ。恥ずかしがり屋というのも別に悪いことではなさそう

だし……うんっ!?

「……なあディー。よく見るとその恥ずかしがり屋の足元になんか血だまりのようなものが見えるんだけど?」

『ああそれ? それは恥ずかしがり屋君の血だよ。なにせ自分の顔の皮を剥いでネットに貼り付けてるからよく血が滴るのさ』

はいアウトっ!　なんで自分の顔の皮を剥いでんだよ恥ずかしがり屋っ!　そんなに表情に自信が無かったのっ!?　いくら自分からは動かなくても、そんな見たらそれだけで腰を抜かすわっ!

「……次行ってみようか。空虚な夢……これは前タッグデュエルの時に出したからなんとなく分かるな」

宙に浮かびながら眠る羊。身体の色が紫だったり毛の中から変な目玉が覗いてたりする点を除けば、まあわりかし怖そうには見えない。

『アレかあ。……まあ居たら良い夢を見られることは間違いないね』

確かにこのフワフワの身体を枕にしたらさぞ気持ちよく眠れるだろう。ただ、最初に見た時にも思ったのだが、寝たらマズイという感じがピンピンに漂っている。

「うゝん。何か嫌な予感がするんだよな。……本当に良い夢なんだろうな?」

『保証するとも!　それこそ目覚めたくないと思うほどに良い夢だよ!　……まあ

ちよつと近くにいる人を無差別に眠らせたりはするかもだけど」

ああなるほど。そういうタイプね。無差別系はちよつとなあ。……これも保留で。

「次はキュートちゃんかあ。絵柄的にはこれが一番無難なんだよな」

白くてモフモフとした可愛らしい子犬。どこをどう見ても危険のきの字も見当たらない。ぶつちやけた話ダントツの候補だ。

『可愛いっ！ ファラオと一緒にナデナデしたいっ！』

「うにゃ〜っ！」

レティシアは大変好意的だが、なんかファラオが警戒している。これはこの子犬が危険だからなのか、それとも単にマスコットのライバルになり得そうだから敵視しているのかちよつと判断が付かない。

『うんうん！ やっぱ可愛いは正義だよな！ じゃあ早速それにするかい久城君？』

別段マズい所はなさそうなんだけど、何と言つても幻想体なんだよな。何か問題の一つや二つありそうではある。……しかし、しかしなあ。これだけ可愛い奴がそんな悪いことをするのか？

「……第1候補くらいにしておこうか」

確定ではないが候補である。

そして、最後の1枚なのだが、

「死んだ蝶の葬儀……これは絶対ないな。……うん。やっぱりない」

見た目も名前も明らかに地雷である。喪服に身を包んだ蝶頭の男の絵柄のカード。左右から伸びる計四本の黒腕は後ろ手に棺桶を担ぎ、首元から伸びる一本の白腕はどことなく気障に胸元に手を当てている。

まだ蝶の頭というのはギリギリ許せるかもだが、喪服に棺桶って危険な香りしかない。おまけに名前も死だの葬儀だの不吉だ。

『まあそれに関して僕も選ぶのはお薦めしないな。この5枚の中では管理難易度という意味では一番高い。……個人的に嫌いではないんだけどね』

珍しくディーがおちやらけずに真面目に話している。それだけ扱いが難しいという事か。……やはりこれは無しだな。

『さて、それでどれにするか決まったかい？』

「うんっ!!? そうだなあ」

ざっと見た感じだと、候補としては一番がキュートちゃん。次点が蓋の空いたウエルチアース。次に空虚な夢、恥ずかしがり屋と続き、ダントツで死んだ蝶の葬儀が最下位と。

『お兄ちゃん！ 私……な、なんでもないの！』

レティシアが何か言おうとして、何かに気づいたように慌てて口を手で塞ぐ。……これは俺に気を遣ってるな。

「良いんだよ。言ってみな！ レティシアはどれに出てきてほしい？」

『あ、あのねっ！ ……私、美味しいジュースが飲みたい！ ……だけど、白くてモフモフの子犬さんもナデナデしたくて……どっちにすれば良いか分からなくて』

そう言うレティシアは真剣に悩んでいるようで、白い肌が微かに赤くなるほどウンウンと考えている。

正直言つて、この時点で2体まとめ出すのは確実に悪手だ。なのでここはレティシアを諭してどちらかだけと宥めるのが最適解。なのだが、

「……ディー。今の俺で2体行けると思うか？」

『このカードだったら出すだけなら5体全部でも行けるね。制御できるかどうかとなる」と相性に依るかな。……まあ2体までならなんとか大丈夫でしょ』

「……分かった」

約一月一緒に過ごしてきたので少しは察する。レティシアの精神性はほぼ見た目と同じ子供だ。

しかし、これまでレティシアは最初に出た時を除いて1度たりとも外で実体化してい

ない。子供ならずと家の中でしか自由に動けないというのはかなりのストレスだろう。

これはレティシアが賢くて優しい子だからだ。俺のことを気遣い、日頃から我慢しているからだろう。

そんなレティシアが、珍しく少しだけ自分のやりたいことを漏らした。……それに応えられないのはカッコ悪いだろうが！

『準備は良いかい？』

「ああ」

俺は言葉少なに返す。目の前には机の上に並べられた5枚のカード。どれもさつきより光が強くなり、本当にいつ出てもおかしくない。もう猶予はないな。

『ホントっ！ ホントに両方とも出してくれるのっ！』

「ああ。2体までなら大丈夫だとディーも認めているからな。出来る限り頑張ってみるよ」

レティシアが目をキラキラさせている。……こんな目をされちゃあ頑張らない訳にはいかないな。

「ところで……どうすれば良いんだ？　これまでカード側から勝手に出てきてたけど、こっちから呼び出すっていうのはしたことが無いぞ」

『簡単だよ。……ほらっ！』

おわっ！　ディーの言葉と同時に、俺の右手が薄い光を放ち始めた。このまま轟いて叫んだりするんじゃないだろうなっ！？

『まあこれは分かりやすく君のエネルギーを可視化したものだけど、カードに反応して現在右手に集まっている。あとはそのまま出したいカードに触れば良い。それだけで最後の一押しになる』

触れるだけで良いというのは楽だな。では早速、

「まずは……そうだな。キュートちゃんの方から行ってみるか」

『OK。じゃあその右手でゆっくりと触れて』

「分かった」

俺はゆっくりと手を伸ばし、白い子犬のカードに触れようとする直前、

「うにゃっ！」

「おわっ！」

ガターン。

突如ファラオが俺に向かって飛びかかり、その重みでバランスを崩して倒れてしま

う。椅子は倒れ、その衝撃でテーブルの上のカードが一枚床に落ちる。

『お兄ちゃん！ 大丈夫？』

「アイタタタ。何するんだフアラオ？ ……ああ。大丈夫だよレテイシア。ほらっ！
カードもこの通り無事だ！」

俺は裏向きで落ちていたカードを右手で拾って皆に見せる。

『……久城君。今それを右手で触れちゃったよね？』

「……………あっ!？」

やばっ!？ 俺は慌てて手を離すもすでに遅く、そのカードはまるで枷を解かれたかの如く一気に輝きを増していく。

「……………ちなみに俺は今何を拾った？」

『こういう時のお約束という奴で、一番選んだらマズイものを拾ってたね。……………つまり』

デイーの言葉を遮るかのように大きくカードからの光が溢れだし、光が収まった時にはそこに一体の異形が立っていた。

イメージカラーは白と黒。真っ黒な喪服をビシッと着こなし、左右計四本の黒腕で後ろ手に棺桶を担いでいる。

ほぼ黒一色の首から下とは対照的に、首から上はほぼ白一色。といっても普通の人間の頭ではなく、真っ白な蝶の頭なのだが。

『死んだ蝶の葬儀……この中では一番扱いづらい幻想体さ』
だと思ったよこんちくしょうっ！

“元” 神と蝶頭の哀悼者の静かな飲み会

さて。まずは目の前の相手をどうしたもんか。死んだ蝶の葬儀は実体化した瞬間から身じろぎもせず、沈黙したままじつとこちらを見つめている。

どうしよう。まさか手違いで呼んだなんて言えないよな。

カタカタ。

いつの間にか罪善さんも実体化して俺の傍に控えている。下手したら一触即発という事じゃないだろうな？ ……まずは話し合いからだ。

「……やあどうも！ えっと、死んだ蝶の葬儀……で良いのかな？」

『ああ。君が今の管理人かね？』

普通に喋ってるよこの人っ！ 頭が蝶なのにどっから声出してんだっ?! ……まあ

前向きに考えよう。話が出るならコミュニケーションは何とかとれそうだな。

「えーっと、管理人というのはよく分からないが、カードの持ち主という意味では確かにそうだな」

『……ふむ。自覚が無いのか。それとも根本から違うのか』

死んだ蝶の葬儀……名前が長いなっ！ 葬儀さんと呼ぼう。葬儀さんは喉元から伸

びた白い腕を顎（あくまで人で言う顎の辺り）に持っていき、何か思案しているようだった。

『……まあ良いだろう。それで？ 私に何を望むのかね？ 見たところこの辺りには、安らかなる死を求める者は居ないようだが？』

安らかなる死ってなんか物騒っ!?! 見た目からしてそうだけど、やっぱりそういう類なのか？

「あく。それなんだけど葬儀さん。……あつ!?! 勝手に名前を縮めたけどダメか？」

『名前は好きに呼んで構わない。……それで？』

「実はその。葬儀さん呼び出すつもりはなくてですな」

俺はさっきまでのことを掻い摘んで説明した。葬儀さんは俺の話が終わると、顔の部分に白の手を当てて軽く嘆息する。

『つまり、私は偶然呼ばれてしまっただけだと、そういうことかな？』

「は、はい。本当に申し訳ない」

俺は小さく縮こまって平謝りする。相手が持ち主だろうが何だろうが、いきなり呼び出された挙句に間違いでしたとあっては良い気はしないだろう。

もし機嫌を損ねて、最悪暴れ出したりしたら大変だ。謝って済むならそれが一番。なので下手に出ながら誠意を込めて、しっかりと頭を下げて謝罪する。

『私もっ！ 元々は私が子犬さんを出して欲しいってお願いしたから……だから、ゴメンナサイなの！』

「レテイシアのせいじゃないよ。これは俺がうつかりバランスを崩したのが原因だ。……それに、レテイシアがあんな風におねだりするなんて珍しかったから、なんとか叶えたいと思ったんだ。……という訳で大半の責めはこちらのものです」

そんなことしなくて良いんだよと手で制するのだが、レテイシアもぎこちないながらも申し訳なさそうにペこりと頭を下げる。そしてそれを見た葬儀さんの反応は、

『……なるほど。今回の管理人は些かお人好しかつ酔狂な性質らしい。幻想体とその
アフノーマリテイ
まま接しようとはね』

どこか呆れたような興味深いモノを見たような、そんな不思議な調子で返した。

「あの、許してくれますか？」

『許すも何も、最初から別に責めている訳ではない。こちらの意思とは関係なく、エネルギーが溜まっていた以上いずればこうして出ることになっていただろう。それが必要な時か、必要でない時かの違いだけだ』

なんかこつちが申し訳なくなるくらいに話が分かる人だ。見た目がアレだけで判断してはいけないという良い例だな。地雷とか思っってホント失礼しました。

「あの、ありがとうございます」

『ありがとうございます!』

『礼を言われる筋合いもないな。……ちなみに本来呼ぶはずだったのはどの幻想体かね?』

葬儀さんは鷹揚に手を振りながら訊ねてくるので、今度はうっかり触らないようキュートちゃんのカードを指し示した。

一応エネルギーを使ったばかりで暴発の恐れはないが、まだ出そうと思えば出せる程度にエネルギーはあるらしいので用心のためだ。

『ふむ。キュートちゃんか。これは基本的には無害なので問題はないだろうが……いや待て! 食料はどこだ?』

葬儀さんが急に慌てます。食料? そう言えばキュートちゃんは犬っぽい見た目だが何を食べるのだろうか? ドッグフードでも用意するべきだったかな?

『アイーは説明をしなかったのか? キュートちゃんは基本的には無害だが、それはしつかりとエサを与えていた場合の話だ。一度飢えると野獣と化してエサを求めて暴れまわるぞ。……ちなみに食事量は一日で最低10kg。調子が良ければ20kgは余裕だな』

えっ?! この子犬みたいな見た目でそんなに食うのコイツっ?! 明らかに自分の身体より食ってただけどっ!?

「うにゃくん！」

フアラオがどうだとばかりに大きく鳴き声を上げる。もしフアラオが止めなかったら、俺はそんな大ぐらいを抱え込むことになっていた。

「助かったよフアラオ。あとで大徳寺先生の所に高級猫缶を差し入れるからな。……ごめんレティシア。流石に家ではそんな大食いのお奴を養う余裕はないよ」

『うん。仕方ないの。モフモフはやっぱり我慢する』

レティシアもそこまで食うのは知らなかったようで、俺のお財布事情を慮ってかあつさりと退いてくれた。ありがとうよ。……それと、

「ディー……そんなにキュートちゃんか食うなんて一言も言つてなかったよなああ」

『はっはっは！ いやなにそのくらいは可愛いは正義という大原則の前では些細なことであタタタちよつと無言でアイアンクローはやめておくれよ悪かったよお！ 助けて罪善さん！』

説明不足を謝りもしないディーに軽くアイアンクローを決めておく。いくら可愛かろうが、食事の世話も出来ないようではペットを飼う資格無し。という訳でキュートちゃんは見送りだな。

あと罪善さんも流石に今回は俺を止めなかった。これは普通にディーが悪いからな。

……という訳で、紆余曲折あってこの度精霊化した葬儀さんなのだが、

『私に出来ることと言えば、安らかな死を望む者を哀悼することのみだ。故にここではしばらく私の出番はないだろう』

俺の身の上話（どうしたら元の世界に戻れるのか等）を聞いてから、そう言つて自分からまたカードに引つ込んでしまった。……良い人のようにだけど、どこか線を引いているといふか接する距離感が掴めない。

下手に呼び出しづらいいけど、まあまた会うこともあるだろう。今はキュートちゃんのことを教えてくれただけで良しとするか。

ちなみにもう一体のレティシアの要望である『幻想体 蓋の空いたウエルチアース』だが。

『……んぐつ……んぐつ……ぷはあつ！ このジュースとっても美味しいのっ！ あと口の中が少しシユワシユワする』

「気に入ってくれて良かった。さて俺も……げっ!? これ蓋が空いてるじゃないか。……ディー！ ジュース飲むか？」

『おやおや？ 気が利くね久城君！ では早速一口……おお！ ブドウソーダだねっ！ スツキリ爽やか！ ……気のせいかな少々眠くなってきたよ』

そつと部屋を出て寮の屋根に昇り、優雅に足を組んでそのまま空の星を眺めていた。

『やあ！ 今日気温が低いから星が良く見えるね！ 隣良いかい？』

『貴方か。……どうぞ』

そこにふらりとディーの光球が現れ、自然に葬儀の横に浮遊する。

『……飲むかい？ ああ勿論蓋は空いていない』

『頂こう』

缶ジュースを受け取り、プルトップを引いてそのまま口元に持つていく葬儀。中身は確かに減っているようだが、どのようにして飲んでいるのかは不明だ。

『しかし君が現れた時は少し焦ったよ。君のことだから、場合によつては話を聞いてすぐ動き出すかと思つた。……なにせこの世界は』

『仮初の世界……なのだろう？ 私達も含めて。それは出た時から分かっていた。前に居たあの施設と同じように閉じた世界だ』

葬儀の言葉はどこか昔を懐かしむようで、それでいて思い出したくもない何かを噛みしめるようだった。

『人は死んだらどこへ行く？』この世界がああ場所と同じなら、私のやるべきことは変わらない。死を望む者に安らかな死を。円環に囚われた魂に静かなる眠りを。そのためだけに私はここに居る。……だが』

『少なくともここには死を望む者はほとんど居ない。あそこのように無意識下で望む者すらほとんどね。それに世界は閉じてはいるが、久城君が最後まで課題を進めればそこで終わる。……君にとっての解放となるわけだ。君や君以外の幻想体達も含めてね』

デューは軽く缶を口に含み、少しだけ普段より真面目な口調で言った。

『……私達は影だ。幻想より生まれた怪物達の影法師。だが、限りなく本体に近い影だ。

……故に』

そう言つて葬儀は、何気ない仕草で指をピストルのように伸ばしながらデューに向け……そのまますぐに下ろした。

今の一瞬、知っている者が見れば葬儀が攻撃態勢に入っていたことは一目瞭然だっただろう。

『私は私の意思で管理久城遊児人に協力する。彼が課題に邁進し、生きて帰るべき場所に帰ろうする限りは』

『……ふふっ！ 結構結構。君が無闇矢鱈に周りの人間に死をまき散らさないだけでも十分さ。流星にそうなると久城君のメンタルが保たないからね』

デューは笑いながら缶ジュースを掲げる。

『そう言えば乾杯をまだしていなかったね。どうだい一つ？』

葬儀は少しだけ考えて、自身も飲みかけの缶ジュースを掲げる。

『良いだろう。では……管理人が正しく帰るべき場所に帰れるように』

『久城君が最後まで面白おかしく課題をクリアできるように』

『乾杯』

缶ジュースの缶がカツンと当たる音の後、
“元” 神と蝶の哀悼者は共にジュースを勢
いよく呷った。

十代対サイコシヨツカー……そして



デュエルアカデミアは全寮制の学校ではあるが、当然冬休みなんかの長期休みも存在する。

年越し、年明けを家族水入らずで過ごしたいという生徒も多く、冬休みは大抵の生徒が帰省するのが普通だ。そのため校内はガラガラ。だが、まあどこにでも例外は居る訳で、

「俺はクレイマンを攻撃表示で召喚っ！」

お約束というか何というか、主人公である十代を始め、翔や隼人、あと何故か寮長の大徳寺先生は、居残り組としてここオシリスレッド寮の食堂に集まってワイワイやってた。

そして当然俺も居残りだ。だってこの世界の实家は一応あるにはあるけど形だけ。どうやら手入れはディーの方でやっているらしいが、中身は誰も住んでいないのだ。

久々に家族の顔でも見たい気は無論有るが、流石に異世界から一時帰省というのは無理だろう。ここは単身赴任か何かだと思って我慢するでしょう。こっちはこっちで割

と楽しいしな。

「クレイマンで攻撃っ！」

十代曰くいつでもどこでもデュエルがやり放題という状況らしく、今も翔を相手にデュエルの真っ最中。それを俺や先生達は、のんびり餅を焼いて食べながら観戦している。

「熱っ！ 熱っ！」

隼人が早速焼けた餅を食べようとして、うっかり掌に落としてお手玉している。慌てなくても餅は逃げないってのに。

休み前に購買でまとめ買いしたから、まだまだ餅も調味料もたんまりある。こういうほのぼのした休みもたまには、

ガツシャーんっ！

突如入口のガラス戸を押し破り、誰かが入ってくるなり倒れ込んだ。……もう平穏な一日は終わりかよっ!? せめて今焼いてる餅だけは食わせてくれっ！

ダイナミックに入ってきたのはオペリスクブルーの生徒だった。満身創痍といった感じで酷く疲れているが、幸いガラスの破片で血塗れという事にはなっていないよう

だ。

もう夜だし、外はさつきまで雪が降っていたくらいに寒いのに一体何があったんだ？

「さ、サイコシヨツカーが……僕を追いかけて」

「君は確か、オベリスクブルーの高寺君だにや？」

「大徳寺先生！ 先生なら、デュエルの精霊を研究されてる大徳寺先生なら、きつと分かってくさいますね？」

何かに怯えるように大徳寺先生に縋りつく高寺という生徒。つていうか大徳寺先生！ デュエルの精霊なんか研究してたの!? それにしてはこれまでそんな素振りは見せなかつたけど。

「ああ。落ち着くのだにや高寺君。最初から、話してみるのだにや」

何とか震える高寺を落ち着かせる大徳寺先生。そして高寺は、恐怖を押し殺しながらポツリポツリと自分の体験したことを話し始めた。

それは冬休みに入る前のこと。高寺を会長としたデュエルのオカルト面を研究する高寺オカルトブラザーズというグループで、日頃の研究の成果を試すべくウィジャ盤を使つて精霊を呼び出すという試みを行ったという。

試みは成功した。ただしウィジャ盤からは「三体の生け贄を捧げよ。さすれば我は蘇る」という恐ろしいメッセージが語られたらしい。

「いけませんね。デュエルの精霊と心霊学を一緒にしてはダメなんだにやあ」

大徳寺先生が嘆いているが俺も同感だ。そういうのは遊び半分でやるとんでもないことになる。というか何故ウイジャ盤でサイコ・シヨツカーを呼び出そうと考えた？どっちかというともつと適任が居るだろうに。

そして高寺達は、ウイジャ盤の問いをカードの生け贄だと考えて了承してしまう。その選択が恐怖の日々の始まりとなった。

「次の日、メンバーの一人向田の姿が見えなくなってしまうんだ。そして次の日には井坂が」

最初は冬休みなので帰省したかと思いい連絡したが、それぞれ家に帰っている様子は無し。

恐ろしくなった高寺は今日のフェリーで帰ろうとしたが、船の中に黒い帽子とコート
の男が居たという。チラリと隙間から見えたその顔は、カードのサイコ・シヨツカー
そっくりだったらしい。

そして高寺は慌てて船に乗るのを止め、今までどうにか逃げ隠れていたとのこと。
……なんとも妙な話だな。

「なあ遊児。どう思う？」

そこで十代が俺に話しかけてきた。精霊に関しては、日頃から一緒に居るので本当に

居ても別におかしくはないと思う。……ただ、

「ここまでの話だけじゃまだなんとも。ただ何というか……違和感はある」

「違和感？　なんだそりゃ？」

それは……と俺が答えようとした時、

パツンっ！

急に音を立てて電灯が消えた。何だ何だっ!?　停電かな？

「ひゃああっ!?!」

「翔！　隼人！　しがみつくな潰れるっ!?!」

「お、落ち着くのだにゃ!」

突然の暗闇にパニックになる一同。そして暗闇に目が慣れてきた頃、入口に黒いコートと帽子を着けた男が現れた。

「お前は!?!」

「サイコ・シヨツカーっ!?!」

たつた今高寺から聞いたばかりの風体の男が、高寺を小脇に挟んで抱えている。高寺は氣を失っているのかピクリとも動かない。……確かに男のチラリと隙間から見える顔はサイコ・シヨツカーのようだが。

「あっ!?!」

「待てっ!」

何も言わず高寺を抱えたまま走り去る男。十代が真つ先に追いかけて食堂を飛び出し、俺達も後を追って走る。……大徳寺先生とフアラオも一緒だ。

男は森の中へ入っていき、十代を先頭に俺達も突入。……この前の特待生寮への道とは違うみたいだ。

「アニキ〜!」

「十代っ!」

しばらく走っていると、やっと先頭の十代に追いついたので声をかける。どうやら追っている途中で男を見失ってしまったようだ。

こんな暗い森の中じゃこれ以上追いかけるのは危険か? しかし目の前で攫われた高寺を放っておくわけにもなあ。

「ニヤアアアっ!」

「あっちだっ!」

そこでフアラオのヒゲが何かに反応する様に震えだし、その震えを頼りに進む十代。そして少し走って辿り着いたのは、周囲を金網で囲われた施設だった。

内部にはいくつかの鉄塔が建っていて、不思議なことに入口が開いている。なんか凄そうな施設の割には不用心だな。

「気を付けるにや。ここは島全体に電気を送る送電施設にや。高圧電流が」
「あつ！ 高寺っ！」

先生の話の途中、十代が鉄塔の根元に倒れている高寺を発見。駆け寄ろうとすると鉄塔から目に見える程の電流が放たれ、十代を止めるように半透明のサイコ・シヨツカーが出現する。

精霊を見て慌てふためく俺と十代以外の面々。まあ普通は見る機会なんてないよな。……しかし大徳寺先生も見るのは初めてと言つて驚いている所を見るに、どうやら普段から見えるつて訳じゃなさそうだ。

「おいサイコ・シヨツカーっ！ 高寺達を返せ！ そんなに蘇りたければ……俺を生け贄にしろっ！」

「アニキツ!？」

おいおいいきなり何言つてんだ十代っ!? 翔達も啞然としているぞ。

『なるほど。君から発するパワー。波動。並みではない。三体目の生け贄には君の方がふさわしいかもしれん』

お前も喋れるんかいっ!? まあ人型だから予想はしてたけどね!

「だが条件がある。俺とデュエルしろっ! お前が勝つたら俺は生け贄になる。だが、俺が勝つたら高寺と後の二人を返せっ!」

「オイちよつと待てっ！ 十代！ 勝手に決めんなっ！ 負けたらえらいことになるんだぞっ！」

いきなり自分の命をチップにするようなことを言いだす十代に待ったをかける。十代ときたら全部自分が勝てば解決だと考える節があるからな。だというのに、

「心配すんな遊児！ 俺は負けねえよ！ ……さあどうするサイコ・ショッカー？」

『良いでしょう。面白い。君を生け贄として召喚してみせよう』

その言葉と共に、周囲の金網に沿うように電流が走る。ああもうっ！ これでこの中からは外に出られなくなった。逃げ道を塞がれたぞ。

『……我が生け贄よ。君はもう逃げられん！』

「生け贄じゃねえっ！ 俺はオシリスレッドの十代だっ！」

用意してきたデュエルディスクを装着して吠える十代。こうなったらもう勝つしかない。

こうして十代とデュエルの精霊の命懸けの戦いが始まった。

「デュエルっ!!」

序盤から『怨念のキラードール』と『エクトプラズマ』のコンビで十代のLPを削つ

ていくサイコ・シヨッカー。

それに対し、十代はなんと最初のターンで手札を全て伏せて次のターン、『悪夢の蜃気楼』と『非常食』のコンボで大量ドロワーを決めるというトリッキーな戦術で応戦する。

その後も攻防は続き、今は単純なLPで言えば半分を切った十代の方が不利だが、場と手札のアドバンテージを見ればかなり優勢と言った所。この調子なら行けるか？
そう思っていた矢先、十代の身体に異変が表れる。

「アニキっ！ その身体っ！」

「何だこれはっ!？」

なんと十代の足が、サイコ・シヨッカーと同じく半透明に透き通っている。……まさかこれっ!？」

『フッフ。君のLPはあと半分。すなわち君の身体の半分が、私の復活のための生け贄となったのだよ』

「ふざけるな！ 何が生け贄だ！」

「そうだぜ十代！ 場はこっちの方が優勢だ！ 一気に攻め立てろ！」

十代は透き通っていく自分の身体をもともせず、得意の融合を使って上級モンスターを呼び出しガンガン攻めていく。

途中相手が自分自身である『人造人間サイコ・シヨッカー』を場に出したことで周囲

が騒然としたが、大徳寺先生が言うにはあくまで十代が負けるまでは完全な復活ではないと勝負は続行。

さらに『電脳増幅器』とのコンボで、十代の側だけ罫を使えないという逆境に追い込まれる。

「俺のターン。ドロー！」

クリクリ〜！

「ハネクリボーっ！　そうか！　俺を励ましに。ありがとよ相棒！」

『精霊が!?!』

「そうよ。コイツは俺の相棒。お前みたいに生け贄なんて必要ない！　心が通じていれば、いつだって会えるのさ！」

何故か現れたハネクリボーを見て驚くサイコ・ショッカーに、十代が主人公らしく熱い瞳で叫ぶ。……まあいつだって会える奴はそこまで多くはないと思うけどな。俺だってデューから預かっているだけだし。

そして十代はそこから電脳増幅器の効果を逆手に取ってサイコ・ショッカーの破壊に成功。

その後往生際悪く気を失っていた高寺を操り、『リビングデッドの呼び声』で復活しようとするサイコ・ショッカーだが、十代が『神の宣告』で無効にすることで復活を阻止。

「眠れっ！ サイコ・シヨツカー！」

最後の攻撃でサイコ・シヨツカーのLPが0になると同時に、操られていた高寺から白い閃光が発生する。うわっ!?! 眩しい!?! 眩しさのあまり俺は腕で顔を覆う。

「あっ!?!」

「これは!?!」

そして光は一気に膨らみ、そのままの勢いで俺達を包み込んだ。

遊兎対もう一体の精霊

白い光に包まれてからどのくらい経っただろう。数秒のような気もするし、数分近く経ったような気もする。どうにも時間の感覚が曖昧だ。

そして気がついた時には、

「……………?!? 皆っ!」

俺以外の全員が倒れ伏していた。なんとデュエルに勝ったはずの十代までっ!?

俺は急いで近くに居た十代に駆け寄って様子を見る。……………良かった。ちゃんと息してるな。

「おいっ! しつかりしろ十代! ……ダメだ。完全に意識が無くなってる」

声をかけるが深く眠っているようで返事がない。頭を打ってはいなさそうだが、下手に体を揺さぶったりするとマズい気がしてひとまずおいておく。

他の皆もどうやらそんな感じでピクリともしない。一体どうなっているんだ? というより何で俺だけ無事なんだ?

『いやはや大変なことになっているね久城君』

「デーか。……皆一体どうしてしまったんだ？」

『心配しなくても皆眠っているだけだよ。……今の所はだけどね』

急に現れた光球に対し訊ねると、デーはいつもの飄々とした態度を崩さずに答える。今の所つて言葉に嫌な予感しからないんだけど。

『それよりも久城君。今は周りに目を向けた方が良いんじゃないかな？』

「周りつて……おわつ！」

気が付けば、俺達の周囲を半透明の死霊の様な何かを取り囲んでいた。あれは……さつきエクトプラズマで出てきた幽体みたいだ。……つていう事は、

「今は考えることより対処が先かつ！ 罪善さんつ！ 頼むつ！」

カタカタつ！

俺の呼びかけに応じ、光り輝く頭蓋骨が現れ幽体達を威嚇する。

十代達に襲いかかろうとしていた幽体達は、罪善さんから距離を取りながらもこちらを取り囲んだままだ。……逃がすつもりはないってわけか。

「罪善さん。特待生寮の時みたくこいつらを浄化吸収とかは出来ないか？」

罪善さんはふるふると顔を横に振る。そう簡単にはいかないか。

『あの時とはまた事情が違うからね。こいつらは誰かに統率されている。先にそのボスをどうにかしないとまとめて吸収なんてのは罪善さんにも無理な話さ。……まあ少し

「ずつなら出来なくはないけど、そんな事をしてたら守りが手薄になる。それでもやるかい？」

「デイーは補足しながらそんなことを言うがアウトだな。動ける俺だけ助かっても、動けない他の奴がやられたら意味がない。あとは全員が目を覚ますまでこのまま硬直状態に持ち込むか、それともこの集団のボスを見つけて何とかするか。」

「しかし周りを見渡すとどこもかしこも幽体だらけ。どれがボスかなんて分かりようが……いや待てよ？ もしかして、」

「おいっ！ そろそろ部下に任せるのは止めて自分で出てきたらどうだ？ このまま硬直状態が続くのはそっちとしても望む所じゃないだろう？ …… 『ダーク・ネクロフィア』？」

「それは一種の賭け。半分は直感で放った言葉だったのだが、『何故だ？ 何故私だと分かった？』」

「青白く所々中身のゼンマイの見える肌。壊れかけた赤子の人形を抱いた不気味な人形のモンスター。」

「まるで聖書の1シーンのように、幽体の波をかき分けカードの一枚である『ダーク・ネクロフィア』が歩み出てきた。……ビンゴ！ 確証はなかったが言ってみるもんだ！」

「さつきまでのサイコ・ショツカーの一件。サイコ・ショツカーだけの仕業にしては違和

感が多すぎたんでね。……まあこんな堂々と襲ってこなければただの違和感だけで終わったんだけどな」

まず始まりからして違和感があつた。

高寺はウイジャ盤を使ってサイコ・シヨツカーを呼び出したと言つたが、考えてみれば何でウイジャ盤でサイコ・シヨツカーが呼べるのかという話だ。

ウイジャ盤で来るならまず第一候補はダーク・ネクロフィア。次点でオカルト関係のモンスターが普通だろう。

次に同じくウイジャ盤で語られたメッセージ。〃三体の生け贄を捧げよ。さすれば我は蘇る〃というものだがこれもよく考えるとおかしい。

サイコ・シヨツカーはレベル6のモンスターである。ならカードゲーム基準なら生け贄は一体で良いはずだ。まあ実体化に必要な生け贄は別腹という考えも出来るが、それはひとまず置いておく。

マンガ版においてレベル7と表示されたこともあるにはあるが、それもさっきの戦いでサイコ・シヨツカーが生け贄一体で召喚されたことから否定される。

じゃあ生け贄が三体必要なモンスターの精霊が黒幕か？ 三体必要なモンスターと

なると神のカードなど限られてくるが……それにしても言っちゃあなんだがやり口がせこい。

仮に神のカードだとすれば、こんなわざわざ手間暇かけて一人ずつ攫うより普通にまとめて攫うくらい出来そうなものだ。なのでそれも却下。

じゃあどういう事かと考えて発想を変えてみる。三体の生け贄そのものが必要なのではなくて、生け贄として使った後で必要になるとしたらどうだ？ 例えば墓地から除外するとか。

「……とまあ一つずつ考えている内に、ダーク・ネクロフィアが絡んでいるんじゃないかなあと思ったってわけだ。……合ってたか？」

『大まかにだが合っている。……よくこの短い時間でそこまで考えたものだ』

『同感！ 何だかんだ久城君って一度考え出すと結構真相に近づくタイプなんだよね。時々考え事をし過ぎてひかれてるけど』

カタカタ！

ちなみに今の内容を確認と時間稼ぎがてらした所、何故かダーク・ネクロフィアはどこか感心したような態度をする。

横で時々茶化しながら聞いていたディーと罪善さんも一緒にだ。……いやちよつと罪善さん！ 聞いてないでしつかり周囲を威嚇してほらほらっ！

「お誉めに与り光栄だよ。……それに免じて逃がしてくれたりしないか？」

『それは駄目だ。お前は私の蘇るための生け贄の一人なのだから』

ですよねえ。簡単には逃がしてくれないか。ダーク・ネクロフィアは人形を抱え直しながら話を続ける。

『そもそも高寺達呼び出したのは私だ。本人達はサイコ・ショッカーを呼んだと思い込んでいたようだが。……そして呼び出されたので復活するための生け贄を要求したところ、奴らは了承した。私はただそれを取り立てに来ただけだ』

そうなんだよなあ。高寺達ときたら、カードの生け贄と解釈してはいつて答えてるか
らよろしくない。

『そしてあのサイコ・ショッカーは、どうせなら相手が呼び出したがっているモノをと考えて私が呼び出したモノだ。互いに復活するために協力し合うという約定でな。私の復活のためには、誰かが三体の生け贄で復活する事が条件になる。……そのために奴には必要以上の生け贄を集めさせることになったが、余剰分の生け贄は奴自身の強化にも繋がるので特に反対はしなかった』

つまりは互いの利害の一致だったってわけか。サイコ・ショッカーの復活⇨ダーク・ネクロフィアの復活にもなっていた訳だ。

『しかしこうなっては仕方がない。多少強引ではあるが、私自身がお前達をまとめて生

け贄にすることでサイコ・シヨツカーを再び復活させる。そうすれば約定により私も復活できる!』

「……なあ? 出来ればこいつらを生け贄にといいのは勘弁してくれないか? 純粋に

エネルギーが必要だってんなら、時間をくれればこっちで用立てても良いんだ」

俺は交渉を申し出る。勘違いしないで欲しいのだが、俺は最初からカードの精霊の実体化自体は止めるつもりはない。そんなの散々俺自身もやって来たことだしな。

あんまり向こうが悪さしない限りは不干涉で行く気もあるし、事と次第によつては協力関係だつて考える。こちとら四六時中カードの精霊やら「元」神様と付き合っているのだからそれくらいは許容範囲だ。

そして実体化に必要なのがエネルギーであれば、罪善さんが前やったみたいに調達も多分可能だ。俺から流れるエネルギーを少し分けても良いし、極論すれば今この辺りに居る幽体を罪善さんが吸収するという手も時間をかければ出来なくはない。

なので何とか話し合いで解決できないかと言つてみたのだが、

『断る。そんないつになるか分からないようなことよりも、今ここでこいつらを生け贄にする方が余程簡単で確実だ』

「……そうかい。じゃあ戦うしかないな」

俺は一応準備してきたデュエルディスクを腕に装着し、軽くデツキを調整した上でディスクにセツトする。

「これまでずつと我慢してきたんだけどな。いい加減こつちも頭にきてんだよ。……こいつらに手を出そうって言うんなら、そつちも痛い目を見る覚悟は出来てんだよなあつ!!」

今回の一件はほとんど高寺達に非がある。制御も出来ないのに精霊を呼び出し、おまけに安易によく分からない問いにはいと答える体たらく。最悪高寺達だけだったら見捨てるという選択肢もチラツと頭に浮かんだぐらいだ。

しかしサイコ・シヨツカーが生け贄に指名したのは十代。それもこつちの方がふさわしいなどという馬鹿げた理由でだ。そして目の前のコイツはもつと酷く、ここに居る全員を生け贄にしようとしている。

そして話し合いにも応じないとあつてはもうここまです。あとは腕づく力尽くで押し通るのみっ!

『ふっ! 良いだろう。我が生け贄よ。お前を最初の生け贄にした後で、じつくりと他の者たちを生け贄として復活してやろう』

相手はデュエルディスクこそ着けていないが、デツキらしきものを取り出して自分の左胸の辺りにセツトする。……つてそんな機能もあるの!?

『ほおほお！ 何だかんだ厄介ごとは避けて通る久城君にしてはえらくやる気だね。……一応言っておくけどこれ闇のデュエルだよ。さつき十代君がサイコ・シヨツカーとやったのと同じ命がけのデュエル。……怖くないのかい？』

デュエスクを構える俺に向けて、ディーが少しだけいつもより真剣な声色で聞いてくる。何だそんな事か。

「言うまでもなく怖いな。負けたら死ぬようなデュエルなんてやりたくもない。実際時間稼ぎ中に誰か起きてこないかなあとか普通に思ってたし、十代が起きたらそのままバトンタッチするつもりだった。でも一向に起きてこないし仕方ないだろう。……それに」

『それに？』

そこで俺は倒れている奴らを軽く見て、そのまま視線を倒すべき相手の方に向ける。「怖いのはまた別に、一発かましてやりたいって思うのもまた事実なもんでね。俺の友達に手を出した分は、きっちり返してやらねえとな」

俺は恐怖を怒りで抑えつけながら、もう一体の精霊との決戦に挑んだ。

遊兎対ダーク・ネクロファイア その一

『頑張つてね久城君！ こんな序盤でやられてしまったらつまらないからね』

カタカタ！

デイーはいつも通りにどこか気楽に、罪善さんは俺達の周りを囲む幽体を牽制しながら応援してくれる。おう！ 任せておけよ！

『精霊を従える者か。ますます我らの生け贄にふさわしい』

「従えるっていうか力を借してもらってるって感じだけどな。……それと生け贄になんかなる気は無いんで諦めな。……行くぞっ！」

「「デュエルっ!!」」

遊兎 LP4000

ダーク・ネクロファイア LP4000

『では、先手は私が貰う。ドロー！』

セットされたデッキからカードが飛び出し、ネクロフィアの手に収まる。くっ……な
んかカッコイイなそれ！

『私は手札から『怨念のキラードール』を攻撃表示で召喚。そして手札から、永続魔法『エ
クトプラズマ』を発動！』

相手の場に出現したのは斧を持った不気味な人形。そして続けて出されたのは、ター
ンの終わりにモンスターを強制的に生け贄にしてその攻撃力の半分のダメージを与え
る永続魔法。

この流れは……なるほど。

「さっきサイコ・シヨツカーが使ったのは元々アンタのデッキだったって訳か」

『ああ。これは自分が動けない代わりにサイコ・シヨツカーに貸していたデッキ。……
もちろんサイコ・シヨツカーのカードは抜いてあるが』

さっきの十代とサイコ・シヨツカーのデュエル。道理でサイコ・シヨツカーが使うに
しては閻属性にも機械族にもシナジーが無いと思った。完全に内容はオカルト物だっ
たからな。

『更にカードを1枚伏せて、私は魔法カード『手札抹殺』を発動！ 互いの手札を全て捨
て、その分だけ互いにドローする。私は2枚捨てて2枚ドロー！』

「俺は5枚捨てて5枚ドローだ」

初手からでは対策の仕様もない。手札を全て交換する。……さつきと比べると可もなく不可もなくと言った所か。

『私はこれでターンエンドだ。この瞬間エクトプラズマの効果発動。キラードールを生け贄に、相手プレイヤーにその攻撃力の半分、800のダメージを与える』

エクトプラズマのカードが光ったかと思うと、キラードールが周囲の奴らと同じ幽体となつて俺に襲い掛かってきた！

「うぐっ!」

幽体が俺の身体をすり抜けた瞬間、急激に身体から力が抜ける感覚があつた。それと同時に俺の足の先が僅かに透き通る。そこも十代と同じかよ。

遊兎LP4000↓3200

『まずは800LP。その分だけお前は生け贄となつたのだ。……残り3200。どこまで保つかな?』

「……確かに、これはキツイな」

こんなのを何度も受けたらたまらない。……だが、幸い薄くなつたとは言え足の感覚はある。まだまだ行けるな。

それにしても十代め。さつきもそうだけど、こういう危ないデュエルを周りに相談もせずホイホイ受けるんじゃないよ! このデュエルが終わったらその分も言つてやら

ないとな。

「俺のターン。ドロ―！俺は手札からフィールド魔法『ロボットミーコーポレーション』を発動！」

カードの発動と共に場に展開されるのは、生命の樹を逆さまにしたような施設。その部屋の一つに陣取り、俺は手札を再度確認する。

場にエクトプラズマがある以上、単純に攻撃力の高いモンスターを出していくのが定石。出来ればロボトミーコーポレーションの効果でコストを減らして一気に出したいところだが、

「……俺は手札から『オールアラウンドヘルパー』を攻撃表示で召喚！クリフォトカウンターを二つ乗せる」

「あなたのお供、ヘルパーロボットだよ！」

オールアラウンドヘルパー 星4 機械族 地 ATK1800 DEF1700
CC2

俺の場に現れたのは、ここ最近おなじみとなったヘルパーロボット。……丁度レベル5も6もさつき捨てられてしまったんだから仕方がない。

「ヘルパーでダーク・ネクロフィアにダイレクトアタックだ！行けっ！ヘルパー！」
「汚染が検出されました。クリーニングプロセスを開始します」

攻撃宣言と共にヘルパーが変形を開始する。一度脚部が白い楕円形の胴体に引っ込み、代わりに上下左右から計四本の刃物の取り付けられたアームが飛び出した。

……怖っ!? アレが掃除を命じた時の姿か? 完全に掃除と書いて抹殺って読む類の奴だよ! いつもと変わらぬ笑顔が逆に不気味だ。

〈対象確認。掃除開始〉

ダーク・ネクロフィアを認識したヘルパーは、刃物のアームを器用に使って高速回転しながら突進していく。あんなのに巻き込まれたらひとたまりもない。だが、

『畏発動!』『リビングデッドの呼び声』。墓地の『ジャイアントウイルス』を攻撃表示で特殊召喚する』

しまった! さっき手札抹殺で墓地に送っていたのか!? 突如毒々しい見た目の巨大なウイルスが、ダーク・ネクロフィアの壁になるように出現する。

ジャイアントウイルスは戦闘で破壊すると、相手に500ダメージを与えた上でデッキから同じカードを呼び出すという厄介なカード。このまま行けば戦闘ダメージを与えることは出来ても、代わりに向こうの増援が来てしまう。

「……攻撃は中止だ。戻れヘルパーっ!」

〈了解。スタンバイ状態に移行します〉

俺の命令を素直に聞き、ヘルパーはアームを引っ込めてそのまま帰還する。……本来

実体化した状態なら掃除と聞くとこのまましばらく暴れ続けるというデイーの話だが、カードで使う分にはまだ抑えが効くらしい。

「メインフェイズ2。俺はカードを2枚伏せてターン終了だ。……この時エクトプラズマの効果発動！ ヘルパーを生け贄に、その攻撃力の半分の900ダメージを受けてもらうぜ！ 行けヘルパー！」

〈了解。突撃します〉

ヘルパーは機械だけどエクトプラズマの効果で幽体になれるのかという懸念はあったが、そこはしっかりとカードの仕様が勝って半透明の幽体に。そのままダーク・ネクロフィアに突っ込んでLPをしっかりと削っていく。

ダーク・ネクロフィア LP4000↓3100

『ぐ、ぬうう』

「どうだっ！ 少しは勝手に生け贄なんかにしようとしている人の痛みが分かったかよ？ 今ならまだ痛み分けてことで勝負を無しにしても良いぜ」

『……生け贄風情が調子に乗るなっ！ 私のターンドロウ！ スタンバイフェイズ時、先ほどエクトプラズマの効果で生け贄となった怨念のキラードルが復活する』

一応停戦を呼び掛けたのだが、ダーク・ネクロフィアは僅かに苛立った様子でカードを手札に加え、墓地よりキラードルが効果で特殊召喚される。エクトプラズマとのコ

ンボはこれだから嫌なんだ。

『私はジャイアントウィルスを生け贄に『死霊伯爵』を攻撃表示で召喚する』

死霊伯爵 ATK2000

ウィルスを生け贄に現れたのは、仕立ての良い服にレイピアを携えたどこか貴族風の死霊。確か効果のないノーマルモンスターだったはずだ。

あのままジャイアントウィルスを出しておけば、効果ダメージと増援のことで俺は攻撃の際に少し考えざるを得ない。

それなのにわざわざジャイアントウィルスを生け贄にしてまで出すことは……
一気に決めに来る気か。

『怨念のキラードールで、我が生け贄に攻撃！』

俺の場にモンスターは居ない。強引にでも攻めるなら今だと考えたのだろう。……
だが、こっちの伏せカードを忘れちゃいないか？

「だから生け贄になんかなるかかっての！ 畏発動！ 『幻想体 血の風呂』。このカードは相手の攻撃宣言時、モンスターとして守備表示で特殊召喚できる」

幻想体 血の風呂 星3 ATK400 DEF1800 アンデット族 水

斧で切りかかるキラードールの攻撃に対して俺の場に現れたのは、全体を皮膚のような物で覆われ、中を大量の血で満たされた浴槽だった。

それだけでも恐ろしいのに、備え付けられている人の手首のようなシャワーヘッドから絶えず血が滴り落ち、おまけに浴槽の側面には大きな目が二つ瞳を閉じた状態で並んでいる。

こう言つては何だが、不気味さではこっちの幻想体だつて負けてはいないぞ！

『うわあく。傍から見るとどつちが悪役だか分からないフィールドだね』

「それを言うんじゃないよディー。……さあどうするダーク・ネクロフィア？」

血の風呂の方が守備力はキラードールより上だ。このまま行けば返り討ち。なので、

『……キラードールの攻撃は中止する。ならば死霊伯爵で血の風呂に攻撃！』

「当然そう来るわな。だけどただでやられると思うなよ！ 血の風呂の効果発動！」

死霊伯爵のレイピアが浴槽に突き刺さった瞬間、血の風呂の閉ざされた瞳がぎよろりと見開かれて死霊伯爵を見据える。

「血の風呂が特殊召喚されたターンの戦闘で破壊された時、攻撃したモンスターを墓地へ送る。死霊伯爵を墓地へ！」

血の風呂の中から何本もの腕が突如伸び、死霊伯爵を掴んで一気に引きずり込んでしまふ。そして死霊伯爵の腕だけが助けを求めるかのように浴槽から外に出たかと思うと、そのまま血の風呂ごと砕け散った。……予想より見た目がエグイな。

「その後、効果により俺の場のカードにPEカウンターを2つ乗せる。乗せる先は口ポ

トミーコーポレーションだ」

ロボトミーコーポレーション PE2

『ぐっ!?! メインフェイズ2。私は手札から『暗黒の扉』を発動』

相手の場に出されたのは、バトルフェイズにモンスター1体でしか攻撃できなくなるカード。なるほど。ロックをかけてじわじわエクトプラズマで削ろうって作戦か。

『私はカードを1枚伏せてターンエンド。エクトプラズマの効果により、怨念のキラードールを生け贄に捧げる。食らうがいい』

「うおっ!?!」

遊児 LP3200↓2400

再びのキラードールによる幽体アタックで、今度は腰の辺りまで半透明になってきた。それに比例して脱力感が強くなってくる。……これは早いところ決着をつけないとマズいな。

『おやおや久城君。大分ピンチになってきたんじゃないのかい?』

「分かっているっての! 俺のターン。ドロロー! 俺は場のロボトミーコーポレーションの効果を発動! スタンバイフェイズにデッキから3枚めくり、幻想体と名の付くカードがあれば1枚選んで手札に加えることが出来る」

相変わらずのデイーの言葉にどこか落ち着きながら、俺は気合を入れてデッキから3

枚めくり確認する。……よし。これだ！

「俺は『幻想体 大きくて悪いオオカミ』を手札に加える。残りはデツキに戻してシヤツフルだ」

相手に確認のため見せるのは、二本足で立つどこかユーモラスな姿のオオカミの絵柄のカード。

さあて。立体映像で見るのは初めてだが、一つ暴れてもらおうか。

遊兇対ダーク・ネクロファイア その二

遊兇 LP2400 手札4 モンスター0 魔法・罨 ロボトミーコピーション
 ン 伏せー

ダーク・ネクロファイア LP3100 手札0 モンスター0 魔法・罨 エクトプ
 ラズマー リビングゲッドの呼び声 暗黒の扉 伏せー

「俺は手札から永続魔法『エンサイクロペディア』を発動！ このカードは場のPEカウ
 ンターを任意の数使用することで効果を発動する。俺はロボトミーコピーション
 に乗っているPEカウンター2つを使用して効果発動！」

ロボトミーコピーション PE2↓0

俺の場に現れるタブレットのような物体の画面に、何かがぼんやりと映し出される。

「手札のレベル4以下の幻想体を1体特殊召喚する。手札から出すのはコイツだ！

『幻想体 たった一つの罪と何百もの善』を準備表示で特殊召喚。頼むぜ罪善さん！」

幻想体 たった一つの罪と何百もの善 DEF200

カタカタ！

場に出るなり、罪善さんが辺りを光で照らします。それはどこか暖かく、俺達を取り囲んでいた幽体達が少しずつ距離を置くほどだった。

『ぬうつ?!? これはっ?!?』

「罪善さんの効果により、手札か自分の場のカード1枚につき俺のLPを300回復する。俺は場のカードの数×300、1200ポイント回復だ」

遊兇 LP2400↓3600

LPの回復と共に、透けていた俺の身体もその分だけ元に戻り、感覚も戻ってくる。……よし。これなら行ける。

「ロボトミーコーポレーションの効果。このカードが場にある限り、幻想体を召喚する際の生け贄は1つ減る。俺は罪善さんを生け贄に、『幻想体 大きくて悪いオオカミ』を召喚! 召喚時にクリフトカウンターを2個乗せる」

輝ける頭蓋骨を生け贄に現れたのは、どこかユーモラスな外見の二本足で立つオオカミだった。

灰色の毛皮にだらりと前に垂らした白い前脚。先だけ真つ白な尾に可愛らしく突き出たへそ。眉毛だけ黒く、片目には刃物か何かで切られたような縦に真つ直ぐな傷がある。

立ち上がるとぎつと2メートル半ばになるかという巨体ではあるが、デフォルメされ

たような姿とどこか愛嬌のある仕草が怖さを中和している。

幻想体 大きくて悪いオオカミ 星7 ATK2400 DEF1800 獣族
地 CC2

『おっ！ これは中々強いのが出たね』

「1体しか攻撃できないって言うなら、それだけ強い1体を出せば良いだけのこと。バトルだ！ 大きくて悪いオオカミでダイレクトアタック！」

攻撃宣言と共に、デーイーが強いと評するオオカミがドタドタと二本足でダークネクロフィアに向かって走っていく。緊張感が削がれるなあ。

『畏発動！ 『死霊ゾーマ』！ 効果によりこのカードを守備表示で特殊召喚する！』

死霊ゾーマ DEF500

おっと!? そう来たか！ 死霊ゾーマはモンスターとして召喚され、戦闘破壊されると相手の攻撃力分のダメージを与える厄介なカード。……ならば！

「オオカミの攻撃は中止。メインフェイズ2に移行し、手札を1枚捨ててオオカミの効果発動！」

オオカミはゾーマの直前で急停止。そのままの勢いでずっこけながら慌ててこちらの場に戻り、大きく深呼吸をして息を整え始める。……なんかコメディックだけど、こいつの能力は意外にエグイんだぞ！

『そんなオオカミ一匹に何が出来る!』

「大きくて悪いオオカミの効果。手札を一枚捨てることで、相手の場のモンスター1体を装備カード扱いとしてこのカードに装備する。対象は死霊ゾーマだ」

『何っ!?!』

効果の発動と共に、オオカミは凄まじい勢いで息を吸い込み、場の死霊ゾーマを吸い込んでしまった。その分で大きく膨らんだ腹をポンポンと叩くオオカミ。

『死霊だけど腹の足しになるんだねえ』

そこっ! 余計な茶々入れないのっ! オオカミが戦闘で破壊されると装備したモンスターは元の場に戻るが、これなら戦闘破壊ではないから効果ダメージは発生しないぞ。

「……あとこのままターンを終えると、オオカミがエクトプラズマーによって生け贄になつて場がから空気になる。なので俺は手札から魔法カード『幻想体再抽出』を発動!

墓地の幻想体を1体特殊召喚する。俺が出すのは『幻想体 三鳥 審判鳥』

『なっ!?! そんなカードいつ墓地に?』

「まさか忘れたのか? お前が手札抹殺で最初のターン互いの手札を捨てさせたろ?

その時だよ。そして俺はターンエンド。……エンド時にエクトプラズマーの効果により、審判鳥を生け贄にする。行け審判鳥!」

場に現れた審判鳥が幽体となり、ダーク・ネクロフィアを貫いて攻撃力の半分の1400ダメージを与える。これは結構効いただろ。

ダーク・ネクロフィア LP3100↓1700

大きくて悪いオオカミ CC2↓1

「そしてターン終了時にオオカミのクリフオトカウンターが1つ減る。……どうだ？

サレンダーしないか？ そっちももうズタボロだろ？」

『……ふ、ふざけるなああつ！』

ダーク・ネクロフィアときたら、俺の言葉を挑発か何かだと思ったのか激昂してらっしやる。いや普通にこっちはもうここらへんでやめにしときたいんだって。

負けるつもりはないけどあの幽体アタックはもう食らいたくないだよ。結構キツイから。

『私のターン。ドロー！ ……ハハハっ！ 遂に来たぞ。スタンバイフェイズ時、墓地の怨念のキラードールを準備表示で特殊召喚する』

三度現れるキラードール。もうさっきの十代のデュエルから何回見てるか分からないぞ。過労死するんじゃないか？

「そして墓地に存在する悪魔族3体。『ジャイアントウィルス』『死霊伯爵』そして『死霊操りしパペットマスター』を除外する！」

っ!? やはり手札抹殺で他にもモンスターを捨てていたか。そして墓地の悪魔族3枚を除外して出すモンスターと言ええば。

『いよいよ我らの復活の儀式が始まる！ 私は手札から私自身『ダーク・ネクロフィア』を攻撃表示で特殊召喚！』

ダーク・ネクロフィア ATK2200

ダーク・ネクロフィアの場合、もう1体のダーク・ネクロフィアが出現する。このタイミングで攻撃表示で出すことは、狙いはアレか。

『バトルだ。ダーク・ネクロフィアで、大きくて悪いオオカミを攻撃！』

「迎え撃てオオカミ！」

大きな悪いオオカミの攻撃力は2400。その大きな前脚にある鋭い爪で、場のダーク・ネクロフィアを切り裂いて返り討ちにする。……だがここまではおそらく向こうの計算通り。

『私の分身を壊したな。だがそれが命取りだ。……私はこれでターンエンド。この瞬間、エクトプラズマの効果と、私の分身の効果が発動する』

「またかよっ!？」

まず毎度おなじみのエクトプラズマーとキラードールのコンボにより、俺のLPは800削られる。やっぱこの力が抜けていく感覚は慣れないな。

遊兎 LP3600↓2800

『そして、私の分身たるダーク・ネクロファイアの効果。このカードが相手によつて破壊されたターンのエンドフェイズ、相手の場のモンスター1体に墓地のこのカードを装備する。そしてこのカードの効果で装備したモンスターのコントロールを得る。こちらへ来い。大きくて悪いオオカミ』

先ほど倒したダーク・ネクロファイアの抱いていた子供の人形。その幽体がオオカミに纏わりつき、オオカミがフラフラと相手の場に移動する。

『ハハハハハ！ 形勢逆転だな！ 先ほどの言葉そっくりそのまま返そう私の生け贄よ。サレンダーするが良い。そうすればこれ以上苦しむ必要もない』

なるほど。確かに形勢は悪いな。強力なカードを奪われ、向こうのエクトプラズマーのコンボは未だ健在。このまま防ぎ続けてもLPを削り切られて終わりだろう。

……だが、それは前提を間違えているぞ。

『ハハハハハ……は？ 何だ？』

ダーク・ネクロファイアの高笑いが急に止まる。それはそうだろう。何故ならせっかく奪い取ったオオカミが急に頭を押さえて蹲りだしたのだから。

それと同時に俺の場に紅い月が出現する。そう。見る者の心をどこかささくれ立たせる血のように真っ赤な月が。

『何だっ?! 何が起こっているっ?!』

「何って簡単なことだ。お前はプレイングミスをした。オオカミがそつちの場に移ったことで、オオカミの効果でターン終了時にクリフトカウンターが1つ減り、0になる」
大きくて悪いオオカミ C C I ↓ 0

それと同時にウオオ〜ンと一声遠吠えを響かせ、大きくて悪いオオカミはその姿を変貌させていた。

シュツとした顔つき。眼光鋭く青く輝く瞳。血の滴る大きな爪。全身のいたるところに生々しい傷痕の残る四足歩行の巨軀。

デフォルメされた愛嬌のある姿は完全になりを潜め、そこには人から悪と断じられた一匹の獣が居た。

「大きくて悪いオオカミの効果。ターン終了時にカウンターが無い場合、このカードのコントロールは相手に移りまたカウンターを2つ乗せる」

『知ってるかいダークネクロフィア。……こいつは大きくて悪いオオカミ。場合によっては簡単に使い手を裏切るんだぜ』

デイーの言葉に反応し、オオカミは赤子の幽体を纏わりつかせたまま俺の場へ移動。

グルルと唸り声をあげてダーク・ネクロフィアを威嚇する。

『そ、そんなっ!!? そんなバカなことがっ!!?』

「これでまた形勢逆転だな。俺のターン。ドロロー。……これでトドメだ。大きくて悪いオオカミで、ダーク・ネクロフィアにダイレクトアタック。やれっ! オオカミ」

『ぐっ!!? ああああっ!!?』

俺の合図と共に、オオカミは残像が残るほどの速さでダーク・ネクロフィアに近づき、そのギラリと輝く爪でLPを全て削り取った。

事後処理とお説教

『あ、あアアアっ!?!』

LPが全て削り取られ、苦悶の表情を見せながら崩れ落ちるダーク・ネクロフィア。互いに命がけのデュエルだったとはいえ、負けて消えていくというのは見ていて辛いものがあるな。

「これで終わりだ。……こんな闇のデュエルなんてするもんじゃなかったな」

『……まだだ。……まだダアっ!』

「……っ!?!」

身体が崩れかけながらも、ダーク・ネクロフィアは必死の思いで手を伸ばす。俺の方……ではなく、倒れている十代や高寺達の方に。

『生け贄が……生け贄さえアレバ、私は、ワタシ達がフツカツ……やれイモノ共っ! 生け贄を確保スルノダっ!!』

もはやノイズ交じりの言葉で、デュエルの結果など知ったことではないとばかりに俺を無視して他の奴を狙わせるダーク・ネクロフィア。

そしてその号令に合わせて、倒れている十代達に襲い掛かる幽体達。罪善さんにも防

ぎぎきれないほどの数と勢いで殺到し、

『“人は死んだらどこへ行く？”』

それ以上の白い蝶の大群が、幽体の群れを横つ腹から覆いつくした。

幽体達は全身を蝶に集られ、次から次へとまるで眠るように消滅していく。

『……ナツ?!』

『迷える魂達を捕らえ統率していたのは君か。残念ながら、私は囚われた魂を救うことにかけては多少心得があつてね。君が弱つたことで統率が乱れた魂なら、安らかに眠らせることはひどく簡単だ』

そこにどこからともなく現れたのは、身の丈を超える大きな棺を立てて全開にした葬儀さん。棺からはまるで尽きる事の無いように白い蝶の群れが飛び出し続けている。

「そういえば一つ言い忘れてた。そっちがデュエルの前にデツキを組み替えたように、俺も直前にデツキを少し調整してさ。予めその葬儀さんを抜いてこつそり精霊化させて頼んでおいた。『念の為、奇襲に備えて身を隠してくれ』ってな」

『ふむ。こういつた仕事ならばお安い御用だ。管理者よ』

葬儀さんは恭しく胸に白腕を当てて一礼する。いちいち動きが洒落てんだよな葬儀

さん。

『何故……なぜ私のウゴギガッ!?』

「分かっていた訳じゃないぜ。……たださっきのサイコ・ショッカーみたく、負けても往生際悪く最後まで何かやらかすんじゃないかって考えただけさ。普通に消えるんだつたら葬儀さんもそのまま戻す予定だったしな」

古今東西、こういった悪党がただ潔くやられるなんてことはあんまり無いんでね。あんな目立つ罪善さんが堂々と守っていれば、それ以外の奴が陰に身を潜めて守っているなんて思わないだろう。

『クソっ！ クソオオオっ！』

ダーク・ネクロフィアは、そのまま怨嗟の声をあげながら消滅していった。何となく俺は合掌しておく。一応気分的にな。

残った幽体達は、大半が罪善さんに浄化吸収されるか葬儀さんによって消滅（というよりもはや成仏？）し、辺りはまた静けさに包まれる。

「……………ふう」

周囲を見渡し、幽体の残りが居なくなつたことを確認してほつと一息ついて座り込む。……疲れた。頼むからもうお代わりはやめてくれよ。実はさらに黒幕が居ましたとかだつたらもう嫌だよ俺。

『やったじゃないか久城君！ 中々に面白い戦いだっただよ！』

「互いに命なんかかけて、面白いも何もないさ。……デュエルは楽しむものだったのに、何が悲しくてこんなことをしなきゃならんのかねえ」

「デーイーが少しだけ感嘆した様子で言うが、俺の気は全然晴れない。……いつの間にか罪善さんが俺に光を当てて落ち着かせようとしてくれてるが、それでも落ち着かないってのは我ながら結構キツいみたいだ。」

「そこへサツと罪善さんのとはまた違う温かさの光、朝日が差して俺の身体を照らす。……ああ。やつと夜が明けたか。」

「いつの間にか高寺以外にもブルー生徒が二人倒れていて、おそらく以前に生け贄としてさらわれた二人だと判断する。これでやつと終わったみたいだな。」

「……………ううっ……………おっ!？」

「……………あれっ!？ もう朝なのか?」

「そこでやつと十代達が目を覚ました。仮にダーク・ネクロフィアの力で眠らされていたら仮定すれば、奴を倒したから目を覚ましたと考えるべきだろうか? ……まあ単に朝日が眩しくて目を覚ましたと考える方が自然かな?」

「十代達が起きると同時に、デーイーや罪善さん、葬儀さんはそつと姿を消す。十代や隼人が勘付くかもしれないからな。」

「よう！ そつちも今起きた所か十代？」

「遊児か……一体何があつたんだ？」

「さてね？ 俺も今起きた所だ」

寝ぼけまなこの十代に、俺も一緒に今まで眠っていたと咄嗟に誤魔化す。

嘘はあまり好きじゃないが、寝ている間に生け贄にされかけたというのはあまり良い気分じゃないだろう。ダーク・ネクロフィアのこととは言わずに俺の胸の奥にでも仕舞っておこう。

十代はそうかと寝ぼけながら頷き、鉄塔の傍に倒れている高寺達を見つけて慌てて駆け寄る。

「どうやら大丈夫そうだなや」

大徳寺先生が確認して皆ほつと一安心。やはり何だかんだ大人だからな。俺が言うよりも先生が言った方が、こういう時の説得力があるので十代達も安心するだろう。

「……あれは夢じゃないよね？」

翔がこの様子を見てどこか不安そうに言う。確かに、いきなりデュエルの精霊とデュエルしたなんて、現実味がないにもほどがある話だ。夢と疑っても仕方ない。

「よく分かんねえけど、俺は楽しかったぜ！ アハハハハ！」

翔の言葉に、十代はいつものように明るく笑った。他の面子を置いてきぼりにして。

デュエルの精霊が居るのも分かっていて、生け贄云々がおそらく本当だったという事にも気づいている。それでもなお笑うことが出来るというのは、ある意味主人公の才能であり美徳なのだろう。だけど、

「あたっ!?! 何すんだよ遊児!?!」

とりあえず一発チョップを脳天にかましておく。こういうタイプのバカは早いうちに気づかせないと後で大変なことになるからな。

「これはさつき、デュエルの精霊相手に自分の命をチップにして勝負を挑んだ分だ。……あのなあ。いくら十代が強くて自信があるからって、いきなり一人で突っ走るんじゃないよっ!」

「……でもよう。勝ったから良いじゃん!」

「結果的にはなっ! だけど万が一ということもあるだろうがっ! 一人じゃないんだから、やる前にまず相談しろよっ! それとも……そんなに俺達が信用ならないか?」

その言葉に、十代はハツとして俺や翔、隼人や大徳寺先生を見る。

「……アニキ」

「十代……」

翔と隼人は俺の言いたいことが分かったのか、ただ十代の名を呼ぶだけでそれ以上は何も言わない。大徳寺先生も、先ほどからフアラオを抱えて事の成り行きを見守っている。

る。

「十代。もつと皆に頼れよ。何でもかんでも一人でやろうとしないでき。俺達にも助けさせてくれよ。……友達だろ？」

おそらくこれは十代の悪癖だ。自分がなまじ強いから、ことデュエルにおいては人に頼るといふ選択肢がほとんどない。

主人公補正があるから大事な局面で負けるといふ事はまずないだろうが、それでも放つておくとどこまでも一人で突つ走つて行きかねない。そういうトコは早め早めに直しておかないとな。

「……ああ。そうだな。悪い皆。今回は俺がちよつと突つ走り過ぎてた」

「アニキ。……良いっすよ！ アニキが突つ走つて行くのもいつものことだし、僕はどこまでもついていくよ！ だけど、その前にちよつと話してもらえると助かるけど」

「俺も良いんだな！ もちろん頼ってくれるならそれも嬉しいんだけどな」

十代が軽く皆に頭を下げた謝るのを、翔と隼人は笑つて許した。その様子を見て大徳寺先生は何も言わず、ただうんうんと頷いている。

「さつてと、それじゃあそろそろ寮に戻ろうぜ。結局徹夜みたいになつちやっだし、餅も食い損ねたしな」

「あつ!? そういやあ腹減つてきたな。急いで帰ろうぜ！」

「じゃあ皆さんは先に行つていてくださいにや。ぼくは高寺君達が起きるまで待つて、簡単に事情を説明してからもどるのにや」

そういえば高寺達の事をどうするか考えてなかつた。そこへ都合よく大徳寺先生が名乗りを上げてくれたので、ここはありがたく頼らせてもらおうとしよう。事後処理はやはり年長者の仕事だと思ふしな。

「じゃあ先生。お先に失礼します」

「任せておくにや！」

細かい説明云々は、大徳寺先生に任せ、俺達はレッド寮への帰路につく。こうしてようやく長い夜は終わりを迎えたのだつた。

寮に戻り、サイコ・シヨッカーによつて出た食堂の被害（ガラスが割れたり物が倒れたり）を片付け、もうすっかり固くなつてしまつた餅を空腹という最高の調味料で平らげた後、俺達は自室に戻つて眠ることに。

多少自堕落ではあるが、幸い冬休みなので授業はなく、昼まで寝ていても怒る人もいないからな。激戦による疲れが溜まっているからという事でのんびり休ませてもらう。

そうしてベッドに入りさせて寝ようという所で、ふと今回の事件で気になったことを試しに聞いてみることにした。

「なあディー。一つ聞いても良いか？」

『うんっ!? 何だい?』

「今回の事件つてさ、原作……というか本来の流れでもあるんだよな? おそらく」

『そうだねえ。序盤では割と重要な話かな。全体で見ればまだまだ序の口って感じだけど』

だろうな。カードの精霊とのデュエルなんてのが重要じゃない訳がない。だが、

「それで不思議なんだけど、サイコ・シヨツカーを倒すまでは十代がやったよな。だけどその後の流れ。あれは完全に俺が起きてなかったらダーク・ネクロフィアの餌食になつてた流れだよな。もしかしてあそこで何かあつて、十代が目を覚ますイベントとかあつたりしたのか?」

もしそうなら、俺は主人公のイベントを横取りしたことになる。それで全体の流れが変わったら、この先どう転ぶか分かったもんじゃないからな。

俺の質問に対しディーの答えは、

『いや。特になかったね。というよりダーク・ネクロフィアの件自体が原作の流れにはないんだよ。面白いことにね』

「なぬっ?! ってことは……どういう事だ?」

まさか俺が居ることによってイベントが追加された? だとしたら余計にややこしいことになるぞ。ますます十代だけに事態を丸投げすることが難しくなる。

『僕の創ったこの世界は、基本的にアニメ版の流れに沿うものだ。だけど登場人物は全て生きている訳で、アニメ風に言うなら視聴者の視点以外でも常に世界の流れは進行し続けている。つまり』

そこでデイーは一度言葉を止め、わざとタメを作ってから結論を話す。

『あれは追加されたイベントというより、視点外で起きていたイベントと捉えた方が良いかもね。例えばそう、あそこで寝たふりをしてた誰かが誰にも気づかれずにこっそり倒していた……とかね!』

寝たふり? あそこで皆気を失っていたと思ったが、実は誰かが起きていたっていう事か? 一体誰が……ああくそっ! 疲れて頭が回らない。前にもあったなこんなの。「疲れて頭が働かない。……また明日じっくり話してもらってからな」

『良いともさ。今はじっくりお休み。……ああそれと言いだしたんだけどね。さつき葬儀君が何やら面白いものを見つけたようぞ』

お休みっていう割には普通に寝かせまいと話し始めるんだからこの「元」神様は……そんな事を思いながら、俺の意識はゆっくりと沈んでいった。



「やれやれ。十代君の実力を見るだけのつもりだったのに、それとは別に思わぬ掘り出し物を見つけてしまいましたにや」

倒れている高寺達が始まるまで見守りながら、大徳寺はついそんな言葉を漏らした。

普段の彼なら口に出すようなへまはまずないのだが、それだけだった今見た出来事が衝撃的だったのだ。

「精霊と共に戦うデュエリスト。腕もさることながら、戦いの後のことを予測して手を打っておくあの観察眼。実に良い逸材ですにや」

大徳寺は最初から眠らされてなどいなかった。ただあの時は相手の出方を伺うため、そして生徒の一人の思わぬ活躍を見るため、咄嗟に眠ったふりをしていたので。

もちろん最悪の場合、十代達や遊児に万が一のことが起こるようであれば、途中から勝負に割り込んででも大徳寺が片を付けるつもりであった。それでも教師であり、生徒を見捨てるつもりなど端からない。

だが結局大徳寺が出張の必要もなく、見事遊児は勝ってみせた。

「彼もまた要観察対象かにな。……十代君に遊児君。この二人なら……あるいは」

ヒュルリと一陣の風が彼の周りを吹き抜けていく。彼の言葉を聞いていたものはそ

の場には誰も居なかった。

調査依頼と拾った人形



冬休みが終わり、帰省していた生徒達も続々と島に戻ってきた。それからまたテストや実技に備え、勉強やら何やらの日々である。

……良い。これだよこれ。やはりこういう平穏が一番だ。この前の闇のデュエルみたいなことはそうそうあつてほしくはない。

『思っている割には、自分からそういったことを調べようとしているんだね?』

「さうつと思考を読むんじゃないよディー」

目の前の机に並べられた書類に目を通しながら、横から茶々を入れるディーに文句を言う。

コイツとききたら基本的に傍観者としてあるくせに、絶妙な所で口だけ出すものだから質が悪い。どうせなら手を貸してくれても良いのに。

まあ時々罪善さんにストレスを和らげてもらっているでそこまで怒ってはいないが。……あとその分アイアンクローを時折ディーにかましていることもあるな。うん。

ちなみに今は授業も終わって自室で勉強中。……と言っても授業のことではなくて、この学園内に存在する怪談や噂話をだ。

「今日の分の宿題も終わったし、息抜きに調べ物をしているだけだよ」

『へえ〜？ 息抜きにねえ。……それにしても、よくあの高寺君達が言う事を聞いてくれたものだね』

そう。目の前の書類は、この前の高寺オカルトブラザーズが収集してきた物だ。流石にデュエルのオカルト面の研究を活動内容にしているだけあって、学園内であればネットよりも広く深い情報を仕入れてくれる。

「穩便に頼み込んだ成果だよ。穩便に……な」

まあサイコ・シヨツカーに生け贄にされかける所を助けた恩とか、寮の食堂の修理代諸々とか、そういったものをちらつかせはしたが、最終的に決めたのは向こうだ。

それに調査代としてそれなりの額のDPを前払いしている。そこまで悪い話でもない。今回の罰も含めてそれくらいはやってもらわないとな。

「俺だって自分から首を突っ込みたくはないけどさ。最悪何か起きた時に事前情報があるに越したことはないだろ？ 転ばぬ先の杖って奴だよ」

『そういうものかな？ ……まあ良いさ。それで原作の流れの外の事件に出くわしてくれたらそれはそれで面白そうだしね！』

言ってるろ！ ……さて。ざつと目を通したが、やはりこれだけではどれが本物だかがセダか分らないな。こうなったら、

「レティシア。居るかい？ ちよつとネクを連れてきてくれ」

『は〜い！』

俺の声と同時に、元気良く返事をしながらレティシアが実体化する。だが以前と違うのは、その胸に何かを抱きかかえているということだ。それは、

『……何の用だ？ 我が生け贄よ』

「そう怖い顔をするなよネク。……いや、ダーク・ネクロフィア。早速仕事が出来たつてのに」

レティシアが持っていたのは、ダーク・ネクロフィアが抱きかかえていた赤子の人形。ただし壊れかけでは見た目がよろしくないのです、簡単にだが布を当てたり色を塗り直したりして修繕している。

これならまあまあ可愛らしく見えるな。まさかヘルパーにおもちやの修繕機能まであるとは知らなかった。……ヘルパーは掃除以外は本当に有能だ。

驚いたことに、あのダーク・ネクロフィアは実はこつちが本体だったのだ！

他の個体は見た目通りあのデカイ方が本体らしいが、こつちは突然変異か知らないがこちら側に自我があり、腹話術の反対で小さい方がデカイ方を動かしていたという。

『ぐっ！ 何故私が仕事なぞっ！』

『ダメだよネクちゃん。ちゃんとお仕事しないと』

「文句言わない。約束したはずだぞ。こっちの仕事を手伝う代わりにいずれお前を自由にしてやると」

ダーク・ネクロフィア改めネクは顔を歪ませて威圧するが、レティシアに撫でられながら言ってもたんなる可愛い人形にしか見えない。

あの戦いの時、ダーク・ネクロフィアのカードはオオカミに装備されたままだった。そしてその状態でデュエルが終了したことにより、カードと魂の一部がこっちのデツキに引つかかってきたのだ。

それを魂の動きに敏感な葬儀さんが目ざとく見つけ、器となっていた赤子の人形（デカイ方は完全に消滅して修復不可だった）を回収して入れ直したという訳だ。……本人は俺に確認を取った後で消滅させるつもりだったらしいけどな。

こんな状態ではこいつも悪さは出来ない。かといってこのまま放り出してはなんとも後味が悪い。……それに人を生け贄になんてしようとしたからな。その分の罰も必要だ。

という訳で出した結論が、精霊関係の情報を提供する代わりに俺のエネルギーを少しずつ差し出すという物だった。カードも器となる人形もあるのだから、あとはエネルギー

ギーを入れればいずれは復活できるという話だ。

「デカイ方の身体までは面倒見切れないので自分で用意してもらおう事になるが。

「ちゃんと仕事をすればその分エネルギーを流すから、あとは自力で復活しな。……それだけ溜まるのいつまでかかるかは知らないけどな」

『くうっ！ 何たる屈辱。……復活したら真っ先に餌食にしてくれる』

『ネクちゃんっ！ めっ！』

はっはっは。奴めレティシアに叱られてやんの！ 何故かレティシアが赤子状態のネクを気に入った時にはどうしようかと思つたが、案外上手くいつているようで何よりだ。

「……それでだ。早速ネクに聞きたいんだが、この中で本当に精霊かそれに近い何か絡んでいる話ってあるか？ 知っている分だけで良いから教えてくれ」

もう少し見ていたところだがそれでは話が進まない。俺は真面目な表情で書類をネクに見せた。

『……………これとこれ。あと……………これも多分絡んでいるな。残りは知らん』

ネクは嫌々ながらもその小さな指で一つずつ指差していく。

どれどれ……………ふむ。俺達が以前行つた特待生寮と、森の奥にあるカードの墓場とされている枯れ井戸。それと翔が以前怪談話で言つていた北の断崖にあるという洞窟の入

り江か。

特待生寮にそういうのがあるのは既に分かっている。あとは森の奥の枯れ井戸と洞窟だが。

「なるほど。……ディー。一つ聞くけど、これからの流れでこれらの場所は十代達と絡んでくるか?」

『うゝん。あんまり教えすぎるとアレだけど……まあ良いか! 絡む場所もあるし絡まない場所もある……といった所かな』

ディーはクルクルと周りを回転しながらそういった。そうか。そこで少し考える。もしこれらの場所で何か問題が起こるとして、俺が何か手を出すべきだろうか?……おそらく答えはノーだ。

俺が今やることは、この場所に行くとかそういった話を十代達がした場合、なるべくそこに近づかないこと。むしろ俺と一緒に行ったら話が混乱しかねない。

仮に行くにしてもせいぜいどんな具合か確認するだけ。それ以上は十代達主人公の仕事だろう。

「分かった。じゃあこの枯れ井戸と洞窟の情報を重点的に調査してもらえよう明日にでも高寺オカルトブラザーズに頼んでおくとするか。……現地に直接行かせるつもりはないけどな」

『あの三人じゃ、またうつかり変な精霊に絡まれたりするかもだしね!』

いや、そこまでは言わないけどさ。それにこつちが言わなくても、いくら何でもあれだけ痛い目を見たのにまた現地に乗り込んでいくなんてことは……無いよな?

「……ふう。ではひとまず今日はこのくらいで」

『割と良く調べたねえ』

息抜きのもりが大分時間が経ってしまった。僅かに固くなった目をほぐしながら、俺は立ち上がってグツと伸びをする。

手伝ってくれた精霊達も、皆どことなく疲れ気味だ。そこに、

コンコンコン!

「お〜い遊児! 居るか? 居たら飯食いに行こうぜ!」

「そうっすよ久城君! 今日は何んとエビフライの日っすよ!」

扉をノックする音と共に、十代と翔の声が聞こえてきた。もうそんな時間か。精霊達もそれを聞いて静かに姿を消す。十代だけならまだしも翔も居るからな。

「ああ! 分かった。先に行つててくれ! 用意したら俺も行くから」

早く来いよという声を残し、そのまま階段を下りていく音が聞こえる。さて、俺も早

く準備して夕食を食べに行かないとな。

広げていた書類を片付け、さっきの物以外の候補をまとめたメモを机の引き出しに仕舞い込む。準備と言つても後はあまりないし、そのまま扉を開けて食堂へ向かおうとした時、

『ねえ。ところでさ。……大徳寺先生には話さないのかい?』

俺の背に向けて、デイーがそうポツリともらした。……大徳寺先生か。

「……これは単に俺の推測というか直感だけどさ。あの人絶対これからの流れの重要人物だろ?」

『まあね。かなり重要な立ち位置』

デイーは隠す気が無いとばかりに答える。……考えてみればそうだよな。

主人公 十代の寮の寮長で、あんな特徴的な語尾な上にいつも飄々としていて、おまけにこれまで一度もあの人デユエルしている所を見たことが無い。さらに言えば担当科目が錬金術。ついでに言うとな糸目だ。

こんなにキャラが濃い上にフラグをポンポン立てておいて、重要人物でなかったら逆におかしい。

あとサイコ・ショッカーの事件の時、大徳寺先生がデユエルの精霊を研究してるって高寺が言ってたからな。余計に重要フラグが立った。

「……ディーがこの前言っていた、本来ダーク・ネクロフィアを倒すはずだったのもおそらく大徳寺先生だ。そう考えるとおそらく俺がやったこともバツチリ見られてる。……それで向こうから話しかけてこないと来れば、まだその時じゃないってことだ」

俺はディーに振り向いてニヤリと笑ってみせる。

「気が向いたら向こうから話しかけてくるさ。……もしかしたらこつちから話す必要が出てくるかもしれないけど、それまでは好きにさせてもらおうとしようか」

まあそんな事になった時点で、逃れられない厄介ごとと一緒にするのは間違いないだろうけどな。

伝説のデツキ特別展示

ある日の放課後。

「ふわあ〜！」

「おっ！ 寝不足か遊児？」

「ああ。この所少し疲れててな。むしろ何でそつちはそんなに元気なんだよ？ 十代の方が俺より動いてるくせして」

授業も終わり帰り支度をしていると、今日は珍しく翔と一緒にではなく一人の十代が聞いてきた。

何故疲れてるかというところ、この所やたらアニメの本筋と思しきことばかり起きて休む暇がないのだ。

この前は十代のテニス部一日体験入部に巻き込まれてなんかスカウトされかけたし、その次はオベリススクブルーの生徒ばかり狙ってアンティールでカードを奪う、通称闇夜の巨人デュエリストの捜索。

そして極めつけはつい一昨日のこと。なんと購買部のドローパーンの内、黄金のタマゴパンだけを盗んでいく無茶苦茶引きの強い泥棒を徹夜で待ち伏せするという大捕り物

をやったばかりだ。

連日の徹夜やら肉体労働やらで俺は割とキツイというのに、一番デュエルしてるはずの十代がピンピンしているというのがどうにも解せない。

「へへっ！ そりゃあ俺は授業中にぐっすりよ！ おかげでいつもバツチリ快調さー！」
「お前なあ。そんなことじゃまた筆記テストで赤点だぞ。それにそんな授業態度じゃ先生方に目を付けられる。……ただでさえクロノス先生とかから白い目で見られていつてのに」

得意げに胸を張る十代に対し、俺は呆れながら忠告する。数か月も一緒に授業を受けていれば嫌でも分かるが、この通り十代の授業態度は決して良いとは言えない。

授業中に居眠りは平気でするし、よく堂々と翔と話しているものだから先生方からの評判はあまり良くない。そしてもはや敵視していると行って良い先生が二人いる。

何かと縁のあるクロノス先生と、デュエル理論の授業を主に行っている佐藤浩二先生だ。

クロノス先生の方は入学の際に十代と何かあったようだが、佐藤先生に関してはおそらく純粋に性格の相性が最悪だ。あの人礼儀にとっても厳しいから。

「別に良いよ。俺つてどつちかかって言う理論より感覚派だし、筆記の成績が悪くても実技で取り返せば良いだけだしさあ」

「そういう問題じゃないっての！ ……つたく。また今日もいつもの面子で勉強会するからな」

「え〜っ！ ……まあ皆でワイワイやるのは悪くないけどさ」

十代は授業態度もそうだが、筆記の成績もあまり良くないからな。俺の勉強のついでに時々テストの傾向なんかを話し合つて勉強している。これでもマシになれば良いのだが。

「よっしゃ！ ……じゃあ早速購買部に行つてなんか買つておこうぜ！」

「そうだな。長丁場になるから甘いものや飲み物とかも必要になるしな。何か買つて行くか」

そうして俺達は購買部に寄つて勉強会の準備をすることにした。

「おっ!? 何の騒ぎだ? 喧嘩か?」

購買部に着いたのだが、何やら人だかりが出来ている。おかしいな? 今日は特に

デュエル大会は無かつたはずだけど。十代がいち早く駆けつけ、野次馬の中に居た三沢に話を聞き始めた。

俺も何とか人混みをかき分けて前の方に移動すると、人だかりの中心では二人の生徒

がソリッドビジョンでデュエルをしているのが見える。一人はライイエローの生徒か。もう一人は……翔っ！

「どうしたんだ翔」

「どうもこうもないっすよ。あれあれ！」

十代も気付いたらしく翔に手を振ると、翔は壁の一部に貼り付けられたポスターを指差す。その内容は、

「……デュエルアカデミアにて、初代デュエルキング武藤遊戯のデッキ特別展示。つてことは、遊戯さんの使ってたデッキがこの学園に来るのかっ！」

「これはもう見るしかないでしょ！……アニキ？ アニキい？」

十代は目を輝かせたまま想像の世界に入ってしまったようで、翔が目の前で手を振っても気がつかない。……まあそれはそうだろうな。武藤遊戯のデッキなら俺だって見たい。

少しして十代が立ち直り、俺も人混みを抜けて二人に近寄る。

「あっ！ 久城君も来てたんすね！ 二人共。神のカードは入ってないらしいけど、ブラックマジシャンやブラックマジシャンガール、他にもお宝カード満載の激レアデッキ。絶対見なきゃ損ですよ」

「それは分かったけど、この事態と何の関係があるんだ？」

「購買部で、朝一番で見られる整理券を配ってただけどきあ、最後の一枚になって、デュエルで決着着けることになったのよ」

十代の疑問に答えるように、カウンターで戦いを見守っていたトメさんが横から話す。その最後の一枚らしきものを指でひらひらさせながら。

「無茶すんなって翔」

「何言ってるんすか。あの整理券はアニキの分ですよ。僕の方は……ほらー!」

相手が格上という事で心配したのだろう十代の言葉は、翔の取り出した整理券でピタリと止まる。つまりここで翔が負ければ、自分の分が無くなるという訳だ。

「えっ! がんばれ翔!」

「わ、分かっているっす! デュエル再開っ!」

その言葉と共に、翔は再びデュエルディスクを構えて相手の生徒に向き合う。翔の場にはジェット・ロイドのみ。相手は伏せカード2枚か。戦況は微妙だな。

「俺のターン。魔法カード『大嵐』。場の全ての魔法・罠カードを破壊するノクネ」

「ノクネ? なんかどつかで聞いたような語尾だな」

「神楽坂はクロノス教諭のコピーデッキだ」

今度は俺の疑問に三沢が解説する。ああなるほど。どこかで聞いたと思ったら、クロノス先生に成り切っているのね。

そのまま神楽坂という生徒は、大嵐で自分の伏せカード『黄金の邪神像』を2枚破壊。一気に生け贄を揃え、クロノス教諭の代名詞である『古代の機械巨人』を召喚してみせる。前に実技の時間に見たカードの動きもそっくりだ。

そのままジェット・ロイドを攻撃するのだが、そこで予想外の事が起きた。

「ジェット・ロイドの特殊効果発動！ 僕が受けた攻撃は……そのまま返しだっ！」
なんと翔は効果で手札から罠『魔法の筒』を発動。古代の機械巨人の攻撃を跳ね返して相手のLPを削り切ったのだ。

……あれ？ 確かこの場合、古代の機械巨人の効果で手札からも罠は使えないはずだけど……アニメ版特有の効果かね？

神楽坂はそのまま力なく崩れ落ち、翔は嬉しさのあまり腕を突き上げる。

「凄いで翔！俺が苦勞したコンボをあっさり破りやがって」

「アニキとクロノス先生のデュエルを憶えて……それと久城君にも前ジェット・ロイドの使い方を聞いてたからだよ。ありがとうね久城君！」

「えっ！……いやまあ、役に立てたのなら良かった」

まあ細かいことはこの際気にしないでおこう。とにかくこれで俺も遊戯のデッキを見に行け……待てよ？

「ところで翔。これで貰うのが最後の一枚なら、俺の分は無いのか？」

「……………あつ!？」

その反応は忘れてたな。翔は困った顔をしながらトメさんから最後の一枚を受け取る。……仕方ない。おそらくこれも本筋の流れだろうし、ここは俺が我慢するか。……………見たかったけどな。

「さあさ。皆これでおしまい。帰った帰った!」

デュエルが終わったのを見届けて、トメさんがパンパンと手を叩きながら宣言する。確かに買い物もしないのにこんな所でたむろっていたら邪魔でしょうがないだろう。ひとまず俺が代表で勉強会用の買い出し(代金はあとでまとめて請求する)を担当し、十代と翔には先に行ってもらう事に。

他の生徒達も次々に買い物をする者以外は散っていく。のだが、

「なんだよ神楽坂の奴。ライイエローのくせに格下に負けてやがる。元々理屈ばつかで実戦はからつきしだからなあ」

「あいつもうじき降格かな」

聞こえるか聞こえないかの声量で、去っていく生徒の誰かがまだうなだれている神楽坂に向けてそんな陰口を叩いていった。うわっ! こんな落ち込んでいる奴に追い打

ちとは酷い。

流石に見かねたのか、三沢が神楽坂の傍に歩いていく。しかし、

「ドンマイ。まっ。ツイてないこともあるさ」

「うるさい！ いつだってオベリスクブルーに行けるお前に……何が分かるっ！」

下手な慰めはむしろ逆効果だったようで、神楽坂は三沢にそう叫ぶと一人走り去ってしまった。

そりゃあ三沢がいくら純粋な善意で手を差し伸べても、いつでも上に行ける奴が余裕ぶつていると捉えてもおかしくはないわな。

だけど神楽坂か。ああいうどこか心に余裕が無くなった奴に限って何かやらかすんだよな。何事もなければ良いんだけど。……おっと。今はそれより買い出し買い出しと！

その日の夜。

十代達の部屋で行われた勉強会も大体終わり、あとは軽く皆でだべってから自分の部屋に戻ろうという時、

「気持ちよかったなあ。格上の人にデュエルで勝つので！ ねっ！ アニキ」

「……ああ」

翔は今日の勝利が余程嬉しかったのかまだニマニマしている。といっても、なんだかんだ翔も隼人も最初に会った時に比べたら格段に強くなっているからな。ライイエローに勝つても別段不思議だとは思わないが。

それより気になるのは十代の様子だ。勉強会が始まる時から何か考え込んでいるように、今もハネクリポールのカードを眺めながらぼくつとしてしている。

「何考えてるんすか？ さつきからずつと」

「なあ。皆でちよつと展示会場に行かないか？ 明日会場が開くのは朝九時。つてことは、今夜の内にデツキは展示されてるつてことだろ？ 頼み込めば少しくらい見せてもらえるんじゃないか？」

何を考えているかと思えば、十代は要するにちよつとフライングしようと考えていた訳だ。確かにこういう場合、前日から展示品が準備されていることは多いが。

「それは良いかもな。明日は込み合うだろうし、人混みは苦手なんだな」

ちやつかり整理券を手に入れていた隼人がそう賛同する。……昼間翔と隼人の姿を見ないと思つたら、二人して整理券をゲットしに行っていたらしい。俺達にも言つてくれれば良いのに。

「え〜っ!? それつて僕が手に入れた整理券は使わないつてこと?」

「それはそれ。明日の朝もまた見に行くって！ 行こうぜ。……当然遊兎も行くだろう？」

少しむくれ顔の翔を指でツンツン頬をつつきながら、俺のことも十代が誘ってくる。うらむ。本来なら整理券が無い俺は見に行けないが、どさくさでチラリとでも見ればそれはそれで良いか。たまにはこうやってバカをやるのも良いかもしれぬ。ただ、

「面白そうだな。ただし、あくまでも向こうの責任者の人が見せてくれたらの話だ。ダメって言われたら大人しく引き返すこと。最低限それくらいは守るべきマナーつてもんだろ？」

「分かってるって！ じゃあ早速準備して展示会場に出発だ！」

「「おうー」」

あまり褒められた行為ではないが、見たいという気持ちに嘘は吐けない。……唯一整理券を持っていない俺に気を遣ってくれたというのもあるだろうしな。

という事で俺達は、他の生徒達に気づかれぬようこっそりと展示会場に向かったのだ。

遊戯デツキ盗難事件

「凄いな。武藤遊戯のポスターだらけだ」

「流石デュエルキングつすよねー！」

展示会場に着いた俺達は守衛に頼み込み、何とかほんの少しの間だけ見せてもらう許可を貰った。勿論入る時と出る時にボディチェックをしっかりと受けることを条件にだ。

そうして既にデツキが展示されているスペースへと歩いていく俺達。通路の途中あちこちにポスターが貼つてあるのを見て俺も感嘆してしまう。

流石初代主人公。無印からそれなりの時間が経っているはずだけど、今でもそれだけ強い人気を誇っているらしい。あの最終回からどのような流れを辿って行ったのだろうか？ ちよつと気になるな。

「ほらっ！ さつき貰ったパンフレットによると、その通路を曲がってすぐだつてよ！ 早く行こうぜ！」

「待ってくれよ〜」

もつとゆっくり見ていけば良いのに、十代は辛抱たまらなくなったのか遂に駆け出し

てしまう。それを追う俺、翔、隼人。……こらっ！ 通路を走るんじゃないよ！

「……おっ!？」

「おう！ 十代！」

先頭を走っていた十代が急に立ち止まる。そこはデッキが展示されている部屋。……その扉の前に、通路の反対側から三沢が歩いてきたのだ。

「三沢！ どうしたんだ？」

「ははは。ちよつとフライングして、キングのデッキを拝みにね」

「なんだ。皆考えることは同じか！」

「……」
「ここにも明日を待ちきれない奴が居たよ。しかし真面目な三沢ですらこの調子じゃ他にも居そうだな。そんな事を思いながら軽く談笑していると、

「マンマミーアっ！」

突如部屋の中から聞き覚えのある叫び声が響き渡った。

「何だ今のっ？」

「あの声は……クロノス教諭だ」

「行こうっ！」

声の様子からただ事ではないと判断し、俺達は慌てて部屋に駆けこむ。その中には、

「ンニヤっ!?! ガビ〜ンっ!?!」

中央に設置されたデツキが入っていたであろうガラス製の展示ケース。その一部が粉々に叩き壊され中身は空っぽ。そしてその傍らには慌てた様子のクロノス先生が……これはまさか。

「クロノス教諭っ!?!」

「キングのデツキが無いんだなあっ!?!」

「まさかクロノス先生が?」

翔の疑いの言葉にクロノス先生は慌ててノンノンと首を横に振る。

「皆に知らせようぜっ!」

「ちよつと待つゝノっ! 事が公になると、私が責任取らされるノゝネ」

クロノス先生がそう言つて外に出ようとする俺達を引き留める。

「もしかしたら免職かも」

「だから違うノゝネ! 私じゃないノゝネ! ないノゝネ!」

「んな事最初から分かつてるよ。先生ならガラスケース割る必要ないだろ?」

「そ、そうなのゝネ。ガラスケースの鍵あるノゝネ」

疑われて少し涙目になりながらも、クロノス先生は胸元からチャリつと音を立てて鍵らしきものを取り出す。

まあミステリー物なら容疑者から外れるためにわざとぶつ壊したという考えも出来

るが、それにしてはさっきの慌てっぷりはどうもホントっぽかったしな。

「十代。さっき守衛さんが言つてたんだが、少し前に警備の人が見回りをしたつて。その時はまだ無事だったつてことは」

「そうか！ ならまだ時間は経つていない。犯人を見つけ出すんだ！」

「ウゝ。ドロップアウトボーイ！ シニョール達だけが頼りなノゝネ！」

いやクロノス先生。ハンカチ持つて嬉し泣きしてる場合じゃないですつて！

「行くぞ！ 翔。隼人。遊児！」

「俺も居るぞ！」

「クロノス先生は守衛さんにこのことを説明して、念のため会場内の搜索をお願いします。まだ隠れているつてことも一応考えられますから」

「分かつたノゝネ」

さらつと忘れられかけた三沢も含め、俺達は早速会場の外を探すことにした。まだ犯人が遠くまで行つていないと良いんだが。

「それにしてもデツキ泥棒とは。カードが普通に盗まれることなんてあんまり無いんじゃないかつたのかディー？」

『あんまりであつて絶対じゃないからね。いやあそれにしてもこんな目に遭うとは災難だねえ久城君！ 実に面白い展開さ』

手分けしてそれぞれ犯人を捜すことになった俺達。俺は守衛さんから借りた懐中電灯を頼りに、一人近くの林の中を捜索していた。

今なら誰も居ないとばかりに、さつきから黙っていたディーがここぞとばかりに喋りまくっている。

「ディー。いい加減話してくれてもいいだろ？ 武藤遊戯絡みの事件なんてほぼ確実に本筋の流れじゃないか。……つてことは犯人も犯人の動きも分かっているんだろ？」

『まあ一応はね。……一つヒントを言うと、この林には来ていないよ』

「それならもつと早く言ってくれよ！」

『いやあゴメンゴメン！ 頑張つて何も無い場所を探す久城君の姿が意外と面白……ゲフンゲフン。いや、水を差しちや邪魔になるかなと思つて』

おのれこのやる。思いつきし愉快犯じゃねえか！ ……全部終わったらまたアイアンクローの刑だからな。

『でもまああんまり話しすぎるとマズいのも事実なんだよね。全部知ってしまったらつまらないし、それに他のキャラクターの成長に繋がらないつてことにもなりかねない』
「だから話す気が無いつてか？ ……はあ。んで？ ここに居ないとなると、一体犯人

はどこに居るんだ？ それぐらいは良いだろ？」

『さあてどこだろうね？ まあ良い時間だし、そろそろ一度待ち合わせ場所に戻ってみたらどうだい？』

確かに気づけばそれなりの時間が経っている。見つからなくてもある程度時間が経ったら集合すると決めてあったから、他にも誰か戻っているかもしれないな。

「遊児っ！ こつちだこつち！」

待ち合わせ場所である近くの橋に行くと、そこには既に十代、隼人、三沢の三人が揃っていた。

「こつちの林には誰も居なかった。そつちはどうだ？」

「だめだ」

「怪しい奴は居なかったぞ」

皆して口々に首を横に振る。そうか。一体どこに行ったんだ？

「……そういえば翔はまだ戻ってきてないのか？」

「ああ。翔なら海岸の方を探しに行くってさっきこの橋を渡って」

「うわああああっ!!」

その時、どこかから翔のものらしき叫び声が響き渡った。もしかして犯人と何かあったんじゃない?

「しまった! あつちか! 翔っ!」

そう言う十代を先頭に、俺達は翔が向かったという海岸に向けて走り出した。

海岸に辿り着いた俺達が目にしたのは、近くにある岩から転がり落ちたのかひっくり返っている翔と、

「凄い。俺がこんなに強い。ハッハッハッハ!」

それを別の岩から見下ろして高笑いしている神楽坂の姿だった。こんな所で何笑ってるんだアイツは?

あとなんか雰囲気の前と違う。首にはやや擦り切れたマフラーをたなびかせ、服の裾は鋭く広がっている。髪は前よりも逆立ち、シャツには大きな逆三角形の模様。あれではまるで、

「翔! 大丈夫か?」

「……アニキ。悔しいよ。アイツが」

翔は何とか一人で起き上がる。……良かった。倒れてはいたが特に怪我はしていない

いようだ。二人共デュエルディスクを装着している所を見ると、どうやらここで一戦交えたらしい。

「お前が犯人か！」

十代がひよいっと身軽に翔が立っていたと思われる岩にジャンプする。相変わらず十代は身体能力も高いな。

「そのデッキを返せ。今ならクロノス先生も大事にはしない」

「ふっ。嫌だと言ったら？」

「何？」

クロノス先生も事が大きくなったら責任を取らされる。そのことを踏まえて話し合おうとする十代だが、神楽坂は聞く耳を持たない。

「これこそ俺が求めていた最強のデッキだ。俺なら、武藤遊戯のデュエルも徹底的に研究している俺なら。彼のデュエルを百パーセント再現できる！」

そうして神楽坂は自身満々に両手を広げ、天を仰ぎながら大声で言い放った。

「もう俺は誰にも負けない！ クロノスだろうが、カイザーだろうが、誰にもっ！」

「翔。デュエルディスクを寄せ。……誰にも負けないって言うなら、俺とデュエルしろ！ そしてもし負けたら、デッキは潔く返すんだ」

十代は神楽坂の言葉を聞いて闘志を燃やす。デュエルで全てを解決する男としては、

この状況はむしろ望む所なのだろう。

「お前、本当に俺に勝つ気でいるのか？」

「遊戯さんのデツキとやれるなんて、こんなワクワクすることはないぜ」

「良いだろう。相手をしてやる」

神楽坂は自身満々にデュエルディスクを構える。当然だがさつき翔と一戦交えていたので、既にデツキはセット済みだ。

「アニキっ！」

翔は十代に向けて自分のデュエルディスクを放り投げる。それは十代目掛けて綺麗な放物線を描いて飛んだ。

あとは放っておけばおそらく十代が解決するのだろう。相手が武藤遊戯のデツキだろうが、あくまで使うのは別人。苦戦はするだろうが、別の使い手に十代主人公が負けるとは思えない。

それがおそらく本筋。ならば下手に関わらず、このまま傍観に徹するのが最善手。
……だが、

「悪いな。少し借りるぞ」

十代がキャッチする直前で、横から俺がガシツとディスクを掴み取った。そのまま俺も十代と同じ岩に登る。……流石にジャンプして飛び乗るのはちよつとキツイ。

「おい！ 何すんだよ？」

「……すまないな十代。この勝負。俺にやらせてくれないか？」

俺は静かにそう十代に頼む。デュエルを楽しむ十代にとつて、こんな風に横からかつさらわれるのは良い気分はしないだろう。だが、それを分かった上で敢えて頼み込む。「そつちが乗り気なのは分かっている。……だけど、今回だけは譲つてくれないか？」

……頼むよ」

「それは、相手が遊戯さんのデツキだからか？」

頭を下げる俺に十代は理由を尋ねる。確かに使い手はともかく武藤遊戯のデツキと戦えるというのは一種の名誉であり、それが狙いかと思うのは当然だろう。だが、

「いや。それとは関係ない。……単にアイツにむかつ腹が立っただけだ」

「……そつか。じゃあしようがないな。今回は譲つてやるよ！」

クリクリ〜！

十代はそう言つて岩から身軽に飛び降り、彼のデツキからハネクリボーが出てきて可愛らしくウインクする。勝負は俺に任せて応援してくれるってことだろう。……ありがとうな。

カタカタ！

負けじと罪善さんも精霊化して俺を掩護すべく光を浴びせる。ハネクリボーとは友達なのかライバルなのかよく分からん立ち位置なんだよな。両方かも知れないが。

「ありがとよ罪善さん。……待たせたな。まさか対戦相手が変わったからさっきの約束は無しって言わないよな？ 負けたら潔くデツキを返すっていう」

「それこそまさかだな。言っただろ？ このデツキを使う以上、もう俺は誰にも負けないと。それなのにわざわざ逃げる必要がどこにある」

神楽坂は圧倒的な自信と共にそう言っつて不敵な笑みを浮かべる。……ああ。またか。

「お前は何も分かっつてない。俺は誰にも負けなんつて言葉はよお、そうそう気軽に言っつて良い言葉じゃないんだ」

「……っ!？」

俺を見ていた神楽坂が、何故か一瞬だけ雰囲気か元に戻ったかと思うと怯えたように後ずさりし、すぐにまた不敵な笑みを浮かべて立ち直る。

「……俺の知っつているある男は、自身の進退を懸けた大一番で自分は負けないと宣言した。どんなに相手が強くても決して逃げず、卑怯な手も使わずに戦い……そして宣言通り負けなかった」

俺はそこで神楽坂を見据える。俺の目の前に居る奴からは、あの時の万丈目から感じ

たような圧も覚悟も感じられない。

「自分や仲間を鼓舞するために言うのは良い。何があつても負けるつもりはないという覚悟を持つてそう言っているならそれでも良い。だがそのどちらでもなく、ただ強い力遊戯のデッキを持つただけでそんなことをほざくなら」

俺は服からデッキを取り出しディスクにセット。そのまま腕に装着して構えを取る。

「十代には悪いが、俺がお前をぶっ潰す」

憧れた人の心からの覚悟の言葉を、こんな奴には汚させない。

VS 遊戯デッキ 遊兎対神楽坂 その一

「デュエル!!」

遊兎 LP4000

神楽坂 LP4000

ザザーンときぎ波が岩場を打ち付ける中、俺と神楽坂のデュエルが始まった。

「先攻は貰うぜ。ドロロー！俺は手札から『幻想体 幸せなテディ』を攻撃表示で召喚」

幸せなテディ 星4 ATK1500 DEF1200 獣族 地

まず俺の場に現れたのは、子供なら余裕で包み込めるくらい大きなテディベアだ。

だがかなりくたびれていて茶色の毛並みはボサボサ。白いボタンで出来た目は右目が取れてしまっていて、元々は丸かつただろう右耳は虫にでも齧られたのか左耳に比べて少し短い。

破れた生地のおちこちから綿がはみ出し、後から着けられたと思われる首に結った緑色のリボンも大分色あせている。

「俺はさらにカードを一枚伏せ、ターンエンドだ」

初手はまずは様子見。相手の出方によってこれからの手を決めるつもりだ。

「頑張れよ遊児！」

「久城君！ そんな奴ぎやふんと言わせて欲しいっす！」

「ああ！ 任せてくれ」

口々に飛ぶこちらへの声援。さあ神楽坂。武藤遊戯のデッキでまずはどう出る？

「俺のターン。『幻獣王ガゼル』と『バフオメット』を手札融合！ いでよ！ 『有翼幻獣キマイラ』！」

有翼幻獣キマイラ ATK2100

神楽坂が『融合』を使って呼び出したのは、翼の生えた双頭の獣。あれは以前読んだ無印のマンガ版で見覚えがあるな。

「初手から攻撃力2100のモンスターか。いきなり飛ばしてくるな」

「行けっ！ キマイラ！ 『インパクト・ダッシュ』！」

神楽坂の号令と共に、双頭の獣はぬいぐるみの獣へと襲い掛かる。食らいつき、切り裂き、ねじ伏せるために。……しかし、幻想体は見かけほど柔ではない。

「幸せなテディの効果。攻撃表示のこのカードは1ターンに1度、戦闘では破壊されない」

「だがダメージは受けてもらう」

テディベアがキマイラの突撃を受けて吹き飛ばされ、その風圧が俺にまで押し寄せ
る。

遊児 LP4000↓3400

「幸せなテディの効果。戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウン
ターを3つ乗せる」

幸せなテディ PE3

「小癪な真似を。俺はこれでターンエンドだ」

まずは向こうが主導権を握ったつとどこか。だがこれは序盤も序盤。この程度なら
簡単にひっくり返る程度ではない。

「翔。奴と戦ったんだろ？ 何か遊児にアドバイス」

「それが……融合には融合でスチームジャイロイドを出してキマイラを倒したは良いん
だけど、キマイラにはやられたら融合素材を1体場に復活させる効果があったんだ。そ
れで次のターン上級モンスターに繋げられてそのまま」

隼人が俺達が来るまでの戦いの様子を聞くが、翔はその時の展開を思い出したのか俯
いてしまう。

融合使いの最大の悩みは、とにかく手札の消費が激しいことだ。現代の環境なら1枚
だけで融合というのも珍しくはないが、基本は最低でも融合+素材(2枚以上)。単純に

考えて3枚必要になる。

その点目の前のキマイラは、やや基本ステータスが低い代わりにやられてもガゼルかバフオメットが場に残る。多少ではあるがコストが抑えられるという点では優秀だ。

融合には融合という翔の手は悪くないが、それで手札を一気に消耗したところを叩かれたって所か。

「……けど、前に翔が一度勝てた相手なら、遊児だって大丈夫さ。強いデッキには、高いレベルのタクティクスが必要」

「それはどうかな？ 神楽坂は記憶力が良すぎて、自分で組んだデッキは無意識のうちに誰かのデッキに似てしまう。そこを突かれていつも勝負には負けるが」

隼人の言葉を否定する様に、三沢が神楽坂について解説する。

「デッキを真似るってことは、一瞬で他人のデッキの特徴を読み取るってことだ。デッキからそれを作ったデュエリストの人格まで読み取り、そのタクティクスを再現する。今奴の持っているデッキが最強と言うなら、今のアイツは無敵のデュエリストという事だ」

つまりは、神楽坂は凄まじく真似るのが上手いデュエリストってことか。……なるほど。それならさつきから所々に感じる武藤遊戯（闇遊戯）ムーブも領ける。

「そんなっ！ それじゃあ今アイツはデュエルキングそのものってことっ!? そんな相

手どうすれば」

「……でも、どこまで行ってもあくまで真似っこだろ？」

一度負けた翔には相手の強さがより絶望的に伝わったのだろう。一層その顔に不安の色が濃く浮かぶ。だが、その不安を払いのけるように十代が明るく言う。

「遊戯さんじゃない。なら十分勝ち目があるはずだぜ。……それに、今戦っている遊児が少しでも負けそうな顔に見えるか？」

「……見えないね」

何故か皆が俺の表情を遠くからチラチラ見てくる。確かにまあ負けるつもりは今のところないが。

「つてなわけで、頑張れよ遊児！ 物真似野郎なんかになんかに負けんなよ！」

「言われなくとも！ 俺のターン。ドロー！」

声援を受けながら、俺は引いたカードを確認する。……よし。反撃開始だ。

「俺は手札から『幻想体 母なるクモ』を攻撃表示で召喚！」

母なるクモ 星3 ATK1900 DEF1000 昆虫族 地

新たに召喚されたのは、突如どこから垂れ下がってきた黒い繭のように見える何かだった。

繭は大きさのバラバラな赤い目が多数表面に浮かんでいて、それらがそれぞれ別々に

ぎよろぎよろと周囲を見回している。

カードの絵柄からしてもそうだったけど、全然蜘蛛って見た目してないな。もしかして雲の方だとか？ しかし種族は昆虫族だったしな。

「うわあ！ またなんか不気味なのが出てきたっす！」

「ああ。遊児のデッキって意外とゾツとする見た目の奴が多いんだよな」

「俺もそう思うんだな」

オイこらその仲良し三人組。聞こえてるぞ！ ちょびつと気にしてんだから言うんじゃないよ！ 罪善さんとか葬儀さんとか結構良い幻想体も多いんだが、如何せん見た目がなあ。

「気を取り直して……バトルだ！ 幸せなテディでキマイラを攻撃！」

「馬鹿が！ キマイラの方が攻撃力は上なんだぞ」

俺の掛け声が聞こえたのか、テディはゆっくりとキマイラの方へ歩き出す。だが結果は先ほどと同じ。キマイラの体当たりを食らって吹き飛ばされてしまう。

遊児 LP3400↓2800

「久城君！ 大丈夫？」

「ああ。……なんでこんなことをしたのかって顔だな？ それは……こういう事だ！」

翔が心配する様に声をかけてくる中、俺はよく見るとばかり相手のカードを指差す。

そこには、

「なっ!! キマイラがつ!!」

キマイラがさつき吹き飛ばしたはずの幸せなテディに抱きつかれていた。いや、締め上げられていた。これがほんとのベア^熊ハグ^{抱擁}。

「幸せなテディと2度戦闘を行ったモンスターは、ダメージステップ終了時に破壊される……のだけど」

体格だけで言えば圧倒的に勝っているはずのキマイラが、純粋な腕力だけで締め上げられ、骨がボキボキと折れる音と共に消滅する。

その光景に一同啞然。……というか俺もビックリだよっ!! 何あれ? 見た目と違っつてすげえ力技だよ! もうちよつとこうふわつとした感じで倒して欲しかった!

『今なら皆テディの方に注意が逸れてるから出ても大丈夫そうかな?』

「デイー。一体何なんだアレ?」

『ただの愛情表現だよ。テディは凄まじく甘えん坊で寂しがり屋だからね。何度も接して気に入った相手に親愛の証としてハグをするんだけど、力が強すぎて大抵の相手はあの通りさ』

みんなの視線がテディに釘付けになっている内に、こっそり現れたデイーが説明してくれる。ただのハグであれっつて、どんだけ力が強いんだよ!! ……もしあれが実体化し

たらどうすれば良いんだ？

「……っ!? キマイラの特殊効果発動! このカードが破壊された時、墓地にあるバフオメットかガゼルを特殊召喚できる。蘇れバフオメット」

バフオメット DEF1800

神楽坂も放心状態から何とか脱し、キマイラの効果で守備モンスターを展開する。だ
けどこつちもまだ攻撃は終わってないぞ。

「まだまだ! 母なるクモでバフオメットを攻撃!」

ただあの繭みたいな状態でどう攻撃するのか割と気になっていた。もしやあのまま
振り子のように勢いをつけて突進とかじゃないだろうな？

次の瞬間、繭がバツと拵がった。

それは本当に一瞬のこと。だがその一瞬で繭から放たれた黒い鎌のような脚が、守り
の姿勢を取っていたはずのバフオメットを袈裟斬りにし、そのまま何事もなかったかの
ように元に戻っていた。

……いやだから怖いってのっ! 予想の斜め上のやり方でバツサリだったよ!

バトルフェイズが終わり、それぞれ戦闘したことによってPEカウンターが乗る。

幸せなテディ PE3↓6

母なるクモ PE2

「良いぞ久城君！ 僕がやられた手をこんなにあつさりど！」

「翔にさつき相手の手の内を聞いたおかげさ。……これでそつちの場はがら空きになつたぞ神楽坂。バフオメツトを生け贄にして上級モンスターを出す予定だったのなら当てが外れたな」

「ふん。キマイラを上手く倒しただけで良く吠える。だが、このデツキの真の力はここからだぜ！」

神楽坂は相変わらず余裕たつぶりの態度。思いつきりなり切つてるな。だが、

「それは結構。いくら何でもこんな程度しか扱えないんじや、本物の武藤遊戯だつて嘆くというものだ。もっと気合を入れてかかつてこいや！ カードを1枚伏せ、俺はこれでターンエンド」

挑発ならこつちだつてお手の物。指をクイクイ曲げてからかつてみせる。

この程度の実力しか出せないのに、俺は負けないなどと言われたんじや言葉の方が汚れるつて話だ。せめて元の使い手の半分程度は扱ってもらわないとなあ。

さあ。第二ラウンドと行こうじゃないか！

VS遊戯デッキ 遊兎対神楽坂 その二

遊兎 LP2800 手札3 モンスター 幸せなテディ 母なるクモ 魔法・罨
 伏せ2

神楽坂 LP4000 手札3 モンスター0 魔法・罨0

「俺のターン。カードを1枚伏せ、手札から魔法カード『死者転生』を発動。このカードは手札を1枚捨て、墓地のモンスター1体を手札に加える。墓地より幻獣王ガゼルを手札に加え召喚！」

先ほどキマイラの融合素材として使われた角の生えた獣が、守りの構えをとって場に現れる。だが壁モンスター1体だけならすぐに押し込めるぞ。

「さらに魔法カード『光の護封剣』を発動する。これで貴様のモンスターは3ターンの間攻撃できない！」

効果により空から光の剣が俺の場に降り注ぎ、モンスター達を囲い込んで動きを封じる。

「光の護封剣とはまた面倒なカードを。だが、これでお前の手札は切れたぞ。護封剣が消えた後凌ぎきれるかな？」

「今はただ、つかの間の優位をじっくり楽しんでいるが良いぜ。俺はこれでターンエンド」

手札が0で劣勢だつていうのに神楽坂のあの余裕。あれは一種の空元気か、それともあの伏せカードに何かあるのか？ この状況では判断つかないな。

「しっかし流石遊戯さんのデツキだ。そう簡単にダメージは与えられないか」
「ああ。遊兎が攻めきれないんだな」

まあこのタイミングで光の護封剣を出されると一気に攻撃の手が止められる。マズい時に出されたなと思う。

しかしそれならそれで、時間があるうちにこっちも攻め手を増やしていくだけのことだ。

「俺のターン。スタンバイフェイズに母なるクモの効果発動！俺の場に子蜘蛛トークンを守備表示で特殊召喚する！」

子蜘蛛トークン 星1 ATK500 DEF500 昆虫族 地

手のひらサイズの一般的なサイズよりやや大きめの蜘蛛が、母なるクモの繭の中からボトリと産み落とされる。これ虫嫌いの人が見たら失神ものじゃないか？

「攻撃が出来ないと言うなら、さらに場に展開していくのみ！俺は手札から『幻想体三鳥 罰鳥』を攻撃表示で召喚！」

俺の場に腹に赤い模様の付いた白い小鳥が召喚される。

このカードは攻撃される際、破壊こそされるもののプレイヤーへのダメージは0。そして相手のモンスターを道連れにしていく。

攻撃表示において攻撃してくればそのまま迎え撃てるし、幸せなデディと合わせることにより戦闘面に関しては盤石になるはず。

だが、俺がモンスターを出したのを見て神楽坂は静かに笑みを浮かべたのだ。

「ふっ！ お前が新たなモンスターを召喚するのを待っていたぜ。俺はこの瞬間罠カード『黒魔族復活の棺』を発動！ このカードは、相手がモンスターを召喚した時、そのモンスターの魂と自分のモンスター1体と引き換えに、墓地にある魔法使い族1体を復活させる」

えっ！ それって確か自分の生け贄にするモンスターも魔法使い族じゃないといけない奴じゃなかったっけ？ いや、それよりも重要なのは、

「墓地にある魔法使い族のモンスターだと？ バカな。お前の墓地にあるのはキマイラとバフオメット」

そうそう。十代の言った通り、今神楽坂の墓地にはそれしかモンスターが居ないは

ず。……待てよ？

「いや。あつたのさ。俺が墓地に魔法使い族を送るチャンスが」

「そうか！ ガゼルを手札に戻した時に使った死者転生。あれのコストで捨てたヤツだな？」

「ご名答！ 俺はガゼルと罰鳥を生け贄に、いでよ！ 『ブラック・マジシャン』！」

神楽坂の場に、どこぞの吸血鬼でも眠つていそうな仰々しい意匠の棺が出現し、一度蓋が開いてガゼルと罰鳥を吸い込んだかと思うと、そのまま入れ替わりに黒い衣装を身に纏った魔術師が出現する。

「ブラック・マジシャン。こいつが遊戯さんのデッキの象徴とも言えるモンスター」

「攻撃力2500。なるほど。さつきから余裕ぶっていたのはこれを狙っていたって訳か」

しかし困った。マズイことに、今の俺の手札にはブラック・マジシャンを何とかできるカードはない。また幸せなテイでダメージ覚悟で効果破壊しようにも、光の護封剣のせいでこつちからは攻撃できない。

召喚できればある程度は何とかできるカードは有るが、さつき召喚権も使ってしまったから出すことは出来ない。神楽坂め。トークンが出た時に使わないと思つたらこれを見越してか。

「ここは耐えるとするか。母なるクモを守備表示に変更してターンエンドだ」

幸せなテディの戦闘破壊耐性は攻撃表示の時のみ。なので敢えて攻撃表示で残しておく。……まあ2度同じ手には引つかからないだろうけどな。

「俺のターン。俺は魔法カード『千本ナイフ』を発動！ このカードは、自分の場にブランク・マジシャンが存在する時、相手モンスターを破壊する」

神楽坂の周囲に大量のナイフが出現する。ドロートしたカードが除去カードとは良い引きだな。ならこのタイミングで狙うとすれば、

「またそいつに抱きしめられちゃ敵わないんでな。幸せなテディを破壊だ！」

滞空していたナイフが一斉にテディに向かって殺到する。ならば、

「永続罨発動！ 『業務終了』。場のPEカウンターを5つ取り除くことで、魔法・罨・モンスターの効果の発動を無効にし、破壊する。俺は幸せなテディと母なるクモからそれぞれPEカウンターを使用！ 千本ナイフは無効だ！」

幸せなテディ PE6↓3

母なるクモ PE2↓0

何かのスイッチを押す絵柄のカードが場に出現したかと思うと、多数のナイフがテディに当たる直前に消失する。

……ふう。間に合ったか。業務終了は効果が強い分、カウンターの消費がかなり激し

いんだよな。序盤ではあまり使えないのが難点だ。

「小賢しい真似を。なら、ブラック・マジシャンで母なるクモを攻撃！」
『ブラック・マジック
黒・魔・導！』

黒き魔術師の放つ光弾が、母なるクモに直撃して打ち砕く。残された子蜘蛛はその様子を見てどこか寂しそうだ。

「これでターンエンド、……ふっ！ 貴様程度のデュエリストが俺に勝とうなんて、千年早いぜ」

「言ってくれるじゃないか。エースを出しただけで……満悦か？」

だがブラック・マジシャンだけならともかく、まだ光の護封剣が残っているので攻撃は出来ない。こっちも除去カードを引くか耐えしのぐかしないとな。

「俺のターン。ドロー！ ……俺は永続魔法エンサイクロペディアを発動！ 効果により、幸せなテディのPEカウンターを3つ使い、墓地のレベル4以下の幻想体を特殊召喚する。戻ってこい罰鳥！」

幸せなテディ PE3↓0

場のタブレット端末が光り輝き、先ほど見せ場もなく退場させられた白い小鳥を攻撃表示で呼び戻す。当然場に出たことでクリフォトカウンターも4つ乗る。

罰鳥 ATK100 CC4

「そして俺は、幸せなティディと子蜘蛛トークンを生け贄に、『幻想体 魔法少女 絶望の騎士』を準備表示で召喚！ 1枚伏せてターンエンドだ」

古ぼけたティディアと親を失った子蜘蛛を生け贄に、黒き涙を流す異形の女騎士を場に召喚し、次への布石を打ってひとまず終了。罰鳥の効果でターン終了時にクリフオートカウンターが1つ減る。

絶望の騎士 DEF2600

罰鳥 CC4↓3

「あのカード!? 僕達とのタッグデュエルで出てきたカードだ!」

「ああ。あの時は苦戦させられたよな」

「だけどこれで、いくらブラック・マジシャンとはいえ迂闊に攻撃出来なくなっただな!」

今のところ手札にブラック・マジシャンを倒せるカードはない。だが持ちこたえるだけであればこれで十分だ。

「どうやらブラック・マジシャンに手も足も出ないようだな。俺のターン」

「だが、そっちだって絶望の騎士には攻撃できないだろう? こっちの方が守備力は上だからな」

「……そう言つて罰鳥への攻撃を誘つているようだが、その鳥の効果は知つている。俺もカードを1枚伏せてターンエンドだ。姑息な手も無駄だったな」

まあそんな簡単に引つかからないわな。しかし流れは完全に膠着状態だ。これはどちらが先に状況を打破できるカードを引くかにかかつているな。

「では俺のターン。ドロロー」

カタカタ！

引いたカードは罪善さんか！ ……よし。ならここは一つ仕掛けてみるか。

「こころえろ遊児！ このターンで光の護封剣の効果は終わる。そうすればきつと逆転のチャンスはある！」

単人の言葉通り、このターンのエンドフェイズに光の護封剣は消える。だが、

「ああ。確かにこのターンをしのげば消える。でも、別にこつちから仕掛けても構わな
いだろう？ 俺は手札から『幻想体 たつた一つの罪と何百もの善』を守備表示で召喚
！ 頼むぜ罪善さん！」

たつた一つの罪と何百もの善 DEF200

俺の場に現れたのは、毎度おなじみ輝きを放つ頭蓋骨。そして、

「罪善さんの効果発動！ 俺の場合か手札、どちらかのカード数×300のLPを回復する。俺は場のカードを選択。枚数は罪善さんも含めて6枚！」

「合計1800ポイントだ?!」

「それだけじゃない! 俺は罪善さんの効果にチェインして永続罫『幻想体 テレジア』を発動! このカードによりさらに500回復し、光の護封剣を破壊する!」

罪善さんが神々しい光を放つのと同時に、最初からずっと伏せてあったカードがオーブンされ、くるくると人形の回るオルゴールが音楽を奏で始める。

「上手いつ! これならターン終了まで待つこともなく光の護封剣を突破できる」

「ふつ! それはどうか? 俺は伏せてあった速攻魔法『サイクロン』を発動! テレジアを破壊する!」

三沢の感心する声も虚しく、神楽坂の場から巻き起こった疾風がオルゴールを吹き飛ばし、さらにそれによって場のカードが減り罪善さんの回復量もダウンする。

遊児LP2800↓4300

「ああ。惜しいつ!」

「だが、これで遊児のLPは神楽坂を上回った。フィールドだって数だけなら遊児の方が優勢だ。まだまだ勝負は分からないぜ!」

と皆は言ってくれているが、ここでテレジアが壊されたのはちよつと痛手だ。これぞ罪善さんを絶望の騎士で守りながら、相手の伏せカードを毎ターン壊していくという手は使えなくなった。

「仕方ないか。俺はこれでターンエンド。これによりまた罰鳥のカウンターが1つ減る」

罰鳥 CC3↓2

「よし。3ターン経過！」

俺のターン終了の宣言と共に、光の護封剣の効果が切れて光の剣が消滅する。……ふう。やっとか。

「やった。これで久城君も攻撃が仕掛けられるぞ！」

「ふっふっふ。次に奴が攻撃に回ることができればの話だな。俺のターン！」

神楽坂は引いたカードを見てニヤリと笑った。これはそう簡単には突破させてくれなさそうだ。

VS 遊戯デッキ 遊児対神楽坂 その三

遊児 LP4300 手札1 モンスター 絶望の騎士 罰鳥 罪善さん 魔法・罨
 エンサイクロペディア 業務終了

神楽坂 LP4000 手札1 モンスター ブラック・マジシャン 魔法・罨0

さて。今の神楽坂の様子から見るに……何か良いカードでも引いたか？ さつきから神楽坂の引くカードがことごとくタイミングが良い。デッキの強さは当然として、本人のドロロー力も相当なものだ。

「行くぜ！ ブラック・マジシャンで、たった一つの罪と何百もの善を攻撃！」

「攻撃宣言時、絶望の騎士の効果発動！ 場のモンスター1体の攻撃力・守備力を500アップし、一度だけ破壊を免れる。俺は罪善さんを選択！」

絶望の騎士が祈りを捧げるとともに、どこからともなく数本の剣が出現して罪善さんを護るように展開。ブラック・マジシャンが放つ光弾を弾き返す。

「悪いけど、絶望の騎士が居る限り、そう簡単には破壊させないぜ。いくらブラック・マジシャンが相手と言ってもな」

「神の居ない今、ブラック・マジシャンは遊戯デッキのエースモンスター。抑えることができれば久城にも勝機がある」

三沢が解説してくれているように、エースを動かさなければいくら強いデッキだろうと回らない。このまま抑えながら粘れば勝ち筋はある。

「ふっ。絶望の騎士か。確かにそのカードの護りは強力だ。だが、このデッキはお前達の想像をはるかに超えている。神のカードが抜けた穴を十分に埋める程にな。俺は手札より速攻魔法『光と闇の洗礼』を発動！」

なっ!? さっき引いたカードはそれかっ！ なんてタイミングで！

カードの発動と共に、ブラック・マジシャンを黒い靄が包み込む。

「このカードは、自分の場のブラック・マジシャンを生け贄に、自分の手札・墓地・デッキの中から『混沌の黒魔術師』を特殊召喚する！」

「混沌の黒魔術師って」

「伝説の魔術師^{マジシャン}。最強レベルモンスターの一人」

「そうだ。貴様らは今から伝説を目にする。デッキからいよいよ！ 混沌の黒魔術師っ

！」

靄が晴れた時、そこにいたのはブラック・マジシャンとは似て非なる者だった。衣装が全体的に禍々しくなり、肌もやや青白くなっている。

「このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、墓地から魔法カード1枚を手札に加える。俺は死者転生を選択！　そして混沌の黒魔術師の攻撃力は、ブラック・マジシャンを上げる2800ポイント！」

「マズイぞ。遊児の絶望の騎士を上回ったんだな?」

「いや……もつとマズイ!」

隼人の言葉に十代が顔色を変えながら追加する。そういえば隼人や翔の前では、絶望の騎士のデメリットを見せたことがなかったな。

「俺は混沌の黒魔術師で、たった一つの罪と何百もの善を攻撃！　食らえ。『滅びの呪文』!」

「えっ!?　絶望の騎士じゃなくて?」

神楽坂の動きに翔は疑問の声を上げるが、この状況ではこっちの方がキツイ。

ブラック・マジシャンの時よりも威力が上がった光弾が、絶望の騎士の剣の守護を貫いて罪善さんに直撃する。

罪善さんは耐えきれず、そのまま光の粒子となつて消滅した。スマン罪善さん。……まあ精霊として俺の傍に移動したただけだけど。

そして、守護する対象を喪つたことで、絶望の騎士のデメリットが発動する。

「うそっ!?!　絶望の騎士の様子が!?!」

「なんか急に苦しみ出したんだな！」

それまで祈りを捧げるように合わさっていた両手で顔を覆い、どこか慟哭するような動きをする。いかん。暴走の前兆だ！

「絶望の騎士の効果。このカードの効果が発動中に選択したカードが破壊された時、場の魔法・罫を全て破壊し、互いのLPを半分にする」

もはや彼女のその姿は痛ましいものに変貌していた。前腕部と顔の左半分を覆う闇はより深く浸食し、黒い棘がいくつも体の内側からドレスを突き破って生えている。

泣き叫ぶ絶望の騎士の剣が荒れ狂うように周りを飛び回り、俺の場のエンサイクロペディアと業務終了が破壊される。

おお。カードがまとめて吹き飛ばされた。相手側に魔法も罫もないからこっただけ一方的に辛い。

そしてそれだけでは足らぬとばかりに、剣は俺と神楽坂にそれぞれ飛来する。服をかすめ、肌を切り裂き、腕に突き刺さる。……映像と分かっただけでも痛い気がするな。

遊児 LP 4300 ↓ 2150

神楽坂 LP 4000 ↓ 2000

「うわっ！ 前にも見たことあるけどエッグイナこれ」

「そして散々暴れまわった後、絶望の騎士は手札に戻る」

彼女の剣の最後の標的は、護るべきものを護れなかった彼女自身。

自らの剣を身体の内側に突き立てられ、絶望の騎士はまるで涙のような形の粒子をまき散らしながら消滅して俺の手札に戻る。だから演出が凝りすぎだったの。

「これが……絶望の騎士のデメリット」

「なんとというか、その……おつかないんだな」

翔と隼人も呆然としている。そうだよな。俺も最初に見たときはビビった。暴走の果てに最後なんか自決だもんな。下手なホラー映画より怖い。……というか、

「絶望の騎士の効果をよく知っていたな神楽坂。この効果を使ったのはほとんどないってのに」

効果を知らなければ、あの状況では絶望の騎士をそのまま攻撃するのが普通だ。

そしてディーとのチュートリアルデュエルの時にはそれなりに使ったが、学園生活の中ではまだ数回だけ。ソリッドビジョンでは一度しか使っていないので、知っている人の方が少ないはずだが。

「勿論知っている。その暴走の様子は以前タッグデュエルの時に見たからな」

「……なるほど。あの時居たのか」

十代達と一緒に出たタッグデュエル大会。あのあとの大乱戦で、場所の空いた時に一度だけソリッドビジョンを使って俺もデュエルしている。

あの時の相手がやたらモンスター破壊の手際が良い奴で、今回と同じく絶望の騎士が護り切れない時があった。結果として勝つことができたものの、あの時もひどい目に遭ったからな。

その時は翔も隼人も疲れて先に部屋に戻っていたから、絶望の騎士のデメリットを知らなかったんだ。十代は最後まで戦っていたから当然見えていたけどな。

「あの時のデュエルは見事だった。だが相手が誰であろうと、この最強のデツキを手にした俺の前では結果は同じだ。……言っただけだぜ。お前が俺に勝とうだなんて、千年早いつてな」

おっ！ 今一瞬だけ武藤遊戯の姿が神楽坂にダブって見えた。今のセリフは本当に闇遊戯が言いそうな言葉だったものな。……だけど。

「それはどうかな？ デュエルっていうのは、LPが0になるまで結果は分からないもんだぜ」

「マズいよ！ 久城君の場が一気にボロボロに!？」

「神楽坂の場には攻撃力2800の混沌の黒魔術師。おまけに、今でこそ遊児の方がLPは上だが、神楽坂に自発的に与えたダメージは未だ0。こりゃあ……勝つにはちよい

と難しい状況になってきたな」

「いや。遊児はまだ諦めた顔はしてないぜ」

「そうなんだな！」

翔や三沢はやや悲観的なムードになっているが、十代や隼人はそうでもなさそうだな。……まあその通り俺はまだ全然諦めていないんだが。

「さて。互いに手札も場も少なくなっただけど、勝負はこれからだな。俺のターン！」

カードをドローし、手札を改めて確認する。また何とか絶望の騎士を呼び出したとしても、混沌の黒魔術師の攻撃力の前じゃ防ぎきれない。となると。

「俺はカードを一枚伏せ、罰鳥で神楽坂に攻撃！ このカードは効果で直接攻撃が出来る！」

白い小鳥がすくくと神楽坂の方に向かって飛び、そのままその額を嘴で突つつく。痛みはないはずだがとっさに顔を腕で庇う神楽坂。

神楽坂 LP2000→1900

「くっ?!」 だが、たかが100ダメージだ」

「ああ。確かにたかが100のダメージだな。だけど、これで無傷じゃなくなっただろう。どうだい三沢？ これでもまだ諦めムードか？」

「……ふっ！ ああ。さっきの言葉は訂正するよ。まだまだ勝負は分からないってな」

たとえ僅かだろうが自分の力でダメージを与えた。それだけでも諦めを吹き飛ばすには十分だ。

「俺はこれでターンエンド。そしてまた罰鳥のカウンターが1つ減る」

罰鳥 CC2↓1

「さあどうする神楽坂？ 罰鳥のカウンターが無くなった時の効果は知ってるよな？」

あの時絶望の騎士の効果を見ていたなら、当然その後のことも」

罰鳥の効果。ターン終了時にクリフォトカウンターが0の時、場の最も攻撃力の高いモンスターを破壊する。この場合は当然混沌の黒魔術師だ。

かと言って攻撃したら、罰鳥はそのモンスターを道連れに破壊する。どっちにせよこれで混沌の黒魔術師は倒すことができる。

「小賢しい真似を。俺のターン。ドロロー！ ……なに。簡単なことだ。攻撃したモンスターが破壊されるというなら、他のモンスターで攻撃するだけのこと。俺はこいつを召喚。『クリボー』！」

クリクリ〜！

クリボー ATK300

「クリボーを普通に攻撃に参加させてくるのかよ!?!」

「バトルだ！ クリボーで罰鳥に攻撃！」

クリボーが罰鳥に体当たりを決め、破壊されながらも罰鳥も負けじと効果発動！ 腹の赤い模様が全身に拡がり、そのまま裂けて大きな口となりクリボーを一呑みにする。相打ちではあるがこれではあまり割に合わない。

「これでお前を守るモンスターは居なくなつた。混沌の黒魔術師でダイレクトアタック！」

「させるかよっ！ 畏発動！ 『幻想体 血の風呂』。これをモンスター扱いで守備表示で特殊召喚だ」

血の風呂 DEF1800

がら空きの俺の場を守るように、血に塗れた不気味な浴槽が出現する。さあどうする？

「……攻撃は中止だ。俺はこれでターンエンド」

やはりこれも知っていたか。血の風呂は出たターンに破壊されると、そのまま相手と道連れにするカード。……幻想体ってそういう奴が地味に多いんだよな。

「今攻撃せずとも、このターンが終わればそのカードの効果はなくなる。次のターンで潰せばいい」

「あつちやゝ。これで上手くいけば久城君の血の風呂で混沌の黒魔術師を墓地に送れたのこ」

「やるな神楽坂。遊見のカードの特徴を、全てではないがよく掴んでいる」

しかしこの状況は正直辛い。相手のカードも着実に減らしてはいるが、混沌の黒魔術師に主導権を握られていることに変わりはない。

もし相手にもう1体攻め手が追加されたら、それだけでこっちの布陣は崩壊しかねない。その前に、

「巻き返せるカードよ来てくれ。ドロロー！……これだ！俺は魔法カード『人ならざるモノからのギフト』を発動！手札の幻想体を1枚捨て、カードを3枚ドロローする。俺は絶望の騎士を捨てて3ドロロー！」

ただしもし引いた中に幻想体が1枚もなければ、デメリットによりそれまでの手札も合わせて全て捨てなくてはならない。そうなったらさらにこっちが劣勢になるので、俺は気合を入れて3枚引く。

「……引いたカードの中から幻想体を1枚公開しないと、俺は手札を全て捨てるリスクがある。そして今引いた中から公開するのは、『幻想体 魔法少女 貪欲の王』」

俺が神楽坂に見せるのは、前部が透けた黄金の卵の中に封印された少女のカード。

暴走がどれも怖い魔法少女の中でも、さらにとびっきりの暴れ馬。だけど、

「この状況、こいつでひっくり返してやろうじゃないの！」

VS遊戯デッキ 遊児対神楽坂 その四

遊児 LP2150 手札4 モンスター 血の風呂 魔法・罾0

神楽坂 LP1900 手札1 モンスター 混沌の黒魔術師 魔法・罾0

「この状況をひっくり返すだと？ お前にできるのか？」

「やれなきやどのみち負けは濃厚。なら、やってみせるさ。俺は手札からフィールド魔法『ロボトミーコーポレーション』を発動！」

「試すような神楽坂に対し啖呵を切り、俺はフィールド魔法を発動。それと共に、足元に巨大な逆向きの生命の樹を模した施設が展開される。」

「何っ？ フィールドが妙な施設に」

「見たか！ これが久城君のフィールドさっ！」

「なぜか翔が誇らしげに言う。幸いなことに、あの時このカードは使っていなかったから神楽坂も能力は知らないようで驚いている。今がチャンスだな。」

「このカードの効果により、幻想体の召喚に必要な生け贄が一つ減る。俺は血の風呂を

生け贄にレベル7、『幻想体 魔法少女 貪欲の王』を攻撃表示で召喚！」

貪欲の王 星7 ATK2800 DEF1500 魔法使い族 闇

血に塗れた風呂を生け贄にして召喚されたのは、大の大人がすつぽり入ってもまだ余裕のあるほど巨大な黄金の卵。そしてその前部から透けて見える琥珀の結晶と、その中にまるで眠っているかのように漂っている少女だった。

褐色の肌には白い長髪。黄色をメインカラーとした動きやすさを重視したドレスに身を包み、髪と同じく白いネックレスとブレスレットが褐色の肌に合っている。

「攻撃力2800だどっ?! 混沌の黒魔術師と同じ!？」

「スゴイスゴイ！ だけど貪欲の王？ 初めて見るカードだ」

「ああ。俺もだ」

このカードには皆して首を傾げている。それはそうだ。このカードは扱いづらさ故、これまで人前で1度も使ったことがないのだから。

「貪欲の王の効果。場に出た時、このカードにクリフォトカウンターが1つ乗る。そして他の幻想体と同じくターン終了時にカウンターが1つ減り、0の時効果が発動する」

貪欲の王 C C 1

1しか乗らないんじゃない、実質毎ターン暴走するようなカードだからな。おちおち場に出せないんだよこれ。

「ではバトルだ！ ただし貪欲の王は効果により、攻撃の度に手札か自分の場のカードを1枚墓地に送らなければならない。なので手札から1枚墓地に送り、貪欲の王で混沌の黒魔術師に攻撃！」

その上、攻撃の度にコストが要るんだから実に面倒だ。だがその分の働きはする。

貪欲の王の前に、以前憎しみの女王が展開したのとよく似た魔法陣が発動！ そこへ琥珀部分から光が放たれ、魔法陣を通して混沌の黒魔術師に向けて照射される。

対する混沌の黒魔術師も、光弾を向かってくる光に向けて発射。攻撃力が同じなので互いの攻撃が中間で留まっている。

「何っ!?! 相打ち狙いか!」

「いや。違うな！ 貪欲の王の効果。自身が攻撃したダメージステップ時、その攻撃力はエンドフェイズまで500アップする。よって貪欲の王の攻撃力は3300まで上昇する！」

「攻撃力3300だどっ!?!」

それに呼応するように貪欲の王から放たれる光が強まり、光弾を?み込んでそのまま混沌の黒魔術師に直撃。伝説の魔術師は粒子となって消滅する。

神楽坂 LP1900↓1400

「なっ!?! 混沌の黒魔術師がっ!?!」

「よっしやく！ 良いぞ遊児！ 混沌の黒魔術師を倒したぜ！」
 「見事だ。まさか伝説の魔術師を打ち破るとは」

あゝ。十代に三沢。実は喜ぶのはちよつとだけ早いんだよこれが。

「戦闘を行ったことにより、貪欲の王にPEカウンターが4つ乗る。そしてメインフェイズ2。俺はカードを1枚伏せてターンエンド。それにより貪欲の王の攻撃力は元に戻り、クリフオートカウンターが1つ減る」

貪欲の王 ATK3300↓2800 PE4 CC1↓0

カウンターが0になったことにより、当然暴走が始まる。

貪欲の王の琥珀部分にピシツとヒビが入り、そのままドンドン黄金の卵部分にまで拡がっていく。まるで中から何かが孵化するかのよう。

「……なんか貪欲の王の様子がおかしいんだな？」

「まさか！ さっきの絶望の騎士の時と同じっ!？」

「そうだ。貪欲の王の効果。自分のターン終了時にカウンターが0の場合、場のこのカードより攻撃力の低いモンスターと裏側表示のモンスターを全て破壊。そして互いのプレイヤーに1000ダメージを与えた後、またクリフオートカウンターが1つ乗る」

ついに卵が割れ、琥珀の結晶が砕け散った瞬間、

卵が琥珀の中の少女を呑み込んだ。

そして卵はそのまま姿を変貌させる。巨大な口にそれとは似つかわしくない小さな目と足。姿だけならどこか黄金の魚のようにも見える巨躯の怪物へと。

アツハツハツハツハ!

化け魚の巨大な口の中。何者をも噛み砕き呑み込むであろう鋭い牙のその奥には、少女の首から上だけが生えて狂気に満ちた笑い声をあげていた。

「……………何アレ?」

「映像では俺も初めて見たけど、こうなるのかよ」

翔がそう呟いた言葉は、この場にいる俺以外の全員が思っているであろう言葉だ。

……正直俺自身も絶望の騎士のことから覚悟はしていたが、まさかソリッドビジョンだとここまで精神を削ってくる姿になるとは思っていなかった。

残る憎しみの女王も多分こんな感じだろうけど、なんか映像で見るのが怖くなってきたな。

貪欲の王はそのまま周囲に琥珀色の光をまき散らしながらその巨躯で暴れまわり、俺と神楽坂に1000ダメージを与えた後、やっと大人しくなって元の卵の状態に戻る。

遊兎 LP2150↓1150

神楽坂 LP1400↓400

「何とか落ち着いたか。……さあてどうする神楽坂? さつきとは立場が逆転したぜ」

「ふっ！ それはどうかかな？」

言ってくれるな。さっきの俺の言葉をそのまま返してきたか。それじゃあここは一つお手並み拝見といくか。

「この程度で、俺のデッキを破れると思うなよ。俺のターン。ドロロー！ 俺はカードを1枚伏せて魔法カード『天よりの宝札』を発動！ 互いのプレイヤーは、手札が6枚になるようカードを引く」

「げっ!? 漫画版で最強のドロローカードじゃないか!? 実際にあるカードとは全然違う効果だけど、よりによって漫画版の性能かよ！ 俺の『人ならざるモノからのギフト』なんかよりよっぽどチートだぞそれっ！」

互いに手札は0なため、一気に6枚ドロローとなる。これ下手するとこのターンで決着がつくぞ。

「俺は『ワタポン』を特殊召喚。このカードは魔法・罠・モンスター効果でデッキから手札に加わった時、場に特殊召喚できる」

神楽坂の場に、白い綿毛のようなモンスターが出現する。カード効果によるドロローで手札に加えたんだから条件は満たしているな。

「そして、ワタポンを生け贄にいでよ！ 『ブラック・マジシャン・ガール』！」
 「ブラック・マジシャン・ガールだどっ!?」

そしてワタポンを生け贄に現れたのは、ブラック・マジシャンの唯一の弟子とされる女魔術師。その可愛らしさとサポートカードの多さから、今でも多くのプレイヤーが愛用しているカードだ。

ただこの世界においては、どうやら武藤遊戯のデッキにしか入っていない超激レアカードらしい。師匠よりレアリティが高いな。

「ブラック・マジシャン・ガールは、墓地にあるブラック・マジシャン1体につき、300ポイント攻撃力アップ」

ブラック・マジシャン・ガール ATK2000↓2300

パチンっ！

「……僕、久城君には勝ってもらいたいけど、彼女だけは応援しちやおうかなあ」

「バカっ！ 何言ってるんだ！」

「だって、ブラマジガールは遊戯さんのデッキにしか入ってないし、今夜限りの恋かもしれないんだよっ！」

登場時の彼女のウインク一つでも翔はメロメロだ。この前の憎しみの女王でも似たような感じになってたし、翔って可愛い系に弱いんだよな。

「そしてお前はこのターン、このデッキの本当の力を思い知ることになるぜ。俺は墓地より、闇属性と光属性のモンスターを1体ずつ取り除き」

「えっ!! 墓地から闇と光のモンスターを?」

「何? この特殊な召喚条件は?」

十代達は首を傾げているが、三沢だけは何か思い当たったようだ。この条件で出せて遊戯デッキに入っていそうなカードと言ったら、

「この召喚条件で呼び出すモンスター。その1枚は、あまりの強さと凶悪な効果ゆえに公式大会では禁止カードとなった『混沌帝龍』カオスエンペラー・ドラゴン」

そなっていないが混沌帝龍と双壁を成すカードがある」

「そう。このカードこそがこのデッキの真のエース。いでよ『カオス・ソルジャー 開闢の使者』っ!」

カオス・ソルジャー ATK3000

墓地のバフオメットとワタポンを除外して呼び出されたのは、明らかにこれまでのカードとは格の違う威圧感を放つ全身鎧を纏った超戦士。

「おいおい。この土壇場でコイツかよ!! シャレにならないぞ。だがこの瞬間、神楽坂はそのまま攻撃せず少しだけ考え込んでいるようだった。俺の伏せカードを警戒しているらしい。」

カオス・ソルジャーには攻撃権を放棄する代わりに、相手モンスターを1体除外する効果がある。そしてもう一つ、戦闘でモンスターを破壊した場合もう一度攻撃できる効果も。

普通に攻撃しても破壊は可能だ。だがもし攻撃反応型の罠だったら返り討ちに遭う可能性がある。

ではもし効果で除外した場合、残ったブラック・マジシャン・ガールで直接攻撃すればLPを削り切れるが、またさつきみたいにモンスターを特殊召喚するタイプだったらトドメまで持つていけない。といったところを考えているのだろうか？

そして神楽坂の出した結論は、

「受けてみるがいい。最強戦士の攻撃を！ ゆけっ！ カオス・ソルジャー！ 『開闢双破斬』！」

攻撃反応型ではなく特殊召喚型と読んでの攻撃だった。特殊召喚型であれば、貪欲の王を倒してそのまま連続攻撃に繋がられるからだ。そして俺の伏せていたカードは、

「速攻魔法発動！ 『管理人の弾丸 シールド弾』。選択した幻想体は一度だけ破壊されない。貪欲の王を選択！」

「破壊耐性の方だったか。だがダメージは受けてもらおう！」

超戦士の剣閃が幾つもの貪欲の王を切り裂き、黄金の卵の外殻を削っていく。そしてそ

の破片が俺にまで飛び、僅かにだがダメージを受ける。

遊児 LP1150↓950

「ぐうつ!!? ……ふう。戦闘で破壊していないので、カオス・ソルジャーは連続攻撃が来ない。首の皮1枚繋がったぜ。正直除外の方で来られたら負けていた。貪欲の王が戦闘を行ったことにより、バトルフェイズ終了時にPEカウンターがさらに4つ乗る」

貪欲の王 PE4↓8

「運の良い奴め。俺はメインフェイズ2にカードを1枚伏せ、伏せていた死者転生を發動！そしてそれにチェーンして手札から速攻魔法『非常食』を發動！」

神楽坂はトドメを刺しきれなかったと見るや素早く迎撃態勢を整える。

「非常食の効果で、死者転生と伏せカードを墓地に送り2000ポイント回復。さらに死者転生の効果により、手札を1枚捨てて墓地よりクリボーを手札に加える」

神楽坂 LP400↓2400

やるな。1ターンで手札を全部消費して鉄壁の布陣にしてきた。これで次のターンを乗り切ろうって腹か。

「俺はこれでターンエンド。次のターンで俺を倒しきれなければ、その貪欲の王の効果によって1000ダメージを受けてお前の負けだ」

「なるほど。確かに何もしなかったらそうなるだろうな。……だが、本・当・に・防・ぎ・き・れ・る」

「と思うのか？」

これはデュエルだけにかかわらずだが、物事には幾つもの決定的な判断を迫られる勝負所がある。

今のターン俺を仕留められるかどうか。このデュエルで言ったら勝負所は間違いないくさつきのことだったのだろう。

……そして、神楽坂は選択を誤った。もしこれが遊戯だったらどちらを選んでいたかなんてタラれば言うつもりはない。だが、

「少なくとも、相手の自滅に頼って勝ちを狙おうなんてセコイやり方は、遊戯らしくはないと思うぜ。俺のターン！」

俺は勢いよくドロローしたカードを確認し、頭の中で勝利への道筋を並べだす。さあ。これで終わりにしようじゃないか。

V S 遊戯デッキ 遊兎対神楽坂 その五

遊兎 LP950 手札7 モンスター 貪欲の王 魔法・罨 ロボトミークーポ
レーション

神楽坂 LP2400 手札1 モンスター カオス・ソルジャー ブラック・マジ
シャン・ガール

「スタンバイフェイズ時。ロボトミークーポレーションの効果発動！ デッキから3枚めくり、幻想体があれば1枚手札に加える。……幻想体は無し。だが、今の手札で十分だ！」

手札はドローした分を合わせて7枚。これだけあれば事足りる。

「俺は魔法カード『魔法少女の誓い』を発動！ このカードは場に〃幻想体 魔法少女〃が存在し、墓地にそれとは異なる魔法少女が2種類以上存在する時に発動可能！ 墓地から2枚を選択し、1枚を手札に、1枚を場に特殊召喚する。ただしこのターン、俺は魔法少女以外では攻撃できない」

まず最初に俺が取り出したのは、ステッキと剣、そして拳が交差した絵柄のカード。

……ステッキと剣は分かるけどなんで拳？

「何をバカな。お前の墓地にあるのは絶望の騎士のみ。墓地にそれ以外の魔法少女なんて」

「……いいや。それが居るのさ。さつき貪欲の王の攻撃時に効果で墓地に送った『幻想体 魔法少女 憎しみの女王』がなっ！」

奇しくも最初に神楽坂にやられた手をやり返した形になり、どこか向こうも悔しそうだ。まあそれはともかくとしてデュエルを続けよう。

「俺は憎しみの女王を手札に加え、絶望の騎士を守備表示で特殊召喚！」

俺の場に、再び悲しみと絶望を漂わせる女騎士が出現する。

「まだまだ行くぜ！俺は手札の『幻想体 赤ずきんの傭兵』の効果発動！場のPEカウンターを4つ取り除くことで、このカードを手札から特殊召喚することができる。俺は貪欲の王のPEカウンターを4つ使う」

貪欲の王 PE8↓4

赤ずきんの傭兵 星6 ATK2100 DEF1500 戦士族 闇 CC3

続けて現れたのは、暗い色の服を身に纏い、目元まで覆う赤いフードを被った長身の女性だった。顔を隠すように鋭い牙を模したマスクで口元を覆い、隙間から垣間見える肌は古い傷だらけ。

両手にショットガンのような銃器と、折り畳み式の鎌に近い手斧を持って油断なく佇む様は、歴戦の戦士という風格を醸し出している。

見るからに強そうだ。だけど、今回はこのカードが主役というわけじゃない。

「さらに俺は赤ずきんの傭兵を生け贄に、『幻想体 魔法少女 憎しみの女王』を攻撃表示で召喚！」

出たばかりで悪いけど赤ずきんを生け贄に、俺の場に3体目の魔法少女を召喚する。

憎しみの女王 ATK2300 CC2

憎しみの女王は場に出た瞬間ステッキを軽く手前でバトンのように回転させ、そのままステッキ片手にピースサインを決めてみせる。……やっぱり魔法少女系演出凝りすぎじゃね？

「おっつ！ すっげ〜！ 一気に上級モンスターを場に3体も並べた！」

「う〜ん。ブラマジガールに憎しみの女王。僕はどっちを応援すれば良いんだろ？」

素直に驚いている十代はともかく、大真面目に悩んでいる翔は放っておこう。次が最後のキーカードだ。

「手札から装備魔法カード『幻想体 狂研究者のノート』を発動！ このカードは、クリフォトカウンターかPEカウンターを乗せたカードにしか装備できない。これを貪欲の王に装備！」

何かの研究ノートのようなものが貪欲の王の元へ飛んでいく。……しかし毎度思うけど、こういう装備カードってどう装備するのだろうか？ 特に人型以外の奴。

「そして、絶望の騎士の効果発動！ 貪欲の王を選択。このターン攻撃力・守備力を500アップし、1度だけ破壊されない」

貪欲の王 ATK2800↓3300 DEF1500↓2000

絶望の騎士の加護が、貪欲の王に力を与える。

「終わらせるぞ。バトルだ！ 貪欲の王で、ブラック・マジシャン・ガールに攻撃！」

効果により手札を1枚捨て、貪欲の王の攻撃力はさらに上昇する。

貪欲の王 ATK3300↓3800

黄金の卵から照射された光が、展開された魔法陣を通して女魔術師を襲い、ブラック・マジシャン・ガールは光の粒子となって消滅する。

神楽坂 LP2400↓900

「……さよなら。ブラック・マジシャン・ガール」

翔がどこか名残惜しそうな顔をしているが、これもまたデュエルと諦めてほしい。

「ふっ！ 勝負を焦ったな！ 残ったのは攻撃力2300の憎しみの女王。攻撃力3000のカオス・ソルジャーは倒せない」

「確かに憎しみの女王じゃカオス・ソルジャーは倒せないな。だが、そもそも戦うのは

そつちじゃないんだよ。貪欲の王に装備した狂研究者のノートの効果発動！ 1ター
ンに1度、装備したモンスターへの攻撃終了時、乗っているカウンターを全て取り除くこ
とでもう一度攻撃できる」

貪欲の王 PE4↓0 CC1↓0

「自分からカウンターを0につ!? そんなことしたらっ!?」

「またさつきみたいに暴走するぞっ!」

再び貪欲の王の琥珀部分にヒビが入り、先ほどと同じく暴走の前兆を見せ始める。だ
が、

スッ!

「なっ!? 憎しみの女王と絶望の騎士がっ!」

俺の場の二人の魔法少女が、まるで寄り添うように貪欲の王に歩み寄る。そして、先
ほどとは違い琥珀の結晶だけが砕け散った。

中に封じられていた褐色の少女はそのまま解き放たれ、その両の足でしつかりと場を
踏みしめると、開かれた赤い瞳で戦うべき相手を鋭く見据える。

「魔法少女シリーズの効果。場に他の魔法少女が居る限り、暴走を無効化できる。たと
えどんなに荒れ狂おうと、引つ張り戻してくれる仲間が居る。大切なことだ」

「で、では!? このターン俺が守り切ったとしてもっ!?」

「そう。暴走しないからダメージも発生せず、俺が負けることもない。……だから相手の自滅頼りなんて戦法はらしくないって言ったんだよ」

神楽坂が愕然としている。さあ。あとはもう押し切るだけだ。

貪欲の王は、いつの間にかその両腕に黄金に輝く手甲を装着していた。手甲の中心には先ほど自分が入っていた琥珀が埋め込まれており、それをガツンガツンと音を立ててぶつけ合わせる。

「手札を一枚墓地に送り、貪欲の王でカオス・ソルジャーに攻撃っ！　そしてダメージステップ時、効果によりさらに攻撃力5000アップ！」

貪欲の王 ATK3800↓4300

「攻撃力4300だどっ!？」

攻撃宣言と共に、先ほども使っていた魔法陣が貪欲の王の前面に展開される。だが今回はそこから光を照射するのではなく、驚くべきことに自分がその魔法陣に飛び込んだ。

その瞬間カオス・ソルジャーの前面に同じ魔法陣が展開され、そこから貪欲の王が躍り出る。

カオス・ソルジャーが反応して迎撃態勢に移るまでの僅か一秒足らずの間に、貪欲の王の拳が剣を弾き飛ばし、そのまま渾身の右ストレートで鎧ごとカオス・ソルジャーを

破壊していた。

……予想よりも武闘派の魔法少女だったよ貪欲の王！　ってかもうどこが魔法だか分からんぞ！　魔法陣による短距離ワープだけじゃん！

「ぐっ!?　手札のクリボーの効果！　このカードを捨てることで、戦闘ダメージを0にする！」

「だろうな！　だけど、残った憎しみの女王の攻撃は防げないっ！」

カオス・ソルジャーを倒した勢いで神楽坂に向かっていく貪欲の王だが、そこは神楽坂の出したクリボーが壁となって食い止める。

しかし貪欲の王の攻撃に合わせてるように、憎しみの女王も同じく魔法陣を展開して詠唱を開始していた。

「終わりだっ！　憎しみの女王で、神楽坂にダイレクトアタックっ！」

「ぐっ!?　ぐわあああっ!?」

ステッキから放たれた星形のエネルギー弾が神楽坂に直撃し、そのまま残っていたLPを削り切った。

神楽坂　LP900↓0

デュエル終了。遊見WIN！

「この俺が……負けた？」

神楽坂はがつくりと膝をつく。そのはずみに、使っていたデッキのカードが数枚岩場に散らばる。

「俺は、こんな強いデッキを使っても勝てないのか？ 俺にはやはり、才能がまるで無いんだ」

神楽坂は、ポタリポタリと涙を流しながら嘆く。……いや、それは

「いいや。そうでもないさ」

「カイザー！」

「明日香！ どうしてここに？」

俺が神楽坂を止めようとした時、同じタイミングで明日香と共に現れたカイザーと言葉が被る。……俺が言うよりはカイザーが言った方が影響力があるか。ひとまず様子を見よう。

「俺達も、一足早くデッキを見たくてね」

「会場に行ってみたらケースの蓋が壊れてて、デッキは消えていた。それで辺りを探してみたら、貴方達を見つけたわけ」

やはり皆して考えることは一緒だったってわけか。

「止めようと思ったが、止めるにはあまりにも惜しいデュエルだったんでな」

「そりやそうだ」

「おいおい。必死に戦った翔や遊児の身にもなってくれよ」

「そうだ十代。もつと言ってやってくれ！ さっきのは結構きつかったんだから。」

「それにどうやら、見ていたのは俺達だけじゃないようだ」

その言葉に辺りを見渡すと居るわ居るわ！ 俺達以外にも少なく見積もっても二十人以上あつちこつちで見っていた。どんだけ皆フライングしてんだよっ!?

「いやあ。凄いでデュエルだったぜ！」

「良いもん見させてもらった。勉強になったよ」

「皆……」

そう言っているのは、今日購買部でのデュエルの時に神楽坂に陰口を叩いていた奴ら。ああは言っていたが、今のデュエルを見て何か感じるものがあつたのだろう。

「確かに、他人のデッキを勝手に持ち出したことは許されない行為だ。しかし、その武藤遊戯のデッキが戦い力を発揮する姿を、皆が見たがっていたことも事実。故に、ここは大目に見るべきだろうな」

カイザーはそう言うが、実際にガラスケースをぶつ壊してるしクロノス先生も容疑者

にされかけたわけだし、何らかの処罰はありそうなんだよな。

「キングオブデュエリスト。武藤遊戯のデッキをあれだけ使いこなすなんて」

「凄いで神楽坂！」

「けど俺は負けた。……どうして？」

「それは簡単さ！ お前にはなくて、遊児にはあったものの違いだぜ！」

皆から称賛されるも、何故負けたのか分からず悩んでいる神楽坂。そこへ十代が自分の意見を述べる。頼むぞ十代。主人公ここで神楽坂にバシッと決めてやれ！

「俺にないもの？」

「それは、デッキを信じる気持ちさ。確かにそのデッキは強い。けど所詮お前のアイデアが詰まったデッキじゃない。それじゃあデュエルには勝てないんだ。……なんつったら良いかな？」

「自分が時間と労力をかけたからこそ、デッキを心の底から信じていることができる。そして、その信念がデュエリストに気迫を与え、ギリギリの戦いでは勝敗を左右する。今のデュエル、本物の武藤遊戯であれば、遊児はそのプレッシャーに負けていたかもしれない」

十代のどこか感動的な説明に、カイザーが補足説明をする。……まあ神楽坂からはそこまでのプレッシャーを感じなかったのは事実だ。

少なくともチュートリアルデュエル百連戦の時のディーはこんなもんじゃなかった。もし神楽坂からディーくらいプレッシャーが出ていたら、もう少し苦戦したかもしれない。

「やつぱり、そのデツキの本当の力を引き出すのは、遊戯さんにしか出来ないことなのさ。……遊児も何か言ってやれよ！」

「俺が？ ……別に俺は言うことはないんだけど」

このまま十代達に任せようと思っていたのだが、最後の最後で俺に振ってきたよ!?

……仕方ない。あまりためになるかどうかは分からないが、素直に思ったことを言っておくか。

俺は軽く髪を掻きながら、岩場をトントンと渡って神楽坂の居る岩場まで跳ぶ。そしてまだうなだれたままの神楽坂に向けてゆっくりと話しかけた。

「……はつきり言つて、俺がデュエルを仕掛けた理由は単にムカついたからだ。何の覚悟もなく自分は誰にも負けないなんて、ただ強いデツキを持っただけで言い出したから。……だけどまあそれはもういい。俺が言いたいのはその後のことだ」

「……何がだ？」

「今回の勝負。仮に俺が負けていたとしても、お前に負けた気にはならなかったと思う。負けたのはあくまで武藤遊戯のデツキ、そしてお前が演じる武藤遊戯の影にだと思って

「いただろうな」

「俺じゃなくて、俺が演じる影？」

神楽坂は少しだけ不思議そうに俺の方を見る。

「ああ。正直な話、自分のじゃないデッキで戦うことを咎めるつもりはない。それと言ったら……いや。何でもない。俺が言いたいのは、借り物のデッキだろうが自分の心まで借り物にしなくてもいいだろうってことだ」

借り物云々で言ったら、このデッキだってディーから借りているようなものだしな。

話を戻すと、さっきの戦いで神楽坂は遊戯のデッキを使いこなしていた。だけどそれは、あくまで遊戯だったらどう動くかという流れを忠実に再現していただけだ。

「だからさっき神楽坂が遊戯らしくない手を使った時、ああは言ったけど実はちよつとだけ嬉しかったんだ。やつと遊戯じゃなくてお前と戦ってるって思えてさ」

「俺と？」

「ああ。どんなに自分の作ったデッキが誰かのデッキに似ようが、自分だけの使い方をすればそれは間違いなく神楽坂の力だよ。だから次は誰かが使う誰かのデッキじゃなくて、お前の使うお前のデッキでまたやろうぜ！」

「ああ。……ああ！」

神楽坂は涙を拭い、俺の差し出した手をガシツと掴む。……これなら約束通りデッキ

は返してくれそうだな。

こうして、伝説のデツキを巡る一夜限りの騒動はやつと幕を閉じたのだつた。

翌日。

「よかつたよかつた！ 無事デツキが戻つて」

「まつたくだ」

デツキが戻つたことにより、デツキの特別展示は予定通り開催された。俺達は昨日しっかりと見れなかつたデツキをじっくり観賞すべく、少し用があつて遅れるという翔を除いた面子で整理券組として再び展示会場にやつてきていたのだ。

本来なら整理券を持つていない俺は入れないのだが、今回の一件の功績から特別に入らせてもらった。それくらいの役得はあつてもいいと思う。

「武藤遊戯のデツキは、デュエリスト全員の財産なんだな。それはそうと、十代何持つてるんだ？」

「これか！ ！これはなあ……へっへっへん！」

十代が大事そうに抱えていたのは、以前購買部でも見たこの展示会のポスターだ。この一件のささやかな報酬として、十代が購買部のトメさんから貰い受けたらしい。

それを自慢げに見せる十代だったが、突如走り込んできた翔の言葉で状況が一変する。

「アニキ大変だよ！ 久城君の偽物が現れた！」

「何っ!？」

「俺のっ!？」

偽物は展示会場の外にいるとのことで、慌ててどういふことかと走り出す俺達。そして会場の外で目にしたのは、

「待ってたぞ」

「わっ!？ 神楽坂!？ 何やってんだよ?」

そこにいたのは昨夜俺と戦った神楽坂。しかしあの時とは少々雰囲気が違うな。服装もオシリスレッドのものだし、髪型も逆立ちが落ち着いている。

「俺は分かったんだ。なぜデッキを信じてできなかったか。……それはつまり、俺のなり切り方が半端だったからだっ!!」

「全然分かってねえ。こいつ」

十代が呆れたように額に手を当てるが、神楽坂は少しだけ違えばかりに首を横に振る。

「まあ待て。十代とカイザーが言った言葉だけなら俺も今の言葉で終わっただろう。し

かし、そのの久城からの言葉を受けて、俺ももう少し深く考えてみた。その結果出した結論は、このなり切りもまた俺のやり方だということだ」

神楽坂はそこで言葉を切り、姿勢を正して俺の方を見た。……なぜ俺？

「俺はもつとなり切りを極める。様々な使い手になり切り、そして持ち主の使い方を完全に再現し、その上で俺だけのより良い使い方を見つけてみせる！」

それは神楽坂なりの決意の表れ。今はただ強者を真似るだけのコピーであつても、いずれはオリジナルを超えるコピーになるという宣言。

「というわけで、まずは俺を倒した久城になり切ろうとしたわけだ。デツキもお前に似せて作り直そうとしたが、幻想体は非常にレアなため手に入らなかつた。なので、ひとまず恰好からなり切ることにした。さあ！もつと普段の動きや癖を観察させろ！」

「だからってなんで俺なんだよおっ!？」

純粹だがはた迷惑な決意を前に、俺の理不尽に対する叫び声が響き渡つたのは言うまでもない。

ぬいぐるみと編入生 その一

それは神楽坂の一件からしばらく経った日の事。授業も終わり、学園から自室に戻る途中の出来事だった。

「……ん!?」

道端に、やや大きめの古ぼけたぬいぐるみのようなものが落ちていた。

堂々と、道のど真ん中に、これ見よがしに、拾ってほしいと言わんばかりに。

俺は興味を持って近づき、そのぬいぐるみを確認し……顔をみるなり残像が見える(体感)速度でぬいぐるみとぬいぐるみが持っている物を回収。

そのまま全速力でオシリスレッド寮の自室に飛び込むように入り、扉をしつかりと施錠し、

『やあやあお帰り久城君！ 早かつぎよえ〜っ!』

その流れでサラツと留守番をしていた諸悪の根源たる光球にアイアンクローをぶちかます。

ちなみにいくら俺でも何の理由もなくこんなことはしない。なら何故こんな手段を取ったかというと。

「……デイー。行く前にあれほど言ったよな？ 俺が授業に出ている間に何かあったらいち早く知らせろって？」

『そんなことも言ったようなイタタタっ?!』 言った！ 言つてたような気がするな。うんっ！』

「じゃあなんで部屋に居るはずの幸せなデイーが道端に居たんだこの野郎っ！」

そう。このぬいぐるみこそ幻想体の1体である幸せなデイー。こんな見た目のくせして、場合によってはキマイラすら絞め殺すという凄まじいデイーベアである。

事の始まりは昨日の夜。エネルギーが溜まり、急にこの幸せなデイーがカードから勝手に実体化してきたことだった。

『クマさん！ 可愛い！』

『ぐおおっ！ イタタタッ！ もっと優しくするのだ小さな魔女よ。壊れるっ！』

デイーが出現するや否や、可愛いものに目がないレティシアも連鎖的に実体化してデイーを抱きしめる。どさくさでネクも一緒にだ。多少ボロボロになつてはいるが、レティシアにとつてそんなことは関係ないようだ。

『ほう。これはまた面倒な。幸せなデイーとはね』

「知っているのか？ 葬儀さん！」

『ああ。多少程度だがね。……話しても良いかな？』

精霊状態の葬儀さんも現れ、何か知っているようなそぶりを見せる。最後の方の言葉はディーに向けたものだろう。ディーが頷くように縦に動くのを見ると、葬儀さんとはと一拍おいて話し始める。

『幸せなテディはリスクレベルH Eクラスの幻想体だ』

「リスクレベル？」

聞きなれない言葉が出てきたので聞き返す。

『そういえば言っただけじゃなかったね久城君！ 幻想体にはそれぞれ管理難易度、リスクレベルというのがあってね。下から順にZ A Y I N、T E T H、H E、W A W、A L E P Hの5段階に分けられる。これが高ければ高いほど基本的に危ないと思えばいい』

そういう大事なことはもつと早く言っておけよな！

『H Eはつまるところ真ん中だね。カードのレベルとも大体連動しているから、危なければ危ないほどレベルも高い』

『ちなみに私やレティシア、ヘルパーもH Eクラスだ。……レティシアもあれで中々に危険視されているのだよ』

葬儀さんはなんか強そうだし、ヘルパーも戦う時のあの刃物を展開した姿は中々に

おつかないものだったから分からなくはないが、レティシアも？ あんなに可愛らしいのにな。

まあカード名に小さな魔女とあるくらいだし、本人も色々な術が使えると以前言っていたっけ。その分が危険と見なされたのかもしれないな。

「しかし、このテディベアが危険っていうのは……ああ。神楽坂とのデュエルで見せたアレか！」

戦闘中、この幸せなテディは神楽坂のキマイラを倍以上の体格差なのに締め上げて破壊していた。つまりはああいうことを実際にやれるわけだ。

『そういうこと！ テディときたら凄まじく甘えん坊かつさみしがり屋でね。一度自分の持ち主と定めた相手から離れようとしな。それでも離れようとすると、力いっぱい抱きしめて引き留めようとする訳さ。……自分の力がそこらの猛獣程度なら簡単に絞め殺せるほどののを忘れてね』

そこだけ聞くと悪い奴じゃなさそうだが、そうホイホイ絞め殺されてはたまつたもんじゃないな。……つてちよつと待った！

「レティシアが今思いつきり遊んでんじゃんつ！ レティシアちよつと待った！」

『大丈夫だよお兄ちゃん！ こんなに可愛いんだもの！』

『いや、大丈夫なのはお前だけでアタタつ！ やめろテディ！ ヒビがっ！ ヒビ

があつ!』

レティシアは楽しく遊んでいるようだが、テディとレティシアに挟まれているネクはたまらない。レティシアはもうちよつと優しくしてやってな。

テディも基本的にされるがままで、あまり自分からは動く様子がない。こうしていればただのテディベアっぽいよな。

『テディもただ遊んでいる分には普通のテディベアだからね。それにレティシアは幻想体だ。本能的に持ち主ではないと判断しているのだろう』

なるほど。相手が人間でなければ安全と。しかしそうなるか……。

「この場合、カードも持つてるし俺が持ち主認定されるのかね?」

『一応はな。ただし、君はカードの持ち主ではあるけれど、テディの持ち主ではない。この場合テディにとっての持ち主とは、短いスパンで自分で二度以上遊んだ者を指すのだよ。幸いテディは今出たばかりだ。あまり触れなければ問題はない』

おお! 葬儀さんの言葉に一安心する。要するに触らなきや良いんだ。なるべく実体化を避けて出さなきや良い。意外に簡単だな。

『クマさくくん♪』

『ぬおおつ!! 今ベキつて言った! 完全にベキつて言ったぞ! 私の生け贄よつ! 早く何とかしてくれえつ!!』

ネクよ。安らかに眠れ。……あとでヘルパーに頼んで直してもらおうな。

ということがあつて、幸せなテディの一件は丸く収まったかに思えたのだが、「まったくテディときたら。目を離すとすぐに追つかけてくるんだからな」

この幸せなテディときたら、某おもちやの物語よろしく一応の持ち主である俺を求めて勝手に動き回るから厄介だ。

俺がカードを持っていたらいつの間にか当然とばかりに近くに現れているし、カードを自室に保管していてもそのカードごと追っかけてくるといふ始末。

誰かが見張つていれば多少はおとなしくなるが、少しでも目を離すといふの間にか居なくなつていふという脱走の名医になつてしまった。

『言い訳させてもらうけど、僕だつてこれでも頑張つていたんだよ！ だけど……ずっとテディを見てるだけだと暇になつて、ついウエルチアースからジュースを貰つて一服してたらなんだか眠くなつて』

「普通に一服盛られてんじゃねえか?!」

なんで毎回蓋が開いても平気で飲むんだよコイツは！ 「いや〜つい癖になつちやつて！」とのたまうデイーに今度はデコピンを叩き込み、幸せなテディをそつと取

り出して荷物置きになっている二段目のベッドに置く。

あくまでティィのトリガーは遊ぶこと。抱きしめるとか頬擦りするとかも含まれるらしいが、こうやって持ち運ぶ程度なら遊んだことにはならない。

この手で何とか躲し続けてはいるものの、そのうちうっかり持ち主認定されて抱きしめられないか不安だ。それにしても、

「……お前酷くボロボロだな」

『そうだねえ。ここ最近君を追っかけてあちこち移動しているからますます汚れがひどい』

改めて見ると、幸せなティィはとても良い状態とは言い難かった。

ソリッドビジョンで見た時もそうだったが、ボタンで出来た目は片方取れてしまっているし、身体のうちから綿も飛び出している。

生地の手入れも悪いようだし、首に結ったりボンも色褪せている。動き回るから砂や土もくっついてはいるし、これでは俺が抱きしめられる云々よりもまず衛生的に良くない。

あとレティシアも気に入ってよく遊んでいるからな。どうせなら綺麗な方が良い。

「ヘルパー！ 出てきてくれ！」

へあなたのお供、ヘルパーロボットだよ！ 何をお手伝いしようかな？！

最近有能すぎて大活躍している万能（掃除以外）型家事ロボットのヘルパーが、俺が呼ぶや否や出現する。

「ヘルパー。前にネクを直したことがあったろ。もしかしてそれみたいにテデイも修復できるか？」

ヘルパーは家事に関わることなら掃除以外だいたい可能だ。その中には子供のおもちゃの修復機能なんてものも備わっている。それを使い、実際に体のあちこちにヒビの入ったネクを見事に修復してみせた。

だが、今回は相手も同じ幻想体。もしかしたら勝手が違うかもしれない。そう考えて恐る恐る聞いてみたところ。

〈了解。リペアプロセスを開始します〉

……なんだか最近ヘルパーがホントに有能すぎる気がする。

そうしてヘルパーは早速テデイの修繕に取り掛かったのだが、流石に幻想体のぬいぐるみとなるとそれなりに時間がかかるという。

今度こそ目を離すなよとデイーに念を押し、俺は夕食を食べに十代達と連れ立って寮の食堂に向かった。

「にやゝ。皆様で紹介したい人が居ますのにや！」

レッド寮生が集まって夕食を摂る中、大徳寺先生が皆に聞こえるようにやや大きめの声で話し始める。……これはもしかしてあれか？ 以前の俺と同じパターンか？

「編入テストを受けてこの度オシリスレッドに入ってきた、早乙女レイ君だにや！」

同じだったようだ。大徳寺先生の言葉と共に歩いてきたのは、帽子を目深に被った小柄な生徒だった。少し俯いていて表情が良く見えないな。

「女の子みたいにきれいな子なんだな」

「編入先がオシリスレッドなんで落ち込んでるのかな？ ……その気持ち分かるな」

素直な感想を述べる隼人と、何か一人で納得しているようにうんうんと頷く翔。まあ分かるなどは言わないが、それを言っちゃあmazいだろ翔。

「よっし！ フレー！ フレー！ レ〜イっ！ な〜に！ 成績悪くても気にすんな！

俺達と一緒に楽しくやろうぜ！」

そして十代ときたら、なんか変な風にスイッチが入ったらしくいきなり応援団張りの応援を披露し始めた。……今だけは他人のふりをしたい。

「何を勘違いしてるんだにや？」

「心痛めてる編入生に、慰めの言葉をかけてるんだけど？」

拳句の果てにいきなりレイの肩をポンポンと叩いて励まそうとする距離感の近い十

代に、流石に大徳寺先生も止めに入る。

「早乙女君は成績が悪くてオシリスレッドに入ってきた訳じゃないのにや。途中編入生はまずこの寮に入るんだにや。早乙女君の成績なら、近いうちにラーイエローに移るのにや！」

「……いやあッハッハ！ とにかくオシリスレッドの仲間が増えることは大歓迎だぜ！

……なあ翔！ 隼人！ 遊児！」

十代は早とちりだったと笑って誤魔化し俺達に振る。……まあしばらくしたら他所に移るとはいえ、クラスメイトが増えること自体は悪いことじゃないからな。俺達は顔を見合わせて勿論と返した。

「良かったにや〜！ 特に久城君にそう言ってもらえて助かるにや！ 部屋が足らなくてどうしようかと思ってたにや！」

えっ!? 部屋が足りないっ!? ってこの流れだとまさか!?

「しばらく、久城君の部屋を使わせてもらいなさい」

「……はい」

げえっ!? やっぱりか! 現在俺の部屋だけまだ俺一人で使ってるもん。編入生が来るとすれば、当然そういう場所に優先的に入れるだろう。

「よろしく〜！」

「よ、よろしく頼む」

俺はレイから差し出された手を握り返す。どうやら同居人が増えることになったようだ。

しかしあの幻想体達をどうしたらよいものやら。なんか頭が痛くなりそうだ。

ぬいぐるみと編入生 その二

俺は皆に部屋の片づけがあるといって先に自室に戻った。新しくルームメイトが増える以上、それは必要だろうと大徳寺先生も普通に承認する。

手伝おうかと十代達が申し出てくれたが、レイの方を手伝ってやってくれと言うと素直に頷いた。レイも持ち込む荷物とかがあるだろうしな。

さて。レイが俺と相部屋になるに当たり当然だが問題がある。俺の部屋で度々実体化してくる幻想体達と、俺の周りをふよふよ飛び回る「元」神様のことだ。なので、「皆！ しばらくの間、レイの前では実体化は無しで頼むぞー！」

『え〜っ!?!』

ちなみに今不満げに声を上げたのはデーである。それ以外のメンツはというと、

カタカタ！ コクン！

へ了解。スタンバイモードに移行します。お手伝いが必要なら呼んでね

『まあ当然の措置だろう。私達の見た目はあまり常人にとって精神的に良いものではないのでね』

『クッククック。我が生け贄よ。私がそんな言葉程度で引き下がるとでも?』

『ネクちゃん。めっ！……仕方ないよね。お兄ちゃんがそう言うならばしばらく我慢するの』

上から順に罪善さん、ヘルパー、葬儀さん、ネク、レティシアの反応である。ちなみにウエルチアースの自販機の方は無反応。エビ頭の漁師の方は一応頷いているのだが、どうにも意思疎通が難しい。

「ごめんな皆。大徳寺先生によると、レイもここは足掛けでしばらくしたらラーイエローに移るらしい。だからそれまでの間頼むよ」

そう長くはならなそうだが、自由に実体化できないことでストレスが溜まったら大変だ。夜に散歩なりなんなりして少しでも出られるようにした方が良いかもしれないな。

……ではあと残る問題は、

『それはそうと久城君。実体化を皆に我慢させるのは良いんだけどさ、幸せなテディはどうする？』

そう。あの脱走常習犯の問題はまだ片付いていない。あんな感じでこれからも自由に実体化されたらとても手に負えないわけだが。

「……そういえばヘルパー。テディの修復はどうなった？」

へりペアプロセス完了！ こっちだよ

ヘルパーに促されて、物置と化しているベッドの二段目を覗き込む。するとそこに

は、

「おおっ！ なかなかいい感じになったんじゃないか？」

そこには立派に修復された幸せなテディの姿があった。

くたびれていた毛皮はツヤを取り戻し、ところどころ解れて綿がはみ出していた部分もちゃんと繕われている。

片目が取れていた所は、俺の制服の予備のボタンを付けることで代用。元の目が白いボタンなのに俺のボタンは濃い赤なのでオッドアイになってしまったが、まあ趣味としては悪くない。

首に結われた緑色のリボンも色褪せていたので取り換えようとしたらしいが、こちらはテディ自身が拒否したのでそのままにしたらしい。思い入れのある大切なものなのかもしれない。

「流石だぞヘルパー！ ありがとうな」

ヘルパーに軽く礼を言い、幸せなテディをそつと持ち上げる。……近くで見てももうどこが解れてたんだか分からないな。

『すごいすごいっ！ クマさんがとっても綺麗になったよっ！』

『ぐぎやあゝっ!? だからいちいち私を巻き込むんじゃないっ！』

レティシアも大喜びしている。まあそれで抱きつく度に挟まれるネクにはほんとに

同情するが。……まあこれも込みでやらかしたことの罰と違って受け止めてほしい。

『しかし久城君。テディが見違えるくらいに綺麗になったのは良いんだけど、結局まだ脱走問題は全然解決していないよね?』

「……………あつ!？」

そうだった。デイーから言われるとはなんか悔しいが間違はなくその通り。

「ふう。……テディ。すまないけど、しばらくの間で良いから実体化は控えてくれないか?」

普通に頼み込んでみるのだが、レティシアに抱きしめられているぬいぐるみはこてんと首を傾げたきり返事がない。……本当に分かってるのかな?

コンコンコン。

「おくい遊児! そろそろ良いか? こっちは食い終わったし手こずってんならやっぱ手伝うぜ!」

ま、マズイっ! 十代達だ!

「皆! 急いで実体化を解いてくれ!」

十代にはどうせ精霊状態でも見えるから仕方ないが、足音からすると翔や隼人、あと多分レイも早速来てる。今見られるのは非常にマズイ。

フツとデイーと幻想体達が姿を消すのを確認し、俺は軽く深呼吸をして十代達を招き

入れる。

「どう？ 久城君？ 片付け終わった？」

「えっ!? ……ああ。ざっとだけだな。ただ床と机はまあ良いとして、レイがベッドのどの段を使うか分からなくて片づけきれないんだ」

片付けという口実で先に来ていた以上、まがりなりにも多少ではあるがやっている。だが、話している途中でベッドのことを思い出して話題にあげる。何せ使つてなかったから俺の寝ている場所以外物置状態なんだよな。

だがそれを聞くと、十代達はどこか複雑そうな顔をした。何かあったかな？

「そっか。実はそれに関わることなんだけど、ちよつと問題が発生してな。レイの持ち込むやつが問題なんだ」

「そんなに荷物が多いのか？ 自前のカードとか服とか？」

「いや、それがその……ベッドなんだ」

ベッドの持ち込み？ ペットじゃなくてか？ 俺の頭に疑問符が浮かんだ瞬間だった。

「せ、狭いんだな」

「足の踏み場もないっす」

翔と隼人がげんなりした顔をしてそうぼやく。

一応言っておくが、俺の部屋は十代達の部屋と同じ間取りだ。そしてたかだか俺と十代・翔・隼人にレイを加えた五人程度で足の踏み場もなくなるほどではない。

幻想体達が実体化しているわけでもない。なら何故足の踏み場もなくなっているかというと、

「まさかホントにベッドを持ち込んでくるとは思ってたよっ！」

普段使う三段ベッドとは別の、一人用のベッドがデンッと部屋の一角を占領しているからだ。

よくよく話を聞いてみると、これは本来ライイエローで使われる家具だそうだ。成績上で言えばレイはライイエローが妥当でも、編入生は基本レッド寮から。

なのでせめて家具だけでもと、学園側からの支給品らしい。……いや明らかに部屋に合っていないよねこれっ!? 重みで床が抜けたりしないよな？

「ごめんささい」

レイは申し訳なさそうに謝りまた顔を伏せる。どうやらレイが望んだとかではなく、完全に学園側からの押し付けらしい。だからさつきは引越し業者みたいな人たちが勝手にベッドを運んできたのか。

「……いや。レイが謝る必要はないさ。と言つてもこれじゃあ流石に場所を取りすぎるから、明日辺り大徳寺先生に掛け合つて何とかしてもらえよう頼んでみよう」

これがレイ個人のワガママで運ばれてきたものなら文句を言うところだが、あくまで学園からの押し付けだ。ならレイを責めるのは筋が違う。……それに、編入初日からこんなしようもない理由で責められてはレイも辛いだろう。

「そうだな遊児。まあ、たまにはこういうのも良いじゃん！ いざとなつたらベッドの上で寝ながらデュエルできるぜ！」

「デュエルバカの十代らしいな！」
「アニキらしいっす」

その前向き思考には感心するばかりだ。これもある意味主人公に必要な素養なのかもしれないな。

「なあに。どんなに狭くたって、飯と寝る場所があればそれで良いのさ！」

そう言いながら十代は自然に制服のボタンを外し、上から脱いでいく。………うんっ!?

「さあ！ 皆で風呂行こうぜ！」

「きゃあっ!？」

あまりに自然にアンダーシャツ一枚になった十代の姿を見て、レイがまるで少女のよ

うな悲鳴を上げながら顔を両手で押さえる。

「おいおい。人の部屋で着替えだすなよ」

「悪い悪い！ けどどうせなら皆で一緒に行こうと思つてさ！ 男同士裸で背中を流しあえばもう仲間だぜ」

そう言いながらいそいそとタオルなんかを用意します十代。やつてることはアレだが、つまりはこれが十代なりのレイへの歓迎ということらしい。

まあ一緒に同じことをするというのは連帯感を生むから、あながち悪い話ではないんだけどな。……せめてこんな密集した場所でやらないでほしいとは思うが。狭いから。

「い、いや……ゴホン。ボクちよつと風邪気味で」

「ふくん。……じゃあ仕方ないな。俺達だけで行こうぜ！」

だが、レイは十代から顔を背けながら咳払いをする。十代はやや残念そうな顔をしながらも他の皆を誘っていく。

「あつ!? ちよつと待つててくださいいつすアニキ！ 部屋にタオル置いてきちやつて」

「俺もなんだな」

「なんだよ準備万端なのは俺だけかよ！ じゃあ一度部屋に戻るか。……遊児はどうする？」

風呂か。なにぶん初めてルームメイトが出来るわけだし、第一印象は大事だ。ひとつ

風呂浴びて清潔にしておくのも悪くはないか。

「じゃあ俺も行くのかな。こつちも用意してから行くから十代達は先に行つてくれ。……すまないけどレイ。そのベッドの二段目に俺の入浴セットが袋にまとめてあるから取つてくれないか？」

「うん。分かつたよ」

俺は十代達を先に行かせ、レイにちよつとした頼みごとをする。

編入初日で頼みごとをするのも気が引けるが、場所的に一番近いのはレイだ。これからしばらくの付き合いになるわけだし、距離感を掴むためにも簡単なお願いを試してみる。と、レイは素直に了承してくれる。

「えつと入浴セットは……うんっ!？」

ベッドの中を探っていたレイだが、急に何か不思議そうな声を上げる。だけどすぐにまたごそごそと動き出し、入浴セットを取つてはいと渡してくれる。

「ありがたいな。じゃあ俺は十代達と風呂に行つてくる。レッド寮は設備とかはぼろいけど、風呂は他の寮にも負けないぜ。何せ温泉が普通に湧いているからな」

この島の火山の影響か、レッド寮に備え付けられた風呂とは別で近くに自然の温泉があることには驚いた。しかも露天風呂だ。これは中々に風情がある。

雨が降つたら入れない点と、時折野生動物(サルとか場合によってはクマとか)が入つ

てくることを除けば良い風呂で、最近皆で専らこつちを利用してゐる。

「へえ、温泉か！ ボクも風邪が治つたら行つてみようかな」

「個人的にはかなりおススメだぞ。……つと、そろそろ行かなきゃ。風邪が酷いようなら棚に風邪薬も置いてあるから好きに使つてくれ。じゃあ行つてくる！」

俺は入浴セットの袋を肩にかけ、先に行つた十代達を追つて温泉へ向かつた。



「……ふう」

これから相部屋になる久城遊児という人が部屋を出て行つたのを確認して、ボクはそつと息を吐く。

さつきはあの十代という人の行動にはビックリした。まさかいきなり人前で堂々と服を脱ぎ出そうとするだなんて。

最初にここの食堂で会つた時も、いきなり応援してきたりなれなれしく肩をポンポンと叩いてきたり、多分デリカシーつてものが無いんだ。

一緒に行つた二人のことはまだ分からないけれど、多分こちらも同じような人なのだと思う。

遊児という人もまだ良く分からないけれど、こちらは十代達に比べて少し落ち着いて

いる感じがした。咄嗟についた風邪なんて嘘を、出かける前に少しは気遣ってくれたしね。同居人としては良い人かもしれない。

だけどやっぱりボクが一番はあの人。初恋は実らないなんて言葉があるけど、ボクはそんなことにはならない。いずれ必ず気持ち伝えるんだ。

「それにしても……遊児も結構良い趣味をしてるんだな」

ボクはさつき二段目のベッドを探っていた時に見つけた物を引つ張り出す。

それは、小さな子供くらいなら普通に包み込めるほど立派なテディベア。

毛並みはふさふさで触り心地が良く、片目だけ違うボタンが使われているのもオシャレと考えれば悪くないと思う。

「別に隠さなくても良いのに。恥ずかしかつたのかな？」

何の気もなく、ふと思いついてボクはそのテディベアを抱きしめる。遊児の物だから本当は許可を取らなくちゃいけないけど、少しだけだから許してほしい。

ボクの秘密が他の人にバレないように、あの人に思いを伝えなきゃ。出来るかどうか不安だけど、ボクはきつとやり遂げてみせる。

不安を打ち払うようにそのまましばらくテディベアを抱きしめ、ふさふさの毛並みをしっかりと堪能すると、ボクは静かに元の場所にテディベアを戻す。

「よし。あとはもう行動あるのみ。まずはどうしたらあの人と会えるか考えなくちゃ

！
」

その時、なぜかテディベアがこくりと頷くように動いた気がした。戻し方が悪かったのかな？

ぬいぐるみと編入生 その三



「何っ!? レイが幸せなテディに抱きついてたっ!」

『そうなのさ。いやあこっそりどんな様子かうかがっていたら急に。これはビックリ実
にまいっちゃったね!』

「そんなお気楽な事言ってる場合か!」

温泉でひとつぷろ浴びて（なんか野生の熊が離れた場所で湯に浸かっていたけど襲つ
てこないのそのまま）帰ってきたところ、こっそりディーに外に呼び出されて聞かさ
れたのがこれである。

温まつてほっこりしていた気分も一気に急降下だ。というかまたいつの間に実体化
してんだあのぬいぐるみはっ!

「じゃあもしかして、下手に今レイがテディから離れたらそのまま……」

俺の脳裏に、テディに力の限り抱きしめられて苦しんでいるレイの姿が浮かび上
がる。そんなことになったら大変だ!

『いや。それはまだ大丈夫。あくまで一度抱きしめただけだからまだ持ち主認定はされていい。でももう一度この数日間の間に抱きつくなり頬擦りするなりしたらもうアウトだろうね』

テディのトリガーは数日のうちに二度以上遊ぶこと。このまま数日間放っておけばひとまずは落ち着くはずだ。ならば、

「よし。それなら何が何でもレイがテディと接触するのを阻止しないとな」

幸いレイはしばらく経てばライイエローに移動となる。そうすれば距離が離れるから、テディと接触する機会も減って少しは安全になるだろう。それまでの辛抱だ。

『それじゃあそろそろ部屋に戻ろうか。急に出たからレイも何事かと思ってるかもよ！』

「それもそうだな。……ところでレイって本筋に絡んでたりするの？」

『さあてどうだろうね！』

一応聞いてみると、デイーはそう言っではぐらかす。……このはぐらかし方はおそろしく絡んでるな。まあこういう編入生は大抵話に絡んでくるものだけだ。

そんなこんなでそうしてまた部屋に戻ると、

「ただいまあつ!?!」

つい変な声が出てしまった。何故かと言えば、レイがベッドの二段目に置かれている

テデイベアに丁度手を伸ばしていたからだ。

俺は慌てて駆け寄りテデイを引つ掴むと、そのまま嚴重に布団で包んでぐるぐる巻きにする。これならそう簡単には出てこれまい。

「……ふう。危なかった」

「何っ?! どうしたのっ?!」

レイが目を丸くしている。これはどう説明したものか。

「その、これは……あれだ。何というか」

「……分かってるよ」

何故かレイはどこか優しい気な微笑を浮かべる。分かってるって何が？

「大切なものなんだよね？ だつてそうじゃなきゃ、わざわざベッドの奥に隠すように置いたりなんてしないもの。……大丈夫。誰にも言わないから」

「あ、ああ。そ、そうなんだ。わりと大事なもので、できればあまり人に触らせたくないんだ」

何か誤解されている気がするが、大切というのは間違いない。

そうしてまあ何とか話を打ち切り、体調の事や編入初日ということもあつて早めにレイには寝てもらふことに。明日からよろしくな。

数日後。

全校生徒が朝礼で講堂に集まっていた。前方上部に掛けられている大型スクリーンから、鮫島校長の姿が映し出されている。

『毎年恒例、北にある姉妹校デュエルアカデミアノース校との、友好デュエルが近づいています』

姉妹校との友好デュエルか。友好と銘打ってはいるけど、こういうのつて裏では火花バチバチつてのが多いよな。互いの学校のメンツとかもあるだろうし。

「ふわああっ」

「おっ！ 遊児が朝礼中に欠伸なんて珍しいんだな！」

「ああ。ちよつと最近寝不足だな」

欠伸したところを準人に目ざとく見つかかり、俺は適当に返事をする。ここ数日いつも気を張っているからな。あんまり寝れていない。それというのも、

「テディの奴、最近ますますストーカー染みてきたんだよな」

ふと気が付くと、いつの間にか近くにいるテディベアに最近悩まされている。それも俺だけならあまり問題はないのだが、このところはレイの周囲にも出没するようになって余計に厄介になった。

うっかりレイや他の人に見つかったらマズいので、こっちが見つけ次第他の人の目に触れる前に回収するという毎日。しかも捕まえてもすぐにどこかに消えるのだから質が悪い。

昨日など、夜中に目を覚ますとレイの枕元にちよこんとテディが座っていた時なんかちよつとしたホラーよりビビったぞ。起こさないようにそつと回収するのは結構大変だった。

あのクマほんとにどうしてくれようか。……おっと。今は朝礼の途中だった。集中しないと。

『昨年は二年生だった丸藤亮君が、ノース校代表を倒し、本校の面目躍如となりました』その言葉に周囲の視線がカイザーに注目する。去年の代表だったのか。まああの實力なら不思議じゃないが。

「へへっ！ 僕の兄さんなんだ。……僕と違って成績良いからね」
「へえ〜！」

ちらちらとカイザーを見ていたレイに、翔がそう言うってから軽く落ち込む。落ち込むくらいなら自虐ネタを振るなよ。

『今年の本校代表はまだ決まっていますませんが、誰が選ばれても良いように皆さん、日々努力を怠らないように』

その言葉を最後に映像は途切れる。……多分これもアニメ版の話に絡んでくるんだろうな。こういう一大イベントは話が盛り上がるもの。

「よっし。代表目指していつちよ頑張るか!」

「いくらアニキでも、やつぱ今年もカイザー亮で代表は決まりっす!」

「ちえ〜っ」

やはり翔としては、お兄カイザーさんが最強でいくらアニキ十代でも敵わないと考えているのだろう。一度負けたこともあり、十代は少しだけ拗ねた顔をして引き下がる。

「まあそうむくれるなよ十代。またそのうち勝負する機会もあるっつて! その時にリベンジすればいい」

「そうだな。じゃあ気を取り直して授業行こうぜ!」

相変わらずポジティブ嗜好の十代。すぐに立ち直って次の授業に思考を巡らす。翔や隼人もそれに続く勢いだ。……だが、

「……………ん!」

俺達と一緒に行くそぶりを見せながらも、まだちらちらとカイザーに視線を向けるレイが、俺は何となく気になっていた。

途中でレイは別の授業に出席するということで別れ、そのまま今日の授業が早めに終わり、俺達はいつものように駄弁りながら本棟から寮への帰路につく時だった。

「腹減ったなあ。寮の食事はまだだし」

「戻ってトメさんとこでなんか買ってくる？」

「翔がたまごパンドローするのか？」

「まさか！」

そんな取り留めのない雑談を交わしながら歩いてみると、

「……………んっ!？」

離れた所をレイが走っていくのが見えた。しかしその方向はレッド寮へ向かう道ではない。

「あいつ。どこへ行くつもりだろうな？」

「……………よし。ちよつと気になるから様子見てくる！　パン頼んだぞ！」

「えっつ!？」

十代はそう言って走り出した。まったく。そうほいほい人のプライバシーを侵害しようとするもんじゃないぜ。俺はこのままのんびりと自室に…………げっ!？」

レイの少し後方に、後を追ってトテトテと走る小さな影。あのシルエツト…………幸せなテディじゃないか！　まだ幸い他の人には気づかれていないようだが、このままでは非

常にマズイ。

「あく！ 俺もちよつと気になってきちやつたかな！ という訳で翔。俺の分も頼んだぞ！」

「えっ!? 久城君も!？」

俺も十代達を追つて走り出す。後ろから呆れたような声が聞こえるが、非常事態なため勘弁なつ！

は、
やつと追いついたのは、十代が目的地らしき場所に辿り着いてからだつた。その場所は、

「あいつ。オベリスクブルーの寮に何の用があるんだ？」

「何だろうな！」

「おわっ!? 追つてきたのかよ遊児」

先に着いて様子を窺つていた十代に声をかける。ブルー寮は以前追い払われたりともあまり良い思い出がないからな。さっさと帰りたい。

「ああ。……そういえば十代。ここらでデカイテディベアを見なかつたか？」

「テディベア? いや。見てないけど」

「そうか。もし見かけたら知らせてくれ。間違つても抱きついたり頬擦りしたらダメだぞ」

途中で見失つてしまったが、テディはさつきレイを追っていた。まだ近くににいる可能性は高い。

「ああ。よく分からないが分かつたぜ！……つと、何やつてんだ？ あいつ？」

十代の視線の先を見ると、なんとレイが庭の木を伝つてベランダから寮の一室に忍び込んでいた。

「おいおい。これはあまり穏やかじゃないな」

「追つかけるぞ！」

そこで普通に自分も木を登つて追つていく十代。いや普通に不法侵入だからな！

……ああもう仕方ない。待てよ十代！

俺もテディが居ないか確認しながら木を伝つていく。これくらいなら毎日の通学で鍛えているこの身体なら楽勝だ。誰にも見られてませんように。

ベランダから部屋の様子を窺う俺と十代。そこから見えたのは、誰かのデツキケースを愛おし気に頬擦りしているレイの姿だった。

「なっ?! なんだあいつ？」

「さあな。……マズイ！ しゃがめっ！」

俺は十代を肩に手をかけてしゃがませる。誰かが外から寮に入ってきたみたいだ。あれは……カイザーだ！ カイザーが他のブルー生と連れ立ってきた。

……待てよ!? さっきのデツキケース。前に一度十代と戦った時にカイザーが使ってたなかったか? ってことはここカイザーの部屋!?

「やばっ!? 何やってんだよお前! そんなことしてると、ノースのスパイと勘違いされちゃうぜ」

もうすぐこの部屋の主が戻ってくることを十代も察したのか、慌てて部屋に突入しレイに声をかける。

「そんなんじゃない!」

「じゃあどういう訳だ? 一応ルームメイトがこんなことしてたら俺も気になるんだが」

「……遊児まで」

俺も続いて中に入って話しかけると、レイはどこか気まずそうな顔をした。さらに深く尋ねようとする、ドアの先から何やら足音が聞こえる。……もうすぐ入ってくるぞ!

「話はあるだ。さあ行こうぜ!」

「あっ!?!」

急ごうと強引にレイの腕を掴む十代。しかしその時、慌てた勢いでレイの帽子が髪留めと共に脱げてしまう。そこから現れたのはつやややかな黒い長髪。この姿はまるで、

「レイ!!? お前……」

「……女の子だったのか? いや、それも後だ。今は走れっ!」

レイはその言葉を聞いてか帽子だけ拾って猛然とベランダへ。俺もその後が続く! だが、

「きやあつ!!」

慌てていたためか、下りる途中でバランスを崩し落下するレイ。危ないっ! レイはそのまま地面にしたたかに身体を打ち据え……られることはなかった。

下で待ち構えていた幸せなテディの身体がクツシヨンになったためだ。

レイは自分があまり痛くないことに不思議がりながらも、そのまま一目散に走つていく。……ふう。良かった。あとついでにテディも回収する。

「ナイスだテディ! よくやった! でも素直にこれで帰ろうな」

さてあてあとは自分の部屋に帰るだけ。……あれ!! 十代はどこ行つた?

「あつ! デツキが!! 貴様ノースのスパイだな!」

「違う! いや……ほら! 窓が開いてたから閉めてやろうと思つてさ。……お邪魔しました〜!」

「逃がさん！ 職員室に突き出してやる。お前なんか即退学だ！」

「誤解だつてば〜！」

しまった！ こっちは逃げきれずに捕まったらしい。さらば十代。お前のことは晩御飯まで忘れないぜ。……と言ってもカイザーのとりなしによって、十代は無事釈放となつたわけだが。

その夜。

「遊児。少し話がある。十代も呼んであるから、あとで寮の裏手の海岸に来てくれないか？」

レイから呼び出された。……多分十代も一緒となれば、ブルー寮での一件のことだろうな。

はてさて。どうなることやら。

ぬいぐるみと編入生 その四

夕食も終わり、俺は指定された時間に寮の裏手の海岸へと向かった。

話すだけなら別に俺の部屋でも良いと思うのだが、十代を交えてとなると部屋が近いから他のメンツも一緒に来る可能性があるからな。それを避けたのだろう。

『夜にこつそり少女と密会かあく！ なんかこうイケない気配がプンプンするね！』

「なんでこうお前はそういう風に言うかねっ！ 普通に事情を聞きに行くだけだつての
！」

道中茶化してくる「元」神様に閉口しながらも海岸に辿り着くと、そこには既に十代とレイが待っていた。十代が居るのを確認すると、デューはフツと姿を消す。

「よお！ 待たせたかな？」

「いいや。俺は今さつき来たところだ。その時にはレイは来てたから、レイは待たせたかもしれないけどな」

「ボクはそんなに待ってないから別に良いよ」

「いや。待たせたのは変わりないからな。すまない」

まずは本題に入る前の軽いジャブ。というかレイが同じ部屋なのにわざわざ先に

くというのがよく分からないんだよな。一緒に行けば良いのに。……何か支度でもあったのかね？

「それで？ 話つてのはなんだ？」

「お前達……特に十代に聞きたくて。何故ボクのことを黙ってたんだ？」

レイはどこか強い口調で問いたです。あの時一目散に逃げたと思つていたが、どうやらことの顛末を陰から聞いていたらしい。……確かに十代は捕まりながらも、俺やレイのことを話さなかった。

カイザーがとりなしてくれただから良かったもの、下手をすればあの場で学園側に突き出されていたことも十分あり得るからな。それなのに言わなかったことにレイは疑問を感じていたのだろう。

「昼間のことか？ ……女の子が男の格好してこんなとこまで来るなんて、訳ありそうだから。……最悪の場合遊児のことは喋るつもりだったけどな！」

「そこは喋るんかいっ！ まあ仕方ないと言えば仕方ないけどな」

そこは素直に受け入れる。訳ありの美少女と悪友のどちらを助けるかと言われたら、男は大抵美少女を取るものだ。俺だって多分そうする。

「言うな！ 昼間見たことは、絶対人に言うんじゃない！」

「人にものを頼むときは、まず事情を説明するもんだ」

「そこには俺も同感だな。……訳ありというなら話してみなよ。ルームメイトだろ？」
「……できない」

レイは一瞬悩みかけ、しかし首を横に振る。……よほどの秘密らしいな。これは聞き出すのは難しいかもしれない。

そこで十代は、なぜか自分の荷物を降ろしてごそごそと探り始めた。何やってんだこんな時に。

「じゃ、デュエルしようぜ！」

いやホントに何言ってるのこの人っ!? 荷物からデュエルディスクを取り出した十代に俺もレイも哑然とする。

「なんだ？ それはどういう理屈だ？」

「デュエルじゃだれも、嘘は吐けない」

出たよこのデュエルバカ！ 何でもかんでもデュエルで解決しようとするんだからもう。……だが、こういう話しづらいことを本音でぶつけ合うには、デュエルという方法もアリっちゃアリかもしれない。

「ボクが勝つたら、事情を聴かずに黙ってるっていうのか？」

「ああ。その必要もなくなるからな」

「正直なところ俺には話してほしいんだが……まあレイが勝つたら俺もしばらくは静観

するのでしょうか。そっちが話す気になるまではな」

今回の俺はあくまで立会人。レイもさっきの言葉を聞く限りでは、俺を呼んだのはあくまでメインの目的ってわけじゃなさそうだしな。

元々結果がどうなるうが言いふらすつもりもないし、ここはのんびり勝負を見守るとしよう。

「デュエルっ!!」

十代対レイの対決は十代があつさり勝つかと思いきや、レイが『恋する乙女』と『キューピットキス』のコンボで、戦闘を行った相手のコントロールを得るというトリックキーな戦術で意外に十代を苦しめた。

自らがダメージを負いながらも、愚直なほど一途に向かっていく様は中々に面白いし好感が持てた。なのだが、

『きやつ!!』

『お嬢さん。大丈夫ですか? ……すまない。そんなつもりじゃ』

とか、

『う、ううっ!?!』

『スパークマンっ！ お前はヒーローのくせに、か弱い女性を攻撃するなんて、なんて奴だっ！』

『ああっ！ 俺はなんてことをしてしまったんだあ』

『自分を責めないで。戦うこと……それは宿命なのだから』

とか、戦闘する度にカードの精霊っぽい方々の小話が入るのは何とかならないのだろうか。これには十代もあんどり。

『良いぞ良いぞ〜！ こういうドロドロの関係というのも結構好みなんだよね！』

そこの悪趣味な光球は黙っとれ！

そんなこんなでわりと盛り上がったデュエルだったが、十代が『バーストレディ』と『バースト・リターン』のコンボを使ったことで状況は一変。

『嘆かわしいこと。そのような小娘ごときに惑わされるとは。アンタ達……さっさと戻ってきなさいっ！』

なんかいつもより迫力のあるバーストレディの一喝で男ヒーロー二人は手札に帰還。『ヒーローの絆は、そんな恋愛ごっこより強いってことさ』

そうしてまた単騎になってしまった恋する乙女に、融合召喚されたフレイムウィングマンの攻撃が炸裂。流石にダメージに耐え切れず、レイのLPは0となったのだった。

「ガツチャ！ レイ。面白いデュエルだったぜ！」

崩れ落ちるレイの頭から帽子が脱げ、昼間見た長髪が露わとなる。

「十代。……ボク」

「おっと。皆まで言うな。そこから先は、ずっと見ていた後ろの奴に言ってくれないか」
そこには翔に隼人、明日香に、件の人物であるカイザーの姿があった。

何を隠そう、この人達は最初からずっと隠れてデュエルを見ていたのだ。この前の神楽坂の時といい普通に見ろよ！

「出番よ！ 男の責任でしょ！」

明日香に促され、カイザーはどこことなくいつもより落ち着かない態度で前に進み出る。

「亮様！ ……ごめんなさい。昼間寮に忍び込んだのは、ボクだったんだ。十代と遊兎はそれを止めようとしただけなんだ」

レイが顔を僅かに赤らめながらも申し訳なさそうにそう正直に語るのを、カイザーは静かに聞いていた。……俺もあの場に居たことは言わなくてよかったんだけどな。

「亮様がデュエルアカデミアに進学なさってから、逢いたくて逢いたくて……やつとここまでやってきたの。十代とのデュエルには負けたけど、亮様への思いは誰にも負けない。乙女の一途な思いを受け止めてっ！」

うゝむ。一世一代の告白だ！ 今一瞬レイの後ろに恋する乙女の精霊が見えた気がする。さつきもそうだったし、半分精霊化してないか？

「なくんかカイザーもたじたじだな！ それにしてもスゲー迫力。デュエルと同じだ」
そこでデュエルを例えに出すのは我らがデュエルバカこと十代。今大事なことなんだから茶々入れるんじゃないよ！

「デュエルじゃないもん」

「そうね。一途な思いは素敵よ。でも今アナタが言ったように、デュエルのヒーローと違って本物の男性はウイंकや投げキッスじゃダメなの。デュエルも恋も、気持ちと気持ちが繋がって初めて実るんじゃないかしら？」

「あなた……亮様の何なの！ まさか恋のライバル？」

落ち着いた様子で諭そうとする明日香に対し、レイは頬を膨らませて威嚇する。

「レイ。お前の気持ちは嬉しいが、今の俺にはデュエルが全てなんだ」

「亮様……」

結果はやっぱりというか撃沈か。この男が誰かと付き合うって所があまり想像できないんだよな。強いて言うならよく一緒にいる明日香ぐらいだろうか？ けどその明日香は十代の方を時々なんとも言えない目で見てるしな。

カイザーはポケットから何かを取り出してレイに手渡す。それは、あの時部屋に落っ

こととしたレイの髪留めだった。

「レイ。故郷に帰るんだ」

「そこまですることないだろう！ 女の子だって……オベリスクブルーの女子寮に入れてもらえば」

あまりにバツサリと振られて瞳に涙を浮かべるレイを見かねてか、十代がカイザーに食って掛かる。

「レイはここにはいられない」

「えっ！ レイにはまだ秘密があるのか!？」

「……レイはまだ小学五年だ」

「「えっ!?!」」

カイザーがポツリとつぶやいた言葉に一同騒然とする。もちろん俺もだ。

「デイー。今の話ホントか?」

『ホントホント！ レイは間違いなくまだ小学生だよ!』

おいおい！ 小学生なのにここの編入試験を突破したのか!？ これは生徒の身元調査の不備を責めるべきか、レイの小学生離れた実力を褒めるべきか……両方だな。

「なんなんだよっ！ 俺ってば、小学生相手に苦戦したのかよ!?!」

「ごめんね！ ガッチャ！ 楽しいデュエルだったよ!」

脱力して背を地面に投げ出す十代に、レイはどこかへへろっばいポーズで十代の十番を決める。

「なっはっは！　最高だ！　これだからデュエルは楽しいんだよ！」

夜の海岸に、十代の半分自棄気味で半分本気の笑いが響き渡った。哀れ十代。……まあこんな日もあるって！

そして翌朝。

「……しまった。俺としたことが、最後の最後で詰めをミスった」

早朝にふと目を覚ました俺が目にしたのは、もはや隠す必要もあるまいと帽子を脱ぎ去り、幸せなテディを抱いてすやすやと気持ちよさそうに眠っているレイの姿だった。

めいぐるみと編入生 その五

「皆ジュースは持ったか？」

「「お〜！」」

「よし！ それじゃあいどうぞ。カンパ〜イっ！」

「「カンパ〜イ！」」

コンッと缶をぶつけ合う音と共に、俺達はグイッとジュースを呷った。

昨日の騒動から一夜明けて、レイは両親に連れられて家に戻ることとなった。

しかし島から船が出るのは昼過ぎ。おまけに今日は珍しく休日だ。それなら出発の前に景気づけにパーティーをやるうという十代の思い付きにより、急遽昼食を兼ねて簡単な送別会を行うこととなった。

場所は十代がお気に入りと言っている寮の近くの木陰。確かに今日は天気も良いし、たまには野外での食事会も悪くないだろう。ちよつとしたピクニック気分だ。

参加者は主賓であるレイを始め、俺・十代・翔・隼人・明日香・カイザーといった昨日の面々である。一応失恋したということとカイザーの参加は見送ってもらったことも考えたのだが、レイ本人が呼んでほしいとのことなので参加してもらった。

「しつかしスゴイご馳走だな！俺が言うのもなんだけど、これどうやって用意したんだ？」

「ホントホント！ こんなご馳走見たことないっす」

「そうなんだな！ このジュースもとても美味しいけど、聞いたことない銘柄なんだな！」

シートに並べられたいかにも豪勢な品々を前に、オシリスレッドの面々はもう涎を垂らさんばかり。しかし主賓であるレイがまだ口をつけていないことと、いくら何でも凄すぎるご馳走ということでギリギリ踏み止まっている。

「料理の方は、亮がブルー寮のシェフに頼んで用意してもらったの。カイザーと呼ばれるだけあって、D Pはたっぷりあるらしくてね。……ジュースの方は久城君がどこからか用意してくれたものよ」

「まあな。料理はともかくジュースは伝手があつてさ。まだまだお代わりもたっぷりあるからガンガン飲んでくれ！」

カイザーの方もレイに対して思うところはあのだろうか。何も言わずとも食事の準

備をかって出てくれた。

ジュースに関してはこちらにはいくらでも出してくれる自販機が居るからな。時々蓋が開いている奴にだけは注意する必要があるが、それは全てデイーに押し付けているから問題ない。

「そういうことならありがたく頂くよ。……皆、ボクのために準備してくれてありがとうね」

そう言ってレイが小さく切り分けられたローストビーフを皿に盛り始めたのを切っ掛けに、お預けされていた腹ペコ野郎達が一斉にご馳走に群がる。……オイ待てよお前ら！ 俺も食うぞ！

俺だつてこんなご馳走は元の世界でもそうそうお目にかかれなかったからな。しかもタダ飯とあらば食わない理由はない。俺も他の奴らの後に続いて猛然と食事に襲い掛かった。

「……デイー。デイーは見つかったか？」

パーティーの最中、俺はトイレに行くと偽って近くの木陰に入りデイーを呼び出した。

『いいや。他の幻想体達もまだ見つけてないってさ』

今日の朝、レイが抱きしめて眠っていた幸せなテディは、俺に見つかったのを察知したのかすぐに姿を消してしまった。

急にテディが居なくなつたことで寝ぼけながらも目を覚ましたレイに事のあらましを尋ねると、どうやら失恋のショックが尾を引いていて夜中まで寝付けなかつたらしい。

そこにたまたまベッドの間からまたテディが顔を出しているのが見え、俺に悪いとは思いつながらもギョツと抱きしめて眠つたという。

これに関して言えば完全に俺が迂闊だつたというしかない。レイはまだ小学生だ。性別も年齢も偽つてここ数日気を張っていただろうに、人生初の失恋で心が弱つていることを察することが出来なかつた。

何か支えの一つでも欲しい時に、目の前に丁度良いぬいぐるみがあつたら手を出してしまうことは十分考えられたことだ。

消えたテディを探すため、探し物が得意なヘルパーを筆頭に協力的な幻想体総出で精霊化して周囲を探してもらっているのだが一向に見つからない。

「分かつた。引き続き頼む。……寝るなよな」

『分かつてるって！ そつちはパーティーを楽しんでおいで』

デューはそう言ってフツと姿を消した。……純粹にパーティーを楽しめれば良いんだが、そももいかなんだよな。

レイが二度抱きしめた以上持ち主認定されている可能性が高い。

そして、持ち主が自分から離れようとした場合、デューはどんな手を使っても持ち主を追いかけるだろう。あのクマの行動力を舐めてはいけない。そして寂しさのあまり抱きしめて絞め殺すまでがーセットだ。

しかしあくまでカードの持ち主は俺。いかにデューがカードごと移動しているとしても、俺から長く遠く離れることはできない。

デューに以前確認したところ、幻想体が俺から離れて単独行動できるのはこの島およびその周囲約一キロに限定される。これは幻想体達の脱走防止用に設定したらしい。

『つまりはこの島自体が幻想体にとっての収容室ってわけさ』とかなんとかデューは言っていたが、もちろん俺が幻想体と一緒に行動すればもつと遠くでも大丈夫だとう。

それを超えると自動的にカードごと俺の所に戻ってくる仕様らしく、つまりはレイが船で島を出ればデューがそれ以上追いかけることはできないわけだ。

「パーティーが終わって、レイが船に乗って出発するまであと一時間と少し。……頼むから短気を起こしてくるなよデュー」

「はあく！ 食った食った！」

「もう無理っす！ あんまり美味しいから、お腹が苦しくなるくらい食べたっすよ！」

「それは食いすぎなんだな！」

パーティーも終盤。用意されたご馳走もあらかた各自の腹に収まり、ぽかぽかと気持ちの良い陽気もあつてつい昼寝の態勢に入る十代達。

それを主賓であるレイと明日香はシートに腰を下ろして笑いながら眺め、カイザーも近くの木に寄りかかりながら穏やかな表情を浮かべている。

実に良い。こういうほのぼのとした日常はとても良いものだ。ちなみに俺はさつきからずっと周囲を警戒している。もう油断はせずレイから目を離さないからな。……とは言うものの、

「来ないな」

「何が来ないんだ遊児？」

「えっ!? ……ああ。何でもない。来ないなら来ない方が良い類の奴でさ」

「そうか! ……んっ!?」

気持ちよさそうにうとうとしている十代に生返事を返していると、十代が急に何か気

になったような表情をする。その先に視線を向けると、レイが中座してどこかへ歩いていくのが見えた。

翔も隼人も昼寝してるし、丁度明日香はカイザーと話していてレイが中座したことに気づいていないようだ。

「どうした十代？ 何か変な所でもあったか？」

「うん。なんか険しい顔してるからちよつと気になって」

険しい顔か。一瞬トイレか何かかと思つたが、十代が主人公がそう思つたとなるとこれは何かあるかもしれないな。

「……俺ちよつと様子を見てくる」

「なら俺も付き合おうぜ」

「遊児はここで待つていてくれ。いっぺんに居なくなつたら大事になるかもだろ？」

「……なくに。すぐ戻るさ！」

いや、いつテデイが出てくるか分からないから俺も着いて行きたかつただけだな。

ただどこかで強引に着いていくというのもあれだし、かといってテデイが出たらマズイ……そうだ。

「じゃあ念のため、出てきてくれ罪善さん！」

カタカタ。

俺はあえてデッキに残しておいた罪善さん呼び出す。

「罪善さん。一応着いて行つてあげてくれ。いざつて時は、罪善さんが居るだけで気持ちが悪くしな」

「分かった。ありがとな。じゃあちよつと行つてくるぜ！」

最悪テデイが出てきた時の護衛役も兼ねているが、そつちはハネクリボーも居るし多分大丈夫だとは思ふ。

そうして十代は罪善さんと一緒にレイを追い……少しして何事もなくレイも連れて帰つてきた。罪善さんの様子からすると、どうやらテデイは居なかつたようだ。少しだけホツとする。……それはそれとして。

「おい。十代。……ちよつと来い！ あつ！ レイはそろそろ時間だろ？ 翔達を起こして片づけを始めておいてくれ。俺達も少ししたら行くから」

「うん。分かったよ」

主賓に手伝わせるというのもどうかとは思ふが、こういうのは全部やつてもらふよりも、最後まで一緒にやつたという思い出を残しておく方が良いと思う。ちゃんと護衛に罪善さんも居るから大丈夫だろう。

だが、今はまずこつちのことだ。俺は十代を引つ張つてレイから少しだけ離れる。

「どうした？」

「どうしたじやないよっ！ 気が付いてないのか？」

戻ってきたレイの様子は、少しだけ先ほどと違っていた。というか……明らかに十代に対してなんか意識している感じだったぞ。

「……で？ 何があつたんだ？」

「特に何も。ただまあもうすぐお別れだからつてちよつと落ち込んでたから、ちよつと励まされただけだ。もう少し大きくなつたらまた来いよとか」

おかしいな。いくらなんでもそれだけであんな感じには……。

「他には？ 他には何かなかつたか？」

「他？ 他と言え……話してる途中で偶然レイの寄りかかった木の枝が折れて、落つてこちてきたのを咄嗟に俺が庇つたぐらいだな。おかげでちよつと擦りむいたけど、まあ小学生の女の子を怪我させるわけにはいかないもんな！」

確かによく見ると、袖に隠れて分かりづらいが腕に軽い擦り傷がある。だけどこれって……フラグじゃね？ いや、アニメ的にはこれが正しい流れなのか？ まあどちらにせよ。

「……これから頑張れよ！」

「頑張れつて何を？」

まあ分からなくても良いのさ。この流れは多分そういうことだから。

そうして俺達は皆の所に戻り、最後まで和氣藹々としながらレイの出発の時を迎えたのだった。

本土まで向かう大きめの定期船に乗り込んだレイを見送るべく、俺達は波止場に集まっていた。

ずっとレイに近づくと奴を見張っていたが、彼女が船に乗るまで結局デディは出てこなかった。念のため乗船が打ち切られるまで見張っていたが、諦めたのかな？

「バイバ～イ！」

「来年小学校卒業したら、またテスト受けて入学するからね～！」

汽笛と共に船が少しずつ動き始める中、レイは両親と共にこちらに程近いデッキから手を振る。

「へへっ！　だつてよ！」

「その時は、俺はもう居ないけどな」

十代がそうカイザーを茶化すが、確かに今カイザーは3年生。今年で卒業だからレイが入る頃にはもう居ないわけだ。

あと十代。そんなに悠長に構えてて良いのかな？　こういう場合のお約束がそろそ

ろ来るぞ。

「待つててね〜! ……十代様〜っ!」

レイの最後の言葉に十代は唾然。それ以外はニヤニヤと笑っている。

「な、なんで俺なんだよ!」

「きつと、アナタのデュエルに惚れたんでしょ!」

明日香はそう言っているが、俺的にはそれだけではなく送別会の時の一件も原因だと思っている。自分を庇って怪我を負った人に、大きくなったらまた来いと言われたら結構グツとくるものがありそうだしな。

「あとは任せる」

「じゃあアニキ。先に帰るね」

「ゆつくり見送つてあげるんだな!」

「船が見えなくなるまで見送つてあげなきゃね!」

他の奴らは口々にそう言いながら、固まったままの十代を置いて波止場を後にする。薄情だとは思わない。人の恋路を邪魔するものは、古来より酷い目に合うというのが約束だからだ。

「待つててねっ! きつとよ〜! 十代様〜っ!」

「え、え〜っ! 嘘だろ〜!」

十代は力なく崩れ落ち、俺はその様子を見てつい微笑ましく思い……最後にもう一度レイの方を見て固まった。

レイの後ろから彼女を抱きしめようと、幸せなテデイがトコトコと近づいていくのが小さく見えたからだ。

あのクマっ!? レイが来る前から船の中で待ち伏せてやがったっ!?

もう船は出発してしまつてここからじゃ乗り込めない。残る手は、

「頼む! 罪善さん! テデイを止めてくれっ!」

カタカタ!

俺の傍で素早く実体化した罪善さんが、俺の意を酌んで全速力で船に突撃していく。多少誰かに見られて騒ぎになるかもしれないが、こうなつたら人命優先だ。しかし、

「これじゃ……間に合わない!」

いくら罪善さんが速くても、距離的にどう考えてもテデイが辿り着く方が早い。

「えっ!?! あれ? なんでこんな所に? というか、普通にこの子歩いて……!」

レイはそこで後ろから迫るテデイに気が付く。しかし普通に歩いていることに驚いている内に、テデイはレイをその腕で抱きしめた。

あとは少し力を込めるだけ。それだけで以前キマイラを絞め殺した時のように、レイの身体はまるで枯れ枝を折るように碎け散るだろう。

「やめ……やめろおおつテディっ!!」

ここからではもう言葉も届くか届かないかという所だろうけど、俺にはもう叫ぶことしかできない。そして、

「……えっ!?!」

テディは少し背伸びしてレイの肩をポンつと叩き、まるでさよならを言うように軽く手を上げてデッキの外、大海原へ飛び込み……そのままフツと姿を消した。

次の瞬間、俺の手元にカードとして戻ってくる。これは……どういうことだ? 活動限界範囲に達したのか?

「きゃあああっ!?!」

「うわあああっ!?! 骸骨だああっ!?!」

悲鳴に気が付いて確認すると、何とか船に追いついた罪善さんが、乗客の何人かに見つかって怖がられていた。

本人の精神鎮静の光で周囲を落ち着かせているので大規模なパニックにこそなっていないが、怖がられて罪善さんがおろおろしている。

……あれ? 罪善さんはまだあそこに居るぞ? ってことはまだ活動限界範囲には

達していない。じゃあなんでテデイが急にこっちに。

『そんなの簡単だよ。テデイはただ持ち主の下に戻っただけさ。たった一人の持ち主の下へね』

いつの間にか、デイーの光球が俺の傍に浮遊していた。そしてその言葉と共に、周囲に散らばっていた幻想体達も続々と戻ってくる。たった一人のつてどういうことだ？

『まあそれは後で話すとして……今は罪善さんを戻してさっさと退散した方が良くじゃないかな？』

あっ!? そうだった！ 罪善さくんっ！ 俺は慌ててあの光り輝く骸骨さん呼び戻してその場を後にしたのだった。

ちなみに十代は、急に罪善さんが飛んで行つて驚いてはいたが、後日事の顛末をまとめて話すということで話がついた。……もうこの際精霊関係についても話して協力してもらった方が良くかもしれないな。

『テデイの持ち主は常に一人だけ。そして、一度でも持ち主として認定すれば、その持ち主が死ぬぐらいのことがないと変わらない。つまり』

「テデイが今持ち主認定しているのは俺ってことか。……でも何でだ？ 俺はテデイで

遊んだことはない。抱きしめたりもしてないぞ？」

俺は自分の部屋に戻り、デイーから今回の件の説明を受けていた。

ちなみにテディはまた実体化したところ、レティシアと遊んでいて今はおとなしい。いつもこれなら良いんだけどな。

『いやいや。君は幸せなテディとこの数日遊びまわっていたじゃないか？ 鬼ごっこや

かくれんぼなんかで』

『そんなの……あつ!?!』

俺はここ数日のことを思い返してみる。ここしばらく、俺はレイの周りに出沒するテディを素早く見つけては回収するということを行っていた。

だけどそれが、テディからすれば遊びだったとすれば？

『もちろんレイも候補ではあったのだろうね。だけど一度や二度だけ遊んだ相手と、カードの持ち主な上毎日遊んでいる相手。テディにとってどちらが自分の持ち主かなんて言わずもがなだよ。さらに言えば……テディ！ こっちにおいで!』

その言葉と共に、テディがトコトコ俺に向かって歩いてくる。一応落ち着いているよ
うで、抱きつかずに手前で止まる。

『テディの片目。なくしたボタンの代わりに付けられているのは君の予備の制服のボタン
ンだろ？ これも君を持ち主認定した理由の一つだろうね』

「……つまり、最初から俺が持ち主認定されることはほぼ確定していたと?」

『そういうこと! だから正直わざわざレイの周りを見張っていなくても、この部屋で待つていたらそれだけで勝手に帰ってくる可能性も高かったんだよね』

「そ、そういうことは早く言え〜っ!」

なんだよもうっ! それじゃあここしばらく気を張っていなくても良かったのかよちくしようっ! 俺はそれを聞いて一気に脱力する。……だけど、

「……デイー。それじゃあなんで最後テディは船に乗り込んで待ち伏せしてたんだ?

あの時点ではもう持ち主は俺だったことになる。レイもその日の朝にテディを抱きしめていたが、先に持ち主が決まっている以上変わらないんだろ?」

『そこに関しては僕も疑問なんだよね』

デイーは少しだけ不思議そうに言った。

『朝久城君に見つかつてすぐに消えたのは遊びの一環だとして、持ち主が決まっている以上レイにもうちよつかいを出す理由はないんだよ。……となると、あれは完全にテディの独断ということになる』

独断……ねえ。俺は目の前でちょこんと座るテディベアを優しく撫でる。

『もちろんこれも遊びの延長だったと言えばそれで済むんだけどね。強いてそれ以外の理由を挙げるとすれば……お別れを言いに行つたのかもしれない。持ち主ではないに

せよ、自分を二度も抱きしめた相手へのね！』

「ふうん。それはなんともロマン溢れる話だな」

あるいは、もしかしたらだがテディは、どこかレイに自分との共通点を見出したから気になったのかもしれない。

たった一人の持ち主を探してさまよう自分と、たった一人の初恋の人を追ってこんな島までやってきたレイ。どこか似通っていたからこそ、テディはレイにお別れを言い行つたのかも……なくんてな！

「なあテディ。実際の所どうなんだい？」

俺の何の気もない質問に、テディはただ首をカクンと傾げて何も答えることはなかった。

閑話 十代と幻想体



「あれ？ アニキどこ行くんすか？」

俺が扉を開けようとすると、机で本を読んでいた翔が声をかけてきた。隼人は久々にデッキの構築をしようと、さつきから自分のベッドにカードを並べて集中している。

「おお。ちよつと遊兎のとこまでな」

「久城君の？ 用があるならさつきの夕食の時に言えば良いのに」

「それが、あまり他の人には聞かせられない話らしくてさ。出来れば翔や隼人は連れてこないでくれつてよ」

内緒話、しかもこんな時間になんて遊兎にしては珍しいことだ。だから俺も少し気になつている。

「ふくん。なんか仲間外れみたいでやな感じつすね」

「まあそう言うなつて！ てなわけでちよつと行つてくる」

「あつー！ ちよつと待つてよアニキ。……これ。ついでに届けてほしいんだ。昨日ノートを見せてくれたお礼につて」

翔は俺に菓子の袋を投げ渡す。そう言えば昨日、翔が俺とは違う授業を遊児と一緒に受けて、たまたま宿題を忘れたのを咄嗟に遊児に宿題を写させてもらつて助かつたつて言つてたな。

……遊児は次は自分でやれよつて怒つてたらしいけど。

「あいよー！ それじゃあ行つてくるー！」

俺は扉を開けて外に出て、そのまま静かに遊児の部屋に向かう。もう夜だし、あんまり騒ぐと流石に他の奴らに迷惑だからな。

コンコンコン。

「遊児。俺だ十代だ。言われた通り一人で来たぞ」

……おかしいな。反応がない。呼び出したのは向こうなんだから来るのは分かつているはずなんだが。

聞こえてないのかともう一度ノックして少し待つてみたが、やはり返事はなかった。なんなんだよ一体？

「じゃあねえ。戻るか」

なんか急用でも出来たのかもしれない。ここはひとまず出直そうと振り返つた時、

『カギ、開いてるよ！ 入らないの？』

「おわっ!？」

急に呼びかけられて驚く。俺のすぐ後ろに、小さな女の子が立っていた。こんな子さつきまで居なかつたはずだけどな？

ちよつとお高い人形が着てるみたいな、フリフリが多い赤いドレス。同じ色のやつぱりフリフリのついた帽子を被り、髪飾りなのか両耳の後ろに少し大きめの鈴を付けている。

その子は腕に赤ん坊のような人形を抱いて、どこか不思議そうな顔をしてこつちを見ている。誰だこの子？ ……いや待てよ！ 確か三沢が部屋に泊まりに来た時、遊児の横に立っていた事があつたな。つてことはハネクリボーと同じ精霊か？

「えくつと。遊児の……この部屋に居る奴の知り合いか？」

『うん！ レティシアっていうの！ よろしくお兄ちゃん！』

「ああ！ 俺は十代。遊城十代だ。よろしく！」

レティシアが手を差し出してきたので、俺もそれを握り返す。……普通に触れるな。つて言つてもハネクリボーだつて俺に触れるか。

クリクリ〜！

そんなことを考えていたら、ちよつどそのハネクリボーがデツキから出てきた。ハネ

クリボーはレティシアをじつと見てはいるが、特に警戒みたいなことはしていないようだ。

『わあ！ あなたもモフモフだあつ！ フフツ！ 良い子良い子！』

レティシアもしつかりハネクリボーが見えているようで、人形を片手で抱いたままハネクリボーをその小さな手で撫でる。ハネクリボーもまんざらではないようで、特に嫌な顔もせずに撫でられっぱなしだ。

『……ふんつ！』

気のせいか、レティシアの抱いている人形が何か言ったような気がした。……精霊の持つてる人形だしそういうこともあるのか？

『くっ、あつ！ いけないいけない。もし遊児お兄ちゃんが居ない間に来たら、部屋に通してお出迎えしなさいって言われてたんだつた！』

「つまり、レティシアはお留守番か？」

『そうなの！ さあ十代お兄ちゃん。中へどうぞ！』

そう言いながらレティシアは、遊児の部屋の扉を開けて中に入っていく。

カードの精霊が出迎えてくれるってことは……つまりこの前の罪善さんが急に船に向かつて突撃していったアレとかの説明をしてくれるってことか？ そういうことから翔とか隼人は呼ばないよな。

「へへっ！　なんかワクワクすんじゃねえの！」
クリクリ〜！

さあて一体何が出てくるか？　俺はハネクリボーと共にレティシアを追って部屋に入っていた。

『どうぞ十代お兄ちゃん！　座って座って！』

「ああ！　ありがとうな」

レティシアに促されて椅子に座り、俺は室内を見渡す。部屋ごとの間取りはどこも同じはずなのに、荷物の置き方なんかが違うだけで俺達の部屋とはまるで別物って感じがするな。

『遊児お兄ちゃんが帰るまでもう少しかかるから、それまで私とお話しよっ！』

レティシアは一番下のベッドにポスンと腰を下ろし、ニコニコと笑いながらそう口にする。

「お話？　まあ良いけどさ。……そうだ！　これ、食うか？」

そういえば翔から菓子を預かってるんだった！　ただ待ってるってのもアレだし、遊児の分を残しておけばちよつと摘まむくらいなら良いだろ！

俺は菓子の袋を開けて中のスナック菓子をとり出す。

『お菓子っ！　ありがとう！』

チリンチリンと髪飾りの鈴を鳴らしながら、レティシアは大喜びでスナック菓子を一つ手に取り口に放り込んだ。サクサクという音が口の中から聞こえる。

『美味しいっ！』

「そうか！　喜んでくれて嬉しいぜ！　どんどん食べよ！」

俺も負けじと放り込み、食べながら何でもない雑談を楽しむ。

レティシアは本当に何でもない話でも楽しそうにニコニコしながら聞き、それを見ていると俺もどこかほっこりとした気持ちになって自然と笑顔になっていた。

『ふふっ！　十代お兄ちゃんもとっても笑顔なの！　……これなら私の贈り物は要らないよね』

後の方はよく聞き取れなかったが、まあ大したことじゃないだろう。そうしてあれよあれよという間に、菓子はいつの間にか半分くらいになっていた。

「おっと。もうあとこんだけか。残りは遊児の奴の分に取っておこうな」

『うん。とっても美味しかったよ！　ありがとね十代お兄ちゃん！』

「おう！　しかし菓子ばかり食べてたら喉が渴いたな。何か飲み物でも」

取りに行こうと椅子から立ち上がる時、フツと視界の隅に妙なモノが現れ

た。

それはデカくて白い卵のような形の機械だった。表面にはつぶらな赤い目と笑顔をイメージした口がついていて、金属のアームが二本身体の両脇から伸びている。

下の方から伸びる二本の長い脚は車輪になっていて、それを器用に操りながらこの何かは俺の前にやってきた。

「おわっ!? なんだ?」

『大丈夫! ヘルパーちゃんだよ。飲み物って言ったから反応したみたい』
クリクリ。

突然で驚いたが、ハネクリボーが反応していることからどうやらコイツも精霊らしい。一体遊兎のここには何体精霊が居るんだ?

へぴぴっ! 飲み物。了解。クツキングプロセスを開始します。

ヘルパーはそうどこか金属質な声を上げると、何かの駆動音を身体の中から響かせながら首を上下左右に軽く振る。

そしてしばらくすると、身体の横から小さな筒のようなものが飛び出し、そこから良い香りのする黒い液体が流れだした。香りからしてコーヒーだな。

へコーヒー抽出完了。美味しいコーヒーをどうぞ!。

どこから取り出したのか、ヘルパーは紙コップをアームで器用に持ちながら液体を注

いでいき、ある程度注がれたかと思うとそのコップを俺に向けて差し出してくる。

「俺にくれるのか？」

ヘルパーは何も言わず、ただ湯気を立てるコーヒーを差し出し続けるのみだ。俺はゆっくりと紙コップを受け取り、軽く息を吹いて冷ましながらし口に含む。……熱い。だけどどこかホツとする味だ。

俺はあんまりコーヒーは好きじゃないけど、これならたまには飲んでみたいと思える。

「……ふう。ヘルパーだっけか？ 美味しいコーヒーをありがとう」

「あなたのお供、ヘルパーロボットだよ！ 次は何をお手伝いしようかな？」

『ヘルパーちゃんはもう大丈夫だよって言わないとずっと近くにいるよ』

そうなのか。じゃあ休ませてやらないとな。

「ヘルパー。俺はもう大丈夫だ。なんかあつたらまた呼ぶから休んでくれ」

「了解。スタンバイモードに移行します。お手伝いが必要なら呼んでね」

そう言うヘルパーは、現れた時と同じようにフツと姿を消した。……この辺りはやはり精霊なんだなって思う。

「……そうだ！ レテイシアは飲まないのか？ コーヒーがダメなら他の何かを取ってくるけど……」

『私はコーヒー苦手なの。お砂糖とミルクをたっぷり入れないと飲めないんだもん。……だからこっちのジュースを飲むの!』

レテイシアはいつの間にか、どこか見覚えのある缶ジュースを両手で持つてコクコクと飲んでいた。あれこの前の送別会で遊児が皆に振舞った奴だ! まだ余ってたらしいな!

俺達がこうして一服していると、外から聞き覚えのある声が聞こえてきた。……遊児だな。やつと帰ってきたのか!

と言つてももうこの時点で結構驚かされたからな。これ以上のことはあんまりないだろう。

俺はそんなことを思いながら、少しだけ冷めてきたコーヒーをズズツと飲んだ。

十代へのカミングアウト その一



「なあ？ ぶっちゃけた話どこまで言っただいと思う？」

『突然だね。何の話だい？』

レイがこの島を出て数日した頃、俺は前々から考えていたことを実行に起こす前に、デイーに確認を取るべくそう切り出した。

「いやまあ……俺の事とか、幻想体の事とかさ。十代に話してみようと思って」

もしこれが漫画版の世界なら、俺の多少の原作知識を活かすために流れを壊さぬように動いていただろう。しかしここはアニメ版。元々の流れが分からない以上、何が最善かなんて分かるはずもない。

おまけにこの前のデイーの一件で分かったように、俺がおとなしくしていたとしても場合によっては向こうから絡んでくるし、こちらの幻想体が何かやらかす可能性は十分にあり得る。

なら最初からある程度事情を知っている人に話しておいて、いざという時のために協力体制をとれるようにしておく方が良い。

『ふむ。十代君なら精霊も見えるし、また幻想体が脱走するみたいなのが起きたら協力してもらおうってことか。もちろんOKだとも！ 話す内容も久城君が決めてくれて構わないよ』

「良いのか？ 俺はてつきり話すなど言われると思つていたんだが」

そう聞くと、デイーはまるで首を横に振るように光球が震えた。

『最初に言ったと思うけど、この世界はあくまでシミュレーションだ。元々君という異分子が存在したらという条件付だからね。きちんと一応の目標であるこの学園の卒業に向けて動けるのであれば、君は基本的に好きに動いて構わないとも。むしろその方が退屈しなさそうだ』

「そうか……よし。それなら問題なさそうだな」

〃元〃 神様のお許しも出たことだし、こういうのは善は急げだ。早速今日辺り十代に話してみるとしよう。

『どうだった？』

「一応さつき夕食の時に、十代に後でこの部屋に来てくれるよう頼んでおいた。念のため一人でつて条件付きだな」

俺は食事で膨れた腹を擦りながら、自室で待つていたデイーにそう返す。

精霊が見えない翔や、声だけしか聞こえない隼人にはまだ早い。幻想体を実体化させれば意思疎通はできそうだけど、幻想体が逃げ出すようなことになったら常時実体化しているとは限らないからな。

もし十代と協力体制を築けたら、その後でまた機会を見て二人にも話すかどうか考えるつもりだ。

『それで？ どこまで話すか決めたのかい？』

「ああ。とりあえず俺の目的と、幻想体のことについては話そうと思う」

どこまで行つたつて俺の目的は生きて元の世界に帰ること。

そのためにとつてもアレだが、この学園の卒業自体は十代達も含めて学生の本分だ。特に何も言わなくても互いに協力できるだろう。

それと幻想体関連だが……どう言つたものかな。精霊ではあるけど危険度はピンキリだし、俺もあくまで持ち主でしかないしな。せめて最初に良いイメージでも持つてくれれば話し合いも可能か？

シミュレーション云々は伏せる。というよりこの世界がシミュレーションだと言われても、実際にこの世界で生きている人からしたらここは現実だからな。言う必要はない。

『それは結構。……ところで久城君。実は一つ問題が発生したようでね』

「問題？　まさかまたテデイが逃げ出したり………はしてないな」

「テツキを確認するが、カードはなくなっていないようだ。」

あれ以来、テデイの脱走癖は落ち着いている。一応少しでも寂しがりの性格を抑えるため、定期的に室内で俺やレイシアに遊んでもらっているからだと思いたい。ちなみに今もレイシアがテデイをブラッシングしている真つ最中だ。

だが持ち主が俺に定まった以上、一つ間違えば俺があの馬鹿力でハグされる危険と隣り合わせだ。……何とか俺によく似た人形でも用意してテデイにあげるべきかと最近考えている。

『いや、幸せなテデイは関係ないよ。……詳しいことは彼等から聞くと良い』

「彼等？　彼等つて」

『私と彼だよ。管理人』

カタカタ。

そこに急に半透明の姿で現れたのは、罪善さんと葬儀さんのペア。……なんか珍しい取り合わせだな。

「二人ともどうしたんだ？」

『管理人。君は以前行った特待生寮のことを覚えているかね？』

特待生寮か。あれはかなりおっかない場所だったから今も覚えている。

「あの良くないモノが溜まつていた場所か。もちろん覚えてるとも。つていうかあの時葬儀さん居なかつたんじゃないか？」

『ああ。なのでこの罪善に当時の話を聞いていたのだが、どうやらその良くないモノをまた察知したようなのだ』

「げっ!?! そうなのか罪善さん?」

罪善さんはコクコクと頷く。あの時もその気配を察知して、実体化して部屋から飛び出していったぐらいだからな。また溜まり始めたことが分かつて不思議じゃない。

『囚われた魂に静かなる眠りを与えるのが私の務めだ。よつて罪善と共にその特待生寮に出向きたいと思う。出来れば管理人にも同行を願いたい』

俺もか。確かに実体化した幻想体は独自行動できるとはいえ、俺が近くにいた方が何かとエネルギー効率も良いだろう。ただなあ。

「行くのは良いんだけど、もう少ししたら十代がこの部屋に来るんだよな。あんまり待たせる訳にもいかないし」

『それなら問題ないんじゃないかな? 良くないモノと言つても溜まり始めた段階ならそう多くはないだろうし、パパッと行ってパパッと帰れば大丈夫だって!』

デーの奴め適当に言うんだからまつたく。しかし溜まり始めであれば確かに楽そ

うではある。少なくとも以前闇に飲まれて大量の良くないモノに取り囲まれた時よりはマシだろう。

あそこまで増えるようなことがあったらまた後々面倒そうだし、早め早めに何とかしておくのは良い案かもしれない。

「……分かった。じゃあ俺と罪善さん、葬儀さんの三人で」

『待った！ 私も連れて行くがいい我が生け贄よ！ こういう時こそ私の出番ではないか！』

出発の準備をしようとした時、流石にブラッシングの邪魔になるから床に置かれているネクも志願してきた。こりやまた珍しいな。

「どうしたんだネク？ いつもなら言われたって嫌がつて渋々やるつて感じなのに、今回はえらくやる気じゃないか」

『えっ!? ああ。何、大したことではない。私もそろそろ真面目に働いて、早くエネルギーを溜めて復活に至りたいと思つたまでの事』

『へえ、そうなんだ！ てつきり僕はその良くないモノを以前君がやつていたみたいに従える気かと思つたよ！』

『な、な、何を言うのだ？ 私は別にそのようなことは考えていないとも。ただ少しばかりその良くないモノとやらを取り込んで後の復活の際の足しにしようかなと………』

あっ!？」

「デリーのからかうような言葉に、ネクがつい口を滑らせてハツと口を抑える。……最初に会った時もそうだったけど、ネクって地味にうっかりしているところがあるよな。」

「あく。せつかくだけでも多分罪善さんと葬儀さんで手は足りてるんだ。悪いけど今回はお留守番な」

『Noooooっ!』

「なんかショックのあまりムンクの叫びみたいな顔になつてるネクは置いといて、俺は特待生寮に向かうための準備を整える。……そうだ! 行く前に。」

「レテイシア。ちよつと良いかな?」

『うん? なになに? お兄ちゃん?』

「とてとてとやってきたレテイシアに、俺は念のためお願いをしておく。」

「なるべく早く戻るつもりだけど、もしその前に十代が訪ねてきたら、部屋の中に入れて待つていてもらつてくれないか?」

『私がお出迎えしても良いの?』

「ああ。どうせ十代はレテイシアのことを前に見たことがあるし、多分問題ないだろう。俺が戻るまで何か話でもして待つていてほしい」

『うん。分かった! 私精いっぱいお出迎えするの!』

レティシアは嬉しそうに、そしてどこかやる気のある表情でその小さな拳を握りしめる。

テデイも残すべきかと少し悩んだが、念のためカードとして持っていくことにした。ああ見えて強いから、いざとなったら護衛役を請け負ってもらおう。

そうして待ち合わせに遅れないように、俺と罪善さん、葬儀さんと幸せなテデイは、急いで特待生寮に向かった。……のだが、

三時間後。

「や、やっとレッド寮に戻ってこられた。……しかしなんであんなに居るんだよ!」
『本当だねえ。まさか以前より多い数が溜まっているとは予想外だったよ!』

特待生寮にて俺達が見たものは、十代とタイタンがデュエルした時に居た良くないモノの集団だった。しかも今度は俺と十代が飲まれた闇の中ではなく、なんと寮の中からほんの少しずつであるが外に出てきていたのだ!

あんなのがわらわら出てきたらそれこそ大変なことになる。咄嗟に葬儀さんが寮の

周りを棺から飛び出す蝶で包围し、外へ出ようとする奴らを抑え込む。

『寮から外へ出ようとするモノは私が何とかしよう。管理人達は早く中の方を！』

「分かった！ 頼むぞテディ。罪善さんの道を作ってくれ！」

そこで大活躍したのが意外にもテディ。寮のなかで散乱していた家具を持ち前の腕力で振り回し、襲い掛かってくる奴らを寄せ付けない。

そして、十代とタイタンのデュエルした場所にあった闇。そしてその闇からすこしずつ溢れるように出てくる良くないモノを罪善さんが片っ端から浄化吸収を行い、ようやく闇が消滅した時には俺は疲労困憊の有り様だった。

俺だけじゃない。長く寮を包围し続けていた葬儀さんも、良くないモノを寄せ付けずに戦っていたテディも、予想以上の数を浄化吸収した罪善さんも、皆大なり小なり疲れていた。

こうして……何とか無事帰還してレッド寮にまでたどり着いたという訳だ。

「まだ十代が部屋で待っていると思うか？」

『さてね。部屋に行ってみたら分かるんじゃない？』

それはまあそうなんだけどさ。流星にこんな遅れたからもう帰っていても仕方ないんだよな。

俺は重い足取りをなんとか進めながら自分の部屋へ向かう。そして扉を開けると、そ

ここには。

「おう！ 遅かったな遊児！ 悪いけど遊児の分の菓子も待つてる間に結構食べちまつたよ」

『あつ！ 遊児お兄ちゃん！ 私ちゃんとお出迎え出来たよ！』

もう大分夜も遅いというのに、俺の部屋でコーヒーを飲みながら待っていてくれた十代と、同じくジュースを飲みながら笑顔で俺を迎えてくれたレティシアの姿があった。

話し合いが終わったらこの埋め合わせは必ずするからな。

十代へのカミングアウト その二

「ごめんな。大分遅れて。ちよつと急用が長引いてさ」

「なあに気にすんな！ それで？ こんな時間に俺に話って何なんだよ遊児？ あつ！

レティシアあちよつとそこの菓子取つてくれ」

『うん。 ……はい！ 十代お兄ちゃん！』

「おう！ ありがとな」

十代が持ち込んだのか、部屋になかったはずの菓子を机からレティシアに取ってもらう十代。なんかちよつと見ない間にすつごく仲良くなってるんだけど。これは思わぬ好印象……じゃなくて！

「いやそれっ！ その時点でおかしいと思わないか？ カードの精霊が普通に物に触ったりできる所とか！」

「……………そういやそうだな！」

気づけよっ！ 十代の場合常日頃から精霊と関わっているから、不自然が不自然だと分からないって感じなんだよな。

そこら辺を今回ついでにじっくりと腰を据えて話さないと……つと!?

椅子に腰掛けようとした時、一瞬身体の力が抜けてふらついたのをレティシアが支えてくれる。

『大丈夫?!』

「あ、ああ。ありがとなレティシア。助かったよ」

「遊児お前……本当に大丈夫か?　なんか顔色も悪そうだぞ」

「大丈夫……いや。正直少し疲れてる」

「ここで見栄を張っても仕方ないな。俺は椅子に座って完全に背もたれにもたれかか。しばらくこうしてだらけていたぐらいには疲れてる。

「ヘルパー居るか?　居たらすまないけど熱いコーヒーを一杯淹れてくれ。……ごめん十代。もうちよつとだけ待ってくれるか?　コーヒー飲んで頭をシャキツとさせるから」

「ああ。良いぜ!　……遅れたけどこの菓子も食べよ!　翔がこの前のノートのお礼だったよ」

人の礼の菓子を勝手に食うんじゃないよ。まあレティシアが食べて喜んでるみたいだから良いけどさ。

ヘルパーが素早くコーヒー抽出作業を始めるのを横目に見ながら、俺は十代にどう切

り出そうか考えていた。

「……ふう。やっぱヘルパーのコーヒーは疲れた身体に沁みるなあ」

熱いコーヒーと翔から貰った菓子を飲み食いしてほっと一息つき、どうにか少しはマシな調子に戻る。これなら途中でふらつくってこともないだろう。

「待たせたな十代」

「ああ。……遊兎。それだけ疲れてたのって、俺をここに呼んだのと関係あるのか？」

「無関係……と言いたい所だけど、直接じゃないが関わってるな」

十代が少しだけ普段より真面目な顔で聞いてくるので、俺も下手に誤魔化さず正直に話すとする。

「まあ一つずつ話すよ。まず……前提として聞いてほしいのが、俺のデツキはちよつと普通じゃないってことだ。……皆出てきてくれ」

俺の言葉と同時に、すでに出ているレティシアとヘルパー以外の精霊化できる幻想体がまとめて出現する。……インパクト重視で呼んだけど、この部屋でまとめてはマズかったかな？ ちよつと狭い。

デリーの光球は見当たらない。やはりアイツ自身は十代とはなるべく接触したくな

いようだ。

「うわっ?! いっぱい出てきたな!」

「こいつらが今のところ精霊として出ている幻想体だ。じゃあ一人ずつ紹介していか。まずは罪善さん……と言っても前に紹介したな」

「よお! また会ったな! ハネクリボーも会いたがつてたぜ!」

クリクリ〜! カタカタ!

十代の言う通り、ハネクリボーが嬉しそうに羽を広げ、罪善さんがそれに返すように軽く光を放つ。

「次はレティシアとヘルパー。正式名は『幻想体 小さな魔女 レティシア』と『幻想体 オールアラウンドヘルパー』だ。この二人もさつきまで一緒に居たから何となくは分かるかな?」

「ああ。レティシアは遊児を待っている間、張り切つて俺をもてなそうとしてくれた良い奴で、ヘルパーはどうやら万能型家事ロボットって奴らしいな。さつき待つてる間に聞いた」

『えへへっ! 十代お兄ちゃんに褒められちゃった』

へぴぴっ! ヘルパーロボットだよ

褒められたレティシアが嬉しそうに頬に手を当て、ヘルパーはいつも通り言いつけを

待つて待機中だ。

「OK。俺が居ない間に仲良くなっていて何よりだ。その次は……ちよつと振り向いてみな十代。驚くかもしれないからそつとな」

「驚くつて何が……わっ!?! なんだコイツ? エビ?」

十代が後ろに立つていたウエルチアースのエビ頭の漁師のどアップを見て驚く。まあ最初は誰だつて驚くわな。

「カード名は『幻想体 蓋の空いたウエルチアース』。そのエビ頭の漁師と後ろの自販機でセットの幻想体だ。能力は……実際に見た方が早い。ウエルチアース。ジュースを一本くれ!」

百聞は一見に如かずとばかりに、俺はいつも通りウエルチアースに飲み物を頼む。するとエビ頭の漁師がこくりと頷き、自販機から缶ジュースを一本取りだして差し出してくる。……よし。蓋は開いてないな。

「ほら十代! 俺は今コーヒを飲んだばかりだからやるよ! 大分待たせたお返しにな」

「サンキュー! つて、これこの前レイの送別会でお前が持ってきたジュースじゃないか! ……なるほどコイツのものだったのか!」

「ああ。頼めばいくらでもくれる。元手も掛から……いや。エネルギーという意味では

掛かっているな。うん。まあ制限付きだがジュースを出す能力だと思ってくれればいい」

十代は早速蓋を開けてジュースを飲みだす。俺が来るまでにコーヒーを飲んだらもうにまだ飲むのか？ 飲みすぎて腹を壊しても知らないぞ。

「それで次は……葬儀さんなにそんな隅っこで佇んでるの？ ほらっ！ 紹介するから前に出て」

『……管理人よ。私に構わず紹介を続けてくれ。どうにもその少年と私は相性が良くなさそうなのだ』

「なんだなんだ!? エビ頭の次は蝶の頭かよ!? すっげ〜!」

葬儀さんの顔を見ると、十代が驚いたようなワクワクしたような複雑な表情をする。流石主人公! このくらいじゃあんまり動じないな。

『幻想体 死んだ蝶の葬儀』。通称葬儀さんだ。いつも背負ってる棺は、開けると中から蝶の大群が出てきて敵を攪乱してくれる。少し気難しい所があるが良い人だ」

「それはなんとも派手な技だな。見た目もシュツとしてるし、俺のヒーローと組んで戦ったらカッコ良さそうだ」

『カッコいいというものは求めていないのだが……』

十代の勢いに葬儀さんはどこか疲れた様子。さっきの戦いの疲れがまだ残っている

のか？ だったら悪いことしたかな？

「それと最近精霊化した『幻想体 幸せなテディ』と、幻想体じゃないけどうちで居候しているカードの精霊のネクだ」

「あつ！ このクマのぬいぐるみ。この前レイの船に乗ってた奴だ！ 確かあの時罪善さんが追つかけて行って軽い騒ぎになったんだよな」

十代が思い出したようにそう言うと、テディはトコトコと十代の方に近づいて両手を広げる。どうやら抱っこしてほしいようだ。

持ち主は俺なので十代が抱きしめても問題はないはずだが、一応用心のためさりげなくテディの腕を引っ張ってこつちに抱き寄せる。……十代が羨ましそうに見ているのは無視だ無視。

『ふっふっふ！ 久しぶりだな我が生け贄候補よ』

「うん!? 久しぶり？ ネクって言ったか？ お前以前にどこかで会ったっけ？」

『まあお前が知らないのも無理はない。だが私はお前を見ていたぞ。今こそ聞いて恐怖に震え恐れ慄くがいい。私の名は』

『こらっ！ ネクちゃん。めっ！ 十代お兄ちゃんを怖がらせようとしちゃダメだよ！』

今こそ出番とばかりに自身のことを明かそうとしたネクだったが、良い所でレティシ

アに叱られて中断される。……最近ますますネクとレイシアの力関係がはつきりしてきた気がするな。

これはもしいつかネクがダーク・ネクロファイアとして復活しても、レイシアに頭が上がらなくなるんじゃないだろうか？ それだと安全で良いんだが。

「とまあ以上がうちの精霊達だ。ざつと顔と名前は覚えたか？」

「ああ！　なんか面白れえ奴らだな！」

「……まあここまでではな。それじゃあ大まかに紹介も終えたことだし、いよいよ本題に入らせてもらうとするか」

俺のその言葉に、十代も普段とは違う何かを感じ取ったのか少し顔が引き締まる。

「ここまで話したのはあくまでも前提。このことを知った上で頼みたいことがある。聞いてくれるか？」

「おうよー！」

「……いや即答するなよっ！　まだ内容も何も言っていないだろが！」

「えっ!?　だって遊児は友達だろ？　よっほどのことじゃない限り聞かぜ？」

何を言っているんだとばかりにキョトンとした顔で返す十代に、俺はこういう奴が詐

欺とかに引つかかるんだろうなと頭を抱えつつも、内心とても嬉しかった。事情を聞かずとも手を貸してくれるという友人。それがどんなに心強いことか。俺が話す判断をしたのは、どうやら間違っていないなかつたみたいだ。

十代へのカミングアウト その三

さて。十代はこのように心強い言葉を言ってくれるが、まだ伝えなきゃいけないことを伝えていない。まずはそれからだな。

「実を言うとき、この幻想体達は俺がこの学園に入ってから全員出てきたんだ。……どういうことか分かるか？」

「そりゃ仲間が多いってのは良いことじゃないか！ 皆してこの学園に入ってからってのはちよつと気になるけどな」

あくまでも楽天的に笑う十代。確かにそうだ。仲間が多い方が何かと助かる。出てくる奴が仲間だけならな。

「まあこの学園に入ってから始めたってのは心当たりがあるから置いておく。問題は別にあるんだ。例えば……さつき十代自身が言っていたけど、この前デイが船に乗っていた所はこの前見たよな？」

その言葉に十代はそうだと頷く。

「あの時デイはほぼ完全に俺の手を離れていた。だから罪善さんに迎えに行ってもらったわけだが、実体化させてまで急がせた理由は当然ある。……十代。そのジューズ

はもう飲み終わったか？」

「えっ!! ああ。もう空っぽだけど」

「じゃあ缶を回収してつと。……テディ」

俺は十代から受け取った缶をテディに手渡してたった一言。

「その缶をゴミに出すから……潰せ」

グシャッ!

「……なっ!!」

十代の目が丸くなった。それはそうだろう。あのふわふわで柔らかかそうなぬいぐるみのクマが、その両手を合わせるようにそつと缶を挟み、そのまま紙風船でも潰すように缶をペシヤンコにしたのだから。

「ありがとうなテディ。何も驚くようなことじゃないよ十代。以前神楽坂と戦った時、テディは効果の演出とはいえ自分の数倍は大きいキマイラを絞め殺しただろ? つまりテディは現実でもそれに近い腕力を持つてるわけだ。それこそ本物の熊より下手すりや強いパワーをな」

十代は確かめるようにテディの潰した缶を見ている。ちなみにウエルチアースの出す缶はどれもかなり頑丈で、そこらのスチール缶よりずっと硬い。その上一部をへこませたのではなく完全に平たくなっている。ここまでやるのは道具を使わないと難しい

ぞ。

「勿論テディは誰かれ構わず暴れたりはしない。それでもうつかりじゃれついた挙句力が入って骨を折ってしまうくらいは十分あり得る話だ。……テディだけじゃない。ここに居る幻想体達は大なり小なりそういう危険性を秘めている」

やつと俺の言いたいことが何となく察せられたのか、十代も真剣な面持ちでこちらの話を聞いている。

幻想体。こいつらはすなわち、お前のヒーロー達に退治される怪物側にあたる奴らだということだ。

ヘルパーとウエルチアースはいまいちよく分からないが、罪善さんも葬儀さんも、レティシアやテディ、幻想体ではないネクに至るまで、俺の言葉に何も言わず耳を傾けている。

持ち主である俺に危険性があるとされていて、幻想体達の内心がどうなっているかは定かじやない。だけど、最初にこの危険性について説明しておかなければ、目の前の友人が不用意にこれからの幻想体にも近づきかねない。

これから出てくるであろう、この比較的まだ友好的なもの以外の幻想体にも。

『……遊児お兄ちゃん……十代お兄ちゃん』

レティシアはそう小さく不安そうに声を上げながらも、それ以上は何も言わない。こ

れでもし十代が断るようであれば、それはそれで仕方のないことだ。これまで通り自分達だけで何とかしていくことになる。

だけでもし、もしもこれだけ言って尚手を貸そうなどと言うのであれば、

「……そうか。分かった」

十代は少しだけ何か考え込み、自分の中で何かしらの答えを出したように顔を上げる。

「つまり俺に頼みたいのは、こいつらも含めてお前がピンチになったら助けてほしいってことだな！ 任せとけて！」

「……驚いたな。俺を助けるまでは予想してたけど、こいつらも助けてようとそこで思っか普通？ 十代だってこの前のサイコ・ショッカーの件を覚えてるだろ？ 状況によってはあれ並に危険なことも起こりえるんだぞ？」

「遊児は敢えてそう危険な面や怖い面ばつか俺に伝えてっけどき。別にそれだけじゃないんだろ？ 本当にそれだけだったら、それこそ遊児ならずとカードのままにしておかしくない。けどどうして実体化することを許してる。……つまりそれだけ皆に、幻想体達に気を許してるってことじゃないか？」

実体化することを許してるっていうか、いざとなったら幻想体は自分の意思で全員実体化できるけど、俺と話し合って我慢してくれているって感じなんだよな。

完全制御ではなく、あくまで話し合いによる自発的な協力関係。十代は笑っているが、俺と幻想体達の関係はそういういつ崩壊するかもわからない状態で成り立っている。

「ただどそういつたことを知ってか知らずか……いや、多分レティシアと話して知った上でそう言っているんだろうな。朗らかに笑いながら、十代は加えてこう述べた。

「それに、俺の仲間のヒーロー達は悪を倒すのが仕事だけど、悪から皆を守るのも仕事なんだぜ！ それはこいつらだつて例外じゃない。なくに任せておけつて！ 俺に出来ることなら手を貸してやるからよ！」

その根拠のない自信はどこから出てくるのかねえ。……だけど、そこまで言える奴だからこそ、俺は打ち明けたのかもしれないな。

「まつ！ 何はともかくだ。手を貸してもらうからにはとことん貸してもらうからな十代。途中でもう無理だとか言わせないぞ」

「言わねえよ！ やつぱりさつきまでの重つ苦しい態度はわざとかよ！ こんなニヤニヤしやがつて」

「そりやあそうだ。はつきり手を貸してやるつて言質を取ったからな！ そうだろ皆

！」
「俺の言葉に幻想体達は揃って首を縦に振る。悪いな十代。実はここまでは狙い通りなんだ。」

前々から十代に対して、予め幻想体達とはいくつかの取り決めをしている。そのうちの 하나가、幻想体側からは十代に必要な以上に接触をしないという約束だ。

なにぶん普通に精霊の見える十代は協力者になりえる。幻想体達としても、俺以外に接することのできる相手が居るといふのはかなりの大事だ。だが各自で思い思いに動いたら收拾がつかなくなる。

なのであくまでも話をするのは俺であり、十代が自分の意思で手を貸すなり手伝うなりそういう言葉を言わない限り、あまり関わらないようにと約束している。今回レティシアに出迎えを頼んだ時、やる気を見せていたのはそれが原因だ。

『ありがとう！ 十代お兄ちゃん！』

「おっと。急に抱きついてくるなよレティシア。危ないぞ！」

『そうだレティシアよ止め……アタタツ身体が潰れる〜！』

レティシアが嬉しそうに十代に飛びつき、十代は仕方ないなとばかりに抱きとめる。……ついでにまたサンドイッチにされているネクに誰か目を向けてやってほしい。

しかし十代がこうしてはつきり宣言した以上、幻想体達としてはもう気兼ねすること

は無いわけだ。十代にはすまないが、これからたつぷり幻想体達にも付き合ってもらうからな。

「さて。それじゃあ早速手伝ってもらいたいことなんだが……まあ十代が今言ったように、俺や幻想体達がピンチになったら助けてくれ。と言っても多分近いうちにピンチになると思うんだけどな」

「えっ!? どういうことだ?」

「それが俺がさっき言った、学園に入ってから精霊が開始たつてことに繋がるんだ。簡単に説明すると、今俺の持つてる幻想体のカードから不定期にカードの精霊が出てきている。これは俺の意思では止められない。出来て出てくる奴を多少選べるくらいだ」

俺は自分のデッキとそれ以外の幻想体達の束を机に置いてみせる。

「少し前に幸せなボディが出たばかりだからもうしばらくは大丈夫だと思うけど、次は何が出てくるか分からないからな。友好的な精霊なら良いが、この前のサイコ・シヨツカーみたく周囲に被害を出すような奴だったら速攻で抑えつけないといけない」

「そうか。……なあ遊児」

「おつと皆まで言うな。分かってるつて。自分に何が出来るかってことだろ? もちらん十代に出てきた奴と戦えとかそんなことは言わないさ。まずは俺が交渉してから」
「いやそうじゃなくて?! お前のデッキさつきから何か光ってるぞー!」

「な、何〜!？」

確かによく見れば、デッキの一部が光を放っている。この光は前にもあったカードの精霊化の前兆だ! しかしこの前テデイが出たばかりだったのになんでこんな立て続けに?

『管理人よ。これは先ほどの特待生寮のことが引き金になったのではないだろうか?』
「さっきの? ……そうかつ!? レテイシアの時と同じか!」

俺は葬儀さんの言葉でハツとする。つまりあの時のように、罪善さんが大量の良くないモノを浄化吸収したことによって、余剰分のエネルギーが他のカードに流れ込んで精霊化を誘発したらしい。

「マズいぞー! 十代! 早速で悪いが手伝ってくれ。デッキの中の光ってるカードを取り出して机に並べてくれないか? 今俺が下手に触れると一気に出てきかねない!」

「ああ。分かったぜ!」

十代は早速俺のデッキを広げて光っているカードを探し始める。俺はその間に以前テデイに教わったように右手に力を溜め、軽く光を纏わせる。……なんだか電球になったみたいだな。

「よし。こっちは準備OKだ。そっちは何枚あった十代? 出来るだけ害のなさそうなやつを選ばないと!」

「それが見つかつただけけど……どうやら一枚だけみたいだ」

そんな馬鹿など俺もデッキを見るが、確かに光っているのは一枚だけ。これじゃあ選ぶも何もあつたもんじゃない。そして、

「え〜つと? 『幻想体 三鳥 大鳥』? こんなカードも持つてたのか遊児。結構長い付き合になるけど知らなかつたな」

「大鳥? ……なるほど道理で」

何故一枚しか選択肢が出なかつたのか不思議だつたが、カード名を見て少し納得する。このカードはレベル6。ディーが以前言つていた所のリスクレベルは実際のカードのレベルに比例する。

つまりこれは、他のレベルの低いカードが数枚精霊化できるだけのエネルギーを一枚だけで使つてしまったことになる。

『リスクレベルW.A.W。気を付けたまえ管理人、……こいつはこれまでの幻想体とは危険度が違う』

俺は葬儀さんの言葉に気合を入れ直す。……悪いな十代。よりにもよつて手伝つてもらふ最初の一体目からかなりハードなことになりそうだ。

十代へのカミングアウト その四

さて、一度状況を整理しよう。

今現在、俺の目の前には今にも精霊化しかねないほど光を放っている『幻想体 三鳥大鳥』のカードが机に置かれている。

いつもなら何枚かのカードが候補として出てくるものの、今回に限ってはこの一枚きり。おそらく他の候補の分もこのカード一枚で使ってしまったんだと思われる。つまりそれだけ強力なカードってわけだ。

「ちなみにこの中で、この大鳥がどんな奴か知ってる人いる？」

「そもそも俺は初耳だ」

『残念ながら私は名前を聞いたことがある程度だ。ただリスクレベルから考えて、危険なことにはほぼ間違いはないだろう』

少しでも出てくる前にこいつの情報を知ればと思いついてみたが、十代は当然として葬儀さんも良く知らないようだった。知っているであろうデューは十代の前だからか出てこないし、このままぶっつけ本番でやるしかないのか。そこに、

『私知ってるよー！』

「本当かレティシア！」

思わぬところから声が上がった。レティシアが軽くぴよんぴよん跳ねながら手を上げてそうアピールする。

『え〜つとね。大鳥さんが出歩くと、周りが夜みたいになつて暗になつちゃうの。電灯もろろそくも皆消えちゃつて、でも大鳥さんの持つてるランタンだけは明るいままなの』
「……よく分からないけど、つまりそいつには停電か何かを起す力があるのか？」

『多分そう。それで時々辺りを見て回つて、何かをいつも探しているんだけど、それが何かまではよく分からないの。ごめんなさい』

何故かレティシアは言い終わると、ちよつとだけ申し訳なさそうな顔をする。

「なんでレティシアが謝るんだ？ これだけ手がかりを出してくれただけで大手柄だぜ

！ なあ遊児？」

「そうだな。レティシアのおかげで何も分からずに相手をするつてことが避けられそう
だ。ありがとうな」

『ホント？ ホントに私役に立った？ えへへ！』

こうして嬉しそうに笑うレティシアは良いとしても、問題は大鳥の方だな。

周りが暗くなる能力となると、もし一度でも見失ったら大変だ。おまけに今は夜。明
かりがないから探すこともできなくなる。

「しっかしその大鳥のランタンは暗闇の中でも明るいんだろ？　なら暗い中でも明るい方に向かえば大鳥が居るってことだ。簡単じゃないか？」

「単純に考えればそうだけど、なんか引つかかるんだよな。……マズっ!!　光がつ!!」

あんまり長々と話している時間はなさそうだ。さつきから大鳥のカードから出る光がどんどん強くなっている。この調子じゃもういつ出てきてもおかしくないな。

「……仕方ない。大鳥を精霊化させるぞ!　下手に暴発して出てくるよりは、こっちのタイミングで呼び出した方がまだマシだ!」

出来ればもう少し話し合っただけで情報をまとめたかったが時間切れか。俺はゆっくりと大鳥のカードに自分の手を翳そうとし……そうだ!・

「幻想体の皆はいったんカードに戻ってくれ!　このまま実体化していたら、最悪大鳥の大きさによっては部屋が壊れかねない」

『ダメっ!　私も残る!　もしかしたら大鳥さんとお話してできるかもしれないもの。喧嘩はだめだよ』

『私もレイシアの意見に同意しよう。相手はWAWクラス。最悪戦うことになれば周囲に被害が出る。管理人やその友人の身を守る意味でももう一体か二体は傍に置いておくことを勧める。もちろんレイシアの言うように話し合いで解決するならそれに越したことは無い』

確かにレティシアと葬儀さんの言う通りだ。部屋がパンパンになって壊れるのも困るが、最悪大鳥が暴れ出したらそれを抑えるだけの戦力が要る。

「……分かった。じゃあ罪善さんと葬儀さんは精霊化して護衛役として傍に待機してくれ。レティシアはすまないけど実体化して俺と一緒に大鳥との交渉役だ。……これで良いかい？」

『うん！ 私頑張るよ！』

やる気があるのは結構なことだ。他のメンツはそれぞれカードに戻り、葬儀さんと罪善さんは半透明の精霊状態で俺の横に控える。……流石にネクも今回はカードに戻ってもらった。今の小さな人形状態じゃ危ないからな。あとは十代だが、

「十代。お前に頼みたいのはいざって時の抑え役だ。もし交渉が失敗して大鳥が暴れ出した場合、うちの罪善さんと十代のハネクリボアの力で抑え込んでもらいたい。幸い二体とも光属性だから、大鳥の暗闇の中でも動けるかもしれない」

「おう！ 任せとけ！ 頼むぜハネクリボー！」

クリクリ〜！ カタカタ！

声をかけられた二体がやる気十分とばかりに軽く光る。やっぱり仲良いなこの二体。

「……すまないな十代。初っ端からかなりやばい相手の手伝いを頼むことになった」

「気にすんなって！ さあて最初だしな。ここは一つバシツと決めようぜ！」

「OK。なんとも頼もしい限りだ。……じゃあ、始めるぞ」

限られた情報から、少しではあるけど対策らしい対策はした。あとは実際に会って話してみるのみ。俺は大鳥のカードに手を翳し、そのまま静かに触れる。

その瞬間、一気にカードからの光が強烈に部屋を埋め尽くした。

「おわっ!?!」

「うっ!?!」

『きやっ!?!』

俺と十代、そして実体化していたレティシアはもろに光を喰らって眩しさのあまり目を閉じる。最近この光には慣れてきたつもりだったけど、やっぱ目に来るなこれ。

そして光が収まった時、カードのあった所には一体の異形が存在していた。

「な、なんだコイツ?」

「これが……大鳥?」

それは一見するとデカくて黒い毛玉のようだった。目算で3メートル近い巨体だが、よく見ると鳥という名の割には翼がない。

翼の代わりにあるのはその巨体にしては細長い両腕。そしてその片腕には、中でチロ

チロと火が灯るランタンを提げている。

顔らしきところには大きくて鋭いクチバシ。ダチョウやペンギンのように飛ばない鳥もいるので、ここまではまだ何とか現実にもいるかもしれない姿だ。少しデカいだけで。

だが明らかに異形と一目で分かったのは、少なくとも数十はある黄色の瞳がぎよろりと一斉にこちらを見つめていたからだ。

その大量の瞳に圧倒されて、俺は一瞬言葉に詰まる。……マズイ！ 何でもいい。何か喋らないと。何か、

『大鳥さん。こんばんわ！』

そこへレティシアがにっこり笑顔で挨拶した。流石幻想体同士。物怖じしないな。大鳥の瞳が今度はレティシアに向かい、俺への圧力が少し弱まる。

『レティシアだよ。よろしくね！ そこにいるのが遊児お兄ちゃんと十代お兄ちゃん！ どっちもとっても良い人なんだよ！』

「おう！ 俺遊城十代。よろしくな！」

レティシアに呼応するように、十代も軽く手を上げて笑顔を見せる。……まいったな。こんな形で助けられるとは思わなかった。これは怖気づいている場合じゃないよな。

「あ、ああ。久城遊児だ。よろしく。……その、大鳥……で良いかな？ 話は出来るかな？」

またこちらに向けられる視線にくじけそうになるが、腹に力を入れて大鳥と視線を合わせる。

大鳥はこちらを凝視していたが、特に襲ってくることもなく軽く低めの唸り声をあげて返した。

その様子を見て、半透明ではあるが油断なくいつでも動ける構えを取っていた葬儀さんも少しだけ構えを解く。罪善さんもハネクリボーも、心なしかほつとしていたようだ。

そういうえば、大鳥が出ると停電するという話だったけどまだ明かりはついたままだな。これは大鳥が敵対の意思を持っていないからだろうか？

「少なくともこっちの言葉は分かるみたいだな。これはラッキーじゃないか？」

「それなら助かるよ。えっと、とりあえずなんだが……まず机から降りて精霊化してくれると助かる」

何せ大鳥のカードがあつたのは机の上。つまり大鳥は机の上に居る訳で、その巨体を乗せているためかさつきからギシギシ言っている。

なのでそう頼んでみると、大鳥は素直にこくりと頷いて……そのまま床にズシンと揺

れを起こしながら着地して半透明の姿になった。いやもうちよつと静かにつ！ 夜だからつ！ 近所迷惑つ！ あと出来れば精霊化してから降りてほしかった。

しかし一応だけ話を聞いてはくれるようで、いきなり暴れ出すといったことはないようだ。これなら少しは安心か。

「え〜つと、それじゃあ話をしようか。最初にそこはちゃんとしておかないとマズいからな。そつちが話すことが出来ないなら、こつちで適当に質問するから首を振るなり手を上げるなりで答えてくれれば良いさ。じゃあまずは」

そうして俺が質問をしようとした時だった。

グルルルウ。

急に大鳥が何かに気が付いたように、外の方を向いて唸り声をあげた。さつき俺に返したような軽いものではなく、明らかに何かに反応している。さらにその瞳はさつきまでの黄色ではなく、全て真っ赤に染まっていた。

『大鳥さんっ!?! どうしたの?』

「なんかヤバいぞ遊児!」

「ああ。分かつてる。……気を付けろよ! 下手に刺激するとマズそうだ。ここは一度落ち着かせて」

何とか宥めようとした時だった。急に扉がコンコンとノックされる。

「お〜い何してるのにや〜? 大きな音が外まで響いてきましたのにや! 夜なんだからもう少し静かにしてほしいのにや!」

「げっ!? 大徳寺先生だ! なんてこんな時に! 今の大鳥の足音で来たにしては早くないか?」

「そうかつ! さつきまで部屋で幻想体総出演であんな騒ぎだったからな。知らず知らずのうちに周りに音が漏れてたんだ!」

次からはなんとか防音対策を講じないといけないかもな。そんなことを考えて現実逃避をしてしまったが、この状況は非常にマズい。

今の大鳥は何だか知らないが気が立っている。下手に刺激したら何が起こるか分からない。ここはさりげなく大徳寺先生を追い払わなければ。

「あく。大丈夫です大徳寺先生。ちよつと十代と話したら盛り上がってしまったて」

「盛り上がるって……まさか部屋の中でソリッドビジョンのデュエルをやってるんじゃないかにや? ちよつと確認させてもらうにや!」

「あつ!?! 先生入っちゃダメだつて!」

十代も止めようとするが、大徳寺先生は寮長なので当然合鍵を持っている。このままでは普通に入ってくるだろう。

落ち着け俺。幻想体達は皆精霊化しているから姿は見えないはず。大徳寺先生がこ

の部屋を見ても、見えるのは俺と十代だけだ。レティシアもそれを察して素早く実体化を解く。

あとは目の前の大鳥がどう動くかだが、

「は〜い。入るのにや〜!」

ガチャガチャと鍵を開ける音ののちにノブがぐるりと回り、扉がうつつすらと開く。その瞬間、

グルアアアッ!

大鳥が急にその身を翻し、開いたドアに向かって突撃を開始した。

十代へのカミングアウト その五

実体化ではなく精霊化な為か、その巨体に似合わぬ俊敏な動きで開きつつある扉に向かつて突撃する大鳥。その突然の行動に、俺達は誰も大鳥を止めることが出来なかった。そして、

「一体何の騒ぎ……うにゃ〜っ!」

開きかけていた扉をすり抜けて進んでいく大鳥に対し、大徳寺先生は叫び声を上げながら驚いて尻もちをつく。

「マズイっ!? 今はまだ精霊化しているから他の人には見えないが、もし実体化でもしたら大騒ぎになるぞ!」

「アイタタタ何なのにな今の黒くてでつかいのほ? ……つつ〜腰打ったにゃ〜!」

「大鳥を追うぞ! 十代は大徳寺先生を頼む!」

「分かったぜ! 無茶すんなよ」

「……善処するよ」

十代には悪いが確約は出来ない。なにぶんどうしてこうなったか分からないのだ。

あとさつき特待生寮で戦ったばかりだったのにまた動かなきゃならんのかよっ！ 内心色々と思痴りたい気分ではあつたが、大鳥をこのまま放っておくこともできない。

腰を擦って涙目になっていいる大徳寺先生は十代に任せ、俺は幻想体のカードの束を持って大鳥の後を追って走り出した。

「はあ……はあっ」

カタカタ！

夜道を俺達は罪善さんの先導の下走っていく。といつても俺以外は皆精霊化しているので浮遊しているの方が正しいのだが。

罪善さんのおかげで夜道でも視界はそこそこ明るく良好。一応懐中電灯も用意してあるが使うこともなく、走るだけなら問題は無い。不安なのは体力面だが、さつき少し部屋で休んだのもうしばらくは何とかなる。

「それにしても大鳥の奴、一体どこへ向かってるんだ？ ……この方向、もしかして」
『ついさつき行った特待生寮の方角だよねえ』

「うおっとつ!? 急に現れるんじゃないよデューー!」

これまで姿を隠していたデューーが急に出てきたので、一瞬バランスを崩しかけるも何

とか踏ん張ってまた走り出す。十代に直接会いたくないように居なくなっていたが今頃かよ！

『いやあちよつと野暮用があつて席を外していたのさ。それにしても……フツッ！少し僕が見ない間に大分面白そうなことになっているじゃないか！まさかWAWWクラスがこんな所でもう来るとはね』

「笑い事じゃないつての！それで大鳥の行き先が特待生寮だつてのは間違いないのか？」

『そこは私も保証しよう。暗くて道が分かりづらいが、確かにこの方向に真っすぐ行けば先ほどの特待生寮に辿り着く』

精霊状態の葬儀さんが横からそう補足する。

「葬儀さんが言うなら嘘じゃなさそうだな」

『いやちよつとっ！僕のことには疑ったくせして葬儀君のことは一発で信じるのっ!』

「これまでの行いを振り返ってみろ。明らかに葬儀さんの方が信頼度が高いぞ」

『そ、そんな〜っ!?!』

片や面白半分で人をおちよくる自称“元”神様。片や見かけこそアレだが実直で仕事のできる男。どう考えたつて葬儀さんの方が信頼度が高い。

何を今さらということと言うと、デーはちよつとだけ落ち込んだように光量が落ち

る。といつてもすぐに復活するだろうから慰めないけどな。

「問題はなんで急に大鳥がそこへ向かつているかだ。それが分からないとまた同じことが起きかねない」

『ふくむ。ちよつと走りながらで悪いけど、大鳥が出た時のことを話してくれないかい？』

「こんな時にかよ！ ……手短にだぞ」

デイーは本当に席を外していたらしく、状況を把握していないようだった。まあ情報の共有は必要だ。俺は手早くあつたことを説明する。

『なるほどね。 ……ゴメンさっぱり分からない』

「分からないんかいっ!？」

結局どうして逃げたかは分からずじまいじゃないか。こうなつたらまたぶつつけ本番で行くしかないか。そう思った時、

『ただまあ大鳥の目的地は正確には特待生寮じゃないってことは分かるけどね』
「えっ!?! それってどういう」

『遊児お兄ちゃんっ! 前っ! なんか変だよ!』

デイーが思わせぶりに言つた言葉を聞き直そうとした時、レティシアの言葉にハッと前を見る。そこには、

「……なんだこれ？ 道がないぞ」

前方にたつた今まで見えていた道が急に姿を消した。……いや、その言葉は正確ではないか。目の前に道はあるのだけど暗くて見えないという方が正しい。俺は訳が分からず一度立ち止まる。

弱々しいながらも月明かりも星明りもあるのに、ある一定以上先を見ようとすると急に真つ暗闇になってよく見えなくなる。試しに懐中電灯をつけてみるも、スイッチの音がカチカチと鳴るだけで何故か反応しない。

「暗闇……もしかしてこれって!？」

『そう。ここから先は大鳥のテリトリー。大鳥にとつての暗く黒い森の中ってわけさ。本物には程遠いけど、代わりに自分が居るべき仮の場所としてここを定めたのだろうね。ここから先へ踏み出すのならそれなりの覚悟がいるよ』

それを聞き、俺は近くに落ちていた木の枝を取って暗闇の中へ差し込み探る。……大丈夫。見えないだけでちゃんと道は続いている。ならば、

「罪善さん。この暗闇を照らせるか？」

カタカタ!

返事代わりに軽く骨を鳴らし、心なし光を強く放つ罪善さん。すると、まるで何も見えなかった暗闇が、少し先程度なら見通せるようになった。薄暗いは薄暗いのだが、こ

れくらいならまだ何とか進める。

「ありがたい罪善さん。もう少し先導を頼むな。……ここから先が大鳥のテリトリーだつて言うのなら、つまりは大鳥がこの近くにいるつてことだ。わざわざ自分の大体の居場所を教えてくれるとは親切で助かるぜ」

『……ちよつと待った』

早速森へ足を踏み入れようとした時、少しだけ真剣な態度でデイーが待ったをかける。

『ねえ久城君。一つだけ聞くけど、なんで君はここまでするんだい？』

「何だよ？ 藪から棒に」

『いやね。ちよこつとだけ気にかかったのさ。大鳥は間違いなくこれまで精霊化した幻想体の中で危険度が一番高い。そんな物騒な相手の所へ向かおうとする君のことが不思議なんだよ』

「んっ？ そんなに不思議か？」

俺が聞き返すと、デイーは肯定するように上下に光球を動かす。

『最初に会った時、君は生きるために動くと言った。それはこの世界に来て変わっていない。だけどそれならわざわざ大鳥に向かっていく必要はないんだよ。……だつて大鳥のカードは君が持っているんだから』

デーの言葉は間違っていない。大鳥は確かに精霊化して飛び出していったが、自分のカードを持っていったわけではなかった。なのでそのまま放っておいたとしても、いずれは大鳥も戻ってくる。

『カードがある以上精霊が居なくてもデツキに入れて問題なく使えるし、むしろ近くにいない方が安全といえれば安全かもしれない。こんな停電を起こす奴を身近に置いておくこともないしね。ねえ。なんでだい?』

「そんな分かり切ったことを聞くなよ。今行つた方がマシだからに決まつてるだろ?」
その言葉にデーだけじゃなく他の幻想体達も何故か驚いたように感じる。……そんなに驚くことか?

「あのな。いずれは戻るにしたってそれまでの間何が起こるか分からない。俺はまだ持ち主だし他の幻想体も居るし少しは安全だとしてもだ。うっかりそれ以外の人がバツタリ会つてあの鋭いクチバシで突かれたり齧られたりしてみろ。痛いじゃすまないぞ! うっかり知らない内に何かやらかして俺の精神がゴリゴリ削られて死にそうになるぐらいなら、多少肉体的に無理してでもさっさと目の届くところに戻りたいっての!」

大前提として俺の安全第一なのは間違いない。しかしそれは身体の安全だけではなく精神の安全も含まれる。そのの所を上手くバランスを取ろうとしているだけの話だ

ぞ。

『普通の人はそこまで他の人のことを気遣ったりはあんまり出来ないと思うんだけどねえ』

『管理人よ。これからはまず自分の安全も視野に入れた方が良い』

『遊児お兄ちゃん。自分を大切にしないとダメだよ！』

なんか皆からダメだしされたっ!? あとポンポンとテデイが背中を擦ってくれるのがなんかかえって物悲しい。

「ま、まあともかくだ。まだなんにも起きていない内にさつきと行こうー!」

この話題はここまでにするべく、俺は一番最初に暗闇の中に足を踏み入れる。……よし。罪善さんの光が届く範囲であれば普通に歩けるな。

俺一人じゃきついから、すまないけど皆におんぶにだっこで行かせてもらおうのでよろしく!

そうして暗闇の中の探索を始めて数分後、
「まいったな」

周りに誰も居なくなつた。

といつても何も不思議なことじゃない。ただ単に俺が暗闇の中で足をとられ、少しその場で手間取っている間に他の皆とはぐれてしまっただけだ。おんぶにだつこで行くと考えてすぐにこの調子だよ!?

「罪善さん！ デイー！ 葬儀さん！ レティシア！ 誰でも良いから誰か居ないのか？」

この状態で下手に動き回るのは悪手。なので動かずにその場で声を張り上げている訳だが、どういう訳か互いの声まで阻害されているようで周りは静かなものだ。

ちなみに服のポケットに入れてあるデツキケースに触れながら呼びかけているのだが、マズいことにどうやらこの暗闇の中ではカードが有っても他の幻想体達との繋がりが薄くなるみたいだ。なくなつてはいないけど、この暗闇の中じゃ互いに手さぐりで探すしかない。

「お〜い！ 皆どこにいるんだ〜！」

近くにいることは間違いない。なので少しでも声が聞こえるか姿さえ見えればそれで十分。俺は必死に声を上げ続け、

「……………あれはっ？」

突如視界の中にゆらゆらと光る何かが飛び込んできた。暗闇の中ではその輝きは思いつきり目立つ。

おおっ！ あれは罪善さんの光だな！ 場所さえわかればこつちのものだ。あとはあの光へ向けて歩けばいい。今度は足を取られないよう慎重に、少しずつだけど着実にその光に向けて近づいていく。

もう少し、あともう少しで皆と合流が……。

この時の俺は焦って忘れていた。この暗闇の中、光を放つことのできるのは罪善さんだけではないことを。つまり、

「……………えっ!？」

光に辿り着いた俺が見たものは、暗闇の中でも変わらず光り輝くランタンを翳してこちらを凝視する、数十の瞳を真っ赤に染めた大鳥の姿だった。

十代へのカミングアウト その六

俺の頬にたらりと冷や汗が流れる。

視界には数十はある瞳を真っ赤に染めてこちらを凝視している大鳥。明らかに興奮状態だ。

対してこちらは頼りになる幻想体とはぐれてたった一人の完全に無防備状態。というか今も足が止まらない。

大鳥が居てこのまま行くのは危険だと頭では分かっているのに、誘蛾灯に吸い寄せられる虫のように足が光の方へ勝手に向かっていく。……何か変だ。よく分からないのだがぼんやりする。

あと数歩。あと数歩で大鳥の手どころかクチバシすら届く距離。だけど足はまだ勝手にランタンの光に向かっていこうとし……。

「……熱っ!？」

突如胸からの熱でぼんやりしていた意識がはつきりとする。そこにあつたのは、以前デイーがチュートリアルデュエルの時にプレゼントとしてくれた、罪善さんの顔と翼の

ような意匠を彫り込んだ剣の形のペンダント。それが熱く、そして僅かにこの暗闇の中でも光を放っていた。

なんだかんだデザインも気に入って今までずっと着けていたが、それが急に大鳥のラントとは違う光と熱を放つとは知らなかった。だけど、これで足が止まった。

俺がギリギリで踏みとどまったのを見て、大鳥はほんの少しだけ驚いた様子で再びラントを翳す。だけど、

「もうその光は効かないぜ。……こつちにだって明かりはあるからなー」

俺は不敵に笑いながら、少し熱いがこつちもペンダントを軽く持つて翳してみる。大鳥のラントンから放たれるどこか人を誘う怪しい光とは違い、こちらの光はただここに在ることを示す光。

だけどそれを見ていると、どこか暗闇の中で不安定だった自己が安定してくるのを感じる確かな光。

そしてしばらく互いに光を出し合っていると、きつきまで俺を凝視していた大鳥の真つ赤に染まっていた瞳が、急に最初に会った時と同じく黄色に戻っていた。どうやら落ち着いたらしい。というよりこれは、相手が俺だと気が付いたって感じか。

まあひとまず落ち着いたのなら後は対話だ。言葉を発することが出来なくても、意思の疎通を図る方法は幾つもある。

俺はペンダントの光を頼りに腰を下ろせそうな場所を見つけると、そこに座り込んで
はあくつと大きく息を吐いた。どうせ襲い掛かれたら逃げ場はないし、さつきも今も
走り回って流石にクタクタだ。対話くらいは楽な体勢でいたい。

「ようし。……さてと。じゃあここからは話し合いというか」

ここまで来たら腹をくくれ俺！ 黄色の目のままこちらを見据える幾つもの目を前
に、俺はせいっぱいの笑みを浮かべてそう言った。

「ふっつ。なるほど。少しは分かったよ」

大鳥への簡単な聞き取りを終えて、俺はよいしょつと力を入れて立ち上がる。

話こそできないが大鳥は知能自体は高く、質問の答えをはいかいいくらいなら普通
に首を振ることで応答できた。しかし時間はそれなりにかかり、他の幻想体達が心配し
ていることは間違いない。

かと言って大鳥はまだしばらくこの森から離れそうにない。大鳥がここに来た目的
がまだ果たされていないからだ。

おまけに他の皆とは話している間もまだ合流できていない。それだけこの暗闇の阻
害効果が強力ということだろうか？

「なあ。そつちの事情は何となく把握したから、ひとまずこの暗闇だけは何とかしてくれないか？ この暗闇の中でこそそのランタンの力が最大限発揮できるのは分かるけど、せめて他の皆と合流するまでは収めてほしい」

大鳥はコクンと頷き、次の瞬間その瞳を真っ赤に染め上げた。臨戦態勢っ!? つまりこれは!?

そのまま大鳥は、人間の頭など簡単に噛み千切れるであろう鋭い牙が内側に生えたクチバシを俺の方に向けて大きく開き、

「危ないっ!」

次の瞬間、俺の身体に横から強い衝撃が来て吹き飛ばされた。どうやら誰かに抱きつくようにタツクルされたらしい。俺とその誰かは暗闇の中ゴロゴロと転がり、そのまま少ししてやっと止まる。

「あいたたたあつ!?! ……なんだよ急に?」

タツクルをかましてきた奴に文句を言ってやろうとその相手を見ると、

「大丈夫だったか遊児?」

「十代? 十代じゃないか!」

なんと、俺の腰の辺りにダイレクトアタックを決めてきたのは、先ほど察に残ったはずの十代だった。なんでこんな所に?」

「へへっ！ あの後大徳寺先生を何とか誤魔化してよ。介抱して先生の部屋に連れて行って、その足でハネクリボーを頼りにお前を追ってきたのさ」

そう得意そうに鼻を擦りながら語る十代。よくあの状況を誤魔化せたなど少し感心する。見ればハネクリボーも十代の近くに浮かんでいて、ハネクリボーの光も罪善さんと同じくこの暗闇の中をはつきり照らしていた。

「それで追いかけている内に森の中が妙に真つ暗になつてよ。これがさつき部屋で言つてた大鳥の能力かと当たりを付けて、ハネクリボーと一緒に探し回つてたらこれだもん。大鳥に遊児がガブリといかれると思つて、慌てて助け出したつてわけだ」

そう言う十代は、俺の前に立つて大鳥の方を強く見据える。

「やい大鳥。よくも俺の仲間に手を出してくれたな！ 今度は俺と勝負だ」

クリクリ。

左腕のデュエルディスクを展開し、ハネクリボー相棒と共に勇ましく大鳥に挑む十代。その背中はまさしく将来皆の希望を背負つて立つヒーローの物……なのだが。

「ちよっ!? ちよつと待つた十代！ 誤解だ。大鳥は俺を狙つたんじゃ……危ない十代っ！」

この一瞬、完全に十代とハネクリボーの意識は大鳥に向かつていて、俺がそれに気づいたのは十代の後ろから見ていたためだった。

それは死角から飛び出して格好の獲物である十代に襲い掛かった。頼みのハネクリボーはちようど十代を挟んだ反対側。迎撃しようにも割り込もうにも肝心の十代が邪魔になる。

そしてその接近に十代が気づく時にはもう遅く、それは獲物^{十代}へと手を伸ばし、

ガブツツ!!

瞳を爛々と赤く輝かせた大鳥に噛み千切られた。

「なっ!!? ……えっ!!?」

「十代! こっちだ!」

俺は目の前で起きた出来事に呆然としている十代を引つ張り、大鳥の背中に走り込む。今大鳥の前に居ると巻き添えを食いかねないからな。ハネクリボーも慌てて十代を護るように追ってくる。

グルルルル。

大鳥は噛み千切られて粒子のように消えていくそれを一瞥すると、低い唸り声を上げながら先ほどのように自分のランタンを翳した。するとランタンからまた揺らめくように妖しい光が放たれ周囲を照らす。

「何だ？ この光？ なんだか吸い寄せられそうに」

「十代行くなよ！ ハネクリボー！ 光の出力を上げて十代を護れ！」

なんか目が虚ろになっている十代を掴んで引つ張りながら、俺も胸元のペンダントの熱を頼りに意識を保つ。そしてハネクリボーが自身から出る光を強くすると、十代の虚ろだった目がだんだんシャキツとしてきた。これなら大丈夫だろう。

「うおっ!? なんか今意識が飛んでた！」

「気を付けろよ。この暗闇の中で大鳥のランタンの光を見ると、そのままフラフラと吸い寄せられてしまうんだ。そして最後は意識のないままさつきみたいにガブリだ」

十代はさつきの光景を思い出したのは少し顔を青ざめさせる。

「それにしても遊児。今さつき大鳥にやられた奴。あれって前に特待生寮で見た」

「ああ。俺はあれを良くないモノって呼んでる。大鳥は最初からあれを狙っていたんだ。」

そう。さつき十代を襲ったのは、今日も特待生寮でみた良くないモノ。最初から大鳥は良くないモノを仕留めるためにここに来たらしい。

「良くないモノは元々特待生寮の奥に溜まっていたが、今日遂に限界を迎えたらしく寮の外に溢れ出してしまったんだ。今日俺が幻想体達と一緒にあらかた倒したはずだったんだけど、どうやら討ち洩らしが居たらしい」

「俺との待ち合わせに遅れたのはそれが原因か!?　そういうことならなんで俺を呼ばなかったんだよ?」

「話をするために約束したすぐ後に分かったからしようがないだろ!　……続けるぞ。討ち洩らした良くないモノは特待生寮から出てこの森に潜んだ。だけどそれが大鳥の逆鱗に触れた」

さつき大鳥と対話してどうにか理解できたのは、大鳥は何故かこの森に対して強い縄張り意識のようなものを持っているということだった。森の秩序を守ろうとしている……と言い換えても良いかもしれない。

大鳥が俺の部屋で精霊化した時、話の途中で大鳥は外に向かって赤い瞳の臨戦態勢を取っていた。それは良くないモノがこの森に居ることを察知したからだ。

「良くないモノが居ることでの森の秩序が乱れると考えたんだろ。大鳥はそれと何かさすべくこの森に踏み込んだ。だけど森は広いから、普通に探したんじや良くないモノを見つけるのは難しい。だからこの暗闇を展開したんだ。相手の方から寄ってくるように」

さつき俺や十代がそうだったように、この暗闇の中では皆大鳥のランタンに吸い寄せられる。森の獣が全然吸い寄せられていないのを見ると、元々この森に棲んでいるモノは対象外といった所か。

「そして吸い寄せられた奴を凝視して確認し、それだと判断した瞬間ガブリってか？でもそれならなんで今もまだ続けてるんだ？ その良くないモノは今……やつつけたら？」

「ああ。一体はな。だけどあの一体だけとは限らないだろ」

俺の言葉に追従するかのよう、ランタンの光に誘われて出るわ出るわ。良くないモノがそこから中から現れる。その数目に見えるだけでも十体以上。普通なら俺や十代だけでは切り抜けるだけでも一苦労だろう。だが、

グルアアア！ ガブツ！ グシユアツ！

それはまさしく蹂躪だった。たかが良くないモノの十体やそこらでWAWクラスの幻想体が止められるはずもなく、大鳥がそのクチバシを開いて閉じる度に良くないモノ達は数を減らしていく。

「何かここまで一方的だと相手の方が可哀そうになってくるな」

「ああ。……これ俺達最初から大鳥を追っかけなくても良かったんじゃないかな」

「……かもしれない」

まあそれは結果論であり、たとえ大鳥のやろうとしていることが分かっていたとしても追いかけたとは思うけどな。やっぱり気になるし、放つてはおけないから。

『……………い！』

……ん!? 今聞き覚えのある声が聞こえた気が。

『お〜い! 久城く〜ん! どこだ〜い?』

『管理人! どこだ? 聞こえたら返事をしてくれ!』

『遊児お兄ちゃん! どこ行つたの〜っ!』

大鳥のランタンに誘われたのか、それともハネクリボーの光を見たからか。声が聞こえた方向を見ると、少し離れた所に罪善さんとディーを先頭に幻想体達が俺を探しているのが見えた。

「おい! どうやら迎えが来たみたいだぜ!」

「そうだな。じゃあ早いとこ帰……れるのかなこれ?」

グルアアア!

まだ良くないモノを蹂躪している大鳥を見て、俺は知らず知らずのうちに額を押さえていた。

夜明けが来るまではまだ少しかかりそうだ。

十代へのカミングアウト その七

俺達はオシリスレッド寮へ戻るべく森の中を歩いてきた。

まだ大鳥の展開する暗闇の中ではあるが、大鳥自身がランタンを翳しながら先導してくれているのではぐれる心配はない。ただ吸い寄せられる方に行けばいいのだ。

まあ俺というはぐれた本人が言っても説得力が薄いので、一応念のため罪善さんとハネクリボーが最後尾から見守りながらだが、デイーの奴はまた十代を避けるように姿を消しているな。

あと実体化したテデイが、さつきから俺と手を繋いだまま歩いているのは何とかならないだろうか？　ここまで来るとテデイが寂しいからなのか俺が心配だからなのか分からないぞ。うっかり力を入れて俺の手をグシャってしないでね。

葬儀さんは何も言わず俺の横を精霊状態で浮遊している。……ただ多分これは俺が疲れているからであって、疲れが取れたら即お説教の時間ですって感じなんだよな。歩きながらそんなことを考える。

……いや、正確には俺は歩いていない。何故ならば、俺は今大鳥の背に乗っているからだ。

完全に力を抜いて仰向けにおぶさり、ズシンズシンと結構大きい大鳥の足音を聞いていると、疲れも溜まっているからかついウトウトとしてしまう。

「なあ遊児。今度は俺も乗せてくれるよう頼んでくれよ!」

「止めといた方が良いと思うぞ。見た目の割に全然柔らかくないし、どちらかという touches 心地はざらついているっていうかゴワゴワって感じた。俺は自分で動くのもきついくらい疲れているから乗せてもらってるけど、十代には合わないって」

十代が乗っている俺を羨ましそうに見ているのでそう返してやる。十代は試しに少し手のひらを当てて「うわっ!? ホントになんかざらついている!」と驚いていた。大鳥は見た目は黒い毛玉みたいなのにな。

グルルルル。

「ああゴメンゴメン! 乗せてもらってる身で文句なんか言うもんじやないよな。悪かったよ!」

大鳥が憤慨するように軽く唸り声を上げるので、俺は慌てて顔を上げて謝る。大鳥は一声鳴くと、また足音を立てながら前進を再開した。

『私ゴワゴワしても平気だよ! ちょっとだけ乗せてね大鳥さん! えいつ!』

そこでレティシアが急に実体化して、おぶさっている俺の横にちよこんと座った。定期的な揺れにキヤツキヤと笑っているところを見ると、案外アトラクションか何かのよ

うな感覚なのかもしれない。

大鳥はこのくらい重いならどうってこともないらしく、足取りはさつきとまるで変わらない。

「それにしても、大鳥が森の外まで乗せて行ってくれて提案するとは意外だったよな」

「良くないモノ退治が一段落着いたからさ。……まあ大鳥自身はこの森に残るみたいだけどな」

あの蹂躪劇は夜通し続き、一体何体良くないモノを倒したのかよく覚えていない。途中で相手の増援が来た時は驚いたが、こつちの罪善さんと葬儀さんのコンビが加勢したので結局良くないモノの結末は変わらなかったと言える。

俺？ 俺は見るだけ。十代もハネクリボーに指示を出して頑張っていたけど、俺はもうホント疲れたから休ませてもらった。

途中一、二体俺にも襲ってきたが、そこはテディとレイシアが返り討ちにした。テディが強いのはよく知っていたが、レイシアも戦闘になると手のひらサイズのハートみたいな球を投げつけて普通に戦っていたのは驚きだ。……ぬいぐるみと女の子に守られるとはなんか自分が情けない。

そうして一通り倒したは良いのだが、この前のことを考えるとまた寮から良くないモ

ノが溢れ出してもおかしくない。幻想体達なら撃退できるが、普通の生徒が万が一出くわしたら大変だ。

その度にこんな大立ち回りをするのかと最初は憂鬱になったが、そこに立候補したのが大鳥だった。

「大鳥がこの森を巡回することで、出てきた良くないモノを倒しつつ迷い込んだ一般人を森の外へ連れ出すか。……大丈夫なのかそれ？」

「正直少し不安だな。だけど大鳥自身がやる気みたいだし、あんまりこの森から離れたくないみたいなんだよな。それに力尽くまで大鳥を止められるか？」

「それは………キツいんじゃないかな？」

それを聞いた十代は少し考えて、苦笑しながら答えを出す。

あの蹂躪の様を見た俺と十代だから言えるが、森の外でならともかく森の中、おまけにこの暗闇の中は完全に大鳥のテリトリー。そんな場所で大鳥と戦うのは危険極まりない。むしろこつちがズタボロにされるのがオチだ。

エネルギーの方は常に実体化していなければそこまで問題はないし、定期的に俺の持っているカードに戻る必要はあるが逆に言えば制限はそれだけだ。

無理やり言うことを聞かすのはどう考えても悪手。なら幸い本人（本鳥？）がやりたがっているのだからやらせた方が良い。絶対に一般人に危害を加えないということだ

け守ってくればあとは自由にさせよう。

「なあ遊児。……あの良くないモノって、結局何なんだろうな？」

そんなこんなで歩き続けていると、ふと思いついたように十代はこんなことを言い出した。

「さあな。俺にも分からない。だけど以前俺の知り合いと話をしたら、あれは人の罪の形じゃないかって話が出た。詳しくは教えてくれなかったけど、人の手によつて生まれたんじやないかって」

「あんなのがか？ ……俺にはよく分かんねえけど、あんなのが出来るなんて普通じゃねえな」

十代は両手を頭の後ろで組みながら、何か思案しているようだった。実際昔あの寮で何があったのかは分からない。だけど十代の言う通り、ただ事でないことがあそこで有ったのだろう。

もういつそのこと寮を解体した方が良いんじゃないかと思うのだが、そうしないってことは学園側にも何かしら理由があるのかもしれない。

「まあとにかくだ。これからはあそこにはあんまり近づかないってのが一番だな。十代

も知り合いが近づこうとしたらそれとなく注意するぐらいはした方が良いでしょう」

「……あく。まあ一応言うだけ言っておくよ」

なんか十代が含みのある言い方をしたな。まさかあんなとこにほいほい行くような友人でもいるのか？ 言つとくがもう俺は疲れたから行きたくないぞ。

そのまま進み続けてしばらく。遂に大鳥が立ち止まって俺に降りるように促す。どうやらここまでみたいだな。レティシアを含めた幻想体達もそこで再び精霊化し、俺も寝ぼけ眼でゆっくりりと地面に降りる。

「……つと。さっきのことともそうだけど、ここまで乗せてくれて助かったよ。ありがとうな」

俺は大鳥に礼を言うと、軽く背中部分を撫でてやる。ふっふっふ！ 俺もただここまでおぶさっていたわけじゃない。ここを撫でられると少し気持ちよさそうにしていたのは分かっているんだぞ！

すると大鳥は少しだけ、ほんの少しだけその瞳を閉じ、一声鳴くとどことなく穏やかな様子でまた森の奥へと歩いていった。

暗闇の中でチラチラと揺れるランタンの光が小さくなっていき、そのまま完全に見えなくなつた頃、

「……おっ!? いつの間にか日が出てるぜ！」

「ああ。眩しいな」

それまで真つ暗闇だったのに、急に日が差してきた。どうやら大鳥の暗闇の中に居たから日が出ていることに気が付かなかつたらしい。大鳥から離れたことで暗闇の効果が消えてきたのだろう。

どうやらやつとこの長い夜が終わり、夜明けを迎えることが出来たようだ。

「……………んっ!? 夜明けってことは……………マズイっ!? 急いで戻らないと寝る時間もないぞ！」

「ヤバいっ! 急いで帰るぞっ! 走れっ!」

ああもう。なんでこうこの特待生寮絡みになると毎回朝帰りになるんだか。森さえ抜ければあとは道なりに走るのみ。疲れた身体に鞭を打ち、俺達は寮に向けて猛ダッシュする。

「なあ遊児」

「……………はあ……………はあ……………何だ?」

「最初からいきなり大冒険だったけどさ。だからって俺に遠慮なんかするなよな」

十代は走りながらにも拘らず、あまり疲れを感じさせない顔で俺にニイツと笑いかけ

た。

「これからもこういうことがあつたら言えよ！ 友達なんだから！」

「……ああ！ 言われずとも……はあ。手が足らなくなつたら頼らせてもらうから覚悟しろよ。あと……そつちも何かあつたら言えよな」

まつたく。これだから主人公つてやつは。だけどこれだからこそ、十代に惹かれる奴も多いのかもしれないな。

そうして俺達は何とかオシリスレッド寮まで戻り、授業に間に合うギリギリまで束の間の安眠を貪つたのだった。

数日後、

「え〜つと。これが今回の調査結果か」

俺は自分の部屋で、高寺オカルトブラザーズが集めてきてくれたこの学園の怪談や噂話に目を通していた。

現地には行かせていないので基本的に表面上のものばかりではあるけれど、相変わらずよく集めたなと感心するレベルの数だ。もうその道に進んだ方が大成するんじゃないだろうか？

『と言つても、大半は元々あつた話が脚色されたり話し手が変わった程度のもが多いね。ここ最近で新しく増えたものは少なそうだ』

「まあそれは仕方ないけどな。あと勝手に見るんじゃないよディー！」

『あらら。最近冷たいつたらありやしないね』

肝心な時にどこかに行くくせして、どうでもいい時に限つて現れる奴にはこんなもんだ。堂々と俺の顔の横に出現して覗いてくるディーを手で払い、俺は改めて書類を読み込んでいく。そして、

「……おうっ！」

ここ最近で新しく出てきた噂話の欄に目を通していた時、ある文章を見てつい変な声が出てしまった。

『どれどれ? ……アツハツハツハ。これはまた何とも』

「笑い事じゃないつての! ……はあ。まさかこうなるとはな」

そこに載っていたのは、怪談とも言えない極々小さな噂話。

一人の生徒が面白半分に関胸試しに森へ行き、近道をしようとしてうっかり道に迷つたという馬鹿な話。

道も分からず明かりも落とし、ただ暗い森を彷徨う中、ついに疲れ果てて座り込んで

しまうその生徒。

だんだんと意識が薄れていく直前にその生徒が見たのは、自分に飛びかかろうとした黒くてドロドロした不定形の何かと、その何かを噛み千切ってこちらを凝視するさらに真つ黒な毛玉のような怪物の姿。

そして生徒が次に気が付いた時には、いつの間にか朝になっていて森の入り口に倒れていたという。

その生徒は臆気ながら夢の中で、その怪物の背に揺られていたらしい。その毛玉のような見た目に似つかわしくもない、どこかざらついた背中に。

文の最後はこう締めくくられている。

『この暗い森のどこかには居るのかもしれない。片手にランタンを提げ、その幾つもの瞳で森を見回る、大きくて黒い怪物が』森の守護者

代表決定戦と怪しい男 その一

ある日の事。授業がもうすぐ終わるといふ時、

「へっ!? 俺っ?」

「そうなのによ! 三沢君とデュエルして、勝った方がノース校とのデュエルに出場できるのによ!」

その大徳寺先生の言葉に教室内の生徒は皆騒然となった。当然渦中の二人である十代と三沢もだ。

これまでにあつた大徳寺先生の話を要約するところなる。まず近々行われるここの姉妹校であるノース校との友好デュエル。こちらの代表は去年と同じくカイザーが務めることになっていた。

だがノース校側からの連絡で、向こうの代表が一年生であることが判明。ならばこちらも一年生で行くという流れになってしまったという。

いやなんでだよっ!? 相手が一年生で来るならこっちはそのままカイザーに任せて勝ちをもぎ取ればいいじゃんっ!? あとこんな急に代表を変えられたら、ほぼとはいえ

確定だったカイザーの立つ瀬がない。ここはホントにカイザーは怒っても良かったと思う。

ただまあそこはカイザー自身が了承したのでよしとする。問題は代わりの代表として生徒の選抜だ。だがそこで驚くべきことに、カイザーはなんと自身の後釜に十代を指名したというのだ。

当然ひと悶着あった。十代はオシリスレッドの所属。このランク重視の学園において最底辺の生徒だ。普通なら代表など許されるはずもない。しかしその提案を、他ならぬ鮫島校長が同意したというのだからたまらない。

これに異を唱えたのは十代を目の敵にしているクロノス先生。それはまだ仕方ないのだが、なんとクロノス先生ときたら代わりに三沢を推薦し、互いに戦わせ勝った方を代表とするべきと提案した。

結局他に代案はなく、こうしてこのタイミングで大徳寺先生が二人と一緒に居るから丁度良いとばかりにそのことを話したというのが事の顛末だ。

まあ色々と言いたいことはある。最たることは、そんな大事なことをなんで前日にするかなあっ!?

いきなり明日代表をかけた大一番とか生徒の都合を考えろよ全く！ と突っ込みた
い所ではある。しかし、

「へへっー！」

「……………ふっー！」

顔を見合わせて互いにやる気に満ちた笑顔を向けあう十代と三沢を見ると、そうそう野暮なことを言えなくなるから困ってしまふ。個人的にこの二人の戦いも見たいしな。

「良いデュエルを期待してるのにな」

そう大徳寺先生が言つたのを最後に授業は終わり、生徒達はそれぞれ思い思いに教室を出ていく。……………ただ、

「なんで、なんであんな奴が候補に」

「どう考えたつてレッドの奴なんかより、俺達ブルーの生徒が選ばれるべきだろう」

そんな言葉が聞こえたのはおそらく空耳じゃない。三沢はまだライイエローのトツプだから良いが、十代を恨めしそうに見ていた奴は何人か居たしな。だが知らぬは本人とその友達ばかりなりだ。何事もなければ良いんだけどな。

「凄いやアニキ！ 学園の代表なんて！」

「今までオシリスレッドから、代表が選ばれたことは無いんだな！」

「ということはうまくすれば快拳だな十代。頑張れよ！」

十代の所に翔と隼人が駆け寄っていく。まあ俺もだが。事情はどうあれ十代にとってはチャンスだからな。それはとても喜ばしいことだ。

「えへへ……案外早く戦う機会が来たな」

十代の後半の言葉は上の段に居た三沢にあてたものだ。三沢は階段を下りて十代に向き合う。これは相手を格下などではなく、本気でぶつかる対等の相手としての振る舞い。

「ああ。あれから俺は日夜研究を続けている。お前のE・HEROデッキに対抗できる七番目のデッキを」

「出来たのか!」

「いや。だが、デュエルまでには間に合わせるさ」

「楽しみにしてるぜ!」

軽く互いに拳をぶつけ合わせると、三沢はそのまま教室を出て行った。さっそくその新デッキを完成させるために行ったのだろう。

「七番目のデッキ。一体どんなんだろ?」

「これは凄いいデュエルになりそうな予感がするぞ」

「十代。ここは気合を入れないとな。調整には俺も付き合うぜ。翔や隼人もそうだろう?」

二人も力強く頷いたのを見て、十代はますますやる気が漲ったようだ。

「助かるぜ皆! ありがとうな! よし。早速帰ってデッキの調整だ!」

「「おうー」」

これは面白くなってきた！ どっちが勝つにせよ、ぜひとも二人には良い勝負をしてほしい所だ。

と意気込んでいたのだが、帰り道に思わぬトラブルにぶち当たった。通路を歩いていたら、一人のオシリスレッドの生徒らしき人がブルーやイエローの生徒にすげなく扱われているのが見えたのだ。

らしきというのは、やけにその生徒が年をくついていたからだ。見た所三十くらい。下手をしたら三十後半かもしれない。むしろ教師と言われた方がまだ自然なくらいだ。

そのあからさまに怪しい人を前にして、

「なあアンタ？ ……分かった！ おっさん万年落第生だろ？」

オイオイっ!? 何やってんだ十代!? いきなりそんな怪しい人に話しかけ、あまつさえそんな失礼なことを!? 向こうもいきなりおっさんと言われたことに目を白黒させる。

「お、おっさん!?!」

「良いって良いって！ 分かっている。頑張ればそのうち進級できるさ。諦めるなよ！」

……さあ寮に帰ろうぜ！」

「ちよつ!! ちよつと待て十代」

なんと十代はそのままその人の手を掴み、オシリスレッド寮に連れて行くとしたのだ。流石にそれはマズいので一声かける。

「こんな人に構つてる場合じゃないだろう！ 急いで戻つて明日のためのデツキ調整をするんじゃないのか？」

「なぐにこれからどのみち寮に戻るんだからついでだよついで！ それにまずは腹ごしらえもしくちやな！ 寮に着いたら飯にしようぜ！」

「あつ!? アニキ待つてよ」

そのまま走り出した十代を止めることが出来ず、ついには寮まで辿り着いて一緒に夕食を食べることになってしまった。……前から思うが、十代はこういう時の感覚がどこかズレている気がするな。

「美味え〜！」

「ここのご飯をそんだけ美味しそうに食べるのはアニキと久城君だけだよ」

翔はそう言うが、ここのご飯は普通に美味しいと思うんだけどな。まあ焼いたメザシにご飯とみそ汁、そして漬物のみというのはやや質素ではあると思うが。……それよりも、

「隼人。あの人が知ってるか？」

「いいや。俺も何年もこの寮に居るけど見たことはないんだな」

食べながら国崎康介と名乗ったこの人のことをこっそり尋ねるが、やはり隼人も見覚えはないという。……となると生徒のフリをしているってことか。別にここで聞いたとしても良いんだが、

「い、いただきます」

良く分かっているが、もしやもしやとご飯を食べるこの人を見ると、どうにもそんな気が失せてくる。……まあまがりなりにも同じ釜の飯を食った仲間になったわけだし、もう少し様子を見るとするか。

夕飯を食べ終わり、十代達の部屋にて俺達、おまけに国崎さんも合わせて十代のデッキ調整を見守ることに。十代が真剣そうにカードを並べていく様子は、見ててこちらも緊張するな。

「うーん……やっぱこれが良いや！」

そう言つて十代がデッキ調整を終了する。だが、

「十代。良いのかそれで？ ほとんど前と変わっていないようだけど？」

「ああ。三沢がどんなデッキで来ようと、俺はこいつらを信じる」

カードを揃え始める十代の顔には気負いも乱れも感じられなかった。それは自分のデッキを信じているからこそその言葉。……毎日のようにデッキを見直している俺とはまるで違う。少し羨ましいな。

「……そっか」

「アニキらしいっすね!」

翔の言葉に隼人もうんうんと頷く。そして国崎さんは、それをどこか冷めた様子で見つめていた。だけど、たまたま少し遠くに置かれていたカードの一枚を手に取ると少し顔色が変わる。

それは『摩天楼 ―スカイスクレイパー―』のカード。どこか外国を思わせるビル群のイラストを見て、国崎さんに浮かんだのはどこか懐かしいような、それで苦い思い出を噛み締めるような、そんな表情だった。

「おっさん? どうした?」

「おっさん言うな! 俺は国崎だつての!」

「ああ悪い悪い! 国崎さんつてどこかおっさんっぽくてな。……スカイスクレイパーか。国崎さんも好きなのか?」

十代はなんとなしに興味本位で聞いたのだろうが、それを聞いた国崎さんの顔が少し

曇る。

「俺は……デュエルなんて好きじゃない」

「えっ!? じゃあどうしてデュエルアカデミアに?」

「ああ。いや、その。落第ばかりで楽しくないなあとか」

翔の疑問に明らかに誤魔化そうとして動揺する国崎さんだが、それを聞いて隼人がピクツと反応する。

「ああ。その気持ち俺には分かるんだな。俺も自分はダメなんだって諦めてたから。でも、十代や遊児、皆のデュエルを見ているうちに、俺もまたやりたいって思うようになったんだ」

「隼人……」

そうだった。隼人もただデュエルで勝つことだけを強要される毎日に嫌気が差して、いつの間にかやる気をなくしてたんだ。……やっぱデュエルは楽しむもんだよな。もちろん負けられない戦いつてのはあるだろうけど、それが全てじゃないはずだ。

「そうだよ! 国崎さんもアニキのデュエルを見たらきつとワクワクするよ。丁度明日学園代表決定デュエルがあるし」

「あ、ああ。……なあ。ところで噂で聞いたんだけど、学園の生徒が行方不明になってるってほんとかなあ?」

国崎さんはまた冷めたような表情に戻っていたが、急に何を思ったのかそんなことを聞いてきた。行方不明とはまた物騒な。……だけど確かそれって。

「行方不明？ 幽霊寮のことかな？ ……あつ？」

「幽霊寮？」

十代がマズいことを言ったとばかりに口元を押しえる。それもそのはず、別名幽霊寮ことこの前行った特待生寮は、大徳寺先生曰く何人もの生徒が行方不明になったという話だ。

行方不明云々の真偽はさておいて、今あの寮は時折良くないモノが出現する危険地帯。大鳥が近くの森で見回っているとはいえ、そうホイホイ近づいたら危ない。

「いやあ詳しいことは分からないけど。へへっ！」

十代もそのことに思い当たったのか誤魔化そうとするが、国崎さんはその言葉を聞いて僅かに瞳の奥をぎらつかせる。……これはちよつとマズいかもしれないな。

カタカタ。カタカタ！

「……んっ!？」

耳に馴染みのある骨の鳴る音。ふと横を見ると、罪善さんが急に半透明の状態で俺の横に現れていた。十代もそれに気が付いて一瞬驚くが、そこは流石にハネクリボーで慣れているのかすぐに平静を保つ。

何だろうかと罪善さんが顎で指す方を見ると、窓の外にディーの光球が一瞬チカッと瞬いた。……ディーの奴め。十代が居て部屋に出られないから代わりに罪善さんに頼んだな。

「ああ。そういえばちよつと野暮用を思い出した。悪いけど俺は先に部屋に戻るわ。皆も早めに休んでおけよ。……特に十代。明日はお前が主役なんだから、しっかり寝て体調を整えとかないとな」

「えっ!? もう戻っちゃうんすか? ……でもまあ確かに明日に備えて早めに寝ておいた方が良くもしいつすね」

「分かったんだな! お休み遊児!」

翔と隼人はそれぞれ軽く手を振ってくる。国崎さんは「ああ。お休み」とどこか気のない返事をするのみだった。頼むから何もやらかさないでくれよ。そして、

「遊児。……大丈夫か?」

「ああ。手が足らなくなるようだったらこっちから頼むから心配すんな。……お休み」

十代が心配するような声を上げるのを手で制し、俺はそのまま静かに部屋を出た。そして自分の部屋に戻り、そこで待ち構えていたディーに軽くため息を吐く。

「もう十代の前に姿を出しても良いんじゃないか? どうせ幻想体の一種とか言っても通じるぜ」

『どうだろうね。ああ見えて十代は意外と勘の良い所があるし、ハネクリボーが幻想体とは違うって勘づくことは十分考えられる。……まあここまで来たら、どこまで会わずにいられるかやってみたいというのもあるんだけどね』

俺はそんな面倒くさいことを宣うデイーに呆れを覚えて軽く目元を押さえる。それでいちいち代わりに仲介役で呼ばれる罪善さんはたまつたもんじゃないだろうに。

そつちも苦勞するなどと視線で語ると、罪善さんは軽く顔を横に振つてそんなでもない。と返す。まったくもつてデイーより人格者だよ罪善さん。

「それで？ わざわざ呼びつけるなんて何があつた？ 新しい幻想体の実体化の予兆はさつき確認したけどなかったぞ」

『いやいや。今回はそういうことじゃないよ』

最初に予想したのはそれだったが、デイーはそれを否定する。それじゃああと考えられることと言ったら、

『これは正直言わなくてもすぐに分かることなんだけどね。心の準備をする時間くらいは先にあげておこうと思つて。……ついさつき寮長室に、すごい剣幕で何人かのブルー生徒が乗り込んでいった所さ。そして』

その言葉と共に、ドンドンと扉を乱暴にノックする音がする。

『もうすぐこの部屋にやってくるよ……つて言おうとしたらもう来たね。君としては』

もっと早く言えって怒る所かな？」

「いや。今回は怒らないさ。なんせ俺が間に合ったからな」

何の用かは知らないが、この部屋を目標していたってことは俺に用があるってことで間違いない。そして俺が居ないとすれば、俺の友人である十代達の部屋に探しに向かうのは自明の理だ。明日に備えて準備中の十代に厄介ごとを持ち込まれるわけにはいかない。

「さて、こんな夜に近所迷惑なことになる前に、さつさと話を付けるとするか」

まあ、そう穏便に話し合いで済めばの話だけだな。俺は組み直したばかりのデツキを服に仕込み、さつきからノツクの続く扉に歩き出した。

代表決定戦と怪しい男 その二

「はい。どちら様ですか？」

扉を開けると、そこにはやけに殺気立った感じのブルー生徒が数人立っていた。これは穏便に話し合いとはいけなさそうだな。

その中の二人が進み出てくるが……あれ？ どっかで見た顔だな。確か……あっ!?! 前に万丈目の取り巻きをした二人だ!

「お前が久城遊児だな？ ちよつとデュエルしてもらおうか」

「ちよつと何なんですか貴方達は？ こんな夜に大勢で、近所迷惑でしょうが」

「良いから早くしろ! このオシリスレッド風情が。本来なら呼びつける所だが、ここまで来てやっただけでもありがたく思え」

なんか無茶苦茶なことを言ってるよこの人達。別に従う義理も義務もないのだが……。視界の隅で大徳寺先生がすまなそうな顔してこつちを拝んでるんだよな。

「……はあ。分かりました。じゃあひとまず訳を聞かせてもらいましょうか。大徳寺先生の部屋で」

えゝそんなにやつ!? とか聞こえてきたが、それくらいは責任を持つてほしい。どんなに頼りなさそうでもこのオシリスレッドの寮長なのだから。

一度大徳寺先生の部屋に行つて話を聞いてみた所、大雑把にだが事のあらまが見えてきた。どうやらこのブルー生徒達は、今回の代表決定戦に文句を付けに来たようだ。

俺の予想通り、まだラーイエローのトップでありクロノス先生も高く評価している三沢は良いが、ドロップアウトボーイだのなんだの言われているオシリスレッドの十代が出る事が不満だったらしい。

最初はブルー寮長であるクロノス先生に直談判したがこれは決定事項なノゝネとすげなく断られ、次はブルー女子寮の鮎川先生に頼んで明日香を推薦してもらおうとしたが本人がそれを拒否。

そして最終手段としてオシリスレッドの寮長である大徳寺先生に直談判したところ、辞退してもらえよう寮長として頼んでも良いと返答したという。ただし、

「ただし、それは少なくとも君達が辞退させる十代君よりも強いというのが最低条件。暫定的には言え推薦を受けている十代君への挑戦は許されないので、代わりにオシリスレッドの成績優秀者である久城遊児君を倒せたら……と、いうことなのによ」

「なるほどなるほど……つて言うと思つたんですか大徳寺先生っ！」

とりあえず怒りを込めて大徳寺先生を軽く睨みつけると、余計すまなそうな顔でこちらを拝みだす。拜むくらいならやらないでほしい。

「あのですね。 magari なりにも十代が代表に選ばれるかどうかの瀬戸際ですよ。それをこんな勝手に代表を変えさせようだなんてことが通ると思つているんですか？　しかも本人に了承も取らずに他の人の勝敗に委ねようだとか……それとあんたらもあんたらだっ！」

あまり大きな声を出すと迷惑になるのでやや声を抑えめに一喝すると、やつぱりこいつらも少しだけ委縮したようだった。こんな程度でビビんじやないよ。反省自体はしてほしいけどな。

「なんでさつきとここに来なかつた？　外を見る。完全に真つ暗じやないかつ！　授業で皆に聞かされたのがやや遅かつたとはいえ、すぐに向かえば十分に日が出ていたはずだ」

「なんだこの……オシリスレッドの分際で」

「レッドもブルーもあるかつ！　これは単なる礼儀の問題だつ！　まだ最初に自分達の寮長であるクロノス先生に相談するまでは分かる。筋としては間違つていない。けどあんたらはその後ブルー女子寮に行つてからここに来た。代表決定戦の関係度の順

なら間違いない次はレッド寮だつてのになっ！」

そこでこいつらは黙り込む。自分達の行動を思い返しているのだろう。

「あんたらは結局のところランクでしか相手を見てないんだよ。自分達が一番で、ブルー女子が同格。だからその天上院明日香を推薦した。そこならまだ自分達のプライドが守れるからだ。……で、それすらダメだったので仕方なく直接オシリスレッド寮に来た。相手が格下だからといって、仮とは言え明日決戦を控えている選手にこんな夜に大勢で。迷惑だとは考えなかつたのかっ!?! いや」

俺はそこで軽く首を振ってより強くこいつらを見据える。

「考える必要すら感じてなかつたんだろうな。なにせ相手は格下。学園最底辺のオシリスレッドだ。エリートである自分達なら何をしても良いんだとそう思っていたんだろ? ……ふざけんな！」

ランクランクランクっ! 皆して同じことばかり。序列があるまではまだ仕方がない。勝ち負けも優劣も必要だし避けられないことだ。だからといって上の序列が何をやってても良い訳じゃない。

「この……言わせておけばオシリスレッドの分際で。表に出ろっ! 学園最底辺がエリートに盾突くことがどういふことかデュエルで教えてやるっ!」

「まだ言うか。そうじゃないだろう? レッドがブルーに盾突くんじゃなくて、俺がお

前らに盾突いてんだ！ 自分も相手もランクで一纏めにすんじゃないっ！ ……ふう。
大徳寺先生」

「は、はいにやつ！」

なんでそんなにびくついてんだ大徳寺先生。他のブルー生徒が全員部屋から出た後で、俺は静かに大徳寺先生に頼み事をする。

「先生には立会人をお願いします。この調子で下手にごねられても仕方ないので」「ま、任せておくにゃ。……しつかり見させてもらうのにゃ」

最後が少し引つかかる言い方だが、まあ良いだろ。俺は大徳寺先生と共にブルー生徒達の後を追った。

着いたのは寮から少し離れた場所にある広場。そこそこ広くてソリッドビジョンのデュエルをするにはもってこいであり、よくレッド生徒も利用している場所だ。

俺達はその中央に集まってしつかり取り決めをする。

「え〜つと。デュエルの方式は一对一。ブルー生徒は代表一名を決めて戦ってもらうにゃ。そしてここにいる久城遊児君に勝った場合、明日の準備をしているはずの遊城十代君にぼくから代表決定戦の辞退を薦めるのにゃ。それで異論はないかにゃ？」

「……失礼。少し待ってもらえませんか？」

「にや？　なんですかにや？」

相手側は異論無しと頷くが、流石にこちらとしては納得いかないので口を出させてもらう。

「あの、それはこつちが勝つても何のメリットもないですよ。それで負けたら一方的に、しかも人のデュエルの結果で辞退させられるなんておかしくないですか？」

「……なにが言いたいんだオシリスレッド」

万丈目の取り巻きの一人がそう返す。立ち位置からしてこいつが代表つてどこか。だけどそれは今回無駄になるかもしれないな。

「そもそもその前提である、俺が負けたら十代に辞退を薦めるというのを無しにしてください」

「馬鹿な！　それではそもそもデュエルをやる意味がない」

「意味ならある。代わりに明日の朝一番で十代に挑めるよう大徳寺先生には働きかけてもらう。朝一であれば代表決定戦の良いウォーミングアップになるだろうし、そちらとしてもどうせなら実力でねじ伏せて代表の座を勝ち取りたいだろ？」

俺の言葉に、ブルー生徒達は少し悩んでいるようだった。これで試したいのはデュエルに対するプライドがあるかどうか。

もし本当に自分達の強さに、自分達の積み上げてきたエリートの立場に自信と誇りがあるのなら、これを断る理由はない。

彼らは集まって何か話し合い……そして、

「良いだろう。そもそも俺達エリートが落ちこぼれのオシリスレッドに負けるはずがない。戦う機会さえも与えられないのなら構わないさ」

承諾した。それすら無いようであれば目も当てられなかったが、そんなことにはならず、に少しだけホツとする。

「よし。交渉成立だ。……それとついでに俺個人への迷惑料つてことで、俺が勝ったら特別DPを支給してもらいたい。これで良いですね大徳寺先生」

「ちよっ!? 特別DPつて……にや、にやあ。申請が大変だけど何とかやってみるにや」
大徳寺先生はものすごく困った顔ながらも同意する。別にDPには困っていないが、完全なタダ働きというのも嫌なので一応請求しておく。……すみませんね。だけど最初にこつちを巻き込んだのはそちらつてことで頑張ってください。

まあ負けるつもりはないけどな。

俺達以外の生徒は少し離れ、広場の中央には勝負する俺達と立会人の大徳寺先生が残

る。そして互いの位置についてデュエルディスクを展開するだけなのだが。

「……なあ。確か万丈目の取り巻きだったよな。そういえばまだ名前を聞いていなかった。戦う相手の名前くらいは知っておきたいから聞かせてくれ」

「何を言っている？ 今お前が言ったじゃないか？ 取巻だ」

「？ だから取り巻きなのは知ってるから名前を教えろって言うてるの！」

「だから取巻だと言ってるだろうが！」

どうにも話がかみ合わないと思ったが、どうやら取巻太陽という名前だったらしい。ピツタリすぎるにもほどがある名前だな。

さて、じゃあそろそろ位置に着くとするか。俺はそのまま取巻に背を向け、

「しかし今の言葉を聞いて思い出したよ。万丈目は今頃どうしてるだろうなあ。あの惨めにもラーイエローに引き分けて逃げ出した奴はさ」

その言葉に足を止める。これは俺の後ろの取巻達の会話か。まだ戦っても居ないのにもう俺に勝った気でべらべらと。

「ああ居たよなそんな奴。情けないっつたらないよなあ。格下に引き分けるなんてブルーの恥晒しだ」

「ホントホント。そんな奴とつるんでたらこつちまでそんな目で見られるもんな。逃げ出してくれて逆にせいせいしたって感じだ」

知らず知らずのうちに拳を握りしめ、

「俺、アイツ嫌いだったんだよね。実家は財閥で金持ちらしいし、どうせこの学園へも金の力で入ったんだぜ！」

「言えてる言えてる！　もしくはコネでも使ったのかもよ。そうじゃなきゃブルーになれなかったのかも」

奥歯をギリリと噛み締める。そして、

「明日の朝遊城十代を倒して代わり三沢と戦う。……なんだ余裕だな！　何せオシリスレッドのドロップアウトと、コネと金の力でブルーだった万丈目と引き分けた奴だもん
な」

「楽勝楽勝！　俺が代わりたいくらいだぜ」

「ああ。万丈目の奴ふらつと戻ってこないかな。そうしたらもう奴に気を遣わずに勝つてやるんだけどな。俺の方がデュエル強いし」

「……………ふう」

静かに息を吐いた。

「君達いい加減にする……にやあつ?!」

何故か小さく悲鳴を上げて俺の顔を見る大徳寺先生。何か付いているだろうか？

いや、今はそんなことはどうでも良いか。

「大徳寺先生。早くデュエルを始めるとしましうか。俺もさっさと終わらせて明日に備えたい。……十代と三沢の勝負となるときつと名勝負になるでしょうからね。万全の状態で観戦しないと」

「そ、そうだにや」

そそくさと離れた場所に移動する大徳寺先生を見ながら、俺は位置についてデュエルディスクを展開し、取り出したデッキをセットして準備を終える。相手も準備は整っているようだな。

「さあ始めよう。最底辺がエリートに盾突いたらどうなるか教えてやる」

「……ああ。教えてもらおうか。お前が本当に万丈目より強いかどうかをな」

ゴメン万丈目。本来なら万丈目自身が戻ってきてこいつらを黙らせるのが筋なのだろうけど、今回ばかりはこつちも我慢を止めることにする。

推しと友人と知り合いをまとめて貶した奴には、キツイお仕置が必要だろうからな。

代表決定戦と怪しい男 その三

「デュエル!!」

遊児 LP4000

取巻 LP4000

ヒュルリと風が俺達の間を吹き抜ける中、デュエルは俺の先攻で始まった。

「俺のターン。ドロ―！ 俺は手札から『幻想体 死んだ蝶の葬儀』を攻撃表示で召喚。効果によりクリフトカウンを二つ乗せる」

死んだ蝶の葬儀 星4 ATK1500 CC2

俺の場に蝶の頭を持つ喪服の男が出現する。そして、それと同時に俺の傍らに同じく葬儀さんが半透明で現れる。どうやらソリッドビジョンと精霊は別々に動けるらしいな。

『……管理人よ。どうやらイラついているようだな』

「ああ。正直アイツらにかなりむかつ腹が立ってる。……もうホントの俺はいい齢だつてのにな。このカツとなる気質は自分でも嫌になる」

『個人的に言わせてもらえば、そうやって感情を出すことができるというのは好ましい

ものだと思うな。……それと一つ助言を。レ・テイシアが悲しむのでやりすぎないことだ」

俺はその言葉に少しだけ落ち着きを取り戻す。……そうだな。小さな子供にこんな辛気臭い顔をずっと見せるわけにはいかないよな。

「おいつー！ 長考もほどほどにしろよオシリスレッド。どうせいくら考えても勝てやしないんだからな」

取巻のヤジで怒りが再燃しかけるが、レ・テイシアの顔を思い出して落ち着く。……よし。まずはこの手で行くか。

「そして俺は魔法カード『幻想体脱走』を発動！ LP1000をコストに、自分の場の幻想体を1体選択し、そのカードより二つまでレベルの高い幻想体をデッキから攻撃表示で特殊召喚する。このカードを使ったターンは相手に戦闘ダメージを与えられないが、1ターン目だから関係ないな。俺はレベル4の葬儀さんを選択し、デッキからレベル6の『幻想体 三鳥 大鳥』を攻撃表示で特殊召喚する」

遊児 LP4000↓3000

大鳥 星6 ATK2200 DEF2200 鳥獣族 炎 CC5

ズシン。ズシンと音を立てて、俺の場にランタンを掲げる巨体の黒い毛玉のような鳥が顕現する。

「……なんだアレは？」

「ば、化け物だ！」

ランタンの明かりでユラユラと映る姿を見て、何故か他のブルー生徒がビビっている。化け物とは失敬な。確かに見た目は夜に見たら少し怖いが、それでも森の平和を守る守護者だぞ。

「ふ、ふん。そんなこけ脅しに誰がビビるか」

いやビビってんじやん取巻。声が震えてるぞ。……あとあの大鳥なんか映像じゃなくて本物臭いな。取巻を凝視しているし、うっかりパトロールの最中に呼び出しちゃったかもしれない。……暴れないでね。

「大鳥が召喚されたことにより、クリフォトカウンターを5個乗せる。そして俺はフィールド魔法『深く暗い森』を発動」

そのカードを発動した瞬間……何も起こらなかった。少なくとも見た目だけは。

それもそのはず、元々この場合は多少開けているとは言え少し歩けば森の程度に自然が豊富。しかも夜なので辺りも見えづらく、注意してみなければ分からない。

「……ハ、ハハハハハッ！ 何が出てくるかと思えば不発か。流石落ちこぼれのオシリスレッド。メンテナンスを怠っていたらしいな」

「な、なんだ。驚かせやがって」

「そんなんだから落ちこぼれなんだ。さっさと止めちまえっ！」

「どうやら誰も発動していることに気づいていないらしい。……ここまで来ると怒りを通り越して呆れるな。」

「俺はこのままカードを一枚伏せてターンエンドだ」

「さあ。どう動く？」

「ターンエンドだな？ では俺のターンだ。お前に格の違いを見せてやる。ドロ―！」

取巻は引いたカードを見てニヤリと笑う。

「これは良いカードを引いた。俺は手札から強欲な壺を発動。デッキから二枚ドロ―する。……ハハッ！ これは良いや！」

初手から手札補充を行い、七枚になった手札を見て取巻は上機嫌に高笑いを上げる。

「断言するぜオシリスレッド。お前に次のターンは来ない。このターンで勝負をつけてやるぜ」

「……どうやらよほど手札が良いみたいだな。なら見せてもらおうか」

「言われるまでもない。俺は手札から魔法カード『増援』を発動！ デッキから『切り込み隊長』を手札に加えてそのまま召喚する」

切り込み隊長 ATK1200

デッキから戦士族をサーチするカードにより手札に加え、そのまま召喚されたのは、いかにも歴戦の戦士といった風格の双剣を携えた騎士。そしてこのカードが召喚されたという事は、

「切り込み隊長の効果発動！ 召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスター一体を特殊召喚する。俺は手札からもう一体、切り込み隊長を攻撃表示で特殊召喚！」
取巻の場に二体目の切り込み隊長が出現する。やるな。初手で二体揃えてきたか。

「切り込み隊長がモンスターゾーンに存在する限り、相手は他の戦士族モンスターを攻撃対象に選択できない。そして俺の場には二体の切り込み隊長。これがどういうことかいかにおシリスレッドでも分かるよなあ？」

「互いが互いを守るから、俺はどちらにも攻撃できないってことだろ？」

「その通り。これが俺の切り込み隊長ロックだ！」

自信満々にそう言い放つ取巻。俺のつてお前の専売特許じゃないだろうに。戦士軸のデッキとかで割とよく見るぞ。

「まだ終わりじゃないぞオシリスレッド。俺は魔法カード『二重召喚』を発動！ これにより俺はこのターンもう一度召喚が出来る。そしてなんと……三体目の切り込み隊長を攻撃表示で召喚だ！」

「何?」

場に出現する三体目の切り込み隊長。これは地味に驚いた。強欲な壺と増援があったとはいえ、初手で三体並べるのは結構運が良い。その点は素直に凄いと思う。しかしこれだけ居るとどれが隊長だか分からないな。

だが確かにロックが盤石にはかかったが、これではこのターンで決めるには火力が足りないだろうに。

「続けていくぜっ! 俺は召喚した切り込み隊長の効果発動! 手札から『コマンド・ナイト』を攻撃表示で特殊召喚だ!」

コマンド・ナイト ATK1200

最後に現れたのは、どこか中性的な見た目をした女騎士だった。……なるほど。ここでコマンド・ナイトか。このカードが場に居る限り、自分の戦士族モンスターの攻撃力は400アップする。全体の攻撃力を底上げする気か。

コマンド・ナイト ATK1200↓1600

切り込み隊長 ATK1200↓1600

「そしてこれがトドメの一枚! 俺は手札から装備魔法『団結の力』をコマンドナイトに装備。このカードを装備したモンスターの攻撃力・守備力は、自分フィールド上の表側表示モンスターの数×800アップする。俺の場の表側表示のモンスターは4体。

よってコマンド・ナイトの攻撃力・守備力は、3200アップ！」

コマンド・ナイト ATK1600↓4800 DEF1900↓5100

仲間の力を得て、コマンド・ナイトの力が急激に増大する。

「出たっ！ 取巻の十八番！ モンスター効果でロツクをかけながら、モンスターを強化して一気に押し込む」

「これはもう勝負は決まったな。……まあ最初から結果の見えてた勝負だったかな」

取巻を含め、ブルー生徒達はもう戦勝ムードだ。確かに攻撃力5000近いモンスターに加え、効果により攻撃も出来ない。これなら余裕なもの領ける。だが、まだ俺の場には、

「うんっ!? そういえばお前の場にはまだ伏せカードがあつたな。大したことは出来ないと思うが……念には念だ。俺は手札から速攻魔法『サイクロン』を発動。お前の伏せカードを破壊する」

取巻の最後の手札から放たれた突風が俺の伏せカードを吹き飛ばす。そこにあつたのは『幻想体 3月27日のシエルター』。

「小癩な真似を。これで破壊を免れようって腹だったか。戦闘ダメージも0になるから、このターンは凌げるってわけだ。……だが、これでお前を守る伏せカードもなくなったな」

取巻が嫌な感じで嗤う。これは自分の勝利を確信した嗤い。相手を踏みにじり、打ち砕くことの愉悦の笑み。

「バトルだ！ 俺はコマンド・ナイトで大鳥に攻撃！ ぶっ潰せっ！」

女騎士は主人の言葉に従い大鳥を攻撃……………しなかった。

「……………なんだ？ おい。攻撃。攻撃だ！ まさか……………こんな時に故障か？」

「いや。デュエルディスクは正常に作動しているさ。コマンド・ナイトはただ効果で攻撃できないだけだ」

「何だと？ 一体どういう……………ひっ!？」

そこでようやく取巻は気づく。いつの間にか、フィールドが真っ暗な森の中に変わっていることに。

ソリッドビジョンとは言え森の密度は濃く、他のブルー生徒の姿すらまともに見えないほどだ。一応対戦相手である俺達は互いに見えているようだが。

「やっとなついたか。勝ちを目の前にしたからって油断しすぎだな」

「何だこれは？ 一体何が？」

「何がって、だからカードの効果だよ。お前がさつき不発と断じた深く暗い森の効果のな」

深く暗い森の効果。それは、攻撃順の強制。

「この森が展開している限り、互いに攻撃力の低いモンスターからしか攻撃できない。ああ。森の住人たる三鳥が味方に居ればその限りじゃないけどな」

それは入った者を惑わす森。住民の協力がなければまともに進むこともできない難所。そして、

「ちいっ！ なら仕方ない。切り込み隊長で死んだ蝶の葬儀に攻撃を」

「それも出来ないな。大鳥の効果発動！」

俺の号令と共に、大鳥の周囲が闇に包まれる。当然近くに居た葬儀さんの姿も闇に隠される。

「なっ!? 相手の姿が見えない！」

「大鳥の効果。相手の攻撃宣言時、その対象を大鳥に移し替えることができる。……さあ。森への侵入者はどうなるかな？」

切り込み隊長は主人の指示で闇に突入するが、当然視界は悪くまともに相手は見えない。そこに、

グルアアア！ グシュアツ！

一瞬の出来事だった。闇から突如現れた大鳥によって、切り込み隊長はその命脈を絶たれる。本人さえももしかしたら自分がやられたことに気づいていなかったかもしれない。

「ああ。一つ言い忘れていたが、深く暗い森の中では獣、鳥獣、獣戦士族以外のモンスターは攻撃宣言時、エンドフェイズまで攻撃力が600ダウンする。この森で侵入者がまともに動けると思うなよ」

切り込み隊長 ATK1600↓1000

取巻 LP4000↓2800

「ぐうつ！ ……くそ。仕方ない。俺はこれでターンエンドを」

「させるかよつ！ 大鳥のもう一つの効果。大鳥が居る限り、攻撃可能なモンスターは全て攻撃しなければならぬ！」

大鳥は静かにランタンを掲げた。そこから放たれるのはユラユラと妖しく揺らめく光。それを見た取巻のモンスター達は、全て瞳を虚ろにして武器を構える。

「なつ!? ま、待てつ！」

「待つわけあるかっ！ さあ。ここがお前達の死地だ！」

大鳥の効果によって攻撃を強制される切り込み隊長達は、一人また一人と自分から大鳥の牙に飛び込んでいく。まるで燃え盛る火に飛び込んでいく蛾のように。

取巻 LP2800↓1600↓400

「切り込み隊長が全滅したことで、コマンド・ナイトの装備した団結の力の効果も落ちる。 ……やつと手が届いたぞ」

コマンド・ナイト ATK4800↓2400

仲間を喪い力を失った女騎士は、虚ろな瞳のままにふらふらと森の中へ突き進む。その手に持つ剣は頼りなく揺れ、攻撃したものと見なされて森の木々に絡めとられ、ツタに巻きつかれていく。

コマンド・ナイト ATK2400↓1800

いつの間にか、コマンド・ナイトの前に大鳥が佇んでいた。コマンド・ナイトは力なく大鳥の持つランタンの前で棒立ちになり、大鳥はその様をじつと見つめながらゆっくりとそのクチバシを開き、

「やめ、やめろおっ!!」

「……………トドメだ」

ガブツツ!!

カランと剣が落ちる音と共に、女騎士の姿は消え失せていた。あとに残るは森を脅かす者を排除した守護者と、散っていった騎士達の死を悼むかのように静かに胸に手を当てる哀悼者のみ。

取巻 LP400↓0

デュエル終了。遊児WIN!

「やはり万丈目には及ばないな。……アイツなら例えもつと危機的状況だって、不敵な笑みを浮かべながら切り抜けてみせるだろうさ。それが俺の推しだ」

俺はそう言つて取巻に背を向け……一つ気が付いたことがあつたのでついでは言つておくことにした。

「ああ。そう言えば、一つだけお前の言う通りだったよ。確かに次の俺のターンはこなかつたな」

代表決定戦と怪しい男 その四

勝負がついたことで、さあつと音を立ててソリッドビジョンである深く暗い森が消え去る。出ていた葬儀さんと大鳥も姿を消し……いや。二体とも半透明の精霊状態になっただけでそこに居るな。

取巻はがっくりと膝をついて項垂れている。……まああんなに自信満々だったのにこつちに1ダメージも与えられず（コストは払ったが）、自分のターンに2ターンキルを喰らったわけだから多少プライドに傷が付いたかもしれないな。

だが勝負は勝負。おまけにそつちから吹っ掛けてきた上に友人を馬鹿にした分ということで甘んじて受けてもらおう。

「この勝負。しつかりと……まあソリッドビジョンの隙間からだったけど見させてもらつたにゃ」

「大徳寺先生」

草を踏みしめて大徳寺先生が歩いてくる。確かにさつきは視界が悪かったからな。立ち合いを頼んだというのにそれはまずかった。

「何とか勝てましたよ」

「そうかにゃ？ 結構余裕がありそうだったんだけどにゃ。でも、これでブルーの生徒達も納得が」

「いいや納得いかないね」

その声はもう一人の万丈目の取り巻きから発せられたものだった。そいつは項垂れていた取巻を押しつけて代わりにデュエルディスクを構える。

「途中から急に視界が悪くなって何も見えなくなてな。だが、あの状況で圧倒的に優勢だったはずの取巻が負けるだなんて納得できないな。それはこいつらも同じことだ。

……なあ？」

そいつが他のブルー生徒にそう呼びかけると、他の奴らも呼応するようにデュエルディスクを展開する。

「君達。今の勝負は確かにこの久城君が」

「先生。……どうやら話し合いで解決する問題じゃなさそうですよ」

「久城君」

こいつらの何人かがニヤニヤ笑いを浮かべていることから、おそらく取巻が本当に負けたことは分かった上でこう言っている。つまりはいちやもんを付けている訳だ。

肝心の十代の前哨戦である俺に負けたとあってはブルー生徒の名折れ。なので多少無理やりにも今の勝負を無かったことにしたい。考えているのは大体そんなところ

だろう。

大徳寺先生という立会人がそう証言しているのにも関わらず強行するのなら、いざとなったらオシリスレッドの寮長だから鼻肩をしたとでも言い出すのかもしれない。

おまけに代表一人の話だったはずなのに、全員がデュエルディスクを構えてやる気満々ときたものだ。この調子だと次勝つてもまた何か言ってくるのは確実。

まったく嘆かわしい。これで本当に万丈目やカイザーと同じくブルーを名乗れんのか？

俺は一步前に進み出て再びデュエルディスクを構える。さっきの勝負はすぐに終わったので気力・体力は共に十分。……行けるな。

「良いだろう。そつちがその気ならとことんやってやる」

話し合いをするつもりすらないというのなら。則るべきルールを破り、貫くべき最低限の筋をかなぐり捨て、それでもなお自分達の小さなプライドを守ろうと動くのなら。後に残るのはただの意地の張り合いだ。

「こつちはルールを違えるつもりはない。俺に勝った奴が明日の朝一番で十代に挑む。異論はないな？」

相手が先にルールを破ったからと言って、こちらまでルールを破ることはない。俺がやるべきことは変わらず、ただこいつらと全力でぶつかるのみ。

人数差？ 関係ないね。俺の心を折りたいなら、デーヴぐらいの奴と百連戦マラソンデュエルでもさせるんだな。……そうなったら流石に受けないけど。

「さあ。お前らの気が済むまで付き合ってやる。……かかってこいやこの野郎おおっ!!」

俺は勢いよくカードをドローした。



いやはや。凄まじいな。久城君の実力を見極めるべく、私の下に直訴しに来たブルーの生徒達をこれ幸いと久城君と戦うようそれとなく誘導してみたが。

『幻想体 魔法少女 憎しみの女王』の効果発動！ 相手モンスターを戦闘で破壊した時、カードを一枚ドローする。ドローしたカードが幻想体モンスターだったら再度攻撃できる。ドローっ！ ……来たぜ！ 俺が引いたのは『幻想体 幸せなティディ』。よつてもう一度攻撃権を得る。ダイレクトアタックでトドメだっ！」

「ぐわああっ!!」

彼らの戦いはもう二時間に及んでいた。ブルーの生徒達はもはや最後に残っていた

プライドすら捨て、一度負けた者であっても再び挑んでは返り討ちにあっている。
「……はあ。次いつ！ かかってこいつ！」

普段の常に落ち着いたものとは少し違う口調。おそらくこちらの方が久城君の素なのだろう。荒々しくも力強く、それでいて相手の動きを読んでそれに対応する冷静さは損なわれていない。

対して相手側にはもう半ば自棄になっている者もいる。息は荒く、心も乱れ、それはプレイングにも表れていた。平静であつても難しいのに、こうなつてはいよいよ久城君に勝つことは困難だろう。

「これ以上は見なくても結果は決まったかにや」

おっと。つい言葉が漏れてしまった。しかし一応立会人を任された以上、結果は読めているが見届けないわけにはいかない。

『幻想体 三鳥 大鳥』でダイレクトアタックっ！
「うわああつ！」

ほらまた一人。徹底的に叩きのめされ、もうあれは完全に戦意を失っている。まだ諦めようとしなない……というより負けを受け入れられない生徒はあと僅か。じきにこの戦いも終わるだろう。

やはり久城君は私の思った通りの逸材だった。

同じく逸材である十代君と同様。カードの精霊を従え、強き精神と善良な魂、そして高いデュエルタクティクスを兼ね備えた者。

この二人ならあるいは……あの人を。

「……………生。大徳寺先生?」

「ふにやつ!!? な、何かにや久城君?」

「まったく。いくら長いからって立会人がぼくつとしないでくださいよ。……これで一応終わりのようです」

その言葉に周囲を見渡すと、そこは死屍累々という言葉がぴったりだった。ブルーの生徒達は全員力なく立ち尽くすか倒れ伏すか、とにかくもう誰も戦意は残っていないようだ。

「何なんだ……何なんだよお前はっ!!? エリートである俺達が……こんな」

どうにか立ち直った取巻君が、まるで恐ろしいものでも見るかのように久城君を凝視する。まあ分からなくもない。

結局久城君は一度たりとも負けることはなかった。無論負けそうになったことはあつたし、長く戦って疲労の色も表情に濃く出ている。

だがそのたった一人が凄まじい闘志でもって自分達をねじ伏せていったことは間違いない、しかもそれが自分達が蔑んでいるオシリスレッドなのだから、もうブルーの生

徒達からすれば悪夢以外の何物でもないだろう。

「ただのオシリスレッドの久城遊児だよ。……さあ。まだやるのか？ お前達がオベリスクブルーのエリートとして、他の生徒の見本として、こんなことをしている今の自分にまだ胸を張れるっていうのなら、ぶっ倒れるまでまた相手をしてやるよ」

「……………いや。もう良い」

取巻君は小さく首を横に振った。

「そっか。では気が済んだのなら帰りな。こんな所で倒れてたら疲れも取れやしない。自分の部屋で休むこったね」

「……………ああ」

取巻君は最初に負けたためか少しだけ余力があり、倒れていた生徒に手を貸して一人ずつ起き上がらせていく。全員疲労困憊といった様子だが、この調子なら何とか寮に戻るぐらいは出来そうだ。

生徒達は最後に久城君の方を見て、どこか怯えた様に一人、また一人とブルー寮の方に歩いて行った。その背中には、勢い込んでオシリスレッド寮に乗り込んできた時の自信はもう欠片も見当たらなかった。

「……………一つ言つて良いか？」

最後に残っていた取巻君がその場を去ろうとした時、久城君がそう呼びかけた。取巻

君はそのまま足を止めて力なく振り向く。

「万丈目は決して金やコネの力だけでのし上がってきた訳じゃない。お前ならそれは分かっている筈だろ？ 万丈目とつるんで間近で見えていたお前なら」

「……………」

「それと引き分けた三沢が弱いなんてことはないし、十代も当然そうだ。ランクだけで全てが決まるんなら、なおのこと一番上のブルーはそういう実力のある奴らのことを認めるべきじゃないのかよ？ ……俺の言いたいことはこれで終わりだ。呼び止めてすまなかつたな」

「……………ちっ！」

取巻君は小さく舌打ちをしながらまた振り向き、そのままよろよろとブルー寮へ帰っていった。……今の言葉が何かしら心に届けば良いのだが。仮にも私は教育者だ。未
来ある若者達には、健やかに育ってほしいものだ。

「……………はあ。疲れた」

久城君は大きく息を吐くと、そのまま近くの木に寄りかかって座り込んだ。

「お疲れ様。今回はすまなかつたにゃ」

「ホントですよ。もう本気でキツかったんですから」

「……それにしても大したもんだにや〜！ ブルーの生徒相手にあそこまでやれるなんてにや〜！」

私が掛け値なしの称賛の声を上げると、久城君はゆっくりと首を横に振る。

「それは相手がはなつからこつちを格下だと考えて舐めていたからですよ。もしそういうの無しで全力で来てたら危なかった場面も何度かありました」

「いいや。それでもぼくは久城君が勝つと思っているにや。君の実力はそれだけのものにや」

「ありがとうございます。……さて、俺はもう少しここで休んでから戻りますから、大徳寺先生は先に帰っててください」

「そうさせてもらうにや。久城君も早く帰るんにやよ」

今回の事で、久城君の実力がかなりはつきりしたのは大きな収穫だった。……しかし、まだ足りない。あの人を止めるには……まだ。

これからもこの二人には試練を課さなくてはならない。身も心も鍛え上げるための試練を。……私にはもう、あまり時間は残されていないのだから。

「あつ!? そういえば大徳寺先生！ 一回どころかあんなに沢山戦ったわけだから、こ

「これはもう特別DPとか相当期待しちゃってもいいんですよね？ それぐらいはこっちにもメリットがあつてしかるべきですよね？」

「……その前に申請作業が大変そうだなこれは。」

代表決定戦と怪しい男 その五



「……………よし。行くか」

困り顔で帰路につく大徳寺先生を見送ると、俺は少し休んでマシになった身体を無理やり起こす。

『おやおや。もう行くのかい？ もっとのんびりしていけば良いのに』

「十代達のことにも気になるしな。ああは言ったけど、十代は良いがむしろ翔辺りが緊張して当日寝不足で遅刻するなんてことありそうだ。さっさと戻って確認する。……とところで、今までどこ行ってたんだディー？」

『いやまあ、さつきまでの久城君はちよつと近寄り難かったからね。落ち着くまで様子見を』

いつもなら途中で茶々を入れてくるディーなのに、今回は今頃になってやってきた。……そんなに怖かったかな？

『それはもう。流石の僕もおちよくるのに気合が要るレベルだったね』

「だからナチュラルに考えを読むなっての！ ……言っとくけど別に本気でアイツらに

怒っちゃいなかったからな。割とムカツとしただけで」

『あれで本気じゃなかったんだね。……分かった。本気で怒ったら次は僕も覚悟を決めておちよくりに行くよ!』

「だからそもそもそれを止めろって……何だ?」

そこをグイグイと誰かに袖を引つ張られた。見ると、大鳥がクチバシを器用に使つて袖を引いている。罪善さんという大鳥という喋れない幻想体は皆こうなのか?

「どうした大鳥……っておわつ!」

急に腕を取つて上に放り投げられ、そのまま大鳥の背中に落下する。……やっぱちよつとゴワゴワするな。乗せてくれるのは良いけどせめて鞍的な何かが欲しい……って実体化してる!?

グルルルル。

『管理人よ。どうやら大鳥がまた森にて何かを察知したらしい。良くないモノのみなら単騎で向かう所を君を乗せたということは』

「何かあるってことだよな」

俺の返事に葬儀さんが静かに頷く。せめて俺も大鳥の言葉のニュアンスくらいは掴めるようになりたいよ。

「……はあ。明日に備えて早く寝たいってのにもう」

『そうブツクサ言いながらも行く気満々じゃないか。素直じゃないねえ』

「わざわざ大鳥が俺を連れて行こうとするくらいだからな。その分くらいは付き合おうってだけだ。……さあ。行こうか」

そう一声かけると、大鳥はまた軽く鳴いて俺を乗せたまま森へ歩き出す。ディーや葬儀さんも一緒だ。頼むから簡単な件であつてくれよ！

ズシン。ズシンと大鳥の足音が夜の静寂を破っていく。あく。これマズったかも。確かに大鳥に乗った方が俺が走るより断然早いし夜の森の中でも安全だけど、音が出るから意外に隠密には向かない。

大鳥の暗闇を展開すれば音もある程度遮断できるみたいだけど、そうすると何でもかんでも吸い寄せかねないからな。うっかり森に入った無関係の人が吸い寄せられでもしたら大変だ。

というかそれを大鳥がしない時点で、少なくとも良くないモノ系統ではない。それだったら速攻で暗闇を展開してそれを一網打尽にしている。じゃあ一体何が。

グルアッ！

『およっ！ どうやらこの近くみたいだね』

森の草木をかき分けて突き進んでいた大鳥が急に速度を落とし、それに気づいたデイーが声をかける。

「おわつと!? 急に降ろさないでくれよ! ……で? どこだここ?」

『ふむ。どうやら管理人にとつてまたもや来たくない場所のようだぞ』

「来たくないって……またここかよつ!」

葬儀さんの言葉に周りを見渡すと、森を抜けた少し先に見えるのはもう三度目になる特待生寮の姿。……もう来たくなかったよ。なんでここ来る度に面倒ごとがあるんだよつ!

『久城君。こつちこつち。なにやら面白ゲフンゲフン……厄介なことになっているみたいだよ』

デイーがふよふよと近くの茂みに隠れながらこつちを呼ぶ。……今面白そうって言わなかったか? まあ良い。大鳥と葬儀さんがスツと精霊化するのを確認し、そつと俺も茂みに隠れて外を窺う。

そこからは丁度特待生寮の入り口が見えた。以前見た立ち入り禁止の看板と鎖が、風に揺られてユラユラと揺れている。そして、

「あれは……明日香? それと誰かもう一人いるな。……誰だ?」

大鳥のランタンが消えて夜の闇に包まれているが、少しずつこつちも目が慣れてき

た。どうにか見えてきたのは門の前に立つ明日香ともう一人。そちらは立ち姿から男のようだが、こちらに背を向けているので顔が見えない。

『おやくつ!!』　もしかしてこんな場所で深夜の密会？　良いねえ青春だねえ!』

「もしそうなら邪魔したくはないけど、場所が場所だしな」

明らかに楽しんでいる様子のデイーがアレだが、こつちとしても人の恋路を邪魔するような野暮なこととはしたくない。しかしここは良くないモノが時折湧き出る危険地帯。ちよつと様子を見て長引くようであれば注意するか。

俺はそのまま二人の会話を聴き取るべく耳をそばだてる。……これは必要なことだからだ。けつして野次馬根性からではないからね。そして聞こえてきたのは、

「ここで、何人もの生徒が行方不明になってるんだってね？　君はその居なくなつた生徒と関係が？」

うんっ?!　どつかで聞いたことがある声だ。あと行方不明って……。

「そんなことを聞いてどうするの？」

「いやあ。ちよつと興味があつてね」

「余計なことしないで」

明日香の機嫌は明らかに悪そうだ。表情は険しく、相手を咎めるように睨みつけている。

「関係無い人にかき回されては迷惑なの。さっさと自分の寮にお帰りなさい」

そう言い残して、明日香はその場を去っていった。……これってどう聴いてもカッパルとかそういう類の会話じゃないよな。

「おっ怖っ！ ……ここで諦めてたまるかよ。せつかく良い金になる特ダネなんだから」

男は軽く鼻を鳴らしてそう呟くと、懐からカメラらしき物を取り出してパシャパシャと寮を撮影し始める。……仕方ない。行くとするか。

敢えて隠さずにガサガサと音を立てると、男は音に反応してこちらを向く。

「だ、誰だっ!？」

「……どうも。こんな夜更けですが良い天気ですね。月も出てるし星も良く見える。そうは思いませんか国崎さん」

堂々と俺が出ていくとその男、国崎さんはこちらを見て驚いているようだった。ちなみにディーは空気を読んで茂みに隠れたままだ。見えないとは思うが念のためな。

「お前は……確か久城だったか？」

「はい。その久城です。そちらは夜の散歩ですか？」

「あ、ああ。そうなんだ。眠れなくてちよつと」

「ちよつとカメラを持って？」

その言葉に国崎さんは片手に持っていたカメラを咄嗟に背中に隠す。今さら隠さなくても。

「まあ薄々勘づいてましたけど。国崎さんここの生徒じゃないでしょ？　ここに何年も居る友人に話を聞いたけど見たことが無いらしいし、そのカメラ……プロ仕様の高級品ですよ？　普通の学生が持つにには本格的すぎるし、趣味にしてもそんな金持ちには見えない」

カメラのことは正直根拠はない。こんな暗い中でじっくり見れないしな。だけどカメラをかけたらどうやら当たっていたようで狼狽える国崎さん。

「いや……これは、その」

「となるとあと考えられるのは、どこぞのスパイか……ジャーナリスト」

おっ！　ジャーナリストでちよこつと反応があつたな。OK。スパイとかだったらちよつと物騒なことになるかと思つたが、まだそれなら話し合いが出来そうだ。

「……………そうだ。俺はこの学園の外から来た。この学園で多くの行方不明者が出ているといふ噂を聞いてな。その噂の真偽を確かめに来たんだ」

「なるほど。ジャーナリストにとつて噂は飯のタネ。それが金になると踏めば何処へで

も行くってことですか」

「そういうことだ。……どうする？ 俺の事を学園側に報告するか？」

国崎さんはこちらを油断なく見据える。答えによつてはそのまま逃げだすかもしれないし、場合によつてはこつちの口を封じようとするかもしれない。……まあ後者は最悪の場合だけだな。そちらを選ぶようならこつちも反撃はするが。だけど、

「いいえ。特に報告する気はありませんよ。写真撮影も止めはしないのでご自由に」
「……報告しないのか？」

「やり方は知らないけど、せつかく乗り込んできたんですから噂の真偽を確かめるくらいなら別に。まあさっきの明日香みたいに、下手に首を突つ込むと嫌な気分になる人もいますのでやりすぎは避けてほしいですが」

これに関してはこつちは首を突つ込むつもりはない。特待生寮の情報が手に入るようであれば協力するという手もあるけど、いくらなんでも来たばかりの人がそう簡単に分かるとは思えないしな。

ジャーナリストということで調べた事実を公表する可能性もあるにはあるが……そこはどうせ学園側もセキュリティがしっかりしている筈だ。少なくとも情報の隠蔽が出来る何者かが居ることは確かみたいだしな。

ならこちらからはやりすぎないよう釘を刺す程度で十分。あとは勝手に調べ物をし

て勝手に帰るだろう。……そうだ!

「国崎さんがいつまでこの島に滞在するのかは知りませんが、出来れば明日の十代の代表決定戦は見ておいた方が良いと思いますよ。多分一見の価値あります。……じゃ! 俺は明日に備えてもう戻って寝ます。お休みなさい」

「……ああ。お休み」

俺はそう言い残して特待生寮を後にした。国崎さんは……どうやら着いてきていないみたいだな。こつそり流れを見守っていたディーが、ひゅつと俺の横に飛んでくる。

『お疲れ様〜! ちよつと僕としては報告しないと云つたのは意外だったかな』

「そんなに意外か? 言うまでもないっただけさ。……それに、一応同じ釜の飯を食った仲だろ。あんまり突き出したりとかはしたくない」

『君って結構そういう所あるよね。なんだかんだ仲間意識を持つと甘いというか面倒見が良いというか』

ただほつとくのも気になるっただけだよと返しながら、俺は歩きながら横で精霊化して着いてきている大鳥に呼び掛ける。

「大鳥。すまないけど、さっきの国崎さんが森を出るまで見守ってあげてくれないか。場所が場所だし、何か出てこないとも限らない。その後は休むも次の巡回に行くも自由だから」

グルっ！

そのまま大鳥は姿を消した。国崎さんの傍に張り付きに行っただろう。こっちは他の幻想体達が居るし付き添いは十分だ。

『やっぱり甘いじゃないか！ わざわざ乗せて行ってもらう予定の大鳥に頼むなんて』

「ほっとけよ。ちよつとうっかりして忘れてたんだよ！ ……ふわゝあ。今度こそ部屋に戻ってぐつすり寝てやるからな」

『フッフッフ。大欠伸だね。それじゃあここは一つ、君が寝る前に横で眠れなくなるほど怖い話を』

「……………」

『分かった分かったって！ やらないよ！ やらないからその顔止めて〜！』

そうして何とか俺はオシリスレッド寮に辿り着き、十代達がちゃんと寝ていることを確認して部屋に戻り、ベッドに飛び込んですぐに意識を失った。

いよいよ代表決定戦が始まる。

代表決定戦と怪しい男 その六

「シニョール。シニョーラ。お待ちせしたノ〜ネ！ 只今から、学園代表決定デュエルを始めるノ〜ネ！」

司会進行役としてクロノス先生が、特設リングの中央にてそう宣言する。ポーズまで決めてノリノリだ。

「ラーイエローからは三沢大地。……そしてオシリスレッドからは、遊城十代つと」

「ちよつと先生！ いくら嫌いだからって十代の方を適当に言わないでくれよ。」

「その顔だと、出来たのか？」

「ああ。楽しみにしている。お前を倒す七番目のデッキを」

「俺だつて負けないぜ！」

そして戦う当の二人は、互いにもう闘志満々と言つたところ。やる気がないよりは大いに結構だ。

「アニキ〜！ 頑張つて〜！」

「きばれ〜十代！」

「二人とも頑張れよ〜!」

ちなみに俺と翔、隼人は観客席にて応援だ。観客席は満杯とまでは言わないがかなり盛況。やはり学園の代表を決める戦いとなると皆関心があるらしい。

「もう久城君つてば。ここはアニキの応援をしてよ」

「だって三沢も知らない仲じやないしな。以前食事をご馳走になったこともあるし、なので両方応援だ」

「遊児らしいんだな。……それにしても、国崎さんどこ行つたんだろぅな?」

そう。昨日の夜を最後に、国崎さんは姿を消していた。俺を警戒しているということはないだろうが、どうせなら朝食でも食べていけばよかつたのにな。

「おっと。そろそろ始まるみたいだぞ!」

二人がデュエルディスクを構える。いよいよだ。俺の見立てでは二人の実力は大差なし。ただ十代には持ち前の強運と主人公補正が。三沢には十代のデータを研究してきたという強みがある。さてどうなることやら。

「デュエル!!」

遊城十代対三沢大地

始まりは三沢がモンスター一体を召喚するだけで終わるといふ静かな滑り出し。ここからは互いにモンスターとライフの削りあいに突入したのだが、

「魔法カード『ボンディング―H2O』を発動！ ウォーター・ドラゴンを特殊召喚！」
三沢がオキシゲドンと二体のハイドロゲドンを生け贄に、エースモンスターであるウォーター・ドラゴンを出して場にプレッシャーを与えたことにより、一気に流れが動き出す。

「流石だな。だけどまだこれからだ。お前が三体のモンスターを生け贄にエースモンスターを呼んだのなら、俺もお前の全力に伝えてやるぜ！」

この展開。おそらく十代は手札に融合でも握ってるな。ここで十八番の融合を決めてまた戦局をひっくり返そうって所か。

アニメならここで反撃のBGMでも流れる所だろう。だが、気になるのは三沢の伏せているカード。

「魔法カード『融合』発動！ 場のスパークマン。そして手札のフェザーマン、バブルマンを融合させ、テンペスターを召喚するぜ！」

「その時を待っていたぞ！ 罨カードオープン。『封魔の呪印』！ このカードは、手札から一枚魔法カードを捨てることで発動。相手の魔法カードを無効にし破壊する！」

これにより融合は無効となり、ウォーター・ドラゴンにぶつけるはずだったテンペスターは不発に終わる。

なるほど。これが三沢の十代対策か。融合回収などで融合を手札に戻しても、封魔の呪印の効果でもう融合のカードはこのデュエル中使えない。

十代のデッキの要は融合。個々のモンスターを対処するよりも、根本の融合召喚自体を防いだ方が早いと判断したわけか。

「そんな。アニキの融合コンボが破られるなんて」

これはかなり厳しい戦いになってきたな。さあどうする十代？

「どうだ？ お前に対抗するために構築した俺の七番目のデッキは？」

「ああ。これ以上ないくらい楽しいぜ。そこまで考えてくれたデッキを、どうやって打ち破ろうかと思うと、ワクワクする！」

流石十代。こんな逆境に立たされても怯むどころかむしろ楽しんでる。そしてその言葉は決してハツタリなどではなかった。

「俺のHEROが融合だけだと思ったら大間違いだぜ。HEROの真の力は、魔法・罠・モンスターの全ての連携から繰り出される多彩なコンボにある」

その言葉通り、十代はバブルマンの召喚による二枚ドローを皮切りに、融合無しでも

ウォーター・ドラゴンに食い下がっていく。そんな中、

あれは……国崎さんか。

デュエルの最中チラリと他の席に目を向けると、席の片隅に国崎さんが居るのが見えた。その身体は立ち上がって今にも帰りそうなのに、その視線は十代の戦いをじつと見つめている。

「……翔、隼人。スマン。俺ちよつと席を外す」

「えっ！ 今良い所なのにな？ ……早く戻っておいでよ」

なんだろうな。少しだけ国崎さんのことが気になった。なので俺は少し席を外し、国崎さんの方に移動する。後ろから近づくと、国崎さんは何か葛藤しているようだった。

「……いや。こんな事してる場合じゃねえだろ。早くこの特ダネを持って」

「こんにちは」

「わっ!？」

普通に話しかけただけなのに、国崎さんはポケットに咄嗟に手をやりながら驚いた。……この様子だと何か情報を掴んだかな？ これは学園のセキュリティが甘いというべきか、この人の腕が良いというべきか。

「な、なんだお前か」

「なんだは無いでしょうに。来てくれたんですね」

「……まあな。ちよつとした気まぐれだよ」

国崎さんは気まずそうに顔を逸らしながらも、視線は相変わらずデュエルに向いたまままだ。素直じゃないな。

「たかがデュエルに……なに熱くなってんだか」

どこか冷めた様子で、それでいてほんの少し苦みと寂しさを漂わせる顔でそう言う国崎さん。この顔を俺は知っている。

俺がまだ子供の頃、同じような顔をした人が居た。その人は毎週シヨップの大会に出るくらい熱心なプレイヤーだったが、その顔を見た数日後からぱったりとシヨップに顔を出さなくなった。

噂によると、その人は大会には出るもののほとんど勝つことが出来ず、それが嫌になつて止めたのではないかということだ。

結局本当の理由は分からない。噂通り勝てないことが嫌になつたのかもしれないし、引つ越しか何かをしたのかもしれない。単に飽きただけなのかもしれないし、それ以外の理由なのかも。でも、あのどこか寂しそうな顔は忘れられない。

「たかが……ですか。確かにそうかもしれないですね」

実際この世界はデュエルがとても盛んだ。しかしそれだけで食っていけるいわゆるプロと言われる人はそう多くない。

この学校の生徒とて、卒業後全てがその道に行けるわけではない。おそらくなれるのはほんの一握りの人のみ。それ以外は夢破れ、何か別の道を行くのだろう。

そういう意味ではデュエルに熱くなるというのは、国崎さんにとっては将来性のあまり感じられないことなのかもしれない。でも、

「でも、少なくともアイツらはどこまでも真剣に取り組んでいます。この一戦一戦を全力で楽しんで、全力で勝利のために手を模索しています。今だって」

「バカな！ 勝っている三沢はともかく、こんな大一番で負けそうな十代がそんなわけないだろう！ 楽しんで見えるのだったただの空元気さ。内心もう諦める寸前に決まってる」

「……それはどうでしょうか？」

諦める？ それこそ十代に一番似合わない言葉だな。まあ百聞は一見に如かず。この戦いを見守るとしようか。

「フィールド魔法『スカイスクレイパー』！」

出たっ！ E・HEROが自分より強い相手と戦闘する時、攻撃力が10000アップするというパワーカード！ 元の世界ではHEROから攻撃した時のみだったのに、

こっちでは相手からの攻撃でも発動する厄介なカードになっている。

「……………」

国崎さんはこの瞬間、スカイスクレイパーを見て何か考えているようだった。昨日部屋でも見ていたし、もしかしたら思い入れがあるのかもしれない。

十代はこれによって強化したエツジマンでウオーター・ドラゴンを撃破！ しかし三沢もただではやられず、味方が破壊された時に使える罠『ラスト・マグネット』をエツジマンに装備させて攻撃力をダウンさせる。そして、

「俺のターン！ 俺は手札から儀式魔法『リトマスの死儀式』を発動！ 『リトマスの死の剣士』を儀式召喚する！」

これこそ三沢の七番目のデツキのもう一体のエース。このカードは攻撃力0だが、戦闘破壊出来ず罠も受け付けられない厄介なモンスター。そして場に罠がある限り、攻撃力が3000となる。

ラスト・マグネットがあることで死の剣士は攻撃力が上がり、逆に攻撃力の下がったエツジマンではスカイスクレイパーの援護をもつても届かず撃破され、

「そして手札から魔法カード『巨竜の羽ばたき』発動！」

おまけとばかりに三沢は場の魔法・罠を一掃するカードを発動！ その後カードを一枚伏せてターンを終了する。

「さ、流石に十代に打つ手はないだろ。もう諦めるよな?」

国崎さんがそう漏らすのも不思議じゃない。三沢のターンで十代の場はがら空き。おまけに手札もたった一枚ときた。対して三沢はLPこそもう500を切っているが、罨さえあれば攻撃力が3000まで跳ね上がるリトマスの死の剣士が残っている。

おそらくあの伏せカードはこの流れだと罨カード。十代がモンスタアを出したとしても、リトマスの死の剣士を強化して返り討ちにするという腹積もりだろう。

まさしく絶体絶命大ピンチ。常人なら顔がこわばり絶望の影が差すだろう。だが、
「楽しいな三沢。こんなワクワクするデュエルはないぜ!」

「アイツ……笑ってやがる」

十代はそんな程度では絶望なんてしない。

「俺の全力を傾けた七番目のデツキだ。お前も全てを賭けてこいつ!」
「おうっ! 俺の全てを賭けて……ドローっ!」

その後十代は怒涛の追い上げを見せた。リトマスの死の剣士は戦闘で倒せないモンスタア。だが、その特性上どうしても場に罨がなくてはならない。そこを突き、『ワイルドマン』と『サイクロンブーメラン』のコンボを発動!

自分がダメージを受けることを覚悟の上で攻撃を仕掛け、効果により場の魔法・罨を全て破壊。効果ダメージを与えることでギリギリ三沢のライフを削り切ったのだ。

デュエル終了。十代WIN!

「やった! 良いぞ十代! アイツ勝ちやがった!」

国崎さんの喜びようは凄いものだった。拳を握りしめ、大きくガッツポーズを決める様は、とてもさつききたかがデュエルなどと言いつ放った人とは思えない。

「へえ、大した喜びようですね。さつきまであんなこと言つてたのに」

「うぐつ! そ、それはだな」

「気まぐれで見たたかがデュエルで? そういえば昨日はデュエルなんて好きじゃないとかも言つてましたよねえ?」

俺はニヤニヤと笑いながら国崎さんを追い込む。……ヤバい。これ結構楽しい。デイーが俺をおちよくる気持ちに少しだけ分かるな。

「ぐつ……分かつた! 分かつたつて! ……負けたよ。悪かつた。アイツらがあんなに熱くなれるデュエルを貶して」

そう言うのと、国崎さんはどこか憑き物が落ちたような落ち着いた表情で俺に頭を下げた。

よく分からないが、今のデュエルを見て国崎さんの中でも何かしら思う所があつたの

だろう。まあさつきまでの顔よりかはマシになったから良かった。
さてと。じゃあそろそろ十代のお祝いに行くとするか！

ジャーナリストとプロデュエリスト

「勝者。オシリスレッド遊城十代！ おめでとう。君が我がデュエルアカデミアの代表だ」

「やった〜！ アニキ！」

「おめでとう！」

鮫島校長の代表宣言を聞くや否や、翔と隼人がなんと観客席の柵を乗り越えて十代の下へ駆け寄る。俺と国崎さんの場所はやや高い場所にあるのでその手は使えない。普通に回っていくとするか。

「負けたぜ。また一から計算し直した。いつかお前を超える八番目のデッキを作れるようにな」

「おう！ 楽しみにしてるぜ！ ガッチャー！」

そう対戦者同士でもどこか通じ合った会話をしている中、俺はどうせなら一緒に行こうと国崎さんを誘って通路へ出る。すると、

「待ちなさいっ！ アナタ一体何者なの？」

「つと。どうやら俺をお呼びらしい」

おっ!? 後ろから明日香に呼び止められた。いや。この場合はどちらかという国崎さんの方かな。

どうやら勝負で人の目が集まるのを逆手に取り、この場所に来るまで国崎さんもこつそり動いていたらしい。国崎さんは軽く振り向くと、両手をポケットに突っ込んで目を閉じる。

「俺も思い出した。昔はこれでもデュエリストを目指して、世界を渡り歩いたこともあったんだ。しかし世界の強豪達の前に敗れ、夢を捨てて、今じゃジャーナリストとは名ばかり。金になれば汚いことも平気でやった」

「……何を言ってる」

急に始まった一見関係のなさそうな話に明日香は困惑する。俺もよく分からない。ただ、少なくとも国崎さんはふざけている訳でも誤魔化そうとしているわけでもなさそうだった。

「だけど、アイツらのデュエルを見て、アイツらがあれだけ熱くなれるデュエルを、夢を諦めて逃げ出した俺に取り上げる権利は無いって気づいた。そして俺も、もう一度やってみたいとなった。……今度こそ、本気の正義の追求ってやつをさ」

そこで国崎さんはポケットから、何かのチップのようなものを取り出した。どうやら

この学園で掴んだ情報を入れている物らしい。

「こいつを記事にするのはやめだ。だが、俺なりに真実を調べてみる。何かあつたら知らせるよ」

そうして軽く手を上げると、国崎さんはそのまま歩いていく。おっと。俺も行かないきや。

「まあそういうことらしい。少なくとも今の国崎さんは悪い人じゃないよ。……俺達は十代のお祝いに行くけど明日香はどうする？」

「……………そうね。あとで一度顔を見せに行くわ」

まだ国崎さんに対して警戒しているようだけど、明日香も少し考えてそう返した。よし。それじゃあ国崎さんを追うとするか。

その次の日の夜。オシリスレッドの食堂にて、レッドの生徒達は普段より数段豪華な夕食に目を輝かせながら、今か今かとその時を待ちわびていた。

そして、いよいよその時を告げるために寮長である大徳寺先生が食堂に現れる。

「お待たせしましたにや〜皆さん。あんまり長々と話すのもあれなので早速始めますか
にや。ゴホン。……じゃあ、この度めでたく学園代表に選ばれた十代君を祝って、乾

杯っ！」

「「カンパ〜イ!!!」」

大徳寺先生の音頭と共に、各自でジュースを高々と上げて一気に口に含み、そのまま各自でご馳走に食らいついた。

「ぷは〜っ！ やっぱり相変わらず美味え〜なこのジュース！」

「ホントホント。一体どこのメーカーなんだろうね？」

「いや、それは今は良いじゃないか。まあもつと飲め飲め！ それと食べる」

翔が疑問に思い始めたので慌ててジュースのお代わりを出す。深く突っ込まれると面倒だからな。幻想体の事を知っている十代もナハハと誤魔化すように笑っている。

「だけど、よくこんなご馳走を用意できたな遊児。しかもレッド寮の全員分……ジュースの方は分かるんだけど」

「うん。すっごく美味しいんだな！」

夕食に十代も隼人も舌鼓を打っている。そんな大げさなことじゃないんだけどな。ジュースはウエルチアースに頼んで出してもらったから、手間はかかったけど出費はないんだよな。それに食事の方は、

「全部俺が用意したってわけじゃないさ。……まあちよつとした慰謝料代わりってやつだ」

元々十代が勝ったことで何かお祝いしようと思っていたのだが、そこで先日の取巻達の事を思い出した。

考えてみれば未遂で終わったとはいえ、取巻達のやろうとしたことは代表候補への妨害行為だ。クロノス先生が知ったら間違いなく大目玉。場合によっては処罰も考えられる。

かと言ってこっちとしてもそこまで大事にしたくはない。個人的にはあれだけデュエルでぶつ飛ばしたからそれなりに気も晴れたし、下手に十代が知って気をまわされても面倒だ。

なのでこのことを公にしない代わりに、大徳寺先生を通してアイツらには今回のパーティーに出費をしてもらった。と言っても食事は元々ブルー寮で出される物を格安で流しているだけで、多少パーティー用で量こそ多いが逆に言えばそれだけだ。

元々支給DPの多いブルー生徒が何人かで割り勘すれば、そこまでの負担にはならない。クロノス先生にバレルよりはまだマシだと思う。実際その提案をしたら向こうはそれで了承したからな。丸く収まるようで何よりだ。

……ちなみに俺が大徳寺先生から貰う特別DPはまた別だ。これを聞いた大徳寺先生が苦笑いしてたがそれはそれ。これはこれだ。

「それにしても、国崎さんがまさかこの島を出ちやうなんてね」

「まあな。だけど、家の事情じゃあな。隼人の時と違って本人の意思だし、それに昨日は島を出る前にお祝いに来てくれたじゃないか」

「国崎さんは昨日の夜に島を出立した。出来れば今日のパーティーに出席してほしかったが、あまり長くいるとマズいとのことだ。勝手に島に来ている訳だしな。」

「なので昨日十代のデュエルが終わってすぐ、俺と一緒に祝いに行つてこの島を出ることを一緒に話している。ジャーナリスト云々はマズいので、あくまで家の都合で学校を辞めるといふ筋書きだ。」

「そういえば十代。あの時国崎さんと何を話してたんだ？　ちよつとの間二人で話してただろ」

「おう！　聞いてくれよ！　実は国崎のおっさんもHERO使いだったらしくてさ。使つてたカードの話で盛り上がったんだ！」

「えっ!?　あの人もHERO使いだったの？　ああ。だからスカイスクレイパーのカードを見てどこか色々懐かしむような顔を。」

「なんか知り合いにもHERO使いが居るらしくてさ。向こうの都合が合えばまたいつか一緒に顔を出すつてよ」

「へえ〜。どんな人なんだろうな？」

「そこまでは聞けなかった。ただ国崎さん曰く知つている中で最高のHERO使いらしい」

い。へへっ！　どんな人かワクワクするな！」

十代はそう言つて楽しそうに笑つている。仲良くなつて良かった。国崎さんもなんだかんだ十代のデュエルを見てどこかすっきりした顔をしていたしな。

「さて十代。代表に選ばれたけどそれはゴールじゃなくてあくまでもスタート。分かつてるよな？」

「ああ。学園友好デュエルで向こうからどんな強い奴が出てくるのか今から楽しみだぜ！」

わざわざ俺が釘を刺す必要もなかったな。十代は必要以上に緩むことも緊張することもない。普段通りの自然体だ。

「分かつてるなら良いんだ。さあ！　今はこのパーティーを楽しもうぜ」

「おうよ！　あつ!?　隼人！　それ俺が目をつけてた奴っ！」

「早い者勝ちなんだな！　それより早く食べないとなくなるぞ」

隼人の言葉に周囲を見ると、もう全体の半分近くがなくなつていゝ。これは食べ盛りの高校生の食いつぷりをちよつと甘く見ていたらしい。もっと用意しておけば良かったか。

「ヤベっ！　こうしちゃいられねえ。食うぞっ！」

「げっ!?　アニキそれ僕の確保した奴っすよ!?　食べちゃダメっすよ!」

さて。俺もこの仁義なき戦いクダ食に参加するのでしょうか。待てよお前ら！ 俺も食うぞ
 ！



「……ふう。ここまで来ればもう追われることもないか」

俺は力なく部屋のベッドに横たわり大きく息を吐いた。すっかり夜も更けてしまっ
 たな。

ここまで来るのに相当な手間がかかった。デュエルアカデミアに潜入した時も難し
 かったが、脱出も当然同じくらいに難しい。

泳いで出るのは海流の関係で出来ず、今回は定期船に密航するという手段を取った。
 乗客自体はそこそ居るがチェックが厳しく、常に隠れながらだったので本土に辿り着
 くまで気が休まらなかったのだ。

念のため尾行やなんかを着いていないことを確認し、デュエルアカデミアに行く前に
 予約しておいた宿に入ってやつと落ち着ける。

「……やれやれ。今回は完全な赤字だぜ」

俺はポケットのチップを軽く手のひらで弄ぶ。

特ダネらしきものは手に入ったが、これを記事にするのは憚られる。以前の自分なら

迷わず金のために記事にしていたらうが、十代達の本気のデュエルを見た後ではそんな気にはなれなかった。

「学園で行方不明になった奴らを留学扱いにして隠蔽している可能性……か」

俺が学園で調べた所によると、少なくとも数年前から毎年それなりの人数が留学している。だがこの学園ではそこまで大規模な留学制度は存在しない。

本当に留学しているかどうかの確認はまだこれからだが、俺のジャーナリストの勘が正しければ本当に留学していそうなのはごく僅か。それ以外はどうにもきな臭い。

これはどう考えても俺の手に余る。あまり深く突っ込みすぎればヤバい橋を渡ることもにもなりかねない。だが、

「俺なりに調べてみるって言っちゃまったからな。金にはならねえが、仕事の合間に確認ぐらいはして連絡してやるとするか。連絡先も交換したし」

そうと決まれば善は急げだ。少し休んだら早速取り掛からなければ。……そうだ！

俺は携帯を手に取り、少しでも躊躇しながらもある番号を打ち込む。それは俺がまだデュエリストを目指していた頃の友人の番号。

抜群のデュエルセンスとどんな時でもデュエルを楽しむ良い意味での余裕を持ち、数年ほど謎の病気で入院さえしていなければ、所属リーグこそ違えど現チャンピオンであるDDと並び称されたいらう男。

俺が挫折して疎遠になっていたが、十代にああ言ったし一度久しぶりに連絡してみても良いかもしれない。忙しくて逢えないと言われたらそれまでだが、話の切っ掛けぐらいにはなるだろう。

そして数度のコール音の後に聞こえてきたのは、随分と懐かしい友人の声。

『もしもし。そっちから連絡してくるなんて珍しいじゃないか国崎。久しぶりだな』

「ああ。久しぶり！……いきなりで悪いが、近いうちに逢えないか？ プロデュエリストとして忙しいならまた出直すが」

『おいおい。オレを舐めてくれるなよ！ 忙しい程度で友達の誘いを断るもんか。……ちよつと待つててくれ。早速姉さんと相談してスケジュール調整をして折り返すから』

「ああ。ありがとよ紅葉！」

俺の友人にして、知る限りで最高のHERO使い。元世界チャンプ響紅葉は、以前と変わらずどこか懐っこい態度で電話口で笑った。

クロノス先生危うし！ 迫る罰と審判の時



「つたく。あの遊城十代が、我が校の代表だナンクテ。あり得ないノクネ」

クロノス教諭は自身の気に入らないことが起きつつある状況に憤慨していた。

先日の学園代表決定戦。生粋のエリート第一主義である彼は、本音を言えば優秀とは言えイエローの生徒である三沢を推薦したくはなかった。

しかしブルーは二、三年生ならいざ知らず、今年の一年生はいささか不作と言って良者達ばかり。確かに全体的に優秀ではあるが、イマイチあのにつきドロツプアウトボーイに対抗出来る者が居ない。

あるいは、ランク入れ替え戦の際にどこか吹っ切れたようだった万丈目なら心置きなく推薦できたのだが、肝心のその万丈目は無断で島を出て現在半ば退学扱い。これではどうしようもない。

仕方なく苦渋の選択で、じきにブルーへ昇格する可能性が高いと自らを納得させて三沢を推薦したものの、それも十代に敗れてしまった。

「ホントに決まっちゃった？ ノンノンノンノン！ まだ奥の手があるノ〜ネ」
クロノス教諭はその奥の手である生徒を連れにある場所へ向かっていた。

その生徒の名は茂木もけ夫。数年前はブルーの生徒の中でも群を抜いて優秀な生徒だったが、ある時を境に彼の周りで不思議なことが起き始めた。

何故か彼とデュエルをした生徒が次々にやる気、あるいは闘志と言っても良いがそれを失い、遂には学園を辞める者まで出始めたのだ。

この異常事態に学園側も調査を開始するが、しかし根本的な原因は結局解明できなかった。彼の所持しているカードの精霊の力などと言う眉唾な話まで飛び交う始末だが、クロノス教諭はもちろんそんなオカルトは信じていない。

ただ、茂木のその力は彼に近寄らなければ発動せず、また特殊な防護服を身に付ければ防ぐことも出来た。なので学園側は茂木の力を研究するとともに、他の生徒とは別の専用寮を建ててそこに隔離していた。

クロノスはその茂木の力に目を付けた。茂木を十代と戦わせるように仕向けようと考えていたのだ。デュエル中に十代がやる気をなくせば、それを口実に代表をまた改めて決める口実になる。

「私にこの手を使わせるだナン〜テ。すべてあのドロップアウトボーイのせいなの〜ネ」

ただし、出来れば使いたくない奥の手であったことは事実。いくつか理由があるが、その一つは下手をすれば周囲に被害が拡大する可能性があるため。なので使いたくない奥の手ではあったが、ことこうなってしまうては仕方がない。

そうしてブックサ言いつつクロノス教諭は茂木の寮の入り口が隠されている場所に向かった。だが、

「しかし、なんで入り口がこんな所にあるノ〜ネ？」

これが使いたくなかった二つ目の理由。なんと入り口が、学園内で飼われている鶏小屋に隠されているのだから厄介だ。

それでも貴族の流れを汲むメデイチ家の人間が、何が悲しくて鶏小屋なんぞに乗り込まなければならぬのか。おまけにその鶏達は気性が荒く、以前ここに来た時には襲い掛かってきた。中でも黄金の卵を産む金色の鶏は特に厄介だ。頭を重点的に狙ってくるし。

それもこれもやっぱりあのドロップアウトボーイのせいだと筋違いの怒りを沸々と滾らせながら、クロノス教諭は鶏小屋の中に入る。すると、

「『コケ？』」

一斉に中で思い思いに動いていた鶏達が、闖入者であるクロノス教諭の方をじつと見る。そして一拍の後に、

「「コケエ〜!!」」

黄金の毛並みの鶏の合図とともに、鶏達は一斉に突撃を開始する。

「痛っ！ 痛い！ 頭だけはやめテ〜ノっ！」

執拗に何故か頭頂部を突きまくる鶏達に追い回されながら、何とか隠された入り口を開けるクロノス教諭。なおも纏わりついてくる鶏を一羽一羽外に放り出してから、どうにか扉を閉めてホッと一息吐く。

ちなみにここは正確には入り口ではなくその一つ手前。茂木と会うための準備をするための場所だ。

「ああもう。帰りもあの鶏達に襲われるかと思うとたまったもんじやないノ〜ネ。……おっ！ これナノ〜ネ！」

クロノス教諭はその部屋に置かれていた防護服を一着手に取り素早く身に付ける。これなしで会えば、それだけで下手をすると茂木の力の影響を受けかねない。

「さて、では……んなっ!？」

コツコツ。コツコツ。

まるで宇宙服のような姿になったクロノス教諭だが、頭を覆う透明な強化プラスチックをコツコツと何かが突く音に顔をしかめる。まださっきの鶏どもが残っていたか？ だが一羽くらいなら返り討ちにするノ〜ネ。そう思っただけを見ると、

「……なんなの？ネこれは？」

それは小鳥だった。

手に乗るサイズでつぶらな瞳の白い小鳥。何故か腹部だけ血のような赤い模様をしているが、それ以外はいたって可愛らしい小鳥だ。明らかに鶏ではない。

「どこかで見たことがあるような無いような……まあ良いでしょう。今は構っている暇ないの？ネ」

さつきからずっと突き倒しているが、この強化プラスチックはそんな程度で碎けるよ
うなものではない。なんで鶏小屋にこんなものが紛れ込んでいたかは知らないが、今は
放っておいても良いだろう。

クロノス教諭はそのままずんずんと進んでいった。この先に眠る災厄を引つ張り出
すために。

それを小鳥はパタパタと音を立てながら着いて行った。この罪人に罰を与えるため
に。



「うくん。どうしよう。こいつを入れるならこいつは要らないし、こいつを入れたら……」

間近に迫った学園対抗戦に向け、十代も教室で自分のデッキをもう一度組み直していた……のだけど、

「ここはウォータードラゴンを入れよう。炎属性には圧倒的に有利だ」

「エトワール・サイバーも入れるべきよ！ 直接攻撃の破壊力が違うわ」

「デス・コアラも良いんだなあ！」

「あのお。僕のパワーボンドも」

「ああもうっ！ うるさいうるさいっ！」

横から事あるごとに皆して自分のおススメをぶっこもうとしてくるので、流石の十代も辟易していた。

「ハハっ！ モテモテだな十代！」

「そんなこと言ってる場合かよっ！ もう邪魔すんなって」

「何も邪魔している訳じゃない。今度のデュエルは学園の名誉を賭けた戦い。俺達も一緒に戦うつもりで言ってるんだ」

苛立つ十代に対し、三沢は大真面目にそう返す。なるほど。その言葉はもつともだ。学園対抗戦となれば、代表選手こそ一人だがそのバックアップなども含めて皆で戦うっ

ていうのは筋が通ってる。……ただ、

「冗談じゃない。学園のためなんかにデュエルするかよ。俺は楽しむためにやってるんだ」

「……まあ十代ならその方が良いかもな。むしろ下手にそういう重圧をかけた方がマズいんじゃないか？」

「おおっ！ 分かってくれたか！ 流石遊児だ」

十代がなんか喜んでるが、これは単に俺個人の意見ってだけだからな。むしろ何か背負っている奴の方が強くなる場合もある。十代の場合は自由にさせた方が良かった話だ。

「……って、そういう遊児は何してるんだ？」

「うん？ ああ。今お前のデッキに合った幻想体のカードをリストアップしてるんだ。せっかくだから俺のもついでに二、三枚くらい入れてもらおうかなあ〜！ ……なくんて」

「げっ!! お前もかよっ!! これじゃあ落ち着いてデッキも組めないよっ!!」

冗談だと言おうとしたのに、十代は遂にこの場からダッシュで逃げ出してしまった。まったく話は最後まで聞けっつての！

それを追って走り出す翔達。手に手にカードを持っていることからまだ諦めていな

いらしい。……やれやれ。適当にデツキに入れたって、相性が悪ければむしろ戦力ダウンしかねないってのに。

「どうしたもんかねえ。俺もこのバカ騒ぎに加わるべきか、ここはさっさと寮に戻るべきか」

個人的にはバカ騒ぎに加わりたい。なんだかんだ楽しそうだしな。だけどこの調子だと、下手したら十代がデツキを組めずに寮に帰ってくるなんてこともあり得る。

おそらくこの学園対抗戦はアニメで言うならちよつとした山場だ。この前の三沢と一件も踏まえて、おそらく一連のシリーズか何かだと思う。そんな大事の時にまともにデツキが組めないとあつてはシャレにならない。

まあそこまでのことにはならないと思うが、俺が居ることによる影響が全く出ないとは限らないしな。

「……よし。じゃあここはさっさと部屋に」

『お〜い久城君！ ちよつと問題発生だよ！』

俺が寮に戻ろうと荷物を纏めた時、全然深刻そうじゃない口調でデイーがふよふよと飛んできた。

「……もうこの流れは分かっているからな。どうせまた俺が居ない間に幻想体がまた精霊化したんだろ？」

『流石に慣れてきたね。まあぶっちゃけるとそうんだけどさ』

「デーがどこかつまらなさそうな声で言う。こいつは俺をおちよくるのが趣味みたいな奴だからな。だがこつちもこれまで伊達に何回も驚かされている訳ではない。」

「それで？ 出てきたのは誰だ？ この前大鳥が出てきたばかりだからそうものすごいのは出てこないと思うが」

『うん。それなんだけど』

そこで少し間をおいて、デーはとんでもないことを言い出した。

『出てきたのは二体。『幻想体 三鳥 罰鳥』と『幻想体 三鳥 審判鳥』。どうやらこの前大鳥が出てきたことから連鎖的に出てきたみたいだ』

……なんで二体同時なんだよコンチキショウっ！

『あと二体とも悪や罪に反応する性質があつてね。精霊化するなりふらつとどこかへ行つちやつてさ。今頃この学園の悪い人の所に向かつているんじゃないかな？』



「ムッフッフ。これであのドロップアウトボーイともおさらばナノ〜ネー！」

首尾よく茂木の興味を引き、十代がよく来るお気に入り場所である本棟の屋上にて

待ち構えさせることに成功したクロノス教諭。

あとはどうやって上手く鉢合わせさせようか考えていたところ、丁度向こうからやってきたので茂木がデュエルを申し込む。

自分の考えた筋書き通りに進んでいるのを陰から見てもくそ笑むクロノス教諭。そのクロノス教諭に罰を与えるべく、強化プラスチック越しに突っつき続けている小鳥と罰鳥。

そして、その一人と一羽の後ろに、そつともう一羽は佇んでいた。

白い包帯のような何かでグルグルと覆い、両側面からは先だけ赤い白い羽が伸びている頭部。今にもぼつきりと折れそうな細い首。不気味なほどに痩せこけたダチヨウのような身体。

目の前のモノが罪人か、そうでないか。それだけを確かめるべく、天秤を持つ三鳥の一羽は佇んでいた。

すでに天秤は傾いているというのに。

もけもけパニック! 語られる三鳥の過去



「ああもうっ! なんてこうなるんだよっ!」

『あつはっは! いやあ面白くなってきたね!』

「どこがだよっ!」

俺は頭を掻きむしりながら横で軽口を叩くディーに文句をぶつける。こいつは面白がっているが、罰鳥に審判鳥と二体の幻想体が同時に出たとあつてはもう一刻の猶予もない。

と言つてもそれぞれのカードの能力を考えると、まだ罰鳥の方はこちらから手を出さなければ危険性は低いだらう。問題なのは審判鳥の方だ。

審判鳥は効果で特定の条件を満たしたカードを纏めて破壊する範囲攻撃持ち。それが本体にも反映されているとしたらどんな具合になるか予想できない。

おまけにカードとしてのレベルがディーの前に言っていたリスクレベルに比例するので、罰鳥はともかく審判鳥は最低でも大鳥と同格かそれ以上。つまり最低でもWAW以上ということになる。早く見つけ出さないと。

しかし探すにしたって当てがない。悪や罪に反応すると急に言われても困るし、闇雲に探すにはこの島は広すぎる。

「デイー。その二体の情報はなんかあるか？ さつき悪や罪に反応するとか言つてたけど、それだけじゃなんとも」

『……そうだね。流石に二体相手はちよつと大変だろうし、少しだけ説明がてらバックボーンを話すとしようか。罰鳥と審判鳥。それとこの前出てきた大鳥は、それぞれ同じ場所に棲んでいた幻想体なんだ』

口でも滑らせたなら儲けものつもりだったのだが、デイーはそこでほんの少しだけ言葉を切ると、僅かに語り口を変えて話し出した。まるで物語でも読み聞かせるかのよう

に。

『とある深くて暗い森。通称黒き森と呼ばれる場所にその三匹は棲んでいた。三匹はその森を愛し、そして森に棲む生き物達を守るために活動していた』

黒き森か。……なるほど。つまりカードの深く暗い森はその再現。大鳥が最初に精霊化した時にこつちの森に反応したのもそれ繋がりがか。

『大鳥は森のあちこちを見回り、森の秩序を乱す悪を見つける。そして審判鳥がその者の罪を持っている黄金の天秤で見極め、罰鳥がその罪の分だけの罰を与える。三匹はそうして力を合わせて森の秩序を守ってきた。だけど、いつの日からか少しずつ歪みが生

じ始めた』

「歪み?」

どう考えてもあまり好意的ではないその言葉に、俺はたまらず聞き返す。

『そう。大鳥は審判鳥の目を借り、さらに自らの羽を材料にしてランタンを作ることで、昼夜を問わず見回りが可能になった。だけどそれはいつの間にか森に棲むもの全ての監視へと繋がっていく。また審判鳥は自らの目を封じることと私情を捨てて天秤により悪を見定めたけど、いつからかその天秤は最初からどちらかに傾くようになり公平であるとは言えなくなった』

デイーは静かに、それでいてはつきりと通る言葉を口にする。

『そして罰鳥は、どんな重い罪でも罰を与えられるように自身の身体そのものをクチバシへと変えられるようになった。だけどその大きすぎるクチバシは、些細な罪であつても度を越した罰を下すようになった。結果として森の秩序こそ保たれていたけど、行き過ぎた秩序がもたらすのは決して幸福だけじゃない』

それは願いの成れの果て。三羽の行動の始まりは間違いなく善だったのだろう。だけどいつの間にか、どこか歪んでいったのだ。自分達では気が付けないほどに緩やかに、それでいて致命的に。

『……とまあ今話せるのはこんな所かな。少しは参考になったかい?』

「ああ。少しだけど当てが出来た。……じゃあ早速行くとするか」

俺は荷物を持って立ち上がり、そのまま一目散に走り出す。

『お〜い待っておくれよ！ 当てって一体どこに向かう気だい？』

「決まってる。大鳥の所だ！ 大鳥と同じ理由で精霊化したのなら、罰鳥も審判鳥もあの森に向かった可能性が高い。それにやはりこういうのは同じ森の仲間に尋ねるのが一番だろ！」

あと大鳥を介して話し合いが出来るかもしれないしな。そういった打算もあり、俺は大鳥の見回っている森を目指して走り出した。

「大鳥っ！ 近くに居るなら出てきてくれっ！」

森の入り口に着いた俺は、大声でその声を張り上げながら中に入る。カードがあれば幻想体呼び出せるのだが、あいにく今の手持ちのデッキには三鳥はどれも入っていない。

それなら常に予備も含めて身に付けていれば良いという話だが、いくら何でも四六時中それでは精霊化している幻想体達の方も困ってしまう。幻想体が誰にも見られずに実体化できるのはあの部屋の中ぐらいだからな。

なので時折デッキを組みかえたあとで部屋にカードを残し、周囲に迷惑をかけない程度であれば好きに実体化させているのが今回は裏目に出たみたいだ。WAWクラスが相手じゃたとえ抑え込めても周囲に被害が出るからな。立ち去るのを黙って見送るくらいしかできなかつたのだろう。

「部屋に残してきた葬儀さんとレティシアの事だから、今頃カードを届けにこつちへ向かってきている可能性もあるけど、下手すると間に合わないかもな。……どうするか」俺は今の手持ちを確認する。デッキの中で精霊化出来るのは罪善さん、テディ、ウエルチアースの三枚か。冷静で頼りになる葬儀さんと、汎用性の高いヘルパー。大鳥の時みたいに落ち着かせてくれそうなレティシアが居ないのはキツイな。

カタカタ! ガシツ!

俺の考えていたことを察するように、罪善さんとテディが実体化する。罪善さんは温かな光を放ちながらふわりと浮かび、テディは何故か俺の背中によじ登ってそのまましがみつく。頼むからうつつかり力を入れすぎないでくれよ! 複雑骨折しかねないから。

最悪戦うことになった場合、ウエルチアースはどう見ても戦闘向きじゃないから実質戦えるのはこの罪善さんとテディのみ。だけどそれでも真正面からでは勝ち目は薄い。レベル差もあるし。

「……となるとやはり大鳥が居ないとどうにもならないか。お〜い大鳥〜! 大と……

うわっ!」

そこで急に目の前の茂みがガサゴソと音を立てる。そして、
グルアッ?

自分を呼んだかとはかりに大鳥が顔を茂みから覗かせた。相変わらず幾つもの瞳に凝視されるのは慣れないが、茂みから顔とランタンだけ出す様子は意外にユーモラスだ。

先ほどのデイーの話を思い出して、大鳥を見ると何とも言えない気持ちになるが、今はそれどころじゃないと考えを振り払う。

『おや居たね! これは案外大鳥の方も久城君が近づいてきているのに気が付いて、向こうから来てくれた感じかな?』

「それだと助かるよ。大鳥。一つ聞きたいんだけど、この森に罰鳥と審判鳥が来なかったか?」

場合によってはこの近くに居るかもしれない。そう思つて緊張しながら訪ねたのだが、大鳥はふるふると首を横に振つた。大鳥ならこの森に入っただけで大なり小なり反応するだろうから、本当に二体はこの森に来ていないらしい。

「そつか。……だけどおかしいな。この森じゃないとすると、二体は何が目的なんだ?」
また良くないモノが出てそれに反応したということもあり得たが、それじゃないとな

るといよいよもって手詰まりだ。

『ふむふむ。久城君。どうやら大鳥が何か伝えたいみたいだよ』

こうなったら一度自室まで戻ってカードを取ってくださる方が良いかと考えていた所、デイーの言う通り大鳥が何か伝えようとしていた。そのクチバシでさつきから俺の服の袖を引っ張っている。

「……もしかして、大鳥には他の二体の場所が分かるのか?」

一縷の望みを込めてそう尋ねると、なんと大鳥はこくりと頷く。……あつ?! 俺はさつきのデイーの説明を思い出す。

説明の中で、大鳥は審判鳥の目を借りたと言っていた。それが比喻ではなく物理的にそうだったとしたら、大鳥と審判鳥は肉体的な繋がりにあることになる。

元々大鳥自身が森全体を監視するほど察知能力が高い訳で、さらに肉体的な繋がりにあるとすればそれを頼りに審判鳥を探し当てることも可能かもしれない。

また審判鳥と罰鳥は連鎖的に精霊化したらしいから、片方が居る所にもう片方も居る可能性も大いにある。つまり罰鳥も一緒に居るかもしれない。

「じゃあ、大鳥。他の二体の所まで案内してくれないか?」

「グルア!」

大鳥はそう一声低い唸り声を返すと、前の時と同じようにランタンを翳してズシンズ

シンと森の入り口に向けて歩き始めた。これで何とか……って!!　大鳥ストップストゥップ!!　騒ぎになるからせめて実体化だけは解いてくれっ!!

俺は慌てて罪善さんとテディに精霊状態に戻ってもらい大鳥を追いかけた。

大鳥は森の外に出た瞬間実体化を解き、半透明の精霊状態でスツと宙を滑るように進んでいった。この状態だと足音が響かないから少しホツとする。

だけど大鳥が向かっていく場所を見て俺は驚いた。なにせそれは俺がさっきまで居たデュエルアカデミア本棟だったのだから。

行き来する生徒達の目に留まることもなく、大鳥は迷わず突き進んでいく。俺に配慮してか最短距離ではなく、ちゃんと階段や通路に沿って進んでくれるのはありがたいな。

「灯台下暗しとはこういうことかね?」

『そうかもしれない。……というより、真上が見えないって感じかな』

なんとか追いかけていく内に、どんどん階段を上っていつの間にか本棟の屋上まで辿り着いた。そして、

「……これは一体どういう状況だ?」

俺がついそう言ってしまったのは誰も責められないと思う。何故ならそこに広がっていたのは、

「「もけもけ〜！」」

完全にだらけ切ってそう連呼する翔、三沢、明日香の三人と、気持ち良さそうに寝息を立てている隼人。そしてその面子を背にして、十代が誰かとデュエルしている様子だったのだから。

もけもけパニック！ 重すぎる罰には異議申し立てを

……いやホントに何がどうなってるんだこの状況は？ 大鳥の先導について屋上まで来たものの、どう考えてもよく分からない。

十代がハネクリボーを傍らに置いて誰かとデュエルしている。それはまああのデュエル大好き人間のことだから、どこで誰とデュエルしてもおかしくないので別に良い。

問題なのは、さつき十代を追っていったはずの翔達の様子が明らかにおかしいということだ。なんか皆してだらけ切った顔をしているし、隼人に至ってはイビキをかいて爆睡している。

「もけもけ〜」

あと何かさつきから変なことブツブツ言ってるんだけど。もけもけってアレか？ あの何とも言えないゆるキャラみたいな絵柄のカードか？ 確かに十代と戦っている相手の場には、もけもけを強化する永続魔法『怒れるもけもけ』が発動してるけど。

他にも低レベルモンスターが破壊されたら別の低レベルをデツキから引つ張つてくる『人海戦術』と、その発動条件を満たすモンスター『はにわ』のカードも場に出され

ている。これはもろにもけもけを出しますよって流れだ。……あるいはもう出したのかもれないが。

「一体どうなってるんだこりゃ? おい十代! 何があつた?」

「遊児かつ! それが俺にもよく分からないんだ。皆して急にこんなになつちまつて」「もけけのけくナノくネ!」

俺が必死に状況を整理しようとしていると、そこへ特徴的な語尾の言葉と共にクロノス先生が現れた。それもいつものどこか貴族っぽい服装ではなく、まるで映画にでも出てきそうな宇宙服か防護服のような恰好をしている。顔の部分なんか透明なヘルメットを被ってるしな。

「驚きましたか? ドロップアウトボーイ遊城十代。それと……オウ! オシリスレツドにしては成績優秀なシニョール久城ではありませんか!」

にしてはは余計だよクロノス先生っ! そう抗議しようとした俺だが、クロノス先生のおすぐ後ろに目を向けて一瞬息が詰まる。

「……こんにちはクロノス先生。あの、いくつか伺いたいのですがまず一つ。……その鳥は?」

「鳥? ああコイツですか? 先ほどから何故か私を突こうとして離れようとしません。しかし、この通りこの強化プラスチックに阻まれて手も足も出ないノくネ」

なんと見覚えのある姿の小鳥が、普通に実体化してさつきからクロノス先生を突きつけていたのだ。プラスチックに阻まれようと何度でも突き続けるその様子は、何が何でも当ててやるぞと言わんばかりだ。そして、

グルルルル。

「ああ。分かつてる。罰鳥もそうだけど、さらにその後ろが明らかにヤバイ」

大鳥が精霊状態ではあるが軽く唸り声を上げて警戒する。その視線の先に居るのは、向こうも半透明ではあるものの、その状態でも危険だと分かるほどにただならぬ威圧感を出している鳥のような何か。あの姿にも見覚えがある。あれが審判鳥か。

審判鳥は先ほどからずっとクロノス先生の方を向いている。その手にはきらりと輝く黄金の天秤。ただ不思議な事に、天秤はさつきから何も乗せていないのに片方に傾いている。

「なあ遊児。あれって……」

「……ああ。さつき勝手に精霊化して探していたんだが、まさかこんな所に居たなんて」
十代が罰鳥達を見てこっそり話しかけてくる。幻想体二体はいくら何でも十代も見過ごせないのだろう。……それにしても、アイツらは確か悪や罪に反応するんじゃないのか？ それでなんでクロノス先生に？

「デイーを問い詰めようとしたが、いつの間にか姿を消していた。ここは人が多いから

な。

「……? 何をコソコソ話してるのですかアナタ達は? ……まあ良いでしょう。話を戻しましょうか。アナタ達の後ろの生徒達がこうなったこと。それこそが茂木もけ夫の脱力デュエルの力ナノ〜ネ」

「脱力デュエル?」

なんかよく分からない単語が飛び出してきた。ひとまず動きのない幻想体達はおいておいて、何故こうなったのかクロノス先生の話の聞いてみるか。

「そう。シニョール茂木は三年前、学園の誇る優秀なデュエリストだったノ〜ネ。相手の戦術、伏せカードの読み。全てにおいて彼は天才的だったノ〜ネ。しかも、ある日を境にシニョール茂木のデュエルが変わってしまったノ〜ネ」

『もけもけ〜』

十代と戦っている相手、茂木もけ夫というらしいが、よく見たら傍らにもけもけが半透明で浮かんでいる。……もしかしてあれも精霊か?

「よく分からないんだけど、もけもけと出会ってからデュエルをすると、皆こうなっちゃうんだよね」

茂木はそう言いながらクロノス先生の後ろ、静かに佇んでいる審判鳥をチラチラと見ている。やっぱり向こうも気付いてるよ。精霊が見えるってことはこの茂木もアニメの重要キャラなのかね？

それはともかくとしてクロノス先生の話を要約すると、茂木とデュエルする者は誰もかれもやる気をなくし、場合によっては退学者まで出る始末。

学園側も調査したが結局原因は分からず、対処として茂木を彼専用の寮に隔離したのだという。

「酷いことをしやがる」

「ノン。何を言うノ〜ネ。そこは天国。茂木もけ夫だけの超豪華施設ノ〜ネ」

「……物は言いようですねクロノス先生。どんなに良い待遇でも、周りとの関係を断たれるというなら俺はお断りしますが」

クロノス先生はそんなことを言っているが、どう言い繕っても人一人を隔離していることに変わりはない。割と人権とかに引っかけりそうな所業だが、それを押し通すのがこの学園の怖い所だ。やはり闇が深い。

「だったらなんで外に出てきやがった？ さつき言ってたけど、デュエルなんてしたくないんだろ？」

「うん。でもクロノス教諭から君の事を聞いてある予感がしたんだ。ひよつとして君は

僕と同じようにデュエルの精霊を扱えるんじゃないかってね。それと……そこに居る君も」

「俺も?」

「うん。僕はね、君達の可愛い精霊をデュエルから解放してあげたいんだよ。こうやってのほほんとしているほうが精霊にとって幸せだからね」

茂木は十代と俺をそれぞれ視線に捉えると軽く微笑んだ。……確かにそうかもしれないな。俺は目の前でずっと審判鳥から視線を外さない大鳥を見つめる。

大鳥もそうだけど、幻想体達だってそれぞれに意思があるし元々の実体がある。それがカードに押し込められ、結構無理やり俺に従わされるのは良い気分じゃないだろう。

もちろん快く言うことを聞いてくれている幻想体も居る。だけど、茂木の言う通りにのほほんとしたいと思っっている幻想体も居るのだろう。だから俺は茂木の言うことを否定はしない。だが、

クリクリクリ〜!

「うんっ!? ……残念だけどそうじゃないらしい。相棒は楽しいと言っている。今ここでデュエル出来ることを」

「そうかなあ?」

十代はそんなこと気にしない。

確かに茂木の言うことにも一理あるのだろう。だけどそれはあくまで茂木と茂木の精霊の意見だ。

十代と十代の精霊の意見がまるで違う以上、こんな所で足を止めたりはしない。それよりデュエルの続きだとばかりに十代は場のワイルドマンとスパークマンで攻撃し、茂木のLPを削っていく。

「ちよちよちよ。ちよつと待つテ〜ノ？ ドロップアウトボーイだったらまだ、やる気満々じゃないノ〜ヨ？ 何故？ どうして？ なんであいつらみたいに、もけもけになつちやわないノ〜ネ？」

クロノス先生が腕をぶんぶんと振り回しながら驚いている。……まあ予想は出来ていたけどな。このやる気をなくさせるといのが茂木の横に居るもけもけの力だとすれば、同じく精霊がついている十代なら抵抗出来て当然だ。

その証拠に、俺も近くに居るものの特に脱力感に見舞われたりはしていない。先ほどから罪善さんが出てきて光を放っていることも理由かもしれないが、……だが、
「「「すやすや」」」

「げっ!? 十代っ！ 遂に翔達も眠り始めた。早い所決着をつけないとマズいぞー」

元々のんびりしていた隼人が眠るのは仕方ないとして、真面目な三沢や明日香までぐっすりとなるとただ事じゃない。このままほついたらどうなるか分かったもん

じゃないぞ!

「ああ分かってる! さあ。そっちのターンだぜ」

十代は勝負を早く着けるべくターンを終了する。だが、向こうも流石は精霊使いのデュエリスト。一筋縄ではいかなかった。

「僕は手札から『闇の量産工場』を発動。墓地から通常モンスターを二体選んで手札に加えるよ」

茂木がそうして墓地から戻してきたのはやはりというかもけもけのカード。そして手札のもけもけ三枚を融合し、『キングもけもけ』の融合召喚を決めてみせる。

「うわああっ?! デカっ?!」
「なんて大きさだよ」

十代も啞然とする。ソリッドビジョンではあるが、明らかにそこらの建物よりも巨大なのだ。まさに見上げんばかりのその巨体に俺もビツクリ。

茂木はそのままキングもけもけでワイルドマンに攻撃。わざと返り討ちに遭うことで場に墓地のもけもけを三体特殊召喚する。……この流れはマズい! 茂木の場には怒れるもけもけがあるんだぞっ!?

さらに茂木はダメージ覚悟で前のターン、人海戦術で特殊召喚したハッピーラヴァーで自爆特攻を仕掛ける。結果怒れるもけもけの効果により、なんと場に攻撃力3000のもけもけが三体という凄まじい状況になってしまった。

そして、効果によるパワーアップでもけもけ三体が雄たけびを上げた時、それが皆して耳を押さえる轟音と共に思わぬ展開を生んだ。

「「もけもけ〜」」

パリーン！

「んなっ!？」

流石カードの精霊の力というべきか、攻撃力の跳ね上がったことで物理的な破壊力が生まれたというべきか、なんとクロノス先生の強化プラスチック製ヘルメットにヒビが入ったのだ。そして、その僅かな隙を見逃す罰鳥ではなかった。

コツコツコツコツっ！

「なっ!？ や、やめるノ〜ネ」

今こそ好機とばかりに凄まじい猛攻をかける罰鳥。これはマズいとクロノス先生も止めようとするがもう遅い。一度入ったヒビは罰鳥によってどんどん広げられ、

「何です〜ノっ!？ アタタタタっ!？ 痛いノ〜ネ」

遂に届いた罰鳥のクチバシが、クロノス先生の頭頂部を責め苛む。何とか振り払おう

にも、罰鳥はしつかり隙間からヘルメット内部に潜り込んでしまつて出てこない。

かと言つて、このヘルメットを脱げばそれこそ罰鳥から身を守るのは難しいし、おまけに茂木の能力を生身で受けることになる。そしてクロノス先生は、

「ノオ~~~~アタツ!？」

パニックに陥つてその場を走り回り、そのまま屋上の壁に激突。マンガだつたら頭之星がくるくる回るエフェクトが出そうな勢いでそのまま倒れ込んだ。

「あつ!!? クロノス先生っ!」

これにはデュエル中の二人も一時中断して様子を見に駆け寄る。当然俺もだ。

ちなみに罰鳥は散々クロノス先生を突いて気が済んだのか、内部からヘルメットの穴を広げて悠々と外へ飛び出し、そのままパタパタとクロノス先生の真上で飛んでいる。

俺は位置的にいち早く駆け寄り、クロノス先生の様子を確認する。

「クロノス先生っ! 大丈夫か!」

「……………大丈夫。気を失っているだけみたいだ」

頭頂部からちよつと血が出ていることと、額にこぶが出来ていること。怪我はこの二つだけでどうやら問題なさそうだな。……まあ茂木を引つ張り出したりとかこれまでの言動とかを考えると、もう二、三回突つつかれて痛い目を見ても良い気もするけどな。

ひとまずデュエルの邪魔にならないように、近くの壁の陰に寄りかかる感じで移動さ

せる。

「なあ？ けしかけたクロノス先生がこの調子だけまだやるのか？ 俺達の精霊のことが知りたいなら普通に話しても良いと思うが」

「……そうだね。クロノス教諭に言われたからデュエルを挑んだけど、僕は別にデュエルなんてどうでも良いからね」

「おっと。それは聞き捨てならねえな」

マズい。茂木の方はデュエルを止めようとしたけど、余計なことを言ったおかげで十代の闘志に火が付いた。こうなったら十代は止められない。

「互いの事を知るにはデュエルが一番なんだぜ！ だから、デュエル再開だ！」

「……ああもう。分かった。じゃあやるからにはきっちり勝てよ十代！ それと茂木。このデュエルが終わったら話をしよう。……こっちとしても話を聞いてみたいとは思っていたからな」

「おうよ！ 任せとけ遊児！」

「うん。……じゃあ後でね」

そうしてさつきまでの立ち位置に走っていく十代と茂木。……ふう。どうやら気づかれなかったみたいだな。俺はそのままさりげなく二人から見えない位置にクロノス先生を移動させる。

「……さて。それで? どうやら罰鳥はさっきので気が済んだみたいだが、そっちはまだクロノス先生を許しちやいなのか? 審判鳥」

俺の視線の先に居るのは、先ほどから動かずにいた審判鳥。……いや、動かずにいたというより、動けなかったというべきか。大鳥がずっと見張っていたのだから。

「クロノス先生の防護服の内側。あれお前の仕業だろ?」

さっき確認した時、服の内側に何重にもロープのようなものが絡みついていた。しかも全て半透明の。

普段なら見えなくとも感触でクロノス先生は気が付いただろう。だが、今は着慣れない防護服を着ている状態。内側に何か仕込まれても、その防護服の飾りだろうと思って気が付かない。

「首にこそ巻かれていなかったが、あとはお前の意思一つでロープが内側に絞られ、そのまま全身を締め上げられて死ぬ。エグイ手口だな。……クロノス先生は確かに今回悪行を成した。だけど、死を持って償うほどの罪とは思えない」

俺が手を上げると、それを合図として罪善さんとテディ、大鳥が実体化する。

罰鳥はもうクロノス先生への罰を与え終わつたと判断したのか動きを見せない。な

らあと何とかすべきは目の前の審判鳥のみ。

「……こんな人だが、目の前で死なせると寝覚めが悪いんでね。その傾いた天秤の裁定、力づくで異議申し立てさせてもらうぜ」

もけもけパニック! 逆転判決

しかし、格好つけて言ったもののどうしたものでしょうか。俺は審判鳥と対峙しながらも内心頭を抱えていた。

状況を整理すると、まずその壁に寄りかかって気絶しているクロノス先生は今命の危機に瀕している。防護服の内側に何重にもロープが巻かれており、目の前の審判鳥の意思一つでクロノス先生の全身を締め上げる。

審判鳥と罰鳥は罪や悪に反応するという話だから、今回茂木を引つ張り出して十代と戦わせるなんてことをやらかしたクロノス先生に反応するというのはまだ分かる。

しかし片方の罰鳥が突っつきまくって終わらせたのに対し、こっちは罰は全身ロープによる締め上げっていくくらくら何でも過剰すぎる。だからこうして向かい合っているという訳だ。

戦う? 今のこの状況で? 出来ればそれは避けたい。

こっちの戦力は大鳥を筆頭に罪善さん、そしてテデイの三体のみ。数こそ多いがカードのパラメータなどから考えると、対抗できるのは大鳥のみ。しかもそれも多分対抗で

きるだけで、三体がかりで何とか勝るといった所か。下手をしたら押し負ける。

その上俺というお荷物と、クロノス先生という要救助者が居るとなると戦いになったら非常にマズイ。

「……なあ？　こつちとしても戦いたくはないんだ。ここは素直にこのロープを外してはもらえないだろうか？」

なるべく穏便に進めようとそう話しかけるが、審判鳥は返事どころか身じろぎもしない。クロノス先生に巻きついたロープも見える限りでは消えた様子はない。ホントにどうしたもんか。そう考えていると、何の前触れもなく急に審判鳥が動いた。

カタンッ！

実体化して提げていた黄金の天秤を右腕で掲げ、その瞬間クロノス先生に巻かれたロープの一部が実体化する。いきなりかよっ！

「大鳥っ！」

グルアッ！

俺の合図とともに大鳥が飛び出した。その瞳は赤く染まり、審判鳥とクロノス先生の間の何も無い空間に食らいつく。すると、今実体化したはずのロープがフツと消失する。

その機を逃さず続いて走り出したのはデディ。ぬいぐるみらしからぬ俊敏さで審判

鳥に近づき、その腕をぶんぶん振り回して掬い上げるように審判鳥の顔を強かに殴りつけた。

頭部が包帯状の物でぐるぐると覆われているのではつきりとは分らないが、あの腕力で殴られたら少しは効いていると思いたい。このまま協力して何とか抑え込めれば。

カタン!

審判鳥が天秤を掲げた。またクロノス先生のロープを実体化させる気か? 天秤は

キラリと光り輝き、

「……………うっ!?!」

咄嗟に手で口を押さえる。なんかものすごくキモチワルイ。ガクツとその場に膝を着き、必死に喉の奥からせり上がってくるものに耐える。……………何だコレは?

必死に周りを見ると、審判鳥の掲げている天秤から放たれる水色の光が俺やティ達を照らしている。くそっ! これが原因か。

カタカタッ!

そこへ俺の前に罪善さんが立ちはだかり、相手の光から壁になるとともに自身の光を俺に放つ。……………なんかさつきよりキモチワルイのが収まってきた。

「ありがとう罪善さん。助かったよ!」

お礼を言うとう、罪善さんは何でもないとばかりに首を振る。しかしなんだ今のは?

これが審判鳥の力か？ 範囲攻撃持ちなんてキツ過ぎるぞ！

見るとティディは明らかにさつきより動きが鈍っており、そこを審判鳥のもう片方の腕で払いのけられた。大鳥も光を受けているようだが、まだこちらはそこまで動きが鈍っている様子はない。

「しかし、幻想体のティディでもあの有り様なのに、なんで俺が耐えられたんだ？」

いくら何でも俺の身体は幻想体のようにタフじゃない。下手すりゃこの一撃で意識を刈り取られていてもおかしくないのになんで……うんっ!?

見ると俺のペンダントも同じく微かに光を放っている。どうやらこれがダメージを軽減してくれたみたいだ。ティー本人はともかくくれたペンダントは良い仕事をするな。

「もけもけ1号、2号、3号で攻撃！」

「畏発動！ 『ヒーローバリア』！」

離れた場所ではデュエルが再開したみたいだ。もけもけ三体の攻撃を十代は畏カード『ヒーローバリア』で一度は凌ぐものの、残りの攻撃でヒーロー達は全て破壊される。幸いなことに今の審判鳥の攻撃は、離れた所に居る二人には届いていないようだ。こんなのが届いたらデュエルどころじゃないだろうからな。

向こうもピンチのようだが、正直こっちもピンチなんだよな。俺は冷や汗をかきなが

らなんとか足に力を入れて立ち上がろうとする。だけど、なかなか力が入らない。

「ぐうつ!」

「そうだよ力を抜いて。どうでも良いじゃない? デュエルなんて」

聞こえてくるのは茂木のどこか穏やかで優しい言葉。どうやら十代も同じくよれよれらしい。

……俺、何やってるんだろ? なんでこんな酷い目に遭ってまでクロノス先生を助けようとしてるんだろ?

元々目の前の審判鳥も罰鳥も、悪行を成したクロノス先生に反応してただけだ。罰を与え終わったらそれでいずれ二体ともカードの下に戻ってきただろう。

罰を受けるのはあくまでクロノス先生の自業自得だ。隔離されていた茂木を連れ出し、十代と戦わせる。それは十代を茂木の力で脱力化、最終的には退学にまで追い込むということ。決して教師が生徒にして良いことのはずがない。

ならもうこのまま茂木の言う通り力を抜いて、審判鳥の審判を待った方が良いのではないか?

向こうだってまだロープを全身に巻きつけただけだ。締め上げるにしてもそこまで

強い力じゃない可能性もある。放っておいても助かるかもしれない。
そうして俺は腕の力を抜き、

「つんなろっ!」

そのまま一気に反動をつけて立ち上がった。膝が笑っているがまだ立てるな。

「……俺のターン」

「あれおかしいな?　なんでまだやる気があるんだ?」

「あつたりまえだろ!　こんな楽しいことやってるのに、欠伸してる暇なんかないっつゝの!」

聞こえてくる声からすると、どうやら十代も立ち上がったらしいな。まああつちはデュエルをすることへの楽しさから立ち上がれたみたいだけど、こつちはそんな良い理由じゃない。

正直このままぶつ倒れて楽になりたいさ。痛いのも苦しいのも真つ平御免だし、こんな物騒な奴と戦いたくなんてない。

……けど、けどな。目の前で知り合いが死ぬかもしれないのに、このままぶつ倒れてたら身体より先に心が辛いんだよっ!

身体は痛くないかもしれない。でもどんな言い訳を並べたつて、俺は絶対この時動か
なかつたことをあとで後悔する。その後悔がこれからもずっと付き纏うくらいなら、

「なら……ここで気合入れて立ち上がった方がまだマシつてもんだろがつー!」

まだ笑つてる膝をパシつと打ち、俺は再び戦いの様子を見守る。幸いさつきの技は連
発出来ないらしく、大鳥とテデイが二体がかりで審判鳥を何とか抑え込んでいる状況。

罪善さんは俺の護衛で動けないし、あと一步決め手に欠ける。それに肝心の審判鳥が
なんでこんな行動をとろうとするのかよく分からない。

『ふくむ。どうやら審判鳥のことで悩んでいるみたいだ……あぎやつ?!』

今までどこ行つてたんだデイーひとまずツラ貸してもらおうかと、俺は流れるように
現れたデイーを鷲掴みにし、いちいち話してる暇もないので無言で催促する。いざと
なつたらこいつは俺の心も読めるだろうからな。

『せめて無言はヤメテく! ……分かつた分かつた! ヒントくらいは出すよ!』と
言つても……君ももうなんとなく察しているかもしれないね。あの審判鳥を見て何か
気になることはないかい?』

デイーのその言葉に、俺はもう一度審判鳥を観察する。……気になる所と言つたら二
つ。

「目を布で塞いでいることと、天秤が最初から傾いてるつてことか?」

『そういうこと！ 特に天秤の方が問題だね。あれのせいで正しく罪を量ることが出来ないでいる。つまり審判鳥の理不尽な判決を止めるには？』

「……何となく分かった気がする」

俺はディーから手を放し、今にも崩れ落ちそうな身体に活を入れる。それを見て罪善さんが何か言いたそうにカタカタと骨を鳴らす。

「すまないな罪善さん。多分心配してくれているんだと思うけど、もう少しだけ無茶をするよ」

さて、もうひと踏ん張りするとするか！

「大鳥っ！ テディっ！ 少しの間で良いからそのまま審判鳥を押さえててくれっ！」

俺はそう叫びながら、罪善さんを伴って審判鳥に向けて走り出した。

審判鳥はそこで向かってくる俺に気づき、再びさっきのように右腕で天秤を掲げる。また範囲攻撃か！ でもな……来るって分かっているんなら何とかなるんだよっ！

「罪善さんっ！」

俺の合図とともに罪善さんが前に出、そのまま天秤の光を受け止める。だが心なしか罪善さんも動きが弱々しくなってきた。ゴメン罪善さん。もう少しだけ耐えてくれ！

グルアッ!

なおも天秤を掲げようとする審判鳥の腕に、大鳥が鋭い牙で食らいつく。審判鳥は天秤を取り落しこそしなかったものの、一瞬動きが止まった。そこをテデイがもう片方の腕に組みついて動きを封じる。

テデイはまだともかくとして、大鳥も素直に言うことを聞いてくれるのは疑問だが大いに助かる。あと審判鳥までの距離はわずか。あと少しで、

「……………えっ!」

その時、審判鳥は最後のあがきに出た。わざと見えるように空中にロープを実体化させたのだ。ロープは何本も伸び、その先にあるのはクロノス先生の身体。この土壇場でそつちを狙うかよっ!?

どうする? このまま行けば何とか審判鳥の懐に飛び込める。しかし放っておいたらクロノス先生がヤバイ。ロープが音を立てて引き絞られる。ああもう迷ってる暇はないか!

「大鳥っ! 頼む!」

俺が頼むのとはほぼ同時。むしろ頼むより一瞬早かったかもしれない。大鳥は食らいついていた審判鳥の腕を放し、標的をクロノス先生を縛っているロープへと変える。

噛み合わされる大鳥の牙とブツリと音を立てて千切れるロープ。これでクロノス先

生は大丈夫だ。だけど、

グルアっ!?

その一瞬の隙を突かれ、大鳥の牙から自由になった審判鳥が再び天秤を翳す。するとまたどこからともなく現れたロープが大鳥とテデイの手足に絡みついた。大鳥を拘束し、自分にしがみつくとテデイを無理やり引き剥がそうってことか!

俺はその間を縫って審判鳥の所へ走り込む。あとはあの天秤をどうにかするだけ。そうすれば、

「……あっ!?!」

ガクッ!

チクシヨウ足がもつれた。なんと審判鳥のど真ん前で。

それは本当に一瞬の事。すぐに踏ん張りを効かせて体勢を立て直す。でも審判鳥が俺を迎撃するには十分すぎるほどの間だ。

「罪善さんっ!?!」

俺を守ろうとした罪善さんを手で払いのけ、審判鳥は俺に向かって天秤を翳す。そこから水色の光が俺を……。

パァンっ!

包まなかった。まるで銃撃のような音と共に、天秤が審判鳥の手から弾かれカラッと地面に落ちる。これは!?

『管理人っ! 今だっ!』

その声の方向を見ると、そこに映るのは指をピストルのように伸ばした葬儀さん。そして、その後を車輪を出して激走するヘルパーと、それに乗ってこちらに手を振るレティシアの姿。……皆来てくれたのか!

『遊児お兄ちゃん! 受け取ってっ!』

レティシアがその子供らしい見た目とは打って変わって強い肩で、こちらに投げ渡してきたのは幻想体の予備のカードを収めたデツキケース。そして俺はそれをキャッチし、

「ありがとなっ! ……審判鳥。お前に一つ言いたいことがある。公平な審判やんならまず道具から見直せやアアアっ!」

そのままの勢いでずつと上がりっぱなしの天秤の片方に叩きつけた。

もけもけパニック！ 森に集う三鳥

「俺は罠カード『異次元トンネルミラーゲート』を発動！ バトル中のモンスターを入れ替え、戦闘を続行させる！」

俺が十代達の所に戻ると、いよいよデュエルは佳境に入ったという所だった。

力には力ではなく、むしろ相手の力を利用して勝つ。それが攻撃力3000まで膨れ上がったもけもけへの十代の一手。

十代のバブルマンから茂木のもけもけへの攻撃は、そっくりそのまま入れ替わって十代のもけもけから茂木のパブルマンへの攻撃に変化する。

「よっしゃー！ もけもけウェーブで攻撃！」

十代の手持ちとなったもけもけは、怒れるもけもけの効果で真っ赤に染まりながら戦いに向けて雄たけびを上げた。

「えっ!? もけもけがあんなにやる気を出している? ……うわああっ!」

そうしてどこか驚いた様子の茂木のLPを、もけもけの攻撃が削り切った。

デュエル終了。十代WIN!

「やったな十代! 最後の方だけだけ見てたぞ」

「おうよ! ……つて最後だけかよっ!? まあ良いけどな」

俺は手を上げながら十代に駆け寄る。俺だって全部見たかったんだけどな。色々あったんだから仕方がないのだ。そして衝撃でそのまま座り込んだ茂木に、十代がゆくりと歩み寄った。

「ガツチャ! 楽しいデュエルだったぜ。お前も結構熱くなつてたしよ!」

「……ふふっ! これでも楽しやないんだ。力を抜くのもね」

十代の言葉に、茂木は少しだけどこかスッキリしたような顔でそう返す。俺には茂木の気持ちはよく分からない。ただ、茂木には茂木の悩みというのがあるのだろう。

「分かるぜ。デュエルつてすつごく楽しいからな。へへっ!」

「たまには君のように勝負にこだわるのも良いもんだな。でも今は、頑張り過ぎたんで眠くなつてきちゃった。その君には悪いけど、話はまた後でね。……お休み」

そう言ううと茂木は、なんとそのまま後ろに倒れ込んでいびきをかき始めた。この早寝の手際。某昼寝の天才並かもしれない。

「え〜っ!? おいっ!? ……お前も。……ええ〜っ!?」

後ろを見れば、当然だが翔達もまだ眠ったまま。陰に居るので見えないがクロノス先生も気絶しているし、十代はこれどうするんだよとばかりに困り声を響かせた。

「まあ、たまにはこうして青空の下で昼寝つてのも良いんじゃないか？ この通り場所はたつぷり空いてるし、俺も酷く疲れたしな」

俺は近くの壁に背中を預けてふうふうと一息つく。正直身体はガタガタでしんどい。しばらくこうして動きたくない気分だ。

「……そうだな。楽しいデュエルをやって良い気分です寝するつても悪くないかもな。俺も寝るか！」

遂に十代も腕を枕にしてその場にごろりと横になる。そして誰も起きていなかった……なんてミステリー染みたタイトルがつきそうな風景だ。

そのまま目を閉じ、良い具合にウトウトし始めた時、

「……なあ？ 寝る前に一つ聞かせてくれよ。あそこに居る鳥みたいな奴は結局どうなったんだ？ クロノス先生を狙っていたんだろ？」

十代からそんな声が飛んできた。ああ……アレね！ 俺は薄目を開け、今はもうすっかりおとなしくなった審判鳥を視界に映す。

「やっぱバレてたか。……大丈夫。ひとまずは安全だよ。あとでまとめて話すから……今は……寝かせてくれ」

「おいっ! おい遊児っ!」

十代の言葉がどこか遠ざかっていくように感じながら、俺の意識はそこで途切れた。

「ふわあ〜!」

その日の夜、俺は自分の部屋で大きな大きな欠伸をした。

『おやおや〜! あれだけ眠ったのにまだ眠いのかい?』

デイーがからかうようにそう言うてくるが、自分でもびっくりするぐらい爆睡してしまったので間違っではない。

なにせいち早く起きた三沢達に起こされた時にはもう夕暮れで、慌てて皆で寮に戻った時にはもう真っ暗になっていたからな。すっかり夜も遅くなつたから、十代に諸々のことを話すのは明日になつたぐらいだ。

「むしろ寝過ぎて頭がぼんやりしてる。ヘルパー! すまないけどコーヒーを……?」
と。今は無理だつたな」

今はヘルパーは部屋の隅で外せない作業をしている。それが終わるまでは他の用は頼めない。疲れているだろうがもう少し頑張ってくれ。

『それにしても今日は大変だつたねえ。他の幻想体達が皆カードに戻って休むくらいの

激戦だった。まあ僕としては中々に見ごたえのあるものが見れて悪くなかったけどさ」
「楽しんでくれて何よりだよこの野郎っ！」

今日の審判鳥の一件は本当に大変だった。もうあんなキツイのはコリゴリだ。唯一の救いは、天秤を釣り合わせたら審判鳥がおとなしくなったことぐらいだな。

あの時、天秤が狂っているなら何か重りを乗せて釣り合わせたら良いという半ば自棄の発想だったのだが、それが見事に決まった時は自分でも驚いた。何事もやってみるものだ。

ちなみに審判鳥は今精霊化してこの部屋に居る。昼間はあれだけ手こずった相手だが、痩せこけた身体をさらに小さくして部屋で待機している様はどこかユーモラスだ。

『本来審判鳥は公正な裁判官だからね。天秤が狂って無罪か極刑の極端な二択になつたけど、正しく釣り合っているのならそれ以上の手出しはしないさ』

「それなら最初から天秤をしつかり整備しとけよって話だけだな。最初からあんなに傾いてたんじや欠陥品も良いとこだ……おっ!？」

そうぼやいていると、作業をしていたヘルパーがこちらにやってくる。どうやら出来たみたいだ。

「リペアプロセス完了！ 残存エネルギー100%を切りました。スタンバイモードに移行します。お手伝いが必要なら呼んでね」

ヘルパーも疲れていたらしい。俺にそれを手渡すと、普段なら俺が言わないと休まないのに今回は自分からスタンバイモードになった。……ゆっくり休んでくれよな。

『それにしても、まさかこんなことまで出来るとはね。これには僕も驚いたよ』

俺の手にあるのは、審判鳥が持っていた黄金の天秤。だがもう傾いてなどなく、テーブルに置くとピッタリと秤が水平になっている。

ネクヤテディの前例があるように、ヘルパーはカードの精霊であつても修繕が可能だ。だが今回は本人ではなく持ち物。しかも自分より格上のWAWクラスだ。流石に出来るかどうか分からなかったのだが、出来てしまったのだから凄い。……ホントになんでこれで掃除だけはダメなんだ？

「審判鳥。出来たぞー！ これでもう無茶苦茶な判決は出ないはずだー」

俺の言葉に反応し、審判鳥がのっそりとその頭部をこちらに向ける。相変わらず布で覆われているのでよく分からないが、どうやらこちらを向いてはいるらしい。

そのままゆっくりと実体化すると、そつとこちらに手を差し出してくる。……手に乗せろつてことかな？

「ほらっ！ これに懲りたら定期的に天秤を整備しろよな？ 自分で出来ないならヘルパーにやり方を教えてもらうなり大鳥達に手伝ってもらうなり方法はあるから」

そう言つて俺が天秤を手に乗せると、審判鳥はそのままゆっくり頷いてフツと消えて

いった。

『……本当に良かったのかい？ 審判鳥も罰鳥も手元に置かず森に行かせて』

「良いんだよ。手元に置いてても戦力過多だし、どのみちWAWクラスを完全に制御するのは無理だ。なら仲間同士で一緒に居させた方がまだ安定するかもだろ？」

「デーイーが俺を試すようにそんなことを言う。分かっているくせしてそういうこと言うんだからコイツは。」

まず大鳥は今回相手が審判鳥だから手伝ってくれたように、審判鳥が落ち着いた瞬間勝手に精霊化して森に帰ってしまったしな。基本言うことを聞くかどうかは幻想体の自由意志だ。

なので審判鳥にも予め、大鳥と同じく森で良くないモノ退治と迷った人の護衛を頼んでおいた。森に関わることなので、これは審判鳥も断る理由がなく普通に承諾してくれたな。

懸念があるとすればまたWAWクラス以上のカードが精霊化した場合だが、その場合戦闘になったら周囲がヤバいのでそもそも戦闘は避ける方針だ。よっぽど相手が話の通じない奴じゃない限りは大鳥や審判鳥を呼ぶ必要はない。

最後に罰鳥だが、こいつに関しては基本カードと同じでこつちから攻撃しなければ比較的安全らしい。実際クロノス先生を散々突っついたけど、頭を軽く怪我させるだけに

留めたしな。他の二体に比べたら可愛いもんだ。

こつちは手元においてもなんとか制御できそうだが、他の二体を安定させるために一緒に行かせることにした。一番見た目が普通の鳥っぽいから誰かに見られても安心だしな。

『……………それはそれで良いか。条件が揃いつつあるけどよほどのことがない限り出てはこないだろうし』

なんか不穏なこと言ってるんなコイツ?!? 条件って何?? なんかあるの?!? あれ以上凄い奴が出てきたらもうどうしようもないぞ。

『おっと。口が滑ったね。まあそれは今は良いじゃない? それより未来の事を考えようじゃないか。……………明日どうしようか?』

なんか釈然としないな。しかし、デイーの言う通り明日はいくつかやることがある。十代に今回の一件を話すこと。茂木と一度じっくり話し合いをすること。そして、

「……………決まってるさ。クロノス先生とはきっちりお話をしなくちゃな」

自分のやらかしかけたことには責任を取ってもらおう。俺の友人を無理やり退学させようとしてタダで済むと思うなよ。

突撃！ 茂木君の寮 その一

茂木の件から一日経って。

『……という訳で、『突撃！ 茂木君の寮』のお時間となりましたっ！ いえっ！』
「いえっ！ いやねえよっ！ 何そのノリっ！」

隣で今まで以上に騒がしいテンションのディーに困り果てながら、俺は茂木の寮の入り口が隠されている鶏小屋の前に立っていた。

ちなみに鶏達は本来凶暴で、よほど慣れた人じゃないと入った時点で襲われるらしいのだが、

『ピピィ〜！』

「コケ〜っ！」

何故かどこからともなく飛んできた罰鳥が、鶏達のボスらしきひときわ風格のある黄金の毛並みの鶏と話し、何か合意したらしく互いに空に向かって鳴き声を響かせる。

すると、俺が入っても鶏達は襲ってこず、むしろ道を譲るように下がっていった。いったいどういう関係なんだ罰鳥？

『えっ！？ だって要するにこれは、久城君が友達の家遊びに行くってことだよ？』

……あの久城君がそこまで成長するなんて僕は嬉しいよ。およろしく!

「下手な泣き真似してんじゃないよ。それに俺がまるで友達の少ないボッチみたいない方すんな! よく十代のところにも行ってんだろ?」

『だけど逆に言えばそれくらいじゃない?』

デイーの言葉にハツとする。確かに俺十代の部屋以外だと、いつも学園の本棟と食堂と自室と時々図書室の往復くらいであんまりそれ以外に歩かない。……確かに灰色とまでは行かないが、やや青春としては暗いかもしれないな。

「……あと茂木は友達じゃなくて知り合いだ。ただ色々と気になることがあるから話があつて、それと場合によつては協力してもらいたいだけだ」

『またまたそんなこと言っちゃつて。君の友達基準は結構ハードル高いんじゃない?』
「そんなことはないと思うんだがな。……それにしても十代遅いな」

本来この時間に十代と待ち合わせていたのだが、いつまで経つてもやってこない。……もしや授業態度が悪くてレポートでも書かされているのか? だからあれほど授業中の居眠りや早弁は控えろと言ったのに。また佐藤先生辺りに睨まれるぞ。

『まあ良いじゃないの! その間に僕はたつぷりと君をからかう時間が出来る』

「そもそもからかうなよっ!」

デイーは絶妙に俺の手の届かない高さまでふわりと上がってカラカラと笑う。ジャ

ンブすれば問題なく届くだろうが、わざわざそんなことをしたらむしろこいつが喜ぶだけだ。それなら飽きるまで放っておいた方が良い。

『アツハツハ！ 久城君もここまでは届かないようだね。これは良い！ では一つここから……アタツ!!』

あつ！ 罰鳥に突かれてる。この状況ではデリーの行動は罰鳥にとつての悪だと判断されたらしい。

そのままデリーがふらついて降下したところを掴み取り、『げっ!? ゴメン悪かったよ許して〜!』とかなんとか言っているの、俺はにっこりと優しく笑顔で笑いかけた。

俺はポケットから特殊な加工をされたカードキーを取り出す。これは、茂木の寮の入り口を開けるキー。クロノス先生とのお話の結果譲渡されたものだ。

『それにしてもさっきのクロノス先生とのお話は凄かったね。流石の僕もあれはちよつとビビったよ』

「……? そんなに怖かったか?」

少しだけボロボロ（俺の所感）になったデリーがどこかふらつきながらそう言う。生徒として舐められたら交渉しづらいと思つて、元の世界で仕事に相手と交渉している

時を思い出してちよつと気合を入れていただけなんだが。

『もし次回のようなことがあつたら鏡を持つていくことを薦めるよ。心臓の弱い人が相手だつたらポツクリ逝つちやうんじやないかと思うくらい威圧感が凄かつたもの』

「そんなにかつ!？」

俺はただクロノス先生に、昨日茂木を連れ出したことと十代にぶつけて退学させようとしたことの説明をしてもらつて、あと丁度良いからこれまで俺が感じていたブルー生徒の態度の悪さ（実名は出してない）を話したただけだぞ。

そういうえば何故かクロノス先生が、最初に俺の顔を見て冷や汗を流していたようだったが……まさかな？　ちよつと体調が悪かつただけだよな？　多分鮫島校長にチクられたらマズいなあと思つて話を聞いてくれたんだよな？

『だけど、本当に補償がそれだけで良かったのかい？』

「これだけつてことはないぞ。俺や十代が自由に茂木の寮に会いに行く許可とか、その時に必要な備品の申請、状況によってはこのカードキーの追加発行もできる」

そもそも茂木の近くに居ると妙な脱力感に見舞われるらしいが、その件がもう何年もまるで解決していないのがマズいんだ。原因不明でやったことと言つたら隔離処置のみ。これでは治るものも治らない。

だが昨日の件では俺と十代には特に影響はなかつた。これが仮に精霊の力だとすれ

ば、オカルトでもなんでもそこをさらに調べることで抑制できるかもしれない。

この件の申請が通つたのが、クロノス先生も茂木の体質改善がこれでも叶うと踏んでの事ならそれはそれでアリなんだけどな。

「それに、クロノス先生にはこれ以上十代に私怨でちよつかいを出さないって言質を取つたしな」

『……まああれだけ懇々と説得されれば流石にもうクロノス君も手を出さないか』

本当は万丈目への仕打ちとか、もつと色々この機に言つてやりたい所ではあるが、今は十代がもうすぐ学園対抗戦を控えた大事な時。下手にやり過ぎて他の人に迷惑をかける訳にもいかない。

当事者である十代も補償をしてもらえるはずだったのだが、「俺は楽しいデュエルが出来たから別に良いぞ」と言つて断られてしまった。まったくあのデュエル馬鹿は甘いんだから。

なら今は茂木とのパイプをしつかり繋いでもらうことが第一だ。……考えてみれば茂木も被害者みたいなものだからな。話をして少しでも向こうも納得してくれれば良いのだが。

俺は罰鳥を肩に乗せ、砂場に隠された入り口を掘り返す。いちいち会いに行くのこんな手間をかけるんじゃないぞ。もっと簡単な場所にしてほしい。そう思っているよ、

「おっ！ 悪い遅れた。居眠りと早弁の罰でレポートを書かされてさ」

「予想はしてたけど両方共かよっ!?」 ったく。十代も砂を払うのを手伝え」

悪い悪いと頭を掻きながらやってきた十代に、俺は軽く呆れを込めて言う。もう毎回と言つて良いほど講義中にやらかすからな。いくら実技が良くてもこれじゃ先生方からの評価は最悪だ。その内こういった所も直していかないとな。

いつの間にかまた居なくなつたデイーはもう気にしないとして、二人がかりだとすぐに砂場に隠された入り口が露わになつた。その頑丈そうな扉を開き、俺達は中の防護服が置かれた部屋まで進む。

「おおっ！ 聞いてた通り、これはスゲーな」

「ああ。これはまさに隔離だな。生徒一人にいくら何でも嚴重すぎだろ」

何重にもある隔壁、入り口の前に用意されている防護服、そしてなにやらよく分からないコードらしきものが幾つも繋がれた球状の建造物。

これらが全て茂木のためだけに用意されたかと思うと、よくこんなのを用意する財源があつたなど少し感心する。

だが、それと同時に何やってんだと呆れかえる。これはいくら何でも方向性がズレている。人一人のために住む場所を快適にするのではなく、その一人を治すなりなんなりする方向に金をかけた方が建設的ってものだ。

「ところで……この防護服はどうする？ 安全性を考えるなら着ていく方が良いが」

「え〜っ！ 俺いいよそれ。なんか動きづらそうだし、やっぱりこういうのは防護服越しにじゃなくて直接だろ？」

「……そうか。じゃあ俺も着ないでおく」

来客用の防護服を手渡そうとするが十代はそれを拒否。まあ昨日も十代は直接デュエルしたのに平気だったしな。……それに今ここに有るのは一着だけ。最悪の場合は救助に来る誰かのためにここに残しておいた方が良いか。

「よし。じゃあ開けるぞ。この時間に行くつて連絡を入れてあるから、向こうもそろそろ待っているはずだ」

俺は障壁を開けるために横の機械にカードキーを差し込んだ。ブシューという空気が漏れるような音と共に隔壁が開き、茂木の寮への扉が開く。

「さあて。それじゃあ行くとするか。何をするかは分かっているよな？」

「おう！ またデュエルするんだろ？」

「違うよっ!? 分かっているじゃないか！ あくまで今回は話し合い。……まあ個人的

に思惑もあるはあるんだが」

十代ときたら何でもデュエルと結びつけるデュエル脳だからな。分かっているかっ
たらしい。

今回の表向き理由は茂木との話し合い。向こうも十代や俺に興味があるみたい
だったからな。それに折角精霊が見える相手が見つかったんだ。交友関係を広げてい
くのも悪くないだろう?

と言つても正直こんなキャラの濃い奴がストーリーに関わらないということはおそ
らくないだろうし、放つておいても話の本筋に絡んでくると睨んではいるけどな。

裏の理由は茂木と接触することで、その脱力現象を調べること。これはクロノス先生
も全面協力してもらおう。もう誰かが茂木を引っ張り出して馬鹿なことをしないように、
さっさとこういうことは対処できるようにしないとな。

そして、最後に俺個人の思惑。まあこれは茂木の……というより茂木の寮を見てみな
いことには動けない。なので半分は出たとこ勝負になるな。俺個人としては予め準備
しておくほうが好みなんだが。

「さあて。鬼が出るか蛇が出るか」

「茂木ともけもけが出るんだろ? さあ行こうぜ! おつ邪魔しまゝつす!」

「あつ! 十代ちよつと……ああもうっ!! 先に行くなよつ!」

俺は茂木の寮に向かう十代を追って走り出した。……向こうも気付いてはいると思
うけど、インターホンとかはないかな？

突撃! 茂木君の寮 その二

球状の建造物の内部、茂木の寮は凄まじいの一言だった。

「おお! すっげ〜! 地下なのに日が差してるぞ!」

十代の言う通り、扉に入った瞬間眩しい日の光が俺達を出迎えた。見上げるとそこは天井があるはずなのに、何故か雲のほとんどない青空と太陽が存在を主張している。

そしてどうやら茂木が居るらしき住居部分、それはなんと海の上にある小島に建っていた。そこまでの道のりは栈橋のようになっていて、下を覗けば日の光を浴びてきらめく海面が見える。

「遊児! これどうやら本物の海水みたいだぜ! しよつぺえ。……つてことは、俺達いつの間にか海まで歩いてきちゃったのか?」

十代が早速海面に手を伸ばし、指先をぺろりと舐めてそう判断する。魚影も見えないし、どうやら本当に海水らしい。ただ、

「十代。海水ではあるけど海じゃなさそうぞ。これソリッドビジョンの応用だよ」

よく見ると水底まで割と浅いし、遠くに見える雲や太陽も何となく本物じゃないって感じがする。海水はどこかから引き込んでいるとして、おそらく太陽とかは映像を壁に

貼り付けるか何かしているのだろう。

「なくんだ。本物じゃないのか。まあそれでも面白いっちゃ面白いけどな」

「ほら。遊んでないで行くぞ」

このままほつとけば飛び込んで泳ぎ出すんじゃないかと不安になり、俺は十代を急かして先へ進む。そしてついに、

「着いたな！ ……んっ!? あそこに居るの茂木じゃねえか？」

「そうみたいだな」

まるで南の島にでも来たのかと錯覚しかねない風通しの良い住居部分に着くと、そこにはぼかぼかとした陽気の中でハンモックに揺られて気持ち良さそうに昼寝する茂木の姿があった。

……ハンモックで昼寝とは分かっているなコイツ。しかし大体この時間に行くって言ってあったのに寝てるとは。

『もけもけ』

駆け寄ってみると、茂木の横でもけもけもまた気持ち良さそうにプカプカ浮いている。相変わらずコイツはよく分からんな。

ただ気持ち良さそうに寝ているところ悪いのだが、これではこつちも話が進まない。なので心を鬼にしてハンモックを揺すり茂木を叩き起こす。

「おいつ! 起きろ茂木。起きろつたら! 約束通り来たぞ」

「……………むにゃ!? ……ああ。おはよう」

「おはようつたつてもう放課後だぜ」

「ゴメンゴメン。ハンモックを新調してちよつと昼寝するつもりが、ついつい気持ちよくてぐつすり寝ちやつたんだ」

大きな欠伸をしながら身体を伸ばす茂木に、十代がどこか呆れたような声を出す。昼寝にしては長いな。

そして茂木はびよんつとハンモックから降りると、そのままほんの少しだけ目をシャキッとさせて住居部分を手で指し示す。

「さあ。こちらへどうぞ。お客さんなんだから遠慮しないでよ」

「おう! 楽しみだな茂木んち!」

十代はもう完全に友達の家遊びに来たつて感じだな。間違つてはいないが、もう少し何とかならないものかね。

住居部分の内部も中々に洒落ていた。外観は南国だったけど、中はよくドラマで見かけるような軽井沢の別荘とかを思わせる。家具も良いものではあるのだけど決して自

己主張し過ぎず、なんというか気を楽にできる場所って感じた。

「まあ適当に座ってよ。今飲み物と茶菓子を持ってくるから」

リビングらしき場所に着くと、茂木はそう言って部屋を出る。あまり人が来ないようではあるけど、一応来客用に色々用意はされているようだ。俺達はひとまず用意されているソファアームに座ろうとし、

「……なんか先客が居るぞ」

「ああ。こっちは流石に起こしづらいな」

その上で丸くなって眠っている『プチリユウ』に気づいてスツと立ち上がる。

よく部屋を見たら居るわ居るわ。テレビの上には『ハッピーラヴァー』が浮いているし、置物かと思ったら『はにわ』が普通に棚の上に乗っていた。

他にもカードの精霊らしきものがあちこちに居る。実体化してはいないものの、これは見える人からしたら驚きだな。

カタカタ。クリクリ〜！

「なんだ？ ハネクリボーもこいつらと話がしたいのか？」

「罪善さんもどうやら同じらしいな。良いよ別に。行ってきな」

周りがこう精霊ばかりだと、普通に罪善さんとハネクリボーが出てきても違和感が無い。特に止める必要もないし、俺達はそれぞれの精霊が交流を深めるのを見守る。……

なんかほのぼのするな。

『遊児お兄ちゃん。あのね。その……』

「うんっ!? どうしたレティシア?」

急にレティシアが俺に声をかけてくる。だけど、そのままレティシアはもじもじと両手を擦り合わせて俯き黙ってしまった。そこへ、レティシアに抱かれているネクがからかうように不敵な笑みを浮かべる。

『クツクツク。我が生け贄よ。お前は子供心が分からん奴だなあ。可愛らしいものが好きなレティシアがこんな場所を見れば、それこそいつらに触れたり撫で擦ったりしたいと思つて当然だろうに。そこをお前に配慮して我慢するレティシアの何ともいじらしいことよ』

『ネ、ネクちゃんっ!? ……大丈夫だから。私、我慢するもの! でも……うう』

確かにこれは俺がなじられても仕方ないな。レティシアがさつきからチラチラとこの部屋の精霊達に視線を向ける様子に気が付かなかった。

「……遊児」

「ああ。……レティシア。別に良いんじゃないか? もちろんいきなり触ったら向こうもビックリするかもだけど、まずは挨拶から始めて仲良くなったら触らせてもらうってことで」

『遊児お兄ちゃん。……うん！　ありがとう！　まずは挨拶からだよね！　私、一生懸命挨拶するの！』

レティシアは、ペアつと顔をほころばせ、早速浮いていたハッピーラヴァーの所に駆けていく。

「ネク。ありがとうな」

「ああ。お前良いところあんじゃん！」

『ふんっ！　あまりにも運び手が情けない姿だったので少し後押しをしただけの事よ。というかレティシアっ!?　私を置いていくなっ！　自力ではまともに動けんのだっ!』

ネクはそんなことを言いながらよたよたとレティシアを追い、そのまま手を取り合つて遊んでいるのに巻き込まれて吹き飛ばされていた。……最初に会った時に比べてネクもちよつとだけ丸くなった気がする。この調子で身体を取り戻しても悪さしないくらいまでなつてくれれば良いんだけどな。

「お待たせ。飲み物と茶菓子を持つて……わあっ！　精霊同士は仲良くなつたみたいだね」

そこに茂木が戻ってきた。精霊同士が遊んでいる様子を見て俺達と同じくほっこりしているようだ。……これはもけもけの影響じゃなく、普通に起こりうることだと信じたい。

「じゃあ、僕達も始めようか」

「ああ。始めるとするか。話し合いをな」

そう。ほっこりとしたムードに流されがちだが問題はここからだ。

目の前の奴はカードの精霊をデュエルから解放するという考えを持っている奴だ。おまけに能力的にはそれをある程度無理やりに実現できるだけの力がある。気を引き締めていかないと。

「うおっ!? これケーキかよっ! それもこんな高そうな……いやあ悪いなあこんなご馳走になっちゃって!」

……とりあえず十代に緊張感を期待するのは無理そうだな。

「では改めて。ようこそ僕の家……っていうか寮? 部屋かな? まあとにかくようこそ」

「お邪魔してまうす! あとこのケーキ美味っ!」

「十代行儀が悪いぞ! ……ゴホン。お邪魔します。この度はお招き感謝……いや、普通に言おう。招いてくれてありがとうよ」

俺達はそれぞれ椅子に腰掛け、テーブルに置かれたケーキを頂いていた。ショート

ケーキとはド定番だが、一口食べてすぐに良い品だと分かる。十代なんか挨拶もそこそこがつつついてるし。

「どういたしまして。ここにお客さんなんて滅多に来ないからね。来客用の茶菓子も定期的に学園側から支給されてはいるけど食べきれないし、良かったらどんどん食べてよ！ お代わりもあるよ」

「マジかよ！ それなら早速……」

「十代っ!? つたく、少しは遠慮しろつての。……しかし定期的に支給っていうのは？」
さらにエンジンがかかって口いっぱい頬張る十代を横目に、俺は気になった言葉を聞いた。支給されたDPで買うとかなら分かるが、現物を支給というのは珍しい気がするな。

「うん。僕が望んだらそれを用意してくれるし、望まなくても何かしら勝手に送られてくるんだ。食事も、嗜好品もね。DPも溜まってはいるけど使い道がないし」

「……そうか。勝手にね。……ところで、日の光とかはどうしてるんだ？ いくら何でも映像の光だけじゃ身体に悪いだろ？」

「勿論それは学園側も考えてくれてね。この寮の一室に日向ぼっこ用の設備を作ってるんだ。なんでも、外から鏡を使ってパイプ沿いに光が届くようにしてあるんだって。まあでもやっぱり直に浴びるのが一番だよ。昨日クロノス先生の呼び出しに応えた

のも実はちよつとだけそれ目当てもあつたかな」

茂木はそう言つてえへへと頬を搔く。

なるほど。これが隔離処置を行った学園側の誠意つて奴か。好きなものを与える代わりにここに隔離するのを許してほしいつてか? 少し日光浴することすらまともに許すことなく?

……ふざけんな。

「お、おい遊児!」

知らず知らずのうちに握りしめた拳に力が入る。

確かにここは良い環境かもしれない。少し室内を見るだけで分かるけど、冷暖房はバツチリ完備されていていつでも過ごしやすい状態を保っている。

小島の広さもそこそこあるから運動なんかも出来るし、釣りのようなレジャーも可能だろう。外に貼り付けられた映像を弄れば、すぐに南国から別の景色に切り替えることも多分可能だ。そう簡単には飽きない。

しかし、それでもだ。あくまでもこれらは避暑地としての高い完成度はあつても、定住するためのものじゃない。欲しい物は何でも揃う。だけど自分が外に出ることは許されない。周りの人が困るから。

言い方は悪いが、これじゃあここはいわば非常に環境の整つた箱庭か監獄だ。やはり

この学園は微妙に信用できない。

おまけにさつきお客さんが滅多に来ないと言っていた。一応ではあるが防護服を着れば能力の影響は防げるというのだ。つまり茂木はこんな所でほとんど独りぼっちだったということになる。

精霊たちが居るから独りぼっちではないともとれるが、その精霊の力でこんな所に押し込められる結果になったのだから皮肉だ。

「遊児……お前怖い顔してるぞ」

「……………ああ。いや、すまなかった。人の部屋でこれは無いよな」

「いいよ別に。よく分からないうけど、どうやら僕の様子を見て怒ってくれたみたいだし。だけど僕も外に中々出られない以外は割と満足してるんだ。だから大丈夫」

十代に諫められ、流石にこれは無礼だったと頭を下げると、茂木は気にしないで軽く笑ってみせた。

「へえ。そんなことが」

「ああ。あの時はまいったぜ。森の中で黒いスライムみたいな奴に襲われた時にはもうダメかと。遊児の精霊が居なかったらヤバかった。なっ！」

「いやあの時はこっちこそ十代に助けられたしな」

気を取り直し、俺達は茂木と色々な話をした。どうしても共通の話題である精霊関係や、俺の幻想体関係の話が多かったが、それ以外に茂木はなんて事の無い普通の話も好んだ。本当になんて事の無い、穏やかな日常の話を。

その間幻想体達も、部屋で普通に他の精霊達と遊んでいたのは印象深かった。特にレティシアとテディは生き生きとしていて、それを葬儀さんが少し離れた所から静かに見守っている様子は、どことなく保護者か何かのように感じられた。

ちなみに大鳥と審判鳥は不参加。葬儀さん曰く、あまり力量差がありすぎると他の精霊達が怯える可能性があるから森の巡回に行っているという。罰鳥は普通の小鳥のように俺の肩に留まったままだ。下手に攻撃しなければ実におとなしい。

ウエルチアースは相変わらずよく分からなかったが、今回地味に一番忙しかったのはヘルパーだったかもしれない。元々万能型家事ロボットとして造られたポテンシャルを遺憾なく発揮し、子供組の精霊の相手をしていたのだから。……タブー関連の事を予め皆に伝えておいてよかった。

「……やっぱり精霊達はこうしてのほほんとしている方が幸せだと思っただよ。無理やり使い手の勝手にデュエルをさせられるよりはね」

話している最中、茂木は精霊達をそうぼつりと呟いた。いよいよ本題ってことか。

「茂木はデュエルは嫌か？」

「……いいや。やつぱり嫌じゃない。昨日の十代とのデュエル。あれは久しぶりに楽しかった。熱くなれた」

「そうだろうさうだろう！ やつぱデュエルは楽しいもんだよなー！」

茂木の言葉に十代がそう返す。ただ、茂木はだけどと前置いてさらに続けた。

「だけど、いつもあれじゃあ疲れちゃうし、僕の精霊達もそうなんだよ。もけもけだつてそう」

『もけもけ』

茂木は宙に漂っているもけもけを軽く撫でる。さつき漂いながら俺に当たった感触もあつたし、どうやらもけもけも普通に実体化出来ているようだ。

「あの時もけもけは一瞬だけやる気を出していたけど、あのすぐ後に元に戻った。誰でもずつとやる気を出していられるわけじゃないんだよ。君達みたいだね。熱くなるのはたまにで良いんだ」

いや、俺はそこまでやる気にあふれている訳じゃないんだけど。そのデュエル^十馬鹿^代は別として。

「だから僕は今でも無理やり戦わされている精霊達をデュエルから解放したいと思つている。ただ、昨日の十代とハネクリボーみたいに、自分でデュエルを望んでいる人と精

霊のコンビが居るのも分かった。人それぞれなんだよ」

そう言つて茂木はいつものように穏やかな笑みを浮かべた。……とりあえず、こつちの精霊を無理に解放しようとしなないみたいで助かったな。

それからしばらく雑談とケーキのお代わりを楽しみ、大分時間も経つてしまったのでそろそろお暇することになった。

「ああ食つた食つた! 悪いな! お土産まで貰つちやつて」

「どうせ僕には食べきれないし、帰ったらあの時来てた友達と一緒に食べてよ」

何回もお代わりまでして、その上土産まで貰つて十代もほくほく顔だ。ちなみに俺も貰つた。これはどつちかつて言うど幻想体達のだ。……ヘルパーはどう食べるんだろうか?」

「……そうだ! 茂木。ちよつと良いか?」

「うんっ!?! なんだい?」

「次はいつ頃が良い? 互いの都合もあるし、予定は早めに立てておいた方が良くからな」

「……? 予定つて何の?」

「決まってる。またここに遊びに来る日の予定だよ」

俺がそう言うのと、茂木は少しだけ目を丸くした。

「また……来てくれるの?」

「おうよ! 次はまたデュエルしような。あとあのケーキ美味かったからまたご馳走になるぜ!」

「おい十代言い方っ!? ……まあ俺も下心がない訳じゃないけどな」

俺も頭を掻きながら真面目な顔をする。

「実を言うと………時々こうして幻想体達をのびのびさせられる場所が必要なんだ。なにぶん俺の部屋じゃ手狭だからな」

これこそが俺がここに来た個人的な思惑。幻想体達もたまには羽を伸ばしてのんびりしたいだろうけど、俺の部屋ぐらいいしか実体化できる場所はない。

かといってあそこじゃ走り回ることもできない。さぞストレスが溜まるだろう。そのストレスをここののんびりした雰囲気の中で解消させようという考えだ。

「無論もてなされてばかりじゃ悪いから、こっちからも手土産の一つや二つ用意する。そういう下心があつてのことだから、来てくれるのなんて言わなくていいんだ。むしろ来てても良いよ。……友達なんだから」

「友達?」

「ああ。一緒に話をして、一緒に食事をして、デュエルも……まあ十代とはやったな。そして家に遊びに行つたし、次に遊ぶ約束もした。あと、互いの精霊同士も仲良くなった。ここまで来たら一応友達と言つても良いんじゃないかな？」

「ああ。その通りさ。俺らもう友達だろ？ 違ふのかよ？」

そこに十代も割り込む。茂木は少しだけ俯いたかと思うと、

「……しようがないな。友達の頼みじゃ仕方ない。その内また来ても良いよ！」

そう言つて今までより少しだけ、少しだけ晴れやかな顔で茂木は笑つたのだつた。

閑話 幻想体紹介 その一

『幻想体 キュートちゃん』

星2 ATK1000 DEF800 獣族 地

効果

- ①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフォトカウンターを2個乗せる。
- ②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを2個乗せる。
- ③自分のターン終了時、カードに乗っているクリフォトカウンターを1つ取り除く。
- ④自分のターン終了時、このカードにクリフォトカウンターが乗っていない場合、このカード以外のフィールド上の最も攻撃力の低い表側表示モンスターを破壊する。対象が居ない場合このカードを破壊する。

白くてふわっふわの子犬。とても可愛らしい。ただ……腹ペコで脱走する時だけにご用心。ヒ○グマがり○グマになるぐらい変わる。

『幻想体 雪の女王』

星5 ATK1900 DEF2000 魔法使い族 水

効果

- ①このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを3個乗せる。
- ②1ターンに1度、相手フィールド上のこのカード以下の攻撃力の表側表示モンスター1体を除外し、攻撃力を300アップする。相手プレイヤーはLPを1000払うことでこの効果を無効にできる。
- ③このカードが戦闘で破壊された時、効果で除外したモンスターは除外した時の表示形式でフィールドに戻る。
- ④自分フィールド上に『幻想体 火の鳥』が召喚、特殊召喚、リバースされた時、このカードを破壊し、互いに1000ダメージを受ける。

意外に武闘派の女王様。剣もガンガン振るう。タイマン勝負に勝つとプレゼントをくれる気前の良さ。……ただし何故か火の鳥と相性最悪。

『幻想体 宇宙の欠片』

星2 ATK1000 DEF1200 天使族 光

効果

- ①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフオートカウンターを2個乗せる。
- ②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを2個乗せる。
- ③このカードが戦闘を行う時、相手プレイヤーに500ダメージを与える。
- ④自分のターン終了時、カードに乗っているクリフオートカウンターを1つ取り除く。
- ⑤自分のターン終了時、このカードにクリフオートカウンターが乗っていない場合、互いのプレイヤーに800ダメージを与える。その後このカードにクリフオートカウンターを2個乗せる。

不定形の宇宙人。今の身体は子供の絵をモデルにしたもの。人間に好意的ではあるけれど、仲良くするには狂気に陥る必要があるから困りもの。

『幻想体 蓋の空いたウエルチアース』

星1 ATK700 DEF400 魚族 水

効果

①1ターンの1度、モンスターの攻撃宣言時に発動できる。攻撃宣言を行ったプレイヤーはデッキトップをめくり互いに確認する。モンスターであればレベルの合計×100LPを回復する。モンスターでない場合、攻撃宣言をしたモンスターを除外する。その後めくったカードをデッキに戻してシャッフルする。この効果は相手ターンでも使用できる。

②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを1個乗せる。

エビ頭の漁師と自動販売機。自販機からはジュース飲み放題。飲むだけで体力が回復するので結構便利。……ただし最初から蓋が空いているものは即死トラップ。

『幻想体 ラ・ルナ』

永続魔法

① 自分フィールド上のモンスター1体を選択し、ラ・ルナトークン（星6 ATK2200 DEF1700 天使族 光）を特殊召喚。その後このカードにクリフオトカウンターを3個乗せる。選択したモンスターは、このカードがある限り攻撃が出来ない。

② 選択したカードが場を離れた時、このカードとラ・ルナトークンは破壊される。

③ 1ターンに1度発動可能。このカードのクリフオトカウンターを1つ取り除き、LPを1000払う事で、次の自分のターンまで自分フィールド上のモンスターの攻撃力は8000アップする。

④ ラ・ルナトークンが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを4個乗せる。

⑤ 自分のターン終了時、カードに乗っているクリフオトカウンターを1つ取り除く。

⑥ 自分のターン終了時、このカードにクリフオトカウンターが乗っていない場合、このカードを破壊し、ラ・ルナトークンも破壊される。

ピアノと老婦人。どんな人でも上手く弾けるピアノ。ただし弾いていると老婦人が暴れる。しかも強い。命を削った演奏中は仲間の力を引き上げるのでかなり有能。だけど使いすぎに注意。

『幻想体 1. 76 MHz』

永続罨

効果

①このカードを(星2 ATK0 DEF1700 雷族 光)モンスター扱いで、準備表示で特殊召喚する。

②特殊召喚に成功した時、このカードにクリフフォトカウンターを4個乗せる。

③このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを2個乗せる。

④1ターンに1度発動可能。互いのプレイヤーに、それぞれ自身のモンスターの置かれていないモンスターゾーン×200のダメージを与える。

⑤自分のターン終了時、このカードに乗っているクリフフォトカウンターを1つ取り除く。

⑥自分のターン終了時、このカードにクリフフォトカウンターが乗っていない場合、互いのモンスターゾーンを1つずつ選択し、このカードが居る限り使用不能にする。その後このカードにクリフフォトカウンターを4個乗せる。

肉体を持たない電波そのものの幻想体。近くに居るだけで怒りっぽくなる。その上勝手に陣地を広げていくので放っておくと面倒。あと目が疲れる。

『幻想体 三鳥 審判鳥』

星8 ATK2800 DEF2300 鳥獣族 光

効果

- ①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフオートカウンターを2個乗せる。
- ②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを4個乗せる。
- ③1ターンに1度、相手フィールド上の守備表示モンスター、又は裏側表示のカードを全て破壊する。
- ④自分のターン終了時、このカードに乗っているクリフオートカウンターを1つ取り除く。

⑤自分のターン終了時、このカードにクリフオートカウンターが乗っていない場合、フィールド上の守備表示モンスター、又は裏側表示のカードを全て破壊し、その数×8

00ダメージを互いに受け、このカードにクリフオートカウンターを2個乗せる。対象が居ない場合、このカードを破壊する。

三鳥というのは独自設定の名前。三位一体の黒き森の怪物。ある事情で目を失ったので、自身の天秤が決まった方に傾いているの気付いていない。……あるいは知らないフリかもしれないが。

範囲攻撃は単体でも厄介だが、合体すると手に負えない。

『幻想体 死んだ蝶の葬儀』

星4 ATK1500 DEF1300 昆虫族 光

効果

①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフオートカウンターを2個乗せる。

②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを3個乗せる。

③1ターンに1度発動可能。相手フィールド上の表側表示モンスター全ての攻撃力、守備力をエンドフェイズまで500下げる。

④自分のターン終了時、カードに乗っているクリフトカウンターを1つ取り除く。

⑤自分のターン終了時、このカードにクリフトカウンターが乗っていない場合、フィールド上の攻撃力、又は守備力が1000以下のモンスターを全て破壊する。その後このカードにクリフトカウンターを2個乗せる。

蝶男。喪服、棺桶、装備で造れる二丁拳銃と、中二病の琴線に触れまくる奴。眷属の蝶を操って攻撃する様は中々に美麗。あと倒れた時の独特のモーションも好き。

『幻想体 魔法少女 憎しみの女王』

星7 ATK2300 DEF2300 魔法使い 光

効果

①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフトカウンターを2個乗せる。

②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを4個乗せる。

③このカードが戦闘を行ったターンのバトルフェイズ終了時、その回数だけこのカードにクリフトカウンターを乗せる。

④1ターンに1度発動可能。相手モンスターを戦闘で破壊した時、カードを1枚ドロウする。そのカードが幻想体モンスターだった場合、公開することでエンドフェイズまで攻撃力を500アップし、もう1度攻撃が出来る。

⑤自分フィールド上のモンスターが墓地に送られる度、クリフオトカウンターを1つ取り除く。

⑥自分のターン終了時、このカードにクリフオトカウンターが乗っていない場合、互いのプレイヤーは手札を全て捨て、このカードの攻撃力分のダメージを受ける。その後このカードは手札に戻る。

⑦⑥の効果発動時、自分フィールド上に『幻想体 魔法少女 貪欲の王』か『幻想体 魔法少女 絶望の騎士』が居る場合無効に出来る。

愛と正義の魔法少女。ただし凄まじく精神的に不安定。機嫌が良い時は共に戦う心強い仲間だが、一度ヒステリーを起こすと怪物と化して敵味方問わずなぎ倒す。彼女が正義であり続けるためには、倒すべき悪が居なくてはならない。

『幻想体 たった一つの罪と何百もの善』

星1 ATK300 DEF200 天使族 光

効果

① 1ターンの1度発動出来る。自身のフィールド上のカードの数×300のLPを回復する。

② 1ターンの1度発動出来る。自分の手札の枚数×300のLPを回復する。

③ このカードの①、②の効果は1ターンにどちらか1つしか使用できない。

④ このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを1個乗せる。

⑤ (??が出ている時のみ使用可能)
?????

みんな大好き罪善さん！ 描写自体は作中で語られているのに、ちゃんと召喚されたのは今回が初。

必ず最初を選ぶことになる幻想体。凄い名前と見た目のくせして善の塊。お世話を失敗してもほとんど怒らないので新人の教育には最適！ 罪善イズゴッド！

⑤の効果は遊児本人も不明。ただ妙な空欄があるぐらいの認識。??が最悪顕現した場合の最終兵器。やっぱり罪善イズゴッド！

『幻想体 三鳥 罰鳥』

星2 ATK100 DEF100 鳥獣族 風

効果

①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフオートカウンターを4個乗せる。

②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを2個乗せる。

③このカードは直接攻撃が出来る。

④このカードが攻撃を受けた時、こちらが受けるダメージは0になる。そのダメージステップ終了時、戦闘を行った相手モンスターを破壊する。

⑤自分のターン終了時、カードに乗っているクリフオートカウンターを1つ取り除く。

⑥自分のターン終了時、このカードにクリフオートカウンターが乗っていない場合、フィールド上の最も攻撃力の高いモンスターを破壊する。その後このカードにクリフオートカウンターを4個乗せる。

三鳥は独自名称。可愛い小鳥。脱走常習犯。職員がパニックを起こすと、どこからともなくやってきてつつきまわす。

パニックは収まるけれど、普通に肉体ダメージも入るので防具なしだと割と大怪我。

下手に攻撃しようものならほぼ即死級の反撃をしてくる始末。諦めてつつかれよう。

『幻想体 3月27日のシエルター』

永続罫

効果

①1ターンに1度発動可能。自分フィールド上のモンスターを1体選択する。そのモンスターはエンドフェイズまで攻撃宣言が行えず、戦闘で破壊されず、受ける戦闘ダメージが0になり、このカード以外の効果を受けない。

②効果を発動したターンのエンドフェイズ時、自分フィールド上のモンスターを1体選択し、クリフォトカウンターを全て取り除く。又は2000ダメージを受ける。

鉄壁のシエルター。「地球で一番安全な場所」が売り文句。ただし長く使っていると、他の幻想体のクリフォトカウンターが減っていく。外を凄まじく危険な場所に変えることで、相対的にシエルターを「地球で一番安全な場所」にするというトンデモ発想！
使いすぎに注意。

『幻想体 テレジア』

永続罨

効果

①LPを回復する効果が発動した時に発動可能。1ターンに1度、500LPを回復し、フィールドの魔法・罨を1枚破壊する。

②エンドフェイズ時、フィールド上のクリフフォトカウンターかPEカウンターを1つ取り除くか、このカードを破壊する。

聞いているだけで癒されるオルゴール。ただし使いすぎると逆にパニックを起こすので注意。音楽系はみんなしてそんな感じ。

『幻想体 空虚な夢』

星3 ATK1400 DEF1000 獣族 光

効果

①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフフォトカウンターを2個乗せる。

②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを2個乗せる。

③1ターンに1度、相手の攻撃宣言時に発動可能。相手フィールド上の攻撃表示モンスター1体を選択し、守備表示にする。このカードがフィールド上にある限り、そのカードは表示形式が変更できない。

④自分のターン終了時、カードに乗っているクリフオトカウンターを1つ取り除く。

⑤自分のターン終了時、このカードにクリフオトカウンターが乗っていない場合、このカードを破壊しフィールド上の全ての表側守備表示モンスターを攻撃表示にする。この効果で攻撃表示になったモンスターは攻撃力が0となり、表示形式を変更できない。

相手に幸せな夢を見せる羊。しかし夢が幸せであればあるほど、現実に戻った時に辛くなる。いくら普通に眠っても、一度起きてしまったらもうその幸せな夢は見られない。

最終的には相手が永遠に眠っていたいと懇願するようになるヤバイ羊。あとブチ切れると何故かニワトリに変身して周りを叩き起こしに来る。安眠妨害。ただで能力の雲のベッドはとも寝心地が良さそう。

『幻想体 歌う機械』

永続罨

効果

①このカードを（星5 ATK2000 DEF2000 機械族 罨）モンスター扱いで、攻撃表示で特殊召喚する。その後このカードにクリフオトカウンターを1つ乗せる。

②このカードは攻撃宣言が出来ない。

③このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを3個乗せる。

④このカードが場に居る限り、相手の攻撃可能なこのカードよりレベルの低いモンスターは、このカードに攻撃しなければならぬ。

⑤このカードが戦闘を行わなかったターン終了時、カードに乗っているクリフオトカウンターを1つ取り除く。

⑥自分のターン終了時、このカードにクリフオトカウンターが乗っていない場合、このカードを破壊し互いのプレイヤーは1000ダメージを受ける。

意志を持ったデカイ肉挽き機。意志の弱い職員を引き寄せ、自分の中に吸い寄せて自

分で勝手に作動するという厄介者。

何かを粉碎している時に流れる音楽は高い中毒性が有り、それを聞いた職員がまた間くために他の職員を放り込むという二次災害が起こりやすい。

人の都合で歌わされているならともかく、この機械が自分の意思で音楽を求めて職員を引き寄せているのだから質が悪い。他の肉で満足してもらえないだろうか？

『幻想体 魔法少女 絶望の騎士』

星7 ATK1900 DEF2600 魔法使い族 闇

①このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを4個乗せる。

②1ターンに1度発動可能。自分以外のフィールド上のモンスター1体を選択する。そのカードは次のターンまで攻撃力・守備力が500アップし、1度だけ戦闘、効果で破壊されない。この効果は相手の攻撃宣言時にも使用可能。この効果を使ったターン、このカードは攻撃できない。

③②の効果が発動中に選択したモンスターが破壊された時、フィールド上の魔法、罫を全て破壊し、互いのLPを半分にする。その後このカードは手札に戻る。

④③の効果発動時、自分ワールド上に『幻想体 魔法少女 憎しみの女王』か『幻想体 魔法少女 貪欲の王』が居る場合無効に出来る。

憎しみの女王、貪欲の王と同じ魔法少女の一人。誰かを守ることに憑りつかれた悲しき騎士。

他二人に比べて滅多なことで怒らず、職員を守る能力は非常に優秀。見た目も中々に美しいと個人的に好きな幻想体の1体。

ただし万が一ブチ切れた場合、具体的に言うのと守るべき人を守れなかった場合修羅と化す。普段落ち着いた人ほど怒ると怖い。

閑話 幻想体紹介 その二

『幻想体 オールアラウンドヘルパー』

星4 ATK1800 DEF1700 機械族 地

効果

①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフオートカウンターを2個乗せる。

②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを3個乗せる。

③自分のターン終了時、カードに乗っているクリフオートカウンターを一つ取り除く。

④自分のターン終了時、このカードにクリフオートカウンターが乗っていない場合、フィールド上の裏側表示のカード1枚を破壊し、このカードにクリフオートカウンターを2個乗せる。破壊する対象が居ない場合このカードを破壊する。

万能型家事ロボット。ただし掃除を頼むと殺人ロボットに早変わり。

どうやら量産型らしいけれど、レガシー版によるとこの機体は特別だとかなんとか。良い意味で特別だと良いけど、悪い意味で特別だったらホラーである。

実はデュエルで描写されるのはこれが初めてのヘルパー君。地味に星4にしては武闘派の性能。

『幻想体 血の風呂』

永続罠

効果

①このカードを（星3 ATK400 DEF1800 アンデット族 水）モンス
ター扱いで、守備表示で特殊召喚する。

②特殊召喚されたターン、このカードが戦闘で破壊された時、攻撃した相手モンス
ターを墓地に送り、その後自分フィールド上のカード1枚にPEカウンターを2個乗せ
る。

③このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを
2個乗せる。

時々職員を引きずり込む風呂。地味に取り込んだ職員が多ければ多いほど得られる
エネルギーが多くなるという側面も。

ストーリーを読んでいくと、リストカットによる自殺などの暗示がある地味に怖い幻
想体。

『幻想体 大きくて悪いオオカミ』

星7 ATK2400 DEF1800 獣族 地

効果

①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフオートカウンターを2個乗せる。

②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを4個乗せる。

③1ターンに1度、手札を捨てることで発動可能。相手フィールド上のモンスター1体を、このカードに装備カード扱いで装備する。このカードが戦闘で破壊された時、効果で装備されたカードは守備表示で持ち主のフィールドに戻る。

④フィールド上に『幻想体 赤ずきんの傭兵』が居る時、『幻想体 赤ずきんの傭兵』を手札に戻すことでこのカードを手札、墓地から特殊召喚できる。この効果で特殊召喚した場合、①の効果は無効となる。この効果はデュエル中1度だけ使用できる。

⑤自分のターン終了時、このカードに乗っているクリフオートカウンターを1つ取り除く。

⑥自分のターン終了時、このカードにクリフオトカウンターが乗っていない場合、このカードのコントロールは相手に移り、クリフオトカウンターを2個乗せる。

何かの物語に登場する悪いオオカミの一つ。あるいは総体。

悪であれかしと望まれ、そのように行動している一種の必要悪。

ある赤ずきんとは天敵同士。出会ったら即周りを巻き込んだ殺し合いが始まるレベルでの仲の悪さ。決して近づけてはならない。

『幻想体 幸せなテディ』

星4 ATK1500 DEF1200 獣族 地

①このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを3個乗せる。

②このカードが攻撃表示の時、1ターンに1度戦闘で破壊されない。

③このカードと2度戦闘を行ったモンスターは、ダメージステップ終了時に破壊される。

愛され、忘れ去られ、捨てられたテディベア。

見た目の大人しさとは裏腹に、同じ人が連続でお世話をすると抱きしめて背骨を折り

に来る厄介なクマ。

だけどその理由が「仲良くなった（あるいはこれからなる）人ともう二度と離れたくないから」というのがどうにも切ない。

『幻想体 母なるクモ』

星3 ATK1900 DEF1000 昆虫族 地

効果

①このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを2個乗せる。

②このカードは直接攻撃が出来ない。

③1ターンに1度、自分のスタンバイフェイズに子蜘蛛トークン（星1 ATK500 DEF500 昆虫族 地）を準備表示で特殊召喚する。

④子蜘蛛トークンが戦闘で破壊された時、戦闘したモンスターを破壊しこのカードにPEカウンターを2個乗せる。

子蜘蛛見守り系親蜘蛛。

産まれた子蜘蛛を非常に可愛がっていて、うっかり一匹でも潰そうものなら即ブチギレ案件。相手がどんなに強かろうが即死が入るといふ初見殺し。

ただ子蜘蛛を殺さず、しっかりとエサさえ欠かさなければ意外と落ち着いているのでまだ管理しやすい方。

『幻想体 魔法少女 貪欲の王』

星7 ATK2800 DEF1500 魔法使い族 闇

効果

①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフオートカウンターを1個乗せる。

②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを4個乗せる。

③このカードの攻撃宣言の際に、自分はこのカード以外の自分フィールドのカードか、手札を1枚墓地に送らなければならない。

④このカードが攻撃したダメージステップ時、その攻撃力はエンドフェイズまで500アップする

⑤自分のターン終了時、カードに乗っているクリフトカウンターを1つ取り除く。

⑥自分のターン終了時、このカードにクリフトカウンターが乗っていない場合、フィールド上のこのカードより攻撃力の低いモンスターと、裏側表示のモンスターを全て破壊する。その後、互いのプレイヤーに1000ダメージを与え、このカードにクリフトカウンターを1個乗せる。

⑦⑥の効果発動時、自分フィールド上に『幻想体 魔法少女 憎しみの女王』か『幻想体 魔法少女 絶望の騎士』が居る場合無効に出来る。

別名強欲の王とも呼ばれている幻想体にして魔法少女。

自らの欲望を制御できず、護るべき世界を喰らう怪物に成り果てた者。

攻撃力の高さだけなら幻想体の中でも上位だが、常に満たされぬ空腹に悩まされている燃費の悪い腹ペコ少女。

化け魚モードの時は、正面に居る者を敵味方問わず食らいついでいくので近寄りたくない。……ただし基本真つすぐにしか行けないので背中はがら空き。

『幻想体 赤ずきんの傭兵』

星6 ATK2100 DEF1500 戦士族 闇

効果

①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフオートカウンターを3個乗せる。

②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを4個乗せる。

③このカードは、フィールド上のPEカウンターを4つ取り除くことで手札から特殊召喚できる。

④自分フィールド上に『幻想体 大きくて悪いオオカミ』が居る時、このカードは召喚・特殊召喚ができない。

⑤相手フィールド上に『幻想体 大きくて悪いオオカミ』が居る時、このカードを手札、墓地から特殊召喚し、攻撃力を500アップする。この効果で特殊召喚した場合、①の効果は無効となる。この効果はデュエル中1度だけ使用できる。

⑥自分のターン終了時、このカードに乗っているクリフオートカウンターを1つ取り除く。

⑦自分のターン終了時、このカードにクリフオートカウンターが乗っていない場合、互いのプレイヤーに800ダメージを与え、このカードにクリフオートカウンターを3個乗せる。

プロの傭兵。オオカミの被害者にして復讐者。

互いの身体中に刻まれた傷跡は、幾度となくぶつかった殺し合いの歴史そのもの。互いが互いの天敵であるため、出会って1秒で殺し合いに発展する仲の悪さ。

ただし、対価さえ払えば傭兵としてしっかりと働く面も。オオカミがいなければギリギリ話の分かる常識人。

『幻想体 狂研究者のノート』

装備魔法

効果

①このカードは、クリフトカウンターかPEカウンターを乗せたカードにしか装備できない

②1ターンに1度、このカードを装備したモンスターの攻撃終了時、乗っているカウンターを全て取り除くことでもう1度攻撃できる。

③効果ダメージが発生した時、このカードを装備しているモンスターを破壊する。

④このカードの効果で装備モンスターが破壊され墓地に送られた時、このカードは手札に戻る。

なぜか身に着けると強くなる不思議なノート。対象が文字の読めないものでも効くというから実に不思議。

ただし持ち主が一定以上のダメージを受けるとなぜか爆発四散するという不思議ノート。ホントに訳が分からない。

『幻想体 三鳥 大鳥』

星6 ATK2200 DEF2200 鳥獣族 炎

効果

①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフオートカウンターを5個乗せる。

②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを4個乗せる。

③フィールド上のモンスターが墓地に送られる度、このカードのクリフオートカウンターを1つ取り除く。

④相手の攻撃宣言時に発動可能。攻撃対象をこのカードに移し替えてダメージ計算を行う。

⑤相手バトルフェイズ時、このカードが場に居る限り、攻撃可能なモンスターは全て攻撃しなければならない。

⑥自分のターン終了時、このカードにクリフオートカウンターが乗っていない場合、こ

のカードを破壊する。その後場のカードを1枚破壊し、そのコントロールラーに1000ダメージを与える。

深く暗い森の守護者にして三鳥の一羽。

当初森に現れたとされる『怪物』から住人を守るべく巡回していたが、〃『怪物』に惨たらしく殺される前に自分が安らかに死なせてあげた方が救いになる〃という歪んだ思考に囚われ、やがて自らが『怪物』に成り果てる。

葬儀と同じく善意から悪行を成す者。ただし精霊化したのがまだ『怪物』に成り果てる前のタイミングだったため、今は正しく森の守護者として行動している。

『怪物』に堕ちるか守護者として踏み止まるかはこれからの遊兎次第。

『深く暗い森』

フィールド魔法

効果

①互いのプレイヤーは自分の場の最も攻撃力の低いモンスターからしか攻撃宣言を行えない。

②獣、鳥獣、獣戦士族以外のモンスターの攻撃宣言時、エンドフェイズまで攻撃力が600ダウンする。

③自分の場に『幻想体 三鳥』が居る時、自分のターン中①、②の効果は無効となる。

④(『怪物』が出ている時のみ使用可能)

三鳥が棲んでいた森。

かつてそこは多くの命で満ちていたのだろう。しかしもうそこに居るのは、歪み果てて守るべき者を失った孤独な『怪物』ただ一羽のみ。

今日もまた『怪物』は森を巡回する。殺して救うべきものを探して。

閑話 模倣、再現、そして…… その一



ある日のこと。

イエロー寮のデュエルスペースの一つで、ラーイエローの生徒二人がデュエルに興じていた。

「俺のターン。魔法カード『ハリケーン』を発動！ これでお前の場の『スピリットバリア』は手札に戻り、『リトマスの死の剣士』の攻撃力は0になる。そして、俺は『サイバネティック・サイクロプス』を攻撃表示で召喚！ リトマスの死の剣士に攻撃だ！」

どこか機械的な見た目の単眼の戦士が、リトマス紙を由来とした双剣士に攻撃を仕掛ける。死の剣士は効果で戦闘破壊こそされないものの、その攻撃力は今や0。サイクロプスの攻撃の余波が、そのままプレイヤーのLPを削り切った。

「うわああっ!？」

攻撃を受けた生徒ががっくりと膝を突き、そして勝負が着いたことでソリッドビジョンはすうっと消えていく。後に残るはデュエルに興じていた二人のみ。

「うっしやく！へへっ！助かったぜ神楽坂！これで次の授業で三沢に当たる前にこのデツキの調整が出来た」

「ああ。だけど」

「分かってるって。デュエルの前に聞いたことはちゃんと覚えてるよ。〴〵似せてはいるけど本人じゃない”。あくまで参考程度にしろ？ ……じゃ、俺は部屋に戻るわ。またよろしくな」

勝った生徒はそうしてその場を去り、負けた生徒……神楽坂はそのまま軽く息を吐いた。

（再現率90、いや85%って所か。本物の三沢なら、あそこでハリケーンを封魔の呪印で防げていた……いや、そもそも前のターンで押し切れていたか？俺のなり切りもまだまだってことか）

神楽坂は今のデュエルの反省点を脳内でまとめながら膝の埃を払い、ポケットの小型端末を取り出して確認する。

（え〜つと。次はクロノス教諭が二件か。やはり人気だな。……少し休んでから行くとするか）

そう考えた神楽坂は近くに用意された椅子に腰掛け、置いていたカバンからノートとテーブルを広げると、猛然と今のデュエルの流れを書き込み始める。

もちろん休むことも忘れてはいない。疲労回復のために購買で買っておいたスポーツドリンクを呷り、チョコレートを一つ口に放り込んで糖分も摂取する。

「……まだだ。もう少し。もう少しで何か……」

一心不乱にペンを走らせながらそうポツリと漏らす神楽坂。その顔はやる気に満ちていた。

時間は少し前に遡る。

「デュエルのレポート……ですか？」

「そうなの？ネ。所属や勝敗は問いませんが、最低50人とデュエルしてそのデュエルの流れや反省点などをレポートにまとめること。それがアナタがやったことに対する罰なの？ネ！」

他の生徒がさつさと次の授業に向かう中、少し話があると残された神楽坂に対しクロノス教諭は厳しい顔をしながらそう告げる。

以前あった、初代デュエルキング武藤遊戯のデッキ特別展示会。あれは前日の夜中にケースが壊されるというハプニングがあったものの無事開催された。

もちろん表向きの話はだが。

実際には神楽坂のやったのは器物破損に加えてデツキの窃盗である。しかもあの武藤遊戯のデツキとくれば、その価値は計り知れない。本来なら良くて降格処分。場合によつては退学処分や最悪法の下に断罪されるべき罪状だ。

だが厄介なことに神楽坂は盗んだデツキを使用し、武藤遊戯を彷彿とさせるほど再現度の高いデュエルを行つてみせた。

そしてそのデュエルを見た多くの生徒から、神楽坂の処罰を軽くするよう嘆願書が届いたのだ。確かに悪行ではあるが、それによつてこのデツキが力を発揮する瞬間を見ることが出来たからと。

その数が一定以上有り、その上署名した者の中にカイザーや天上院明日香と言つた成績優秀かつ影響力のある生徒も居るのだからたまらない。

さらにデツキが盗まれた時にケースの管理をしていたのは他でもないクロノス教諭。全てを公にすれば自分の責任問題に発展しかねない。

なのでクロノス教諭も苦肉の策として、「前日にデツキを見に来た生徒がケースに詰め寄り、誤つてケースを破損させてしまった」というバックストーリーで誤魔化すというハメになった。あくまで故意ではなく事故。窃盗など起きてはいないという風いだ。

かくして神楽坂は表向きは器物破損による嚴重注意だけで済んだのだが、それでは腹の虫が収まらないのがクロノス教諭。

(結局、故意ではないにせよケースを破損させてしまったということで、私も校長から注意を受けるハメになったノ〜ネ。それもこれもこの神楽坂のせいノ〜ネ)

本来処罰などは所属している寮の寮長、つまりイエローである神楽坂なら寮長の樺山先生が行うもののだが、こうして直々に難しい課題を神楽坂に与えに来るほどには怒っていた。

「期限は一か月。元々筆記試験では成績優秀なアナタならそこまで難しくはないはずノ〜ネ? 出上ががったレポートは私に提出するように。じゃ! そういうことで」

クロノス教諭はそれだけ言うと言と身と身を翻して去っていく。その顔には僅かに嗜虐の笑みを浮かべながら。

一か月で五十人以上とデュエル及びレポートの提出。それだけ聞けばそこまで難しくはないように思える。しかしそれはそれだけに集中できればの事。

当然毎日の授業もあるし、各先生方の課題などは別物だ。そんな中で単純に考えて一日最低一つないし二つのレポートを書き上げる。……一か月でこれはかなりの難行と言える。

(これで失敗すれば処分の大義名分が出来、仮に成功しても他の授業が疎かになっていくことは確実。やはり成績不振を元に堂々と降格処分が下せるノ〜ネ! ウシシシシ。我ながらナイスアイデアノ〜ネ)

そう考えていたクロノス教諭だが、彼の唯一の誤算は神楽坂のその瞳が全く闘志を失っていないなかったのを見ていなかったことだろう。

(これが俺への罰か。……ハッ！ 好都合じゃないか)

神楽坂はこれは良い機会だと思った。

自分の行ったことは決して許されることではない。デュエルで負け続け、悩み、自分を見失った結果があのだ。デッキ盗難事件だ。

あの時、仮にとは言えデュエルキング武藤遊戯のデッキを手に入れ、そのデッキの力に酔いしれた。

これならもう俺は誰にも負けない。深く武藤遊戯のデュエルを研究し、彼のプレイングを再現できるであろう俺ならば、もう誰にも。

今にして考えれば、それは間違いなく思い上がりだった。何故ならそのやり方では出来るのはそのデッキが使われた当時の再現だけ。

デュエルモンスターズの歴史は日々進歩し、カードもどんどん新しいものが出ていく。本来の使い手もその都度新しいカードを取り入れたり、新しい戦術を編み出すのが普通だ。当時の再現に留まってしまっただけは、それこそ本来の使い手に遠く及ばない。

そして、その思い上がりを正してくれたのがあのオシリスレッドの生徒、久城遊児だった。

（「どんなに自分の作ったデツキが誰かのデツキに似ようが、自分だけの使い方をすればそれは間違いない俺の力」……か）

最強のデツキを用いてなお倒され、思い上がりは完膚なきまでに打ち砕かれ、もうデュエルを続ける意思すらなくなりかけていた時、久城が俺に向けて言った言葉。

たとえデツキが借り物であっても、自分の心まで借り物にしなくて良い。それを聞いた時、自分の淀んでいた心が少しだけ楽になった気がした。もう一度やり直してみようと思えた。

そして皆が大目に見てくれていたとはいえ、自分のやったことに対して心の中で燻っていたこの罪悪感。それをこうして償える機会まで与えてもらえた。これで奮い立たなくて、またアイツの前に立って戦いを挑むなど到底無理なこと。

（見てろよ久城。俺は必ずこの課題を終わらせて、俺のやり方で必ずお前の前に立つ）
そうして神楽坂は決意を新たにした。目指す者が居て、やるべきことがある限り、ここで止まっている暇はないのだから。

（とは言え、これからどうしたものだろうか？）

一度自室に戻り、これからの考えを纏める神楽坂。なにせ時間は限られている。

休みの日以外は毎日授業があるし、それぞれの授業で課題が出されることもしばしば。クロノス教諭の目論んだように、意外と一日にデュエルとレポートに回せる時間は少ない。

(簡単な内容であれば数はこなせる。レポートも書き上げるだけなら何とかなる。だが……それじゃ得られるものは少ない)

あくまで課題を達成することは最低条件だ。神楽坂は、この課題の中でさらに自分の殻を破ろうとしていた。

以前久城に切った啖呵。『俺はもつとなり切りを極める。様々な使い手になり切り、そして持ち主の使い方を完全に再現し、その上で俺だけのより良い使い方を見つけてみせる!』という言葉。だがああは言ったものの、完全に再現するだけでも実はまだムラがある。

以前武藤遊戯のデッキを使った時は、いわば絶好調の時だった。……それでも完全とはとても言えず、久城に倒されてしまったが。

他のデッキでも大体似たようなものだ。出来が良くても平均して精々7、80%ぐらいの再現度。デッキを似せ、服装や仕草なんかも真似て無理やり引き上げてはいるけど、これじゃ本人はもちろん他の奴にも普通に負ける。

その上神楽坂が目指しているのは再現を超えたその先。今のままではとても届かな

い。

「一体どうしたら……うんっ!？」

コンコンコンと、静かな部屋にノックの音が響き渡る。

神楽坂が扉を開けると、そこに立っていたのは、

「やあ。ちよつと良いかな？」

「……何しに来たんだよ。三沢?」

ラーイエローの首席。最もオベリスクブルーに近いと言われている男。三沢大地だった。

閑話 模倣、再現、そして…… その二

いきなり押しにかけてきた三沢に少し複雑な思いを抱きながら、神楽坂は仕方なく部屋に招き入れる。

「なんだよ急に。……何か飲むか？ コーヒーぐらいなら買い置きがあるけど」

「ありがとう。……それとすまない。さつき偶然神楽坂とクロノス教諭の話聞いてしまったんだ。盗み聞きのようになってしまったのは謝る」

「別に良いよ。謝るな。むしろ……」

入ってくるなり謝ってくる三沢に、神楽坂は軽く言葉に詰まりながらも素早く部屋の冷蔵庫から缶コーヒースタックを取り出して投げ渡す。

二人してコーヒースタックを飲み、そのまま気まずい沈黙が部屋に漂う。……先に沈黙を破つたのは神楽坂の方だった。

「……それで何の用だよ？ 話を聞いてたんなら俺が忙しいって分かるだろ？」

「ああ。実は、何か俺に手伝えることはないかと思つてな」

「手伝い？ お前がか？」

神楽坂が困惑しながら確認すると、三沢はしっかりと頷く。

「……はっ！ 手伝いなんか要らないね。これは俺の問題だ。お前はさっさと」
「頼む」

すげなく断ろうとした神楽坂だが、その言葉は途中で止まった。なんと目の前で、三沢が静かにそう言つて頭を下げてきたからだ。

「おいおい逆だろ。なんで手伝う側が頭下げてるんだよっ!? 頭を上げろよ」

慌ててそう言う神楽坂だが、三沢は頭を下げたまま動こうとしない。

（つたく。調子が狂うな）

神楽坂は内心複雑だった。目の前の男に対しては色々と思う所がある。

三沢大地。ラーイエローの首席にして、なろうと思えばいつでもオベリスクブルーになれるくせして、敢えて自分からここに留まってる変わり者。

（余裕ぶつてんじゃない。さっさと上に行くなら行けよ。そうすればその分席が空く）

このランク主義の学園の中でそんなことを普通にする三沢に、まるで見下されているようで神楽坂はあまり良い印象を持っていなかった。

だが、正直自分一人では行き詰りかけていたのも事実。合理的に考えれば、わざわざ向こうから協力してくれるというのだから断ることもない。

神楽坂は自分の頭の中で意地やプライドや見栄と合理性を天秤にかけ、僅かに合理性に傾いたのを確認し軽くため息を吐く。

「ああもうっ！ 分かったよ。何だか知らないが手伝いたいなら勝手に手伝えよっ！」
「本当だなっ！ ありがとう」

三沢はその言葉を聞くなり頭を上げて破顔する。

「……で？ 手伝うと言つても、一体何を手伝つてくれるんだ？」

「問題はそこだな。課題は確か50人以上とデュエルしてそれぞれの内容をレポートにまとめるというものだよね？ ……出来そうなのか？」

「数をこなしてレポートを書くだけならな。だけど考えてみたら、そもそも都合よく相手が居るかどうかな」

この課題の地味に厄介な所は、50戦ではなく50人と戦えという点。つまり同じ相手と何度も戦つて数を稼ぐということが出来ない。

もちろん神楽坂もデュエルに付き合ってくれそうな友人はそれなりに居る。しかし当然それだけで50人はいかないし、相手にも時間の都合などがある。

ならあと手当たり次第に手の空いている相手に対戦を頼んでいくということになるが、探しているだけでも骨が折れる話だ。

大会にでも参加すれば数は稼げるかもしれないが、丁度神楽坂には間の悪いことに、

時々購買部で行われるショップ大会は昨日行われたばかり。次の大会は大分先になるし、何より一度にあまり多く戦ってもレポートにまとめるのに時間がかかる。

記憶力には自信がある神楽坂だが、体力などの事も考えたと出来れば少しずつ戦ってその度にレポートにまとめたい。

「授業の合間ぐらいに少しずつ戦ってレポートを書く。それをほぼ毎日続けられれば理想的だが、流石にそううまくは行かないだろうな」

「よし。相手探しは俺も協力するぞ。知り合いの暇な奴に声をかけてみよう」

「……まあ、よろしく頼む」

力強く言ってくれる三沢に対し、神楽坂はそうぶつきらぼうに返した。手伝ってほし
いと言ったわけでもない。礼など言わないぞと思いつつながら。……ただ、

「ああ。どうせならその相手の戦いたい相手とかを聞いてきてくれ」

「……？ そんなのを聞いてどうするんだ？」

「決まってる。せっかく課題に付き合ってもらうんだ」

そこで神楽坂はにやりと笑う。

「俺のなり切りの練習も兼ねて、その人物になり切って戦ってやるよ。本物にはまだ及ばないけどな」

そして一週間後。

(……まさかこんなことになるとは)

神楽坂は以前の自分の軽はずみな行動の結果に頭を抱えていた。何故なら、

「ぜひクロノス先生で頼む！」

「俺はカイザーのデツキで！」

「あの………天上院さんでお願いします」

目の前に居るのは神楽坂との対戦希望者。それも一人や二人ではなく何人もいる。これがここ最近の彼の日常だった。

きっかけは三沢が紹介した最初の一人相手に、その生徒が戦いたいと言ったクロノス教諭のデツキを用いて戦ったことだ。

『古代の機械兵士』アンティーク・ギアソルジャーで攻撃するのくネー！」

「うわああっ!？」

比較的高い再現度でクロノス教諭になり切り、初戦を勝利で飾った神楽坂。それだけなら何の問題もなかっただろう。ただ、

「凄いなあ。まるで本物のクロノス教諭みたいだ。他の人にもなり切れたりするの?」

「まあな。俺が興味を持って調べた奴ならある程度は」

そう言つて自分のなり切れるレパトリーをつい漏らしてしまふ神楽坂。神楽坂はこれまで多くの名だたるデュエリスト達のデュエルを研究し、その度にその者に似たデツキを作つていた。

そして作つたデツキをきちんと保管していたため、デツキさえ変えればすぐに別の人になり切れる。そういった意味で話したのだが、

「そうなのか。三沢君から聞いていたけど大したものだね。……戦う相手を探しているのなら、僕も周りに呼び掛けてみるよ。じゃー！」

そう言つて去つていった生徒が、周囲にそのことを話したので話がややこしくなつた。噂は人伝に、そして少しずつ誇張されていき、しまいにはどんな人にもなり切つてデツキを使いこなせるという噂に発展。

それを聞いたら腕試しに戦つてみたくなるというのがデュエリストというもので、皆して好き勝手に戦いたいデツキを指定してくるのだから神楽坂も困り果てる。

「うゝむ。俺も七つのデツキを持つているが、まさか俺以上に多くのデツキを使いこなせるとは流石だな神楽坂」

「感心してないでこいつらを止めろよ三沢っ！ ああもうっ！ クロノス教諭だな？
今デツキを用意するから待つてろ！ それにカイザーと……何？ 天上院？ 女性
じゃないか？ そこまでなり切れるかいっ！」

もちろんなり切りも完璧ではなく、完全なその人と戦いたいという者の多くは少しずつ離れていった。だが代わりに、本物に挑む前のデツキ調整として神楽坂と戦いたいという者が現れるようになった。

神楽坂のなり切りは高い再現度ではあるが、本人にはやや及ばない。それでも仮想の練習相手としては人気があり、神楽坂には毎日何件もの対戦希望の連絡が来るようになった。

ここまで来るとむしろ人数を制限しなければいけないレベルで、三沢のスケジュール管理が無ければ神楽坂もオーバーワークで倒れていたかもしれない。

そしてその結果として、

「まさか半月で目標達成間際まで来るとは思わなかったな」

「俺自身も驚いてるよ」

元々筆記試験も成績優秀な神楽坂。レポートの書き上げもかなり早く、なんと半月にして49人と戦いそのデュエルのレポートをまとめ上げたのだ。

当然だが授業もしっかり出席しているし、多少の疲労こそあったものの適度に休息を挟んだことで身体にそこまでの問題は無い。もうここでクロノス教諭の思惑は大体破

綻していると言える。

「最初は三沢の呼んできた相手のせいでどうなることかと思っただが、結果的に人が多く集まって助かったな」

「ふっ！ 酷い言い草だな。元はと言えば、神楽坂がわざわざ相手の要望に合わせてデッキを変えたからだろうに」

「何を！」

「何だ！」

二人は軽く睨みあい……どちらともなくこらえきれずに笑い出した。そうしてひとしきり笑いあつた後、

「さて、それで神楽坂。最後の50人目は誰にするかもう決めたのか？」

「……ああ」

神楽坂は笑顔から一転して真面目な顔になる。正直な所、最初から50人目は決めていたのだ。だが一つだけ問題があった。

これまでの相手とは違い、向こうから対戦希望を貫っている訳ではない。そしてその相手に対してだけは、自分の選んだデッキで挑もうと心に決めていた。

なので、神楽坂は直接尋ねることにする。

「この一戦。お前の選ぶデッキじゃなくて、俺の選ぶデッキでの勝負を受けてくれるか

? 三沢?」

「ああ。当然だろう! 何ならそっちが俺の使うデツキを指定しても良いんだぞ?」
「ほざけよ。……全力で来い。じやなきや俺が勝つ意味がないだろう?」

余裕綽々の三沢の顔に、ほんの僅かな苛立ちと胸に灯る闘志、そして……これまでの感謝を込めて、神楽坂は不敵に笑いかけた。

閑話 模倣、再現、そして…… その三

「デュエル!!」

神楽坂対三沢のデュエルは一方的な展開を見せていた。

『ウォータードラゴン』で、『マスマティシャン』を攻撃!

「ぐうっ!」

水龍から放たれるブレスが学者の老人を吹き飛ばし、神楽坂に余波でダメージを与える。ダメージを受けた神楽坂は片膝を突いて息を荒くした。

神楽坂LP 2200 ↓ 900 手札 1 ↓ 2 モンスター なし 魔法・罠 伏せ 1

三沢LP 2800 手札 3 モンスター ウォータードラゴン 魔法・罠 なし

神楽坂のLPは1000を切り、対する三沢はまだそれなりに余裕のある2800。

そしてマスマティシャンが破壊されたことにより一枚ドロウするも、神楽坂の戦況は思わしくない。

（しかし、神楽坂は何を考えているんだ？ 自分のデッキだぞ。動きも簡単に読めることぐらい分かっているはずだろうに）

神楽坂の出したデッキ。それは三沢になり切った時のデッキだった。そして三沢も全力を尽くすために選んだデッキは当然最も自信のある七番目のデッキ。

いわばミラーマッチになったわけだが、そうなるのとあと試されるのは純粋に互いの運と技量のみとなる。そして運はともかくとして、技量という点では明らかに三沢に一日の長があつた。

「俺はカードを二枚伏せてターンエンド。……神楽坂。何故このデッキにした？ お前自身が言ったんじゃないか。お前のなり切りはまだ完全じゃないって。どんなに調子が良くても90%ぐらいしか再現できないって」

「……ああ」

「だったらなんでこのデッキで俺に挑む？ このデッキじゃ俺に勝つのは難しいだろうに。他にも幾つも扱えるデッキはあつたはずだ」

実際ここまでのプレイングを見ると、僅かにだが三沢の方がデッキの動きが常に的確だった。ほんの僅かな差であろうと、繰り返ししていけばそれは大きな差となる。それは今の状況を見れば明らかだろう。

それならまだ他のデッキ、今の所再現率の高いクロノス教諭などのデッキの方がまだ

勝ちの目が出る。もちろん三沢としては、どんなデッキが相手でも負けるつもりはなかったが。

「うるさいな。分かっているよ。……確かにその通りだ。本来の使い手相手に同じ戦法で挑んでもこっちの方が不利」

ゆらりと神楽坂は力なく立ち上がる。痛みはないがダメージの度に衝撃はそこそこあるので疲れはする。しかし、身体はフラフラでもその瞳はまだ闘志をなくしていない。

「だから……ここからは俺の戦法だ。俺のターンっ！」

少しだけ、神楽坂の雰囲気が変わったように三沢には感じられた。神楽坂は気合を入れてドローし、引いたカードを見る。そして、

「手札から『強欲な壺』を発動！ カードを2枚ドローする。……行くぞ！ 俺は手札から儀式魔法『リトマスの死儀式』を発動！」

この瞬間三沢は少しだけ迷った。今自分の場に伏せてあるのは『ラスト・マグネット』と『封魔の呪印』。封魔の呪印を発動すれば、リトマスの死儀式を無効にすることが出来る。

しかし気がかりなのは、今この瞬間場には表側表示の罫は無いという点。つまりリトマスの死の剣士の攻撃力は0のまま。こちらのウォータードラゴンを倒すことはでき

ない。

戦闘破壊耐性があるので守備表示で出して壁にするとという手もあるにはあるが、本当にそれだけだろうか？

（だとすれば狙いは……そうか！ あの伏せカードが罠だとすれば、それで攻撃力を上げてウォータードラゴンを倒すという算段だな！ ならば……）

「俺は手札の『二重魔法』を捨てて罠カード、封魔の呪印を発動！ リトマスの死儀式の発動を無効にし破壊する！」

三沢はそもそも出させないという手で行くことにした。死儀式を除いて残り神楽坂の手札は3枚。そして今の発動から、神楽坂の手札にはリトマスの死の剣士とそれを出せるだけの合計レベル8以上のモンスターが居ることは確定。

つまりコストにしようとしたのが、ウォータードラゴンなどのレベル8以上の上級モンスターだとしても残り手札は1枚。そうじゃなければもう手札は下級モンスターのみにということになる。

唯一気になるのはあの伏せカード。デュエルが始まってすぐに伏せられ、今までずっと残っていて正体がまるで分からない。ただ先ほどの攻撃に使わなかったということ。は攻撃反応型じゃない。死の剣士の攻撃力を上げるための物だとするといつでも発動できる永続罠系統か。

三沢は自分のデッキを頭の中で思い返し、どのカードが来てても何とか対処できると判断する。

(リトマスの死の剣士さえ出させなければ、残るは下級モンスターのみ。このままウォータードラゴンで押し切れば)

「……ふっ！ 俺はこの瞬間を待ってたぜ。」

三沢が圧倒的優位のこの状況で、この神楽坂はそう不敵に笑ったのだ。

「俺は封魔の呪印に対してカウンター罠『神の宣告』を発動！」

「なっ!? 神の宣告だど!? そんなもの俺のデッキには入っていないっ！」

三沢は驚愕した。確かに神の宣告はデッキ構築の際に候補として考えてはいた。しかしすでに同じくカウンター罠の封魔の呪印があったことと、LP消費が一気に激しくなることから採用を見送ったのだ。

「LPを半分にし、封魔の呪印は無効となる。結果リトマスの死儀式の効果は有効！」

手札のウォータードラゴンを生け贄に現れる！ リトマスの死の剣士を守備表示で儀式召喚！」

神楽坂LP900↓450

神楽坂の場に、味方の水龍を糧として双剣士が出現する。だが、

「守備表示で出したかつ！ しかし場に罠が無い以上、攻撃力と守備力は0のまま。手札も残り1枚。除去できるカードが来た時点で終わりだ」

「それはどうかな？ さつきカウンター罠を発動したことで、俺は手札からこのモンスターを特殊召喚する。……来いっ！ 『冥王竜ヴァンダルギオン』っ！」

「なっ!？」

神楽坂の呼びかけに応じて現れたのは、これもまた三沢のデッキには入っていないはずのないカード。ただならぬ威圧感を持つ闇を纏った黒竜が、やや人に近い二足歩行で場を踏みしめ咆哮する。

ヴァンダルギオン ATK2800

「冥王竜ヴァンダルギオンの効果。カウンター罠で相手のカードの発動を無効にした場合、手札から特殊召喚できる。そしてこの効果で特殊召喚に成功した時、無効にしたカードの種類によって効果が変わる。……罠を無効にした場合、相手フィールドのカード1枚を選択して破壊する。ウォータードラゴンを破壊だっ！」

黒竜は翼を広げて飛び上がり、そのまま急降下して水龍に突撃、粉碎する。

「バトルフェイズっ！ ……終わりだ。ヴァンダルギオンで三沢にダイレクトアタック。『冥王葬送』っ!!」

「ぐあああつ!？」

黒竜の極太のブレスが、モンスターもなくがら空きとなっていた三沢の身を飲み込んだ。
だ。

「良いデュエルだったぜ。だが、勝者は俺だ」

そう言った神楽坂の姿が、三沢には一瞬デュエルキング武藤遊戯とダブって見えた。

三沢LP2800↓0

デュエル終了。神楽坂WIN!

「……………はあ。まいった。負けてしまったか」

「ああ。何とかだけどな。はなつからお前を仕留めるために準備してたつてのに、こんなギリギリの勝利じゃ目も当てられないけど」

戦いの後、神楽坂は自室でレポートを仕上げていた。どうせだから最後まで付き合うと、三沢も一緒に部屋に来てコーヒーを啜っている。

「なあ神楽坂。さっきのデュエルの最後の局面。俺にはどうしても腑に落ちない所があ

るんだ」

「デツキの内容が違ったことか？ それなら最初に言っておいたはずだぜ。俺の選ぶデツキで勝負つて。それをミラーマッチだと勝手に思い込んだのはそっちだ」

「ああいや、それは特に気にしてないんだ。ヴァンダルギオンはかつてデュエルキングが使っていたレアカードの一つだけど、神楽坂はなんだかんだデツキを再現する時に様々なカードを手に入れてくるからな。手に入ったとしても特に問題はない」

実際神楽坂は、クロノス教諭のエースモンスターである古代の機械巨人もどこからか手に入れてきた。そういう伝手があるのだろうと三沢はそこは別に気にしていなかった。

「俺が気になったのは、あの時何故あのタイミングまで神の宣告を使わなかったのかってことだ。あれは最初のターンから伏せてあったものだろう？」

神楽坂は机に向かってペンを動かし続けるだけで答えない。

LPのコストが高い序盤に使いたくないという心理は分かる。だが、それなら中盤のウォータードラゴンが出る時に使つて封じるのが合理的だ。自分ならそこで使つたし、何もここまで温存していく必要はあまりないと三沢は考えていた。

「俺になり切っているなら尚更使うはず。それなのに残しておいたつてことは……最初から封魔の呪印をピンポイントでカウンターする気だつたつてことになる。合つてい

るか?」

「……ああ」

「どうしてだ? 封魔の呪印は俺のデツキのキーカードつてわけじゃない。それ一枚を封じて何になる?」

「……………そのセリフ。そのまま返すぜ三沢」

そこで神楽坂はレポートを書く手をいったん止め、椅子から立ち上がって三沢の方に向き直る。

「なんで今でも封魔の呪印を使つてんだ三沢。……いや、そうじゃないな。いつまで十代にこだわつてんだ?」

「なっ! ……何を」

「あのデツキは元々対十代用に組んだものだろうが。それをずっとあのままに残している時点でこだわってるってバレバレだよ。融合を封じるために入れた封魔の呪印で自分が縛られているってか? ハッ! お笑い草だね」

神楽坂はそう言うのと、突如三沢の襟首をつかんで自分と向き合わせる。

「前から言いたいことがあったんだ。丁度良いから言つてやるよ。……俺はな、お前のことが嫌いだよ!」

そんなことを言う神楽坂の表情は、どこか悲痛さを湛えていた。

閑話 模倣、再現、そして…… その四

「……だろうな」

いきなりそんなことを言われた三沢だが、特に困惑したという感じではなかった。まるで今言われたことなどとづくに分かつていたかのように

「成績優秀で、スポーツも出来て、人望もある。それなのにたった一人にこだわって上に行こうともしない。そんなお前のことが嫌いだ。イラつくんだよっ！ ……今のお前の事を一部の奴がなんて言ってると思う？ 上に行こうともせずそこそこの位置をキープしてる舐めプ野郎ってよ」

「俺は別に舐めてなんか」

「分かってるよっ！ ここ半月ほとんど毎日会ってたんだ。お前がそんな奴じゃないことぐらい分かってる。……でも、お前のやってることは実質そういうことに見えるんだよ」

実際そういう心ない陰口を叩く者も僅かにだが存在していた。このランク主義の強い学園にて、昇格できるのに理由を付けてそうしないというのは、確かに舐めていると見られても仕方がないのかもしれない。

「気持ちに分かるさ。どうせなら勝つべき相手に勝つてスッキリとした気持ちで上に昇格したいってのは分かる。でもその間他の奴がどう思うかぐらい考えてくれよっ！」

ブルーに上がりたい奴は沢山居る。皆が皆お前みたいに良い奴じゃないんだ」

罵声を浴びせられているのは三沢のはずなのに、浴びせている神楽坂の方がどこか辛そうな顔をしていた。

「俺を手伝うって言った時もそうだ。頭を下げてまで……何俺に気を遣ってんだよ。どこまで良い奴なんだよっ！ 自分が止められていれば盗難事件も起きなかつたってか？ ふざけんな！ 悪いのは俺だろうがっ！」

神楽坂が以前整理券を巡って、オシリスレッドの丸藤翔という生徒に負けた時、周りのライイエローの生徒が陰口を叩く中、三沢だけが励まそうとした。その時手を振り払ったのは神楽坂の方だ。

だが、三沢に思う所が一切無いという訳ではなかつた。神楽坂が事件を起こした後、傲慢で独善的な考えかもしれないが、自分かもしれないあの時もと歩み寄っていたらそもそもあんな事件は起こさなかつたんじゃないだろうか？ そんなことを考えたことは確かにあつた。

だがそう思うことこそ神楽坂は許せなかつた。それがますます自身の罪の意識を深めていった。

「なのに、色々あつて謝れないままずると時間だけが経つて、そうしたらお前の方から頭を下げてまで手伝いたいつて言つてきてよ。……俺がどんな気持ちだったかお前に分かるかっ！」

もう神楽坂の手にはほとんど力が入っていなかった。掴むというよりも縋るようなその手を、三沢は振りほどくこともせず黙つて聞く。

「……良い機会だと思つた。手伝つてもらつて、こうして戦つていく中で自分の腕を磨いて、そして最後の最後にお前と戦つて分かせてやろうつてな。もう自分を縛らないで良いんだつて。」

「神楽坂。お前、だから封魔の呪印をピンポイントで」

「三沢。上に行けよ。……悔しいけど俺はまだ実力じゃお前に及ばない。久城の前に立てるほどにもなつていない。だから今回は譲つてやる。……それに別に今すぐ行けつて言つてるんじゃない。お前の中で踏ん切りがついてからで良いさ。だけどな」

神楽坂はくしやくしやくで今にも泣きそうな、それでいて歯を食いしばつてそんなそぶりを見せまいと必死な形相で三沢を睨みつけた。

「だけどこのままダラダラと居座り続けるつてんなら、俺が先にブルーに上がつて啗つてやるよ。あの時さつさと俺の言うことを聞いて上がつていれば良かったのになつてなっ！」

三沢は何も言わなかった。いや、言えなかった。神楽坂はそのまま三沢から手を放し、また机に向かってペンを走らせ始める。

「レポートの邪魔だ。……もう帰れ」

「……ああ」

これ以上ここに居ても本当に邪魔になるだけだろう。三沢はゆつくりと部屋を出るために扉に手をかける。その時、

「三沢……あの時の事、謝っておくよ。……ゴメン」

そう背中から声をかけられながら、三沢は扉を開けて外へ出ていく。振り返ることはしなかった。今顔を合わせたら、どんな顔をすれば良いか分からなかったから。ただ、

「気にするなよ。……俺も、もう少しだけ待たせるからおあいこだ」

それだけ言い残すのが精いっぱいだった。

そして三沢が居なくなった後、

「……………つたく。我ながら、酷い謝り方もあったもんだ。もつと普通に謝れば良かったのにな」

部屋の主は誰に言うでもなくポツリと呟いた。

「……確かにレポートは受け取りましタ〜」

クロノス教諭は難しい顔をしながら神楽坂が提出したレポートを受け取った。

内心クロノス教諭は面食らっていた。一か月と期限を設けたこの課題を、なんと目の前の生徒は半月で終わらせたのだから。

軽く内容を確認したが、少なくとも手抜きをしたという様子は見られない。どれも細部までしっかりとまとめてあり、簡単な教材として使えそうなほどの出来栄でいちやもんの付けようがない。

なら神楽坂が普段の講義をさぼって書き上げたかと言えばそれもない。

神楽坂の授業態度は真面目であり、以前の事件から今日までほとんど講義を休んだという話もない。つまり毎日限られた時間をフルに使って戦い、レポートをまとめ上げたということになる。

（これは……もしかしたらとんだ拾い物かもしれないまセン〜）

クロノス教諭は目の前の神楽坂の評価を大分改めていた。

短期間でここまでの課題をこなしたこの行動力。数多くのデツキを扱える対応力の高さ。純粹に座学の成績も優秀だ。

「レポートの成否は数日中に連絡します。……それにしてもシニョール神楽坂。まさかここまで早く仕上げるとは、私は感服しました。出来栄え如何によつては、樺山先生に掛け合つてブルー昇格の推薦をしてあげても良いですよ！」

確かに以前腹立たしい目に遭わされたが、それも表向きは単なる事故による器物破損だけで済んでいる。仮にブルーに迎え入れたとしてもそこまでの反対はされないだろう。ならばここで粉をかけておくのも悪い手ではない。

そう思つて言つたクロノス教諭だったのだが、

「ありがとうございます。……ですが、昇格の件はお断りさせていただきます」
「それは……何故なのネ？」

「今回の課題はあくまで以前の事に対する俺への罰。罰を受けて昇格なんてことになったら、周りになんて言われるか。また改めてそれだけの何かを成してから、昇格の件について考えたいと思います」

以前の神楽坂なら何も迷うことなく昇格の打診を受け入れたらう。今の自分が三沢と同じく、他者から見れば舐めていると取られることをしているとも理解している。ただ、

「……それに、今の俺よりブルーにふさわしい奴がいますから」

三派 奴はもう少しだけ待たせると言つた。なら俺も、もう少しだけ待つてみよう。それで

もダメなようなら俺が先に行くだけだ。

それに自身のなり切りの先がようやく見え始めてきたところだ。三沢との一戦の中で、ほんの少しだけ何か掴めたような気がした。模倣し、再現し、そしてその先。完全なる再現を組み合わせて新たな道を見出すこと。

これを仕上げる事が出来た時、ようやく実力で三沢、そして久城へのリベンジに挑める。神楽坂はそう考えていた。

「ふむ。……そういうことなら仕方ありません。ただ、もし気が変わるようなことがあればいつでも言っただけでほしい。私はいつでも歓迎します。」

クロノス教諭は意外にあっさり引き下がった。

最近の深刻なブルー一年生の質の低下。そして以前の万丈目や三沢といった優秀な生徒を見抜ききれなかったことから、クロノス教諭はより幅広く優秀な生徒を勧誘していくことを考えていた。

だが神楽坂本人の意思がこれでは無理に引き入れるのは難しい。ならむしろここは器の大きな所を見せて、時間をかけてじっくり考えが変わるのを待てば良い。

こうして神楽坂への課題は滞りなく終了したのだった。

その後、

「おくい遊児！ 購買に行つて何か食おうぜ！」

「そうだな。最近ちよつと懐も温かいし、たまには奮発して豪華なものでも食うか」

「えっ！ それつてもしかして久城君の奢りつて事つすか？」

「そういうことならゴチになるんだな！」

「いや何でだよっ!? ……しようがないな。飲み物くらいなら奢つてやるよ」

そういうもののメンツで騒いでいる久城遊児を、神楽坂はこつそりと陰から観察していた。

いまだにカードこそ用意できてはいないが、普段の動きや癖などを観察することでその思考を読み取り、いつかデツキごとと再現する際に役に立つだろうという考えだ。

（普段はどちらかと言えば質素な食事だが、今日は珍しく豪華だな。何か臨時収入でもあつたか？ ……んっ!?）

そこに、三沢がふらりと現れた。なにやら連れ立って食事に行くようで、話をしながら同行する。そして、偶然だろうがこちらに顔を向けた。

神楽坂は、すぐに三沢が顔を逸らすのだろうと思つた。部屋で半ば喧嘩別れになつて以来、ときたま同じ講義に出るくらいでまともに会話をしていない。向こうから話しかけてこようとしたこともあつたがこちらが避けている。

これだけすればもう自分の事を嫌つて顔を見るのも嫌になるだろうと。なのに、三沢

は笑っていた。

それは今の自分の立ち位置に満足した妥協からでも、何も考えていないのほほんとしたものでもなく、自分の認めたライバルへ向ける笑み。

嫌うこともなく、かと言ってただ仲良くなるうとうとうということでもない。互いに競い高めあう相手へ向ける闘志と自信に満ちた笑み。

そして三沢が久城達と購買に連れ立っていった時、神楽坂はそのままの態勢で大きく息を吐いた。

「……つたく。だから嫌いなんだよ」

自分が実力でねじ伏せたいと願う相手が前よりも強くなっているのを見て、神楽坂は本当に自然にそう口から洩らした。

自身もまた三沢と同じ笑みを浮かべながら。

学園対抗戦 稲妻の帰還



「出でよ！ E・HEROフェザーマン！ バーストレディ！ クレイマン！ スパークマン！」

十代がディスクにカードをセットする度に、彼の心強い仲間達はその姿を現す。……あれっでもう半分くらい精霊化してないか？ 大分前にレイと戦った時もそれっぽい感じだったし。

「うわあ！ 今日も皆メツチャクチャ格好良いな！ 気合入れて、デュエルアカデミアノース校との対抗試合頑張ってくれよな」

そう。今日は学園対抗戦当日。十代は最後のデュエルディスクの調整のため、こうして点検用のデュエルリングでモンスター達を呼び出していたのだ。ちなみに俺は一応の付き添い。

「どうやらディスクに問題はなさそうだな。この大一番で、いざ勝負って時に整備不良でカードが発動しないってことになったら大変だからな」

「おいおい遊児。俺が日々の整備を怠ると思うか？ 毎日ちゃんとチェックしてるって

の

十代はそんなことを言っているが、マンガ版ではデュエルディスクをフリスビー代わりにして遊ぶという暴挙をやらかしていたからな。こっちではそんなことは一度もないが、念のため注意しておかないと。

「ところで十代。機能チェックはそれくらいにして、そろそろ準備した方が良くないかい？ なにせ」

「アニキ〜！ こんな所に居たんすか！ 久城君も！ もう皆集まつてるよ」

そこに翔が息せき切って走り込んできた。まあそろそろだとは思ってたけどな。

「集まつてるって？」

「出迎えつすよ出迎え！ ノース校代表団のお出迎えだよ！」

そう。デュエル開始はまだ先だが、向こうの代表団の出迎えやらそういうったものも当然ある。このデュエルの根幹にあるのは互いの学園の友好を深めることだ。こういった交流も必要となる。

「あくいつけね！ 忘れてた。急げ翔！ 遊児！」

そう言つて慌てて走り出す十代を、翔は置いてかないでと急いで追いかける。俺も追いかけようとすると、そこにディーが急に出現した。

『さ〜ていよいよ序盤の山場の一つに差し掛かったね。面白くなってきたよ〜！』

「ああ。不本意ながら俺もそこは同感だよ。お前がそこまで言うなら名勝負が期待できそうだ。……ところで、相手は一体どんな奴なんだ？」

『ふふっ！ それは見てのお楽しみって奴さ！ ヒントを挙げるなら……君が知っている人ってことかな？』

俺が知っている？ ……誰だろう？ もしやマンガ版で見たキャラってことかな？

まあ誰にせよ。ここまで来たら行ってみれば分かるか！

そうして俺も十代達を追って走り出した。

ノース校からの人員を出迎える場所は以前レイを見送った波止場。ってことは向こうは船で来るのかと考えていたら、

「うおっ！ すっげー！」

「まさか船じゃなくて潜水艦で来るとは……」

出迎えの人達が集まる中、波止場に留まっていたのは船ではなく、水面から上部だけ出ている巨大な潜水艦だった。あんなの使わないと行けないってどんな学校だよ!?

いち早く艦から波止場に降り立った中年の男性が、鯨島校長と親しげに握手を交わす。

「おお！ よくいらしたな市ノ瀬校長」

「しばしうちの悪童らがお世話をかけますが、よろしく願いますよ」

「いや、私の方こそ」

どうやらこの人が向こうの校長らしい。端から見た限りでは仲は悪くなさそうだ。……トツプ同士が火花バチバチだと色々生徒側も苦勞するからな。仲が良いに越したことはない。

「ところで……トメさんはお元気ですか？」

「もちろん！ トメさんはこの対抗試合には欠かせない人ですからな」

……訂正。今ほんの一瞬この二人の間に火花が散った。仲が悪いという訳ではなさそうだが、こと女性が絡むとそうではなくなるらしい。考えてみればトメさんもこの二人とそう齡は離れていなさそうだし、昔……多分今もだけど何かあるんだろうな。

そんな中、

「校長先生！ 挨拶はその辺にしておき、早く俺の相手紹介してよ！」

なんと空気を読めないのか読まないのか、十代がやる気満々で校長先生同士の話に割って入った。いや何やってんのあのデュエルバカ！ クロノス教諭が怖い顔してそつちを見てるぞ。

「これ十代。行儀が悪い」

「でも、俺早く対戦相手に会いたくつてさ」

「……そうか。君が噂の十代君か！」

鮫島校長にたしなめられる十代。だが市ノ瀬校長は特に気分を害した様子もなく、優しく十代に話しかける。

「よろしく！ おっさんがノース校の校長先生？」

「これっ！ 十代君」

おっさんは流石に無礼だと鮫島校長がさつきより強くたしなめるも、今のワクワクモードの十代はそれくらいじゃ止められない。すみません校長方。あとで俺が一発はたいてきますので。

「で誰なのさ？ 俺と戦う相手は」

「俺だ」

その聞き覚えのある声を聞いた時、俺はハツとしてその方向、潜水艦の方を見る。十代や他の者達も皆。今の声にはそれだけの人を引き付ける何かがあった。

潜水艦の上に立っていたのは、どいつもこいつもどこか不良っぽい屈強な男達。そしてその最奥に立っている男こそ。

「ああっ?!」 万丈目! 万丈目だ!」

「万丈目さんだ」

俺の推しがそこに居た。

かつて着ていたデュエルアカデミアのブルーの制服を脱ぎ捨て、今着ているのは黒を基調にしたロングコート。所々ほつれてはいるが、その傷だらけのコートから見て取れるのは弱々しさなどではなく歴戦の戦士の風格。

ただ立っているだけなのにここまで伝わってくるこの感じ。間違いなく最後に会った時より強くなっているな。

「俺って……じゃあもしかして、俺のデュエルの相手って、万丈目かつ!」

「だから万丈目さんだ」

頑なにそこは譲らない万丈目。意外と礼儀に厳しかったらしい。だが別段怒った様子も見せずひどく落ち着いている。

「おい一年。さつきから聞いていれば、サンダーさんのことを呼び捨てにしやがって」

「いっちょシメてやろうか」

「放っておけ」

むしろ万丈目の周囲にいる男達の方が十代に食って掛かろうとするが、万丈目が一言制止するだけで姿勢を正す。なんか完全に向こうの奴らを従えているぞ万丈目。

それも今の言葉からあの取り巻き達は一年生ではなく二年か三年生。つまり事実上デュエルアカデミアを出てからたった数か月のうちに、万丈目はノース校のトップにまで上り詰めたということになる。

毎年対抗試合をやるくらいだから、向こうのレベルも相当の物のはず。それをねじ伏せてくるとは流石万丈目だ。あと何でサンダー？ ……ああ！ さんがなまってサンダーね！ なんかりングネームみたいだな。

「十代。こんなにも早くリベンジの機会が巡ってくるなんてな。それに……」

そこで万丈目は一瞬チラリとこちらの方に視線を向け、ほんの僅かにだけ口角を上げる。こちらも何も言わずただ軽く手を上げて返す。前みたいに戦う前からグロッキーっていうのはなさそうで安心した。

「……まあ良い。ここで貴様を完膚なきまでに叩きのめし、あの時の俺が受けた屈辱を雪いでやるとしよう」

「へへっ！ 何だかよく分かんねえけど、お前とまたやれるなんて嬉しいぜ万丈目！」
互いに視線を交わす十代と万丈目。おおっ！ これは燃える！ このライバル同士の対峙はマンガ版を思い出すな！

マンガ版では十代と万丈目は二度本気でデュエルしている。その結果一度目は十代の勝利。二度目は本当に僅差で万丈目の勝利だった。つまり二人の実力は伯仲してい

る。

もちろんここはマンガ版ではなくアニメ版の世界。当然流れも変わってくるだろう。もしかしたらマンガ版のように万丈目が勝つのもかもしれないし、あるいは十代が主人公として勝つのもかもしれない。だがどちらにせよ名勝負になるのは間違いない。

そう心躍る展開を期待していた時、
バラバラララっ！

突然空からデカい音が響き渡った。何事かと思いき空を見ると、そこには一台のヘリの姿が。今のはあのヘリのローター音か！

「あれは!？」

「あのマークは……万丈目グループの」

よく見ると機体に大きく一文字『万』と書かれている。あれが万丈目の所のマークか。そうこうしている内に、まだ空中だというのにヘリのドアが開き、そこから二人の男が顔を出す。

「久しぶりだな準。元気でやっているのか？」

「長作兄さん。正司兄さん。……何しに来たんだ」

やはりというか二人の男は万丈目の兄弟らしい。万丈目が驚いた様子でヘリの音にも負けない声量で叫ぶ。というか兄弟揃って声がデカいな。スピーカー要らずだ。

「もちろん。お前の勝利を祝福するためにさ」

「あまり心配をかけるなよ準」

なるほど応援か！ 確かにこういう晴れの舞台で身内が応援を兼ねて観戦しに来るのはよくあるし、そういうのは力になるからな。間違っちゃいない。

ただいきなりヘリで登場というのは如何なものか。見ろっ！ ここに集まった人達が皆ポカ〜ンとした顔をしているじゃないか。身内を応援したいというのは分かるけどもつと常識的にやってほしいものだ。

万丈目もさぞ応援される嬉しさや恥ずかしさやらの入り混じった複雑な顔を……おやっ!?

俺が見たその時、万丈目の顔に映るのは嬉しさでも恥ずかしさでもなく、どこか苦しみを湛えたものだった。……一体どうしたっていうんだ？

学園対抗戦 対峙する兄弟

両校選手に用意された控え室。本来なら居るのは選手である十代だけのはずだが、応援兼付き添いということで特別に俺や翔、隼人も同席していた。ちなみに三沢や明日香もさつきまで居たが、今はそれぞれ自分達の寮に戻って観戦の準備をしている。

「まさかテレビ中継が入るなんて」

「全くだよな。しかも生放送！俺もちよつとだけ緊張するぜ」

珍しいな。あのいつも笑っている十代でも、テレビ中継となると流石に緊張するらしい。

ヘリが突如やってきたあの後、万丈目ブラザーズの連れてきたテレビクルーやら何やらもやって来てノース校組の出迎えは一時中断。

しかもとんでもないことに、テレビ中継の事は鮫島校長に知らされていなかったというのだからさあ大変。急すぎるということでも万丈目グループに抗議する騒動にまで発展した。結果テレビ中継自体は許可がでたけれど、万丈目グループは嚴重注意を受けたという。

あくまで注意なのは、責めすぎることデユエルする当の万丈目に責めが行くのを避

けるためだろうか？ それも計算した上で今回のようなゴリ押しをしたのだとしたらかなりの策士だなあの兄さん達。

「テレビ中継は驚いたけど、何とか無事対抗戦は始められそうなのが不幸中の幸いなんだな」

「本当だよ。だけどおかげでデュエル開始が少し予定より遅れちゃうなんて」

翔や隼人は口々にそう言う。テレビ中継の機材の搬入などで、本来の予定よりずれ込んでいるのだ。そうして話していると、

「……………どうした遊児？ さっきから黙りこくって」

「……………ああ。ちよつと万丈目の事を考えててな」

「万丈目君の？」

俺は翔の言葉にこくりと頷く。

「確かに相手の選手として出てきたのは驚いたよね。でも一度アニキは万丈目君に勝つてるから、気を楽にしていけば余裕じゃないっすか？」

「いや、勝てる勝てないとかそういうことを言ってるんじゃないんだ。ただ……何となく万丈目の様子が気になって」

さっき万丈目ブラザーズと話をしていた時の万丈目のあの顔。その時までには風格ともいえる何かがにじみ出るくらいだったのに、あの一瞬はどこかとても弱々しく見え

た。

その顔がさつきから気になって仕方がない。

「たまたま影とかでそう見えたんじゃないか？　だつて今回の事だつて、万丈目グループが色々とバックアップしてるんだろ？　身内が応援に来て奮い立つならまだしも、その逆つてことは聞いたことないんだな」

「そうなんだよな。……いや待てよ？」

俺の脳裏に、以前万丈目が三沢のデッキを捨てようとした時の事が浮かんでくる。

『俺の肩には万丈目一族の未来が掛かっている。兄さん達二人と俺で政界、財界、カードゲーム界のトップに君臨し、万丈目一族で世界を制覇するために。……なのに、なのに今の俺はトップなどではなくて、格下げになりそうだななんて兄さんたちには言えなくて……俺は……俺はっ！』

今思い出した。確かあの時万丈目はそんなことを言っていたな。つまり万丈目にとって兄二人は重圧の大本なわけだ。そんな二人が応援に来て奮い立つか？　……むしろ下手すると前みたいに精神的に追い詰められるんじゃないか？

「なんかすつごい嫌な予感がしてきた」

「……よし！　ならちよつと万丈目に会いに行こうぜ！」

「ちよ!?　ちよちよちよつと待て!?　お前いきなり何言つてんだ!？」

いきなりグツと背筋を伸ばして何を言い出すんだこのバカは!?

「それはマズいんだな十代。予定より時間があるとは言っても、それでももう一時間もしたら会場入りの時間なんだな。それなのに乗り込んでいくっていうのは」

「そうだよアニキ! それに今の万丈目君はノース校の代表だよ! それなのにわざわざ会いに行くことないって!」

隼人と翔は慌てて口々に十代を止める。そりやそうだ。俺だって止める。だが十代は、

「だけどき、嫌な予感がするって言うなら直接確かめた方が手っ取り早いじゃんか。それにまだ一時間もあるんだ。万丈目だって許してくれるって!」

「いや、だからって」

「それにだ」

十代は軽く頭を振ると、俺の事を澄んだ瞳でじつと見てくる。

「アイツは今ノース校の代表で対戦相手だ。だけど、それ以前に友達だろうが! そうじゃねえのかよ遊児?」

「……………ああ。そうだったな」

目の前のデュエルバカにとつて、一度本気でデュエルすればその相手はもう敵ではなく友人。なら友人のことを気遣って会いに行くというのは何の不思議もないのだ。だ

が、

「だからと言って、いくら何でも対戦相手が部屋に乗り込んできたら色々マズいから止めろー!」

「え〜!? なんだよお」

「いいから、十代はここで飯食うなり横になるなりして体調を整えてろよ! それにテレビ中継があるんだろ? 少しは身だしなみにも気を遣え!」

「えっ!? ……もしかして寝癖とかか? やつべ!」

慌てて髪を触りだす十代。それを見て、俺はフツと軽く笑いながら扉を開ける。

「あれっ!? 久城君?」

「どこに行くんだな?」

「ああ。ちよつと友達の様子を見にな」

……俺としたことが、知らず知らずのうちに万丈目がノース校の代表として出てきたことで委縮していたらしい。会いに行ったらスパイか何かと言われて拒まれるんじゃないかってな。

だが十代の言う通りだ。そもそもこれは友好デュエル。調子の悪そうな友人の様子を見に……いや、ファンが推しを心配して様子を見に行くことのどが悪い?

門前払いされたらその時はその時。俺は静かに万丈目の控え室に向かった。

「万丈目の控え室は……つと、この部屋か」

十代の控え室から少し離れた場所。わざわざ表札に『ノース校代表選手控え室』と書かれた場所を見つけて俺は静かに息を吐く。

『ふっふっふ！ 久城君。何かボクに言うことがあるんじゃないのかなあ〜？』

「……………がとう」

『おやあ〜!? 聞こえないな〜!』

「わざと言ってんだろ!? ありがとうよ! だけど場所が場所だから小さな声で勘弁な

!」

デイーが声だけでも分かるほどドヤ顔をしている気がする。

なにぶん下手にノース校の生徒とバツタリ会ったら話がややこしくなるからな。デイーの先導で上手く生徒に会わないよう進んできた訳だが、いくら時間がなかつたとはいえ、こいつに案内を頼んだのは間違いだったかもしれない。

他の幻想体にも頼むべきだったかな? だけど大半は丁度茂木の所に行かせて休ませているし、無理やり呼び出すというのも気が引けたしな。……今となってはタラればだけど。

「どうにか辿り着いたけど……どうも中に誰か居るっぽいな。これは心配は杞憂だったか?」

部屋の中から誰かの話し声が聞こえる。声からするとおそらく三人くらいだ。一つは万丈目の声だから、おそらく最後の調整でもしているのだろう。

元気でやっているならそれはそれで良い。問題なさそうだし戻るとするか。そう考えてくるつと踵を返そうとした時、

「どういふつもりなんだ? 兄さん達」

中から万丈目のそんな声が聞こえてきてつい足を止める。……嫌な予感的中したかもしれない。

盗み聞きとはあまり褒められた話じゃないけど、下手に中に入るのは躊躇われたのでそつと中の様子に聞き耳を立てる。

「決まっているじゃないか。このテレビ中継は、俺達兄弟の約束を現実に移す一プランなのだ」

この声は万丈目ブラザーズの兄貴の方……長作だな。しかしテレビ中継がプランとはどういうことだ?

そこから万丈目ブラザーズが代わる代わる語ったのは、以前万丈目が言っていた万丈目一族の世界制覇。その足掛かりとして万丈目をプロモートし、カードゲーム界のス

ターにするというものだった。

つまりは大掛かりなバックアップってことだな。規模がデカくて些か周りに迷惑ではあるが、これならまだ一応問題ないのか？

「準。クロノス教諭とかに聞いたが、お前三か月前にここを退学……いや、長期無断欠席しているそうじゃないか？」

「そ、それは……」

今度は弟の方……正司が、万丈目をなじるように言い放つ。ここでストレートに退学ではなく言葉を濁したのは、話したクロノス先生の方もそのまま退学させるのは惜しいと思ったからなのかもしれない。

「良いか準。お前は元々俺達兄弟の落ちこぼれ」

「我が万丈目グループ主催でテレビ中継するからには、絶対に負けることは許さん」

そこで室内に、何か重いものを置いたような音が響く。

「ここには、俺と兄貴が金に物を言わせたカードが山と入っている。これを使い、最強のデッキを組み立てるのだ！」

「良いか準？ 決して万丈目グループの顔に泥を塗るようなことはするなよ」

そのまましばし沈黙が流れる。そして、

「……兄さん達。すまない。このカードは受け取れない。持って帰ってくれ」

小さいながらもはつきりと、そう万丈目が断る声が聞こえてきた。

「な、何を言うんだ準！」

「すまない。……この勝負。俺はこのデッキで戦いたいんだ。ノース校で託され、自分の魂を込めて仕上げたデッキで」

「……バカな。魂だと？ どこで手に入れたかは知らんが、そんな世迷言が通じるとでも思うのか！」

ガツと何か鈍い音がした。たまらず扉を少しだけ開けて様子を窺うと、なんと正司が万丈目の胸ぐらを掴んでいる。

「落ちこぼれのお前が生意気を言うんじゃないっ！ 良いからさっさとこれを使え！」

落ちこぼれ落ちこぼれと……あれが弟にとる態度かよっ！ もう黙ってみちやいられない。扉を開けて乗り込もうとした時、

「……………断る！」

「なっ!？」

万丈目が胸ぐらを掴んでいるその手を掴み返し、ミシミシと音が聞こえるほどに力を入れる。

「頼む。今回は俺のわがままを聞いてくれ。兄さん達。……この通りだ」

胸ぐらを掴んでいた手を力を入れながらもそつと外すと、万丈目はなんと静かに頭を下げたのだ。あの気位の高い万丈目が。

「……良いだろう」

「兄貴っ!? 何を言うんだ!?!」

そこに一時静観していた長作が、スツと歩いて行って置かれていたスーツケースを持つ。そして万丈目にほんの少し、ほんの少しだけ笑いかけた。……こういうとこやっぱ兄弟だな。笑い方がよく似てる。

「少しはマシな面構えになったじゃないか。準。それでこそ我らが万丈目一族の端くれだ。……一度だけお前のわがままを許すとしよう」

「……!?! ありがとう。長作兄さん」

万丈目は表情を明るくし、正司はどこか不満げな顔をする。

「ただし、先ほども言ったが負けることは許さん! 良いな? 行くぞ正司」

「あ、兄貴!?! くッ! くれぐれも万丈目グループの顔に泥を塗るようなことはするなよ。準!」

そうして二人はスーツケースを持って部屋を出ていった。……もちろん俺は鉢合わせないよう近くの物陰に隠れてやり過ぎしたさ。

『いやあそれにしても、意外に変わるもんだねえ』

「何がだ？ 万丈目の事か？」

少しだけ感心するかのようにつたデーに、俺はそう問いかける。

『まあね。正直言うと、本来の流れならここで万丈目君は兄弟の重圧に負けて、断り切れずに受け取ってしまうんだ。だけど今、彼は自分の意思できちんと断った。少しずつだけ流れは確実に変わっているんだよ。君のおかげでね！』

そうかな？ 俺のやったことと言ったら、以前軽く背を押したただけだ。それだけでは人の本質は変わらない。つまりは俺がどうこう言わなくても、元々万丈目には断れるだけの勇氣も意思もあったのだと思う。

「それもこれも、全ては万丈目自身の力だ。それを俺がどうこう出来るわけがないじゃないか」

さて。一応ここまで来たわけだし、少し推しの顔を見てから帰るとするか。

俺は控え室の扉を軽くノックした。

学園対抗戦 決戦前の対談

「お邪魔するよ」

「誰だ？ ……お前か。どうしてここに？」

控え室の中では、万丈目が長椅子にやや疲れた顔で腰掛けていた。万丈目はこちらに気づくと、疲れなどまるでなかったかのようにコートを直して向き直る。

「どうしてって、大一番の前にファンが推しの応援に来ちゃいけないのか？」

「……なるほど。違ういな」

万丈目はフツと小さく笑った。俺は軽く断りを入れて万丈目の体面の椅子に座る。

「待ってたぜ。約束通り、相当腕を上げたみたいだな。見違えた」

「ああ。当然だ！ 必ず戻ると言ったからな」

俺の言葉にファンと鼻を鳴らして不敵に笑う万丈目。

「あと一時間ほどで試合だけど、調子は万全か？」

「俺を誰だと思っている。いつ如何なる時でも万全だ」

確かに一見した所万丈目の調子は悪くなさそうだ。しかし、さつき一瞬疲れた顔をし

ていたのは見逃せない。肉体的にはともかくとして、今さっきの兄弟の話し合いで精神的には多少疲労しているだろうに。

人前で疲れた顔を見せまいとするのはプライドの高さからだろうが、分かっている側としては隠さないでほしい。なので、

「……………そうか。なら安心だ」

俺はひとまずそう言つてゆっくりと席を立つ。

「もう行くのか？」

「ああ。あまり長居すると疲れさせかねないからな。試合前に雑談し過ぎて疲れたらマズいだろう？ どうせ試合の後で話す時間がとれるし、万丈目が居ない間の事はその時にでもゆっくり話すとしよう」

「……………そうだな」

万丈目の顔がほんの少しだけ名残惜しそうに見えたのは俺の気のせいだろう。俺はそのままゆっくりと背を向け、試合頑張れよと軽く手を上げて部屋を出る。

『おやおや。意外にあっさりしていたね。君の事だからもう少し気遣うかと思つたけど』

「万丈目の気持ちを尊重したいと思つてさ」

今まで消えていたのにまた現れたデーが、どこか不思議そうな声で尋ねてくる。

個人的には疲れているなら疲れていると話してほしいが、意地を張って隠そうというのなら多少は尊重したい。ただ、

「ただ、気持ちには尊重するが、隠そうって言うならこつちにも考えがある。……罪善さん！」

デツキからカードを取り出して呼び掛けると、それに応じて罪善さんがカタカタと音を鳴らしながら半透明の姿で出現した。

「休んでいたところ悪いな。すまないけどお願いがあるんだ。試合開始まで、精霊状態でこの中に居る万丈目に付いてあげてほしい。少し心が疲れているみたいだから」

そつちが隠そうとするのなら、こつちも知らない間にこれくらいのはしておいてやる。罪善さんが居れば少しは精神的に安定するはずだからな。それに精霊だから実体化さえしなければ気づかれることもないし。

罪善さんは分かっただばかりにコクコクと頷き、そのまま壁をすり抜けていった。

「ふっふっふ。これでよし。さて、戻るとするか！」

『……………あく。久城君。実は言いそびれてただけだ』

「……………何だ？」

あとはこの後の観戦に向けて準備をしなくちゃと、ルンルン気分で十代の控え室に戻ろうとした時、デーイからの呼びかけを聞いて嫌な予感と共に立ち止まる。

頼むからこんな時に幻想体実体化は勘弁してくれ。それとも茂木の所で何かあったか？ しかしそれにしてはさっきの罪善さんは落ち着いていたしな。幻想体もまだ大丈夫だつてこの前言つてたし何が……。

『実は………万丈目君も精霊見えるんだよ』

それを聞いた俺は慌てて回れ右をした。そういうことはもつと早く言つてくれよ
デイーっ！

急いで控え室に突入した俺が見たものは、

カタカタ。

「うわっ!? なんだこの化け物っ!? ガイコツっ!?」

罪善さんに対して身構える万丈目と、

『イヤアアンっ!? 食べられるううっ!?』

その肩で泣きわめく、半透明の黄色い何かだった。……アレ何？

「それで、何がどうなっているんだ？」

「いや、何というか……ゴメン」

目を白黒させる万丈目に、俺は平謝りするしかなかった。デイーもまたいつの間にか姿を消しているし、もうどうしたら良いんだこの状況。

「実は俺、さっきまたまたまお前とお前の兄弟達の会話を聞いてしまったんだ。それで話が終わるのを待つて中に入ったら、万丈目がなんか疲れている風に見えてさ。普通に聞いてもそんな素振りは見せないし、だからこつそりこの罪善さんに頼んで近くに居てもらおうと思つたんだ。罪善さんは近くに居る人の心を落ち着かせる力があるから」

「落ち着かせるつて……こんな見た目の奴が近くに居たら休まるものも休まらん！」
「罪善さんはカードの精霊だから、普通の人には見えないはずだったんだよ」

以前万丈目が三沢のカードを捨てようとした時、あの時も罪善さんが近くに居たのに万丈目は全く反応していなかった。なので大丈夫だと思つていたのだが、どうやら学園を出て修行中にどういう訳か見えるようになってしまったらしい。

「こつそり休ませるはずがこんなことになってしまつて、本当に申し訳ない」

俺は再度頭を下げる。しばしの沈黙の後、万丈目は静かに口を開いた。

「……しかしどうしてだ？ いわば今の俺はこの学園側から見れば敵だ。下手に協力するようなことをすれば責められるだろうに」

「協力つたつて、あくまで体調を整えるだけだ。それ以上の事はしないよ。それに最初に言つたじゃないか。俺はこの学園の生徒であると同時にお前のファンだ。ファンが

推しの応援に来て悪いということはないさ。……あと、敵なんかじゃない」

俺はさつき十代に言われたことを思い出し、顔を上げて万丈目の方を見る。

「これは十代が言っていた言葉でもあるけど、確かに万丈目は今は違う学園かもしれない。対戦相手かもしれない。だけど友好デュエルなんだろ？ 敵なんかじゃない。競い合う見習うべき相手だ」

「……十代か。奴に言われたら業腹だが、お前に言われるならまだ幾分かマシか。……つたく。それで？ この罪善とかいう奴の近くに居れば良いのか？」

「えっ?! 良いのか？」

なんと万丈目は、自分から罪善さんに近づいて座り直した。今の流れだと、また意地を張ってさつきと帰れとか言われるかと思っただが。

「疲れがバレているのなら隠すこともないだろう。それにせっかくのファンの厚意だ。受け取らないというのも無礼だろうが。……おお！ どこか温かい感じの光だな」

万丈目は罪善さんが放つ光を受けて、気持ち良さそうに目を閉じる。……良かった。少しは効いているみたいだ。ついでに俺も浴びよう。

そのまましばらくくくつろいでいると、

「……どこから、聞いていた？」

突如万丈目がそう尋ねてきた。これはさつきの兄弟との会話の事だと踏み、万丈目一

族で世界を制覇する云々の辺りからだと答える。

「そうか。恥ずかしい所を見られたらしいな」

万丈目はふうくと息を吐き、閉じていた瞳をこちらに向ける。

「政界、財界、カードゲーム界のトップに君臨し、万丈目一族で世界を制覇する。それが俺達兄弟の野望だ。俺は兄さん達の期待に応えるべく、落ちこぼれなんかじゃないと証明するために戦い続け、勝ち続けた」

これまで背負ってきたものを、ため込んできたものを吐き出すように、淡々と万丈目の口から語られる言葉に俺は口を挟めない。

「勝て。勝て。……ただ勝てと。そう言われ続けた。明日も明後日も、その次もその次の次も。だがあの時、俺は十代に負けた。……シヨックだったぜ。何かの間違いだって何度も心の中で叫んだ。それでも俺が負けたという事実は覆らなくて、クロノス教諭からも見限られた。そして兄さん達に失望され、三沢と戦うことになって奴のデツキを捨てようとし……お前に出会った」

万丈目は拳を握りしめていた。だが、その顔はどこか穏やかだった。

「お前が止めてくれなかつたら、仮に勝ったとしてもおそらく俺はそのことをずっと後悔することになっていた。あの時は言えなかつたが……ありがとう」

「謝られるほどの事じゃないって。あの時の万丈目は魔が差しただけなんだから。俺は

ちよつときっかけを与えただけで、思いとどまったのは間違いなく万丈目自身の力だ」
「……フツ！ ではそういうことにしておくか。しかし、この光で気持ちよくなっているせいか、つい口が滑ってしまおうな」

万丈目は軽く笑いながらまた瞳を閉じて休み始めた。別に罪善さんの光にそういう力はない……はずだよな？ 実は白白効果があるなんてことはないよな？

『ねえアニキ。おいらのことも紹介しておくれよ』

「えーいうるさい！ 攻撃力0の雑魚など紹介して何になる」

『そんなく。ヒドイよアニキ』

「確かに自己紹介がまだだったな。俺は久城遊児。この学園の生徒で、万丈目のファンだ。よろしく！ こっちは精霊の罪善さん」

瞳をウルウルさせながら万丈目の周りを飛び回る黄色い半透明の何かに、万丈目は口では辛辣なことを言っているが、軽く手で払うだけで特にそれ以上の事はしない。

なんだかんだそこまで嫌っている訳ではないと判断し、俺はゆつくりと声をかけながら自分と罪善さんを紹介した。

『お、おいらはおジャマ・イエロー。よ、よろしくなのよー！』

黄色くくねくねした身体にパンツ一丁というインパクトのある姿。一度見たら中々忘れづらい見た目をしているおジャマ・イエローが、罪善さんにビビって万丈目にしがみつきのながら俺にそう返す。しかし……まさかおジャマ・イエローの精霊とはな。

「それにしても驚いたな。まさか万丈目が精霊が見えるようになってたなんて。……あつ?!」 万丈目さんと言わなきやダメだったか?」

「まあな。だが、言いづらいいのであれば慣れるまでは許してやる」

これまで何度も言っていたので気分を害したかと思つたが、万丈目は罪善さんの光で気持ち良さそうな顔をしながら鷹揚に軽く手を上げて返した。

それから少しして、

「……もう良いか。すまないな。大分スッキリした気がする」

「そうか! それなら良かった」

万丈目が立ち上がって軽く伸びをし、身体の調子を確かめる。肉体そのものはそのまま癒されてはいないと思うけど、気が楽になったことで身体にも影響が出たのかもしれない。

「俺が出来るのはここまでだ。これ以上は流石に筋が違うからノース校の人達に任せよう」

「ああ。……今度は十代の方も同じように回復しに行くのか?」

「これでも友人だからな。それに、片方だけに手を貸したらフェアじゃない。万丈目……さんだって、どうせ戦うなら万全の十代とが良いだろう？」

「無論だ。万全のアイツを完膚なきまでに叩きのめす。それでこそリベンジというものだ」

万丈目はグツと力強くガッツポーズを決めてみせる。さっき見た疲れはまるで残っておらず、その瞳には冷静に闘志を燃やすという相反する二つが垣間見えた。そこへ、
コンコンコン。

「万丈目さん。江戸川です。入ってもよろしいでしょうか？」

江戸川？ ああ！ この声は潜水艦の上で万丈目と一緒に居た一人か。

「おっと！ 打合せかな？ じゃあそろそろ俺もお暇するよ。勝つにしても負けるにしても、名勝負を期待してる。……じゃ！」

「ああ！ 観客席で見ている。俺様が十代を降し、勝利を宣言する様をな！」
『じゃあね〜』

すっかり調子を取り戻した万丈目とおジャマ・イエローに別れを告げ、俺は控え室の外に居た江戸川さんに軽く一礼して部屋を後にした。

後ろで何ですかアイツはと万丈目に聞いただけしているが、そこらへんは万丈目が上手く説明するだろう。

そして、いよいよ対抗戦の幕が上がる。

学園対抗戦 マイクパフォーマンスと最初の駆け引き

ワアアアアッ!!!

急遽テレビカメラなども設置することになった特設デュエルリング。その観客席は既にほぼ満席に近く、ざわめきがまるで空間を揺らしているかのような錯覚を覚える。

俺は十代達と一緒に、リングの手前で最後の調整をしていた。……まあ調整と言ってもここまで来たらテッキの調整などではなく、頭の中で相手の手をシミュレーションするとか自分の精神を落ち着かせるとかそれくらいだが。

「アニキ。氣を楽に持つてくださいね。アニキは前に万丈目君に勝ってるから楽勝ですよー!」

「そうかな?」

翔が試合に向けて十代の氣を楽にしようとそう軽口を叩くが、肝心の十代はどこか浮かない顔だ。……さつきトイレから戻ってからどうにもおかしい。何かあったかな?」

「弱氣は禁物なんだな」

「別に弱氣なわけじゃないさ。ただ……」

十代はそつとリングの反対側に居るノース校の連中、正確に言うとその中でこちらと

同じく対戦に向けてどっしり構えながら集中している万丈目を見つめる。

「今の万丈目は尊敬するぜ。たつた一人で別の学校の頭取って、ここへ殴り込んできやがったんだからな。なんかアイツ……格好良いぜ」

「……ああ。その通りだ」

この世界が俺の知っているマンガ版でなくアニメ版であること。つまり俺の知っている万丈目とこの世界の万丈目は違うということとは分かっている。

だがアイツは、マンガ版よりもある意味酷い苦難にさらされながらも再びここに戻ってきた。家族や周囲からの重圧に潰されそうになりながらも歯を食いしばって立ち上がった。その意志の強さは、例え別の世界でも関係がないのだろう。流石俺の推しだ。

「だけど十代。それはそれとして、今は目の前のデュエルに集中だ。そうじゃないと対戦相手に失礼ってやつだからな」

「ああ。分かっている」

十代は俺の言葉に頷き、気持ちを入れ替えるように自らの頬を軽く張る。

そう。戦う前から心が乱れるようであれば、今の万丈目には及ばない。間違いなく、今のアイツは以前十代や三沢と戦った時より強い。

個人的には困ったことに、どちらも応援したい気持ちでいっぱいだ。なので俺から十代に言えることは一つ。

「楽しめよ！ まっすぐ向き合い、全力でぶつかれ。要するに……いつもお前がやっていることをすれば良い」

「当然だろ！」

俺のアドバイスに、十代はニツと笑って応えた！ 言うまでもないことだったかな。

「ではここに、デュエルアカデミア本校」

「ノース校」

「対抗デュエル大会の開催を宣言する」

中継用のカメラが回る中、両校の校長による開会宣言によつていよいよ対抗戦の始まりだ。一時的に静まっていた観客達が、それに合わせて一気に歓声を上げる。

俺や翔、隼人、そして合流した三沢や明日香は、観客席に移動して戦いを見守つていた。

ちなみに観客は当然このデュエルアカデミア本校の生徒が大半だが、観客席の一角はノース校の生徒が少なく見積もっても50人以上陣取っている。どいつもこいつも顔つきの厳つい奴らで、これだけ居ると圧も物凄いな。

「クロノス教諭。デュエリストの紹介を」

「信じられないノ〜ネ！ 私の姿が今、全国に流れているナン〜テ」

鮫島校長の指示の下、クロノス先生がどこかガチガチな様子でリングの脇に立つ。クロノス先生がデュエルするんじゃないんだからもっと普通にしてくれよ！

「まず紹介するのは、ドロップアウト……じゃなかった。遊城十代！」

おいっ！ いきなりなんつう紹介の仕方してんだ！ だが十代はそんな紹介ものともせず、どうもどうもと頭に手を当てて軽く笑いながら入場する。

「頑張れアニキ。負けるな！」

翔の応援に十代は手を上げて応える。……よし。コンディションは良好！ 気負いも抜けて自然体だ。

「対するはノース校……」

十代がリングインしたのを確認し、クロノス先生はもう一人の選手を紹介しようとする。だが、

「要らん。俺の名は俺が告げる」

「へっ!?!」

「黙って引つ込めと言ったんだ。おかつぱ野郎」

「お、おかつぱじゃないワ〜ヨ！」

突然のことに目が点になるクロノス先生。……万丈目。やはりほんの少しだけ見限

られたことを根に持っているな。ちよこつとだけ口が悪い。

「お前達っ！ この俺を覚えているかっ！」

万丈目は憤慨するクロノス先生からマイクをかつきらい、リング中央に立つて堂々と視線を観客席に向ける。

「この学園で、俺が消えてせいせいしたと思っっている奴。俺の退学を自業自得だと思っていた奴。知らぬなら言っただけ聞かせるぜ。その耳かっぼじってよく聞くが良いっ！ 地獄の底から不死鳥の如く復活してきた……俺の名はっ！」

そこで言葉を切り、万丈目は高々と片手を上げて人差し指を伸ばす。そこから始まるのは、万丈目なりの宣戦布告。

「一、十」

「百っ！ 千っ！」

万丈目に追従するかのようになり、カウントに合わせてノース校の生徒達が唱和する。そして最後に大きく万丈目はその拳を突き上げる。

「万丈目さんだっ！」

「うおおおっ!!! サンダー！ サンダー！ 万丈目サンダーっ!!!」

巻き起こるノース校側の万丈目コール。その圧は、人数では負けていても応援で負けはしないと言わんばかりのもの。

その歓声を背負い、万丈目はマイクをクロノス先生に投げ渡すとデュエルディスクを構えて十代を見据える。

「行くぞ十代。このデュエル。万丈目一族のため、後ろの馬鹿共のため、そして何より俺のプライドを取り戻すため。負けるわけにはいかないからな」

「来いっ！ 万丈目！」

「だから万丈目さんだ」

十代もデュエルディスクを構えて向かい合う。闘志は十分。あとはもう互いにカードで語るのみ。

「デュエル！」

十代LP4000

万丈目LP4000

「俺の先攻……ドロー！ 俺は『仮面竜』を守備表示で召喚。ターンエンド！」

仮面竜 DEF1100

先手は万丈目。万丈目の場に仮面を被ったような見た目の竜が出現して守りを固める。初手は手堅くりクルーターを出してきたか。

「俺のターン。ドロ―！俺は『バーストレディ』を攻撃表示で召喚！バーストレディ！仮面竜に攻撃だ！『バーストファイアー』！」

対して十代が呼び出したのはバーストレディ。炎の女戦士の一撃が仮面竜を焼き払う。

「やった！アニキが先手を取った」

「……いや、これはわざと先手を取らせたんだ」

俺の言葉通り、万丈目はそこでニヤリと笑う。

「甘い！狙い通りだぜ。仮面竜の効果発動！このカードがバトルで墓地に送られた時、デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族を特殊召喚することが出来る。俺は『アームド・ドラゴンLV3』を攻撃表示で特殊召喚！」

万丈目の場に、ゴツゴツして拳を握ったような腕のドラゴンが出現する。身体のあちこちから棘まで生やして見ているからに危なそうだ。

しかしアームド・ドラゴン!? マンガ版でもドラゴン主体のデッキだったが、アニメ版ではそっちメインかよ！

「れ、LVって!?!」

「条件を満たすと、どんどんレベルアップしていくモンスターよ」

「しかし、伝説とも言われている非常にレアなカード。奴は一体どこで？」

俺以外に三沢や明日香もどよめいているな。しかしこの世界ではLV系は珍しかったりするのかな？ 遊戯も使っていた気がするけど。

「十代君負けるな！ 負けてはならんぞおっ！」

あと鮫島校長からも応援が飛んでくるが、なんかやけに必死だ。横中市ノ瀬校長がニヤニヤしてるし、友好デュエルと言つてもやはり自分の所の代表に勝ってもらいたいというのが心情だろう。

「あつたりまえじゃん！ こんな面白そうなカードがどうなるのか、最後まで見届けなくっちゃ！ 俺はカードを一枚伏せてターンを終了する」

「強がつていられるのも今の内だ。そして恐怖の俺のターンが始まる！ ドロー！」

万丈目はカードを引くと、余裕たつぷりに十代に語り掛ける。何せ場のアームド・ドラゴンLV3の効果は、

「クツクツク。十代。俺のスタンバイフェイズが訪れたことで、アームド・ドラゴンLV3の効果が発動。このカードを墓地に送ることで、アームド・ドラゴンLV5を手札からデッキから特殊召喚出来る」

「何っ!？」

「レベルアップ!？」

「そうだ。アームド・ドラゴンLV3を墓地に送り、いでよっ！ 『アームド・ドラゴン

LV5』

アームド・ドラゴンLV5 ATK2400

まるで成長を誇示するかのようになり、より大きくゴツゴツして凶悪な面構えになったアームド・ドラゴンが雄たけびを上げる。

さあ。ここが肝心だ。公平を期すため、俺はアームド・ドラゴンの効果を知ってはいるが十代に教えるつもりはない。ここで対応を誤ると一気に状況は傾くぞ。

「気を付けろ十代。レベルが上がったことで、アームド・ドラゴンの特殊能力も飛躍的に上がったはずだ！」

「分かってるぜ！ こんな時のために俺は……」

三沢の言葉に頷き、そこで十代の手が止まった。

そして何かを思案するように一瞬場の伏せカードをちらりと見る。

「……さあ！ 来いよ万丈目！」

「万丈目さんだっ！ ……バトルフェイズ！ アームド・ドラゴンLV5で、バーストレディに」

「この瞬間異発動！ 『ヒーロー・ハイロー』！ このカードをバーストレディに装備！」

万丈目が攻撃に移ろうとするや否や、十代は伏せてあったカードを発動！ バーストレディに身体の半分近くもある大盾が装備される。

「装着完了！ この効果により、相手の攻撃力1900以上のモンスターは攻撃できない」

「チイっ！ アームド・ドラゴンは攻撃せずバトルフェイズは終了。……だが」

そう。アームド・ドラゴンの効果はここからが本番だ。

「メインフェイズ2。……攻撃力1900以上の上級モンスターの攻撃を封じる盾だと？ その程度の防御じゃ、アームド・ドラゴンを完全には止めることはできないぜ」

「何っ!？」

「アームド・ドラゴンLV5の効果！ 俺は手札のモンスターを墓地に送ることで、そのモンスターの攻撃力以下の相手モンスターを一体破壊する！ 俺は手札の『ドラゴンフライ』を墓地に送る」

その瞬間、ジャキッと音を立ててアームド・ドラゴンの全身から生えた棘が隆起する。えっ!？ そういう演出なの!？

「ドラゴンフライの攻撃力は1400。攻撃力1200のバーストレディは破壊される」

「行けえ！ アームド・ドラゴンLV5。『デストロイド・パイル』！」

万丈目の合図と共に、棘がまるでミサイルのようにアームド・ドラゴンから射出されバーストレディに直撃し、盾ごと粉碎、爆発する！ 攻撃は出来なくても効果による破

壊は別だからな。

「うわっ!?!」

ソリッドビジョン

立体映像とは言え衝撃はある。爆発の余波で、十代はぐらりとよろめき片膝を突く。

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド。どうした十代? そんなものか?」

「つと!?! そうだった! これって全国に放送されているんだった! だからあんまりカツコ悪いとこ見せられないんだったぜ。ナツハツハ!」

煽るような万丈目の言葉に、十代は素早く起き上がって照れ隠しにナハハと笑う。

しかし今の局面、万丈目が主導権を取ったように見えるが、実は完全にはそうならない。

十代がヒーロー・ヒーローの発動を万丈目の攻撃ギリギリにすることで、万丈目は僅かながら攻撃直前まで悩んだはず。次のアームド・ドラゴンのレベルアップ条件は、
「戦闘でモンスターを破壊すること」だからだ。

もしLV5が出た瞬間に発動していれば、万丈目は迷わず効果でヒーロー・ヒーローごとバーストレディを破壊し、そのまま十代にダイレクトアタックを決めていただろう。

だが本当に直前まで使わなかったことで、万丈目は戦闘破壊で次のレベルアップに繋げるべきか、効果破壊で今確実にダメージを与えるか悩むハメになった。その結果戦闘

破壊を選び、ヒーロー・ヘイローに阻まれてこのターンダメージを与えそびれたという訳だ。

上手く最小限の被害で抑えた十代も凄いが、焦ることなくきっちり効果で追撃してきた万丈目もやはりやる。……ただし、どっちにしてもまだ序盤も序盤。

さあ。勝負はここからだ！

学園対抗戦 アームド・ドラゴンの猛攻

十代LP4000 手札4 モンスターなし 魔法・罠なし

万丈目LP4000 手札4 モンスター アームド・ドラゴンLV5 魔法・罠

伏せー

「俺のターン。ドロロー！ 俺は『E・HEROバブルマン』を攻撃表示で召喚ー！」

バブルマン ATK800

！
十代の場に水を操るヒーローが出現する。出たなアドバンテージ製造機バブルマン

「そしてバブルマンが召喚された時、自分の場にカードが無かったら、カードを二枚ドロローすることが出来る」

当然二枚ドロローする十代。相変わらずアニメ版のバブルマンは厄介だ。劣勢の時に
出るだけで二枚ドロローとか逆転してくださいと言わんばかりの効果だもの。そして、

「さらにこの融合のカードにより、手札の『フェザーマン』、『スパークマン』、そして場
のバブルマンを融合する！ いでよ！ 『E・HEROテンペスターー！』」

テンペスター ATK2800

バブルマンで得たカードアドバンテージをフルに使い、十代が呼び出したのは風、水、光の力を合わせた上級ヒーロー。手札消費こそ激しかったが、これでアームド・ドラゴンの攻撃力を上回った。

「テンペスターだと？」

「よっしゃー！ アニキ行け〜！」

「このカードが俺の逆転の一撃。テンペスター。『カオステンペスト』！」

十代の合図と共にテンペスターから放たれたビームにより、アームド・ドラゴンはそのまま爆発する。

先ほどのお返しとばかりに万丈目を衝撃が襲い、必死に耐えるも身体が少しぐらつく。膝を突こうとしないのはその気位の高さによるものか。

万丈目LP4000↓3600

「やるな十代。だがまだまだだ。畏発動！ 『リビングゲッドの呼び声』！ このカードにより、墓地からモンスターを一体特殊召喚できる。俺はアームド・ドラゴンLV5を呼び出す！ 甦れっ！ アームド・ドラゴンLV5」

「くっ!? 俺はカードを一枚セットし、このターンを終える」

流石にやるな万丈目。今倒したはずのアームド・ドラゴンがすぐさま復活して場を立て直した。十代もこれには驚きを隠せず、しかし油断せずにカードをセットして次の手

に備える。

「ま、またアームド・ドラゴンが」

「けど、大丈夫なんだな！ アームド・ドラゴンは、手札のカードを捨ててその攻撃力以下のモンスターを破壊するんだな。十代の場に居るのは攻撃力2800のテンペスター。そいつ以上のモンスターなんてそうそう居ないんだな！」

焦る翔を落ち着かせるべく隼人がそう説明する。確かに攻撃力2800以上のカードとなると、特殊な構築のデッキでもない限りそう何枚も入れることはあまりない。デッキのバランスが崩れかねないからだ。

だから普通に考えれば万丈目の手札にたまたまそのカードがある可能性は低い。だが、アームド・ドラゴン主軸となると当然5より上のレベルも入ってるよな。それをワンチャン引き当てられたらテンペスターがやられるが……。

「果たしてそうかな？ 俺のデッキに眠るモンスターを舐めるなよ！ 俺のターン！ ドロー」

どうやら観客席の隼人のセリフが聞こえていたらしく、万丈目はそんなことを言いながらドローしたカードを確認する。……おっ！ あの顔は何か引き当てたか？

「俺はアームド・ドラゴンの効果を発動！ 手札より『闇より出でし絶望』を墓地へと捨てる！ このカードの攻撃力は2800！ よってテンペスターは破壊だ！」

なっ!? 何故に絶望っ!? どうやったたらそのデッキと噛み合うんだそれ!? しかし攻撃力は間違いなくテンペスターと同じ2800。

アームド・ドラゴンから、先ほどバーストレディを吹き飛ばした弾幕が雨あられと放たれた。テンペスターが倒される直前、十代は伏せていたカードをオープンする。

「速攻魔法『融合解除』! 解除せよテンペスター!」

「あ、危なかった」

「間一髪ギリギリで躲したんだな!」

十代の融合解除により、テンペスターは融合素材であるフェザーマン、スパークマン、バブルマンに分離。その勢いでアームド・ドラゴンの弾幕を回避することに成功する。だがその躲し方では、

「しかし俺の攻撃はまだ残っている。アームド・ドラゴンLV5でスパークマンを攻撃! 『アームド・バスター』!」

アームド・ドラゴンLV5がそのゴツゴツした腕を振り回し、スパークマンを捉えて破壊する。守備表示だったのでダメージこそないが、

「……マズいな。条件を満たした」

「えっ!? 何がすすか久城君」

俺の眩きが聞こえたのか、翔がこちらに不思議そうに聞き返す。それはな、

「クツクツク。十代。さっきの攻撃を融合解除で躲したのは失敗だったな。これで俺の
アームド・ドラゴンは、更なるレベルアップを遂げることが出来る。見ろっ！アームド・
ドラゴンの更なる進化。エンドフェイズに効果発動！LV5を墓地に送り、デツキか
らアームド・ドラゴンLV7を特殊召喚する！」

アームド・ドラゴンLV7 ATK2800

……俺が説明するより先に出てきちゃったよ。もはやLV3の時に僅かに有った可
愛らしさはすっかり鳴りを潜め、そのもはや怪獣かと言わんばかりの巨体に全身から突
き出る棘や刃。見るからに近づいたら危なそうだ。

「これが、アームド・ドラゴンの究極の姿？」

「見たか！これが伝説のレベルアップモンスター。アームド・ドラゴンLV7だ」

実際はさらにその先のLV10があるはずだが、どうやらまだこの時点では実装され
ていないらしい。ギャオオオオンとアームド・ドラゴンが自らの進化を誇るように雄た
けびを上げる。

呆然とする十代やデュエルアカデミア側の観客達。無理もない。特に十代からすれ
ば、主力のテンペスターが居なくなつた上でこの厄介な奴のご登場だ。多少は気落ちも
して……。

「うおおっ！格好良いなっ！」

「バカが。お前の身が危ないんだぞ！ 感心してる場合か？」

「だけどき、こんなになくわくわくすることつてあるかよ！ 俺今ピンチになるくらい強いモンスターと戦つてることだぜ！ すっげ〜！ デュエルしてて良かった！」

……訂正。流石生粋のデュエルバカ。こんな状況においても強いモンスターにビビるところか楽しんでる。万丈目にまで言われるこのメンタルはある意味凄いな。

「……チツ！ どこまでも鼻につく。俺は貴様のように何も考えず、毎日をただチャラチャラと生きていくわけにはいかないんだ！ 見ろっ！ この張り詰めた視線を。万丈家の夢と野望を全部俺の肩に乗せたこの重い視線を！」

十代の態度にイラついたのか、万丈目は怖い顔をしてどこか叫ぶようにそう絞り出す。

「俺は兄さん達の期待に応えるため、そして俺の価値を証明するため、どんなことがあっても十代。お前を倒さなければならぬっ！」

「そう簡単にはやられないぜ。万丈目」
「万丈目さんだっ！」

律儀に訂正する万丈目だが……何故だろうな？ 前に言った言葉に似ているけど、今の万丈目から感じるのは圧でも凄みでもなく悲痛さ。……それじゃダメなんだよ万丈目。

「俺のターン。ドロロー！ 俺は『フレンドツグ』を守備表示で召喚！ さらにカードを伏せてターンを終了する」

フレンドツグ DEF1200

十代が場に出したのは、戦闘で破壊された時に墓地のE・HEROと融合を手札に加えるカード。既に場に居るフェザーマン、バブルマンに加えてこのフレンドツグ。そしてカードも伏せることで守りはより強固になった。

「だけど、もし一枚でも万丈目の手札にモンスターカードがあった場合一気に戦線が崩壊することになる。」

「こればかりは運なんだけど、さあどうなる？」

「往生際が悪い。そんな雑魚が今の俺に通用するかっ！ 俺のターン。ドロロー！ 俺はアームド・ドラゴンLV7の効果発動！ 手札のモンスターを墓地に送ることで、その攻撃力以下の相手モンスターを全て破壊する」

「相手モンスターを全部っ!？」

「その効果もパワーアップしたということか！」

「げっ!?! やっぱり有ったか！ 三沢は冷静に言っているが、これはマズいぞ十代。」

「俺は手札からアームド・ドラゴンLV3を墓地に送り、場にある攻撃力1200以下の
お前のモンスター全てを破壊する！ 行けっ！ アームド・ドラゴンLV7！ 『ジエ
ノサイド・カッター』！」

先ほどとは違い、ミサイルのような棘ではなく巨大な刃がアームド・ドラゴンから発
射され、十代の場のモンスターを薙ぎ払っていく。

そしてモンスターが破壊された独特のエフェクトと共に、三体も居た十代のモン
スターは一掃された。

「うおおおっ！ サンダー！ サンダー！ 万丈目サンダー!!」

その様子を見たノース校組は大盛り上がり。しきりに万丈目コールを繰り返し、中
には応援用の大きな旗を振るう者までいる。だが、十代も負けてはいない。

「フレンドッグの効果発動！ フレンドッグが墓地に送られた時、墓地から融合とE・H
EROのカードを一枚手札に加える」

そう。戦闘で破壊された時というのはあくまで俺の世界での効果。このアニメ版の
世界では僅かに効果が違うようで、十代はそのまま効果で墓地の融合とバーストレ
ディを手札に加える。

「だが、これでお前の壁モンスターは全滅した。……見てくれ兄さん達。この俺の強
さを。アームド・ドラゴンLV7でダイレクトアタック。『アームド・パニッシャー』！」

どこか必死さすら感じられる万丈目の号令により、アームド・ドラゴンの剛腕が十代に襲い掛かった。

学園対抗戦 敵は目の前に在らず

アームド・ドラゴンの攻撃が十代に迫る。その攻撃力は2800。直撃すれば大ダメージは免れない。なので、

「罷発動！ 『攻撃の無力化』！」

十代は伏せてあったカードを発動。攻撃が当たる直前で十代の前に魔力の渦が現れ、アームド・ドラゴンの剛腕を防ぐ。

「またしても凄いだか。まあ良い。俺の優位に変わりはないのだから。このアームド・ドラゴンLV7に勝てる者などいない。ターンエンドだ」

攻撃が躲されたというのに、万丈目はまるで焦ることもなくそのままターンを終了。それはそうだ。

十代 LP4000 手札3 モンスター なし 魔法・罠 なし

万丈目 LP3600 手札4 モンスター アームド・ドラゴンLV7 魔法・罠

リビングデッドの呼び声

LPこそ僅かに十代が勝っているが、ここまでの流れで万丈目のアームド・ドラゴンが常時場を制圧し続けている。おまけに下手なモンスターでは効果で破壊されて壁にすらならない。この状況を覆すのは大変だ。

さてさて。十代はこの状況をどう返す？

「俺のターン。ドロロー。流石相棒。良い所で来てくれるぜ。俺はハネクリボーを守備表示で召喚！ ターンエンド」

ハネクリボー DEF200

「いつもながらの逃げの一手か？ そんなものが何の役に立つと言うのだ」

十代の場に出されたハネクリボーを見て、万丈目がせせら笑う。確かにハネクリボーのみでは脅威にはあまりならないよな。せめて進化する翼でもあれば良いんだが。

クリクリっ!?!

ハネクリボーも馬鹿にされたのは分かるのか、抗議するようにその小さな手を振り回す。

「ふん。一丁前に怒ってやがる」

『でもアニキ。アイツならおいらの兄弟の事知ってるかもしれないよ。なあ。おいらをデュエルに出して聞いておくれよ』

「うるさい。この大事なデュエルにお前の出番などあるか！」

『そんなこと言わずに。アニキ〜!』

さつきから半透明のおジャマ・イエローが万丈目に纏わりついて何か話しているな。精霊は普通の人には見えないから、端から見ると一人で万丈目が何かブツブツ言っているという風に見える。

クリクリ〜!

ハネクリボーが十代の肩に乗って万丈目の方、正確に言うとうと万丈目と漫才染みたことをしているおジャマ・イエローを指差した。

「えっ!? 万丈目のデツキに? ……あっ! 本当だ! まあ万丈目! それって!」
「マズい! 早く引つ込め。引つ込まんか!」

だけど精霊が見える人からすればおジャマのことは普通に気づく訳で、十代はハネクリボーに指摘されておジャマ・イエローをバツチリ認識。

万丈目もそれに気づいておジャマ・イエローを慌てて追い払う。……見てるだけなら結構面白いな。

「俺のターン。ドロー! お前など攻撃にも値しない雑魚だが、アームド・ドラゴンLV7で攻撃!」

ハネクリボーは破壊されると、そのターンプレイヤーへの戦闘ダメージを0にする効果がある。下手に効果で破壊しても使い損になると踏んだのだろう。万丈目はアーム

ド・ドラゴンで攻撃し、ハネクリボーを破壊しただけでそのままターンを終了する。

「この土壇場での粘り強さ。まだ十代の運は尽きていないようね」

明日香はそう言うが、粘ってはいるものの相変わらず十代の場はがら空きで劣勢のままだ。どうしたものか。それともここで終わるのか？

「俺のターン。俺は魔法カード『強欲な壺』を発動！ これによりカードを二枚ドロースる！ ……来たっ！ これこそ俺が待ち望んでいた逆転のカードだぜ」

「何っ！」

強欲の壺からの逆転はもはや約束。十代はドロースたカードを見て早速反撃を開始する。

「手札を一枚捨てて、魔法カード発動。『スペシャルハリケーン』！ これこそがお前のレベルアップモンスターを破壊できるカードだぜ」

「そんなんっ!? バカなんっ!」

スペシャルハリケーンは、手札を一枚捨てて場に特殊召喚されたモンスターを全て破壊するカード。これには味方も含まれるが十代の場はがら空き。よってアームド・ドラゴンだけが暴風を受けて破壊される。

「上手いぞ十代！ レベルアップモンスターは上級になればなるほど、特殊召喚されたモンスターなんだな！」

「なるほど。それを逆手に取ったか」

「アニキがアームド・ドラゴンの究極体をやっつけた！ 流れはアニキに向いてきたぞ」

反撃に沸く翔達や本校の観客達。ノース校に負けじとばかりに声を張り上げ応援する。

「俺はさらに『E・HERO ワイルドマン』を召喚。行けっ！ 万丈目……サンダーにダイレクトアタック！ 『ワイルド・スラッシュ』！」

ワイルドマン ATK1500

何度も注意されたので一応反省したのだろうか、十代も遅れながらサンダーと付けて万丈目に攻撃を宣言し、野生の力溢れるヒーローが持っている剣で万丈目を切り裂く。

万丈目 3600↓2100

「ぐわあっ!？」

思わぬ反撃に万丈目もダメージを隠しきれず、遂に床に片膝をつく。

「立てっ！ 立つんだサンダー！」

「サンダー！」

そうなる黙っていないのがノース校の面々。市ノ瀬校長を始めとしてより熱の

入った応援を万丈目にかける。……戦いは何も本人達だけじゃなく、周囲でも行われているのだよな。

万丈目はすぐにグツと力を入れて立ち上がり、その手をデュエルディスクに伸ばす。主力が破壊された程度の事で、何ら問題はないとも言うかのように。

「くっ！……俺のターン。俺は魔法カード『四次元の墓』を発動する。このカードは、墓地に存在するLVを持つモンスター二体をデッキに戻しシャッフルする。俺が戻すのはアームド・ドラゴンLV3とLV7。さらに俺はアームド・ドラゴンLV3を守備表示で召喚。カードを一枚伏せてターン終了だ」

アームド・ドラゴンLV3 DEF900

再び場に現れたのは、まだどこか可愛らしさを残す姿の一番最初のアームド・ドラゴン。これで守りを固める気か。

「しかし、またアームド・ドラゴンを呼び出すとは、万丈目の奴パターンが見えてきたな。焦ってきたか？」

三沢は冷静にそう分析しているが、確かにこの状況で一からアームド・ドラゴンやベルアツプさせていくのは厳しい。一体何を狙っているんだ？

だが肝心の万丈目は十代の方ではなく、チラチラと観客席の一部を見ている。あの方は……なるほど。あの兄貴二人が居る所か。

十代も万丈目の視線の先をちらりと見る。どうやら十代も何か思う所があるみたいだな。

……万丈目。目の前の相手から目を逸らしては勝てる試合も勝てなくなるぞ。

十代 LP4000 手札2 モンスター ワイルドマン 魔法・罠 なし

万丈目 LP2100 手札3 モンスター アームド・ドラゴンLV3 魔法・罠

伏せー リビングゲッツドの呼び声

「行くぜ。俺のターン。ドロー！ ワイルドマンでアームド・ドラゴンLV3を攻撃」

今こそ攻め時と判断したのか、十代は果敢に攻め立てる。ワイルドマンの攻撃がアームド・ドラゴンを撃破するのだが、それは万丈目の思惑通りだった。

「罠発動！ 『復活の墓穴』。モンスターがバトルで破壊された時、このカードの効果で互いのプレイヤーは墓地からモンスターを一体守備表示で特殊召喚出来る。俺が特殊召喚するのはアームド・ドラゴンLV5。さあ。貴様も墓地からモンスターを呼べ」

アームド・ドラゴンLV5 DEF1700

三度目の登場となるアームド・ドラゴンLV5。効果で攻撃こそできないが、手札を

墓地に送ることで相手を破壊する効果は未だ健在だ。放っておけばまた場を荒らされかねないな。

「なら俺もここで勝負をかける。墓地から『ヒーロー・キッズ』を特殊召喚！」

ヒーロー・キッズ DEF600

「何っ!?! そんなカードをいつの間に……あの時かつ!?!」

見覚えのないカードに驚く万丈目だが、心当たりがあるのか何かに気づいたような顔をする。……おそらくあれは、十代がスペシャルハリケーンのコストで墓地に送ったものだな。

「そしてこのカードは特殊召喚に成功した時、デツキから同名のカードを特殊召喚することが出来る。俺はさらに、二体のヒーロー・キッズを特殊召喚! そしてカードを一枚セツトし、このターンを終了するぜ!」

十代の場に計三体のヒーロー・キッズが出現。ワイルドマンと合わせて一気にモンスターが並び、攻め手こそ居ないがかなり場が充実する。これなら一体ずつ破壊されても耐えられるということか。

「ふっ! 雑魚をいくら揃えても無駄だ。何故ならアームド・ドラゴンはこのターンにLV7に進化する。俺のターン!」

だが万丈目は不敵な笑みを崩さない。手札から発動した魔法カード『レベルアップ

！』により、アームド・ドラゴンLV5を墓地に送ってデッキからLV7を再び呼び出す。

アームド・ドラゴンLV7 ATK2800

「ハツハツハツハ！ 俺は……絶対にお前に負けはしない。十代。お前に必ず勝たなきゃならないんだっ！」

万丈目は再び現れたLV7の威容にご満悦とばかりに高笑いをする。だけど、俺にはそれがどこか無理をしているように感じられた。

「映せ映せっ！ いやいよクライマックスだよ！」

デュエルを中継しているテレビクルーが、デカイ撮影機材を万丈目の方に向ける。ここが正念場だぞ十代。

「これで驚くな十代。俺はさらに装備魔法『アームド・チェンジャー』を発動！ このカードは、装備魔法を一枚墓地に送ることにより発動する。LV7に装着っ！ ワイルドマンを粉碎せよ！」

コストを支払い発動と同時に、アームド・ドラゴンに刺々しいナツクルのようなものが装着される。

そのままぐるぐると腕を回転させ、小型の竜巻のような勢いでアームド・ドラゴンがワイルドマンを殴りつける。ワイルドマンは一瞬で全身を切り裂かれて破壊された。

十代 LP4000↓2700

「ぐっ!？」

「装備カードの効果発動! 戦闘で相手モンスターを破壊した時、破壊されたモンスターの攻撃力以下のモンスター一体を墓地から手札に加える。俺は仮面竜を手札に加え、アームド・ドラゴンLV7の効果で再び墓地へと送るっ!」

少し俺の知っている効果と違うがそれはアニメ版だからか? だが結果は変わるのとなく、万丈目はモンスターを手札に加えてそのままアームド・ドラゴンの効果へと繋げる。

「仮面竜の攻撃力は1400。それ以下の攻撃力のモンスターは全て破壊される。ヒーロー・キッズの攻撃力は300」

「その通り。ジェノサイド・カッター発射っ!」

それは数ターン前の光景の再現か。再びアームド・ドラゴンLV7の身体から巨大な刃が発射され、またもや十代の場のモンスターが一掃された。

「ああ。またアニキのモンスターが全滅」

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド。……ハッハッハ! 貴様にアームド・ドラゴンを倒す術はない。十代。今ならテレビの前で恥をかく前にサレンダーすることを認めてやるぞ」

確かにこの状況は十代にとって明らかな劣勢。展開していたモンスターはまとめて破壊され、次にアームド・ドラゴンのダイレクトアタックを受ければそれで勝負が着いてしまう程度のLPしか残されていない。

並のデュエリストならもうこの時点で絶望の表情を浮かべてサレンダーしてもおかしくない。並のデュエリストなら。

しかし十代は並ではない。顔を上げた十代の表情に映るのは絶望などではなく、喜びに満ちた笑顔だった。

そう。十代はLPが0になるまで自らの勝利を諦めない。どんな逆境であろうとも、自分のデッキを信じてカードを引く。

「冗談じゃない。俺がサレンダーなんかするわけじゃないじゃん！俺今超ワクワクしてるんだぜ！だって、次のターンで奇跡を起こすんだからな。でも、出来ればさ……もつと本気の万丈目……サンダーと戦いたかったぜ」

「俺が、本気じゃないだと？」

「ああ。なんかお前は目の前の俺を見てないで、違う敵と戦ってるようだったぜ。……この次は、もっと楽しみながらデュエルしようぜ。だってデュエルするのってむちゃくちゃ楽しいだろ？」

全身全霊でデュエルを楽しむ。相手がどんな奴であれ、その基本理念は揺らがない。

それは間違いなく十代の長所だった。

そんな十代だからこそ、目の前の万丈目がデュエルを楽しんでいないことに気が付いたのだろう。

「デュエルするのが楽しい……か」

万丈目が少し、ほんの少しだけ寂しそうに呟いたのは、俺の気のせいじゃないのだろう。

「そう！ デュエルはわくわくする。特に信じている仲間がそれに応えてくれた時はな。俺のターン。ドロー！」

十代は勢いよくドロローし、万丈目に向けてにつこり笑いかけた。

どうやら、いよいよ決着の時らしい。

学園対抗戦 決着

十代 LP2700 手札3 モンスター なし 魔法・罾 伏せ1

万丈目 LP2100 手札0 モンスター アームド・ドラゴンLV7 魔法・罾

リビングデッドの呼び声 アームド・チェンジャー 伏せ1

「手札から、『戦士の生還』を発動！ 俺は墓地から戦士族モンスター一体を選択して手札に加える。俺が手札に戻すのは、E・HEROフェザーマン」

十代が墓地から呼び戻したのはフェザーマン。そして手札にはさつきフレンドッグで戻した融合とバーストレディのカード。と来れば次の流れは十代の十八番。

「そして、フェザーマンとバーストレディを手札融合！ いでよ！ 『E・HEROフレームウイングマン』！」

フレームウイングマン ATK2100

予想通り、十代の場に炎と風の力を纏うヒーローが出現する。

「バカな！ そんな奴を呼び出してどうする？ 俺のアームド・ドラゴンLV7の攻撃力は2800。倒すことは出来んっ！」

そう怒鳴るように言う万丈目だが、声がほんの僅かに震えている。万丈目もまた頭の片隅にちらついているのだ。……この局面で十代がこのモンスターを出したこと。それこそが十代が逆転を狙っているという証であると。

「いいや。既に俺の必殺のコンボは完成しているぜ。行くぜ。罨発動！ 『ミラクル・キッズ』」

そして十代がオープンした伏せカードは、墓地のヒーロー・キッズ一枚につき400ポイント相手の攻撃力を下げるカード。ヒーロー・キッズ達の幻影が、アームド・ドラゴンに纏わりついてその力を封じる。

アームド・ドラゴンLV7 ATK2800↓1600

「くっ!?!」

万丈目もこの先の流れを悟ったのだろう。その顔は非常に険しい。

「これで俺の勝ちだっ！ 行けっ！ フレイムウィングマン。『フレイムシュート』！」「マズいマズイ!?! カットだカットくっ!」

十代の号令でフレイムウィングマンの腕から炎が放たれ、万丈目の敗北を察してテレビ中継が慌てて中断される。

おまけに万丈目本人も何故か闘志を失いかけていたようだった。

十代のフレイムウィングマンには、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与え

る効果がある。万丈目のLPは残り2100。このまま行けばフレイムウイングマンの効果でLPは尽きる……はずだが。

「万丈目……それで良いのかよ？」

そうポツリと漏らしたその言葉は、観客達の声援にかき消されていった。



（負ける？ 俺はまた負けるのか？）

十代がミラクル・キッズを発動させた時、万丈目の心に過ぎったのは不安と恐怖だった。

敗北への不安。敗北することで兄達から見放されるのではないか。また以前のよう
に、他の生徒から陰口を叩かれるようなことになるのではないかと思う恐怖。それはい
つも万丈目の心の奥底に燻っていた。

だからいつも自分を鼓舞し続けた。俺は絶対に負けんと。負けられないと。そうで
もしないといつまた不安が顔を出すか分からないから。

だがもうそれもここで終わる。フレイムウイングマンの攻撃が到達した時点で万丈
目の負けは確定する。

さらに万丈目は視線の端で目にした。観客席で苛立たし気にこちらを見、席から立ち

上がって帰り支度をしている兄二人の姿を。

勝利こそ最低条件。勝って当然。それが出来なければ落ちこぼれ。落ちこぼれなどに用はないと、そう考えていることが手に取るように分かる二人を。

ならもう諦めても良いのではないか？ 兄さん達にも見限られ、どうせもうすぐ終わりだ。万丈目の瞳から光が消えかける。後はもう俯いて力なく倒れ込んでしまえば良い。そうすれば楽になれる。妥協と諦めが心の中を埋め尽くし、

声が、聞こえた気がした。

観客の声援に混じって微かに、だが間違いなくそれで良いのかと万丈目に問いかける声か。

（良いのかだと？ 良い訳がないだろうがっ！）

万丈目はキツと俯きかけた顔を上げて前を向く。

その視線に捉えたのは、十代の勝利を確信した本校生徒達の中でただ一人、まだ分からないという目をした男。

敵対している十代の側の生徒ではあるが、万丈目の実力を信じているからこそこの状況になってもまだ何かやるかもしれないと思っている一人のファン。そして、

「諦めるなっ！ サンダー！」

「サンダー！」

自分の後ろから聞こえる応援の声。圧倒的劣勢。それでも尚、まだ万丈目は、サンダーは負けないと信じる者達の声が聞こえた。

「最後まで奴が、そして後ろの馬鹿共が負けると思っていないのに、肝心の俺が諦める訳にはいかんよなああっ！」

万丈目の瞳に光が戻る。萎えかけた心と身体を奮い立たせ、力強く一步前に踏み出す。

「罷発動！ 『バーストブレス』！」

「何っ!？」

万丈目の伏せていたカード。その効果により、フレイムウイングマンの放った炎が到達する直前にアームド・ドラゴンLV7が口からブレスを吐いて炎を相殺する。いや、このカードは、俺の場のドラゴン族モンスター一体を生け贄に発動できる。生け贄にしたモンスターの攻撃力以下の守備力を持つ場のモンスターを全て破壊する！」

アームド・ドラゴンLV7の命を燃やして放ったブレスが炎を押し返し、そのままフレイムウイングマンを逆に燃やし尽くす。そしてブレスを吐き終わったアームド・ドラゴンLV7もまた、どこか安らかな表情で消滅した。

「なっ?! 俺のフェイバリットカードが!」

「……ハッ! 甘いんだよお前は。俺がこの程度で倒せるとでも思っていたのか?」

「なるほど。違ういな! 俺はこれでターンエンド!」

万丈目はビシツと十代を指差しながら宣言する。だが、必殺の一撃を躲されたというのに十代はどこか楽しそうだった。

そして、有る筈のない1ターンが幕を開ける。



良いぞ良いぞっ! 流石俺の認めた二人だ! 俺は二人のギリギリの戦いに魅入っていた。

今のターン、間違いなく十代はこれで決めるつもりの一撃だった。おそらく通常の話なら、ここで勝ち確BGMでも流れるはずだったのだろう。

だがこれは学園対抗戦。アニメで言ったらおそらく前後編の大ボリュームだ。流石は万丈目。主力を失ったものの、無事持ちこたえた上にフレームウイングマンも破壊した。これでまだ勝負は分からなくなった。

「ああ。フレイムウィングマンがやられちゃった」

「やるな。万丈目。まさかあの状況から粘り切るとは」

「そうね。……以前の万丈目君ならここで決まっていたわ。だけど、今の万丈目君は間違いないそれを凌駕している」

翔達が口々に言う。隼人に至っては言葉を発することもなく試合に魅入っている。

そんな中、

『いやあこれはこれは。実に面白いことになってきたね』

「何だよ急に？ 今良い所なんだから邪魔するなよ」

皆が試合の行方に集中している中、いつものように突然かつこっそりとディーが俺の真横に出現した。だが今はこの名勝負を見逃したくはない。ディーの方からすぐに視線を逸らし、俺は再び試合の行方を見守る。

『邪魔なんかするもんか。僕個人としても見逃せない一戦だからね。つつい良い場所で見えなくなっただけさ。……この試合どっちが勝つと思う？』

「……さあな。そんなの知るわけないだろ。だけど……勝者は一人だ」

十代 LP2700 手札0 モンスターなし 魔法・罠なし

万丈目 LP2100 手札0 モンスター なし 魔法・罫 リビングデッドの呼
び声

「俺のターン。……十代。さつきお前はデュエルするのは楽しいと、そう言ったな？」
「ああ！ デュエルするのってむちゃくちゃ楽しいだろ？ それは万丈目も同じのはず
だぜ」

何故か万丈目は、ドロローの前にどこか落ち着いた雰囲気です。十代に話しかけた。十代は
なんだそんなことかとはばかりに軽く答える。

「そりゃあ勝ちやあ楽しいだろうよ。俺にとつてデュエルは、兄さん達に俺の価値を証
明するための物だ。勝ち続けて兄弟の落ちこぼれなんかじゃないと認めさせるための
な。そしてそれは今でも変わらない。……だが、兄さん達には見限られたようだ」

その言葉にさつきまで万丈目の兄貴達が居た場所を見ると、あの二人まだ勝負が着い
ていないつてのに帰ろうとしてやがる。応援が本人より先に諦めてんじゃないよ！

「……万丈目」

「さんだ。もうこうなつては万丈目一族のためにも何も無いな。だがそれとは別に、俺に
も負けられない理由が出来た」

そこで万丈目は、それまでチラチラ見ていた兄弟達の方ではなく、一度後ろのノース

校の生徒達をチラリと見た後真つすぐに戦う相手である十代を見据えた。

「まだ俺が勝つことを信じて諦めない後ろの馬鹿共のためにも、俺の戦いを最後まで見届けようとしているファンのためにも、俺は負けん……いや、俺は勝つ！」

今の状況は以前月一テストで十代と万丈目が戦った時の再現。互いの手札も場もほぼすつからかん。となればあとは純粹なドロロー力の勝負となる。

「以前戦った時の言葉を引用させてもらうぜ十代。このターン。俺が攻撃力2700以上のモンスターを出せたら面白いよなあっ？」

「……面白れえ。面白れえぜ万丈目っ！ あん時の仕返しって訳か！ じゃあ俺もお前の言葉で返すぜ。『出来るかな？ そう簡単に』」

「今見せてやる。お前に奇跡が起こせるのなら、俺に起こせん道理はないっ！ ドローっ！」

気合を入れて万丈目がカードを引く。そのカードは、

「魔法発動。『早すぎた埋葬』！ LPを800払い、俺の墓地のモンスター一体を攻撃表示で特殊召喚しこのカードを装備する。このカードが破壊された時そのモンスターも破壊される。俺が呼び出すのは、『闇より出でし絶望』！」

万丈目 LP2100↓1300

闇より出でし絶望 ATK2800

おいおい!! ここで宣言通り引くとはなんて鬼引きだよ?!

万丈目が墓地から呼び出したのは、アームド・ドラゴンの効果コストで墓地に送った上級モンスター。本来なら自慢のアームド・ドラゴンLV7を出したかったのだろうが、あのカードはLV5の効果以外では出せないという効果があるためこちらになったのだろう。

「……へへっ!」

宣言通りドロウしたカードで奇跡を起こしてみせた万丈目に、十代はただ感心のあまり笑うことしかできなかった。……そうだよな。まさか手札0のこの状況で一発で引き当てるなんてそうそう出来ることじゃない。まあ十代はよくやってるからある意味因果応報だけどな。

そして、これが最後の攻撃。

「闇より出でし絶望で、十代にダイレクトアタック! これで……最後だっ!」
「ぐああああつ!」

その影のような体躯の中で唯一はつきりとした紫の巨腕を伸ばし、絶望が十代のLPを磨り潰した。

十代 LP2700↓0

デュエル終了。万丈目WIN！

挑むための一歩

その日の夜。

「……………ぶはあつー！」

俺は一人、つい数時間前の激戦を思い出しながら、本棟のホールのバルコニーでジュースを呷っていた。ホール内では現在、本校とノース校の懇親会……というか宴会が催されている。

元々ノース校組は今日の夜に帰還する予定だったらしいが、急なテレビ中継やら何やらで時間がずれ込んで結局明日の朝出発になったらしい。授業計画とかどうするのかと思つたが、まあその辺りは向こうの都合。上手く調整なりなんなりするのだろう。

問題は急に押しかけてきた五十人以上もの食べ盛りの学生の食事や寝る場所の方だった。そこに関しては意外な所から助け船があつた。……そう。万丈目グループだ。

どうやらあの兄さん達、最初から勝負の後でパーティーを開く算段だったらしい。そこも含めてドキュメンタリー風にテレビ中継し、万丈目を売り出していくという具合だ

ろうか？

だが流石にテレビ中継に関しては今度こそ学園側からストップが入り、あくまで急に撮影をねじ込んだことの謝罪として食事諸々を提供するという風に落着。テレビクルーもさっさと撤退していった。

『しっかし皆して元気だね。あれだけ飲み食いしてそのまますぐにデュエル大会とは』

「それだけさっきの勝負が皆の心に火を付けたってことだな」

ふわりふわりといつもの如くデイーが現れてそう呟く。

大半はまだ食事中なのだが、早めに食べ終わった両校の生徒が腕試しとばかりにデュエルを始めたのだ。これも一応懇親会の一部と扱われているのか、互いの教師陣も軽く注意しただけでお咎めは無い。そして、

「ガッチャ！ 楽しいデュエルだったぜ」

「次は俺だ！」

「いや。俺だ！」

その中で一番やる気になっているのが十代だといふのだから物凄い。普通あれだけの一番のあとは精神的にも肉体的にも疲れているはずなのに、宴会でたらふく食いだれが無くなったかのようにデュエルだ。どこから出てるんだあのスタミナ。

『君も混ざったら良いのに』

「……今は止めとく」

普段なら混ざっても良いが、今はそういう気分にはなれない。

一進一退の攻防。主導権自体は終始万丈目が握っていたが、十代は粘り強く攻撃を防ぎながら反撃してみせた。実際最後のターンは、少しでも手を間違えればどっちが勝つか分からないような手に汗握るギリギリの勝負だったと言える。

そうしてのんびりさっきの勝負の余韻に浸っていると、

コツコツ。

「……こんな所に居たのか」

「よお。お疲れ様」

足音と共にやってきたのは、丁度話題にしていた万丈目その人だった。

万丈目が片手に食事を載せた皿を持ちながら近づいてくるので、軽く手を上げて挨拶する。立食形式だから問題はないがどうしたんだらうか？

ちなみにいつの間にかデーは素早く身を隠したようにで姿が見えない。万丈目に精霊が見える以上、自分の事が見られないようにということだろう。

「隣……良いか？」

「別に俺の場所って訳でもないしな。どうぞどうぞ」

「悪い。下手にホールに居ると誰かに捕まりかねなくてな。……つたく。食事くらい静かに食わせてほしいものだ」

万丈目はそう言うなり、柵に寄りかかつて食事を食べ始めた。まあ万丈目の話もありえなくはない話だ。十代とかに見つかつたらすぐにまた再戦を挑まれかねない。

そう言えばさつきまで姿が見えなかつたな。つてことはまだ夕飯を食べていないのだろうか？ だとしたら止めることもないし、俺は万丈目が食べているのを横目で見ながらその場に佇む。

そしてしばらくして、

「……さつきまで兄さん達、そして両校の校長達と話をしてきた」

あらかた食べ終わり、万丈目が急にそうポツリと話し始めた。俺は黙って先を促す。

「結論から言うと、俺はこの学園に復学する」

「それはまた……随分と思いい切つたことだ。ノース校の方はどうする？ 代表にまでなつたんだろ？」

「校長達の配慮で、あくまでノース校へは一時的な留学であり籍は本校に置いたままという処置となつた。と言つても無断長期欠席の事実自体はあるからブルーやイエロー

では進級できない。戻るのならオシリスレッド扱いだと言われたよ。……俺がレッドなど屈辱ではあるが、背に腹は代えられない」

万丈目は慥然とした顔でそう口にする。確かに元々ブルーだったのが二段階降格はキツイよな。寮の設備とか天と地の差があるし。ちなみに万丈目ブラザーズもその点に噛みついたそうだが、規則ということでは校長達が押し切ったらしい。

「……なあ。どうしてそこまでこの学園にこだわるんだ？ そんなにノース校が嫌だったのか？」

「そんなんじゃない。……この数か月ノース校に居たが、あそこは実にシンプルだ。単純にデュエルの腕がモノを言う。まああの馬鹿共も嫌いではないし、居心地も悪くはなかった」

「じゃあ、何故だ？」

「……こつちじゃなきゃ挑めないからだ」

そう言うのと、万丈目はチラッとホール内に目を向ける。その視線の先に居たのは、
「……なるほど。カイザーか」

「ああ。十代にはリベンジした。しかし今のままノース校に居たら、次の学園対抗戦まで本校の生徒とは戦えない。そしてその頃にはカイザーは卒業。卒業してプロデュエリストになった場合いつ挑めるかもわからない。だが」

同じ学園内であればまだ挑む機会はある。それこそ卒業デュエルの対戦相手に選ばれるとかな。そう締めくくった万丈目だが、その眼がほんの僅かにだけ寂しそうにしていることが見て取れる。

「このことは校長とノース校の一部の奴らには既に話してある。キングの称号も江戸川の奴に返した。……引き留められたが、最終的には納得してくれたよ」

「……そっか」

自分で居心地が悪くはなかったと言うあたり、ノース校の暮らしはそれなりに肌に合っていたのだろう。少し見た限りだったが、ノース校の連中も体育会系のノリではあったものの万丈目を慕っているようだった。

本校の方で色々あった万丈目からしたら、このままノース校に行くという選択肢もあつたはずだ。だけど、万丈目はカイザーに挑むためにここに残った。それもまた一つの覚悟なのだろう。

「……………んっ!?! 校長達はそれで済むとして、じゃあ兄さん達とは何の話があつたんだ? 今回のデュエル、万丈目が勝つたんだからその……………なんだ。万丈目一族の世界制覇だったか? それに大きく近づいたってことでお褒めの言葉でも貰ったとかか?」

バックアップしてくれるんだろ？」

ふと気になって尋ねてみる。すると、予想外の言葉が返ってきた。

「ああ。それは断った。それで少し兄さん達とは喧嘩……いや、違うな。喧嘩にすらなっていない。一時的に退いてもらったと言った方が正しいか」

万丈目の話によると、両校長の立会いの中兄さん達に対し、過度の援助は必要ないと突っぱねたらしい。当然万丈目をスターに仕立て上げたい兄二人は反発する。だが今回の件は無理に押し進められないわけがあった。

一つ目は、勝利したとはいえ十代と万丈目の戦いは接戦過ぎたということ。特に途中万丈目のピンチでテレビクルーが中継をカットしたのは早計過ぎた。あの戦いは生中継だったため、あのシーンだけ見ると万丈目が負けたようにも見えるのだ。

もちろん実際に見ていた者からすれば万丈目が勝ったことは分かっている。しかし下手に後から結末を流したとしても、編集かやらせだと邪推される可能性があるのだ。

その件に関しては向こうでテレビ局に抗議する姿勢らしいが、自分達も早まって帰り支度をしていたのを考えるとどっこいどっこいだと思う。

二つ目は学園側との関係。既にテレビ中継を断行した以上、これ以上無理を通そうとすれば間違いなく関係は悪化する。今回のノース校組への助け船のように少しずつ関係を修復していくにも、それには結構な時間がかかる。

それこそ一年がかりでやっていけないといけない案件だ。ゴリ押ししても良いことはない。

「俺は俺のやり方で必ずこの学園のトップに立つ。だから過度の援助も演出もしないでくれ。そう頼み込んでなんとか退いてもらった。正司兄さんは怒り狂っていたが、長作兄さんがとりなしてくれて何とか事なきを得たな。……俺が勝ち続ける限りは俺のわがママを認めるとさ」

長作兄さんは政治家だし腹芸はお手の物だ。校長達が立ち会っていたからああ言っただけかもしれないがなと、万丈目は自身を戒めるように軽く笑った。

「そっちの家庭事情も大概複雑だな。援助くらいなら受けても良いだろうに。……まあそこを自分の力でやるって所が万丈目らしいと言えばらしいんだが……あっ!? またさんを付けるの忘れた。すまないな」

「……もう良い。ここまで来たら特別に許そう。ファンは大切にしないとな」

俺が平謝りすると、万丈目は何故か複雑な顔をしながら鷹揚に手を振る。はつきり言っておりがたい。この調子だとあと何回付け忘れるか分からないからな。

「あゝっ!? そんなところに居たのか万丈目! おっ!? 遊児も一緒に居たのか!」
「むっ!?!」

「おう十代! そっちは……って、聞くまでもなさそうだな」

そこにやってきたのは先ほどまでホールでデュエルしていたはずの十代。どうやら一人で何人も蹴散らしたらしい。

「なあなあ万丈目！ またデュエルしようぜ。今度は負けないからよ！」

「騒ぐな！ さつきやつたばかりだろうが。お前へのリベンジは済んだのだからもうやらん！」

「えーそんなこと言うなよ！ どうせ明日には帰っちゃうんだろ？ ならまたやろうぜ。先に行つて待つてるからな！ 遊兎も来いよ！」

十代はそんなことを勝手に言い残してすぐまたホールへ戻っていった。……ホントにデュエルに関しては何力馬鹿だな。

万丈目がこれから同じ寮に入ると知ったら……ダメだな。どっちにしてもデュエルやりたがるわ。

「えー。何が悲しくてあんなバカと同じ寮に入らなければならんのだ！」

「これからちよくちよくデュエルをせがまれるだろうから、ご愁傷さまとだけ言っておくよ」

「……なんてことだ」

軽く嘆息しながら額に手をやる万丈目。そして、

「まあ、一ファンとしては推しが同寮になるのは喜ばしいことだ。なので、今の万丈目に

は悪いけどこう言わせてもらおうか」

俺は嘆く万丈目に向けて手を差し出す。

「ようこそオシリスレッドへ。これからよろしくな！ 万丈目」

「……ふっ！ ファンサービスはあまり期待するなよ」

万丈目はニヤリと笑いながら力強く俺の手を握り返した。

精霊が見える者達の団欒 その一

学園對抗戦から数日。万丈目は無事本校に復学した。

オシリスレッド所属という扱いになつたけれど、その制服はノース校の頃からの黒いロングコートで通している。レッドの服を着るくらいならこつちの方が良いとかないとか。まあ制服の改造はやっていゝ生徒も多いので、そこまで問題にはなつていないよ
うだ。

問題と言つたら、急に戻つたことで他の生徒からのやつかみがあるんじゃないかと思
われていたが、これは意外にもそんなに多くはなかつた。あの学園對抗戦のことが効い
ているらしく、どうやら一目置かれていゝようだ。

そして負けた十代の方だけど、こちらにも表立つた反感は今の所来ていない。負けたこ
とで何かしらあちこちから文句が来るかと思つたが、こちらに關してはあの日の懇親会
で一際戦いまくつたことが効いていゝようだった。

何せ一人でノース校、本校問わず十人以上倒していたからな。ノース校側からも流石
サンダーを苦しめた男と評価が高かつた。流石にその疲れが祟つて、万丈目と当たる前
に三沢と戦つて負けていたが。

三沢自身も十代が疲れていたのは知っていたようで、こんな状態のお前に勝つのは当然の結果だろうとこともなげに言っていたな。それと試したいことがあるとかで、普段とは違うデツキを使っていたのも意外だった。てつきりまた対十代用のデツキでも引つ提げてくると思っただけだな。

まあそんなこんなで少しずつ万丈目もこの学園に馴染んできた結果、

「こうして茂木の寮で精霊とのんびり戯れるくらいになったのです」

「こいつらに無理やり引つ張り込まれたんだがっ!？」

目の前で茂木の所の精霊達に纏わりつかれている万丈目が、そうパワフルな突っ込みを返してきた。いつものクールな万丈目とはまた違う一面だ。それはそれで良いものだが。

「まあそう言うなよ万丈目！ お前むちゃくちゃ懐かれてるじゃんか！」

「さんだ！ だからこれはこいつらが勝手に纏わりついてくるだけだっ！ こら離れろっ！ 鬱陶しい」

「あはははっ！ 初対面の人にこんなに精霊達が懐くなんて初めてだよ」

万丈目は腕をぶんぶん振って精霊達を引つpegす。だけど精霊達は気分を害した様

子もなく、そのままプカプカとそこらを漂っている。ある意味精霊に慕われるのも才能かね。

それを見て十代と茂木はニマニマと笑うものだから、万丈目は余計に怒り狂っている。

ちなみに茂木は俺達が来る前にたつぷり昼寝をしていたらしく、少しだけいつもよりシャキツとした顔つきをしている。……あくまでいつもに比べたらの話だが。

「それにしても万丈目、身体にどっか変な感じはないか？ どっか頭がふわふわというかもけもけくっという感じにならないか？」

「もけもけくっってどんな感じだっ!? ……今の所特に違和感を感じないな。周り中精霊だらけで驚いてはいるが」

一応聞いてみると、万丈目が手を開いたり閉じたりしながら自らの調子を確認する。今回茂木の寮に皆で遊びに来たのは、万丈目に茂木を紹介することも理由の一つではあるが、茂木の能力に万丈目が影響を受けるかどうかを試すためでもある。

茂木の近くに居る者が脱力するという現象。これが何故か俺と十代には効かなかった。二人に共通するのは精霊の姿が見えるかどうか。つまり同じように精霊が見える万丈目が効かないのであれば、脱力の原因はやはり精霊の力によるものということではほぼ確定だ。

なので万丈目には、先にそのことを説明して協力を頼んだ。もちろん本人の意思が第一なので断つても良いし、協力してくれる場合何か少しでも兆候が見られたら即座に外へ引つ張り出すことになっている。少しもけもけになつたぐらいなら復帰できるのは前の一件で証明済みだしな。

万丈目も精霊のこと自体には興味があつたようで、俺の知つていることについて出来るだけ話すと言つたら普通に引き受けてくれた。ありがたいことだがもうちよつと疑つたり安全性の確認なんかをしてほしい。……危険なことにはならないよう全力は尽くすが。

「話には聞いていたが、本当に精霊が多いなこは。うちの雑魚のような奴がそこら中にうようよしている」

『ちよつとヒドイよアニキ。おいらのことをそんな風に言うなんてさ』

万丈目の言葉に反応してか、おジャマ・イエローが半透明の姿で現れ万丈目に纏わりつく。まったく万丈目ときたら、そのやや口が悪い所は何とかした方が良いと思うんだけどな。根は良い奴なのに伝わりづらいというか。

「おゝっ！ 前に一度見たけど、こうやって顔を合わせるのは初めてだな！ 俺遊城十代。よろしくな！」

「僕は茂木もけ夫。よろしくね。おジャマ・イエロー君」

「俺は前にも会ったよな。改めて、久城遊児だ」

『よ、よろしくなのよ。……アニキと違って皆優しいんだよ！ おいらのアニキときたら……』

おジャマ・イエローはその大きな目をうるうるさせながら皆に挨拶し、横目でチラッと拗ねるような目を万丈目に向ける。

「ふん。攻撃力0の雑魚を雑魚と言つて何が悪い。悔しかつたらデュエルで役に立つて見せろ」

万丈目は冷たくシッシと手で払う仕草をする。確かにおジャマは単体ではただのバニラカードだからな。おジャマは他のメンツが揃つてこそ真価を発揮するタイプだ。

『う、うわくん。おいらだつて、おいらだつて兄弟が揃えばお役に立つのよくん。……そうだ！ 誰かおいらの兄弟の事を知らない？』

「おジャマ・イエローの兄弟つてことはグリーンとかブラックとかか？ 悪いけどそんな精霊は見たことないぜ」

「僕も残念だけど……久城君は何か知らないかい？」

茂木の問いに俺も知らないと言を横に振る。この時代ではまだ実装されているのはグリーンとブラックだけだろうが、それにしたつてイエローがこの調子なら残り二体もかなりキャラが濃そうだ。そんなのを見たら忘れるはずなものな。

それを聞いて、イエローはがっくりと肩を落としてしょんぼりとした顔をする。すると、

『大丈夫。大丈夫だよ！ ほら。笑って！ 良い子良い子！』

『うおっ!? レティシアよ。急に出るんじゃない！ 止めるのだ！』

カタカタ!?

笑顔じゃない姿に反応したのか、レティシアが不意に実体化！ そのままおジャマ・イエローの頭を撫で始める。腕に抱かれていたネクも連鎖的に実体化させられ、それを止めようと慌てて罪善さんも出現する始末。

「なんだお前は？ ……子供？」

『私レティシア！ 黒つぽいお兄ちゃん。あんまりおジャマ・イエローちゃんを苛めちゃダメだよ。皆笑ってた方がずっと良いもの！』

『ふむ。直接見るとお前も我が生け贄にふさわしいな。よろしい。お前も生け贄候補として我が名に震え慄くが良い。いずれ復活する我が名は』

『ネクちゃん！ 皆を怖がらせるなんてめっ！ だよ』

万丈目は急に現れた人型の精霊に驚き、レティシアはイエローをあやししながら万丈目にダメ出しする。ついでにまたいつもの如く口上の後で名乗りを上げようとしたネクを叱つてたりする。もうなんかお約束みたいになつてる気がするな。

イエローも撫でられてまんざらでもない様子で、すぐに泣き止み少しだけ笑顔を取り戻す。

「あく。万丈目。この子はうちの精霊のレティシアと、色々あつて部屋に置いてあるネクダ。何となく分かるかと思うけど……実体化してる」

「それくらい見りゃ分かる。……久城。精霊というのは皆こう実体化出来るものなのか？」

「それはまだなんとも。俺のデツキが特別つてこともあるかもしれない。他にも実体化出来るのが何体か居るし」

そう言うと、万丈目は額に手を当ててため息を吐く。

「なんだ？ 怖いのか万丈目？」

「さんだ！ 怖いというより面倒だ。考えてみる。ただでさえ鬱陶しいこの雑魚が、最悪実体化して俺に四六時中纏わりつくんだぞ。頭が痛くなる」

『うつふくん。おいらと万丈目のアニキがより親密な関係になるのねくん！』

「だから纏わりつくな！ あっちへ行つてろ」

からかうように言う十代を、お前は分かかっていないとばかりに説明する万丈目。そしてまたくつつこうとしたイエローを掴んで他の精霊達の方に放り投げた。

「レティシアもせつかくだからあつちで遊んでおいで。イエローと色々話したいことも

あるだろう？」

『うん！ 分かった。行ってくるね！』

『おジャマ・イエローか。攻撃力0だが上手く使えば復活の役に……うおっ!? レティシアよ。考え事をしている時はもつと優しく運ぶのだ！』

何やらブツブツ言っていたネクを抱いて、レティシアはそのままイエローの所に歩いていった。仲良く……なるイメージしかないな。なんだかんだコミュ力高いレティシアだもの。

「さて、うつとうしい奴が消えた所で、そろそろ本題に入るとするか。俺がここに来たのは精霊関係について興味があつたから。それで久城が知っている限りのことをここで話すと言つたからだ。……という訳で聞かせてもらえるか？」

「俺もそこまで詳しいって訳じゃないんだけど、約束だからな。良い機会だから、十代も茂木も今回は精霊について知つてることや感じたことを話しあってみよう。話のネタとしては中々だろう？」

ここに集まつた精霊が見えるメンバー。俺は一種の例外的なものだから当てにはならないかもしれないが、俺以外に三人も居れば何かしら見えてくるものがあるかもしれない。

「そうだな。俺と相棒ハネクリガーの出会いを聞いて、お前ら腰抜かすなよ！」

「じゃあ僕は茶菓子のおかわりを取ってくるね。……ふふっ！　こんな風に友達何人かでおしゃべりするのも久しぶりで楽しみな」

十代の話は前に聞いているから何となくわかるが、万丈目と茂木の出会いはそう言え
ばどんな感じなんだろうか？

退屈はしなさそうだな。

精霊が見える者達の団欒　その二

こうしてそれぞれの精霊との出会い。それをテーマに雑談に興じることになったのだが、それぞれの反応は中々に面白いものだった。

まず万丈目とおジャマ・イエローの話からだが、

「船が遭難して、ノース校の潜水艦に拾われた時に市ノ瀬校長から貰った」

「いや待ってっ!? 最初から突っ込みどころ満載なんだけど!」

船が遭難してっでっでっでっなんだよっ!? いきなり大冒険の予感だよ万丈目。

「おおっ! いきなり面白そうな話じゃねえか! 続きを聞かせてくれよ万丈目!」

「さんだっ!」

やっぱり呼び捨てには厳しい万丈目だったが、少しずつ学園を出た後の事を話してくれた。

万丈目グループで所有している船で学園を出た所、途中水難事故に遭って遭難したところ。その際ノース校の潜水艦に拾われ、最初に会った時は身分を隠していた市ノ瀬校長からおジャマ・イエローを渡されたことなどだ。

「校長が言うには、このカードが俺の危機を察知したんだよ」

『あの時は運命を感じたわ〜ん。あの時のお礼をしてくれても良いのよん!』

「デツキに入れてやってるだけありがたいと思え」

『もう。いけず〜!』

途中から戻ってきたおジャマ・イエローがなんかくねくねして悶えてるが、なるほど。割と興味深いな。そうして考えてみると、見えるかどうかは別にしても市ノ瀬校長もおジャマ・イエローのことを知っていたっぽいな。次会うことがあつたらちよつと話を聞いてみるか。と言つてもあんまり接点はないのだが。

ちなみにその後の万丈目のノース校の話も手に汗握つた。周囲を氷に囲まれた場所に存在するノース校。そこは厳しい自然と隣り合わせであり、入学試験もまた独特だ。

まず扉はデツキの最低枚数である四十枚を確認しなければ開かないが、万丈目のデツキは海水でダメになっていた。その場合の補充用カードも用意されてはいたのだが、その場所がなんと学校の周りの自然の中。

おまけに強いカードほどより険しかったり見つけにくい所に置かれていたりという鬼畜ぶり。万丈目が言うには、断崖絶壁を登つたり洞窟やクレバスに入つたり、はたまたシロクマやシャチと戦つたりもしたらしい。

まあいくら何でも多少の脚色はあるだろうが、ノース校では肉体が軟弱ではまず生き残れないみたいだ。カードにだけ集中させてほしい。

そしてカードを集めて扉を何とか潜つても、そこから始まるのは新入生歓迎の死の五人抜きデュエル。ランクの下の者から順に戦つていき、負けた所のランクから学園生活が始まるという荒行。

だがそこは流石俺の推し。万丈目は五十人を全て倒した後、生徒会長の江戸川……この前ノース校の面々の中に居た屈強な男を破り、見事ノース校最高ランクであるキングの称号を手にしたという。

「何故かこの雑魚がデツキから離れようとしないので半ばハンデマッチになったが、まあ五十人程度なら恐れるに足らなかつたな」

『あの時のアニキはカツコ良かったわよくん。もうおいらシビレちゃつたのよ』

「凄いなあ万丈目君は。僕なんか確実に途中で眠くなつてサレンダーしちゃうよ」

「良いな良いな！ 万丈目の奴そんな楽しそうなことやつてたのかよ！ 俺もやつてみてえ！」

それぞれ方向性こそ違うものの、十代も茂木も万丈目の話にいたく感心していた。当然俺もだ。あと十代は割と似たようなことやつてるだろうが。……この前の懇親会も、最後の相手が三沢じゃなかつたらまだまだ連勝記録は続いていたと思うしな。

「じゃあ次は僕の番だね。と言ってもそこまで凄いい出会いという訳でもないんだけど」
もけもけ〜!

ふわりと飛んできたもけもけを優しく撫でながら、茂木はぼつりぼつりと話し始めた。

聞いてみると、どうやら茂木は初等部の頃から時折精霊が見えたという。ただあくまでも調子が良かった時ぐらいで、月に一回見えるかどうかくらいだったらしい。

「でも中等部、特に一度入学前にこの学園の見学をした辺りから少しずつ見える頻度が増えてきてね。その時偶然拾ったのがもけもけとの出会いだよ」

「えっ!? お前それ拾ったの? 最初から持ってたとか貰ったとかじゃなくて?」

「そうだよ。それまでは見えると言ってもどこか朧気だったけど、もけもけを拾った時はいつになくはつきりと見えてね。それからもうほとんど毎日見えるようになってた」

茂木はそうどこか思い出すように微笑んだ。いや拾ったってそれかなり運命的じゃないか? つまり精霊関係の素養は元々あって、もけもけを切っ掛けに完全に開花したってことか?

それからのことはおおよそクロノス先生が言っていた通りの事だった。

三年前優秀なデュエリストとして周囲から認知されていたが、ある時を境にデュエル

が変わる。戦った相手が脱力していくデュエルへと。それを重く見た学園側に隔離されて現在に至る……あれ？

「ちよつと待った。前デュエルした時から気になってただけどさあ茂木。三年前に色々あつてそれからこの寮に隔離されてたつてことは……今お前学年はどうなつてんだ？」

十代が良いタイミングで俺の思つたことを代わりに質問してくれる。ずっとここに居たんじゃ出席日数なんかの問題もあるだろうしな。

「それがちよつとややこしいんだけど、デュエルで相手が脱力しちゃうようになったのが一年の半ば頃。そこからずっと隔離されてこの寮に居るけど、事情が事情つてことで授業は通信越しでやってるし、それなりに成績優秀だったからランクもそのまま。だから今は一応ブルーの三年生扱いかな。ただ進級は出来たけど卒業出来るかというところ……」

そこで茂木はその眠そうな垂れ目を少し引き締めてむくと唸る。確かに学園側としては、この学園内で進級させるだけならまだしも下手に卒業させたら危ないと感じているかもしれない。

この学園の卒業生が、外でデュエルして対戦相手を脱力させました。なんてことがホイホイ起きたらそれこそ厄介だし、少なくとも対処法が確立できるまではここに押し込

める可能性も十分あり得る。

十代も万丈目もその可能性に気が付いたのか、表情を少し険しくする。

「まあそこは難しく考えないでよ。僕も今の暮らしをそれなりに気に行っているんだから。卒業出来ないなら出来ないで、もうしばらくここを満喫するだけさ」

そう言う茂木の顔は穏やかなものだった。本当にそう思っているようにも見えるし、内心を隠しているようにも見える。

「……そつか。分かった。なら俺は俺で、この学園にいる間はちよくちよくここに遊びに来るからな！ 遊兎！ 万丈目！ お前らもそうだろう？」

「万丈目さんだ。……ふん。まあ気が向いたらな」

「それにあくまでまだ可能性の話だしな。案外普通に卒業できるかもしれない。まあそれはこれからの茂木次第って奴だ。今日明日で何とかなる問題でもなさそうだし、じっくり考えていこうか」

ただの問題の先送りかもしれないが、実際の所今の俺達に出来ることと言ったらほとんどない。ひとまず茂木の話はここでお開きとなった。

「ちなみに三年生つてことは敬語使った方が良いか？ 茂木先輩」

「いや別に？ 友達だし今さら畏まられてもね」

試しにからかうように言ってもみたら、友達として普通に笑って返された。やるな。

「さてと。そんじゃ次は俺と相棒の話だな」

クリクリ〜！

万丈目と茂木の話が終わり、次に語るのは十代とハネクリボーだった。と言っても俺は以前十代から聞かされたので多少知っているが。

本校の入学試験の日。十代は遅刻して大慌てで会場に向かっていた。その途中偶然デュエルキングである武藤遊戯と出会い、その際にラッキーカードだと言われてハネクリボーを託されたのだという。

「あのデュエルキングに貰ったのか!？」

「それは羨ましいなく。世のデュエリストの憧れの的だもの」

二人共これには驚いたようで十代を羨ましがっている。俺も遊戯には是非一度会ってみたかった。何せ一番最初の主人公だからな。それに闇のゲーム関係の話も聞いてみたい。もちろんやりたいとかじゃなくて対処法についてだ。

あと強いて言えば、一戦交えてみたい気もない訳じゃない。この前の展示会でデッキだけは見たけれど、あれはあくまで当時のデッキだ。今はどんな風になっているかは気になる。

「じゃあそこから精霊が見えるようになったわけ……いやちよつと待った。確か以前怪談話を言い合った時、小さい頃モンスタアの声が聞こえたって言ってたよな。その頃から素養自体はあつたってことか？ それがさっきの茂木と同じように、ハネクリボーと出会ったことで完全に開花したとか？」

「多分そうだな！ 小さい頃は聞こえてたけど、ある程度大きくなつたら聞こえなくなつたし。ハネクリボー以外の精霊なんてその頃は見たことも……っ!？」

話している途中で、一瞬十代が顔をしかめながら額を押さえる。

「んっ!? どうかしたの十代君？」

「いや、何か一瞬間がズキツとして……うん。もう大丈夫だ」

茂木が心配するように話しかけると、十代は軽く頭を振ってそのまま何もなかったかのようにいつも通りに戻る。

「ほう？ これは珍しい。このバカも一丁前に風邪でも引いたか？ バカなのに」

「バカバカ言うなよ万丈目。もう大丈夫だつての！ ……とまあ俺と相棒の話はそんなとこだ。それより遊見。最後はお前だぜ！」

軽く万丈目とじゃれあいながら、これまで語っていない俺にバトンタッチする十代。トリかよ。と言つても正直どう語つたものか。ディーのことや幻想体のことをどう説明したら良いものやら。全部話すつて訳にもいかないしな。

「あく。正直皆に比べたらそこまで凄い話じゃないんだけど良いか？ 十代と茂木には前少しだけ話したし、つまらないって思ったりしない？」

一応予防線でも張ってハードルを下げようとしたのだが、

「多分それはねえよ。それに俺と茂木が聞いたのだからって幻想体達に關しての事だけだったろ？ 前から一度突っ込んだところも聞いてみたかったんだよな！」

「久城……いや、俺のファンよ。幻想体というのが何かは知らないが、ここまで来て一人だけだんまりを決め込むというのはこの場では相応しくないだろうに」

「僕もちよつと興味あるな。久城君ももしかして僕みたいに拾ったりして出会ったの？」

三人とも興味がある顔しているから困る。あと茂木。普通はそこまで運命的な出会いはしないから。まあ前回主人公から託されたり、漂流している時に命を救われたりとか他の二人も大概だけど。

……仕方ない。全て話すわけにはいかないが、どうにか言えそうな所だけでも話るとするか。

「それじゃあ俺と……この場合最初に精霊化した罪善さんかな。罪善さんの出会いから話すとするか」

カタカタ？

自分の名前が出たことに反応してか、さつきまで他の精霊達と一緒に居た罪善さんが俺の方に向かってくる。まあ近くに居た方が説明はしやすいよな。

俺は罪善さんに軽く笑いかけながら、皆にデュエルアカデミア……ひいてはこの世界に初めて来た時のことを語り始めた。

精霊が見える者達の団欒　その三

さて。いざ自分の事を話すとどう話したのか。目の前の三人とも期待しているが、話せるところは限られてるんだよな。上手くぼかして話せれば良いが。

「コホン。まず前提としてさ、今俺が使っている幻想体デツキ。これはある奴からの借り物なんだよ」

「借り物？」

十代が不思議そうに言う中、俺は懐からデツキを取り出し机の上に置く。

「ああ。ちよつと理由があつてさ、このデュエルアカデミアで俺の本来のデツキは使えない。だから代わりについて渡してくれたんだ。罪善さんとはこのデツキを受け取った時に会つた。いきなり出てきた時は俺もビビつて腰を抜かしたものさ！」

「なるほど。確かにインパクトのある顔だもんな」

罪善さんはそれを聞いてどこか笑うようにカタカタと骨を鳴らす。

思えば最初は尻餅を着くくらい怖かったが、今ではもう慣れてしまつて急に現れない限りは平気になった。……流星に夜中にヌツと現れたら驚くけどな。

「精霊が見えるようになったのはそれが最初だ。まあこの場合俺に素養があったというよりも、それ自体に強い力のあるカードを使い続けたから無理やり素養が引き出されたと言った方が正しいのかもしれない。なんせこのデッキに慣れるためにその借りた奴と納得いくまでデュエルしたからな」

「納得いくまでつてどのくらいだ？」

「そうだな。……正確な時間は覚えていないけど、時々休憩を挟みながら百連戦ぐらいぶつ通しで」

「「百連戦っ!?!」」

それを聞いた三人がどこか驚いた顔をした。そこまで驚くことかね？

確かにちよつと多いかもしれないが休憩や食事を挟みながらだったし、ディーもあくまでチュートリアルで最初の数回は俺に動かし方を教えながらつて感じだったぞ。時間もたつぷりあったし割と余裕をもってやってたんだが。

それにさっきの万丈目の話でだって五十人抜きしてたようだし、十代だって普通に何人もと戦うから連戦でもおかしくはないはずだよな。

「そして大体デッキの動かし方を覚えて調整をした時にそいつは言った。幻想体は大半が精霊化出来るってな。その言葉通り、最初は罪善さんだけだったけど、続々とカードが精霊化して出てくるようになった。今の所精霊化出来るのは………このカード達

かな」

俺はデッキから、罪善さんを始めとした精霊として動ける面々のカードを取り出して並べる。

『たった一つの罪と何百もの善』。

『小さな魔女 レティシア』。

『オールアラウンドヘルパー』。

『死んだ蝶の葬儀』。

『蓋の空いたウエルチアース』。

『幸せなテディ』。

『三鳥 大鳥』。

『三鳥 罰鳥』。

『三鳥 審判鳥』。

幸いというか丁度全部デッキに入っていたから説明しやすいな。

「ふむ。一、二……………九枚もあるのか？ 多すぎるぞ」

「えーつと。これが罪善さんだね。それとそこに居るレティシアに、幸せなテディ」

「おっ！ この前見た大鳥と審判鳥、罰鳥も居るな」

皆で一つずつカードを確認していく。こういう情報共有はしておかないとな。しか

し万丈目の言う通り、もう九枚にもなったのか。これ以上増えたら本当に収拾がつかなくなりそうだな。

『お兄ちゃん達。呼んだ?』

「呼んでな……いや、茶菓子があるから食べるかい?」

『良いのっ!!? ありがとうっ!』

『我が運び手よ。喜ぶのは良いが手はちゃんと……わっ!!? 止めるそのクリームでベタベタの手で私に触るんじゃないっ!!?』

あと名前を呼ばれたと勘違いしたレティシアとテディ、そしてレティシアに抱かれたままのネクもこちらにトコトコやってきたので、折角だから茶菓子として用意された俺の分のシュークリームを一つ分ける。

レティシアはニコニコしながらそれを頬張り、ネクにも食べさせようとしてネクが閉口している。ちなみにテディは最初から菓子には興味がないようで、今度は俺の身体によじよじと登って背中におぶさってきた。

寂しくて持ち主を締め上げるという衝動は、ヘルパーの修繕やレティシアと日頃遊んでいることで多少抑えられてはいるが、それでもこうして定期的に甘えてくるのは変わらない。なので多少ビクビクしながらもある程度は好きにさせている。

「……それとこの通り、十代にも話したけど幻想体達は、短い時間なら精霊化を通り越し

て実体化して物に触ることも出来るみたいだ」

「それは……何とも面倒な話だな。それが久城のカードだけの事ならともかく、場合によつてはうちの雑魚やここの奴らも普通に精霊化から実体化しかねないわけか」

こちらに気を遣つてか、万丈目は少しマイルドな言い方をして難しい顔をする。万丈目なら一目見てカードの実体化の危険性を察しているだろうからな。そこは性善説の塊みたいな十代とは違う所だ。

「そう。なので最悪の場合、俺の意思とは別に幻想体が何かしらやらかす危険性もあるわけだ。基本的には俺の言うことを聞いてくれるけど、あくまでも行動を全て縛れるわけじゃない。だから」

俺だつて自分の身は可愛い。出来れば厄介なことは他の誰かに丸投げしたいし、それをやつても良いタイミングで丸投げできる相手が居るのであれば普通にやる。

だが幻想体関連はどう考えてもそうじゃない。基本的に俺自身で何とかしなきゃならない案件だ。だから危ないと思つたらすぐに逃げろと言おうとしたら、

「おう！ 任せとけつて遊児！ 前にも言つたけど幻想体達も含めてお前がピンチになつたら助けてやるよ！」

十代の奴自分の胸をドンッと叩いて自信満々に言つてのけた。……まあ十代なら普通にそう言うわな。前もそんなこと言つてたし。

「だけど万丈目と茂木はそうじゃないはずだ。だから、

「万丈目も茂木も手伝つてくれるよな？」

「ふっ！ その何かをやらかすような幻想体まで助ける義理は無いが、ファンを見捨てたとあつては万丈目一族の名折れ。力ぐらいは貸してやらんでもない」

「僕に出来るかどうかは分からないけど、ちよつとくらいなら手伝うよ。友達だからね」
「つて即答かよこの二人もっ！ 十代の問いかけに万丈目は腕を組んで軽く鼻を鳴らし、茂木もその眠そうな目を少しだけ引き締めて応える。

……まったくこいつらは。なんだかんだ仲間思いな奴ばかりなんだから。

「……ああもうっ！ これじゃあ危ないから逃げろなんて言えないじゃないかっ！ ピンチになったらよろしく頼むよこの馬鹿野郎共っ！」

そんなこんなで皆の各精霊との出会いの話は終わり、そこからしばらくゆつたりとした時間が流れた。

「ふわっつ。少し眠くなつてきちゃったよ」

「……つと。結構長く話し込んでたからな。十代と万丈目はどんな具合？ 疲れたり頭がボヤっつてしてるか？」

茂木の大きな欠伸に俺は部屋に備え付けられた時計を見る。ここに来てからざつと三時間つて所か。流石に今はまだ茂木の事もあるからデュエルは出来ないが、話をしたり精霊達と遊んでたら大分時間が経っていた。

「うんっ!? うおれもうだもうだふえいきだじえ（俺まだまだ平気だぜ）！」

「少し眠気というか疲れが出てきたという所だな」

十代は小腹が減ったのか口いっぱいに茶菓子を頬張りながら返し、万丈目も少し気だるげではあるが特に問題はなさそうだ。

あとで十代は軽く説教するとして、万丈目のそれは話疲れからなのか茂木の能力の影響なのか分からないな。ただ逆に言えば、三時間くらい経たないと効かないくらいには耐性があることになる。

どうやら茂木の脱力の力は精霊関係の物で、俺や十代、万丈目のように精霊が見えたり話が出るくらいになると効かなくなるということはほぼ確定か。

「流石に長居し過ぎたな。そろそろお暇するでしょうか。レティシア達もそろそろ帰るよ」

『分かったの。じゃあ皆。またね!』

俺の言葉にレティシア達も、この精霊達に軽く別れを告げて精霊化を解きカードに戻る。なんだか保父さんにでもなった気分だな。あと十代は早く口の中の物を呑み込

めよ。

そうして軽く片づけを済ませて帰ろうとする俺達。茂木も入り口まで見送ってくれる。

「今回も盛大にもてなしてもらって悪かったな。……これ大したものじゃないけど土産としてもらってほしい」

俺は少し前に購買部で買っておいた、リラックス効果があるというハーブの小袋を手渡した。最初に会った時からちよくちよく眠そうだったからな。眠るのが好きというならより良い眠りのためにやれることをやるべきだ。

「ありがとう。……ねえ。次はこっちから時間が空いた時に誘っても良いかい？」

「ああもちろんだ。また十代と万丈目を誘っていくよ。二人はそれで良いかい？」

十代は当然だろとばかりに力強く、万丈目はまあ気が向いたらなとばかりに頷いた。

そして茂木にさよならを言っこの寮から出ようとした時、

「……あつ!? そうだ万丈目君」

「何だ？」

茂木が急に万丈目を呼び止めた。どこか訝し気な態度をとる万丈目に対し、茂木はいつも通りのほほくんとした態度を崩さない。

「僕はね。最初君と君の精霊の仲が悪ければ引き剥がそうかななんて思ってたんだ。久

城君や十代君には悪いけど、それで精霊が幸せになるのならね。……だけど」

そこで茂木は一拍置いて、穏やかな顔で微笑みながら続ける。

「おジャマ・イエローも君も、間違いなく相性が良いと思う。だからこれからも仲良くね」

「なっ!? ちょっと待て!」

「じゃあね!」

万丈目の制止も虚しく、茂木はそのまま踵を返して部屋に戻っていった。万丈目は「こんな奴と俺のどこが相性が良いんだ」と憤慨しながら地団駄を踏む。

「素直になれよ万丈目く! さつきも精霊達に懐かれてたし、おジャマ・イエローとの出会いは運命的だったしよ。そう言った面の才能もあるんだって!」

「さんだっ! えくいそれ以上言うな! この雑魚がますますつけあがるだろうがっ!」

『えへへく。茂木って人分かってるじゃない』

さつきからおジャマ・イエローは、どこか頬を赤らめながらまたくねくねしていた。相性が良いという言葉に反応したらしい。

そうして俺達は茂木の寮を後にした。

帰りは大分日が落ちてしまったので、森を巡回していた大鳥を呼んで案内を頼むことに。

万丈目は最初森の中から急に出てきた大鳥に警戒していたが、さつき確認したカードの中に居たと知るや少しだけ態度が軟化する。イエローは思いつきりビビっていたが。

「おゝスゲースゲー！ ちよつとゴワゴワしてるけどこりやあ楽だぜー！」

「十代もうちよつと優しく乗れよ。ゴメンな大鳥。嫌になつたら体を揺すつて振り落してやつても良いから」

前は俺が乗ったからという理由で、今回は十代が大鳥の背に乗せてもらうことに。ラントンを翳しながら先頭をズシンズシンと進む大鳥を、俺と万丈目は歩いて着いて行く。

大鳥も分かっている様子で、歩きでも普通についてくれる程度に速度を抑えてくれている。なので帰り道も俺達は雑談に花を咲かせていた。

「そう言えば二人共。明日の日曜はどうする？」

大鳥の定期的な揺れを満喫しながら十代がそう切り出してきた。それというのも少し前の授業で、大徳寺先生がその日希望者を募ってちよつとしたピックアップを企画していると話したのだ。

島の一角には何故か変な遺跡があつて、今回は観光がてらそこまで行つて昼食を食べて帰るといふ。この島ホントどうなつてんだ？ そんな昔からあるの？

これは当日参加も認められていて、十代はオシリスレッドの義理で一応翔と隼人を誘つていくらしい。

「俺はパスだ。何故貴重な休日に遺跡へピクニックになぞ行かねばならんのだ」

「そつか。じゃあ仕方ないな。遊児はどうする？」

万丈目はどうやら不参加らしい。似合わないという訳ではないが、あくまで自由参加だからな。無理に誘うものでもない、十代はすつぱり諦めて今度は俺に振る。……そうだなあ。

「まあたまにはそういうのも良いか。俺も十代達に付き合うよ」

最近勉強や調べものばかりだったからな。それに遺跡見物というのも面白そうではある。

唯一の懸念はこれがアニメ版で何らかのイベントに繋がる場合だが、流石にそういうのは遺跡に入りさえしなければ大抵は回避できるもんだ。

まさか遺跡の外に秘密のスイッチか何かがあるということないだろうしな。

まあそういう訳で、明日はのんびり外から遺跡を眺めるとするか。そう地味に明日を楽しみにしながら、俺達はオシリスレッド寮までの道を歩くのだった。

閑話 ある人形の日常 その一



……ふっ。ふっふっふ。ふっはっはっは！

遂に、遂にこの時が来たのだ。この嘆かわしい姿になってしばらく、ようやくエネルギーも少しは溜まった。雌伏の時が終わり、今こそ奴らへの日頃の恨みを晴らす時つ！
まずは貴様からだ。刮目せよっ！これが私の復讐の一撃っ！

『ネクちゃん。何してるの？』

『静かにしろ。やっと何とか自分の力で動ける程度までエネルギーが溜まったのだ。今のうちにそこで眠りこけている我が生遊け贄鬼から直接エネルギーを吸い取……………つてレティシアあっ!?!』

『ネクちゃん。めっ！悪いことはダメなんだよ！』

『アイタタタ止めよレティシア。我が運び手よ！分かった！分かったから本気で抱きしめるのは止めるのだっ!?!』

くそっ！ またしても阻まれてしまった。あと少しの所だったものを。

遊児の周りは常に何かしらの幻想体がうろついている。おかげで直接エネルギー

ギーを吸い取ることも出来ない有り様だ。

自分で多少動けるようになったとはいえ、それでもまだ動きはぎこちないし見つかったら抵抗も難しい。遊兎本人が眠っていて抵抗できない絶好のチャンスだったというのに。……仕方あるまい。また少しずつ力を溜めて機会を窺うとしよう。

ふむ。そう言えば自己紹介がまだだったな。

我が名はダーク・ネクロフィア。遊兎からはネクという名を付けられた、今なお復活の時を待つカードの精霊である。

思えば、こんな屈辱の日々に甘んじているのも、以前高寺オカルトブラザーズとかいう者達にウイジャ盤で呼び出されたことがきっかけになったように思える。

ウイジャ盤で呼び出されるとしたらまず私だろうに、どうやらその者達はサイコ・シヨツカーを呼び出すつもりだったらしい。ヒドイ精霊違いである。

その後折角なので呼び出すつもりだったサイコ・シヨツカーを代わりに呼び出し、復活のための生け贄を所望した。そして奴らは承諾。これでサイコ・シヨツカー。ひいて

は私の復活も叶うと喜んでいたのでが、

「眠れっ！ サイコ・シヨツカー！」

何故か遊城十代とかいう者にサイコ・シヨツカーが倒されてしまう。何故だ？ 我々はただ高寺達が了承したものを取り立てにやってきただけだというのに。

こうなつては仕方がない。私自身で動くしかないか。そう思い、近くの霊体をかき集めて生け贄候補を連れ去ろうとしたところ……… 奴に出会った。久城遊児に。

「これで終わりだ。………こんな闇のデュエルなんてするもんじゃなかったな」

奴は強かった。私をデュエルで打ち負かし、最後のあがきで他の奴を生け贄にしようとした私の手を先読みして伏兵を忍ばせていたので。

私は怨嗟の声を上げながらそこで消滅する………はずだった。だがいくつかの点が重なり、こうして今もここに存在している。

私という個体の自意識が、抱きかかえている人形の方にあつたこと。デュエル中に私の依り代であるカードが相手のカードに装備されたままデュエルが終わつたこと。意識が完全に消滅する直前、幻想体の一人に見つかり捕獲されたこと。

これらの内一つでも欠けていたら、私はここには居ないだろう。ここに居ると言うだけで喜ばしいことなのかもしれない。………だが、

『ネクちゃん！ 良い天気だからお散歩しよ！ お散歩』

『お散歩？ 何故この私がそんなことをせねば』

『お散歩きつと楽しいよ！ 行こう行こう！』

『話を聞く気ないな我が運び手よっ!!? 分かった。分かったからもつと優しく抱きかかえるのだ』

こんな屈辱を受けるくらいなら、ある意味あの場で消滅していた方が良かったのかも
しれない。

捕獲された私は遊児の下に引き出された。このままトドメを刺されるのだろうかと思
は思っていたし、私を捕獲した死んだ蝶の葬儀とかいう幻想体もそのように思っていた
ようだった。だが、

「そうか。生きてて良かったな。もう悪さをするなよ」

遊児はそっけないながらも、どこか安堵した様子でそう言ったのだ。実に度し難い。
だがそう言われても私の器（大きい方）は消滅していて、今の器（小さい方）を維持す
るだけのエネルギーで手一杯。このまま放りだされればおそらく遠くない内に私は消
滅するだろう。

そう多少の悪意と恨み節を込めて消え去る前に文句を言うと、遊児はなんと自分の手

伝いをすればエネルギーを分けると言ってきた。

「……………フツ！ バカな奴め。わざわざ自分を生け贄にして復活しようとしている者を助けようとはな。エネルギーがある程度溜まれば自分で動くことも可能になる。私に仕事などさせる屈辱に耐え忍び、いずれこのことを後悔させてやるとしよう。今は機会をただ待つのだ。だが、

『私レティシア！ よろしくね……………えつと』

「そう言えばダーク・ネクロフィアって長いよな。この際だから罪善さんや葬儀さんみたいに縮めて呼ぼう。ネクとかどうだ？」

『ふん。勝手に呼ぶが良い』

『わーい！ よろしくねネクちゃん！』

何故かほぼ初対面でレティシアに懐かれた。向こうも微かに人形のような雰囲気を持つことから同類と見られたのかもしれない。精霊状態でもまともに動けない私だが、運び手としてレティシアが立候補したのはまあ良いとする。だが結果として、

『ふんふんふくん！ お散歩お散歩楽しいな！』

『何故私まで付き合わされなければならんだ。それと眩しい。もつと日陰を歩くのだ我が運び手よ』

『なんでなんで？ お日様あったかくてポカポカだよ！ 気持ちいいよ？』

前の器（大きい方）は私の意思で自在に動かせたのでなんら問題はなかったが、レティシアときたら非常に自由奔放かつ明るい性格をしているので、こうやってよく外に連れ出されるから困る。

前は大分自重していたのだが、十代との協力を取り付けてからは罪善や遊児の許可を得てちよくちよく寮の周りを散歩するのが日課のようになっていた。もう見られても平気だかららしい。

……しかしやはり太陽は苦手だ。月の光の方が肌に合う。今はレティシアに付き合わされて規則正しい生活になっているが、私が復活した暁には昼間寝て夜起きる生活習慣にしてくれるわ。

それと、最近はまだ面倒な奴が増えて困っている。それが、

『テディも楽しいよね？ ……ほらっ！ テディもそう言ってるよ！』

『テディは喋らんだろうが。首を縦に振っただけで内心嫌がつてるのかも……そこで首を横に振るんじゃないテディ』

以前精霊化したこのふわふわのぬいぐるみこと幸せなテディ。こいつもレティシアとは仲が良く、こうして時々一緒に散歩に行く。

テディも以前は自身の依り代たるカードごとちよくちよく逃げ出す脱走の名手だったが、こうしてレティシアと一緒に散歩を始めてからは大分頻度が落ちた。

それでも時々遊児の近くで勝手に実体化して甘えるが、それに関してには実に結構だ。遊児が困るので良い気味だ。もつとやれと言いたい。……まあ口にしたら色々面倒なので言わないが。

人形とどこか人形のような雰囲気を持つ少女。そしてぬいぐるみというよく分からない集団が寮の周りを徘徊する。言葉にすると些か問題な気もするが、基本的に精霊は人には見えない。なので実体化しない限り問題はない。

そうして散歩するのだが、最近に行くことが多い場所がある。それは、

『大鳥さくくん。おはよう！』

『……ふん』

グルウ！

いつもより心なしか優しい感じで、レティシアの挨拶に大鳥が唸り声で返した。

寮の近くの森。その入り口によくレティシアは寄り、時折森を巡回している大鳥や審判鳥、罰鳥が近くに居れば挨拶をするのだ。居ない時もあるが、居たら必ず挨拶している。今回は大鳥だけのようにだ。

「テディも腕を少し上げて挨拶をする。……私？ 私はやらん。というより大鳥達の

方が私を微妙に警戒している節がある。この前など、何故か審判鳥に軽くだが縛られ罰鳥に突っつかれた。

この身体では碌な反撃も出来ずにやられるばかりでヘルパーに修繕してもらおう羽目になったが、復活を果たしたら今に見ているよ。

という訳で私には何故か当りがキツイ三鳥共だが、レティシアやテデイには比較的優しい。罰鳥は時々肩に乗るレベルで懐いているし、審判鳥や大鳥に至っては自身の背に乗っても嫌な顔もしない。私が触れると嫌がるくせして。解せぬ。

『ふくん。そうなんだ？ 大変だね』

完全に理解できるわけではないが、しばらく付き合っていれば大鳥などの喋ることのできない相手でも何となく言いたいことは分かってくる。

そして毎日森を巡回していれば、大なり小なり事件も起きる。遊児の言う良くないモノが沸いていたので退治したとか、極稀に森に迷い込む生徒を姿を隠しながら導いたりなどだ。

近くの大きな石に座り、ふんふんとそうした大鳥の話を聞くレティシア。テデイも横にちよこんと座り、私も何かしら役に立つ情報は無いかと耳をそばだてる。……端から見たらシユールかもしれないな。そして、

グイグイ。

『どうしたのテディ? ……いつけない!? もうこんな時間!? 急いで帰らなきゃ!』
テディに教えられてレティシアがふと気が付くと、もう大分日が高い所に来ていた。
そろそろ正午か。散歩にしても大分時間が経ったな。

『じゃあね大鳥さん。もう帰るね。審判鳥さんや罰鳥さんにもよろしくね!』
レティシアは軽く服を直しながら慌てて立ち上がり、きちんと大鳥に挨拶して寮へ歩
き出した。そういう所が三鳥達に好かれる点なのかもしれない。

閑話 ある人形の日常 その二

『かくえろかえろ！ お部屋に帰ろ！ ルンルンルン！』

寮へと変える道の途中、レティシアはいつものように自作であろう、美しいがどこか調子つばずれな歌を響かせる。

『お前は相変わらず明るいな』

『だって笑っていた方が楽しいもの！ ネクちゃんもほらっ！ 笑って！』

そう言われてもどこに笑う要素があると言うのか……いや。くじている場合ではない。今の所直接遊児からエネルギーを吸い取ることは失敗続き。こうしてレティシアに運んでもらわねばならない状況に甘んじている訳だが、私とて他に何の策もないわけではない。

ふむふむ。そうして考えると、あながち笑える要素が無いわけでもないな。奴の泣きつ面を想像すると多少は嗤えるというものだ。

ふっ！ 自分に直接危害を加えられないからと言って油断している我が生遊け贄児よ。今はせいぜい油断し安寧を食うが良い。だがいずれお前は知るので。私に情けをかけ

てトドメを刺さなかったことがいかに愚かなことだったかということな。ふくはっはっは………痛っ!?

『罰鳥さんこんにちは! ……ネクちゃん大丈夫? さつきから罰鳥さんに突っつかれてるけど』

『ぬおっ!?! 何故だ? 何故私がこんな目にくっ!?!』

森から少し離れてきたというのに、わざわざ罰鳥が私達を察知して追ってきたらしい。

おのれこの毎回会う度に突っついてくる鳥め。我が器の頭に穴が開いたらどうしてくれるっ! 私が復活したら鳥かごにでも閉じ込めてくれるからな!

……あとレティシアよ。もしくはテディ。黙って見ていないで助けてくれ。頼むから。

昼間の散歩から戻った私達であるが、今日は幻想体の大半でお出かけた。今回で二度目になるが、遊児が茂木という精霊を見ることの出来る男の部屋に向かうので同行することとなった。

森からあまり離れたがらないあの三鳥はあのまま巡回を続けている。一応カードは

遊児が持つているので呼び出そうと思えばすぐに呼び出せるのだが、顔を合わせると攻撃してくるあいつらには会いたくないので呼ばないでほしい所だ。なのだが、

『だからなんで毎回私の頭を突っついてくるんだコイツはっ!?!』

「それはお前……罰鳥の中で悪者認定されているからだろ?」

『言ってる場合かつ! アイタタっ!?! 早く行くのだ我が生け贄よ!』

茂木の寮に入るための入り口は凶暴な鶏共に守られ、それを突破するのは困難だ。だが何故か鶏共と仲の良い罰鳥が居れば、奴らは出入りする者を襲わない。しかしその肝心の罰鳥は、毎回私を目の敵にして突っついてくるからたまらない。

結局罰鳥のこの暴挙は、我々が茂木の寮に入るまで続いた。ホントに何なのだアイツは?」

こうして茂木の寮についたわけだが、今回はこの部屋の主である茂木や時折遊児の部屋に来る十代とは別の人間が同席していた。

「まあそう言うなよ万丈目! お前むちやくちや懐かれてるじゃんか!」

「さんだ! だからこれはこいつらが勝手に纏わりついてくるだけだっ! こら離れろっ! 鬱陶しい!」

「あはははっ！ 初対面の人にこんなに精霊達が懐くなんて初めてだよ」

目の前で茂木の部屋の精霊達に纏わりつかれている男の名は万丈目。ここに居る他の奴らと同じく、精霊が見える体質の人間だ。

しかし本当に凄まじく懐かれているな。純粹な力だけならこの中ではやや低めだが、その分下級の精霊からしてみれば親しみやすいのだろう。現に万丈目にすぎなく振り払われても、気分を害した様子もなくそこらを漂っている。

そうして人間達は人間達で、精霊は各自で雑談などをしていた訳だが、

『う、うわくん。おいらだつて、おいらだつて兄弟が揃えばお役に立つのよくん。……そうだ！ 誰かおいらの兄弟の事を知らない？』

突如万丈目の手持ちらしいおジャマ・イエローの精霊が、情けなく瞳をうるうるさせながら聞きまわり始めた。しかし誰も知っているらしきものは居ず、おジャマ・イエローはそのまま肩を落としてしよんぼりとした顔をする。

……マズイっ！ さっさとその情けない顔を何とかするのだそこのおジャマ・イエローよっ！ さもなくば、

『大丈夫。大丈夫だよ！ ほら。笑って！ 良い子良い子！』

『うおっ!! レティシアよ。急に出るんじゃない！ 止めるのだ!』

こうなるから嫌だったのだ。他者の悲しむ顔を見過ごせない我が運び手レティシア

が、わざわざ実体化してまでそいつを慰めに入る。ついでに抱き抱えられていた私も巻き添えである。

しかし直接実体化して見てみると、目の前の万丈目とかいう男は中々に悪くない。確かに他のメンツに比べれば精霊力はやや劣るが、それは最近素質が開花したからであつて時間をかければまだまだ伸びる。

『ふむ。直接見るとお前も我が生け贄にふさわしいな。よろしい。お前も生け贄候補として我が名に震え慄くが良い。いずれ復活する我が名は』

『ネクちゃん！ 皆を怖がらせるなんてめっ！ だよ』

むう。我が生け贄にふさわしい程の能力があると褒めたのだが叱られた。その後イエローは立ち直つてまた万丈目に纏わりついていたが、遂に万丈目に捕まつて他の精霊達の所に放り投げられる。……だがこちらとしては都合だ。

『おジャマ・イエローか。攻撃力0だが上手く使えば復活の役に……うおっ!? レティシアよ。考え事をしている時はもつと優しく運ぶのだ!』

私の策にどう組み込んでやるうかと考えていたのだが、レティシアがそのままイエローを追つていくので私も連れまわされることになった。運び手が活動的すぎるのも考え物だ。

さて。使い手達が話し合いをしている中、私を含む精霊達が何をしているかというところ……。

『よゝし行くよ！ ……えいつ！』

『ほほう。6か。良い目だな。流石我が運び手。着いた先は……何っ?! 振り出しに戻るだっ?!』

『うっふ〜ん！ これでネクちゃんがビリなのね〜ん』

『何故だあぁっ?!』

双六に興じていた。

茂木の部屋には暇をつぶすためか、各種一人用のゲームが取り揃えられていた。だが決して多人数用のゲームがないわけではなく、こうして精霊同士で遊興に耽ることも出来るわけだ。

そこはデュエルだろうと言う者が居るかもしれないが、カードの精霊にとつてデュエルとは特別な意味を持つ。場合によつては勝ち負けがそのまま自らの存在に直結するのだ。

もちろんよほどのことが無ければ消滅という事態にはならないが、なので遊興であっても精霊同士ではデュエルをあまりやることはなく、代わりにこのボードゲームを引つ

張り出してきたという訳だ。

ちなみに今の参加者は私(サイコロを振るのはレティシア)、ハネクリボー、おジャマ・イエロー、あと近くで浮かんでいたもけもけである。

他の精霊達は思い思いに勝負を観戦したり、他のゲームで対戦したり、あるいは我関せずとのんびりする者もいた。ちなみに面倒な葬儀と罪善は、さつきからオセロとかいうゲームで対戦していてこちらから注意が逸れている。

クリクリ〜！

ハネクリボーが自分の番だとばかりにサイコロを手に取り、コロんとそのまま振って自身のコマを動かしていく。……くっ!? またハネクリボーがトップか。

『すごいすごい！ これで三連続でハネクリボーの勝ちだね！』

『負けて喜ぶんじゃないレティシアよ。……もう一度だ。次にやる者は誰だ？』

……つつつつ。この私がただ暇つぶしに双六に耽つていると思うなよ。これぞ壮大な我が策の一つなのだ。

遊児のエネルギーを直接吸い取ることは失敗した。なら他の奴らから吸い取れば良いという話だ。

だが下手に他の人間に手を出せば遊児、そして幻想体達がおそらく黙っていないだろう。それこそあの忌々しい三鳥や、私とすこぶる相性の悪そうな罪善や葬儀の奴がここ

ぞとばかりに実力行使に移るはずだ。

さらに言えば、確実にレ・テイシアが悲しむ。……これはまがりなりにも運び手であるので情が湧いたから言っているのではない。断じてない！ だが、何となくレ・テイシアを悲しませるのは誰にとつても良いことではないと感じるのだ。

以上の事から人間には手が出せん。かと言って、遊兎の提案通り地道に手伝つてエネルギーを集めるなど屈辱以外の何物でもない。

なら人間以外、精霊から頂けば良いという結論に達したわけだ。無論精霊が相手となると、普通にエネルギーを吸い取るなんてことは出来ない。即バレて反撃されるのがオチだ。

だが気心の知れた仲であれば？ それこそ多少吸い取つても笑つて許せる間柄であればどうだ？

つまり端的に言えば、仲良くなる（フリ）ことでエネルギーを頂き、いずれ器を修復して溜め込んだエネルギーを使い復活するという作戦だ。

そのためならば、私は何度敗北という挫折を味わおうとも再び立ち上がって双六に興じることが出来る。さあ行くぞ。次のゲームだ。

クリクリ？

もけもけ？

『ネクちゃん。二人共今度は他のゲームやろうって言ってるよ!』

『そうねえ。そろそろ他のゲームをやっても』

『おのれお前ら。特にハネクリボー。勝ち逃げは許さんぞ。もう一回だ!』

……別に双六で負けっぱなしは悔しいとか、一回くらいは勝ちたいとかそういうこと
はないぞ。

その後二度双六で勝負したが、今度はおジャマ・イエローともけもけにも一位を取ら
れた。悔しくなんか……ないからなっ!

閑話 ある人形の日常 その三

茂木の寮から遊児の部屋に戻った後、

『うむ……うむ。実に良いぞ。あの罰鳥めに突かれた場所もそれ以外も、実に綺麗に修復されている』

私は実体化して鏡で自分の姿を確認しながら満足する。

鏡に映るのは、人形用の少女服を着て椅子にちょこんと腰掛けるビスクドールの姿。傷一つなくどこか高級感を漂わせるその姿は、ちゃんとした店に置かれればガラスケースで展示されること請け合いだ。……まあ私なので当然だがな。

この服はデイーとかいう胡散臭い奴が用意したものだ。身に着けてみると寸法までピッタリだった。おまけに精霊化、実体化の際に一緒にそうなるという特別仕様。……侮れん奴だ。

『助かったぞヘルパーよ』

へりペアプロセス完了！ 綺麗に直ったよ！

私の言葉にヘルパーは目を点滅させながら返答し、そのまま修繕用のアームを引っ込

める。

毎日毎日、あの鳥に突かれテイやレティシアに思いつきり抱きしめられ、この器は細かな傷や歪みの出来ない日がないのではないかといいくらいひどい目に遭っている。

その度に活躍するのが私の目の前に居るヘルパーだ。精霊を含めた無機物系の修復能力という稀有な能力持ちのコイツには、毎日とまでは言わないが数日おきに器の人形の点検、修繕作業を頼んでいる。ちなみにテイも時々診てもらっている。

『いつもながらお前の修復技術は良いものだ。私が復活した際は専属の技師として抱えてやるからな。休んでエネルギーを蓄えるが良い』

へスタンバイモードに移行します。お手伝いが必要なら呼んでね

ヘルパーはそう言って実体化を解除。そのままフツと姿を消す。実に有能なヘルパーではあるが、定型文しか喋らないのがある意味欠点だな。それ以外を今の奴なら喋れないということはないはずだが。

……まあ良い。いざれ必要になったら自分から話し出すだろう。今はそれよりも次の手を練るとしなければ。

遊児が十代達と連れ添って外の温泉に行っている間、流石にデツキなどは部屋に置く

ことが多い。

まあここから温泉程度の距離なら精霊としては普通に移動できるので、デュエル以外ではあまり意味は無いらしいが。

実際今も罪善と葬儀、レテイシアとテデイは普通に精霊化して遊兎に着いて行っている。三鳥は森で巡回中で、部屋に残っているのは相変わらず何を考えているのか分からないウエルチアースと、修繕作業のために残った私とヘルパーのみだ。

……待てよ？ これはチャンスではなかるうか？ 私はすつくと立ちあがる。

今この部屋には私とヘルパー、ウエルチアースのみ。ヘルパーは現在休息中。ウエルチアースはいつも呼ばれない限りはカードのまま、自分から出てきた所は見たことがない。つまり、私を阻む者は誰も居ないという訳だ。

私は服の擦れる音さえしなほ静かに、だが着実に歩いて遊兎の机に向かう。

ふっふっふ。油断したな遊兎よ。お前が私のカードを他の幻想体のカードと一緒にしていることは既に調査済みだ。本来ならもう少しエネルギーが溜まってから折を見てカードに注ぎ込むつもりだったが、少しずつ先に入れてしまっても良からう。

引き出しに手をかけ、ゆつくりと引つ張る。そこにあるのは使い手の帰還を待つカードの束。一枚一枚から妙な力を感じながら、私は自分との繋がりを頼りにカードの束から一枚を取り出す。

『……………これだ！ やつと取り戻したぞ！』

そうして見つけた我が依り代たる『ダーク・ネクロファイア』のカード。それを傷つけないよう慎重に抜き出すと、そつと机の上に置く。

さあ。いよいよだ。私はカードにこの器に溜めたエネルギーを少しずつ流し込む。ドクン。ドクンと、この器に心臓などないはずなのに、まるで胸の奥が鼓動しているかのような錯覚を覚える。

そのまましばらく、時間にして数分程度であるが、私にはまるでその十倍以上に感じられる長い時間をかけ、器の行動に支障のない程度の余剰エネルギーを注ぎ終える。

『……………ふう。終わった』

これで良い。完全なる復活にはエネルギーだけでなく生け贄が必要になるが、大きい方の器の修復だけであるならエネルギーさえあれば良い。

この調子で行けばそう遠くない未来に……………ふっふっふ。

『楽しそうだね？ 僕も混ぜてくれないかな？』

聞こえてきた声に、自分の顔がほくそ笑んだまま引き攣るのを感じた。ギギツとまるで油でも切れたかのようにぎこちなく、そつとその声の方を振り向く。そこに居たのは、

『やあ！ 良い夜だねネク君！』

『……………ディー』

顔が見えるのなら確実にニヤニヤと笑っているであろう声音の、私が知る胡散臭く侮れないもの筆頭の自称「元」神のディーであった。

どうする？ どうするどうするどうするっ!?

……いや待て。落ち着け。まだ見られたと決まったわけじゃない。偶然今やって来てカマをかけているということも、

『そのテーブルの上のカード。君の依り代だね？ 自分のエネルギーを注ぎこんで何をしていたのかな？ うん？』

バツチリ見られてるのではないかあっ!?! 私がここでしていたことを思いっきりっ! 『それは……それはだな』

考えろ。考えるのだ私。いかにすればこの窮地を乗り越えられるのかをつ!

誤魔化す？ どうやって？ ここまではつきりと見られた以上それは難しい。いくら私が策士とは言え、この状況で言いくるめるのは無理がある。

実力行使？ それこそ困難だ。大きい方の器があるならまだしも、今の状態では勝ち目はないに等しい。その上目の前の奴はどうも底が知れない。何というか、力量が全く

測れないのだ。

カードの精霊なら大まかにであれば力の有無くらい分かる。カードで言うレベルという奴だ。そのの大小くらいなら幻想体だろうが一目見ればすぐにだ。

無論レベルが高くて戦闘に向かない。あるいは特定の状況でのみ強かったりなどと様々だ。だがそれでも大まかな指標にはなる。

だというのに、目の前の光球からはそれがはつきりと感じ取れない。低いようにも感じるし高いようにも感じる。常に揺らいでいるようで安定しないのだ。

なので実力行使は論外。となるとあとは……。

『……………はあ。見てのとおりだ。我が依り代たるカードにエネルギーを注ぎこみ、完全にせよ復活を果たそうと画策していた』

『へえ〜！』

正直に話すこと。その上で相手を懐柔するより他はない。

『どうする？ 遊児に報告するのか？ そうすれば私はより嚴重な監視下に置かれ、場合によってはそのまま消滅させられる可能性もあるな。……こんな惨めな姿のまま、ひっそりと静かに。……ああ。実に不甲斐ないことだ』

少しでも同情を誘うように、力なく崩れ落ちて上目遣いにディーを見つめる。……まあ効くとは思えないが、どうせこの後の交渉に繋げるつもりだから別に、

『あく。うん。なんか勘違いしてない？ 僕は別に久城君に報告するつもりは無いんだけど』

『……………何？』

想定外の言葉に一瞬言葉に詰まる。目の前の光球が、先ほどの泣き落とし程度に絆されたとは到底思えない。となると……………

『何が狙いだ？』

『狙いだなんてそんな大げさなものじゃないんだけどな。…………ウエルチアース君。居るかい？』

デイーのその言葉に、エビ頭の漁師と自動販売機の精霊がヌツと出現する。

『すまないけどジュースを一本頼むよ！ ……君も要るかい？』

『…………!? 私は別にいい』

『それは残念』

デイーはまるで肩を落とすように光球を上下させ、そのままエビ頭はこくりと頷いて自販機から缶ジュースを出して手渡す。と言ってもデイーには手も足もなく、その代わりにエビ頭の手から缶がふわりと浮いてゆっくりと机の上に着地する。

『よくしよし。蓋は大丈夫だね。話し中に寝込んでしまったら大変だ』

『それよりさっきの話を』

『慌てない慌てない！ 飲みながら話そうじゃないか！ ほらっ！ カンパ〜イ！』
相手も居ないのにクイツと缶を持ち上げて、そのまま自身に近づけるデイー。あれで
どうやって飲んでいいるのだ？

『さっきの話の続きだけどね。実を言うと、僕は面白いことになればそれで良いんだよ』
『……つまり私を見逃すのは、その方がお前にとつて面白いことになるかと踏んだからか
？』

飲みながら急にさっきの答えを語るデイー。私が確認のため聞き返すと、デイーは肯
定するように大きく上下する。

『ふん！ 良いのか？ 遊兎は我が生け贄候補だ。試みが成つて完全とはいかなくとも
復活したら、私は完全な復活のために奴を狙うぞ？』

『それは……まずサイコ・シヨツカーを復活させるために？』

『ああ。約定だからな。奴を三体以上の生け贄で復活させることで、私の復活も成る』
まあ今言ったことの全てが正確ではないが。

正確に言うと、私が復活するには誰かが三体以上の生け贄でもつて復活することが条
件だ。そしてサイコ・シヨツカーとは互いに復活に協力し合うという約定を結んではい
るが、直接復活させなくとも協力にはなる。例えばエネルギーを注ぎ込むだけでも協力は
協力だ。

なので別の三体以上の生け贄で復活させる相手が居るのなら、そちらが先でも一向に構わない。と言つても他の候補が居ないのでサイコ・シヨツカーを優先するが。

『今更に気でも変わったか？ サイコ・シヨツカーまでも復活したら一大事になると』
『いいや。……勘違いしないでほしいんだけど、僕は基本傍観者なんだよ。観客と言つても良い。だから久城君にも必要以上に肩入れするつもりはない。無論話した方が面白くなると判断したら話すさ。だけど今回はそうじゃない』

デイーはそこで缶を机に置き、表情が見えたらさぞ楽しそうな笑みを浮かべているであらう声で続ける。

『君を打ち倒したのも、君を助けると決めたのも久城君自身だ。そこに關しては一切僕は助言も何もしていない。なら僕はその顛末を、観客として面白おかしく楽しませてもらうだけさ』

『……私が言うのもなんだが、実に歪んでいるな』

『ふふん！ 〃元〃とは言え神様だからね！ 神様は大なり小なりそういうものなのさ！ それに、そこで終わるようならそれまでだ』

そうはつきりとデイーは言い切つた。こいつの言を信じるなら、こいつはどこまでも愉快犯だ。自分の楽しみ、快楽を第一に考え、そのために必要なことを成す。

しかし屈辱だ。そんな奴に私の弱みを握られるとは。この器に齒があれば盛大に齒

ぎりりをしている所だ。……だが、愉快犯とあればこちらとてやりようはあるのだぞ。『……良いだろう。ここは素直に見逃してもらうことを受け入れるとしよう。だがなっ！』

私はせめてもの矜持を込めて、ぎこちないながらもしつかりとディーに向けて指差す。

『私は受けた屈辱を忘れない。……覚悟しておくが良い。お前好みの展開になるとは限らないとな。予想を超えた駄作に仕上げてやろう』

『その意気は大いに結構！ それすらも楽しませてもらうとするさ』

こうして私の頭の中の屈辱を晴らす相手リストに、ディーの文字が追加されたわけだ。やることは多く、問題も山積み。エネルギーも順調に集められるか分からず、そもそもいつバれて中止させられてもおかしくない。

しかし、私は諦めるつもりはない。いずれ必ず復活を果たしてみせる。

我が名はダーク・ネクロフィア。遊児からはネクという名を付けられた、今なお復活の時を待つカードの精霊である。

『それじゃあここは一つ。ここまで啖呵を切ったネク君に耳寄りなアドバイスをしようかな』

『ふっ！ さっきの今で、お前を楽しませるために助言などに従うとでも』

『久城君が部屋に戻るまであと一分もないだろうね。今のこの状況を見られたらどうなるかなあ？ じゃっ！ そういうことで』

『それはもつと早く言ええっ!?!』

そのまま姿を消したデイーに悪態を吐きつつ、私は慌ててカードを片付け始めたのだった。

課外授業は危険がいっぱい



「今日は皆集まってくれて嬉しいのにや〜！」

日曜日。気持ちの良い晴れ空の下、本棟の前に集合した俺達に向けて大徳寺先生が言った。横には愛猫のフアラオも一緒だ。

「皆つて五人だけですよ？ しかも大徳寺先生に無理やり集められたようなもんだし」

翔がそう言つてぼやくが無理もない。ここに居るのは大徳寺先生を除けば十代、翔、隼人、俺、そして、

「俺達はオシリスレッドの義理があるけど、お前まで来るなんてな」

十代が最後の一人、明日香に向けて不思議そうに話しかける。確かにそうだ。義理らしきものもなく、着いて行つてもせいぜい大徳寺先生の心証が多少良くなる程度。特に成績に影響もしないはずだけどな。

「あの遺跡は曰く付きなの。闇のデュエルにも関係あるつて言われてる」

「ふ〜ん？ 兄さんの失踪と何か関係あるのか？」

「それは分からないけどね」

……ん？ 今聞き逃せない言葉が出てきたんだけど!? 闇のデュエルの方も問題だけど兄さんの失踪がどうしたって？

明日香の兄の天上院吹雪は確か留学していたはずだ。実際以前軽く調べた所、記録上はそうなっていた。マンガ版でもアメリカアカデミアに留学していたので疑っていなかったのだが、失踪しているととなると話が変わってくる。

俺がその点をもっと詳しく聞こうとすると、

「アニキ。ちよつと話したいことが」

「えっ!? どうした翔?」

何やら翔が、どこかただならない様子で十代を少し離れた所に引つ張っていく。これはどうしたもんか。十代達の様子を見に行くべきか明日香の方に尋ねるべきか。

俺は一瞬悩み、十代達の方を追いかけることにした。

「昨夜、大徳寺先生が墓に埋められるとか眠らせるとかなんとか」

「なに馬鹿なこと言ってるんだ? 寝ぼけて夢でも見たんじゃないか?」

俺が追いついた時に聞こえてきたのは、何やらこつちはこつちで物騒なワードの数々。

「いや。確かに寝ぼけてたけど」

「こんな面白そうな課外授業なら毎日でも良いぜ！」

「さあ皆。出発だにや〜！」

そこに大徳寺先生の号令が聞こえ、十代はそのまま歩いていつてしまう。えっ!? 翔はこのままかよっ!?

「……本当なただけどな」

「その話。詳しく聞かせてくれないか？」

「久城君っ!?! 聞いてたんすか?」

そのままぼつんと立っていた翔に、俺は陰からこっそり声をかけて話を聞いてみることにした。流星にこのままだとちよつと放つて置きづらいからな。

「いいや。だけど何やら最後の方だけ聞こえてきたから気になつてき。俺にも詳しく話してくれないか? ピクニックで歩きながらさ」

明日香の言っていた闇のデュエル。十代の言っていた吹雪の失踪。そして翔のこの不穏なセリフ。

どう考えても不吉な感じしかしねえよ全くっ! これアレだろっ!?! このピクニック絶対アニメで言う所の重要回だろ! 何か起こるかこの先のフラグが建つ流れだろ! そのくらいは分かるぞこの野郎!

こういうのは行かないのが一番安全だが、参加してしまった以上今更もう遅い。ならせめて情報を集め、何が起こるか対策を立てておくしかない。

といったことを考えながら、俺は翔と連れ立って皆と共に歩き始めた。

さて。今日のピクニックの目的地である遺跡は、火山の近くにあるということで普段は立ち入り禁止に設定されている。

だが今日のように火山の活動が収まっていて、なおかつ教師随伴であれば許可が下りるといふ。よく丁度ピクニックの日にそうなったなと思っただが、そこはアニメ的な都合主義という奴だろう。

道中ちよつとした山登りや不安定なつり橋を渡るなど、ピクニックにしては些かハードな道の日だったが、そこはもう毎日の通学のハードさで慣れたもの。多少隼人がへばりこそしたが、一人の脱落者も出なかった。

そして歩きながらではあるが、色々と情報を集めることも出来た。だけど、

「……………はあ〜」

集めた情報の内容にため息を吐く。

まず吹雪についてだが、明日香にそれとなく尋ねてみた所本当に失踪しているとい

う。だが記録では表向き留学扱いになっていて、学園も警察も取り合ってはくれないらしい。

下手な相手に頼ることも出来ず、今はカイザーなどのごく一部の信頼が置ける人物と情報の共有をしているに留まっているという。

このことは以前特待生寮で会った時に十代達にも話していたそうで、俺もそこに居たから聞いていたはずだと呆れられた。あの時は十代に初めて罪善さんを見られてテンパってたからな。うっかり聞き逃していたらしい。何たる不覚っ！

ちなみにこれは勝手な想像ではあるが、明日香が時折特待生寮に通っているのは消えた兄を忘れないためではないだろうか？ まあ真実は本人のみぞ知るといふ奴だが。

次に、この遺跡と闇のデュエルが関係してるんじゃないかという話。これに関しては、以前高寺オカルトブラザーズが集めてきた噂話の中にそんな話があったのを思い出した。

だが遺跡自体はあらかじめ調査団の手によって調査されているようで、現在はもう半分放棄されているような有様だという。少なくとも今は闇のデュエルとは特に関係はなさそうだ。

最後に翔の言っていた言葉だが、

「うんっ!? どうした遊児? もうへばったのか?」

「いや。体力的にはまだまだ平気なんだが……なんだがなあ」

「何だよ？ まさかさっきの翔の言っただけのことを気にしてんのか？ 夢だよ夢！」

俺の様子を見て話しかけてきた十代が、そう言ってカラカラと笑う。俺もそう思いたいところだが、どうにも無視しきれない点がいくつかあった。

大まかな流れを順を追って並べると、まず昨夜翔は夜中にトイレに立った。だが寝ぼけていたのか、帰りに一度部屋を間違えて大徳寺先生の部屋の前に立ってしまった。

すぐに気づいて戻ろうとしたところ、中から大徳寺先生が誰かと話しているのを聞いてしまったのだ。

そして大徳寺先生から出る墓に埋められるとか眠らせるとかの物騒な単語。とぎれとぎれで詳しくは聴き取れず、最初は夢か聞き間違いだと判断してそのまま部屋に戻って寝たらしいが、さっきふと思いついて出てきたという。

十代は気に留めていないようだが、こういったイベントの直前に出てくる不穏なセリフはよく当たるというのがアニメなりマンガなりのお約束だ。それに大徳寺先生が誰かと話していたというのにも気にかかる。

墓というのはよく分からないが、もし今回のピクニックで墓やそれに近い何かがあったら要注意だ。……ただ、

「……ああ。多分そうなんだろうな。翔にも夢だと言っておいたんだが、自分で言って

おいてなんだけど妙に気になっちゃってな。気にかけてくれて済まない。ピクニックを続けるとしよう」

「そうなくっちゃ！」

ここでそのことを皆に話すわけにはいかない。ここまで来ると大徳寺先生絡みで何か起こる可能性はかなり高いが、それでも確定したわけじゃない。それにこのピクニックとはまた別口の話の可能性だってある。

なのにここで皆に言ってしまったら、不安がらせてピクニックを楽しむことが出来ないだろう。それは誰も望んでいない。だから翔にも改めて夢だと言って安心させておいた。

俺のやることは二つ。皆の安全を確保しながら何事も起こらないように見張り、なおかつ自分もこのピクニックを楽しむ。非常に難易度の高い問題ではあるが、ここで諦めてはいられない。

俺は内心気合を入れて、全力でこのピクニックに挑むことにした。

「着いたのにゃ！ 古代遺跡の入り口なのにな！」

大徳寺先生が手で指し示す先にあるのは、元はアーチ状だったのだろう柱。だがすつ

かり苔むしていて、おまけに破損も激しく途中でポツキリ折れてしまっている。

その先に見えるのは、もはや廃墟のようにも見えるけど遺跡と言われたらそのようにも見える建造物。入り口らしき穴がぼっかりと開いている様は、まるでどでかいモンスターが口を開けて待っているのではないかと錯覚してしまいそうになる。

「つ、疲れた〜」

「疲れたんだな」

「流石に……ちよつと疲れたな」

目的地に着いたこともあって、俺と翔、隼人の三人は近くの瓦礫に座り込む。色々警戒しながら全力で楽しむのって無茶苦茶疲れたな。その点、

「お〜！ なんか遺跡っぽいぞ〜」

「だから遺跡だって」

やっと目的地についてはしゃいんでいる十代と、それに突っ込みを入れながらクスッと笑う明日香はまだまだ大丈夫そうだ。十代はともかく明日香にも負けるとは……。

「この奥にもつと凄い、古代のデュエル場と言われている遺跡とか、お墓の遺跡とかがあるのじゃ〜」

ちよつぱり落ち込んでいると、大徳寺先生が そう観光ガイドみたいな説明を始める。……いや待て。お墓の遺跡？

「大徳寺先生。お墓の遺跡というのは？」

「ああ。久城君は知らなかったかには？　この遺跡の様式は古代エジプトのもの……特に王家の墓のものと酷似していて一時期話題になったのには。だけど結局その理由は分からずじまい。調査隊もお手上げで、大掛かりな偽物じゃないかって説もあるくらいにや」

なるほど。だから放っておかれてると。といつてもあくまで説の一つである以上、そう簡単に調査が終わるとは思えないんだけどな。……これ誰かが遺跡を保護するべく手をまわしてないか？

しかし墓か。もろに一番警戒しているキーワードが出てきちゃったよ。

「なあ！　本格的に遺跡探検する前に昼飯食おうぜ！」

「し、しようがないのには。それじゃあお弁当の時間にするのにはや」

げっ！　もう十代の中で遺跡探検は確定事項なのかよ！　見ると他の皆も特に否定しない。皆して遺跡探検したいのかよっ!?　……俺も見たいとは思っていたけど。

まあなんにせよ昼食休憩には賛成だ。早速皆でシートを敷き、そこに各自で用意した弁当を並べる。おにぎりにサンドイッチ、他にも様々なおかずが揃う様子はまさしくピクニックの一風景だ。

かくいう俺も事前に購買部でおにぎりを買ってきた。中身の具材は割と定番の鮭、お

かか、梅の三種類だ。一人でなら冒険もするが、こういう集まりではやはり王道だろう。だが、そんな和やかな風景の中で、何故か大徳寺先生だけ少し離れた所でムフフと笑いながら、自身のリュックを見せびらかすように持ち上げる。

「先生は、購買部のトメさんに作ってもらった特製弁当があるのにや！」

「えっ!!? そのリュック全部弁当か? 俺にも分けてくれよ」

なんとあのリュック全部か? ただでさえ登山用の本格的なリュックだというのに、それに入るだけ全部だとすれば相当な量になる。……流石にそんなことないよな?」

だが十代はどちらにせよ大量の弁当だと判断し、片手に自分のおにぎりを持ちながら催促する。まずは自分の分を食ってから言おうな! それに対し大徳寺先生は、

「嫌なのにな。皆に分ける分はないのにな」

「大徳寺先生。そんな大人げないことを言わずに、こつちで皆で食べましょうよ!」

それでも教育者かと少し情けない姿を見せながら、一人ルンルン気分でリュックを地面に下ろす大徳寺先生。だが、やはりこういうことには天罰が下るのだろう。

「ふっふくん! 私のお弁当……んっ!! にやくっ!! ファラオっ!! 私のお弁当全部食べてしまったのにな?」

リュックの中から出てきたのは、口周りに弁当らしき食べかすを付けて小さくゲップするファラオ。大徳寺先生はガクツと膝をつき、

「……先生に弁当分けてほしいのにな」

今度は生徒に弁当をたかり始めた。本当に目も当てられない。……だが、こういう時の答えは決まっている。十代はニヤリと笑いながら、

「嫌なのにな！ 先生に分ける分の弁当なんてないのにな！」

さっきの仕返しをしつかり決めてみせた。

それでも頼み込む大徳寺先生に、仕方ないなあと皆の弁当を少しずつ分けて食べる昼食会。皆で集まって、青空の下で上手い飯を食う。それはとても和やかで、心地よく、笑顔に溢れ、間違いなく今日一番良い時間だったのだと思う。

そして、そう言った時間ほどあつけなく、唐突に崩れ去るものだと知ったのは、俺が三つ目のおにぎりにぎりに手を掛けた時の事だった。

課外授業 絶望を刺し貫く騎士

「……………はあ」

俺は頭を抱えて大きくため息を吐いた。だつてそうだろう。

目の前にそびえるのは、ピラミッドのような巨大な建造物。空は淡い緑色に染まり、太陽がなんと三つに分かれて大地を明るく照らしている。

おまけに少し高い場所から周囲を見渡すと、相当先の方で地面がぼっかりと消滅して底が見えない。そしてそのまた先に見えるのは、まるで島のようにぼつぼつと点在する切り立った大地。

こんな場所がもし地球にあつたら、確実に世界遺産か何かに登録されているであろう不思議な光景だ。つまりここは、

逆戦王^{G X}「異世界からさらに異世界つてそんなのアリかよ」

カタカタ？ カタカタ！

「ああ。ありがとうな罪善さん。少し落ち着いたよ」

いきなりこんな状況になったが、罪善さんが一緒に居てくれたのは不幸中の幸いだ。こちらを心配する罪善さんから放たれる光を浴びている内に、パニックになりかけていた頭が少し落ち着いていく。

『やあやあ久城君。災難だったプギヤっ!?』

「今回はお前に付き合っている暇はない。可及的速やかにこの状況を説明しろ早くついで！」

いつもの如く俺をからかいに来たデイーを慣れた手つきで捕まえ、そのまま軽く睨んで説明を急かす。何せここには人間は俺しかいないのだ。まだパニックが完全に収まったわけじゃないから普段より優しくもないぞ。

『分かった。分かったつてば! ……ふう。他の皆が心配なのは分かるけどちよつと落ち着きなよ。まずは落ち着いて話の出来る場所に移動しない? こんな所で突っ立つていたら……捕まっちゃうよ?』

「……っ!? ……分かった」

デイーの今の一言で少し察する。つまりここは、俺達を捕まえるような何か居る場所だ。

俺は静かに頷き、近くの建造物の陰に身を潜める。ここなら近くからじゃないと気づかれにくいはずだ。罪善さんも空気を呼んで光量を抑えめにする。

『結構。それじゃあ説明するけど……君はこれまでの経緯を覚えているかい?』

「ああ。大体はな」

あれは遺跡にピクニックに来て昼食を皆で摂っていた時、急に近くの地面から空に向かって光の柱が伸びたのだ。

すると突如空の色が緑に染まり、さらに虹色の膜のような何かが空に現れた。その時点で明らかにただ事じゃなかったけど、その上雷鳴のような音まで響き渡った。

『遺跡の中に逃げるのにな』

そう言ったのは大徳寺先生だっただろうか? 俺達はその言葉に従い、遺跡の入り口に避難した。だがそこで、何故か十代だけがハネクリボーと共に外に残っていたのだ。

『俺は大丈夫だ。皆は隠れてろよ』

そう言つてどこかへ走り出した十代。俺は連れ戻すべく入り口から出て十代を追い、そして空からの変な光に包まれたかと思うと……いつの間にかこの場所に倒れていたという訳だ。

以上の事をディーに確認がてら説明すると、コイツときたらどこか面白がるような態度でふんふんと聞いていた。もつと真面目に聞けよこの野郎。

『ああゴメンゴメン。だけど許しておくれよ。こういうアクシデントやハプニングこそ僕の大好物なんでね。……お詫びと言つちやあなんだけど、僕も多少はこの状況の事を

説明しようじゃないか』

「デイーの語った内容はとんでもないものだった。なんと今俺達が居るのは精霊の世界だというのだ。」

『ほら！ あそこを見てみなよ』

俺は建物の陰に隠れながらデイーの指し示した方をそつと覗く。そこには、

「あれは……『墓守の番兵』と『墓守の長槍兵』つ!? なんてそんなのが普通に歩いてんだよ!」

カタカタ?

『そりやあここは王家の墓だもの。墓守の一族が居るのは当然でしょ』

俺と罪善さんの疑問にデイーは事もなげに答える。

遠くで隊列を乱さずに行進しているのは、俗に墓守シリーズと呼ばれるカード群の墓守の番兵と長槍兵そのまんまの人物達。どうやら同じカードだと顔もほとんど同じように、似たような顔の奴らがずらつと歩いてくるのはなんかおっかない。

「……ちよつと待て。今王家の墓って言わなかったか? それってもしかして無印に出てきた古代エジプトの? 精霊の世界なの?」

『そうだよ。古代エジプトはほら。遊戯王の世界とはそれこそ数千年単位の深い関わりがあるじゃない。だから精霊の世界とも普通に繋がりがああるわけだ』

「そんなのアリかよ……というかここが王家の墓ってことは、見つかったら俺達エライことになるんじゃないか？」

無印のことや色んな映画などから推察するに、こういうのは見つかったら墓荒らしと勘違いされるっていうのがお約束だ。

『そりゃあね。特にこの連中は掟に厳しく融通が利かないのが多いから。捕まったりしたら即墓荒らしと判断されて、生きたままミイラにされちゃうかもよ〜！』

そうおどけるように言うデューだが、俺にとつてはたまったものではない。

ここがアニメの重要回か何かだとすれば、十代や翔などの主要メンバーはおそらく無事に帰れる可能性は高い。だが問題なのは俺の存在だ。

全員一緒に居るのであれば、流れに任せれば主人公である十代の手で何とかなる。しかし俺が居ないことで、例えば十代や大徳寺先生が探しに来る可能性がある。特に十代ならやりかねないからな。

それが元で万が一帰れないなんて事態になったら目も当てられない。こんな精霊の世界に取り残されたら命が幾つあっても足りないからな。

「なんでここに来たかはひとまず置いておこう。今はまず早い所皆と合流しないと。」

……そう言えば」

俺は一つ気にかかったことがあって、ポケットに入れていたデツキを手取る。ここが精霊の世界で、精霊が普通に実体化して歩いているってことは、幻想体達も普通に歩けるはずだ。

だというのに罪善さん以外の面々が誰も出てこない。こんな状況なら葬儀さんやレティシアが出てきてもおかしくないのに。

『ああ。それがだね。そのお、ちよつと調整というか幻想体の活動範囲に不備があつて……ゴメンっ！ ここじやカードから幻想体は呼び出せない』

な、なんだつてっつ！? マズイ。非常にマズイぞそれは。

今までは最悪墓守達に見つかったとしても、幻想体達に頼んで逃がしてもらおうという手段があつた。しかし呼び出せないとなると話が変わってくる。見つかったらほぼ詰みの鬼畜難易度になってしまう。

……あれ? しかしカードから呼び出せないのなら、じゃあそこに居る罪善さんは、

『おいつ! そのお前。何者だっ!?!』

マズイっ!?! 話し込んでいて見つかったっ! 近くを通りかかった巡回だろう。長

槍兵が三体こちらに向けて槍を構えている。

槍の穂先がギリリと光り、俺は咄嗟に両手を挙げて戦う意思はないことをアピールする。だって刃物怖いじゃんっ！ 数も多いし戦うなんてもつてのほか。なら話し合いで解決だ。

「待ったっ！ お、俺は怪しい者じゃないっ！ 偶然ここに迷い込んでしまったんだ。出口さえ教えてくれればすぐに出ていくからっ！」

『信じられるか。墓荒らしに裁きを』

『裁きを』

目の前の墓守達は話に耳を貸す様子もなく、俺に向けて槍を突き出したままだ。確かに自称怪しくない奴ほど怪しいってよく言うもんな。しかし今の俺には時間が無くて大した言い訳が思いつかなかったんだもの。

槍がずずいと突き出されていき、俺は遂に壁に追い込まれる。まさかこのまま捕まえもせずにここでグサツじやないだろうな？ そうなったらもうおしまいだぞ。

カタカタっ！

罪善さんがサツと前に出るが、元々罪善さんは戦闘向きじゃない。回復や精神安定、防御や良くないモノの撃退などには長けていても物理的な攻撃には弱い。あの槍に刺されたらそれだけでダメージは大きいだろう。

『さくて大ピンチだね久城君!』

「嬉しそうに言うなよっ!　なんか手はないのかディー?」

『残念ながら、僕は過度の干渉は出来ない身の上でね。ここでこれから起こることをハラハラドキドキ見物するぐらいしか出来ないのさ』

溺れる者は藁をもつかむ。物は試しとディーに頼むが、コイツめ凄い見てるだけで動く心配がない。……ディーはこういう奴だった。気が乗れば手助けもしてくれるが、気が乗らなければどこまで行っても見てるだけだ。

『裁きを』

遂にしびれを切らしたのか、長槍兵の一人が槍の柄で俺の頭を殴りつけてきた。ひとまず気絶させて連行しようってつもりか。だが、

カタカタっ!

罪善さんが俺の目の前に庇うように移動し、強い光を放って長槍兵の攻撃を防ぐ。しかしもう一体によって槍で壁に叩きつけられてしまう。

「罪善さんっ!!?　ぐっ!!?」

続けざまに俺の頭に衝撃が走る。殴られたと理解した時にはもう目がチカチカし、よろめいて壁にもたれかかりながらズルズルと座り込む。……まいった。これは本格的にヤバそうだ。

視界が少しずつ狭まり、手足も思うように動かない。長槍兵の一人がこちらに手を伸ばしてくる。……おそらくここで殺されることはない。ここで殺す気なら槍で殴るのではなく刺しているはずだ。これが的外れな考えじゃないことを祈るが。

そして、さつきからやけに胸が熱い。

……ああ。なんだ。ペンダントが熱いのか！ なんとか視線をそちらに向けると、俺の首から提げていたペンダントがまるで脈打つように光を放っていた。以前大鳥や審判鳥と対峙した時に役に立ったこれだけど、流石にこの状況ではどうにもならないか。そして長槍兵の手が俺の身体に届こうかという瞬間、

ザシユッ！

『ぐおおおっ!?!』

何かが飛来し、手を伸ばしていた長槍兵の腕を刺し貫いた。腕はかなりの深手のようで、長槍兵は槍を取り落して傷口を押さえる。何だ？ 一体何が？ 俺は飛んできたその何かをじつと見つめる。

それは一振りの細身の剣だった。

持ち手に星座のような形をあしらった、青と黒を基調にした細剣。……何故だろう？

あの剣に俺はどこか見覚えがあった。

『ぐわっ!?!』

『何も……うおっ!?!』

さらに同じ剣が続けて何本も飛来して他の長槍兵の腕を刺し貫いていく。そして全ての長槍兵が槍を取り落して悶える中、

『……大丈夫かしら?』

どこからともなく静かな声が響き、俺の目の前に見知った……いや、直接会うのは初めてだが、姿はカードのイラストやデュエル中のソリッドビジョンで見たことのある相手が現れる。

黒と青の長髪。髪と同色の星空の装飾の付いたドレスと白く透き通ったマント。スパードを組み合わせた形のティアラを被り、もはや蒼白に近いレベルまで白い肌。

顔の左半分と両腕の一部を覆う刺々しい闇と、残った片目から流れる黒い涙により、神聖さと悲哀の絶妙なバランスを保っている美少女。

絶望の騎士がそこに居た。

課外授業 星の名を持った騎士

『……如何かしら？ その涙と絶望で鍛えられた剣の味は。……本来なら騎士の礼に則って正面から行きたいところだけど、守るべき人が危険にさらされている危急の時だもの。多少の無作法は許してほしいものね』

絶望の騎士が突如現れてそう言いながら、腕を押さえて悶絶する長槍兵達を睥睨する。瞳を閉じているというのにそう思わせる隻眼は横から僅かに見えるだけでも鋭く、それを直接受けている長槍兵たちにはどれほど突き刺さっていることか。

『お、おのれ。墓荒らしの新手か』

『墓荒らしなどではないのだけれど……そうね。ここに入った時点で、貴方達の言う墓荒らしの範疇かしら。……どうする？ まだ向かってくるのなら腕だけではすまないけれど、逃げるのなら追わないわ。……まだ私に、みすばらしいけど騎士の矜持が残っている今の内ならね』

『くっ………退くぞっ！』

今の状況では不利だと判断したのだろう。長槍兵達は憎々しげにこちらを一瞥して、そのまま去っていった。……槍を置いていってしまったけど良いのか？ あれじゃあ

長槍兵じゃなくてただの兵じゃないか？

兵達が走り去っていくのを確認すると、絶望の騎士はふうと息を吐いてこちらに向き直る。

「あ……ありが……とう」

礼を言おうとしたが、頭がガンガンして呂律が回らない。というか今にも気を失いそうだ。そうならないよう必死に意識を保つ。

絶望の騎士はそんな俺に優しく手を伸ばし、

『嘆かわしいこと。こんな人が私が護るべき相手なんて。……恥を知りなさい』

その手に横から飛来した細剣を掴み取り、そのまま俺の頬にピタリと当てる。

……動けない。頭がガンガンするのを差し引いたとしても、ほんの少しでも気を緩めたら、そのままこの刃が俺を害するぞと言わんばかりの威圧感だ。

カタカタっ!?

壁に叩きつけられたことからどうにか立ち直った罪善さんが、どこかオロオロとしながら俺と絶望の騎士を交互に振り向く。

『罪善は口を挟まないで。……いいこと？　よく覚えておいて。私は貴方を認めていな

『い』

罪善さんを手で制しながら、絶望の騎士は冷たい声で剣を突き付けたままこちらに語り掛ける。その顔は先ほど長槍兵達に向けていたものよりはほんの少し穏やかで、しかし険が全くないという訳ではなかった。

『私は役割として誰かを守ることを自分に課している。今はたまたまそれが貴方というだけ。……私のカードの持ち主だというのなら、私の仕えるべき主だというのなら……せめて守りたいと思わせる人であることね』

確かに絶望の騎士の言う通りだ。俺はカードの持ち主ではあるけれど、俺自身に力は無くして幻想体達に対する強制力なんかも一切無い。あくまで皆は厚意で助けてくれているだけだ。

対して絶望の騎士は今会ったばかり。厚意も何もあつたものじゃない。むしろ初めて会ったはずの俺をこうして助けてくれただけでもありがたいことだ。

どうやったら認められるのかは知らないけれど、俺に出来ることは今の所真摯にその言葉を受け入れることしかない。俺は何とか絶望の騎士の言葉に対して首を縦に振る。

『……良いでしょう。今の気持ちをお忘れないうちに。……罪善ももう良いわよ』

カタカタ！

一瞬の間の後、剣を静かに引く絶望の騎士。その言葉を聞いた罪善さんが、すぐさま

俺の近くに飛んできて光を放つ。……ああ。少しずつではあるけれど、光を浴びて頭がはつきりしてきた感じがする。まだ痛いは痛いんだけど、大分マシになった感じだ。

「ありがとう罪善さん。……よつと！ それと、改めてありがとう。えつと……絶望さん？ いやしかしそれだとな」

『……どうとでも、お好きなように呼べば良いわ』

どうにか立ち上げられるようになり、罪善さんに礼を言った後で絶望の騎士にも礼を言おうとする。しかし絶望の騎士とフルに毎回言うのは長いし、絶望さんというのはいくら何でも呼び方としては悪い気がするしな。

まごまごしていると、御本人から気を遣われてしまった。かと言って絶望さんは……うんっ!?

そこで目についたのは、絶望の騎士の持っている剣の持ち手。ナツクルガードも含めて星の模様があしらわれていて、纏っているドレスにも星空のような装飾がある。……そうだ！

「ッセイ」……セイさんって呼んで良いかな？ ほらっ！ 星が好きみたいだし、漢字で星の事をセイとも言うから」

『セイ……ね。さん付けすると毒にもなる名前とはまた』

「あっ!? そ、そんなつもりはなかったんだけど」

しまった!? 気に障ってしまったか。……俺がアタフタしていると、彼女はほんの僅か、よく見ないと分からないレベルで口角を少し上げて微笑む。

『フッフ。セイで良いわ。……では、この騎士の成れの果て。毒になるか薬になるかは貴方次第。しばらくの間、貴方を護りながら見極めさせてもらうわ』

「ああ。俺は久城遊児。よろしく頼むよ。セイさん」

そうして絶望の騎士……セイさんの差し出した手を、俺は今度こそしっかりと握りしめたのだった。

『……良いわ。こっちへ』

カタカタ!

「分かった!」

滑るように進むセイさんの声と罪善さんに促され、俺は素早く建造物を壁伝いに移動する。よくテレビで見てやってみたいとは思っていたけど、実際は相当しんどいぞ。

まだ頭痛はするが、罪善さんのおかげでごく軽いもの。あそこで休んでいたらすぐにさっきの巡回が応援を連れてくるとセイさんに急かされ、俺達は今移動しながら他の飛ばされたであろうメンツを探しているのだ。しかし、

『侵入者だ！ 侵入者だぞ！』

『探せっ！』

さつきから巡回の動きが慌ただしい。陰に隠れて何度やり過ぎしたことか。多分さつきセイさんが追い払った奴が他の奴に知らせたんだろう。もしくは十代達が同じように見つかったのかもしれないが。

『警戒厳重ね。……どうする？ さつきの兵の数人程度であれば蹴散らすことは容易だけど？』

「……いや。どう考えても多勢に無勢で追い込まれるだろうし、出来ればこれ以上戦って大事にはしたくない。それが分かっているからセイさんもさつき、トドメを刺さずに腕を狙って槍を持ってなくするだけに留めたんだろ？」

さつきの攻撃。どれも正確に腕を貫いていた。相手が反応できなかったことから、やろうと思えば急所を射抜くことだって出来たはずだ。なのに誰一人殺さなかった。セイさんも俺と同じ考えなのだと言え勝ちに推測する。

『……そこまで深く考えたわけじゃないわ。ただ騎士として、不意打ちで仕留めるといふのは恥だったというだけの事よ。逃げていく彼らを追撃しなかったのも同じ。……もちろんあそこでまだ向かってくるようであれば容赦する気はなかったし、貴方をこれ以上狙うようでも同じだったわ』

セイさんはこともなげに言う。つまりセイさんは騎士としての在り方にこだわっている訳だ。だけど一応の護衛対象である俺が狙われるようであればこちらを優先すると。

少しおつかない感じがするけど、どうやら予想より良い人らしい。

『…………そのニマニマ笑いを止めて。……ひとまずあそこに隠れましょう』

少し嫌そうな顔をしながらもセイさんが指差したのは、小さな建物らしき場所。ドアはなく入り口と窓があるだけで、中から音もしないことから空き家か何からしい。

このまま動きっぱなしでは体力を消耗するだけだし、あそこなら少しは休めるかもしれない。おそらくそういうことも踏まえて言ってくれているのだろう。

「分かった。あそこでちよつと休んでいこう」

俺達は巡回の目をどうにか盗んでその建物の中に転がり込んだ。

中は特に何もないそこそこの広さのある空間だった。倉庫か何かかな？　そこで身を潜め息を殺し、少して巡回が離れていくのを確認しようやく一息つく。

「……………はあく。ようやく行ったか」

『そのようね。…………このままもう少し休んだら出るわよ』

俺は少し息切れしているのに、セイさんはまるで疲れた様子を見せない。これが幻想体と人間の体力の差かよ。

罪善さんから出る光を浴びながら、俺は少しずつ息を整える。そして、

「……なあ。ちよつと良いか？ 気になつてただけど、ディーが言うにはカードから幻想体は今呼び出せないらしいけど、なんでセイさんや罪善さんは普通に出てこれたんだ？」

『質問ね……まあ少しなら良いでしょう。答えは、私や罪善は他の幻想体とは少し違うから。……そのペンダントを見れば思い出すかしら？』

その言葉に、俺は首から下げていたペンダントをそつと手に取る。もう先ほどのような強い光と熱は発していないが、それでもほんのりとは放っている。

『幻想体はそれぞれ自分のカードを依り代に精霊化する。それは私も罪善も同じ。……だけど例外として、私達にはもう一つ依り代があるわ』

「そつか！ このペンダント！」

考えてみれば、このペンダントを作る際にディーにカードを選ばされてたな！ つまりあの時選んだ幻想体はペンダントからでも呼び出せるって訳か！

『気が付いたようね。……私の場合正確にはまだ精霊化していないのだけど、この世界に満ちている力を使って無理やり実体化しているの。……この世界だから出せない幻

想体も居れば、この世界だからこそ出せる者も居たということね』

「そうだったのか」

まあ何はともあれこれは不幸中の幸いだ。罪善さんもセイさんも頼りになる幻想体だし、あの時この二体を引き当てるに助かつ……んっ!?

そう言えば、あの時も一枚選んでいたよな。確か名前は………ペスト、

『大分お疲れのようだね久城君。飲み物飲むかい?』

「ああ。ありがとう………って!?! さつきから姿が見えないと思ったら、今までどこ行つてたんだよディー!?!」

あまりにも自然に飲み物を手渡してきたので一瞬スルーしかけたが、そこに現れたのはさつきからいつの間にか姿を消していたディーだった。

………ってあれ? 三枚目何て名前だったっけ?

課外授業 微睡みの中でやってくる漁師

カタカタッ！

『まあまあ。そう怒らないでくれよ久城君も罪善さんも。……僕だって下手にあのま
ま居たら巻き添えを喰らう可能性があったからね。今みたいに安全な場所でもない
のんびり話せやしない。それに悪いとは思ってたんだよ』

咎めるように骨を鳴らす罪善さんに、デューは飄々とした態度でそう返す。俺もも
らった缶ジュースを呷りながらジト目で軽く睨んでいるのだが、あまり効いている様子
は見えないな。

『……だからひとまずその剣を下ろしてくれないかな？』

『それは貴方次第……といった所でしようね』

だがそれに続く言葉にセイさんの方を見ると、数本の剣を宙に浮かべてデューに向
け、自身も剣を構えるセイさんの姿があった。

「ちよ!?」 ちよつと待ってセイさんっ!？」

あわや一触即発の事態になりかけたが、デューに動きがないことからセイさんは静か

に剣を下ろし、浮いていた剣も姿を消す。一体どこから出てるんだあの剣は。

『おく怖い怖い！ 君の剣は掠めただけでも危ないからね。先ほどもろに刺さった墓守達は今頃どうなっていることやら』

『一応加減して弱めてはいるから、すぐに手当てすればどうということはないでしょう。……それよりも、今になって出てきたということは何か用があるのでしよう？』

『さあて。どうだろうね？』

「ちよつと待った！」
何やら色々と含みのある話をしているが、今はそれは置いておこう。俺は二人の話に割り込む。

「おいディー！ さつきは襲われてうやむやになったけど、結局十代達はどこに居るんだ？ 無事なのか？」

『それなら大丈夫。十代達は全員無事で、今の所およそ原作通りの行動をとっているよ。……君も飛ばされたことで流れがズレるかも少し思ったのだけど、細かい所はともかく大筋は変わっていない』

「そっか。良かった！」

俺はほつと胸を撫でおろす。基本ディーの言うアニメ版通りの流れを辿っているらしいが、万が一俺という異物の影響でバッドエンドになったら卒業どころではないから

な。俺が生き残つても代わりに誰か死んだりしたら目覚めが悪すぎる。

だが、無事だというならあとは合流して帰るだけだ。どうやって帰るかは分からないが、十代の近くに居れば多分一緒に帰れるだろう。

「……ちなみに十代達の場所を教えてくださいませんか」

『良いよ!』

「くれないよな……つて!? 良いのか?」

予想外に軽い答えにビックリだ! 俺が慌てて問い返すと、デイーは頷くように光球を上下させる。

『まあ場所を教えるというより、たった一言だけ言えば良いだけなんだけどね。久城君。窓の外を見てごらん』

窓? あれか! 俺はこの部屋の、明かり取り用と思われる少し高い所にある窓に飛びつき外を見る。そこには、

「あつ!?! 十代じゃないか!」

少しここから離れた所で、十代が何者かと向かい合つてデュエルディスクを構えている。相手は遠くて顔までは分からないが、服装からして墓守の誰か。おそらくカードの『墓守の長』だろう。

そしてさらにそこから離れた所に、よくテレビなんかで見かける棺が四つ並んでい

る。……げっ!? よく見たら翔や隼人、明日香に大徳寺先生が入られている。

つまりこれは遊戯王世界お約束の、デュエルで全て解決という奴だろう。勝ったら皆を助けてくれるとかそんなところだ。

『状況くらいは大雑把に説明しようか。現在十代はこの墓守の長と闇のデュエル、試練に挑む所だ。内容は多分久城君が想像した通り。デュエルで勝ったら自身も含めた全員の命が助かり、元の世界への帰還方法を教えてくれる。負けたら……まあとても酷い目に遭うとだけ言っておこうかな。生き埋めというかミイラというか』

「いや言ってるんじゃない? 生き埋めとかミイラとか怖いわっ! ……とにかくだ。十代の奴また勝手にそんな危ないデュエルをしようとしてんのか」

断れない状況に追い込まれたからかもしれないが、だからと言ってこんなところで見ている訳にもいかない。場所さえ分かればこつちのもんだ。早くあそこに行かなくては。

「よっし! 俺達も早速あそこへ……おっと!」

『しっかりしなさい』

急に眩暈がしてよろめいた。バランスを崩しそうになったところをセイさんがそつと支えてくれる。

「ゴメン。急にフラッと来て」

『無理もないよ。この世界に来てから今までずっと墓守達から隠れながらの走りっぱな

しだ。疲れが出たんだよ』

まいったな。ディーが気遣ってくれるなんて、よっぽど俺は今疲れが顔に出ていたらしい。さつきまではまだまだ行けるって感じだったのに、今になって急に疲れが来たみたいだ。アドレナリンとかの関係かな？ 何だか視界までぼやけてきた。

俺はいよいよ立っていられなくなり、悪いと思っただけどセイさんにもたれかかりながら座り込む。

『少し休むと良いよ。大丈夫。まだデュエルは始まったばかりだ。少しここで休んでから出発しようじゃないか』

「……………ああ。そうだな。……………じゃあ、少しだけ……………十分だけ、休んだら……………しゅっぱ……………」

だんだん気が遠くなり、なんとなしにまだ手に持っていた空き缶がカランと音を立てて転がる。

そう言えばさつきの缶ジュース、俺についていつ蓋を空けたっけか？ ……まあ良いか。何か大事なことを忘れているような気がしながらも、俺の意識はそこで微睡みに落ちていった。



『……………ふう。どうやら眠ったみたいだね。流石はウエルチアースの特製ジュース。眠り薬が良く効いている』

遊児が静かに寝息を立て始めたのを確認し、ディーがそんなことをポツリと漏らす。

『しかし意外だったね。君が気づいていながら久城君が飲むのを見過ごすなんて』

『遊児を休ませることについてだけは私も同意見だったからよ。僅かでも眠った方が体力の回復は早い。それに飲み物自体にも回復効果はあるし、これなら短い時間で復調するでしょう。……………それと、貴方の出方も知りたくてね』

絶望の騎士……………セイはさりげなく遊児を庇うように立ち位置を変える。罪善もだ。少しでも遊児を回復させるべく光を浴びせながら、何かあればディーとセイの衝突を止めるべく身構えている。

『……………それで？ 今ここに現れたということは、奴は抑え込んできたということの良いのかしら？』

『もちろんさ。ペンダントから君が呼び出された後、急いでロツクをガツチリかけてきた。流石の僕も、ここで『ペスト医師』の実体化というのはいただけない。いや……………面白そうは面白そうなんだけど、この世界で出てこられたら今の久城君じゃ扱いきれな

い
い』

『まったく……よりもよつて奴のカードを引き当てるなんて。私に認められない程度では、確実に呑み込まれてしまう。死よりもある意味もつと酷い終わりを迎えることになるわ。せめて罪善以外にも対抗できる幻想体を揃えてからじゃないと』

カタカタ？

罪善が呼んだとばかりに振り向く中、セイは悩ましそうに小さくため息を吐いて遊兎を見つめる。その表情はさつきまでの鋭いものよりも、ほんの僅かにだけ穏やかで優しいものだった。

『おやおや？ 認めていないとか言っていた割には、久城君を気に掛けているんじゃないか！』

『……フツ。そういうことじゃないわ』

セイはどこからともなく取り出した剣を握りしめ、くるりと一回転させて目の前に掲げる。

『私は騎士で、遊兎は私の庇護対象。そして、将来的には私が仕えることになる予定の人。こんな所で止まっただけじゃ困るとは思っているだけよ』

『素直じゃないなあ。ねえ？ 罪善さんもそう思うだろう？』

カタカタ！

『そうだろう！ ……さて、それじゃあ久城君が寝ている内に話しておこうか。これからの流れをね』

そうして三人が遊児の傍でちよつとした話し合いをしていると、

『ふくむ。そろそろかな』

ピシッ!!

空間が裂けた。

何もない空中に突然亀裂が走り、そのまままるでガラスか何かのように音を立てて割れる。そして、中から潮の香りとカモメの鳴き声と共に何かが姿を現す。

それは漁船だった。

海水のような何かの流れに乗り、部屋のご真ん中に漁船が停泊する。こんな奇怪な状況だというのに、デーイーに聞かされていたので罪善、セイの両者は特に驚いた様子を見

せない。

漁船に乗っているのはエビ頭の漁師。流石に自販機までは載せていないが、漁船に乗っている以上正しく漁師としてここに在った。

『お〜い！ こつちこつち！ はいスト〜ップ』

デイーの呼びかけに反応したのか、漁船は目の前までゆるゆると進んで停止する。

『やあやあウエルチアース。お疲れ様。精霊の世界と学園を移動する実験はひとまず成功だよ』

『……難儀なことね。誰かがジュースを飲んで眠りに落ちた時だけやつてくるなんて』
漁船に驚いてこそでないものの、どこか呆れた様子でセイは言う。

『元々ウエルチアースは都市伝説から生まれた人攫いの幻想体だからね。そのシチュエーションになぞらえないと力を発揮できないのさ。……まああの施設からすら職員を誘拐する程だし、型にハマればとても有能なんだけどね。じゃあ頼んだよウエルチアース』

デイーが合図をすると、エビ頭はこくりと頷いて眠っている遊児を船上に引き上げる。それを追って船に乗り込む罪善とセイ。

『このまま久城君だけで学園に戻ることも出来るけど、それじゃあ十代達が納得しない。なら……実験ついでにド派手な登場と行こうじゃないか！』

そう楽しそうに語るディーの姿は、まるで手に入れたおもちゃを試す子供のようだった。

『ちなみに実験と言っていたけど、もしウエルチアースが来なかつたらどうするつもりだったの?』

『うん? その時は君に久城君を運んでもらうつもりだったさ。やはり騎士らしくお姫様抱っこでお願いしていたね!』

『……………そこは逆じゃないかしら』

閑話 課外授業 試練を乗り越えた者



俺達がここに来たのは本当に突然だった。

課外授業でピクニック兼遺跡探検に来て昼飯の最中に、急に地面から伸びる光の柱。空は緑色に染まって虹色の膜に覆われ、太陽なんか何と三つに分裂だ。皆で遺跡の入り口に避難したが、俺はハネクリボーが何故かざわめくので一人外に出ていた。

そうしたら急に空から強い光が降り注ぎ、気が付いたらこの世界に来ていたって訳だ。

なんでか普通にハネクリボーも実体化しているし、そこら中墓守の精霊だらけ。途中助けてくれたサラって女の人が居なかったら、すぐに巡回の槍でグサツとやられていただろう。

まあ結局は捕まって、偉そうな墓守のおっさんに試練を受けろって言われたんだけどな。

負けたら先に捕まえた仲間も含めて墓に埋めるだとか、生きたままミイラにするなん

て物騒なことを言っていたが、要するにこれはデュエルだ。闇のデュエルだろうが何だろうが、デュエルならやってやろうじやないか！

……そこでチラツと以前遊兎に言われたこと。一人で突っ走らず、仲間に頼れという言葉を考えて出す。

悪いな遊兎。その頼るべきお前らを助けるためにも今が戦う時だぜ。

「エッジマンで、『墓守の呪術師』に攻撃！ 『パワー・エッジ・アタック』っ！」

『ぬ、ぬおおおっ?!』

墓守の長 L P O

十代WIN！

いや〜手強い相手だったぜ。墓守のおっさん。まさかフィールド魔法で墓地を封じられるとは思わなかった。そのうえ闇のデュエルというだけあって、ダメージがそのままの痛みになるのにはヒヤツとしたぜ。

俺は軽く息を吐いて、そのまま倒れ込みそうになって他の墓守達に支えられているおっさんの所に走る。

しかし痛いのは痛かったけど、それを除けばスゲー面白いデュエルだった。おっさんも

周りの墓守達も皆強かったしな。とても楽しかった。

そう言ったら何故か呆れられて、おっさんは俺に変なペンダントを譲ってくれた。半分に割れているみたいだがこれでも試練を乗り越えた証で、もう半分は以前俺の他に試練を突破した奴が持っているという。

また闇のデュエルに巻き込まれたら、このペンダントが少しだけ守ってくれるらしいのでお礼を言つて首から掲げる。お守り代わりだ。

さあ。これで皆で帰れるぜ！

「アニキっつー！」

試練も終わり、捕まってぐるぐる巻きにされていた皆が走ってくる。翔に隼人、明日香に大徳寺先生もだ。……つてあれっ!?

「おっさん。これで全員か？」

『ああ。そうだが？』

おかしいぞ？ 遊児が居ない！ あの時確かに遺跡の入り口に走つていったはずなのに。

念のために翔達にも尋ねたが、皆してこつちに来てすぐ捕まったけどその時から遊児

は居なかつたらしい。どうやら俺と一緒に居るんじゃないかと思つていたらしいが、こつちも皆と一緒に居ると思つてたんだよ！

『長。その者ですが』

『どうした？ ……分かつた。見つけ次第こちらへ連れてくるのだ。試練を乗り越えた者の仲間だ。くれぐれも丁重にな』

「何か分かつたのかおっさん！」

墓守の一人がおっさんに何か耳打ちして、おっさんがそれに対して指示を飛ばす。

話を聞いてみると、どうやら他の墓荒らしらしき者が、取り押さえようとした巡回に軽い怪我を負わせて逃げたという。

あつちやく。そう言えば遊兎には幻想体達がついてる。多分襲われたかなんかして巡回を撃退したな。……だけど無事みたいでホツとした。

『さあ。仲間達と共に元の世界に戻るが良い。未だ逃げている者は後から見つけて向かわせよう』

「ありがとなおっさん！ でも、どうやれば元の世界に戻るんだ？」

『天の三つの光一つに重なり、光の膜が現れる前に、王家の墓の門より出でよ』

「はあ〜？」

何だろな？ 詩みたいなことを言われたが俺にはサツパリだ。他の皆も首を傾げて

いる。もうちよつと簡単に言ってくれないかな。そこへ、

『……ん!? お前達。何をしている?』

うわあ何だこいつら!? 俺達が悩んでいると、そこに大勢の墓守達が武器を持って詰め寄ってきた。おっさんも驚いていることから、これはおっさんの指示じゃないみたいだ。

『王家の墓を暴きし者には裁きを!』

『『裁きを!』』

『やめろっ! この少年は、掟に従い儀式を行い、その試練を乗り越えたのだ』

『『裁きを!』』

おっさんが詰め寄ってくる奴らを宥めてはいるが、完全にはその歩みを止められない。そして遂に制止を振り切った何人かが俺に向けて槍を突き出してきた。ヤバい!? 当たるっ!?

「十代っ!」

ガキーンっ!

「うっ!?! ……………お前は!」

激しい金属音と共に、突き出された槍を切り払ったのは『墓守の暗殺者』。そしてそのはずみに顔を覆っていたフードが取れて素顔が露わになる。あれは……さつき俺を助けてくれたサラじゃないか！

『ごめんなさい。私は墓守の暗殺者。墓守の長の言うことに逆らうことはできず、さつきは表立って助けられなかったの。……貴方達の世界に帰ったら、そのアイテムの半分を持つている人に伝えて。サラは例え異世界に居ても貴方の事を忘れません。またいつかお会いできる日を信じていますと』

墓守の暗殺者……サラは、貰ったペンダントを見てどこか寂しそうにそう言伝を頼んだかと思うと、すぐに短剣を構えて襲ってきた奴らに向き直った。

『動くなっ！ この少年は儀式を勝ち抜いたのだ。神聖なる墓守としての誇りを忘れたか？ この者達に手を出す者は、私が容赦しない！ ……さあ。今のうちに』

サラの気迫に押されて墓守達の人ごみに少しだけ隙間が出来る。あそこからなら抜けられそうだ。

「ああ。でもどこへいけば良いんだ？」

『それは貴方の友達が教えてくれるわ』

クリ〜！

その言葉と同時に、ハネクリボーがデッキからスツと実体化した。それを見て皆して

口をあんどりさせている。翔なんか目をゴシゴシ擦ってるしな。

「おっ！ ハネクリボー。案内してくれるんだな！ ようし。行くぞ皆！ サラとおっさんも元気だな！」

気を取り直し、俺達はハネクリボーを追って走り出した。

「天の三つの光一つに重なり……王家の墓の門！ あれだつ！ 皆急げ！」

ハネクリボーが向かう先。それはピクニックで俺達が昼飯を食っていた遺跡の入り口だった。ただあの時とは違い、壊れても苔むしてもいない綺麗なアーチ型になっている。

空に浮かぶ三つの太陽は明らかにさつきより間隔が狭くなっていて、この調子で行けばもうすぐ重なるだろう。時間がない。

「ああつ!？」

突然後ろを走っていた隼人の叫び声と共に、盛大に転ぶ音が聞こえてきた。何があつたと振り返ると、そこには足を押さえる隼人と地面に突き刺さる槍が見えた。

『『裁きを！ 裁きを！』』

げっ!? 後ろからまた墓守の奴らが追いかけてきてやがる。さつきより大分少ない

のはサラとおっさんが足止めしてくれているからだろうけど、それでもまだ十人近くいるぞー!

「大丈夫か隼人?」

「隼人君大丈夫?」

「イタタタツ!!? ……あまり大丈夫ではないんだな」

慌てて駆け寄ると隼人は苦し気な声でそう返す。槍はどうやら掠めただけみたいだけれど、それで倒れた際に打ち所が悪かったらしい。そうこうしている内に、空に虹色の膜が出てきた。

「……太陽が一つになって、光の膜が現れたんだなっ!!? ……早く。早く逃げるんだな!」

「何言ってるんだよ。お前を置いていけるか!」

「そうよ! しつかりしなさい!」

明日香が発破をかけるが、しかしこの足じや隼人は走れない。かと言ってこのままもたもたしてたら間に合わない。一体どうすれば……。

『『裁きを!』』』

「まずいにや!!? もうそこまで迫っているにや!!?」

大徳寺先生の指差す方を見ると……やばっ! 追いつかれる!? もう俺達との距離

は十メートルもない。墓守達は一気に差を詰めようとさらに速度を上げ、通りすがりの漁船に撥ね飛ばされた。

「……………は？」

「えっ!？」

目の前の光景に一瞬反応が遅れる。えっ? なんで漁船? いやまず何で陸に漁船? 頭の上にはなマークが飛び交ってる感じだ。他の皆なんか完全に目が点になっているし。

そんな訳の分かんねえ状態の中、

『お困りのようね。手を貸しましょうか?』

その言葉と共に、誰かが漁船から飛び降りてくる。それは、

「お前は……………絶望の騎士!？」

『こうして直接会うのは初めてかしら。……………それと、今はセイと名乗っているわ。私のカードの持ち主の意向でね』

以前タッグデュエルでソリッドビジョンとして出た時と同じ。いや。あの時よりも明らかに強い存在感でそこに居たのは、紛れもなく遊児の使っていた幻想体。絶望の騎

士だ。……そして驚いたことに、

「……………?! 遊児! 一体どうしたんだ?!」

「久城君!」

遊児が絶望の騎士……セイにお姫様だっこされていた。意識がないのか目を閉じてぐったりしている。

『安心して。少し怪我をしているけど眠っているだけよ。……今はそれより友人のことを心配するべきね』

そうだった。遊児も心配だけど今は隼人の事だ。急がないと間に合わないけどこの足じゃ……そうだ!

「なあ! 隼人をその船に乗せて運べないか?」

『出来なくはないわね。……でも、運ぶ役を取っては恨まれそうなのでお断りよ』

その言葉と共に、今度は隼人のデッキから光を放って何か現れる。今度はなん……つて!? 『デス・コアラ』!?

一瞬隼人と見間違えるくらいに雰囲気似ている隼人のデッキの十八番デス・コアラ。それが突然現れたかと思うと、隼人を持ち上げて背中に背負う。隼人自身も目をパチクリさせている。

『私と同じくこの世界に満ちる力だけで無理やり実体化なんて。どうやら彼も、自分の

持ち主のために出来ることをしたいよね。……さあ。行くわよ!』

「お……おうっ!」

まだよく分からないけど、つまりはこれなら間に合うかもってことだ! 俺と翔も、明日香と大徳寺先生も、遊児を抱きかかえたセイと隼人を背負ったデス・コアラも。……あの漁船は結局よく分からないけど、あとはもう全速力で走るのみ。

後ろなんか振り向かず、ただただ走れ。走れ! 走れっ!

そして何とか皆で門に到着すると同時に、地面から光の柱が伸びていく。これは……ここに来た時と同じ!? そしてその光に皆が包まれていくのと同時に、俺は意識を失った。

クリクリ。クリクリ。クリクリ。

「うっ……うん。……皆っ!」

半透明のハネクリボーに起こされて、気が付くと俺は門にもたれかかっていた。近くには皆も同じくもたれたり倒れこんだりしている。今度は遊児もちゃんといるな!

そして俺の近くにはハネクリボーのカードが。隼人の前にはデス・コアラのカードが落ちている。

「……………全部夢だったのかな？ ……これはっ!？」

長い夢でも見ていたんだらうか？ 一瞬そう思ったが、首から提げている墓守のおっさんから貰ったペンダントを見てそうじゃないってのはつきり分かった。

「あれは……………夢じゃなかったんだ！ 闇のデュエルは……………精霊達の世界は、本当にあったんだぜっ！」

クリクリ〜！

ハネクリボーが、パチリとウインクして笑った気がした。

課外授業の後始末 その一



「……もう良いわよ久城君」

「はい。……どうですか鮎川先生？」

ここは学園の医務室。俺は身体を起こして目の前の先生、オベリスクブルー女子寮の寮長にして保健科目担当の鮎川先生に向き直った。

俺が目を覚ました時、既に事件は大体終わっていた。

俺達は元の世界の遺跡の入り口で眠っていたようで、知らない間に戻っていたというのはどうにも落ち着かない。デーもセイさんも起こしてくれば良いのに。

だがそこで俺が眠っている間の細かい話を聞く前に、まずは早く学園に戻るべきだという話になった。

よく見たら隼人は足を痛めているみたいだったし、俺も頭を思いつきり殴られて瘤になっっている。というかかなりズキズキする。やはりあの時はアドレナリンがドバドバ

出ていたから痛みを感じなかっただけらしい。

早く診てもらった方が良いということで、俺達は歩けない隼人を代わる代わる支えながらなんとか学園に戻った。そうして医務室で先生に診てもらった所、なんと俺は全治二日の割と酷い怪我だと判明した。おのれあの墓守の長槍兵め。そんなに強く殴ったのか。

ちなみに隼人は意外に軽傷で、湿布を貼って松葉杖を借りるだけで即日帰宅可能だった。……この差は酷くないか。

そうして即座に医務室のベッドに放り込まれたのが昨日の事。検査を受けて一日医務室に泊まり、今は鮎川先生に途中経過を診てもらっている所だ。自分としてはもうすっかり良くなったと思うんだが。

「脳出血の症状は見られないし、手足などのシビレも見られない。意識もはっきりしているし……これなら明日には自分の寮に戻るわよ」

「おお！ ありがとうございませう鮎川先生！」

たった一日医務室で過ごしたただだが、やはり自分の部屋が一番だ。明日には戻れると聞いて嬉しさがこみ上げてくる。

「だけど一応怪我の場所が場所だから、大事を取って今日一日はまだ安静にしていること。なんなら診断書を書くから明日一日安静にしても良いのよ」

「流石にそれは大げさですつて。ただ先生の言う通り、今日一日は休ませてもらいます」
「よろしい。……元気なのは良いことだけど、だからと言ってもう遺跡の一部によじ登って足を踏み外して落ちるなんてことは無いようにね」

「ははは……肝に銘じます」

鮎川先生がフツツと大人っぽく笑みを浮かべ、俺はそれに苦笑して返す。

ちなみにこの足を踏み外した云々は当然嘘だ。精霊の世界で墓守に殴られましたなんて言っても、信じてもらえないとは思えないし証明も難しい。なら代わりのカバーストーリーで誤魔化すしかない。

……まあ鮎川先生なら傷の具合で殴られた傷と転落してぶつけた傷を判別できるのかもしれないが、幸いそれ以上の追求はしてこなかった。少しホツとする。

「じゃあ私は授業の時間だからそろそろ行かなきゃ。くれぐれも安静にね」

「分かりました！」

鮎川先生はそう言うのと、軽く微笑みながら医務室を出ていった。主が居なくなつたことで、医務室を静寂が支配する……ということとは特にない。何故なら、

「……………ふう。もう良いぞ」

『やれやれ。仕事熱心なのも困つたものだねあの先生も。おかげで中々話も出来やしな

い』

カタカタ。

『まあ実体化しない限り素養の無い者には我々の声は聞こえないのだから、普通に話しても良いのだがね。これが管理人の意向とあらばある程度は従おう』

俺の言葉と同時にデーがふっと出現する。そしてそれに続いて罪善さんと葬儀さんも。……いや、それ以外にも幻想体は居るのだけどちよつと問題がある。何故なら、ギユ。

「……………あの、いつまで俺はしがみ付かれ続けるんでしょうか？ そろそろ腕がきついでしょ」

『ダメなの。遊児お兄ちゃんがまた居なくならないように捕まえておかないと』

俺は現在進行形で、両腕をそれぞれレティシアとテディにがっしりホルドされているのだ。実を言うと、さつき鮎川先生に診てもらっている時から既に引っ付かれています。

『そこは我慢したまえ管理人。今無理やり引き剥がせば管理人の命に関わるぞ』
「分かってるよ」

葬儀さんの言葉に俺も苦い顔で返す。どうしてこうなったかと言えば単純明快だ。

俺が異世界に行っていた間、デーの言う不具合によってカードから幻想体を呼び出すことが出来なくなった。それは幻想体側から見ると、急に俺との繋がりが限りなく弱

「笑い事じゃないっての。……ところで、そろそろ話しても良いんじゃないか？ セイさんのこと」

『……そうだね。少しは他の幻想体達も落ち着いてきたようだし、話しても良いかもしれないね』

さつき、この世界に戻った直後幻想体達が一斉に出てきたと言ったが、何故かセイさんは姿を現さなかった。それどころかカードに念じても出てこない。

その時点でデイーに聞いたただすことも出来たが、怪我の事もあるし他の幻想体達の手もあるしで後回しになっていたのだ。

俺が真面目なトーンで尋ねると、それに合わせてデイーもほんの少しだけ真面目に返した。幻想体達も固唾をのんで見守っている。何せセイさんこと絶望の騎士はランク W A W。今ここに居ない大鳥や審判鳥と同格だ。居ると居ないのでは影響力がまるで違う。

『……これはセイ自身に聞いたかと思うけど、セイと罪善さん、そしてもう一体は他の幻想体と比べてちよつと特殊だね。カードとは別にそのペンダントを依り代にしている。あの世界で出てこれたのはそれが理由さ』

「ああ。それは聞いたよ」

『そしてもう一つ。セイは精霊化していない。なのにあの世界に満ちる力を使って無理やり実体化……ぶつちやけると相当負担が大きいだよ。順序をすつ飛ばしたようなものだからね』

順序か。そう言われるとなんとなく分かる気がする。

「つまり……セイさんは今の俺みたいに休息中つてことで良いのか？」

『まあざっくり言うとなんかそういうことかな。ただ数日やそこらじゃ回復はしないし、それが済んでも精霊化に必要な分の力はまた別に必要だしね』

「そっか。……じゃあそれまでにこっちも体調を万全にしておかないとな」

何せWAWクラスを呼び出すとなると、この前の大鳥みたく他の幻想体数体分のエネルギーが必要になる。おまけに呼び出してもへろへろの状態じゃまた説教をされかねないからな。

『ふむ。珍しいな管理人よ。君がそこまで一体の幻想体にこだわるとは。私は面識がないが、何か気になることでもあったのかね？』

『私もその人に会ったことないけど、遊児お兄ちゃんがその人にとつても会いたがつてるのは分かるよ』

「……そうだね。気になると言えば気になるかな」

葬儀さんが人で言ったらあごの辺りに手を当てて、何か考えるように俺に聞いてくる。俺にくつついたままのレティシアもだ。テディも何も言っていないけど、そのボタンの瞳をじつとこちらに向けてくる。

実際セイさんとはそんなに一緒に居たわけじゃない。だけど、

「まだハッキリと礼も言えてなかったからね。それに言われたんだ。私のカードの持ち主だというのなら、せめて守りたいと思わせる人であれって。……言われっぱなしじゃないか悔しいじゃないか」

実際あの世界で俺のやったことと言ったら、セイさんと罪善さんに守られながら後ろを着いて行って、途中で疲れて眠ってしまっただけだ。これじゃあいくら何でも守りたいとは思わせられない。

だからせめて、次会う時はもうちよつとマシな男になっていないとな。あの厳しくも誰かを守ろうと奮戦する騎士に似合うような。

俺はそう言ってまたベッドに横たわった。まあ授業が終わったらまた十代辺りが見舞いに来るだろうしな。それまでもう少し眠っておくか。

『そうだ！ 久城君。君にセイからの伝言を伝え忘れていたよ』

「伝言？」

『……身体に気を付けて。私を主なき騎士にさせないように……だつてさ！』
……なんだかんだ優しいんだから。それも含めて礼を言わないとな。

課外授業の後始末 その二

放課後。

「お〜つす！ 元気が遊児！ ……おわっ?!」

「ダメだよアニキ医務室で大きな声出しちゃ!!」 久城君。お見舞いに来たよー」

「ドローパン買って来たんだな！」

俺が医務室のベッドで明日に備えて予習をしていると、ガラリと扉を開けて十代達三人が入ってきた。幸い今は鮎川先生は出ているから良いけど、十代はもう少しそういうとこを勉強した方が良いかもな。

まあ十代が驚いたのは、半透明で今も俺の腕にしがみついているレティシアとテディを見たからということもあるのだから仕方ないのだが。

「おう！ ありがとうな皆。だけど昨日も来てくれたばかりだろうに、わざわざまた来てくれるなんてな。どうせ明日には俺も寮に戻れるんだから別に良いのに」
「へへっ！ 寮に戻る前に寄るくらいなら手間にもならないぜ」

十代は鼻を擦りながらそう返した。いやお前はそうかもだけどさ。隼人なんかまだ

松葉杖を使つてゐるじゃないか。俺の視線に気づくと、隼人はそのまま軽く松葉杖を持ち上げてみせる。

「これなら心配要らないんだな！ もうすつかり良くなつたから、松葉杖を返しに來たつていふのも理由なんだな！」

「そうそう。だから別に気にしなくて良いんだよ久城君」

お前達……まったく。こういう時こそ優しさが身に沁みるなあ。皆して良い奴ばつかなんだから。こいつらとていひ明日香とていひ。

「まあ立ちっぱなしもなんだからそこに座つてくれよ。……そうだ！ これ食うか？ ついさつきまで明日香が見舞いに来てくれていたんだ。これはその土産」

「ありがとな！ じゃあ俺このリングもくらいつ！ だけど珍しいな遊児。お前いつも明日香の事天上院つて呼んでなかつたか？」

ああそのことか。十代がかごに入つた果物の詰め合わせからリングを取りながら不思議そうに聞いてくる。別になんてことは無い。さつきまで見舞いに来てくれた明日香に「名前を呼ぶときは明日香で良いわよ。天上院さんつて言うのも今更堅苦しいでしょうし」と言われたから呼び方を改めただけだ。

元々心の中では普通に明日香と呼んでいたし、それに合わせるだけなら簡単だ。……万丈目の方は未だにさんと付け忘れるのもう向こうも半分諦めつつあるけどな。

そう説明すると、

「そっか。もうちよつと早く来ればよかつたな。……どうせなら明日香も一緒に皆でもう一度この前の事を話しておこうと思つただけだ」

十代は軽く首を横に振りながらそう言う。この前の事という言葉に他の二人も僅かに反応する。

「あの事か……ねえ。本当にあれつて夢じゃなかつたんだよね。僕今でも信じられないんだよ」

「昨日も散々話したじゃないか。夢なんかじゃないさ。俺達は間違ひなくあの時精霊達の世界に居た。……これが証拠だ」

翔のどこか不安そうな言葉に、十代は首から提げたペンダントを見せる。

そう。昨日も見舞いに来てくれた十代、翔、隼人、明日香の異世界に行つた面子でこの前の事、異世界での出来事を互いに話し合つた。

何せ十代、俺、そして他の皆の三手に分かれて跳ばされていたみたいだからな。互いになんかどうだった状況だったかをすり合わせる必要があつたわけだ。まさか俺が寝ている間に、闇のデュエルやら墓守達からの撤退戦があつたなんて初めて聞いた時は驚いた。

ちなみに大徳寺先生は欠席。引率している中生徒が二人も怪我（俺に至つては医務室に泊まる必要があるレベル）したので、上の方にみっちり注意などをされていたらしい。

……注意だけで済んで良かったというべきかもな。減俸も十分あり得た。

しかし話し合った後の今でも翔はまだ受け入れ切れていないようだ。まあ無理もないけどな。

「俺は眠っていたから分からないけど、実際にその世界の物がここに有るんだからある程度は認めても良いんじゃないか？ ……俺や隼人も怪我を夢つてことでなくしたいけどな」

「あつ!? ……ごめん。隼人君も久城君も」

「俺は気にしてないんだなあ。それに、あの世界だからこそデス・コアラが力を貸してくれたんだと思うと……ちよつと嬉しいんだな」

翔が謝ってくるが、隼人は本当に気にしていないようだし、俺も気に障ったということもないので軽く手を振っただけで返す。

しかし話だけは聞いていたが、まさか隼人のデス・コアラが実体化してくるとはな。これやっぱ隼人もそういうった方面の素養があるんじゃないか？

「そういうえば遊兎。遊兎が寝ている間も凄かったぜ！ どこからともなくやってきた漁船が墓守達をぶつ飛ばしたかと思ったら、そこから絶望の騎士が眠っているお前をお姫様抱っこして降りてきた時はもう啞然としたぜ！」

漁船云々は何となく察しが付くから良いとしよう。俺があそこで急に眠くなったの

もそれ関連だなと今考えれば分かる。……でもセイさんなんで俺をお姫様抱っこ？
普通逆じゃね？ かなり恥ずかしいんですけどっ!?

「……よお。大分賑やかだな」

「おお！ お前も来たのか万丈目！」

「さんだ」

十代達と話し込んでいると、途中から万丈目もお見舞いに来てくれた。万丈目もレティシアとテディを見て一瞬驚いた顔だったが、そこは流石の俺の推し。すぐに気を取り直して何事もなかったかのように平静を装う。

「……って何で俺がここに居るって知ってるんだ？」

「こいつらがレッド寮の食堂で話しているのを偶々な。……水臭いぞ久城。俺にフアンを労る度量がないとでも思ったか」

「ごめん。どうせ明日には復帰するし、一日や二日ぐらいなら敢えて言うこともないかなあつてな」

俺がそう言うと、万丈目はどこか呆れた様子で見舞いの品だろう包装された箱を差し出してきた。許可を取って早速開けてみると、中にはちよつとお高そうなクツキーの小

袋が入っていた。

「次に茂木の所に行く時の手土産のつもりだったがお前にやる。それを食って早く怪我を治……っってお前らっ!？」

「いやあ悪いな万丈目！ このクッキーめっちゃうんめえくっ！」

「ホントホント。とつても美味しいよ万丈目君！」

「このサクサク感が絶妙でたまらないんだな！」

まだ話してる最中だつてのに、十代達ときたらさっさとクッキーを食べ始めているじゃないか!？ おいこらお前ら！ それ一応俺への見舞いなんだぞ！

「つたくこいつらときたら……すまないな万丈目。クッキーありがたく頂くよ！ けど

茂木にも悪いな」

「心配するな。茂木用にはまた別の物を見繕うとする。えくいどけどけ。俺様の場所を空けろ！」

万丈目はそう言いながら、強引に自分が座る場所を確保する。半透明だけど幻想体達も居るから割とキツキツだ。

「……それで？ 一体何があつてそんな怪我をした？」

「あゝ。それね。この怪我はちよつとピクニックで遺跡に行つて高い所から落ちて」

「嘘だな」

バツサリだった。万丈目は俺の目を見据えながら続ける。

「お前ともあろうものが、ただ遺跡から転落して頭をぶつけるようなヘマをするとは思えん。その馬鹿共なら話は別だがな」

「お〜い。それはないぜ万丈目……サンダー」

「そうっすよ！ 酷い言われようっす！」

「あんまりなんだな！」

「うるさい馬鹿共！ 食べかすをこぼすんじゃない」

万丈目の一喝に、十代達は顔を見合わせてす〜す〜引き下がる。……まあ今のクツキーをモグモグやっている状態では説得力のかけらもないけどな。あと万丈目もここ医務室だからね!? 今は良いけど基本静かにな。

しかしどうしたもののか。やたら俺への信頼度が高いのはさておくとして、精霊の世界に行ってきたなんて普通に話して信じる訳が……いや待てよ!? 万丈目は精霊関係の事を知っているから、意外に信じてくれるかもしれないな。

俺は十代達の方に目配せする。信じてもらえるかは別として、一応話して良いか同意を求めたのだ。俺の考えていることが伝わったのか、十代達は軽く頷く。……よし。なら話すとするか。

「実を言うと……笑わないでくれよ。俺達は遺跡から精霊の世界に行ってきたんだ」

そうして俺は万丈目に、課外授業であったことを話し始めたのだ。その結果、
「……ということがあったんだ」

「ちなみにこれがそこで貰った奴な！」

「……なるほど。災難だったな」

普通に信じてくれました。十代が見せびらかすように掲げるペンダントはチラツと見るだけに留まる。あまりにもあつさりだからちよつと拍子抜けするくらいだ。

「疑わないのか？ 普通こんなこと言われたら悪ふざけかなんかだと思うんじゃないか？」

「普通の奴が同じことを言ったら確かにそう思うが、少なくともお前とその馬鹿は普通ではないしな。ただ不注意で転落したよりはまだ信憑性がある。それに」

『アニキ〜！ おいら、あのペンダントから妙な力を感じるのよ〜ん』

突如おジャマ・イエローが半透明の姿で現れ、万丈目の肩に乗って十代のペンダントを指差す。

「この通りだ。この雑魚が授業の間もそのペンダントに反応してな。それも絡んでいるのであれば猶のことだ」

「そつか。そういうことなら納得だ！ そう思うだろ遊児」

「……まあな」

なんか俺の事をどう思っているのか小一時間ほど問い詰めたいワードが出てきたけど、万丈目はどうやら信じてくれるみたいだ。

精霊が見えない翔と隼人はよく分からないと言った顔をしていたが、まあ万丈目が普通に信じた時点で改めて何か特に言うこともなかった。

「貴方達！ もう日が暮れるし、明日も授業があるんだからそろそろお帰りなさい」

「あっ!? やべっ!? そろそろ帰るわ遊児」

「ああ」

話し込んでいるといつの間にか時間は経つもので、戻ってきた鮎川先生に言われて窓の外を見ればもう薄暗い。これ以上暗くなつては帰りに差し障ることもあって、十代達と万丈目は慌てて帰り支度を始める。

「じゃっ！ また明日授業でな！ 待ってるぜ！」

「ちゃんと居眠りしないで起きて待つてろよ十代。翔も隼人も時折は横から注意してやつてくれよ。こいつ佐藤先生に睨まれてるから。……それと万丈目。クツキーありがとうな。大事に食べさせてもらうよ」

「ふん。そんな大層な物でもない。さっさと食べてさっさとまた授業に來い。……待つ

てるぞ」

「お大事になんだな！」

「じゃあね！」

□々にそう言いながら去っていく皆。……ふう。嵐みたいなやつらだった。

「ふふっ！ 慕われてるわね。あんなに友達が来てくれて」

「まったく。俺にはもつたいたくないくらい奴らですよ」

鮎川先生がそれを見てクスツと笑い、俺もしみじみそう思った。

それからしばらく見舞いに来る人もなく、怪我をして運ばれてくる人も居ないという静かな時間だった。聞こえてくるのは鮎川先生が書類を纏める音と、俺が予習でペンを走らせる音ぐらい。

途中夕食（病院食のようなもの）を頂き、軽く鮎川先生と談笑し、その間幻想体達もそんなに話しかけてくることもなく時間だけが過ぎていく。……そして、

「……ふう。そろそろ時間ね。私は自室に戻らせてもらうけど、久城君はどうする？ 明日の朝の授業から出れそうなら明日私の出勤と入れ替わりに入る？」

「はい。この調子なら直接ここから授業に向かえそうです。ペンやノートなんかここに有りますし。お世話になりました」

俺が頭を下げると、鮎川先生は大したことはしていないと笑って手を振る。

「それにお礼なら明日私と入れ替わりに授業へ向かう時に。生徒が元気になってここを出ていくのを見るのが私にとってのお礼なのよね！」

「そうでしたか。では、明日思いつきり元気になってここを出る姿をお見せしますとも」
「それは楽しみね。それじゃあ私は行きますから、今日はゆっくり休むと良いわ。お大事にね」

そうして鮎川先生は席を立ち、医務室の扉を開けて出ていこうとし、

「にやにやつ!? すみません鮎川先生。まだ面会は可能ですかにや?」

本日最後の見舞客がやってきた。

課外授業の後始末　その三

「やあやあこんな時間になってすまないにや久城君！　傷はもう大丈夫かにや？　昨日は鮫島校長にみっちり注意……ゴホンゴホン。いや、重要な会議があつてにや。結局一日遅れの見舞いになってしまったのにや！」

本来ならもう鍵を閉めてしまう頃合いだが、後で自分が鍵を戻しておくということで鮎川先生も了承して帰つたようだ。

チャリチャリと鍵の音を鳴らし、ナハハと軽薄な笑いを浮かべながら椅子に座り込む大徳寺先生。

「いえいえ。見舞いに来てくれただけでも嬉しいものですよ。ただ来るならもう少し早いが色々と良かったですけどね」

「それはホントにすまないのにや。……実は今日ここに来たのは、君にどうしても言わなきゃいけないことがあるからなのにな」

「それは奇遇ですね。……こちらでも丁度話がしたいと思つていた所です」

そこで大徳寺先生は普段のおちゃらけた態度から一変し、どことなく真面目な雰囲気

を醸し出す。そして俺もまた、この人に尋ねなくてはならないことがあった。

「……久城遊児君。この度は本当に申し訳なかったにや」

先に切り出したのは大徳寺先生の方だった。大徳寺先生は敢えて俺をフルネームで呼ぶと、そのまま深々と頭を下げる。

「今回の一件、こんなことになってしまったのは僕のせいなのにや。僕が遺跡へのピックアップなんて企画したばかりにこんなことに。君や隼人君に怪我をさせてしまつて……いや、それ以外の生徒全員に対して、本当にすまなかつたにや」

「……頭を上げてください」

大徳寺先生は少しだけ頭を上げてこちらの方を見る。……今の言葉、多分だけど本当だと感じた。本気で申し訳ないと思つているみたいだし、俺達全員への責任もおそらく感じている。

だからこそ、俺にはこの人が良く分からない。俺の予想が正しければこの人は……。

確かめなきやいけない。俺の予想が外れていることを。そして外れていると分かつたら、俺も誠心誠意謝ろう。

「俺はもうそのことは気にしていませんよ。この通り頭にガツンとやられたけど、明日

には授業に復帰できそうです」

「それを聞いて安心したにや」

俺が優しく笑いかけると、明らかにホツとした様子を見せる大徳寺先生。そこへ、「そうだ！ 大徳寺先生。そこに万丈目が持つてきてくれた土産があるんですが、お一ついかがですか？」

「えっ!? いやあ悪いにやそんな。……でもせつかく勧めてくれたものを断るのを悪いし、頂くとしましようかにや！」

俺が机の上に置いた箱を手で指すと、しよげていた顔を一気に明るくして大徳寺先生はいそいそとその箱を手を取った。実に現金な話だ。そして、「さくて中身は何か……うにやっ!？」

大徳寺先生は中身を見て箱を取り落としながらひっくり返る。

「どうしました大徳寺先生?」

「いやだつて骸骨っ!?! 骸骨の顔がぬう〜つて………っ!？」

あわあわと慌てていた大徳寺先生は、そこで何かに気づいたようにハツとした様子で口元に手を当てる。それはそうだろう。箱の底から罪善さんが急に出てきた様子を見たら大抵の人は驚く。だけど、

「そう。骸骨。俺のカードの『たった一つの罪と何百もの善』。通称罪善さんです。カー

ドの精霊って奴ですよ。ですが問題はそこじゃない。大徳寺先生」

俺は軽く息を吐き、しっかりと相手の目を見据えて肝心要の事を聞く。

「貴方は……罪善さんが見えているんですよね？ 実体化もしていない精霊の罪善さんが」

おかしいと思ったのは、以前大鳥が初めて精霊化した時のことだ。

あの時大鳥は精霊化し、扉をすり抜けて外に出ていった。あの時丁度の先に大徳寺先生が居て、驚いて尻餅をついたのを覚えている。そしてこう言ったのだ。『アイタタタ何なのにな今の黒くてでつかいののは？』と。

何かが出て行つたまでなら風圧か何かで感じ取ることもあり得た。だが大徳寺先生ははつきりと色やサイズまで口に出していた。これは朧氣にでも見えていなくては出てこない言葉だ。

そして見えていると考えれば色々腑に落ちることもあった。以前のダーク・ネクロフィアとの一戦。あれは元々俺ではなくこの大徳寺先生がやるはずだったのでないかという仮説。それがまさしく現実味を帯びていく。

それにあの時、大徳寺先生は精霊の研究をしているという話もあったしな。その過程で精霊を見る力に目覚めたのか、あるいは最初から見えていたから研究するようになったのか。

それを確かめるべく、大徳寺先生に会った時のために予め罪善さんに頼んでおいた。俺が何かを見せたり渡そうとした際に、それと重なるように精霊状態で姿を見せるようにと。

もし大徳寺先生に見る力がないのなら、普通に罪善さんに気づかず箱の中のクッキーを手にとっていただろう。だけど結果はこれだ。

「……と言っても、精霊が見えるかどうかは正直話のとっかかり程度に考えていただけで、それを隠していたことについては特に思うことは無いんです。俺が知りたいのはまた別の事なんです」

「別の事ですかにや?」

「はい。……俺が聞きたいのは、大徳寺先生は何をしようとしているのかってことなんですよ」

そう。俺がはつきりさせたいのはこれなのだ。大徳寺先生には不審な行動が多すぎる。

例えば今回の一件。事前に翔から大徳寺先生の部屋で聞いた誰かとの会話。普通な

ら空耳とか勘違いで済ませる所だが、ここがアニメ版の世界であるのならそういう言葉は非常に高い確率で当たる。つまり大徳寺先生は、今回の事件を程度はどうあれ予想していたことになる。

もちろんこれだけではなく、俺が初めて特待生寮に行った時のことも気になっていた。

あの時十代達があそこに行くことになったのは、大徳寺先生が怪談話としてその話をしたから。つまりはあそこへ行くよう誘導したと言えなくもない。そしてその結果がタイタンとかいう自称闇のデュエリストとのデュエル。そして後半本当の闇のデュエルになったあの一戦だ。

さらに言えば、その後十代達が帰ってからの学園側の対応もおかしかった。ことが起きてから一日も経たずに事件の発覚。これはもう偶然誰かが目にしたというよりは、特待生寮自体が監視されていたか、あるいは行くだろうと予想していた誰かのタレコミがあつたと考える方が自然だ。

あの時十代と翔だけタレコミがあつたのは今でもよく分からないが、考えれば考えるほど大徳寺先生への疑念が膨らんでいく。

そして、俺がこれまでの事を一つ一つ話していく間、大徳寺先生は何も言わずにただ聞いていた。

「……以上です。これが全て俺の勘違いか何かなら、怒ってくださっても笑い飛ばしてくださっても構いません。ですがもし……もしもそうでないのなら、俺はもう一度お聞きします。大徳寺先生。貴方は一体何をしようとしているんですか？」

その言葉と共に、医務室を静寂が支配した。……この静寂が答えだというんじゃないだろうな？ それではあんまり大徳寺先生！ 頼むから疑われて心外だと怒るとか、何を馬鹿なことをと笑い飛ばしてほしい。

これじゃあまるで、俺の疑念が合っているみたいじゃないか！ それは違うと反論してほしい。

……それからしばらくして、不意に大徳寺先生はゆっくりと顔を上げ、

「久城君。僕は………ぐうっ!」

何か答えようとした時、急に大徳寺先生はうめき声と共にその場に崩れ落ちた。見ると右手を押さえながら、尋常じやない汗を流している。

「先生っ!?! どうしたんですか先生っ!?!」

「………ううっ! こ、こんな時に」

その声は明らかに弱々しく、どう考えてもただ事じゃない。だが幸いここは医務室。あとは鮎川先生を呼び戻せば診てもらえる！ 携帯用タブレットから鮎川先生へ緊急連絡用のボタンを押そうとして、

「や……やめるにや」

「そんなことを言っている場合ですかっ！ 早く鮎川先生を……っ!?」

俺を引き留める大徳寺先生の手。それを振り払おうとして見た時、俺は息が止まるかと思うほど驚いた。

大徳寺先生の手はカラカラに乾き……いや、そんな生易しいものじゃない。もはや崩壊しかけていた。まるで乾燥しきった枯れ木が粉々に崩れていくかのように。

「その手は……」

「はあ……はあ。だ、大丈夫にや。すぐに……収まるから」

大徳寺先生は弱々しい笑みを浮かべながら、服の内ポケットから何かを取り出す。それは一冊の本のようだった。表紙には古代エジプトでよく見られるウジャド眼が埋め込まれていて、見るからに普通の本とは違う何かだと思わせる風格がある。

「なっ!?」

その本を開きながら先生が右手に翳すと、何かの文様のようなものが手に浮かび上がり、みるみるうちにその手は生氣を取り戻していく。まるで映像の逆再生でもしているかのように。

そして一分もしない内に、先ほどまで今にも崩れ落ちそうだった大徳寺先生の手はいつも通りの手に戻っていた。

「……大徳寺先生。貴方は」

「ふふつ。見られてしまつては……もう流石に言い逃れは出来そうにないにや」

そう言う大徳寺先生の顔は、どこか諦めたような、あるいは何か決心をしたような顔だった。

「本当はもう見舞いの時間も終了なのだけど、もう少しだけ付き合ってくれるかにや？
教師でありながら、生徒を巻き込んでまでことを成そうとした恥ずべき僕の……いや、私の告解を」

「……聞かせてください。最初からそのつもりです」

ああ。もう少しこの長い夜は続きそうだ。

氣遣つてくれる者達

「……………はあ」

「おいおいどうした遊児？　せつかく医務室から戻ってこれたつてのにそんなでうつかいため息を吐いて」

「知らず知らずのうちにため息が漏れていたらしく、俺の事を十代が不思議そうに見つめていた。」

「まさか久城君っ!?　まだ怪我が治り切ってないんじやっ!？」

「それだったら無理せず言つた方が良いんだな!」

「大丈夫!　大丈夫だつて!　それにあんまり騒いでいると」

「翔と隼人も心配そうに口々に言つてきて、少し温かい気持ちになるのだが授業中にそれはマズい。何故なら、

「…………ゴホン。その仲良しさん達。友達の怪我の心配をするのは良いけど、授業の方もちゃくんと聞いてほしいのによ!」

「ほら見ろ怒られた!　教壇の上から目ざとくこちらを注意する大徳寺先生は、知らなければ間違いなく普通の、普段はおチャラけているけど締める時は締める只の教師であ

ると思つていただろう。

いや、今でもまだどこか信じられない。

まさかあの大徳寺先生が人間ではないだなんて。

昨日の夜、医務室で大徳寺先生から聞かされたのは驚愕の事実だった。

全てを思い返すと時間がかかりすぎるので要点だけ挙げるなら、大徳寺先生はどうかから本物の錬金術師だったらしい。

科学に通ずるところもあるが、現代社会においては異質異端である錬金術。古くは金属を黄金に変えたり、不老不死に通ずる賢者の石を造ろうとしたりなどで創作物でもよく登場する。

しかし大徳寺先生は、それを正しく学問として長年研究していたという。スポンサーの下で不老不死、そしてそれを可能にする賢者の石を研究。世界各地を周り、時には原作でお馴染みのエジプトの王墓の調査隊に同行し、その傍らデュエルの精霊についても研究していた。

結果として、大徳寺先生は本当に科学とは別系統の何かを会得することに成功した。それこそ素養がなくとも精霊を見たり、あるいは闇のデュエルに対抗できるほどのもの

を。

だが、その代償は大きかった。長旅の影響か、それとも各地の精霊か何かの影響を受けすぎたためか、大徳寺先生の身体は見た目はともかくとして中身はもうボロボロだった。それこそ現代の医学でも治しきれないほどに。

そこで大徳寺先生は最終手段として自らの研究の成果、つまりは錬金術によつて造つた人造人間ホムンクルスに自身の魂を移植するという方法を取った。

結果、ホムンクルスについての倫理観云々はひとまず置いておくとして実験は成功し、大徳寺先生は一命を取り留めた。だが、それには重大な欠陥があった。

『いくら自分に似せて造つても所詮は紛い物。一時的には馴染んだとしても、少しずつ先ほどのように拒絶反応が出てきてしまう。……おそらくもう私は長くないのだろうね』

今はまだ旅路の中で手に入れた錬金術の秘伝書たるエメラルド・タブレットの力で拒絶反応を抑え込んでいるが、それもいずれは効かなくなるだろう。

新たにホムンクルスを造つたとしても、魂そのものの摩耗は防げないし次はもう無理。

人の身で踏み込んではいけない所に踏み込み過ぎた結果なのかもしれないと、そう言っていた大徳寺先生の表情は、俺にはどこか自嘲しているようにも見えた。

以上が昨日見た大徳寺先生の手が崩れかける場面の真相だ。

こんなことが定期的に起きていたというのに、それをずっと隠し通していた大徳寺先生の胆の太さには驚かされた。

そして、肝心要の俺や十代達を色々なことに巻き込んだ理由についてだが、

『これ以上は聞かない方がよい。……今話したことは、あくまで見られてしまったことへの説明と怪我をさせてしまったことの謝罪と受け取ってほしい。世界には知らない方がよいこともある』

と誤魔化されてしまった。さらに俺が尋ねようとした時、

『本当に君はそれを知りたいと思っているのか？ 知ればより一層深い闇を見ることになるとしても？』

『そ……それは』

『私は知っているよ久城君。君は優しく、友達思いでそれなりに協調性もある。だけど自分から事件に首を突っ込むことは無い。これまで君が動いたのは、いつだって我が身へ降りかかる火の粉を払う時だ』

……流石に先生はよく見ていた。先生の言う通り、俺は自分から危険や揉め事に立ち

向かうほど熱血漢でも勇気があるわけでもない。むしろ避けれる危険は避ける主義だ。

例えばネク……ダーク・ネクロフィアと戦った時だつて、俺以外の奴が皆倒れていたから戦つたまでだ。あそこで十代が仮に起きていたら丸投げしていたと思う。

特待生寮の時も、最初は行くつもりなんてなかった。あれは罪善さんが飛び出していったからやむなく行つただけだ。

神楽坂の時は……まあ神楽坂の言葉にムカツと来たから俺が戦つたが、それが無かつたら自分から行こうとは思わなかつただろうし。

代表決定戦前日のことだつて……まあ今にして思えばあれも大徳寺先生の差し金だつた可能性があるけど、話し合いで解決できるんならそれで済ませていたと思う。色々あつて徹底抗戦になつちやつたけどな。

そして極めつけに今回の一件。……どれもこれも、俺は基本的に自分の身を守るために動いていた。

『敢えて自分から危険に踏み込むことは無いんだ。一度知つてしまえば知らなかつた頃には戻れない。これから私とは只の教師と生徒として、何もなかつたように過ごせばいい。しかし、もしそれでも尚知りたいというのなら、それだけの覚悟があるというのなら……明日の夜、誰にも言わず一人で特待生寮に来なさい。そこで全てを打ち明けよう』

そう言つて大徳寺先生は医務室を去つていった。

そのことを悶々と一晩中考えていたらいつの間にか眠つていて、気が付けばもう朝。そんな状態で授業に出たら、こうため息の一つも吐きたくなるというものだ。

そうしてせっかく授業に出たのに全然身が入らず、普段とは逆に十代達に気を遣われることになつてしまった。いつもは俺の方が寝ている十代を起こしたりする役なんだからだな。

「……はあ」

どうにか今日の分の授業も終わり、まだ本調子じゃないと十代達に断つて先に帰り、数日ぶりの自室のベッドに倒れ込む。医務室のベッドも悪くはないけど、やはり自室のベッドの方が良い。

そのまま何もする気も起きずに横になつていて、

『今日だけで8回目のため息だね久城君。あんまりため息を吐くと幸せが逃げるよ』

「……数えてたのか。暇だねお前も」

いつものようにどこからともなく現れたデイーに、俺はそつげなく返事をする。……：そういうえば、さつきから幻想体達が誰も出てこないな。いつもなら部屋に入るなり誰か

しらはめを外して出てくるって言うのに。

『やつと気が付いたみたいだね。普段ならとつくに気が付いていたと思うけど、それだけ悩んでいるってことか。……他の幻想体達にはちよつと席を外してもらっている。というより皆が半ば自主的に君に氣を遣つて出るのを自肅していると言つた方が正しいかな』

まいったな。遂には十代達だけじゃなく幻想体の皆にまで氣を遣われるとは。

「……そつか。で？ デイーはどうして出てきたんだ？」

『そりゃあ悩んでいる君をおちよくり……反撃してこないというのは中々に重症だね』

「単にそんな氣分じゃないだけだ」

そのまま少しの間、互いに何も言わずに時間だけが過ぎていく。壁に掛けられた時計の針の音が嫌に大きく響く。そして……先にどちらともなく切り出したのは俺の方だった。

「俺さ、割と薄情な奴だと自分では思ってるんだよ。どこまで行つても自分本位で、昨日の大徳寺先生はそういう所をちゃんと見抜いてた」

『そうだね』

「實際これ以上踏み込むのはどう考えてもヤバそうだし、色々知らんぷりを決め込んで

距離をおいた方が間違いなく安全なんだよな。大徳寺先生からも……十代からも」

そもそも十代達に近づいたのだから、そういったヤバい何かの予兆を早めに掴んで対処するためだ。わざわざ近づきすぎて事件に巻き込まれることもない。さつさと離れればいい。……だというのに、

「本当にまいっちゃったよな。……やつぱり何だかんだあいつらの事を友達だと思つてるみたいで、離れようって選択肢にどうしても行きそうにない」

『そうだね』

「……さつきから同じような相槌ばかりで、真面目に聞けよ！」

『だってさあ。それで悩んでるんじゃないってことは最初から分かり切つてるじゃない！ 僕としては答えの分かり切つた悩みにすらならない悩みなんかよりも、君がずっと本気で悩んでいる方が気になってるんだよ』

おのれ腹立つ。何が腹立つって普通に考えを読まれてるのに腹立つ！ しかも能力とかじゃなく普通に察したつて感じだから余計嫌だ。

『君が本当に悩んでいるのは……大徳寺先生の方だろうか？』

「分かつてんなら言うなよ！ ……なあデー。あの人、原作ではどうなるんだ？」
『教えな〜い。……君なら察しがついているんじゃないかい？』

その言い方はやつぱりか。おそらく大徳寺先生は、本人も言ったようにもう長くな

い。そして昨日の様子から、大徳寺先生は多分それを覚悟した上で何かをやるうとしている。俺や十代達を巻き込んで。

「どう考えてもこつちも放っておくわけにいかないんだよなあ。その結果がどうなるにしても、せめて何をしようとしているのかは知らなきゃならない。……だけど、それが本当に止めなきやいけない何かだったとして、果たして俺に止められるのかって……悩んでしまっていたんだ」

一人の男が命をすり減らしてまでやるうとしている何か。これは流石に想像もできない。それが止めてはいけない何かだった場合、俺はどう向き合えば良いのだろうか？
そうして俺はまた悩みの無限ループに落ちそうになって、

グイッ！

突如口元を無理やり上げられた。見ると、そこには心配そうな目でこちらを見るレティシアの姿があった。

『ごめんなさい。出ちやダメってディーさんに言われてたんだけど、出てきちゃった。……遊児お兄ちゃん。笑って！』

そう言いながら、レティシア自身も優しく微笑む。

『そんな暗い顔をしていたら、その大徳寺先生だつて困っちゃうよ。それに、遊児お兄ちゃんなら大丈夫だよ！ デイーさんも、私も、罪善さんも、葬儀さんも、テディも、ネクちゃんも、他にも幻想体の皆がついているんだもん！』

「……………つぶ！ アツハツハツハ！ 確かにその通りだ」

俺は笑うしかなかった。なるほどなるほど。俺としたことが、一人で悩んでばかりでこんな単純なことを忘れてた。俺には頼りになる仲間達が居るじゃないか！

「一人で悩んでいたって始まらないか。……………ありがとうなレティシア」

『えへへ！ 遊児お兄ちゃんもちよつと笑顔になったの！』

軽く頭を撫でると、レティシアもくすぐったがる様に笑っていた。それを見てデイーが『……………幼女に慰められる男』とポツリと呟いていたので、とりあえずアイアンクローをかましてやった。言うんじゃないよ！ 俺も後になつてちよつと恥ずかしいんだから。

さうして！ 夜までに色々準備しないと。それに詳しくは説明できないけど、十代達に礼を言つてから夜出かけてくるって伝えないといけないしな。じゃあまずは、
「皆俺に気を遣わなくて良いから出てきてくれ！ 作戦会議と行こう！」

その日の夜。

「……やはり君は来てしまったのかにや」

「はー」

俺が約束の時間に特待生寮に着くと、その入り口に大徳寺先生が立っていた。俺を見てどこか諦めたような、あるいは俺を案じるような不思議な表情をしている。

「ここから先はもう後戻り出来ないにや。君は自分からそんな道を選ぼうと言うのかにや?」

「氣遣つてもらつて申し訳ないんですが、俺も色々知らなきゃならないと思ひましてね。

……それに、大徳寺先生の事も心配ですから」

「教師が生徒に心配されちゃあべこべだにや!」

軽いジョークだと思つたのか、大徳寺先生は笑つて流す。普通に心配してるんだけどな。

「……さて。では行くでしょうか」

「はい。中でじっくりお話を伺いましょう」

そこでいつもと口調が変わり、先にすたすたと歩いて寮に入っていく大徳寺先生。さてさて。鬼が出るか蛇が出るか。出来ればどっちも出てほしくないんだけど。

「……頼りにしてるぜ。皆!」

俺はボンつと胸ポケットのデッ仲キ間ケース達に軽く手を当て、大徳寺先生について歩いていった。

接続話 ペストマスクを着けた男

これは、少しだけ未来の話。

◆◆◆◆◆

レッドアイズ・ブラックドラゴン

『真紅眼の黒竜』でワイルドマンを攻撃っ！ 『ダーク・メガ・フレア』！』

「ぐううっ?! ……この痛みはっ?!」

黒竜のプレスでワイルドマンが破壊され、俺のLPが削られると同時に、普段デュエルで受ける衝撃とは別の激痛が俺の胸に襲い掛かる。

「言つたろう? 魂と命を賭けた戦いだ。だから文字通り命を削ってもらおう。これが闇のデュエルだ」

俺とデュエルしている謎の男。セブンスターズの一人、仮面の男ダークネスと名乗るドラゴン使いはそう言った。

事の始まりは今日の昼。授業が終わって昼飯をパクつこうとした俺、そして一緒に授業を受けていた万丈目と明日香、三沢は大徳寺先生に校長室に呼び出された。

校長室には鮫島校長の他に、カイザーやクロノス先生も待っていた。そしてそこで校長から聞かされたのは、俺にはよく分からない話だった。

何でも、この学園の地下には三幻魔とかいう伝説のカードがあつて、それが七精門という七つの柱で封印されている。三幻魔が世に出るととんでもないことになるらしい。

その封印を解こうと、セブンスターズって奴らが学園にデュエルを挑んできたというのが鮫島校長の言葉だ。クロノス先生が言うには要するに道場破りみたいなものらしい。

それでその封印を解くために使われる七つの鍵。それをここに集まった皆で一つずつ守ってほしいという話だった。

面白れえ。やってやるぜ！ どんな強い奴が来るのかワクワクするしな！ 俺は鍵の一つを手に取り、以前異世界で墓守のおっさんから貰ったペンダントと一緒に提げる。

それを皮切りにしてカイザー、万丈目、三沢、明日香、クロノス先生、大徳寺先生が一つずつ鍵を手取る。この七人で守るわけか。

「……………んっ!? そういえば大徳寺先生。遊児には声をかけなかったのか? あいつの実

力は知ってるだろ？」

「そうだな。奴ならそこらの生徒の数倍は頼りになる。直接防衛に回せなくとも、サポート役に回すだけでも大分違うはずだ」

俺の言葉に万丈目も追従する。遊児なら腕は確かだし、時々カツとなる点を除けば物事をいつも冷静に見ている奴だ。ここに呼ばれても良いはずだけど。

そう聞くと、大徳寺先生と何故か鮫島校長も少しだけ顔色を変えた。

「ウオツホン……ああ。それなんだがね。君の言う久城遊児君も候補には入っていたんだよ。だが大徳寺先生がどうしても自分も鍵を守ると聞かなくてね」

「にやにやつ!! ……………コホン。そ、そんなのにや。僕も教師として、可愛い生徒を守るために立ち上がらなければと思つた次第なのにや! ナハハハハ!」

なくんか怪しいんだよな。大徳寺先生つてそんなキヤラだったつけ? だが、俺や他の皆も大なり小なり今回の事に考えることがあつたらしく、それ以上突つ込むことは無かつた。

そしてその夜、寝ている時にハネクリボーに起こされたと思つたら、急に変な光に包まれて、気が付けば俺はこの島の火山の頂上に立っていた。気になって様子を見に来た

らしい明日香も巻き添えに。

そこに現れたのはセブンスターズの一人ダークネスを名乗る男。俺達を呼び出したのは自分だと言い放ち、俺に闇のデュエルを挑んできやがった。

おまけに最悪なのは、

「十代っ！」

「アニキっ！」

「翔君っ!? 隼人君も!?!」

同じ部屋で寝ていたはずの翔と隼人が、光の球に閉じ込められて溶岩の上に浮かんでいるってことだ。

「光の檻に守られてはいるが、あれは時間と共に消滅する。このデュエルが長引けば、彼らはマグマの中だ」

「汚ねえぞっ! あいつらはこの戦いに何の関係もねえっ!」

「生半可なことを言うなよ遊城十代。七精門の鍵を賭けたこの戦い。貴様には全能力を出し切つて戦つてもらう。これはそのために用意した舞台。お互いの魂……いや、命をも賭けて、我々はこのデュエルに挑まねばならん。それが、この私の闇のデュエル」

「このデュエル。翔や隼人のためにも負けられない。絶対につ!」

『レッドアイズ・ダークネスドラゴン
『真紅眼の闇竜』でテンペスターを攻撃！』『ダークネス・ギガ・フレイム』』

「うっ!? うぐうっ……」

だがダークネスは手強かった。主力の真紅眼の黒竜を破壊したと思ったら、今度はさらに厄介な真紅眼の闇竜で猛攻を仕掛けてくる。墓地のドラゴンの数だけ攻撃力の上がる効果を持ち、今やその攻撃力は4500まで膨れ上がっていた。

俺のモンスターは破壊され、そのブレスがソリッドビジョンとは全然違う痛みを俺に浴びせてくる。

「もうやめてっ! このデュエルを中止してっ! ……私の鍵を渡すから、隼人君と翔君、十代を助けて」

「待てよ。明日香。……こんな熱いデュエル。俺から取り上げるなよ。……LPはまだ残ってるぜ。俺のターン! ドローっ!」

明日香が鍵を渡そうとするのを制して、俺は気合を入れてカードを引く。……よし! この手札ならいける。後は、トドメまでどうもっていくか。

「わあっ!?! 助けてアニキっ!」

そこに翔の今までとは違う叫び声が響き渡った。

見ると、下の溶岩が荒れ狂って波を起こし、その一部が翔達の居る光の球に届く。そ

してその衝撃で、光の球の下にデカイ穴が空いた。

「わ、わああっ!?!」

「翔っ!?!」

……急に全てがスローモーションになった気がした。光の球から翔が、信じられないと言った表情でバランスを崩し落ちていくのが見える。隼人はまだ何とか光の球にしがみ付けているが、今は翔の方が先だ!

「うおおおっ!」

俺は一時デュエルを中断し、力の限り駆け寄って落ちていく翔の腕を掴む。だが、

「げげっ!?!」

勢いが付きすぎて踏み止まれず、翔と入れ替わりになる形でくると回転して自分が溶岩に投げ出される。

マズいっ! これじゃ俺が丸焼きになっちまうっ! ハネクリボーが現れて俺に光の膜を張ってくれているが、それでもこの溶岩じゃどれだけ保つか。

俺はこれから来る熱さと痛みに耐えるべくグツと身体に力を入れ……すぐに身体が何かにぶち当たった。

「……痛っ! イタタタッ! 溶岩って割と硬いんだな。それに思ったよりも熱くない

……はあ!?!」

溶岩が凍っていた。

冗談か何かみたいに、さつきまでグツグツと泡立ち煮え立っていた溶岩が、そのままの形で凍り付いていた。

「なっ……何だこれえっ!？」

幻か何かかと思ったが、触つてみるとすげえ冷たい。本物の氷だ。ハネクリボーがやったのかと目で尋ねてみたが、ハネクリボーはぶんぶんと首を横に振る。

その光景に俺以外の皆、翔も隼人も明日香も目を丸くして言葉も出ない。……いや、ダークネスだけは違った。奴はこの凍り付いた溶岩とは別の、火山の岩陰をじつと見据えていた。そして、

「……横槍を入れるとは、何のつもりだバランサー?」

『それはこっちのセリフだダークネス。関係のない奴を巻き込むとはどういう見だつ!』

ダークネスの言葉と同時に岩陰から現れた奴。その一喝を聞いた時、俺の全身に何とも言えない感覚が走って僅かに身を竦ませる。エコーがかかったような不思議な声なのに、何となく初めて聞いた気がしないような。

首から下をすっぽりと覆う黒い外套に、首回りに巻かれた羽毛のファー。そして頭に
乗せているのは外套と同じく真つ黒のつば広帽子。

だが、それよりなにより特徴的なのは、顔に付けられた独特の形の仮面だ。鳥の嘴を
模したようなその仮面は、歴史の授業で見覚えがある。確かペストマスクという奴だっ
たか？

『人質をとって鍵の守り手呼び出すまでは俺も百歩譲って認めよう。手荒ではあるけ
ど十代が仲間を見捨てるはずもないしな。だが』

仮面のせいでもどこを見ているのかよく分からないが、そいつ……バランサーは一瞬だ
けこちらを見たような気がした。しかしすぐにバランサーはダークネスに向き直る。
それも明らかに怒っていると分かる態度で。

『こうしてデュエルが始まった以上、もう人質の意味はないはず。解放してやれ。これ
でもまだごねるっていうのなら……俺も黙っちゃいられない』

そいつは外套の中からデュエルディスクを取り出し片腕に装着すると、そのままデッ
キをセツトする。

『均衡をとる人バランサーの名の通り、人質ひとしの分だけ十代に手を貸させてもらうが……どうするかね
？』

これが俺と、これから始まるセブンスターズとの戦いの中で長く関わっていくことになる謎の男。 balanサーとの出会いだった。

第二章 潜入！ セブンスターズ編 闇に集う者達と一人の代理

『時……ここに満ちた』

暗い洞窟内に、重々しい声が響き渡る。

そこに集うのは六人。年齢も性別もバラバラだが、共通するのはいずれも自身のデュエルの腕に自信を持つ猛者ばかりということ。

そのくせ者達に曲がりなりにも命を下すこの声の主からもまた、ここに居ないとは言え声だけで分かる圧を感じさせる。

『一人足らぬようだが……まあ良からう。お前達の力が我に約束し、運命のカードを運ぶ。先陣を切る者は誰か？』

「私が行こう」

『……ダークネスか』

声に真っ先に応えたのは、黒いコートに同色の仮面を付けた男。片腕に着けたデュエルディスクを掲げ、表情こそ仮面で隠されているものの、その闘志は隠されることなく周囲に広まっていく。

『よかろう。だがその前に……この場に我の知らぬ者が紛れ込んでいるようだな』

いよいよ出立という所で、姿を見せないその声が響くと、洞窟内の一部にパツと光がどこからともなく浴びせられる。

そこに居たのは、ここに集った者達とは別のもう一人の何者か。黒き外套と帽子に、鳥の嘴を模したペストマスクを被った男が少しせりあがった岩場に腰掛けていた。

『何者だ?』

『……これは失礼した。先ほどからここに居たのだが、誰も触れないので一足先に話がいつているものとばかり。……では、自己紹介をさせていただけよう』

男はサツと岩場から降りると、軽く身なりを正して優雅に一礼する。

『俺の名はバランサー。ここに居ないアムナエルの代理として呼ばれた者だ。以後、よろしく願います』



だあああつ!? 何でこんなことになったかなあもうっ!

バランサー……改め俺久城遊児は、内心顔を覆ってそこらを転げまわりたい気持ちでいつばいだった。

目の前に居る奴らが皆してこちらを見つめている。どいつもこいつも明らかに強そ

う……というか濃い面子ばかりだ。コードネームアムナエルこと大徳寺先生の本気モードも大概だったが、こいつらもそれと同じか近いくらいに厄介そうだ。

こんな奴らとこれから顔を突き合わせていかなきゃいけないかと思うと全く気が重い。と言つてもそれもこれも、俺がつい気の迷いでこんなことを引き受けちゃったことが原因なんだけだな

俺は数日前の大徳寺先生との話を思い出していた。

あの時、俺は特待生寮の地下にて大徳寺先生から話を聞いていた。……あの廃寮ときたら以前来た場所以外にも隠し部屋やら隠し通路やらが幾つもあって、大徳寺先生も全てを把握している訳ではないらしい。そこはそんな隠し部屋の一つだった。

そこで大徳寺先生から語られたのは、学園の地下に存在するという三幻魔のカードや、それを狙うセブンスターズという者達の事だった。……まあ先生自身もその一員らしいが。

しかし三幻魔とはまた厄介なものが出てきたもんだ。実際に元の世界でもあったが、あれは専用構築をしないと扱いが難しいものだった。

ただし一度出たらどれもかなりのパワーを誇り、特にその三枚を素材とする融合モン

スター『混沌幻魔アーミタイル』は、攻撃力が自分のターンだけとはいえ1000000まで跳ね上がるという圧倒的ロマン性能で人気があった。

姿も明らかに無印の三幻神を意識していたし、出るとしたら重要な立ち位置だとは思っていたがこんな所で出るとは。おまけに世に出るだけで世界に影響を与えるレベルとか、ほんとに神のカードに近いものになっている。

「つまり、大徳寺先生はその自分を含めたセブンスターズに対抗させるために十代達にあんな真似をしていたと？ それはいくらなんでも」

「……許されるはずのないことだということには分かっている。だが、セブンスターズは私を含めて皆闇のデュエルに精通している。そのために多少危険であっても、早急に十代や君を闇のデュエルに耐えられるように育てる必要があった。それに……問題はセブンスターズだけではない。その裏に控えている者が問題なのだ」

いつものにやも語尾に着けずに真面目な口調で続ける大徳寺先生。それによると、セブンスターズを操っている者の名は影丸。なんとこの学園の理事長だという。

その影丸理事長はもう百歳を超えるほどの高齢で、三幻魔の力を使って疑似不老不死になろうと目論んでいるらしい。だがそれには三幻魔のカードと大量のエネルギー……それも特にデュエリストの闘志が必要になる。

「この度のセブンスターズの件も、影丸理事長からすれば勝とうが負けようがどちらで

も良いのだ。戦ってデュエリストの闘志を集めること自体が目的なのだから」

そもそも三幻魔のカードを封じている七精門とかいう封印は、デュエルで勝たなくても理事長は緊急用の合鍵を持つていて最悪自力でこじ開けられるという。あとは溜まったデュエリストの闘志を、直接デュエルで三幻魔を使用することで注ぎ込めば完全に覚醒する。

つまり三幻魔を守るためには、セブンスターズの迎撃及び理事長を何とかする必要がある。だが、

「……私は、正直迷ってしまったのだ。今でこそ影丸理事長は三幻魔を解き放つという悪行を成そうとしてはいるが、それは結局自らの延命のため。生きたいと願うこと自体は悪ではない。……特に自らの身体を捨てても生き延びようとした私がそれを咎める資格はない。それに、影丸理事長には研究に協力してもらった恩もある」

「だから放つておくつもりですか？」

「いいやつ！……だからこそ、私は高いデュエルの腕と精霊の力を併せ持った者を探していた。理事長を、そして私を止めてくれる者を」

要するに大徳寺先生は、恩義と倫理の板挟みになっていたわけだ。……ということであれば、

「大徳寺先生。……失礼しますっ！」

「何を……あたっ!？」

俺は先に断りを入れて、とりあえず大徳寺先生の頭にチョップを叩き込む。先生に暴力を振るうのはいただけないが、それくらいの事をしたという事で甘んじて受けてほしい。

頭を押さえながら驚いてぼろつとしていいる大徳寺先生に向けて、俺はふんつと鼻を鳴らす。

「ひとまずこれで俺は許します。命云々と言われたら俺も強く言える立場じゃないですから。ですが、事が全て終わったら十代達にも正直に話して謝ってくださいね。……それと」

三幻魔に復活でもされたら世界がヤバイ。そうなったらこの学園で卒業どころの話ではない。十代が居ればおそらく最終的に丸く収まるとは思うが、それにしたって俺がここに居る以上どんなズレが出てもおかしくない。ならば、

「そんな物騒なことは早めに何とかするに限りませんからね。こちらとしても出来る限り協力しますとも。まずは……情報収集からですね」

こうなったらやったろうじゃないの。直接どうにかは無理にしても、ギリギリ安全圏から皆をサポートして三幻魔を何とかしようじゃないか。目指せ! 影の立役者ってか!

……で、色々あつて現在こうなつた。

だつてしようがないだらう!? 大徳寺先生の身体はとつくのとうにボロボロで、本人曰く余命はもう半年保つかどうか。おまけに全力でデュエルをすればさらに寿命が縮むというどつかの元世界チャンプみたいな状態だというのだから性質が悪い。

本人は既に覚悟完了しているみたいだが、俺個人としては長生きしてほしい。一応この学園に来て最初に会つた人だし、なんだかんだ付き合ひのある先生だしな。

そんな大徳寺先生だが、困つたことにセブンスターズとして既にメンバー入りしている。今さら辞めますというのは無理っぽいし、そんなことをすれば怪しまれる。

かと言つて闇のデュエルをする奴らの近くに居たら、それこそデュエルしなくても寿命が縮みかねない。ということと俺が選んだのがこの代理作戦だつた訳だが……いや無理があるだらう! あの時の俺を殴つてでも止めたい。だけどあのまま放つておくのもなあ。

それを知つたディーなんかやけにノリノリで、『良いねえ面白くなつてきた! じゃあこれはほんの差し入れさ。お気に入り役者には応援なり花束なり渡すものだからね』とかなんとか言つて、この服を渡してきたし。

以前カードで見た『ペスト医師』の服装らしく、着けているだけで軽い認識阻害とちよつとした闇への耐性が付くと言うが、イマイチディーのことだから不安なんだよな。

『アムナエルの代理だと? ……奴からはそんな話は聞かされておらぬが』

『あくまで一時的なものですから。アムナエルは体調が思わしくなく、自身の番に備えて養生するとの事。書状もこちらに預かっています』

俺はあくまで事も無げにそう言うと、懐から大徳寺先生の書いた手紙を取り出す。一応素の話し方だと即身元がバレる可能性もあるし、代理として認められるまでは誤魔化したいのでちよつと優雅系の謎多き人物って感じでキャラを作っているが……大丈夫かこれ? 妙な痛い奴だつて思われてないよね?

声……多分理事長は少しの間沈黙する。他のセブンスターズの面々も押し黙ったままだ。どうやらこちらを見定めているらしいな。それから少しして、

『……………ふむ。ならば……ダークネス』

「心得た」

その言葉に、さつき最初に号令に応じた男がずいっと前が出る。あれっ!? この流れ……どうにも嫌な予感がするんだが。

『アムナエルの代理よ。バランスーと言ったな。代理と言うならば、ここでこのダーク

ネスと戦いそれに値する力を見せるが良い。出来ぬというのであればここで闇に？ま
れ、明日から始まる決戦の礎となるが良い』

げくっ!!? ?だろっ!!? 入団テストがあるなんて聞いてないぞ。ダークネスは無言
でデイスクを構えているし、他の奴らも明らかに観戦ムードだ。

いや、ほんとに何でこんなことになっちゃったかなあもうっ!

入団試験 遊兎対ダークネス その一

あれよあれよと言う間に、俺とダークネスのデュエルの準備が整えられていく。

洞窟内のやや広まった場所に移動すると、戦いやすいようにか壁伝いに照明がぼつぼつと灯る。……へえ。この洞窟そんな仕掛けまで有ったのか。

以前墓守達の世界に行くはめになった遺跡の近く。そこにひっそりとあるこの洞窟。最初に大徳寺先生に教わった時はそんな馬鹿なと思ったが、見た目こそただの洞窟だけど色々仕掛けが施されているのは間違いないみたいだ。

デュエルしやすいようにわざわざ他の奴らは場所を空けてくれる始末。皆して俺という新参者の実力を知りたいってか？ ……正直そこまで強くないよ俺。幻想体達が強いだけなんだよ。カードパワー頼りだよ。

しかしもうやるしかない。俺は静かに深呼吸をし、多少なりとも気持ち落ち着けてデュエルディスクを構える。

見たら反対側では対戦相手、ダークネスはとづくに準備万端だ。ディスクを構えたまま悠然と佇んでいる。……怖え。絶対修羅場の一つや二つ潜ってるよあの人……ん？ あれは？

一瞬ダークネスの胸元に、照明の光が反射して何か光った気がしたが……。

『ではこれより、ダークネスとバランスの闇のデュエルを始める。この戦いに異議のある者は在るか?』

おつといけない。今はこつちに集中だ。両者が準備が整ったと見たのか、声だけの影丸理事長が最終確認をとってきた。だが、それに誰も異議を唱えるものは居ない。……この俺以外は。

「異議ありっ! ……一つ物申してもよろしいでしょうか?」

『何だ?』

「デュエル自体は大いに結構。これからそれなりに長い付き合いになる以上、互いの実力を知るためには必要でしょう。……だが闇のデュエルということであれば、俺はこの戦いに応じるつもりは毛頭ありませんね」

デュエルとは楽しむためのものだ。ゲームで命のやり取りなんて冗談じゃない! と言うか正直怖い。逃げれるもんなら逃げたいね。しかしそれをこのまま言っても聞き入れてくれそうにないのがここに集った闇のデュエリストの方々。

なので表向きの理由として、明日決戦なのに身体に負担のかかる闇のデュエルをしている場合じゃないとか、そもそも個人的に闇のデュエルは互いに辛いから嫌いだとか色々まくし立ててやった。……後半はただの愚痴になっていたが気にしないように。

だがまあ結果として、何とか普通のデュエルという形に落ち着いた。……あまりに不甲斐ない内容であればそのまま闇に沈めるぞと釘を刺されたけどな。

『では改めて、これよりダークネスとバランサーのデュエルを行う』

「ああ。よろしく頼む」

一応戦う前に挨拶をと思ったのだが、普通にスルーされてしまった。……まあ良いさ。ここまで来たらあとはもう、デツキ仲間を信じて挑むのみ。

「デュエル!!」

遊児 LP4000

ダークネス LP4000

「私が先攻だ。ドロー」

さて。ダークネスはどんな手で来るか。コードネームのように闇属性主体とかかな？

「私は『レッドアイズワイバーン真紅眼の飛竜』を攻撃表示で召喚！ カードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

真紅眼の飛竜 ATK1800

ダークネスの場に、黒い甲殻を纏った細身の飛竜が立体映像ソリッドビジョンで出現する。

なぬっ!! レッドアイズ? こりやまた厄介な奴が来たな。

原作無印で、主人公武藤遊戯の親友兼ライバルの城之内克也のエースモンスター『真紅眼の黒竜』を中心としたカテゴリーであり、十年以上前のカードでありながらも時折サポート系カードが追加されるほどの根強い人気がある。

特徴としてはとにかく種類が豊富で、それを主軸に据えるかによって動きが全然変わるからデッキが読みづらい。こっちはどう動いたものか。

「では俺のターン。ドロロー。俺は手札から『幻想体 死んだ蝶の葬儀』を攻撃表示で召喚。そして召喚時に効果でこのカードにクリフオートカウンターを2つ乗せる」

死んだ蝶の葬儀 ATK1500 CC2

葬儀さんは場に出たものの俺を見向きもしない。それもそのはず。あれはただの立体映像だ。

葬儀さんに限らないが、カードの精霊の事はなるべく秘密にしておくよう事前に話し合い、幻想体の皆は潜入中は緊急時以外は出てこないように頼んである。セブンスターズの中に大徳寺先生以外にも精霊が見える奴が居ないとも限らないからな。

『……幻想体だ?』

「ほう。見たことのないカードだな」

おっ！ 表情までは分からないが、向こうも驚いているみたいだな。カテゴリだけでも知っているのとまったく知らないのでは情報量に大きな差がある。その点ではこっちが少し有利かね。

「死んだ蝶の葬儀の効果発動。1ターンに1度、相手フィールドの表側モンスター全ての攻撃力、守備力を500下げる事が出来る」

葬儀さんが抱えていた棺桶を開き、そこから大量の白い蝶が溢れ出て真紅眼の飛竜に纏わりつく。

真紅眼の飛竜 ATK1800↓1300 DEF1600↓1100

「飛竜の攻撃力が!？」

「ではバトルだ。死んだ蝶の葬儀で、真紅眼の飛竜に攻撃ー」

葬儀さんはゆっくりと腕を伸ばして指を銃のように伸ばすと、そのまま見えない弾丸を放って飛竜を攻撃、破壊する。

ダークネス LP4000↓3800

やるな。ダメージによる痛みはないとは言え衝撃ぐらいはある筈なのに、こいつまるで意にも介さない。どこ吹く風で立っている。

「戦闘を行ったことで死んだ蝶の葬儀の効果発動。バトルフェイズ終了時、このカード

にPEカウンターを3個乗せる。そして俺もカードを2枚伏せてターンエンドだ。さらにエンドフェイズ時に、死んだ蝶の葬儀のクリフォトカウンターを1つ取り除く」

死んだ蝶の葬儀 PE3 CC2↓1

ふう。最初は互いに様子見つてとこか。

今のターンの攻防。ダークネスの伏せたカードがどちらもブラフだとはあまり思えない。おそらく奴は飛竜をわざと破壊させたを見た。

飛竜は墓地に居ることで使える効果があるから、多少ダメージを受けても早めに墓地に送っておいたほうが良いと判断したんだろう。……まあそれに乗つてこつちも、早めに葬儀さんに戦闘を行わせてPEカウンターを乗せたわけだが。

さて。問題は次のターンだ。ダークネスはどう動くか。

遊児 LP4000 手札3 モンスター 死んだ蝶の葬儀 魔法・罠 伏せ2

ダークネス LP3800 手札3 モンスター0 魔法・罠 伏せ2

「私のターン。ドロロー！……聴こえるぞ。我が手札から響く黒竜の咆哮が。私は手札から『黒竜の雛』を準備表示で召喚」

黒竜の雛 DEF500

どこか厨二臭いセリフと共に召喚されたのは一つの真つ赤な卵。そしてその卵が内側からピシピシと音を立てて割れたかと思うと、中から先ほどの飛竜にもどこか似た小さな黒竜が顔を出す。

このタイミングで来たってことは……手札にアレがあるな！

「そして私は手札から魔法カード『スタンピング・クラッシュ』を発動！ 自分フィールドにドラゴン族が存在する時に発動でき、フィールドの魔法・罠を1枚破壊し、そのコントローラーに500ダメージを与える。お前から見て右側のカードを破壊させてもらおう」

「ぐっ!?!」

遊児 LP4000↓3500

巨大な竜の脚が俺の伏せカードの片方、『幻想体 テレジア』を踏みつぶして破壊し、さらにその風圧が俺に襲い掛かる。わざわざスピードの速いサイクロンじゃなくてダメージを与えるスタンピング・クラッシュってことは……バーン軸寄りか？

「それくらいで倒れてくれるなよ。ここからが本番だ！ 私は黒竜の雛の効果発動っ！」

そう。これがまだ残っていた。黒竜の雛が一声大きく鳴くと、そのまま光の粒子となつて舞い上がる。……そして、

「場の黒竜の雛を墓地に送ることで、手札から『真紅眼の黒竜』を特殊召喚する。出でよっ！ レッドアイズっ！」

真紅眼の黒竜 ATK2400

光の粒子が突如燃え上がって形を成し、その炎の中から大きく成長した黒竜がその姿を現す。先ほどの飛竜と同じく細身ではあれど、その真紅の瞳から出る圧は飛竜の比じゃない。

そして、口元から僅かに火の粉を散らしながら俺を睨みつける真紅眼を見て、そんな場合じゃないって分かってはいるものの俺はつい見惚れてしまった。原作を読んでいた身としてはちよつと感動だな。

「まだだ！ まだ終わらん！ 私はそこで永続罫『リビングデッドの呼び声』を黒竜の雛を対象に発動！」

ダークネスの場に再び黒竜の雛が出現する。このタイミングで飛竜じゃなくて雛を出すつてことは……まさか!?

「そして黒竜の雛の効果を再び発動！ 墓地に送ることで、もう一体、真紅眼の黒竜を攻撃表示で特殊召喚する！」

それは先ほどの繰り返し。光の粒子となった黒竜の雛が、炎と共に再構成されて急成長し揃って雄叫びを上げる。

……おいおい。真紅眼2体とはやってくれるなダークネス。流石はセブンスターズの一人つてか？ だが、こつちもただ負けるわけにはいかないんでね。きつちり挑ませてもらうぜ。

俺に向けて圧を放ってくる真紅眼2体に対し、俺は仮面の下で不敵に笑った。

入団試験 遊児対ダークネス その二

「バトルフェイズ。真紅眼の黒竜で、死んだ蝶の葬儀に攻撃！ 『ダーク・メガ・フレア』
！」

「くっ!？」

黒竜の咆哮と共に吐き出されたブレスが、死んだ蝶の葬儀に向かう。棺桶から蝶の大量を出して迎撃するも、それごと焼き尽くされる死んだ蝶の葬儀。

遊児 LP3500↓2600

「続けて受けよ！ もう一体のレッドアイズで、バランサーにダイレクトアタック」

『流石にそれは止めさせてもらう。罨発動！ 『幻想体 血の風呂』。相手の攻撃宣言時、このカードをモンスター扱いで守備表示で特殊召喚する』

血の風呂 DEF1800

『このターン。血の風呂を戦闘で破壊したらそのモンスターも墓地に送られる。さあどうする?』

「構わぬ。レッドアイズで攻撃を続行する」

禍々しい雰囲気を持つ血の風呂を恐れず、もう一体の黒竜がブレスで血の風呂を焼こ

うとする。だが炎が当たる直前、浴槽から伸びた何本もの青白い腕が黒竜を絡み取り、そのまま浴槽に引きずり込んで諸共消滅する。

本来なら血の風呂は、効果の後PEカウンターを自分の場のカードに乗せることが出来るが、今回は乗せるカードが無いので省略だ。

「私はこれでターンエンドだ。……どうしたアムナエルの代理よ。その程度か?」

『ふう。そちらも最初から飛ばすものだ。息切れしても知らないぞ』

とは言うもののどうしたものか。俺は今の状況を整理する。

遊児 LP2600 手札3 モンスター0 魔法・罠0

ダークネス LP3800 手札0 モンスター1 真紅眼の黒竜 魔法・罠 リビン
グデッドの呼び声 伏せ1

こっちが勝っているのは手札の数だけ。相手が攻撃力2400となると、こちらもそれなりのモンスターを出すか搦め手で仕留めるか。

おまけに手札が0になったとはいえ、ダークネスの墓地には真紅眼の飛竜が居る。あれは通常召喚をしないことを条件に、一度だけエンドフェイズ時にレッドアイズを墓地から復活する効果がある。

今のターンは黒竜の雛を通常召喚したので使えなかったが、手札が無くてモンスターを出せなくても代わりに墓地からさつき倒したレッドアイズが舞い戻ってくるわけだ。それなら一体血の風呂で道連れにされてもへっちゃらという訳か。

さらに言えば、レッドアイズバーン軸と来れば間違いないデッキにはあの真紅眼の黒竜専用のカードがある。そちらを出されたらもつとこちらが厳しくなるな。

何ともまあ、考えれば考えるほど状況は不利だ。……だが、まだ手が無くなったわけじゃない。

『俺のターン。ドロロー！俺は手札からフィールド魔法『ロボットミーコーポレーション』を発動』

カードの発動と共に、俺の周りが逆さまの生命の樹を模した施設に変貌する。

「むっ!? これは」

『幻想体には幻想体にあつた場所があるんでな。そこに変えさせてもらった。そして俺はロボトミーコーポレーションの効果により、手札の幻想体を生け贄を一体少なく召喚できる。俺は手札から『幻想体 雪の女王』を攻撃表示で召喚する』

雪の女王 ATK1900

俺の場に現れたのは、黒いドレスの上に白いローブを纏った何か。カード名からして女性だとは思うけど、顔に当たる所には白い仮面と王冠が浮かぶのみで他には何も見え

ない。

ただここまではカードのイラスト通りなのだけど、そこには描かれていなかった物を今の雪の女王は持っていた。両手で逆手に持っているライトブルーの長剣だ。最近の女王は自分でも戦うらしい。

『さらに俺は魔法カード『幻想体再抽出』を発動！ 墓地から幻想体モンスターを1体特殊召喚する。俺は死んだ蝶の葬儀を特殊召喚！』

死んだ蝶の葬儀 ATK1500 CC2

そこに墓地から蝶頭の男が舞い戻る。……よし。今が攻め時だ！

『死んだ蝶の葬儀の効果。レッドアイズの攻撃力、守備力はエンドフェイズまで500ダウン！』

真紅眼の黒竜 ATK2400↓1900

『そしてそこで雪の女王の効果発動！ 相手の場のこのカードの攻撃力以下の攻撃力を持つモンスターを1枚選択し、そのカードをゲームから除外する。俺が選ぶのは当然攻撃力の下がったレッドアイズ』

雪の女王がそこで剣を構え直し、黒竜に向けてスツと切っ先を向ける。するとどこからともなく猛烈な吹雪が黒竜を襲い、瞬く間に氷の棺に閉じ込めてしまう。

『ただしこの効果は、相手が1000のライフを支払うことで無効に出来る。……どう

する?』

「……ライフを支払い効果を無効にする」

まあ当然の結果だな。ここで効果を見過ぎせば場はがら空き。雪の女王と葬儀さんのダイレクトアタックを受けることになる。

ダークネス LP3800↓2800

ライフを支払ったことで、氷の棺から黒竜が解き放たれる。しかしまだこちらの攻撃は残っているぞ。

『バトルフェイズ。雪の女王で真紅眼の黒竜に攻撃!』

「相打ち狙いか!?!」

ダークネスの言う通りだ。どうせ次のターン、墓地の飛竜の効果で復活させるだろうが、それでも相手の攻めを遅らせることぐらいはできる。ついでにダメージも与えられれば尚良しだ。だがその狙いは、

「畏発動! 『攻撃の無力化』!」

ダークネスの伏せカードで防がれる。攻撃自体を無効化してバトルフェイズを強制的に終わらせる効果なので、葬儀さんの追撃もPEカウンターも溜まらないという嫌な手だ。

『俺はカードを1枚伏せてターンエンド。出来ればここで破壊しておきたかったんだけ

どな』

遊児 LP2600 手札0 モンスター 雪の女王 死んだ蝶の葬儀 魔法・罫

ロボトミーカーポレーション 伏せー

ダークネス LP2800 手札0 モンスター 真紅眼の黒竜 魔法・罫 リビン

グデツドの呼び声

「私のターン。ドロロー！ 私は魔法カード『強欲な壺』を発動！ カードを2枚ドロローする」

むっ!? この土壇場で強欲な壺とはやるな。ダークネスが2枚引いたカードを確認した時、仮面の下の口元がほんの僅かにニヤリと笑った気がした。……何か厄介なカードでも引いたな。

「先ほどのターンで我がレッドアイズを破壊出来なかったことを後悔するが良い。私は魔法カード『黒炎弾』を発動！」

げっ!? こんなところで引いてきたよ専用カード！ このターン真紅眼の黒竜が攻撃できなくなる代わりに、その元々の攻撃力分のダメージを相手に与えるという強力なバーンカード。

「放てっ！ レッドアイズ！」

ダークネスの号令と共に、黒竜から放たれるブレスが俺に襲い掛かる。元々の攻撃力分、つまり2400の大ダメージだ。……何か嫌な予感がして、咄嗟に外套を大きく前面に押し出してブレスを防ぐ。

『ぐううっ。………熱っ?!』

遊児 LP2600↓200

立体映像の強い衝撃とは別に、強い熱を感じてハッと外套を見る。………なっ?! 本当
に少し焦っているっ?! ってことは………これ闇のデュエルじゃんっ!?

周囲は本当にブレスの炎が拡がり、そのまま俺とダークネスを囲むように地面に円を描く。他のセブンスターズ達は全員円の外だ。

『………これはどういうことだ? 闇のデュエルなら受けないとはいつきり最初に言っただけだ?』

『不甲斐ない。不甲斐ないぞバランサーとやらよ』

対戦相手のダークネスが勝手にやったのかと思っただが、そこにどこかからまた影丸理事長の声が響き渡る。……おのれこっちの仕業かっ!

『アムナエルの代理と言うからどれほどのものかと思っただが……何ということは無。終始ダークネスに圧倒されてばかりではないか。……どのみち闇に沈むのだ。ならば』

少し早くそのまま炎に焼かれて倒れても良からう!」

「おいお話が違うよ!? 俺そんなのやりたくないってのにつ! 今からでも遅くはない。さっさと元に戻せと物申し立てようとした時、

「よそ見するとは舐められたものだ。我が暗黒の竜は今か今かと出番を待ちわびているというのに。私は真紅眼の黒竜を生け贄に捧げ、真紅眼レッドアイズダークネスドラゴンの闇竜を攻撃表示で特殊召喚する!」

さらに鋭さを増したフォルム。身体の随所に埋め込まれた怪しい光を放つオレンジの宝玉。場の黒竜が急に全身を燃え上がらせたかと思うと、その炎の中からさらに禍々しい姿となって再臨する。

真紅眼の闇竜 ATK2400

ダークネスのコードネームの由来はコイツかよっ!? おまけにこいつは黒竜じゃないから、さっきの黒炎弾の攻撃できないデメリット効果の範囲外。そして、

「闇竜の効果。このカードは墓地のドラゴン族の数×300、攻撃力が上がる。現在墓地のドラゴン族は4枚。死したドラゴン達の力を受け継ぎ、今暗黒の竜は更なる力を宿す」

真紅眼の闇竜 ATK2400↓3600

「これで終わりだ! 真紅眼の闇竜で雪の女王に攻撃! 『ダークネス・ギガ・フレイ

ム』

さらに勢いを増したレッドアイズのプレスが雪の女王に伸び、

『リバーズカードオーブン。永続罫『幻想体 異界の肖像』。この効果を雪の女王を対象に発動!』

雪の女王の背後に大きなキャンバスが出現し、そこに雪の女王の姿が描かれる。

『異界の肖像の効果。対象となったモンスターが戦闘を行う場合、俺へのダメージは0になる。また対象となったモンスターが破壊される場合、代わりに自分フィールドの他のモンスターを墓地に送る。……俺は死んだ蝶の葬儀を墓地に送る』

プレスは雪の女王に直撃するが、雪の女王は溶けることもなくピンピンしている。だが代わりに、死んだ蝶の葬儀が全身が燃え上がりまた破壊されてしまった。……本物じゃないとは言えなんかゴメン。

そして雪の女王が戦闘を行ったことにより、PEカウンターが3つ雪の女王に乗せられる。

雪の女王 PE3

『熱っ!? ……攻撃こそ防いだが、周りの火勢がより酷くなったぞ』

「小賢しい真似を。私はこれでターンエンド。……だがこの瞬間、墓地の真紅眼の飛竜の効果発動! このカードを除外することで、墓地から真紅眼の黒竜を復活させる。墓

地より舞い戻れレッドアイズっ！」

真紅眼の黒竜 ATK2400

真紅眼の闇竜 ATK3600↓3000

先ほど倒れたはずの黒竜が三度場に現れ、闇竜と共に咆哮を轟かせる。それに応じるようにますます周囲の炎は勢いを増していく。……そういえばこのターンダークネスは通常召喚をできなかったな。発動条件を満たしていたか。

闇竜こそ墓地のドラゴンが減って攻撃力が下がったものの、攻撃力2400と3000の2体に挟まれるとさつきより圧力が凄い。

状況は圧倒的に不利だ。こっちのLPは残りたった200。向こうがまた黒炎弾なり何かしらのバーンカードを使ってきたら俺は終わる。手札も0。場のモンスターは雪の女王のみ。

『ダークネス。お前はこのデュエルに対して何も思う所は無いのか？ デュエル中に急に闇のデュエルなんかにされて。嫌だとは思わないのか？』

「構わない。どちらにしても俺が勝つことには変わりはないからな」

『……………そうか』

闇のデュエルということは、負けたら俺はマンガ版のように意識不明になるのか？

それともこの前のダーク・ネクロフィアとの一戦のように体が消えてしまうのか？ あ

るいはこの炎にそのまま焼かれ死んでしまうのかもしれない。どれにしても嫌だ。

怖い。逃げたい。熱い。苦しい。……だけど、それ以上に俺は怒っている。

本来楽しむためのデュエルで傷つけあわなきやならないことも。最初の約定をいきなり破り捨ててきた理事長に対しても。そんなデュエルを何も言わずに受け入れている目の前のダークネスにも。

ああ。まったくもって、

『腹立たしい』

……んっ!? 今俺以外の奴も誰か同じことを喋らなかつたか? そう思って辺りを見回してみるも、ここに居るのは俺とダークネス、そして少し距離を置いて円の外からデュエルの成り行きを見守っている他のセブンスターズの面々。そして、

『まったく腹立たしい。この妾わらわに牙を向けただけでは飽き足らず、よりにもよって炎なんぞを放つとは。あの無礼な竜めどうしてくれようか』

雪の女王も静かにブチ切れてた。……あれ普通に精霊化してないか?

入団試験 遊児対ダークネス その三

遊児 LP200 手札0 モンスター 雪の女王 魔法・罫 ロボトミーコーポ

レーション 異界の肖像

ダークネス LP2800 手札0 モンスター 真紅眼の闇竜 真紅眼の黒竜

魔法・罫 リビングデッドの呼び声

『俺のターン』

『……ほう！ この状況になっても諦めぬか。アムナエルの代理よ』

俺がそつとデツキに指をかけると、どこか不思議なものに対するような理事長の声が響き渡る。

確かにそうだよな。この圧倒的不利な状況じゃ、諦めてしまってもおかしくはない。実際これが普通のデュエルなら素直に降参することもあり得た。……でもな、

『生憎と、負けられない戦いになってしまいましたのでね。だけどまだデツキにカードが残っている限り、まだLPが残っている限り……そして、まだ勝ち筋が残っている限りっ！ ここで諦めてる場合じゃないよなあっ！ ドローっ！』

少なくとも、十代や万丈目ならこんな程度では屈さない。なら俺も負けが決まるまで戦い続けるのみ。この劣勢を逆転すべく、俺は勢いよくカードを引く。……これはっ！

『俺はロボトミーコーポレーションの効果発動！ スタンバイフェイズ時、デッキから3枚めくり、幻想体のカードがあれば手札に加えることが出来る。……俺は『幻想体魔法少女 貪欲の王』を手札に加え、残りはデッキに戻してシャッフルする』

「そんなモンスター1枚で何が出来る？」

ダークネスの言うように、確かにこれだけでは無理だろうな。しかし、まだ俺の手は伸びるぜ。

『さらに俺は魔法カード『人ならざるモノからのギフト』を発動！ 手札の幻想体を1枚捨てて代わりに3枚ドロし、そのドロしたカードから幻想体を1枚公開しなければならぬ。そこで幻想体が無ければ手札を全て捨てる。ドロ』

毎回この瞬間は緊張する。低い確率だが引けない場合もあるからだ。この状況で引けなかつたら今度こそ敗色濃厚。だが引いた3枚の中に幻想体が、それも良いカードが来てくれたことにホッと胸を撫でおろす。……この手なら上手くすれば。

『俺は引いたカードから『幻想体 たった一つの罪と何百もの善』を公開！ そしてさらに公開したカードが星2以下なら特殊召喚出来る。頼むぞ罪善さん！』

たった一つの罪と何百もの善 DEF200 星1

俺の場に光り輝く頭蓋骨こと罪善さんが姿を現す。……一瞬こつちをチラツと見てきたからあれは本物だな。うん。罪善さんはあれでかなり心配性だから、この状況を緊急事態だと考えて出てきてくれたんだろう。

さあ。ここからは順番が大事だぞ。

『続けて俺は手札から『幻想体 魔弾の射手』を攻撃表示で召喚し、クリフトカウナーを3つ乗せる。魔弾の射手は星5だが、ロボトミーコーポレーションの効果により生け贄は必要ない』

魔弾の射手 ATK2000 星5 CC3

さらに呼び出したのは人型の影のような幻想体で、黒い軍服のような服の上に青いクロークを纏っている。服から伸びる手足や顔は黒い靄に覆われ、常時陽炎のように揺らめいていてその姿は定かじやない。

だが、その中で2つだけはつきりとしたものがある。黒い陽炎の中で青く光る鋭いまなざしと、その肩に掛けている身の丈ほどあるマスケット銃だ。

『罪善さんの効果発動！ 1ターンの1度俺の手札、あるいは場のカードの数×300LPを回復する。俺は場のモンスターの数を選択。300×5で1500回復だ』

カタカタ！

罪善さんが効果の発動と同時に優しい光を放ち、洞窟内を明るく照らす。この光は

カードの数値上だけでなく、本当に精神を落ち着かせて癒す力があるからな。回復量はあまり多くないが使っておくに越したことは無い。

遊児 LP2000↓1700

「グッ!? グオアアア」

「(っ、この光はっ!?)」

何だ? 何故か目の前のダークネスが頭を押さえて苦しんでいる。この野郎頭痛持ちか何かか? あと何か周囲のセブンスターズの誰かがやけに驚いているが……まあ今は目の前のデュエルに集中だ。

「グアアア……………はあ……………はあ」

ようやく頭痛が落ち着いたのか、ダークネスが軽く頭を振って呼吸を落ち着ける。……やっぱりこんな闇のデュエルをしてるから体調不良なんじゃないか?

『……………さて、どうやら落ち着いたようなので最後に尋ねたい。今からでもこの闇のデュエルを止めるつもりはないか? 勿論負けたら何かしらヤバいというのは分かる。なら同時に降参^{サンダー}すればなんとかなるんじゃないか?』

「はあ……………断る。私が弱っているから情けをかけるといふならお門違いだ。そもそも盤面は私の方が有利。手札0の状況からここまで持ち直したのは驚いたが、それでも私の真紅眼の闇竜には及ばぬ」

ダークネスは今の今まで頭を抱えていたのにも関わらずさらつと返す。この強情厨二仮面めつ！ 結局こうなるのかよ！ ……仕方ない。覚悟を決めるか。

『ならば……行くぞつ！ 俺は魔弾の射手の効果発動！ このターン魔弾の射手は攻撃が出来なくなる代わり、フィールドのPEカウンターを3つ、あるいは1000ポイントのライフを払うことで、場のカードを1枚破壊することが出来る。俺は雪の女王のPEカウンターを3つ使う！』

「なんだとつ!？」

雪の女王 PE3↓0

魔弾の射手はゆつくりと銃を両手で構え、何故か明後日の方向にピタリと狙いを定める。それと同時に銃口の先に、ブンつと音を立てて魔法陣のようなものが四重に展開される。

『当然対象は……真紅眼の閻竜！ 吹き飛ばべつ！』

その瞬間、口元こそ見えないが魔弾の射手がニヤリと嗤った気がした。

バンつという発砲音と共に、放たれた銃弾はわざと俺に見えるギリギリの速度で動き、そのまま不規則な軌道を描いて閻竜の頭部に直撃する。

閻竜はぐらりと体勢を崩し、そのまま地面に倒れ込んで消滅した。……いや普通に撃てよ!?! わざわざ曲射すんな!

魔弾の射手 CC3↓2

「闇竜がつ!？」

『効果発動後、魔弾の射手のクリフトカウンタが1つ減る。もう一発行くぞっ!』

魔弾の射手は、1ターンに2度までこの効果を使える。今度はLPを1000払って効果発動!』

遊児 LP1700↓700

魔弾の射手 CC2↓1

もう一度発射音が響く中、今度は弾丸は黒竜の顎を打ち抜いて撃破する。消費がデカいが良い仕事するな魔弾の射手。

ダークネスは目の前の光景が信じられないのか呆然としている。……それじゃあれでダメ押しだ。

『バトルフェ……なっ!？』

バトルフェイズに入ろうと瞬間、雪の女王が攻撃の指示の前にダークネスに向かって疾走する。ああもうっ!？ まだ何も言っていないのにっ!。

『バトルフェイズ! 雪の女王で、ダークネスにダイレクトアタック。くらえっ!』

「ぐおおっ!？」

ダークネス LP2800↓900

慌てて宣言すると、間髪入れずに雪の女王が剣で一閃し、ダークネスは流石にたまらず片膝を突く。

『ふんっ！ それで良い。これにて先ほどの不敬は無かったことにしてやろう。妾の寛大きにむせび泣くが良いわ』

攻撃が終わってこちらの場に戻る雪の女王だが、やり返したからかちよつとだけスッキリした感じだった。……あんまり尾を引かないタイプのようでは何よりだ。

これにて互いのLPは1000を切った。……あとは仕上げだな。

「ぐっ!? ぬうう」

ダークネスはフラフラになりながらも立ち上がる。ダメージが実体化する闇のデユエルである以上、向こうも相当キツイ筈なのになんて奴だ。こっちはもういっぱいばいだってのに。

『俺はこれでバトルフェイズを終了する。……おいつ！ 聞いているんだろう影丸理事長っ！ これ以上はどちらが勝とうが負けようが負担が大きすぎる。今すぐ闇のデユエルを中止しろっ！ 仮にも部下と、これから部下になるかもしれない者を見殺しにする気かっ!?』

俺は半ば怒鳴りつけるようにどこかで聞いているであろう理事長に話しかける。流石にここまで来たらもう敬語を使うつもりもない。約定をいきなり反故にした上、入団

テストで部下を使い潰すような奴相手にそんな義理は無いからな。

だというのに、どうしてか理事長からの反応がない。……おのれ無視する気か。ならこつちにも考えがあるぞ。

「さあ。早くターンエンドするが良い。レッドアイズ達は破壊されたが、お前のLPも僅か100。闇のデュエルはまだこれからだ」

『……いや。これで終わりだ。出来ればもつと穩便に済ませたかつたんだが……仕方ないな』

ダークネスはこんな状態だというのにまだまだやる気十分だ。実際次のドロウで、何か俺のLPを直接削るカードでも引けたら勝利は向こうに転がり込むし、ギリギリまで勝負は分からない。

だが悪いな。もうお前のターンは来させない。

『俺はこれでターンを終了。そこで魔弾の射手の効果が発動！ ターン終了時にこのカードのクリフオートカウンターを1つ取り除く』

魔弾の射手 C C 1 ↓ 0

その瞬間、魔弾の射手が何も無い天井に向けて銃を構えた。

「……………？ 何を」

『魔弾の射手の効果。ターン終了時にクリフトカウンターが0の時、互いのプレイヤーに10000のダメージを与えて再びカウンターを3つ乗せる』

ダークネスのLPは900。俺は100。つまりこの状態で同時に1000ダメージを受ければ、

「……………!? 貴様っ!? まさか最初からこれを狙ってっ!?」

『悪いな。勝負はここまでだ。互いに降参という手が使えない以上、引き分けに持ち込むしかないだろう？ ……かなり痛いと思うがそこは我慢しろよっ！ 放てっ！』

俺の合図と共に放たれた二発の弾丸は、それぞれが時間差を不規則な軌道と共に埋めて同時に俺達を貫いた。

遊兎 LP700↓0

ダークネス LP900↓0

遊兎対ダークネス 両者LP0によりドロ。

入団試験終了　そしてセブンスターズの初戦

「ぬうっ!？」

『ぐあああっ!？』

かくして魔弾の射手の効果によって両者引き分けに持ち込んだ訳だが、終わった瞬間身体に激痛が走ってたまらず膝を突く。

……ぐっ!？　これが闇のデュエルかよ。前にダーク・ネクロフィアとやった時の身体の感覚が無くなつていく感じも嫌だったけど、こういう直で痛みが来る奴もこれはこれで嫌だな。だけどこれで終わり……じゃないっ!？

戦いの前に俺達を囲んでいた炎が、消え去る前に一際勢いよく燃え盛る。そしてその近くには丁度バランスを崩していたダークネスの姿が。……えくい。一か八かだ。

『雪の女王っ!　頼むっ!』

今さっき精霊化したばかりで、どういう相手なのか分からない。もしかしたらこちらに危害を加えようとするかもしれない。だが咄嗟に思い浮かんだのは先ほどのデュエルで見た猛吹雪のイメージで。消火に手を貸してほしいという俺の願いは、

「……なっ!？」

振り向いたダークネスが見た、燃え盛る炎が一瞬で凍り付く様という形で応えられた。

『ふんっ！ かの無礼な竜の炎など、妾の手に掛ければこれこの通りよ。妾が凍らせきれなかったものは、春の日差しと温かき人の心のみ。身の程を知るが良いっ！』

カタカタっ！

気が付けば、俺の横に普通に雪の女王が実体化していた。あとドサクサで罪善さんも。罪善さんの方は俺に向かってきた炎を抑えてくれたらしい。

『ありがとう。雪の女王。罪善さんも』

なるべく幻想体達が出てこれることはセブンスターズには秘密にしておきたかったが、さっきのデュエルを見て勘づいている奴も居るだろうし今更か。

「……むう。バランサーよ。貴様私相手に最初から引き分けを狙っていたとはな」

『ハッハッハ。まさか。引き分けに持ち込むのがせいぜいだっただけだ』

どうにか立ち直ったダークネスの追求に、俺はそう笑って返す。実際ギリギリだったからな。あの状況で引き分けに持ち込める手札になったからやっただけで、そうじゃなかったら普通に勝ちを狙ってた。これでも負けたくはないからな。

『ほう。精霊の実体化とはな。面白い』

『面白がってもらわなくても結構だがな。さっきのデュエルについて何か釈明があれば

「お聞きしたいんだが？」

出たな理事長。声だけだけど。急に闇のデュエルにしゃがってこの野郎。軽く皮肉ってやるが、奴はまるで堪えた様子がない。

『フフフ。まあ良いではないか。確かにお前は実力を示してみせた。 balanサーよ。お前を正式にアムナエルの代理として認めよう。これからの仔細はアムナエルから聞いておるな。……ではダークネスよ。明日の先陣は任せるぞ』

「承知した」

『さて。ここに集いし者共よ。明日からいよいよ決戦だ。それぞれの奮闘に期待するでしょう』

「そこまで一方的に言うとは通信が途絶える。オイ待てこらっ！ せめて一言謝っていけっ！ 俺だけじゃなくてダークネスにもっ！」

それを聞いて、周囲の人影が一つ、二つとどこへともなく消えていく。……今のが解散の合図だったのっ！? とどうか俺まだ全員の顔と名前も一致してないんだけどっ!?

『つたく。なんて雇い主だ。……そうは思わないか？ そっちも』

「それがお前の素か？」

「やべっ!?! さつきからついつい口調がいつもの調子になってた。」

「別に隠すことは無い。お前との決着はいずれ日を改めてとしよう。ではな」

ダークネスはそれだけ言うと言身を翻して去っていった。何か罪善さんを避けていたような気もするが……よく分からないな。

しかし……疲れたなあもうっ！ 周りに人影が居なくなつたのを確認すると、俺は近くの壁にもたれかかりながらズルズルと崩れ落ちる。

「こんなのが大徳寺先生を抜いてあと五人……いや、理事長も入れたら六人かよ。これは強敵だぞ十代。万丈目」

俺は汗で蒸れる仮面を外して、そう誰に言うでもなくポツリと呟いた。

「だからよ。それで俺がそのセブンスターズって奴らからこの鍵を守る役を任せられたんだー！」

「凄いやアニキっ！」

「流石十代なんだな」

翌日、俺は十代達の部屋で十代から話を聞かされていた。

学園の地下に眠る三幻魔のカードを狙うセブンスターズから挑戦を受け、学園側から七人の鍵の守り手を選出されたこと。そのうちの一人に自分が選ばれたことなどだ。

「……………んっ!? なんだよ遊児? あんまり驚いていないな」

「えっ?! ……ああ。勿論驚いてるさ」

十代に突っ込まれて慌ててそう返す。……スマン十代。俺もうその事の大半知ってるんだ。選出メンバーの件とかも。……だって俺も一枚噛んでいるんだもの。

今回のセブンスターズの襲撃だが、実は理事長から鮫島校長にとづくに話はついていたりする。そうじゃなきゃそもそもこんな戦いは成立しないからな。

正確にどういう取引があつたかまでは知らないが、理事長がセブンスターズを組織してカードを奪わせようとしているのに対し、校長もまた七人の守護者を選出して迎え撃つ。ここまではどうやら互いに合意している。

だが鮫島校長の選出したメンバーは、なんと七人中五人が生徒という無茶苦茶ぶり。いくら成績優秀だろうが何だろうが、こういう大事な場面で生徒ばかりというのはまずない。そこらの生徒なら一蹴できてこそその先生だし、人材は豊富のはずだ。

しかしこの選出には訳がある。つまりはこれが理事長側からの条件なのだ。

正直な話、三幻魔を手に入れるだけなら理事長は特に問題ない。何せ合鍵を持っているんだから。だが直接乗り込んだらいくら何でも外聞が悪いし、何より三幻魔の完全復活にはデュエリストの闘志が大量に必要。それも生徒の闘志なら尚良い。

だからおそらく取引の内容としては、自分が直接動かない代わりにセブンスターズを差し向けて堂々と奪いに行く。それに対してそちらは七人の守護者（生徒が大半）を揃

えて防衛させろ。無事退けられたのなら三幻魔を諦める……とかそういう感じだろう。

まあそうして鮫島校長、そして理事長の計画を知って止めようとしていた大徳寺先生、ついでに色々あつて俺も加わつて話し合った結果、このような選出になつたわけだ。

ちなみに大徳寺先生がセブンスターズ側にも関わらず選出されたのは、いわばもしもその時の保険だ。

昨日も見えた様に、理事長はいざとなつたら平気で約定を破り捨てるからな。セブンスターズ側が勝つてしまつても困るが、あまりに守り手側が優勢だと普通に直接乗り込んでくる可能性もある。

なので守り手側が優勢過ぎたらそのまま大徳寺先生がセブンスターズの難関として立ちほだかり、逆に劣勢であればその枠に他の誰かが入つて防衛に加わる。……まあその加わる誰かつて言うのが俺の予定なんだけどな。

という訳で、表では学園生活を送りつつ、裏では身体がボロボロの大徳寺先生の代理でセブンスターズに潜入してちよこちよこ情報を探るといふ酷いハードスケジュールになつてしまった。八人目の守護者……とか言つたら格好良いかもしれないが、実際はスパイ活動なんだよな。

そういうった色々を既に知っているとはいえず、俺は何も知らない風に十代の話を聞い

ていった。

その日の夜。

俺は自室で変装用セットを仮面以外着込んで待機していた。もう夜も遅く、十代達も眠っている頃合いだろう。

『いよいよだね。……ところで、ダークネスは一体誰を狙うつもりだと思う?』

「さあな。結局それを聞き出すことは出来なかったから」

原作知ってるなら分かっているだろうに。ふわりと急に現れて白々しく聞いてくるデュールに対し、俺はいつもよりそっけない態度で返す。

ダークネスが行動を起こすのは今日だ。それは昨日聞いたから間違いない。しかし誰を狙うかは分からない。そしてダークネスの事だから、おそらく相手が誰だろうと闇のデュエルを吹っ掛けるだろう。

闇のデュエルはやるだけで互いにとんでもない目に遭う。俺が何とか耐えられたのは、俺が多少なりとも幻想体達に馴染んでいたことや、身に着けていたペンダントやこの服の力が大きい。

しかし、選出メンバーの中でそういった耐性があるのはおそらく十代と万丈目だけ

だ。というか耐性があってもキツイ。

なので俺是最悪の場合を考えて、誰が挑まれてもすぐ駆け付けて被害を抑えられるように準備していた。幻想体の皆を分散して各メンバーの近くに向かわせ、デュエルが始まったら俺を呼んでもらうというやり方だ。来る日取りが分かっているからこそ取れるやり方だな。

そして、遂にその時がやってくる。

「十代っ!」

……っ!? マズイっ! 狙いはそっちかっ!? 俺は外から聞こえてきた叫びにも近い声にハツとし、急いで仮面を掴んで外へ飛び出す。

目指すは十代の部屋。だが、

「……んなっ!」

そこで十代の部屋から強い光が発せられたかと思うと、そのままシンツと静まり返る。扉は開きっぱなしだったのだから中を覗き込むと、そこには誰も居なかった。

おいおいマジか!? 十代だけじゃなく翔や隼人も居なくなってるぞ。今の今までここには人の気配があった。それなのにこれとは……ダークネスの奴やってくれるな。

カタカタっ！　カタカタっ！

罪善さんが何かに反応して実体化し、俺の服の袖を引っ張る。どうやらどこに跳んだか分かったらしい。

『どうせ罪善さんにも分かっているみたいだし、急ぎだろうから場所だけ教えよう。……あの山の頂上さ。そこに彼らは居るよ』

デーが教え、罪善さんが引っ張っていこうとするその先にあるのは、この島唯一の火山。……えっっ！? あんな所に居るのかよっ！? 急がないと間に合いそうにないな。

俺はカードを通して幻想体達に呼び掛けると、急いで近くの森に走り出した。乗せてくれると良いんだけどな……大鳥。

十代対ダークネス そして明かされるダークネスの素顔

早くっ！ 早くっ！

俺は森から出たがらない大鳥をどうにか拝み倒し（あんまりしつこいから罰鳥に一回突かれながらも）、火山まで急いで乗っけてもらい罪善さんの先導の下に頂上を目指した。そして、

「見つけたっ！」

やっと火口付近に遠目に人影が見えてそうポツリと洩らし、そこからはひとまず隠れて様子を見ながら近づいていく。そこに居たのは……。

「思った通りダークネスか。そして相手は十代……って、何であいつらまで居るんだっ！？」

デュエルしている二人の他に、光る丸い球体に閉じ込められている翔と隼人。そして何故か明日香まで十代の傍にいる。……一体どうなつてんだこの状況？

グルルルウ。

大鳥が何故か十代達とは別の方向を向いて唸っている。瞳こそまだ赤じやなく黄色

のままだけど……向こうに何かあるのだろうか？

「大鳥。何か居るのか？」

大鳥は無言で頷く。よくよく目を凝らしてみると、どうやら小さなコウモリが二、三羽飛んでいるのが見えた。こちらへんにコウモリなんか居たっけか？

「大丈夫だよ大鳥。ただのコウモリだ。気になるのかもしれないが、今は少しだけ静かにしていてくれ。十代達に気づかれる」

そう言う大鳥は、まだ何か警戒しながらも唸り声を抑える。……ありがとうな。

そうして隠れながら様子を探っていると、デュエル中の二人の会話から大体の状況が掴めてきた。ダークネスは十代が闇のデュエルを受けるよう、翔と隼人を人質にしたらしい。十代が逃げたり負けたり時間経過で火口に真つ逆さまという奴だ。

あと明日香も鍵を持っているから狙われたのかと思つたが、こちらはただ近くに居たから巻き込まれただけのようだった。こんな時間に十代に何の用だったのか。

しかしどうしたものか。幻想体の誰かの力を借りれば翔達を助けることは多分出るわけではない。友達が捕まっているのを見過ごすというのは個人的に嫌だしな。だが、おそらく放つておいてもアニメ的な流れなら二人は無事救助される。むしろ下手に手を出した方が却つて危ないかもしれない。

どうすれば良いかと悩んでいると、

「わあっ?! 助けてアニキっ!」

気づけば二人が閉じ込められている光の球が一部崩れかかっていた。……え〜い悩んでいる暇はないっ!

「昨日に続いて今日もだけど、頼むっ! 雪の女王」

『またか……こんな熱い中に妾を呼び出すとは不敬な奴め』

予想していた通り、実体化した雪の女王はご立腹だった。そりゃあ昨日はまだ自身に降りかかる火の粉を払うためってこともあっただろうけど、今回は完全に俺の我がままだもんな。だけど、

「緊急事態なんだっ! 俺に出来ることならあとで何でもするから……お願いしますっ!」

放っておいて解決するなら良いけど、ここで助けなくて万が一のことがあったら一生後悔する。ならば下げれる頭は下げるべしだ。

「わ、わああっ!」

遂に翔がバランスを崩して球から落っこちる。十代が走り出すが間に合うかどうかギリギリだ。

「雪の女王っ!」

『……………良からう。後で貢物を用意せよ。……はあっ!』

そこからの行動は素早かった。

雪の女王は気合を込めて剣を地面に勢いよく突き立てる。するとそこから強烈な冷気が噴出し、瞬く間にグツグツ煮えたぎる溶岩を凍らせた。……水蒸気爆発とかはもう考えないぞ。今はそれより翔達だ。

確認すると、落ちたのは翔ではなくその身代わりとなった十代だったが、溶岩にダイブする直前に何とか凍らせることが出来たみたいだ。背中を強かに打ち付けていたが、ハネクリボーが咄嗟に光の膜で衝撃を弱めていたみたいだし元気そうだ。

しかしホツとしたのも束の間、

「……横槍を入れるとは、何のつもりだ。バランサー？」

まあバレるよな。ダークネスが俺達が隠れている辺りをじっと見ている。

出来れば十代達にはもうしばらく姿を見せたくないなかつたんだが……仕方ないか。それにダークネスにも言つてやりたいことはあるしな。この際だ。

俺は仮面を被り、ゆっくりと岩陰から進み出た。雪の女王と大鳥、罪善さんは留守番だ。カードに戻つてもらうという手もあるが、いざという時それでは素早い対応に困るので実体化したままだな。

『それはこっちのセリフだダークネス。関係のない奴を巻き込むとはどういう見だつ！』

ダークネスのみならず、ここに居る皆の視線が俺に集中する。

『人質をとって鍵の守り手呼び出すまでは俺も百歩譲って認めよう。手荒ではあるけど十代が仲間を見捨てるはずもないしな。だが、こうしてデュエルが始まった以上、もう人質の意味はないはず。解放してやれ。これでもまだごねるっていうのなら……俺も黙っちゃいられない』

俺がスパイ活動をしているのは、被害を最小限に抑えるためでもある。鍵の守り手が闇のデュエルをして傷つくだけでも正直嫌だったのに、それ以外の奴まで手を出すんじゃないよっ！

そこで俺は十代、そして溶岩が凍ったことでゆっくりと降りてくる翔や隼人、明日香をチラリと見てからダークネスに向き直り、デュエルディスクを取り出して構える。

『均衡をとる人バランサーの名の通り、人質の分だけ十代に手を貸させてもらうが……どうするかね？』

少しの間周囲を沈黙が支配した。

……誰かなんか言っちゃってよっ！ いや分かるけどさ。いきなり現れた新たなセブンスターズらしき変な奴が、突然こんなこと言っちゃ仲間割れを始めたらそりゃあ戸惑うさ。仕方ないじゃないかっ！ ついでサクサで文句の一つも言いたくなつたんだってっ

!

実際この後の行動はダークネス次第だったりする。もしこれだけ言って尚人質を取ろうというのなら、俺は全力でそれを止めるしその分十代に協力する。

だけど出来ればそれはしたくない。一応スパイだからね。表向きは向こうの立ち位置だから、敵対行為はマズいわけだ。……そして、ダークネスの出した結論は、

「……良からう。お前には借りがあゑる。ここはお前の顔を立てて鍵の守り手以外は見逃そう」

『そうしてくれるなら助かるな。ほらっ！ その二人。こんな所に居たら十代の邪魔になるのではないか？ 早く移動したまゑ』

「えっ!? ……う、うん」

「分かつたんだな！」

俺はダークネスが折れてくれたことに内心ホツとしながら、改めてちよつと口調を作りつつ翔と隼人を明日香の居る辺りに移動させる。ここならぎりぎり勝負の余波を受けな……いや、ちよつと受けるか。しかし人数は固まつてくれた方が万が一の時に対応しやすいしな。

「なあ！ その……バランサーだっけか？ この氷お前がやつてくれたんだろ？ 敵なのかもだけど……ありがとうな」

『助けたのはこちらの都合なので礼は要らない。さっ。デュエルを続行したまえ』

十代は礼を言いながら元の場所に戻っていく。ホントに礼は要らないんだよ。仕方ないとはいえ闇のデュエルなんか巻き込んだのはこっちなんだから。

そして結論だけ言うと、激戦ではあつたが最終的にこのデュエルは十代が勝利した。そこは流石主人公といった所だ。さつきも俺が助けなくても十代なら何とかなつたかもしれないな。

だが問題はその後だ。勝つた十代だが闇のデュエルのダメージが大きくそのまま倒れてしまい、負けたダークネスに至っては、

「ぐ、ぐあああつ!!」

ライフが0になつた瞬間、何か黒い靄が身体……特に仮面の辺りから抜け出たかと思うと崩れ落ち、そのままここに居る全員が光に包まれて山の麓へと跳ばされる。ここに来た時と同様に、戦いが終わつたら自動的に移動するようになっていたようだな。

「十代っ!!? 十代っ!!」

「アニキっ!!」

明日香達が一斉に倒れ伏す十代に駆け寄る。十代は身体のおちこちにデュエルでの

怪我を負っているが、見た所命に別状はなさそうだ。ちゃんと治療すれば問題ないとして、問題なのはダークネスの方だな。

俺は倒れているダークネスに近づく。……反応がない。まさか倒れた時に打ち所でも悪かったか？ 抱き起こそうとして、よく見たら普段から着けていたダークネスの仮面が無くなっていることに気づく。

そしてその仮面の下の素顔を見た時、

『……嘘だろ。なんでこいつがここに？』

そう本当にポツリと漏らした言葉を、他の誰かに聞かれなかったのはある意味幸運だった。それぐらいダークネスを名乗っていた者の正体は衝撃的だったのだ。

俺が少しだけ呆然としてしていると、そこで明日香が十代の近くに落ちていたカードを拾い上げる。何だあれ？

「これが、ダークネスの魂」

……ん!? 今ちよつと聞き逃せない言葉が出ただけだ。魂がなんだって？ 慌てて詰め寄ろうとすると、明日香達は警戒するように俺に向けて構える。

『まあそう警戒するな。こちらに今の所戦う意志は無い。そのカードがダークネスの魂というのはどういうことだ？』

明日香は警戒を解かずにながが教えてくれた。ダークネスが提示した闇のデュエル。

それは敗者の魂がカードに封印される物だったと。

まったくなんてデュエル吹っ掛けてんだダークネスの奴はっ!? おまけに自分で分が封印されてちや世話ないぜ。まあスパイとしては初戦は順調と言えなくもないけどな。

とにかく、魂が封印されているにしても身体の方をこんな所に放置しておくわけにはいかない。こつちで連れ帰るか、学園側に引き渡すかの二択だな。……いや連れ帰るのは正直キツいか。学園側なら医療設備とかあるから何とかかなりそうだしそつちにしよう。

『……事情は理解した。そういう事ならダークネスの魂と身柄はそちらに預けよう。目を覚ますようであれば尋問でもするが良い』

「待ってっ! ……貴方は一体何者なの? 口ぶりからすると貴方もセブンススターズみたいだけど、何故私達を助けたの?」

俺が立ち去ろうとすると、明日香は逃がすまいと食い下がってくる。少しでも情報を得ようってか?

遠くの空を見ると少しずつ明るくなっている。もう少ししたら夜が明けるのだろう。早いとこさっきの場所に待たせている罪善さんたちと合流しなくちゃいけない。

『バランスー。ただの代理だ。それと、今回はたまたまお前達を助ける形になっただけ

の事。次会う時は敵同士だろうな。……では、さらばだっ!」

そう言い残して素早く身を翻す俺。

実を言うと、さつき遠目にこちらに向かつてくる一団が見えた。おそらくあれは他の鍵の守り手達だ。……下手にここで鉢合わせたら俺もデュエルを挑まれかねないからな。さつきと逃げるに限る。

俺を追おうにも、倒れている十代やダークネスが居る以上そちらを放つてはおけないはずだ。実際その予想は当たり、駆けだした俺を追ってくるものは居なかった。

その後なんとか他の皆と合流し、十代達と鉢合わせしないよう遠回りして自分の部屋に帰宅した。途中大鳥と森で別れる時、なにやらキイキイとコウモリの鳴き声がしていたが何なんだろうか？

だけど初戦からこんな激戦じゃ先が思いやられるぜ。あと少なくとも先生を抜いても五人は居るんだぞ。

「しかし……なんでダークネスなんて名乗っていたんだろうなあ。天上院吹雪は」

ダークネスの素顔。マンガ版でも重要人物として登場した者のまさかの配役に、俺はますます頭が痛くなるのだった。

見舞いと貢物　そしてコウモリは見ていた

十代とダークネスの戦いから翌日。いや、もう既に日付があの時変わっていたわけだから当日か。

俺は翔達から、十代がセブンスターズと戦って医務室に担ぎ込まれたことを聞かされた。といつても既に知っていることだが。

内心シヨックではあった。アニメの流れ的にはおそらく正しい流れなのだろうが、それでも友達が怪我をするのを見過ごすハメになったからな。

幸いなことに、直接戦った十代以外は怪我らしい怪我もなかったらしい。これで翔達まで怪我をしていたら、俺の罪悪感がよりとんでもないことになっていた。

全部終わったら謝罪回りに行くことを心に決め、翔達と話し合って授業が終わったら皆で見舞いに行く流れになる。俺がついこの前まで見舞いされる側だったのにな。医務室とはこれからも馴染みが深くなりそう怖い。

……あとで購買部に寄って見舞いの品も買っていくか。

色々あつて授業後。

一度購買部に寄つた後、約束通り翔や隼人と一緒に医務室に向かう。すると、

「あつ！ お兄さん」

「翔か。それにお前達も」

丁度医務室からカイザーが出てくるのが見えた。翔が最初に駆け寄っていき、俺達も後をついていく。

「十代のお見舞いですか？」

「ああ。それもある。俺は今終わった所だ。怪我人なのだから、あまり長居はしないよ
うにな」

「はい！ お兄さん！」

翔が元気よく返事をする、カイザーは俺達にも軽く手を上げて去っていった。……
さて、今度は俺達の番だな。

コンコンコン。

「失礼します。久城です。十代の見舞いに来たのですが……入つてもよろしいでしょう
か？」

「ああ久城君ね。良いわよ」

その返事に俺はそつと扉を開ける。そこには何か書き物をしている鮎川先生と、ベツ

ドに横たわっている十代が居た。

「失礼します。……アニキは？」

「大丈夫なんだな？」

「安心して。命に別状はないわ。もうしばらくしたら目を覚ますと思う。だけど身体のおちこちがボロボロで、一体何があつてこうなつたんだか」

鮎川先生の言葉にホッと胸をなでおろす。しかし、鮎川先生の表情は晴れない。

「十代君もだけど……今危ないのはあの子なの」

その視線の先、奥のベッドには、酸素マスクを着けて眠り続けているダークネス……
天大院吹雪の姿と、

「あつ！　明日香さん」

「こんにちははなんだな！」

「こんにちは。アナタ達もお見舞い？」

吹雪のベッドの傍に明日香の姿もあった。明日香は兄妹だし、やっと見つかった吹雪のお見舞いに来てもおかしくない。多分さっきのカイザーも吹雪の見舞いを兼ねていたのだろう。

「こちらは十代のお見舞いに来たことを説明すると、明日香は少し何かを言い淀む。

「あつ！　……久城君も例の事は」

「……そう。なら多少は話しても良さそうね」

鮎川先生に聞かれないうよう翔が声を抑えながら言うと、明日香は微妙に困った顔をしながらそう呟く。

多分セブンスターズに関することだろう。そのことは限られた人にしか知らされていない。下手に広めて無用な混乱を避けるためだ。

そんな重要事項を、十代ときたら昨日ペラペラ同室の翔や隼人、おまけに友人とは言え俺に喋るんだからまったたくもう。昨日聞かされた時は少し呆れたぞ。

「明日香。大雑把にだが俺もセブンスターズの事は聞いた。その一人が……その、お前の兄さんだったなんてな」

「……分からないの。行方不明になっていた兄さんが、何故こんなことになっていたのか。今もまだ目を覚まさないし……」

明日香は辛そうな顔をしていた。それもそうだろう。肉親がこんなことになってしまったのだ。それに怪我の度合いも十代より重傷で、こちらはいつ意識が戻るか不明らしい。

聞けば聞くほど悪い知らせばかりだが、一つだけ良い知らせもある。それは……間違いないく吹雪はここに居るといふことだ。

「吹雪……さんに何があったのかは分からない。だけど、それは起きてから聞けば良い。

……大丈夫。きつとすぐに目を覚ますさ。勿論十代もな」

もつと気の利いた言葉があるのかもしれないが、今の俺にはこれが精いっぱいだった。

と、お見舞いに来た者同士でしばらく雑談をしていたのだが、流石にずっと居続ければ迷惑になる。

見舞いの品として買ってきた果物を起きたら渡してほしいと鮎川先生に渡しながら、俺は今一度十代と吹雪の様子を見る。

………んっ!?

「すいません。その籠の中に入っているのは吹雪さんの持っていたものですか?」

「ええ。そうよ。ここに運び込まれてきた時の服も一緒に」

吹雪のベッド脇に置かれていた籠。ダークネスの時の仮面はいつの間にか消えていたが、それ以外の衣装や物はそこに入っていた。その中の妙なモノに目が留まり、俺は明日香と鮎川先生に許可を取って少しだけ見せてもらう。

それは奇妙な形をしたペンダントだった。装飾を見るとおそらく本来は円形だったのだろうが、途中で割れたか何かして欠けている。……待てよ? この装飾どつかで見

たような……ダメだ。出てこない。

明日香に話を聞いても、吹雪がこんなものを持っていたということは無いらしい。つまりこれは行方不明になっていてる間に手に入れた物だ。そこから何があつたのか割り出せるかと思つたんだが……残念だ。

まあさつき明日香にも言つたように、吹雪が起きるのを待つて直接聞けば良いか。

「じゃあ鮎川先生。俺達はこれで失礼します。明日香は……」
「私は……もう少しここに居るわ」

出来ることはそんなに多くは無いかも出来ない。だけど傍に居ることが明日香なりの出来ることなのだろう。

「分かった。……じゃあ、また明日な」

「また明日もお見舞いに来るっす！」

「またねなんだな！」

そうして軽く一礼して、俺達はレッド寮に戻ることとなつた。

その帰り道、

「ねえねえ久城君。僕ずつと不思議だつただけけど」

「ん!? なんだ翔」

「それ。どうするの? 最初はやや季節外れのお見舞いの品かと思つたけど、それにし

てはお見舞いの品はさっきの果物みたいだったし」

「そう言えばそうなんだな。自分用にしてもそんなに沢山……食べられるのか?」

翔と隼人は俺の持つ袋の中に大量に入っている物に興味津々だ。……まあ一人で食うには量が多すぎるのは分かる。

「俺だけじゃないし大丈夫さ。……むしろ場合によっては足りないかもしれない」

いやまあ貢物なもので奮発せざるを得なかったんだよ。翔も隼人も首を傾げている中、俺は苦笑しながらそう返した。

その日の夜。自室にて。

『ほう………ほう。これは中々』

「……どうだ雪の女王。貢物はお気に召したかな?」

俺は目の前に実体化している雪の女王にそう呼びかけた。

ダークネスとの一戦と、十代を助ける時に雪の女王の力を借りた件。あの時の礼として、雪の女王は俺に貢物をよこすよう要求してきた。

あの時、俺に出来ることなら後で何でもすると言った手前断ると言う選択肢はなく、今日十代の見舞いの品を買うついでに購買部で探したわけだが、正直何を渡したら良い

か分からない。

なので雪の女王というくらいだから、これならいけるかと思いきや大量に購入したのが、『うむ。存外悪くないな。このハーゲン○ッツという甘味は』

「気に入ってもらえてホツとしたよ」

雪の女王はスプーンで少しづつ掬い、仮面の奥にひよいひよいと運んでいる。よつしや！ 流石ちよつとお高いアイスことハーゲン○ッツ。何とか雪の女王に気に入ってもらえたみたいだ。

念のため購買部に置いてある全フレーバーを買い込んだからDPが割と飛んだが、最悪機嫌を悪くしたらそこら中氷漬けにされる可能性もあったからな。それに比べりや大分マシだ。

『……………む!』

雪の女王がそこでアイスを掬う手を止める。その視線の先には、アイスに目が釘付けになっているレティシアの姿があった。……………もしかして、

「レティシアも食べたいのか?」

『あう。だ、大丈夫。我慢するの。だけど……………美味しそうなの』

『ぐわあああつ?! 我が運び手よ。我慢するのは良いが力が……………力が入ってるってぎよえ〜っ!』

顔をフルフル振って大丈夫だと言うレティシアだが、その視線はハーゲン○ッツから外れない。……あとその分ネクが大変なことになってるからもうちよつと優しくしてあげような。

雪の女王はそんなレティシアの様子を見て、何か考えているようだった。そしておもむろにレティシアの方に向き直ると、

『ふっ。幼子よ。妾は今機嫌が良い。一つくらいなら下賜してやらんでもない』

『良いのっ!?!』

『ああ。……ほれ。もつと近う寄るが良い。好きな物を選ぶが良からう。……ただしラムレーズン味は妾の物であるからな。選んではならぬぞ』

『うんっ！　ありがとう女王様』

……意外に優しい所もあったよ雪の女王。レティシアがストロベリー味を選んで顔をほころばせているのを見てなんかほっこりしてる。

こうしてどうにかこうにか雪の女王への貢物も上手いきき、雪の女王は一応気が向いたら協力してくれることになった。

まあ時折ハーゲン○ッツ（ラムレーズン一つと他は気分で変わる）を買わされること

になつたが、契約料としては安い……のか？

ちなみにこれは余談だが、

『久城君！　ちよつとやることがあつて出てこれなかつたけど元気だつたかい？

……それと、やあ雪の女王。君がハーゲン○ッツが好きだなんて意外だつ』

『騒がしいな。無礼者め』

いつもの通り急に現れて話し始めるデーだつたが、雪の女王が食べている所に話しかけたら氷漬けにされてた。……優しいのは子供にだけっぽい。

キイキイ。

またか。俺は鳴き声から窓の外に舞う蝙蝠を見てすぐにカーテンを閉める。

それにしても、この所やけに蝙蝠が多いな。何か変なことの前触れじやなきや良いんだけど。



時は少し遡る。

キイキイ！

「フフツッ！　ご苦労様。さあ我が僕よしもべ。アナタの見聞きしたものを教えてちょうだい」
自らの僕たるコウモリを優しく撫でながら、その女は自らの棺に腰掛け優雅に微笑む。

腰まで伸びた緑色の長髪。血のように紅いドレスを着こなす妖艶な雰囲気的美女。その名はカミューラ。吸血鬼一族の末裔にしてセブンスターズの一人である。

カミューラは用心深い性格であった。いつも事前に戦う相手について調べ上げ、デュエルにてどう動くかを頭の中で綿密にシミュレーションしてから戦いに臨む。

今回も、戦いの先陣を切るダークネスにコウモリを張り付けることで、戦う相手がどの程度の者か探る腹積もりだった。

僕のコウモリと感覚を同調し見聞きした事柄、特にデュエルの内容を確認する。……だが、そこでカミューラの予想だにできなかったことが起きた。バランスが人質（正確に言うとそのドサクサで溶岩に落ちかけた十代）を救出したのだ。

結果ダークネスは敗北。そしてバランスも去っていくのだが、コウモリも気になったのか空からそつとバランスの後をつける。だが、

グルグルルッ！

キイキイツ!?

途中までは追いかけたものの、森の中で見失った挙句大きな鳥に威嚇されて追い払われてしまったようだ。コウモリ自身の戦闘力は低い。それも仕方ないことだと、カミューラは大きくかぶりを振る。

しかし結果として、カミューラの中に balanサーへの疑念が浮かび上がった。元々 balanサーはアムナエルの代理だという話だが、アムナエル自身も謎の多い人物だ。信用できない。

「少し調べてみた方が良さそうね。差し当たっては……そう」

カミューラは島の大まかな地図を取り出し、balanサーを見失った森、そしてその先にある物に目を付ける。そこにあったのは、

「オシリスレッド寮。……落ちこぼれの集まりだというけれど、まずはここから調べてみましょうか」

スパイが素顔を晒す時



「はあああつー！」

『うおおおつー！』

セブンスターズの拠点の一つである洞窟内で、二人の雄叫びが響き渡った。

互いの拳が片や腹を痛烈にめぐり、片や砕けるとばかりに顔面に突き刺さる。

繰り返される拳打の応酬。一撃ごとに踏ん張っているはずの足がよろめき、それでもなお立ち続ける意地の張り合い。

まるで一昔前の少年マンガにでもありそうな殴り合いだが、

『やってるのが仮面俺の男とアマゾネスっていうキワモノなんだよなあ』

そうポツリと洩らしながら、俺は仮面の奥で相手と同じく獰猛に笑っていた。

ダークネスとの一戦から数日。

十代は目を覚ましたもののまだ本調子でなく、吹雪はまだ目を覚ましていない。明日香は毎日見舞いに行っているのだが、いつになったら吹雪は目を覚ますのやら。

ただ十代や吹雪の有り様を見て、鍵の守り手達は各自何か思う所があるようだった。より深く闘志を燃やす者。友人の有り様を見て心を痛める者。まあそれは様々だ。

そしてそれぞれが次の戦いに備え、一層気を引き締めている時、俺はと言うとだ。

『ふむ。体調が思わしくないとこの事だったが、大事ないかアムナエル?』

「お氣遣い感謝致します。まだ万全とまでは申せませんが、少しずつ自らの決戦に備えて整えている所でございます」

肩パットの付いた灰色のフード付きマントを羽織り、素顔を口元に巻いたマスクと赤い飾り布で巧妙に隠した男。アムナエルこと大徳寺先生の後ろにこそつと佇んでいた。

いやだって、いくら何でもずっと代理権だけじゃ色々問題になるんだよ。勿論大徳寺先生の体調は最悪。本音を言えば顔を出さずに何とか誤魔化しながら、ずっと学園で養生しつつ教鞭を執っていてほしい所だが、本人の強い希望もあつて顔を出してもらった。

周りは相変わらず濃い面子ばかりで、長くこんな所に居たらどんな影響が出るか分からない。

今日はさっさと用件を終わらせて、また大徳寺先生には養生してもらわないとな。

『さて、早速だが本題に入るとしよう。……ダークネスが敗れた。次に動く者は誰か?』
相変わらず声だけ響く影丸理事長の言葉に、それまで張り詰めていた空気がさらに重くなる。

そりゃあいきなりチーム戦のこちらの先鋒。しかも相当な実力者が落ちたのだ。空気が悪くなるというのも仕方がない。

静まる洞窟内の広間。そして一拍の間を置いて、
カツン。

洞窟にはあまり似つかわしくないヒールの音が響き渡る。そして一步前に踏み出してきたのは、腰まで届く長い緑髪で赤いドレスを纏った妖艶な女性だった。首元に巻いたウジヤト眼の刻まれたチョーカーがまた異彩を放っている。

何アレ? 凄まじく色っぽいだけ……何か手を出しづらい感覚がある。何というのか、綺麗なバラには棘があるって言葉がとても似合う感じだ。

『カミューラか。……良かろう。では次に戦う者はカミューラに』

「お待ちになつて。……その前に、ここで一つはつきりとさせておきたいことがあります。宜しいかしら?」

『聞こう』

理事長の言葉を遮り、その声を響き渡らせるカミューラ。理事長は遮られたことに別段気を悪くもせず、カミューラに続きを促す。

「私が問い質したいのは……アナタのことよ。 balanサー」

『……何かな?』

カミューラはビシツと俺を指差す。何か嫌な予感がしながらも、俺はなるべく怪しまれないように返す。

「まあー。しらばつくれるのがお上手なこと。だけどこれを見てもそんな余裕が通じるかしら?」

キイキイ。

そこに飛んできたのは一羽のコウモリ。コウモリは差し出されたカミューラの肩にそつと乗り、カミューラは優しくコウモリを撫でる。

コウモリ……何か嫌な予感が増大してきたんだけど。

「私は誇り高き吸血鬼一族の末裔。そして我が僕であるコウモリが視てきたことを私も視ることが出来る。それによると……この前のダークネスの一戦。アナタは学園側に利する行動をとったわよねえ。人質になっていた生徒二人を助けて」

ギクツツ! もしやあれが見られてたのか? ……あつ!? そう言えばあの時コウ

モリが空に飛んでたわっ！ 大鳥がずっと気にしていたからおかしいとは思っていたけど、デュエルの後すぐに跳ばされたからすっかり忘れてた。

「考えたくはないけど……まさかアナタ。学園側に通じているスパイ……なんてことは無いわよねえ？ 戦いの後、森でアナタのペットに我が僕が追い払われてしまったので正確ではないけれど、最後に向かったのがその森の近くのオシリスレッド寮だなんてことも無いわよねえ？」

ペット？ ……森ってことは大鳥達の事か？ どうやら大鳥はコウモリに気づいていたから、追ってこないように撃退してくれていたらしい。助かったぜ。

ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべながら、一つ一つの確にこちらの退路を塞いでくるカミューラ。……こいつ絶対DSだな。間違いない。

この分だと俺の素顔にも当たりを付けている可能性が高い。直で突き付けてこないのはまだ確証はないためか、あるいは言い訳をさせてボロを出すのを待っているのか。

大徳寺先生は何も言わない。……いや、言う必要があまりないと言うべきか。何故なら、

『……………フツ。ハツハツハツハ。いやあお見事お見事。まさかそこまで調べがついているとは参った。カミューラの情報収集力がここまでとは』

「褒め言葉として受け取っておくわ。……それで？ 今のは自白と捉えても良いのかし

ら？ スパイのバランサーさん」

俺がつい笑ってしまつたのに対し、カミューラは余裕の面持ちでさらに追及する。勝つた……と思うよなあ。だけど残念。その質問は織り込み済みなんだよ。

『ああ。大体は正しい。確かに俺は……この通り、学園側の人間だ』

俺はそこで敢えて自分で仮面を外して素顔を見せる。カミューラの顔が獲物を捕らえた狩人のように笑みを浮かべる。やはり素顔はバレていたか……あるいは候補に挙がついていたつてとこか？

その言葉と共に周囲からの圧力が急激に増す。そりやそうだ。学園側の人間がこの場に紛れ込んでいるんだから。だが、

「だけど誤解しないでもらいたい。確かに俺は学園側の人間だが、こちら側の人間でもあるのだから」

「……どういうことかしら？」

その言葉にほんの僅かな雲行きの変わりようを察したのか、カミューラが笑みを止めて真顔でこちらを見る。

「なに。簡単なことだ。俺の事はアムナエル、学園の鮫島校長、そして既に影丸理事長もご存じだということだよ」

「なっ!？」

おうおう驚いてるな。してやったりという奴だ。出来れば本来の予定通り自分から切り出した方が話のペースを掴みやすかったのだが、先にカミューラに問い質された時はちよつと焦ったな。

このセブンスターズとの戦いは、下手をすると闇のデュエルで学園に大きな被害が出る。人的被害は当然として、場合によっては学園の継続そのものに関わりかねない。流石にそうなつては理事長も困るはず。エネルギーを集める伝手が減るわけだしな。

なのでそれを調整するために、敢えて学園側から事情を知っている第三者として用意されたのがこの俺均衡を取る人、バラランサーである……というのが、以前理事長に渡した代理の旨を書き記した手紙に一緒に書いておいた内容だ。

「俺の役割は、今回の戦いが滞りなく進むように調整すること。明らかに必要以上の被害……例えば先のダークネスのように、鍵の守り手以外にまで被害が出そうな場合は介入させてもらう。これも当然了承は既に取つてある」

まあ逆に、これも例えばだけど……学園側が不正、セブンスターズの一人を多人数で袋叩きにするとか守り手以外の人がデュエルするなどの場合はこちらにも介入する。審判役みたいなものだ。

もちろんこれらは表向きの理由だ。実際は理事長への抑止力も兼ねている。これでも理事長が来るのを躊躇わせられれば良いんだが……どうせ気づいてるよな。

という諸々を説明すると、カムミューラは理事長に確認を取った後ものすごい形相でこちらを睨んでくる。口元が大きく裂け、吸血鬼らしい鋭い牙がむき出しになる様は実におっかない。……いや目論見通りにいかなかったからって怒らないでよ!!

「……という訳なので」

俺はそこで仮面を被り直す。

『仮に学生としての俺を見かけたとしても、基本的に初めて見た風に装ってほしい。……それと、戦いの日取りなども事前に知らせてくれれば幸いだ。それに合わせて部外者を締め出したり準備が出来るのでな』

そう言い終わると、大徳寺先生は何も言わずに大きく頷いて応えた。これで少しでも他のセブンスターズ達も落ち着いて動いてくれれば良いんだが。

『……では、改めて皆に問おう。次の戦い、我こそはと思う者は居るか？ それともこのままカムミューラが行くか』

俺の説明も終わり、一区切りついたところで再び理事長からの呼びかけが入る。未だ広間の中心にはカムミューラが立っているの、このまま何もなければカムミューラが選ばれることになる。……だが、

『申し訳ありません。今回は私、順番を先送らせていただきますわ。少し調べたいことも出来ましたし……まだ疑いが完全に晴れた訳ではありませんのよ』

カミューラは自身の順番を先送りにする。その際きつちりこちらに睨むような視線を向けてきたので、まだ監視の目を切らすつもりはなさそうだ。……これからコウモリには注意しないとな。

そうして動くはずだった者が居なくなつたため、

「ならば、私が行こう」

『……タニヤか。良いだろう』

代わりに動いたのは、褐色肌の女戦士だった。赤銅色の髪を後ろでまとめてポニーテールにし、惜しみなく晒すその両腕は筋肉質。しかししなやかさも兼ね備えたまさに肉体美という奴だ。

片手にだけウジヤト眼の刻まれた手袋を着けているのが気にかかるが、その容姿は紛れもなくアレ。いわゆるアマゾネスという奴であった。

アマゾネスは婿を探す

突然だが、今回の戦いはセブンスターズ側にもルールが幾つかある。

例を挙げるなら、誰か一人が鍵の奪取に挑んでいる間、他のメンバーは手を出さない
“ というものだ。これはただでさえ癖の強い面々が、各自勝手に動いてメンバー同士で潰しあうことを防ぐためでもある。

例外として、現在挑んでいるメンバー自身が助けを求めた場合というのがありますが、それはあまり起こりそうにない。

つまりは次に挑む者としてタニヤが選ばれた以上、タニヤ自身が望まない限り他のメンバーへの注意は多少減らしても良いということだ。

これには本当に助かった。何故なら、

「バランサーだったか？ ……じゃあバランつちね！ ねえバランつち。アナタタニヤのお婿さんにならない？」

『勘弁してくださいお願いしますっ！』

こんなのを何人もまとめて面倒見てたら俺どうしようもなかったと思う。

一応ではあるが調整役、審判役を公言した以上、次に挑むメンバーの事を知る必要がある。そんなわけで今回の招集が解散する時、タニヤにちよつと良いかと呼びかけたらこれだよチクシヨウっ！

「……あく。では balan サーよ。私は先に戻っている。……仲良くな」

いやちよつと行かないでくださいよ大徳寺先生っ!? アムナエルモードで良いから残つてくれよ！ だが俺のそんな声なき思いも虚しく去っていく。おのれ大徳寺先生。見捨てられた恨みは必ず晴らすからなっ！

そして洞窟に残った俺とタニヤの二人なのだが、

「ねえどう？ どう？ わたしい、これでも尽くすオンナだから、balan っちもきつと気に入ると思うんだあ」

さりげなく膝を曲げ、視線を敢えて上目遣いにしながら軽く自身の唇に指をあてるタニヤ。

……なんだこのキャピキャピ具合は。さつきメンバーの前で名乗りを上げた時の凛々しい仕草とはまるで別物だ。口調なんかやや甘えるように巻き舌気味になつてるし、押しもやたら強くグイグイ来る。

俺が困惑して答えられずにいると、

「……フツ。あまりこのやり方では良くなさそうだな。ならやはりこちらの方が自然か」

すぐにさつきまでの媚びたような雰囲気が無くなり、最初の女戦士然とした雰囲気に戻る。……助かった。どうやら今のは彼女なりのジョークか何かだったらしい。

『ああ。ぜひそうしてくれ。今みたいな冗談は心臓に悪い』

「うん？ 冗談ではないぞ。私はかなり本気で婿に来ないかと誘っているのだが？」

マジかっ!?! それはどういふことかと話を聞いてみると、なんともんでもない答えが返ってきた。

タニヤがセブンススターズに入った理由というのが、自分の婿となる強い男を探して自身の里に連れ帰ることだという。つまりは大掛かりな婚活である。

「三幻魔なるものに私はあまり興味はない。ただ、私の婿は心と身体を滾らせる強き男でなくてはならない。鍵の守り手はさぞ私を滾らせてくれると期待していたが、お前も中々のものだぞ」

タニヤはニツと笑って続ける。

「バランスは以前ダークネスとの戦いを見て実力は高いと判断し、先ほどカミューラの前で堂々と弁じてみせた胆力も見事だった。そしてその時に見せた面構えも悪くない。婿としての資格は十分だ」

『お眼鏡に合ったのは誉め言葉として受け取ろう。……だけど悪いが、俺はそういう事は考えていないんだ』

ほとんど今日会ったばかりの相手からプロポーズされたとして、そこですぐOKを出す奴というのは少数派だと思う。こういうのはまずお互いを知ってからだと思うんだ。「そうか……それは残念だ。やはり当初の予定通り鍵の守り手にアタックするとしよう。……それでも居なかつたらやはりお前を無理やりにも」

『安心しろよタニヤ！ 鍵の守り手はどれもタニヤの心を滾らせる強い男ばかりだともハッハッハ！ ……だからまた俺の方にアタックしないでね』

スマン十代や万丈目に他の皆。この肉食系女子は任せたぞ。俺はどことも知れぬ十代達に詫びの意味を込めて静かに合掌した。

『よし。自己紹介はとりあえずここまでにするとして。鍵の守り手と戦う訳だがどういう流れで行く？ 俺としてはあまり学園や生徒に被害が出ない形が望ましいのだが』
そこでやっと本題に入る。戦い方は基本各自の裁量に任されているので、俺がするのはあくまで調整だ。だから大まかな流れを聞いておきたいのだが、

「うむ。やはり闘いはそれにふさわしい場所ではなくてはな。ということ、現在これを

建設中だ」

そう言つてタニヤが渡してきたのは……図面？ 見るとどこか古代ローマの闘技場を思わせる建物の設計図が出てくる。ふむふむ成程……つて!? これを建設中っ!?

『……これを本気で造るつもりか』

「ああ。既に資材並びに場所も確保済みだ。本来ならカミューラが戦っている間に完成させる予定だったが、順番が繰り上がりになったからな。宣戦布告は完成と合わせて行う予定だ」

本来なら莫大な予算やら時間がかかる作業のはずだが、その辺りはなんせ理事長がバックについているからな。権力やら何やらでゴリ押しして大まかな土台は既に出ていた。今のペースならあと一週間ほどで完成だという。

ちなみに場所は大鳥達の居る森を抜けて少し行った所にある岩場。森の中に造っていたら、確実に三鳥激怒案件だったので少しホツとする。

『わざわざ造らなくとも、学園のデュエル場を使えば良いだけだろうに』

「私と私の媚候補の仮宿も兼ねているのでな。場合によっては新居になるかもしれぬ。気合を入れて造らねば」

新居つて何さっ!? えっ!? ここに住む気か? 里に連れ帰るんじゃないのっ

!?

調整役って言ったって、これをどう調整しろって言うんだよっ!?

前回の招集から数日が経った。

その間に起きたことだが、まず十代が目を覚まして無事復帰した。

皆はとても喜び、万丈目は「ふん。奴めようやく戻ったか」とぶつきらぼうに言いながら、だけど少しだけ顔をほころばせていたな。

しかし起きてから十代の様子がどうも変だった。普段はそうでもないのだが、時折物思いにふけて気分を沈ませるようになったのだ。まあ流石の主人公も、闇のデュエルであんな目に遭ったらそういう事もあるか。

元気づけるために今日、翔と隼人が十代を誘って遊びに行くとか言っていたな。確かに学園に新たに出来た室内温泉だったか？俺も来ないかと誘われたが、今は色々と立て込んでいるので今回は見送った。

だが同じく医務室にいる吹雪はまだ目を覚まさない。毎日明日香が見舞いに行っているのだが、一体いつになったら起きるのやら。

早い所起きてダークネスとして活動していた頃の話を聞かせてもらいたいが、魂が封印されたとなるとそこは望み薄かもな。

そして、今ちよつと問題が発生している。それというのも、

「皆の者。今日もよく働いてくれた。感謝するぞ！」

タニヤが建設中の闘技場にて、目の前に整列する者達に声をかける。その者達というのがなんと、皆この学園の生徒なのだからたまらない。お前ら何でこんな所で働いてんだよ!?

俺がそのことを知ったのはつい二日前の事。

どうやらタニヤは当初その有り余るパワーで闘技場を建設していたのだが、流石に一人ですべてこなすのは少々大変だと考えたらしい。いやもつと早く気づけよと思ったがそこは敢えて突っ込まない。

ならばどうするか？ 人手を増やせばいい！ そのシンプルな結論に至ったタニヤは、自身が手懐けている大虎バースに命じて生徒を攫わせ労働力とした。

そこだけ聞くと恐ろしい話だが、

「ほらっ！ これ今日のご褒美！ 明日もまたよろしくね！」

「ありがとうございますっ！」

「おおっ！ これで新作のバックが買えるぜ！」

意外に攫われた方の生徒達からは受けが良かったりする。それもそのはず、生徒の大半はオシリスレッド。つまりは万年金欠の奴らだ。おまけに毎日キツイ通学路を登下校しているので、イエローやブルーより肉体的に強い者が多い。

なのでバースに攫われた当初は怯えていたものの、肉体労働にすぐに馴染んで一種のアルバイトとして額に汗して働いていた。用意された食事も、レッド寮の質素な食事に慣れていた生徒達からすればむしろ質が上がって好待遇だった。

バースもさぼったり逃げようとしなければおとなしいし、タニヤも日当をきっちり払ったので不満も少なかった。

結果として互いにWIN WINの関係（一部のレッド以外の生徒は除く）となったのだ。

『これ思いつきり学園側に被害が出ていると思うんだが?』

「数日程度なら大したことは無いはずだ。それに、こういう事の調整をするのもお前の仕事なのだろう? バランサー」

『……授業を数日サボる程度なら確かにな』

タニヤは何でもないようにバースを撫でながら返す。

人数がやや多いが、攫われたことが考慮されればあとで補習を受けることで取り戻せる。その点も踏まえて今回の事を引き起こしているのなら相当強かだ。

「今日で闘技場の部分はほぼ完成だ。早ければ明日、遅くとも明後日で全て完成するだろう」

『OK。じゃあ宣戦布告は余裕をもって三日後ということに構わないか?』

「ああ。それで良い」

ふう。目途が立った以上、あと俺がやることはそんなにない。場所の指定はタニヤがやるだろうしな。ベースでも差し向けて伝令代わりにするとか。

そうして内心ひとごちちついていると、

「……うむ。いよいよ日取りが決まった所で、バランスヤよ」

『何だ?』

「決戦の前に肩慣らしをしておきたい。一つ相手をしてはくれまいか?」

ちなみに拒否権は無い。タニヤの眼と、その後ろでのっそりと立ち上がるベースの仕事がそう言っていた。

遊兎対タニヤ その一 拳を交えて

俺達はいつもセブンスターズの集合場所に使っている洞窟の広間まで移動した。

あの闘技場で戦っても良かったが、万が一にもデュエルがエキサイトし過ぎてぶつ壊すなんてことになったら目も当てられないからだ。あれ以上予定を伸ばして生徒を働かせられない。

「先に言っておくが、もちろんこれはダークネスのしたような闇のデュエルなどではない。負けた所で魂を封印されるということもない。そもそも魂など要らぬしな。……お前は欲しいが」

『婿にはならないぞっ！ だが闇のデュエルじゃないと聞いて安心したよ。これで心置きなくタニヤ。お前に勝つことが出来る』

「言ってくれるな。だが、男とはそれくらい強気の方が私の好みだ」

開始前から軽く言葉のジャブを交わしあい、互いに位置についてデュエルディスクを展開する。

大虎のバースはタニヤの後ろで丸くなりながら、グルルとこちらに向けて唸り声を上げてている。怖っ!? だけど、前に大鳥に睨まれた時に比べたらまだ比較的マシだっ！

俺は腹に力を入れてその視線を受け止める。

「バースに臆さぬその胆力は良し。ではデュエルを始める前に……ここに戦いの行方を左右する二つのデッキがある」

その言葉通り、タニヤは両手に一つずつデッキを持つてこちらに見せてくる。

「二つは『知恵』のデッキ。一つは『勇気』のデッキ。どちらでも好きな方を選ぶが良
い」

『戦うデッキを選ばせてくれるという訳か。面白い』

さて。どちらと戦うか。正直知恵比べというのはどのデッキでも大なり小なりやっている。それなのにわざわざそう言うということは、かなりテクニカルなデッキと見た。

対して勇気というのはどうにも想像がつかない。……折角の純粋な腕試しのデュエルだ。タニヤの事を知るためにもこちらの方にするか。

俺が勇気のデッキを選ぶと、タニヤはよろしいと一言デッキをディスクにセットする。

さて。スパイとしては少しでも情報収集をしたいところだが、それはそれこれはこれだ。今はしっかりとデュエルを楽しもうじゃないか。

「『デュエル!!』」

遊兎 LP4000

タニヤ LP4000

『先攻は俺が貰うぞ……ドロー!』

俺は引いたカードと手札を確認する。初手としては中々に悪くない。序盤からガンガン圧力を掛けさせてもらうか。

『俺はフィールド魔法『ロボットミーコーポレーション』を発動!』

周囲に逆さまの生命の樹を模した施設が展開される。召喚の負担軽減と、毎ターンサーチが出来るこれが最序盤からあるのは結構大きい。

「いきなりダークネスとの戦いで使ったカードか」

『なら効果も当然知っているよな? 俺はロボットミーコーポレーションの効果により、幻想体の生け贄を一つ減らすことが出来る。よって星5の『幻想体 シャーデンフロイデ』を守備表示でそのまま召喚。そしてクリフォトカウンターを2つ乗せる』

シャーデンフロイデ DEF2200 CC2

俺の場に現れたのは、大きな黒い鋼鉄の箱のような何かだった。二つのレンズのよう

なものがそれぞれ左上と右下の隅についている。

そして正面中央には手のひらサイズの鍵穴があつて、その中から灰色の眼のようなのがギョロギョロと辺りを見渡している。

ギョロ！

おつと。今一瞬こつちを見たぞアイツ。なんか目を合わせたらヤバそうなので素早く目を逸らす。ずっと向こうを向いててくれよ。

『俺はさらにカードを2枚伏せ、ターンエンドだ』

フィールド魔法合わせて3枚の魔法・罫は出し過ぎかと思つたが、最悪大嵐か何かで一掃されるとしても1枚はフリーチェーン出来る。初手としてはこんなもんだらう。

「私のターン。ドロウ。初手から守備力の高いモンスターで守りに入つたか。だがこのデッキ相手ではそれは失策だな。私は手札から『アマゾネスの剣士』を攻撃表示で召喚！」

アマゾネスの剣士 ATK1500

タニヤの場に現れたのは、一振りの剣を構えた筋骨隆々のアマゾネス。……マズいな。剣士は確かにシャーデンフロイデとは相性が良い。だが、

『ここでもシャーデンフロイデの効果発動。1ターンに1度、相手がモンスターを召喚、反転召喚、特殊召喚した時、相手に800のダメージを与える。くらえっ！』

召喚された剣士とシャードンフロイデの視線が交錯する。その瞬間、シャードンフロイデに変化が起こった。下部が赤黒い肉塊に覆われ、そこから血と錆に塗れたアームが生えてきたのだ。……お前箱なのに動けるんかいっ!?

そしてガシヤガシヤと音を立てながらタニヤに詰め寄り、アームの一本を振りかぶって叩きつける。

「ぬうっ!」

タニヤ LP4000↓3200

『先制パンチはこつちが貰ったぜ』

「まさか召喚時にダメージを与えてくるとはな。だが勝負はこれからだ。まずは……この邪魔くさいフィールドを誇り高きアマゾネス達の戦いの場にするでしょう。私は手札からフィールド魔法『アマゾネスの死闘場』を発動!」

げっ!? フィールド魔法の張替えだと。……マズイっ!

現代ではルール改定されているが、この時代のルール上においてフィールド魔法は常に一枚のみ。つまり既にフィールド魔法が出ている状態で追加で出された場合、先に出ていた方が破壊される。

タニヤの場から巨大な檻が展開されて俺達を囲い込んでいく。そしてその展開にこちらの施設が巻き込まれ、ロボットミーコーポレーションが破壊される。

『うぐつ!! ……ロボトミーコーポレーションの効果。破壊された時、場の幻想体に乗っているクリフトカウンター、PEカウンターを全て取り除く』

シャーデンフロイデ CC2↓0

参つたな。ロボトミーコーポレーションが破壊されたのは当然キツいけど、効果で強制的にカウンターも取つ払われるから嫌なんだよな。PEカウンターは元々ないからまだ良いとして、シャーデンフロイデのCC0の効果はデメリツトしかないからな。

あと何だこのフィールド魔法は？ こんなカード有ったつけ？ アニメオ리지ナルカードか？

「アマゾネスの死闘場は、モンスターとの絆を互いの魂をかけて証明する神聖な場だ。発動した時、互いのLPを600回復する」

遊児 LP4000↓4600

タニヤ LP3200↓3800

『こつちまで回復してくれるとはな。しかし、絆を魂をかけて証明するとはまた大仰な言い回しだな』

「お前には分からないかもしれないが、デュエルとはアマゾネス一族にとつて神聖なものだ。戦う際には互いの全身全霊を……いや、それをも超えたものを出してぶつかり合わなければならない。そしてそれはプレイヤーもモンスターも同じなのだ」

よく分からないが、つまりは互いに本気でぶつかり合おうってことか？ なら俺は基本的にいつも本気だぜ。あと多分十代も。

「さあ行くぞ！ 私はアマゾネスの剣士で、シャーデンフロイデに攻撃っ！」

『そりやまあそう来るだろうな。仕方ない。迎え撃てシャーデンフロイデ』

敢えて攻撃力の低いアマゾネスの剣士の側から仕掛けてきた。剣で叩きつけるように切りつけるが、シャーデンフロイデは箱の側面から高速回転する丸鋸を展開して迎撃。振り下ろされた剣は火花を散らしながら弾き飛ばされる。

「シャーデンフロイデは守備表示。よってアマゾネスの剣士は破壊されない。……そしてアマゾネスの剣士の効果発動！ このカードの戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは、代わりに相手が受ける」

『ぐわっ!』

遊兎 LP4600↓3900

弾き飛ばされた剣がそのまま俺に向かい、俺の腕を掠めて地面に突き刺さる。……衝撃はあるけど俺の身体に傷はついていない。確かにタニヤの言うように闇のデュエルではないな。

しかしアマゾネスの剣士は厄介だ。シャーデンフロイデは場に居続けることで相手の召喚にプレッシャーをかけるのが大きな役割だが、ダメージを強制的に肩代わりさせ

る剣士が既に場に居るのだから、向こうはこれ以上無理に召喚しなくともよい。

このままジワジワダメージを与えられたらこつちが不利だ。これはどうしたものか。「考えている所悪いが、ここでアマゾネスの死闘場の効果発動！ モンスター同士の戦闘後、互いのプレイヤーはLPを100支払うことで、相手プレイヤーに100ダメージを与えることが出来る。私は当然支払う。勿論やるやらないは任意だけど……どうする？」

その言葉と共に、タニヤの場にタニヤそっくりの人影が浮かび上がって拳を構えた。どうやらLPを払うとあれが出てくるらしいな。

つまりこれは、自分のLPを使って相手のLPを削っていくチキンレースか。何も考えずに蛮勇を振るえば自滅。かと言って慎重が過ぎれば相手にペースを持っていかれる。……なるほど。それらを総合的に見ての「勇気」って訳ね。ならば、

『良いだろう。俺も100支払って迎え撃つ』
「良い覚悟だ。行くぞ！」

LPを払うと決めると、俺の場にも俺のような人影が浮かび上がる。頼むぞ俺っぽい奴。

「はあああつ！」

『うおおおつ！』

互いの人影同士が走り出し、何と互いに顔面目掛けて拳を繰り出した。そして、

「ぬうつ!! 中々に良いパンチを持つてるじゃない」

『あたつ!!』

互いに拳が直撃したのと同時に、俺の頬に衝撃が走った。見るとタニヤの方も何かに殴られたかのように軽く頭を振りながらニヤリと笑う。……これはまさか!?

「モンスターだけに戦わせちゃ悪いからね。死闘場の効果でダメージが発生すると、プレイヤーの同じ箇所にもダメージが入る」

遊兇 LP3900↓3800↓3700

タニヤ LP3800↓3700↓3600

タニヤはガツンと自身の拳をぶつけ合い、そのままデュエルディスクを構え直した。

『シャーデンフロイデの効果。戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを3つ乗せる』

シャーデンフロイデ PE3

「私はカードを2枚伏せてターンエンド。痛みの恐怖に打ち勝ち、勇気をもって勝利を掴む! それがこの勇気のデッキ。……さあ。拳で語り合おうじゃないか」

マジか……急にリアルファイトが始まっちゃったんだけど。

遊兎対タニヤ その二 軽率さの代償

遊兎 LP3700 手札2 モンスター シャーデンフロイデ 魔法・罾 伏せ2
 タニヤ LP3600 手札2 モンスター アマゾネスの剣士 魔法・罾 アマゾ
 ネスの死闘場 伏せ2

『俺のターン。ドロロー』

さて。カードを引いたものどうしたものか。

正直アマゾネスの死闘場は数値上ではさほど脅威ではない。モンスター同士の戦闘の度に効果ダメージを与えたり喰らったりする訳だが、両方が発動させても200ずつという少ないものだ。終盤ならともかく序盤ではどうということはない。

問題なのはむしろリアルの方だ。何発も食らっていたらデュエルが終わる前に身体がポロポロになるかもしれない。長期戦はマズい。

『なら……速攻で決めるまでだ。俺はシャーデンフロイデを攻撃表示に変更し、手札から『幻想体 幸せなテディ』を攻撃表示で召喚！』

シャーデンフロイデ ATK1800

幸せなテディ ATK1500

現れたテディベアに向けて、シャーデンフロイデが静かにガンを飛ばす。こいつ自分以外のモンスターが居る時にクリフォトカウンターが減るから扱いづらいんだよな。……まあとづくにカウンターは0だから良いけど。

「攻撃力1500。アマゾネスの剣士と同じか」

『これなら戦闘ダメージは発生せず、俺に反射されることもない。さらに俺は永続魔法『エンサイクロペディア』を発動！俺はシャーデンフロイデのPEカウンターを2つ使い効果発動！』

シャーデンフロイデ PE3↓1

俺の場にタブレットのような物が出現し、その画面に何かが映し出される。

『手札からレベル4以下の幻想体を特殊召喚する。俺が特殊召喚するのは『幻想体 捨てられた殺人者』。そして特殊召喚時に、このカードにクリフォトカウンターを1つ乗せる』

捨てられた殺人者 星3 ATK1400 CC1

画面に映し出された何かの姿を現す。それは凶悪犯が身に着ける拘束具に身を包んだ禿頭の男。首が妙な角度に折れ曲がっているものの、淀んだ眼をして微かに身じろぎをしているので生きていようだ。

他の幻想体達に比べて普通に人型っぽいんだけど、これが精霊として出てきたらそれ

はそれでビジュアルがなあ。

しかし、これで勝ちへの準備は整った。

流れはこうだ。まず幸せなテデイでアマゾネスの剣士に攻撃する。攻撃力は同じなのでダメージは発生せず相打ち。

さらに言えば、テデイには攻撃表示の時1ターンに1度戦闘で破壊されない。これなら破壊されるのはアマゾネスの剣士だけだ。ここでアマゾネスの死闘場が発動するが、1度ならば仕方ない。

その後シャーデンフロイデと殺人者で攻撃すれば、合計3200のダメージ。そして殺人者には、ターン終了時に互いのプレイヤーに400ダメージを与える効果がある。これで合わせて3600ダメージ。

全て決まればタニヤのLPを削り切れることが出来る。

「ほう。場にモンスターを並べてきたか」

『今度はこっちの番だ。幸せなテデイで、アマゾネスの剣士に攻撃！』

テデイがアマゾネスの剣士に向けてトコトコと歩いていく。そしてテデイがアマゾネスの剣士に到達しようという時、

「そんな単純な攻撃が、私に通用すると思うなっ！ リバースカードオープン！ 『アマゾネスの弩弓隊』。このカードは相手の攻撃宣言時に発動可能。相手フィールドのモン

スターは全て攻撃表示となり、攻撃力が600ダウンする」

しまった!? しかも実際のカードでは500ダウンなのに、アニメ版だと600かよ!?

幸せなテディ ATK1500↓900

シャーデンフロイデ ATK1800↓1200

捨てられた殺人者 ATK1400↓800

「迎え撃てアマゾネスの剣士。『首狩りの剣』っ!」

近づくテディを剣士が剣で切り裂き、そのままテディは衝撃を受けて吹き飛ばされる。

『幸せなテディは攻撃表示の時、1ターンに1度戦闘では破壊されない』

「だが戦闘ダメージは受けてもらう」

遊児 LP3700↓3100

「さらにここで死闘場の効果。当然私はライフを支払う」

タニヤの場に再び分身が出現する。……これは俺が払わなかったら一方的に殴られるだけか。ライフでは互いに100減るだけだが、痛みを負うのはこっちだけ。納得いかない。ならば、

『こちらも支払う。勝負だ』

そこで再び分身同士が殴り合い、俺の分身は腹に、タニヤの分身は脇腹に一撃を貰う。
『うぐっ!?!』

「……むっ!?!」

遊兎 LP3100↓3000↓2900

タニヤ LP3600↓3500↓3400

衝撃にたまらず腹を押さえる。……待てよ？ アマゾネスの弩弓隊と言ったら確か?!

「まだだ。アマゾネスの弩弓隊の更なる効果。相手は全てのモンスターで攻撃しなくてはならない」

そう。このカードの一番厄介なのは、下がった攻撃力で攻撃を強制されることだ。俺の場のモンスターは軒並み剣士より攻撃力が下。このままじゃ全滅だ。

『仕方ない。まずはシャードンフロイデで攻撃』

先ほど戦ったが今回は逆の結果に終わる。剣士の剣が今度はシャードンフロイデに直撃し、そのまま鋼鉄の箱を両断する。

遊兎 LP2900↓2600

『死闘場の効果。……俺はLPを支払う』

やっぱりタニヤも支払い、分身同士の殴り合いと共に本体にも痛みが走る。

遊児 LP2600↓2500↓2400

タニヤ LP3400↓3300↓3200

「まだだ。まだもう1体残っているぞ」

『捨てられた殺人者で攻撃。……だがこっちは破壊させない。速攻魔法発動！』 『管理人の弾丸 シールド弾』

殺人者がなんと頭を金属に変化させて突撃していく。流石に両方は無理だが片方は守らなくては。剣士の迎撃を伏せてあつたシールド弾で受け止める。だがその余波までは防ぎきれず、戦闘ダメージがこちらを襲う。

さらに死闘場の効果も発動。……こちらも反撃するが、この調子だと分が悪いな。

遊児 LP2400↓1700↓1600↓1500

タニヤ LP3200↓3100↓3000

『バトルフェイズ終了時、戦闘を行ったことで幻想体達にPEカウンターが乗る。……俺はこれでターンエンドだ。そしてそこで捨てられた殺人者の効果発動。クリフォトカウンターが1つ減り、0になったことでさらに効果発動』

幸せなテディ PE3

捨てられた殺人者 PE2 CCI↓0

クリフォトカウンターが0になったことにより、殺人者が頭を金属に変えて暴れまわ

る。大地に頭を金槌のように叩きつけ、その破片が俺達を掠めて400ダメージを与えた。

遊児 LP1500↓1100

タニヤ LP3000↓2600

捨てられた殺人者 CC0↓1

殺人者のクリフォトカウンターが回復するが、1つではまた次のターン暴走するから変わらない。

しかし燦々たる有り様だ。勝つどころか見事に場を荒らされこっちの手札は0。LPも半分以下まで削られてしまった。こんなことになったのは、

「痛みが怖いか？ だからこんなに攻め急いだのだろうか？ その証拠に、最初の一発に比べて今のターンのお前の拳はまるで身が入っていないかった」

タニヤの言葉は俺の内心を完全に捉えていた。確かにいつもの俺なら、アマゾネスのデツキ相手なら弩弓隊が入っていることを多少は警戒していたはずだ。無理やり攻撃表示に変える効果もあるから、敢えて殺人者は出さずにテイとシャーデンフロイデだけで様子を見るとかな。

ただ俺は死闘場の効果を嫌がって、あまり痛みを受けないように早めに勝負を終わらせようとした。

「恐怖は思考を鈍らせる。お前の力は、心はその程度の物だったか？ これでは私を滾らせるなど到底無理な話だ」

タニヤのどこか失望を孕んだ言葉に俺はハツとする。……俺としたことが肝心なことを忘れていた。

これはちよつと身体への衝撃がデカいけど、どこまで行ってもただのデュエルだ。ならば、

「ふんっ！」

俺は一度仮面を外し、そのまま思いつきり自分の額を殴りつける。目が一瞬チカチカし、じゅんと鈍痛が頭に響く。

「むっ!? 何をっ！」

俺の急な奇行にタニヤが驚いているが気にしない。

「痛っく!? ……やっぱりな。俺が自分でぶん殴った方が痛い」

なら我慢できる。衝撃は確かにキツイけど、あくまでそれはデュエルの範疇でのことだ。必要以上に怖れなくとも良い。俺は軽く額を擦ってから仮面を被り直した。

最近の闇のデュエルの事もあって、必要以上に痛みを避けた結果がこれだ。……なら、俺がやるべきことは決まってる。

「私のターン。ドロロー。何やら考えているようだがそんな余裕があると思うか？ 私は手札から『アマゾネスの吹き矢兵』を攻撃表示で召喚」

アマゾネスの吹き矢兵 ATK800

タニヤの場に、吹き矢を携えた女戦士が現れる。……くっ?!? わりやり押し込んでくる気か！

「行くぞ。アマゾネスの吹き矢兵で、捨てられた殺人者を攻撃」

『相打ち狙いか』

殺人者の攻撃力は、弩弓隊の効果で下がったままの800。金属となった頭を振り下ろして吹き矢兵に叩きつける殺人者だが、やられ際に吹き矢を打ち込まれて共に破壊されてしまう。

そして、相打ちだろうともモンスター同士の戦闘によってまた死闘場の効果が発動する。

『死闘場の効果だが……今回俺はLPを払わない』

「……臆したか。良いだろう。ならば払うのは私のみ。喰らうが良い」

タニヤの分身が俺に向けて拳を放ってくる。拳は肩に直撃し、その部分に衝撃が走る。

遊児 LP1100↓1000

タニヤ LP2600↓2500

「続けて行くぞ。アマゾネスの剣士で、幸せなテディを攻撃！」

タニヤは一気に俺のLPを削ろうと追撃を仕掛ける。テディも攻撃力が下がったままの900なので、たとえ戦闘破壊出来なくとも押し切れると判断したのだろう。だが、

『その攻撃を待つてたぞ。幸せなテディの効果発動！ 攻撃表示の時1ターンに1度戦闘では破壊されず、またこのカードと2回戦闘を行ったモンスターは破壊される』

アマゾネスの剣士はこれで2度目。よってダメージこそ受けることになるが、アマゾネスの剣士は破壊できる。

再び先ほどのように剣がテディを捉えたが、斬られながらもテディはそのモフモフの腕で剣士に抱きつき、そのまま力強く締め上げて破壊する。

遊児 LP1000↓400

「アマゾネスの剣士は破壊されたが、まだ死闘場の効果が残っているっ！」

『俺はライフを払わない。……来るなら来いっ！』

タニヤの分身が俺の頬を殴り飛ばす。よろめきそうになるのを必死にこらえ、俺はキツと前を見据える。

遊児 LP400↓300

タニヤ LP2500↓2400

『そして幸せなテディの効果。バトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターが3つ乗る』

幸せなテディ PE3↓6

「私は一枚カードを伏せてターンエンド。……フフツ。最初はただ臆して打つてこないだけかと思つたが、中々どうして先ほどよりも闘志に満ちている。その仮面の奥底から漏れ出すほどにな」

『ああ。これ以上LPを払ったら、俺の逆転のために使える分が無くなってしまうからな。ここは我慢の時つて奴だ』

手札は0。ライフもあと僅か。下手に戦闘を行えばそれだけでライフを削られていくという最悪の状況。だけど、まだ負けてない。

見てろよタニヤ。お前をデュエルで失望なんかさせないぜ。

遊児対タニヤ その三 変わる拳

遊児 LP300 手札0 モンスター 幸せなテディ 魔法・毘 エンサイクロペ
 デイア 伏せ1

タニヤ LP2400 手札1 モンスター0 魔法・毘 アマゾネスの死闘場 伏
 せ2

正直戦況は微妙だ。俺の手札は0。LPもギリギリだ。掠り傷でも終わりがねないし、相手の場にはモンスター同士の戦闘の度に互いのLPを削りあう死闘場がある。

つけ入る隙があるとすれば、今タニヤの場にはモンスターが居ないという事。直接攻撃であれば死闘場の効果は発動せず、一方的に殴り勝つことが出来る。

だが、タニヤが伏せているあの2枚のカード。あれが気になる。

「どうした？ お前のターンだ」

『ああ。じゃあ行くぞ。ドロ〜っ！』

え〜いどのみち今は引かなきゃ始まらない。俺は気合を入れてドロ〜する。……これほっ！

『まだ俺はツキに見放されちゃいないみたいだぜ。俺は永続魔法『幻想体 古い信念と約束』を発動!』

俺の場に一抱えほどある大きな丸い水晶が出現する。水晶には上下に爬虫類のような何かが見えがみついでいて、上部の爬虫類から鎖が三本伸びて上から吊り下げられている。

『古い信念と約束の効果。場のPEカウンターを3つ取り除くことで俺はカードを1枚ドロウする。そしてこの効果は1ターンに2度まで使用できるため、俺はテディに乗っているPEカウンターを全て使って2枚ドロウっ!』

幸せなテディ PE6↓3↓0

ギリギリの状態でこの2枚ドロウは大きい。ちなみにこれは永続魔法なので、PEカウンターさえあれば次のターンも使えるという優れモノだ。……まあ効果を使ったターンの終了時にコイントスをして、外れたら破壊される上に自分の手札を1枚捨てなきゃいけないけどな。

エンサイクロペディアの効果で殺人者を復活させるという手もあったけど、アイツはターン終了時に互いのプレイヤーにダメージを与えるからな。このターンで決められなきゃ自滅してしまう。

俺は2枚に増えた手札を見て、まだ勝機はあるとキツとタニヤを見据える。

「何か良いカードを引いたようだな。良いだろう。来るが良い」

『言われなくとも。俺は手札から『幻想体 小さな魔女 レティシア』を守備表示で召喚』

レティシア DEF600

俺の場に現れたのは、赤を基調としたフリフリのドレスを纏った少女。……ただ、

『が、頑張るよ！』

『我が運び手よ。我が生け贄が潜入中は出るなど言っていないかったか？ さっさと戻ろう』

『あつ！ そうだったの！』

普通にあれって映像じゃなくて本物のレティシアだよな。ネクを抱きかかえているし。ただ出たは良いけど慌てて口元を押さえて喋ってないアピールしてる。

『……もう良いよレティシア。雪の女王や罪善さんも前に見られてるし、ここまできたら今更だ』

『そうなの？ じゃあこのままでいる！』

『私としては面倒だから戻りたいのだがな』

精霊が味方してくれるというのは以前の事でもうセブンスターズにはバレているし、なら今更一人二人増えた所でそこまで変わらないだろう。

そう言うのとレティシアは嬉しそうに、ネクは若干嫌そうにその場に残る。

そしてタニヤの反応はと言うと……あつ！ ちょこつとだけ微笑ましいものを見るような目をしてる。やっぱり精霊が見えるようだ。

『続けて行くぞ！ 俺は手札から永続魔法『幻想体 ラ・ルナ』をレティシアを対象にして発動！ ラ・ルナトークンを攻撃表示で特殊召喚し、ラ・ルナ本体にはクリフトカウンターを3つ乗せる』

ラ・ルナトークン ATK2200

ラ・ルナ CC3

次に現れたのは古いピアノ。上には火の消えた黒いキャンドルが乗せられ、物騒なことにピアノの脚には黒く変色した人の頭部らしきものが転がっている。

そしてその傍らには、薔薇のような装飾のあしらわれた黒いドレスを着た老婦人が、蛇を象った柄の杖について椅子に腰掛けている。

うゝむ。カードの絵柄でもそうだったけどよく分からんな。多分ピアノがラ・ルナで老婦人がトークンなんだと思うけど。

『す〜い！ ピアノだ！』

対象となったレティシアが老婦人に促されて椅子に座り、ピアノの鍵盤にそつと指をかける。対象にしたモンスターは攻撃できなくなるが、元々レティシアを攻撃に参加さ

せようとは思っていないから問題ないな。

さて。準備は整った。あとはタニヤの伏せカード次第。

『バトルフェイズ。俺はラ・ルナトークンでダイレクトアタック』

レイシアがポロンポロンと演奏を始めると同時に、傍らに腰掛けていた老婦人がそつと鳥を横した仮面を被って場に躍り出る。……いやあんたも仮面かいっ!? 俺も含めて仮面キャラ多いなっ!?

しかしこう見えてラ・ルナトークンの攻撃力は2200。直撃すればタニヤもただでは済まない。さあどう出る？

「毘發動! 『リビンググデッドの呼び声』。この効果で墓地のアマゾネスの剣士を攻撃表示で特殊召喚する」

くっ!? やっぱり迎撃用のカードを伏せていたか。簡単に蘇生できるリビンググデッドは使いやすいからな。厄介な効果を持つ剣士が再び場に舞い戻る。

「どうした? 攻撃してこないのか?」

『したら反射でやられるだろうが! 俺は攻撃せずにバトルフェイズを終了。メインフェイズ2。……ふっ! だけど、俺がただやられっぱなしで終わると思うなよ。ここで俺はટેდეიを守備表示に変更し、レイシアの効果発動!』

『は〜い! プレゼントだよ! 喜んでくれると良いな』

レテイシアは赤いハート形の何かを取り出すと、それがふわりと浮かび上がってアマゾネスの剣士の上に止まる。

『相手モンスター1体を指定し、互いのプレイヤーは1000LP回復するか、1枚ずつドローする。俺は回復効果を選択!』

遊児 LP3000↓1300

タニヤ LP2400↓3400

この効果は相手モンスターが居ないと使えない。やたら死闘場の効果にこだわっているタニヤの事だから、効果でモンスターの特殊召喚を狙ってくると踏んでいたらドンピシャだ。

「やるな。追いつめられていたライフに余裕を持たせてきたか」

『ああ。これでもうしばらくは耐えられる。そしてターン終了時、古い信念と約束の効果でコイントスを行う。……よつと』

俺はディスクに備え付けられているコインを弾き、そのまま手の甲でキャッチする。出たのは……表。

水晶が一度青く光輝いたかと思うと、そのまま黄金色に変化する。成功というエフェクトだ。

ラ・ルナ CC3↓2

さらにラ・ルナの効果によりクリフトカウンターが1つ減り、これで本当にターンを終了する。……さあ。仕切り直しだ。

「私のターン。ドロ。……LPを回復してきたのは驚いたが、それだけでいつまで保つかな？ 私は手札から『アマゾネスペット 虎^{タイガー}』を攻撃表示で召喚。そして効果により、場のアマゾネスと名の付くモンスターの数×400攻撃力が上がる。勿論自身も含めるので場のアマゾネスは2枚。よって攻撃力800アップだ」

アマゾネスペット虎 ATK1100↓1900

むっ!? 攻め手を増やしてきたか！ おまけにあの虎は、場に居る限り他のアマゾネスに攻撃できなくなるという効果がある。まあ自分から剣士に攻撃したくはないが、それでも選択肢が狭まるのはキツイ。

「まだだ。私は手札から魔法カード『アマゾネスの呪詛師』を発動！ これにより、ターン終了時まで私のアマゾネスモンスター1体と、相手モンスター1体の元々の攻撃力を入れ替える。私が選択するのはラ・ルナトークンと、アマゾネスペット虎」

げっ!? ここで攻撃力入れ替えかよ。

ラ・ルナトークン ATK2200↓1100

アマゾネスペット虎 ATK1900↓3000

あくまで入れ替わるのは元々の攻撃力。なので虎は入れ替わった後に自身の効果で攻撃力が追加され、攻撃力が3000まで跳ね上がる。

「多少LPが回復しようが、ならそのLPごと削り切るのみ。行くぞ。アマゾネスペット虎でラ・ルナトークンに攻撃。『密林の王牙』っ!」

技名と共に虎がラ・ルナトークンに飛びかかる。これが決まれば敗北必至。だが、

『させるかつ! 畏発動『階層移動』。これは幻想体モンスターが攻撃対象になった時発動可能! そのモンスターを手札に戻してレベルが1つ上か下の幻想体モンスターを代わりに呼び出すか、攻撃対象を場の別の幻想体に移し替えることが出来る。俺は2つ目の効果を発動! 幸せなデディに攻撃を移し替える』

ラ・ルナトークンに攻撃が決まる直前、横からデディが割り込んで虎の攻撃を受け止める。しかし守備表示ではデディに破壊耐性は無く、そのまま弾き飛ばされて破壊されてしまった。済まないデディ。

「ギリギリで躲したか。だが……アマゾネスの死闘場の効果発動! 私は当然ライフを支払う」

『……良いだろう。俺もここはライフを支払う』

守ってばかりでは勝てない。なら、余裕のあるうちに少しでも削る。

遊兇 LP1300↓1200↓1100

タニヤ LP3400↓3300↓3200

ライフを払うと同時に俺達の分身が殴り合いを繰り広げる。だが、

「ぐふうっ!? ……良いねえ。さっきの気の抜けた拳とはまるで別物。今のは重く良い一撃だった」

『いてて……そいつはどうも』

そう言いながらタニヤはニヤリと獰猛な笑みを浮かべて軽く口の端を拭う。

なんか分身の動きが変わった気がする。前のターンと比べてアグレッシブになったというか。ライフの変動は同じなのになんだだろうなこの差は。

「だがまだ私の攻撃は残っている。アマゾネスの剣士で、ラルナトークンに攻撃……っ!?」

タニヤは目の前の光景に一瞬言葉もなくす。何故なら、

『……ごめんなさいなの。私の贈り物を受け取った以上、その子は攻撃しちやいけないの。それでも攻撃しようとするなら……私の友達が許さないの』

アマゾネスの剣士は攻撃宣言した瞬間に息絶えていた。

下手人は彼女の贈ったプレゼント。……いや、正確に言えばその中で眠っていたレティシアの友達。

虹色の六本の脚に、大鳥のように多数の目を持つ蜘蛛のような怪物。それが歯をむき出しにしてアマゾネスの剣士に襲い掛かり、瞬く間にその脚で切り裂いていたのだ。

『立体映像だと初めて見たけど……アレホントに友達かレティシア?』

『うん! そうだよ! 私のお友達。まだまだ沢山居るよ!』

なんと?! どこか友達を自慢するようにニコニコ笑うレティシアの事を、俺は初めてほんのちよつとだけおっかないと思つた。レティシアのリスクレベルがH真ん中Eなのつてこれが原因かもな。

レティシアの友達……プレゼントトークンは、効果発動後俺の場に攻撃表示で特殊召喚される。結構見た目えぐいけどこれで味方なんだよな。

プレゼントトークン 星4 ATK1400

「……ふつ。なるほどな。愛らしい姿に油断した私のミスという事か。……だが、このままでは終わらない。私はここでリバースカードオープン! 永続罠『アマゾネスの意地』。この効果により、私は再びアマゾネスの剣士を墓地から蘇生する!」

これで三度目となるアマゾネスの剣士の登場。……ここまで来れば俺にだって大体は察しが付く。

『なあ。タニヤ。お前のデッキ……相手モンスターを破壊するカード入ってないだろ?』

遊兇対タニヤ その四 決着

デッキにモンスターを破壊するカードが入っていない。その俺の言葉にタニヤの表情が少し変わる。どうやら俺の考えは合っていたようだな。

『なぜそう思ったのかって顔だな。……これは言うまでもないことだと思うが、デッキにはそれを作った奴の考えがもろに出る。それでだ。これまでの戦い方や言動なんかを見るに、このデッキのコンセプトはモンスター同士の殴り合いを追求したものだ』

タニヤはモンスターの攻撃力を変動させるカードや蘇生させるカードばかり使っていた。モンスターそのものを破壊したり除外する方が大抵の場合は手っ取り早いのだ。

『思えば最初に使うデッキを選ばせるのだから、相手に対策させるようなものだ。勝つためだけならする必要は欠片もない。それでもするつてことはそうされても勝つ自信があるか、あるいはそれを踏まえてもなお通すべきこだわりがあるか』

敢えて勝ち方を狭めることで、それにより特化した戦い方。

つまりこれがタニヤなりのこだわり。勝利のためのデッキではなく、自分の納得いく戦いのためのデッキ。

「お喋りだなバランスーよ。だがまあ当たらずとも遠からずという所だ。……さあ。デュエル再開だ。私は特殊召喚したアマゾネスの剣士で、再びラ・ルナトークンに攻撃！」

タニヤは少しだけ複雑そうな顔をしながら、再びアマゾネスの剣士に攻撃命令を出す。

レティシアの効果は当然だがもう切れており、剣士はそのままラ・ルナトークンを切り裂いて消滅させた。

遊児 LP1100↓700

「私は再びアマゾネスの死闘場の効果発動！ さあどうするバランスー？」

『良いだろう。その勝負受けた！』

遊児 LP700↓600↓500

タニヤ LP3200↓3100↓3000

もう何度目の殴り合いになっただろうか？

本当に殴り合っている訳ではないが、もう全身がかなりズキズキする。明日は筋肉痛確定だな。

『おいおい。今のは一手間違えたんじゃないか？ こちらにレティシアが居る以上、死闘場の効果より回復量の方が上回るぜ』

「だが肉体の痛みまでは回復しまい。効果で互いに回復するならデュエルはどう転んでも長期戦だ。長期戦は望むところ。私はこれでターンエンド」

軽口を叩いて相手の意図を探ってみるが、タニヤはニヤリと笑みを浮かべて軽く拳を握る。なるほど。要するに最後まで立っていられた方の勝ちって訳か。……どこが決戦前の肩慣らしだよ。消耗も何も考えていないガチの喧嘩じゃないか。

ちなみにレティシアに攻撃されていた場合、ダメージを受けなかった代わりにラルナ本体も破壊されていた。100ポイントのライフが貴重な今の状況では、どっちが苦しいかは悩ましい所だったな。

『おっと。バトルフェイズ終了時、ラルナトークンが戦闘を行ったことにより効果発動！ラルナにPEカウンターを4つ乗せる。……トークンが破壊されても本体はまだ無事なんでね』

ラ・ルナ PE4

『なあタニヤ。ここらへんで一つ引き分けてことにしないか？ いかにか闇のデュエルじゃないとは言えもうすぐ決戦だろ？ 体力は消耗し過ぎない方が良くと思うんだが？』

「何を今さら。ここらまで滾った私の心が分からないでもあるまいに。……それに、お前も本心ではそう思っていないのだろう？」

……バレていたか。俺は軽く息を吐いて仮面越しに頬を搔く。まあここで止めるという事であれば、俺もそのまま止めるつもりはあったんだけどな。

実際このデュエルは痛み云々を抜きにすれば割と楽しい。効果でカードを破壊しないデッキ。純粋なモンスター同士の力比べというのもそれはそれで燃えるものがある。

死闘場の効果も、プレイヤーは自身がモンスターと共に戦っているという実感がより強く感じられるしな。……まあモンスター達にはいい迷惑かもしれないけど。

『遊児お兄ちゃん。ちよつと楽しそう』

『どうでも良いから早く終わらせてほしいものだな』

いけねっ!? レティシアにもバツチリ見抜かれてるし、ネクに至ってはどこか呆れ顔だ。

『……参ったな。頭ではそろそろ止めるべきだって分かっているのに、心ではキツチリ白黒つけたらいつて思ってしまう。……そっちも止めないって思うなら仕方ないよなあっ!』

さあ。とことんやろうじゃないか!

遊児 LP500 手札0 モンスター レティシア プレゼントトークン 魔法・

罨 エンサイクロペディア 古い信念と約束 ラ・ルナ

タニヤ LP3000 手札0 モンスター アマゾネスの剣士 アマゾネスペツト虎 魔法・罨 アマゾネスの意地

『俺のターン。ドローっ！』

俺は力の限りカードを引く。どう引いたって結果は変わらないが、その辺りは心の赴くままに。

ドローしたカードを見て、俺は頭の中で勝ち筋を見出す。いよいよ決着の時だ。

『俺はまずレティシアの効果のアマゾネスの剣士を対象に発動！ 互いのLPを1000回復する。』

遊児 LP5000↓1500

タニヤ LP3000↓4000

「やはり回復してきたか。だが私の場には戦闘ダメージを相手に受けさせるアマゾネスの剣士と、自身が居る限り他のアマゾネスへ攻撃できなくなるアマゾネスペツト虎が居る」

『エンサイクロペディアの効果。ラ・ルナのPEカウンターを3つ使うことで、墓地から幸せなデディを特殊召喚。そしてラ・ルナの効果発動！ 頼むぞレティシア！』

ラ・ルナ PE4↓1

『任せて！ 行つくよ〜！』

テデイが場に戻ると同時に、レティシアは今一度ピアノに向き直ると、先ほどとは打って変わって凄まじい勢いで鍵盤を叩き始めた。しかしその指運びはどこまでも繊細で、ピアノから聞こえてくるのはどこか激しくも切ない旋律。

『ラ・ルナの効果。このカードのクリフォトカウンターを1つ取り除き、1000ポイントを支払うことで、自分フィールドのモンスターは次の俺のターンまで800アップする』

遊児 LP1500↓500

ラ・ルナ CC2↓1

レティシア ATK800↓1600

プレゼントトークン ATK1400↓2200

幸せなテデイ ATK1500↓2300

『そしてレティシアを攻撃表示に変更。……行くぞバトルフェイズ！ 俺はプレゼントトークンで、アマゾネスペット虎に攻撃！』

虎と蜘蛛。普通なら虎の圧勝だろうが、ここに居るのはレティシアの友達の普通ではない蜘蛛。歯をむき出しにした恐ろしい姿で飛びかかり、瞬く間に虎をその脚で切り裂

く。

タニヤ LP4000↓3700

「ぐっ!? アマゾネスの死闘場の効果は忘れてないな?」

『当然っ!』

遊児 LP500↓400↓300

タニヤ LP3700↓3600↓3500

残りLPはあと僅か。だが、ここはギリギリまで攻める時だ。

「ぐうっ!? ……良いぞっ! さつきよりもさらに拳が重くなっている。だがこの後はどうする? 攻撃力が上がってしまった幸せなデデーでは、アマゾネスの剣士の効果でお前のLPは0だ」

『こうするんだっ! 俺は手札から速攻魔法『幻想体解放』を発動! 場の幻想体を任意の数墓地に送り、その数×3までのレベルの幻想体をデッキから特殊召喚する。俺は場のラ・ルナと古い信念と約束、レティシアを墓地へ送る!』

『遊児お兄ちゃん! あとは頑張ってね!』

『やれやれ。やっと休める』

墓地へ送られる代わりに、半透明になって俺の横に浮かぶレティシアと抱きかかえられるネク。さあ。後は仕上げだ。

『俺が呼び出すのはレベル7。『幻想体 魔法少女 貪欲の王』！　そして場のラ・ルナが無くなったことで、テディの攻撃力が元に戻る』

貪欲の王　ATK2800　CC1

幸せなテディ　ATK2300↓1500

俺の場に現れるのは、その身を琥珀と黄金の卵に封じた武闘派の魔法少女。出来ればまた琥珀から出て拳で戦ってくればタニヤも喜びそうだが、あれは一緒に魔法少女が居てこそこのことだからなあ。

「幸せなテディの攻撃力が、アマゾネスの剣士と同じに!？」

『バトル！　テディでアマゾネスの剣士に攻撃！』

この戦いも何度目か。それぞれの攻撃力は互角。しかしテディは攻撃表示の時1ターンに1度戦闘で破壊されない。

テディは剣士に切り裂かれながらもその腕を取り、そのまま力強く振り回して地面に叩きつけて撃破する。

遊兎　LP300↓200↓100

タニヤ　LP3500↓3400↓3300

そして、もう互いに言葉は要らないとばかりに死闘場の効果が発動。互いの全力の拳と拳がぶつかり合い、その余波が洞窟内を震わせる。……ここまで来るとある意味これ

も闇のデュエルかね？

『これで俺はもう死闘場を発動するライフが無くなった。そういう意味では最後まで使
い続けたタニヤの勝ちかもな。……だけど、この勝負は俺が勝たせてもらう。コストと
して場のエンサイクロペディアを墓地に送り、貪欲の王でタニヤに直接攻撃！ そして
攻撃する時、貪欲の王は攻撃力が500アップするっ！』

「なんだとっ!？」

貪欲の王 ATK2800↓3300

『これで終わりだっ!』

貪欲の王から放たれる光が、展開された魔法陣を通してタニヤに照射される。その光
に包まれる瞬間、どこかタニヤの顔が満足げに笑っていたように見えた。

タニヤ LP3300↓0

遊児WIN!

「ハッハッハ！ 実に心が滾る良いデュエルだった。感謝するぞ balanサー！」

『いや何で終わった直後でそんなに元気なんだよ!？ 俺なんかもうへとへとだったの

に』

戦いが終わるなり満足げな笑顔でそう言われたら、俺はもう感心するやら呆れるやらよく分からないな。こいつ十代並のスタミナだぞ。

ガルルルルっ！

キイキイ。

『……んっ!?』

今バースが何かに威嚇したと思ったら、洞窟の入り口に向かってコウモリみたいなのが飛んでったぞ！ まさかまたカミューラか？ ……となると今のデュエルも見られてたっぼいな。

バースはひとしきり唸ってコウモリがもう近くに居ないことを確認すると、そのままゆっくりとタニヤの所に行って頭を撫でてもらっている。

「おそらくカミューラの僕だろうな。なに。気にすることは無い。今回のデュエルは私から誘ったのだ。特に怪しまれるようなことでもない。堂々としているが良い」

『だと良いんだが』

一方的にこっちの情報だけ持ってかれるってのはちよつと嫌だな。その内そつちの情報も貰ってやるからな。

そしてまた明日様子を見に来ることを告げて、俺はタニヤと別れてオシリスレッド寮

へ戻ることにした。

「ふう。それにしても疲れたなあ」

『まさかあんなに肉体言語で話し合うことになるとはねえ。暑苦しいつたらないよ。まあ傍から見ると中々に楽しめたけどさ』

ここ最近潜入中は出てこれなかったディーがそうぼやく。……お前も次から参加させてやろうかまったく。新種の精霊だとかなんとか言つて。

しかし今回は割と収穫があったように思う。タニヤがセブンスターズとして戦う時間も場所もおおよそだが分かったし、実際に戦つてそれなりにデツキも把握した。

タニヤは確かに強敵だが、それでも十代達なら十分に勝ち目があると信じている。

「気合入れろよ……皆」

『大丈夫さ。きつとね』

俺とディーの言葉は風にのつて、どこへともなく消えて行つた。

閑話 案内人と森の中



「セブンスターズから宣戦布告が届いたって本当かよ鮫島校長!？」

「ああ。本当だとも十代君」

ある日授業が終わってすぐの事。連絡を受けて俺達鍵の守り手は校長室に集合した。翔と隼人も一応関係者扱いで一緒に居る。

遊児も呼びたかったところだけど、朝から体調が悪いつて授業を休んで部屋で寝てる。最近やけに授業を休む奴らが多いし、性質の悪い病気でも流行ってんじゃないだろうな？

それで鮫島校長が言うには戦いの時間は一時間後。場所は近くの森を抜けて少し行った所だという。

「連絡によると、森の入口で案内人が待っているので詳しい内容はそちらに聞くようにとの事だ」

「案内人？ 何者なノ〜ネ？」

「さて。そこまでは。……引率としてくれぐれもよろしくお願いしますね。クロノス教

論

「分かっています。このクロノス・デ・メデイチ。闇のデュエルなんてオカルトは無いと、証明してやる。ネ」

おう！ クロノス先生やる気じゃん！ ……だけど闇のデュエルか。俺の脳裏にこの前のダークネスとの戦いがよぎる。

闇のデュエルは本当にある。それはとても危険で、俺自身も少しだけ怪我が治ってからも負けることに不安を覚えた。

ちよつと前に翔達と一緒に行った温泉で迷い込んだ精霊達の世界。俺はそこでカイバーマンの精霊とデュエルすることで吹っ切れたけど、他の皆も同じように危険なことは変わらない。気を引き締めないとな。

見るとここに居る奴ら。万丈目に明日香、三沢、カイザーも、これからの戦いに向けて闘志が満ちていた。特に三沢なんか、ここ数日いつ戦いになっても良いようにデュエルの早朝特訓をしていたぐらいだからな。やる気満々だ。

…大徳寺先生はいつも通りみたいだけだな。猫のフアラオを撫でながら飄々としている。

「よし。では早速その場所に向かおう。行くぞ皆！」

「「おうっ！」」

生徒代表としてカイザーが音頭を取り、俺達は案内人が居るといふ場所に向かった。

学園本棟を出て少し。森の入り口で待っていた案内人。それは、

『…………ふむ。鍵の守り手以外の者が混ざっているようだが…………まあ良いだろう。ようこそ。戦いの誘いに応じてやって来た者達よ』

「お前は…………バランサーっ！」

以前会ったペストマスクの男バランサーが、木の一本にもたれかかりながら佇んでいた。そしてその横には、

ガールルル！

「ひいつ!? でつかい虎が居るのにやっつ!？」

「な、何アレっ!？」

大徳寺先生と翔の言うように、大きな虎がこちらに唸り声を上げながら丸くなっていた。遊児の所の幻想体で少しはこういうのに慣れてはいるが、それでもおつかないのに変わりはしない。

『バース。これからお前の主人と戦う者達だぞ。威嚇するんじゃない。…………失礼した。』

この虎はバース。決戦場までの案内役兼護衛役だ。見ての通り少々気性が荒いが、下手

にちよつかいを出さない限りは何もしない』

バランスーが軽く虎……バースの背をポンポンと叩くと、バースは一度俺達をじろりと睨んでのっそり立ち上がる。なんかサーカスカ動物園の調教師みたいだ。

『自己紹介がまだだったな。以前に会った者も居るが、多くは初めて会うので名乗らせてもらおう。俺の名はバランスー。鮫島校長への手紙に書かれていたかと思うが案内人だ。どうぞよろしく』

そう言つてバランスーは、ゆつくりと腕を胸に当てて大きく一礼した。すると万丈目が一歩進み出る。

「お前がバランスーか。十代や天上院君から話は聞いている。奴らの仲間らしいが、人質になっていたそいつらや火口に落ちかけた十代を助けたつてな」

『結果的に助ける形になっただけの事だ。……それにダークネスが人質を取っていなければ、そもそも俺は出るつもりはなかった』

「結果的にだろうがなんだろうが、それでも俺達が助かったのは事実だ。だからありがたいなバランスー！」

俺も割り込んで礼を言つたら、何故かバランスーにそっぽを向かれた。礼くらい素直に受け取つてくれよな。

『……つと。バースがさつきからしびれを切らし始めている。そろそろ出発とさせても

らおう。話は歩きながらも構わないな?」

そう言つてバランスサーは、のそのそと先頭に行くバースについて森の中へ歩き始める。ちよつと待てよバランスサー! 色々と聞きたいことがあるんだよ! 俺はすぐに後を追いかけて、他の皆も少し遅れて続いた。

まだ陽も高いので、森の中は木々の隙間から日が入つて結構明るい。戦いの前だつてのに、気分は軽いハイキングだ。……それも、なんとなくこのバランスサーから敵意が一切感じられないっていうのが大きいのかもな。

バースとバランスサーについて歩く中、他の皆は少し後ろで誰が話しかけるか話し合つていた。戦いの詳しいこととかは案内人に聞けつて鮫島校長が言つてたからな。……わざわざそんなところで悩んでいないで普通に聞けば良いのに。

「なあバランスサー。結局お前は一体何なんだ? セブンスターズの一人なのか? 今回の戦いのルールはどんな内容なんだ?」

「十代っ!? そんな勝手に」

「だつて皆尻込みしてるしよ。こういうのはまとめてササつと聞いて準備した方が良いつて!」

隼人が止めてくるけど、これくらいなら問題ないはずだ。俺にはどうにもこいつが悪い奴って感じはしないし、手紙に詳しくは案内人に聞けつてあつたんならこれくらい問題ないだろうしな。

balanサーは少し考えるように軽く顎に手を当てると、そのまま普通に話し出した。『まず最初の質問から返そう。俺はセブンスターズ側ではあるがセブンスターズではない。……そうだな。審判兼司会進行役とでも言えば良いか』

「なんだそりゃ」

『俺の仕事は、この案内もそうだがセブンスターズと鍵の守り手達の戦いを円滑に進めることだ。前は鍵の守り手以外の者……翔と隼人だな。その二人が巻き込まれていたので助けた。……自分から首を突っ込むようであれば次は無いが』

なので今回のように、戦いの日取りや時間を上手く調整するのも仕事の内だと balanサーは続ける。なんかマネージャーみたいだな。

『次にルールと言えるほどの細かなルールは無い。デュエルに変わりはないからな。七専門の鍵を賭けて戦い、セブンスターズ側が勝つたら鍵を貰う。学園側が勝つたら防衛成功。単純に言えばそれだけだ。ただ……一つだけ特殊ルールがあるとすれば、今回戦う相手は向こうが指定する』

えっ?! つてことは、俺が選ばれない場合もあるのか? ……立候補式じゃダメか?

『まあその点は今回の相手だけかもしれないがな。それに……そうだな。お前は選ばれる可能性が高い。アイツの好みそうだ』

「好みねえ」

そんなに選り好みの激しい奴なのか。参ったな。そうして少しずつ話していると、

「ねえ。バランスー。ちよつと良いかしら？」

『何かね？ ……あゝ』

「明日香よ。天上院明日香。アナタ達は兄さんに、吹雪兄さんに何をしたのっ!？」

明日香はどこか鬼気迫る表情で、歩きながらバランスーに詰め寄った。その様子を他の皆は固唾をのんで見守っている。

「兄さんはまだ意識が戻らないの。闇のデュエルっていったい何なのっ!？ なんて兄さんがあんなことに。……もしアナタ達が兄さんをあんな風に変えてしまったのだとしたら、私は決して許さない。ねえ。答えてっ!」

「俺もだ。時折調子に乗ってやらかす男ではあったが、吹雪は俺の大切な友だ。それがあんな目にあつたのが誰かの差し金だというのなら、その誰かを俺も許さない」

明日香に追従するようにカイザーもスツと移動する。その二人に鋭い視線を向けられ、バランスーはどう思つたんだろうか？

仮面で表情までは分からない。だけど、

『……ダークネス、天上院吹雪が何を思つてこの戦いに臨んだのかは俺には分からない。俺が最初に会つた時、既に奴はダークネスとしてゼブンスターズに所属していた』

「だから何っ!? 自分は関わっていなかったとしても言うつもり?」

『ああ。何故あんなつたのかは関わっていなかったのだから答えようがない。なので俺が今言えるのは一つ。答えは直接本人から聞くことだ』

バランサーはそう毅然とした態度で返した。

『起きるまで待つのも良いし、何らかのやり方で起こしても良い。それともお前達はもう吹雪が目を覚まさないとも思っているのか? あれだけの男が妹や友人を置いて? ……ハッ! 無いな。それは無い。……大丈夫。奴は必ず目を覚ます。もつと信用してやることだ』

最後の言葉がどこか優しく感じられたのは気のせいじゃないのだろう。その証拠に、明日香もカイザーも怒りがほんの少しだけ落ち着いたみたいだった。

「バランサー。……お前」

『おっと。お喋りの時間はそろそろ終わりだ。もうすぐ到着する。誰が戦うことになるかは分からないが、気を引き締めていくことだな』

その言葉と共に森の出口が見えてきた。俺は軽く頬を張つて気持ち切り替えると、俺達の戦う相手はどんな奴か考え始める。

そして、森を抜けた先にあつたのは、
「うわあ」

「凄い。……いつの間にかこんな建物が」

昔のどっかの国にありそうな、デッカイ闘技場だった。今からここで戦うのか。……
ちよつとワクワクするな。

タニヤ対三沢 強かなれど一途な女



……ふう。やつと辿り着いたか。

俺、バランスサーこと久城遊児は、鍵の守り手達を連れてタニヤの待つコロシウムに来ていた。

コロシウムが完成したのがつい昨日の事。明日はゆっくり休みようと生徒達に給料を払って解放し、鮫島校長に事の次第を書いた手紙を送るといった根回しも済ませ、あとは先にコロシウムで待つて居れば良いと思つていたのだが、

「……そう言えば、あの森大鳥達の巡回範囲だよな？ そこに十代達が団体で乗り込んでいったらどうなる？ 通り過ぎるだけとは言え」

『そりやあまあ……あまり良い気はしないだろうね。特にクロノス先生とか普通に乗り込んでいったら』

俺の脳裏に、クロノス先生が罰鳥に頭を突かれまくってはげる様子が浮かび上がる。いやそれだけじゃない。もし何かの拍子に大鳥達も参加したりした日には、それこそセブンスターズとの戦いどころではない。

という訳で急遽俺がバースと共に案内人を買って出て、十代達が来る前に大鳥達に説明。俺が一緒に居ることで安心させるといふ流れとなった。

そうして balanサーとして案内をすることになったのだが、その間周囲の奴らからの圧が凄いのなんの。やはり俺の事を警戒している者がほとんど。

十代が居なかったら針の筵だったかもしれない。……いやまあ普通に助けてくれてありがとうなんて言われるとは思っていなかったから少し照れたけどな。十代はもう少し人を疑うことを覚えよう。

むしろ森の中で明日香やカイザーに向けられた敵意の方が普通だ。こっちに関して少し突き放すような物言いになってしまったが、実際俺はマンガ版はともかくアニメ版の吹雪はまるで知らない。

ただ作中で十代に勝ち、プロデュエリストであるエド・フェニックスと互角に渡り合っている、カイザーと並び称されたほどの傑物がこんな所で終わるとはどうしても思えなかった。

そんなこんなでコロシウムに辿り着き、バースを先頭にぞろぞろと中に入っていく。長い通路を抜けてそこに待っていたのは、

「よくぞ来た。七精門の鍵を守るデュエリスト達よ」

決闘用の舞台に、それを取り囲むように建てられた客席。そしてその中央に仁王立ちしているタニヤの姿だった。

バースはその姿を見るや否や、案内役は終わったとばかりにタニヤの下に走り寄る。……うん。俺もそろそろ案内役はお役御免だな。こつちも十代達から少し距離を取る。

「何者だっ！ お前？」

「私はタニヤ。偉大なるアマゾネス一族の末裔にして長。……そしてセブンスターズの一人」

タニヤは堂々と名乗りを上げる。この辺りは嫌いじゃないんだよな。

「このコロシウムで七精門の鍵を賭けた戦いを行う。……でもね。私と戦うことが出来るのは、男の中の男だけ。我こそは男と言う者……出てこいっ！」

何よそれっ!? つと明日香が憤慨しているが、それ以外の男たちは全員名乗りを上げ……いや、大徳寺先生だけはこっさり皆の後ろに隠れてるな。そんなことしなくても、先生はタニヤの好みから大分離れてますって!

「う〜ん。面構えは皆悪くないけど……いえ。その男は気色悪いからやんない」

「そんなっ?! 不公平なノ〜ネっ?!」

哀れクロノス先生。速攻で面接に落とされた。残るは十代、万丈目、三沢、カイザー

の四人。全員心技体を兼ね備えた猛者ばかり。その中で少し考えてタニヤが戦いの手に選んだのは、

「……お前。名前は？」

「俺は、三沢大地」

どうやらタニヤは三沢をお気に召したようだ。すぐごと観客席まで下がる残りの面々。そこで俺はふとあることが気になって、タニヤにこっそり聞いてみることにした。

『タニヤ。デュエル前にちよつと良いか』

「おおバランサー。案内役ご苦労だった。何が聞きたい？」

『選考基準つて奴だ。他の面子も中々に悪くなかったと思うけど？』

そう聞くと、タニヤは小さな声で話し始めた。声を抑えているのは他の者に聞かれな
いたための配慮だろう。

「あの赤い服十代の男は、元気に満ち溢れているがややおバカそうなのが欠点だ。
黒い服万代の男も悪くはないが、何か横に気色悪いのがくつついていたからパス」

……初見なののに的確に相手の事を見抜くこの観察眼は凄い。あと地味に精霊（おジャマイエロー）も見えていたよタニヤ。

「じゃあカイザー、あの青い服の男はどうだ？ 実力だけで言えば抜きん出ていると思

うが」

「ふん。あれは好みじゃない。完成し過ぎてる。それでいて、心が強そうに見えるどころか脆そうだ。それならまだ黒い服の男の方が良い。あつちは挫折してもなお立ち上がりそう。以上を踏まえて総合的に三沢を選んだ。……頭も悪くなさそうだし、顔はダントツで好みだ」

へえ。あのカイザーがどこか脆いねえ。俺にはそうは思えないけど、タニヤ的に何か気がかかったのだろう。そこで話はいったん終わりとし、俺も少し下がる。

キイキイ！

むっ!? よく見ると、通路の陰になつてゐる所にまたコウモリがとまっていた。またカミューラの僕か。バースも気付いたのかまた低く唸り声を上げている。

どうすると視線でタニヤに問いかけると、放っておくとばかりに軽く首を横に振る。……良いだろう。覗き見はいただけじゃないが、見ていただけならただの観客だ。ちよつかいをかけてこない限りこつちも静観する構えで行こう。

さあ。ここからは二人の対決だ。しっかりと見届けさせてもらおうか。

「ここにお前の明暗を分ける二つのデッキがある。知恵のデッキと勇気のデッキ。お前

に選択させてやろう」

戦いの前にタニヤが取り出したのは、俺の時と同じ二つのデッキ。知恵と勇氣。三沢は迷うことなく知恵のデッキを選択する。頭脳派キャラだもんなアイツ。知恵比べで勝負したいんだろう。

デッキを決めてさあデュエルだという所で、タニヤは軽く前置きをする。

「言い忘れていたが、このデュエルは闇のデュエルではない」

「何っ!? どういうことだ?」

「魂なんていらなくいい! 私はお前自身が欲しいの! つまり、私が勝ったらお前を婿として里に連れて帰るっ!」

おいおいここで言うのかよっ!? 一気にキャピキャピした感じになったタニヤに、一同目を丸くする。……その気持ちはよく分かるぞ。

「婿っ!? 訳の分からんことを。ならば、もし俺が勝ったら?」

「そしたら、私三沢つちのお嫁さんになってあげる!」

勝つても負けても同じじゃないかという突っ込みはぐつとこらえる。なんか一気に場の雰囲気が和んだ気がするな。

「このデュエル。何か羨ましいかも」

「お嫁さんか……」

オイこら!! 翔はともかくとしてなんで万丈目までちよつと顔を赤らめてんだよっ!?
いつものクールっぷりはどうした?

そうして少しグダグダになりながらもデュエルが始まった……のだが、

三沢 LP4000

タニヤ LP4000

「分かつているぜタニヤ。お色気で俺のペースを崩そうというその陳腐な作戦。だが俺の戦術は鉄壁。お前の桃色光線など通用しないっ!」

……と、この通り微妙に三沢も知ってか知らずかたじたじだったりする。

デュエルの流れを簡単にまとめるならば、三沢は地のデツキ。磁石の戦士シリーズの亜種十と一モンスターで攻め立てるのに対し、タニヤはアマゾネス系下級モンスターを主軸としたテクニカルなデツキで上手く三沢の攻撃を捌いていった。

時にキャピキャピとした態度、時に女戦士然とした態度のタニヤにすっかり三沢はペースを崩され、戦術の二手三手先を読まれていった。すると戦いの中、
「恋の駆け引きはね、女の方が上手なのよ」

「ふざけるなっ! 何が媚だ。嫁だっ! 俺とお前は敵同士なんだぞっ! 俺達は、世界の破滅を賭けて戦っているんじゃないのかっ!」

それは実にもつともな叫びだった。三沢としてはそういう戦いをイメージしていたのだろう。デュエルの早朝特訓を十代達としていた（俺はランサーとして活動していたので不参加）ぐらいだ。さぞ覚悟も決まっていたに違いない。だが、

「世界の破滅が何よ。恋は不滅よっ！ 七精門の鍵でも開かないアナタのハートを、ワタシの鍵で開けてみせるわっ！」

お前の相手はこれだぞ三沢。

最初から三幻魔の力などに見向きもせず、ただ自分の婿を探すためだけにセブンスターズに所属している女だぞ。

自分のどこに惚れたのかと三沢が聞けば、その凛々しい顔にだと返すタニヤ。しかしこんな傍から見るとラブコメみたいな問答をしている中もデュエルは進行していく。

やや劣勢に立たされ始めた三沢は、意を決して一つの問いかけをした。

「見せろよ。お前の本性を」

今まで言っていたのは全て俺を惑わす戯言か何かなのだろうと、三沢はタニヤを見定めようとした。むしろその方が良かったのだろう。惚れただけの恋だのというモノでなければ、三沢はそこの悪意ぐらいなら軽くねじ伏せる覚悟も実力もあった。だけど、「見せてるじゃない。ずっつと。どうやったら三沢つちを振り向かせることが出来るか。一生懸命考えて、好きになつてもらおうとしてるじゃない」

タニヤの言葉は間違いなく本物だった。

俺も数日程度ながらも一緒に過ごしたから少しは分かる。タニヤは強かで計算高い女ではあるが、ある意味でどこまでも真つすくな奴だ。

先ほどの顔に惚れたという点も嘘じゃない。だけどそれだけではないし、本気で三沢を落とすために全身全霊でぶつかっている。

「十とー。磁力の法則とは違うけど、違う者同士が引き合うにはたくさん頑張らないといけないの。……ふふっ！ だから三沢つちも頑張つてっ！ 三沢つちの心のリバー スカード。オープンしてっ！」

全力の熱い想いだからこそ、それが三沢にも伝わったのだろう。この自分に向けられた気持ちも、自分の中からタニヤに向けて湧き出るこの気持ちも、間違いなく本物だとだからこそ、三沢も覚悟を決めたようだった。

「タニヤ。見せてやるぜっ！ 俺の想いっ！」

三沢は大量にモンスターを展開し、一気にLPを削り切るべく猛攻に出る。確かにそれが全て決まればこの勝負は三沢の勝ちだっただろう。だが、
「これが三沢つちの想い。私も全身全霊で受け止めるっ！」

タニヤの場には他のアマゾネスへ攻撃できなくなるアマゾネスペット虎。そして俺も食らったアマゾネスの弩弓隊のコンボが発動した！

三沢のモンスターは攻撃力を下げられた上で、アマゾネスペット虎に攻撃を強制されていく。そして、

「アマゾネスペット虎。私の想いを三沢つちに伝えてっ！ お受けします。恋の成就っ！ 『密林の王牙』っ！」

モンスターが返り討ちに遭い、三沢のLPは衝撃と共に消し飛ばされる。だが、
「ぐう……………タニヤっち」

負けたはずの三沢の顔は、どこか少しだけ満足そうだった。

三沢 LP O

タニヤ WIN!

「三沢っ!?!」

「バースっ!」

倒れ伏す三沢に駆け寄ろうとする十代達を、タニヤの号令と共にバースが躍り出て押しとどめる。

ただ一応審判役なので体調なんかの確認をしなきゃマズい。俺は許可を取ってそっ

と三沢に近づいた。

『……大丈夫そうだ。特に頭をぶつけたとかはなさそうだし、呼吸も脈もしっかりしている』

「それは良かった。まああのくらいの衝撃で怪我をしてもらっては困るのだが」
『なんとも基準が厳しいな』

そんな掛け合いをしながらも、タニヤは持ち前のパワーで三沢を何とお姫様抱っこする。いやそこ逆だからねっ!? 三沢が起きていたら落ち込んでいたかもしれん。気を失っていて良かった。

そのままベースに追い立てられてコロシアムの外に追い出される十代達を尻目に、三沢を休ませるべく俺達はベッドのある部屋に向かうのだった。

甘い葛藤と買収騒ぎ

「三沢っ！ おい三沢っ！ 返事をしてくれっ！」

「三沢君っ！ 無事なのっ？」

三沢が敗北した日の夜。十代達はまだコロシアムの近くに居た。

バースにコロシアムから追い出され、門も固く閉ざされてしまったが、それでも攫われた三沢を置いていくことは出来ない。陽も落ちてきたので焚き火を熾し、生徒の面々はこのまま寝ずの番をしながら呼び続ける意気込みだ。

「シニョール三沢の事は我々教師が何とかするノッネ。だから生徒諸君はもう寮に戻りなさいッ」

「そうなのによ！ ここはクロノス教諭に任せて、私達は早く帰りましょうなのによ」
それを何とか諫めようとするのは教師二人。特に引率を任されたクロノス教諭としては、いくらセブンスターズ絡みとは言え夜遅くまで生徒を連れ出すのは避けたい。

こうして帰る帰らないの言い争いが勃発しかけた所に、ガラガラと音を立てて門が開く。そこから現れたのは、

「バランスサーっ!？」

そう。俺である。実の所、今までの事はずっとコロシアムの中から見ていたのだが、まさかここでこいつらが一晩明かそうとするとは思わなかった。

いくら気温が暖かくなってきたと言っても、こんな所に居られては大問題だ。身体にも良くないし、なにより……。まあともかく、早い所こいつらをどうにかしなくては。

『ふむ。まさかこんなにも粘るとはな。今日の勝負はもう終わりだ。次回の戦いの日取りはまた近い内に連絡するので、さっさと帰ることを勧めるぞ』

「三沢を置いて帰れるかよっ！　なあバランスサー。あんたならタニヤに言って次の戦いを早められるんじゃないか？　頼むよ！」

うゝむ。十代にせつつかかれてしまった。他の皆からの視線もこっちに突き刺さっているし、参ったなこりや。

『……そうだな。確約は出来ないが、話してみるだけなら可能だろう。ただ問題は、下手なことを言つて馬に蹴られたくは無いということだ』

「馬？　タニヤと一緒に居たのは虎だろ？」

『お子様には分からんこともあるつてことだ。……ささっ！　三沢の事が心配なのは分かるが帰つた帰つたっ！　後日三沢自身から連絡させるからほらほらっ！　教師の方々。あとはよろしくお願いする』

「分かったのにや。さあ皆。この人もそう言ってるから早く帰りますのにや！」

これ幸いと俺に追隨する大徳寺先生。洩る生徒達だったが、何とか帰路につかせることに成功した。そうして皆の姿が見えなくなるのを確認し、俺はふうつと息を吐く。

『やつと帰ったか。やれやれ。これで俺もようやく部屋に戻る』

『部屋で寝ているはずの君の部屋に、十代達がお見舞いにでも来たら面倒なことになるからねえ。かと言ってバランサーとしてはある程度ここに残らないといけない。いやあ大変だねえ二重生活は！』

『楽しそうに言うんじゃないよ。……よし。一度タニヤの所に戻ってから帰るぞ』

また茶々を入れるディーをシツシと手で払いながら、俺はコロシアムの中に戻っていく。……だけど、あの中には今は戻りたくないなあ。何せ、

「ほら三沢っち！ ア〜ン！」

「ア〜ン！ うん。実に美味しいよタニヤっち！」

……これである。ベッドから身を起こす三沢を、タニヤが手作りのお粥で甲斐甲斐しく世話をする様は非常に甘ったるい。実を言うと、こうなつた一因は俺にもあるのだが。

本来なら、タニヤは三沢が起きた時点ですぐさまデュエルをまた始める予定だった。自身の婿なのだからそのくらいは当然とばかりにだ。闘争本能がほとんど日常に根付いているレベルだな。

だがそれは俺が待ったをかけた。いくら何でもさつき戦つて敗れたばかりだ。精神を落ち着ける必要もあるだろうし、体力の回復だつて必要だろう。次は明日にしても良いはずだと。

それをタニヤは了承した訳だが、何故か今度は嫁としてベタバタし始めた。そして起きた三沢もまんざらでもないという感じで受け入れている。一応両思いなのかこれ？

仲睦まじくラブラブな空間に長く居たら胸焼けしそうだ。ベースも気のせいとか三沢に向けて睨んでいる気がするし、御主人を取られたと思つて嫉妬してんじゃないか？

『あく。お熱い所すまないが、これからの予定を話し合いたいのだが』

『おおそうか！ 三沢っちちよくつとだけ待つててね！ すぐ終わらせて戻るから！』
『ああ。焦らなくても良いよ。タニヤっち！』

そのままベッドに横になる三沢を置いて、俺達はそつと部屋を出る。

『……さて、これからのことだが、タニヤの目的である婿取りについてはそこまで口を挟むつもりはない。……まあ学園側との兼ね合いとしては、三沢はまだ生徒なので正式な結婚なりなんなりは卒業後という方が良いとは思うが』

「私個人としては今からでも構わないけど……まあ良い。三沢つちもその方が良いだろうし、私もそれに異存はない」

その言葉に正直ほっとする。やや大人びているが、三沢はまだ一年生だ。本人の気持ちもあるだろうが、今はいくら何でも性急すぎる。

『OK。それでは次だ。こうして目的を達したわけだが、これからどうする？ セブンスターズを抜けるのか？』

「いや。一度引き受けたことだ。目的こそ達したが最後まで続ける。残りの鍵の守り手達も、この私が仕留めよう。……そうすれば三沢つちはさらに私にベタ惚れ間違いない！」

タニヤは力強く頷きながら、後半ちよつと頬を赤らめる。スパイとしてはここで降りてくれると助かったんだがな。

『分かった。じゃあ次の日取りは？ 鍵の守り手からはさつき早くても良いとせつつあったが』

「そうだな。では二日後……いや、三日後だな。二日は三沢つちとの甘〜い一時を楽しみたい」

『……結構。実に甘い話をご馳走様だ。日取りの連絡はこちらからおこう。それと、最後に三沢と話をして良いか？ 本人の意思を確かめたい』

最後の意見は無視されるかと思つたが、タニヤは特に反対もせず了承した。俺は三沢のいる部屋に取つて返す。

『失礼。三沢君……ちよつと良いか?』

「バランスだつたか? ……どうぞ」

ノックと共に入ると、三沢はすつかり食事を平らげて落ち着いた雰囲気だつた。この調子なら攫われて精神的にきているということはなさそうだな。

首に掛けていた鍵は、敗北と共にフツと姿を消していた。どういう理屈か知らないが、負けると自動的に消失するらしい。

『調子は悪くなさそうだな。結構。では単刀直入に聞くが、君はタニヤの事をどう思っている? 敵か? 嫁か? それとも……』

「……分からない。頭では敵だと分かっているんだ。だが俺はデュエルでタニヤの想いを受け、俺もまた全力でぶつかった。結果として……俺個人としてはもうタニヤを敵とは見られない」

『だろ。さつきのタニヤとの掛け合いを見れば分かる。……だが、タニヤはセブンスターズの一員として他の鍵の守り手達と戦う気だ。一度請け負つた仕事としてな』

そうかと三沢は一言返し、何か考えるように俯く。

以前読んだマンガ版では、三沢は明日香に気があるという描写があつた。だけどこれ

までの所、アニメ版では三沢にそんな素振りは無かった。つまりシンプルに気になる女か仲間かという二択なわけだ。……板挟みだな。

『戦いは三日後の予定だ。まだ時間はある。たつぷり悩んで、たつぷり思いを伝えれば良い。……ああ。忘れる所だった。十代達が心配しているからな。自分の状況ぐらいは連絡しておくことだ。……ではな』

「ありがとう。……考えてみるよ」

そうして俺は部屋から出、タニヤにまた様子を見に来ると告げてコロシウムを後にした。さあ。急いで寮に戻らないとな！

そうして翌日の朝。鮫島校長と大徳寺先生に一連の流れを説明、三沢は数日間欠席するという旨を伝えたのだが、そこで思わぬ展開を迎えることとなった。

「学園の買取っ!？」

「ああ。突然買取騒ぎが持ち上がったね。ここの運命は、買取相手と我が校の代表選手によるデュエルで決まることになってしまった。ここのオーナーがデュエルの条件を持ち出されてOKしてしまっただけ」

「何でも『よかろう。未来のロードは己が手で切り開くもの。デュエルアカデミアには

貴様に負けるデュエリストなど一人もおらん。貴様がデュエルに勝ったら学園などくれてやるわ』とかなんとか言っちゃったらしいんだにや」

二人の言葉にそんな無茶なと思ったが、なにせここは世界の運命ですらカードで決まる遊戯王世界。まだありえなくはないのかと軽く顔を手で覆う。

あとどのどいつだそのオーナーはっ!? なんか聞き覚えのあるセリフだけど、生徒に学園の未来を勝手に託すんじゃないよっ!

「ただでさえセブンスターズ絡みで忙しい時に……それで? その選手と言うのはもう決まっているんですか?」

「ああ。わざわざ相手側から代表選手を指名してきたのにや。今十代君と丸藤君に呼びに行ってもらってるのにや!」

わざわざあの二人に呼びに行かせたってことは……まさかっ!

「おっ! 校長先生! 連れて来たぜ!」

「失礼します。何ですか校長。俺にしか頼めない一大事と言うのは?」

そこに十代達に連れられてやってきたのは、俺の推しこと万丈目だった。やつぱりか。あの二人に呼びに行かせるってことはオシリスレッドの生徒。万丈目は現在レッド扱いで寮に在籍しているからな。

「おっ! 遊児。もう調子悪いのは大丈夫か? 昨日見舞いに行った時はえらく鼻声

だったけど？ あとなんでこんな所に？」

「ああ。調子の方はだいぶ良くなつたよ。ちよつと大徳寺先生と話があつて、そのまま成り行きでな」

実を言うと、俺が部屋に戻る前に十代が扉越しに見舞いに来たらしいのだ。幸い部屋で念のため留守番をしていた幻想体達が誤魔化してくれたらしいが、何度もやると怪しまれるからあんまり頼めないな。

鮫島校長達は、そこでさつき俺に話したことをもう一度万丈目達に説明する。すると、

「校長。お電話が入ってますにや！」

「繋いでください」

大徳寺先生が校長室に備え付けのタッチパネルを操作すると、壁のスクリーンに誰かの姿が浮かび上がる。でかいテレビ電話だな。

そしてそこに映っていたのは、

「久しぶりだな準」

以前十代と万丈目の戦いの時に居た、万丈目ブラザーズこと長作と正司だった。買収の相手ってこいつらかよっ！

迫る戦い一度に二つ

「兄さん達。これはどういうことですか？」

素早く気を取り直し、万丈目が進み出てそう尋ねる。

「知つての通り、我々の目的は政界・財界、そしてカードゲーム界に君臨し、世界に万丈目帝国を創り上げること」

「兄さん達。前にも言つたはずですよ。俺は俺のやり方でこの学園のトップに立つ。だから援助も演出も要らないと」

「誰が落ちこぼれなど相手にするものか」

そこに正司が割つて入った。誰が落ちこぼれだこの野郎。

「お前の悠長なやり方など待つてはおられん。我らは自らこの学園を手に入れ、カードゲーム界への足掛かりとすることにした。貴様には兄貴と学園を賭けて戦ってもらう」

「俺が長作兄さんって?! 本当なのですか長作兄さん」

その長作は何も言わず、ただ兄弟よく似た不敵な笑みを浮かべている。だが、

「あく。万丈目のお兄さん方。言つては何ですがそれは無謀という奴では？」

「そうそう。万丈目の兄貴はデュエルの素人。学園でも指折りの実力を持つ万丈目に勝てるわけないぜ」

俺の言葉に十代も追随する。素人かどうかは知らないが、少なくとも前の一件から考えると専門家ではないだろう。そこらの相手なら万丈目が負けるとは思えない。

「ハツハツハ。勿論ハンディはつけさせてもらう」

そこで長作は言葉を切り、画面に一つのスーツケースを映し出す。あれは……。

「以前準が使うのを拒んだカード。俺はこのカードでデツキを組む。そして準。お前はハンディとして攻撃力500未満のカードで戦え」

「無茶苦茶だっ!」

「そんな不利な条件呑めるかよ」

なるほどそう来たか。向こうのカードはレアカードばかり。レアリティと能力は必ずしも比例しないが。強いカードが多いのに変わりはない。

対して万丈目はカード制限。500未満でもやりようはあるが、使い慣れないカードを扱うのは腕が問われるからな。

「この条件はオーナーも了承済みだ。『良いだろう。初心者相手なら当然だ』とな」

だから何でそう安請け合いいしちゃうのオーナーっ!?! 仮にも学園が懸かってんだぞ

!

「デュエルは三日後。楽しみにしているぞ。ハーツハツハツハ！」

そう言つて二人の高笑いを最後に通信は終了する。……厄介なことになつたな。まさか三日後とは。

「用が済んだのなら帰らせてもらいます。準備があるので」

「待てよ。俺達も力を貸すぜ」

「そうだよ」

「断る。デュエルをするのは俺だ」

険しい顔をして身を翻す万丈目。それを十代と翔が引き留めるが、万丈目は背中を向けたまま振り向こうともしない。そして場の空気が重くなつた時、さらに特大の爆弾が落とされる。それは、

「いやはや。大変なことになつたものだ。それにもう一つ。例の件の進展があつた。

……ああ。濟まないが久城君は席を外してくれないかね？」

「校長先生。セブンスターズのことなら遊児も少しは知つてゐるぜ。どうせだからここで一緒に話してくれよ」

一瞬こちらに見せる校長の目配せ。そして大徳寺先生の軽い頷きから、これからタニヤの事を十代達に伝えると踏んで速やかに退出しようとしたら、十代め今度は俺も引き留めてきた。

止めてくれ。俺はバランスサーとして関わるから遊兎としては関われなんだよ!?

何とか逃げようとするが普通に捕まり、そしてなし崩し的に校長から次のタニヤとの戦いの日取りが伝えられる。まあ俺が知らせたんだから内容は聞かなくても分かるんだけどね。問題は、

「二日後!?!」

「ああ。二日後昨日と同じ場所、時間を指定してきた。対戦相手も向こうが指名するよ
うだ」

そう。つまり明後日タニヤとの一戦。三日後に万丈目ブラザーズとの一戦という過密スケジュールになってしまったのだ。

ないとは思うが、もし万丈目を指名されでもしたらそのまま連続で万丈目ブラザーズとの戦いに臨むことになる。

「ならますます準備が必要だな。失礼します」

「あつ!?! 待てよ万丈目!」

「さんだ」

そうして今度は十代も止める間もなく、万丈目は去っていった。慌てて追いかけてやるとする十代だったが、今度は俺が十代を引き留める。

「十代と翔はそのセブンスターズの件を校長達からじっくり聞いておいてくれ。万丈目

の方には俺が行く。……万丈目はやや意地っ張りな所があるから、今下手にお前達が行くところじれかねないからな」

「久城君」

「だけど……えい。仕方ねえ。俺達は後で行くから、少しの間頼むな遊児！」

「任せろ」

さうと。ややこしくなってきたけど、上手く話を纏められたら良いんだが。俺は校長室を出て万丈目を追いかけた。

「万丈目！」

「……久城か。何しに来た？」

「ファンが推しを追いかけるのに理由が要るのか？ 途中まで一緒に行こうぜ！」

「……勝手にしろ」

追いついた万丈目は少し先の通路を一人歩いていた。俺は一言断りを入れて横に並ぶ。

と言ったものの何を話せば良いものやら。ただでさえセブンススターズの件で忙しいのに、今度は兄弟の問題だからな。下手なことを言ったらマズイ。

そうして並びながら歩いていると、

「……濟まない」

「えっ!?!」

歩きながら、万丈目がそう小さく呟いた。何を謝られたのかと不思議に思っている
と、万丈目はさらに続ける。

「今回の一件。兄さん達を止めきれなかった俺にも非がある。だから、今度こそ兄さん
達は何としても俺が止める。例えその前にあの女と一戦交えることになってもな」

その言葉でふと気づく。その瞳に映るどこか悲壮な決意。万丈目はまとめて色々と
背負いこもうとしていると。だからこそ、

「えいやっ!」

「痛っ!?! 何をする!?!」

とりあえずチョップをかまし、頭を押さえる万丈目に対し足を止めて真正面に立つ。
「まくた三沢との一戦の時みたくメンタルが弱ってるぞ。前にも言っただろ? もつと
胸を張れよ! あとついでに仲間を頼れ! ……大丈夫」

俺はそこで軽く万丈目の肩に手を当てる。

「万丈目以外にも、苦戦した相手も勝ちたい相手も仲間ザ!に居るんだろ? 全部背負わな
いで、時々他の奴にも任せろよ! ……なっ!」

「……ふっ。まったたく。俺のファンにそうまで言われてはな。……仕方ない。露払いく
 らいは他の奴に任せるとするか。本命兄さん達が控えているのでな」
 「無茶苦茶タ激しい露ニと贅沢十代とカイザな露払いだけどな」

そう言う万丈目には、もう悲壮の影は見当たらなかつた。

よくし。これで万丈目はひとまず落ち着いたと。後はタニヤに連絡して、万丈目だけ
 は後に回すよう進言すれば良い。戦うのではなく後回しならまだ言い訳も立つだろう。
 俺はホツと胸を撫でおろした。

翌日。

どうしてこうなつた？

昨日の夜、タニヤに次の戦いの時は万丈目は後回しにしてくれと連絡しに行つた所、
 悩んだ結果どこか覚悟を決めたような三沢と良い勝負をしていたのはまあ良いとしよ
 う。

これで心置きなく万丈目は兄弟との勝負に臨める。そう思っていたのに。

「きつと今度のデュエルって」

「そうそう。万丈目兄弟の策略だぜ」

たまたま万丈目と一緒に授業に向かう時、移動中に周りからそんなひそひそ話が聞こえてきた。よく観察してみると、すれ違う生徒の多くが万丈目を見て何とも言えない表情をしている。

マズいな。万丈目は平気な顔をしているが、それでもこうひそひそ噂されて良い気分な訳はない。

「じゃあ、初めから万丈目は負けるつもりで？」

「ここが万丈目グループの物になれば、万丈目自身の物になるってことだろ」

おのれコイツら。言いたい放題言ってくれちゃって、何様のつもりだっ！一言文句を言つてやろうとした時、

「お前達っ！ そんな言い方は無いだろっ！ 万丈目はこの生徒だぞ。一度でもデユエルしたことがあれば、そんな奴じゃないって分かるだろっ！」

おお！ 良い所に十代登場！ 俺の言いたかったことをまとめてぶちまけてくれる。良いぞもつとやれ！

「余計なことを。貴様の助けなど要らんと言つたらうが」

「まあそう言うなよ万丈目。せっかく十代が骨を折ってくれているんだ。厚意は素直に受け取ろうぜ」

ふんつと万丈目はちよつとだけ顔を逸らす。こういふところ素直じゃないんだからな。

それに、

「話は聞いたわ。私達に出来ることがあったら言つて。協力するわ」

「天上院君！ ……ゴホン。いや、天上院君には悪いが断る」

そこに明日香とカイザーも登場！ 明日香の言葉に一瞬表情を明るくする万丈目だが、すぐに取り繕うように咳払いをして服を整える。

前々から思っていたのだが、どうやらマンガ版で三沢が明日香に気があつたように、アニメ版では万丈目が明日香に気があるようだ。惚れた女に弱みを見せたくないってのは分かるぞ万丈目。

「そう尖るな。デュエルで負けるならまだしも、このままではデュエルすることすら出来ないんじゃないか？」

「どういう事？」

「無いんだよ万丈目には。攻撃力500未満のカードが」

えっ?! カイザーの言葉に一瞬時が止まる。今なんて言つた？

「元々俺のデツキはパワーデツキ。攻撃力500未満のカードなどありはしない。唯一持っているのは……これ」

『うつふくん!』

「「え〜っ!?!」」

万丈目が取り出したのはおジャマイエローのカード。これには群衆も含めて嘩然とするしかない。

「そんな。じゃあデッキも組めないって事なのか？」

「ああ。購買部でカードを買い漁ってやろうかと思つたが、間の悪いことに昨日から改装工事中だ」

そう言えばそんな話があつたな。数日購買部が使用できなくなるので、必要な物があれば早めに買っておくようにという連絡が大分前から来てた。

俺の場合は非常用の食料や、雪の女王などの幻想体に渡す分だけ買い込めば良いから問題なかつたが、パックが買えないって他の奴らが嘆いてたのを思い出す。

しかしどうしたものか。いくら何でもカードが無いんじや戦えない。最悪他の生徒達から分けてもらうということになるが、今のこの空気じゃそんなことは言い出しづらい。

万事休すか。そんな諦めムードが漂ってきた時、

「噂で聞いただけなのですが、この島に一か所だけ、それを手に入れられるかもしれない場所があるのによ」

「……!? 本当ですか大徳寺先生!」

そこにいつの間居たのか、大徳寺先生が愛猫アラオを撫でながらふらりと現れ、

そんなことを口にする。だが、

「はい。本当ですにや。私はそんなに嘘はつかないのにや！　ねえフアラオ！」
「うにゃくん！」

微笑みながら語るその言葉に、一瞬何か企んでいるのではと勘ぐってしまったのは何故だろうか？

井戸の底の再会

大徳寺先生の話によると、森の奥には使われていない枯れ井戸があり、そこに昔生徒の一部が余った弱小カードを捨てていたという。

今ではそのカードが悪霊と化して、近づく者を無差別に呪ったり襲い掛かるとかなんとか。

だがそこは天下の万丈目。

「構わん！ たとえ呪われても、カードを手に入れねばならん。俺はこの学園を守らねばならんからなっ！」

只の噂だとそう啖呵を切り、授業が終わると即出発という流れとなった。しかし問題なのは、

「どういうことですか大徳寺先生!? 大徳寺先生も知っているんでしょ？ あそこは本当に出るんだって」

皆が授業に向かった後、俺は僅かな時間を使って大徳寺先生を問い詰める。

噂自体は俺も以前高寺オカルトブラザーズに調べてもらったから知っている。そし

てネクがはつきり精霊が絡んでいると断言しているのだ。

「精霊の強さや数は不明ですが、本物が居る以上危険です。それなのにわざわざ焚きつけるなんて」

「危険は承知にや。でもこれからもどんどんセブンスターズとの戦いは激化していく。闇のデュエルに対抗するためにも、精霊と対面させて少しでも慣らさせる必要があるにや」

先生の言いたいことは分かる。けどはいそうですかとこのまま放っておくわけにもいかない。

俺が行くことで話がこじれる可能性もあるが、行かないで何かあったらそれこそ寝覚めが悪すぎる。なので、

「え〜い。何故お前達がのこのこ着いてくるっ!？」

「いやあ。何せお前にデュエルアカデミアの運命が懸かってるんだ。悪霊が襲ってきたらお前を守らなきゃ!」

「俺もだ。……どこまで力になれるかは分からないけどな」

万丈目を先頭に、俺と十代も加えた一行は森の奥に向けて突き進んでいた。

言っておくが安全第一だ。仮に悪霊が出てきたとして、手に負えないと判断したら即逃げる。逃げる時間ぐらいなら皆で協力すれば何とかなるだろう。なので、

カタカタ！

『まさか悪霊とはな。だが、魂がそこに囚われているのであれば私の得意分野だ』

『今回は私も協力するぞ我が生け贄よ。相手が幽体なら上手くいけば使える手駒が増え……いや。以前私が言つた手前もあるからな。見届けるとしよう』

『ネクちゃん。一緒に頑張ろうね！』

グルル！

今回ばかりは久々に幻想体が最初から精霊状態で同伴だ。

毎度おなじみの罪善さんに、対悪霊ということで葬儀さん。何故か自分から志願してきたネクと、付き添いでレティシア。そして森に関係するということで大鳥も近くに潜んでいる。

ちよつとオーバーかもしれないが、分かっている危険に備えるのは当然のことだ。

「ばかばかしい……と一笑に付したところだが、精霊の存在は知っているからな。万が一ということもある。俺一人でも十分だが、まあ勝手に着いてくるなら好きに……うわっ!？」

そう言いながら進む万丈目の目の前に、突如白っぽい何かが浮かび上がる。あれは!？」

『きやつ!?! お化けつ!?!』

『首が絞まる首がつ!?! 我が運び手よつ!?! 何とかしてやるからその手を放……ぐ』

ええっ!？」

ふよふよと幾つもの何かが飛び回っていた。よく見れば一つ一つにカードの絵柄のような顔が付いている。どうやらあれが件の悪霊らしい。

「ホントに出やがった。……来るぞっ!」

万丈目の言葉通り、悪霊達は呻き声をあげながらこちらに向かってくる。だが悪いな。こつちにはそういうのに強いのが揃ってんだ!

「罪善さん! 葬儀さん! 頼む」

カタカタ!

『ふっ』

罪善さんの放つ光に遮られて悪霊達はこちらに近づくことが出来ず、そこを葬儀さんが一体ずつ白い蝶を飛ばして撃ち落していく。……だが、

「あれ? 消えていない」

前にダーク・ネクロフィアと戦った時のように消滅するかと思ったが、撃ち落した後もその場でもがいている。一体これは?

『一応加減はしておいた。……大丈夫。あれを見てみると良い』

「あれって……げっ!？」

葬儀さんの指し示す先で見たのは、

「ぐわっ!!」

「うっ!!」

悪霊達が十代と万丈目の身体をすり抜ける瞬間だった。俺は慌てて二人に走り寄る。

「大丈夫か二人共っ!!」

「……ん!? 何だ? 痛くも痒くも」

「そうか! こいつらの攻撃力は0。悪霊は悪霊でも、雑魚中の雑魚つてことか」

万丈目の指摘によく悪霊達を見ると、確かに悪霊の大半は攻撃力0のモンスターばかり。他のも精々レベル1や2の低レベルモンスターで攻撃力も低い。これならいくらぶつかられても大したことにはならない。

……なるほど。大徳寺先生はこのことを知ってたな! だから危険もないと判断して万丈目を焚きつけたと。そうと分かればこっちのものだ。俺達は悪霊達を振り払いながら先へ進んでいった。

「お〜! 井戸だ井戸!」

「やかましい。見れば分かる。降りるぞ」

「気を付けろよ二人共。さっきはアレだったけど、奥にもまだ居るかもしれない」

ようやく目的地に辿り着き、持参した縄梯子を伝って慎重に井戸の底に降りていく。さっきの奴らが追ってくる可能性もあるので、葬儀さんと大鳥は井戸の前で待機だ。実力的にも十分だろう。

そして降りた先は、

「ここは……カードの墓場か」

『広いね。カードもいっぱい』

井戸の底はちよつとした空間になっていて、そこにはかなりの数のカードが散らばっていた。十や二十ではきかず、下手すると百枚はあるのではないだろうか？

よくもまあこんな辺鄙な所にこれだけカードを捨てに来たものだ。

「……なるほど。弱っちいカードばかりだ」

「でも、結構面白そうなカードがあるな」

万丈目は一目でそう断じるが、十代は何枚か手に取ってしげしげと眺めている。

俺も何枚か手に取ってみるが……これは凄いな！ 『デーモン・ビーバー』に『火炎草』、『サンダー・キッズ』に『プチテンシ』。現代じゃとつくに絶版になっているような初期のカードばかりだ。性能的にはともかくコレクターが喜びそうなカードばかりだぞ。

他にも攻撃力こそ0だけど、効果は割と面白いカードなんかもちらほら見かけた。

『キャツスル・ゲート』とか『薄幸の美少女』なんかだ。捨てた人は攻撃力でしかカードを見ない奴だったらしいな。

そうしてカードを物色していると、

『やいやい！ テメエら何しに来やがった？』

突然カードの幾つかが光り出し、半透明の姿で現れる。……ってあれは『おジャマ・ブラック』と『おジャマ・グリーン』じゃないか！

イエローと同じくパンツ一丁の独特な姿をしたモンスターが、ポージングをしながら俺達を睨みつける。……って、この流れはまさか！

『まさか捨てられた俺達の恨みを忘れた訳じゃねえだろうな。やるなら相手になってやるぜ』

「知るかつ！ 俺が捨てた訳じゃないし、来るなら来い。碌な攻撃力もないお前達に何が出来る」

万丈目はバツサリ切り捨てる。いや、それはそうだけど言い方っ!?

『万丈目お兄ちゃん。可哀そうだよ。いくら攻撃力がないからって』

『うつ……うわ〜んっ!?!』

確かにおジャマ達の攻撃力は0。飛びかかっても普通に返り討ちだろう。おまけに可愛い見た目でも自分達より攻撃力のあるレティシアに慰められ、惨めさゆえか二人し

て泣き出してしまふ。

おまけにそこかしこからもすすり泣くような声が聞こえてきて、井戸の中を反響してとんでもないことになってきた。

『俺達はやつぱ落ちこぼれよ。あんな奴すら脅すことも出来ないなんて』

『せめて弟が見つかれば、兄弟三人力を合わせ、もう少し何とかなるかもしれないのによっ！』

『『弟よ。どこ行つたんだよ！ お・ジ・ヤ・マ・イ・エ・ロ・ー・よ・お』』

『オイラのこと呼んだ？』

それは多分アニメ的に必然だったのだろう。この二人の呼びかけに対し、万丈目のデツキからおジャマ・イエローがひよっこり顔を出す。

『『イエローっ！ 無事だったのか！』』

『ブラック兄ちゃん！ グリーンあんちゃん！』

『『弟よっ！』』

二人にイエローが飛びついてそのまま抱き合う。本来なら感動的なシーンなのだけど、

「そうか。お前らは兄弟だったのか！」

「なんと見苦しい再会シーンだ」

「見苦しいって言うか……見た目がエグイな」

パンツ一丁の異形達が抱き合う様って誰得なのだろうか？ 一応兄弟の感動の再会に水を差すというのも野暮なので、何も言わずに見守っていると、

『そうだ！ 早く兄さん達お願いして。この人ならここから出してくれるから』

おいイエロー何を言いだすんだ!?

『ホントかつ!? 出してくれよ！ お願いだ。俺達をここから出してくれ！』

『『出してくれ！』』

見るとおジャマ達だけでなく、落ちていたカードの精霊や、さっきの悪霊達までいつの間にかこちらを見つめていた。おまけに、

『こんな所じゃ皆笑えないよ。お願い！ 万丈目お兄ちゃん』

『質は悪いがこれだけ居ればそこそこ使え……ゴホンゴホン。いやまあレティシアの言う通りだ。どうせデツキに必要なのだろうし、全てとは言わんが助けてやつても良いのではないか?』

レティシアは純粹に可哀そうだからと。ネクは何か企んでいるようだが、言っていることは実際まともだ。罪善さんは中立のようで、何も言わずただ静かに浮いている。

そうしていくつもの懇願の瞳が万丈目に集中し、

「……万丈目」

「万丈目さんだ。……………分かった。こいつらは全部俺が預かる」

精霊達は飛び上がって喜んだ。レティシアもニツコリだ。あとネクも何かニタ々つて笑っている。だけど、

「良いのか万丈目？ これ下手すると精霊が百体くらい居るぞ。いくら万丈目でも抑えきれるかどうか」

「仕方ないだろう。その人形の言う通り、まずはカードが無くては始まらない。それにその馬鹿^{十代}に預けたら好き勝手やりかねんし、お前の所は幻想体が既に居る。…………心配するな。この雑魚共程度にどうにかなる俺ではない」

俺が少し心配して尋ねると、万丈目はいつもの不敵な笑みを浮かべて自信満々に言ってみせた。そう上手くいけば良いけど。

『『お〜！ 万丈目様！』』』

「だから万丈目さんだ」

『ありがとう。万丈目サンダー！』

『『万丈目サンダー！！』』』

「サンダー！」

こうしてちやつかり十代も混じったサンダーコールが響き渡る中、俺達は大量のカードを回収して寮に戻るのだった。

さあ。カードは手に入れたが、明日はまずタニヤとの決戦だ。頑張ってくれよ皆！

想いと悩みとリターンマッチ

次の日。

前回と同じ闘技場にて、鍵の守り手達が勢揃いしつつあった。対峙するのはタニヤ。そして愛虎のバースだ。流石に二度目なので、案内役はバースのみで十分ということ。俺は別行動。

ちなみに何をしているかと言うと、

『さてと。いよいよと言った所か。先に行っているぞ。準備が出来たら来るが良い』

「ああ。最終調整に付き合ってもらって済まないな。バランスー」

闘技場内部の一室。外の様子を窺いながら、俺は三沢に声をかけた。三沢は最後にもう一度デッキを確認し、いつものようにベストの内ポケットに装着する。

そうして俺は扉に手をかけると、最後にもう一度確認することにした。

『本当に良いのか？ 一度始めたらもう後には引けないし、可能性も低い。今ならまだやめても良いが』

「……いや。もう決めたことだ」

『そうか。……なら、俺はもう何も言うまい』

ほんの一瞬だけ沈黙し、三沢は勢いよく立ち上がる。その一瞬が、三沢の悩みぬいた答えを表しているようだった。

それを確認すると、俺は一足先に戦いの場へ赴く。これでも審判役だからな。俺が居なきや始まらない。

『いやあ。まさかこんな展開になるなんてね』

歩いている途中、またデーがふらりと現れてそう切り出す。何だよいきなり。

『本来の流れと少しだけズレてきてるってことさ。まだあつたかもしれないって範囲だけどね。まあ君が居ること変わってきているのは実に面白いけど』

『俺が居ようが居まいが関係ないと思うがな。……だけど、三沢がどっちを選んだとしても、俺はそれを尊重するつもりだ』

『久城君ってそういうところあるよね。実に退屈しない。……僕はのんびりこの展開を楽しませてもらうとするよ』

それだけ言ってまたデーは姿を消す。……何しに出てきたんだアイツは？ まあ良いけど。

「よくぞ来た。この私の胸を焦がし、熱き血潮を滾らせる強き男であることを期待する

ぞ」

「おうっ！ 俺が相手になるぜ！」

俺が辿り着いた時、タニヤは開口一番前と同じ条件を鍵の守り手達に告げた所だった。

三沢という婿が出来たのもう男という縛りは実質意味は無いのだが、それはそれとして好みの問題だろう。ちなみに自然に外された明日香はご立腹だ。

そしてタニヤの言葉に十代がスツと進み出て立候補するが、

『……十代よ。アピールするのは良いが、今回選ぶのはタニヤの方だ』

「そっか！ そうだよな。……なあ！ 俺を選んでくれよ！」

「バランスーか。遅かったではないか」

『少し野暮用でな』

親し気に声をかけてくるタニヤにそう返しながら、俺は仮面越しに十代を見据えてルールを確認させた。十代はうっかりしてたと言わんばかりに髪を掻く。

「お前……名前は何？」

「俺は遊城十代。遊城つちって呼んでくれ！」

「ふくむ。面構えは良し。ちよっとおバカそうだけど熱い奴のようだ。……良いだろう。お前にしよう」

本来タニヤが選手を指定する側なのだが、十代の強引なアピールと持ち前の観察眼からお気に召したようだ。そのまま十代を対戦相手と認める。

そして両者位置に着こうとした時、十代が突如声を上げた。

「だけどその前に、三沢は無事なんだろうな？」

「無事？ 私が三沢つちに危害を加えるとしても？ バランサーの話では三沢つちからの

手紙を受け取った筈だが」

「ああ。手紙によると三沢は元気でやっているらしい。でもやっぱ自分の目で確かめた
いじゃんかー！」

十代の言葉に皆がうんうんと頷く。それはそうだ。ならば、

『十代。三沢は間違いなく手紙にあったように無事だ。何なら証拠を見せても良い』

「証拠？」

『ああ。俺の後ろを見ってみろ』

十代や他の皆に聞こえるように声を上げ、そのまま後ろを腕で指し示す。そこから歩いてくる男こそ、

「三沢っ！ 無事だったんだな！」

「ああ。心配かけたみたいだな」

「三沢君……って、何か雰囲気変わった？」

「そうかな？」

ザツザと音を立てて歩いてくる三沢に対し、翔が少しだけ困惑するような声を出す。それはそうだろう。

近づくだけで分かるどことなく漂う迫力。前のように知性に溢れながらも、どこか野性味をも帯びた鋭い顔立ち。

「男子三日会わざれば刮目して見よ」という言葉があるが、今の三沢はまさにそれだった。

タニヤに半ば無理やり拉致られてからの三日間、三沢を待っていたのは戦いの日々だった。

起きてデュエルをし、朝食を食べて腹ごなしにデュエルをし、トレーニングをしてからデュエルをし、と言った具合に。

もし途中で肉体か精神のどちらかが折れるようなことがあれば、三沢つちと言えど容赦なく放り出していたというのがタニヤの談だが、三沢もまたその戦士としての闘争本能によく応えた。

それは元々身体を鍛えていた三沢であつても精魂尽き果てかねないハードさだった

が、初日にしつかり休んでいたこともあって、必死に食らいつく姿勢はタニヤをも感心させるほどだった。

結果、全体で見れば未だ負け越してはいるものの、戦う度にどんどん腕を上げていく三沢は放り出されることもなく今日までであり続けた。

そしてタニヤもまた、戦いの合間合間では嫁として甲斐甲斐しく三沢に尽くした。看病も、服の繕いも、食事や洗濯も。まるで新婚夫婦のように。

厳しいながらも張りのある生活。それを数日続けたことで、今の三沢は心身ともに充実しつつあった。

「三沢っ！」

「三沢君！」

他の皆も次々に駆け寄っていき、三沢の無事を確認する。……まあデュエルがエキサイトして軽い擦り傷くらいは出来たかもしれないが、それ以上の傷は無いはずだ。流石にそこまで行くと俺も止めに入るからな。

「皆。心配かけたな」

「無事でよかつたノ〜ネ。シニョール三沢」

「まったくだにゃ！」

「先生方も、御心配をおかけしました」

教師二人がホッと胸を撫でおろす。生徒が怪我でもしたら大問題だ。

『これで心配はなくなったかね十代?』

「おうよ! さっ! 待たせたなタニヤ」

「待ちかねたぞ。三沢つちはちよくつと待っててね! ここでまた一つ鍵を手に入れて、三沢つちに良い所見せちやうから! ……あつ!? もし仲間が負ける所が見たくないってことなら先に部屋に戻ってくれても良いから」

そうして二人はデュエルディスクを展開し、

「待ってくれ!」

その戦いを止めるべく、力強い声が場を切り裂いた。その声を発した男、三沢に対して一同の視線が集まる。

三沢は覚悟を決めた様子で十代の下に歩み寄り、とんでもない発言を口にする。

「十代。この勝負……俺に譲ってくれないか?」

「どういふことだよ三沢?」

「言った通りの意味だ。俺にもう一度タニヤと戦わせてくれ」

驚く十代に対し、三沢は静かな口調だが強い意志を込めてそう告げる。

「もうっ！ 三沢っちつたら！ デュエルなら後でいつでも付き合っただけでいいのに！」

「そうじゃない。もう一度鍵を賭けて真剣勝負がしたいと言ってるんだ」

その言葉に、甘えるような声を出していたタニヤも真剣な顔つきに戻る。

「あの時のデュエル、後悔してるの？ 私に負けたから？」

「ああ。後悔してる。……だけど、それは負けたからでも、タニヤの想いに応えたことでもない。想いに応えることだけに囚われて、肝心のデュエルで冷静さを欠いたことだっ！ お前が全力で来てくれたのに、俺の全力を出し切れなかったことだっ！」

そう。それが三沢が心の奥底で悩み続けていたこと。

以前三沢は全力でぶつかっただけで済んでしまった。しかしそれは想いに対しての全力だけで、デュエリストとしての全力とは言えなかったのではないかと。

ここ数日、三沢とタニヤは戦い続けていたが、それはどちらかと言えば模擬戦に近い。手を抜いている訳ではないが、あの時のような熱意とはまた別物だ。

「だから……頼む十代。凶々しいこととは承知している。だが、このデュエルだけは譲ってくれ。……頼む」

「急に言われてもな……第一三沢の鍵はもう」

深々と頭を下げる三沢に対し十代も困惑気味だ。さて。俺も助け舟を出すとするか。

『その点に関してだが、一つ補足させてもらおう。事前に三沢に今回の件を聞かされ、審判役として問い合わせた結果、想定外との返答が返ってきた。基本的に行われるのは闇のデュエルなので、一度負けた者が再戦を要求するなんてことはまずないからな』

例えば、ダークネスが行ったのは負けた方の魂が封印されるもの。他の面子も似たようなものだと思えば、そりゃあ再戦は難しい。

『なので今回は特例として、当事者が了承するなら一戦だけ認めるとのお達しが来た。ただし既に負けている以上、誰かの鍵を担保とすることが条件だ。この場合はタニヤと十代が認め、さらに十代が自身の鍵を代わりに賭けることが条件となる』

「そんな!? いくら何でもめっちゃくちゃだよ! こんな条件呑む必要ないよアニキ」

「同感だな。再戦と言っても三沢は一度負けている。なのにわざわざリスクを負って任せることもないだろう」

翔と万丈目の言葉はもつともだ。実際俺も、素直に受け入れられる可能性が低いことは事前に三沢に告げている。仮に勝とうが負けようが、これが元で友情を損なう可能性だってあると。だけど、それでも三沢は意思を曲げなかった。

「……タニヤは、闇のデュエリストでありながらその潔い戦いに姑息さは無く、真つすぐに向かつてくる姿には尊敬の念さえ覚えた。何度も戦って、カードを交える度にその思

いが強くなっていった」

「デツキとデツキを交えた者同士で感じる事が出来る絆のようなものか」

カイザーの言葉に三沢は静かに頷く。

「だが、そんな彼女との戦いを俺は汚してしまった。これを逃したら、多分一生後悔する。……だから、この通りだ」

頭を下げ続ける三沢。そして十代の答えは、

「……良かったな三沢。そんなデュエリストに出会えて」

「十代」

「そこまで本気で頼まれちゃあ断れねえって！ 前に遊見ももつと仲間に頼れって言うてたしな。俺もやりたいけど、今回だけは譲ってやる。……勝てよ」

「ああ。……ああ！ ありがとう」

十代はサツパリと……いや、かなり未練たらたらな様子だったが、自分の鍵を三沢に手渡して観客席に移動する。他の皆も続々と移動していく中、

『一応タニヤの了承も要るが……断らないよな？』

「当然だ。戦士は決して挑まれた勝負から背を向けない。三沢つちが挑んでくるというのなら、私はそれを迎え撃つのみ」

『なんとも男前なことだ。だが、感謝する』

舞台は整った。ここに居るのはセブンスターズと鍵の守り手。……いや、それより前に、互いの想いと熱意をぶつけ合うただ一組の男と女。

ある意味当事者にとって、世界の破滅よりも大事な一戦が再び幕を開ける。

再戦 タニヤ対三沢 知恵比べ

三沢 LP4000

タニヤ LP4000

俺も含め十代達は全員観客席に移動し、中央には三沢とタニヤの二人きり。そんな中、戦いの出だしはとても静かなものだった。

「俺のターン。俺は手札から『オキシゲドン』を攻撃表示で召喚。カードを1枚伏せてターンエンドだ」

オキシゲドン ATK1800

それだけ？ とでも聞きたくなるような静かな一手。だがその一手を見ても、タニヤの目には僅かたりとも油断の影は見えない。

「私のターン。ドロー。私は魔法カード『増援』を手札から発動！ デツキから戦士族『アマゾネスの聖戦士』を手札に加える。そしてモンスターを裏守備表示でセットし、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

対するタニヤはなんとモンスターを裏守備で出す。現実世界では定石であるが、GX世界では大抵表側で出して伏せカードで迎撃するのが一般的だ。

しかも今増援の効果で手札に加えた聖戦士は、そのまま出しても自身の攻撃力をオキシゲドンと同じまで上げる効果がある。それをわざわざ守備で出すとは思えないので、あのモンスターは別物か、それとも伏せカードに自信があるか。

「三沢っち……いや、三沢よ。お前は前と同じく知恵のデッキを選んだ。よって、ここは一つ知恵比べと行こうではないか」

「望むところだー！」

嫁ではなく戦士として接するタニヤに対し、三沢もまた知恵者として受けて立つ。

さあ。問題は次のターンだ。

三沢 LP4000 手札4 モンスター オキシゲドン 魔法・罠 伏せ1

タニヤ LP4000 手札3 モンスター 裏守備1 魔法・罠 伏せ2

「行くぞ。俺のターン。俺は手札から『ハイドロゲドン』を攻撃表示で召喚」

ハイドロゲドン ATK1600

『どうやら三沢君は攻め込む気みたいだねえ。ハイドロゲドンの効果を狙っているみたいだけど、果たしてどう転ぶか』

『……もう突っ込まないからなデー』

どうせ他の皆は試合に集中してるから僕が出てきても大丈夫だよとかなんとか言う気だろ！俺はディーを放っておいてこれからの流れを見守る。

「バトルだ！俺はハイドロゲドンで裏モンスターに攻撃。『ハイドロプレス』！」

三沢の号令により、ハイドロゲドンが口から水流を噴き出して攻撃を仕掛ける。だがタニヤは伏せカードで迎撃するでもなく、そのまま攻撃を受けてカードが表側に変化する。そのカードは、

アマゾネスの鎖使い DEF1300

『アマゾネスの鎖使い』。このカードが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、1500LPを払う事で効果発動！『死に際の鎖舞い』！

タニヤ LP4000↓2500

破壊されたアマゾネスの持つ鎖がヒュンッと風を切り、三沢の手札に絡みつく。……げっ!! これはマズい！

「相手の手札を確認し、その中からモンスター1体を選んで私の手札に加える。私が選ぶのは……『ウォータードラゴン』」

「なっ!?!」

鎖はそのまま手札の1枚を抜き取ってタニヤの下に運ぶ。鎖使いとはまた厄介なカードを伏せていたものだ。1500という割と大きいコストを払う代わりに、相手の

手札の確認・相手のモンスター奪取・自分の手札増強がこなせるからな。

手札もLPも少ない終盤では使いづらいが、序盤で使われると手の内も読まれてかなり面倒だ。そのことに三沢も気付いたのか険しい表情をしている。

おまけにウォータードラゴンは三沢のデッキのエース。本来魔法『ボンディング―H20』で手札・墓地・デッキのどこからでも出せるのが利点だが、流石に相手の手札からは呼び出せない。

たつた一枚でここまでやるとは流石だなタニヤ。

「惜しかったな。その手札なら、次のターンにはこのカードを呼び出せただろうに」

「くっ！……だがこちらもハイドロゲドンの効果発動！ 相手モンスターを破壊したことで、デッキから同名カードを特殊召喚できる」

余裕たっぷりと言うタニヤに、三沢も負けじとハイドロゲドンをもう1体場に揃える。このまま行けば連続直接攻撃を受けてタニヤの負けだが、

「永續罨発動！ 『アマゾネスの意地』。墓地のアマゾネスの鎖使いを攻撃表示で特殊召喚する」

再び場に出る鎖使い。効果は確かに脅威だが、残りLPを考えると乱発は出来ないはず。単に壁にしたとしても、またハイドロゲドンに破壊されれば同じことの繰り返しだ。

三沢もそう思ったのか追撃をしようと口を開き、

「もう1体のハイドロゲドンでアマゾネスの鎖使いを……」

その瞬間、何かに思い当たったように手を止めてタニヤのもう1枚の伏せカードを見る。

「どうした？ 攻撃してこないのか？」

「……いや。俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

「ふふっ。慎重だな。だが……良く気づいた」

ニヤリと笑うタニヤの言葉に俺もそこで気づく。あのタイミング。これはあくまでも想像だが、もし伏せてあるのが『アマゾネスの弩弓隊』だったら？

鎖使いの効果すらも囿。三沢に敢えて鎖使いを一度破壊させ、ハイドロゲドンで倒せると印象付ける。その状態で鎖使いが復活すれば、また同じように効果の発動を狙ってハイドロゲドンで攻撃するだろう。

そこを弩弓隊で攻撃力を下げた上で攻撃を強制させてまとめて返り討ちにする。あと三沢の場に残るのは既に攻撃を終えた上に攻撃力も下げられたハイドロゲドン1体と、しっかりとタニヤに確認された手札のみ。当然対策も容易で三沢には苦しい展開になっただろう。

「単純な攻撃だけでは手痛い反撃を受ける。言っただろう？ 知恵比べだと」

「ああ。理解しているよ」

「では私のターン。ドロロー。私は手札からアマゾネスの聖戦士を攻撃表示で召喚。効果により攻撃力アップだ」

アマゾネスの聖戦士 ATK1700↓1900

「さらに手札から魔法カード『アマゾネスの呪詛師』を発動！ これにより、アマゾネスの鎖使いとオキシゲドンの攻撃力を入れ替える」

鎖使い ATK1500↓1800

オキシゲドン ATK1800↓1500

「ああっ!? 三沢君のモンスターは攻撃力がっ!?」

「全てタニヤのモンスターを下回ったか」

観客席からは焦ったような声が聞こえてくる。それはそうだ。ここで三沢が負ければ、代わりに無くなるのは十代の鍵。気が気ではないだろう。……だが、

「心配すんなって！ 三沢はまだ全然諦めちゃいない」

そう。肝心の鍵を賭けている十代が、三沢の事を信じている。そのことがどこか周囲にも落ち着きを保たせていた。

「分かっているぞ三沢よ。お前が今のターン伏せたのは永続罫『スピリットバリア』。それで自分へのダメージを最小限に抑えつつ、『リトマス』の死の剣士の効果に繋げる腹積

もりだということ。だがそうはさせません。私は速攻魔法『サイクロン』を発動！ 相手の場の魔法・罠を1枚破壊する」

タニヤのカードから巻き起こる風が、三沢のさつき伏せたカードを破壊する。それはまさにスピリットバリア。……やるな。さつき手札を確認したから、何があるかは把握済みって訳か。

「行くぞ。私はアマゾネスの聖戦士でハイドロゲドンに攻撃！」

聖戦士が剣を構え、ハイドロゲドン目掛けて踊るように跳躍する、そしてその攻撃が直撃する寸前、

「罠発動！ 『アモルフアス・バリア』。モンスターが3体以上居る時、相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる」

地面から薄紫の柱がハイドロゲドンを守るように伸び、剣で切り裂こうとした聖戦士がたたたらを踏む。

「ほう。二段構えだったか」

「ああ。分かっているからこそ、そのまま出してしまえば対処せざるを得ないはず。情報が洩れているのならそれも踏まえた上で動くだけの事」

「なるほど。それがお前の知恵か。……面白い」

そしてタニヤのターンエンド時にアマゾネスの鎖使いとオキシゲドンの攻撃力は元

に戻る。

そんな中互いにニツと笑うその姿は、婿と嫁という事の前にただ二人の戦士だった。

三沢 LP4000 手札2 モンスター ハイドロゲドン2体 オキシゲドン
魔法・罠 なし

タニヤ LP2500 手札2 モンスター アマゾネスの聖戦士 アマゾネスの
鎖使い 魔法・罠 アマゾネスの意地 伏せー

「俺のターン。ドロロー！……俺はカードを伏せてこのままターンエンド」

「三沢の奴。良いカードが引けなかったみたいだな」

「ああ。かと言って、もし迂闊に攻撃してタニヤの伏せカードが本当にアマゾネスの弩
弓隊だったらそのまま全員返り討ちだ。今は耐えるしかない」

十代と万丈目がそう流れを評しながら見守っている。

アマゾネスの弩弓隊は、アマゾネスモンスターが場に居る時に相手が攻撃宣言をした
ら発動する罠。だからこちらから仕掛けない限りは使えない。

しかし今の状態では、発動したら三沢の全モンスターが返り討ちに遭い、しかもがら
空きの状態でタニヤにターンが回るといふ最悪の展開になる。つまり三沢が今考えて

いるのは、

「攻撃力を下げられても強引に突破できるだけのモンスターか、伏せカード自体を破壊できるカードを待つ……といった所か？」

タニヤの推測に、三沢は何も答えない。だがおそらくそれは当たっている。

「確かにそれが今の時点の最良だろう。だが……それまで場が保てばの話だ。私のターン」

タニヤは勢いよくカードをドロウしてニヤリと笑う。何か仕掛けてくる気だぞ三沢。

「私は『アマゾネスペット虎』を攻撃表示で召喚。場のアマゾネスの数だけ攻撃力が上がり、当然アマゾネスの聖戦士もアップだ」

アマゾネスの聖戦士 ATK1900↓2000

アマゾネスペット虎 ATK1100↓2300

タニヤの場に大虎が出現して吠え上げる。

「今度は防ぎきれるかな？ まずはアマゾネスペット虎で、ハイドロゲドンを攻撃！」

「ぐうっ!!？」

三沢 LP4000↓3300

「まだまだ！」

続いてアマゾネスの聖戦士で、もう一体のハイドロゲドンに攻撃だ」

「うおっ!!？」

三沢 LP3300↓2900

大虎の牙と聖戦士の剣に、2体のハイドロゲドンは倒れ伏す。そして、

「最後に、アマゾネスの鎖使いでオキシゲドンを攻撃」

「迎え撃てオキシゲドン！」

鎖使いが鎖を振り回して投げつけるが、オキシゲドンはひらりとそれを回避、そのまま滑空して鎖使いに反撃、破壊する。

タニヤ LP2500↓2200

そして対象が破壊されたことで、アマゾネスの意地も連鎖的に破壊され、他のカードも攻撃力がダウンする。

アマゾネスの聖戦士 ATK2000↓1900

アマゾネスペット虎 ATK2000↓1900

「あれっ!? なんでタニヤは敢えて攻撃力の低い鎖使いで攻撃したんだろう?」

「お勉強が足りません〜ネ。アマゾネスの意地で蘇生したカードは、攻撃可能であれば必ず攻撃しなければならぬデメリットがあります〜」

翔の疑問にクロノス教諭が気取った態度で答える。さっきのターンは呪詛師で攻撃力を変えていたから良かったが、効果が切れた以上残るは玉砕のみだ。その点はリビングデッドの呼び声の方が優れているが、アマゾネスだからこそそのサーチなんかも出来る

からまあ一長一短だな。

あとは鎖使いが戦闘で破壊されたことで、一応また効果を発動することも出来るんだが……。

「鎖使いの効果は使わない。私はこれでターンエンドだ」

まあ使わないわな。ここで使ったらLPは残り700。おまけに使っても三沢の手札はあと2枚。確認してもあまり旨味は無いし、獲れるモンスターがある確率も低い。鎖使いは序盤に使ってこそ意味がある。

しかし状況はやや三沢が不利。さあ。どう切り抜ける三沢。

再戦 タニヤ対三沢 想いを繋げる双竜

三沢 LP2900 手札2 モンスター オキシゲドン 魔法・罨 伏せ1

タニヤ LP2200 手札2 モンスター アマゾネスの聖戦士 アマゾネス

ペット虎 魔法・罨 伏せ1

戦っている内にすっかり陽も落ち、周りが暗くなる代わりに闘技場のあちこちに火が灯る。

ユラユラと炎に照らし出される中央の二人の姿は、どこか幻想的とさえ言えた。

「俺のターンっ！ 俺は手札から魔法カード『強欲な壺』を発動！ カードを2枚ドロ―する」

おおっ！ ここで手札増強カードか！ 三沢は更に手札を追加し、何か覚悟を決めたかのようにタニヤを見据える。

「俺は手札から魔法カード『インスタントフュージョン簡易融合』を発動！」

「簡易融合だと？」

対戦しているタニヤが驚く。ちなみにこのカードは、三沢がタニヤと真剣勝負をする
と覚悟を決めた時、最終調整用に俺が三沢の寮から取ってきた中であつた物の一つだ。

ここに来るギリギリまで調整していたから知らなくても無理はない。

「簡易融合の効果。LPを1000払い、レベル5以下の融合モンスターを融合召喚扱いで融合デッキから特殊召喚する。俺が選ぶのはレベル5『朱雀』」

三沢 LP2900↓1900

朱雀 ATK1900 炎属性 炎族

三沢の場に、中国の四神の名を冠した魔術師が現れる。

「攻撃力1900か。私の場のモンスターと同じ。だが、簡易融合で召喚したモンスターは攻撃宣言が行えず、エンドフェイズに破壊されるデメリットが有る筈」

「ああ。だがタニヤ。最初に俺のウォータードラゴンを封じてくるとは流石だが、俺のデッキはそれだけじゃないってことを教えてやるぜ！俺は続けて儀式魔法『リトマスの死儀式』を発動！場のオキシゲドンと朱雀を生け贄に、『リトマスの死の剣士』を儀式召喚するっ！」

オキシゲドンと朱雀のレベルの合計は9。よって召喚条件を満たし、三沢の手札からリトマスの死の剣士が特殊召喚される。

リトマスの死の剣士 ATK0

「さらに俺はリバースカードオープン！ 永続罫『アストララルバリア』」

モンスターへの攻撃を、自分への直接攻撃に変更する障壁。だが、三沢の狙いはそこ

じゃない。場に罨が存在することにより、リトマスの死の剣士の攻撃力は3000まで上昇する。

リトマスの死の剣士 ATK0↓3000

「リトマスの死の剣士は罨カードの効果を受け付けない。よってアマゾネスの弩弓隊の効果は通用しないぞ。バトルだ！ リトマスの死の剣士で、アマゾネスペット虎に攻撃！」

「ぐおおおっ?!」

アマゾネスペット虎 ATK1900

タニヤ LP2200↓1100

大虎が双剣によって切り裂かれ、タニヤもその衝撃の余波でよろめく。だが倒れる直前、力強く足で踏ん張り、ギリギリで耐え忍んだ。

「モンスターが減ったことで、聖戦士の攻撃力もダウン。俺はこれでターンエンドだ」

聖戦士 ATK1900↓1800

「良いぞ三沢っ！ その調子だ」

「三沢君っ！ 頑張っつて！」

状況が一気に三沢に傾いたことで、活気を取り戻す応援団。だが、

「……フフフ。良いぞ。良い感じだ。デュエルはやはりこうでないかねえ」

タニヤは劣勢に焦るところか寧ろ喜んでいた。今の衝撃で僅かに切れた口の端をグイッと拭い、闘志をメラメラと滾らせる。

この強敵との戦いをどこまでも純粋に楽しむ気質。ある意味で十代と同じだが、敵に回すところまで厄介とは。

「私のターン。私は手札から『アマゾネスの剣士』を攻撃表示で召喚」

アマゾネスの剣士 ATK1500

前に戦った時に散々苦しめられたカードが、タニヤの場で油断なく剣を構える。

「聖戦士を守備表示に変更し、私はアマゾネスの剣士でリトマスの死の剣士に攻撃を仕掛けるっ！」

「何っ!?!」

攻撃力の劣るアマゾネスの剣士の方から、三沢の双剣士に突っ込んでいく。結果は当然リトマスの死の剣士が女剣士を返り討ちにすることで終わる。のだが、

「アマゾネスの剣士の効果発動! このカードの戦闘によつて受けるダメージは、全て相手プレイヤーが受ける」

女剣士の手を離れた剣が、そのまま勢いよく三沢に突き刺さる。勿論映像とは言え、

それでも衝撃は本物で三沢もたまたまらず傷口を押さえる。

三沢 L P 19000 ↓ 400

そう。相手が強ければ強い程、剣士の効果はより凶悪になる。おかげで一気に三沢のLPは風前の灯火だ。

「メインフェイズ2。私は手札から魔法カード『死者蘇生』を発動！ 墓地から1体モンスターを特殊召喚する。私が選ぶのは当然アマゾネスの剣士」

好きなカードを復活させられる単純だが強力な死者蘇生の効果により、今倒されたはずの剣士が再び場に現れる。これはマズいぞ!?

「ヤバいな。このままじゃ三沢は次のターン負ける」

「えっ!?! どうしてさ万丈目君?」

「三沢のライフは残り400。今下手にリトマスの死の剣士で攻撃したらそれだけでアウトだ。かと言って攻撃力を抑えたモンスターで攻撃しても」

「おそらく伏せているだろう弩弓隊で、攻撃力を下げられてカウンターが来る。攻撃しなくても次のターンでタニヤの方から来るだろうしな」

「そんなっ!?! じゃあ三沢君はもう」

冷静に状況を読み取る万丈目とカイザーの言葉に、翔が絶望的な顔をする。確かに酷い状況だ。だが、

「いや、まだ勝負は分からないぞ」

ふとそんな言葉が口からこぼれ出ると同時に、自分と同じ言葉を発した十代と顔を見合わせてつい苦笑する。

そう。まだ勝負は分からない。さっきのターン。わざわざ朱雀を墓地に送ったことで既に布石は打たれている。あとはあのカードを引き込めるかどうか。

「私はこれでターンエンドだ。……三沢よ。サレンダー^降しても良いのだぞ？ 三沢っちはタニヤのお婿さんだもの。今はまだ勝てなくても、今の調子で鍛えればいずれは私より強くなるかもしれない。だから」

構えを解いてそう投げかけるタニヤの言葉はどこか優しげだった。少しだけ嫁としての面が出てくるほどに。……だが、

「……それは出来ないよ。タニヤっち」

三沢はゆっくりと首を横に振った。

「前に君は言ったよな？ 『デュエルに諦めは許されない。そして情けも許されない』と。最後の最後の最後まで、デュエルに全身全霊を込めて向き合う事。それが真の戦士の生き様だ。それなのに、このデュエルを中途半端に終わらせることは出来ない。君との戦いをまた汚したくはない」

それは三沢なりの戦士としての敬意。数日間戦い続けてきたからこそその絆。故に大

切な人からの優しい降伏勧告でも、大切な人だからこそ受け入れられない。

それを聞いてタニヤも、ゆっくりと頷いてデュエルディスクを構え直す。

「……そうか。お前の気持ち確かに受け取った。なら、全力で叩き潰すのみ！ さあ三沢よ。知恵を絞れ。お前の力を見せてみる！」

「おうっ！」

いよいよ決着の 때가近いようだ。

三沢 LP400 手札1 モンスター リトマスの死の剣士 魔法・罨 アストラ
ルバリア

タニヤ LP1100 手札1 モンスター アマゾネスの剣士 アマゾネスの聖
戦士 魔法・罨 伏せ1

かなりの劣勢。逆転したと思つたらまた逆転され、並の精神力ならもう心が折れてもおかしくない状況。だが、三沢は落ち着いているように見えた。

『この状況。久城君はどう見る？』

『大ピンチだな。真正正銘の……だが、勝ち筋はある』

ギリギリまで最終調整した三沢のデッキ。それに付き合つたのは俺だ。なので今の

三沢のデッキに、この状況を打開できるカードがあることを知っている。

『全てはこのドローに懸かっている』

『そっか。……じゃあ見守るとしようじゃないか。いよいよクライマックスだ！』

三沢は静かにデッキに指を掛けた。そして、

「ドローっ！」

気合一閃。弧を描くようにカードの軌跡が伸びる。引き当てたカードは、

「俺は墓地のハイドロゲドン2枚と朱雀を除外し、手札から『氷炎の双竜』フロストアンドフレイムツインドラゴンを特

殊召喚する！」

氷炎の双竜 ATK2300

三沢の場に現れたのは、氷と炎の竜が絡み合ったようなモンスターだった。

このモンスターをデッキに入れると三沢が言った時には少し驚いたが、この氷と炎という正反対の属性を持ちながらも共に戦うこの姿に、以前タニヤの言った「違う者同士が引き合うにはたくさん頑張らないといけない」という言葉を思い出したという。

いわばこれが彼なりのアイドルカードという訳だ。そして、このカードこそが逆転の

キーカード。

「氷炎の双竜の効果発動！ 1ターンに1度、手札を1枚捨てて場のモンスター1体を破壊することが出来る。俺はアマゾネスの剣士を破壊っ！」

「何だどっ!?」

手札からコストとして捨てられたのは、これまでずっと手札で燻っていた『ボンディングーH20』。それに呼応してか、まるでウオータードラゴンのような水と氷の混ざったブレスを氷竜が放って剣士を吹き飛ばす。

戦闘を行わないのなら当然ダメージも発生しない。さあ。厄介なモンスターは居なくなつたぞ。

「行くぞタニヤ。まずリトマスの死の剣士で、アマゾネスの聖戦士を攻撃!」

「くっ!? リバースカードオープン! アマゾネスの弩弓隊! 相手モンスターの攻撃力を600ダウンさせる」

「リトマスの死の剣士は罨を受け付けない!」

氷炎の双竜 ATK2300↓1700

苦し紛れに放たれる矢の嵐だが、氷炎の双竜の攻撃力を僅かに下げただけ。矢を掻い潜りながら近づき、双剣士が聖戦士を切り裂いて消滅させる。そして、

「これでトドメだ。氷炎の双竜でタニヤに直接攻撃! うおおおっ!」

「……見事だ。三沢っち」

自らのLPを削り切る氷炎のブレスを浴びながら、タニヤはそう言って仰向けに倒れ伏した。

タニヤ LP1100↓0

三沢WIN!

ある一つの想いの結末

「タニヤっ!？」

倒れ込んだタニヤに向けて三沢が慌てて駆け寄る。他の面子も三沢を追って観客席から降りようとするが、

ガルルル!

「うわっ!? またコイツかよ!？」

先頭を行く十代の前に、バースが素早く立ち塞がって威嚇するように唸り声を上げる。だが、その視線はチラチラと主人の方を向いている。

「悪いな。ここから先に進んで良いのは三沢だけだ」

「バランサー」

俺もバースの横に立って他の面々を押し止める。……バースも本来ならいの一歩に駆け寄りたい所だろうが、ほんの少しだけ我慢してほしい。別れぐらいは恋人同士二人つきりでないとな。

まあ調整役として聞き耳程度は立てさせてもらおうが。俺はそつと首だけ後ろを振り返り、微かに聞こえる声に耳を澄ませる。

「タニヤ。俺は……」

「……ふふっ！ 見事だったぞ三沢。これまで私は一族に見合う強い男を探してきたが、最後の最後で出逢えたようだ。最高のデュエリストに」

三沢の手を取ってタニヤがゆっくりと立ち上がると同時に、その身体を小さな粒子が覆い隠す。そして、その粒子が晴れた後に残ったのは……風格漂う一頭の白い大虎だった。

「……虎!?」

『デュエルに敗れ、鍵を奪うことが不可能になった以上、契約不履行と見なされたようだ。……三沢には言えなかったが、これが本来の私。精霊としての私の姿なのだ』

虎の姿のまま、タニヤの声が直接心に響いてくる。声帯が変わって人の言葉を喋ることが出来なくなったのだろう。

『婿探しには人の姿の方が何かと便利だな。精霊の世界では自在に人の姿も取れるのだが、こちらの世界では実体化するだけでも力を消耗して人の姿を取り続けることはなお難しい。なのでセブンススターズに所属する際、その闇のアイテムを契約の一部として借り受けたのだ。人の姿を保つためにな』

タニヤの視線の先には、彼女が人の姿の時に手に着けていたウジャド眼の刻まれた手袋が落ちていた。あれか。妙な意匠だとは思っていたが闇のアイテムだったとは。

『だがこうして負けた以上、契約が切れて人の姿を保てなくなったわけだ。……騙していてすまないな三沢よ』

「……知っていたさ。タニヤが精霊だということは。虎だとは分からなかったがな」

『それは……なるほど。バランスーめ。口を滑らせたな』

おっと。タニヤがこつちにじろつと視線を向けてきたので素知らぬフリをする。こういう時は仮面は便利だ。

「詫びるのはこつちだ。タニヤが精霊であること。そして真剣勝負の結果、もし勝つたらもうタニヤと離れ離れになること。全部知った上で俺は戦いを挑んだ。こんな形でしか、俺の想いを伝えられなかった。……すまない」

三沢は黙って頭を下げる。実際三沢はあのまま何もしないという選択肢もあった。

アニメの流れなんかを考えると、仮にその場合でもいざ十代辺りに当たってタニヤが負ける可能性は高く、いつかは生活は破綻していただろう。しかしそれまでは甘く穏やかな暮らしをすることは出来たはずだ。

実際タニヤの事を話したのは、それも踏まえて決めてほしかったということもある。

だが、三沢はそのままであることを許せなかった。恋に溺れ、想いに吞まれてデュエルに向き合えなかったことを恥じ、相手がタニヤだからこそもう一度真摯に向き合って戦うことを選んだ。

その気持ちを止めることは、どうしてもできなかった。

頭を下げ続ける三沢を、タニヤは何も言わずじっと見つめていた。そして、

『良いのだ。三沢よ。あの瞬間、お前はまさしく戦士だった。戦士であり、私の婿であり、最高のデュエリストだった。ならば、この敗北は寧ろ本望だ。……ああ。そろそろ、行かねばならないらしい』

その言葉と共に、タニヤの身体が少しずつ透けていく。それを見た十代達も、ようやく今は手を出す雰囲気じゃないと察したのか勢いが弱まる。……もう良いだろう。

俺は最後に大きく腕を広げて十代達を制止すると、後方で様子を窺う大徳寺先生にそっと目配せをしてバースと共にタニヤの下に駆け寄った。

『バランスーか。お前にも世話をかけたな』

『それが俺の役目だからな。……行くのか?』

『ああ。少しずつ実体を保つのも難しくなってきた。敗者はただ去るのみだ。……バース!』

ガルツ!

一声吠えると、従順なる虎は主人の傍らに寄り添うように歩み出る。今にして思ったが、これまでバースが三沢に対して微妙に距離を置いていたのは、嫉妬などもあったのかもしれない。

タニヤは虎としてその四肢で強く地面を蹴ると、ザッと闘技場の出口へと歩き出す。それに付き従うバース。

『さらばだ。三沢。……私の婿よ。これからも強くあれ!』

言葉少なにそう言い残し、消えつつある身体をもともせずに歩みを進めるタニヤ。そうして彼女が闘技場を去るのを、一同は静かに見守って……いや、

「タニヤっ!」

『三沢!?!』

一人だけ違った。三沢はタニヤに駆け寄り、そのまま力強く抱きしめたのだ。

「例え精霊であろうともっ! 人でなかりうともっ! 俺の想いは変わらない。……大好きだ。タニヤっち。心の底から」

『……ああ。私もだよ。三沢っち』

タニヤもまた、凶悪ながらもどこか優しく笑いかけた。

もうすっかり陽も落ち、辺りを暗闇が包む。

『さて。これからどうする?』

闘技場を出た後、俺はもう大分姿の薄れてきたタニヤとバースに尋ねた。スパイでは

あるが一応調整役として、最後までしつかりこなさないとな。

『元の世界に戻るだけだ。契約は敗北という形ではあるが終了した』

ちなみにタニヤが人の姿を保つために持っていた手袋は、俺が預かっている。貸与という形だった以上、おそらく元々の持ち主である影丸理事長に返すのが筋だろうからな。

『この度の闘いは実に良きものだった。お前や三沢のような強き男達に出逢えたからな！』

『だからと言って、俺は婿にはならないがな。これ以上恋敵が出たら、バースもうかうかしていられないだろう。なあ？』

俺の軽口に、バースは低く唸るだけで返した。……さて。そろそろお別れかな。そこに、

「フフツッ！ ざまあないわね。男に絆されるなんて。ああ。アナタは最初からその気だったものね。この結果も当然という所かしら？」

不意に目の前に大量のコウモリが現れたかと思うと、その中心に黒い霧と共に妖艶な美女が現れる。セブンスターズの一人カミューラだ。

『ほう。誰かと思えば、いつも自身の僕にばかり働かせる女主人の直々の登場とは珍しい。夜の散歩にでも来たか？ それとも敗者を笑いにでも来たか？』

「いいえ。私はただアナタにお礼を言いに来たの。私のために負けてくれてありがとう。これでまた大分相手の手の内が分かったわ。もうすぐ惨めに消えてしまうアナタに礼を言う機会なんてもうないから、こうしてわざわざ直接足を運んだって訳。感謝してほしいわね」

主人への無礼に飛びかかろうとするバースだが、タニヤ自身が軽く制止する。

『それはそれは、臆病を慎重という言葉で塗り固めたコウモリ女が礼とはな。誇りあるアマゾネスの戦士としてありがたく受け取るとしよう』

怖っ!? 互いに笑みこそ浮かべてはいるが、目元は全く笑ってない。だが、

「もうすぐ消えるアナタが何を言おうとそれは敗者の戯言。吸血鬼一族の末裔にして寛容な私は聞き流してあげましょう。……ふん。人間なんかにうつつを抜かすからこうなるのよ」

そう吐き捨てるカミューラの表情は、一瞬どこか寂しさと怒りを湛えていたように見えた。

『まったく。見送りに来たのが最後まで憎まれ口を叩くお前と言うのがまた。……まあ良い。バランサーよ。後は頼むぞ』

『ああ。この戦い。最後まで俺がしつかりと見届けよう。三沢の事もな』

『感謝する。……では、今度こそさらばだ!』

その言葉を最後に、誇り高きアマゾネスの虎達は自身の世界へと帰っていく。タニヤたちが消えた後には、そこには最初から何もなかったかのようなようだった。だが、ああいう熱い奴は嫌いじゃなかったな。残るは、

『それで？ わざわざタニヤへの別れだけ言いに来たって訳もないだろう？ お前が出てきたということは……次のメンバーはお前か？』

「いいえ。私はまだ見に徹しさせてもらうわ。動くのはもう少し情報が集まってから。……それに、次に動く者はもう決まっている」

『へえ？ それは誰だ？ 調整役としては情報を知っておきたいところだな』

こつちに連絡が一切なかったことは厄介だが、今からでも調整できるだろうと気を取り直して尋ねる。だが、

「教えると思つて？ 知りたいのならアムナエルか理事長にでも聞くことね。私はまだアナタの事を信用していないから。人間なんて種は信用できないのよね。……ではそういう事で。ごきげんよう！」

最後に高笑いを響かせながら、カミューラは黒い霧となつて姿を消した。こういうところは普通に吸血鬼だな。……ちなみにコウモリが残つてこちらを監視していたので追散らしておく。

『ふう。お疲れ様』

『まだ出てくるなデイー。コウモリが残っているかもしれない』

『大丈夫。もう近くには気配は無いよ。……どうだった？ タニヤが居なくなつた感想は？』

デイーも意地悪なことを聞いてくるものだ。潜在的な敵とは言え、数日一緒に行動し、共に計画を練つた間柄だぞ。

『少しだけ……寂しくなるな』

俺はそこで軽く頭を振つて気持ちを切り替える。いかんいかん。こんなしけた顔じゃ、タニヤとレティシアに叱られる。それに三沢はもつと辛い筈だしな。

さあ。次は明日の万丈目ブラザーズとの学園を賭けた戦いだ。次のセブンスターズが来る前に、頑張つて切り抜けてくれよ万丈目！

万丈目対長作 落ちこぼれの意地

タニヤとの戦いから一夜明けて。

デュエルアカデミア本棟。その特設リングにて、二人の男が対峙していた。万丈目と、万丈目ブラザーズの長兄長作だ。

開始までまだ少し時間があるが、観客席はそれなりに生徒が入っている。それもそのはず、この一戦の結果次第で学園の運営が大きく変わることになる。自身の目でそれを見届けたいと思う者は多いだろう。

「三沢は……来ていないか」

ざっと観客席を確認したが、十代達や明日香、カイザーの姿は在っても三沢の姿は見当たらなかった。

『昨日の今日だからな。まだ少し辛いのだろう。肉体的にも……精神的にもな』
『三沢お兄ちゃん……昨日とっても悲しそうな顔をしたの』

他の人には見えないが、葬儀さんやレイシアなどの幻想体達も空いた席で試合を観戦していた。見える十代なんかはこっそり手を振っていたりしたけどな。

笑顔がなかったことにレイシアは少ししよんぼりしていたが、テイや無理やり連

れてこられたネクに慰められているから一応落ち着くだろう。

さて。三沢は後でフォローの一つでもするとして、今は切り替えて目の前の試合を見ないとな。

「ハンディに怖気づかずによく来たな。逃げると思ったが、その勇氣だけは褒めてやるぞ。準」

長作は流石政治家らしく、立ち姿もしつかりしている。人前に出る機会が多いことで、この程度の観客など意にも介さないという事だろう。

だが対する万丈目も決して負けていない。兄からの圧の籠った視線を受け止めて平然としている。以前のように気負っているかと思っただが、どうやらその心配はなさそうだ。

「兄さん。デュエルの前に宣言しておく。俺のデッキは攻撃力500未満という約束だった」

そう。それが初心者だという長作から提示されたハンディだった。だが、

「俺のモンスターは全て攻撃力0。これが俺の決めたハンディだ」

「なっ!?!」

いきなりの爆弾発言に観客席がどよめく。そりやそうだ。わざわざ相手のそれよりさらに厳しい縛りをかけてきたのだから。

「そんなの聞いてないぜ」

「まさか万丈目君。本当に負けるつもりじゃ?」

「バカなこと言うなよ」

観客席で見守る十代達も口々に不安をこぼす。確かに大局的に見れば、ここで万丈目 がわざと負けければ学園の運営は万丈目グループのもの。一部の生徒が噂していた様に、万丈目は勞せずして実質学園のトップになれる。だが、

「ハハッ。万丈目も面白いことを考える。流星は俺の推しだ」

「久城君。なんでそんなに余裕なんすか?」

「決まってる。万丈目が、そんなおこぼれを狙うみたいなセコイやり方で登り詰めようなんてことはしないって信じているからさ」

これは俺の戦いだと、デツキ構築などは万丈目が一人でやっていたからな。内容までは俺も分からない。まあ攻撃力0まで言いだすとは流星に思っていなかったが、それでも言うってことはそれなりの勝算があるってことだ。

いくら初心者とは言え、ここまで言われたら舐められていると思つて激昂してもおかしくない。実際リングの外で見ている次男の正司なんか、本人じゃないのに顔を赤くし

ている。だが、

「……………ふっ！ 面白い。来い準！」

長作は一瞬顔を伏せ、すぐに怒りを見せることなく兄弟よく似た不敵な笑みを浮かべてディスクを構えた。万丈目もやる気十分。自身もまた構えを取る。

おそらくアニメ的な流れからして、キーカードは古井戸で手に入れたおジャマ達。あれは攻撃力0だからピッタリだ。さあ。頑張れよ万丈目！

「デュエル」

万丈目 LP4000

長作 LP4000

そうして始まったデュエルだが、本人も言ったように万丈目のモンスターは攻撃力0。よって全て守備表示で出していくのだが、

「ドロー。私は魔法カード『融合』を発動！ 『ロード・オブ・ドラゴン』と『神竜ラグナロク』を融合。出でよ『竜魔人 キングドラグーン』っ！」

キングドラグーン ATK2400

「これって全部っ！」

「パラレルレアのカードか！」

出るわ出るわ。長作のカードはどれも見た目が輝かしい高レアのカードばかり。必ずしも高レアが強い訳ではないが、それでも強いカードが多いことに変わりはない。

「キングドラグーンの効果発動。1ターンに1度、手札からドラゴン族1体を特殊召喚できる。出でよ『エメラルド・ドラゴン』」

エメラルド・ドラゴン ATK2400

「いきなり攻撃力2400のモンスターがっ!？」

「2体か」

融合で呼び出された半人半竜のモンスターキングドラグーンが、効果でさらに仲間を呼び、場を高攻撃力のモンスターで埋めていく。

「行けキングドラグーン。そして、エメラルド・ドラゴン！」

「ぐあああっ!？」

万丈目 LP4000↓1600

たちまち万丈目のモンスターは破壊され、万丈目は窮地に立たされていった。

「ターンエンド」

「あの男。本当に初心者なのか？」

当然のこととばかりにエンド宣言をする長作。その圧は初心者とはとても思えない。

「ぐっ!!」俺のターン。ドロー。俺はモンスターを裏守備表示で召喚。ターンエンド」

「私のターン。私はサファイア・ドラゴンを攻撃表示で召喚! 続けてキングドラグンの効果により、手札からダイヤモンド・ドラゴンを特殊召喚!」

サファイア・ドラゴン ATK1900

ダイヤモンド・ドラゴン ATK2100

長作の場に眩いモンスター達が展開される。これこそある意味以前の万丈目の戦い方。高攻撃力のモンスターを展開し、そのパワーで敵を制圧する王道。だが、

「兄の情けだ。せめて苦しませぬよう、このターンで勝負を着けてやる。キングドラグンの攻撃!」

『薄幸の美少女』は、バトルによつて墓地に送られた時、相手モンスターのやる気をなくし、強制的にターンを終了させる」

対する万丈目のデッキはいわば強者に対する弱者の戦い方。攻撃力が低い代わりに多彩な効果を持つカードにより、猛攻を紙一重でいなしていく。

「くっ!!」何とか凌いだつもりだろうが、いつまでも保つかな?」

万丈目 LP1600 手札5 モンスター なし 魔法・罠 なし

長作 LP4000 手札1 モンスター キングドラグリーン エメラルド・ドラゴン サファイア・ドラゴン ダイヤモンド・ドラゴン 魔法・罠 なし

「俺のターン。俺は『そよ風の精霊』を守備表示で召喚。さらに永続魔法『暗黒の扉』を発動する。このカードがある限り、お互いにモンスター1体でしか攻撃することが出来ない」

そよ風の精霊 DEF1800

「上手い！ これなら相手がいくらモンスターを出そうが無関係ない」

「これならしばらくは持ちこたえられるぜ！」

観客達の間になんげだけ安堵の雰囲気は漂う。実際防御カードとしては良い手だ。ただ、

「それもその魔法を破壊するカードを引くまでの間の事。私のターン。行けキングドラグリーン」

相手の攻撃で万丈目のモンスターは着実に減らされていく。時間稼ぎにはなっていないが、それだけじゃこの状況は打破できない。

「俺のターン！ 『またたびキャット』を召喚。ターンエンド」

またたびキャット DEF500

「私のターン。……クッククック。準よ。どうやら次のターンで私の勝ちは決まりのようだ。行けキングドラグーン」

長作はまた1体万丈目のモンスターを破壊すると、カードを1枚伏せてターンを終了する。

「あの伏せカードはっ!?!」

「十中八九。暗黒の扉を破壊するカードだ」

そして次の万丈目のターン。その予想は的中する。

「俺のターン」

「この瞬間、毘発動! 『砂塵の大竜巻』が、お前の暗黒の扉を呑み込むぞ」

長作が伏せていた魔法・毘を1枚破壊する竜巻が、暗黒の扉を風で巻き上げて破壊する。

「万丈目の最後の砦がっ!?!」

「次のターン。総攻撃が来るぞ」

「終わったな。これでこの学園は万丈目グループのものだ」

焦る十代達に対し、正司は勝利を確信したのか嫌な笑いを浮かべている。しかし、万丈目の瞳はまだ闘志を失っていない。

「俺は魔法カード『苦渋の選択』を発動! デッキから5枚のカードを選び、相手は1枚

選択する。そのカードを手札に加え、残りは墓地に捨てる。俺が選ぶカードはこれだ」

サクリファイイス

キヤツスル・ゲート

サンダー・クラッシュ

ものマネ幻想師

王立魔法図書館

げっ!? ここで苦渋の選択とは。簡単に墓地肥やしが出来るから現実だと禁止カードに指定されたカードだぞ。

「次のターン。私の総攻撃は決まっているが、念には念を入れ……モンスター以外のカード『サンダー・クラッシュ』だ」

長作は唯一の魔法カードを選択する。キングドラグーンで防げるとは言え、万が一相手のモンスターを奪うサクリファイイスや、相手モンスターをコピーするものマネ幻想師が出てきたら少しだけマズイ。その選択も間違いないじゃない。だが、

「その選択はまさに俺の読み通りだぜ。俺は魔法カード『魔の試着部屋』を発動！ ライフを800払い、デッキの上からカードを4枚めくる。そして、その中にあるレベル3以下の通常モンスターを特殊召喚する」

万丈目 LP1600↓800

万丈目は呼吸を整え、デッキからカードをめくって確認する。そこにあつたのは、

「おれは、このおジャマ三兄弟を特殊召喚」

『『『どうも〜!』』』

おジャマ・イエロー ATK0

おジャマ・グリーン ATK0

おジャマ・ブラック ATK0

え〜マジかよ!? 何この鬼引き? ピンポイントでおジャマ3体引き当てやがった

よ!

「何かと思えば、そんな雑魚共に次のターン、私の光輝くモンスターの攻撃を受けきれぬものか」

「こいつらを馬鹿にすることは、この俺が許さん!」

『『『ア、アニキ〜!』』』

明らかにおジャマ達を見下す長作。まあそれも分からなくはない。こいつら見た目がキツイし能力もあまり高くないからな。だが万丈目はそれを阻む。

「確かにこいつらの攻撃力は0。見かけも性格も間違いなく最悪。だが、俺はこいつらに教えてもらった」

「何を?」

『兄弟の絆をさ！』

『力を合わせれば』

『何だつてできるつてこと！』

おジャマ達が口々にそう吠える中、

「下には下がいるということ。こいつらに比べたら俺なんか全然マシだ」

万丈目のあんまりな言葉におジャマ達もずっこける。上には上がいるというのは良く聞かすが、まさかそう考えると。……うゝむ。なまじ間違っていないから反論しづらい。

「黙れ準っ！ お前も少しはやるようになったようだが、それでも落ちこぼれは所詮落ちこぼれだ」

「ならば見せてやる。落ちこぼれの意地を！ 魔法カード発動！ 『おジャマ・デルタ・

ハリケーン』！ 行けっ雑魚共！」

『イエロー』

『ブラック』

『グリーン』

『『喰らえ必殺！ おジャマ！ デルタ！ ハリケーンっ！』』』

おジャマ達が身体を寄せ合つて高速回転し、長作の場に突撃していく。その結果、

「うおおおっ!! バカな!! 俺のモンスターが……全滅だっ!!」

「見たか落ちこぼれの力を。おジャマ・デルタ・ハリケーンは3匹のおジャマが場に揃った時、相手フィールドのカードを一掃できる」

攻撃力0だろうが、使い方次第で強力モンスターをも撃破できる。これもまた一つのロマンだ。

『『俺達が居る限り、万丈目サンダーは無敵だ!』』』

そう言つてドヤ顔をするおジャマ達だったが、

「攻撃力0の役目は終わりだ。魔法カード発動! サンダー・クラッシュ」

『何? この邪魔なカード。サンダー・クラッシュ?』

『えく。自分の場の全モンスターを破壊する。相手に破壊した数×300ダメージを与える……だつて』

『自分の場のモンスターつて……俺達じゃん!!』

「くらえっ!」

すぐに効果で破壊されてしまったのにはちよつと合掌する。こういうところ万丈目は容赦ないからな。

長作 LP4000↓3100

「ぬううっ!! 良い気になるなよ準。モンスターが全滅しようとも、私の優位に変わり

はない。振り出しに戻っただけだ」

カードの雷撃を受けて僅かに身体がふらつくも、長作はすぐさま体勢を立て直して次のターンに向けて切り替える。その切り替えの早さは立派なものだ。だがな。今の万丈目が次のターンまで猶予を与えてくれるかな？

「いや。このターン。俺にはまだ通常召喚が残っている。……待っていたんだ俺は。墓地にこれだけ多くのモンスターが揃うのを。出でよっ！ 『カオス・ネクロマンサー』」

カオス・ネクロマンサー ATK0

万丈目の場に、不気味な笑みを張り付けた死霊術師が出現する。……なるほど。この手が有ったか。

「このカードの攻撃力は、自分の墓地に眠るモンスター×300となる。俺の墓地のモンスターは11体。よって攻撃力は……3300だっ！」

カオス・ネクロマンサー ATK0↓3300

万丈目の墓地に眠るモンスター達。それが全て半透明の幽体となってネクロマンサーの下に集結する。よく見たら今さつき破壊されたおジャマ達も居るな。自分から万丈目がおジャマを破壊したのはこれを狙っていたらしい。

「カオス・ネクロマンサーの攻撃！ 『ネクロ・パペットショー』！」

「バカなっ!!? ぐ、ぐふああっ!?!」

魔導士の号令で幽体達が一斉に長作に襲い掛かり、見事そのLPを削り切った。
長作 LP3100↓0

万丈目WIN!

兄の心弟知らず

その日の夜。

「……………うゝむ」

俺は万丈目の部屋の前にまで来て中の様子を窺っていた。それと言うのも、今日の万丈目の勝利を祝うパーティーの中で、万丈目がどこか浮かない顔をしていたことに気が付いたからだ。

主役だというのに早々に席を立って部屋に戻っていくのが気にかかり、それとついでに勝利のお祝いとさつき部屋で起きたことの相談をしようとして来てはみたものの、「さつきからずつとベッドに仰向けになって険しい顔してんだよな」

ドアの隙間から見えるただ事ではない雰囲気。この中に飛び込んでいくのは些か勇氣が要る。

今日は出直すべきか？ ……いや。万丈目の事だから、明日には素知らぬ顔で普通に過ごしてそうだ。ならば、

コンコンコン。

「万丈目。入るぞ」

「わっ!! 急に入ってくるな! ……何の用だ?」

万丈目は一瞬驚いた様子をしたが、すぐに先ほどの険しさを覆い隠して普通に接してくる。やはり聞くなら今しかないか。

俺は万丈目に勧められて椅子に腰掛ける。

「いや、大したことじゃないんだ。まだちゃんとしたお祝いを言っただけだと思っただけさ。勝利おめでとう」

「……ああ。当然のことだがな」

その一瞬、万丈目の顔が曇ったことに気が付く。どうやらそのことが原因らしいな。「勝った割にはあんまり嬉しそうじゃないな。……何かあったか?」

「何故お前にそんなことを言わねばならん」

「ごめんな。さつきパーティーで様子が変だったから一ファンとして気になってさ。それにさつき、ドアの隙間から万丈目が険しい顔して横になっているのを見てしまった」

「……つたく。お節介焼きめ」

万丈目は頭をガシガシと掻くと、そのままベッドに不機嫌そうに寝転がる。

「……今回の件。結局長作兄さんの迷惑通りに事が運んだと思っただけだ」

「迷惑通り? 万丈目は勝つたじゃないか?」

「確かに俺は勝った。だがあの時の長作兄さんの顔を見たか? あの時長作兄さんは

……笑っていた」

「そう言えばそうだったな。負けて正司に肩を貸してもらっている時、どこかあの人は笑っているようにも見えた。」

「勝とうが負けようが、長作兄さんにはどちらでも良かったのだ。勝てば当初の予定通り自分達が学園を手に入れ、カードゲーム界への足掛かりとする。仮に負けたとしても、ハンディ戦に勝った俺の評判が一気に上がるのだから」

「……なるほど。そういう事か」

「元々万丈目ブラザーズは、万丈目を後押ししてカードゲーム界のスターに仕立て上げるつもりだった。万丈目自身に過度の支援を断られたとはいえ、今もまだ諦めてはいなかったという事だろう。」

「ちなみに勝っても負けてもプラスになるように事前に動くこと自体は悪じゃない。寧ろ政治家ならそれぐらいの根回しは普通だろうから責める方がお門違いだ。」

「学園を守ったヒーロー。俺の評判は学園内でうなぎ上りだ。だが……これは全部与えられたものだ。俺の力で勝ち取った物じゃない。おそらく長作兄さんは、俺の事を道具か何かとしか見ていないのだろう。もしかしたら、最初から自分が適当にやって負ける気で」

「それは違うんじゃないか？」

万丈目のどこか悲痛さすら感じられる声に、俺はたまらず待ったをかける。

「少なくとも、お前の兄さんは負けるつもりはそこまでなかったと思うぞ。あくまで負けても良い条件だったってだけで」

「何故分かる？」

「本当に負けるつもりなら、決戦に向けてデュエルの練習なんてしないだろう？ 実際に戦った万丈目なら分かるはずだ。」

俺の言葉に万丈目は押し黙る。

そう。あの長作のプレイング。あれは決してただの初心者の動きじゃなかった。モンスターのパワーにやや頼りすぎる気はあったが、それでも融合からの大量展開は悪くなかった。

「政治家つてのは多忙なんだろう？ それでもちゃんとこの日のために、お前と向き合うために練習の時間を作って戦った。そしてそれを万丈目は実力でねじ伏せたんだ。勝たせてもらったのではなく、自分の力で勝ち取ったと自信をもって言えるんじゃないか？」

「長作兄さんが……俺と向き合うために練習を？ いや、正司兄さんも長作兄さんも俺の事を落ちこぼれだと」

「ああ確かにそう言ったな。だけど長作はこうも言ったじゃないか！ 『お前も少しは

やるようになった』と。僅かにだけど、確かに万丈目の事を認めているんだよ。万丈目が勝った時に笑ったのだって、自分の思惑が上手くいったからじゃない。お前がハンデイをもつともせず、自分に勝ったことが嬉しかったんじゃないか？」

「久城……」

もちろん今言ったことは全て想像でしかない。本当に万丈目の考えた様に、どこまでも打算だけで起きたことって可能性もある。

それでも、全てが全て万丈目の思うような悪いことばかりだとは思えないし、思いたくはないんだ。弟の成長を期待したり喜んだり、打算ではない何かがあると信じたいんだ。

仲はアレかもしれないが、なんだかんだ兄弟なんだから。

『おいら達もそう思うのよ。万丈目のアニキ』

『うんうん』

「お前ら」

そこにフツと現れたのは、今日のデュエルで大活躍したおジャマ達だった。

『あの時も言っただけど、兄弟の絆ってとつても強いものよ！』

『そうそう。口では色々言っているも』

『弟の事を気にしないお兄ちゃんはいないんだよ！』

同じく兄弟だからこそ、この3体も黙っていられたのだろう。そしていつの間にか、部屋中に万丈目が拾って来たカードの精霊達が静かに浮かんで心配そうに万丈目を見つめていた。

そんな奴らを前にして、

「……はあ。まったく。お節介焼きは久城だけではなかったか。……良いだろう。俺も少しは兄さん達の事を信じてみるでしょう」

根負けしたように、それでいて少しだけどこか気負いが抜けたかのように、万丈目はそうポツリと呟いた。

そして、

『きやはは！』

『わあわあ！』

「えいやかましいっ！ テメエら。いつまでここに居るつもりだ！」
「そうだぞ。いくら聞こえないとは言えもう夜だしな」

さつきまで少し微笑んでいた万丈目だったが、今はカンカンになって怒り狂っていた。それと言うのも、さつきカードの精霊達が半透明になって出てきたまま一向に戻ら

ず騒ぎまくっているからだ。

精霊の声は素養のある者にしか聞こえないので近所迷惑にはなっていないが、このまま騒がれてはその内十代も何事かとやって来て、

「さつきからどうしたよ？　俺だけに聞こえる声が響きまくっているぞっ！」

噂をしたら影だ。もうその十代本人がやってきたよ。

『良いじゃない！　例え攻撃力0でも、オイラ達だって役に立つって分かってくれたんでしょ？』

『『そうそう！』』

「えーい。俺があのだデュエルで分かったことはな、貴様らは本当に使えないことだっ！

ただでさえ部屋が狭いんだ。皆さつきと戻りやがれえろっ！」

能天気なおジャマ達の言葉に万丈目の叫びが響き渡る。一部の精霊はもうベッドの一部にまで侵食していたからな。怒るのも無理はない。精霊達も流石にやり過ぎたと思っただのか、最後に挨拶をして次々にカードの中に帰っていった。

「ふう。やっと落ち着いたか。世話をかけたな久城。礼を言うぞ。……何見てる十代。もうこれで静かになったからさつきと帰れ」

「おっ！　万丈目もさつきより顔色が良くなつたじゃないか！　遊児と何の話をしてたんだよ？　俺にも教えてくれよ！」

「うおおおっ!! じゃれつくなこのバカ!」

どうやら十代も万丈目の様子に気が付いていたらしい。親し気に肩を組もうとする十代を追い払おうとする万丈目。

うん。実に平和だ。ひとまず次のセブンスターズが来るまではこの平和を楽しみたいところだな。……ただ、

「ところで万丈目。あと丁度良いから十代にも聞きたいんだが、明日ちよつと茂木の所に行こうと思ってるんだけど空いてるか?」

「俺は空いてるぜ!」

「まあ授業の後なら空いているが。……久城。もしやこのバカ共を茂木の所に押し付ける算段か? それなら個人的には賛成だが」

そう言つて万丈目はカードの方に視線を向けた。すると、カードの精霊達が涙目になつて懇願するように万丈目を見つめている。

「この通り。嫌がる奴が大半のようだ。俺も一度引き取つた以上最低限の責任がある。……こいつらが自分から出て行くなはまだしも、俺様から捨てるようなみつともない真似は出来んな」

「まあ茂木の所に残る残らないはあくまで精霊達の自由意志に任せるとして、実は個人的に厄介なことが起こつてさ。……ついさつきまた新しい幻想体が精霊化したんだ。

こいつを茂木の所に連れて行きたい」

俺の言葉に十代は自然体ながらも興味深そうに、万丈目は一気に身を引き締めて無言のまま続きを促す。

「ああ違う違う！　そこまで危険つて訳でもないんだ。じやなかつたらいくら何でも精霊化したばつかりの奴を置いて俺だけここに来るわけないだろ？」

「……それもそうか。では何でわざわざ茂木の所に？」

「それなんだけど……こればつかりは説明するより見てもらった方が良いかな。済まないが部屋まで来てくれないか」

俺はそう言つて二人と一緒に部屋に戻る。すると、

「うんっ!?　中から何か話し声が聞こえるな」

「話し声?　留守番に幻想体達でも置いてあるのか?」

「ああ。新しく出たのはちよつと特殊だな。誰かが常に話し相手にならないといけないんだ。正確に言つと、向こうの話を聞く誰かな。今戻つたよ!」

俺は扉を開けて部屋に入る。そこに待っていたのは、

『あつ!　お帰り遊児お兄ちゃん!　十代お兄ちゃんに黒つぽいお兄ちゃんもこんばんわ!』

良い子で留守番していたレティシアと、

『ああ。誰か来たようだね。……坊や、坊や。古い物語を聞きたいかい？』
共に現れたロツキングチェアに揺られて腰掛ける、一人の老婆の姿だった。

読み聞かせも楽しやない

万丈目の戦いから一夜明けて。俺は十代と万丈目と一緒に茂木の寮にやって来ていた。

幸い茂木は急な連絡にも快く応じてくれたが、「次は僕の方から誘いたかったんだけどなあ」と言っていたので少し申し訳なく思う。

「それで？ あの精霊が君が問題にしていたカード？ え〜つと名前は」

『幻想体 オールドレディ』だ

「オールドレディ……名前の通り、見かけはただのお婆ちゃんだね」

茂木はそう言つて視線を隣の部屋に向ける。そこには、

『……これは、ある暖かい心を持った男の子と女の子。そしてそんな暖かい心を凍らせようとした雪の女王の物語。ある所に、カイとゲルダという男の子と女の子が住んでいたのさ』

皺だらけの白い肌に黒く落ちくぼんだ瞳。やや色褪せた青色のスカートと紫色のブラウス。そして頭には白いボンネットというかなり典型的な西洋風の姿の老婆。

そのオールドレディがリビングの片隅に陣取り、揺らり揺らりと椅子に揺られながら物語を話し聞かせていた。

聞き手は茂木の寮にたむろしていたカードの精霊達。そして、

『ねえねえお婆ちゃん！ それが終わったら今度はこのお話も読んで！』

『まあ待て我が運び手よ。テディは別のが良いらしいぞ。さつきから私の腕を引っ張ってあたたっ?! テディ力強い強いっ?! 千切れるっ?!』

へりペアプロセススタンバイ。千切れてもすぐ直せるよ

うちの幻想体達も、レティシアを始め次の読み聞かせの本を準備している始末。というか今の状態で、オールドレディは本もなくソラで読み聞かせているけど次の本要るの？

心なしかオールドレディも喜んでいよう、近くに寄ってきたレティシアを軽く撫でながらお話を語り続けている。

「見た所ただお話を読んでいただけみたいだけど。それだけにしては僕の所に急に押しかけるというのは珍しいね」

「確かにオールドレディはただ話をしていただけなんだよな。でも」

「ああ。あの婆さんは中々に厄介だぞ」

万丈目が俺の言葉を引き継いで警戒させる。何故なら、

「ああ。万丈目の言う通りだ。何せ数分聞いていただけで気分が悪くなるからな」

精霊達を部屋に残し、俺達は少し離れた部屋に移動する。……よし。ここならオールドレディの声は聞こえないな。

「じゃあ話の続きを。気分が悪くなるって言うのは？」

「言葉通りの意味だ。実際に昨日聞いてみた結果、俺の場合は二十分ほど。十代と万丈目はもう少し早く十分くらいで少し気分が悪くなってきた」

どうたら普通の人間にはオールドレディの話は毒になるようだった。俺の場合は軽く頭がクラつとなつて、十代や万丈目は少し頭痛がしたらしい。

ちなみにこれに話の内容は関係がない。実際に昨日試した結果だが、話の内容が笑い話だろうが怖い話だろうが恋愛ものだろうが、長く聞いていると気分が悪くなってくるのだ。

ちなみに罪善さんの光を浴びて数分ほど横になつていればすぐに収まる。罪善さんホント有能だな。

「他の幻想体やカードの精霊は平気みたいなのが不幸中の幸いだ。寧ろ評判が良いくらいで、あの通り大人気だ。それで……ここからが本題なんだけど、しばらくああしてこ

この精霊達に話を聞いてもらってくれないか？」

最悪こっちの精霊達が嫌がるようであれば頼まないつもりだったが、大分気に入られているようだしな。

「精霊達は喜んでみるみたいだし別に良いけど……何でそこまで話をさせるのにこだわるの？ 単に物語を抑えてほしいと頼めば良いじゃない。言うことを聞いてくれないとか？」

「いや……割とあの婆ちゃんが良い奴だぜ。ハネクリボーも普通に懐いてたしな」

「読み聞かせの腕も一流だ。言葉の抑揚、間のとり方、場面に合わせた絶妙な声量の調節。どれをとつても申し分ない。……気分が悪くなることさえなければ俺も雇つても良いと思えたほどだ」

茂木が疑問に思うのももつともだ。ただ二人の言うように、オールドレディ自身の技量も気質も問題はない。特に技量に関してはあの万丈目がお墨付きを出すくらいの腕だからな。唯一の問題は、

「二番の問題は、オールドレディはとんでもなく寂しがり屋という事なんだ。定期的に誰かに話を聞いてもらえないと、自分の意思に関わらず暴走するぐらいにはな」

「……なるほど。それは厄介だね」

茂木は顔に手を当てて思索する。

しかし今回暴走と言ったけど、別に本人が暴れまわるわけではない。正確に言うとオールドレディに溜まる寂しき。孤独感とでも言おうか。それが噴出して周りに被害を与えるのだ。

何故それが分かるかと言うと、最初にオールドレディが実体化した時、それまでに溜まりに溜まった孤独が部屋中にまき散らされて俺に直撃したからだったりする。

あの猛烈に胸の奥を抉ってくる寂寥感は、言葉では何とも言い表すのが難しい。少し記憶も曖昧だしな。

ただ直撃した直後の俺の顔を見て、あのディーが珍しく『こいつはちよつとシャレにならないかもね。罪善さん！ 急いで久城君に精神安定を。ほつとくとマズい！』と心配してくれる程度にはヤバかったらしい。

「誰かに読み聞かせをしていれば少しずつ発散されるようだけど、部屋ですつと読み聞かせをしていたら俺の体調が持たない。そこで思いついたのが、茂木のもけもけの事なんだ」

「もけもけ？ ……ああそうか！ もけもけの脱力感で中和しようってことだね！」
「あくまで出来るかどうか仮説だけだな」

茂木はすぐに思い当たったのかポンつと手を打つ。

目には目を。歯には歯を。精霊には精霊をだ！ 罪善さんに頼んでも良いが、一体だ

けじゃ足りない可能性も考えてもけもけも加えたい。あとは十代のハネクリボーも居れば多分何とかなるだろう。

もけもけ〜！

呼ばれてきたもけもけ自身もそれなりにやる気のように助かる。

「そういうことなら任せてよ！」

「ありがとう。じゃあ早速試してみよう。十代とハネクリボーも準備を。万丈目は途中で気分が悪くなってきたら無理やりにでも引つ張り出してくれ」

「任せとけ！ 行くぜ相棒！」

クリクリ〜！

「出来ればそうならん方が良いがな。おい雑魚共。お前達もしっかり働けっ！」

『分かってるわよ〜ん。万丈目のアニキ！』

万丈目の号令に、一緒についてきたおジャマ達や古井戸に居たカード達もいつでも動けるように準備する。……一部は普通に読み聞かせを聞いていたけどな。

そうして罪善さん、もけもけ、ハネクリボー、その他精霊達の万全のバックアップで読み聞かせに挑んだ結果。

『……というお話だったのさ。おしまい』

『とつても面白かったの！ もう一回！ もう一回！』

オールドレデイが静かに本を閉じ、小さな歓声と共にアンコールの聲が響く。相変わらず幻想体や精霊達には特に悪い影響は見られず、ただ単に面白い読み聞かせだったという印象のようだ。

「……おお！ 全部聞き終わったぞ！ 皆体調はどうだ？」

「問題ないぜ！ というより寧ろいつもより調子が良いくらいだ！」

「俺もだ。途中から話を聞いていたが……やはり良い腕をしている」

俺を含め、一緒に聞いていた二人にも特に体調不良は見られない。どうやらもけもけで中和するのは一応上手くいったらしいな。

オールドレデイ本人も実体化した当初に比べて相当スッキリした顔をしている。なんだかんだせがまれて読み聞かせをするのは大好きらしく、もう次の準備をしている。これならまた孤独が溢れ出すということはしばらく回避できそうだ。

「皆お疲れ様！ 大丈夫？」

「ああ。ありがとうな茂木。助かったよ！ 場所の提供ももけもけの事もな」

「別に良いよ。友達じゃない」

軽く頭を下げると、茂木は穏やかに微笑んで返した。……見かけの割に何とも頼りが

いがあるから困ったもんだ。またお札に手土産とかを考えないとな！

「なあ？ もう大丈夫だつてんなら、もうちよつと婆ちゃんの話を聞いてこうぜ！」

「……まあ良いだろう。俺もあの婆さんの話には少し興味がある」

十代の提案に万丈目も軽く頷く。話に興味があるつて言うのは俺も同じだな。「僕も一度じっくり聞いてみようかな」と、茂木も珍しく意欲的だ。

「よし。それじゃあ一つ俺達も精霊達と混じつて読み聞かせに参加するとすつか！」

「「おうっ！」」

そうして俺達は菓子を摘まみながら、精霊達と一緒にのんびりとした一日を過ごすのだった。

『やあやあお帰り！ 無事にオールドレディを抑制できたみたいで何よりだね』

皆と別れて部屋に戻ると、また突然ディーが室内に現れて話しかけてきた。

「珍しいな。いつつもこつそりどつかから見てるくせに」

『こつちもずつと見ている訳じゃないからね。色々宥めすかして抑えないといけない奴らも居るからまいっちやうんだよ全く。まだ蒼星や静かなオーケストラなんかは落ちているけど、笑う死体の山辺りは定期的に見ないと大変だしね』

「……よく分からないが、お前が抑えなきやならんとなるとよつぼどだな。そのまま頑張ってくれ」

仮に今言ったのがまだ見ぬ幻想体としたら、今居るより危ない奴がゴロゴロしているということになる。そういうのが出てこないように頑張ってもらおう。

「オールドレディは定期的に話をさせれば被害は出ないはずだ。だから……出てきてくれ。オールドレディ。罪善さんも頼む」

俺はカードを取り出しオールドレディを呼び出す。毎回出てくるロツキングチェアもセットだ。そして罪善さんもいつものように歯を鳴らしながら出現する。

「今回は溜まりに溜まった孤独を発散させるために茂木の所で沢山の精霊を聞き手にする必要があったが、一日一話聞かせてもらう程度ならそこまでのダメージは無い。……さて。聞かせてもらおうか」

俺がオールドレディを実体化させたのは偶然じゃない。他にも実体化しかけたのは何体か居たのだ。その中でオールドレディを選んだのは、選ぶ際にディーが言ったある言葉がきっかけだった。

『オールドレディはとても話好きの幻想体さ。彼女はいろんな話を知っている。……自分と同じ幻想体の話。その原典さえもね』

そう。俺が知りたかったのはそこなんだ。

これからどのような幻想体が出てくるにしても、予め情報さえあれば今回のようにいきなり被害を被るなんてことを避けることができる。

「オールドレディ。俺のリクエストは……アナタと同じく幻想体に関するお話なんだ。……あるかい？」

オールドレディはにっこりと微笑み、深く椅子に腰掛け直して大きく息を吸い込んだ。

『……そう。これは、ある深くて暗くて黒い森。その森を守ろうとした三匹の鳥。そして、その森で産まれた怪物の物語』

……これは二十分じゃ足りないかもしれないな。

新たなセブンスターズと思わぬ事実

午後11時55分。もうすぐ日付も変わろうという時に、俺の持っている通信機に連絡が入る。

『野郎共。準備は良いか?』

『こちらチツク。配置についたよお頭』

『クリフだ。現在金庫前』

『ゴッグ。準備完了』

『こちらミーネ。いつでも行けるよ』

通信機からそれぞれ聞こえてくるのは、各自ターゲットに対していつでも仕掛けられるという合図。そして、

『バランサー。そっちはどうだ?』

『こっちも現場に到着した。……最終確認だ。本当にやるのか?』

正直俺としてはここでこのまま回れ右したい。なので方に一つの可能性に賭けて一応聞いてみたのだが、

『ああ。確かにお前の言う通り、デュエルで勝たなきゃ意味はないのかもしれない。だが、それはそれとして私達にもプライドがある』

通信機からは一人の声しか聞こえない。他の奴らは自分達の頭の声に耳を傾けているのだ。

『どんな障害があろうとも、私達なりのやり方で必ず依頼のブツ。お宝へ繋がる鍵を手に入れてみせる。そう。それが』

『『『『我らっ！ 黒蠍盗掘団っ！』』』』』

いつものように決め台詞を一分の乱れもなく発する一味。……ふう。まったく。やっぱりダメか。予想はしていたがここまで決意が固いんじゃない。

『OK。じゃあそろそろ始めるとするか。……七精門の鍵奪取作戦を！』

『『『『おうっ！』』』』』

こうして俺達は、一夜にして全ての鍵を直接奪取するために行動を開始した。まあ要するに分かりやすく言うところ……泥棒大作戦って奴だ。

俺が何故こんなことになったのか。それはしばらく前に遡る。



万丈目ブラザーズの一件から一週間。俺は実に穏やかな日常を過ごしていた。

タニヤロスで意気消沈していた三沢を慰めたり、学生の本分は学業ということで皆で勉強会をやったり、毎日幻想体達の相手をしたりだ。

最近はおールドレイによる読み聞かせ会もちよこ挟み、罪善さんが居るとは言え気分が悪くならないように一日二十分以内で終わらせている。……と言っても幻想体一体の逸話が二十分そこで終わるわけもなく、数日掛けてやつと一体分のペースだな。道のりは長い。

他の大きな出来事と言えば、遂に吹雪が目を覚ましたことだろうか。明日香がいの一に保健室に乗り込んで吹雪に抱きついたので覚えている。

ただ残念なことに、吹雪は目を覚ましただけでまともに動くことは出来ない。精神の方もまだ不安定で記憶もあやふや。しばらくまともに話ができる状態じゃないとか。

さりげなく俺も色々聞き出そうとしてみたが、どうやら芝居とかそういうものの可能性は低い。やはりダークネス状態とは言え、闇のデュエルで魂を一度封印された影響は大きいようだ。

だが毎日のように明日香やカイザーが見舞いに行っているの、何かしら良い影響があると思いたいな。

あとこの前は学園に、世界の海を股にかける超大富豪の貿易商アナシスとかいう人が来て十代とデュエルしていたな。新たに設立予定の海底デュエルアカデミアのシンボ

ルとして、セブンスターズとは別口で三幻魔を狙っていたらしい。

デュエル中にLPを10000万円で売ってとか無茶苦茶な盤外戦術をしていたが、金に興味のない十代には通じずそのまま十代の勝利となった。俺だったら……ちよつと悩んでいたかもな。大金だし。

気に入られた十代がそのまま攫われるというトラブルがあったものの、自力で学園まで帰ってきたからまあよしとしよう。

が、
こんな比較的穏やかな日常がずっと続けば良いのに。そんなことを思っていたのだ

「黒蠍一の力持ち。剛力のゴーズ」

「黒蠍団の紅一点。茨のミーネ」

「どんな罫でも朝飯前。罫外しのクリフ」

「お宝頂きやあとはトンズラ。逃げ足のチック」

「そしてこの私。首領・ザルーズ」

「……我らっ！ 黒蠍盗掘団っ！……」

いつものセブンスターズの集会所である洞窟。そこで俺の目の前でそう言って

ポーズを決める者達。こいつらが次のセブンスターズだというのだからたまらないな。俺の日常はもうお休みタイム終了らしい。

五人で一人のセブンスターズ。黒蠍盗掘団。

黒蠍盗掘団といえば、普通に現実で存在するカード及びその関連シリーズの事だ。どうやら目の前の奴らはそのカードの精霊らしい。タニヤもそうだったし、意外と精霊の率が多いなセブンスターズ。

ちなみに黒蠍シリーズは、他のカードのイラストにもメンバーが時折描かれるくらいに有名かつ人気があり、全員が相手に戦闘ダメージを与えることで効果を発動するのが特徴だな。やや基本ステータスが低いのが難点だが。

しかし今日の朝、次に動くセブンスターズが決まったので顔合わせをしろと、アムナエルこと大徳寺先生に言われた時からおかしいとは思っていた。

それが実際に会ってみて良く分かった。こいつらとんでもなくキャラが濃い。面倒ごとを押し付けたな大徳寺先生っ！代理だからってこつちも大変なんだぞ！

「ハツハツハ。まあ我らの自己紹介としてはこんなものだろう。これからよろしく頼むぞバラランサー。いや、久城遊児よ」

ザルグがにこやかに笑いながら俺に手を差し出してくる。

今の自己紹介だったのっ!? 会っていきなり戦隊ものみたいな名乗りを挙げられただけなんだけどっ!? こんな濃い奴らの調整なんて無理だろいい加減にしろっ!

ただまあそれでもやらなきゃならないのが調整役の辛い所。俺も仮面で表情が読めないのを幸いと、なるべく冷静に握手に応じる。

『あ、ああ。よろしく。……というか、今俺の名前を』

「ふふ。我々の情報網を侮ってもらっては困る。その程度の事とづくに調査済みよ」

何っ? 俺はここで素顔を明かしたことはあつても、フルネームを名乗ったことはまだない。つまり目の前の男達は、僅かな情報だけで探ってそこまで辿り着いたということになる。

これはスパイとして気が抜けない相手になるな。そう考えたのだが、

「お頭。調査も何も、たまたま俺達が知ってただけじゃないか」

「そうそう」

「あっ!? バカっ! 速攻でネタばらしする奴があるかお前らっ!」

たまたま知ってた? それってどういう……いや待て?

「もしかして……お前オシリスレッド生のチックか? それによく見たら……そつちのゴグは事務員さんじゃないかっ!」

「うむ。その通り」

「へへっ！ 実は俺達、お頭の命で大分前からアカデミアに潜入してたんだ」

大きく頷くゴッグと、得意げに鼻を掻くチック。そう言えば、普段からやけに実物のカードに似た人が居るなど前から思っていた。しかしまさか本物の精霊だったとは。隼人のようにそっくりさんかと思つて油断していたな。

「こつちも驚いたぜ。何せ前にお前がここで仮面を外した時、出てきたのが同寮の奴の顔だったんだから」

「ああ。驚いた」

なるほど。そういう事だったのか。……つてことは他の二人も？ そういう視線を向けると、すぐに察しがついたのか残りの二人も話してくれる。

ミーネはブルー女子寮にて鮎川先生の補佐役。クリフは警備員の一人として潜入していたらしい。こつちはあまり接点がないからよく分からないな。

「……ということ、お前の事はある程度分かっていたという訳だ。これを元に驚かしてやろうと思つていたのに、この二人が要らぬネタばらしを」

「ゴメンゴメン。ついねー！」

「すまない」

手を合わせて謝るチックと静かに頭を下げるゴッグ。ザルグはそれ以上咎めはせ

ず、クリフとミーネも苦笑しながら見ている。

「ここを見るだけでも、どうやら団員達の仲が良好だというのが分かるな。これは敵に回すと中々厄介だぞ。連携とかいかにも上手そうだし。」

「しかし、俺達以外にも学園に潜入している者が居たとはな。これなら仕事もスムーズに行きそうだ」

『いや別に潜入をしていたわけじゃないんだが。それに俺はあくまで調整役。戦う相手のカードや戦い方の情報を流したりとかを期待しているなら無駄だぞ』

「えっ!? いや、そういう事は別に期待していないんだが?」

仕事がスムーズにというザルグの言葉に、俺から鍵の守り手達の情報を聞き出すつもりかと考えて釘をさすが、ザルグは何のことだとばかりにキョトンとした顔をする。

『なんだ。そういう事じゃないのか。……じゃあ何がスムーズに行くんだ?』

「決まっている。俺達の仕事と言えど……これだっ!」

ザルグは懐から紙を取り出し、それをバツと大きく広げた。それと同時に他のメンバーが一糸乱れぬ連携で簡易的な台を造り、紙が置けるスペースを用意する。

紙は何枚かに分かれていて、それぞれに鍵の守り手の簡単なプロフィール、部屋の間取りなどが記されていて、その他あちこちに印や注釈まで書かれている。

これは……まさか!?

「俺達は黒蠍盗掘団。依頼された内容は七精門の鍵を奪う事。それで仕事と言ったら当然盗みに決まっているだろう」

まさかの泥棒宣言だったよコンチキショウっ！ 俺これも調整すんの？ どうしろって言うんだっ!?

黒蠍盗掘団と七精門の鍵奪取作戦 その一

『ちよつ!? ちよつと待つてくれ!? いくら何でも直接鍵を分捕りに行くというのはマズいだろう!!』

「そうか? そもそも我々はそれが本業なのだが」

一様にうんうんと頷く黒蠍メンバー。ノゝつ!? この場で常識人は俺一人かよつ!? 何とか思い留まらせないと。

『いやだから、鍵を手に入れるには正式な手順があるんだ。守っている奴らをデュエルで打ち負かさない限り、鍵だけあつたつて門は開かない!』

「何? デュエル? ……ああ! そう言えば確かに依頼人からこんなものを受け取っていたな」

そうしてザルグが取り出したのは、一般的に使われているデュエルディスク。特注ではなく量産品だ。

『そうそう。ザルグもカードぐらい持っているだろう? それで鍵の守り手とデュエルしてだな』

「なるほど。情報提供感謝するぞ。まあそれはそれとしてだ。早速どうやって鍵を盗み

出すか考えよう」

『いや聞けよっ!』

この調子である。どうやら黒蠍盗掘団としては、自然とそういう考えに寄つてしまふようだ。いくら言つても結局盗むという手段に行きついてしまふのでたまらない。

仕方ないので後でこのことを大徳寺先生、及び大徳寺先生から彼らの依頼主である影丸理事長に報告したのだが、

「えっ!? 現状維持っ!」

「そうなのによ。鍵の入手方法は各メンバーに一任されてるし、本人が助けを求めない限り他のメンバーは手出し無用というルールによ」

大徳寺先生の言葉にどつと疲れが出る。

だからつてなあ……。そもそも理事長は鍵そのものよりも、どちらかと言えば戦いによつて得られるデュエリストの闘志の方が必要なんじゃないやなかつたっけ?

「まあ鍵だけ手に入れても門は開かないし、どうせ戦う事にはなるからあの連中は放つておけつて話によ!」

「なんか投げやりな感じですね」

あいつらに依頼したのアンタだろ理事長っ!? 責任取れっ! かと言つて、このまま放つておいたら面倒ごとの気配しかない。どんな手段で盗みにかかるか分からないの

が本当に怖いのだ。

それならまだ俺が近くで見張っていた方がマシだ。それでなるべく穏便に盗みを成功させて、扉が開かないことを認めさせるしかない。

「……大徳寺先生。最悪俺が犯罪者として捕まるようなことになったら弁護お願いします」

「……善処するにや」

そして数日後。

『野郎共。今日はいよいよお勤めだ。準備は良いな?』

『……おうっ!』

通信機越しにザルグと団員達の声が響く。

最初は下手に人的被害が出ないよう計画には俺も口を出すつもりだったのだが、

「人的被害だと? 出すわけがないだろうがバランスーよ。おい! お前達!」

「「盗みの掟三箇条。誰も痛めず、傷つけず、貧しき者からは何も盗まず」。それがっ!

黒蠍盗掘団!」

「……ということだ。お宝を手に入れるために必要とあらば罨や障害を破壊することは

辞さないが、堅気の奴らを傷つけるつもりはねえ」

そう自信満々にポーズをとりつつ言っているザルグ一同。その言葉に偽りはなさそうと判断し、俺は特に計画に口を出すことは無かった。強いて言うなら全体の確認作業程度だ。

少し準備する物があるということでザルグのみ一度島を離れて明日到着予定だが、逆に言えばザルグが来た時点で作戦開始となる。

今回の作戦はかなり大がかりだ。

まずセブンスターズの手から鍵を守るため、防犯点検も兼ねて一度鍵の所在を確認したいという触れ込みで、ザルグが警察（コードネームはマグレ警部）として堂々と島に潜入する。ちなみに変装はかなり本格的なものであり、細かく確認しなければつと見はバレない。

これは実際に既にセブンスターズによって三沢の鍵が奪われている以上、危機感はずなからずある筈だ。そこに付け入る隙が生まれる。

それぞれの鍵の守り手の保管場所を確認したら、そこで他の黒蠍メンバーを保管場所の近くに配置する。

当然すぐ見つかるが、そこで敢えてザルグが怪しんで見せることで鍵の守り手自身に弁明させ、疑いを逸らせるという作戦だ。まさかここまで堂々と犯人が下見するとは

思わないという盲点を突く訳だ。

その後全員の鍵の場所を調べたらその夜が本番。予め各鍵の守り手の部屋の間取りは全て調査済み。正確な場所さえ分かれば、どこであろうとも奪取可能と言うのが黒蠍団の判断だ。

そして深くザルグの身元を突っ込まれてバレル前に、全ての鍵を電撃作戦で一夜で奪取する……という流れだ。

正直敢えてメンバーの姿を見せて疑わせるというのはかなりリスキーだが、直接保管場所を見た方が奪取の可能性は格段に上がる。もちろん最悪の場合の逃走経路も準備済みだ。

『私が島に着いたら作戦開始だ。ぬかるなよお前ら』

『分かってるって！ お頭も遅刻しないでくれよ！』

『うむ』

『まったくだ。前のお勤めの時だってそれで酷い目に』

『こらっ！ アンタ達。くっちゃべってないで準備準備！ バランサーも聞いてんだから。……お頭はくれぐれも遅刻しないようにね』

『分かっているさミーネ。……では野郎共。そしてバランサーよ。後で会おう』

それを最後にそれぞれの通信が切れる。作戦間際ながらもこの余裕っぷり。流石は

黒蠍盗掘団だ。

一応大徳寺先生と鮫島校長には調整役として、今回のセブンスターズは鍵を物理的に狙っているという事だけは報告しておいた。

ただし怪しまれないよう手口や日取りまでは教えていないし、鮫島校長もそれなら三幻魔の復活には及ばないとして必要以上の警戒はしていない。寧ろ防犯システムの穴を調べる良い機会だと考えているようだった。

なので俺が今回の計画に関わっていたとしてもお咎めは無いと言質を取ることに成功した。一番の懸念が無くなってホッとす。

さあ。あとは早い所この作戦を成功させて、速やかにデュエルでの鍵の奪い合いに持っていくのみ。上手く行ってくれよ！

実際作戦は途中までは順調に進んでいた。ザルグは無事警部として潜入し、鍵の守り手の保管場所を一つ一つ確認していったのだ。

十代・明日香・万丈目・大徳寺先生・カイザーの鍵の保管場所までは確認が取れた。カイザーの鍵の保管場所がやや意表を突いていた（なんとデツキケースの一つに紛れ込ませていた）が、場所さえ分かれば問題はない。だというのに、

「このクロノス・デ・メデイチ。部外者にそう易々と部屋を覗かせるつもりはないノネ」

「ですが、これは防犯上必要な処置でして。せめて鍵の隠し場所だけでも」

「ノンノンノン。お断りでス〜ノ。直接鍵を狙うようなコソ泥など、この私がふんじばってやるノ〜ネ！」

意外に頑固なクロノス教諭は室内に入れるのを拒否。おかげでクロノス教諭の鍵の在処だけ分からずじまいとなった。結果として、

「……で？ 何で俺も参加することになったんだよっ!？」

「まあそう言うなバランサー。計画にはアクシデントもハプニングも付き物だ」

来客用に与えられた部屋の一つ。そこでザルグはそう言つて笑っているが、こつちとしては笑うどころの話ではない。

「今回のお勤めはスピードが命だ。やるなら一度に全ての鍵を奪わないと事件が発覚して警戒される。だが厄介なことに、標的の一人クロノス教諭だけ鍵の正確な位置だけが不明だ。ある程度の目星は付いているがな。なので」

そこで一度言葉を切り、ザルグはブルー寮の地図を広げていくつかの場所に線を引きしていく。これは……。

「まずそれ以外の鍵を全て同時に奪取し、私以外の団員は一足先に合流地点である七精

門に向かう。私はブルー寮のカイザーの鍵を担当するが、幸いクロノス教諭の部屋もまた同じブルー寮。カイザーの鍵を奪取した後、そのまま私がクロノス教諭の部屋に向かう。その間にバランサーには室内の様子を確認し、鍵の場所を探り当ててもらいたい」「しかし、俺は盗賊じゃないから忍び込むスキルなんて」

「もちろん侵入経路と脱出経路は準備してある。そういう心得が無くても大丈夫なように調整しよう」

そう言いながらザルグの手は素早く動き、地図に新たな線を書き加えていた。どうやらこれが俺用の侵入経路と脱出経路らしい。

「場所を探り当てただけで良い。あとは私がやる。見つからなかったとしても、探した場所を選択肢から外せるだけで大分楽になる。……どうだ？　引き受けてはくれないか？」

その言葉に俺は少し思案する。仮にも黒蠍団はプロフェツショナルだ。最悪俺が手を貸さなかったとしても、時間は掛かるかもしれないが何とかなる算段は付いているのだろう。だから俺に頼むのはあくまでも保険。手を貸してくれたらいい程度の事。

さりとて本人が言ったように、今回の事はスピードが胆だ。時間がかかればかかるほど、失敗の可能性は大きくなる。今回の事にもそれなりの準備期間が必要だったのに、これが失敗したら次はいつまでかかるか分からない。

あんまり時間がかかり過ぎれば理事長がしびれを切らして乗り込んでくる可能性すらあるのだ。失敗している場合じゃない。なので、

「……………分かった。協力しよう。ただし鍵が見つかるかどうかまでは保証できないぞ」

「それで十分だ。感謝するぞ balanサー！」

感謝は良いから必ず一発で成功してくれ。

そして、その夜午後11時55分。

『OK。じゃあそろそろ始めるとするか。…………七精門の鍵奪取作戦を』

『『『『『おうっ！』』』』』

作戦決行は午後12時丁度。

それに向けての最終確認を兼ねた連絡を終え、俺はいつもの balanサーの格好で準備された侵入経路を通ってクロノス先生の部屋に侵入する。あとは鍵を探すだけなのだが、

「スヤ〜。スヤ〜」

鍵はすぐに見つかった。しかしその場所は、

「嘘だろ!? なんで枕の下に敷いてんだよっ!?」

寝息を立てるクロノス先生の枕。その下から僅かにはみ出る鍵の一部を見て、俺は小声で毒づいた。

黒蠍盗掘団と七精門の鍵奪取作戦 その二

「厄介な場所にあるな」

俺が鍵の場所を見つけてからおおよそ十五分後。ザルグは無事カイザーの鍵を奪取してここ、クロノス先生の部屋の屋根裏までやってきた。なんとも早業だ。

ザルグに鍵の場所を教えるなり、そう言つてムムツと唸り始める。だが、幸い鍵は枕から僅かにはみ出している。上手くすれば引き上げることが出来るかもしれない。という訳で、

カタリ。

小さな音を立てて、クロノス先生の真上の板が外れる。そして、そこから静かに垂れ下がるのは、小さなフックの付いた一筋の細い糸。

そう。これが今回のザルグの作戦である。

『……どうだ？ 上手く行きそうか？』

「静かに。焦らせるな。位置取りは完璧。あとは上手く引つかかるかどうかだ」

そろりそろりとザルグが糸を垂らしていく様は、どこかザリガニ釣りを彷彿とさせ

る。だが相手はザリガニなどではなく、起きてしまったら即アウトの高難易度だ。

しかしそこは流石盗掘団のお頭。静かかつ素早く糸は鍵に到達し、巧みに糸を揺らしてフックを鍵に引つ掛ける。よし。後はクロノス先生に気づかれぬように引き抜くだけ。ザルグは勝利を確信した笑みを浮かべ、

キイキイっ！ キイキイっ！

「ナ〜二っ!? 何なノ〜ネっ!?!」

突如窓の外から響き渡る甲高い叫び声。慌ててクロノス先生が飛び起きる。マズイっ!?

「ちっ!」

ザルグは小さく舌打ちしながらも素早く糸を回収。クロノス先生は窓に駆け寄っていたので見られてはいなさそうだ。しかし急いでいたためフックから鍵が外れ、枕の傍にポトリと落ちてしまう。

「シツシツ! ……まったく。安眠妨害なコウモリ達でス〜ノ。……おや? 慌てて起きたから鍵がはみ出てしまいまシ〜タ。危ない危ない」

幸いなことに鍵の移動を怪しまれてはいないようだ。だがクロノス先生は鍵をしつ

かり枕の下に仕舞い込み、すぐさますやすやとまた寝息を立て始める。

チクシヨウっ！ さつきより状況が厳しくなったぞ。

『どうする？ 完全に鍵は枕の下に隠れてしまってもう釣り上げる作戦は使えないぞ。

寝返りを打つのを待つか？』

「いや。そんないつになるか分からない事を待っている暇はない。……くっ!? そろそろ子分達が集合場所に辿り着いている頃合いか」

ザルグは時間を確認して渋い顔をする。急いで合流しないと。しかし今の騒ぎ。あれはいつたい何だったのだろうか？ クロノス先生はコウモリ達と言っていたけど……まさかな。

「……仕方ない。ここは危険だが直接私が降りて枕の下から鍵を」

『いや待ってっ！ いくらプロでも直接行くのは無茶だ！ それに、ザルグはここから脱出した後の事もある。捕まらせるわけにはいかない』

「 balanサー。お前……」

世間一般的には泥棒など捕まった方が良いのだが、今回は事情が事情だ。ここで盗みを成功させないと、これからのスケジュールに差し支える。そういう意味で言ったのだ

が、何故かザルグは涙ぐんでいた。

しかしどうするか……んっ?! 俺が悩んでいると、急に懐に入れてあるカードが光を放ってテディが精霊化した。テディは屋根裏にちよこんと立って、そのまま胸をポンつと叩く。まるで自分に任せろと言っているかのよう。

そう言えばテディもまた脱走とかくれんぼの名手。上手くすれば何とかかなるかもしれない。

『テディ……よし。任せたぞ。枕の下にあるあの鍵をこっそり取ってきてくれ!』

テディは俺の言葉にこくりと頷き、天井に空いた穴から部屋にそつと降りていく。床についた直後にテディは実体化。ぬいぐるみだから足音を立てることもなく、無音で枕元に忍び寄っていく。……なんか怖いな。俺が寝てる間に同じことやっけないよね?

「何だ? 急に部屋にぬいぐるみが見れたぞ?」

『ああ。あれは俺のカードの精霊の幸せなテディ……つてちよつと待った!! お前さっきまでテディの姿が見えてなかったのか? お前もカードの精霊だろ?』

「むっ。ああ。それはだな……話は後だ。いよいよブツの場所に辿り着いたぞ」

話している間に、テディはクロノス先生の枕元に辿り着く。テディはそのままゆつくりと枕に手をかけ……そのまま一気に枕を引き抜いた。

『なっ!?!』

重力に従い、自由落下を始めるクロノス先生の頭、しかし地面に当たる直前、テディがそのふわふわの腕を間に差し込んで受け止める。……ふう。心臓が悪い。

クロノス先生が起きてこないことを確認すると、テディはそのままもう一方の手で落ちていた鍵を手に取り、自慢げにこちらに向けて伸ばしてくる。

「ほう。やるじゃないかあのぬいぐるみ」

『あんまり直球でビビったけどなまったく。……よし。テディ。クロノス先生を起こさないように枕を直してこつちに返ってくれ』

もたもたしているともた外からコウモリの鳴き声か何かで起こされかねないからな。鍵を取ったらさっさと逃げるに限る。テディもこくりと頷いてそつと枕を元に戻そうとし、

「……むにゃ」

寝ぼけたクロノス先生に掴まれた。

相変わらず寝息を立てているので起きた訳ではない。単に寝返りを打って偶然掴んだだけのようだ。そこまで力を入れている様子もなく、テディの力なら外すことなど造作もないだろう。だが、

「おい。どうしたんだ？　なんであいつは振りほどかない」

『……振りほどかないんじゃない。振りほどけないんだ』

不思議そうに言うザルグに俺はそう答える。

テディは元々寂しきのあまりに相手を抱きしめて殺してしまう幻想体。だけど逆に言えば、相手が抱きしめてきた場合その手を振りほどくなんてことはしない。相手の意思はどうあれ、それは自分自身の否定に繋がるから。

何とかテディは枕をクロノス先生の頭に持つていくのだが、それでも尚掴まれたまま。これではどうにも動けない。このまま待つていたら時間がかかりすぎるしな。どうしたものか。

『うわっ!?!』

そう考えていると、急にテディが片方の手で鍵をこつちに放り投げてきた。俺が驚きながらも何とかキャッチすると、テディはそのままクロノス先生の枕元に座り込んだ。……まさかあいつ。自分だけでクロノス先生が離すまで粘る気か？

何とか来いと小さな声で呼びかけるのだが、テディは頑としてその場を動こうとしない。

「 balanサーよ。どうする? 」

『……仕方がない。俺達だけで先に行こう』

「何? 奴を見捨てていく気か? 」

ザルグははつきりと分かるほどに顔をしかめる。あの黒蠍団の様子を見る限り、コ

イツは仲間を見捨てるなんてことはしないタイプだ。その部分は個人的に好感が持てる。

『一時的に置いていくだけだ。テデイはさつきも見ただろうけど隠密は得意だし、見かけよりすばしっこい。クロノス先生が手を放し次第後から追ってこさせる。……それにテデイのカードはここに有る』

俺はデッキからテデイのカードを取り出して見せる。カードがあれば繋がりが出来、テデイからも場所が分かる。そして本当にいざとなったらカードを通じて呼び出すことも出来る。

勿論急にテデイが消えたらクロノス先生が起きる可能性があるのもそれなので最後の手段だが。

そう説明すると、ザルীগも一応納得したのか逃走準備に入る。……よし。覚悟が決まったら即行動だ。ぐずぐずしていたら誰も得しない。

『後は任せるよ。手が離れ次第後から追ってきてくれ』

最後にテデイが大きく腕を振って見送ってくれるのを背に、俺はザルীগの先導の下クロノス先生の部屋から脱出した。

『これが……七精門か』

学園の地下に広がる空間、黒蠍団との合流場所として決められたその場所を見て、俺はちよつと感嘆する。

中央の台座を守るように周囲に配置された七つの巨大な石柱。しかし一つだけ柱が他に比べて沈み込んでいる。台座には最初から鍵が一つ差し込まれていて、その部分だけ光り輝いていた。どうやら三沢が最初に戦って負けた分の鍵らしい。

台座の手前には、既に仕事を終えた他のメンバーが揃っていた。

「お頭っ！ こつちこつち！」

「待たせたな野郎共。バランサーの協力もあつて無事手に入れてきたぜ。首尾はどうだ？」

「バツチリだ！ 他の皆もキツチリ盗ってきたぜ！」

クリフを筆頭に、それぞれが手に入れた鍵を取り出して見せる。ザルグと俺も鍵を出し、ここに全ての鍵が揃った。

「さっ！ お頭。早速この台座にはめ込もうぜ」

「そうだな。バランサー。鍵を貸してくれ」

『ああ。……だけどザルグ。最初に言ったが鍵だけあつても』

「分かつてる。あくまで物は試しという奴だ」

ここまで来たたら試さないことには納得しないだろう。俺は一応注意だけしてザルグに鍵を手渡す。ザルグはそれぞれの鍵を受け取ると、台座に一つずつはめ込み始めた。

一つ。二つ。確かに鍵をはめ込んでいくのだが、三沢の分のように光り輝くことは無い。そして、

「これで……最後だ」

全ての鍵をはめ込んだザルグだが、周囲を見渡してみても何も起きない。

「ふむ。もしかしたらとは思ったが、やはりバランサーの言う通りか」

「門が開かないのでは、お宝が手に入らない」

ゴークの言葉にザルグも顎に手を当てて考える。しかしこれでようやく納得してくれたみたいだな。あとは普通に鍵の守り手とデュエルするという流れに持っていかば、

「……仕方ねえ。最後にアレを試したら今日はいったん引き上げだ。野郎共。プランBだ」

「「おうっ！」」

ザルグの号令と共に、黒蠍団はそれぞれが散らばっていく。……プランB？

『ザルグ。まだ何かあったのか？ プランBとは聞いていないが』

「ああ。普通に鍵を使うだけでは開かないとバランスーに聞いてな、本当に開かなかつた時のために急遽準備をしてきたのだ。……私がただ警察に成り済ますだけのために数日島を離れたと思つたか？」

何だろう？ このザルグの自信満々な顔を見てどうにも嫌な予感がプンプンする。

「お頭。セット完了したよ」

「ご苦労ミーネ。タイミングはクリフに任せる。さあバランスーよ。少し離れるとしよう。……危ないぞ」

『危ない？ 危ないって何が？』

ザルグ達は俺を連れてこの空間の入り口まで下がる。するとクリフが片手に何やらボタンのようなものを取り出した。

「なくに。……ちよつと発破をかけるだけだ」

次の瞬間、石柱から爆発音が響き渡った。

黒蠍盗掘団と七精門の鍵奪取作戦 その三

『お前らなあ……一体何考えてんだこの野郎っ！』

「まあ落ち着けバランサー。良い仕事のコツはな、失敗したとしても常に次の手を考えておくことだ」

つついといほぼ素で詰ってしまうが、当のザルグは落ち着いたものだ。

先ほどの爆発音は、ザルグが島を離れて準備してきた爆薬のものだった。どこから手に入れてきたか知らないが、爆薬盗難でニユースにならないことを祈ろう。

ザルグに理事長から元々依頼されたのは、鍵を手に入れて門を開き、三幻魔のカードを手に入れること。

しかし鍵を手に入れたものの門は開かない。ならば直接門をこじ開けてカードを手に入れれば問題ない。という発想の飛躍の下、ザルグ達黒蠍盗掘団は今回の犯行に及んだという。

流石にこれは理事長も想定していなかっただろう。その証拠に、

『見ろこれを！ 石柱の一本にヒビが入っているじゃないかっ！』

「くっ!! あれだけの爆薬をもつてしてもヒビを入れるのがやっとは。全て壊そうと思つたらどれだけ必要になるか分からんな。流石お宝を守る仕掛け。頑丈だ」

『そういう問題じゃないってのっ!! 最悪お宝そのものが吹っ飛んだらどうするつもりだ?』

まあザルグもそれは見越して周囲の石柱一本だけを狙ったようだが、火力を集中しても少しヒビが入った程度で健在なこの封印も流石だ。

「まあ良いではないか。つまり物理的にこの封印をどうにかするのは難しいと分かっただけでも収穫だ。ここは頭を切り替え、正攻法でどのように行くかを考えようではないか。なあ! お前達」

うんうんと頷く団員達。……はあ。やっとうデュエルする方向に向かったのは良いけれど、今回の一件をどう報告したら良いんだ?

『つたくもう。さっさと逃げるぞ。今の爆発音を聞いて誰かが駆けつけてくるかもしれない』

「なあに心配するな。こんなこともあろうかと、入口には防音処理をさつきしておいた。余程近くに居なくては気づきもしない」

『その用意周到さをもっと前から発揮してほしかったよ』

もうこいつらの調整役降りても良いだろうか。俺頑張ったよな。今回ばかりは大徳

寺先生に任せたって許されるんじゃないかなホント。

次の作戦を練るのは明日にして、ひとまず今日は解散すべくそろそろと七精門から離れていく俺達。

奪取した鍵はまとめてザルグが預かることに。まあ鍵だけでは開かないとは言え、鍵がこちらにある以上鍵の守り手達は動かざるを得ない。上手く誘導するための小道具としては使えるだろうということだ。

そういえばふと疑問に思ったことがあったので、帰り際に少し聞いてみることにした。

『ザルグ。さっきティディが実体化するまで姿が見えてなかったよな？ お前もカードの精霊なのに何故だ？』

「うん!? それはな。これが原因だ」

ザルグはトントンと自身の右目……正確に言うとな右目を覆う眼帯を指で叩いた。よく見るとカードの絵柄のものとは違って、ウジャド眼がモチーフになっている。……ウジャド眼つてことは、

「精霊が自身の力だけで長く実体化するのは難しい。なのでこれを仕事に必要というこ

とで依頼主から貸与されている。これがあることで俺や子分達もまとめて実体化……というより、人としての肉体を持てている訳だ」

前タニヤが持つていた手袋と同じ闇のアイテムか。

「だがこれにも欠点があつてな。一度人になると精霊としての力が多少封じられる。特に俺達の場合五人に分散しているから一人ずつの力は余計に少ない。余程気合を入れない限り精霊を見ることは出来ないわけだ」

五人で一人の精霊。諜報や潜入活動には向いていても、数が増える代わりに力が落ちるという事か。ある意味理に適っている。だからあの時テデイが見えなかったのか。

しかし理事長はそんな闇のアイテムをポンポン仕事だからと言つて貸し出すとは、タニヤの闘技場の件もあるし、案外仕事をする方としては良い環境なのかもしれない。だからと言つて闇のデュエルはしたくはないが。そこへ、

『おつ！ テデイじゃないか！』

前方からテデイが精霊状態でふわふわ飛んできた。どうやら無事クロノス先生から離れたらしいな。

「バランサーよ。さっきのぬいぐるみが追いついてきたのか？ なら礼を言っておいてくれ。お前のおかげで仕事がスムーズに進んだと」

『ああ。ちよつと待つてくれ。今実体化してもらおうから』

「テディに頼んで実体化してもらおうと黒蠍盗掘団はかわるがわる札を言い始める。なんだかんだ協力者とか仲間に対してはすぐに仲良くなるタイプだなこいつら。……だが、テディの様子が何かおかしい。どこか慌てているようだ。」

『どうしたテディ？ 何があつた？』

「テディは必死に身振り手振りでも何かを知らせようとするのだが、かなり複雑で何を言っているのか分からない。困つたな。」

「なあバランサー。お前こいつの他にも精霊は居ないのか？ 居るんだつたらそいつに通訳してもらえば良いんだ」

「チツクの提案にその手があつたと手を叩く。しかし丁度今俺の手持ちのデツキに居る精霊で普通に会話できると言つたら……。」

『仕方ないか。ちよつと出てきてくれ。雪の女王』

『何用だ？ 妾を急に呼び出すとは』

「精霊化して現れたのは長剣を携えた女王様。出来ればレイシアとか葬儀さんとかもつと穏やかな幻想体と呼び出したかったのだが、今デツキに居るのが雪の女王だったんだものしょうがない。」

『そのお……お願いがあるのだけど、このテディが何を伝えたいのか雪の女王に教えて欲しいなあ』

『……ほお。つまりはこの妾にそのぬいぐるみの通訳をせよと? ……そんな些事にこの妾を使おうと?』

雪の女王は長剣を持つ手に力を込める。げっ?! 機嫌を悪くしたらしい。気のせいか周りの気温が急激に冷え込んできた気がする。……気のせいじゃなさそうだ。他の黒蠍盗掘団の面々もなんか寒そうなもの。

あわや氷漬けにされるかと思つたが、そこにテデイが走り込んできて雪の女王に何かを訴えるような仕草をする。

『何? ……良かろう』

テデイの仕草に少し考え込むと、雪の女王から放たれる冷気が僅かに緩む。そしてちよいちよいと軽く手招きされたので、そつと彼女に近づく。

『管理人よ。妾に頼みごとをするという意味合いは分かっているな?』

『ああ。……後日ハーゲン○ッツ二つでどうか』

『三つだ。それと別口の甘味も貢物として差し出すが良い。……また幼子辺りに物欲しそうな顔で見られたらそれを下賜してやろう』

『なるほど。レティシアの分も。……分かった』

交渉成立らしい。少々財布が軽くなるが、これくらいならまだ許容範囲だろう。ちなみに今の会話は雪の女王の名誉のためにもひそひそ声で会話している。周囲に漏らす

と凍らせかねないしな。

「おい。話はついたのかバランサー。俺達の目にははつきりとは見えんのだ。ぼんやり見えるというだけでかなり強力な精霊だとは分かるが」

『ああ。ザルグ。一応通訳をしてくれることになった』

そうと決まれば急がねば。下手に刺激して周り中氷漬けにされたら大変なことになる。

雪の女王はその方が聞き取りやすいのか実体化し、周りの連中が驚く中テディへの聞き取りを開始した。すると、

『ふむ……ほう……分かった。確かに伝えるとしよう。管理人よ。おおよそだが分かったぞ』

テディからの情報を雪の女王が大まかにまとめるとこうなる。

まずテディはクロノス先生が手を離れたのを見計らい、素早く精霊化してこちらを追って来た。そこまでは予想通りだ。だが、それだけではなかったらしい。

『こんな夜中に連絡があった？』

『そのようだ。それでそのクロノスとかいう者は、すぐに枕の下を確認して鍵がないことに気が付いたらしい。それこそテディを気にも留めないほどの慌てぶりだったそう』

あつちやく。つてことは今頃鍵の守り手全員に連絡が行ってんな。できれば発覚は朝までかかってくれば良かったんだけど。

『どうやら電話口で、一番酷く荒らされていたオシリスレッドに集まって話し合うということを言っていたようだ。今戻れば鍵の守り手達と鉢合わせする。このテディめはそのことを伝えようと慌てていたのであろう』

雪の女王の言葉にテディはこくこくと頷く。そうだったのか。ありがとうなテディ。伝え終えて気が緩んだのか、俺の肩に掴まってきたテディに礼を言いながら軽く撫でる。

ちなみに一番オシリスレッドが荒らされていたというのは、

「すまん。多分、俺のせい」

「俺もちよつと心当たりがあるかな」

ゴーグとチツクがバツが悪そうに頭を搔いて名乗り出る。どうやら元々鍵を盗つてそのままトズラする計画だったため、証拠隠滅が疎かになったらしい。

チツクは道具で壁に穴を開けてそこから鍵を奪い、ゴーグに至っては扉を破壊して直接部屋に侵入するという力技だったらしいからな。単純な被害で言えばそこそこ大きかったようだ。もうちよつとスマートに行けなかったのか。

雪の女王も『これで用は済んだな。貢物を忘れるでないぞ』と言い残して精霊化を解

く。さて。これからどうするか。

「……ふむ。予想よりバレルのが早かったが、こうなつてはある意味都合だな」
『んっ?! 何か考えがあるのか?』

既に手が回っているかもしれないというのに、ザルグを始め黒蠍盗掘団の顔には余裕がある。まさかこの状況を読んで何か手を残していたのか?

「いや何。簡単な話だバランスーよ。結局の所、お前の提言した通りデュエルするとうだけの話よ。ただまだ俺達の正体までバレた訳ではない。それを活かしてこれからどう立ち回るか考えるところではないか」

『なんだ。結局の所行き当たりばったりじゃないか』

何かと思つたらただ楽天的だつただけか。まあこんな状況でも心に余裕が持てるのは長所なのかもしれないけどな。そう言うと、

「ハッハッハ。例え計画なしのアドリブだろうとも、目標に向けて常に直進する。そう。それがっ」

「「「我らっ! 黒蠍盗掘団っ!」」」」

これである。ホントにブレないねこいつら。

相変わらずのポーズを決めるこいつらを見て、俺はため息を吐きながらもこの嫌いなれない奴らをどうするか頭を働かせていた。

それからしばらくして、俺達は問題のオシリスレッド寮に到着していた。

テディに先行してもらい、俺の部屋の幻想体達には既に事情は伝わっている。そうして十代達鍵の守り手の動向を探ってもらった所、どうやら万丈目の部屋に皆集まっているようだ。

「野郎共。作戦は頭に入っているな」

「『『おうっ！』』」

「静かに。声が大嫌い」

そういう俺達は各自変装を解き……というより黒蠍盗掘団は元々盗掘団としての姿の方が素なので変装し直してというべきか？ まあこの学園で普段過ごす姿でいる。つまりザルグは警察として、チツクは生徒としてという具合にだ。

作戦としては、鍵を奪う前の下準備とおおよそは同じ。ザルグが警察として事情聴取をすると持ちかけ、敢えて鍵の守り手の前で黒蠍盗掘団のメンバーを先に取り調べる。

そうすることで一度疑わせて、その後身の潔白を証明させることで疑いの気持ちを消すというやり方だ。心理の盲点を突くやり方だな。受け答えもここに来るまでの道中

でざっと頭に入れてある。大抵の質問には乗り切れるだろう。

ちなみに俺は不参加。自室からチックガリアルタイムでこっそり映している映像を俺のタブレット越しに見て、それと念のために送った幻想体を通じて状況を確認する予定だ。

十代や万丈目、大徳寺先生には見えるだろうが、そもそも幻想体のことは知られてるので勝手に覗きに來たと思われるだけだ。そこまで問題はない。

スパイとしてはあまりセブンススターズ側に協力し過ぎるのはマズいが、ここまで來たら無事追及を躲しきってほしいと思わなくもない。デュエル自体は機を見て一人ずつ仕掛けるつもりらしいので意欲はあるみたいだしな。

「ではお前達。俺は自分の部屋から見させてもらうよ。……健闘を祈る」

「ああ。今日は色々助かった。これが済んだらまた共に作戦を練るとしよう」

そうして俺は黒蠍盗掘団と別れて部屋に戻った。部屋には既に幻想体達が精霊化して待機してくれている。ありがたい。

「皆。待たせたな」

『待ちくたびれたよ久城君。部屋にはもう葬儀君が行ってる。本当ならレティシアの方が見られても安心なんだけど』

いつもの調子でそう話しながら部屋の片隅に軽く動くディー。その先には、途中まで

俺を待っていたのだろう。空のコップを持ったままやすやすと寝息を立てるレイシアの姿があった。最初に会った時を思い出すな。

「なんだかんだ夜中だからな。寝かせておこう」

俺は二段目のベッドをざっと片づけてレイシアをそこに運ぶ。布団も掛けて準備完了。……精霊化してくれば良かったが、実体化したまま眠るとそのままらしい。妙な話だ。

さて。いよいよだな。タブレットの電源を付け、チックから送られてくる映像を確認する。そこに映っていたのは、

「この事件。必ず俺が解決してみせる。名探偵万丈目サンダーの名にかけてっ！」

なんかキレッキレのポーズを決めている万丈目の姿だった。……俺は何を見せられているのだろうか？

を回収に行つた際、こいつらは犯行の一部始終を目撃していた」

『間違いない』

『こいつらだ』

『オイラ達は見たぞ!』

口々に叫ぶおジャマ達。他の精霊達もうんうんと頷いている。だが、

「目撃者だと?」

「どこに居るの?」

そうだった。黒蠍盗掘団は人の身になつて居るから、余程存在感のある精霊じゃないや見えないんだつた。

それに映像越しに見える俺や十代、大徳寺先生はともかくとして、それ以外の見えな
い人から見れば些か説得力に欠けるが、万丈目はどう切り崩すつもりだ?

しかし参つたな。つてことは、俺は隠れてたから気づかれてないにしても、クロノス
先生の所でテディがばつちり目撃されてる可能性があるんだよな。幻想体を使う人な
んで俺ぐらいの物だろうし……これはバレたかな?

「なんなら目撃者達が見たことを詳しく語ろうか? どこに誰が入つたかも分かつてい
るから、細かく調べればそいつの痕跡が必ず出てくるはずだぜ。それが一人でも確定す
れば、自ずとそれ以外も信憑性を帯びてくる。そして」

最後に、万丈目は力強くザルグを指差した。

「マグレ警部。貴方がこの一味の黒幕だ。貴方は俺達に鍵をわざと保管させ、手下にその場所を教えていた。そしてわざとらしく疑ってみせて、俺達に弁明させた。そうすることによって、俺達から彼らを疑う気持ちを消したんだ」

「……ふっ！ 流石は名探偵を名乗るだけの事はある。めちやくちやな推理だが、結果は全て大当たりだ。そう。私達の正体は」

「……黒蠍盗掘団っ！」「……」

ザルグは流石に追及を躲しきれないと踏んだのか、早々に他の面々と一緒に正体を現した。まあ精霊に見られている時点で怪しいのは明白だからな。

「私は以前七精門の鍵を奪う依頼を受け、部下をこの島に送り込んだのだ」

「時間をかけた割には仕事が雑だぜ」

「……それがっ！ 黒蠍盗掘団っ！」「……」

「なんか面白いぞこいつら！」

「でも、鍵を盗んだだけじゃ七精門は開かない。意外と間が抜けてるわね」

「……それがっ！ 黒蠍盗掘団っ！」「……」

十代や明日香が口々に声を上げる中、黒蠍盗掘団は一つ一つ決めポーズを決めて返していく。何でもかんでもそれで押し通す気かこいつらは!?

「まあそれだけでは開かないとバランスーに聞いてはいたのだが、我らも一応確認のためにな。……それでだ。奴の言う所によると、門を開くにはデュエルする必要があるらしいな」

ザルグは懐から全ての鍵を取り出して掲げる。

「という訳で、私とデュエルだ小僧。いや、名探偵万丈目サンダーよ」

「望むところだ！ 来いっ！ 黒蠍盗掘団」

そう言つて外に飛び出していく二人。おいっ!? 折角鍵があるんだからもうちよつと作戦練つてからにしろよ！ 絶対アイツ行き当たりばったりで進めてるよ！

慌てて後を追う他の面々。映像はチックの映しているもの頼りなので画面がブレまくっているが、何とか事態は把握できる。

『さて。面白いことになってきたけど……久城君はどうする?』

「もちろん行くさ。審判役も兼ねているからな」

デイーが言うにはどうやら万丈目達は寮の前の広場で戦うらしい。人に見られないようそつと部屋を出て寮の裏手に回り、急いでバランスーとしての服に着替える。

そこへザルグから持たされた通信機から連絡が入った。

『俺だ。状況は分かっていると思うが、今からデュエルをやるので至急来てくれ』

『分かった』

俺は言葉少なに返して通信を切り、その足で広場に駆け付ける。

「来たな！ 待つていたぞ」

『大して待たせてはいないはずだがな』

何せ寮の前だから一分もかからない。そうザルグに軽口を叩くが、何故か反対側に居る万丈目がこちらを見てどこか不思議そうな顔をしていた。何かあったかな？

「さて。デュエルする前に一つ聞きたい。名探偵万丈目サンダーよ」

「何だ？」

「今回の一件。お前は昼間鍵の保管場所を周る時に目撃者たるカードを置いたと言っていたな。では、最後まで鍵の保管場所を誰にも教えなかったクロノス教諭の部屋にもカードは置いたのか？」

その質問に一瞬場に沈黙が降りる。そして、

「……いいや。その部屋だけはカードは置けなかった。よつてクロノス先生の鍵の犯行だけはあくまで想像に過ぎない」

何？ ということはテディの事は見られていない？

「そうか。ならば今更なので答えるでしょう。クロノス教諭の鍵は私が奪取した。カイザーの鍵を奪った後に一人だな。何なら犯行の口口でも語つてやろうか？」

「……いや。良い。それよりも今はデュエルだ」

それを聞いてザルグはこちらにウインクをしてくる。どうやらザルグも分かってこの質問をしたらしいな。俺の事を庇って一人でやったと嘘を吐くなんて。すまないザルグ。

「ワタシのあの鉄壁の保管場所を破るなんて、中々やります〜ノ！ 間が抜けてるけど腕は良いみたいなの〜ネ」

なんかクロノス先生は感心していたが、それやったの正確にはテディなんだけどね。

「デュエル」

万丈目 LP4000

ザルグ LP4000

そうして始まったデュエルだったが、モンスターと伏せカード一枚という静かな立ち上がりのザルグに対し、万丈目は最初のターンで手札を駆使してエースモンスター『アームド・ドラゴンLV7』を召喚！ いきなりザルグにプレッシャーをかけていく。

これは最初からザルグの敗北濃厚かと思ったが、どうやら俺は知らず知らずのうちに黒蠍盗掘団の事をキワモノキャラだと侮っていたらしい。

「ここは折角なので、デュエルの場には我々自身が参上する。集まれ野郎共。お勤めだ！」

「黒蠍一の力持ち。剛力のゴーク」

「黒蠍団の紅一点。茨のミーネ」

「どんな罠でも朝飯前。罠外しのクリフ」

「お宝頂きやあとはトンズラ。逃げ足のチック」

「……我らっ！ 黒蠍盗掘団っ！……」

なんとザルグは、僅か2ターン目にして魔法カード『黒蠍団召集』の効果により、手札から全黒蠍メンバーを場に揃えてみせたのだ。

おまけに伏せてあったカードは、黒蠍盗掘団が全て場に居る時のみ使用可能になる『必殺！黒蠍コンビネーション』。攻撃力こそ下がるものの、全ての黒蠍が直接攻撃可能になるという効果により、一気に万丈目のLPは半分に。

さらに相手にダメージを与えた時に黒蠍盗掘団はそれぞれ効果が発動するため、万丈目はLPの他に手札・場・デッキがそれぞれ削られるという苦難に見舞われる。おまけにコンボ成立後、再びザルグの手札に黒蠍コンビネーションが戻ってくるという二段構えだ。

いやホントに良く出せたな。成立条件が厳しすぎてほぼロマンカードの域なんだぞ

黒蠍コンビネーション。だが、

「その程度のコンボでは、俺はびくともせん！ 畏発動！ 『レベル調整』」

流星は俺の推し万丈目。素早くLVモンスターを蘇生させる『レベル調整』の効果でアームド・ドラゴンを蘇生させ、自分のターンに効果の発動を狙う。……レベル調整は魔法カードだった気がするが、何故か畏扱いになっていたのはアニメ版だからだろうか？

十代を苦しめたモンスター破壊効果で黒蠍団を一掃しようとするが、

「甘いっ！ 畏発動！ 『黒蠍団撤収』。場の黒蠍団は全て手札に戻る！」

ザルグは効果による破壊を自分から手札に戻す効果で回避。アームド・ドラゴンの直接攻撃でLPを大きく失うものの、黒蠍団のメンバーはお頭が自分の身を盾にして仲間を守ったとますます奮起する。

「今のは効いたぜ。だが、これで勝負は決した！ 私のターン！」

そこでザルグは再び手札から黒蠍団招集を発動！ これでまた黒蠍コンビネーションが決まればほぼ万丈目に勝機は無い。だが、万丈目もただそれを見過ごすような男じゃなかった。

「そうはさせせん。畏発動！ 『おジャマトリオ』」

「なっ!? こいつら」

「俺達の場所がないっ!？」

おジャマトリオは相手の場におジャマトークンを3体特殊召喚するカード。先に出されてしまつては場が圧迫されて黒蠍団も召喚出来ず、全員揃つていないから黒蠍コンピネーションも封じられる。実に上手い手だ。

『すいませんね!』

『お宅の場なのに』

『すつかりお邪魔して!』

「ホントに邪魔だこいつら」

実際にもつともだ。そのくせ奴ら自身はすつかりくつろいだ様子なのが何とも言えない。

その後ザルグは余つた場にミーネのみを特殊召喚。ミーネを墓地に送ることで相手モンスターを破壊する『黒蠍 愛の悲劇』によつてアームド・ドラゴンを破壊する。

「あとは任せたよ。お頭」

「ミーネ。お前の命は預かつた。……ミーネの仇。喰らえっ!」

万丈目の場はこれであら空き。そこにザルグ自身の直接攻撃が入り、万丈目のLPは残り僅かとなる。

「さらに、今の私の攻撃で効果発動! 相手の手札からランダムに1枚捨てる」

万丈目の手札は1枚。これを捨てれば場・手札に何も無い状態となってしまう。ザルーグは自分の圧倒的優位を確信していただろう。だが、

「……まだ俺にもツキはあるようだぜ。俺の手札はこの1枚のみ。『おジャマジック』。このカードが手札か場から墓地に送られた時、デッキからおジャマイエロー、ブラック、グリーンを手札に加える」

おっとそう来たか！ 普通の魔法のように使えない代わりに、条件を満たせば手札を3枚も増強するカード。これはザルーグも自身の効果が裏目に出た形で苦い顔をする。

「俺のターン。俺は『強欲な壺』を発動して2枚ドロロー！ 魔法カード『融合』を発動！」
窮地から万丈目が呼び出したのは、おジャマ3体を融合素材とする『おジャマ・キング』。オシリスレッド寮よりデカイパンツ一丁のおジャマの王なんて誰が喜ぶんだ!?

さらに万丈目は魔法『おジャマツスル』を発動し、ザルーグの場のおジャマトークンを全て破壊してその数×1000の攻撃力をおジャマ・キングに加算。結果攻撃力3000の強力モンスターへと変貌する。

これにはザルーグも唾然とせざるを得ない。というかここに居る他の面々もだ。絶望的状况をひっくり返したのもそうだが、絵面がとにかくヤバイ。

「行けっおジャマ・キング！ 『おジャマツスル・フライングボディアタック』！」

「ぐわあああっ!？」

おジャマの王が宙を舞い、その巨体でLPごとザルグを押し潰した。
ザルグ LP O

万丈目WIN!

白々しい偶然は良くあること

「やった〜！ 勝った！」

「凄いぞ万丈目！」

「さんだ」

勝敗が決し、十代達鍵の守り手は歓声を上げる。こんな状況であっても呼び方を嗜める万丈目も流石と云うか何と云うか。

おジャマ・キングのボディプレスをまともに受け、ザルグはギャグマンガ調に人型に地面にめり込んで目を回していた。

「む、無念。すまん皆」

「お頭つ!?!」

黒蠍盗掘団の面々がザルグに駆け寄る。だが、ザルグを始め全員の身体は光の粒子と共にうつすらと消えかけていた。これは……タニヤの時と同じか。

対峙していた万丈目が駆け寄ろうとするが、それを制して俺が先に歩み寄る。悪いが見届けるのは俺の役目なんでね。譲れない。

『ザルグ。皆も』

「ああ。バランスサーか。どうやら敗北したことで契約不履行と見なされたらしい。この眼帯の力が急激に弱まっているようだ」

俺が手を差し伸べると、ザルーフはふらつきながらも手を取って立ち上がった。だが明らかに普段より弱々しい。眼帯の力が無くなり、実体化が難しくなってきたらしい。「お宝を手に入れられなかったのは悔しいが、まあ偶にはこういう事もあるものだ。お前には世話になったな」

『ああ。たつぷり世話をしてやった。まさか直で鍵を盗りに行くとは思ってなかったがな。色々大変だったんだぞ』

「違うない！ ナツハツハ」

ここで下手な謙遜はしない。さぞ苦勞したぞというように話すと、黒蠍盗掘団は皆で笑い飛ばす。ここまで来ても明るい奴らだ。

そこでいよいよ黒蠍団の身体がぼんやりとしてきた。いよいよ限界らしい。

「さてそろそろか。悪いがバランスサー。俺が消えたらこの眼帯はお前から返しておいてくれ」

「この数日……いや、この学園での暮らしは割と楽しかったぜ！」

「……うむ。悪く、なかった」

「盗賊なのに警備員つてのも新鮮だったな」

「生徒に慕われるっていうのも中々良かったわよねえ」

口々に言う黒蠍盗掘団の誰一人として、悲壮感を漂わせてはいなかった。消えるのではなく精霊として元の世界に戻るだけだと。もう少し切ない系の別れになると想像していたのだが、

『本当に……最後まで騒がしくも明るい奴らだなお前らは』

そうポツリと洩らした俺の言葉にこいつらはニヤリと笑い、

「」「」「それがっ！　黒蠍盗掘団っ！」「」

最後にいつもの決めポーズをして消滅していった。余韻を吹き飛ばすような、最後まで奴ららしい別れだった。

地面に残されていたのは、黒蠍盗掘団の個別のカードと七精門の鍵。そしてザルグが身に着けていた眼帯だけだった。俺は静かにそれらを拾い上げる。

「ただの盗賊かと思っていたが、カードの精霊だったのか」

『気づいていなかったのか？　……ああ。そうだ』

そつと歩み寄ってくる万丈目。俺は七精門の鍵を万丈目に投げ渡す。

『今回の戦い。審判役として確かに見届けさせてもらった。おめでとう。見事な戦いだつたな』

「当然だ。俺は負けん！ 相手がカードの精霊だろうが何だろうがな」

自身たつぷりに言う万丈目に、流星は俺の推しだと感心すると共にふとある考えが浮かんだ。それは、

『それと、これも渡しておく』

「これは……さっきの奴らのカードか。何故俺に？」

『いや何。良い勝負を見せてもらった礼だ。精霊使いならば色々聞き取りも出来るのではと思つてな』

そう。俺が考えたのは黒蠍団のカードを万丈目に預けることだった。このまま野ざらしにするには忍びないし、かと言って俺が回収してもデッキには入れられず、精霊として扱おうにも遊兎が持つていたら不自然だ。

鍵の守り手としては上手く行けば情報が得られるため回収はするだろうし、あれだけ私の強い奴らなのでカードさえあればまたその内戻つてくることも可能だろう。

あとは十代に渡すか万丈目に渡すかだが……普通に考えれば万丈目だろう。こつちの方がしつかりしているし、十代とアイツらを組ませたら何をしでかすか分からない。

混ぜるな危険という奴だ。

まあ本当の目的は、いざという時のための協力者を作りたいということもあるが。やり方はどうあれアイツら潜入能力自体は高いからな。この場合持ち主は万丈目と言うことになるが、伝手は多いに越したことは無い。

万丈目は少し考えて、

「……良いだろう。何を考えているか知らんが、カードは俺が預かっておく」

『よろしい。では諸君。今宵はここまでだ。また次の戦いの時まで……さらばっ!』

「あっ! 逃げたノ〜ネっ! 待っノ〜ネ!」

その通り。用は済んだので後はトンズラ! チック直伝の逃げ足を發揮し、マントを翻して猛烈な勢いで走り出す。……あのままだとまた質問攻めにされかねないからな。

慌てて追いかけてこようとする面々だが、

「うわっ!?!」

「うな〜っ!?!」

うっかりすつ転んでしまった大徳寺先生が偶然クロノス先生のコートの裾を掴み、そのままを巻き込んで転倒する。大徳寺先生も味な真似をする。これなら追いかけるどころの話じゃないな。

俺はその隙に素早くその場を後にした。

『はあっ！ はあっ！』

近くの森の中に駆け込み、どうにか誰も追いかけてこないことを確認してやつと一息つく。

グルルルウ？

『……はあっ。ごめんな大鳥。騒がせて。少し休んだらすぐ森から出るから、もう少し待っていてくれ』

何事かとやってきた大鳥を宥めながら、近くの木に寄りかかって呼吸を整える。……毎回こう逃げるのは疲れるから、次からは何か煙幕的な何かを用意するべきかもな。そんな風に考えながら、

『……はあ。……それで？ 今度は何の用だ？ さっきから俺を覗いていることは分かっているんだが。カミューラ』

「フフツ。バレていたの」

キイキイというコウモリの鳴き声と共に、前と同じく黒い霧が目の前に巻き起こり、その中からカミューラが姿を現す。この移動法は羨ましいよな。割と格好良いし。

「別に大したことじゃないわ。ただアナタが有力な情報を洩らさないかとひやひやして

ただけ。アナタの大事な大事なお友達なんですよ？ あの人達」

『心配するな。俺の立ち位置はあくまでバランスサー。審判役だ。基本的にはセブンスターズの側に立つし、上手く互いの戦いの場を調整するのが仕事だ。必要以上に学園側に味方するつもりはない。……だがな』

俺はそこで軽くカミューラを睨みつける。それに合わせてか偶然か、大鳥も瞳を真っ赤に染めて臨戦態勢をとる。

『もしも反則行為。例えば直接あいつらに危害を加えるようなことがあれば……俺がお前をぶっ潰す。覚えておけ』

「あら。怖い怖い」

カミューラは軽く口元を隠しながら妖艶に微笑む。まったくもう。タニヤやザルীগ達と違って、こいつはどう見ても搦め手で来るタイプだ。コウモリで事前に相手の手を探ったりとか。

今まで順番を後回しにしているのも、多分何か策を練る時間が必要だからといった所か。

『それと一つ尋ねる。今日俺とザルীগがクロノス先生の所に忍び込んだ時、外からちよつかいを出して先生を起こしたのはお前の所のコウモリだろ？』

「あーら。何の事かしら？」

『とぼけるな。もし野生のコウモリが出るんなら、それをあの黒蠍団が下見の時に気が付かなかつた筈がないだろうが』

あれでも奴らの腕は本物だった。これまで一度も出なかつた場所で急にコウモリが出るとしたら、目の前のコウモリを僕とする吸血鬼の差し金くらいしか考えられない。

「……ああ！　もしかしてあれかしら？　偶々偶然あの辺りで私の僕達をお散歩させていたことかしら？　もしそうだとしたらごめんさいねえ」

『白々しい。……だが何故だ？　あの時点でザルグの事がバレても、戦うのが早まるだけでそこまで全体に影響はなかつたはず。俺は一応ザルグの要望を聞く立場にあつたから手を貸したが、お前が動く理由が分からん』

「……あくまで偶然私の可愛い僕が起こしたことだから意図はないのだけど……そうね。例えば」

その瞬間、カミューラは隠していた口元……大きく裂け、牙が剥き出しになったものを露わにし、こちらに壮絶な笑みを浮かべてくる。

「邪魔者のアナタの正体を曝け出し、セブンスターズからも学園からも追い出したいから……なんてね。おほほほほ！」

カミューラは高笑いを上げながら来た時と同じように黒い霧となつて姿を消す。そして、

「言い忘れていたけど、次も私は辞退させてもらうわ。どうせ次のメンバーはすぐに交代することになるでしょうからね」

その言葉を残し、今度こそカミューラは気配を消した。それが分かったのか大鳥も臨戦態勢を解く。

すぐに交代する？ どういうことだ？ ……まあ良い。実際に会ってみれば分かるか。俺は大鳥の背をそつと撫で、

『……はあ。本当にもう。セブンスターズも一枚岩じゃないから困る。あくまで内部分裂による崩壊ではなく、堂々と戦って学園側に勝ってもらうのが理想なんだよな』

どうして世の中もつとこうシンプルに出来ていないのか。こうして俺はぼやきながら、ここまで来たついでにそのまま大鳥に乗せてもらい、寮の近くまで送ってもらって帰宅したのだった。

翌日。

『やっぱり俺達は、こつちの方が気が楽だ！』

『これも人生よね！ お頭！』

『お仲間だったのね！』

万丈目の様子を見に行くと、普通に昨日ぶりに精霊化して宴会してやがったよこいつらっ!? 早くとももう数日は掛かると思っていたのにつ!?

「万丈目……こいつらは」

「ああ。色々あつてここで預かることになったバカ共だ。……おい。潜入中に知っているかもしれないが、俺と同じように精霊が見えるここの生徒の久城遊児だ。自己紹介をしておけ」

『分かつているとも。俺達こそ』

一応持ち主扱いしているのか、万丈目の言葉に従い黒蠍メンバーが勢揃いする。この流れは……まさか!?

『黒蠍一の力持ち。剛力のゴング』

『黒蠍団の紅一点。茨のミーネ』

『どんな罨でも朝飯前。罨外しのクリフ』

『お宝頂きやあとはトンズラ。逃げ足のチック』

『そしてこの私。首領・ザルグ』

『『『我らっ! 黒蠍盗掘団っ!』』』』

『これからよろしく頼むぜ。久城遊児』

「……ああ。よろしく。黒蠍盗掘団」

恒例の決めポーズをとりつつ、万丈目に見えないようウインクするザルーグに対し、俺もまたこっそりとウインクで返すのだった。

バランサーと負けさせてもらえなかった王

ザルグの件から数日後。

何事も無いのんびりとした休日は、アムナエルこと大徳寺先生からの連絡で不意に終わりを迎えた。

「新しいセブンスターズ……ですか」

『そうなのによ。今回は中々癖が強い人だから気を付けてほしいのによ』

セブンスターズは全員癖が強いと思っただが、まあそこは置いておく。連絡があつた以上バランサーとしては会ってみなくてはならない。連絡があつた以

「早速向かいます。集合場所はいつもの洞窟で？」

『ああいや。今回はちよつと違うのによ』

大徳寺先生によると、向こうが指定してきた場所がいつもの洞窟ではなく、少し離れた所にある海岸らしい。何故かと尋ねた所、どうやら船で来るから広い場所が良いだとか。まさかこの前の貿易商がリターンマッチに来るつてことは無いだろうな？

まあ幾つかの予想を立てて、俺は早速バランサーとして指定された海岸に向かった。

当然だがこつそり会う必要があるのもう真夜中だ。そこに待っていたのは、

『……つて飛行船かよっ?!』

巨大な黄金の船。それもプロペラや気球などで飛んでいるのではなく、黄金の女神を模した帆船のようなものがある。そのまま浮かんでいるのだからよく分からない。動力は何だアレは？ 魔法的な何かか？

いきなり常識をぶっ壊してきたそれに唾然としていると、急にその船から光が伸びてスポットライトのように俺を照らす。眩しさに咄嗟に腕を翳すと、突然の浮遊感が俺を襲った。……つて俺も浮いてるっ!?

そのまま船に引き寄せられ、甲板に投げ出されるも何とかギリギリ着地。ずつこけるなんて無様を晒さず一安心するも、周囲を見てまた唾然とする。

俺を取り囲むのはミイラの軍勢だった。

乾ききつてもう動くはずのない肉体。それらが古いエジプト風の服装を身に纏い、あ
る者は槍を、ある者は松明を、それぞれ構えて直立不動の姿勢で立っていた。

そしてその最奥の玉座に座っていたのは、

『……………王様?』

特に誰にも言われたわけではないのだが、自然とそう理解できた。目の前の男は王である。

古代エジプト風の装束に黄金のマスク。額にはウジヤド眼を模した黄金のサークルレット。チラリと見える素肌は褐色に染まり、他のミイラたちとは一線を画す瑞々しい肉体を誇っていた。

「いかにも。余の名はアビドス3世。セブンスターズの一人だ。そなたがバランサーとやらか？」

何っ!? アビドス3世っ!?

その名前はこちらの世界の教科書に載っていたほどの偉人の一人。古代エジプトにおいて生涯無敗の伝説を誇り、神のデュエリストと称えられた伝説の王ファラオだとか。

古代エジプトといったら原作無印とも大いに絡んでくる地だ。その王の一人と言ったらどうしたつも一人の遊戯を思い出す。あの関係者だったりするのだろうか? おくつ! 原作を読んだ身としてはワクワクが止まらない。

「……どうした? そなたがバランサーとやらなのか?」

『……………はっ!?! いや失礼。その通り。俺がバランサーです。偉大なる王アビドス3世に会えて嬉しく思います』

いかん。一瞬また意識がトリップしていた。軽く顔を振って意識を集中し、片膝を突

いて一礼する。そこまで作法に詳しい訳ではないが、相手が王というなら礼はちゃんとしないで。勿論原作にあったように左足をやや前に出すことも忘れない。

幸いなことにアビドス3世はある程度作法に寛容だった。だが早速鍵の守り手の所に出向いて鍵を奪いに行こうとするのだからさあ大変。

今は真夜中でもう皆寝ているだとか、民草を安定させてこそその王自身がそれを破つては如何なものかとか色々言い包めてどうにか延期してもらおう。

途中周りのミイラやら神官っぽい方々が口々に王に逆らうのかと言っていたが、その辺りはこちらにも調整役として譲れないと何とか説得（後ろに幻想体達が精霊化して睨みを利かせながら）することで事なきを得た。

相手が正しく王なら勝つのは厳しいが、それ以外の下っ端に負けてはいられない。こちらら最悪の場合神のカードと対を成す三幻魔と戦う可能性があるんだぞ。それに比べりや大分マシだいつ！

さて、何とか鍵の守り手とのデュエルは延期してもらったわけなのだが、一原作ファンとしても場合によっては戦うことになる相手としても、個人的には一度戦ってみたい相手ではある。なので、

「デュエル？ そなたとか？」

『はい。是非一度王のデュエルを味わう榮譽を頂きたく』

「……よかろう。余も久方ぶりのデュエル故、腕が鈍ってしまいか確かめる必要もあるう」

ということとんとん拍子で事が運び、俺とアビドス3世のデュエルが船の上で急遽行われることとなった。勿論闇のデュエルではなくあくまで普通のデュエルだ。

相手は生涯無敗の王。相手にとつて不足なし。以前神楽坂が使った遊戯デツキも手強かったが、今回もギリギリの戦いになりそうだ。だが負けても魂を取られるわけではない。ならば楽しまなくちゃ損だろう！

『「デュエルっ!!」』

バランサー LP4000

アビドス3世 LP4000

「ぐわあああつ?!」

アビドス3世 LP0

バランサーWIN!

『……………えっ?!』

つい仮面の下で呆けてしまうほど、デュエルはあつかりと決着がついた。

「むう……………そなた。何者だ? 余をここまで完膚なきまでに打ち負かすとは」

『……………いや王様。これって俺が強いというより……………王様がちよつと弱いのでは?』

「……………そうなのか?」

いや俺も自分が凄腕とは思っていないが、それを差し引いても王様のプレイングはよろしくなかった。

3ターン経過で特定のモンスターをデッキか手札から呼び出す『第一の棺』をドヤ顔で出してきたことはまあ良い。扱いが難しいカードだが、上手く決まればモンスターを一度に最大五体まで展開できるからな。

だけどその後の流れが実にお粗末だった。出したモンスターが棺の効果に対応したカードだったのは良いとしても、基本攻撃力が低い上に伏せカードが何もないんじや破壊してくださいと言っているようなものだ。

早速罪善さんとテレジアのコンボで棺を破壊したらやけに驚くし、無理やり攻めてきたので大鳥を出して攻撃対象を変更したら普通に返り討ちに出来たし。

実質こっちはコストを除いてノーダメージ。手札事故でもあったかと思えるぐらい

の酷い内容だった。これでは不完全燃焼も良い所である。

『……王様。失礼ながら、本当に生涯無敗のデュエリストだったのですか？』

「無論だ。しかしそなたのあの鋭い一撃は見事なものだったぞ。余の棺を壊そうとしてきたのはそなたが初めてだったからな」

何？ 俺が初めて？ デュエルにおいて相手のキーカードを発動前に潰すのは定石。それなのに一度もないなんてあるわけが……いや待てよ？

俺がそこでふと思いついて周囲の神官達を見回すと、気のせいか僅かに顔を逸らす。……なるほど。そういう事か。アビドス3世もその視線を追って神官たちの挙動を確認すると、ほんの少しだけ肩を落とす。

「……そうか。いつもどこか手応えがないと思っていたが……誰も余と本気でデュエルしてはいなかったのだな」

おそらく、これまでの王のデュエルには多少の忖度なりが働いていたのだろう。王に気持ちよくデュエルしてもらおう。……つまりは接待デュエルだ。だから王の戦術を潰すなんてもつてのほかか。これまで一度たりとも棺の効果を邪魔されるなんてことは無かったのだろう。

『カミューラめ。この前言っていたのはこのことか』

どうせ次のメンバーはすぐに交代することになる。その言葉はつまり、接待デュエル

に慣れ切った今のアビドス3世の実力ではすぐに鍵の守り手に負けるといふ意味。

正直これは消化試合だ。学園側にしてみれば楽に一勝がもぎ取れる。スパイとしてはこれほど楽な仕事はない。というか明日にでも適当な相手とデュエルすればおそらくそれで事足りるだろう。……だが、

仮にも王がこれじゃあいけないよなあ。

『……王様。少し宜しいでしょうか?』

「なんだ。余は今少し打ちひしがれている所だ」

すつかり気落ちしてしまったのか、アビドス3世は玉座に力なくもたれかかっている。無理もない。しかしだ。少なくともこんな姿は王様には似合わない。なので、

『しゃんとしてください』

「ぶほおっ!？」

とりあえず落ち込んでいる王様にビンタをかます。その弾みで被っていた黄金のマスクが外れ、王様の素顔が明らかになる。……そこにあつたのはまだどこか幼さを残す青年の顔。

「なっ!? 無礼者めっ!」

「王に平手打ちとは何たる無礼なっ！」

呆然として何も言わない王様の代わりにぎわめく神官達。中にはこちらに武器を向けてくる者も居る。だがな、

『黙れこの馬鹿野郎共っ!! 元はと言えばお前達の怠慢のせいだろうがっ!』

少々腹に据えかねたので周囲に怒鳴りつける。

『王に気持ちよく戦ってもらいたいというのは分かる。だからと言って、手加減が過ぎればそれはもう接待ですらないっ! ただの怠慢だっ! 生涯無敗のデュエリスト? 違うな。ただ単に負けさせてもらえなかっただけだろうがっ!』

……何故だろう? 反論の一つでもあるかと思つたのだが、神官達は押し黙ってしまつた。正論で切り返してくると思つたのに。……まさか後ろの幻想体達にビビつた? そんなことは無いだろう?

『あく。管理人よ。どちらかと言えば私達ではなく君を恐れているのでは?』

『えっ!! ホントか?』

こつそり耳打ちしてくる葬儀さんだが、いくら何でもそれはないって! ……そうだよね? そうだと言ってくれっ!

まあそれは置いといてだ。うん。俺は一度咳払いをしてアピドス3世の前で静かに首を垂れる。

『王様。王様に手を上げる不敬。誠に申し訳ありません。ですが、もし宜しければ、俺に王様のデュエル指南役の任をお任せいただきたく存じます』

「……そなたは、余と本気でデュエルしてくれると言うのか？」

『はっ！ バランサー調整役として……いや。原作一ファンとして。鍵の守り手とも渡り合えるようになるまで鍛え上げてみせます。何度もコテンパンに打ち負かす気で厳しく行きますが、お任せいただけますか？』

アビドス3世は僅かに逡巡した後、一度大きく頷いた。契約成立だな。

本来なら多分今のままで鍵の守り手達と戦うことになっていたんだろうが……悪いな皆。ちよこつとだけ難易度を上げさせてもらおう。

仮にも古代エジプトアテムに連なる者の王が、弱いままじゃられないのだから。

協力者は多い方が良い

「ぬあああつ!？」

アビドス3世 L P O

バランサーWIN!

『これで俺の十連勝。一度休憩しますか王様?』

「……………はあ……………はあ……………いや。もう一度だ指南役よ。やつと手応えを感じてきた所だ」
『よろしい。……………ではもう一度行きますよっ!』

アビドス3世との衝撃の邂逅から一夜明けて、俺は早速アビドス3世とのトレーニングに勤しんでいた。と言っても別段特別なことをするわけでもない。基本的には全力でデュエルをするだけだ。

個人的な所感を言えば、アビドス3世の印象は磨かれなかった原石といった所か。相手との戦略の読み合いや、自分の手が妨害された時の対応が圧倒的に経験不足だった。それをしてくれる相手に恵まれなかったからだ。

だが俺とデュエルしている内、少しずつそれが分かってきたのか対応できるようになってきた。一緒にカードを伏せて破壊を防いだり、わざとブラフのカードを伏せて除

去カードを使わせたりとか。と言っても毎回ではないが、最初に比べれば雲泥の差だ。

それに本人がとてもデュエルに対して意欲的だったのも大きい。ここまで連敗すれば意欲が落ちるのが普通だが、今のアビドス3世は純粋にデュエルそのものを楽しんでいた。勝つても負けても全力で向き合う事。それこそが望みだったのだから。

やればやるほど動きが洗練されていくのは間違いない。才能がある。こつちも手応えのある相手は歓迎だから喜ばしいことだ。とはいえ、

「…………ふう。さて。そろそろ俺も行かなくては」

「なに？ ……はあ。指南役よ。もう終わりか？」

バランスーとしての服を脱いで制服に着替えていると、アビドス3世が息を切らしながらもまだまだやれると言わんばかりに構えている。

「やる気があるのは実に結構。ただ俺はこの学園の生徒ですから。それにバランスーとして戦いの日取りなんかの調整もしなくてはならないのです」

「そうか……折角全力で戦ってくれる相手が見つかったというのに」

少ししよんぼりしているアビドス3世。そうは言っても俺も授業をさぼって訓練に付き合う訳にもいかない。かと言って俺が居ない間ただ休んでいるというのも何かもつたいない気がする。

あの神官達じゃまたなんだかんだ手加減してしまいかねないし、丁度良いトレーニン

グの相手が居れば良いんだが……待てよ？

「……王様。つかぬ事をお伺いしますが、庶民の生活に興味はございますか？」

「庶民の生活？」

首を傾げるアビドス3世に対し、俺は仮面越しではない素顔でにつこりと悪い笑みを浮かべてみせた。

その日の昼。

俺はちよつとした用件があつてある人物の部屋に向かつていた。それは、

コンコンコン。

「……はい」

「こんにちは。俺だ。久城だ。少し話があるので中に入って良いか？」

「ああ。どうぞ。鍵は開いてる」

「お邪魔します！ 元氣か三沢？」

俺は中に入ってこの部屋の主、三沢に軽く頭を下げた。三沢はデスクに座つてパソコンと睨めっこしていたが、軽く手を上げて返してくれる。

以前十代達と一緒にビックバンをした部屋だが、また数式がそこかしこに書かれてい

る。前に来た時より増えていることから悪癖は健在らしい。

「相変わらず研究熱心だな。進捗はどうだ？」

「ああ。もう少しという所なんだがな。やはり混成デツキというのは構築が難しい」

三沢は軽く背伸びしながら椅子にもたれかかる。パソコンの画面に映るのは、以前タニヤと決着をつけた時に使った水と炎の混成デツキ……とは別のデツキレシピ。

単一属性、或いは種族に特化したデツキは特定の条件において無類の力を発揮する。実際三沢も様々な状況に対応できるように六属性それぞれのデツキを試作用に組んだ。

しかし三沢はタニヤにその六属性で一度完膚なきまでに敗れた後、水デツキに炎の要素を混ぜてデツキを組んだことを皮切りに、違う属性同士の新たなデツキ開発に着手していたのだ。

今のままで満足することなく、かつてタニヤと別れ際に交わした「これからも強くあれ！」という言葉を守るために。

「前の光と闇属性の混成デツキはどうだ？ デミスを主軸とした儀式主体でカオス・ソーサラーを混ぜる奴。光属性はマンジユゴッドなんかで補えば行けるのでは？」

「あれはとにかくライフコストがかかるのがなあ。序盤で押し切れるならともかく中盤以降、終盤になると効果の発動自体が難しい。そこがネックだ」

「非常食とゴブリンのやりくり上手を入れるのはどうだ？ これならフリーチェーンで

デミスの全体破壊効果の中でも使えるし、上手く行けばLP回復と手札補充が見込める」

「なるほど……一理あるな」

そんな感じでデッキ構築論をしばし戦わせた後、

「……それで？ 結局俺に何の用だ？ デッキ構築に手を貸してくれたのは嬉しいがな」

「ああ。実は……今回久城遊児としてではなく、バランサーとして頼みがある。聞いてくれるか？」

その言葉に、三沢は何も言わず手で座るよう促した。

俺がバランサーであると三沢が気づいたのは少し前。バランサーとして黒蠍盗掘団と作戦を練る傍ら、俺は久城遊児として三沢と何度か会っていた。タニヤとの別れで少し落ち込んでいた三沢の事が気になっていたからだ。

「……お前、バランサーだな？」

その際半ば確信をもって三沢にそう尋ねられた時、何故そう思ったかと聞くと、動きの癖で何となく察したと返された。

これには少し理由がある。俺はタニヤと三沢が一緒に過ごしている間、ランサーとして時折二人の様子を見に行っていた。つまりランサーとしての姿を他の奴よりも多く三沢には見せていた訳だ。おまけに対タニヤ戦に向けてデツキ構築を手伝ったこともあった。

という訳で十代よりも万丈目よりも先に、三沢にはバレていたわけだ。俺は観念して三沢に事情を打ち明けた。その結果、

「今もなお鍵の守り手なら鍵を守るべく警戒もするが、俺はもう負けた身だ。それにお前の事情も分かった。大徳寺先生や鮫島校長が噛んでいるというのなら、俺から特に皆にばらそうとは思わないよ。それにランサーには世話になったしな」

そう言つて三沢は俺の事を秘密にしてくれると約束してくれた。正直助かる。それからは時折会いに来てはデツキ構築に協力しているわけだが、今回はあくまでランサーとして手を借りる必要が出てきた。それは、

「スパーリング相手？ この俺がか？」

「頼むよ。無論俺も時間がある時はデュエルするが、どうしてもずつと一緒つて訳にはいかない。その間一人にしたら時間をもつたないし、何よりなんかの弾みで飛行船で学園に乗り込んででも来たたら大事だ。オシリスレッドとライイエローでの合同授業以外の空いた時間でも付き合ってくれれば良い」

ちなみに三沢を選んだ理由は俺の正体を知っているというのもあるが、それ以外にデツキの多様性ということもある。スパーリングはなるべく多くの相手、多くのデツキと戦った方が経験になるからな。

その点三沢は幾つものデツキを使いこなすことが出来るから最適だ。

「セブンスターズの一人に協力か。……タニヤのようにただ全力でデュエルに向き合おうとしている奴ならまあ良いだろう。だが協力するにしても、平然と学内に関係者以外の者が居るのはマズいぞ。その点はどうする？」

三沢の意見はもつともだ。だが、

「それに関しては心配するな。手は打つてある。多分学内でも堂々と動けるはずだ。説明すると……」

俺の計画を伝えると三沢は「お前落ち着いているように見えて、実はある意味十代よりめちやくちやだな」と苦笑いしながら言った。……まあ今回は少し強引な手だが、いつもはもつとおとなしめなんだよホント。相手が王だクワンだからちよつとこだわっているだけで。

そうして三沢にも何とか協力を取り付けることに成功する。「スパーリングなら神楽坂も呼んでみよう。アイツも新しくデツキを組むのに悩んでいたからな。良い刺激になるかもしれない」とも言っていたが、神楽坂また前みたいに俺のものマネとかしない

よな？

しかし協力者がいるというのは実に良い。一人で出来ないことは二人で。二人で出来ないことは三人。それでもダメなら沢山でつてな！

そして、その日の夕方。

「え〜。注目ですよ〜！ 皆さん。この度この寮に、短期留学生を一人迎えることになったのにや〜！」

オシリスレッド寮の食堂にて、大徳寺先生が食事中の生徒達に呼び掛ける。

「おっ!? 何だ何だ?」

「この前のレイちゃんみたいな人っすかね?」

十代と翔が疑問に思う中、隼人ももしやもしやとご飯を口に含みながら頷く。

「じゃあ紹介するのにな。エジプトからの留学生……アビドス君だにや!」

「アビドスだ。七日間という短い時間ではあるが、皆の者。よろしく頼むぞ!」

紹介に応じて現れたのは、オシリスレッドの制服を着たどこか幼さの残る褐色の青年……つまりは王様であった。

「こんな時期に留学生……ね。久城。お前は知っていたか?」

「少しは。話をしていっているのを聞いた程度だけだな」

実際は少しどころか思いっきり知っているのだが、どうして知っているんだという話になるので誤魔化す。……だから万丈目。名探偵万丈目サンダーの雰囲気醸し出してこちらを見るのは止めてくれっ!?

「ちなみにアビドス君の部屋は久城君と相部屋だからよろしくにや!」

げっ! 聞いてないんですけどっ!?! あの幻想体達が毎日大騒ぎしている部屋に王族を泊めるのかっ!?! ……あのミイラたちに知られたら本気で攻め込んできそうなので内緒にしておこう。

アビドス3世とデュエル馬鹿

俺が提案したのは、王様を留学生扱いで一時的に学園に編入させることだった。

極論すれば、王様は要するに全力でデュエルする相手が欲しい。なら学園というのはうってつけだ。それが普通の場所だからな。

ただ自分でもセブンスターズを学園に入れるというのは暴挙だとも思うので、本人や関係者などに確認を取って了承されなければ素直に諦めるつもりだった。だが、

「この学び舎の生徒として……か。良かろう。異国の暮らしというのにも多少興味があ
るしな」

と王様自身がまず了承。

「ふ〜む。素晴らしい向上意欲です。……良いでしょう。短期留学という名目であれば許可しましょう。例えばセブンスターズの一人であれ、学びたいという若人にその場を提
供することが学園の本分なのですから。……いや、若人というのは王に失礼でしたかな
? ハッハッハ!」

とやや理想主義の強い鮫島校長も了承し、大徳寺先生も渋々しながらOKを出してく
れた。俺が基本的にアビドス3世の傍について問題を起こさないようにするという条

件付きだが。

そして肝心の影丸理事長の方だが、何とこちらもこの件を了承した。仮とはいえ戸籍の作成やら学生としての準備諸々、そういったものも全部理事長持ちだ。こつちが驚くような好待遇だが、どうやら理事長もそれだけアビドス3世の伸びしろに期待しているらしい。

確かにこれまでのセブンスターズの戦績から見ると、タニヤ以外全敗という体たらく。この辺りでメンバーの強化をしておきたいと思っても不思議ではない。というかこれ以上負けが込んだら直接本人が出張ってくる可能性もある。出来ればそれはギリギリまで避けたい。

という訳で、

「さあどうぞどうぞ。王様の住んでいた所とは比べようもない狭い部屋ですが、これもまた庶民の生活の醍醐味ということで」

「うむ。……これはっ!？」

夕食の後早速アビドス3世を部屋に案内したのだが、当の本人は部屋の内装よりも、カカカタっ!

『お客様なのっ! 初めまして。黒っぽいお兄ちゃんっ!』

『そうそう。目上の相手にちゃんとお辞儀出来て偉いぞ我が運び手よ。……あとは一礼

する時に私の足を床に擦らなければもつと偉いぞ」

『あつ!? ごめんなさい』

「精霊が……こんなに!? しかもどれも実体化出来るだけの格のある精霊ばかり」

部屋でくつろいでいた幻想体達に普通に驚いていた。初見で精霊だと分かるのは、流石魔物や精霊が身近だった古代エジプト出身者だ。

「何体かはデュエルで実際に使ったから知っているかもしれませんが、見ての通り俺の使うデツキに宿る精霊達です。皆。こちらは今日からここでしばらく寝泊まりするセブンスターズの一人。アビドス3世様だ。王様なので出来る限り礼儀正しく接するように」

姿だけなら知っていても、直接会うのは初めてだ。幻想体達もこれからしばらく付き合っていくわけだし、互いに自己紹介をしてもらうことに。その結果、

「これだけの精霊を従えるとは、流石は余の指南役だ！」

何故かアビドス3世からの好感度が上がった気がする。幸い幻想体達ともそれなりにすぐ打ち解けたようでホツとした。まあ森に居る問題児達三や、未だ反応がないセイさんなんかとはまだ会っていないので何とも言えないけどな。

さて。明日からも忙しいぞ。三沢の協力も取り付けたことだし、今日は早めに寝て明日に備えなければなっ！

と、思っていたのに。

「おう！ 転入生！ 俺とデュエルしようぜ！」

夜だつてのに普通に十代デュエル馬鹿が乗り込んできやがったつ!? 間の悪い奴め。

「おい十代っ!? こちらの王様……アビドスさんは編入初日で疲れているんだ。明日にしろ明日に」

「そうだよアニキ。いくらなんでも迷惑だよ」

「アビドス君にも悪いだろうし、早く帰るんだな」

「そんなあ。良いじゃん！ 一回だけ。なっ！ エジプトのデュエリストと一度思いっきりデュエルをやってみたいんだよ」

まだ一緒に来ていた翔と隼人は幸い常識的だ。十代を宥めながら引つ張つていこうとするのだが、十代は往生際悪く両手を合わせて拝むように頼み込んでくる。

普段なら構わないが今回は時と場合が悪い。俺も今回はさっさと十代を追い払うべく扉を閉めようとしたのだが、

「そなたも、余と本気でデュエルしてくれるというのか？」

……マズイ。王様の方がノリノリになった。

「当然じゃん！ デュエルつてのは本気でやるから楽しいんだ！」

「……良かろう。そなた。十代とか申したな。デュエルだ」

「王様」

一応俺は止めるべく声をかける。バランサーとしても指南役としても段取りというものがあるからな。だが、

「案ずるな指南役よ。余とてセブンスターズの一人。鍵の守り手以外の民草にそうそう負けはしない。十代とやら。ここでは些か狭い。外で行うとしよう」

「よっしゃー！ そうじゃなきやー！」

前半を俺の耳元でこそつと喋り、そのまま王様は十代と共に外の広場に飛び出して行ってしまった。翔と隼人も慌てて後を追う。いや、だからその十代が鍵の守り手なんだってっ！ ……いや待てよ？ これはこれでありか？

留学生としてここに居る限り、セブンスターズとしての闇のデュエルにはならないと事前に理事長に確認している。だからここで勝とうが負けようが鍵の行方に影響はない。

実力的に最初に十代と当たるのはかなりきつい、十代なら間違いなく全力で戦って

くれるという意味ではうってつけの相手だ。王様にも良い刺激になるだろう。

まずはこの学園での最初の一戦。お手並み拝見といこうか。

「デュエル!!」

互いに掛け声とともにデュエルディスクを展開する。ちなみに王様のディスクはセブンスターズとして使う黄金の物ではなく、あくまで生徒に支給される一般の物だ。

デュエルの内容だが、王様は初手から『第一の棺』を展開。堅実に守備モンスターで固めていくも、十代の速攻で着実にLPが削られていく。

おまけに魔法『R—ライトジャステイス』の効果により、棺を破壊されそうになる始末。だがそこはちゃんと練習した甲斐があったというべきか、防衛策として伏せていた『マジック・ジャマー』で棺を守る。

そして、

「場の第一、第二、第三の棺全てを墓地に送ることで、『スピリッツ・オブ・ファラオ』を攻撃表示で特殊召喚する!」

何とか棺を守り切り、場に現れたのはファラオの魂ことスピリッツ・オブ・ファラオ。王様のデッキのエースモンスターだ。

「えっ!?! 攻撃力2500? 何だよ。手間暇かけた割には普通じゃないか」

「そなた。フアラオの魂を愚弄する気か。このスピリッツ・オブ・フアラオが特殊召喚に成功した時、レベル2以下のアンデット族通常モンスターを4体まで、墓地から特殊召喚できるんだぞっ！」

その通り。王様がわざと低レベルの通常モンスターばかり場に出していたのはこれが狙い。場に残るならそれで良し。仮に破壊されても、この効果で一気に再び場に展開できるのを見越しての事。

王様の場にそれまで墓地に送られたモンスターが4体まとめて展開される。

さらに王様は魔法カード『サウザンドエナジー』を発動。ターン終了時に破壊される代わりに、全てのレベル2通常モンスターの攻撃力を1000引き上げるカードで一気に勝利を目指す。

これによる総攻撃で十代のLPを大きく削ることに成功したものの、そこは流石に主人公。

「王様は3枚揃えたよな。じゃあ俺はその上を行って4枚だ」

墓地にある特定のカード4枚を除外することで発動するカード『ヒーローフラッシュ!!』により、十代はデッキからE・HEROを1体特殊召喚し、そのターン全てのHEROは直接攻撃の権利を得る。

これで十代の場にはフェザーマン、スパークマン、クレイマン、バーストレディの4

体そろい踏みに。

「ふっ。雑魚が何体掛かって来ても同じだ」

「ばくか。デュエルつてのは最後の最後まで分かんないもんなんだぜ！」

「バカだと？ 無礼者っ！ 余を誰だと」

「王様だろうが何だろうが、バカなものはバカなの！」

「バカっていう方がバカなんだぞ！」

「おうっ！ 俺はバカだ」

オイ王様。威厳はどこへ消えた？ これではまるで子供の喧嘩だとギャラリーも皆して呆れている。ただ、二人は今思いつきりデュエルを楽しんでいた。

「ガツチャ！ 本気で楽しかったぜ王様！ 行けえヒーロー達！ プレイヤーに直接攻撃！」

「ぬわああああっ!?!」

アビドス3世 LPO

十代WIN!

という訳で、予想通りと言うか十代の勝利となった。

「どうだ王様？ 楽しかったか？」

「ああ。ついうっかり成仏してしまいそうなほどにな」

「えっ？ そこまでか！ やっぱデュエルって最高だよな！」

十代は比喻だと思っているようだが、俺は見逃さない。地味に王様の足の先が一瞬消えかけてた。これ普通に闇のデュエルだったら今ので成仏してた可能性があるぞ。

「王様。ご歓談中申し訳ないが、そろそろ明日の準備があります。部屋にお戻りください」

「ああ。そうだったな。では十代よ。明日からもよろしく頼むぞ！ また戦おうではないか！」

これ以上は流石にマズいので呼び掛けると、王様も素直に十代に別れを言つて俺と共に部屋に戻っていく。ただ、

「なあ！ とところで何で王様って呼ばれてんだ？ 遊児がそう呼んでたから俺もそう呼んだだけだよ！」

「そういえばそうだよね？」

「……？ 余が王であるのは当然だが？」

「お前ら。……この方正真正銘のエジプトの王族だぞ」

その時の十代達の顔は、何とも言い表せないものだった。

「なあ王様。デュエルしようぜ！」

「良かろう。今回は負けぬぞ！」

まあそれでも普通に翌日デュエルに誘う十代は、間違いなくデュエル馬鹿だったけどな。

王様の学園の日々

さて。アビドス3世ならぬアビドス君として学園に編入した王様ではあるが、中々に学園生活を楽しんでいたと傍で見守っていた俺には思えた。

例えば人間関係。

「よっ！ おはよう王様！」

「おはようアビドス君」

「うむ。おはよう。十代に翔。異国の民ではあるが、毎朝の一礼を欠かさぬのは感心だ。褒めて遣わずぞ」

留学生でやや上から目線という難しい人物だが、そこはコミュ力が高い十代を始めとする面子は普通に打ち解けた。

王様の場合最低限の敬意さえ持っていれば普通に話せたし、十代達も王族だからとあって必要以上にへりくだったりもしなかったしな。

次にオシリスレッドの食事だが、

「ほう。この味噌汁という物。中々に深い味だ」

「ふん。その点はまあ同感だな。ここの食事は質素だが、これは我が万丈目グループでも取り入れて良い出来だ。……あつ!? おのれ十代っ!? 俺のエビフライを返せっ!」

他の寮に比べて貧相だとか色々言われる食事だが、逆に王様として贅を極めていた王様からすれば寧ろ珍味の域だったらしい。味噌汁を美味そうに飲むエジプトの王というのも中々シユールだ。それに品目こそ少ないものの味自体は悪くないしな。

授業に関しては、元々名目だけ留学生という建前があればよかつたので出なくても良かつたのだが、是非この時代のデュエルの内容を学びたいと王様自身が申し出たので俺と一緒に参加。

「ふむ。佐藤殿よ。そなたのデュエル理論とやは興味深い。また次も耳を傾けたく思う」

「少々目上の人間に対する言葉遣いとしてはおかしいですが……その真面目に学ぼうとする姿勢は立派です。次回も歓迎しますよ」

やや古臭くてつまらないと時々言われる佐藤先生の授業だが、王様からすれば未来のデュエル理論に変わりはない。王様はやや一般常識に欠けるところがあるものの、勉強意欲は高く分らない所も積極的に質問した。

それは堅物の佐藤先生も珍しく褒めていたくらいだ。近くで居眠りしている十代も見習ってほしい。毎度起こすこつちの身にもなつてくれ。

授業が終われば次は実践あるのみ。

「あゝっ!? 負けたくっ!」

「はっはっは。見たか! これこそ余の実力である!」

「よっしや! 次は俺とやろうぜ王様! 翔。仇はとってやる」

「いや。次は俺なんだな!」

「えっ!? 待つてよ二人共。もう一回やらせて。次は負けないから」

「良かろう。誰でもどこからでもかかってくるが良い!」

俺の他に毎日デュエルをやりたがる十代や、十代に付き合ってやってくる翔に隼人。協力を要請しておいた三沢。そして三沢の伝手で呼んできた神楽坂や時折様子を見に来る明日香、万丈目などデュエルの相手には困らない。

王様は何度も戦い、時には勝ち時には負け、そしてその度にとっても楽しそうな顔をすののだ。生きている間に得られなかったものをここで得ているかというように。

ある日、

「ここからテディ。俺の肩に掴まるのは良いがもうちょっと優しく掴まってくれ。レティシアはほら。向こうでオールドレディが読み聞かせを始めたから聴いてくると良

い。……罪善さん。葬儀さんと一緒に精霊の付き添いを頼む。また万丈目の所の精霊が紛れ込んでる」

「ははっ！ 流石の指南役もこうなつては形無しだな。そこまで精霊と身近に接し続ける者は、余の時代でもそう居ないぞ」

「それ褒めてるのか貶してるのか分からないぞ王様」

「無論褒めているのだよ。本当だぞ」

俺が幻想体達と戯れている時、王様はヘルパーの淹れたコーヒを片手にデッキと睨めっこをしながらそう笑った。何日も一緒に過ごしていれば、多少は気心も知れてくる。

ちなみに今日まで話し合いの中で、学生として振る舞う間は過度な敬語を付けなくて良いという本人のお達しで砕けた口調に直している。

「ふくむ。召喚を妨害されないためにカウンタ―罫を増やすか？ それよりも基点となる棺を増やす……いや待て。それだとデッキを圧迫して全体的に苦しいか？ そもそもそもスピリッツ・オブ・ファラオで復活させるカードを先にどう墓地に送るかも考えねば」
「悩んでいるみたいだな。しかし相変わらずスピリッツ・オブ・ファラオは抜かないんだな」

「これは歴代の王の魂故な。余が王として戦い続ける限りこれを外すつもりはない」

俺の言葉に王様は軽い口調で、しかしどこか真面目にそう返した。

スピリッツ・オブ・フアラオはお世辞にも使いやすいカードではない。

基点となる第一の棺が発動してから特殊召喚まで時間がかかるのに加え、その間1枚でも棺を破壊されたら召喚失敗。第二、第三の棺が手札にきたら実質死に札だし、肝心のフアラオも攻撃力自体は2500と微妙なラインだ。

持ち味であるモンスター大量展開は強力だが、その為には先に墓地にモンスターが居る必要がある。おまけに出せるのはレベル2以下のアンデット通常モンスターに限定されており、フアラオの攻撃力が微妙なものも相まって相手の強力モンスター1体に封殺されることもしばしばだ。

後のシンクロやエクシーズ、リンク召喚に繋がられるなら十分使えるが、この時代ではまだ出ていない。以上の事から玄人向けの扱いづらいカードなのだが、王様は自分のこのこだわりを持って外そうとはしなかった。

その後もぶつぶつ言いながら悩むアビドス3世。だが、

「なんだか楽しそうだな王様」

「ああ。こんなにも悩ましいのに心が躍ってしょうがないのだ。純粹に互いの全力をぶつけ合う。そのために悩み、自身のデッキを組み上げるのがこれほどに楽しいとはな」

「……ああ。そうだな」

いずれセブンスターズとして戦わなければならぬ身ではあるが、少なくともこの経験は確実に王様の……そして十代達の身になっていると信じる。

実際翔や隼人も、強すぎず弱すぎない王様との毎日のデュエルでやる気が出ているよ
うで、十代が言うには向こうもデツキ調整に余念がないとか。ついでに成績も上がって
くれれば尚良い。

「しかし、いずれ余が戦う鍵の守り手というのは一体どのような者共なのだろうな？

このオシリスレッドにも十代や万丈目といった強者が居るのだ。それに翔や隼人など
も中々の使い手。それを超える猛者達となると想像しづらい」

「おっと。王様。今はまだ見ぬ強敵を想うより、着実に自分の実力を身に付ける方が先
だと思うが？」

「むっ！ そうであつたな。許せ指南役よ」

敢えて王様には鍵の守り手のこと……つまり十代や万丈目がメンバーである事は話
していない。下手に話して意識させるより、自然体で過ごしてほしかったからだ。

「しかしどうしたものか。デツキの構想は練れてきたのだ。だがまだ決め手に欠ける。
必要なのはスピリッツ・オブ・ファラオをより活かすカードか……あるいは」

「……そうだ！ 王様。明日は神楽坂にデツキ構築を手伝ってもらうのはどうだ？ 三

沢が言うには神楽坂もデツキ構築に悩んでいるみたいだし、話し合ったら良い案が浮か

ぶんじやないか？」

「ふむ……確かに折角このような機会を得たのだ。それに今の余は学生でもある。誰かの知恵を借りるのも一興か。分かった。明日こちらから出向けば良いのだな？」

神楽坂の部屋は行ったことがないが、三沢に聞けば分かるだろう。

王様が留学生としてここに居られる時間は限られている。それが済んだらセブンスターズとして十代達の前に立ちはだかなければならない。

そうでなくてもアビドス3世はいわば死者。いつかは原作のアテムの様に冥界へ戻らなければならないのだ。それまでに出来るだけの事をしないと。

ということと翌日。三沢に頼んで神楽坂の部屋に連れてきてもらった俺達なのだが、「久城か。丁度良い。お前のデツキを貸してくれ」

何故か神楽坂が俺のデツキを狙って来た。まだ懲りてなかったのかっ!?

王様とお別れ会

「いたたた。いきなり殴ることは無いだろうに」

「……悪かった。だがあんな勢いで迫ってきたら、つい手が出てしまっても仕方ないと思うぞ」

目の前で頭を押さえて蹲る神楽坂に、少しだけ理不尽だと思いつつも謝る俺。

話を聞いてみると、神楽坂も最近デツキ構築に悩んでおり、丁度良く目の前にサンプル^{俺のデツキ}が飛び込んだので少し勢いがついただけだという。……ちよつとしたタツクル並の勢いだったけど。

「まあ詫びと頼みごとの分を兼ねて俺のデツキを貸しても良い」

「それは助かる！ ……頼み事？」

「ああ。お前と一緒にデツキ構築に悩んでいるこのアビドス君の力になってほしい。頼めるか？」

そこで俺は敢えて部屋の外で待機してもらった三沢と王様の方を手で指す。

「指南役よ……本当にこの者で大丈夫なのか？ 余は些か不安だ」

「そう言うなよ王様。確かに神楽坂はこう思い込んだら一直線でやり方もめっちゃく

ちや。おまけに前科持ちだが物真似とデツキ構築にかけては一流だ」

「……お前わざと言ってるだろ。喧嘩なら買うぞ！」

おっと。さっきの仕返しとは言えからかいすぎたか。まあまあと宥める三沢達と一緒にひとまず部屋にあげてもらおう。

「それで？ そのアビドスのデツキ構築を手伝えれば良いんだったか？ ……まずは少しデツキを見せてもらえるか？」

「良いぞ。……ほら」

自分のデツキを見せるというのはデュエリストにとって色んな意味があるのだが、アビドス3世もまずは見せなければ話にならないと分かっているため素直に渡す。

神楽坂はデツキを受け取るとテーブルにザッと広げ、そのまましばらく見てすぐにとめ直した。

「大体分かった」

「もうかつ!? 適当なことを言っているのではあるまいな？」

「スピリッツ・オブ・ファラオを主軸としたエジプトデツキだろ？ どのカードがエースかさえ分かれば、後はサポートカードを見れば大体の動かし方は予測できる。それに以

前三沢と一緒に前前のデュエルを見たこともある。あの時の事も踏まえればなお分かりやすい」

アビドス3世が唾然としている中、神楽坂はまるでななことないように語る。だからと言ってこの短時間デツキを見ただけで内容を完全把握するというのは結構凄い。

「相変わらずの知識量と観察眼だな」

「ふん。知識だけで言ったら三沢とどっこいだよ。悔しいことに一から新しい何かを生み出す才能は大分劣ってる。だからデツキ構築も行き詰ってるのさ。……よし。デツキコンセプトは分かったから、よりエースを活かすにはどんな戦術が良いか考えてみるぞ。頼まれた分は手は抜かない主義なんだ」

神楽坂は自嘲するようにそう俺に返しながら、アビドス3世とデツキの構成について話し始める。アビドス3世も真剣な表情だ。

「ありがとうな久城」

「何がだ？」

「神楽坂の事さ。ずっと自分のデツキに悩んでこの所塞ぎ込んでいたが、どうやら良い刺激になってきているみたいだ。俺が相手だとライバル意識が出ていつも気を張っているからな」

三沢が言うように、神楽坂はアビドス3世と議論を白熱させながらもどこか楽しそう

だった。

神楽坂の相手のデッキや仕草、動きなどを真似ること。その根底にあるのは、誰かと接することが好きということかもしれない。それなら一人で考え込むよりも、誰かと一緒に考える方が合っている。

「……となると妨害ばかりで攻め手が薄くなるのではないか？ 余としては攻めも重視したいのだが」

「そうか。では俺の調整用カードで幾つか使えそうな奴を見繕おう。……代金は心配するな。久城の奴にたっぷり請求してやる」

「げっ!? 何か勝手に俺の懐具合に関わる問題が発生しつつあるっ!? ちょっと待てよお前らっ!」

こうして調整用のカードを譲ってもらい（俺のDPで支払った）、デュエルの中でそれを踏まえたデッキの動きをどんどん身体に馴染ませていくアビドス3世。そして遂に、「行くぞ! 余は魔法カード『太陽の書』を発動! 『たった一つの罪と何百もの善』を攻撃表示に変更し、スピリッツ・オブ・フアラオで攻撃だ!」

「しまっ……うわあああっ!」

「やったぞ! 遂に指南役（のデッキ）に勝ったぞ!」

約束通り俺のデッキを貸した神楽坂と何度もぶつかり合った末、遂に一勝をもぎ取る

ことに成功する。神楽坂は「むうっ！　まだなり切りが不完全だったか。だがなんて無茶苦茶なデツキだ。よく久城はこのデツキを回せるな」とか文句を言っていた。

ほつとけ！　このカテゴリしか使えないから入念に組み上げただけだ！

しかしデュエル中、カードの何枚かが神楽坂がドロウする際に光つたような気がした。光の加減か？　まさかまた幻想体のどれかが精霊化しかけたんじゃないだろうか？

こうして充実した日々を過ごし、デュエルの腕もメキメキ上達していったアビドス3世ではあるが、物事にはなんだつて終わりがあるものだ。

そう。今日で遂に留学最終日。周囲には明日の早朝ここを経つと知らせているので、実質今日の夜までが生徒として振る舞える最後の時間となる。

アビドス3世はしっかりと最後の授業に出席し、大徳寺先生を通じて他の先生方にもきちんと別れを告げた。

鮫島校長からも「アビドス3世。いや、アビドス君。君はセブンスターズであると同時に、間違いなくデュエルアカデミアの生徒です。この一週間が、貴方を含めた多くの人にとって有意義なものであったと私は確信しています。戦いがどんな結末を迎えた

としてもその点は変わりません。どうかお元気で」と校長なりの言葉を贈られた。

そして最後の夜を俺の部屋で過ごす……筈だったのだが。

「遂に今日でお別れか。七日なんてあつという間だったな」

「寂しくなるね」

「そうだな。……つて何なのだこの状況はっ!？」

アビドス3世は驚いていた。何故なら十代達に夕食に呼ばれ、これが最後のこの寮の食事になるとしんみりした気持ちで食堂に向かったのだが、そこにあつたのは「さよならアビドス君」とでっかく書かれた垂れ幕と、テーブルに並べられた普段よりやや豪華な夕食の数々。そして待ち受けるレッド寮生だった。

「何つて見りや分かるだろ? 王様送別パーティーだよ。寮の皆で少しづつDPを出し合つて準備したんだ」

「これを……余の為にか?」

「うん。だつてアビドス君。たつた一週間ですぐ皆と打ち解けちやつたじゃない。だから皆で盛大にお別れしようつてアニキが」

「どうやら十代の企画だったらしい。十代を見ると、エへへと恥ずかしそうに鼻を掻いている。」

「この一週間毎日思いつきりデュエルしてよ。すつげく楽しかったぜ王様! ……明日

の朝早く出るんだろ？　なら今日はめいっぱい楽しんで明日を迎えようぜ！」

「……指南役よ。そなたもこのことを知っていたな？」

「まあな。と言つてもあくまで言い出したのは十代やレッド寮の皆だ。これは全て王様のこの一週間の行動の結果だよ」

俺は肩をすくめて言う。アビドス3世はどこまでもデュエルを楽しみ、その上でデュエルを通して寮の生徒達ときちんと向き合っていた。ある意味で十代と同じデュエル馬鹿ではあるが、だからこそ受け入れられたとも言える。

アビドス3世はしばらく黙りこくった後、

「……………ふっ。はっはっはっはっはー」

大きく高らかに笑った。そしてしばらく笑い倒した後、

「余は王として数々の歓待を受けてきた。どれも王の舌を唸らす美味や贅の限りを尽くしたものばかり。それに比べればこの宴は実に貧相だ。……だが、実に余の心を震わせる良き宴である」

そう言つて満面の笑みを浮かべたのだ。

その夜は大いに盛り上がった。

しんみりなんて言葉は似合わない。そう言わんばかりに皆ご馳走に舌鼓を打ち、腹ごなしにデュエルをした。監督役として一応大徳寺先生も付き添ってはいたが、この半ば無礼講みたいなどんちゃん騒ぎは止められるものではなかったな。

そして一人、また一人とアビドスに別れを告げて部屋に戻っていき、

「もう一回。もう一回だけ！」

「おい十代。そう言ってもう何回目だ！ アビドスも明日は早いし、お前だつて授業があるだろうが。さっさと帰るぞ。……じゃあなアビドス。精々元気でな」

「そうなんだな十代。もうそろそろ帰るんだな。さよならなんだなアビドス」

「もう明日の朝は居ないんだよね。……うん。さよならアビドス君」

「分かったよ。……じゃあな王様！ またデュエルやろうぜ！」

「ああ。そなた達も達者でな」

予想通りと言うか何と言うか、最後までスタミナが切れずにデュエルを続けた十代を万丈目達は何とか引き剥がし、これで宴はお開きとなった。

「ふふっ。何と言うか。最後まで元気な生徒達ですにや。……この一週間。学園の生徒として過ごしてみてもうどうだったかにや？ アビドス君」

「ああ。とても良き体験をした。良き出会いも。それもこれも、提案してくれた指南役や了承してくれた大徳寺殿達。それにここに集った生徒達のおかげだ。感謝する」

アビドス3世は静かに感謝の意を込めて大徳寺先生と俺に頭を下げた。普段なら王としてやらないことだが、今は一生徒だ。問題ないと判断したのだろう。

ああ。アビドス3世をこの学園に編入させたのは間違いないじゃなかったみたいだ。

出会った頃に比べてデュエルの腕は格段に上がり、日々の登下校で身体を鍛え、デュエルを通じて他者と触れ合うことで精神的にも成長した。アテム級までとは言わないが、デュエリストとして少しは立派になったと思う。

……ちよつと難易度上げ過ぎかとも思うが、その分十代達も成長している筈なのでまあ大丈夫だろう。

「さて。いよいよ明日から生徒ではなく、セブンスターズの一人として戦うことになる。鍵の守り手達から鍵を奪う為の戦いだ。細かな調整は俺や大徳寺先生がやるが、大まかな方針は王様に一任される。いつ頃仕掛けていく？」

「……明後日だ」

部屋に戻り、生徒としてここを離れる準備をしながらセブンスターズとしての方針を聞くと、アビドス3世は少し考えてそう答えた。

「おや？ 王様の事だから、明日の夜にでも仕掛けるのかと思っていたが」

「なに。今日の明日で仕掛けられては宴・疲・れの者も出よう。戦うなら体調は万全でないとな」

「……気づいていたのか」

今の言葉。つまり宴に参加した者達の中に鍵の守り手が居ると確信しての事。俺のその言葉に、

「当然であろう。余は王であるぞ」

王様はそう自信満々に答えた。

閑話 十代と（生涯）無敗



「最近セブンスターズの奴ら来ねえなあ」

授業中、俺は退屈のあまりついそんな言葉を漏らしてしまふ。

実際この前の黒蠍盗掘団の件からもう半月近く経つというのに、セブンスターズのセの字もない。まあこれまでの奴らで戦う前に連絡してきたのはタニヤだけだったから、知らない間に動いているのかもしれないけどな。

「平和で良いじゃないっすか」

「そうだぞ。こういう平和な一時をもつと味わうべきだ。いつ何時事件が起きても良いようにな」

両隣から翔と遊児が口々に言う。今日は隼人が風邪をひいて居ないからなんか寂しいな。それに、

「王様……今頃どうしてっかなあ」

「……そうっすね。パーティーの翌日いつの間にか行っちゃいましたもんね」

アビドス。一週間だけだったけど、毎日のようにデュエルしてなんだかんだ通じ合え

たんじやないかと思うエジプトからの留学生。

あの盛大なお別れパーティーの翌日、本当にスツとあいつは居なくなっていた。皆が寝てる早朝に発つたらしく、同室だった遊兎だけは一応見送りをしたんだとか。

遊兎は何も言わず何とも言えない表情をしている。王様と同室だったし色々あったんだろうな。

王族らしいから向こうで何か美味しい物でも食っているのだろうか？ それともやっぱりデュエルか？ なんにせよ元氣だと良いな。

「は〜い注目ですよ！ 武藤遊戯、海馬瀬人など、時代に選ばれた伝説のデュエリストとされる方々は皆さんご存じですよ？ でも伝説を残したとされるデュエリストは、古代エジプトにも居たんですよ！」

おっと。いけねいけね。授業をちゃんと聞かねえとまた遊兎に叱られるな。にしても、

「古代エジプト。そんなに昔からあるんだ。デュエルって」

「まだカードが無かった古代エジプトでは、石板使つてデュエルしてたんすよ」

「一説によると、石板から精霊や魔物を実際に呼び出して戦わせたらしいぞ。今でいう立休映像ソリットレジョンみたい。……精霊が今より余程身近だったんだろうな」

ふ〜んそうなのか。ふと振り向いたら後ろの席の万丈目も微妙に聞き耳立ててるな。

あつちも精霊が大所帯だから気になるんだろうな。

そんな中も大徳寺先生の講義は続いていき、

「これが、生涯無敗の伝説を残し、デュエルの神と言われた少年王アビドス3世なんだにや」

黒板に何とも言えない人型の絵を自慢げに書き終える大徳寺先生。新種のモンスターのかと思つたけどどうやら似顔絵らしい。だがそれより気になるのは、

「生涯無敗つてことは、一度も負けたことがない？ すっげ〜な！ 俺その神様とデュエルしてみたかったぜ！」

「ふん。どうせ神のワンターンでLPが0になるに決まってるがな」

そんな強い奴となら一度デュエルしてみたいもんだが、後ろから万丈目が茶々を入れ
る。言つたな！

「平気平気。お前の仇は俺がちゃくんと取つてやるからさ！」

「貴様の事だ貴様のっ！」

「あつ!?! ちよつとお前ら」

「二人共。授業中だつて」

「いっけね！ 翔と遊児が止める声が聞こえるが、いつい悪ノリし過ぎたみたいだ。大徳寺先生に見つかつて居残り掃除を言い渡される。ついでに翔と遊児も一緒だ。悪

い二人共。

夜。居残り掃除を終えて皆で帰る中、遊児の姿はここにはない。遊児は掃除の前に少し大徳寺先生と話したかと思うと、

『すまないけど俺は先に戻らせてもらう。居残り掃除自体はまた後日やるから安心しろ。……一人は早めに戻って風邪でダウンした隼人に知らせないといけないしな』

と言つて先に戻つていったからだ。確かに隼人からすれば、同室の俺達に戻らないと心配するかもしれないしな。納得できる理由だし、大徳寺先生も許可を出したみたいだった。

「もう。何で僕まで。良い迷惑だよ！ あくあ。僕も久城君と一緒に帰れば良かったなあ」

翔は元気にブツクサ言つてる。まあとぼちりだったしな。そんな翔を宥めつつ万丈目とじやれ合いながら帰る途中、

「きゃああああつ?!」

暗闇を引き裂くような鋭い悲鳴が響き渡つた。今の声は？

「何だ？ 向こうの灯台の方から聞こえたぞ!」

どう考えてもただ事じゃない。俺達は早速灯台へひた走る。そして遠目に見えてきた時、

「あれは……カイザー!?!」

「お兄さん!?!」

「天上院君も!?!」

灯台の下の栈橋。そこでカイザーと明日香が変な奴らに囲まれていた。何だアイツら……ミイラ!?!

「むっ!?! 翔!?! 来るなっ!」

こっちに気づいたカイザーが止めるのと同時に、俺達の周囲の地面が盛り上がりつつここからミイラ達が現れる。アイツらだけじゃなかったのか!?!

「鍵を……よこせ」

「こいつら、セブンスターズか」

よたよたと迫ってくるミイラ達のその言葉に、セブンスターズ関連の相手だと当たりを付ける。ならデュエルで相手になりたい所だが、これだけ居たんじやどれを倒せば良いのやら。

そこへ、

「あっ!?!」

周りが一瞬昼間の様に明るくなった。何事かと空を見たら、空から黄金の光と共に変な形の飛行船が現れる。すっげ〜！ 何だアレ！

そうこうしている内に周囲が一層眩い光に包まれ、俺はいつの間にか気が遠くなつていった。

「……………はっ!？」

ハツとして慌てて起き上がる。今まで気を失っていたみたいだ。ここは……………さつき
の飛行船の上か？

「気が付いたか？」

「皆っ! ……あれ? 先生達に三沢も」

声をかけられて振り返ると、そこには一緒に居た翔や万丈目を始め、カイザー・明日香・大徳寺先生と愛猫のファラオ・クロノス先生、それともう鍵がない筈の三沢もこの場に居た。

「これから夕飯だつて時に、無理やりミイラに連れてこられたんだにや」

「にや〜お」

「ワタ〜シも授業プリントの作成中にミイラに囲まれたノ〜ネ」

「俺はクロノス先生の手伝いをして一緒に。どうやら巻き込まれたみたいだな」

「どうやら皆してミイラに襲われたらしい。あとクロノス先生を襲った奴ナイス！」

「これでプリントが減るぜ！ ……だけど、

「鍵を持った者が揃ったか」

カイザーの言う通り、もう持っていない三沢を含めて鍵の守り手勢揃いだ。つて事は。

ゴオ〜ン！

突如響き渡る銅鑼の音。そこで周りを見渡すと、船の奥に大量のミイラやエジプト風の服装の神官。そして、その中央の玉座に誰かが座っているのが見えた。アイツが親玉だな！

「お前は何者だ！」

「余の名は……………少し待て？ そなたが鍵の守り手か？」

「おう！ 俺は十代。遊城十代だ！」

黄金の仮面とウジヤド眼を模したサークレットを被っていて素顔が見えないが、何故か男は俺を見て驚いている様子だった。そして、

「おい。 balanサーよ。間違はなく十代が鍵の守り手か？ どことなく民の上に立つ風

格があった故万丈目辺りは選出されていると思っていたが、十代のデュエルの腕は余も

認めるが奴はとんでもないバカだぞ」

『フアラオ王よ。間違はなく十代も万丈目も鍵の守り手の一人。この学園でも指折りの強者の一人でございます。多少バカなのは否定しませんが』

男の呼びかけと共にバランスサーがフツと神官達の中から進み出て説明する。……いきなりこいつらにバカ扱いされた。それと後ろで笑うな万丈目。

「そうか。……待たせたな。余の名はアビドス3世。セブンスターズの一人だ」

男は玉座に悠然と座つたままアビドス3世と名乗った。アビドス3世？ その名前は確か！

「アビドス3世？ あの生涯一度も負けなかったという伝説の？」

「負けなかった……か。いや、今は関係のないことよ。そなた達の鍵を貰い受ける！」

何故かアビドス3世は一瞬どこか寂し気な声を出し、すぐに気を取り直して鍵を奪うことを宣言する。

「神と言われたデュエリストと戦えと言うの？」

「こちらの鍵を一気に手に入れようという訳か」

「敵さんも焦つてきたという訳だ」

万丈目の言う通り、多分セブンスターズも焦つてきたのだろう。何せダークネス、タニヤ、黒蠍盗掘団と向こうは三人もやられているのに、こっちの負けは三沢だけ。それ

もリベンジマッチでしつかり勝った以上実質向こうの全敗だ。

「ここらで強い選手を出して一気に流れをひっくり返そうというのは分かる。明日香の言うように神と言われたデュエリストならピツタリだ。」

「余としてはつまらぬが、鍵を置いて逃げるのなら今の内だ。……どうする?」

「は〜いはいはい! 俺がやる! 俺お前と一度デュエルしたいと思つてたんだ!」

逃げるなんてとんでもない! 俺は真つ先に手を上げながら中央のリングっぽい場所上がる。

「無礼な。王に向かつて」

「構うな。……そなたなら一番に向かつてくると思つていたぞ十代」

『でしようね。十代ならこの場面で燃えない筈がない。そうだろう十代?』

何故か色めき立つ神官達を手で制しながら、どこか確信しているように俺の事を話すアビドス3世とバランサー。知らない内に俺も有名になったみたいだ。

「十代。これは闇のデュエルだぞ」

「それに相手は神よ」

「無茶だよアニキっ!」

外野が口々に止めるように言うが、悪いな皆。

「分かつてるって。でもこのワクワクする気持ちは止められないんだ! やろうぜ神様

！」

「…………ふっ。良かろう。お前となら間違いなく全力で心躍るデュエルが出来そうだ。来るが良い！」

表情は相変わらず分からないが、アビドス3世はどこか楽しそうにそう言って黄金のデュエルディスクを構える。へへっ！ そう来なくっちゃ！ 俺もデュエルディスクを構え、

「行くぜ神様！ デュエ」

「ちよつと待つノッネっ！」

勢いよくデッキからカードをドローしようとした時、突然待ったの聲がかかって一瞬つんのめる。この特徴的な声はクロノス先生か。

「な、なんだよクロノス先生。これからって時に」

「下がるノッネドロップアウトボーイ。相手は神と称されたデュエリスト。つまりはほぼ間違いなく相手の主力。エースですッ。オシリスレッドの生徒などワンターンでお終い。教師としてそんな戦いは認められませんッ」

「えッ。じゃあどうすんだよ！」

皆して神様相手に委縮しているみたいで、どこか空気が張り詰めている。そんな中、クロノス先生はノンノンノンと軽く指を前で振って見せる。

「主力には主力を。エースにはエースをぶつけるのが定石。この場合は実技最高責任者であるこのワタシか、或いは同じく教師である大徳寺……ありや？ 大徳寺先生はどこ行つたノコネ？」

「クロノス先生！ 大徳寺先生ならミイラの軍勢に驚いて頭をぶつけて伸びてます」

ホントだ！ 翔の言葉の通り大徳寺先生がぶつ倒れている。三沢が傍で確認してバツテンを出している所を見ると、どうやら完全に伸びていて戦えそうにない。

「……まあ良いでしょう。最初からあんまり当てにはしていないノコネ。……コホン。つまりこちらの主力であるワタシか」

そこでクロノス先生は一拍溜めて、

「我が校随一の呼び声の高いデュエリスト。帝王カイザーの異名を持つ生徒。シニョール亮をぶつけるのが妥当なノコネ」

アビドス3世対カイザー 生涯無敗と学園最強 その一



「何やら揉めている様だな」

『そのようですね。王を前にして誰が戦うか中々決まらぬ模様。それだけ後の世にも王の名は鳴り響いているという話でしょうな』

鍵の守り手達を待つ間、俺は王様の傍らに控える。一応皆の前なので口調も改まったものだ。最初に使った時は王様に笑われたけど。

しかし今回のデュエルの調整に関しては手間取ったな。

毎度毎度宣戦布告していたら咄嗟の襲撃への対処が遅れるかもと、今回敢えて連絡なし（鮫島校長と大徳寺先生には伝えてある）で鍵の守り手達を招集した訳だが、それだけの場所が散らばっていたものだから探すのが面倒だった。

寮に居たクロノス先生や、居残りが終わるタイミングの分かる十代達はともかく、何でカイザーと明日香は灯台に居たのやら。十代達の帰宅コースに近かったから良かったが、あそこは密会場所にもなっているのだろうか？

「王の名か……微妙に間違っただけで伝わっているのと、そもそも後世に名が伝わらない事。

果たしてどちらが良いのだろうか？」

『……王様？』

「……つと。つい感傷に浸ってしまった。さて。どうやら決まったようだな」

その言葉に鍵の守り手達の方を見ると、一人の男が前に進み出てくる。それは、

「そなた。名は？」

「デュエルアカデミア。オベリスクブルー所属。三年。丸藤亮。カイザーと呼ぶ者も居る」

そう。カイザーである。

マンガ版において、あの万丈目相手にノーダメージで勝利するという圧倒的实力を見せつけたデュエルアカデミアの帝王。

鍵の守り手達の中で、いや、アカデミア全生徒の中で最強候補の一人。その男がアビドス3世の前に立つ。挑戦者として。

「あく悔しいっ！俺も神様とデュエルしてみたかったぜ！」

十代がとんでもなく残念そうな顔でこつちを見ている。そりやあデュエル馬鹿からすればこんな機会は二度とないだろうしな。実際はもう何度もデュエルしているが。

クロノス先生はどこかホツとした顔。だがそれと同じかそれ以上にカイザーを心配するような顔だ。自分が神と戦うのは気後れするが、それ以上に生徒が傷つくかもしれない

ない事にも心を痛めているって所か。

「神と呼ばれる伝説の王アビドス3世よ。俺がどこまでやれるかは分からないが、挑ませていただく」

「……うむ。良かろう。そなたが余の相手だ」

顔を見なくても分かる。格式ばった態度ではあるが、王様は今とんでもなくワクワクしてる。

カイザーの名は学園でも響き渡っていた。自身を何度も打ち負かした十代ですらまだ勝ったことのないという強者。

実際俺も何とか王様とデュエルしてもらおうと申請してみたのだが、肩書としてはオシリスレッド扱いの留学生だったため順番待ちが大分先となつて間に合わなかった。

それが自分に挑戦してくれるというのだ。これは絶対燃える。

だが、それはそれとしてこちらも仕事をしないとな。

『では最終確認だ。鍵の守り手からはカイザーこと丸藤亮。セブンスターズからはアビドス3世。戦う二人は前に』

船の甲板の中央。少し広がった場所に両者進み出る。俺はレフェリー代わりとして二人の間に。

……よし。ここでミイラか十代が乱入してくるなんてことがあったら力づくで抑え

込まないといけなかったからな。おとなしくしてくれているようでホツとする。

『結構。では互いに全力を尽くしてほしい。デュエル開始のタイミングは二人に委ねよう』

特にルールの変更もないし、理事長としてはデュエルさえ滞りなく進めば文句はないだろうから俺からこれ以上言うこともない。なので最低限の説明だけしてさっさと離れながら、

『本来なら審判役としてあまり片方の方に肩入れしてはいけないんだが、王様……ご武運を』

俺はアビドス3世の背中に向けてちよつとしたエールを送る。それに対して、

「無論だ。余は生涯無敗の王なるぞ」

ほんの少しの洒落っ気を込めて、王様はそう返した。

生涯無敗の王と学園最強の帝王。その二人が向かい合うのを少し離れた場所（神官やミイラ達の側。一応表向きはセブンスターズ側だし）で見ていると、

『さくさくしてきて。面白くなってきたよ！ やはりシミュレーションの華はありえざる一戦がある事に尽きるね。ジュース飲むかい久城君？』

何か久々に出てきた気がするなデイー。アビドス3世の前でも姿を現そうとしなかったから、実質七日ぐらい姿を見なかったことになる。その為か若干いつもよりハイテンションだ。

『やめとく。というかそれまたウエルチアースのアレじゃないか』

『まだまだたつぷり在庫は有るからね』

ふわりふわりと宙に浮く光球と缶ジュースという妙な光景だが、今周囲の目は二人に向いているから大丈夫だろうという判断だろう。しかし、

『今の言葉からすると、本来アビドス3世の対戦相手はカイザーじゃなかったみたいだな』

『その通り。本来ならここで十代とぶつかる筈だった。その結果どうなるかは……君なら察しがつくんじゃないかい?』

多分この前最初に十代と戦った時と似たような流れになったのだろう。それはそれで良いものだとは思うが、だけど今はこの通りだ。俺がアビドス3世と出会ったことか、或いは別の要因で戦う相手がカイザーに変わったらしい。

『……でも、面白い組み合わせではあるけど結果は大体予想できるね。流石にアビドス3世がカイザーに勝つのは難しいんじゃないかな』

『おっと。それはどうかかな?』

確かに最初の頃のアビドス3世では厳しいだろう。だがデイーはどうやら知らないらしいな。無理もない。しばらく姿を見せなかったものな。なので優しく、そして少しだけからかうように教えてやる。

『デイーが知っているのはアニメ版のアビドス3世だろ？ 今のアイツは、七日間みっちり自分の心と身体とデッキそのものを鍛え上げたアイツは一味違うぜ！』
 さあ王様。デュエルを思いつきり楽しんでくれ！

「デュエルっ!!」

アビドス3世 LP4000

カイザー LP4000

「先攻は余がもらう。ドロ―!」

「いよいよか。一体神様つてのはどんなデュエルを見せてくれるんだ?」

十代が言うように、アビドス3世の一挙手一投足に注目が高まる。

「余はカードを一枚伏せ、手札から魔法カード『手札抹殺』を発動。互いに手札を全て捨て、捨てた分だけドロ―する。余は4枚捨てて4枚ドロ―」

初手手札抹殺とは中々やるな。これなら捨てたくないカードを先に伏せられたアビドス3世の方が手札調整はしやすい。

カイザーは当然初手5枚をそのまま捨てて5枚ドロロー。互いに墓地が肥えた訳だがこれがどう戦局に影響するか。

「ふむ。余はモンスタ―を1体裏守備で場に出し、さらにカードを1枚伏せてターンエンドだ」

アビドス3世は静かな立ち上がり。だがまだそれ以外カード情報は無く、動きが分からないから知らない相手から見たら不気味だろう。

「俺のターン。ドロロー。手札の『サイバー・ドラゴン』の効果！ 相手フィールドにのみモンスタ―が存在する場合、手札から特殊召喚できる。さらに俺は手札から『融合呪印生物―光』を召喚！」

サイバー・ドラゴン ATK2100

融合呪印生物―光 ATK1000

「流石お兄さん！ 十代のアニキも苦戦したサイバー・ドラゴンだ！ それと……あれ何？ 機械族でもないしサイバーって名前もついていないけど」

翔が兄の活躍に嬉しそうだが、融合呪印生物を見て首を傾げている。勉強が足りないぞ。あれこそサイバー・ドラゴンと相性バツチリのカードの一つ。……しかしこれは厄

介だぞ王様！

「融合呪印生物―光の効果！ このカードは融合素材モンスター1体の代わりにすることができる。そしてこのカードを含む融合素材モンスターを生け贄に捧げることで、そのモンスターを素材とする光属性の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚できる。来いつ！ 『サイバー・ツイン・ドラゴン』！」

サイバー・ツイン・ドラゴン 光属性 ATK2800

機械の竜と光り輝く岩石を生け贄に融合デッキから呼び出されたのは、二頭を持った機械竜。2800と中々の攻撃力を持つている上に、2回攻撃が可能というシンプルに強いカードだ。

「攻撃力2800か」

「続けて行くぞ。俺は手札から魔法カード『死者蘇生』を発動！ 墓地のサイバー・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚！」

死者蘇生の効果で、先ほど墓地に行つた機械竜がカイザーの場に再び現れる。……つてこれはまさか。

「攻撃力2800で2回攻撃できるサイバー・ツイン・ドラゴンと、攻撃力2100のサイバー・ドラゴン。攻撃1回でアビドス3世のモンスターを破壊して、残りの攻撃が全て直接決まったら!!」

「……ワンターンキルか」

翔の気づきに万丈目が静かに補足を入れる。カイザーもなんとも大胆なことを考えるな。

「神相手に出し惜しみも加減も出来るほど余裕はないからな。手が揃わぬ内に速攻で決めさせてもらおうっ！ バトルフェイズ。サイバー・ドラゴンで、裏守備モンスターに攻撃っ！」

機械竜の口から放たれた光線が、アピドス3世のモンスターに襲い掛かった。

アビドス3世対カイザー 生涯無敗と学園最強 その二

サイバー・ドラゴンの攻撃がアビドス3世のセットモンスターに突き刺さる。だが、「余のモンスターは『ピラミッド・タートル』。その効果はそなたも知っておろうな？」

「戦闘破壊された時、デツキから守備力2000以下のアンデット族を特殊召喚できるカードか」

「その通り。ピラミッド・タートルの効果により、余はデツキから守備力1400のピラミッド・タートルを守備表示で特殊召喚する」

伏せられていたピラミッドを甲羅とする亀が破壊されたことにより、アビドス3世の場に再び同じモンスターが現れる。同じモンスターを呼べるのがリクルーターの強みだよな。

「さあどうする？ そなたの場にはまだ2回攻撃出来るサイバー・ツイン・ドラゴンが残っておるが？」

「……バトルだ。サイバー・ツインでピラミッド・タートルを攻撃」

それは先ほどと同じ展開。倒してもまた同じモンスターが現れる。だが、

「2度目の攻撃はしない。俺はこれでバトルフェイズを終了する」

「ほお。そう来たか」

「あれっ!? なんでお兄さんはもう一回攻撃しなかったんだろう?」

敢えて追撃を緩めたカイザーの行動に翔が疑問を漏らす。まあこれに関してはちよつと悩ましい所だけどな。

「カイザーは、ピラミッド・タートルで最後に出るモンスターを警戒したんだ」

「三沢君」

おっ!? 久々に見たな三沢の解説。

「今の場合、カイザーはあと一度しか攻撃できない。それでピラミッド・タートルを攻撃しても、アビドス3世は好きなモンスターを場に呼び出して自分のターンを迎えることが出来る。だから敢えて攻撃を止めたんだ」

そう。守備力2000以下のアンデット族なんて幅広い対象を持ってこれるからな。返しのターンに何を持ってこられるか分からない以上、除去カードが無ければここで止めた方が良い。慌てずとも優勢なのは変わりないしな。だが、

「俺はカードを2枚伏せてターンエンド」

「その瞬間異変動! 『第一の棺』!」

「なっ!?!」

アビドス3世の場に、古代エジプト風の棺が出現する。これぞアビドス3世のキー

カード。

「続けて第一の棺の効果。相手ターンのエンドフェイズ毎に第二、第三の棺を手札、デッキから順に出す。効果により『第二の棺』をデッキから場に」

場にもう一つの棺が出現する。上手い。第一の棺を相手のエンドフェイズに使う事で、すぐさま第二の棺までもっていった。

「さて。ターンエンドをそなたが宣言した以上、何もなければ余のターンとなるが」

「流石は神と呼ばれたデュエリスト。カード1枚でこの布陣を捌いてみせるか」

何か仕掛けてくるかと暗に問うアビドス3世に、カイザーは軽く首を横に振る。しかし猛攻を防がれ、上手く相手のターンに繋げられたというのにその表情に悲壮感はまるでない。

まるでこのくらいの攻めは防がれて当然とでも言うかのように。対して、

「……初手からここまで攻勢をかけてくるとは、流石はカイザーと呼ばれるだけはある。だがな」

アビドス3世は仮面を着けたまま、一瞬背筋がぞわりとするほどの雰囲気を漂わせながらカードを勢いよくドロウする。

「たったワンターンで楽しい時間を終わらせようなどとしてくれるな。無礼者め」

折角のデュエルをすぐに終わらせれそうになって、王様は少しだけご機嫌斜めだつ

た。

アビドス3世 LP4000 手札3 モンスター ピラミッド・タートル 伏せ1

第一の棺 第二の棺

カイザー LP4000 手札1 モンスター サイバー・ツイン・ドラゴン サイバー・ドラゴン 伏せ2

「……なあ翔。第一の棺にあの動き方。それとあの偉そうな喋り方」

「うん。僕も同じ事を考えてた。あの人って……」

おっと。十代と翔が勘づき始めたか。万丈目も何かを察したような顔をしているし、やはり同じ釜の飯を食った仲の相手にはバレるか。三沢に関してはデッキ調整に協力してもらったから言わずもがな。明日香やクロノス先生は……微妙だな。

『なんかすくぐバレちやいそうだね。アビドス君の正体』

『……まあキーカードを出せばすぐバレるのは想定通りだけどな。それにある意味カイザーと戦っていないかったのは幸運だ。カイザーには手の内が割れていないからな』

どこか面白そうに言うデイーにそう返しながら、俺は二人のデュエルを見守る。

今のアビドス3世のデッキのコンセプトは、如何にスピリッツ・オブ・フアラオを際立たせられるか。リクルーターを増やすことで壁要員及びデッキ圧縮をし、手札抹殺やまだ来ていないが『天使の施し』などで墓地を肥やす。

そして肝心のフアラオが来ない場合でも、当然サブアタッカーも居る。

「余のターン。余はピラミッド・タートルを生け贄に、スピリットモンスター『砂塵の悪霊』を攻撃表示で召喚！ そして効果を発動する」

砂塵の悪霊 ATK2200 スピリット

「マズいわね」

「ああ。砂塵の悪霊は召喚時、自分以外の表側モンスターを全て破壊する効果がある。

このままではカイザーの場は丸裸だ」

「お兄さんっ!?!」

砂塵の悪霊の名の通り、その周囲を吹き荒れる砂嵐がカイザーの場の機械竜達を薙ぎ払う。だが、

「行くぞ。余はバトルフェイズに」

「メインフェイズ終了時、俺は伏せカードをオープン。永続罠『サイバー・シャドー・ガードナー』。このカードは相手メインフェイズのみ発動可能。発動後、このカードはモンスター扱いで特殊召喚される」

バトルフェイズに入る直前、カイザーが繰り出したのは黒く刺々しい何か。

サイバー・シャドー・ガードナー 機械族 星4 ATK?

「攻撃力が決まっていけないだど?」

「このカードは攻撃対象になった時、相手モンスターと同じ攻撃力となる。さらにこのカードは相手のエンドフェイズに罠として再びセットされる。先ほどは俺が悩まされたが、今度は貴方に悩んでいただく」

「なるほど。影法師か」

これには王様も少し困る。何故なら砂塵の悪霊とサイバー・シャドー・ガードナーは能力的に相性が悪い。

砂塵の悪霊はスピリットモンスター。これには召喚したターンの終わりに手札に戻る共通効果がある。手札に戻る効果は生け贄があれば何度でも場を一掃できるという利点でもあるが、その効果を使った後にサイバー・シャドー・ガードナーが出てくれば直接攻撃まで届かない。

かと言って攻撃すれば相打ち。貴重な全体除去カードを失うのは痛い。おまけに気になるのもう一枚の伏せカード。仮にリミッター解除などの攻撃力アップ系だったらそのまま返り討ちだ。

悩ましい状況にアビドス3世は少し黙考し、

「……良からう。此度は退くでしょう。余はバトルせずメインフェイズ2に移行。カードを1枚伏せてターンを終了する。そして砂塵の悪霊は余の手札に戻る」

「俺のサイバー・シャドー・ガードナーも再セットだ」

こうして互いのモンスターが無くなった状態でターンはカイザーに移る。この選択は果たして吉と出るか凶と出るか。

「俺のターン。ドロ―！俺は魔法カード『貪欲な壺』を発動！自分の墓地のモンスターを5枚デッキに戻し、2枚ドロ―する」

むむっ!? ここで強欲ではなく貪欲な壺か。墓地が肥やされていないと使えない分強欲な壺より使いづらいが、デッキに戻す事がメリットになる場合もあるのでどっちが良いかは場合による。

カイザーは墓地のサイバー・ドラゴン、サイバー・ツイン、融合呪印生物―光に加え、最初のターンに手札抹殺で捨てられていた『サイバー・フェニックス』と『サイバー・ジラフ』をデッキに戻し2枚ドロ―。そして、

「行くぞアビドス3世。俺は手札から装備魔法『未来融合―フューチャー・フュージョーン』を発動！」

未来融合か。貪欲でデッキにカードが戻ったからこれまた厄介な……つてちよつと待った?! 装備魔法!? 確かアレは永続魔法の筈だけど。

「デッキから融合素材モンスターを墓地に送り、融合デッキから融合モンスター1体を融合召喚扱いで特殊召喚しこのカードを装備する。俺が墓地に送るのはサイバー・ドラゴン3枚。出でよ『サイバー・エンド・ドラゴン』!」

サイバー・エンド・ドラゴン 星10 ATK4000

ギヤオオオオン!

「オウー! シニョール亮のエースモンスターなノ〜ネー!」

「相変わらず、すげえ迫力だよな」

カイザーの場に咆哮と共に現れたのは、まさに名前の通りデュエルに終わりをもたらしかねない三つ首の機械竜。

攻撃力だけなら初期LPと同じな上に、守備モンスターを攻撃した場合貫通能力まであるカイザーのエースモンスターだ。しかし俺が驚いているのは、

『ちよつと待て。俺が知ってる未来融合の効果と大分違うんだだけ?! それにいきなりほぼノーコストでサイバー・エンドを出せるなんてそんなのアリか!?!』

『まあまあ落ち着いて久城君。アニメ版効果つて奴だよ』

慌ててデイーに詰め寄ると、デイーはあくまで騒がずどこかからかうように話す。

俺が知っている未来融合は永続魔法で、デツキから素材を墓地に送るまでは同じだが召喚されるまで2ターンかかるデメリットがあった。

アニメ版でただでこれはやり過ぎだろう。絶対何かしらデメリットが有る筈だが。

「むっ!?」 攻撃力4000だと!」

「しかしこの効果で出したモンスターはこのターン攻撃できず、生け贄にもできない。また装備されたカードが破壊された時一緒に破壊される」

あつたよデメリット!」 だけどそれにしたっていきなり場に出てくるアニメ版の方が厄介だぞ。

しかしこのターン攻撃できない以上、次のターンで棺が揃ってスピリッツ・オブ・ファラオが出張ってくる。または勿体ないが砂塵の悪霊を出して味方ごと場を一掃するという手もある。カイザーは一体何を狙って、

「バトルフェイズ。俺はこの瞬間速攻魔法『融合解除』を発動! サイバー・エンドの融合を解除!」

しまったそつちが狙いか! 三つ首の機械竜は3体の機械竜に分裂する。

サイバー・ドラゴン×3 ATK2100

当然これもまた、防御できなければこのターンでLPが消し飛ばされるだけの圧力だ。これを、

「ふう。先ほどと言いま今と言いま、毎ターンが必殺の構えとは……もう少しデュエルをじっくり楽しめないのか？」

アビドス3世は軽くため息を吐きながら、それでも臆することなくサイバー・ドラゴン達に向けて構えを取った。

この程度では屈する筈もないと言わんばかりに。

アビドス3世対カイザー 生涯無敗と学園最強 その三

『あらあら。これで勝負は決まったかしらね』

むっ!? この妖艶ながらもどこかねっとりとした声は!?

『……カミューラか。またコウモリを通して偵察か? いい加減自分の目で見にきたらどうだ?』

『ウフフ! 高貴なる吸血鬼一族は、わざわざそんな事に自ら出向いたりはしないものよ』

さりげなくミイラ達の中に紛れ込んでいたコウモリ。そこから鳴き声ではなくカミューラの声が届いてくるのは何か違和感があるな。

いつの間にかディーは姿を消している。相変わらずの秘密主義だよまったく。

『それにしても、あのアビドス3世がここまで持ちこたえるなんてねえ。すぐに無様に負けると思っていたのだけれど、予想以上に粘ってくれたおかげで大分手の内が分かったわ! でも……もうここまでのおうだけだね』

そう言えばカミューラはザルグ達が負けた後、次のセブンスターズ……つまりアビドス3世の事も知っていたらしかった。おそらくコウモリ達を使って事前に情報収集

をしていたのだろう。

確かにカイザー相手ならすぐに負けると思われるほど、最初のアビドス3世の実力は平凡だった。

そして今アビドス3世の場にモンスターは無く、カイザーの場にはサイバー・ドラゴンが3体。成程傍から見ると絶体絶命の大ピンチだ。……だが、

『おっと。それはどうかな？ 折角出張ってカイザーの情報収集をしている所悪いがなカミューラ。王様はまだ諦めていないようだぜ！』

スパイとしては学園側に少々申し訳ないのだが、今の王様はこれくらいのピンチで負けるほど柔じやないんだよな。

「サイバー・ドラゴンでアビドス3世に直接攻撃！ 『エボリューション・バースト』三連打っ！」

カイザーの号令と共に3体の機械竜の口に光が集まっていく。直撃すればアビドス3世のLPは跡形もなく消し飛ぶ。しかし、

「させんっ！ 畏発動！ 『アヌビスの呪い』。場の効果モンスターは全て守備表示となり、そのターン元々の守備力が0になる。王に仇成す者よ。報いを受けよっ！」

発動されたカードから放たれる黒い瘴気に蝕まれ、サイバー・ドラゴン達は力なく項垂れる。

サイバー・ドラゴン DEF1600↓0

「くっ!?」 またもやカード一枚で捌かれてしまったか

全て守備表示になってしまった以上もうこのターンは攻撃できない。伏せてあるサイバー・シャドー・ガードナーもあくまで出せるのは相手のターンのみ。必殺の一撃を、
「またも防がれ険しい表情のカイザー。そこへ、

「ふむ。そなた。何をそんなに怖がっておるのだ？」

アビドス3世がカイザーに心底不思議そうにその疑問を突き付けた。

「俺が、怖がっている？」

「ああ。余にはそう感じる。確かにそなたの攻めは苛烈だ。気を抜けば一瞬で余の命脈が絶たれるだろう。だが……それは必死に自らの恐怖心を誤魔化そうとしている故だと思えてならないのだ」

それは直接戦っている王様だからこそ気づく事が出来たのだろう。言われてみれば確かに今回のカイザーのデュエルは苛烈過ぎた。

カイザーは普段リスペクトデュエルを標榜している。これは人によって解釈が異なるが、要するにデュエルの中で全力を出し合い、その上で互いに敬意を持ちつつ全力を超えた先を目指そうというスポーツマンシップ、或いは求道者のな何かのスタンスだと俺は思う。

しかしながら、今回のカイザーは相手が全力を出す前に速攻で叩き潰さんとばかりの動きだ。何と言えば良いのか……らしくない。

カイザーはアビドス3世の言葉にしばし黙り込み、

「……そうかもしれないな。闇のデュエル。対戦した者を傷つける恐ろしいデュエルだ。十代は傷だらけになり、吹雪もあんな姿になって帰ってきた。それを見て、確かに俺はどこか怖がっていたのかもしれない」

カイザーのどこか自嘲するような言葉を、周囲の皆は黙って聞いていた。

「だが仲間達……後輩達や教師の皆様方は勇敢な者ばかりだ。決して臆さず戦いを挑むだろう。例え闇のデュエルであろうと、相手がどんな強敵であろうともな。俺はそれが一番怖い。貴方のような強者が敵方に居るとあれば尚更にだ。仲間達をこれ以上傷つけさせない為なら、俺は一時的にリスペクトの精神をかなぐり捨てよう」

そこでカイザーはチャリと一瞬後ろの鍵の守り手達を見、何か覚悟を決めた目でアビドス3世を鋭く見据える。

「俺の背を見て目指してくる後輩達の為にも、敢えて言わせてもらおう。貴方の懐にある勝利を奪い取つてでも、俺は絶対に負けん！」

それは後輩たる万丈目が言った言葉。ここで何が何でも神と呼ばれた伝説の王を止めるという覚悟の意思表示。自らの恐怖を自覚し、それでも尚戦おうとする帝王の矜持。

それに対するアビドス3世は、仮面越しにだが静かに笑った。

「ふっ！ 良いだろう。少し普段とは趣が違うようだが、その気迫と覚悟。それでこそ余が戦つてみたいと思つたデュエリストだ。しかしそなたのモンスターは全て攻撃出来ぬ。早くターンを終えるが良い」

「まだだっ！ バトルフェイズからメインフェイズ2に移行し、俺は魔法カード『融合』を発動！ 場のサイバー・ドラゴン3体を融合し、再び出でよサイバー・エンド・ドラゴンっ！」

げっ!? まだ融合持ってたの!? 十代張りに融合に愛されてるぞカイザー!

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000

カイザーの場に再び三つ首の機械竜が姿を現す。このターンもう攻撃こそできないが、その威容は相手に威圧感を与えるには十分だ。

「俺はこれでターンを終了する。次のターン、貴方のエースに対抗するにはこれくらい

でないといけないので」

「忘れてはいなかったか。そう。このターンエンドをもつて偉大なる王の魂がここに降臨する。第一の棺の効果発動！ デッキより第三の棺を場に出す」

その言葉と共に場に三つの棺が揃う。これで条件は整ったな。

「三つの棺が場に揃った時、これらのカードを全て墓地に送り、手札かデッキから『スピリッツ・オブ・ファラオ』を特殊召喚する！」

スピリッツ・オブ・ファラオ ATK2500

棺の中より現れたのは王の魂ことスピリッツ・オブ・ファラオ。そして偉大なる王には常に従者が付き従う。

「スピリッツ・オブ・ファラオの効果。このカードが特殊召喚に成功した時、自分の墓地からレベル2以下のアンデット通常モンスターを4体まで特殊召喚することが出来る」
「だがそれには墓地にモンスターが居る事が前提条件。これまでの戦いの中で、貴方が墓地にモンスターを送れたのは初手の手札抹殺のみ」

そう。カイザーの指摘通り、棺が高速で展開されたことよつて墓地にモンスターを送る機会が極端に減ってしまった。本来ならピラミッド・タートルの最後の1枚でそれを呼ぶのが狙いだっただろうと思うが、

「そう。最初の1枚。それで既に支度はおおよそ済んでいたのだ。あの時手札抹殺で捨

てたカードは4枚。そして、それが1枚を除いて全てモンスターだったとしたらどうだ？」

「何だどっ!?」

「現れよ！ 死して尚王に忠義を尽くす臣下達よ！ 余は墓地から『ファラオのしもべ』を2体。『王家の守護者』を1体特殊召喚する！」

ファラオのしもべ×2 ATK900

王家の守護者 ATK900

なんとっ!? まさかこの布陣を初手で手札に揃えていたのか!? 神引きもいい所だろっ!? この世界の奴ら皆して引きが強すぎるぞ。そう俺が呆れかえる中、

「だが、展開こそ出来たがそれぞれの攻撃力は900。おまけにカイザーの場には貫通能力を持つ攻撃力4000のサイバー・エンド・ドラゴンが居る」

「そうね。それに亮の伏せているサイバー・シャドー・ガードナーもまだ残ってる。仮にサイバー・エンド・ドラゴンを破壊されたとしても、それが亮を守るわ」

万丈目と明日香が口々に言うが、肝心のカイザーは決して油断も慢心もしていない。……いや、出来ない。そんなことをしたら確実に次のターンにやられると確信しているかのように。

次のターンで勝負が決まる。ふと……そんな予感がした。

アビドス3世 LP4000 手札2 モンスター スピリッツ・オブ・ファラオ
ファラオのしもべ×2 王家の守護者 魔法・罠 伏せ1

カイザー LP4000 手札0 モンスター サイバー・エンド・ドラゴン 魔法・
罠 サイバー・シャドー・ガードナー 伏せ1

「余のターン。ドロウっ！ ……ふっ！ やはり王の下に臣下は馳せ参じるものらしい。余は手札から王家の守護者を攻撃表示で召喚」

アビドス3世が手札からモンスターを出したことで、モンスターゾーン全てが王と臣下達で埋まる。ここまで揃うとある意味壮観だな。

『でも、所詮は攻撃力900の弱小モンスターの群れ。いくら場を埋め尽くしたとしても』

「さて。この戦いを見守る者共よ。そなたらはこう思ったのではないか？ いくら場を埋めようとも、たかが攻撃力900の弱小モンスターの集まり。サイバー・エンド・ドラゴンには遠く及ばぬと」

突如他の鍵の守り手達にこう切り出す王様。いや、もしかしたら俺の横のカミューラの言葉に反応したのかもしれないが。

「確かに王の従者達一人一人の攻撃力は低い。だが、ここに居る事に意味があるのだっ！ 装備魔法発動！ 『団結の力』をスピリッツ・オブ・ファラオに装備！」

そう。これこそがアビドス3世の辿り着いた結論。一人一人の力は弱くとも、その力を一つに集約させることが出来るなら。それは必殺の一撃へと昇華する。

以前オベリスクブルーの取巻も同じカードを使っていたが、その時は4体だったのに対し今回は場を限界まで使った5体。自分の場のモンスターの数×800攻撃力と守備力が上がる団結の力により、スピリッツ・オブ・ファラオは全身に臣下からの力を纏って強化される。

スピリッツ・オブ・ファラオ ATK2500↓6500

『攻撃力6500ですって!?!』

「死してなお続くお前達の忠誠確かに受け取った。行くぞ！ バトルフェイズ！」

「このタイミングで、俺は再びサイバー・シャドー・ガードナーを発動！」

「構わんつ！」

カイザーの場に再び影法師が現れるが、王様はそれには目もくれずサイバー・エンドに集中する。影法師はあくまで攻撃対象になった時に相手の攻撃力と同じになるもの。

ならばそもそも攻撃しなければ良い。

「受けるが良い。王の一撃。スピリッツ・オブ・ファラオで、サイバー・エンド・ドラゴンを攻撃っ！」

「リバースカードオープンっ！」

最後の攻防の果ては、互いの伏せカードだけが知っている。

アビドス3世対カイザー 生涯無敗と学園最強 その四

カイザーのオープンするカードの様子を、俺を含めた周囲の者達は固唾をのんで見守っていた。

サイバー系を主軸としたデツキで攻撃反応系で代表的なのは、機械族の攻撃力を倍にする『リミッター解除』。或いはサイバー・ドラゴンやそれを素材としたカードを墓地に送ることで相手を破壊する『サイバネテック・ヒドウン・テクノロジー』といった所か。勿論サイバー系に限定しなければ他にも汎用性の高いカードは多く、範囲を絞り切ることは出来ない。しかしここでサイバー・エンドを仕留められれば、後は残った臣下達の攻撃でシャドー・ガードナーごと押し切れる。

この局面が勝負時だとアビドス3世は踏んだのだろう。そしてその判断の結果は、
「畏れ発動！ 『決戦融合ーファイナル・フュージョン』っ！」

予想外の結末を迎えることになった。……ちよつ?!? ちよつと待ったつ?!? あれの発動条件は、確か戦闘するのが互いに融合モンスターじゃないといけない筈だ！ スピリッツ・オブ・ファラオは融合モンスターじゃない。

「このカードは、自分フィールドの融合モンスターが相手モンスターと戦闘を行うバト

ルステップにその2体を対象にして発動！ お互いのプレイヤーは、そのモンスター2体の攻撃力の合計分のダメージを受ける」

げっ!?! 微妙に効果の細部が変わってる。またアニメ版効果かよ!?!

「そなた……何故ここまでサイバー・エンドに拘るかと思えば、ずっとこれを狙って」

「言った筈だ。貴方の懐の勝利を奪い取ってでも俺は絶対に負けんと。本来引き分けなぞ狙うものではないが、貴方ほどの男をここで墜とせるのなら本望！ ここで俺と共に消えてもらおうっ！」

スピリッツ・オブ・フアラオとサイバー・エンドの攻撃がぶつかり合い、激しい爆発と共に強い光が周囲を覆う。それが収まった時、

カイザー LP4000↓0

アビドス3世 LP4000↓0

互いのモンスターの攻撃力の合計、つまり10000を超える効果ダメージが互いのLPを削り切っていた。

「カイザーっ!」

「お兄さんっ!」

「亮っ!」

『王様っ!』

慌てて二人に駆け寄る面々。アビドス3世の意思で弱めであるとはいえこれは闇のデュエル。それがこんな極大の効果ダメージを受けたとあつてはどんな影響があるか分からない。……だが、

「……くっ!?!」

「むう」

二人共ふらついてはいるものの、しっかりと両足で立っていた。カイザーは駆け寄る仲間達に、少し苦し気ながらも笑顔を見せてみせる。

「凄いぞカイザー! 神様相手に引き分けるなんてよ!」

「流石シニョール亮なノ〜ネ!」

「ありがとう。……だが、俺では引き分けて精いっぱいだったよ。まだまだ精進が足りぬようだ」

カイザーはそんなことを言っているが、実際ギリギリの戦いだったと思うぞ。

『王様。ご無事ですか?』

「当然だ! ……正直な所、少々足にきてはいるが」

アビドス3世も元気そうだ。威力を弱めていなかっただらどうなる事かと思つたぞ。

「しかしバランスサーよ。この場合勝敗はどうなるのだ？」

「そうそれっ！俺も気になるぜそれは」

ひよっこり話に紛れてくるんじゃないよ十代。まあ勝負に関わる事なので鍵の守り手達全員が耳をそばだてているのは仕方がないが。しかし……この場合は、

『ルール上引き分けの場合、両者とも失格となり以降のデュエルへの参加は認められない。ただ失格扱いなので敗者への罰の魂の封印等も行われない。例外は互いの陣営に他の選手が居ない場合のみ再試合となる。……カイザーの思惑通りになってしまったようですな。王様』

「ふむ。残念だ。余としてはもう少しデュエルを楽しみたかったのだがな」

本当に残念そうに言うアビドス3世。純粹にデュエルを楽しむのが目的の王様にとって、勝敗はそこまで重要ではない。強いて言うなら失格になったことで次が出来なくなつたという点への残念さだ。

ひとしきり残念がると、アビドス3世は今まで戦っていたカイザーの所へ歩みを進める。ほんの僅かに警戒の色を滲ませる十代以外の鍵の守り手達だが、他ならぬカイザー自身もまた一歩前に進み出た。

「良きデュエルであつた。褒めて遣わす」

「こちらこそ、貴方と手合わせできて光栄でした。偉大なる王アビドス3世。願わくば

この度のような闇のデュエルではなく、純粹に互いの力を出し合うリスペクトデュエルをしたかったのですが」

「ほう？ ならば余と共に冥界に来るか？ こんな楽しいデュエルが一度だけではつまらぬ。向こうでじっくりと次の勝負と行くのも一興だぞ？ 無論そなただけではなく強者なら誰でも歓迎だ。お前もどうだ十代？」

「俺？ いやあお誘いは嬉しいんだけど、俺まだ生きてるしなあ。……もう百年くらい待つてくれない？」

流石のデュエル馬鹿もここでは即答は避けるか。まあ保留にするだけとんでもないのだが。カイザーや他の鍵の守り手達は拒否。しかし当の王様は一人でも付き合ってくれそうな奴が居たことに大喜び。

三千年の眠りに比べれば百年など短いもの。百年経ったら魂を迎えに行くぞとすっかり乗り気である。良かったな十代。死んだ後もデュエル出来るぞ。デュエル馬鹿冥利に尽きるだろ？

戦いは終わり、あとはこの船に来た時のように鍵の守り手達を送り返すだけとなったのだが、

「……なあ王様。アンタアビドスだろ？　なんで正体を隠してんだ？」

「そうだよ。少し前まで一緒に勉強してたアビドス君でしょ？」

「いや今頃そこ突っ込むか十代に翔!?　それでもデュエルが終わるまで待つだけマシというべきか？　実際プレイスタイルなどから分かる人には分かるしな。」

アビドス3世は一瞬その声に動きを止め、

「無礼者共め。恐れ多くも王の名を呼び捨てにするとは」

「良い。槍を収めよ。……確かに余はアビドス3世であるが、そなたらの言うアビドスなる者は知らぬな。大方余の遠い血筋の誰かであろうよ」

「気やすく話しかける十代達にいきり立つ兵士達だが、アビドス3世はスツとその者達を制止して十代にそう返す。」

この場合、完全にアビドス3世がアビドスだとバレると、どうやって編入したのかとか色々突っ込まれる恐れがある。なのでバレバレかもしれないが一応しらを切るようにと事前に話し合っていたのだ。

「……だが、仮に余がそのアビドスなる者でこの学園に一時期通っていたとするのなら、さぞ毎日が楽しく新鮮だったことだろうな」

王様っ!?　それ以上はポロが出るからストップな!

「……まあ良いや。じゃあ王様!　最後に俺とデュエルしようぜ!　百年後の予約前に

や」

「それも悪くない。だが、そう上手くは行かぬらしい」

そんな中、アビドス3世の身体から光の粒子が放たれ始める。タニヤやザルグ達と同じく、敗北ではないとは言え失格の為契約不履行の扱いがされたのだろう。

こんな状態ではデュエルは出来ないと、十代も仕方なく断念する。心なしか翔も残念そうだ。

こうして、来た時と同じように鍵の守り手達は一人、また一人と元の場所へと転送されていった。全て降ろしたのを確認し、黄金の飛行船は空へと舞い上がっていく。さぞ地面の人達からすれば幻想的な消え方をしただろう。だが、

『……………何で俺はまだ残っているのだろうか?』

「それはもちろん、余の最後の相手はそなただからだバランサー。いや、指南役よ」

他のミイラ達からも光の粒子が放たれる中、何故かずっと残されている俺に向かつてアビドス3世はそんなことを言い出した。

『俺が? いやいや王様! さつき十代がやろうとした時に無理だつて』

「無理だとは言っていない。そう上手くは行かぬと言っただけだ。それに……………はあつ

！」

アビドス3世が気合を入れて一声吠えようと、自分の身体からの粒子の放出が僅かに収まる。

「この通り。いかに余が王としてこのアイテムに干渉できるとは言っても、あくまで一時的なもの。デュエル一回分が限界よ」

自身の仮面を取り、額に嵌めていたサークレット型の闇のアイテムをコツコツと指で叩きながら、アビドス3世は静かに笑う。

自分である程度制御できたんかいっ!? 流石古代エジプトの王。

「十代とは百年後にたっぷりデュエル出来るのでこの場だけは遠慮してもらった。他にもカイザーとの再戦や、あの場に居た誰と戦っても心躍る一戦になっただろう。だが、やはり現世での最後の一戦はそなたが良いのだ。指南役よ」

十代でもなく、カイザーでもなく、万丈目でも明日香でも三沢でもなく、俺を選ぶかよ。まったくこの王様ときたら。

この場には鍵の守り手達も居ないので、俺も仮面を外して念のため準備していたデュエルディスクを装着する。

「デュエルするのは構わない。だが……その前にさっきの戦いの最後の盤面、その時に伏せていたカードを見せてくれ。まだタブレットに記録が残っている筈だ」

「構わぬよ」

そう言つてアビドス3世はさっきの戦いで伏せられたままだったカードを開示する。それは、

『マジック・ジャマー』か。おそらく伏せられたタイミングは砂塵の悪霊を出したターン。……何故これでサイバー・エンドの融合を止めなかったんだ？ 未来融合の時はまだ手札が他にもあつたから警戒するのは分かるが、最後の融合の時手札の砂塵の悪霊を捨てて発動しておけば、決戦融合まで持ち込まれることなく押し切れただろうに」

そう。使うタイミングにもよるが、アビドス3世の勝ち筋は既に出来ていたのだ。勿論デュエルにおいてたればは通用しないし、選択は常に自身で行うものだから責める気は毛頭ないが。

最強の帝王を降す一歩手前まで来ていた無敗の王の答えは、酷く単純なものだった。「いや何。何故あそこまでサイバー・エンドの召喚に拘るのか興味が出てしまつてな。最初は単に強力なモンスターを置いて自分のターンに攻め込む腹積もりかと思つたのだが、まさか余のモンスターがそれを超えてくるのを見越しての決戦融合とは恐れ入つた」

油断……という訳でもないのだろうか。今の王様は相手の強さによつて油断するよ
うな類ではない。まだ他にも理由があるだろうと目で問いただすと、アビドス3世は気

まずそうに頬を掻きながら白状した。

「それに……なんだ。互いに全力を出した上でそれを更に超える為の戦い。それがリスペクトデュエルという奴なのだろう？　ならばまずは、相手の全力を受け止めるのが礼儀であろうと思つてな」

この王様、相手がリスペクトデュエルをかなぐり捨ててまで勝負に拘つたというのに、敢えて相手の土俵で勝負してたつてののか？

「……まつたく。疑問は晴れたけど、ここまできたらもう呆れるほかないよ王様」

「まあそう言うな。これもそなたの影響だぞ指南役よ！　……さあ。そろそろ本当に時間がない。早速始めるとしようではないか！　指南役のデツキを使った神楽坂には一度勝つたが、まだ指南役には一度も勝っていないからな。最後に勝たせてもらうぞ」
「そうだな。じゃあ始めるとするか！」

消えつつある黄金の船の上、互いに戦いの舞台に足を運ぶ。

「最後に一つだけ聞かせてくれ。……現世でのこの数日間。存分に楽しめたか？」

「ああ！　実に良い一時だった！」

「ならば良し。……これが最後の指南デュエル。最後まで俺が勝たせてもらうぜっ！」
その言葉に互いに不敵な笑みを浮かべる。もうこれ以上はカードで語るのみ。

「デュエルっ!!」

さて、デュエルの結末を語るのは野暮というものだろう。

何せ勝つにせよ負けるにせよ、これで別れるのに変わりはなく、

互いに満足した結末だったことには間違いないのだから。

閑話 幻想体だつて遊びたい



アビドス3世が冥界に戻つて翌日の事。

『出番が少ないっ!』

主人の居ない部屋で、突然ネクことダーク・ネクロフィアは大声を上げた。

『ネクちゃん。めっ! 急に大声出したら皆がビックリしちゃうよ』

『そうは言うがな我が運び手よ。私だつて好きで言っている訳ではないのだ』

いつものようにレティシアが嗜めるが、普段とは違いネクも引き下がらない。何故なら、

『最近の我が生遊け見贅遊ときたら、セブンスターズだか何だかの集まりにかかりつきりになつてめつきり部屋に居る時間が減つてしまった。今もそうだ!』

そう。ネクの言う通り、遊見は現在次なるセブンスターズとの顔合わせの為にアジトである洞窟に向かつていた。

この部屋で留守番を任されていたのは、今回デッキに入れていない幻想体のカード

達。レティシアを始めテディ、雪の女王、ヘルパーといった精霊化出来るカードは、それぞれ思い思いの体勢で部屋で過ごしていた。

そんな中のネクの突然の宣言である。

『我が運び手よ。最近遊兎と碌に話せていないのではないか？ テディもそうだ。レティシアとの散歩で我慢してはいるものの、たまには思う存分に遊兎に甘えてみたいのではないか？ 私はそんな今の状況に物申したいのだ』

『それは……そうだけど。でも遊兎お兄ちゃんも忙しいの。だから、私も我慢するの』
レティシアは一瞬言葉に詰まり、その後はつきりと宣言する。しかしその言葉には少しだけ寂しさが混ざっている。

テディもまた同じだ。喋りこそしないものの、レティシアの背をポンポンと擦って傍に寄り添っている。しかしほんの僅かに普段よりも俯いている。

そんな幻想体達の心の機微をネクは見逃さない。

『まあ待て。何もお前達にもつと我慢しろと言うつもりはない。我慢しなくても良い催しがあるぞと教えたいのだ。ヘルパーっ！ 例の物を持ってこい！』

へぴピッ！ 持ってきたよ！

ネクがぎこちなく片手を挙げて呼ぶと、ヘルパーは器用に車輪で移動しながらアームで一枚の紙を出して広げる。それは、

『学園祭のお知らせ?』

『そうだ。一年に一度催される祭り。それぞれの寮の生徒が各自で催し物を披露して楽しむものだ。まだ少し先の話だがな。これはその仮の企画書を少し拝借してきたものだ』

『楽しそう! ……でも、我慢しなくても良いってどういう事?』

レティシアとテディは揃って首を傾げる。それに対してネクは不敵に笑い、

『決まっている。精霊としてではなく、実体化してこの祭りに乗り込むのだ!』

『えっ?!? ネクちゃん。それはダメだよ! 私達精霊だもの! 遊児お兄ちゃんにも他の皆にも迷惑かけちゃうよ』

レティシアは子供らしい外見と思考ではあるが、それでも自分達が実体化したら驚かれるぐらいの事は察していたし、折角のお祭りが自分達のせいで台無しになったら嫌だという良識的な考えもあった。

だがそれはネクも想定内。我慢する心を揺さぶるように、甘い誘惑を静かに囁いていく。

『な〜に心配するな。このオシリスレッドの催しはコスプレデュエル大会(仮)だと書かれている。つまり我々が実体化して練り歩こうが、そういうコスプレなのだと周りが勝手に解釈するさ。人は勝手に物事を自分の納得できる形に落とし込もうとするものだ』

『じゃ、じゃあー!』

『ああ。レティシア。我が運び手よ。この日ばかりは大手を振つて遊兎と温かな日差しの下を出歩ける訳だ。それだけではない。祭りであれば多くの人間達が楽しむだろう。お前の好きな笑顔でな』

レティシアはその言葉を聞いて顔を綻ばせる。期待。願い。喜び。それらがたつぷりと詰まつた顔を。

『無論テディもだ。堂々と遊兎に甘える事が……まあ少なくともいつもより多く出来ることは間違いない。それに他にも遊んでくれる奴が増えるかもしれないぞ』

テディも口にくそしないものの、その言葉にうんうんと大いに乗り気の様だった。

(……までは計画通り)

明るい未来を夢見る少女とぬいぐるみの様子を見て、人形は内心ほくそ笑む。だが、まだこれだけでは自分の思惑には足りない。

幸いここにはその欠けたピースが揃っている。あとはどう口説き落とすか。

『下らんな』

それまで口を出さずに……否。出す口など空いていないと優雅にハーゲン○ッツ(グ

リーントイー味）を味わっていた雪の女王が、話を聞いてビシツと持っていたスプーンをネクに突き付ける。

『何故妾がわざわざそのような些事に付き合わねばならぬ？』

『そこをどうにか頼めないか？ 何もずつとという訳ではない。あくまで一時的にで良い』

『ならん。保護者などという事は、下々の者にでも任せておけば良いのだ』

ネクが雪の女王に持ち掛けたのは、実体化したレティシアやテデイの保護者役だった。

先ほどはああ言ったが、ネク自身ずつとレティシアやテデイが遊兎と一緒に居られる訳ではないと判断している。祭りとは言え遊兎にもやることの一つや二つは有るだろう。セブンスターズの方でも動く必要があるかもしれない。

その間も実体化するのであれば、レティシアはコスプレをした女の子という扱いになる。保護者なくして勝手に出歩けば、それこそ誰に止められてもおかしくはない。

（精霊の見える万丈目や茂木などに声をかける手もあるが、後の事を考えれば出来れば知られたくはない。精霊化する幻想体達で保護者役を務められそうなのは現在人型の雪の女王か葬儀の奴ぐらいだ。葬儀の奴は私の事を疑っているから協力しないだろう。残るはこの雪の女王のみ）

しかしネクがいくら頼んでも雪の女王は首を縦に振らない。これ以上しつこくするような氷漬けにするぞとばかりに僅かに放たれる冷気も強まっている。

絶好の機会だがまた別の策を練るかとネクが諦めかけた時、

『……んっ!?!』

ふわりとどこからか風が吹き、企画書（仮）のペラリと捲つてあるページを開く。そこには、

『……暑さを吹き飛ばす冷たい新作スイーツ祭り』

『何?!』

食いついたっ！ その言葉に少しだけ雪の女王が反応したのを見逃さず、ネクはここぞとばかりに畳みかける。

『オベリスクブルー寮の催しはカフェであるとか。そしてその一画で行われるのがそのスイーツ祭り。……確かに最近はかなり暑い。冷気を是とする雪の女王におかれてはさぞ辛かろう?』

『ふっ。安い挑発よな。妾がこの程度の熱気で参るとでも?』

『しかし心躍らぬと? 未知の甘味に! そのハーゲン○ッツのような出会いがまたあるかもしれないのに?』

雪の女王のアイス好きはもう遊児や幻想体達の中では周知の事実。けっして興味が

無い訳ではないとネクはここぞとばかりに語る。

しかし女王の矜持故か、彼女も僅かに迷いがあるも動こうとはしない。もう一押し、もう一押し何かないかとネクは考え、

『女王様！ 一緒に行こうよ！ 楽しいよきつと！』

思わぬ一手が横から飛び込んできた。

『アイス食べてる時の女王様とつても嬉しそうだもの！ だから色んな冷たいお菓子を食べたらもつと笑顔になれると思うの！ だから一緒に行こつ！』

『……………むう』

目をキラキラとさせて誘う幼子を前に、流石の雪の女王も領かざるを得なかった。

なぜならその幼子が持つ温かい心こそ、雪の女王が敗北する数少ない物なのだから。

(……………つふつふつふ。ふはつはつは！ ここまで計画通りに行くとはな！)

行くなら早速予定を立てようと幻想体達が話し合うのを尻目に、ネクは内心小躍りしていた。

そう。ネクが幻想体達に声をかけたのは、当然ネク自身の思惑の為。その為には一人では手が足らず、それに巻き込むべく理由を付けて他の幻想体達を焚きつけたのだ。そ

れは、

『ご機嫌だねえ。実に喜ばしいことだよ』

『……たつた今お前の姿を見てご機嫌ではなくなった所だ。何用だディー？』

突如現れたディーを前に、ネクは不機嫌さを隠すことなく尋ねる。他の幻想体達は相談に夢中でまだ気づいていない。

『なぐに。君が面白そうなことを進めている様だから、ちよつとだけ気になつてね』

『先ほど都合の良いタイミングで風が吹いたのもお前の仕業か。……まあ良い。この作戦が成功した暁には、そう面白がっても居られなくなるのだからな。精々今の内に楽しんでおくが良いさ』

『それは楽しみだ。何せ三幻魔の力を掠め取ろうなんて企みだからね。個人的には大いに期待させてもらうとも』

ディーは後の方の言葉を他の幻想体達に聞こえぬようこつそりと、それでいてとても楽しそうに口にする。

そう。ネクの狙いは三幻魔の力の奪取。何故かしばらく前……大体黒蠍盗掘団が敗北した辺りから、七精門から僅かながらも三幻魔の力が漏れている事にネクは気が付いていた。

これはネクが霊体の操作、使役を得意としていた事と、漏れ出る力に惹かれて七精門

に靈体が集まつて来ていた事は無関係ではないだろう。

勿論通常なら力が漏れるなんてことは封印が解けない限りあり得ない。それこそ物理的に、例えば大量の爆発物でもって封印を破壊しようとしてもしない限りは。

だが確実に力は漏れている。ならその力を有効活用しようとなクが思い立つのはごく自然だった。

（力を取り込む策は練つてある。後は機会さえ逃さなければ良い。見ているが良いデー。我が生け贄見よ。我が復活の時は近いぞ。……ふくつはつはつは！）
ネクもまた来たる明るい未来を夢想し、その心は浮き立っていた。

企みを持つのが自分だけではないと知る由もなく。

仮面の巨漢は光に感謝する



さて。セブンスターズと学園側の戦いもいよいよ中盤といった所だ。セブンスターズ側はダークネス、タニヤ、黒蠍盗掘団、アビドス3世の四人を失い残り三人。

対して学園側は三沢とカイザーを失い残り五人。元々セブンスターズ側として行動している大徳寺先生を抜けば残り四人だ。

人数的には実は大差なく、仮にどちらかが連勝なり連敗するだけで一気に戦局はどちらにも偏るギリギリのライン。そんな状況で俺はバランスーとして、上手い事諸々の調整をしなくちやいけない訳だが。

「……なあディー。これはどうしたら良いと思う」

『さうてね。これは僕も想定外さ。まあ……これはこれで面白い』

普段傍観者を気取るディーについて尋ねてしまうほど、目の前の光景はどうしたら良いか悩むものだった。何故なら、

カタカタ。カタカタ。

「ふぐつ……うつ……うああ」

そこには光を放ちながら荘嚴な雰囲気醸し出しながらもオロオロする罪善さんと、それに跪いて泣きじやくる仮面の巨漢。セブンスターズの一人にして以前十代と戦ったタイタンの姿があつたのだから。

何がどうしてこうなつたかと言うと、事の起こりは少し前に遡る。

だんだん人数が減つて寂しくなつてきたセブンスターズ側の定期報告。アビドス3世が引き分けになつてセブンスターズも残り半分を切り、理事長から文句の一つでも言われるかと思つたのだが、

『引き分けか。……まあ良い。寧ろ健闘したと言えよう。よくぞアビドス3世をあそこまで鍛え上げた。その手腕見事であつたぞ balanサー』

声だけではアレなので映像が映るように設置された画面。そこに映る理事長から文句どころか何故か称賛された。どうやら理事長は最初からアビドス3世を数合わせだと判断していたようで、負けたとしても問題ないと考えていたようだ。なら最初から別の人をスカウトしてほしい。

『して……体調の方はどうだ？ アムナエルよ』

「はい。長い療養により、万全とは言いませんが戦いには支障ない状態までに仕上が

ました。お心遣い感謝いたします」

『……そうか。ならば良い』

アムナエルこと大徳寺先生がセブンスターズとしての格好でそう答える。実際は戦いに支障ないだけで、その肉体は朽ちかけもう長くはない。おそらく理事長もその事は知っている筈だが、敢えてなのかそれ以上何も言わなかった。

そして本題である次は誰が行くかという話になったのだが、

「私はもう少し後にさせていたいただきたい。戦いは出来るが出来れば万全の状態までもつていきたい」

「私もまた先送りにさせていただきますわ。今やっている仕込みがもう少しかかりそうなので」

ギリギリまで正体を伏せた方が意味のある大徳寺先生はともかくとして、珍しく本体が来たカミューラもまたもや辞退。実質ダークネスの次から今までずっと先送りだ。

『何を企んでいる？ カミューラ』

「あら。企むだなんて心外だわ。私はただ吸血鬼一族の末裔としてふさわしい舞台を準備しているだけなのに」

軽く問い詰めてみるが、カミューラは口元に手を当てて妖艶に笑ってみせる。舞台つて……タニヤの様に闘技場でも建設してんじゃないだろうな。まだ前の闘技場も残っ

たままなのにもた追加されたらきついんだけど。

『良からう。ではタイタン。此度はお前に一任する。契約に基づき存分にその力を振るうが良い』

「……ああ」

そのやたら渋い声と共に進み出たのは、ウジヤト眼を象った仮面を装着した黒いロングコートの大漢。タイタンって……あつ!? 前に闇のデュエリスト（自称）として十代と戦った奴だ!

あの時、特待生寮で良くないモノに呑み込まれた筈だが、どうやら助かっていたらしい。悪党のようではあるが少しだけホツとする。

『ではバランサーよ。これまで通り調整役としてタイタンの補佐をせよ。必要な物資があればアムナエルを通して連絡を……以上だ』

その言葉と共に映像が切れ、カメラは用事は終わりとはばかりに黒い霧と化してその場から消える。

「ではバランサー。私も行くとしよう。後を頼む」

『はい』

アムナエルもまたその場を立ち去る。何せもうすぐ学園祭。大徳寺先生もスケジュール調整やら何やらで大変なのだろう。まあ生徒の側も色々やることがあるので

が。

うちの寮はコスプレデュエル大会とかいうトンデモ行事をやるらしいからな。まさかこの格好で出る訳にもいかないし何か考えないと。だがその前に、

『調整役としての仕事もこなさないとな。……』という訳で、改めて自己紹介させてもらう。我が名はバランサー。この度調整役としてタイタン。お前に協力させてもらう。どうぞよろしく』

俺はこの場に一人残ったタイタンに話しかける。仮面の巨漢は静かにこちらを向き、「ああ。よろしく頼む」

……おや？ 何と言えば良いのか、少しだけ以前十代とデュエルした時と雰囲気が違うように感じられた。酷く落ち着いているというか、勿論普段のタイタンを知っている訳ではないのでこれが素という可能性もあるのだが。

そうして早速これからの戦いについて話し合おうとするのだが、

「その前に頼みがある。以前お前がダークネスと戦った時に使ったカード。『たった一つの罪と何百もの善』だったか？ そのカードの精霊をここに呼び出してくれないか」
罪善さんを知？ 罪善さんが精霊だという事は以前出した時にバレているから分かるとして一体どうして……まあ良い。

『分かった。出てきてくれ罪善さん』

カタカタ!

持っているデツキが光り輝いたかと思うと、罪善さんがフツと目の前に現れて挨拶代わりとばかりに軽く光を放つ。

「おおっ! これだ。この光だっ! かつて俺を救ってくれた光は」

何やらタイタンが妙な事を言い出し、そのまま罪善さんの下に跪いて嗚咽を漏らし始めた。なんだなんだ一体? 罪善さんも光を放ちながらオロオロしている。

今なら大丈夫だろうとこっそり出てきたデーもこの状況には戸惑いを隠せず、俺達はタイタンがひとしきり泣き終わるまでじっと待つハメになった。

『大丈夫か?』

「すまない。見苦しい所を見せた」

ようやく泣き止み涙をコートで拭うタイタン。見苦しいというか驚いたというか。罪善さんもいったん光を弱めて俺の傍に浮かんでいる。……デーはこっそり天井に張り付いて様子を窺っている。

『一体どういう事か、教えてもらっても良いか?』

「……ああ。あれは俺がセブンスターズに入る少し前の事だ」

そこからタイタンが語ったのは、自身が以前闇のデュエリストを名乗り、依頼された標的をデュエルで襲撃していたという事だった。

催眠術をデュエル中に使用する事で、対戦相手に強い精神的ダメージを与え再起不能にする。俺からすればあまりまっとうではない事を生業にしていたのだが、数か月ほど前にこの学園のある生徒を襲撃する依頼があったという。

……あれか！ 十代達の事か！ 確かにあの時何で十代が戦っていたのか結局分からずじまいだったが、まさか襲撃の依頼があったとは。

『ちなみに依頼した人物は？』

「それは言えない。依頼人の秘密は厳守する。それは最低限のルールだ。……続けよう」

タイタンはまず十代の知り合いらしき人物……天上院明日香を拉致し、十代達を自分の催眠術が使いやすい舞台である特待生寮に誘い込みデュエルを挑んだ。

この辺りは俺も大体知っている。仕掛けを十代に見抜かれ、一時撤退しようとした所今度は本当に闇のデュエルが発動。妙な空間にタイタンと十代、俺が吸い込まれる。

タイタンはそこに溜まっていた良くないモノに憑りつかれてデュエル続行。そして十代に敗れ闇のデュエルの敗者として良くないモノ達に呑み込まれていった訳だが、

「ぶよぶよした奴らに呑み込まれた俺は、ひたすら闇の世界を彷徨っていた。出口もな

くあるのは奴らとただ闇ばかり。気が狂うかと思った。……だがある時、そこに一筋の光が差した」

『それが……この罪善さんの光だと?』

「ああ。間違いない。この温かい光を俺ははつきり覚えている。その光が差した瞬間、周りのぶよぶよした奴らの大半が姿を消したのだ」

「良くないモノが罪善さんの光で姿を消した。それって……あつ!? 十代にカミングアウトする直前のアレかつ!」

「良くないモノが特待生寮から溢れるくらいに増えたから、罪善さんや葬儀さん、テディと協力して片っ端からやつつけたんだったか。どうやらその時罪善さんの光が良くないモノが溢れ出る場所、つまりはタイタンの居た場所まで届いていたらしい。」

「その少し後で理事長からセブンスターズにスカウトされて無事闇の世界から脱出したが、あの光が無ければ俺はどうなっていたか分からん。礼を言おうにもあの光の正体が分からなかったが、この前のダークネスとの戦いでまた同じ光を感じたのだ」

『……そう言えばデュエルで罪善さんを使っていたな』

「さらに思い出すと、あの時罪善さんの光に明らかにセブンスターズの誰かが反応していた。誰かまでは分からなかったがタイタンだったらしい。」

「他のセブンスターズが居る時に下手に確かめる訳にもいかなかったが、今回の事でよ

うやく確信できた。……お前のおかげで俺は救われた。感謝する」

再びタイタンは静かに罪善さんの前で跪く。すると、

カタカタ！ カタカタっ！

急に罪善さんからこれまでにない程の光が放たれ、それがタイタンを包み込んだ。今度は何だ一体っ!?

『おやおや。まさか罪善さんの前で罪を告白するとはねえ』

『デイー。一体これはどういう事だ?』

今の今まで天井に張り付いていたデイーが、ふよふよと降りてきた。何やら知っているようなので問い詰める。

『以前話したと思うけど、罪善さんは人間の“罪”を糧にしている。罪善さんの前で自らの悪行……この場合は他者を催眠術を使って再起不能にしたという点だね。それを告白した。それはつまり、罪善さんに自分の罪を差し出したという事』

デイーはそこで一拍置いて、

『罪と一緒に自身の存在も食べられなきや良いけどねえ』

なんかとんでもなく物騒なことを口にした。いやそれシャレにならないからっ!?!
罪善さんストップっ! スト〜ストップっ!!

きれいなタイタンとコスプレ構想

「セブンスターズを穩便に辞める方法？」

俺の言葉に通信機に映る大徳寺先生が怪訝な顔をする。

「どうしたのによ突然？ もしかして balanサーとして働くのが嫌になったかによ？」

……君はこれまでよくやってくれた。辞めたいというのであれば私から止めるような事は一切無いよ。理事長が何か言ってくるかもしれないが、君の功績を考えれば処罰という事もまずない。あつたとしても私が必ず止めてみせる。安心してくれ」

『いや。そういう事じゃなくてですね』

何か察したのか、普段の飄々とした言葉遣いをアムナエルとしてのものに切り替える大徳寺先生。

勿論俺も辞めれるならそれに越したことは無いが、大徳寺先生の代理として立つていゝる以上まだ辞める訳にもいかない。それに本題は別にある。

『少し説明しづらいというか……厄介な状況というか。とにかく一目見てもらえば分かると思います』

俺は通信機の画面を俺の後ろの方に向ける。そこに在るのは、

「人生とは素晴らしいっ！ 見よっ！ 世界はこんなにも美しく光り輝いているっ！」
『それは単にアンタが輝いているから周りもそう見えるだけだよタイタン』

罪善さんの光を受け、すっかり身と心とついでに服まで真っ白になったタイタンの姿だった。

「つまり……その罪善に罪を告白して光を浴びた事で、タイタンが浄化されてしまったと」

『どうやらそのようです』

連絡を受けてやってきた大徳寺先生（アムナエルバージョン）に事の次第を説明する。「うむ。この通り闇の欠片すらない正に完善なるパアフエクトな存在になってしまったのだ」

今やすっかりきれいなタイタンとなってしまった仮面の巨漢は、やや巻き舌気味にそんなことを言っただけでポーズを決めている。ちよつと性格まで変わっている気がするけどその渋いボイスで巻き舌は止めてえっ！

ちなみに大徳寺先生が来るまでに色々質問してみたのだが、タイタンの記憶の一部に欠落が見られた。先ほど罪善さんに告白した辺りが妙に穴ぼこになっていて、大まかな事は覚えていても細かな内容を思い出せないとか。

これが罪善さんに「罪」を食べられたという事らしい。タイタン曰くよく覚えていないがやけにスツキリしているとか。人の罪ごと記憶をホイホイ勝手に食べるのはマズいと思うんだがな。

あと今はまた身を隠しているデーイが『これも洗礼の一種かな？ まさか天敵と同じ事が出来るなんてね。……斎王君ともある意味相性が良いかも』とかブツクサ言っていた。これと同じ事が出来る天敵って物騒だな。あと斎王つてどちら様？

「しかし、まさかそのカードの精霊にここまでの力があるとは。……くれぐれもだがバランサーよ」

『分かっています。強制権はありませんが、罪善さんにこれからは勝手に人の罪を食べないようよく言い聞かせて納得してくれました』

大徳寺先生の懸念はもつともだ。まさか罪善さんがするとは思えないが、知らない間にきれいな誰かを量産されてはたまらないからな。……まあ光る頭蓋骨の前で罪を告白する人はそういないと思うが。

ちなみに罪善さんもやり過ぎたと思ったのか、さつきから輝きが落ちてシユンとなっ

ている。

「そこでののだがアムナエルよ。今や善なる私としては、これまでの悪行を悔い改め償いたいと思っっている。具体的に言うと、セブンスターズを抜けて警察に自首したい。力を貸してくれないか」

「……成程。これは確かに厄介な状況だ」

微妙にアレな態度だが、少なくとも償いたいという気持ちは本物らしく真摯に頭を下げるタイタン。だが先生はその言葉に少し考え込む。

俺個人としては、経緯はあれだがタイタンが善人になったのは喜ばしいし、自首して罪を償いたいというのも納得がいく。しかし、

『どう考えても理事長が黙っているとは思えないんですよね』

あの理事長である。人に闇のデュエルを強制したり、性格捻じれてくるくせして権力やら財力を持っている傍迷惑な御方である。下手に辞めるなんて言ったら何をやらからかすか。

「そもそも契約不履行と見なされた瞬間どうなるか……タイタン。確か君が契約した時闇の世界に居たという話だったな」

「ああ。そこで鍵の守り手達を打ち倒すと誓うのなら助けてやると持ち掛けられた。私もこの世界から出られるならと承諾し、この仮面を渡されその力で脱出することが出来

たのだ」

やっぱりその仮面が毎度お馴染み理事長特製闇のアイテムか。光を浴びてタイタンの服まで真っ白になったというのに、仮面はまるで変わっていないからそうじゃないかと思つた。

『では下手に契約不履行となつたら、最悪またタイタンは闇の世界に逆戻り』

「何っ!? 嫌だ。もうあんな所には二度と戻りたくないぞっ!」

きれいなタイタンでも……いや、きれいだからこそより闇の世界に懲りているのだから。自身をかき抱くように震えている。大分ヒドイ目に遭つたらしい。

さて。どうしたものか。

その後も男三人でうんうん考え続けたのだが結局妙案は浮かばず、夜明け前に集まつたのにもうすっかり日が昇る。なのでひとまず解散して各自考えてみようという流れになつた。現実逃避とも言う。

なにぶんタイタンはともかく、俺も大徳寺先生も割と迫っている学園祭の準備もあつて忙しい。レッド寮ではコスプレデュエル大会をやるらしいが、そもそもコスプレつたつて何をすれば良いのやら。

『やっぱりいつもの格好が良いんじゃないかな？ 久城君には丁度着慣れている衣装があるし』

「バカ言うな。 balanサーの格好で出たら鍵の守り手と一触即発になるだろうが。 どう誤魔化せと？」

部屋に戻って授業の準備をしながら、 デイーとそんな馬鹿なやり取りをして気を落ち着ける。

タイタンの事を忘れた訳ではないが、今はこれといった事が思いつかないのも事実だ。 こういう時は一つの事ばかり考えているよりも、時々他の事も考えていると突然妙案が浮かんだりするからな。

「ここはやはり寮の倉庫から先輩達が使っていた衣装を引っ張り出してくるか。 翔が言うには古いカードの衣装ならそれなりにあるらしいし。 エルフの剣士とか」

『ダメダメ。 そんなありきたりなのは面白くないからね。 やるからにはもつと僕が楽し……ゴホンゴホン。 あく……君にあった品じゃないと。 オーダーメイドって奴だよ』

俺普通の品で良いんだけどな。 ちょっと安っぽい衣装で皆とバカ騒ぎするって何か青春っぽいじゃん。 だけどデイーはお気に召さないらしい。

『いくつか衣装の候補も見繕って来たんだ。 君さえ良ければすぐにでも作成に取り掛かれるから、軽く目を通してみてよ！』

「目を通すつてもうすぐ授業に……つてこれ!! 幻想体をモチーフにした衣装じゃないか!」

ふわりと出現した紙の束にちらりと目を通すと、一枚一枚にそれぞれラフ画のような形で衣装が描かれていた。どれもよく幻想体の特徴が出たものばかりだ。

少々派手で機能性に乏しそうな面もあるが、そこはコスプレだから許されるのだろう。……あと何か横に剣や銃といった武器までセットで描いてあるんだが。これ本物じゃないよな?」

『わあっ! 見せて見せて!』

レティシアを筆頭に、何体かの幻想体達が精霊化して紙束に殺到する。自分がモチーフになったものがあるとなれば、それは興味を持つて当然だろう。自分がモチー

『……おい。私をモチーフにしたらしき物まであるぞ。私は幻想体ではないのだが』

『良いじゃないか! ついでだよついで!』

『そうだよネクちゃん。これで仲間外れじゃないよ!』

自分をモチーフにした衣装を見つけ不思議そうな顔をするネクだが、レティシアは喜ばしいとばかりにいつにもましてニコニコしている。

それを見てネクも少しだけ。ほんの少しだけつられて微笑んだように見えた。

「確かにこれは少し面白そうだな。……一部明らかに変なものも混じってるが。何だよこ

のフリッフリの奴!? 明らかに憎しみの女王の格好だろっ!? 俺がこんなの着たら在学中ずっとネタにされるだろうがっ!

『え〜面白いよ絶対! もう大爆笑間違いなし。一発で人気出るよ! まあ落ち着いてジュースでも飲みながら考えようよ』

絶対着ないかなと憎しみの女王衣装の紙は突っ返し、代わりにデイーが差しだしてきた缶ジュースを受け取る。……ってまた蓋が空いた奴じゃないか!?

「毎度毎度……前異世界に行つた時はうっかり飲んでしまつたけどな。しつかりチエツクしてるから蓋が空いた奴を飲んで眠らされたりしないっての!」

『流石にもう引つかからないか。残念』

デイーも引つかかれば儲けもの程度にしか思つていなかったのか、言葉で言うほど残念そうな素振りも見せずに自分でぐびぐびとジュースを啣る。いやだからそれ飲んだら攫われる奴。

『最近じゃ癖になつちやつてね。この飲んだ直後の微炭酸の爽快感と、その後によつてくる気持ちいい睡魔がまた何とも……ぐう〜』

話している最中に眠つてしまい落っこちるデイーを、突如空間を裂いてやって来た漁船とエビ頭の漁師が引つ掴んで攫つて行く。

しつかし不思議な船だ。デイーが言うには本来、ウエルチアースはジュースを飲んで

眠った人を攫つて船で働かせる幻想体らしいが、本当にどこに居ても出現するらしい。

俺自身は覚えていないが、俺が飲まされた異世界にまで突入出来たとか。別の世界にまで干渉できるなんて地味に凄い能力なんだよなあ。……待てよ!?

今何か一瞬間いた気がする。一体なんだろうかと思考を手繰り、

コンコンコン!

「遊児! 起きてるか? そろそろ学園に行く時間だぜ!」

「……ああ。ちよつと待ってくれ。今行く」

扉をノックする音と共に、外から迎えに来てくれたらしい十代の声がする。今何か思いついたような気がするが、まずは学生の身分たる授業に行かないとな。

皆で悩む俺の服

「うおっ！ すっげ〜！ 幻想体のコスプレじゃんっ！」

「良く出来てるんだな！」

「ホントホント。特にこの憎しみの女王ちゃんの衣装なんかもう可愛いの一言だよ！」

昼休み。俺は迫るコスプレデュエル大会に向け衣装の意見を聞くべく、本棟の食堂で食事をしながら十代達に衣装のラフ画を見せていた。

「これどうしたんだよ遊児？」

「俺の知り合いというか……まあそいつがモノ作りが趣味でさ。学園祭の事を聞いてこれを送ってくれたんだ。この中で俺の選んだ奴を俺用に仕立ててくれるってさ」

実際デイーは俺のペンダントなんかも作っているし嘘は言っていない。

「ちなみに、俺が今の所候補に考えているのはこれだ」

ラフ画の中から俺は6枚抜き出して広げる。ひとまず明らかな女性用（憎しみの女王やレティシア、雪の女王）と、見た目のインパクトが強すぎる大鳥などの物を抜いた残りだ。

「どれどれ……罪善さんに死んだ蝶の葬儀、幸せなデイーにヘルパー、絶望の騎士、……」

最後の奴は何だ？」

「ああ。これは正確に言えば幻想体じゃないんだが、まあ候補の一つだ」

ネクモチーフの衣装は、ゆったりとした薄青色のローブを所々黒い革ベルトで縛るというややぶつとんだもの。そんな見た目ではあるが、幻想体自体ぶつとんだ者が多いのであまり違和感がない。

普段使いはゴメンだが、祭りという事でならアリかもしれないと一応候補だ。

「自分でも考えているんだが、やはり皆の意見も聞きたくてな」

「おうー。そういう事なら任せとけよ！俺なら……これが良いな！」

十代が選んだのは葬儀さんの衣装。

どこか喪服を思わせる、白い蝶の翅をあしらった黒のロングコートとズボン。そして小道具として用意された白と黒の二丁拳銃。

全体的に白と黒の二色でまとめられており、どこか落ち着いた雰囲気醸し出している。

「へへっ！ やっぱ二丁拳銃はロマンだよな！ それになんかこう……出来る男ってイメージがあつて格好良いぜ！」

「そうだよな。それにどこかこう……品がある服装だ」

喪服という点がやや不謹慎かもだが、それを補って余りある品格がある。悪くない。

「アニキは格好良き優先っすからね。僕は……そうっすね。憎しみの女王ちゃん服がダメならこれなんかどうっすか？　僕ロイドデッキ使いだから、こういうメカメカしいのも割と好きっす！」

そう言つて翔が指差したのはヘルパーをモチーフにした衣装。

まるでパワードスーツの様に滑らかな白い装甲に覆われ、背中からは4本のアームが伸びている。関節部からチラリと覗くのは何かの回路のような部品。流石に普通に曝け出す物ではないのであくまでファッションだろう。

胸の中央には赤い宝石のようなものが埋め込まれている。ここが点滅したりここからビームが出たりするのだろうか？　だとしたら凄いが。

そう言えば翔はマンガ版で、『変身』というプレイヤーがパワードスーツを装備する珍しいカードを使っていた。こっちの翔もそういうのが好きなのかもしれない。

「確かにSFチックな良きがあるな。隼人はどうだ？　お薦めとかは有るか？」

「俺は……この中だったらこれを薦めるんだな」

隼人が選んだのはテディをモチーフにしたもの。

茶色の毛皮のようなケープを首に巻き、両腕はテディのようなモフモフのグローブを装着している。……もう一度言おう。モフモフである。下手したら自分から抱きしめられに行きたいほどだ。

そしておまけとばかりに頭にはクマ耳を模した付け耳。どちらかと言うと女性向けな気もするが、このくらいなら十分男性でも許容範囲だ。遊園地とかでもよくあるし。

「なんかデス・コアラに似てて気に入ったんだな！」

「ちよつと。それ完全に隼人君の趣味じゃないっすか」

「それを言ったら翔だつて十代だつて自分の好みを言ってるんだな！」

俺の衣装を選ぶはずだったんだけどな。まあ楽しんでる様だから良いけど。

「ふんっ。まったく騒がしい連中だ」

「まあまあ。いつもの事じゃない」

「万丈目！ 明日香も」

「万丈目さんだ」

そこへ万丈目と明日香が料理を乗せたトレイを持って連れ立ってやって来た。この二人の組み合わせは結構珍しいな。不思議に思ったのが顔に出たのか、明日香が笑って説明する。

「万丈目君に食事に誘われたの。丁度ジュンコももえも用があつて私一人だったし、たまには良いかなって」

「そういう事だ。さあ天上院君。このバカ共は放つておいてあちらの席に」
「あら。ここも空いているわよ！」

万丈目が言い終わる前に、明日香はスツと隣のテーブルにトレイを置いて着席してしまつた。

明日香に気がある万丈目としては二人つきりで食事をしたかつたのだろうが、先につかれては仕方ない。渋々とばかりに同じテーブルにトレイを置く。

「それで？ アナタ達は何の話をしていたの？」

「そうそう。聞いてくれよ二人共。実はさあ」

十代はこれまでの事を二人に説明する。

「……つていう訳なんだ」

「久城君が着る衣装を選ぶ筈が、いつの間にか僕らの好きな衣装はどれかって話になつちやつてね」

「どれ。見せてみる。そういう目利きもまた上に立つ者の嗜みだ。天上院君もどうぞ」

「私はあまりそういうのは得意じゃないのだけど」

二人もテーブルに置かれた衣装のラフ画を覗き込む。まあ意見自体は多い方が良いか。

「……どれも悪くないが、久城に合うのはやはりこれだろう」

少し考えた後、万丈目は罪善さんモチーフの衣装をトンと指で叩いた。

それは一見すると地味な服装だ。紺色を基調としたどこぞの制服のような恰好。その膝や肩、胸部などの要所要所を茶色の革のような物で補強している。ちよつとした防護服と言い換えてもいいだろう。

頭部には罪善さんの物と同じ茨の冠。流星に本物の茨だったら刺さりそうなのでそこは偽物だと信じた。

付属するのは罪善さんの姿があらわれた十字架のようなメイス。どこぞの聖女が持っていてそうな形だが、杖ではなく棍棒の一種である。

「これは他の物に比べて華やかさで劣る。しかしその分実際に使う事を前提とした機能美があるように思う。祭りの服装としては些か問題があるが、久城に合った服という意味であれば俺はこれを推す」

「万丈目」

祭りのコスプレとは少し意味合いが違ってくる気がするが、万丈目なりに筋の通った意見だ。参考になる。

「じゃあ最後は私ね。私なら……これにしようかな」

「ここまできたらお約束と言うか、明日香が選んだのはこれまで選ばれなかったセイさんこと絶望の騎士の衣装。」

こちらは憎しみの女王の物とは違いセイさんのドレス姿ではなく、どちらかといえばマントを纏って甲冑を着込んだ西洋の騎士って感じだ。

全体的に青と黒を基調とした色合いなのだが、首周りから裾に向かう毎に少しずつ色が濃くなっている。だがただ濃くなるのではなく、夜がより深くなっていくように所々星のような模様が描かれている。

付属品はこちらはセイさんの使っていた細剣のような物。持ち手に星座があしらわれ、武器でもあり芸術品でもあるという印象を受ける。

「万丈目君はさつきああ言ったけど、やっぱりお祭りなら華やかさは必要よね。その点これなら見た目がきれいだし、はつきりとコスプレだつて分かるから良いと思うわ」

俺に似合うかどうかはひとまず置いておいて、確かにこれは見た目の美しさという意味ではダントツだろう。

しかし皆に意見を出してもらったが、それぞれにちゃんと良さがあつてなかなか決められないな。コスプレがこんなにも奥が深いとは。

結局こちらも昼休み中には決められず、これまでの意見を元に授業が終わつてから自宅で考えることにした。タイタンの事と言い、最近優柔不断になっている気がするな。

だが、

「はい。じゃあ今日の授業はここまでですよ。……あと久城君はこの前の居残り掃除があるから残ってほしいのにな」

授業終わりがけに大徳寺先生から居残りを命じられた。表向きは以前アビドス3世の襲撃時に一人居残り掃除を先送りにした分。しかし大徳寺先生のこちらへの目配せに、何かセブンスターズ絡みの話だなと察する。

「そう言えばそうだった。悪いな皆。先に帰っていてくれ。……遅くなるようだったら夕飯を取り置いてくれると助かる」

「分かったぜ。だけどなるべく早めに戻れよ。飯は温かい内に食べるのが一番だからさ
！」

そうして十代達を先に帰し、生徒達も全員出て行って残るは俺と大徳寺先生のみとなる。

「それで大徳寺先生。わざわざ俺一人を残したという事は……何かありましたか？」

「そうなのにな。ちよつとスケジュール的な問題が発生して、タイタンも含めて急ぎ話し合いが必要になったのにな」

成程。では早速行かなくちやな。場所はいつもの所だと当たりを付けて教室を飛び出そうとし、

「あと居残り掃除の件は本当だからしつかり頼むにゃ！ ほらっ！」

その前に差し出された掃除道具を何とも言えない表情で受け取った。しまらないなあ。本当に。

罰は忘れた頃にやってくる

「えっ!? あと三日以内に準備を終えてセブンスターズとして戦いを開始しろ? 本当
にそんなお達しが来たんですか!?!」

「そうなのにな」

居残り掃除も終わり、学園の一室に集まる俺と大徳寺先生。それと通信機越しだが
イタン。そこに大徳寺先生からもたらされたのはいきなりの時間制限だった。

「ちよつと待つてくださいいよ。これまでは時間制限なんてなかった筈です。なんでまた
急に?」

『そうだ。それに三日後とはいささか急すぎる』

俺とイタンも急に言われてはいささかとは領けない。

それに表向きはともかく、三幻魔の復活の為にデュエリストのエンジーが必要な
上、時間がかかる事自体は向こうも都合が良い筈だ。しかし大徳寺先生も困ったような
顔で返す。

「私に言われても困るのにな。それに久城君の方にも原因があるのにな。久城君はこれ
までバランスサーとして、セブンスターズ達の補佐や鍵の守り手達との戦いの調整を頑

張ってきましたにや」

まあスパイとしては考え物だが、一度請け負った仕事はきつちりやる主義だからな。自分でもかなり頑張ったと思う。それが何か？

「頑張り過ぎにや。最初のダークネスの一件はともかくとしてタニヤに黒蠍盗掘団、そして極めつけにアビドス3世。それぞれ入念に準備してたっぷり時間をかけていった結果、まだ半分もメンバーが残っているのにもうすぐ学園祭にや」

確かに言われてみれば、ダークネスから始まってもう数ヶ月は経っている。この調子では決着が全て着くまでどれだけかかる事か。

「つまりは時間をかけ過ぎだど？」

「そういう事なのにや。理事長個人は時間がかかるのは望む所でも、学園側としてはあんまり長すぎると色々問題があるのにや。セブンスターズの戦いの事をどこからか嗅ぎつけてくる外部の人間を追い払ったりとか」

「……って事は、これって理事長からのお達しじゃなくて」

「うん。鮫島校長からのお達しなのにや」

『双方の陣営のトップから働かされるとは……雇われの身の辛い所よ』

なんだよそつちかよつ?! 言いたい事は分かる。ただでさえ今の時点でややこしい状況なのに、外部から別の勢力が来たらそれこそめちやくちやだもんな。タイタンも不

憫さを感じ取ったのか少しだけ優しい口調だ。

しかし戦いに直接参加しない他の先生方は何をしているのかと思っていたが、案外そうだった方面の対処だったのかもしれない。実力が無いと対処しづらい案件だろうしな。

ただ事情は分かっていたけど、まだタイタンをどう上手い事穏便に辞めさせるか案が出てないんだよな。

「ちなみに二人共。昨日の件だけでも何か思いついたか？」

「流石に一日じや出てこないのにな」

『私も同じくだ』

ダメか。ちなみに俺は……一応さつき十代達と話している時に思い付きはしたんだ。ただかなり荒業だし正直穏便とは言いづらい。だから時間をかけて他の手を考えるつもりだったんだが、

「ちなみに大徳寺先生。三日後までに進捗が無かった場合は？」

「確証はないけれど……どう考えてもあまり良い結果にはならないだろうにや」

『その校長から理事長に連絡が行くとして、それでも動かなければペナルティ。最悪契約不履行と見なされるかもしれないな』

しらばっくれて時間稼ぎもなしと。こりや八方塞がりだな。……仕方ない。最終手

段だな。

「タイタン。……諦めてまた闇の世界行こうか。ちなみに炭酸は飲める方?」

そう聞いた時のタイタンの顔は、仮面越しでも分かるほどに引き攣っていた。



それから三日後。

(マンマ・ミーア。どうしてこんな事になったノ〜ネ)

暗い夜の森の中を歩く鍵の守り手達こと十代・万丈目・明日香・クロノス教諭・大徳寺先生(それと翔や隼人)。その中でクロノス教諭は内心愚痴っていた。

セブンスターズからの挑戦状が届いたのは今日の朝の事。鮫島校長経由で知らされたのは、今日の夜八時に特待生寮にて待つというシンプルな内容。

しかし、クロノス教諭からすればどうしても見過ごせない事が一つだけあった。

(よりにもよって差出人があのだいタンだん〜テ。これは絶対あの事を追求しに来たノ〜ネ)

そう。セブンスターズとして挑戦してきたのがタイタンだというのが大問題だった。タイタンと言えば、以前クロノス教諭が十代を退学に追い込むために雇った自称闇のデュエリストである。教師が生徒を退学させようと企む時点でとんでもない話だが、話はそれだけで終わっていなかった。

なんとこのクロノス教諭。タイタンへの報酬（依頼人の給料三か月分）を未払いなのだ。おまけにタイタンが以前特待生寮で落とされた領収書をネコババする始末。

十代に勝っていないので報酬は払わないと抗弁する事も出来るが、そもそも自分が依頼人だとバラされるのは非常にマズイ。

そんな訳でダラダラと冷や汗を垂らしながら、クロノス教諭はこの事態を打破すべく脳細胞をフル回転させる。こうなったら途中ではぐれたフリでもして、こっそり先に行つて一人でタイタンと話を着けるか。そんな事を考えていた。

だが、ここでそんな悪だくみをするべきではなかった。

コツコツコツっ！

「アウチツ!!? な、何事です〜ノ!? イタタタ〜!」

何故ならここは暗く深い森の中。人を見定め、罪を量り、罰を与える鳥達の棲む場所。森を巡回していた罰鳥が反応し、クロノス教諭のおかつぱ頭に強襲をかけたのだ。

「むっ!? 罰鳥だと!」

「そう言えばコイツこの森で見回りをしてたんだった。……ハネクリボー。近くに大鳥や審判鳥が居ないか警戒してくれ」

幻想体の事を知っている十代と万丈目はとつきに周りの確認。むやみやたらに人を襲う事は無いと判断しているが、遊兎が近くに居ない以上うっかり怒らせでもしたら宥める者が居ない。

なので少し警戒したのだが、どうやらここに居るのは罰鳥のみのおようですぐ警戒を緩める。罰鳥だけならこつちからちよつかいをかけなければ比較的安全だ。そして肝心の罰鳥だが、

「うわあ！ 白くて小つちやくて可愛いっすね！ だけどどつかで見たような気が」

「おいでおいで！ ……あくんもう。どうしてか私の方には寄ってくれないわ」

「俺の所にもなんだな。羨ましいんだなクロノス先生」

「そんな事言っていないで早く何とかしてほしいノ〜ネっ！ イタタ頭だけは止めテ〜ノ!？」

コツコツコツ！

微笑ましいものを見るような顔で呼びかける翔や明日香達には目もくれず、罰鳥はひたすらにクロノス教諭の頭部を突きつけていた。ただ多少なれど手加減はしているよ

うで、赤くはなっている血が出るまではいっていない。

しかしそれでも痛いものは痛い。クロノス教諭は何とか振り払おうと腕を振り回すのだが、罰鳥はひらりひらりと躲していく。

「ノオオオっ!?!」

これはたまらないとばかりに一人駆け出すクロノス教諭。だが罰鳥はクロノス教諭の頭上をとつてパタパタと猛追。あつけにとられた他の面子を置いて熾烈なデッドヒート開始である。

「あっ!?! ちよつとクロノス先生っ!?!」

「あくあ。クロノス先生あんなにはしゃいじやつて。私と一緒に引率するという話はどうなったのにやまったく」

「そんな事言ってる場合じゃないですよ大徳寺先生! 早く追わないと」

「分かっていますのにや!」

慌ててクロノス教諭の後を追う鍵の守り手達。そして、森を抜けて特待生寮に辿り着いた所で目にしたのは、

「……その意気や良し。分かった。私の相手はお前だ。クロノス・デ・メデイチよ」

「かかってくるノ〜ネこの自称闇のデュエリストっ! 決して闇は光を凌駕出来ないと教えてやるノ〜ネ!」

『両者やる気十分で大変結構。では二人共、奥へどうぞ』

バチバチに闘志を滾らせるクロノス教諭と仮面の白い巨漢。そして二人を導くように手で寮の入り口を指し示す balanサーと、パタパタと未だクロノス教諭の頭上を舞う罰鳥の姿だった。

クロノス対タイタン 機械対悪魔



『いよいよだが、準備は良いかタイタン?』

特待生寮の前にて、 balanサーの格好の俺とタイタンは決戦前の話し合いをしていた。

この三日間準備はしたが、作戦の成功率は正直微妙だ。俺が提案したとはいえ、一つ間違えばある意味死ぬより辛い目に遭う事になる。だというのにタイタンは、

「ああ。例の品も用意し、今日までで出来る限りの準備は済ませた。あとは戦いに臨むのみだ。 balanサーはどんと構えてこの善なるタイタンの戦い……いや、悪辣なる闇のデユエリストタイタンの戦いを見ているが良い」

そう言つて笑つた。……いや、無理に笑つてみせた。

かつて闇の世界に堕ちた者だからこそ、その辛さと恐怖は身に染みているだろうに。それでも己を奮い立たせるべく笑うタイタンに、俺はそれ以上何を言えば良いか分からなかつた。

さて。そろそろ時間だと鍵の守り手達を待ち受けていたのだが、

「ノオオオっ!!」

「なっ!! クロノス先生っ!!」

何故か一番乗りはクロノス先生。頭を罰鳥に突つつかれながら凄まじい勢いで走り込んできた。また悪だくみでもして罰鳥に察知されたらしい。

クロノス先生はこちらを見るや、慌てて服と頭を整えシャキツとした態度をとる。いや先ほどの件ずつと見えてますから。今さらですよ。

そんな事を思いながらも俺は意識を切り替えるべくゴホンと咳ばらいを一回。罰鳥も空気を読んだのか突くのを止めてクロノス先生の頭の上に止まる。……いやそこかよっ!! クロノス先生も冷や汗を流してゐるぞ。

『アナタが一番乗りですか。その様子だと……アナタが此度の戦いに出るといふ事で構いませんか?』

「ちよっ!! ちよつと待つゝノっ!! ワタゝシはそのタイタンに個人的な話があつて先によつてきたノゝネ。……あと何かタイタン白くなつてゐるノゝネ?」

話? というか知り合いだったのかこの二人。

「……成程。あの件か。詳しくは自分でも思い出せぬが、それならば確かに話を通す必

要があるうな。 balanサーよ。 少々席を外す。 あちらで話すとしようではないかクロノス教諭」

視線を向けるとタイタンは軽く頷き、そのままクロノス先生と一緒に建物の陰に移動する。 内緒話を盗み聞きするのはマナー違反だと思いい俺は待機していたのだが、

「……ノッネ。 ……料金……」

「……………三か月……未払い……上乘せ」

「……………待つッネ！ ……領収書……振込……ノッネ」

何やら料金だの未払いだのちよろちよろ聞こえてくるな。 どうやら金のやり取りをしていたらしい。 こそこそ話すのは良いがそういうのは聞こえないようにやってほしい。

少しして戻ってきた時には、何故かクロノス先生が少しだけやつれたような顔をしていた。 戦う前からこれで大丈夫か？

「話をついた。 こちらのクロノス教諭とは以前少し面識があつてな。 その時の清算をしていたのだ。 これでおおよそ解決だ」

『そ、それは良かったな』

よく分からないが解決したのならそれで良い。 次はこれからの事を考えよう。

『では改めて。 これから他の鍵の守り手が来るわけですが、タイタンとの戦いはそちら

に任せるといふ事で宜しいので?』

「そ、それは……」

俺が問いかけると、クロノス先生は少しだけ迷っているように感じられた。

思えば前回のアビドス3世の時もそうだったように思う。カイザーが戦うと決まった時、クロノス先生はホツとしたような心配するような顔をしていた。色々と葛藤があるのだろう。そこへ、

「……フフフ。フハハハハ!」

「何がおかしいノ〜ネ?」

「これが笑わずにいられようか! よりにもよってお前が生徒の事を心配するとはなハハハハハっ!」

突如タイタンが仮面の上から顔に手を当てて笑い始めた。それはクロノス先生を嘲笑うようで、それでいてどこか試しているようで。

「ハハハ……はあ。良いだろう。なら望み通りクロノス教諭は後回しにしてやろうではないか! だがその代わり、それ以外の鍵の守り手を闇のデュエルで闇の世界に引きずり込んでやろう! この闇のデュエリストタイタンがなあ!」

「な、何でス〜ト!?!」

「最近ではセブンスターズも大分減ってしまったからなあ。闇の世界に引きずり込み、立

派な闇のデュエリストにしてやろう。最初は……そうだな。あの明日香とかいう女が
良いか。兄妹揃って闇のデュエリストになればさぞ喜ぶ事だろうよ」

タイタンがとても渋い声で凄井下衆な事を言う。俺はただ成り行きを見守るだけだ。
そして、

「……るノ〜ネ」

「おやあ？ 聞こえんなあ？ 今何か言ったか？」

「黙るノ〜ネこの悪党っ！」

クロノス先生がキツとタイタンを見据えて一喝した。

「ワタ〜シとした事が、こんな輩に協力を仰いでいたナン〜テ、メデイチ家の恥なノ〜
ネ。彼らは私の大事な生徒。お前などに指一本触れさせはしないノ〜ネっ！」

その言葉に迷いはなく、しっかりと地を踏みしめるその立ち姿はどこか覚悟を決めた
男のもの。

それを見たタイタンは、一瞬だけ納得したかのように頷いたかと思うと、

「……その意気や良し。分かった。私の相手はお前だ。クロノス・デ・メデイチよ」

「かかってくるノ〜ネこの自称闇のデュエリストっ！ 決して闇は光を凌駕出来ない
と教えてやるノ〜ネ！」

これは戦うのはこの二人で決まりだな。そこへ丁度他の鍵の守り手達も駆けつけて

くる。丁度良い。

『両者やる気十分で大変結構。では二人共、奥へどうぞ』

こうなれば俺は進行役として粛々と進めるのみ。それぞれに特待生寮の中に入るよう促していく。

さあ。これからだ。……とところで罰鳥よ。このシリアスな場面でクロノス先生の頭に乗ったままというのは笑つちやうから止めてくれ。

特待生寮の地下。奇しくも以前十代とタイタンが戦った場所。そこが今回の戦いの舞台だった。俺達が居る側の反対では、

「前も思ったけど……ここ何か嫌な感じね」

「全くっす」

「俺も同感なんだな」

以前囚われの身になった明日香や、当事者である翔・隼人なんかはどこか居心地が悪そうにしているのに、肝心の十代はまるでケロッとしている。それどころか、

「大丈夫か？ 震えてるぞ？」

「何なら俺が代わろうか？ タイタンとは前にも一度戦ったし」

「これは武者震いなノ〜ネ！ そんな心配生徒がするんじゃないやませ〜ノ」
 戦いの前に緊張しているのかと、クロノス先生に万丈目と一緒に呼び掛ける余裕がある始末。だがクロノス先生は心配ないとばかりに部屋の中央に進み出る。

自身のコートと一体化する特注のデュエルディスクを装備し、デツキをセットするその様子は気合十分。武者震いというのは間違っていないさそうだ。それにしても、

『タイタン。さっきのアレはやり過ぎじゃないか？ アレじゃ悪党というより下衆とか外道だ。それに鍵の守り手が全員揃ってから始める手筈だっただろ？』

「まあ良いではないか。芝居は多少オーバーな方が良い。……これで奴も本気になっただろう」

俺がこつそり指摘すると、タイタンは軽く笑って返す。

そう。さっきタイタンが言ったことはただの演技。実際に相手を闇の世界に引きずり込もうなどとはまるで考えていない。罰鳥がさっきから突きに行かないのがその証拠だ。

あとは出来る限りヘイトを稼いで盛大に負ければ次の作戦に移れるのだが、

「 balanサーよ。予定変更だ。このデュエル……全力で行く」

『……急だな。何かあったか？』

「ああ。他の相手であれば当初の予定通りわざと負ける筈だった。だが、今の奴は例外

だ」

突然の宣言に内心驚きながらも尋ねると、タイタンはクロノス先生にじつと視線を向ける。さっきの話の中で何か気にかかる事でもあったのだろうか？

『……分かった。だけど全力で行っても勝てるとは限らないぞ。クロノス先生の实力は本物だ』

「ああ。そうでなければ困る。……では、行くとしよう」

タイタンもそう言ってデュエルディスクを展開。悠然と舞台中央に足を運ぶ。と言っても俺も最終確認の為に一緒に行くんだがな。

『では最終確認を。鍵の守り手からはクロノス・デ・メデイチ先生。セブンスターズからはタイタン。両者異存はないか？』

「ない」

「ないノ〜ネ」

外野からは十代が「はいはい！俺がやる！」と言っていたが無視する。どう見てもこつちの二人が納得しそうにないからな。

「して、決闘のルールは如何になノ〜ネ？」

「至ってシンプルだ。勝者が鍵を手に入れ、敗者は闇の世界に引きずり込まれる闇のデュエル。それはこの私さえも例外ではない。……まあ勝つのは私だがな」

「なくにが闇のデュエルなノ〜ネ。そんなまやかし。私には通用しないノ〜ネ」

「クロノス先生っ！ 油断すんな！ 闇のデュエルってのは本当に」

「ノン！ ノンノンノン！ それ以上言うんじゃありません〜ノドロップアウトボーイ。さあ。デュエルを始めるノ〜ネ」

闇のデュエルを認めないクロノス先生に忠告する十代だが、クロノス先生はそれをはねのける。……何だろう？ 信じていないというよりこの反応は……まあ良いか。今はこっちの事だ。

「ハハハ。もつと生徒の言葉に耳を傾けても良いのだぞ。これがお前の別れの言葉となる……いや、どうせすぐに向こうの世界で再会するのだから変わらぬかあ？」

『タイタン。試合前の挑発はもうその辺で。あとはカードで語るものだ。では両者構えて。タイミングはそちらに預けるぞ』

タイタンが何を思っただこまでクロノス先生に拘るのかは分からない。だが、今日の俺の仕事は審判役と戦いの後がメインだ。

予定とは少し違うが、全力でぶつかるといふのならそれはそれで良い。さあ。始まるぞ。

「デュエル!!」

クロノス LP4000

タイタン LP4000

今ここに戦いの火蓋が切られる。

「先攻は私が貰う。ドロロー。……私は『ヘルポーンデーモン』を攻撃表示で召喚。さらにカードを2枚伏せターンエンドだ」

ヘルポーンデーモン ATK1200

タイタンの場に両腕が剣と鉤爪になつてゐる悪魔の兵隊が出現する。相手のカード効果の対象になつた時、サイコロを振つてその目により効果を無効に出来るチェスデーモンシリーズの一つだ。

「あいつらかあ。俺も結構苦戦したんだよな。あの時はタイタンが出目をイカサマしてたっぽいけど」

「フハハ。今の私はそのような小細工をしなくとも、この溢れる闇の力で良き目を引き寄せられるのだよ。さあクロノス教諭。お前のターンだ」

「ハッ！ そんな虚偽脅しに引つかかる私じゃないでスゥ。私のターン」

十代が独り言ちる中、クロノス先生もカードをドロローする。

「さしずめそのモンスターはブラフですネ。弱小モンスターを囿に罫を仕掛けるなんて

見え透いていきます。ならば私は永続魔法『古代の機械城』アンティーク・ギアキャッスルを発動し、さらに『古代の機械兵士』アンティーク・ギアソルジャーを攻撃表示で召喚します。

カードの発動と共に、クロノス先生の場に中世ヨーロッパ風の砦のような建造物が出て。加えて全身歯車で出来た兵士が砦を背にするように現れる。

古代の機械兵士 ATK1300↓1600

古代の機械城 カウンター0↓1

「上手いんだな！ 古代の機械城がある限り、全ての古代の機械の攻撃力は300アツプするんだな！」

「そして古代の機械と名の付くカードが召喚される度カウンターが乗る。次への布石もバッチリって訳か」

解説どうも隼人に万丈目。実際1ターン目に土台となる機械城の発動は大きい。300アツプというのは意外に馬鹿にならないからな。

「ほお。攻撃力が上がったか。さあ。攻撃してくるが良い」

タイタンは余裕を崩さない。伏せてあるカードに自信があるという事だろうか？

だけどなタイタン。古代の機械の特性は、

「言われるまでもないノ〜ネ。古代の機械兵士でヘルポーンデーモンに攻撃！ ちなみに古代の機械の大半が、攻撃する場合相手はダメージステップ終了時まで魔法・畏力ー

ドを発動できない”効果があるので御注意なノ〜ネ。当然古代の機械兵士もあるノ〜ネ」

「ナニイっ!？」

タイタン LP4000↓3600

伏せカードで返り討ちにしようとしたのだろうタイタンの思惑は、機械兵士の銃撃でヘルポーンデーモンが破壊されるだけの結果に終わった。

「私はカードを一枚伏せてターンエンド。ふふん。戦いは華麗でなければなりません。このクロノス・デ・メデイチ。舐めてもらっては困ります〜ノヨ」

そう自慢げに語るクロノス先生は、間違いなく実技担当最高責任者の貫禄に満ちていた。

頭に罰鳥が乗ってなきやもつとカツコ良かったんだけどな。

クロノス対タイタン 闇に躍る闘牛士

クロノス LP4000 手札3 モンスター 古代の機械兵士 魔法・罠 古代の
機械城 伏せ1

タイタン LP3600 手札4 モンスター0 魔法・罠 伏せ1

「凄いぞクロノス先生！」

「流石クロノス教諭。見事な先制攻撃です」

「それほどでもあるノ〜ネ！ さあタイタン。この勢いでけちよんけちよんにしてやる
ノ〜ネ！」

翔とカイザーから称賛を浴びながら、クロノス先生は軽く胸を張ってターンを相手に
渡す。しかし、

「いやいや。流石はデュエルアカデミアの教師様だ。だがこちらもこの程度は想定済み
よ。私のターン。ドロ〜」

タイタンはまるで余裕を崩さない。口元には軽い笑みを浮かべ、静かにドロ〜した

カードを確認する。

「では、ここは一つ私の新たな下僕を紹介しよう。私は手札から儀式魔法『マタドール降臨の儀式 ダーク・パセオ』を発動！ 手札の『迅雷の魔王―スカル・デーモン』を生け贄に、レベル6『デーモンズ・マタドール』を準備表示で儀式召喚する」

デーモンズ・マタドール 星6 ATK0 DEF0 戦士族 闇

儀式モンスター。専用の儀式魔法を使用する事で呼び出される玄人向けのモンスター。そんな珍しいカードとしてタイタンが呼び出したのは、両腕が皮膜のような一本角の人型悪魔……ってどうかあの見た目で戦士族っ!?

「攻撃力準備力共に0でス〜ト?」

「続けて私は『デーモン・ピカドール』を攻撃表示で召喚」

デーモン・ピカドール 星4 ATK1600 DEF1200 戦士族 闇

マタドールの横に並び立つは、骨で出来た獣に跨る骨の装飾をあしらった悪魔……つばい戦士。だから紛らわしいってのっ!

しかしマタドールにピカドール。どちらも闘牛士の意味だが。

「さて。長らく待たせたな。これからが本当の闇のデュエルだ。私の授かった闇のアイテムが今目覚めるっ! 見よ。これぞ闇の闘牛場っ! フィールド魔法『ダーク・アリーナ』を発動!」

その瞬間、周囲を闇が包み込んだ。

「何？ 何事なの〜ネ!? 停電なの〜ネ？」

『これはっ!!』

気づけば辺りは真つ暗闇。カードの演出……っただけでもなさそうだな。

少しずつ暗闇に目を慣らして周囲を探ると、どうやらこの闇の中に居るのは戦っていたクロノス先生とタイタン。そして俺だけらしい。

タイタンの周囲に広がるは骨で出来たドーム。ドームから流れる闇はリングの周囲を覆い僅かに黒雷を纏っている。他の面子とは隔絶されてしまったようだ。

『ほうほう。これはまた……厄介な事になったねえ』

少し訂正。神出鬼没なディーもここに居た。どうせこの暗闇の中じゃ気づかれないと思つての事だろう。あとクロノス先生の頭に乗ったままだった罰鳥も。

『あのダーク・アリーナというカード。精霊でこそないけど本当に闇の力が込められている。成程。それと仮面の力を合わせれば、確かに今のタイタンは闇のデュエリストと言えるだろうね』

『解説どうも。しかしダーク・アリーナもマタドール達も俺の知らないカードだ。アニ

メモリジナルか？」

『そうだよ。効果は……まあ見てれば分かるかな』

そうだった。暗闇に驚いていたクロノス先生も、あくまでカードの演出だと自分を納得させたようでもた姿勢を正している。

さあタイタン。次はどう出る？

「ではカードの説明でもしようか。ダーク・アリーナが、この闇がある限り、互いの攻撃表示モンスターは全て攻撃しなければならず、攻撃対象は相手プレイヤーが選択する。これは私もお前も同じ条件だ」

「ハッ！ 急に真つ暗闇にして動揺を誘うだなんぐテ、私にそんな盤外戦術は通用しませんぐノ」

「どうかかな？ 闇を通して僅かに恐怖に怯えるお前の姿が見えているぞ。ではバトルフェイズ。デーモン・ピカドールで攻撃」

タイタンの号令により、闘牛士の一体が骨の獣を駆って突撃する。

「攻撃力は1600。古代の機械兵士と同じ。相打ち狙いでス〜ノ？」

「それはどうかかな？ ピカドールは場にダーク・アリーナがある時、プレイヤーに直接攻

撃出来るのだ」

その言葉にクロノス先生の顔色が変わる。どのモンスターに攻撃するかは決められても、そもそもモンスターではなくプレイヤーに攻撃されてはとうしようもない。

駆けるピカドールは一気に機械兵士を飛び越え、そのまま骨の装飾から光線を放ちクロノス先生に襲い掛かった。

クロノス LP4000↓2400

「こ、この痛みは!? まさか、闇のデュエルとやらは、現実には……ぬう!?」

痛みにたまらずよろめくクロノス先生。考えてみたら闇のデュエル初めてだったな。だけど、

『タイタンっ! どういう事だっ!』

事前の計画ではこの闇のデュエルは見掛け倒し。見かけだけはそれっぽく見えても実際は痛覚などは大分控えめにするという話だった。

しかしクロノス先生のダメージはどう見ても本物。これはやりすぎだろうと流石に問い質すが、

「黙って見ていろ balanサーっ! このダーク・アリーナが発動している限り、私自身抑えることは出来ぬ。……言っただろう。全力で行くと」

見れば闇に薄ら見えるタイタンの姿は先ほどと少し変わっていた。

真つ白に漂白された服装は変わらないが、顔に着けた仮面が生き物のように脈打ち、そこを中心に異常なほどタイタンの血管が身体中の表面に浮き出ている。

さらによく見れば、場のダーク・アリーナやマタドール達へ向けて何か黒い力の流れのようなものがタイタン……正確に言うるとタイタンの仮面から流れ込んでいく。

『おや。タイタン君つたら暴走してない？ 闇のアイテムの力に吞まれかけてないかい？』

『……かもしれない』

だがバランスーとしてはデュエルに途中から割り込むわけにもいかず、今はただデュエルを見守るしかない。

「私はこれでターンエンド。さあお前のターンだ」

「ぐぬぬっ！ 私は栄光あるデュエルアカデミア実技担当最高責任者。断じて闇のデュエルなど、認める訳にはいきませぬっ！ ドローー！」

クロノス先生は痛みをこらえながらカードをドローする。

「私は魔法カード『天使の施し』を発動！ カードを3枚ドローし、その後手札から2枚捨てるノ〜ネー！」

ここで手札交換カードか。枚数こそ変わらないものの、狙ったカードを手札に持つてくる確率がこれでかなり高まった。そしてクロノス先生は少しだけ手札を見て黙考し、

考えがまとまったのかタイタンに向き直る。

「色々と策を弄しているようだが、もう準備は済んだのかな？ 実技担当最高責任者殿

？」

「無論なノ〜ネ！ おそらくアナ〜タは、その攻撃力0のモンスターを攻撃させないためにダーク・アリーナを使っていると見ましました〜ノ。ならば、私は古代の機械兵士を生け贄に『古代の機械アンティーク・ギアヒースト獣』を攻撃表示で召喚するノ〜ネ！」

古代の機械獣 星6 ATK2000↓2300

古代の機械城 カウンター1↓2

クロノス先生が機械兵士を生け贄に呼び出したのは、機械兵士と同じく全身歯車で出来た鋼鉄の獣。当然機械城の効果で攻撃力が上がり、カウンターも一つ増える。

「攻撃対象を相手が決めるのナ〜ラ、どつちを選んででも倒せるモンスターを出せば良いだけの話なノ〜ネ！ バトルフェイズ。行くノ〜ネ古代の機械獣！」

古代の機械獣が闇の中に飛び込んでいく。

そう来たか。機械獣は機械兵士と同じく攻撃時に相手の魔法・罫を封じる効果がある。そして仮に破壊することで効果が発動する相手であっても、その効果を無効にする効果も併せ持つ。これで一気に押し切るつもりか。だが、

「ならば私は、デーモンズ・マタドールでお相手しよう」

「何でス〜ト?」

クロノス先生の読みは外れ、飛びかかる鋼鉄の獣を迎え撃つは守備力0のマタドール。普通なら勝つのは当然攻撃力の高い獣だ。だが、

「なっ!?!」

マタドールはそのマントのような皮膜を器用に操り獣の突進を躲すと、すれ違いざまにその角から光線を発射。獣を貫き爆散させる。その結果にクロノス先生も仰天。

「な、何故でス〜ト?!? 攻撃力はこちらの方が上。おまけに相手は守備表示。戦闘でこちらが破壊される訳ないノ〜ネっ!?!」

「失礼。解説が遅れたな。デーモンズ・マタドールは戦闘では破壊されず、戦闘ダメージも受けない。だがコイツと戦闘した相手は破壊されるのだよ。自分からは攻撃できないがねえ」

えげつないな。クロノス先生の読みは全くの真逆。ダーク・アリーナでマタドールを守るんじやくて、ダーク・アリーナでマタドールが守っている。攻撃力も守備力も不要とばかりに攻撃をいなす闘牛士って訳だ。

おまけにこの時点でタイタンのコンボは粗方完成している。

ダーク・アリーナがある限り、クロノス先生がバトルを仕掛けても全てマタドールに対象を変えられそのまま破壊。しかもどんな攻撃力の高いカードでもダメージが通ら

ない。

かと言ってまごまごしていたら、直接攻撃できるピカドールによってジワジワLPを削られる。

真つ当な殴り合いでは圧倒的不利。クロノス先生はどう切り抜けるか。

「ぐぬぬ〜っ！ 私はカードを1枚伏せ、ターンエンドなノ〜ネ」

「伏せカードで守りを固めてきたか。だがそれでどこまで凌げるかな？ 私のターン」

「タイタンの今の手札は0。クロノス先生のLPを考えると、ここで追撃用のモンスターでも出されたらかなり苦しいが、

「……バトルだ。デーモン・ピカドールで直接攻撃！」

「どうやら追撃用のカードは引けなかったらしい。しかし落胆することもなく、タイタンはピカドールに攻撃命令を降す。」

「その後は先ほどの繰り返し。ダーク・アリーナの補助を受けるまでもなく、モンスターの居ないクロノス先生に向けて直接攻撃が叩き込まれる。」

クロノス LP 2400 ↓ 800

「うぎぎやああっ!？」

激痛に耐えかねてクロノス先生の絶叫が響く。だが、ここでクロノス先生も意地を見せる。

「……畏発動！　だ、『ダメージ・コンデンサー』なノクネ！　自身が戦闘ダメージを受けた時……その数値以下の攻撃力の、モンスター1体を、デッキから攻撃表示で特殊召喚できるノクネ！」

古代の機械兵士　ATK1300↓1600

息も絶え絶えながらも、クロノス先生が呼び出したのは2枚目の古代の機械兵士。そのままでは攻撃にも守備にもあまり役立ちそうにないが。居るのと居ないのでは大分違う。

またダメージ・コンデンサーは本来コストに手札を1枚捨てるのだが、それが無いのはアニメ版だからだと置いておこう。

とにかくまだクロノス先生は諦めていない。少しでも希望を次のターンに繋ぐべく全力で行動している。だが、

「メインフェイズ2へ移行。私は装備魔法『フオールン・ダウン墮落』を発動！　このカードを装備したモンスターのコントロールを得る。対象は勿論古代の機械兵士だ。さあ！　闇に堕ちるがいい」

現実とは実に非情だ。

クロノス対タイタン 闇を穿つ鳥と拳

「ぐっ!? ぐぬぬっ」

クロノス先生は苦悶の表情を浮かべる。それも当然か。傷つきながらも発動させたダメージ・コンデンサーで呼び出した機械兵士が、身体に纏わりついた闇と共にそのまま奪われてしまったのだから。

『墮落』は装備した相手モンスターのコントロールを得るカード。ただしデーモンと名のついたカードが場になれば自壊してしまい、相手のスタンバイフェイズごとに自身は800ダメージを受けるデメリットが有る。

本来なら奪つてすぐ生け贄にするなり墓地に送るなりするのが常道だが、

「フハハ。どうだねクロノス教諭? 自身のモンスターが闇に墮ちるのを見る気分は? これでお前の場はがら空き。もう打つ手もあるまいよ。私はこれでタアーンエンドだ」

今回は純粹にクロノス先生の場を削る事が目的だったらしい。カードを奪っただけでそのまま巻き舌気味に終了を宣言する。

「わ、私のターン」

クロノス先生がカードをドロ―……しようとして手が止まり、そのまま膝を突いてしまふ。見ればその手も微かに震えていた。

「……怖いだろう？ 負けるのが。恐ろしいのだろうか？ 傷つくのが。……お前はそういう男だものなあ。クロノス教諭？」

「な、何を言ってる」

「分かるとも。この闇を通じて、お前の心は手に取るように分かる」

動揺するクロノス先生に対し、タイタンは闇に姿を隠しながらゆっくりと語りかける。

「お前の本質は自己保身と傲慢の塊だ。己の意に沿わぬ者を排除し、教育という名の自身の思想を生徒に押し付ける。……まったく。実に良い教師様だ」

「わ、ワタクシは、そんな事」

「そんな事しないと？ なら何故私のような者と繋がりがあつた!? この闇のデュエリストタイタンとっ！」

そこにタイタンの一喝が響き渡る。……確かにそうだ。さつき金のやり取りをして

いたという事は、少なくとも以前クロノス先生はタイタンに依頼をした事があるという事だ。

それとタイタンのこれまでの言動を照らし合わせれば大体の察しはついてくる。おそらく以前タイタンが十代を襲撃した事件の依頼人は……。

「だが、それは決して責められるものではない。人なら大なり小なり自身が可愛いのは当然の事だ」

そこでタイタンの口調がやや変わる。どこか優しく、それでいて妖しく響く低音の

声。
「降参するサレンダーが良い。お前には闇のデュエリストとして再生する道が待っている。その心根は間違いなく闇にふさわしい。この機械兵士の様にな」

タイタンは闇を纏って自身の場へ移動した機械兵士を顎でしゃくりながら誘惑する。

実際今の盤面はかなり厳しい。クロノス先生の場にモンスターは無く、おまけにこのターンで何とかしなければ次のターンピカドールの一撃で敗北必至。

かと言ってこちらからの攻撃は、全てマタドールとダーク・アリーナのコンボで迎撃される。この厄介な鈍と盾を切り崩さない限り勝機は無い。だが、

「……そうかもしれないノッネ」

今のクロノス先生はもう心身共に傷ついていた。タイタンの誘惑に負けそうになる

程に。クロノス先生はその手をデッキトップに伸ばし、

『……では何故ここに立ったのですか？ クロノス先生』

「バランサーっ!？」

つい口が出てしまった。中立の審判役としては明らかに越権行為。タイタンが咎めるように言うが、これだけは言わせてほしい。この言葉にクロノス先生の手が止まる。『戦いが苛烈なのは知っていた筈。だけど貴方は自身が傷つくのを覚悟の上でここに立った。それは生徒の身に危険が及ぶのを防ぐ為。そして……貴方が教師だからではないのですか?』

クロノス先生は確かに自己保身と傲慢の塊だ。自分の嫌いな十代を排除するため、タイタンや茂木をけしかけるなんて事もした。ランク差別主義者で低ランクには明らかに冷たいしな。

だけど本当に自己保身だけなら、そもそもこんな危険な戦いに自ら身を投じたりはない。

クロノス先生は黙って手を止めたまま動かない。全身を蝕んでいるであろう闇のデュエルのダメージ。圧倒的不利な盤面。ここで降参しても良いと思える条件が揃う中、ここに立ったという責任や倫理観の狭間で揺れている。

そこへ、

パタパタ！

今までずっとクロノス先生の頭に止まっていた罰鳥が急にふわりと飛び立った。

そしてそのまま周囲を覆う闇の外へ出ようとし、バチつと闇から放出された黒雷に阻まれる。だが、それは罰鳥の効果を誘発した。黒雷を攻撃と見なした罰鳥は真つ赤に染まり、

ガブツッ！

黒雷を発する闇ごと、その身体を大きなクチバシと変じて噛み千切った。

えくっ!? アイツあんな事まで出来んのっ!? 物理的ではなく概念的な結界を食い破るとかそんなのアリかっ!? 悠然とポツカリ空いた闇の穴から外へ飛んでいく罰鳥を見ながら、俺は内心冷や汗を流す。

幸いクロノス先生からは見えていなかったようだが、対峙するタイタンからはバツチリ見えていたようで驚愕している。

しかし穴が空いたとはいえそれは人が通るにはやや狭い。出来る事と言ったら……
そう。

「立ってくれよクロノス先生っ！」

外からの声を中に伝えることくらいだ。

その声にクロノス先生が振り向くと、穴からは十代の顔が覗いていた。

「ド、ドロップアウトボーイ!？」

「急に穴が空いたと思ったら中から罰鳥が飛び出してきてよ。何かと思つて覗いてみたら……何か大ピンチみたいじゃねえか」

「……情けない姿を見せてしまったノ〜ネ。これは悪い見本として覚えておくように」
クロノス先生は力なく笑う。そこへ、

「遊城十代か。久しぶりだな」

「タイタンか」

タイタンが闇の中から薄らと姿を見せて声をかけ、十代は僅かに警戒しながら構える。

「まあそう警戒するな。お前は後だ。ここで惨めったらしく降参したクロノスを闇の世に叩き落としてからじつくり料理してやろう」

「取り消せよ。今の言葉」

タイタンの煽るような言葉に十代は鋭く言い放つ。

「惨めったらしく降参なんかしない。クロノス先生は強いぜ。戦つた俺が言うんだから間違いない! ……クロノス先生。見せてくれよ。アンタのターンをっ!」

「……ぐっ！ グヌアアっ！」

ダンつと闇の中に音が響き渡る。それは膝を突いていたクロノス先生が強く地を踏みしめる音。身体を襲っているだろう激痛に耐え、クロノス先生は再び立ち上がる。

「生徒に言われて気づかされるな〜テ、私もまだまだな〜ネ！ ……ワタ〜シはクロノス・デ・メデイチっ！ 誇り高きメデイチ家の一員にして、デュエルアカデミア実技担当最高責任者っ！ 生徒の前で、無様な格好は見せられない〜ネっ！」

「ほお！ あの状態から起き上がるとはな。そこは素直に認めようクロノス教諭。だが、起き上がった所で何が出来る？ お前はどのみちこの闇のデュエルで敗北するのだ。そのまま素直に負けを認めれば良かったものを」

少し驚いた様子のタイタンだったが、すぐに気を取り直してそう問いかける。心を折ろうとする一言一言を、クロノス先生は必死に振り払う。

「このクロノス・デ・メデイチ。断じて闇のデュエルなどに負ける訳にはいきません〜ノ。何故ならっ！ デュエルとは本来青少年に希望の光を与えるものであり、恐怖と闇をもたらすものではない〜ネっ！」

……そうか。だからクロノス先生は頑なに闇のデュエルを認めようとしなかったのか。デュエルとは光であると、誰かの光であってほしいと願って。

「ならば証明してみるのが良い！ このデュエルでっ！」

「証明してやるノ〜ネっ！ 私のターン。……ドローっ！」

クロノス LP800 手札3 モンスター0 魔法・罠 古代の機械城 伏せ1
 タイタン LP3200 手札0 モンスター デーモンズ・マタドール デーモ
 ン・ピカドール 古代の機械兵士 魔法・罠 ダーク・アリーナ 墮落 伏せ1

タイタン LP3200↓2400

墮落の効果でタイタンにダメージが入る。そしてそれが反撃の合図となった。

「私は『古代の機械巨人』^{アンティーク・ギアゴレム}を攻撃表示で召喚するノ〜ネー！」

古代の機械巨人 星8 ATK3000

クロノス先生の場合に、ゴゴゴと轟音を立てながら鋼鉄の巨人が出現する。クロノス先生の代名詞。攻撃力3000に貫通能力を持つエースモンスターだ。

「ナニイ!? バカな!? 機械巨人は星8。生け贄が無いと召喚出来ない筈っ!？」

「機械城の効果。古代の機械を生け贄召喚する場合、必要な生け贄分のカウンターが乗った機械城を代わりに出来るノ〜ネ。そしてさらにバースカードオープン! 『リミッター解除』！」

古代の機械巨人 ATK3000↓6000

そう。機械城にはカウンターが2つ乗っていた。つまり二体分の生け贄の代わりに出来た訳だ。さらにダメ押しとばかりにずっと伏せられていたカードが発動され、ターンの終わりに破壊される代わりに巨人は絶大な力を得る。だが、

「フハハ！ それがどうした？ 攻撃力3000だろうが6000だろうが、このダーク・アリーナとデーモンズ・マタドールが居る限り私には届かない！」

「その通り。確かにこの闇の中で無策に闘牛士に挑んでも返り討ちに遭うだけ。ならば……この闇を取っ払ってしまえば良いノ〜ネ！ ワタ〜シは魔法カード『大嵐』を発動するノ〜ネ！」

「しまっ」

どうやらタイミング的に今のドロウで引いたらしいな。タイタンもマズいと気づいた時にはもう遅い。場の全ての魔法・罠を破壊する大嵐が、タイタンの場のダーク・アリーナと墮落、そして伏せてあったカードを吹き飛ばす。……結局使われないまま破壊されたな。

「バカなっ！ ダーク・アリーナが!? 闇が消えていくっ!?」

ダーク・アリーナが破壊された事で、現実には周囲を覆っていた闇も晴れていく。おっ!!? 十代達も普通に見えるようになってきたな。罰鳥は……あっ!!? 居た！ 部屋の上の方をパタパタ飛んでいる。

「闇さえなくなればこつちのもの。そして墮落が破壊され、古代の機械兵士も戻ってくるノ〜ネ」

その言葉通り、纏わりついていた闇が取り払われ、闇に墮ちた機械兵士はクロノス先生の場に帰還する。

「人間生きていれば闇に墮ちる事だって、悪の道に進む事だってあるノ〜ネ。だけど、それでも切っ掛けさえあれば、また光の道に戻れると私は信じるノ〜ネ！」

「戯言を抜かすなっ！ そんな都合の良い事が」

「ならその切っ掛けを作ってやるノ〜ネ！ 私は魔法カード『アンティーク・ギアハンド古代の機械掌』を機械兵士に装備。バトルなノ〜ネ！ 機械兵士で、デーモンズ・マタドールに攻撃！」

ダーク・アリーナが無くなった事で攻撃対象は自分で選べるようになった。なのにわざわざクロノス先生はマタドールを攻撃する。

「何を考えているか知らんが、マタドールは戦闘で破壊されずダメージも受けない。そして戦闘を行ったモンスターをダメージステップ終了時に破壊するのだぞ！」

「古代の機械掌の効果。装備モンスターと戦闘を行ったモンスターをダメージステップ終了時に破壊するノ〜ネ！ 同じ効果を同じタイミングで発動する場合、先に発動するのはターンプレイヤーの効果。つまり私なノ〜ネ！」

巨大な拳のアタッチメントを着けた機械兵士の鉄拳。マタドールはひらりと皮膜を

使つて拳を受け流そうとするが、その瞬間拳が開いて皮膜ごとマタドールを捉える。こうなつては如何にマタドールと言えどどうしようもなく、そのまま巨大な手に握り潰された。

これがクロノス先生なりの禊ぎ。マタドールは勝つ為に必ず倒す必要はないカードだが、それを闇から帰還した機械兵士が倒す事に意味があると信じたのだろう。

「そして、これでトドメなノ〜ネ！ 古代の機械巨人でデーモン・ピカドールに攻撃！

『アルティメット・パウンド』っ！」

「ぐわあああつ!？」

タイタン LP2400↓0

巨人の自壊をも辞さない豪拳が、もう一体の闘牛士ごとタイタンのLPを吹き飛ばした。

クロノスWIN!

仮面の巨漢は闇へと消える

『勝者。クロノス・デ・メデイチ先生』

「はあ……はあ……や、やったノ〜ネ。……うつ!?!」

俺のコールの通り、勝者はクロノス先生。それは間違いない。だがそのダメージは甚大だった。

息も絶え絶えまともに立つ事すら出来ず、その身体はぐらりと傾く。だが、ガシツ。

「……っ!?! ドロップアウトボーイ!?!」

「カツコ良かったぜ! クロノス先生」

倒れる直前、十代が駆け寄って肩を貸す。一人穴から中を覗いていたからこそ、クロノス先生の消耗にいち早く気が付いたのだろう。

「ぬう!?! ば、バカな!?! 私が……私が負けるなど。それも十代ならまだしも、お前のような奴に」

「タイタン……」

それは先ほどとは真逆の構図。デュエルに敗れ力なく膝を突くタイタンが、事実を受

け入れられないようにそう眩く。クロノス先生は何か言おうとしたが、

「ぬあぁっ!! 止め、止めろっ!!」

「これはっ!!」

突如タイタンの足元から噴き出した黒い煙が周囲を覆う。そして、その中心にいるタイタンは自身の末路を察したのか絶望の叫びを上げる。

「い、嫌だっ! もうあの闇の世界には戻りたくないっ!」

「タイタンっ!! 手をつ!」

クロノス先生は手を伸ばそうとしたが体がまともに動かず、十代もクロノス先生に肩を貸していて動けない。他の鍵の守り手達も距離が離れていて咄嗟に動けず、

「た、助け」

それが鍵の守り手達の聞いたタイタンの最後の言葉となった。足元から噴きあがる黒煙が一気にタイタンを呑み込み……煙が晴れた後には何も残っていないかった。

しばらくその場を静寂が支配した。鍵の守り手達の表情は一樣に暗い。……無理もない。

これまでの戦いでも敗者は何かしらあったが、タニヤも黒蠍盗掘団もアビドスも、ま

だ比較的穏やかな別れだったように思う。全力を尽くした結果の悔いのない消滅だ。

ダークネスに至っては封印されたのはダークネスの精神のみで、吹雪の肉体も精神もそのまま。今回のような生々しく壮絶な、一言で言うとは嫌な消滅の仕方は初めてだったのだから。

だが、本来これが正しい闇のデュエルの敗者の末路だ。マンガ版でもあったような、闇に引きずり込まれるとは多分こういう事なのだ。そして、

『さて。此度の戦い、見事な勝利でした。クロノス先生』

そんな中でも俺は進行役の責務を果たさなければならぬ。気は重いが、なるべく落ち着いた風に語り掛ける。

『タイタンの末路を気に病む事はありません。彼は元々闇の世界に落ちていた所、今回セブンススターズの一員となって勝利する事を条件に脱出していました。これは契約が果たされなかったので引き戻されただけの事です』

「確かにタイタンは悪党だったノ〜ネ。ただ、この終わり方は……どこか哀れなノ〜ネ」「なあバランスー。タイタンはずっとこのままなのか？」

クロノス先生が目を伏せてそう悼むように言う中、十代がふとそんな事を言い出した。流石主人公鋭い所を突いてくる。だが、

『……さてな。俺はただの司会進行役。勝負を滞りなく進める事が仕事であってそれ以

降は認知する所ではない。さあ鍵の守り手の皆様。こちらは事後処理がありますので撤収をお願いします。今日は帰ってゆつくりと心も体もお休めになりますよう」

「その通りにや。クロノス先生も酷いダメージだし、早く鮎川先生に診せた方が良いの
にや。撤収にや撤収！」

俺に呼応するように大徳寺先生も鍵の守り手達に撤収を促し、そろそろと部屋を出て行く。去り際に大徳寺先生と視線が合い、一度軽く頷いていった。そして、

「ドロップアウトボーイ。いや、シニョール十代」

「何だよ改まって？」

「あとで話があるノ〜ネ。……大切な話なノ〜ネ」

立ち去る前に僅かに聞こえたクロノス先生と十代の会話。

一瞬十代は驚いたようだが、すぐに真剣な顔でこくりと頷きそのままクロノス先生に肩を貸して歩いていく。

そうして、この部屋から鍵の守り手達は全員去っていった。念の為確認するがカミューラの僕らしきコウモリも居ない。残ったのは俺と、

「……フハハハハ！ どうだ？ 名演技だっただろうか？」

見つからないよう隠れていたタイタンだけだった。

『名演技過ぎて心を抉り過ぎたかもな。まあここまでなんだかんだ緩い結末だったし、本来闇のデュエルはこういう危ないものなんだと思ひ出させるにはこれで良かったのかも』

悠々と歩いてくるタイタンに、俺は軽く手を上げて応える。

先ほどの一件。実は大半がお芝居だ。と言つても芝居だと知っているのは俺とタイタン、そして大徳寺先生だけだ。

闇に吞まれたように見えたのは、事前にタイタンが準備していた煙球によるもの。足に仕込んだ煙球をデュエルに敗北した瞬間破裂させてそれっぽく見せ、あとはそれに乗じて身を隠すだけ。

単純なトリックではあるが、そこは元々自称闇のデュエリストとして催眠術であくどい商売をしていたタイタン。相手からどのような見えるかを計算するのは得意技だ。それに最後の断末魔的な演技も良かった。

『ダーク・アーリーナを使った時には少し驚いた。あの時の侵食は間違いなく本物だったからな。本当に闇のデュエリストとして暴走したかと冷や冷やしたぞ。……まあ罰鳥

は分かっていたようで動かなかったけどな』

実際あれで闇のデュエルとなった時は肝を冷やしたが、悪心に反応する罰鳥がその時点で動かなかった事からギリギリまで見守る事にした。これは暴走ではなく意味のある行動だと分かったからだ。

『なあタイタン。何故当初の予定を変更してクロノス先生に対して全力で戦ったのか。俺なりに考えてみたんだが……あれはクロノス先生に罪と向き合わせる為じゃないのか?』

タイタンは俺の問いかけに何も言わない。

『未遂に終わったとはいえ、クロノス先生がタイタンに依頼して十代を襲わせたとする。これは立派な犯罪行為だ。だからその分のケジメとして敢えて必要以上に厳しく責め立てた。……違うか?』

「……ふん。買い被りだ。あれは単なる気まぐれで、あれだけ執拗にやれば倒された時に皆が少しは爽快な気分になるかと思っただけの事よ。ただ」

そこでタイタンは一度言葉を切り、クルリと背を向けてポツリと呟いた。

「今や完善体となった私だから分かる。自身の犯した悪行は消えない。それは一生自身を責め苛むのだ。だが……奴は言った。『生きていければ闇に堕ちる事もある。それでも切っ掛けさえあればまた光の道に戻る』と」

そこでタイタンは、こちらに向いてゆつくりと笑いかけた。

「奴自身がそう信じているのであれば、私の様に堕ち続けるようなことはあるまいよ。いずれ自身の行いを自身で見直すだろう。……多少長い目で見る必要はあるだろうがな」

そう言い終わると同時に、タイタンの仮面が急に暗い光を放ち始めた。……いよいよか。その光に誘われたか、どこからともなく黒いスライム状の何か……良くないモノが湧き出てくる。

『もう来たか。この三日間で散々減らしたつてのに』

わざわざこの特待生寮を戦いの舞台にしたのは、十代とタイタンが戦った時の様にこいつらに闇の世界に引きずり込まれる道筋を調える為。

穩便にセブンスターズから抜ける方法。

普通に辞めてもダメ。逃げてても理事長にバレたら処罰されかねない。なら……負け契約不履行になり、処罰を受けたと偽装して身を隠す事。それが俺の思いついた考えだった。

理事長がどうやって敗者を闇に墜とすかはよく分からなかったが、ならこつちで分かるやり方を先にあつらえてしまえば良い。

場所が同じで条件が近ければ、当然原因も近くなる。ここでは前例があるから分かり

やすいしな。あとはタイミングの問題だ。タイタンが負けてから闇に吞まれるまでの間、準備をする時間さえ稼げればいい。

俺は幻想体達と協力し、事前に特待生寮の良くないモノを出来るだけ撃退した。また湧き出てくるだろうが、そうすればタイタンが負けてもすぐ引きずり込まれる事は無いと踏んだからだ。

結果読みは的中。タイタンが自前の手品で消滅を偽装する時間が稼げた。カミュラの監視だけがネックだったがそれもない。これで理事長にもタイタンの末路（偽）が伝わるだろう。あとは、

『タイタン。これを』

少しずつ良くないモノが群がりつつあるタイタンに、俺は準備した物を手渡す。タイタンは足元に群がられて引き攣った顔をしながらも、力強くそれを手に取った。

『こんなギリギリになって言う事でもないんだが、正直成功するかどうかは賭けだ。だが……』

「分かっている。理事長の目から逃れるならこれくらいでないと通じないからな」

一応理論上は上手く行く筈だが、闇の世界となると実証する為に堕ちる訳にも行かずぶつつけ本番だ。

そんな不安だらけの状態で、もはや身体の下半分が良くないモノに覆われつつあるタ

イタンは覚悟を決めたようにそう返した。

『……では最後に言わせてくれ。グッドラック』

「最後ではないさ。……さらばだ」

その言葉と共に良くないモノが一気にタイタンを包み込み、そのまま床に沁み込むように消えていく。

消えた後に残ったのは、タイタンが着けていたウジヤド眼の飾りのついた仮面のみだった。

後日談と学園祭前夜。くせ者達の集う夜

さて、タイタンが消えてからの事を少し語ろうか。

まずクロノス先生の事だが、あの後すぐ医務室に運ばれたものの数日は安静にするよ
うにと診断が下った。タイタンとの戦いは思った以上にハードだったらしい。

まあそれは無理もない。あれは間違いなくガチの闇のデユエル。しかもタイタンは
敢えて厳しめに向かって行ったからな。その分自分の受ける侵食の痛みも上がるつて
のに、それを戦いの中悟られなかったのだから大した役者だよ。

しかしその後予想だにしない事が起きた。なんとクロノス先生が、十代に自分が以前
タイタンに依頼して襲撃させたと告白したのだ。

「ワタシは教師として、生徒に決してしてはいけない事をしてしまいました。謹
んで謝罪する。ネ」

「クロノス先生……」

あのプライドの高いクロノス先生が、自身の非を認めて十代に頭を下げる。偶然本棟
裏を通りがかってそんなシーンを見てしまった俺にどうしろと？ まあ隠れて見てた
けど。

クロノス先生はその後、処罰は覚悟の上だがもし許されるならセブンスターズとの戦いには引き続き参戦させてほしい。生徒だけに今回のような戦いをさせられない。まあ要約するとそう十代に語った。

なんともクロノス先生の株が上がるシーンだが、どうやらタイタンとの戦いでクロノス先生も思う所があつたらしい。まさにタイタンの言つた通り、クロノス先生も自身の行いを自身で見直した訳だ。

まあ結果だけ言うならあのお人好しの十代だ。笑つてクロノス先生を許したさ。

その後、二人で校長先生に事情を説明。クロノス先生のやらかした事は十分クビに値するレベルの悪行だったが、十代のとりなしとクロノス先生が自分から告白したという事から情状酌量の余地ありと判断。

なんとか給料カットとこれからも鍵の守り手として働くという事で解決となった。まあ戦力を削りたくないという校長の思惑もあつたかもしれないが。

そうそう。タイタンがやられた事で、いよいよこれまで動かなかつた奴が遂に重い腰を上げた。カムイラだ。

早速理事長を通して大徳寺先生から辞令が下り、いつもの洞窟にて待ち合わせをした

わけだが、

「短い間だけど、これからどうぞよろしくお願いするわバランサー」

これまで俺に対して敵意をむき出しにしていたカミューラが、着くなり俺にそんな事を言つて笑いかけてきたのだ。どう考えてもおかしい。

『……何だよ。やけに機嫌が良いじゃないか』

「あらあら。私はいつもこんな感じよ。まあやつと準備がおおよそ整つたから機嫌が良いというのは間違いないのだけど」

『準備? ……ああ!』

カミューラはこれまでずっとなんだかんだ理由をつけて参戦を先延ばしにしていた。多分コウモリを通して鍵の守り手達の手の内を探ったり、何かしら策を練っているのだろうと踏んでいたが、いよいよか。

『何が用意できたのかは知らないが、一応調整役として教えてもらつても構わないか?』
「良いわよ! 着いていらして」

そうしてカミューラに連れられたのは、この島にある大きな湖。独自の生態系が出来上がりつつあり釣りにも水遊びにも使えるというスポットだ。

しかしここ数日霧が酷くてあまり立ち寄る者が居ないという話だったが、

『………(´・ω・´)こういう事か』

湖に城が建っていた。

いやバカなのっ!?! タニヤも闘技場を造ったけどこれは流石にないだろうっ!?!

見た目は明らかに中世のそれ。時間が丁度夜だったことから、霧の中の城を月が照らすというなんとも幻想的な風景になっている。

といつても城の周りに無数のコウモリが飛び交い不気味な雰囲気ではあるが。

「どう? これはないかなかの自信作なのよ」

『いやまあ……うん。凄いとさえ言えば凄いな』

「そうでしょう! あの筋肉女の闘技場なんか目じゃないわ。この誇りある吸血鬼一族の末裔である私が、そこらのみすぼらしい舞台で戦う等許されないもの」

意外にカミューラはタニヤに対抗意識を燃やしていたらしい。なんだかんだセブンスターズ二人だけの（黒蠍盗掘団のミーネも加えれば三人だが）女性メンバーだったからな。タニヤの消滅にも立ち会っていたし。

深く聞いてみると、当初は吸血鬼の権能を用いた幻覚を使い、見かけだけそれっぽいものにするつもりだったという。自分の意思一つで瞬く間に消え去る程度の物に。

しかし順番を後回しにし、タニヤの闘技場を見て少し気が変わる。理事長の権力と財

力も使い、情報収集しながら本当に城を建てたのだ。

勿論城なんてものが建っていたら目立ってしようがない。なのでこれまた吸血鬼の権能である霧を操る力で城を覆い隠した。

『……はあ。タニヤの時もそうだったが、こういうのは事前に言つといてくれないか？』
「あら。私が人間風情の顔色を窺うと思つて？」

さりげなく手の甲で口元を隠しながら、カミューラはそうクスクスと笑う。

その後は相変わらず上機嫌のカミューラに城主として城を案内してもらった。見れば見る程あちこち金をかけていて貴族趣味全開。風呂なんかバラが浮いてたもんな。理事長もよく許可したなと少し不安になる。ただ、

『戦いの舞台だけにしては部屋が多いな。客間つて訳でもなさそうだが』

「……ねえ。城主の最大の贅沢を知ってる？ それは何の用途もない部屋を造る事なのよ。さあ。次の場所に行くとしましよう」

途中がらんとして何も無い部屋が幾つもあるのが少し気になった。調度品すらないから客間でもないし……まあすぐにカミューラに急かされて次の部屋に行つたが。

そうして散々城を見て回り、

「如何だったかしら？ 我が城は？」

『いやあ見事としか言えないな。他の城を直接見た事が無いから比較しづらいけど』

「そうでしょうとも。下等な人間でもその程度は分かるようね」

言い方はあれだが、カミューラも城を自慢できてご満悦のようだった。

もう良い頃合いだしそろそろセブンスターズとしての動き方を尋ねようと思ったのだが、

「……今日はここまでにするとしましょう。私もまだ最後の詰めが残っているし、アナタももうすぐ学園祭という物があるのでしょう？ 精々楽しんでくると良いわ」

肝心のカミューラ自身にそう言われては仕方ない。俺はそのまま部屋に戻る事にした。

そして、

『いやあ。君を見てると退屈しないね久城君。まあ退屈しなさそうな人を選んでるのは僕なんだけどね』

「上機嫌のところ悪いんだけどな。……どうだい？ 背中もほつれとかないか？」

『上々！ 我ながら良い仕上がりだ。これなら明日もバツチリだね』

『良く似合っているぞ。管理人』

俺が衣装の具合を確認すると、機嫌よくふわふわ浮いていたデイーと葬儀さんが太鼓

判を押す。

そう。いよいよ明日が学園祭だ。

俺は身に纏った葬儀さんを模した衣装を明日に備えて試着していた。どこか喪服を思わせる、白い蝶の翅をあしらった黒のロングコートとズボン。小道具の二丁拳銃もバツチリだ。

ちなみに当然だが弾は出ない。白と黒のカッコいい見た目だがあくまでファッションだ。ただデーが『そりやあセーフティーはバツチリかけてあるからね。本人が許可しない限りは撃てないさ』と葬儀さんを見て言っていたのがやや気にかかる。ノリで改造とかなしてないだろうなコイツ。

「……そう言えば、レティシアやネクはもう寝たのか？」

『うん。明日早いからもう寝るって』

いつもならこの辺りで幻想体の誰かが精霊化なり実体化なりしてくるのだが、今出ているのは衣装のチェックを頼んだ葬儀さんだけ。今日は静かなものだ。

しかし明日か。確かにレティシアからすれば祭りは楽しみだろう。他の幻想体達も、内心楽しみにしている者も居るかもしれない。

「なあ葬儀さん。明日なんだけど……」

俺はふと思いついた事を、葬儀さんに話してみる事にした。



そうして夜が更けていく。明日の楽しい学園祭に向かって。

「……それで？ 俺に会わせたいその子……十代だったか？ どんな奴なんだ？」

「ああ。俺やお前と同じHERO使いでな。これまたお前みたいに心底からデュエルを楽しむ奴だ。お前もきつと気に入るぜ！ 紅葉ー！」

「そりゃあ楽しみだー！」

「はいはい。その二人。学園祭が楽しみなのは分かるけど、飛行機の中であまり騒がない。……特に紅葉。アナタもプロなんだからその辺りはもつと自覚をもつて」

「分かってるって姉さん。だけど……やっぱり楽しみじゃないか！」

ある飛行機の中ではジャーナリストとプロデュエリスト。そして長期休暇中の学園教師が行先に想いを馳せ、

『楽しみだなあ。……楽しみで眠れなくて困っちゃう』

ポンポン。

『幼子よ。明日を楽しみにするのは構わぬが、このまま起きていて祭りの最中に眠くなっても知らぬぞ』

『うん！ そうだねテディ。女王様！ ちゃんと眠っておかないと。……でも、明日は遊児お兄ちゃんや皆と一緒に……ふっふっ！』

ある主人が先に眠った部屋の片隅で、より良い明日を夢見る少女をぬいぐるみと雪の女王が宥めすかし、

『……………ふっ。ふっふっふ。ふくはっはっは！ おっといかん。つい明日の事を考えて高笑いが』

へっぴっ！ 目的地に到着しました。ムービングプロセスを終了します〜

『ああ。ご苦労ヘルパー。……さて。仕掛けは万全。あとは我が策が上手くいくのを待つのみよ。見ているが良い我が生遊け見贅め。ふくはっはっは！』

ある何もない場所。……いや、地下にある七精門のほぼ真上で、高笑いする人形をお手伝いロボットが見守り、

『ああ。もうすぐ。もうすぐよ。……これで我が一族は復活する。この三幻魔の力さえ手中に入れれば』

湖にそびえる城。その中の何もない部屋の一つで、城主の女吸血鬼は静かにほくそ笑む。

この城はただの囿。敢えて憎い人間であるバランスーに城中を案内したのも、城全体に考えを分散させる為。

勿論拠点としても使えるが、本当に肝心なのはこの何もない部屋七部屋のみ。

『明日は精々楽しむと良いわバランスー。その間に、私は三幻魔の力を手に入れる』
策の成就を胸に、女吸血鬼は思考を巡らす。

そして、時はきっかり真夜中。調整役も主人公も、幻想体や精霊達も眠りについた頃。オシリスレッド寮の屋根の上。

空には丁度雲もなく、月がそつと世界を照らす中、

『……やあ。君か』

起きているのはただ二人。そう。話の傍観者たる光球のデイーと、

『こんばんわ！ お月見には良い夜ね！』

腰まで伸ばした水色の髪。クリっとした黄色の瞳に、ピンクを基調として可愛らしくフリフリの付いたスカートとジャケツト。

胸元にあるリボンとハート形の髪飾りをアクセサリーに、極めつけに星とハートを両端にあしらった独特の形の羽の生えたステッキを携える。

そう。魔法少女がやってきた。

集うはどれもくせ者ぞろい。思惑乱れる学園祭が、いよいよ始まる。

閑話 とある学園祭の一コマ



「お待たせしました。オベリスクブルーブレンドです。ごゆっくりどうぞー」

「キャーっ！ カッコいい！」

「やっぱりブルーの男子ってスマートよねえ」

ここはブルー寮学園祭限定野外カフェ。

学生にしては様になっているウエイターが去っていくのを見ながら、天上院明日香の取り巻きである枕田ジュンコと浜口ももえは黄色い声を上げていた。

「明日香さんも来れば良かったのに」

「仕方ないわよ。お兄さんを連れてレッド寮に出かけるって言うんだもの」

目覚めた当初に比べれば大分身体も復調してきた吹雪だが、記憶の欠落や精神の不安定さはまだ解消されていない。なのでこういうお祭りの時こそ外出の許可を取り、少しでも精神に良い影響を与えようと明日香は動いていた。

明日香の取り巻きである二人も、ある程度は空気を読んで兄妹水入らずの時間を過ごさせてあげたいという気持ちはある。のだが、

「それにしても明日香さん。最近私達に構ってくれないって気がするのよねえ」
「そうですわね。……やはりあの方に惹かれているのでしょいか」

これまでではいつももももえとジユンコは明日香にべったりだった。しかし明日香が十代に興味を持つてから、ちよくちよくレッド寮に通う日々。結果取り巻き達と一緒に居る時間が減ってしまったのだ。

仲の良い友人兼憧れの人を取られたようで、少し不貞腐れながらテーブルに頬杖を突くジユンコ。

「かもねえ……まあ今日は仕方ないにしても、またあのレッドの男子共に負けないようにこつちも明日香さんに……んっ!？」

そうして何の気もなく視線を別の方向に向けると、

『そこなる給仕よ。こちらに参れ』

ふと隅のテーブルに居る女性に目が留まった。

淡いミントのような色の長髪。上下は薄い水色のドレスに身を包み、肩からは濃い青の肩掛け。何の仮装なのか童話の王族が着けるようなテイアラを被り、肌は青白く触れば壊れてしまいそうな程儂く美しい。例えるなら、それは雪や氷のような美しさだ。

とんでもなく目立つ格好の筈なのに、今の今まで気が付かなかつたことをジュンコは不思議に思った。

「はい。お待たせいたしました。お客様」

『うむ。妾の舌にあう良き甘味であった。褒めて遣わす。それとこの“天然かき氷 帝メビウス仕立て”と、“フルーツシャーベット 魂の氷結風”を持って。……ああ。あと“ゴッドハンドクラッシュシャーアイス”のお代わりを』

「か、かしこまりました」

その女性は、皿に盛られたどう見ても普通のカップアイスの数倍はある特大のバナラアイスを見るみる内に匙で掬い取りながら、ウエイターにメニューを見せて追加オーダーをしていた。

とんでもない食べっぷりにウエイターも顔を引きつらせながら、それでもきちんと一礼して去っていったのは中々根性が入っている。

「うわあスツゴ！ 見なよももえ。あの人スツゴイ美人な上にあの食べっぷり。フードファイターかな？」

「本当に。どちら様なのでしょうねえ。……あつ!？」

「ももえっ!？」

ジュンコに勧められ、大きく首を傾けてその女性を見るももえ。しかし驚きと無理に

首を傾げたせいで、普段から少しのんびりしているももえはうつかり体勢を崩してしま
う。

おまけに腕が引つかかかってぐらりと傾くカップ。中にはまだ熱いコーヒーが。ジュ
ンコが気づいて止めようとするも間に合わず、

『おっと。大丈夫かね？ お嬢さん』

そこに現れた男が素早く両腕で倒れかけたももえを抱きとめ、さらに落ちかけたカッ
プを手で掬い上げるように受け止めた。中のコーヒーは一滴たりとも零れていない。

「は、はい。ありがとうござ……っ!？」

咄嗟に礼を言うももえ。だがその言葉は途中で驚きのあまり途切れてしまう。

それも当然だろう。その男は喪服を纏った蝶頭で5本腕の異形だったのだから。

『怪我がないようで何よりだ。折角の祭りに火傷などしてしまつては楽しめないだろう
から。……それとこれはちよつとした忠告だが、あまりまじまじと人が甘味を楽しんで
いる様を覗くものではないよ。相手によっては不快にさせるだろうからね』

蝶頭の男はそつとももえを立たせるように支えながら、二人に優しく諭すようにそう
告げる。

「ももえを助けてくれてありがとうございます！ それと……そのお」
『んっ!? ……ああ！ この姿かね？ もしや見た目で気分を害したかな？ だとしたら申し訳ない。連れが食事を終えて宣伝を終了次第すぐに移動するので許してほしい』
「いえっ！ そうじゃないんです。ただ……不思議な格好で、少し驚いただけなんです。それでその、宣伝……っていうのは？」

蝶頭の男が申し訳なさそうな口調で話すと、ジュンコはぶんぶん顔と顔を横に振って違うと力説。蝶頭の男の宣伝という言葉に、テレビか何かかといつ質問する。

『それはだね……こういう事だ』

蝶頭の男はずっと背中に残った腕で担いでいた何かを見せる。それは、

「レッド寮名物コスプレデュエル大会？」

『ああ。文字通り、カードのモンスターに扮してデュエルを行うという催しだ。と言っても必ず仮装をしなければならないという訳ではないし、デュエルを強制することもない。あくまでどちらも自由参加だ。それに衣装の持ち合わせがなければ現地でも用意がある』

どこか棺にも見える大きな箱に、カードの一種であるデス・コアラとデス・カンガルーが鎧を削る様を描いたポスターが張られていた。

それを見るジュンコに対し、蝶頭の男は淀みない言葉で説明する。

「じゃあ、その格好は？」

『お察しの通り。これも仮装の一つだ。残念ながらレッド寮は毎年観客が少ないようなのでね。こうして宣伝も兼ねて連れと共に各寮を回っているのだよ』

「へえ。……すつごい完成度ですね。腕なんかまるで本物みたい」

明らかに全ての腕が別々の行動をしていて、本当に神経でも通っているのではないかというスムーズな動きに驚きを隠せないジュンコ。そこに、

「……あ、あのっ！ 私浜口ももえと申しますっ！ こちらは友人の枕田ジュンコ。ぜ、是非貴方様のお名前をお聞かせくださいまし！」

突如ももえが蝶頭の男の手を握り、強い意志を感じる言葉で問いかける。その瞳は僅かに潤み、頬は微かに赤く染まっていた。

『ふむ。先に名乗られてしまつては、こちら名乗り返さねばいけないな。……私は』
『葬儀っ！ 何をしておる？ 早くこちらへ来ぬか！』

蝶頭の男が名乗り返そうとした時、そこへ先ほどの冷たいスイーツを爆食していた美女の声が響き渡つた。それを聞いて蝶頭の男は困つたように軽く肩を竦ませる。

『やれやれ。連れの貴婦人のお呼びだ。済まないが失礼させていただく』

蝶頭の男はそう言うトポスターを張つた棺を背負い、去り際に二人に向かつて胸に手を当てながら優雅に一礼した。

『私の名は『死んだ蝶の葬儀』。囚われし魂を哀悼するしか能のない男だが、こうして少しでも誰かの心に残る宣伝が出来れば幸いだ』

「コスプレデュエル大会かあ。オシリスレッドの催しっていうから少し不安だけど、今の人みたいなくオリテイのコスプレだったら少しは面白いかもね。明日香さんもお兄さんで行っている筈だけど、邪魔にならないようこっそり行っちゃおう？ ……ももえ？」

ちよつと冷めたコーヒーを啜りながら、これからの予定を少し変えようかと相方に呼び掛けるジュンコ。だが、

「……素敵な殿方でしたわ」

「あちやく。こっちはこっちで火が着いちやったか。これなら聞くまでもなかつたかな」

今もなお顔が紅潮しっぱなしのももえを見て、ジュンコもそそくさと移動する支度を始めるのだった。

学園祭開幕。宣伝は幻想体と共に



学園祭当日。

空は生憎晴天とまではないかず、むしろやや曇りの度合いの方が多いいった具合。予報では今日は一日中曇り空だとか。

しかし、その程度では学園祭の活気になんら影響はしない。

「らっしやいらっしやいっ！ ラーイエロー特製たこ焼きだよっ！」

「なんのっ！ こっちはお好み焼きだよっ！」

「焼きそばはいかがっ!？」

ここはイエロー寮前の広場。学園祭の為に準備された屋台が列を成し、それぞれ食べ物屋や射的、ヨーヨー釣りなど様々な出し物をしている。

カフェで優雅さや落ち着きを重視したブルー寮。コスプレデュエル大会でデュエリストとしての楽しさを追求したレッド寮。イエロー寮はそのどちらでもなく、純粋に良くイメージされる祭りを楽しんでいた。そして、

『遊児お兄ちゃんっ！ こっちこっちっ！ 早くっ！』

「はいはい。あんまりはしやぎすぎて転ばないようになレティシア」

そこには普通に実体化したレティシアが、目をキラキラさせてお祭りを満喫していた。それを追うのはコスプレデュエル大会の立札を肩に掛け、これまた実体化したテディを背負う遊児。

そう。どうしてこうなったかは、少し前に遡る。



『へえ〜！ コスプレデュエル大会か。面白そうだね！ それでそんな格好を』

通信機越しに茂木が俺の服を見て驚きの声を上げる。

そう。今の俺は普通のオシリスレッド制服ではなく、昨日の内に準備しておいた葬儀さんコスに身を纏っている。腰に提げた二丁拳銃をくるくると回しながら、俺は全身像が良く見えるように少し画面から距離をとった。

残念ながら茂木の体質は未だ治っていない。これまでもちよくちよく俺や十代、万丈目で茂木の寮に行った結果、ほぼ俺達への悪影響が無い事は学園側にも伝わったようだが、それでも一般の生徒に対してはまだ危険だという事で学園祭にも不参加だ。

『まあ出れないのは残念だけど、今年は去年や一昨年よりは楽しいよ。だって……友達がたつぷりとお土産を持ち帰ってくれるって信じてるからね』

「茂木……分かつてる。祭りが終わったら嫌って程土産を持ってきてやるよ。じゃあまたな」

友達という言葉を出されてはそれに応えない訳にはいかない。俺はすっかり約束をして通信を切る。

さて、いよいよ学園祭の始まりだ。衣装もバッチリ整い、あとは各寮の最終調整を残すのみなのだが。

「……おかしい。ディーの奴何処に行つたんだ？」

いつもなら絶対『さあさあやってきました学園祭！これは面白そうで実に見逃せないねえ。あつ!? 久城君も飲むかい？ 気持ちよよく眠気がやってくるけど』とかなんとか囁し立てそうなるものを、朝から一度も姿を見せない。

さらに言えば幻想体達も今日はやけに静かだ。自分から呼び出すつてのもなんか変だしそのままにしているが、部屋で久しぶりに一人になった気がする。

カタカタ!

「おっと。忘れてないよ罪善さん。なんか最初の頃に戻ったみたいだなんて思つてさ。……さて、行くか」

一人俺の横に浮かぶ、最初の頃から変わらず付き添つてくれている優しき頭蓋骨。罪善さんに一声かけて自室の扉を開ける。そして、

『ばあつ!』

「うわっ!?!」

扉の先で待ち伏せていたレティシアとネク、テデイに驚いて腰を抜かした。いきなりの事に罪善さんもオロオロしている。

『ふっ! ざまあないな我が生け贄よ』

『あつ!?! 大丈夫!?! ごめんなさい。ちよつと脅かしすぎちゃつて』

「あいてて……大丈夫大丈夫。少し驚いただけ……つてちよつと待った。よく見たら皆して実体化してるじゃん?! それと……貴女どちら様?」

レティシアの手を借りて立ち上がるが、よく見てみれば各自普通に実体化して地に足が着いている。そして一人見知らぬミント色の長髪の女性が。

『見て分からねのか? 妾だ』

「妾つて……まさか雪の女王つ!?! いつもの格好と違うじゃないか!?! 仮面も着けてないし」

『お忍び用である。聞けば此度の祭りは学生の出し物だとか。普段の装いでは気後れする者も出よう』

確かにこれならまだちよつと派手などつかのご婦人で押し通せない事も……じやなくって!?

「こんな所で精霊の実体化はマズいって。ひとまず部屋に戻って」

『案ずるな。アレを見よ』

「アレ? ……げっ!?!」

雪の女王の指差す先、そこには、

へぴぴっ! 木材加工完了。クラフトプロセスを終了します

「うおおっ! すっげ〜! あつという間に板が均一にっ! 流石万丈目グループの新

型家電ロボ!」

刃物の付いた4本のアームを器用に操り、クラスメイトを手伝って瞬く間にステージに使うベニヤ板を線に沿って裁断していくヘルパー。その横では、

『ふむ。デス・コアラとデス・カンガル―か。中々のものだ』

「ありがとうなんだな!」

「もうコスプレだなんて気合入ってるっすね! ところで君誰?」

『ああ。『死んだ蝶の葬儀』だ。よろしく』

隼人の描いた宣伝用の看板の前に、普通に葬儀さんが翔達と談笑していた。

『あのように、精霊だろうがここではコスプレで通っている。ヘルパーに至ってはただの高性能な機械だ。誰も疑わぬ』

「うゝむ。確かに」

ヘルパーは掃除関係の事を言ったら暴走するからヤバいけど、まあ横に葬儀さんが付いているならギリギリ抑えられるか。しかし万丈目グループの新作って……。

いや予想はしてただけだね。学園祭なんていかにもなイベントで幻想体達が黙っている訳ないって。

実際俺も昨日の夜、葬儀さんによっては保護者として皆の面倒を見てほしいって頼んだしな。

しかし少しなら実体化して良いと俺から切り出す筈だったのに……これは誰かフライングしてなし崩し的にって奴か？ まあ良いけど。

『さて。我が生け贄よ。些か安全面では心配事もあるうが、そのような事は些事だ』

そこへネクがレティシアの手から離れ、自身の足でしっかりと地を踏みしめながら言う。

『セブンスターズなどという輩にかまけ、自身に構ってもらえずに我が運び手がどれだけ我慢をしていたか知っているか？ 無論テディもそうだ。今まさに堂々と外を出歩ける絶好の機会だというのに、わざわざお前を待っていたというこの健気さ。……良識ある者なら決して見過ごしたりなどせぬよなあ？』

『ネクちゃんっ!!? ……だけど、私ももし許されるなら……今日ぐらい遊児お兄ちゃんと一緒に出かけたいの！ お空は少し残念だけど、それでも一緒にお祭りを回れるならとつても良い日になると思うの！ だから……』

ネクが悪い笑顔で俺に問いかける中、レティシアも少し顔を伏せながらおずおずとそう声を出す。

見ればテディも俺の服の裾を引き、見上げるようにこちらにボタンで出来た瞳を向ける。連れて行ってほしいと懇願するように。

まいった。これを断れるほど俺は合理的でもなんでもない。危険性なんかは今はいったん置いておこう。小さい子を泣かす方がよっぽどマズイよな。

「……分かった。だけど実体化している間はなるべく俺の目の届く所に居る事。それと俺が学園祭の仕事で抜ける時は、代わりに葬儀さんか……雪の女王と一緒に居る事。テディも約束できるかい？」

『……!!? う、うん！ 約束するの！ やった〜!』

レテイシアは一瞬驚いた顔をした後、ぴよんぴよんと軽く飛び跳ねながら万歳する。テイデイもこくこくと頷き、そのまま俺の背中によじ登ってきた。あつ……そこなのね。あんまり力入れないでくれよ。

見た所葬儀さんは普通に馴染んでいるようだし、雪の女王もお忍び用の服に着替えるくらいには周りに気を遣ってくれるようだ。下手に機嫌さえ損ねなければ、保護者役としても頑張ってくれる……と思う。

「よし。ここうなりや自棄だ！ 今日皆で目一杯楽しむぞっ！」

『おっ……』

その時視線の端で、ネクが何やら計画通りって感じの笑みを浮かべてたが……うん。全力で見なかつた事にしたい。いざとなつたら罪善さんと葬儀さんに止めてもらおう。

ちなみにヘルパーの万丈目グループの新作云々は本人には事後承諾だった。万丈目がものすごく渋い顔をしていたのでしつかり謝っておいた。うちの幻想体達がゴメン。本当に。



というのが今日の朝方の事。ステージなど諸々の準備も終わり、あとは観客を待つばかりとなったのが、ここで問題が一つ発生する。

「ずばり全然観客が居ないのだ。」

居るのはごく少数を除いて同じレッドの生徒ばかり。たまたま様子を見に来たカイザーや三沢に尋ねてみれば、

「えっ?!? 知らなかった?」

「ああ。イエローの縁日には行った事があるが……これまで学園祭でここまで来た事は無かったな」

「俺は一年だし、レッド寮の出し物についても今日初めて聞いたぞ」

「この通り。そもそもレッド寮の出し物について周囲に認知されていないレベルだった。これは酷い。」

さらに言えばレッド寮は、他の二つに比べ本棟からやや離れている。用事でもなければわざわざ来る者は少ない。これじゃあ観客が増えないのも当然だ。

「なので、」

「宣伝?」

「ああ。とにかくにも知ってもらわないと話にならない。だから手の空いている俺や

幻想体達でそれぞれの寮にコスプレデュエルの事を伝えて回ってくる」

「……と言いながら久城。ただ単にお前が……というよりそのカードの精霊共にハメを外させてやりたいからではないのか？」

「まあそれも否定できないな」

そんなような事を万丈目と話し合い、早速俺と罪善さん・レティシア・テディ・ネク・ヘルパーはイエロー寮へ、葬儀さんと雪の女王はブルー寮へ宣伝に向かう事になった。

どちらの寮に行っても良かったのだが、何故か雪の女王からやけにブルー寮に行きたい熱意みたいなのを感じたのは余談だな。

さて。イエロー寮の出し物は祭り風の出店だったか。一体どんな風になっているのか楽しみだ。

縁日で消える人形と現れる光球

「へえ〜。コスプレデュエル？」

「はい。レッド寮の出し物でして、中々に面白いですよ！ 衣装が無くても貸し出しがあるし、極論自分は仮装しないで他の人のコスプレを眺めるっていうのも大歓迎！ どうですか？」

俺の言葉にイエローの生徒は軽く黙考し、今やっている出店の交代時間になったら軽く冷やかしに行くかと返して自分の場所に戻っていった。まあ一応脈アリってところか。

イエロー寮の前の広場に足を運んでみれば、そこはまさに縁日といった様相を呈していた。俺もこうしてあちこち見て回りながら、さりげなくレッド寮の宣伝をして回っている訳だ。そして、

『遊児お兄ちゃんっ！ あれ見て！ 雲を食べてるよ?!』

「ああ。アレはわたあめっていう雲っぽいお菓子だよ」

さつきから目をキラキラさせて祭りを最大限にエンジョイしているレティシアの保護者役も兼ねている。大いに楽しんでくれているようで何よりだ。

そのまま歩き出そうとするが、レティシアの視線はさつきからわたあめに釘付け。確

かに見た目のインパクトで言ったらわたあめは結構なものだからな。

「食べてみるかい？」

『良いのっ!?! ……あつ?!? でも……』

「代金の事なら構わないさ。ほら。これで一つ買っておいで」

レティシアは顔をぶんぶん振って我慢しようとするが、わたあめ一つぐらいでどうこう言うほど困窮はしていない。

それに実を言うと、直前に大徳寺先生からそれなりの額の軍資金を支給されている。「いつも苦勞を掛けてすまないにや。今日はこれでたっぷり楽しんできなさいにや!」と言って笑う大徳寺先生だったが、最近は少し体調が良いらしい。

俺がセブンスターズの活動の代理を務めている事が、少しでも大徳寺先生の支えになつていてと考えるのは……傲慢だろうか？

まあそういう訳で、DPにせよ現金にせよ余裕がある。豪遊とまではいかないが、一通り見て回るくらいなら問題は無いだろう。一応ブルー寮に向かった葬儀さん達にもそれなりに渡してある。

『ありがとう! 遊児お兄ちゃん!』

レティシアに小銭を渡すと、顔を綻ばせて跳ねるように駆けていった。こういう所は見た目通り子供っぽいな。

ポンポン。

「うんっ!? ああ。楽しそうだな。テデイも一緒に……イテテ!? 分かった分かった?! テデイはそこの方が良いんだな!? 無理に離したりしないから力を入れるな」

ドサクサでテデイも一緒に行かせようとしたら、察知されたのかさらに力を入れておぶさつてきた。テデイからすれば軽く力を入れただけでもこっちからすれば割と痛い。よしよしと手で宥めてようやく落ち着く。

カタカタ?

「ああ。大丈夫。テデイも一応加減はしているしな」

『ふっ!。ざまあないな我が生け贄よ。私の苦勞が分かったか?』

精霊状態の罪善さんが心配してくれるが、ネクはこちらを見ながら鼻で笑っている。なんて奴だ。……それにしても、

「珍しいな。いつもはレティシアに抱かれているのに、今回はヘルパーに乗るのか?」

『えっ!? ……ああ、いや……うん。まあ偶にはな』

へぴへぴっ!」

白く楕円形の万能（掃除以外）家事ロボットに乗る西洋風人形。なんかシユールだ。その事を探ねると、ネクは少しだけ口調がまごついた。……怪しい。だが、

「まあ良い。偶にはそんな日もあるだろうさ。それにその身体じゃいつもまともに動け

ないだろうし、今日ぐらい実体化して翅を伸ばす事には何も言わないさ。それに……レティシア達に今日の事を持ち掛けたの、お前だろ？」

『ど、どうしてそれをつ!?!』

おつと。かもしれない程度に言ったのだが当たつたらしい。

「レティシアは自分からああいう事を言い出すタイプじゃない。思つてはいてもさつきみたいに我慢してしまふタイプだ。誰かが焚きつけないとな。……最初は葬儀さん辺りかと思つたが、さつき出る前に聞いてみたら違つた。つて事はあとはネクぐらいのもんだろ？」

デイーの可能性も少しあつたが、この反応からするとこつちが当たりだ。ネクは少しだけ警戒するようにこちらに向けて目を細める。

『……ああ。その通りだとも。我が生け贄よ。レティシアは……我が運び手はお前の言うように我慢強く、自身の望みを押し殺す癖がある。偶には発散させてやらんと運ばれるこちらにも影響が出かねんな。その点この祭りは都合だつた』

ネクの語るその言葉に嘘はなさそうだつた。……全てを語つていくという訳ではなさそうだが。

おそらくこれに乗じて何か企んでいる。多分常日頃から言っている自身の復活に関する何かだろう。

今なら止めるのは簡単だ。ブルー寮に行っている葬儀さん呼び戻すでも良いし、善さんに見張ってもらうだけでも事足りる。……だが、

『ただいまっ！ 遊児お兄ちゃん見て見てっ！ こくんなおつきいわたあめっ！ おまけしてもらったの！』

そこへ自分の顔より大きいわたあめを持って、レティシアが満面の笑みで戻ってきた。

「はいはいお帰り！ ……大きいわたあめだな。一人で食べられるかい？ まだ他にも店を回るのに」

『大丈夫！ 皆で分けよっ！ はい！ ネクちゃん。テデイも！ 罪善さんにヘルパーちゃんと遊児お兄ちゃんもはい！』

『ま、待つのだ我が運び手よっ!? 私はそのんなの要らモガモガっ!?』

あっ!? ネクが千切ったわたあめを口に突っ込まれた。生憎テデイはそもそも口が開かず、ヘルパーも辞退。罪善さんは一応口に放り込んだのだが、その瞬間わたあめがスツと消えてしまつてイマイチよく分からない。喜んではいるようだけど。

『どう？ 美味しい?』

『うおおっ!? 口の周りがバタバタするっ!? 我が運び手よ。いきなり突っ込むんじゃないっ！ だがまあ……うん。まあまあだな』

『そうでしょ！ 美味しいよねわたあめ！』

照れくさそうに顔を背けながら話すネクを見ていると、以前ならともかく今はそこまでの大事を……少なくともレティシアに対して被害が起きるような事をするようには思えなかった。あとわたあめ美味い。

その後も俺達は宣伝をしつつのんびり祭りを見て回った。

『わ〜い！ わ〜い！』

レティシアのテンションは最初から凄かったのだが、回れば回る程どんどん凄くなっ
ていく。

片手にわたあめの残りとりんご飴。もう片方には水風船とアメリカンドッグ。頭には先ほど買ったクリボーのお面を被り、首からは射的の景品で貰ったカードケース型のペンダントを提げるといふエンジョイっぷりだ。浴衣があれば完璧だった。他に焼きそば等も買ったが流石に多いので俺が持っている。

おまけにその可愛らしさと服装の珍しさから店側からも大人気で、何か買う度にお土産を持たされたりちよつと多めに貰ったり。そんな子がいれば当然目につき、あれは誰だと瞬く間にちよつとした噂になる。店側にしてもレッド寮にしてもかなりの宣伝に

なった。

『だけどさつきの人、神楽坂って人凄かったね!』

「ああ。まさかなり切りがあそこまで行くとは。かくし芸大会でもあれば良い線行くと
思うぞ」

神楽坂も出店を出していたのだが、それがなんとお面売り。様々なデュエルモンス
ターのお面を売っていたのだが、試用の面を被る度にそのモンスターが本当に居るみた
いに仕草が変わるのだ。

「様々な相手のデータを集めている内に、使うカードそのものの身になって考える事を
最近実験的にやっている」という話だったが、どうやらソリッドビジョンのモンスター
の動きなんかも取り入れているらしい。

「凄いは凄いのだが、微妙にデュエルから離れているような? まあ会った当初の思い
つめたような感じからすれば今の方が数段良いのだが。」

あとレティシアを見て「これはっ!? 見事な完成度だ! 前一度使った時のレティシ
アそのままだぞ! 俺も負けていられないな」と何故かやる気を増し、交代時間になっ
たら参考の為にコスプレデュエルにもお邪魔すると言っていた。そりゃレティシア本
物だもの。まあ他の奴も参考になれば良いが。

『あとあのカレーも美味しかったの!』

「そうだな。あの……何だっけ？ 樺川？ 樺山？ とにかくあの先生のカレーは絶品だった」

『樺山先生だよ。お兄ちゃん』

どうにも名前をど忘れしてしまったのだが、ラーイエローの寮長自身も店を出していたのは驚いた。しかもそのカレーときたら非常に美味かった。カレーだけなら学園の料理人を凌ぐかもしれない。

ただ普段の印象はとても影の薄い先生で、樺山先生自身もそれで悩んでいるらしい。レティシアが目立つ格好をすれば良いんじゃないかなとアドバイスしていたが……：そう上手く行くのだろうか？

そんなこんなで祭りを楽しんでいたのだが、

『それにしても、どこに行っちゃったんだろ？ うねネクちゃん』

「ああ。何かあったんだろ？ か」

さつきネクが少し席を外すと言って出て行ったつきり、もう30分近くになる。いざとなったらヘルパーも一緒だから連絡が来ると思うのだが……ちよつと不安だ。そこへ、

『お、おゝい。久城くゝん』

近くから聞き覚えのある声。この声はデイーか！ あの野郎今まで見ないと思っ

たら遂に来たか！

「デイーか。折角の祭りなんだからもう少しのんびりさせて……つて、どうしたお前？
えらくフラフラだけど」

『大丈夫？』

カタカタ？

振り返って居たのは間違いなくデイーだ。だが、明らかにいつもと違って弱々しい。光は力なく明滅しているし、ウエルチアースの薬入りジュースを飲んだ時でもここまでじゃなかったぞ。

レテイシアと罪善さんが心配そうにする中、デイーはよろよろとこちらへ浮遊しながらやってきて、疲労困憊といった様子で声を出す。

『いやあ……酷い目に遭ったよ。あの子に悪党認定されて一晩中追いかけてこだったもの。途中で見失ってくれなきやまだ続いていたかも……つとそれどころじゃなかった。あつちもこつちも面白そうな事ばかりだけど、今はとびきり面白そうな事がレッド寮で起きているようだよ』

悪党認定つて罰鳥にでも捕まったのかと思つたが、デイーのとびきり面白そうな事という言葉にとんでもなく嫌な予感がする。こいつの面白そう⇨厄ネタの可能性大だ。俺が顔をしかめると、

『まあそんな顔しないでくれよ。残念ながら、今僕がレッド寮に近づくと色々マズいからね。体力の回復がてら、ここは久城君にちよつと行つてきてもらおうという訳さ！』

「……まあイエローの祭りも大体見て回つたし、そろそろいったんレッド寮に戻つて様子を見に行こうとは思つてたから良いが……レティシアはどうする？ もう少しこの祭りを見て回るといふなら、葬儀さんなり雪の女王に来てもらつて一緒に回る事になるけど」

『私もお部屋に戻るの！ お婆ちゃんや漁師さんにお土産を持つて行つてあげるの！』
レティシアも一度寮に戻るの賛成のようだ。確かに荷物が多いからな。また出かけるにしても一度どこかに置きたい。

『そうこなくつちやつ！ ……あつ!? 折角だから少しだけレッド寮の様子を見せようか！ 予告編みたいなものさ』

「予告編つて……つてなんじゃこりゃ!?」

デイリーの言葉と共に、持っていた携帯用通信機の画面に映像が浮かび上がる。そこには、

『さあ十代！ 楽しいデュエルをしようぜっ！』

『望む所だ！ 行くぜ紅葉さんっ！』

何故かコスプレデュエルの会場で対峙しているのは十代と、マンガ版GXにて重要な物である元世界チャンピオン響紅葉^{ひびきこよう}。そして、

『皆々！ 声援ありがとうございます！』

『何か困った事が起きたなら、すぐにワタシに知らせてね！ 必ず助けに行くから。そう。ワタシは愛と正義の魔法少女なんだから！』

これまた何故か出来ている小型ステージの上で、大勢の観客達に向かって笑顔で手を振る二人の少女。『ブラック・マジシャン・ガール』と『幻想体 魔法少女 憎しみの女王』だった。

いやどうなってんだこの状況はっ!?

閑話 魔法少女がやってきた



「翔。そうしよげんなよ」

「うー。僕のブラマジガール。ブラマジガールが」

遊児が幻想体達と一緒に宣伝に行つてしばらく。俺は階段に腰掛けてしよげかえる翔を慰めていた。

きっかけはどうしたらレッド寮の出し物にもっと人が来るかって話から。遊児があまり知られていないからだつて宣伝に行つたのに対し、翔はレッド寮の出し物には華が無いからつて言いだした。

それで吹雪さんと一緒に来ていた明日香に、ブラマジガールのコスプレをしてほしいと頭を下げたんだ。だけど、

『ギャーっ!? どうしてトメさんがブラマジガールなんすかっ!?』

『何よ失礼ね。ブラツク・マジシャン・ガールは私の十八番だよ。ほらっ！ こんなにピッタリ……あらっ!?』

どうやら毎年ブラマジガールをやるのはトメさんに決まっているらしく、目の前でブ

ラマジガールの格好で現れた時は翔が涙目になってた。あと、ポーズを決めたら衣装の一部がビリッって破れたのは見なかった事にしたい。

ってな事があって翔は絶賛落ち込み中だ。どうしたもんかな。

「うわあ！ 明日香さん。ハーピイレディなんだな！」

「ちよつと派手だったかな？ 女性向けがあんまりなくて」

その声に現在コスプレ用簡易支度部屋となっている寮の食堂を覗き込むと、そこにはハーピイレディのコスプレをした明日香とそれを褒める隼人の姿があった。

「あっ!? 十代」

「おーやるな。見ろよ翔。ブラマジガールじゃないけど明日香のコスプレ凄いぞ！」

「う、う。心が洗われるようっす！」

よし。翔も少しは立ち直ったみたいだな。それにしても、

「しかし明日香も良くOKしたな。こういうのやらないかと思ってたけど」

「私だってお祭りくらいはめを外すわ。それに……兄さんだったらこんな時「明日香のコスプレ姿だったら僕も見たいな」……とか、言いそうだと思ってる」

明日香は笑いながら、それでいてどこか思いに耽るような顔をする。

吹雪さんは今外でカイザーと一緒に居る。肉体的には治ってきたみたいだけど、相変わらずまだ精神的に不安定でいつもぼくっとしてる。

こうやって外に連れ出す事で、少しは良い状態になるんじゃないかと明日香も考えているんだろうな。

「それで、十代は何のコスプレにするの?」

「俺か? 俺は……」

そういや自分の仮装を考えていなかった。何かないかとまだ使われていない衣装を幾つか引つ張り出してみたんだが、

「アニキ。その格好は?」

「あれこれ扮してたら何に扮してるか分なくなっちゃって」

帽子は『闇・道化師のサギー』。肩パットは『エルフの剣士』。鎧は『魔導戦士ブレイカー』。盾は『鉄の騎士 ギア・フリード』……適当に着けていたらホントに訳が分かんねえ。

「それはコスプレって言わないわ」

だよなあ。まあ一応この格好で行ってみるか。本当にいざとなったら遊兎がこの前言ってた予備の衣装でも借りよう。そこに、

『よっ! 万丈目サンダー! 日本一!』

「世界一と言え」

「おおく! XYZドラゴン・キャノンかよっ!」

すっげ〜っ！ 万丈目がXYZの格好でガチャガチャ音を立てながらやってきた！
周りにはおジャマ達が褒め称えながら浮いている。

「それ素人の仕事じゃないんだな！」

「ふっ。俺はやる時はやる男だ」

「ふふっ！ 似合ってるわよ」

自慢げに言う万丈目。確かに質感といい動きといい本物みたいだ。明日香からも褒められて万丈目は顔を赤くしている。

パシャ！ パシャ！

「ちよつとっ!? 何撮ってるんですか大徳寺先生っ!?」

「にゃ〜！ 折角のお祭りだからにゃ！ 記念ですにゃ記念！」

今度は大徳寺先生か。両手でカメラを構え、明日香や万丈目の様子をパシャパシャと撮っている。

大徳寺先生は今回撮影係を担当している。祭りのあちこちを撮影し、それを現像して後で希望者に売るらしい。

「ふっふっふ。明日香さんの写真。ファンクラブの子達によく売れそうにゃ！」

「大徳寺先生……天上院君の写真を予約したいんですが」

「ちよつとっ!? 大徳寺先生っ!? 万丈目君もっ!?」

「冗談ですのになや冗談！」

怒る明日香に大徳寺先生も万丈目もタジタジだ。ただ、

「こうして撮る写真の一枚一枚が、これからの君達の良き思い出として残り支えになる。最後にそれが叶うのなら、私は本望なのだよ」

一瞬だけ真剣な顔をした大徳寺先生が、そう優しくもどこか寂し気な声で語ったのが、何となく印象に残った。……まあすぐにいつもの調子に戻って他の所の撮影に戻っていったけどな。

『あの〜？ 大会の会場はここですか？ アタシもデュエルしたいです！』

ちよつとしんみりしていた俺だったけど、誰かの呼びかけでハツとする。その声の主は、

「ブラック・マジシャン・ガール!？」

「トメさんじゃない！」

そこに居たのは本物と見間違えうような完成度の高いコスプレのブラック・マジシャン・ガールだった。トメさんの物じゃないと翔は今度は嬉し泣き。ブラマジガール大好きだもんな翔。

『良いですか?』

「当たり前だ。コスプレデュエル実行委員長。この万丈目準が許可する。さあ諸君! 早速オシリスレッド怒涛のコスプレデュエルを始めようではないか」

そろそろ時間か。気を取り直して自称実行委員長こと万丈目の号令の下、ぼつぼつ集まってきた観客達の前で野外デュエルステージに移動する。

「でも、一体誰つすかね? オシリスレッドに女子は居ないし」

「さあな? でも、盛り上がってきたから良いじゃん!」

さあ。デュエルの時間だ!

「ガツチャ! 楽しいデュエルだったぜ!」

『あく。やっぱり負けちゃった。……でも最高に楽しかったよ! 皆もそうだよね!』

「「おっ! 楽しかったぞっ!」」

デュエルを終え、さつきからどんどん増えている観客達に軽く手を振る俺とブラマジガール。

ちなみに今の衣装は普段のレッドの制服。さつきの格好で行ったらヤジを飛ばされまくったから脱いだんだ。デュエルもしにくかったしな。

それにしても、今のデュエルはかなり盛り上がった。翔が実況、万丈目が解説、隼人が裏方にまわり、一番手に俺のデュエルから始まったけど、ブラマジガールのターンの度に観客から歓声上がるんだもんな。俺のターンは攻撃する度にブーイングだった

が。
あとブラマジガールのカードって確かデュエルキング武藤遊戯さんのデッキに入っていないなかった筈だけど、普通に『ファイヤーソーサラー』と『次元融合』のコンボで出てきた時は驚いたぜ。レプリカでも出回ったのか？

そんな事を考えていると、

「アンコール！ アンコール！」

おう。観客も今のでより火が付いたみたいだ！ 確かにブラマジガールのデュエルは翔曰く華のあるデュエルだったもんな。よっしゃ！ もう一戦行くか！ と思っただら、

「ブラマジガールちゃん！ 俺とデュエルしてくれ！」

「いや、こんな奴よりも俺と」

「こら君達！ お触りは厳禁だよ！ ……あとで僕ともお願いします！」

げっ!? ヒートアップした観客が線を越えてブラマジガールの方へ向かって走り出した!? あと止めようとしてる翔もちらりと本音が漏れている。

『あ、あの、デュエルは大歓迎だけど一人ずつ』

「俺が先だあ〜っ！」

「私だ〜っ！」

やべっ!?! 盛り上がり過ぎて何人か取っ組み合いになりかけてる。このままじゃマズイ! 万丈目も止めに入ろうとしているけど、衣装が重くてすぐには動けない。俺も慌てて止めに入ろうとして、

『そこまでよっ! 悪党達!』

突然そんな声が響き渡ったかと思うと、喧嘩になりかけていた奴らの間に小さな爆発が起きて砂埃が巻き上がった。それを見て慌てて離れる喧嘩してた奴ら。

音と衝撃はあったが、幸い誰も怪我した奴は居ない。強いて言うなら驚いて転んで掌を擦った奴ぐらいだ。しかし今一体何が?

「見ろっ! 屋根の上だ!」

観客の一人の声に、皆の視線が亮の屋根の上に集まる。そこには、

『寄って集って女の子を困らせるなんて、正義の味方としては見過ごせないわ! やあっ!』

魔法少女が立っていた。魔法少女は掛け声と共に屋根からジャンプし、そのままブラマジガールの前にスタッと着地する。すげ〜！あの高さから降りて平然としてやがる。

『愛と正義の名の下に、魔法少女ここに参上！ さあ悪党達。ワタシがお仕置きしてあげるっ！』

そう言つてステツキを構えながらピースサインを決める姿は、紛れもなく遊児の持っていた『幻想体 魔法少女 憎しみの女王』だった。

クリクリっ!? クリクリっ! !

「ああ。分かつてるぜ。相棒」

ハネクリボーが反応しているし、どうやら間違いない。……あれ本物じゃねえか？

以前遊児の所であつたみたいに、幻想体のカードが留守の間に実体化したらしい。

確か憎しみの女王のレベルは7。前出てきた大鳥よりもレベルが上だ。だけど今ここに遊児は居ない。

『ま、万丈目のアニキ〜』

「騒ぐな。……だが、いざとなつたら動けるように準備しておけ」

ボソツと聞こえてきたのは万丈目とおジャマ達の会話。万丈目達も目の前の奴が精霊だと勘づいているようで、さつきから目を離さない。

一つ間違えば大変な事になるこの状況。周囲は突然の事にシンと静まり返り、

「「うおおお〜っ！」」

少しして一気に大歓声へと変わった。

「すげえ！　なんて完成度の高いコスプレだ！」

「わざわざ軽く火薬まで使って演出してくるとは凝ってんな。ヒーローショーみたいだ
！」

「コスプレだけじゃなく、あんな高い所から普通に降りてくるのは相当だぜ。どこの運動部だ？」

「美少女を背にして守るヒロイン……アリだな！」

……そうだった。精霊の事とか知らなきやあくまでコスプレだと思ふよな。歓声を上げる奴らを見て憎しみの女王も目をパチクリさせる。

「は〜いちゆうも〜く〜！　皆〜！　こんな可愛いブラマジガールや魔法少女さんを困らせちゃファン失格つすよ〜！　デュエルはルールを守って楽しく一人ずつつす〜！　さあ並んで並んで！」

「あつ……さつきはゴメンな。ちよつとやり過ぎたよ」

そこへ実況の際のマイクを持ち出した翔が会場全体に呼び掛ける。喧嘩になりかけた観客達も流石に行き過ぎた行為だったと思ひ当たったのか、口々に憎しみの女王に詫

びを入れる。

『うん。よく分からないけど、ワタシがお仕置きする前に改心したみたいね！ 感心感心！』

憎しみの女王もステッキを下ろして詫びを受け入れていた。ふう。何とかなつたよ
うでホツとしたぜ。万丈目もどこか緊張が解けたような顔をしている。これならひと
まずは大丈夫だろ。

『それにしても、悪党が居なくなっちゃったわ。……まあ良いか』

視界の端で、憎しみの女王はそんな事を言いながらにつこりと笑っていた。

閑話 十代対紅葉 その一 小手調べ

「E・HEROフレイム・ブラストで、フェザーマンに攻撃！」

「させるかよ！ 畏発動！ 攻撃の無力化」

炎のヒーローから放たれる火炎を、どうにか伏せていたカードで防ぐ。

「ふっ。やるな」

目の前で楽しそうに笑うのは、元世界チャンプだという俺と同じH.E.R.O.使いの響紅葉プロ。

その表情には常に余裕が見え隠れして、こつちとはまるで違う。

相手の場には強力モンスター。LPもこつちの方が不利。だけど、何でだろうな？

「なくに。まだまだこれからだぜ！」

俺、今すっげ〜ワクワクが止まらねえっ！

なんでこんな事になったかって言うと、話は憎しみの女王がやってきた時まで遡る。



『皆〜！ いっくよ〜！』

その言葉と共に、憎しみの女王がステージの上で投げキッスをする。すると、ほわぁん。

そんな効果音でも聞こえてきそうなハートの波動が周囲に広がる。そして、

「ふおおおっ！ 漲ってきたあつ！」

「あ、あれ？ さつき擦りむいた所が痛くない……治ったっ！」

「L・O・V・E コ・コ・ロっ！ L・O・V・E コ・コ・ロっ！」

さつきから盛り上がっていた観客達が、より一層勢いを増してきやがった。あとドサクサで傷が治ったって喜んで居る奴が居るが、あれもココロこと憎しみの女王の力なんだろうか？

ちなみにココロというのは憎しみの女王の自称だ。本人曰く憎しみの女王なんて怖い名前よりもこっちの方が可愛いからだとか。

「ブラマジガールちゃくん！ こっち向いて〜！」

『は〜い！ 皆！ デュエル楽しんでる〜？ 私はスツゴク楽しんでるよ〜！』

「「うおおおっ！」」

このようにブラック・マジシャン・ガール（こっちも本当のカードの精霊っぽい）と一緒に、観客達から声援を受けたりデュエルしたりしている。コスプレデュエル大会というか、どっかのアイドルのコンサートみたいだ。

ちなみにカードは流石に自分の物以外は持つていなくて、デツキを観客の誰かから借りているようだ。是非自分の物を使ってくれと詰めかけてきた時は大変だったけどな。

しかし二人のあまりの人気でどんどん他の寮の奴らが集まってくる。万丈目も翔も隼人も司会やら何やらでてんてこまいだ。その様子を大徳寺先生は笑いながら写真に撮っている。

明日香は吹雪さんと一緒に人ごみに巻き込まれる前に一度寮に帰ったし、カイザーはその付き添い。三沢はどこで調達したのか、アマゾネスペット虎の着ぐるみを着て少し離れた所から皆を眺めている。アイツまだタニヤの事を……。

あとドサクサでクロノス先生が観客の中に紛れて声援を送っていた。改心したとはいえ結構はっちゃけてんな。

そんな中、

「十代っ！ 元氣そうだな！」

「その声は……国崎のおっさん！」

「おっさん言うな！ ったく。お前は変わんねえな」

俺に声をかけてくれたのは、以前この島を家の事情で出て行ってしまった万年落第生こと国崎のおっさんだった。なんでも今はジャーナリストをやっているらしく、この学園祭の取材を兼ねて久々に顔を出したとか。

「そうだ！ 十代。お前に会わせたい奴が居るんだ。ほらっ！ 前に言った俺の知り合い」

「おお！ そういえば言つてた言つてた！ 知っている中で最高のHERO使いだつて。……つてことは、今ここに來てるのか？ 早速会わせてくれよ」

そんなスゲエ人なら是非デュエルしてえ。そう思つたんだが、おっさんは困つたような顔をして苦笑いする。

「すぐに会わせてやりたい所だが、今そいつの姉さんと一緒に学園の本棟に行つてんだ。用事を済ませたらこっちに来ると思うからもう少し待つて」

クリクリ？ クリクリ〜っ！

「あれっ!? どこに行くんだ相棒？」

そこで急にハネクリボーが精霊として出てきたかと思うと、そのまま何かに気づいたように飛んでいく。当然だけど国崎のおっさんには見えていないようだ。

「悪いおっさん！ ちよつと行つてくる！ すぐ戻るからなっ！」

「あっ!? おい十代!? どうしたんだ？」

何かあつたのかとハネクリボーの後を追う。そしてハネクリボーはレッド寮の裏手に向かい、

クリクリ〜!

「よお。久しぶりだな! 相棒!」

そこに立っていた誰かに嬉しそうに飛びついた。つてあれっ!? あの人ハネクリボーが見えるし触れるのか? その人が優しく撫でると、ハネクリボーはとても嬉しそうな顔をしている。どうやら知り合いらしい。

裾の広がったカツコいい赤いコートを着たその人は、走ってくる俺に気が付いたのかこつちに向き直る。

「やあ。君はここの生徒だね?」

「はい。俺十代つて言います。遊城十代。よろしく」

自己紹介すると、その人は少しだけ驚いたようだった。

「十代? すると君が国崎の言っていた子で……ハネクリボーの今の使い手か。成程ね」

「国崎のおっさんの事を知ってるんですか? つて事は」

「お〜い! そんなところに居たのか。急に走り出すからどうしたのかと……つて紅葉っ! もう来たのか!」

俺の後を追って来た国崎のおっさんがこの人……紅葉さんを見てそんな声を上げる。

やっぱりこの人がそうか。

「紅葉。お前みどりさんと一緒に本棟に行つてた筈だろ？ もう戻つてきたのか？」

「いやあ話し合いつて言つても基本話すのは姉さんだし、ずっと会議なのも退屈なんで一足先になー！」

「あとでみどりさん怒るんじゃないか？ まあそん時はお前が叱られるだけだから良いけどな。……そうだ！ 紅葉。こいつがお前に紹介したかった十代だ。きつとお前も気に入るぜ」

国崎さんは俺の背を軽く叩いて押し出す。だけど、

「ああ。分かつてる。コイツの様子を見れば一発でな」

クリクリ！

ハネクリボーはさつきから俺と紅葉さんの間を行ったり来たりしている。余程懐いているみたいだ。まあ一人見えない国崎さんは不思議そうな顔をしているが。

「さて十代。そう言えばきちんと自己紹介をしていなかったな」

紅葉さんは軽く服を調べ、ハネクリボーを肩に乗せると俺に対して笑いながらこう言った。

「俺は響紅葉。こう見えてもデュエルの世界チャンプなんだぜ！ まあ元だけどな！」



そして、

「紅葉さんっ！ 俺とデュエルしてくれよ！」

「ああ良いとも！ 俺も一度勝負してみたいと思ってたんだ！」

という事になった。だって下手に言葉で語るよりも、いっぺんデュエルした方がはつきり人となりが分かるだろ？

丁度コスプレデュエル大会（俺達はコスプレしてないけど）をやってるし、観客の多くはココロやブラマジガールの方に集中してるからこっちは互いに集中できる。

ちなみに紅葉さんもココロ達を見て精霊だと勘づいていた。友達の持つてるカードの精霊なんだと言うと、安心したように胸を撫でおろす。

「あれは響プロっ!? どうしてこんな所に!？」

「これは……見物だな」

あと観客がまったたく居ないって訳でもない。遠くの方で万丈目がココロ達のデュエルの解説をしながら紅葉さんをチラチラ見てるし、三沢なんか堂々と立ち見だ。国崎のおっさんも観客用シートに座って見学中。他にもちらほらと。

俺は知らなかったけど、やはり紅葉さんはプロデュエリストとして有名人らしい。しかし今はまあそんな事はどうでも良いんだ。

「さあ十代！ 楽しいデュエルをしようぜっ！」

「望む所だ！ 行くぜ紅葉さんっ！」

さあ。デュエルの時間だ！

「デュエルっ!!」

紅葉 LP4000

十代 LP4000

「先攻は貰うよ。俺のターン。ドロ―！ 俺は『E・HEROボルテック』を攻撃表示で召喚。そして、装備魔法『ボルテック・スピア』をボルテックに装備する」

E・HEROボルテック ATK1000↓2000

紅葉さんが繰り出してきたのは、全身に雷を纏ったHERO。確か戦闘ダメージを相手に与えると、除外されているカードを墓地に戻す効果がある。おっさんの言っていた通り、紅葉さんもHERO使いか。

そして装備したカードの効果により、いきなり攻撃力が2000まで上がった。

「俺はカードを一枚伏せターンエンド。さあ十代。見せてみるよ。お前のデッキを」

「おう！ 行かぜ紅葉さん。俺のターン！」

ドロローしたカードを確認。……よし。まずはこれだ！

「俺は『E・HEROバブルマン』を攻撃表示で召喚！ そしてバブルマンが場に出た時に他のカードが無い場合、カードを2枚ドロローする！」

「やるね。いきなり手札補充か」

「まだまだこんなもんじゃないぜ紅葉さん。俺は速攻魔法『バブル・シャツフル』を発動！ このカードの効果により、バブルマンとボルテックは守備表示に変更だ」

バブルマン DEF1200

ボルテック DEF1500

「そう来たか。だけど、それだけじゃないんだろう？」

「勿論！ 更にバブル・シャツフルの効果。バブルマンを生け贄に捧げる事で、手札のE・HEROを1体特殊召喚できる。俺は『E・HEROエッジマン』を攻撃表示で特殊召喚！」

エッジマン ATK2600

「上手い！ さっきのバブル・シャツフルでボルテックを守備にしたのはこれが狙いか！」

「そう。エッジマンには貫通能力がある。バトルだ！ エッジマンでボルテックに攻撃

！」

三沢が解説する中、エッジマンがボルテックに突撃する。これでまずは、

「上級HEROを呼んだか。だが……甘い！ 罨発動！ 『ヒーローバリア』」

エッジマンの攻撃を、俺もよく使うカードで無効化する紅葉さん。やっぱり有ったか。

「あちやく。出来れば今ので先制パンチを決めたかつたんだけどなあ」

「仮にも元世界チャンプがそう簡単に一発貫う訳にはいかないからな。防がせてもらったよ」

まるで余裕を崩さない紅葉さん。まあ当然だよな。だけどまだ勝負は序盤も序盤。全力で挑ませてもらうぜ！

閑話 十代対紅葉 その二 融合対融合

紅葉 LP4000 手札3 モンスター ボルテック 魔法・罾 ボルテック・スピア

十代 LP4000 手札5 モンスター エッジマン 魔法・罾 伏せ0

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

エッジマンの先制パンチが防がれたあと、俺はカードを伏せて次のターンの布石にする。

ダメージこそ与えられなかったけど、初手バブルマンでの手札補充は大きいぜ。さあ。紅葉さんはどう出る？

「さて。俺のターンだな。ドロロー。そつちが手札補充で来るならこつちも補充といこうか。俺は手札から『強欲な壺』を発動！ カードを2枚ドロローする」

紅葉さんが連続でカードをドロローする。だけど俺の場には攻撃力2600のエッジマンが居る。これはそう簡単には突破できない筈。だが、紅葉さんは口元に微笑を浮か

べる。

「十代。ピンチの後にチャンス有りって知ってるか？ 俺は魔法カード『融合』を発動。手札の『E・HEROザ・ヒーロー』と『E・HEROレディ・オブ・ファイア』を融合！ 現れる！『E・HEROフレイム・ブラスト』！」

フレイム・ブラスト ATK2300

紅葉さんの場に現れたのは、全身に炎を纏った巨漢のヒーロー。

「おっ！ 強そうなHEROが出てきたっ！ だがまだエツジマンの方が攻撃力が上だぜ？」

「まだまだ。そしてさらに魔法カード『ヒーロープレッシャー』を発動！ 相手の場のモンスター1体を選択し、自身の場のE・HERO×300、相手のATKまたはDEFを下げる。俺の場のHERO達は2体。よってエツジマンの攻撃力は600下がる」

エツジマン ATK2600↓2000

「げっ!? エツジマンがっ!？」

「バトルだ。フレイム・ブラストでエツジマンに攻撃っ！」

マズイっ！ ここでエツジマンがやられたら俺の場はがら空きだ！ ならっ！

「畏発動。『無敵の英雄 インビンシブル・ヒーロー』っ！ エンドフェイズまで俺の場のモンスターは戦闘では破壊されない」

「破壊耐性か。だがダメージは通る」

「ぐっ!?!」

フレイム・ブラストの炎がエッジマンに直撃するが、その瞬間身体の表面に張られたバリアによって弾かれる。しかしその余波は俺に襲い掛かった。

十代 LP4000↓3700

「この通り。どんな強力なモンスターが相手であってもカードの組み合わせで戦うことが出来る。たとえばそれが“神”と呼ばれるモンスターであってもな。俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ」

どこか飄々とした態度で言う紅葉さん。流石元世界チャンプ。気を抜いてたらすぐにつぶつぶ飛ばされるな。くっつ! やっぱリデュエルはこうでないかと。

「俺のターン。ドロロー……来たぜ! そつちが炎ならこつちは風だ! 融合発動! 手札のフェザーマンとバーストレディを融合して……来いっ! マイフェイバリットカード。E・HEROフレイム・ウイングマン!」

「ここでフレイム・ウイングマンか」

フレイム・ウイングマン ATK2100

俺の場に頼りになるヒーローが出現する。ここでボルテックを攻撃すれば、効果ダメージも含めて大ダメージを与えられる。だが気になるのは紅葉さんの伏せカード。

「どうした？ 攻撃してこないのか？」

「……えい迷っててもしやあねえ。行くぜ！ フレイム・ウイングマンで、ボルテックを攻撃！ 『フレイム・シユート』！」

フレイム・ウイングマンから放たれる攻撃はボルテックに向かい……途中で霧散した。ありや？

「思い切りは良かった。だけど防がせてもらったぞ。伏せてあったこの『融合解除』でな」

紅葉さんがそう言いながらカードをひらひらと振っている。見ると攻撃していた筈のフレイム・ウイングマンが、元のフェザーマンとバーストレディに戻されていた。

フェザーマン ATK1000

バーストレディ ATK1200

「くっ!? ならこっちだ！ エッジマンでボルテックに攻撃！」

「相打ち狙いか。受けて立とうじゃないか」

2体の攻撃力は同じ2000。ボルテックの槍に貫かれながらも、エッジマンがそのままタックルを決めて互いに破壊される。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

「良いぞ！ お気に入りのカードをやられてカッとなるかと思つたら意外に冷静じゃないか」

「そりやあすぐに戻されちゃったのは悔しいけどさ。まだデュエルの途中だろ？ それに」

俺は力強く紅葉さんを見据える。

「こんなワクワクするデュエル。悔しがるよりも楽しまなくちゃ損だろ！」

「全く同感だ。さあ！ もっとデュエルを楽しもうぜ。十代！」

目の前で楽しそうに笑うのは間違いなく心躍る強敵。全力を出して立ち向かわなきゃもったいないって！

紅葉 LP4000 手札0 モンスター フレイム・ブラスト 魔法・罠0

十代 LP3700 手札1 モンスター フェザーマン バーストレディ 魔法・

罠 伏せ1

「おい紅葉！ プロが学生相手に大人げないぞ！」

「バカ言ってんじゃないよ国崎。俺だつて手を抜く時と場合ぐらい考えるつての。けどな、明らかにそんな事しちゃいけない相手ぐらい分かるんだ。……そうだろ十代？ 君は俺に手を抜いてほしいと欠片でも思つたか？」

国崎のおつさんが観客席から声をかけるが、紅葉さんはゆっくりとかぶりを振つて俺を見る。分かつてくれているじゃないか。

「まさか！ そんな事されたらがっかりも良いとこだよ紅葉さんっ！ デュエルは全力をぶつけ合うから楽しいんだ！」

こんな逆境いつもの事。俺も仲間達も、まだちつとも諦めてやしない！ それを見て国崎のおつさんも頭を掻きながら困つたように笑う。

「つたく。そんなキラキラした目で言われちゃ言つた方が野暮つてもんだよな。もう止めやしないから存分にやんな二人共」

「当然っ！ 俺のターン。ドロ……よし！ 行くぞ十代！ E・HEROフレイム・ブラストでフェザーマンに攻撃！」

「させるかよ！ 畏発動！ 『攻撃の無力化』」

炎のヒーローから放たれる火炎を、どうにか伏せていたカードで防ぐ。

「ふっ。やるな」

「なぐに。まだまだこれからだぜ！」

という訳で前話? からの回想終わり。ここからが本番だ。

「相手は強力なヒーロー。だけど、こっちだって負けてないんだぜ紅葉さん! 俺のターン!」

俺は仕切り直しとばかりに気合入れてカードを引く。……これならいける!

「魔法カード発動! 『潜入! スパイ・ヒーロー』。デッキから2枚ランダムにカードを墓地に送り、相手の墓地の魔法を1枚選択してターンの終わりまで俺の手札に加える。俺が選ぶのは紅葉さんの墓地の融合のカード! そしてそのまま融合!」

「なっ!? しまった!」

さつき受けた融合解除。あれで場にヒーロー達が残っていたのが裏目に出たな紅葉さん。つまり、融合があればまた融合召喚が出来るって事だ。

「再び現れろっ! フレイム・ウイングマン!」

フレイム・ウイングマン ATK2100

「……驚いたな。そんな方法で再び呼び出すなんて。だが、まだフレイム・ブラストには届か!」

「どんな強力なモンスターが相手であってもカードの組み合わせで戦うことが出来る……だったよな? 俺は魔法カード『Hーヒートハート』を発動! フレイム・ウイングマンの攻撃力を500アップする!」

フレイルム・ウイングマン ATK2100↓2600

「なっ!？」

「行くぜ。フレイルム・ウイングマンで、フレイルム・ブラストに攻撃! 『フレイルム・シュート』」

俺の号令と共に、フレイルム・ウイングマンの放つ炎がフレイルム・ブラストを勢いよく呑み込んだ。

◆◆◆◆◆

「うおおっ! 急げ急げっ! 大鳥もっど急いでくれっ!」

グルルアアっ!

暗い森の中を猛烈な勢いで疾走する大鳥。近道の為森を突っ切る中、俺はその背に振り落とされぬようにしっかりとしがみ付いていた。

『アハハハ! 大鳥さん速い速い!』

「楽しんでるようだけど、レティシアは落ちないようしっかりとおぶさってるんだぞ!

「テディもレティシアをしっかりと捕まえといてくれよ!」

コクコクと頷くテディを横目で見ながら、俺は今向かっているレッド寮の事に想いを馳せる。

何せデイーの見せた映像からすると、レッド寮には今WAWクラスの幻想体憎しみの女王が実体化している。いくら十代や万丈目も近くに居るとは言え相手はWAWクラス。一つ間違えば大惨事になりかねない。

カタカタ！

「ああ分かつてる罪善さん！ さつき葬儀さんと雪の女王にも連絡したから宣伝を切り上げて向かっている筈だ」

もしもの場合の為、協力してくれる幻想体を呼び戻して備えておきたい。レッド寮は森からそう遠くないので、大鳥や別の場所に居る審判鳥、罰鳥も近くまで向かってきている。

そう。そちらはおそらく大丈夫……なのだが、問題なのはさつきはぐれたままのネックとヘルパーの事。今頃どこで何をやっているやら。

「……ああもうっ！ 祭りの日くらいのはんびりさせてくれよっ!」

グルアアア！

大鳥の走る中、俺の愚痴がドップラー効果的に森の中に響き渡った。

閑話 十代対紅葉 その三 削り合い そして暗躍する
人形



「くっ!?!」

紅葉 LP4000↓3700

フレイム・ウィングマンの炎がフレイム・ブラストを呑み込み、その余波で紅葉さんにダメージを与える。だけど、これで終わりじゃないぜ!

「フレイム・ウィングマンの効果発動! 追加で破壊したフレイム・ブラストの攻撃力分のダメージを相手に与えるっ!」

「うおおおっ!?!」

紅葉 LP3700↓1400

更にフレイム・ウィングマンの追撃が決まり、紅葉さんのLPは大幅に削られる。

「フ、フレイム・ブラストの効果発動! 破壊されて墓地に送られた時、墓地の魔法カードを一枚手札に加える。俺は強欲な壺を手札に」

「おっ!?! すぐえぞ十代の奴。あの響プロを圧してる」

「良いぞおっ！ その調子だっ！」

おっ!? いつの間にかこっちにも観客が集まってきたな。……というよりブラマジ
ガールとココロの方に切り切らなくなった奴らがこっちに流れてきたって感じか。ま
あ盛り上がってるから良いか!

「へへっ！ どうだ紅葉さん！ 俺はこれでターンエンド。フレイム・ウイングマンの
攻撃力も元に戻る」

フレイム・ウイングマン ATK2600↓2100

「やるな十代。だけどこれからだ！ 俺のターン。ドロー！ 手札の強欲な壺を発動
し、さらにカードを2枚ドロっ！」

紅葉 LP1400 手札4 モンスター0 魔法・罫0

十代 LP3700 手札0 モンスター フレイム・ウイングマン 魔法・罫0

流星紅葉さん。がけっぷちの状態からでも手札が一気に補充された。さあどう出る

?

「俺は『E・HEROフォレストマン』を守備表示で召喚。カードを2枚伏せてターンエ
ンドだ」

フォレストマン DEF2000

植物を身に纏うヒーローを場に出し、伏せカードで守りを固める紅葉さん。だけど、「ドロ〜っ！ 伏せカードは分かんねえが、もうこうなったらガンガン攻めるのみっ！

俺は『E・HEROスパークマン』を攻撃表示で召喚！ ……行くぜ！ フレイム・ウイングマンでフォレストマンに攻撃！」

光り輝くヒーローを仲間に加え、一気に押し切るべく攻撃を仕掛ける。だがフレイム・ウイングマンの炎がフォレストマンに直撃する直前、

「畏発動！ 『レスボンシィビリティ』。俺の墓地にレベル5以上のHEROが居る時、攻撃してきたモンスターを破壊する。破壊されて尚、ヒーローの魂は屈しない。さあフレイム・ブラスト。さっきのリベンジだ！」

「なっ!？」

半透明のフレイム・ブラストが立ち塞がった。そして炎を防ぎながら突進し、そのままフレイム・ウイングマンに突撃して互いに消滅する。

「この状況じゃ仕方ないとはいえ、伏せカードには注意しないと十代」

「く〜っ！ やっぱ、そう簡単には勝たせてくれねえか。スパークマンじゃフォレストマンは突破出来ねえし、俺はこれでターンエンドだ」

紅葉 LP1400 手札1 モンスター フォレストマン 魔法・罨 伏せ1

十代 LP3700 手札0 モンスター スパークマン 魔法・罨0

「では俺のターン。俺は魔法カード『弱者の贈り物』を発動！ 手札のレベル3以下のモンスターを1枚除外し、カードを2枚ドロウする。俺は『E・HEROアイスエッジ』を除外し2枚ドロウ。……よし。俺は『E・HEROエアーマン』を攻撃表示で召喚！」

エアーマン ATK1800

紅葉さんの場に、背中に金属製の翼を生やしたヒーローが現れる。スパークマンより攻撃力が上か。

「行くぞ十代。俺はエアーマンでスパークマンに攻撃！」

「スパークマンっ!？」

十代 LP3700↓3500

エアーマンの翼から放たれる竜巻にスパークマンが飲み込まれる。すまねえスパークマン。ただでこれでのターンは、

「まだだ！ 俺はこのタイミングで伏せカードオープン！ 罨カード『レイト・ヒーロー』。E・HEROが戦闘で相手を破壊した時、デッキからE・HEROを特殊召喚で

きる！ ヒーローは遅れてやってくる。俺はデッキから『E・HEROオーシャン』を攻撃表示で召喚！」

オーシャン ATK1500

エアーマンに続くように現れたのは、どこか魚のような印象を受ける槍使いのヒーロー。……マズイ!? このタイミングで出てきたって事は。

「当然バトルフェイズ中なのでオーシャンにも攻撃権がある。オーシャンで追撃！」
「うおっ!」

オーシャンが滑るようにこちらに突進し、そのまま槍で一閃してくる。……つつ!?
今のは効いたぜ!

十代 LP3500↓2000

「俺はカードを伏せてターンエンド。……どうした十代? 降参か?」

「冗談じゃない! まだまだこれからさ!」

からかう様にいう紅葉さんに、俺はニヤツと笑って返す。

面白れえ。面白れえ面白れえっ! 強いヒーローを出しても即座に反撃してくるし、少しでも気を緩めたら手痛い攻撃をされる。これだからデュエルは最高だ!

だけど俺の手札は0。場にカードもない。そして紅葉さんの場にはモンスターが3体。つまりはこのドロローに全てが懸かっているって事だ。燃えてくるぜっ!

「頼むぜ皆。力を貸してくれ。……ドローっ！」

信じればデッキは応えてくれる。気合を入れてカードを引く。これはっ！

「俺は魔法カード『死者蘇生』を発動！ 墓地のバブルマンを守備表示で特殊召喚！ そして、バブルマンが場に出た時に他のカードが無い場合、カードを2枚ドローする！

……来たぜ！ 俺は魔法カード『融合回収』を発動！」

「おいおい。この土壇場でそれを引くかよ」

観客席で見ている国崎のおっさんが何やら驚いているが、紅葉さんは落ち着いたもの。これくらい予想していたってどこか？ なら、ご期待に応えてやるぜ！

「墓地の融合とバーストレディを手札に戻し、そのままバーストレディとバブルマンで融合！ 来いっ！ 『E・HERO スチーム・ヒーラー』」

スチーム・ヒーラー ATK1800

水を熱した蒸気を纏い、俺の仲間がまた一人参戦する。さあ。まだまだ終わらないぜ！



一方その頃。

『ふっはっはっは！ ああ漲る。漲るぞ！ はつきりと分かる程になあっ！』

〈ピピっ！〉

七精門の真上に当たる場所で、ネクはヘルパーを従えながら高笑いしていた。

七精門から洩れる三幻魔の力。それが最も多く流れ出る場所を見つけ出し、そこに陣取る事でネクは復活を目論んでいた。

『この調子ならあと半日もすれば、力だけなら以前の状態に近い所まで回復できるっ！

まったく……手間暇こそかかったが、それだけの価値はあったというものだ』

ネクは上機嫌だった。この場所自体は以前から分かっていたが、力の流れに割り込んで横取りするという計画上、下手なタイミングで動けば足が着く。

もし我が生遺け贄見や罪善、葬儀に察知されれば、間違いなく止められるだろう。なのでこの学園祭の日、皆が祭りで浮かれ、人が多く察知しづらくなるこの日を待ったのだ。

レイシアや雪の女王を焚きつけたのも、少しでもそちらに厄介な奴らの注意を引き付ける為。あとは適当な理由をつけてこの場所に向かい、思う存分力を吸収するのみ。

『新たな身体に未だ当てはないが、力が戻ればある程度はやりようもある。もうすぐ私の復活が叶うのだっ！ そうなればヘルパー。お前は私専用の整備士として使つてやるからな。……まあレイシアの奴も』

〈ピピっ！〉

ヘルパーは相槌を打つだけでそれ以上は答えない。ただ静かにネクを見つめている。

『……それにしても、予想よりやや吸収率が悪いな。本来ならあと二、三時間で終わる筈だったか』

ネクは少しだけ違和感を感じていた。力自体は正常に流れている。だが、流れが僅かにズレているような。

『まあ良い。幸い遊児達は私を置いてどこぞへ行ったようだし、時間はまだある。焦る事もないか』

力を求める人形は、ゆったりと自身に漲っていく力に身を委ねた。

閑話 十代対紅葉 その四 相棒



「行くぜっ！ スチーム・ヒーラーでオーシャンに攻撃！」

「くっ!？」

紅葉 LP1400↓1100

スチーム・ヒーラーが放つ水蒸気に巻かれてオーシャンは破壊される。だけどこれだけで終わりじゃないぜ！

「スチーム・ヒーラーの効果発動！ 戦闘で相手モンスターを破壊した時、その元々の攻撃力分のLPを回復する！」

十代 LP2000↓3500

「メインフェイズ2！ 俺は魔法カード『光の護封剣』を発動！ これで3ターンの間相手は攻撃が出来ない！ これで俺はターンエンドだ。へへっ！ どうだ紅葉さん」

「ああ。まさかあの状況でバブルマンからのスチーム・ヒーラーに繋げるとは驚いたよ。このぐらいはな」

俺が冗談めかして言うと、紅葉さんも茶目つ気たつぷりに親指と人差し指を広げて返

す。たったそれだけしか驚いてないって事かよ。

「おい見たか？　なんて試合してんだこの二人は」

「ああ。互いにはぼ毎ターン逆転の一手をドロローしあっている。なんて無茶苦茶な引きだよ!」

周囲の観客がさつきからざわついているが、それくらい普通だろ？　ギリギリ土壇場での逆転がデュエルが一番面白い所だぜ!

さくでこれでLPは俺の方が断然有利。だけどモンスターの数的には紅葉さんの方が有利。ここからどう動いたもんか。

紅葉　LP1100　手札0　モンスター　エアーマン　フォレストマン　魔法・罫

伏せ1

十代　LP3500　手札0　モンスター　スチーム・ヒーラー　魔法・罫　光の護封剣（残り3ターン）

「しかし光の護封剣とは厄介だな。俺のターン」

紅葉さんがその言葉とは裏腹に楽しそうにカードを引く。

「……これじゃないな。俺はこのままターンエンドだ」

「じゃあ俺のターンだな。ドロー！」

俺もカードを引く。だけど今この状況を何とか出来るカードじゃない。

「俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ」

その後更にターン。紅葉さんは引いたカードを伏せ、俺はそのまま手札に加える。

さつきまでの激しい殴り合いから一転して動きのない静かな戦いだぜ。だけど、どつちかがこの状況を動かすカードを引いた時点で一気に終わりまで一直線だ。俺はふとそんな感じがした。

紅葉 LP1100 手札1 モンスター エアーマン フォレストマン 魔法・罠

伏せ2

十代 LP3500 手札1 モンスター スチーム・ヒーラー 魔法・罠 光の護
封剣(残り1ターン) 伏せ1

いよいよ。次のターンで光の護封剣は消える。そこからが勝負だ。だが、

「フフツ。十代。今お前はこう思っているんじゃないか？ 次のターン光の護封剣が消えてからが勝負だって」

ドロローしたカードを見た途端、紅葉さんがイタズラ気味に笑いながらそう言う。

「確かに光の護封剣は3ターンの間攻撃を封じる優秀なカードだ。だけど、必ずしも3ターン凌ぎ切れる訳じゃない。俺は魔法カード『サイクロン』を発動！ 光の護封剣を破壊する」

「げっ!?!」

光の護封剣が3ターンを待たずに破壊される。だけどスチーム・ヒーラーとエアーマンの攻撃力は互角。せめて相打ちに。

「更に俺は魔法カード融合回収を発動！ 墓地の融合とE・HEROザ・ヒートを手札に加える」

ヤバイ！ 俺がさっき使った融合回収を紅葉さんも使ってきた。互いにHERO使いな以上、この後の展開も何となく分かる。

「俺はザ・ヒートを攻撃表示で召喚し、融合を発動！ 場のエアーマンとフォレストマンを融合し……現れろっ！ 『E・HERO Great トルネード』っ！」

「なっ!?! おい紅葉!?! いくら何でも生徒相手にそれはマズいっつて!?!」

ザ・ヒート ATK1600

Great TORNADO ATK2800

炎を操るヒーローザ・ヒートの後で紅葉さんの場に暴風と共に現れたのは、まさに名

前の通り竜巻を纏う風のヒーローだった。それを見て国崎のおっさんが慌てたような声を上げる。……分かるぜ。どう見ても手ごわそうだもんな。

「さあ十代。着いてこれるかな？ トルネードの効果。融合召喚成功時、相手の場の全てのモンスターの攻撃力を半分にする」

スチーム・ヒーラー ATK1800↓900

猛烈な風が吹きあがり、スチーム・ヒーラーの身体が宙に浮く。これはマズいつ!? 「バトルだ。トルネードでスチーム・ヒーラーに攻撃！ 『スーパースセル』！」

十代 LP3500↓1600

さっきのエアーマンの物より更に強力な竜巻が放たれ、空中で身動き取れないスチーム・ヒーラーを呑み込んだ。攻撃力が下がってるからダメージがデカい!?

「さあ。この攻撃をどう躲す十代？ ザ・ヒートでダイレクトアタック！」

ザ・ヒートが炎を纏って突進してくる。これを喰らったら俺のLPは消し飛ぶ。だから、

「させるかよっ！ 速攻魔法発動。『クリボーを呼ぶ笛』！ デッキからハネクリボーを守備表示で特殊召喚する！ 来てくれ相棒っ！」

クリクリっ！

ハネクリボーが俺とザ・ヒートの間に割って入り、そのまま俺の代わりにザ・ヒート

の攻撃を受けて破壊された。

「ふう。助かったぜ！ いつもありがとうな相棒！」

カードとしては破壊されたものの、半透明の精霊の姿でふわふわ浮くハネクリボーに礼を言うと、大丈夫とでも言う様に手を軽く振った後で紅葉さんの方に向き直る。そして紅葉さんもまた、どこか懐かしい物を見るような目でハネクリボーを見つめていた。

「……どんな危機的状况であつても持ち主を守る。流石だなハネクリボー。いや、相棒！」

「相棒つて……さつき最初に会った時もハネクリボーが反応してたし、ひよつとして紅葉さんもハネクリボーを使っていたのか？ だけどこれは俺はデュエルキングの武藤遊戯さんから」

「それは当然だな。だって元々は俺が遊戯さんにハネクリボーを託したんだから」

な、何だつて!? 俺はその言葉にめちゃくちゃ驚く。

「まあ細かい話は後だ。今はこのデュエルを楽しもうじゃないか。俺はこれでターンエンド。さあ。お前のターンだ十代」

……そうだな。確かにハネクリボーの事は気になる。だけど、今はまず紅葉さんとのデュエルが先だよな！ しかし、

紅葉 LP1100 手札0 モンスター トルネード ザ・ヒート 魔法・罨 伏
せ2

十代 LP1600 手札1 モンスター0 魔法・罨0

こつちの場はまた丸裸。くっつ！ 容赦ねえな紅葉さん。俺がいくら逆転しても、終始その上を行ってくる。これが元世界チャンプ。これが国崎のおつさんが言っていた最高のHERO使い。

いやホントどうすつかなこれ。常にがけつぶち。一つでもミスったら即トドメを刺されるつてのに、まさに絶体絶命つて状況なのに、ぞくぞくする程ヤバいのに、それに比例してワクワクが止まんねえ！

「俺のターン！ ドロー！ ……行くぜ紅葉さん。俺は魔法カード『ミラクル・フュージョン』を発動！ 俺の墓地のフレイム・ウィングマンとスパークマンを除外し、『E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン』を融合召喚！」

俺が引き当てたカードこそ、この大ピンチを逆転する一手。俺の場に光り輝く鎧を纏ったヒーローが舞い降りる。

シャイニング・フレア・ウィングマン ATK2500

「このカードは墓地のE・HEROの数×300攻撃力を上げる。今俺の墓地に居るH

EROは全部で7枚。よって攻撃力は2100アップ！」

シャイニング・フレア・ウィングマン ATK2500↓4600

「ちよ、ちよつと待った！ ミラクル・フュージョンで2枚除外したから残り5枚の筈。何故7枚分もっ!？」

「……成程。さつき俺の墓地の融合をスパイ・ヒーローで引つ張り出した時か」

「そういう事！」

国崎のおつさんが疑問の声を上げる中、紅葉さんは冷静に真相を見抜く。そう。スパイ・ヒーローのコストでデッキから墓地にランダムに2枚送った。その時に送られていたのが『E・HEROクレイマン』と『E・HEROワイルドマン』だったんだ。

「仲間との絆によりヒーローは強くなる。これが俺の、俺達の全力全開だ！ 行くぜバトルフェイズ！ シャイニング・フレア・ウィングマンで、トルネードに攻撃！ 『シャイニング・シュート』！」

光のヒーローから放たれる光がトルネードを包み込もうとしたその時、

「見事だ十代。だけど俺も元世界チャンプとしてこんな所でやられるわけにはいかないな！ 速攻魔法発動。『残留思念』！ 相手の攻撃宣言時に墓地のモンスター2枚を除外することで、このターンの戦闘ダメージを0にする。俺は墓地のオーシャンとフォレストマンを除外っ！」

紅葉さんの前に半透明のヒーローが2体現れ盾となる。だけど、

「まだまだあつ！ シヤイニング・フレア・ウイングマンが戦闘で相手を破壊した時、その元々の攻撃力分のダメージを相手に与えるっ！」

「分かっているさ。俺は自分の残留思念にチェインしてもう1枚の伏せカードをオープン！ 罨カード『緊急隔壁』。相手ターンのバトルフェイズ終了まで、自分の場のモンスターは戦闘では破壊されず、相手はモンスター1体のみでしか攻撃できない」

光に呑み込まれる直前、地面からせり出した壁がトルネードを覆って光を遮る。これでこのターン戦闘で破壊されず、戦闘ダメージも受けなくなった訳だ。

「あくくっそ〜！ 今のは完全に決まったと思っただけだなあ」

「いや。今のは割と本気で危なかったぞ十代。まさか両方共使わされるとは思っていなかった」

よく言うぜ。確かにさつきは一瞬焦った顔をしていたけど、もう余裕が戻っているじゃん！

「俺はこれでターンエンド。ここでは決めきれなかったけど、次のターンで決めてやるぜー！」

「それはどうかな？ 確かにそのモンスターは強力だ。仲間との絆の強さはまさに全力全開と言えるパワーだろう。……だけど忘れちゃいけないか？」

紅葉さんは勢いよくカードをドロウする。その眼にはまるで諦めの色はなく、

「ヒーローは、いつだって相手が強ければ強い程燃えるんだぜ？」
どこまでもデュエルを楽しむ男の姿がそこにはあつた。

閑話 十代対紅葉 その五 ジ・アース

今の状況はまさにギリギリだ。

俺のシャイニング・フレア・ウイングマンの攻撃力は4600。これを超える攻撃力はそうはない。そして戦闘でモンスターを破壊した時、その元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

対して紅葉さんのモンスターはそれぞれ攻撃力は2800と1600。こちらには及ばないし、守備表示に変えたとしてもそのまま押し切れる。

だけど、それでも何かをやってくると予感させる凄みが紅葉さんにはある。たった一枚のドロ―で場をひっくり返すような凄みが。今のドロ―。紅葉さんは何を引いたんだ？ そこに、

「おい十代っ！ 無事かっ!？」

『十代おにいちゃんっ！ ただいま!』

カタカタ！

「遊児っ！ もう戻ってきたのか!？」 それに皆も「

宣伝に行っていた筈の遊児が、ハアハアと息を切らしながら走ってきた。背中にテ

デイを背負い、そのすぐ後にはレティシアと罪善さんも一緒だ。

「丁度良い所に戻ってきたな遊児！　今スツゲく良い所なんだ！　俺が今戦っている相手は誰だと思う？」

「知ってるよっ！　元世界チャンプの響紅葉さんだろ？　その事もあつて慌てて帰ってきたんだ！　……だけど今はそれよりもだ。ウチの」

「なら大丈夫だ。さつきからコスプレデュエル大会に参加してスゲく盛り上がってるぜ！」

多分遊児もココロが実体化したのを知って帰ってきたんだろう。だけど特に暴れようって感じもなかったし、あつちには万丈目も居るから大丈夫だろ！　それに遊児も戻ってきたならもう安心だ。

「じゃあ俺はそっちの方に向かうから、あとでデュエルの事を聞かせてくれよ！　じゃあな！　……あつ！　響紅葉さんに国崎さん。俺久城つて言います。今は所用があつて行かねばなりません、また後でゆっくりお話を聞かせてください。それではっ！」

『じゃあね〜！』

遊児達はそれだけ言って慌ただしく向こうのコスプレデュエル大会の会場に走っていった。しかし今の感じだと遊児もどうやら紅葉さんのファンみたいだな。

「十代。今の子は君の友人かい？」

「はい。久城遊児って言って頼れる俺の友達です！」

「あと、齡の割にやたらしつかりしている奴だな。前に来た時も俺の事も勘づいていたみたいだし」

「そうか。十代と同じく精霊と共にある少年……か」

俺と国崎さんの言葉に、紅葉さんは何か考えているようだった。さつきも遊児と半透明状態の罪善さんの事をじつと見ていたしな。

「……つと。今は考えるべきことはそっちじゃないな。デュエルを続けようじゃないか」

「おう！ そう来なくちゃ！ さあ紅葉さん。この勝負俺が貰うぜ！」

「いや。勝つのは……俺だ！」

紅葉 LP1100 手札1 モンスター トルネード ザ・ヒート 魔法・罠0

十代 LP1600 手札1 モンスター シヤイニング・フレア・ウイングマン

魔法・罠0

「俺は魔法カード『パラレル・ワールドフュージョン平行世界融合』を発動！」

「平行世界融合？」

「ああ。さっきのターン。お前はミラクル・フュージョンで墓地のモンスターを除外する事で融合を行ったな。これはその逆。除外されているモンスターをデッキに戻すことで融合扱いにする」

「げっ?! そういえばさっき残留思念でモンスターを2枚除外してたな! まさかこれを狙って!?!」

「ゲームから除外されているフォレストマンとオーシャンをデッキに戻し……行くぞ! 最強のヒーローとして、平行世界から現れるっ! 『E・HERO ジ・アース』っ!」

「バリンと空間が裂け、その中から始めて見るヒーローが紅葉さんの場に着地する。ジ・アースの名を冠したその見たことのない真つ白なヒーローは、並び立つトルネードにも劣らない存在感を持っていた。」

ジ・アース ATK2500

「スゲエ。まさかドロー一枚でこんなスゲエヒーローがやってくるなんて。……だけど、まだ俺のシャイニング・フレア・ウィングマンには届かない」

「ジ・アースの効果発動! 自分の場のE・HEROを生け贄に捧げ、その元々の攻撃力を吸収する。……十代。お前がさっき言った通りだ。仲間との絆でヒーローは強くなる! 『地球灼熱』!」

その瞬間、トルネードがジ・アースに向けて軽く頷いたかと思うと、その身体が光の

粒子となってジ・アースに吸収された。そして純白だったジ・アースの身体が真っ赤に変化する。まるで地球の奥底に流れるマグマみたいに。

ジ・アース ATK2500↓5300

「攻撃力5300!？」

「バトルだ！ ジ・アースでシャイニング・フレア・ウイングマンに攻撃。『地球灼熱斬』！」

「ぐうっ!？」

十代 LP1600↓900

ジ・アースが取り出した光の双剣により、シャイニング・フレア・ウイングマンが両断される。そして、

「これで最後だ！ ザ・ヒートでダイレクトアタック！」

「ぐっ!？ うわあああつ!？」

最後は炎のヒーローの鉄拳で、俺のLPは全て削り切られた。

十代 LP900↓0

紅葉WIN！

「クハ〜っ！ 負けたあ〜っ！」

クリクリ〜？

俺は衝撃で背中から大の字で地面に倒れ込む。空は残念ながら曇り空。戦いが終わったから立体映像も消滅し、残るは半透明のハネクリボーのみ。

「スツゲ〜悔しい。あとちよつとだったんだけどな。だけど……スゴク」

「ああ。楽しいデュエルだったな。十代！」

気が付くと、紅葉さんが笑いながら俺に向かって手を差し伸べていた。あつちや〜。セリフまで取られちゃったか。だから、

「ガツチャ〜！ とんでもなく楽しいデュエルだったぜ！ 紅葉さん！」

心までは負けてないとばかりに、ニヤツと笑って俺はその手を取ったのさ。

パチパチパチ！

「「うおおおっ！」」

気が付くと、俺と紅葉さんの周りには人だかりが出来ていた。拍手の音に驚いていると、

「名勝負だったぜ二人共っ！」

「スゲ〜よ十代！ 響プロにここまで競り合うなんてよ！」

「チクシヨウ……羨ましい。俺もデュエルしてもらいてえ」

「響プロ！ サインください！」

観客から口々にそんな声が掛けられる。まいったな。コスプレデュエル大会の方から溢れた奴がこんなに居たのか。

「いや、純粹に二人のデュエルの方が良いと思つた面子が大半だよ。ここに居る奴らはな」

「三沢！」

俺の考えを読んだみたい三沢がそう返す。相変わらずアマゾネスペット虎の格好だけだな。

「やあ。見させてもらったぜ。しかし、あの響プロに相手をしてもらえるなんて羨ましいぞ十代。……響プロ。次は良ければ俺とお願いします！」

「あつ!? ずるいぞ三沢!? 次は俺！ 俺とお願いします！」

「いや僕と！ 一生の記念にしますからっ！」

三沢を皮切りに、次から次へとデュエルを申し込まれる紅葉さん。だが、
「紅葉。流石にこれだけの相手をしていると時間が無くなるぞ」

国崎のおっさんが静かに紅葉さんを諫める。確かに詰め寄ってくる人数は今も増え続けてる。こいつら全員とやってたらどれだけかかるか。

「分かつてるよ国崎。いやあすまないね学生諸君。今日は久々の休みに羽を伸ばすべく

来たんだ。またしばらくしたら他の場所も見に行く予定だし……あと数回くらいしかやれる時間はなさそうだ。だから」

紅葉さんはそう言つてデュエルディスクを構えると、不敵な笑みを浮かべながら宣言する。

「二人ずつじゃあ面倒だ。二、三人ずつまとめてかかつてきなつ！」

「紅葉っ!?! ……ああもう分かつたよ!?! みどりさんには俺から言つといてやる。プロとしてきつちり実力を見せつけてやれっ！」

国崎のおっさんは呆れながらもその顔に不安さはない。おそらく信じているからだ。紅葉さんがたかだかそんな程度のハンデで負ける筈がないって。

当然それを聞いて詰め寄つていた奴らも黙つちやいない。レッドだのイエローだの垣根を越えて、元世界チャンプに挑むべく闘志を燃やす。

「あくもうっ! もう一回やりてえな。今度こそ紅葉さんに勝つてみせるのに」

「ハツハツハ。まだまだ負けるつもりは無いよ十代。……諸々のケリが着いたらじつくり話をしよう。今度はさっきの久城君も交えてな！」

「おいおい。俺は仲間外れかよ? 十代も紅葉と引き合わせた俺にもつと感謝をだな」
「分かつてるつて国崎のおっさん! ちゃくんと感謝してるよ」

国崎のおっさんが居なかつたら、俺は紅葉さんとデュエル出来なかつただらう。あん

なに楽しい一時は味わえなかっただろう。その点は本気で感謝している。

「さあ皆。準備は良いかっ？」

「「おうっ！」」

「元気で結構。じゃあ……行くぜっ！」

「「「デュエルっ!!」」」

その後遊兎が戻ってきたのは、紅葉さんが二十人ばかり倒した辺りだったかな。何やら浮かない顔をしているがどうしたんだらうか？

探す遊児。見つけたカミューラ



「おゝい十代っ！ 無事かつ!？」

うおおっ！ 紅葉さんだ！ 本物の紅葉さんだ！ 俺が慌ててレッド寮に戻ってきた時、最初に見たのは十代と鎬を削る元世界チャンプ。響紅葉の姿だった。

漫画版の重要人物であり、この世界では五年前に謎の奇病で入院するも、去年退院して現在プロデュエリストとして活動している人物。漫画版準拠なら今も入院中の筈だが、アニメだと少し流れが違うらしい。

しかし漫画版でも屈指の強キャラであり推しの一人を実際に見ると、これは中々に心が弾む。

「丁度良い所に戻ってきたな遊児！ 今スツゲゝ良い所なんだ！ 俺が今戦っている相手は誰だと思う？」

「知ってるよっ！ 元世界チャンプの響紅葉さんだろ？ その事もあって慌てて帰ってきたんだ！ ……だけど今はそれよりもだ」

映像で見た憎しみの女王の事を尋ねようとすると、十代も察しがついたのか場所を教えてくれる。その態度から考えると、どうやら今の所は暴れるような事もなく落ち着いているらしい。

出来ればここでじっくり紅葉さんと話をしてみたい所だが、状況が状況だ。俺は別れの言葉もそこそこに、急いで憎しみの女王の居るステージに向かった。

「何？ 居なくなつた？」

だが、俺が辿り着いた時にはもう遅く、ステージにはブラマジガールが残るのみだった。コスプレデュエル実行委員長の万丈目に尋ねると、俺が来る少し前にここを発つたのだという。

「ああ。観客達が大盛り上がりの中、急に『もうここには悪は居ないみたいだし、ワタシはそろそろお暇するね！ じゃあ皆！ これからも良い子でね！』と言い残してな。一応うちの雑魚共に追いかけさせたのだが」

『途中で見失っちゃって……ごめんなのよ』

万丈目の傍らで、半透明のおジャマ達がしょんぼりしている。まあレベル差があり過ぎるからな。追いつけなかったのは仕方ないか。

しかし憎しみの女王でなくココロと自称するか。セイさんこと絶望の騎士は名前に無頓着だったからこつちが名付けたけど、どうやらこつちはそうじゃないみたいだ。

「そういえば久城。憎しみの女王のカードはどうした？」

「それが、今回はデツキに入れておかなかつたんだ。さつきここに来る前に部屋によって確認したらカードがなくなっていた。どうやら自分で持ち歩いているらしい」

カードがあれば呼び出す事も出来たんだが。そう上手くは行かないか。

ちなみにレティシアは今部屋で留守番中の幻想体達にお土産を渡している。オールドレディとウエルチアースって焼きそば食うんだろうか？

「あと、あのブラマジガールって……本物だよな？」

「おそらくな」

ココロが居なくなった後も、ブラマジガールはステージに残って時々デュエルをしたり、或いは他のデュエルしている奴に応援したりしていた。応援された奴が他の観客から嫉妬の炎の籠った眼で見られているのは気にしないことにする。

まあブラマジガールが何故実体化しているのかは不明だが、さしずめアニメで言う一日限りのお祭り騒ぎ回といった所か。純粋に楽しんでるようだし、今は放っておいても良いか。

「しかしこれからどうする？ 俺はこの通り実行委員長の責務で忙しい」

「それは……見れば分かるな」

全身XYZの気合の入ったコスプレだからな。動くのも大変なレベルだし、この状態でデュエルの解説なんかもやるのだから忙しいだろう。今は偶々休憩中だから話が出るが、すぐにまた忙しくなる。

見れば翔や隼人らも忙しく動いている。手伝いたい所ではあるが、こっちはこっちでやる事が多いから大変だ。

「万丈目はこのまま大会の方を頼むよ。俺はまた宣伝がてら憎しみの女王……ココロを探しに行く。それにネクとヘルパーともはぐれたままだしな」

こんな時ヘルパーが居れば、ココロを探すのにも役立つ筈だ。まずはヘルパーを探すとするか。

「あっ!? 忘れてた。これお土産な! 食う時はちゃんと温めろよ。精霊達もな!」

「あ、ああ。後で食う。スマンな」

『『『ありがとうございまくすっ!』』』

とりあえずイエロー寮で買った(及び大量にレティシアがおまけで貰った)タコ焼きを万丈目とおジャマ達に激励として渡し、十代に事の次第を説明しに行く事にした。

……紅葉さんや国崎さんとも話したいしな。

「そっか。結局会えなかったのか」

「ああ。祭り中にネクとヘルパーともはぐれたし、探す相手が増えて嫌になるな」

十代達の所に戻ると、何故か紅葉さんが大勢の生徒（レッドにイエロー、少しだけブルー）を相手取ってデュエルしていた。

今からデュエルをお願いするのも迷惑だろうし、観客席で十代からデュエルの様子を聞きがてら状況を伝える。

「ジ・アース？ 本当に紅葉さんはジ・アースを使ったのか？」

「ああ。あんなヒーロー初めて見たぜ！ もうカッコいいのなんのって！ ……そういえば遊児。前に俺にジ・アースの事を聞いてたよな？ って事は遊児はあのカードの事を知ってたんだよな？ どこで知ったんだよあんなの？」

「あ、ああ。内緒だ」

流石に漫画版で見たとは言えないしな。しかし不思議な話だ。ジ・アースは漫画版で重要な役割を担う世界にそれぞれ一枚しかないプラネットシリーズの一つ。

紅葉さんはかつて世界大会で優勝した時に手に入れたという話だったが、そんな有名

なカードならヒーロー大好き十代が知らない筈がない。となると考えられるのは……。

「よお久城。さつきは碌に挨拶も出来なかったが元気そうだな」

「国崎さんっ!」

「おいおいよせよ。これでも同じ釜の飯を食った仲だろ?」

そこに国崎さんがふらりとやってきた。俺が一礼すると、国崎さんは手をひらひらさせてそう言う。

「しかし驚きました。まさか国崎さんが紅葉さんと友達だったなんて」

「まあ最近は会ってなかったんだけどな。この島で十代、お前のデュエルを見てさ。なんとなく久しぶりに会って話したくなつてよ。それで話した時にみどりさん……紅葉の姉さんな。みどりさんが次の学園祭でこの島に行くつて言うからそれに便乗してこつちに來たつて訊だ」

響みどり。この人もまた漫画版の重要人物だ。こつちの世界でもどうやら学園の教師らしいけど、今は長期休暇をとっているらしい。多分今回來たのはその事についてだろう。

その後も俺達は色々な話を国崎さんから聞かせてもらった。紅葉さんについての話とか、ジャーナリストとしてあちこちを回った話とか。十代は国崎さんが実はこの学園に潜入していたつて聞いてちよつと驚いていたな。

「よし。じゃあそろそろ行くかな」

「もうか？ 紅葉の奴は……ああ。まだかかりそうか」

さつきから紅葉さんが次から次へと倒しているが、まだまだ生徒の数は残っている。

……あつ?! 今三沢が行ったな！ これは他の奴らより長引きそうだ。

「流石にこれだけの連戦ですから紅葉さんもお疲れでしょう。お話はまたの機会に取っておきます。今日はありがとうございました。じゃあ十代。こっちは頼む。もしアイツらが戻ってきたら、俺が探していたと伝えてくれ」

「分かったぜ！」

国崎さんの前なので名前を伏せるが、十代は元気よく返事をする。……ホントに分かってるよな？

「おっと。忘れる所だった。……ほらっ！」

別れ際、国崎さんが俺に何かを投げ渡す。これは……パソコン用のチップか？

「前にも言っただろ？ 俺なりに真実を調べてみるって。そのデータは好きに使いな」

「……感謝します」

俺は国崎さんに深く一礼すると、そのまま二人に別れを告げて歩き出した。

『遊児お兄ちゃん！』

「レティシアか」

そこにタツタカ走ってくるのは実体化したレティシアとテディ。荷物が多いからとテディもつけたけど、どうやら無事にお土産を渡せたらしい。テディは戻るや否や俺に飛びついて再び背におぶさる。

『おばあちゃんもエビさんも喜んでたよ！ 魔法少女のお姉ちゃんは居なかったの？』

「ああ。入れ違いになったみたいだ。ヘルパーやネクも探さなきゃだし、俺はまた宣伝も兼ねて行ってくるよ。レティシアはどうする？」

『お兄ちゃんと一緒に行く！』

レティシアは考えるまでもないとばかりに即答。そのまま俺の手を握る。さっきからずっと半透明状態で傍に浮いている罪善さんも、賛成とばかりに歯をカタカタ鳴らす。

『行こつ！ ……とところで、どこに探しに行くの？』

「そうだな。まずはネク達とはぐれたイエロー寮に向かってみようか。その後でブルー寮だ。葬儀さんや雪の女王もこちらに向かっていている筈だし、途中で落ち合えるかもしれない」

さうて。ネク達はどこへ行ったのやら。のんびり祭りを楽しむにはまだまだかかりそうだ。



「おかしい。想定ではもう溜まり切っている筈なのに」

島にある湖の畔に佇む古城。その部屋の一つにて、吸血鬼カミューラは苛立ちの声を上げていた。

実を言うと、彼女はセブンスターズとしての活動にあまり熱心ではない。無論契約上鍵の守り手と戦う事自体は了承しているが、あくまでそれは彼女の背負う大願の為。吸血鬼一族の復興の為である。

逆に言えば、一族の復興が叶うのならわざわざ戦う必要はない。そして契約者である影丸理事長が提案した復興の方法は、三幻魔の力を使う事。

つまり彼女は鍵の守り手を全員倒すという手段より、直接三幻魔の力を我が物にして一族の復興を目指す手を取ったのだ。

自分の順番を繰り下げながら情報を集め、今日この日の為に計画を練りに練った。無論途中で計画が理事長に露見しないよう慎重に、かつ必要な物資を大胆にもセブンスターズの活動の一環として理事長に請求したりもした。

それが今日、遂に叶う。あとは呼び水として七精門から洩れる三幻魔の力を規定値まで蓄えるだけ。だというのに、

「何故っ!?」 七精門から洩れる力は確かに検知している。長い時間をかけて力の流れを調べ、今日僅かに流れをズラす事でこの城に自動で流れ込むように調節もしたわ! 邪魔な鍵の守り手やバランスサーが祭りにうつつを抜かしている今が絶好のチャンスだというのに、何故想定よりも力の溜まりが遅いのっ!?」

まるで流れる途中で誰かに横取りでもされているような。そう考えた時、カミューラはハツとした。

(まさか自分と同じように、この機に乗じて三幻魔の力を利用しようと企んでいる者が!?)

何せ自分がそうなのだ。同じ事を考える者が居ても何ら不思議ではない。そうと分かればカミューラの行動は早かった。

「行きなさい我が僕達よ。何か異変が無いか調べておいで!」

早速僕たるコウモリ達を操り、城から七精門までの力の流れを逆に辿らせる。それからしばらく経ち、

キイキイ。

「さあおいでなさい。何を見たのか私に教えてちょうだい。……これは!?」

早速戻ってきたコウモリの一体と感覚を同調する。そしてコウモリが見聞きした事柄がカミューラの頭に流れ込んだ。それは、

『なんだこのコウモリ達は？ シツシツ！ 私が気持ちよく力を蓄えているのを邪魔するんじゃないっ！ 何とかしろヘルパー！！』

〈ピピっ！ 了解〉

よりによつて七精門の真上に陣取る西洋風の人形と、コウモリ達を身体から突き出たアンテナから発する音波で追い散らす白い機械の姿だった。

閑話 幻想体紹介 その三

『幻想体 異界の肖像』

永続罨

効果

①発動時、自分フィールド上のモンスターを1体選択する。対象のモンスターが戦闘を行う場合、コントローラーへの戦闘ダメージは0になる。

②対象のモンスターが破壊される場合、代わりに自分フィールドの他のモンスターを墓地に送る。

③対象のモンスターが場を離れた時、このカードは破壊される。

④このカードが場を離れた時、対象のモンスターは破壊される。

描かれた対象に加護を与える不思議なキャンパス。描かれた者は痛みも怪我也寄せ付けず、いつまでも若々しいままでいられたという。

ただしそんな旨い話はなく、代わりにその者の周りの誰かが強制的に痛みや怪我を、その絵そのものが老いを肩代わりしてくれているだけ。

周りに誰も肩代わりしてくる者が居なくなつた時、それまで肩代わりされてきたものがまとめて降りかかる。たった一人の孤独と共に。

『幻想体 魔弾の射手』

星5 ATK2000 DEF1700 悪魔族 闇

効果

①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフオートカウンターを3個乗せる。

②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを3個乗せる。

③フィールド上のPEカウンターを3つ取り除く、またはライフを1000ポイント支払うことで、フィールド上のカード1枚を破壊する。その後このカードのクリフオートカウンターを1つ取り除く。この効果を使う場合、このターンこのカードは攻撃できない。この効果は1ターンに2度まで使用できる。

④自分のターン終了時、カードに乗っているクリフオートカウンターを1つ取り除く。

⑤自分のターン終了時、このカードにクリフトカウンターが乗っていない場合、互いのプレイヤーは1000ダメージを受ける。その後このカードにクリフトカウンターを3個乗せる。

悪魔に魂を売り渡した……というより、自分が悪魔に成り果てた狙撃手。

悪魔との契約で、何にでも当たるが最終的に自分の愛する者を撃ち殺す銃と弾丸を手に入れた射手が行ったのは、最初に自分の愛する者を殺すというものだった。

結果残ったのは、愛する者が居ないことでデメリットの無くなった必中の銃と弾丸。そしてただ自らの衝動のままに引き金を引く射手のみ。

凄まじく有能だけどバックボーンがとんでもない射手。仕事はきっちり行うが、頼みすぎると悪意を持って故意に暴発させる危険人物。

『幻想体 シャーデンフロイデ』

星5 ATK1800 DEF2200 機械族 闇

効果

①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフトカウンターを

2個乗せる。

②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを3個乗せる。

③1ターンの1度、相手がモンスターを召喚、特殊召喚、反転召喚した時、相手プレイヤーに800ダメージを与える。

④自分のフィールドにモンスターが召喚、特殊召喚、反転召喚される度、このカードに乗っているクリフオートカウンターを1つ取り除く。

⑤自分のターン終了時、このカードにクリフオートカウンターが乗っていない場合、このカードを破壊する。

視線を合わせると機嫌を悪くする初見殺しの幻想体。約5秒以上画面に映し続けているだけで機嫌を悪くするため実況者殺しの異名もある。

挙動的にどこかヘルパーに近いものがあるが、ヘルパーの方が（お掃除モードに入っ
てさえいなければ）可愛い。

『幻想体 捨てられた殺人者』

星3 ATK1400 DEF1200 戦士族 地

効果

- ①このカードの召喚、特殊召喚、リバース時、このカードにクリフオートカウンターを1個乗せる。
 - ②このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを2個乗せる。
 - ③自分のターン終了時、このカードに乗っているクリフオートカウンターを1つ取り除く。
 - ④自分のターン終了時、このカードにクリフオートカウンターが乗っていない場合、互いのプレイヤーに400ダメージを与える。その後このカードにクリフオートカウンターを1個乗せる。
- 薬を投与され、研究され、最終的に見捨てられた元死刑囚。
- 元々は彼の暴力性を取り除くという研究のはずが、いつの間にか人間性をなくしてしまっ結果となった。
- その末かどうか不明だが、金属と化した自身の頭を辺り構わずぶつけるようになってしまったという。
- 意図的に脱走させるのが簡単でありながら、本人の戦闘力はそのままで高くないのでよく試し切りや兵隊のカウント上げに使われる。使いようによっては結構有能。

『幻想体 小さな魔女 レティシア』

星4 ATK800 DEF600 魔法使い 地

効果

①このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを3個乗せる。

②1ターンに1度発動可能。相手フィールド上の表側表示モンスター1体を選択し、互いにLPを1000回復、またはカードを1枚ドロウする。

③②の効果で選択されたカードは、二度目のコントロールのターンまでに攻撃宣言を行うと破壊され、自分フィールドにプレゼントトークン（星4 ATK1400 DEF900 昆虫族 地）1体を特殊召喚する。

別名小さな魔女とも呼ばれる少女。愛らしく可愛らしい、幼女と少女の境目辺りの姿をしている。

性質はとにかく善。とても良い子。ただし自分がそれなりに力を持つ幻想体であるということを微妙に理解していない節がある。

人の笑顔にとっても敏感であり、どこまでも善意で周りを笑顔にしようと行動する。ただその方法がちよつとアレなのが大问题。彼女の友達は必ずしも善性ではないのだから。

『幻想体 古い信念と約束』

永続魔法

効果

①1ターンに2度、フィールド上のPEカウンターを3個取り除くことで発動可能。カードを1枚ドロウする。

②①の効果を使ったターン終了時、コイントスを行う。表はそのまま。裏が出た場合このカードを破壊し、手札1枚をランダムに捨てる。

不思議な球体。元々の能力は装備品の強化。ただし失敗すると装備品が失われるというギャンブル仕様。

適当に使っても職員が死なないという意味では安全な幻想体だが、職員の命と装備の価値でどっちが良いかと悩む管理人も多いとか。

余談だが成功、失敗時の職員の動きが可愛い。

女吸血鬼は頭を悩ませる



「さうして。イエロー寮に着いたは良いのだが」

『ネクちゃんもヘルパーちゃんも居ないね』

はぐれた二体を探してここまでやってきた俺達だが、ここまで一向に姿を見かけなかった。さらに言えば、ブルー寮からレッド寮に向かっている筈の葬儀さんや雪の女王とも会っていない。

一応俺が持つているカードからそれぞれに呼び掛けることは出来るのだが、困ったことに会話は出来ても居場所までは分からない。おまけに何故かさつきから電波障害のような状態になっていて、ヘルパーに至っては通信自体が困難だ。

「どう考えても厄介事の心配がするんだよな。ネクも一緒だし」

『心配だね。どこ行っちゃったんだろう？』

カタカタ。

さつきからレティシアも悲しげだ。笑顔を大事にするレティシアにしては珍しい。ポンポンとティデイが片手で俺にしがみつきながら、もう片方の手でレティシアの背を

擦っている。

半透明の罪善さんも柔らかな光をレティシアに当てて慰めているようだ。

「大丈夫。すぐ見つかるさ！ 今下手に手分けするとまたはぐれそうだし、ひとまずもう一度屋台を一から周って……んっ!？」

話している途中、俺の持っている携帯パッドにメールが入った。こんな時に一体誰だろう？ 何の気もなく画面を開くと、

「緊急事態」。

という題名で、カミューラから急な召集の連絡が書かれていた。ああもうこの忙しい時につ!! 一体どうしたってんだ？

大慌てでバランスサーの衣装を調達（またふらつと現れたディーが部屋から取ってきた）し、森の中で着替えつつ守護者である大鳥と合流。

審判鳥と罰鳥はそれぞれレッド寮とイエロー寮に残し、俺達は比較的ブルー寮に近い島の湖。つまりカミューラの待つ城へと向かう。

そこで俺達を待っていたのは、

「待っていたわよバランスサー」

『これは……一体どういう状況だ?』

「どういうつて……バカな人。見れば分かるでしょう? ティーパーティよ」

何故か城の一室にて、先に帰った筈の明日香とカイザー、吹雪と一緒に紅茶を嗜むカミューラ達の姿があった。

いやホントにこれどういう状況!?

◆◆◆◆◆

時間はカミューラがコウモリ達を通してネク達を発見した時まで遡る。

「何なのよ。一体何なのよアレはっ!」

カミューラも訳の分からない事態に頭を悩ませていた。何か妙だと探らせてみれば、よりによって七精門の真上に妙な人形と機械が陣取っている。

コウモリ越しに調べた結果だが、どうも三幻魔の力をこの城に流れる途中であるの二体。正確に言えば人形の方が吸い取っている。そのせいで城に流れ込む頃には力が想定より大分減ってしまったのだ。

ならあの二体を排除する手だが、厄介な事にアレは精霊だ。しかもどちらも実体化出来るほどの格があり、おまけに場所が最悪。例えるなら無尽蔵に力が湧いてくるスポットなので、下手に戦えばこちらも相当の損耗を覚悟しなければならない。

そしてトドメの一手として、

「人形はともかくあの機械の精霊……確か balanサーが使っていたわね」

これまでのコウモリ達による地道な調査。その中で balanサーがああの機械のカードを使用したデュエルがあつた。つまりは下手に手を出せば、balanサーにこの一件がバレル可能性がある。そうなつたら確実に邪魔をされるだろう。

「……仕方ない。忌々しいけどひとまずここは様子見ね」

これまで練りに練つた策を邪魔されたのは良い気分ではないが、まだ最悪の段階という訳でもない。想定より少ないとはいえ元の量が量だ。時間を掛ければいずれは規定量に達するだろう。

これ以上動いて邪魔者、balanサーや鍵の守り手に勘づかれないよう今は静かに待とうと、祝杯用に用意しておいたワインを景気づけに開けてグラスに注ぐ。その時、

キイキイ！

先ほどとはまた別コウモリが一体戻ってきた。そういえば念の為城の周囲も見張らせていたのだと、カムミューラも今になって思い出す。

「あら？ ……ああ。さっきの邪魔者の衝撃が強くて忘れていたわ。さあおいで。何があつたか見せてちょうだい。まあ流石にさっきのより酷いものは出ないでしょうけど」

カムミューラは余裕をもつて優雅にワインを口に含みながら感覚を同調し、そのまま見

た内容にワインを吹き出しそうになった。

「なっ!? 何故こんな所に鍵の守り手がっ!?」

そこに見えたのは鍵の守り手たる天上院明日香。そして資格こそもないものの元守り手のカイザーこと丸藤亮に、元セブンスターズのダークネスこと天上院吹雪だった。

これはただ間が悪かったとしか言いようがなかった。

コスプレデュエルの途中でブルー寮に戻ろうとしていた明日香と吹雪。そして二人を送っていく事になったカイザー達。だがその道中で、明日香が三人の思い出の場所である湖に寄って行こうと提案したのだ。

勿論中等部の頃からここで暮らしていた三人だ。思い出の場所は幾つもある。だが先ほどの大会で少し気分が浮き立っていた事。丁度昔の様に三人揃っていた事。その内の一つが場所的に近かった事等の偶然が重なり、三人は湖に足を運ぶこととなった。

しかし来てみれば湖は霧に覆われ、よく見れば一糸乱れぬコウモリの大群が流れとなつて霧の中に入っていく。これはおかしいと少し調べてみた結果、霧を抜けた先で明らかに怪しい中世風の城を見つけてしまったという訳だ。

霧だけなら自然現象で誤魔化すことも出来ただろう。だが偵察の為にコウモリを大量に放ったのが完全に仇となった。

それに鍵の守り手達は以前、タニヤが数日で巨大闘技場をこつそり建築していたのを知っている。そこから連想すれば、この城もセブンスターズ絡みであるとすぐに分かるだろう。

「マズいわね。普段ならともかく今はマズいわ」

無論カミューラとてセブンスターズの一人。腕に覚えはあるし、真つ向勝負で負けるとは思っていない。そして事前に各メンバーのデュエルを分析し、デツキもコウモリ達に探らせているので情報戦でも負けるつもりはない。

しかしいくらなんでも残っている鍵の守り手を全員相手取るのは不測の事態が起きかねないし、三幻魔の力が規定値に達するまではこの城の仕掛けも動かせない。

幸いな事にこの霧の中、及び力の流れに沿う地点では城主の許可がない限り通信が阻害されるように調整してある。しかしこのまま戻ってこの城の事を知らされれば厄介だ。

「こうなつては力が規定値に達するまで時間を稼がなくては。何か……………仕方ない。僕達よっ！」

カミューラはコウモリ達に命を下すと、ゆつくりと部屋を出る。城の主人として来客

を出迎える為に。

一方その頃。

「一体……(´)は？」

「兄さん。私から離れないで」

「……ああ」

明日香達三人は、大量のコウモリ達に誘われるように城の中に入っていた。

いや、明日香にしてもカイザーにしても、吹雪の事もあるので一度この場を離れようとはした。しかしその前にコウモリの大群に退路を阻まれ、半ば無理やり城に招かれたのだ。

入ってみれば城の内部は実に絢爛。床も壁もピカピカに磨かれ、レッドカーペットが入り口から階段まで伸びている。……整備をしているのが大量のコウモリ達だというのがアレだが。

言ってみれば、この城は生きています。勿論生物学的意味ではなく、正しく城主がその城に在り、使われる事でより深みを増す類の物だ。

キイキイ。キイキイ。

目を見張る明日香達の前で、急にコウモリ達がレッドカーペットの両脇に列を成す。それは入口より来たる客人達を出迎えるようにも、

「あらあら。珍しいお客人ね。鍵の守り手達と懐かしのダークネス。ようこそ我が城へ。城主として歓迎するわ」

ゆつくりと優雅に階段を降りる主人に敬意を表するようにも見えた。

「アナタは？」

「私の名はカミューラ。誇りあるヴァンパイア一族の最後の一人にして、この城の城主。そしてセブンスターズの一人。本来なら出会ったが最後即決闘なのでしょうが……」

カミューラはそこまで言うのと、くるりと明日香達に背を向けて軽く流し目を送る。それは並の男であればそれだけで魅了されるような魔性の笑み。

「フツ。城主としては客人をもてなさないのは無作法審判というもの。バランサー役が到着するまでの間、お茶でも如何かしら？」

優雅な女吸血鬼の時間稼ぎが始まった。

閑話 女吸血鬼のギスギスしたお茶会



「さあ。どこにでもお好きなようにお座りなさつて。遠慮は要らないわ。礼儀作法はあまり期待していないから」

そこは城の一室。来賓をもてなす為の部屋。

そこに通された明日香、カイザー、吹雪の三人は、この城の城主たるカミューラの歓迎を受けていた。

「さてと、ワインは……止みましょうか。何せお客人は皆様お子様でいらつしやるから。紅茶で良いかしら？」

「さつきから聞いていれば、随分と言葉の端々に棘がある言い方ね」

「そうかしら？ 余裕がないからそう聞こえるだけじゃない？ お嬢さん」

そうどこか嘲るように口角を上げるカミューラに対し、明日香はほんの僅かにムツとした顔をする。だが、

「まあ待て明日香。ここでムキになっても何にもならない。一度落ち着け」

「……そうね。分かったわ」

明日香は大きく息を吐くと、立ち上がりかけた席にそのまま座り直す。

「貴女もだ。まず何の意図があつて俺達をこの茶会に招いたのか、それを説明するのが筋ではないか？」

「フッフ。流石はカイザーと呼ばれた男。冷静ね。……本当に、私の“お人形”に出来ないのがやや惜しいわね」

そう三人からすれば意味の分からない事を呟くと、カミューラは軽く手を叩く。すると、

キイキイ。キイキイ。

大量のコウモリ達が部屋に入り込んできた。その後肢でガラガラとカップとティーポットの乗ったワゴンを引きながら。

「よく躡けられているでしょう？ 私の可愛い僕達よ。この通り給仕役も担えるわ。……さあ。お茶にしましょうか。説明はお茶を飲みながらでも良いでしょう？」

カミューラの言う通り、コウモリ達は器用に鉤爪や後肢を操つてそれぞれの前にカップを並べ、そこにティーポットから温かい紅茶を注いでみせた。

「さあ。温かい内にどうぞ。そう警戒しなくても毒など入っていないわ」

そう言つてカミューラは真つ先にカップを手にとって口をつけ、ごくりと一口飲んでみせた。そして試すように三人を見つめる。

「……頂くとしよう。どのみち簡単にはここから出ることは出来そうにない。なら相手の意向を確かめてから次の手を考えても遅くはないだろう」

静かにカップを手取るカイザーに明日香が視線で咎めるが、カイザーは落ち着いた様子で不敵に笑う。

「それに、吹雪ならこんな時、決して拒む事なく茶会に臨んだだろうしな。『レデイのお誘いを拒むことほど無粋なことには無い』などと奴なら言いそうだし」

「……ふふっ！ そうね。確かに兄さんなら言いそうだし」

明日香はクスリと笑って自身の横に居る当人を見る。相変わらず自身の意識が薄弱で、ぼくつとすることの多い今の吹雪ではあるが、それでもカップを手を取った一瞬優雅さを取り戻したかのように明日香の目に映った。

「……ほう。これは」

「美味しい！ この紅茶とても美味しいわっ！ 香りもとても上品ね」

「そうでしょうとも。それくらいはお子様のお舌でも分かるようね。血のように紅い極上のワインには及ばないまでも、私自ら選んだ紅茶ですもの」

それぞれの言葉にカミューラは満足げに頷く。吹雪は何も言わないが、どこことなく表

情が和らいでいるようだ。

「さて、何故アナタ達を茶会に招いたか……だったかしら？」

それぞれが一口飲んだのを見計らい、カミューラは先ほどのカイザーの質問を繰り返す。

「それに関しては先ほど答えを言ったわね。それは私がこの城の城主だから。城主としては如何に敵であれ、客人はもてなすのが筋でしょう？」

「その言葉を鵜？みにしろと？」

「勿論それだけじゃないわ。正しく鍵の守り手とセブンスターズとして戦うのなら、出来れば審判役バランスが居る状態が望ましいもの。それまでの間の時間潰しよ」

ちなみにカミューラの言葉は嘘ではないが真実でもない。

確かにカミューラは誇りある吸血鬼一族として、この城の城主として恥じない行動をとろうと心がけているし、セブンスターズとして戦うのならバランスサーが居る方が望ましいというのも本当だ。

しかし、カミューラはいざとなったらそれらを目的の為にかなぐり捨てる事が出来るというだけ。

カミューラの狙いは試合云々よりもその先にある三幻魔の力。そしてそれを手に入れる為に今最も必要なのは時間である。

（今一番マズいのは、この三人が一人でも外に出て他の誰かと連絡を取る事。でも、じきに試合が始まるから待てという事であればしばらくは誤魔化せるわ）

実際バランサーには確かに三人の目の前で先ほど招集のメールを送る事により、もうすぐ来るという事は誰も疑っていない。

そして、それ以外の鍵の守り手には一切連絡が行っていないとは仕組んだカミューラ以外誰も気づいていない。

これで後は、来る筈のない他のメンバーを待つてさらに時間を稼ぐのも良し。気づかされて戦いになったとしても、一人ずつであれば自分が負ける筈もない。

「ちなみに逃げようとしたって無駄よ。正直言つて、ここでアナタ達を仕留める事自体は簡単なのよね」

カミューラが指をパチンと鳴らすと、部屋のコウモリ達が一斉に羽ばたいて明日香達を取り囲む。

「甘いのよねえ。鍵の守り手も、他のセブンスターズも。これはゲームじゃないのよ。確かにデュエルをしなければ七精門は正式には開かないのです。だけど、対戦相手が盤外戦術を仕掛けるなんてよくある事じゃないかしら？」

「くっ!?!」

座ったまま明日香達は動けない。実際カミューラの言葉通り、少しでも動けばコウモ

り達は一齐に襲い掛かるだろう。この数を強行突破するのは出来なくはないが、確実に無傷では済まない。

カミューラはそんな三人を嗜虐の笑みで見つめ、

「……だけど残念。それは契約で禁止されているのよねえ。まったく忌々しい」

再びパチンと指を鳴らし、コウモリ達を下がらせる。

「悪趣味ね。いつでも潰せるぞって脅しのつもり？」

「いえいえ。ただの警告よ」

明日香の鋭い視線にもカミューラは動じず、優雅に紅茶をまた一口啜る。だが、

「……良いわ。バランスが到着するまで待てと言うのなら待ちましょう。だけど兄さんは鍵の守り手じゃない。解放してくれない？」

「そうね。では、私の僕達を付けて外へ」

「流石にそこまでは信用できないわ。私か亮と一緒に出してちょうだい。一度寮に戻してからまたここに来るから。それが出来ないというのなら、力づくでもここから兄さんを連れ出すわ」

覚悟の籠った声を上げる明日香。そしてカイザーもそれに同意して静かに頷く。その言葉に困ったのはカミューラだ。この流れは非常にマズイ。

実は先ほどのコウモリ達を使った脅しはいわばパフォーマンス。確かにあの数を無

傷で突破するのは難しいが、逆に言えば怪我覚悟であれば普通に突破できるのだ。

このままではどちらかが外に出てしまう。そうすれば他のメンバーと連絡を取ってしまうだろう。カミューラが内心頭を抱えた時、

キイキイ。

そこに部屋の外から一匹のコウモリが飛び込んできた。そのコウモリがもたらした知らせこそ、

「待っていたわよバランスー」

『これは……一体どういう状況だ？』

「どういうって……バカな人。見れば分かるでしょう？ ティーパーティーよ」

審判役がここに到着したという知らせだった。

明日香対カミューラ その一 女の戦い



さうでどうしたものか。

俺がコウモリ達に通された部屋では、明らかに臨戦態勢ですよって感じの明日香、カイザー、そしてやや虚ろな表情の吹雪がカミューラと向かい合っていた。

『緊急招集を受けて急行してみれば、まさか茶会のお誘いか？ それにしては茶菓子が無いのは寂しいな。言ってくれば学園祭で何か買って来たんだが』

「ふん。まあそれだけなら実に平和でしょうねえ。だけど残念。調整役兼審判役としての仕事よ」

軽くおどけて尋ねるが、カミューラは皮肉気にそう切り捨てる。まあ分かってたけどな。ティーパーティーというには些か雰囲気物が物騒なもの。

そこからカミューラに事の次第を聞いてみると、今日は戦う気は無かったが偶然この居城が明日香達に発見されてしまったらしい。

まだ迎撃態勢が整っていないなかったカミューラは、他の鍵の守り手がやってくる前に慌ててこの三人を確保。しかしいつまでもこのままにしておく訳にもいかず、仕方なく審

判役を呼ぶハメになったとか。

ぶつちやけた話胡散臭い。

このカミューラの性格なら、審判役なんか知った事かとばかりに動いてもおかしくない。しかしわざわざ俺を待った。何の為に？ ……まあ良い。今は審判役としての仕事を果たす時だ。

『事情は分かった。調整役として本来ならこんな急なデュエルは避けてほしいが、今回は状況が状況だ。審判を務めよう。場所はどうか？』

「いえ。ここじゃ少々手狭ね。大広間まで移動するのでしょうか。異存は無いわよねえ？ アナタ達」

「……良いわ。ここまで来たらもう兄さんを連れて城を出るより、バランサーの前でカミューラ。貴女を倒した方が早い」

明日香は力強く宣言し、カイザーは何も言わずに頷く。察する所明日香は吹雪の事が気にかかっているようだが、それが勝負にどう影響するのやら。

そうしてカミューラの先導でやってきたのは、城に入つてすぐの所にある広間。

そこで今回戦う二人。明日香とカミューラが向かい合つて立つ。……おつと。忘れていた。

『そう言えば、他の鍵の守り手に誰か連絡したか？ 急な話だったのでこちらはまだ連絡していないのだが』

「いいえ。私はしていないわ」

「俺もだ。その前にカミューラに城に招かれて、城の中からは何故か通信機器が不調になつている」

通信機器が不調？ ……カミューラが何かしたか？ そう思つてカミューラを見ると、何も言わずにただニヤニヤと嗤うのみ。さしずめ他のメンバーを来させない為の妨害か。

「別に観客が必ずしも要るつて訳でもないわよねえ？ ……まあ気になるというのなら、今から呼び掛けて来るまで待つ？ 私は構わないわよ。それなりに時間がかかるでしょうけど」

時間……ねえ。わざわざ俺が来るまで待つて、なおかつ他のメンバーが来るのを待つ。時間稼ぎか、或いは別の目的があるのか。ただ、

『いや。どうやらもうその心配はないらしい。見ろ』

俺はその言葉と共に広間の入り口を指差す。そこには、

「お〜！ 何だよ。もう始まってんのか」

「天上院君っ！ 無事かつ！」

真っ先に駆けこんできた十代と万丈目を始め、三沢、クロノス教諭の姿があつた。皆してコスプレを止めて普段着だ。それを見てカミューラはあからさまに顔を歪める。

「貴方達っ!? 連絡もしてないのに良く来たわね？」

「おうよ！ なんかネク……俺の友達の友達から、湖にセブンススターズが現れたからたまにはこつちから攻め込んでみたらどうだつて聞いたからな！ それで早速近くに居た万丈目や三沢、クロノス先生に声をかけてやって来たつて来たつて訳だ！」

「心配したぞ天上院君。連絡を取ろうとしても君とカイザー、大徳寺先生に繋がらず、これは真っ先に突撃したのかと思ひ慌ててやって来た。ああ心配しないでくれ。コスプレデュエルの方は翔や隼人等に任せてある。司会をあの響紅葉プロが買って出てくれたんだ」

二人はそんな事を言っているが、何やら聞き逃せない単語が出てきたんだけど。何でネクがわざわざ十代にそんな事を？ あと響さんになんて事させてんだっ!? おまけに大徳寺先生に連絡が取れないとは一体？

「……まさかあの人形っ!? こちらの動きに勘づいて邪魔をつ!! 忌々しい」

ぼつりとカミューラもそんな事を言っている。こっちはこっちでネクと何かしら因縁があったのかも知れない。しかしこれで妨害工作はあまり意味が無くなったな。

「まあ良いわ。ここまで人が集まってしまったのは誤算だったけど、どのみちあと僅かの事。……さあ。デュエルを始めるとしましょう」

気を取り直すように言うカミューラに対し、明日香もまた構えを取って両者デュエルデイスクを展開する。ちなみにカミューラの物はコウモリの羽を模した特注品だ。

『宜しい。では最終確認だ。セブンスターズ側からはカミューラ。鍵の守り手側からは天上院明日香。戦うのはこの二人で間違いないな?』

「ちよつと待つノ〜ネっ! 生徒を危険な目には遭わせられません〜ノっ! ここはこのクロノス・デ・メデイチが」

「いや。ここはこの万丈目準がっ!」

「おっ!? 立候補アリかっ! じゃあハイハイ! 俺がやるっ!」

おっと。ここでクロノス先生と万丈目、十代と残る鍵の守り手は全員立候補か。だが、

「いいえ。やるのは私。貴方達全員もう一回ずつ戦っているじゃない。今度は私の番。……もう見てるだけなんて嫌だから」

「あら? チェンジは無し? ……まあ私としてもその元気いっぱいの坊やは苦手だ

し、クールぶって実は熱いなんて子も大っ嫌い。残る一人は顔で論外。という訳でまだアナタの方が幾分かマシだけだね。そのカイザーがまだ選べるなら好みだけどうもいかないし」

明日香はふるふると首を横に振り、カミューラも十代達を一目見て軽く手をしつと振る。存外タニヤ並に好みにうるさいらしい。あとまた顔で弾かれたクロノス先生は泣いていい。

『では双方前へ。デュエルが始まる前に何か言っておく事は？』

「こちらは無いわ。相手がどんな手で来ようと、ただ全力で戦うだけ」

「ではこちらからは一つ。私はこれまでのセブンスターズ。ダークネスや筋肉女、アビドス三世、タイタンのように甘くないわ。当然このデュエルは闇のデュエルよ。敗者はこの人形に魂を封印される」

端的に終わった明日香に対し、カミューラはそんな事を言ってお胸元から手のひらサイズの人形を取り出す。こうやってプレッシャーをかけるカミューラお得意の盤外戦術か。

「それでも私はコレクターだね、そうして魂を込めたお人形を作ってコレクションするのが趣味なの。アナタの魂はどんなお人形になるのかしらねえ？」

「どうかしら？ 私が勝つものだからそんなこと気にする必要はないわね」

「へえ。……生意気な」

怖あつ!? 二人して口元は笑っているのに目が笑ってない。火花バツチバチじゃんっ!?

二人の庄にあてられたか、男性陣は皆冷や汗をかきながら後退る。至極正しい判断だ。俺も正直逃げたいが、審判役だから最後まで残らなきゃチクシヨウ!

『で、では問題なさそうなので、デュエル開始の合図は二人に委ねよう。両者健闘を祈る』

ここから先は女の戦い。男の出る幕はない。

「デュエルっ!!」

カミューラ LP4000

明日香 LP4000

「まずは私のターン。ドロロー」

「あら? さっさと自分から先攻を取りに行くだなんて、余裕がないのかしら?」

「アナタが遅いだけでしょ? 私は手札から『不死のワーウルフ』を攻撃表示で召喚。

カードを一枚伏せてターンエンド」

不死のワーウルフ 星4 アンデット ATK1200

いきなり互いに舌戦をかましながら、カミューラは全身毛むくじやらの狼男と伏せカードを出してターンエンド。だけどあんなモンスター見た事ないぞ。アニメオリジナルか？

「不死のワーウルフ。確か戦闘で破壊された時、デッキから同名カードを攻撃力を500上げて特殊召喚する厄介なカードだったわね」

「ふふっ！ お嬢さんにしてはよく勉強しているわね。そう。我ら吸血鬼、及び不死者たるアンデットは不滅。破壊されても何度でも蘇るわ」

成程リクルーターか。攻撃力を上げて出てくるとは面倒な。しかし、それだけなら対応策はある。

実際明日香も口では厄介と言ってはいるが、別段焦った顔もしていない。

「私のターン。ドロロー。確かにワーウルフは戦闘破壊したら強くなつて蘇る厄介なカード。だったら……破壊しなければ良い。私は『サイバー・チュチュ』を攻撃表示で召喚！」

サイバー・チュチュ ATK1000

そう来たか。明日香の場に現れたのは、短いスカートを穿いたバレリーナ。このカードの効果は、

「ふっ。可愛らしい子が出てきた事。我が僕の餌にでもなりに来たのかしら?」

「いいえ。戦う為よ。バトルっ! サイバー・チュチュの効果。相手フィールド上に存在する全てのモンスターの攻撃力がこのカードの攻撃力よりも高い場合、直接攻撃出来る! 『ヌーベル・ポアント』」

サイバー・チュチュはくるくると回転しながら迎撃しようとするワーウルフをすり抜け、そのままの勢いでカミューラに回し蹴りを叩き込んだ。

カミューラ LP4000↓3000

「くっ!? この女」

「私はカードを一枚伏せてターンエンド。クスツ。サイバー・チュチュの効果も知らないなんて、お勉強が足りないんじゃない? 吸血鬼さん」

痛みに怒りの目を向けるカミューラに対し、明日香はそう言って不敵に笑った。

だから怖いんだって二人共っ!?

明日香対カミューラ その二 二人のプリマ

カミューラ LP3000 手札4 モンスター 不死のワーウルフ 魔法・罠 伏
 せ1

1
 明日香 LP4000 手札4 モンスター サイバー・チュチュ 魔法・罠 伏せ

「良いぞ！明日香っ！ 先制パンチが決まったぜ！」

「ワーウルフを戦闘破壊したら攻撃力を上げて再び現れる。ならば戦闘をせずに直接攻撃に打って出るとはやるな」

「十代達からの声援に、明日香は軽く手を上げて応じつつカミューラから目を離さない。」

「そう。初撃こそ決まったとはいえ、カミューラの場合は未だ健在。まだまだ油断はならない。」

「よくもやってくれたわね。私のターン。ドロー。……私は手札から『ヴァンパイア』

「バツツ』を攻撃表示で召喚！」

ヴァンパイア・バツツ 星3 アンデット族 ATK800

カミューラが呼び出したのは、さつきから周囲を飛び回っているコウモリに似たモンスター。しかしまたアニメオ리지ナルかよ。

「このカードが場に居る限り、私の可愛いアンデット族の攻撃力は200アップする。わざわざ破壊されなくとも攻撃力は上げられるのよ」

ワーウルフ ATK1200↓1400

バツツ ATK800↓1000

「攻撃力の底上げね」

「バトル。不死のワーウルフでサイバー・チュチュに攻撃！ その小娘を引き裂いておやりっ！」

ワーウルフが主人の命に従い、少女に食らいつくべく呐喊する。だが、

「畏発動！ 『ホーリーライフ・バリア』。手札を1枚捨て、このターン相手から受ける全てのダメージを0にするわ！ そしてモンスターは戦闘で破壊されない」

その爪と牙が少女に届く直前、光の壁が展開されてワーウルフを阻む。戦闘ダメージもないのでは攻撃しても意味がない。

「生意気な。私はカードを1枚伏せてターン終了。……だけど、もうその小娘の効果は

使えないわ。こちらの場にはサイバー・チュチュと攻撃力の同じヴァンパイア・バツツが居るもの」

カミュラは悔しそうに、しかしすぐに気を取り直してそんな事を言う。

そう。サイバー・チュチュの効果はあくまで相手が自分より強くないと使えない。同じでは発動できないのだ。

「あら？ 私がサイバー・チュチュ頼りのデュエリストだとも思ったの？ なら教えてあげる。私のターンっ！ 私は魔法カード『強欲な壺』を発動！ カードを2枚ドロースる」

明日香は更にカードをドロースし、その瞳を僅かに細める。何か仕掛ける気か。

「私は魔法カード『融合』を発動！ 手札の『エトワール・サイバー』と『ブレード・スケーター』を融合！ 現れて！ 『サイバー・ブレイダー』」

サイバー・ブレイダー ATK2100

明日香が手札の2体のモンスターを融合して呼び出したのは、目元をバイザーで隠した長髪の女性。

サイバー・ブレイダー。これは実際に公式でもカードが出ているので俺も知っている。このカードの特殊な点は、相手の場のモンスターの数によって効果変動する点だ。

「サイバー・ブレイドの効果。相手の場のモンスターが2体の時、このカードの攻撃力は倍になる！」

「何ですってっ!?!」

サイバー・ブレイド ATK2100↓4200

全身から闘気を迸らせるサイバー・ブレイドが、バイザー越しに相手モンスターを睨みつける。

「私が知らないと思つて? ヴァンパイア・バツツの二つ目の効果。戦闘及び効果で破壊される時にデッキから同名カードを墓地に送る事で身代わりに来る。大方バツツとワーウルフで場を維持しつつ上級モンスターに繋げるつもりだったんでしようけど、この高攻撃力でLPを削り切つてしまえば関係ないわ」

今さりげなくヴァンパイア・バツツの壁役として有能な効果が明らかになつたけど、事態は一気に動き出した。

カミュラの残りLPは3000。サイバー・ブレイドでヴァンパイア・バツツを攻撃すれば、いくら破壊を免れてもカミュラのLPは吹き飛ぶ。

「バトルよ。サイバー・ブレイドで、ヴァンパイア・バツツを攻撃っ!」

サイバー・ブレイドが場を滑るように突進し、コウモリ目掛けてハイキックを叩きこもうとする。その瞬間、

「ふふっ。甘いわねえお嬢さん。毘発動！ 『妖かしの紅月』^{レッドムーン}」

クスリと笑うカミューラの場合に、血の様に真つ赤に輝く月が浮かび上がる。

「妖かしの紅月。相手モンスター¹の攻撃宣言時、手札のアンデット族1枚を捨てる事で発動。攻撃を無効にし、攻撃力分のLPを回復する。ついでにその後バトルフェイズは強制終了になるわ。私は手札の『ヴァンパイア・レディ』を捨てて発動！」

カミューラ LP3000↓7200

月から放たれる波動はサイバー・ブレイダーの攻撃を食い止め、代わりにカミューラに血の雨の様に降り注いでLPを回復させる。

「うえ〜。何だアイツ!？」

「まさしく吸血鬼だな」

他の鍵の守り手が口々に言う様に、真つ赤な光を浴びて恍惚とするカミューラの姿はまさに怪物とされた吸血鬼に相応しかった。

「…………ふう。ご馳走様。え〜と何だったかしら? 高攻撃力でLPを削り切ってしまった関係ない? ……当然読めてましてよそんな事」

「くっ!?! 破壊耐性があるとは言えヴァンパイア・バツツを攻撃表示で出してきたのは、こちらが攻撃力を上げて一気に削ろうとするのを読んでの事だったと?」

「まあ、そういう事ね」

クツクツと嗤うカミューラに、まんまとしてやられた形の明日香が悔しそうな顔で唸る。

しかし妙だな。明日香はこれまで一回もセブンススターズとの戦いに立っていない。なのに何故ここまで明日香の動きが読め……まさか!?

『カミューラ。お前まさかとは思うが不正行為はしていないよな?』

「失礼ね・バランスー。私もデュエル中にそんな事はしないわよ。……ただ、対戦前に相手のデッキを研究するのは反則じゃないわよねえ?」

『……成程。そっちなか』

一応の確認として声をかけると、カミューラは悪びれない態度でそう返す。

確かにカミューラはこれまでコウモリを介し、俺や鍵の守り手達の動きを探っていた。その際学園での授業のデュエルなども調べていたのだろう。

直前にデッキを組みかえる事もあるし確実にではないが、動きや構築の癖みたいなものはバれていると見た方が良い。そしてさっきのサイバー・ブレイダーは明日香のデッキのエース。当然対策もしているという訳か。

「汚いぞ! 正々堂々デュエルしろっ!」

「正々堂々? 虫唾が走る言葉ねえ。私は勝つ為に全力を尽くしているだけ。準備不足で勝手に喚いているんじゃないわよ坊や」

「バランサー。これは不正には当たらないのか？」

『……グレーゾーンと言った所か。デッキを直接覗く現行犯ならともかく、以前デュエルを見てそれを元に対策しただけであれば反則には当たらない』

憤慨する十代を横に万丈目が確認してくるが、相手の出方を読んで対策する事自体は罪じゃないしな。対策がダメって言うならそもそもサイドデッキの存在もダメになる。「さあお嬢さん。バトルフェイズは終わったけどまだそちらのターンよ。やる事がないならさっさとターンエンドしなさい」

「……私はカードを一枚伏せ、サイバー・チュチュを守備表示に変更。ターンエンドよ」
カードを伏せた事で、明日香はこれで手札を使い切った。手札消費の激しい融合を使つて一気に決めに行こうとしたからだ。

しかしまだ明日香の場には攻撃力4200のサイバー・ブレイダーが居る。大幅にLPを回復したカミューラではあるが、場だけ見れば優勢なのは明日香の方だ。
さて。ここからどう動くか。

カミューラ LP7200 手札3 モンスター 不死のワーウルフ ヴァンパイア・バツツ 魔法・罠 伏せ1

明日香 LP4000 手札0 モンスター サイバー・ブレイダー サイバー・
チュチュ 魔法・罨 伏せー

「では私のターンね。ドロー。……さあどうしましょうか？ サイバー・チュチュを引き裂くのは簡単だけど」

カミューラはそこでサイバー・ブレイダーの方をチラリと見る。

「返しのターン。下手に攻撃表示のままにいればそちらのモンスターの餌食。折角回復したLPも大分削られてしまうわね」

「何が言いたいの？」

「ええ。だから私こう思ったの。全部まとめて吹き飛ばしてしまえば良いってね。フィールド魔法発動！ 『不死の王国―ヘルヴァニア』っ！」

カミューラのカードの発動と同時に周囲の景色が切り替わる。

そこは荒れ果てた大地。そしてその中に静かに佇む中世風の城。……ってこの城じゃんっ!？」

「ヘルヴァニアっ!?! 禁断のフィールド魔法なのっネっ!?!」

「ふふっ。禁断ねえ。まあ禁断であって禁止じゃないのよね。その証拠に、この通りデュエルディスクはしっかりと認識しているわ」

クロノス先生が恐れ慄いているが、これもまた俺の知らないカードだ。カミューラア
ニメオリジナルのカード多いなっ！

「あのカードが禁断と言われる由縁。それは毎ターン手札のアンデットを一枚墓地に送
る事で、場の全てのモンスターを破壊する凶悪さから。発動ターンプレイヤーは通常召
喚を行えないデメリットはあるが」

「アンデットはそもそも墓地からの復活を得意とするカード。召喚制限なんて大したデ
メリットにもならないのよねえ。クスクス」

カイザーが補足説明してくれるが、成程それはえげつない。

実質アンデット使いにとつて、モンスターを捨てる度に毎ターンブラックホールが発
動するようなものだ。おまけに制限も非常に軽い。制限があるから禁止ではないとい
う考えだろうけど、確かにこれはこの時代において使うのを自重して欲しくもなる。

「これで薙ぎ払ってしまえば、あとはこちらの破壊耐性のあるヴァンパイア・バツツだ
け。手札も場も空っぽのお嬢さんなど赤子の手を捻るようなものですねえ。オ
ッホッホッホ！」

カミューラはそこで余裕の高笑い。確かにこれが決まれば戦況はほぼカミューラに
傾く。だが、

「フィールド魔法発動にチェーンして速攻魔法発動！ 『プリマの光』」

「ツホツホツ……何？」

「知っているかしら？ 始まりは誰もが見習いよ。だけど舞台に立ち続け、自らを磨き続けた時、見習いはいつか輝かしい主役プリマとなるわ。プリマの光の効果。サイバー・チュチュを墓地に送り、手札から『サイバー・プリマ』を特殊召喚する！」

サイバー・プリマ ATK2300

発動と共にサイバー・チュチュが光に包まれ、光が収まった後にそこに立っていたのは仮面を着けた立派な主役だった。だが、

「はっ！ 今さら攻撃力が上がるのが、ヘルヴァニアの効果でまとめて……なっ!？」

カミューラは唾然とする。何故ならヘルヴァニアが崩壊を始めていたからだ。

「サイバー・プリマの効果。このカードが召喚、特殊召喚に成功した時、場の表側表示の魔法カードを全て破壊する。プリマが立つ舞台には、こんな荒れ果てた場所は相応しくないから代えさせてもらおうわ」

明日香が淡々と語る中、遂にヘルヴァニアは完全に崩れ去って周囲は元のホールに戻る。

ちなみにサイバー・プリマは現実では生け贄召喚の時のみ効果が発動する筈だが、これもアニメ版の効果らしい。

「おのれえ。よくも私のヘルヴァニアを」

「高笑いなんてしている暇があったら早く効果を使えばよかったのに。それにしても……」

明日香はそこで一度言葉を区切り、

「相手の情報を調べてからでないと戦えず、折角の禁断のカードも調子に乗ってこの有り様。貴女……策士としてはともかく実力はセブンスターズの中でも弱いんじゃない？」

「……っ!?!」

それはまるで、吸血鬼の心臓に杭を打ち込むように。

孤高なるオベリスク・ブルーの女王は、二人のプリマを従えて言葉でカミューラを貫いた。

明日香対カミューラ その三 扉は既にその手の中に

「……くも。よくも言ってくれたわねこの小娘があつ！」

明日香の貴女弱いんじゃない宣言が余程効いたのだろう。カミューラが激昂して吠える。その口元は大きく裂け、鋭利な牙がむき出しになる。

「それが貴女の素？ 今までの貴婦人然とした姿はフェイクだったと言う訳？」

「……っ!？」

明日香の鋭い指摘に、カミューラはハツとして腕で口を覆う。だが、

「……ふう。私はヴァンパイア・バツツと不死のワーウルフを守備表示に変更してターン終了。私としたことが、つい挑発に乗せられる所だったわ」

ヴァンパイア・バツツ DEF1200

不死のワーウルフ DEF1200

一度大きく息を吐いたかと思うと、すぐに落ち着きを取り戻してモンスターを守備表示に変更。カードを伏せて守りを固める。

恐ろしく裂けていた口元も元に戻り、また悠然とした態度で明日香を見据える。

『おうっ!!? 言うねえ明日香も。いやはや。女の戦いというものも実に苛烈というもの』

『さ』

『今更だな。片や戦意漲るオベリスク・ブルーの女王。片や妖艶なる吸血鬼にしてセブンスターズの貴婦人。苛烈にならない訳ないだろう?』

『なるほど。言えてる』

いつの間に回復したのかしれつと出ているデイーにそう返しながら、俺は審判役として戦いを見守る。

さあ。全体破壊を回避し、攻撃力2300と4200のモンスターを出した明日香に流れは来ている。

だが即座に落ち着きを取り戻し、ガードを固めてきたカミューラの方がLPも手札も多い。

まだまだ勝負は分からない。

「私のターン。ドロロー。バトルよ。サイバー・ブレイダーとサイバー・プリマでヴァンパイア・バッツを攻撃」

「くっ!? ヴァンパイア・バッツは破壊される時、デッキから同名カードを墓地に送る事で破壊を免れる。私は2枚のヴァンパイア・バッツを墓地に送って破壊を無効! いく

ら攻撃しようと思駄な事よ」

「いいえ。これでもうデッキにヴァンパイア・バッツは居ない。次で終わりよ。私はカードを1枚伏せてターンエンド」

カミューラの場のモンスターは未だ健在。だが明日香の言う様に、もうヴァンパイア・バッツはただの攻撃力底上げモンスターだ。

もう片方のワーウルフを狙わなかったのは、おそらくそちらは戦闘で破壊された時に攻撃力を上げて同名カードを場に呼び出すカードだから。何か効果で破壊できるカードが来れば、わざわざ戦闘で破壊しなくとも良いと考えたのだろう。

モンスターの数が変わっていないからサイバー・ブレイダーの攻撃力も変わらず4200のまま。依然として流れがあるのは明日香の方だ。だけど、カミューラがこのまま終わると思えないんだよな。

カミューラ LP7200 手札3 モンスター 不死のワーウルフ ヴァンパイア・バッツ 魔法・罠 伏せ1

明日香 LP4000 手札0 モンスター サイバー・ブレイダー サイバー・プリマ 魔法・罠 伏せ1

「私のターン。……ふふ。良いカードを引いたわあ。現れるが良い我が同胞っ！ 私はヴァンパイア・バツツを生け贄に捧げ、ヴァンパイア・ロードを攻撃表示で召喚」

ヴァンパイア・ロード ATK2000

もう壁としてはあまり役に立たないバツツを生け贄として呼び出されたのは、貴族然とした見目麗しい吸血鬼。……だが、それだけじゃない。

「そして、ヴァンパイア・ロードをゲームから除外する事で、私は手札から『ヴァンパイア・ジェネシス』を攻撃表示で特殊召喚！ 現れよ吸血鬼の始祖よっ！」

ヴァンパイア・ジェネシス ATK3000

ロードが一瞬間に覆われたかと思うと、次の瞬間闇を突き破って出てきたのは禍々しい姿の巨体。こいつがカミューラのエースか。

「攻撃力3000っ!?!」

「それだけじゃないわ。ジェネシスの効果発動っ！ 手札のアンデットを1枚墓地に捨てる事で、そのカードよりレベルの低いアンデットを墓地から特殊召喚することが出来るのよっ！」

そう。ロードの時点で有った効果で破壊された時に復活する効果を捨てる代わりに、ジェネシスはこの展開力を手に入れた。どちらが良いかはケースバイケースだ。

「私は手札のもう1体のヴァンパイア・ロードを捨て、先ほど墓地に行った星3のヴァンパイア・バッツを守備表示で特殊召喚。バッツの効果により、当然他のモンスターの攻撃力もアップ」

ヴァンパイア・バッツ DEF1200

ヴァンパイア・ジェネシス ATK3000↓3200

もう1枚ロード有ったんかいっ!? しかしこれでモンスターの数が変わり、サイバー・ブレイダーの攻撃力も元に戻る。

サイバー・ブレイダー ATK4200↓2100

ヴァンパイア・ジェネシス ATK3200↓3000

「知ってるわよお。サイバー・ブレイダーは相手モンスターが3枚の時、相手の魔法・罠・モンスター効果を無効にする。だからまたバッツの攻撃力アップは消えるけど、その分サイバー・ブレイダーの攻撃力もダウンしているからそれで十分」

「マズいノ〜ネっ! ジェネラルの攻撃力が、サイバー・ブレイダーを上回ったノ〜ネっ!?!」

「攻めの要であるサイバー・ブレイダーがやられれば、一気に流れはカミューラの方に転がり込むぞっ!?!」

鍵の守り手達の慌てる声の中、明日香自身も分の悪さに冷や汗を一筋流す。それを見

てカミューラはご満悦だ。

「バトルフェイズ。ヴァンパイア・ジェネシスで、サイバー・ブレイダーを攻撃っ！ 『ヘルビシヤス・ブラッド』」

号令と共に、ジェネシスの身体から放たれたコウモリ状のエネルギー弾がサイバー・ブレイダーに襲い掛かり……そのまますり抜けた。

「……はっ？」

「残念だったわね。私は罠カード『ドゥーブルパッセ』を発動していたのよ。このカードは相手がモンスターに攻撃してきた時、それを直接攻撃として私が受けるカード。さあ来なさいっ！」

すり抜けたエネルギー弾は明日香に直撃し、明日香は苦悶の声を上げて膝を突く。これは闇のデュエル。当然ダメージもそのまま身体を蝕む。

明日香 LP4000→1000

「天上院君っ！」

慌てて声をかける万丈目だったが、明日香は手でそれを制する。

「勝利の為なら、私はこの身が傷つくことを厭わない。そしてカミューラ。貴女も攻撃対象になったモンスター。つまりサイバー・ブレイダーの攻撃力分のダメージを受けてもらおうっ！」

「何ですってっ!? ギャっ?!」

音もなく滑り込んだサイバー・ブレイダーが蹴撃一閃。カミューラに鋭い蹴りを浴びせていく。

カミューラ LP7200↓5100

「ぐうっ。私はこれでターンエンド」

カミューラも当然LPへのダメージに比例して痛みは走る。一瞬ぐらりと身体をよろめかせながらターンエンド宣言。そこへ、

「今のターン。サイバー・ブレイダーを倒せなかったのは痛手だったわね。ジェネシスを呼び出す為、貴女も多くの手札を消費した。これで戦局は五分五分。それならば……勝つのは私っ! 私のターンっ!」

明日香は気合を入れてカードを引く。そして、

「バトルよっ! サイバー・プリマでヴァンパイア・バッツを攻撃」

プリマの仮面から放たれる光が、飛び回るコウモリを撃墜する。そして、「相手モンスターの数が2体になったことで、サイバー・ブレイダーの攻撃力は倍になる。覚悟っ! サイバー・ブレイダーで、ヴァンパイア・ジェネシスに攻撃っ!」

ジェネシスの放つエネルギー弾をすりすり回避して、サイバー・ブレイダーは踊るように肉薄。そのまま鋭いサマーソルトキックを顎に叩き込み、ジェネシスを沈黙

させた。

カミューラ LP51000↓3900

「私はカードを一枚伏せてターンエンド。さあ。貴女のターンよ」

軽く項垂れるカミューラに対し、明日香はそう凛とした態度で告げた。

「よつしやあつ！ カミューラのエースを撃破したぜ！」

「まだLPこそ相手が有利だが、ジエネシスを倒したことで完全に明日香のペースだ。……見ろ。吹雪。お前の妹は立派に戦っているぞ」

観客達は大盛り上がり。まあ俺も審判役でなければ素直に喜んでいただけだな。ただ、

『……なんでだろうなあ。どこことなく、カミューラにまだ余裕が見えるのは』

『流石久城君。勘付いたかい』

ぼつりと呟いた言葉に、ディーが耳ざとく反応する。

『実際戦局的には明日香に流れが来ているのは確かなんだ。カミューラの間にはリクルーターのワーウルフと伏せカード一枚のみ。さっきの攻撃で使わなかったから攻撃反応系じゃない。さしずめ条件を満たさないと使えない系だろう』

俺は他の奴らに聞こえないようぼそぼそと喋る。

『となると残るは手札1枚と次のドロローに懸かっている。絶対とは言わないが、ここからの逆転は結構厳しい。だってのに』

俺の居る場所。鍵の守り手達の居る明日香側ではなく、戦う二人のほぼ中間。ここから僅かに見える今も伏せるカミューラの表情。それは……微笑だった。

『……まあここまで来たら言っても構わないか。実はカミューラはアニメ版セブンスターズ戦においてクロノス教諭、カイザー、そして十代と対戦している。この意味は分かるよね?』

『3人と戦ったって事は……まさか2人に勝ったのかっ!? 十代はいくら何でも主人公だからないとして、それでもクロノス先生とカイザーだぞっ!』

クロノス先生はまだ分かる。あの人実力はあるがどこかポカをやらかす悪癖があるからな。大方そこを突かれたんだろう。だけど残るはあの学園最強と名高いカイザーだぞ?!

『そう。そこが問題だったのさ。カミューラは2枚の現環境でも規制がかかるようなとんでもないカードを使用して2人を倒した。1枚はさつき使った不死の王国―ヘルヴァニア。そしてもう1枚は』

そこでディーが一拍置き、続けて言おうとした時、

ゴォーンっ！　ゴォーンっ！

どこかで鐘が鳴った。それは重々しく城内に響き渡る。そして、

「……フフ。フフフ。オッホッホッホッホっ！」

突然カミューラが笑い出した。楽しくて仕方ないとばかりに、鐘の音にも負けない程に大きな大きな高笑いを響かせる。

「何が可笑しいの？　この鐘の音は何？」

「ホッホッホ……いえ失礼。これは合図よ。準備が整ったってねえ。やっつと時間稼ぎも終われるわ」

「時間稼ぎですって？　まさかっ!?　やけに壁モンスターばかり出していたのは上級モンスターに繋げる為だけじゃなくっ!?!」

「そう。よく分かったわねお嬢さん。ご褒美に……お遊びはお終い。私のターンっ！」
カミューラは勢いよくカードを引くと、それまでずっと手札に持っていたカードを一度愛おしそうに撫でて手に取り、

「さあ御覧なさい。これこそが我が切り札。魔法カード『幻魔の扉』っ！　発動っ！」

ガチリと、何か動き出す音がした。

明日香対カミューラ その四 願いは次に託された

カミューラ LP3900 手札1 モンスター 不死のワーウルフ 魔法・畏 幻魔の扉 伏せ1

明日香 LP1000 手札0 モンスター サイバー・ブレイダー サイバー・ブリマ 魔法・畏 伏せ1

カミューラが発動したのは、見るからに禍々しい装飾を施された扉のカード。発動と同時にカミューラの背後に絵柄そのままの扉が出現する。

ヤバイ。

一目見て分かる。アレは明らかに闇のアイテムだ。それも以前タイタンが使ったダーク・アリーナよりも闇が濃い。下手をするとカミューラ本人よりも。

チクショウ。あれがカミューラの余裕の正体か。

「幻魔の扉。一体どんな効果が」

「焦らずとも教えてあげるわよお嬢さん。その効果は、相手の場のモンスターを全て破壊するっ！」

「何ですってっ!？」

ギギイと音を立てて扉が開き、強烈な吸引力で明日香の場のサイバー・プリマとサイバー・ブレイダーを飲み込んだ。しまった全体除去か!？」

「まだ終わりじゃないわ。続いてもう一つの効果発動。相手が一度でも使用して墓地に送ったモンスター。それを一体私の場に特殊召喚出来るのよ!」

カミューラの言葉に一同騒然となる。なんだそのぶつ壊れカードはっ!？」

「バカなっ! 全体除去に加えてモンスター蘇生だどっ!？ いくらなんでもノーコストでそんな事が!？」

「勿論代償はあるわ。このカードはいわば幻魔の力を借り受けるもの。このカードを使ってデュエルに負けた場合、使用者の魂は幻魔の物になる」

観客席からのカイザーの疑問にカミューラはこともなげにそう返す。自分の魂を質に入れて発動する命がけのカードって訳か。

だが厄介なのは、あくまで試合終了後に取り立てるタイプだから発動自体は完全ノーコストってことだ。しかも勝てば普通に踏み倒せる。道理でディーがとんでもないカードとまで言うわけだ。

しかしよく自分の魂まで担保に出来るものだ。そんな事を思っていると、急にカミューラの顔が愉悦に歪む。

「でもねえ、流石の私も自分の魂を賭けるのは少々気が引けるのよね。だからこう考えたの。誰か別の……そう。私以外の魂でも担保に出来ないかってねえっ！」

その言葉と同時に、カミューラの首に巻かれたウジヤド眼モチーフのチョーカーが光を放ち、その隣にカミューラを半透明にしたような幻影が出現する。……何か嫌な予感。

「……っ!? 皆逃げろっ！」

「遅いわっ！」

慌てて呼びかけたが一手遅く、幻影が一目散に鍵の守り手達に向かって襲い掛かる。させるかよっ！ 俺は横から幻影に向かって飛びつくが、あと僅かの所で届かない。

幻影はそのまま鍵の守り手達の所に到達。そして誰かの身体に纏わりついたかと思うと、その身体ごとふわりと浮き上がってカミューラの元に戻った。攫われたのは、

「に、兄さんっ!？」

そう。吹雪だ。意識が不安定だった為、咄嗟に逃げる事が出来ずに捕まったらしい。カミューラの幻影は素早く吹雪の首に噛みつき、倒れる吹雪の横で消滅する。

「オッソッソッホッホ！ これで天上院吹雪と私の魂は繋がった。仮に私が負けたとしても、代償を支払うのは吹雪も一緒……いえ。或いは吹雪のみの魂で足りるかもしれないわねえ」

「カミューラ……貴女って人は」

明日香は凄まじい気迫でカミューラを睨みつける。これはつまり人質だ。

「カミューラアッ！ てめえ汚いぞっ！」

「ハッ！ 戦いに綺麗も汚いもないわ。さあ行くわよ！ 私は私自身と天上院吹雪の魂を担保に、アナタの墓地のサイバー・ブレイダーを特殊召喚！ アナタの大事なエースでトドメを刺してあげるわ」

十代が怒鳴るがカミューラはどこ吹く風。そしてカミューラの場合に、たった今扉に吸い込まれた筈のサイバー・ブレイダーが黒い靄を纏って舞い戻る。だが、これは流石に見過ごせない。

『カミューラ。自分の魂だけを賭けるならまだしも、これは盤外戦術としてもやり過ぎだ。それ以上続けるなら審判役として止めさせてもらうが』

「あらバランサー。審判役というのなら分かつている筈よ。仮に鍵の守り手を直接狙ったのならまだしも、それ以外に関しては契約外。天上院吹雪はダークネスとしての力を失い、そして鍵の守り手でもない以上もう一般人扱い。私に大した罰則は無いわ。寧ろ止められなかった審判役の方に責があるんじゃないやなくて？」

『このっ……詭弁を言いやがる』

だが実際こうして被害が出ないようにするのもバランサーとしての仕事。俺とした

ことが油断した。

「さあデュエルを続けましょうか。アナタの場にモンスターは居ない。残るはその伏せカード一枚だけ。なんなら使っても良いのよ？ 吹雪がどうなっても良いのならねえ」

「くう……」

自身の伏せカードを僅かに見ただけで明日香は動かない。いや。動けない。あれだけ兄思いの明日香だ。仮に何か逆転のカードがあつたとしても、この状況で動ける筈もない。

こうなつたら無理やりにも割り込んで。そう思つた瞬間、

「うう……明日……香」

「兄さんっ！」

「こいつ。まだ意識が!？」

震える手で必死に身体を起こそうとする吹雪。その眼はさっきまでの不明瞭な物ではなく、はつきりとした意志を持っていた。

「ちっ！ 魂が繋がったシヨックで、不安定な状態だったのが逆に正気を取り戻すなんてね。誤算だったわ」

何っ?! 俺は驚いてデイーの方をチラリと見ると……アイツなんか面白がつている感じだ。これはデイーも想定外の事らしい。

「明日香。僕の事に構わず、カミューラを倒すんだ」

「兄さんっ！ 何を言ってる」

「僕は……暗い闇の中に居た。詳しくは覚えていないが、それでも、誰かを傷つけてしまったという事だけははっきりと憶えているんだ」

それは吹雪の告解。ダークネスとして十代や翔、隼人、明日香を襲撃したという罪の意識。

「それは違うぞ吹雪っ！ あれはあくまでダークネスのやった事。お前の責任だなんて誰も」

「僕自身が思っているんだよ。亮。責任は取らなきゃならない。……それに明日香は、僕の可愛い妹は、こんな所で負けるようなデュエリストじゃない」

「……吹雪」

カイザーが必死に止める中、吹雪は軽く首を振って明日香を優しく見つめる。

「だ、黙りなさいっ！」

「ぐうっ!? ……頼む。明日香。僕は明日香に、消えてほしくないんだっ！」

「えい。仕方ない。バトルフェイズ！」

カミューラが吹雪を止めるべくその背中を踏みつけるが、吹雪は尚も必死に言葉を絞り出していく。

これはマズいと判断したのだろう。カミューラは急ぎバトルフェイズへと移行する。あとはサイバー・ブレイダーに攻撃指令を出すだけ。その時、

ピカッ！

「グアアっ!? 何? この光はっ!」

突如吹雪の身体から……いや、正確に言うところ吹雪の提げていた首飾りが光り出した。

強い光に照らされ、カミューラは悶え苦しむ。

ユラッ。

……んっ!? 今一瞬カミューラの姿が二重にブレた気が。気のせいかな?

「あっ!? あのペンダントっ!? 俺が前墓守のおっさんから貰った奴によく似てるぞ
!」

何かに気づいたように十代が叫ぶ。そういえば十代が言っていたな。墓守の試練を突破した証として、持ち主の身を護るペンダントの片割れを貰ったって。

もう半分はもう一人の突破した者が持っているってあるとか。つまりあれがもう半分。試練を突破したのは吹雪だったのか。

「アアアッ……こんな物っ! 我が僕達よっ!」

しかしカミューラも咄嗟にコウモリ達をけしかけ、物理的に日除けとして光から自分を守らせる。コウモリ達も光で苦しんではいるが、それでもカミューラは一息吐く形になつた。

「はあ。はあ。……残念だつたわね。今ので少し繋がりは弱くなつたけど、それでもまだ残っているわ。今負ければ私もタダじゃすまないけれど、吹雪も道連れになるわよ。……バトルっ！」

カミューラの号令と共に、サイバー・ブレイダーが自身の主に向けて突進する。その動きは明らかに普段より緩慢で、まるでモンスター自身も抵抗しているようだった。

それにより生まれた僅かな猶予。明日香は伏せカードに手を伸ばし、

「 balanサーっ！ この闇のデュエルで負けて人形になつた場合、戻る方法はあるのっ！？」

……そういう事か。実際漫画版において、デュエルで負けて魂を封印された等の事例はある。ペガサスに負けた時の海馬等だ。だが、その後も同じくデュエルで他者が勝利する事で魂が解放されている。なので、

『保証は出来ないが、あくまで闇のデュエルによるものであれば同じく闇のデュエルで誰かが勝利すれば或いは』

「そう。ありがとう。……なら問題ないわね」

明日香は軽く頷き、そのままゆっくりと手を下ろした。

「明日香っ!? 何をっ!?」

「今ここで勝つても、最悪兄さんに何かあつたら大変なもの。大体兄さんっ! 兄さんは私に消えてほしくないって言うけど、私だつて兄さんに消えてほしくないんですからねっ!」

明日香はそうまくし立てると、次に戦いを見守る鍵の守り手達に向かつて、

「後は頼むわね。信じてるから」

「明日香……」

「天上院君」

願いは次に託された。最後に、

「勝ちを譲つてあげるわ。……さあ。来なさいっ!」

不敵な笑みを浮かべ、自分は実力では負けていないと。オベリスク・ブルーの女王は胸を張つてカミューラに宣言する。

それが気に入らなかつたのだろう。カミューラはまた口元が裂けた恐ろしい形相になる。そして

「負け惜しみを。喰らえっ!」

ザンっ!

サイバー・ブレイダーの蹴撃が、無情にも明日香のLPを削り切った。

明日香 LP1000↓0

カミューラWIN!

計画始動と集結する人外達



鍵の守り手とセブンスターズの戦う城の外。霧に包まれた湖に、人外の者達が集結しつつあった。

キイキイっ！ キイキイっ！

『騒がしい。静まるが良いっ！』

キンツという高音と共に、周囲を舞っていたコウモリ達の大半が一瞬にして巨大な氷柱の中に閉じ込められる。完全な氷漬けではなく、中に空いた空洞の中に押し込められる形だ。

それを成したのは言うまでもない。幻想体雪の女王（お忍びスタイル）である。

『ふむ。ご機嫌斜めといった所か。雪の女王』

『当然だ葬儀。妾の舌を喰らす良き甘味を供した故、祭りの催しに興じつつ喧伝するのはまだ許そう。だがこの妾に人形風情の捜索をさせるなど』

憤慨する雪の女王と、それをまあまあと宥める死んだ蝶の葬儀。そして、

『それにその人形風情を見つけたからこそ、こうして大事になる前に動けたのではないか。なあ？ 君はそうは思わないか？ ネク』

『は、離せえっ！ おいヘルパーっ！ 何とかしろっ！』

へっぴっ！ ベビーシッタープロセスを終了します。お家に帰る時間だよ

『おのれっ！ やけに素直に言う事を聞くと思ったら子供扱いだったかっ!? ぬおゝん。あと少しで力が溜まり切ると言うのにいっ！』

葬儀の腕一本に抱え込まれてジタバタするネクとそれに付き従うヘルパー。

勿論ネクも対策はしていた。まずちよっかいを出していたコウモリからカミューラも三幻魔の力を狙っているを見抜き、邪魔者を追い払う為わざわざ十代の元まで行ってカミューラの居場所を力の流れから推測、密告した。

これでようやく邪魔者は居なくなると七精門の真上に陣取るネクだったが、普通に葬儀と雪の女王に発見されてしまう。

幽体を使役するネクと、幽体を解放する葬儀の相性は最悪。それでもヘルパーに任せれば時間稼ぎくらいは出来ると踏んでいたネクだが、肝心のヘルパーはあくまでネクの子守りをしている扱いなので同じ保護者枠の葬儀とは戦闘拒否。こうしてあえなく捕まってしまったという訳だ。

『さて。この城に三幻魔の力が流れ込んでいるというのは本当なのかね？』

『ああ本当だっ！ それで変に流れが弄られていたばかりに力の吸収が遅く。せめてそいつの邪魔もしてやらないと私の気が収まらんっ！』

どう考えても八つ当たりする気満々のネクだが、実際邪魔しないとどう考えても良くない事になると葬儀は直感していた。それほど流れ込む力は看過できないものだったのだ。

『これで漏れ出しているだけとは。三幻魔の力とは実に凄まじい。幻想体で例えるならリスクレベルALLEGH級か』

『……だが、封印されているのならそこまで怖れるものでもあるまい？ どうやら妾達以外にもここに集いつつあるようだ。早々に城に乗り込み、仕掛けなりなんなりを破壊してこの些事を終わらせるとしよう』

そう言つて雪の女王が悠然と歩を進めようとした時、

ゴォーンっ！ ゴォーンっ！

鐘の音が鳴り響いた。音の出所は城の最上部。そこに設置されている鐘が、大きく揺れ動いて荘厳な音を周囲に響かせる。

『……っ!? マズイっ!? 力の流れが切り替わるぞっ!?』

そのネクの言葉と、城から暗い波動が周囲に拡がるのはほぼ同時だった。



『……勝者。カミューラっ！』

個人的には納得いかないが、それでも審判役としての仕事はきっちりしなくてはいいないのが辛い所。静かに俺は勝者の名を宣言する。

「オッソッソッソッ！ オッソッソッソッソッ！」

カミューラの高笑いが響き渡る中、LPが尽きた明日香は力なく倒れ伏した。

「明日香っ!? ……貴様あつ!」

「おっと。アナタの役目はもう終わりなのよっ!」

倒れた状態で必死に掴みかかろうとする吹雪を軽くあしらい、カミューラはゆっくりと胸元から白い人形を取り出す。アレはっ!?

「敗者の末路。当然憶えているわよねえ? さあ。鍵と魂は頂くわっ!」

カミューラがそう言った瞬間、明日香の身体が光の粒子に変換されて消えたかと思うと、人形がどこか明日香の面影のある姿に変貌する。そして明日香の首に掛けていた鍵もまたカミューラの元に。

だが、それを黙って見ていられる奴らばかりではない。

「このおっ！ 次は俺が相手だっ！」

熱くなった十代が、猛然とカミューラに向かって突進していく。だがそれはさせられない。俺は十代の前に立ち塞がる。

「なっ!!? 退けっバランサーっ！ カミューラを倒せば明日香も助かるんだろ？ だったら」

『退く訳にはいかない。俺は司会進行役の任も負っている。少なくともカミューラ自身がOKしない限り、連戦をさせる訳にはいかないっ！』

これがセブンスターズが一度に動かなかつた理由の一つ。互いの同意がない限り連戦はN.G。

勿論互いの立場や抜け駆け禁止などの意味もあったが、連戦を禁止にしないと一人相手にどちらかの陣営がまとめて戦いを挑むなんて事がアリになるからだ。

いくらデュエルが強かるうが、使い手の体力はまた別。特に闇のデュエルなんてものは体力をとんでもなく消耗する。その連戦は危険過ぎるといふ事で鮫島校長から提示され、理事長も承諾している。

『それでも無理やり戦おうとするのなら、俺はカミューラの側につかねばなくなる。……頼む。今は退いてくれっ！』

「……ならカミューラっ！ 俺とデュエルしろっ！ お前がOKを出したら良いんだろ？」

「いや。俺が相手だっ！ 天上院君の仇は俺が取る」

「ノンノン。可愛い生徒をこれ以上危険な目には遭わせられないノ〜ネ。このワタ〜シが」

まだ戦う資格のある三人が、仲間を救うべく思い思いに奮い立つ。倒れている吹雪や資格をなくしたカイザー、三沢もその目には闘志が燃え盛っている。

だが、受けるかどうか決めるのはカミューラ。そしてカミューラがそんな連戦を受けるなんて事は、

「そうねえ。普通にセブンスターズとして戦うなら受けてあげても良いんだけど……ざくんねん！ もうその必要はなくなっちゃったのよねえ」

『カミューラ。何を言ってる……なっ!?!』

その瞬間。強烈な振動が俺達を襲った。城のあちこちが震え、パラパラと小さな石の欠片などが周囲に降り注ぐ。

「じ、地震かっ!?!」

「皆っ!?! 何かに掴まれっ!」

地震にしてはやけに断続的に続く振動。しかしこの規模は間違いない地震のよう。

それぞれ慌てて壁や手すりに掴まるそんな中、カミューラはゆつくりと両手を広げながら広間の中心に歩みを進めた。

『カミューラっ！ 早くこっちへ』

「慌てることは無いわバランスー。これは儀式の始まりよ。私が三幻魔の力を手に入れる為のねえっ！」

『何っ!?! どういう事だっ!?!』

「どこか恍惚とした表情で語るカミューラ。どう考えてもただ事じゃない。俺は手すりに掴まりながら問い質す。

「私は常々思っていたの。セブンスターズとして戦い、鍵の守り手を全滅させた暁には三幻魔の力を使わせてくれる。それが我らが雇い主との契約。……だけど、どうにも胡散臭いのよね。ああ。三幻魔の力がじゃないのよ。雇い主が契約を守るかどうかという点」

「そこは俺も考えていた。何せ入団テストで平然と途中から形式を変える理事長だからな。あまり信用できない。

「だから、そもそもその前提を変える事にしたの。わざわざ鍵の守り手を倒すより、直接三幻魔の力を我が物にした方が早いってね！」

『なっ!?! そんな事できる訳がっ!?!』

「出来るのよおっ！ その為にわざわざ戦う順番を限界まで後回しにし、情報を集めて今まで入念な準備をしてきたのだからっ！」

カミューラはどこか狂気的とも言える笑顔でこちらに笑いかける。まるで何かにとり憑かれているかのように。

「この城もその一つ。私がただ決戦の舞台にするだけにこんな城を建てたと思つて？

いいえ違うわ。これは巨大な依り代。七精門から漏れ出る力を集め、それを呼び水に七精門を無理やりこじ開け、三幻魔を手中にする為の装置っ！ そして、ついさつき力は十分に集まったわあ！」

『力が集まったって……まさかさつききの鐘の音はっ!?!』

「その通りっ！ あれが合図よっ！ 島外からも人が集まり、もつとも活気に満ちるこの学園祭の日。それを機に七精門から漏れ出る力を十分に蓄え、この城の特殊な仕掛けを施した七部屋を七つの封印そのものに見立てた。そして起動の鍵は……これよっ！」

そしてカミューラが得意げに取り出したのは、先ほど明日香に勝利を捨てさせる事になった『幻魔の扉』のカード。

「幻魔の力を借り受け、幻魔と繋がるこのカード。まさかあの人も、自分が渡したこのカードで三幻魔を横取りされるとは思っていなかったでしょうねえ。だけど、私の力を見誤ったのが運の尽き。……さあっ！ いよいよよっ！」

さつきから地震の間隔が短くなっている。これはまるで鼓動のようである。

「だからごめんなさいね坊や達。もうわざわざ鍵を奪う必要はなくなつたの。仮に今戦いを受けて私が負けたとしても、仕掛けが一度起動した以上もう七精門が開くのは止められない。なのでアナタ達はそこでこれから起こる事を見届けると良いわっ！ オッホッホッホッホっ！」

「……チクシヨウっ！」

悔し氣にカミューラを睨みつける鍵の守り手達。

そりやそうだ。こいつらは純粹に戦つて封印を守ろうとしていた。他のセブンスターズ達も立場は違えど、極めて真つ当なやり方（黒蠍盜掘団はその在り方から例外として）で戦いを挑んでいた。

だけどカミューラのやり口はそれら全てを踏みにじるものだ。真つ向から否定するものだ。悔しくない訳がない。

だが、無情にも振動の間隔はどんどん早くなつていく。そして遂に限界を迎え、

何も起きなかつた。

「……は？ な、何故……何故?!? 計算は完璧だった筈?!?」

「どういう事だ？ 何にも起きないぜ?!?」

ここに居る全員の頭に疑問符が浮かび、カミューラ自身も呆然としている。奴の言い分からすれば七精門の解放。つまりは三幻魔の復活を意味する筈だが。

「もう復活したという事か?!?」

「いや。それにしても静かすぎる。……おい雑魚共。何か感じるか?!?」

『いいえ。万丈目のアニキ。もし本当に復活したのなら、オイラ達精霊なら離れてたつてすぐ分かるはずなのよん!』

三沢が油断なく周囲を見渡すが変わった所はない。

万丈目がおジャマを呼び掛けて尋ねるも、代表してイエローがそれはないと断言する。じゃあ一体これは？

『それは俺達から説明しようつ!』

そこに響き渡るどこかで聞いたような声。これはまさか?!?

「……何者かしら？」

『何者とはつれないなカミューラよ。これでも同じ釜の飯……は食ったことは無いが、共に同じ雇い主を持った同僚だと思っていたんだが？』

先ほどまで閉じられていた広間の扉が開かれ、そこから五つの影が勢いよく飛び込んでくる。

そう。こいつらは、

『黒蠍一の力持ち。剛力のゴーグ』

『黒蠍団の紅一点。茨のミーネ』

『どんな罫でも朝飯前。罫外しのクリフ』

『お宝頂きやあとはトンズラ。逃げ足のチック』

『そしてこの私。首領・ザルীগ』

『『『我らっ！ 黒蠍盗掘団っ！』』』』

『せっかくのお祭り騒ぎだ。我らも参加させてもらっても構わないだろう？ 元同僚

よ
』

いつもの集結ポーズをとりながら、トラブルメーカー達は混沌とした場に参上した。

計算は偶然に敗れ、七星は城に集う

「お前達どうしてここにっ!? カードは部屋に置いてきた筈だ」

『落ち着け現雇い主様よ。普段おとなしくしている我らとて、たまの祭りにハメを外したくなる時もある。おまけに何故か今日はこの島中に力が満ちていてな。普段なら実体化も一苦勞なのだが……この通りだ』

ザルグは万丈目を宥めながらそう語る。そう言えばザルグ達黒蠍盗掘団のカードは万丈目に預けてたんだった。

しかしさつきはブラマジガールやココロこと憎しみの女王も普通に実体化していたし、どうやら力の流れが活発になっていっているらしい。これが祭りの日だけならまだ良いが、日常になったらもう抑えるのがきつすぎるぞ。

『久しぶりにシャバに出て楽しもうとしてみれば、なにやら元同僚が祭りを台無しにしようとしている。それを知って黙ってはいられないな』

「おのれえっ! アナタ達。一体何をしたあつ!？」

『ふっ。そうカツカするなカミューラ。黙っていれば紛れもなく良い女なのが台無しだぞ』

『まっ！ 私程じゃないけどね』

怒り狂うカミューラに対しザルグは余裕の表情。ついでにミーネが茶々を入れるのでカミューラの苛立ちは酷くなるばかり。

『まあ慌てるのはもつともだ吸血鬼よ。なので順を追って説明しよう。今回お前はデュエルで鍵を奪う正攻法とは別に、直接三幻魔の力を我が物にしようという企てを立てた。だが……実は俺達も以前同じ事をやろうとしたのだよ。失敗したがな』

「何ですってっ!?!」

そこからザルグが語ったのは、以前セブンススターズとしてデュエルする前に自分達が行った窃盗行為について。つまり俺も加担するハメになった七精門の鍵奪取作戦についてだった。

『俺達は盗賊だ。その在り方に従い、鍵の守り手達から一度は鍵を奪取した。しかし、やはりデュエルで奪わなくては門は開かなかった。……だが俺達もプロ。鍵で門が開かなかった時の為に次なる手を打ったのだ』

「次なる手?」

十代が不思議に思ったのか聞き返す。確かに鍵を奪ってからデュエルまで一日もなかつたからな。次の手などそうそう打てるもんじゃない。

だが、こいつらはとんでもない事をやらかしたんだ。

『なくに簡単だ。普通に開かないのなら壊せば良い。という訳で……爆破した』
「……………は？」

『爆破だ。念の為用意しておいた爆薬を使い、門を封印している柱の一本を物理的に破壊しようとした。まあ結果は俺達が三幻魔のカードを手に入れていない事からお察しだろう。精々ヒビが多少入った程度だ。……ああ心配するな。勿論防音処理は施しておいたから、生徒達の安眠妨害はしていない』

そういう問題じゃないんだよなあ。見ろっ！ 皆して啞然とした顔をしている。普段落ち着いているカイザーまでもだ。

『ちなみにこの事を知っているのはあの時現場に居た者だけだ。嚴重に入り口を見張っていたから流石のお前の僕達も入っては来られなかったようだな』

「何てことを」

カミューラも愕然としている。そりやそうだよなあ。あとさりげなく俺の名前を一切出していないのはありがたい。だが、

『成程そういう事か。カミューラっ！ お前はさつきこう言ったな？ この城の特殊な仕掛けを施した七部屋を七つの封印そのものに見立てたと。もしその見立てが間違っていたとしたら？』

「そ、そんな筈ないわっ!? 何度もシミュレーションを行い、計算は完璧だった筈っ!」

『だが奴らの爆破までは計算に入れていなかった。つまり他の六本はともかく、ヒビの入った一本だけは幾ら綿密な計算を行おうとも……いや、綿密な計算だからこそ誤差が出る』

俺が淡々と語ると、カミューラはただでさえ青白い顔を更に真つ青にして黙りこくる。

「つまり……三幻魔は復活しないって事か？」

「そうなるな。偶然とはいえお手柄だぞお前達っ！」

『よっ！ 救いのヒーローっ！』

『『『『それがっ！ 黒蠍盗掘団っ！』』』』』

おジャマを含めた皆に喝采を受ける中、また集結ポーズを決めてドヤ顔を決める黒蠍盗掘団。しかしあの時の爆破がまさかこう繋がるとは。

『さあどうするかミューラ？ 城のからくりが使えなくなつた以上、もうこれは真正面から戦う道しか残されていなさそうだが？ 勿論普通に戦うという事であれば、俺は審判役としてきつちり戦いを見届けよう。それが嫌いな相手であつてもな』

わざと最後の方を厭味つたらしく言つてやる。何せ未遂に終わったとはいえ今回のこれはあまりにも悪質だ。一つ間違えばこれまでの戦いが根底から覆る事になる。

だが、そうなつてはあの理事長が次にどういう手を打ってくるか分からない。最悪理

事長本人が乗り込んでくることもあり得る。人に闇のアイテムをポンポン貸し与えるような人には出張ってほしくない。

なのでなるべく穏便に済ませるべく、カミューラにまともに戦う意思があるか尋ねたのだが、

「……ふっ。ふふ……オッホッホッホ！」

そう上手くは行かないらしい。今の今まで黙りこくっていたカミューラが急に高笑いを始めた。

「何なノ〜ネ？ 大掛かりな仕掛けが失敗して落ち込んでいるのかと思つタ〜ラ。自棄にでもなつたノ〜ネ？」

「ホッホッホ……いいえ。そうではなくてよクロノス先生。確かにその邪魔者達のおかげで儀式は中断したわ。でもねえ」

「ヒイっ!？」

突如カミューラが不気味な笑みを浮かべるのを見てクロノス先生が一步後退る。

……あの顔はヤバイ。笑つてこそいるが瞳の奥は全然笑っていない。寧ろプツンし過ぎて却って冷静になつてゐるって感じだ。

「中断したならまた始めれば良い。柱一本程度ならこの城からでも十分設定し直せる。

……それでは皆様。ごきげんよう」

『俺がさせると思っているのか』

ふらりと幽鬼のように踵を返すカミューラを、俺は近づいて今度こそ引き留める。また三幻魔を復活させようとするのであれば、流石に見過ごす訳にはいかない。

「あら？ ダメよおバランスー。私はまだセブンスターズの一員。バランスーの役割はあくまで審判や司会進行といったサポート役で私を止める権限はないわ。寧ろそのの皆様が勢い余って襲い掛かってくるのを防がなきゃいけないのが辛い所よねえ？」

俺の後ろの方から、鍵の守り手達の敵意に近い視線がカミューラに浴びせられるのが分かる。頼むから今詰め寄ってきたりはしないでくれよ。

「今からあの^{理事}人に連絡する？ ……出来ないわよねえ！ あの人のホットラインがあるのはセブンスターズの七人のみ。アナタは正式なメンバーじゃないものねえっ！」

どこか狂気すら感じる笑みを浮かべながらこちらの痛い所を突いてくるカミューラ。だが、

『それがどうした？』

さらに一步カミューラに詰め寄ると、それに合わせてカミューラが一步後退る。

『俺は確かに正式なメンバーじゃない。だが、俺は以前言った筈だ。直接あいつらに危

害を加えるような事があれば、俺がお前をぶっ潰すとっ!」

参った。 balanサーとしては明らかな越権行為。これがバレたら俺も処罰対象かもな。

でも、ここでコイツを放っておいて三幻魔を復活させる訳にはいかない。俺は処罰覚悟で外套の中に隠したデュエルディスクを展開しようとし、

「覚悟を決めている所悪いが、その心配はないぞ。 balanサー」

……っ!? この声はっ!?

カツン。カツン。

「おい見ろっ!?! 階段だっ!」

三沢の声に、この場の全員が広間から上に伸びる階段を見上げる。そこから足音と共に降りてきたのは、

「バカなっ!?! 何故アナタまでこんな所につ!?! どこから……いえ、まだ私の順番の筈。アナタが出しやばってくる筈がないのよ」

「どこから来たかは秘密だが、私が来た理由はお前が最もよく分かっているのではないのかね? ……ふむ。鍵の守り手達にはお初にお目にかかるな」

肩パットの付いた灰色のフード付きマントを羽織り、素顔を口元に巻いたマスクと赤い飾り布で巧妙に隠した男。

そして、俺がこうしてセブンスターズの balanサーになる原因となった男。

「私の名はアムナエル。君達からすれば最後のセブンスターズだ。短い間ではあるがよろしく頼む」

いや何でアンタがここに出張って来てるんですか大徳寺先生っ!?

「アムナエル。最後のセブンスターズ」

誰ともなく呟く声が聞こえた。確かに鍵の守り手達からすれば、その言葉には強烈なインパクトがある。

『よお！ アムナエル！ 元気だったか?』

「ああ。そちらも負けたとはいえ元気そうで何よりだザルグ。黒蠍盗掘団よ」

相変わらずポーズを決めながら和やかに声をかけるザルグに対し、アムナエルは軽く頷きながら応える。凄いなこれは。床に倒れている元ダークネスこと吹雪も含めてセブンスターズ大集合だ。タニヤやアビドス3世、タイタンも居ればなあ。

しかし俺にしてみればまた違う意味で問題だ。カミューラの動向に気を配りつつ、俺

は静かにアムナエルの近くに走り寄る。

「アムナエル。貴方がどうしてここに？ ……学園祭の仕事はどうしたんですか大徳寺先生？」

「流石に事態がここまで大事になつては静観ばかりもしていられないのでね。收拾を図る為にやって来たという訳だ。 ……心配要らないのにや。たゞつぷり写真を撮つておいたからしばらく居なくても大丈夫なのにや！」

互いに会話の前半だけ他にも聞こえるように話しながら、後半は声を潜めて静かに話す。だからなんか前半と後半でおかしなテンションになっているが勘弁してもらいたい。

「さて。バランスーよ。越権行為だと覚悟の上でカミューラを止めようとしたようだが、その役目は私に任せてもらおうとしようか」

「……はっ！ 規則を破っているのはそちらも同じでしょうアムナエル。セブンスターズの一人が動いている間、他のセブンスターズは手出し無用がルールの筈」

アムナエルとカミューラ。二人の視線が交錯する。

「確かに本人から協力要請を受けない限り別のセブンスターズの介入はご法度。だが、ここまでやらかしてまだ自分がセブンスターズだと思つているのかね？」

「なんですつて？」

「此度の一件。既に私からあの方に報告させてもらった。カミユールよ。あの方の代理としてお前に通達する。現時刻を持って、お前をセブンスターズから解任する」

アムナエルがビシツとカミユールを指差した瞬間、カミユールが首に巻いていたウジャト眼を模したチョーカーが仄暗い光を放つ。

「なあっ!?! ま、まさかっ!?!」

「敗北による契約不履行ならまだしも、契約違反とあればそれ相応の代償を払ってもら。具体的に言えば吸血鬼よ。夜の貴族よ。……お前に相応しい闇に還るが良い」

「ああっ!?! ああああああっ!?!」

チョーカーから発生した黒い闇が、一瞬にして装着者を飲み込んだ。

一日限りの共同戦線

タイタンの時と同じ。黒い闇がカムイューラを飲み込んでいく。普通ならタイタンと同じく闇の世界に引きずり込まれるだろう。だが、

「ああつ……舐め……るなっ！」

「何だどっ!？」

カムイューラは普通ではなかった。

その身体を一瞬黒い霧のように変化させ、闇に完全に飲み込まれる前に脱出。未だ首元で闇を放出し続けるチョーカーを力づくでむしり取り、そのままアムナエルに向けて投げつける。

「驚いたな。まさか自力でそれを脱するとは」

「……はあ……はあ。残念だったわね。そのチョーカーに反逆防止の仕込みがしてあるのはお見通しよ。時間を掛ければ対処法ぐらい用意できるわ」

やや息が上がっているが、カムイューラは霧の状態でアムナエルを越えて階段の上に辿り着いていた。

「ここで貴方と戦つても、こつちには何のメリットも無いのよね。という訳で失礼するわ！」

「逃がすと思うか？」

『ああ。もうセブンスターズじゃない以上、俺も大手を振つてお前を止められる。覚悟は良いか？』

アムナエルに追隨するように俺も一歩前に進み出る。このまま逃げ出すつもりでも、そんなに距離も離れていないからすぐに追いつける。さあどうするカミューラ？

「あら怖い。だけど……この城にはこういう仕掛けもあるのよねえっ！」

カミューラはそこで軽く指を鳴らす。すると、

グラグラグラ。

「うわあっ!? また地震かっ!?」

「違うっ!? この部屋の仕掛けだっ！」

ザルグの言う通り、さっきより激しい振動が部屋を襲い、遂には天井が崩れて瓦礫まで降ってくる。階段の方にはまだ瓦礫は比較的落ち着いているが、広間の方に居る十代達は降ってくる瓦礫から身を隠す物がない。

『カミューラっ!? お前っ!?』

「もうセブンスターズじゃないんだから、鍵の守り手がどうなろうと知ったこつちやな

いわねえ。さあどうするの balanサー？ アムナエル。私を追つてきても良いけど、残る鍵の守り手達はどうかしらっ！ オクッホツホツホ

高笑いしながら走り出すカミューラ。チクシヨウっ！

『アムナエルっ！ カミューラを頼むっ！ 俺は十代達を』

「まあ待て balanサー。私も行こう。……一教師として生徒を見捨てる訳にはいかないのにや」

それを聞いたら俺にはもう何も言えない。俺達は二人で瓦礫から何とか身を躲している鍵の守り手達を助けに向かった。

「ふいっ。助かったぜ balanサー！ あとアムナエルもな」

『俺がやった事と言えば二、三小さな石を振り払ったくらいだ。どちらかと言うと俺よりアムナエルの方が活躍していたと思うがな。それと……その精霊達も』

あれから数分。降ってくる瓦礫がようやく収まり、十代が軽い感じで礼を言ってくるが俺はそれどころではなかった。何故なら、

ガシッ！ ポンポン。

「ああ。慰めてくれているのか？ すまない……いや、ありがとう」

またふらついている吹雪に肩を貸して支え、そのまま慰めるように背を軽く叩くテ
デイが居たり、

「俺が吹雪をもつとちゃんを見てさえいれば……こんな事には」

『そんな険しい顔しないで。大丈夫。明日香お姉ちゃんはきつと助けられるよ。だから
笑って！』

「……そうだな。こんな所で俯いている場合ではなかったな。ありがとう。お嬢さん」
『えへへ！ レティシアだよ！』

自分の不手際を責めるカイザーを、持ち前の明るさで励ますレティシアが居たり、

『あ、アニキ』

「取り乱すんじゃない雑魚共。……助けられた礼は言うが、お前もその不機嫌さを抑え
たらどうだ」

『そなたの指図など受けぬ。ああ腹立たしい。もう少し早く来ていれば、元凶を氷漬け
にしてゆるとまた祭りに興じていたというのに』

すっかり気圧されて万丈目の後ろに隠れるおジャマ達と、不機嫌さを隠そうともしな

い雪の女王が居たり、

へぴぴっ！ 周囲の危険物反応僅かに減少。引き続きガードプロセスを警戒度を引き下げて続行します」

「すまない。さつきは助かったよヘルパー君」

〈へぴぴっ！〉

『それは良いんだがなヘルパー。次はもう少しゆつくりやれ。運ばれているこつちが目が回るだろうが』

四本のアームを展開し、三沢を守るように立ちながらネクを頭に乗せるヘルパーが居たり、

パタパタ。

「シツシツ！ なんでまた寄ってくるノノネこの鳥はっ!? 今それどころじゃないですノっ!」

クロノス先生が何故か頭に留まろうとしてくる罰鳥を追い払おうと手を振り回していたりするからだ。あと黒蠍盗掘団はそれを見て嘸し立てていた。

俺とアムナエルが鍵の守り手達を助けに戻った時、それと同時に幻想体達がまとめて乗り込んできた時は非常に驚いた。良いタイミングで助かったんだけどな。

元々俺個人に凄い能力はないし、アムナエルも炎の錬金術で降りかかる瓦礫を焼き尽くそうとしていたが全員はカバーしきれなかった。

そこへやって来た幻想体達が、各自で瓦礫を殴り飛ばしたり凍らせたり切り払ったりして手を貸してくれたのだ。……さりげなくその流れで俺と一緒に居たレテイシア達も実体化してたからひとまとめにされたようだけど。

ただ明らかにカミューラが居た時より状況が混沌としてきたのは否めない。そこへ、『少し良いだろうか？ お集まりの皆様方。そちらのセブンスターズの方々も』

「葬儀さん！」

「……精霊か」

良く通る声で周囲に語りかけたのは葬儀さん。十代からすれば時々顔を合わせているので知った顔だ。そして事前に打ち合わせた通り、あくまで俺の事はバランスーとして扱ってくれている。

アムナエルこと大徳寺先生は俺経由で幻想体の事を既に知っているが、それは不自然なので初見のフリだ。

『いかにも。お初にお目にかかる方々にまずは自己紹介を。我々は幻想体^{アブノーマリテイ}。見ての通りカードの精霊だ』

「カードの……精霊なノ〜ネ? 眉睡なノ〜ネ」

「オカルトだな。いや、闇のデュエルなどというものがあるのだ。あつたとしても不思議ではないか」

葬儀さんの言葉にここに居る人達の反応は様々。クロノス先生は半信半疑だし、カイザーはあつてもおかしくはないレベル。三沢はタニヤという前例があるから何も言わず、吹雪に至っては自分が墓守の異世界に行った事があるからそのまま納得。

十代や万丈目は普通に見えてる人なので語るまでもなく。

『仮にはあるがこの私、死んだ蝶の葬儀が代表を務めさせていただく。普段我らは実体化などしない身であるが、此度は先ほどのカミューラによる企ての余波によつて実体化している』

これに関しては割と誤魔化している。普段から実体化出来るが、そんな事を言ったら話がややこしくなる。だからあくまでカミューラのせいで一時的にといい体にしたいのだ。

あと葬儀さんが代表というのは何となく分かる。雪の女王はやや態度がアレだし、レティシアは話すだけならともかく交渉事は向かない。他の面子は話せないから論外。

となれば常識人の葬儀さんが妥当だろう。

『我らがここに来た理由は言うなればその黒蠍盗掘団と同じだ。せつかくの実体化。その上レッド寮において、コスプレデュエル大会という好都合な催しが行われていることもあり祭りに興じていた所にこの事件。我らが管理人も到底看過出来ない』

そこで一拍置いて、葬儀さんは十代と万丈目の方に僅かに顔を向ける。つまり自分達は久城遊児からの援軍であると暗に示している訳だ。名前を出したらバレるから直接は言えないが。

『それでねそれでねっ！ 皆で悪い事をしている人を捕まえて止めさせようって来たら、突然お城が揺れ出してビックリしたの！』

『勢い込んで乗り込んでみれば、部屋の崩落にそなた達が巻き込まれておるではないか。妾は別に見捨てても構わぬが、祭りで民草に死者を出すのも無粋。故に少々手を貸したまでよ』

「そうだったのか。ありがとよ皆！ 後で遊児にも礼を……ムグツッ！」

うっかり口を滑らせそうになった十代を、万丈目が後ろから慌てて口を塞ぐ。万丈目
ナイスっ！

「何でもない。気にするな。それでこれからどうする？」

「……プハッ！ どうするって決まってるあ。カミューラを追いかけて明日香の魂を取

り戻す。そして三幻魔の復活を阻止。単純じゃん」

「一つ我らからも言わせてもらおう。事はそう単純ではないのだ。何せ今ここには鍵の守り手と最後のセブンスターズ、おまけに精霊まで揃っているのだから」

アムナエルの言う事ももつとものだ。カミューラは今やどちらの陣営においても止めなきやならない相手。しかし両陣営が敵同士である事は未だ変わっていない。

さらに精霊達も加える場合によつては四つ巴だ。勿論むやみに戦うつもりは幻想体達にはないだろうが、このままでは互いに牽制し合つて身動きが取れない。だが、「なくに言つてんだよ！ こんな分かりやすい状況はないぜ！」

ここに居るのは天下無敵のデュエル馬鹿。そんなしがらみなど関係がない。

「まず俺達は明日香の魂を取り戻したい。それでセブンスターズ……というよりバランサーか？ バランサーは俺達の戦いを正しく進める為にカミューラを止めたい。そしてその精霊達は祭りを台無しにされるのを防ぎたい。……ならやる事は一つだろ」
十代は拳をアムナエルと葬儀さんの前に突き出す。

「カミューラを倒すまで……いや、この祭りが終わるまで一時休戦。一緒に戦おうぜ！」

この発言で周囲を沈黙が包む。

それは一つ間違えば一発で乱戦になる危険性を孕んでいる。だがそれを真つ向から言えるのはこの場で十代くらいのものだろうか。だから、

「……ふ、フハハハハハ。まったく。やはり君を選んでよかった。……良いだろう」

アムナエルは笑って自分の手を十代に重ねる。

『アムナエル。良いのか?』

「元々お前もそのつもりなのだろう? どのみちカミューラによる三幻魔復活の阻止は最優先事項だ。一時的な協力程度ならあの御方もお認めになるだろう。……幻想体達はどうかな?」

『我々は元々この事態さえ落ち着けばそれで良い。共闘の提案を受諾させてもらおう』

葬儀さんも腕を一本伸ばして手を重ねる。そこへ、

『私も私も! ほらっ! ネクちゃんも女王様もテディも皆一緒に!』

「おっ! ノリが良いなレティシア! じゃあ皆でやろうぜ!」

レティシアと十代の扇動で洩々雪の女王や万丈目、そして黒蠍盗掘団や残りの面子も次々に手を重ねていく。当然俺もだ。

「よし。それじゃバランス。いっちょそれっぽい合図を頼む」

『何? こういうのは発起人のお前がやるんじゃないのか?』

「だってバランスは調整役なんだろ? こういう時にこそ出番じゃん」

おのれ無茶振りしやがって十代の奴。仕方ない。

『ではここに居る皆様。思惑はそれぞれだろうが目的は一つだ。カミューラをぶっ飛ばし、今日の祭りを最高の形で終わらせる。結末はどうあれ、それまでの間俺達は仲間だ。』

『……行くぞおおっ！』

「「おっ！」」

こうして今日一日限定、鍵の守り手達とセブンスターズ、そして幻想体達の異色のチームが結成されたのだった。待つてろよカミューラ。

風雲カミューラ城攻略戦。そして辿り着いたのは

さて。十代の主導で異色のチームが結成された訳だが一つ問題が浮上する。それは、「じゃあまとまった所で早くカミューラを追いかけようぜ！ 部屋の仕掛けでかなり出遅れたからな」

「待て。その前にカミューラがどこに逃げたのか分かるのか？」

「そう言えば……確かにそうだな」

いつもの悪癖で早速突っ走って行こうとした十代を、アムナエルが静かに呼び止める。

今からカミューラを追おうにも、さっきのドサクサで大分距離が離されている。しらみつぶしに探そうにもこの城はかなり広大だ。最低限何かの目星がいる。

「こういう時こそ名探偵万丈目サンダーの出番だ。何か思いつかないか？」

「……そうだな。鍵になりそうなのは奴がさっき言っていた言葉だな。七つの部屋に七つの封印を見立てた。そして奴は三幻魔復活の儀式を再開する為、黒蠍盗掘団の壊した柱分の誤差を修正するべくその七部屋のどれかに向かっている。それがこの城のどこ

にあるかさえ分かれば」

流石は（自称）名探偵。十代の急な無茶振りに対し、理路整然と問題点を並べていく。しかし七つの部屋か……んっ!?

『それに関しては、俺に少し心当たりがある』

「何か知っているのか？ バランサー」

『実は以前、調整役として一度この城を視察した事がある。その際カミューラ直々に城を案内してくれたのだが、その時少し違和感があった』

城の中に用途が良く分からなかったり調度品が何もない部屋が幾つも見られたのだ。あの時カミューラは何の用途もない部屋を造る事が城主の最大の贅沢と言っていたが、あの計算高い奴がそんな事をするだろうか？

仮にだが、あの時俺に見せた後で何らかの仕掛けを施したとしたらどうだろうか？

敢えて先に観客に見せる事で疑いを消し、その後で堂々とネタを仕込む。マジシャンのよくやる手だ。

「なるほど。可能性としてはある。最初から裏切る気だったのなら、カミューラにとってバランサーは目障りな監視役。先に監視役の疑いを消す為自分から城を案内した訳か」

『むう。カミューラめ。俺達の手を真似するとはなんて奴』

「それは偶然だと思っぞ」

俺がその事を説明すると、どこか納得したようにアムナエルは頷く。あとザルグ達
が自分達のやった手をパクられたと憤慨しているが、三沢に冷静に突っ込まれていた。

『あの時の部屋の場所は大体憶えている。確か……』

『大まかな地図ならここに有るぞ。念の為ここに来るまでに城の間取りを軽く調べてき
た』

ザルグが懐から城の見取り図を取り出し、他のメンバーが素早く用意した簡易机に
広げる。さっすが盗賊。手際が良い。

「ほほお。この仕事の早さ。やりまス〜ノ！」

『『『『それがっ！ 黒蠍盗掘団っ！』』』』』

クロノス先生が感心すると、ここぞとばかりにいつものポーズを決める黒蠍盗掘団。
いやそれはいいから。

『大まかつてかなり正確だぞこれ。助かる。あの時俺が違和感を持った部屋は……ここ
とここ。あとここに……』

俺が指し示す部屋をザルグが一つずつマーキングする。その数はピッタリ七つ。
「じゃあこの七つのどれかにカミューラが居るんだな？」

『その可能性は高い。しかしこのどれに居るかまでは分からない。それにおそらくだが

カミュラの事だ。さつきみたいな仕掛けが他の部屋にもある可能性も』

『その点是我々に任せてもらおう。先ほどは不覚を取ったが、仕掛けを掻い潜って突破するのは我々の得意分野だ』

『本職がこれ以上やられっぱなしじゃられないしね』

そこに進み出るはまたもや黒蠍盗掘団。数々の罠を潜り抜けて宝を奪取してきたこいつらはいわばプロだ。普段はアレだがこういう時は頼りになる。

『方針は決まったな。あとは乗り込むだけだが、一つ一つ皆で向かっては時間が無い。これだけ人手があるんだ。手分けしよう』

「OK。班決めはどうする？ それに……誰がアイツと戦う？」

三沢が言葉にしたそれに、残るメンバーが一斉に反応する。誰もが自分がと……さらに言えば三沢自身も戦う気満々だ。

カミュラがセブンスターズじゃない以上、もう鍵の守り手ではないカイザーや三沢、元セブンスターズである吹雪でも戦う事は出来る。だが相手がどこに居るか分からない以上確実に狙う事は出来ない。なので、

『決まってる。運よく当たった奴が、皆の分も含めて奴をぶっ飛ばす。文句は無くなった？』

「「おうっ!!」」

誰が当たるか運しだい。実に分かりやすいだろ？

◆◆◆◆◆

「おのれ……おのれええっ!？」

カミューラは部屋の中央に浮かぶ球体に手を当てながら、呪詛混じりの言葉をまき散らしていた。

黒蠍盗掘団による柱の破壊。それにより儀式が中断した時、カミューラははらわたが煮えくり返るような怒りを覚えていた。

しかし今は一刻も早く設定を調節して儀式を再開すべしと怒りを必死に飲み込み、急ぎ誤差のある場所を特定して復旧作業に勤しんでいた。

「だけど……あくまでも誤差はごく僅か。これならそう再設定に時間もかからない。そう。そうよ。精々が少し儀式を先延ばしにされただけ。最終的な私の勝利は揺るがないのよっ!」

どこか狂気を孕んだ笑みを浮かべながら、カミューラの手はせわしなく球体の上を滑

る。

実際このまま行けば、あと数十分もすれば再設定は完了し儀式は再開されるだろう。その短い時間ではこの広い城のカミューラの場所を正確に特定するのは難しい。

それにバランサーの危惧したようにこの城全体には防衛システムが仕込まれていた。ただネットが放たれ動きを封じるだけの物もあれば、正しい順路で通らなければ鉄杭が突き出す殺傷力の高い物まで様々。

特に要たる封印の七部屋に仕掛けられているのはカミューラのデッキと戦い方をコピーした分身体。無断で部屋に立ち入った者に容赦なく攻撃を仕掛ける心無き影。

何故か知らぬ間に使えるようになっていたそれを、カミューラは自然と使いこなしていた。

「……ふつ。フフフ。オッソッソッソッホー」

これらの罠を短い時間で突破し、この部屋にピンポイントで辿り着くのはほぼ不可能。仮にバランサーが以前の事から部屋の場所に勘づいたとしても、どの部屋か特定できない以上確率は七分の一。手分けするなら分断して罠で始末すれば良い。

勝利を確信して高笑いをするカミューラ。だがそこへ、

ビーっ！　ビーっ！

「罠をすれば、どこかの罠が作動したようね。設定完了までの間、人間共の苦痛に喘ぐ様

でも見物するとしましようか」

細かな箇所はおおよそ修正し、あとは時間を待つばかり。鳴り響く警報音に、カミューラはふとした気まぐれから罠の作動した辺りの様子を壁に映し出す。そこに映るのは、

「おゝつと危ねえ!? 助かったぜ相棒! 葬儀さん」

クリクリ〜!

『壁の仕掛けに集中するあまり、足元が疎かになったようだな』

『ダメじゃないか十代。そこはスイツチがあるから踏むなつて』

「わりいチック。次からは気を付けるからさ」

飛来する毒矢を葬儀が撃ち落とし、その破片を光の障壁で防ぐハネクリボー。そして不注意を叱る黒蠍のチックと頭を下げる十代の姿があつた。

「ふ〜ん。そう言えば十代はバランスーと同じくカードの精霊使いだったわね。ならこの程度の罠は効かないか」

十代の居るのはカミューラの居る部屋から大分離れていた。どうやら別の部屋に向かつているらしい。ならば問題はないと胸を撫でおろすカミューラ。だが、

ビーっ！　ビーっ！

「今度は誰が……何ですって!？」

もうまともに罠を掻い潜れる者は居ない。そう安心しきったカミュラの前に警告音と共に次々に罠の作動した場所が映し出される。しかし、

『……………無礼な』

カキーン。

『さあ。愛する妹を救いに行くのだろうか？　ならば己を奮い立たせよ。その名の通り頭は吹雪のように冷たく、しかしてその心に温かき心を忘れぬ内に』

「……………ああ。ああ！　待つてろ明日香！　今助けに行く」

『そんな身体で無茶をする……………だが、嫌いじゃない』

ある所には降り注ぐ毒液を凍らせながらゆるりと歩む雪の女王と、黒蠍のクリフに肩を貸されながらも歩くのを止めない吹雪の姿が。

へぴぴっ！　ガードプロセス実行中

『ぐうっ!!?　何度聞いても頭に響くっ!!?　オイまだか錬金術師っ!!?』

「もう少し……………解錠完了だ！　走れっ！」

「分かったっ!」

ある所には襲い掛かるコウモリ達をアンテナから放つ超音波で追い払うヘルパーと、その余波で苦しんでいるネク。その間に何重にも仕掛けられた鍵を錬金術で外し、カイザーを素早く先へ進ませるアムナエルが。

「ノオ〜っ!? う、動けないノ〜ネ!」

『しっかり、しろ』

パタパタ。

ある所にはネットに絡まって動けないクロノス先生と、それを外から外そうと悪戦苦闘している黒蠍のゴーク。そして攻撃と判断して自分だけ内側からネットを食い破って悠々と空を舞う罰鳥が。

ギユ〜! メキメキッ!? バキッ!

『す、凄いのよ。ねえ。万丈目のアニキ』

「ふんっ! つと!? お前らっ!? 感心しないで戦え……とまでは期待していないが、せめて動き回って困くらいしろ。次はどっちだザル〜グ?」

『近いぞ。次の十字路を右に曲がってすぐの部屋だ』

ある所には何故か動いて襲い掛かってくる西洋甲冑を抱きしめて粉碎するティディと、それを見て歓声を上げるおジャマ。そんな中他の甲冑から身を躲しながら突き進む万丈目とザルীগが。

『え〜いつ！ これで大丈夫だよ！ 三沢お兄ちゃんっ！』

『これもついでに持つてきな色男。予備の奴だけど貸してやる』

「ありがとう二人共。さあ来いお前達っ！ タニヤつちに認められるべく鍛え上げたこの心技体。今ここで試させてもらう」

ある所では、レテイシアと黒蠍のミーネを背にしてムチを手に取り、グルルと唸りをあげるオオカミ達に立ち向かう三沢の姿があった。

「一体どうなっているの？ 何故鍵の守り手達だけでなくカードの精霊までこんなにも実体化をつ!？」

カミューラは思わぬ事態に混乱していた。バランスーによって精霊が実体化する事自体はまだあり得たが、それは精々二、三体程度の事。それ以上は力が保たないと踏んでいたのだが、そこにカミューラの誤算があった。

今この島一帯は三幻魔の力が多く漏れ出している。一度出てさえしまえば、それこそ

普通にカードの精霊が自身の力で実体化を維持できるほどの。

よつてバランスサーが用立てたのは呼び出す分だけで、それ以降の幻想体達の実体化分は全て自然に賄えているのだ。

「……待つて？ バランスサーはどこ？」

混乱していたカミューラがそこでとんでもない事実気づく。

これまでの鍵の守り手達は全てこの部屋以外の部屋に向かつていた。仮に手分けして部屋を調べるつもりだとすれば、当然まだ出ていないバランスサーの向かう先は、

ギー。

この部屋の扉が開く音がした。

「……そう。貴方が相手つて訳。鍵の守り手達じゃなく、セブンスターズでもない審判役の貴方が。……ええ良いわ。良いでしょう」

カミューラはゆらりと球体の前に立ち塞がり、どこか凄みを帯びた瞳で扉の方を見つめる。

「この城の城主として、誇りある吸血鬼一族の一人として、たくつぷりお相手致しましょう。バランス……サー？」

そこでカミューラはいったん言葉を区切る。そこに居たのは、

『そこまでよっ！ 悪党っ！』

そこに居たのはブランサーなどではなかった。

魔法のステッキをぐるりと回し、彼女はやつと見つけた倒すべき相手に名乗りを上げる。

『魔法少女ココロ。今ここに参上！ さあ悪党さん。愛と正義の名の下に、ワタシがお仕置きしてあげるっ！』

正義の味方。悪の敵。魔法少女。自称ココロこと憎しみの女王が、吸血鬼の鎮圧行動を開始した。

憎しみと対峙するは絶望



『罪善さんっ！ 頼むっ！』

カタカタっ！

何故か城内に湧いていた良くないモノを、罪善さんが光で浄化吸収する。さっき力ミューラが闇に呑みこまれそうになった時、どさくさで湧いてきたのだろうか？ だが、

『邪魔だ邪魔だっ！ お前らに構っている暇はないんだよっ！』

この忙しい時にこつちに寄つてこられてはたまらない。飛びついてくる奴をペンダントを翳して追い払いながら、俺達は先へと進む。

手分けして部屋を指す以上、一組辺りの戦力の低下は避けられない。他のメンバー全員に護衛として幻想体を割り振ったので、俺の所には現在罪善さんのみ。

手持ちのカードを使えば自室に居るオールドレディとウエルチアースをこつちに呼び寄せられるが、どう考えても戦闘向きとは思えない二体なので出すにしてもいざって

時のみ。

『あつたぞ！ あそこだ！』

やっと俺の担当する部屋が見えてきた。あそこにカミューラが居るかどうかは分からないが、居たらここで一発ぶん殴ってやるのみ。

ズガンンっ！

『何だ？』

扉の前に立つと、中から何かデカい音が聞こえてきた。もしかここが当たりか？ なら話は簡単だ。

『来たぞカミューラっ！ 決着の時だっ！』

勢いよく扉を開け、俺は中に飛び込みながら叫ぶ。だが、そこに居たのは、

「ごっふっ!? ……化け物め」

服のあちこちが焼け焦げ、口から軽く血を流して疲労困憊のカミューラと、

『化け物だなんて失礼ね。正義の味方の魔法少女よ。それと……どちら様？』

そのカミューラにステッキを突き付けながらこちらを横目で見る、ココロこと憎しみの女王の姿だった。

一体どうなってんだこの状況っ!?

俺は即座に動けなかった。何せこれから戦うぞと意気込んでいた相手が既にズタボロで、それをやったと思われるのが自分のカードの精霊（独断）なのだから。

罪善さんも困惑しているのかオロオロしている。ちよつと可愛い。

『見るからに怪しい人ね。それに怖そうな骸骨さんも。新たな悪党？ だったら正義の味方としてアナタもお仕置きしなきゃいけないけど』

ココロは困ったように軽く首を傾げる。だが相変わらずステッキの標準はカミュラに向かったままで隙が無い。それと地味に罪善さんがシヨックを受けている。中身は無茶苦茶善人でも見かけだけは怖いからな。

これはマズい。下手な答えをしたらこつちもぶつ飛ばされかねない。だけどおかしいな。

『先に一つ確認させてくれ。俺の事を知っているか？』

『ぜんぜん。アナタみたいな目立つ格好の人なら忘れる筈ないけど……あつ?! ゴメン。少し不安かも。最近物忘れがちよつと酷くて』

ああそうか。ココロは俺と直接の面識はない。おまけに今はこの balanサーとしての姿。そりゃあカードの持ち主だなんて知る筈もない。

しかし物忘れが酷いとはどういう……いや。それは後だ。今はまずこっちの説明をして場を収めないと。

『じゃあひとまず自己紹介させてくれ。まず、俺の名前は』

「balanサーっ!? 来てくれたのねっ! 私を助けに」

そこでカミューラはとんでもない事を口にする。

『助けに? 何を言ってる』

「こっちは問題ないわ。この儀式が成功すれば、あとは貴方が三幻魔の力を従えるだけ。いよいよ我々の悲願が達成されるのよ」

『……なるほど。話を聞く限り、つまりアナタが悪党の親玉って訳ね』

カミューラの言葉にココロはこちらにステッキを向ける。その瞬間、カミューラがニヤリとこちらに向けて嗤ってみせた。

あの野郎っ!? まんまと嵌められたっ!? これじゃあ完全にココロのヘイトが俺に向くっ!?

『ちよっ!!? ちよつと待てっ!!? まず落ち着いて俺の話を』

『アナタみたいな悪党は、お仕置きしてから話を聞いてあげるっ!』

『うおっ!?!』

咄嗟にヤバいと踏んで横っ飛びする。その一瞬後、俺の立っていた所を星形のエネルギー弾が通り過ぎ、そのまま壁に当たって爆発する。

オイ嘘だろっ!?! あんなの直撃したらただじゃ済まんぞ!?!

『このっ! 避けないでよ!』

『誰だつて避けるわこんなのっ!?! うわっ!?!』

次々と飛んでくる星形弾。弾速は早く、見てからでは回避が間に合わないのではほとんど勘だけで回避していく。

勿論俺だけの力ではない。時折当たりそうになるそれを、罪善さんが障壁を張って僅かに逸らしているのだ。

『だから話を聞けつてのっ!』

『問答無用っ!』

カタカタっ!?

『罪善さんっ!?!』

だが、そんなやり方が長く続く筈もない。必死の呼びかけも虚しく、遂に罪善さんが障壁が間に合わずに星形弾を受けて壁に叩きつけられる。

助けに行こうとそちらに視線を向けた瞬間、

『よそ見しちゃダメ!』

『ぐわっ!』

直撃ではないものの、近くの床に星形弾が炸裂してその爆風で床に倒される。そして立ち上がろうとした所、

『はい。おしまいっ』

先ほどのカミューラと同じく、至近距離でステッキを突き付けられた。……詰んだか。この距離じゃ躲そうと身を振った瞬間に吹き飛ばされる。

ふらふらと浮き上がっている罪善さんだが、流星に少し距離が離れた状態では間に合わないだろう。

『……まいったな。降参だ。という訳で命乞いくらい聞いてくれないか?』

『聞いても良いよ! だけどまずは反撃できないようにしておかないとね』

その言葉と共に、ココロのステッキの先端に光が集まっていく。さっきのカミューラのように反撃できない程度に痛めつけるつもりか。

『正義の味方にしてはやり口がエグいな』

『悪を倒してこそその正義だもの。大丈夫安心して。話を聞いてちゃんと反省しているよ
うであればそれ以上の事はしないから』

俺の問いに、ココロはにっこりと笑ってそう返した。うむ。見た目が可愛い分

凄みがある。

今まで罪善さんやレティシア、葬儀さんなど友好的な相手ばかりだったから気が緩んでいたが、これが大鳥や審判鳥と同じWAWクラス。思考がどこかぶっ飛んでいる。

ああしかし絶体絶命だ。死ぬまではキチンと弁明すればないだろうが、大怪我くらいは充分あり得る。

他の幻想体呼んで立ち向かおうにも、WAWクラスに対抗できるとなると大鳥か審判鳥だけ。そしてその二体は基本的に森が絡んでいない限り中立。助けてくれるとは限らない。

もうこれはお手上げかと考えた時、

『……ふっ』

『何が可笑しいの?』

つい吹き出してしまった俺に、ココロは不思議そうな目を向ける。そりやそうだな。今日でおかしくなってもおかしくない。だが、

『いや。前もこんなような事があつたなとつい思い出してな』

そう。あれは以前墓守達の異世界に跳ばされた時の事。

今この時のように他の幻想体とは離れ、罪善さんはまともに動けず、俺は槍で殴られまともに動けない大ピンチ。

そして、今この胸に提げたペンダントから強い熱が放たれているのも同じ。

かつてあの異世界のように、この周囲には力が満ちている。そして、

『あとは俺が精霊化させるだけの力が溜まっているかどうか。その点はここしばらく誰も新たに実体化させていないからバツチリ。……なら、出てこれない筈が無いよな?』

カッ!

その瞬間、ペンダントから強烈な光が放たれる。

『うっ!?!』

眩しさのあまり片方の腕で咄嗟に目を覆いながら数歩後退るココロ。だがその僅かな隙を突き、俺は懐のカードデッキを取り出して一枚のカードを抜きだした。

俺の中から何かカードに流れ込んでいくのを感じる。何か繋がりが出来ていくのを感じる。ただそれは決して嫌な物ではなく。

『このっ!?!』

素早く俺に向けて星形弾を撃ち放つココロ。破壊力充分のエネルギー弾はまっすぐ俺に向かい、

『………単調な攻撃ね』

何処からともなく飛来した細剣に刺し貫かれて軌道を逸らされ、俺の脇を抜けて明後日の方に飛んでいった。

『この剣は……くっ!?!』

ココロは何かに気づいた様子で素早くバックステップ。その足元に次々同じ細剣が突き立っていく。

『……大丈夫かしら?』

それはまさにあの時の再現。

ふわりと俺の前に実体化するのは、かつて俺の命を救ってくれた恩人。

黒と青の長髪。髪と同色の星空の装飾の付いたドレスと白く透き通ったマント。スパードを組み合わせた形のティアラを被り、もはや蒼白に近いレベルまで白い肌。

顔の左半分と両腕の一部を覆う刺々しい闇と、残った片目から流れる黒い涙により、神聖さと悲哀の絶妙なバランスを保っている美少女。

『ああ。……ああっ!』

俺は少しふらつく足を何とか踏ん張ってその場に立つ。こればかりはあの時のように倒れたままの姿じゃられない。

『それは結構。及第点ね。……もし前のように立てないままなんて事だったら、あれから碌に成長もしていない相手を守らなきゃならないのかと落胆していた所よ』

『胆に銘じてきたからな。守りたいと思わせる人であるようにってさ。セイさん』

暴力的な正義を払うのは優しき絶望。

魔法少女。絶望の騎士ことセイさんが、今静かに俺の前に立ってココロと向かい合った。

魔法少女同士の戦い

向かい合い見つめ合うセイさんとココロ。幻想体同士である前に魔法少女同士。何かしら因縁があるのだろう。

先に口を開いたのはセイさんの方だった。

『それにしても……まさか久しぶりに外に出るなり相手が貴女とはね。センパイ』
『今はセイって名乗っているんだね……うん。私もこんな形でまた逢いたくはなかったかな』

センパイ？ 何か関係があるとは思っていたけど、思ったより深い関係のようだった。

『ねえ。お願いだからちよつとだけ退いていてくれないセイちゃん。ワタシはその人を抵抗できなくして捕まえたいただけなの』

『却下ね。貴女がそう言っただけで何人死なないぐらいにボロボロに……いえ。死んでないだけの重体にしてきたと思っただけ？ 壊滅的に手加減が下手なセンパイには任せられないわね。……それに』

セイさんは一度チラリとこちらを見たかと思うと、軽く両手を組んで何かに祈りを捧げるような仕草をする。すると、

キンっ！

一瞬金属音のような高音が響き、何かが俺を覆ったような気がした。それと同時に何やら力が漲るような感じがする。

『祝福っ!?! セイちゃんアナタそこまでっ!?!』

『そう。この祝福は特別性。私が倒れない限り相手を護る加護。……この人が今の私の守るべき人。仕えるべき主っ！ それを害そうというのなら、貴女相手でも容赦はしない』

セイさんはそう言い終わると、いつの間にか周囲に出現した細剣を一つ掴み取り、そのまま軽く左右に振るってココロに突き付ける。

ココロは少し俯いてフルフルと震えていたかと思うと、すぐにキツと顔を上げてセイさんを睨みつけた。

『……そう。アナタはそっち側なのね。悪に加担する者もまた悪。なら愛と正義の魔法少女として、セイちゃんっ！ ワタシはアナタを倒すっ!』

『センパイは昔から愛と正義の魔法少女である事に拘っていたわね。だから極端なまでに貴女が悪と定義した者を倒し続けた。それこそが最も貴女が正義でいられる時だっ

たから。……でも、正義っていうのはそこまで分かりやすい物じゃないのよね』

『お説教？ 先輩に対して生意気ね』

『実体験を語ってるだけよ。自分の理想だけ見ていた貴女とは違ってね』

おいおい。なんかどんどん険悪なムードになってきたんだけど。しかし口喧嘩だけなら理路整然と相手を追い詰めていくセイさんの方が優勢だ。

今にも一触即発というそんな中、セイさんはこちらにそつと語り掛ける。

『バランサー。合図したら下がりなさい。いくら加護があるとはいえ、センパイと私の戦いに巻き込まれたらそう長くは保たないから』

『セイさんっ！ だけどアイツは』

セイさんの仲間じゃないのかと言おうとし、ふわりと浮かぶ細剣の一本が仮面に突き付けられて口を閉じる。

『魔法少女は皆頑固でね。それぞれ自分の中に譲れない何かがあつて、それを護る為に戦っていた。だから魔法少女同士の戦いも日常茶飯事。……これはただの喧嘩よ。大丈夫』

そこでココロを警戒しつつほんの僅かにこちらを振り向くと、セイさんはどこかシニカルでそれでいて綺麗な笑みを浮かべた。

『頭が冷えるまで軽く相手をしてくるわ。だから、貴方も無事でいてね。……今よっ！』

その言葉で俺が大きく後退ると同時に、無数の細剣と星形弾が互いに打ち放たれた。

『アルカナ・スレイブっ!』

『舐めないでっ!』

弾の数と威力は僅かにココロの方が上。しかしセイさんの方が自在に宙を舞う細剣を操り、連射される星形弾を巧みに軌道を変えて明後日の方向へ飛ばしたり相殺している。

『少し見ない間に腕が鈍ったかしらセンパイ? 精度はともかく遠距離火力だけなら群を抜いていたのに、今ではこんなにも簡単に相殺されて。……無様なモノね』

『っ!? ……このっ!』

セイさんの煽りを受け、ココロは顔を真っ赤にしています。星形弾を連射する。

いやこれがヘイトを自分に向ける為だというのは分かるんだけど、セイさんの場合割と本気でそういうセリフも似合うから恐ろしい。

ヒュンヒュンと風を切って舞う細剣。壁や床に着弾する度結構な威力で爆発する星形弾。そんなものが飛び交う中で、俺はふとそんな事を考える。

だつて現実逃避をしたくもなるつてこんな状況っ！

『良いぞ良いぞ！ 流石魔法少女同士のバトル。見応えあるねえ！』

『いや危ないつてデイーっ!? もっと下がれっ！』

またドサクサ紛れに観戦しているデイーを素早く引つ掴み、俺は下がる限界まで下がつて瓦礫の陰に隠れる。

『お前良く見世物みたいに観戦してられるな。ココロに見つかったら大事だぞ！』

『そりゃあ僕にとつては見世物だからね。それに今はこの通り。互いが互いに集中しているからそう簡単にバレは……うひゃっ!』

ほら見ろ。あんまり前に出るから流れ弾が飛んできた。

ギリギリを掠めて壁に飛んでいく弾をそろくつと見、何も言わず瓦礫の陰に戻るデイー。

『いやはや。観戦するのも命がけだ。しかし盛り上がっている所悪いけど、君の方は良いのかい？ この後の事』

『……ああ。分かつてるさ』

『なら結構。……ああ。そろそろクライマックスだ』

デイーの言う通り、戦局がいよいよ動こうとしていた。

互いの攻撃を相殺し合い、膠着状態となっていた魔法少女同士の戦い。だけど、

ジャキンっ！

『…………ふっ！』

その膠着の中先に動いたのはセイさんだった。両手に細剣を携え、周囲に他の細剣を浮かべたまま呐喊したのだ。

『えっ!?! ……ならっ！』

当然ココロは弾幕を張って押し止めようとする。

弾が放たれる度に一本、また一本と展開する細剣が減っていく。だが着実にセイさんは距離を詰めていき、展開した細剣が全て無くなると同時にココロの懐に飛び込んだ。

右の細剣を繰り出すセイさん。それをステッキで弾き飛ばすココロだが、続いて左から第二撃が入る。

『貰ったわっ！』

『まだ…………よっ！』

細剣が腕に突き刺さる直前、ステッキから強引に星形弾を発射し細剣を叩き落とすココロ。これでセイさんは両手とも細剣をなくして丸腰に。

この瞬間ココロは勝利を確信しただろう。他の細剣は皆地面に転がっていて、こちらへ操って飛ばすにしても時間がかかる。それだけあればフィニッシュブローが決まる。だが、

『甘いわね。……ここまで近づければ十分なのよっ!』

ガシッ!

『なっ?!? セイちゃんっ?!?』

丸腰のまま自分に抱きついてくるとは、ココロも予想していなかったのだろう。傍から見ると一見百合百合しく見えるがそういう問題じゃない。

動きの止まった一瞬の隙を突き、セイさんは抱きしめたまま俺とは反対側の壁に向かって駆ける。

『壁に叩きつける気っ? だけどそれくらいなら』

『いいえ。……分からない? その壁がさっきからどうなっているか?』

『……あっ?!?』

ココロは何かを勘付いて慌てて拘束から逃れようとするが、こう密着されてはステッキで攻撃しようにも自分も巻き添えを食う。

そうこうしている内に、

『せやあああっ!』

セイさんは壁にココロごとぶつかっていく。先ほどまで散々流れ弾が当たり、もう一

撃ぶつけるだけで穴が空きそうな壁に。そして、

ドンっ！ ガラガラガラっ！

壁は崩れ、魔法少女二人はそのままの勢いでぐらりと外に飛び出した。ちなみにここは城の三階。つまりこのままだと地面にまっさかさまだ。

『危ないっ！ セイさんっ！』

俺は慌てて走り寄って手を伸ばすが、代わりに手の中に飛び込んできたのは二枚のカード。一枚は先ほど実体化の際に使った絶望の騎士。そして、

『あくっ!? それワタシのカードっ!?』

『こっちはこっちで何とかするから、貴方は貴方のやるべき事をなさいっ！』

わざわざ懐に飛び込み、抱きついて動きを封じたのは全てこの為。幻想体の核であるカードを奪い取り、俺に託してココロと一緒に距離を取る為。

ここまで託されたら受け取らなきやマズいだろ。

『任されたっ！』

『……良い返事ね』

その言葉を最後に、二人の魔法少女は外に落ちていった。

俺は駆け寄って安否を確かめたいという気持ちをもぐつとこらえ、大きく息を吸って気持ちを切り替える。何故なら、

『……さて。隠れてないで出てこいよ。もたもたしてたらまた誰かが来るかもだぜ？

カミューラ』

「あら残念。もしその穴に近づいたら突き落としてあげても良かったのに」

あまりに派手な魔法少女たちの戦い。

いつの間にかその陰に隠れ、自らの気配を消してじつと機会を窺っていた女吸血鬼は、邪魔者が居なくなつたとばかりにゆらりとその姿を現す。

「あわよくばあの化け物達が共倒れしてくれればと思つていたけれど、流石にそこまで上手くはいかなかったわあ。まあこれが無事だったのが不幸中の幸いだっただけ」

カミューラがパチンと指を鳴らすと、中央の床から大きな球体がせり出して浮かび上がる。

『それがこの部屋の制御装置か』

「ええそうよお。さつきは咄嗟に床に格納していたから巻き添えを食わずに済んだよね。そしてえ……カウントダウンは既に始まっているっ！」

カミューラはギラギラした瞳で叫ぶ。

「格納されて中断していた分を差し引いてもあと僅か。それが済んだ時、今度こそ封印は解け三幻魔の力は我が物になるっ！」

『それはどうかな？ お前はさつき明日香を倒した時にこう言った。『幻魔の扉』が起動の鍵だつて。実際明日香と戦っている時も中々幻魔の扉を使わなかった。つまり、力が溜まった状態で幻魔の扉を使わないと起動しないと見た。なら』

俺はカミューラに向けて立ち、デュエルディスクを腕に装着、展開する。

『デュエルしようぜカミューラ。俺が勝つて明日香の魂を取り戻すか、お前が勝つて三幻魔の力を我が物にするか。分かりやすくケリをつけようじゃないか』

遊兇対カミューラ その一 同時多数戦闘開始



それはどこまでも偶然だった。

別れて柱の制御用の部屋に向かった鍵の守り手及び精霊及びセブンスターズの連合軍だったが、一足先に辿り着いたバランスサー以外がほぼ同時に到着したのだ。

そして、当然だがカミューラが居る部屋以外には防衛システムが備わっていた。カミューラの戦法とテツキをコピーした分身体である。

各自の反応は様々だった。

十代はどこかこんな状況でも楽しそうに、万丈目はただ冷静に己の敵を見据え、三沢は少女達を庇いながらも奮起し、吹雪は怒りを静かに心の内に秘め、カイザーは友の為に決意を固め、クロノス教諭は自らの中の僅かな恐れをグツと飲み込む。

精霊達は各自の決闘を邪魔立てされぬよう周囲に気を配り、自分と共にいる者に声援を送る。

アムナエルは最後のセブンスターズとして、そして一人の教師として事態がどう転んでもフォローに回れるよう静かに単独行動に移る。

そんな中、

「デュエル……ね。ええ良いわ。良いでしょう」

カミューラは静かにブランサーからのデュエルの申し出を承諾する。実際今のこの状況は、カミューラにとっては痛し痒しだ。

このまま時間を稼げば儀式の準備は整う。しかしこれ以上時間を掛ければまた邪魔者が来る可能性も高く、なによりあくまで起動の鍵は幻魔の扉。ブランサーの推察通り、それをデュエル中に発動しなくては完全な起動には至らない。

ブランサーはそれなりの使い手と（実に癪だが）カミューラは見込んでいたし、思わぬ魔法少女の乱入によって肉体のダメージも大きい。

しかしダメージ自体はブランサーも同じ。ならばあとは互いのデュエルの腕と運、そしてデュエルに懸ける思いこそが勝敗を分ける。

（吸血鬼一族の復興。それが私の……ワタシたちの大願。それがこんな男に負ける筈もないっ！）

こうしてカミューラはデュエルを承諾し、互いにデュエルディスクを展開する。

『分かりやすい話で大いに結構。互いにこれで負けられない戦いになったな』

「ええ。だけど、勝つのは私よ」

『いや。……俺だ』

遊児対カミューラ

連合軍対カミューラ（分身体）×6

「「「デュエルっ！」「」」

今、戦いの幕が切って落とされた。



遊児 LP4000

カミューラ LP4000

「……ふう」

「あら？ 仮面を外すの？ 仮面の方がハンサムなのに」

「今回はバランサー調というよりも、どちらかと言えば個人的に友人を助ける為の戦いな

んでね。という訳で先手は貰うぜ。ドロロー！」

さて。手札は……よくしませんがこの手で行くか。

「俺は手札から『幻想体 母なるクモ』を攻撃表示で召喚！そしてカードを2枚伏せてターンエンドだ」

母なるクモ ATK1900

俺の場に黒い繭のような何かはどこからか垂れ下がり、表面に浮かぶ多数の赤い目が周囲をギョロギョロと見渡す。

「まあ気色の悪いモンスターなこと。でもそんなモンスター、さっさと仕留めてあげろわ。私のターン」

カミューラもカードを勢いよく引く。

「では早速攻めさせてもらおうわよ。私はフィールド魔法『不死の王国―ヘルヴァニア』を発動！」

いきなりかよっ!?俺が警戒していた2枚のカードの1つ。毎ターン手札のアンデットを捨てる事で場のモンスターを一掃する中世の城が展開される。……といても現実でも城の中なので、中から外に出たというぐらいしか周囲に変化がないが。

「私は手札の『ヴァンパイア・ロード』を捨てて効果発動!場のモンスターを全て破壊するっ!」

「むっ!？」

哀れ母なるクモは、何もしないまま城から吹き荒れる風で破壊される。スマン。

「だが、そいつを使ったターンは通常召喚が出来ない。今のお前の場はから空きだぜ？」
「心配ご無用。前にも言った筈よ？ アンデットは墓地からの復活を得意とする種族だつて。私は魔法カード『生者の書―禁断の呪術―』を発動！」

そう来たか！ 生者の書は自分の墓地のアンデットを場に特殊召喚できるカード。今コストで捨てたカードを復活させる気か。そしてもう一つの効果は、

「私はヴァンパイア・ロードを攻撃表示で特殊召喚！ 更に効果により、相手の墓地のモンスターを1枚除外するわ。当然対象は今破壊した母なるクモ」

ヴァンパイア・ロード ATK2000

カミューラの場に貴公子然とした吸血鬼が出現すると同時に、墓地の母なるクモが除外される。踏んだり蹴つたりの母なるクモ。……精霊化してたらブチギレてそう。

「バトルフェイズ。ヴァンパイア・ロードでアナタにダイレクトアタック！」

吸血鬼が自らの纏うマントを広げると、そこから大量のコウモリが飛び出してこちらに向かってくる。なので、

「おっと流石にそれは止めさせてもらう。罨カード発動！ 『幻想体 肉の灯籠』。このカードは発動時、モンスター扱いで場に攻撃表示で特殊召喚され、クリフォトカウン

ターを1つ乗せる！」

肉の灯籠 星3 ATK2000 CC1

俺の場に現れたのは、地面から生えた一輪の花だった。……いや、地面からというのは少しだけ語弊がある。地面の一部が盛り上がり、そこからつぶらな瞳の白い巨大な何かを外を覗いている。花はそこから生えているのだ。

地面に潜って頭からは綺麗な花。……ああ成程。チョウチンアンコウがモデルか！

「攻撃力2000つ?! ヴァンパイア・ロードと同じ」

「さあどうする? 相打ち覚悟で向かってくるかい? ちなみにコイツはデメリットとして、自分から攻撃は出来ない。完全に待ち構える用だな」

さっきの母なるクモと言いつつと言いつつ、レベルの割に高ステータスの奴は大抵デメリットが有る。まあそれを踏まえても結構有能なカードではあるけどな。

カミューラはしばし思索し、

「攻撃は中止よ。私はこのまま一枚カードを伏せてターンエンド。……どうせいざとなつたら」

「ヘルヴァニアで薙ぎ払えば関係は無いつてか? 大味だねえ」

実に妙な話だ。さっきのヴァンパイア・ロードに繋げるまでの流れは実にスムーズだったのに、それ以降の動きは割と大雑把。

明日香との戦いでもそうだったけど、なんというか……予め想定していた動きには強いけど、その場その場のプレイングには粗が多いつて感じた。

「なら俺のターン。ドロー」

遊児 LP4000 手札4 モンスター 肉の灯籠 魔法・罠 伏せ1

カミューラ LP4000 手札2 モンスター ヴァンパイア・ロード 魔法・罠

ヘルヴァニア 伏せ1

「まずはそのヘルヴァニア頼みの性根に活を入れてやるっ！俺はフィールド魔法『ロボトミーコーポレーション』を発動！」

「ちいつ!! ヘルヴァニアがっ!!」

場に新たに展開されるのはこのデツキの代名詞ともいえる逆さまの生命の樹を模した形の巨大な施設。場に新たにフィールド魔法が展開された事により、ヘルヴァニアはガラガラと音を立てて崩壊する。

「おのれっ！だがそのモンスターは攻撃が出来ない。それに攻撃力2000のヴァンパイア・ロードを越えるモンスターをそう簡単に」

「出せないと思ってるのか？確かにこの肉の灯籠は自分からの攻撃は出来ない。だが生け贄にはできるんだぜ」

その言葉と同時に、肉の灯籠は身体を光の粒子と化していく。

「そして場にロボトミーコーポレーションがある事で、幻想体の召喚に必要な生け贄は1体少なくなる。よって俺は肉の灯籠を生け贄に、手札から『幻想体 魔法少女 絶望の騎士』を攻撃表示で召喚！」

絶望の騎士 ATK1900

現れたのは先ほど俺を助けてくれたセイさんこと絶望の騎士。だが精霊としてのセイさんはまだ外で戦っているのです、こつちに居るのはあくまで映像だ。

「……ふ、フフフフっ！ なくにそれ。何が出てくるかと思えば、攻撃力1900？ 寧ろさっきのモンスターの方が大きいくらいじゃない。それに知っているわよ。そのカードは自分以外のモンスターしか強化出来ない。そのカードだけで何が出来るというの？」

確かにカミュラの言う通りだ。絶望の騎士はあくまで誰かを守る騎士。他のモンスターが居なくては最大限の実力を発揮できない。だが、

「更に俺は永続魔法『幻想体 調整の鏡』を発動。このカードは1ターンに1度、場のモンスターを1体選択し、その攻撃力と守備力を入れ替える。対象は絶望の騎士」

俺の場に出現したのは、フレームに赤い染みの付いた大きな姿見。そこに絶望の騎士の姿が映ったかと思うと、その姿が白い靄に包まれる。

俺は知っている。セイさんは決して守る事だけしか出来ない訳じゃないと。能力の大半を守りに割り振っているだけで、スペックだけで言えばココロ……憎しみの女王にも引けを取らないと。

絶望の騎士 ATK1900↓2600 DEF2600↓1900

祈りを捨て、普段周囲に展開する細剣を両手に持った絶望の騎士は、普段よりも威圧的に敵……ヴァンパイア・ロードを見据える。

「なっ!? 攻撃力がヴァンパイア・ロードを上回ったですって!」

「今この時だけ、守る者無き絶望の騎士は敵を討つ為だけに剣を振るう。バトルだ!

絶望の騎士で、ヴァンパイア・ロードを攻撃!」

号令と共に疾走する絶望の騎士。迎撃する大量のコウモリ達を的確に刺し貫いて突破し、青いマントをはためかせながらヴァンパイア・ロードに肉薄。

ほんの一瞬キラリと剣閃が光ったかと思うと、吸血鬼の貴公子は頭と胸を刺し貫かれ
て消滅する。

「ぐ、あああっ!?!」

カミューラ LP4000↓3400

「絶望の騎士の効果。戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、このカードにPEカウンターを4個乗せる」

絶望の騎士 P E 4

「俺はこれでターンエンド。おい。どうしたカミューラ？ こんなのはまだまだ序の口だぜ？」

一応これでも俺……怒っているんだぜ。

明日香をほとんど反則のやり方で倒して人形にし、さつき城の仕掛けで俺達全員を仕留めようとした。そして極めつけは、よりにもよって祭りの日にこんな事をやらかした事だ。

「覚悟しな。幻魔の扉だろうが何だろうが、俺がお前をぶつ潰すのに変わりはない」俺はそうカミューラに向けて啖呵を切った。

遊兎対カミューラ その二 思い出す痛み

さて。ヴァンパイア・ロードは仕留めたが向こうはどう出るか。俺は油断なくカミューラを見据えながらターンを終える。

「私のターン。ドロップ！ ……ちいっ！ 私はヴァンパイア・バッツを守備表示で召喚してターンエンド」

ヴァンパイア・バッツ DEF1200

カミューラは引いたカードを見て軽く舌打ちすると、そのままコウモリを場に出して守りを固める。

今こっちの場に居るのは攻撃力2600となった絶望の騎士。それを何とかするカードとなると中々難しいのだろう。

しかしヴァンパイア・バッツか。前の戦いで見たが、効果で攻撃力は上がっても守備力にまでは影響しないようだ。だが問題なのはデッキの同名カードを身代わりにして破壊を免れる壁としての優秀さにある。

ただ守りに入ったのなら今が好機。ここで一気に攻めさせてもらう。

遊児 LP4000 手札1 モンスター 絶望の騎士(PE4) 魔法・罫 ロボト
 ミーコーポレーション 調整の鏡 伏せ1

カミューラ LP3400 手札2 モンスター ヴアンパイア・バツツ 魔法・罫
 伏せ1

「行くぜ。俺のターン。ドロロー。スタンバイフェイズにロボトミーコーポレーションの効果を発動！ デツキの上から3枚めくり、幻想体と名の付くカードがあれば1枚手札に加える」

俺はカードを確認する。……よし。これなら行ける。

「俺は『幻想体 墓穴の桜』を手札に加え、そのまま攻撃表示で召喚！ そしてクリフトカウンターを3つ乗せる」

墓穴の桜 ATK300 CC3

俺の場に現れたのは、赤茶色の幹を持つ桜の木の幻想体。

その枝には葉も果物もなく、あるのはただつぼみだけ。その木の根元には人が丸ごと入りそうなほど大きい穴がぼっかりと開いていて、内部から干からびた手のような何かが覗いている。

「このカードは攻撃力こそ低いが守備力は1800。調整の鏡で攻守を入れ替えれば立派なアタッカーになる。これならヴァンパイア・バッツもすぐに削り切つて」

「……フフ。オッソホッソホッ！ ヴァンパイア・バッツの効果から考えて、攻め手を増やそうとするその瞬間を待つていたわ！ リバーズカードオープン」

カミューラは高笑いを挙げながらカードを発動する。それは、

「罨カード『激流葬』。場にモンスターが召喚、特殊召喚された時に発動可能。場のモンスターを全て破壊するわっ！」

「なっ!? このタイミングで激流葬かっ!？」

アンデットにはまるで関係のないカードだがそれは良い。しかし幻魔の扉といいヘルヴァニアといいこれといい、全体破壊のカードが多すぎるぞカミューラあっ!

「もう知っているでしょうけど、ヴァンパイア・バッツの効果。デッキの同名カードを墓地に送る事で自らの破壊を免れる。よって激流葬で破壊されるのはそちらのモンスターだけよ」

「ならばこっちは手札から速攻魔法『管理人の弾丸 シールド弾』を発動! 絶望の騎士は1度だけ破壊を免れるっ!」

「でも今出したもう1体は防げない。墓穴の桜を破壊よ」

どこからともなく押し寄せる猛烈な鉄砲水。咄嗟に絶望の騎士はシールドを張って

難を逃れたが、墓穴の桜はそのまま押し流されて消滅してしまった。

「ぐっ!!」 ならばバトルフェイズ。絶望の騎士でヴァンパイア・バッツに攻撃!」

「再びヴァンパイア・バッツの効果発動! デッキの同名カードを墓地に送って身代わりにするわ」

絶望の騎士の細剣がコウモリを串刺しにするが、次から次へと現れるコウモリ達にいったん仕切り直すべく距離を取る。

「だがこれでもうデッキにヴァンパイア・バッツは居ない。もう破壊を免れることは出来ないぞ。そして絶望の騎士が戦闘を行った事により、このカードにPEカウンターをまた4つ乗せる。俺はこれでターンエンドだ」

絶望の騎士 PE4↓8

「私のターン……フフっ。私はヴァンパイア・バッツを生け贄に、ヴァンパイア・ロードを召喚」

カミューラがコウモリ達を生け贄に呼び出したのは、先ほど倒したのとはまた別の吸血鬼の貴公子。だが、おそらくそれだけじゃない。

「さらに私はヴァンパイア・ロードを除外する事で、手札からヴァンパイア・ジェネシス

を攻撃表示で特殊召喚っ！」

ヴァンパイア・ジェネシス ATK3000

それは明日香との戦いで見せたモンスター。禍々しい姿を持つ吸血鬼の始祖が、貴公子の力を喰らって場に顕現する。

ジェネシスはその攻撃力も厄介だが、加えて厄介なのは手札のアンデットを捨てる事でそれよりレベルの低いモンスターを墓地から復活させる展開力だ。

俺は伏せてあるカードを一瞬チラリと見る。カミューラの手札は残り1枚。あれがモンスターかどうかでこちらの対応が大きく変わるんだが……。

「バトルよ。私はヴァンパイア・ジェネシスで、絶望の騎士に攻撃っ！」

追加召喚は無しでそのまま攻撃かよっ!?

絶望の騎士は他のモンスターは守れても自分は守れない。ジェネシスから放たれたコウモリ状のエネルギー弾が、絶望の騎士を吹き飛ばした。

「ぐおっ!？」

遊児 LP4000↓3600

ロボトミーコーポレーション PE8

絶望の騎士が破壊された事で、乗っていたPEカウンターは全てロボトミーコーポレーションに集められる。しかし問題はそこじゃない。

ダメージと共に、通常のデュエルの比じやない痛みが襲い掛かる。これは……前ダークネスと戦った時と同じ。闇のデュエルか。

「私はこれでターンエンド。……あらどうしたの？ まさかバランサーともあろう者が、この程度の痛みで根をあげてしまったのお？」

「いいや。忘れていただけだ。……そうだよな。闇のデュエルつてのはこういうもんだつたよな」

タニヤや黒蠍盗掘団、アビドス3世。タイタンは敢えて厳しくクロノス先生に当たる必要があったから例外として、これまでのセブンスターズの大半がこういう痛みを伴うやり方を取らなかつたから忘れていた。

「……ああ。だから闇のデュエルは嫌なんだ。互いに傷つき、傷つけあうしかない勝負のどこが楽しいんだろうな」

ギリギリと音が出る程に拳を握りしめる。

「俺のターン。ドローク！」

俺は痛みを振り払うようにデッキからカードをドロークした。

皆。俺がコイツをぶつ飛ばすまで、頼むから無事でいてくれよ。



天上院吹雪の場合。

カミューラ（分身体） LP4000 手札0 モンスター ヴァンパイア・ロード×

2 魔法・罾 伏せ1

天上院吹雪 LP4000 手札5

カミューラの戦法とデッキをコピーした分身体は、1ターン目から飛ばしていた。

まずデッキから好きなカードを墓地に送るおろかな埋葬によりヴァンパイア・ロードを墓地へ。そのまま墓地のカードを特殊召喚する死者蘇生を使ってヴァンパイア・ロードを復活。

さらにいざという時幻魔の扉やヘルヴァニアを引き戻す為のものだろう。手札を2枚捨てる事で墓地の魔法を手札に戻す魔法石の採掘を使い死者蘇生を戻して再び発動。コストで捨てた2体目のヴァンパイア・ロードを特殊召喚。

そしてカードを1枚伏せ、ターン終了となったのだが、

「僕のターン。ドロー」

『罾カード発動。リビングデッドの呼び声。墓地ノヴァンパイア・ロードヲ特殊召喚』

どこかノイズ混じりの言葉と共に、分身体はなんと3枚目のヴァンパイア・ロードを

特殊召喚する。

1ターン目から場に攻撃力2000のモンスターが3体。並のデュエリストならこの時点で闘志を喪失しかける状況だろう。だが、

「その程度かい？　なら……決めさせてもらうよ」

天上院吹雪は並のデュエリストではなかった。

「僕は手札から魔法カード『天使の施し』を発動。デッキからカードを3枚ドロし、その後2枚手札から捨てる」

初手手札交換。これによって手札を整え、そこからは怒濤の展開だった。

『黒竜の雛』を召喚。そして魔法カード『スタンピング・クラッシュ』を発動！　自分の場にドラゴン族が存在する時、場の魔法・罠を1枚破壊しそのコントローラーに500ダメージを与える。リビングデッドの呼び声を破壊だっ！」

場の小さな黒竜の一撃がリビングデッドの呼び声を破壊し、それによって復活していたヴァンパイア・ロードが連鎖的に破壊される。

カミューラ（分身体） LP4000↓3500

「そして、黒竜の雛の効果発動。このカードを墓地に送る事で、手札の『真紅眼の黒竜』

を特殊召喚する。現れるレッドアイズっ!!」

真紅眼の黒竜 ATK2400

黒竜の雛は急成長を遂げ、成体となつて雄たけびを上げる。もうこの時点でヴァンパイア・ロードの攻撃力を上回り、場の流れは吹雪に傾いていた。

「僕は魔法カード『黒炎弾』を発動。このターン真紅眼の黒竜は攻撃できないが、相手にその元々の攻撃力……2400のダメージを与える。竜の炎。受けてもらおうよっ!」

『グ、ガアアアッ!』

『すげえ。吹雪の奴。とんでもない気迫だ』

カミューラ（分身体） LP3500↓1100

たまらず声を上げる分身体。そして後方で見守っていた黒蠍のクリフは凄い物だと感心する。だが、今の吹雪はその程度では終わらない。

「さらに僕は真紅眼の黒竜を生け贄に捧げ、手札から『真紅眼の闇竜』を攻撃表示で特殊召喚する。レッドアイズよ。今その身体に闇を纏いて再誕せよっ!」

真紅眼の闇竜 ATK2400

『……いふん』

ほんの一瞬だけ吹雪から漂ったダークネスの残滓。

それを周囲を警戒していた雪の女王はなんとなく感じ取るが、

ピカッ!

吹雪の胸に輝く首飾り。先ほど十代のそれと合わせて完全な形になった物が、すぐさま残滓を抑え込むのを見て軽く鼻を鳴らすだけに留める。

「真紅眼の闇竜は、墓地のドラゴンの数×300攻撃力を上げる。墓地のドラゴンは最初に天使の施しで捨てた『軍隊竜』と『真紅眼の飛竜』。そして今生け贄とした黒竜の3体。よって闇竜の攻撃力は」

真紅眼の闇竜 ATK2400↓3300

『ナニッ!?』

「バトルっ! 真紅眼の闇竜でヴァンパイア・ロードに攻撃。我が敵を焼き尽くせっ!

『ダークネス・ギガ・フレイム』っ!」

『ギ、ギアアアアアッ!』

カミュラLP1100↓0

黒炎がヴァンパイア・ロード、そしてその余波で分身体を焼き尽くし、圧倒的な火力で吹雪が後攻ワンターンキルを成し遂げた。

吹雪WIN!

「くっ……はあ……はあ」

勝利した吹雪だったが、ノーダメージだったのに既に息が上がっていた。それは、『無茶をする。その弱った身体ではいつ倒れてもおかしくないであろうに。……いや、それ故か。長期戦は身体が保たないからこそ苛烈な攻めでワンターンキルを狙ったな』『僕に……出来る事と言ったら、これくらいしかなかったからね。さて、あとは……これをどうするか』

『そうだよなあ。こればかりは流石に俺も見当がつかん』

吹雪とクリフが視線を向けるのは、この部屋の中央で分身体が守っていた物。七精門の柱と連動した、制御装置を兼ねる球体。それを、

『簡単だ。要するに……こうすれば良いのだろうか？』

雪の女王はこともなげに、持っていた長剣で一振りに切り捨てた。

遊児対カミューラ その三 発露する狂気

◇◆◆◆◆◆◆◆

遊児 LP3600 手札2 モンスター なし 魔法・罨 ロボトミーコーポレー
 シヨン (PE8) 調整の鏡 伏せ1

カミューラ LP3400 手札1 モンスター ヴアンパイア・ジエネシス 魔
 法・罨 なし

うゝむ。どうするか。

今ドロートした事でこっちの手札は2枚。数だけなら手札も場もこっちの方が上だが、カミューラの場合には厄介なジエネシスが控えている。

「スタンバイフェイズにロボトミーコーポレーションの効果。デッキから3枚めくり、幻想体があれば1枚手札に加える」

これで何とか突破できるカードを引き込めればと思つたが、

「……俺はこのままメインフェイズに移行」

「あくらどうしたのかしらあ？　もしかして引けなかった？　残念ねえ」

嘲笑う様にカミューラが言う。流星にこればかりは運だからな。十代達のような引きが毎回できる訳じゃない。

「まず俺は永続魔法調整の鏡の効果発動！　ジエネシスの攻守の数値を入れ替える」

ジエネシス　ATK3000↓2100

「涙ぐましい努力なこと。少しでも受けるダメージを減らそうっていうの？」

「まあな。だが」

下がったのは良いが、それでもまだ突破は出来ない。……仕方ない。

カタカタ！

「ああ分かってる。俺は幻想体　たった一つの罪と何百もの善を守備表示で召喚。頼むぜ罪善さん！」

たった一つの罪と何百もの善　DEF200

倒せない以上今は耐えるしかない。自分を出せと言う意思を感じ、俺は罪善さんを壁として場に。

「俺はそこで手札を1枚伏せ、罪善さんの効果発動！　1ターンに1度、手札か場のカードを選びその数×300のLPを回復する。俺が選ぶのは当然場のカードの数だ」

遊児　LP3600↓5100

罪善さんが合図と共に光を放つ。俺の場のカードは罪善さんを含めて5枚。よって1500のLPが回復する。のだが、

「アグツ!! ギャアアアアツ!!」

何故か人の精神を癒す働きを持つ罪善さんの光で、カミューラが悲鳴を上げて後退っていた。その上、

ユラツ。

「……まただ」

光に照らされ、一瞬だけカミューラの姿が二重にブレる。明日香との戦いで吹雪のペンドラントが光った時もこんな感じだった。どうやら気のせいじゃなかったようだ。

「『オ、オノレエツ! 人間風情ガツ!』」

罪善さんの効果処理が終わって光が治まると、カミューラはもはや貴婦人としての体裁を取り繕う事も止めたのか、口は大きく裂けめも血走っている。

……と言うか、あれホントにカミューラか? なんか今声も二重に聴こえたし。

「え〜い考察は後だ。俺はこれでターンエンド」

まずは目の前のこの闇のデュエルをどうにかしないと。

「私のターン。ドロー。私は『不死のワーウルフ』を攻撃表示で召喚！ バトルよ！ その忌々しい光を放つ奴を引き裂いておやりっ！ ワーウルフでたった一つの罪と何百もの善に攻撃っ！」

ワーウルフ ATK1200

普通に攻め手を増やしてきたかっ!? カミューラの場に現れた狼男が俊敏に駆け回り、そのまま罪善さんを鋭い爪で切り裂き破壊する。

「罪善さんっ!?!」

「モンスターを気遣っている場合っ? ヴアンパイア・ジエネシスで直接攻撃。『ヘルビシヤス・ブラッド』！」

「ぐふっ!?!」

遊児 LP5100↓3000

ジエネシスの放つコウモリ状のエネルギー弾が俺の身体を貫き、内臓に強烈なボディーブローでも喰らったみたいなの衝撃が走る。

チクショウっ! デーイ曰くちよつとした闇への耐性があるらしいこのバランスの格好と、セイさんや罪善さん……あと名前は忘れたが何かの加護があるペンダントを

着けていてもこの痛みかよっ!?

俺はたまらず荒い息を吐きながら床に片膝を突く。

「これで私はターンエンド。ねえ痛い? 痛いわよねえ? 逃げてしまいたいでしょう? ……でもダメ。アナタの命もワタシタチの大願、吸血鬼一族の復興の為に役立てあげるわあ! アハハハハッ!」

これまでの貴族じみた高笑いではなく、どこか狂気を孕んだ哄笑を響かせるカミューラ。だが、

「……一族の復興か。それが、三幻魔を復活させてでも叶えたい願いつて訳だ。やくつと本音が聴けたなカミューラ」

俺はどうか痛みをこらえながら立ち上がる。冷酷非道なカミューラの願い。どんなもんかと冷や冷やしていたが、予想より真面目な願いで驚いた。

「あらくに? 同情でもしてくれるの? だったらこのままやられてくれると助かるわよ。そうしたら……そうね。憎い人間であるけれど、ワイン一滴分くらいは感謝してあげるわあ」

「そりゃあ大盤振る舞いなことで。でもな……こつちも負ける訳にはいかないんでね。」

俺のターンっ！ ドローっ！」

んっ!? このカードは！ これを見て咄嗟にあるアイデアが浮かぶが、このカードだけでは逆転は難しい。

「なあに？ 何か良いカードでも引いたのかしらあ。ならさっさと手を進めなさいな」
「そう言つてロボトミーコーポレーションの効果を忘れさせようつて言うんなら無駄だぜカミューラ。俺は効果によりデッキから3枚めくる」

戦局はかなり不利。つまりこの引きに全てが懸かっている。

『おお！ ここが正念場だね久城君。ほらほら。がんばれがんばれ！』
「うるさいなもうっ！ 気が散るっ！ 静かにしてろ！」

「また精霊……だけどそんなぼんやりとした姿。どこの低級精霊かしら？」

いつものようにヤジを飛ばすディーをしっしと手を振つて追い払うが、カミューラがどこか白けたような顔でこつちを見ている。

「ほら見る。カミューラだつて呆れてるぞ。お前はジュースでも飲んで下がつてな！
……蓋が空いた奴を」

『……成程ね。了解！ ここはおとなしく従つておきますよ〜っ』

その言葉を聞いてディーはフツと姿を消す。ちゃんと伝わったんなら良いんだが。そしてここからが本番。この引きで全てが決まる。俺は3枚デッキをめくり、

「……ありがとな。セイさん。俺は『幻想体 魔法少女 憎しみの女王』を手札に加えるっ！」

さつきセイさんが落ちながらも投げ渡してくれたココロのカード。精霊が向こうに居る以上意識の無いただのカードだが、この状況では間違いなく活路を開く1枚。

「憎しみの女王。確かそれはレベル7のモンスターだったわね。いくらフィールド魔法の効果で生け贄が1体減っているとは言え、出すにはもう1体足りないんじゃないやなくて？」

「その事ならご心配なく。リバースカードオープン！ 罠カード『幻想体 1. 76 M H Z』。このカードをモンスター扱いで場に守備表示で特殊召喚する」

1. 76 M H Z D E F 1 7 0 0 C C 4

場に現れたのは、まるでテレビに映る砂嵐のような不思議な靄。そしてその効果は、「1. 76 M H Zの効果発動！ 互いのプレイヤーは、それぞれ自身のモンスターの置かれていないモンスターゾーン×200のダメージを受ける。……ぐっ!？」

遊児 LP 3 0 0 0 ↓ 2 2 0 0

カミューラ LP 3 4 0 0 ↓ 2 8 0 0

靄から何かの悲鳴や銃撃の音といったどこか心を抉る騒音が響き、互いのLPを削っていく。こちらの方が受けるダメージが多いが、今は無茶をしても攻める時だ。

「そして1. 76 M H Zを生け贄に捧げ、俺は憎しみの女王を攻撃表示で召喚！」
霧が光の粒子となって姿を消し、代わりに現れたのは先ほど大暴れしていた魔法少女……の立体映像。

今この場では頼もしい味方であるそれが、クルリクルリとステッキを回して自分の戦うべき相手に突き付ける。

さあ。反撃の時間だ。



魔法少女達の場合。

城から落下した二人の魔法少女。戦いはそのくらいでは終わらず熾烈を極めた。周囲はすっかり戦いの余波で荒れ果て、本来城の周囲を見張っているコウモリ達でさえもともに近づけない始末。

だが、ここのようにやくやく終わりを迎えようとしていた。

『……はあ……はあ』

『どつやら……ここまでのようね。センパイ』

息も荒く座り込むココロに、セイが立ったまま細剣を突き付けていた。

と言つても決してセイに余裕があつた訳ではない。その身体はあちこち傷ついていて、美しい星空のドレスも所々焼け焦げている。

二人の実力に大差はなく、強いて言うならセイと戦う前にココロが城に乗り込んで消耗していた分。更に落下の際に依り代のカードを奪われたという精神的ダメージ。そして僅かな運が積み重なつてセイに軍配が上がつただけの事。

『さあ。もう気は済んだでしょう? ここはいつたんアイツの所に戻りましょう。大丈夫。アイツは貴女が思うような悪じゃない。それどころか貴女の味方になる人よ』

セイはそう静かに語り掛ける。

思わぬ敵対ではあつたけど、アイツが今の管理人だと分かればココロもいつたんは落ち着くだろう。そう考えた故の行動だったが、今回はそれが裏目に出た。

『……ダメよ。ダメ。……ワタシは、正義は……負けちゃいけないんだから』

『センパイ?』

セイはそこでココロの様子がおかしいのに気が付く。

ココロは目も虚ろに何かをブツブツと呟き、いつの間にかその身体から黒いハートのような何かが生まれては消えていく。

『なっ?! ヒステリーを起こしてるですつて?! いくら何でも一度負けただけで何故こんななっ?!』

セイは仰天した。本来ココロこと憎しみの女王の精神は不安定で、精神状態が悪化した時にしばしばこういう現象が起こる事自体はセイも知っていた。

しかし当時魔法少女としての活動の中、一度や二度の敗北程度でこうなった例は極めて少ない。それこそ何度も続くか、一般人の犠牲が多く出るか、或いは長期間ココロの言う悪を倒していないか。

そこで誤算だったのは、ココロが精霊化してから今までの軌跡をセイが知らなかった事。

デー^悪ィーには逃げられ、ブラマジガールを困らせていた生徒^悪達は自分が手を出すまでもなく改心して居なくなり、遊^悪児を捕まえようとしたらセイに邪魔された上この敗北。

つまる所、爆発寸前だった。

『正義は負けない。だけど、ワタシは負けた。じゃあワタシは……何?』

『くっ! マズイっ!?! 落ち着いてセンパイっ!?! こんな所で暴走したらっ!?!』

急いで細剣を手放し、ココロの両肩を掴んで自分へ意識を向かせようとしたセイだが時既に遅し。

『ああ。そうか。正義じゃないのなら、ワタシは……… “悪”だ』

ココロの身を黒いハートが覆い、そのハートごと持っていたステッキが持ち主を貫く。そして、

『ウオオオオンツ!!』

黒いハートが真つ二つに裂けると共に、とんでもない咆哮が辺りに響き渡った。

遊兎対カミューラ その四 攫う者あれば救う者あり



遊兎 LP2200 手札1 モンスター 憎しみの女王（CC2） 魔法・罨 ロボ

トミーコーポレーション（PE8） 調整の鏡 伏せ1

カミューラ LP2800 手札1 モンスター ヴァンパイア・ジェネシス（AT

K2100） 不死のワーウルフ 魔法・罨 なし

俺の場に現れた憎しみの女王は、クルリと回したステッキをヴァンパイア・ジェネシスに向ける。さあ。反撃開始だ。

「まず俺は場の調整の鏡の第二の効果発動！ このカードはモンスターの攻守の値を逆転するだけではなく、単純にそれぞれ500下げる事も出来る。俺はジェネシスの攻守を500ダウン」

ヴァンパイア・ジェネシス ATK2100↓1600

「チイツ!? ジェネシスの攻撃力が」

「バトルだ。憎しみの女王でジェネシスに攻撃」

俺の号令と共に、憎しみの女王のステッキから放たれた星形弾がジェネシスに殺到した。ジェネシスもコウモリ状のエネルギー弾を放ち応戦するが、今の攻撃力は通常時の約半分。星形弾の勢いに押されてそのまま破壊される。

カミューラ LP2800↓2100

ジェネシスが破壊された余波で、カミューラが一步後退る。だが、まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ。

「憎しみの女王の効果発動！ このカードが戦闘でモンスターを破壊した時、カードを1枚ドローする。そしてそのカードが幻想体モンスターだった場合、エンドフェイズまで攻撃力を500アップしてもう一度攻撃することが出来る」

憎しみの女王が詠唱を始め、前方にハートの模様の魔法陣が幾重にも展開される。追加攻撃の準備だ。

「くっ!!」 だけど、この土壇場でそう都合良く」

「引けるかって？ ああそうさ。俺は十代や万丈目みたいに毎度毎度最高のカードを引けるようなドロー力はない。実際さっきのロボトミーコーポレーションだつて外してたしな。だが……ドローっ！」

「ここが勝負所と、俺は勢いよくカードを引く。そして、

「……引ける時もある。俺が引いたのは『幻想体 宇宙の欠片』。モンスターカードだ。よって憎しみの女王は、攻撃力を500上げてもう一度攻撃出来る。不死のワーウルフに攻撃っ！」

憎しみの女王 ATK2300↓2800

詠唱が終わり、憎しみの女王が放ったビーム砲は魔法陣を通る度に巨大化。遂には極太の柱のようになったそれがワーウルフを飲み込み消し飛ばすと、そのままカミューラへ襲い掛かる。

「ガアアアアッ!?!」

カミューラ LP2100↓500

物理的な破壊力を持ったビーム砲に飲まれてカミューラの絶叫が響く。そしてビームが消えた後には身体からブスブスと煙を立たせるカミューラの姿が。半分はカードの演出とは言えこれは闇のデュエル。服の一部は本当に焼け焦げているから怖い。

「わ、私は……不死のワーウルフの……効果発動。戦闘で破壊された時……同名カードを攻撃力を500上げて場に特殊召喚する。もう一体の……ワーウルフを守備表示で特殊召喚」

ワーウルフ DEF1200

カミューラは息も絶え絶えに、デッキから場にさつき倒したのと同じカードを出す。

しかし今は守備表示。これでは攻撃力アップの効果も意味はない。

「バトルフェイズ終了時。憎しみの女王の効果発動。このカードが戦闘を行った事でP Eカウンターを4つ。そして戦闘を行った回数分のクリフォトカウンターを乗せる」

憎しみの女王 P E 0 ↓ 4 C C 2 ↓ 4

「俺はこれでターンエンドだ。形勢逆転って所だな」

「ええ……そのようね。まさかここまでとは思っていなかったわ」

カミューラはよろよろと今にも崩れ落ちそうな状態で力なく返す。だが、俺は油断なくデイスクを構えたままだ。

今一瞬チラリと見えた奴の目。アレは決して勝負を諦めた目じゃない。まだカミューラは何か狙ってる。そう。例えば、

ゴォーンっ！ ゴォーンっ！

「……フフ。フフフ。アハハハハッ！」

来やがったかっ!?

聞き覚えのある鐘の音が響き渡ると同時に、カミューラは口元の裂けた恐ろしい顔で嗤う。その明らかに狂気を孕んだ嗤いに、俺は気をしっかり持って対峙した。

「一手、一手遅かったわねえバランサーアッ！ アナタの唯一の勝ち筋は、私の準備が整う前に倒す事だった。だがもう遅いわあ。私のターンっ！」

カミューラの身体から黒い靄のようなものが腕に纏わりつき、ボロボロの筈の腕で力強くカードをドロローする。……なんか変だぞ？ まるで靄で無理やり身体を動かしているみたいだな。

「ああ。実にもどかしかったわあ。最初から手札にあつたのに使えないなんて。でも……アハハ。もう良いわよねえっ！ 私は魔法カード『幻魔の扉』を発動！」

ゴオツと音を立て、カミューラの背後に禍々しい装飾を施された扉が出現した。

これはまるでさっきの明日香との戦いの再現。扉から発せられる濃密な闇の濃さに、俺は知らず知らずの内に冷や汗を流す。

「幻魔の扉。明日香を追い詰めたカードか」

「ええ。そして、幻魔の扉の代償として私は幻魔に魂を担保として差し出す……とでも思ったあ？」

カミューラはそこでドレスのスリットからある物を取り出す。それは、

「明日香っ!!」

「そうよお！ 私が先ほど倒した小娘の魂を封じた人形。丁度良いからこれを担保として差し出させてもらうわあ。何か逆転の手があるならやつて見なさいな。仮に私が負けたとしても、その時は小娘の魂は幻魔の物になるっ！ 小娘の命にも気を掛けなきやいけないなんて辛いわねえバランサーっ！」

明日香の人形を高々と掲げるカミューラ。だが、その時を待ってたぜっ！

「させるかよっ！ 頼む罪善さんっ！」

カタカタ！

「何ですって!? むうっ?!」

こっさりカミューラの死角に隠れていた罪善さんが、俺の呼びかけに応じて強烈な光を放つ。

「お前の事だから、いざとなったら人質としても使ってくるぞ踏んでたぜ！ 人質を取り返せるこの時をこっちもずっと待ってたんだっ！」

さつき場で破壊された後、罪善さんには敢えて精霊状態ですつと身を隠してもらっていた。カミューラにまた幻魔の扉の生け贄として魂を差し出されないように。

効果の光でもダメージを受ける程だ。これならさぞキツイだろう。カミューラは光に驚いて咄嗟に顔を庇い、明日香の人形を取り落す。

「罪善さんっ！ 今の内に明日香の人形をっ！ 俺もそつちに」

「サセルカアアアツ！ 我ガ僕達ヨツ！」

どこかノイズの混じつたような声でカミューラが号令をかける。するとどこからともなくコウモリの大群が現れ、罪善さんを囲い込むように壁を作った。

ついではかりにこつちにもコウモリ達^{たち}が押し寄せ、俺は必死に振り払うもまるで前に進めない。

「悪あがきを……だけど、これでもう終わりなのよおつ！」

カミューラはゆつくりと人形を拾い上げようとする。罪善さんはコウモリ達に抑えられ、俺も動くことは出来ない。そんな絶望的な状況の中、

どこか遠くで、カモメの鳴き声が聞こえた。

ザザン！

「水？ なんてこんな所に……キヤアっ!?」

どこからか流れてきた水に不審がるカミューラ。そこに何かか飛んできて身体に絡みついた。それは漁業で使われる投網。

よっしゃ！ タイミングバツチリ！

「ナイスだウエルチアース！」

そう。実は罪善さんの奇襲が防がれるのは想定内。本命はこっち。前のターンのドロで手札に加えたウエルチアースによる追撃。

勿論罪善さんだけで上手く行けばそれで良しだが、カミューラは吹雪のペンダントの光をコウモリ達で防いでいたので罪善さんも防がれる可能性があった。

なので事前にディーに蓋の開いたジューズを飲んでもらい、漁船をいつでも出せるようにスタンバってもらったという訳だ。上手く伝わったように助かった。

そしてカミューラが網を外そうともがく一瞬の隙を突き、

「スマンな。これは貰っていくぞ」

「なっ!?! お前はっ!?!」

漁船に乗ったどこか巻き舌気味の巨漢が明日香の人形（とついでに薬でふらつくディー）を拾い上げ、そのまま俺の方に乗りつけてくる。漁船にエビ頭の漁師と共に乗っていたのは、

「しかし因果なものだ。かつて自分が捕らえて人質にした者を、今度は助ける側になるとは。記録にあるだけで記憶はないのだが」

「でも何か胸に引っかかるモノがあつたからこうして助けに来てくれたんだろう？ 自分の犯した悪行を償う為に。……ありがとうな。タイタン」

そこに居たのは、以前の黒コートではなくウエルチアースと同じく漁師服ですっかり肌も日焼けし、しかしトレードマークである仮面は未だ外そうとしない元セブンスターズの一人。

自称完善体となったタイタンが、ニヤリと笑って取り戻した明日香の人形をこちらに手渡した。

遊児対カミューラ その五 策士は策にて崩れ行く

それは、以前鮫島校長からセブンスターズとしての活動を巻きで進めるようお達しが来た時に遡る。

穩便にタイタンがセブンスターズを辞めるべく考えを巡らせていた時に突然のこのお達し。タイタンや大徳寺先生とも考えたが上手い手は中々思いつかず、

「タイタン。……諦めてまた闇の世界行こうか。ちなみに炭酸は飲める方?」

俺のこの言葉に仮面越しでも分かるほどにタイタンの顔が引き攣っていたのは当然の事だった。だが、

「勘違いするなつて。あくまでこれは偽装。闇の世界に堕ちるまではその通りだが、その後脱出する手段があるんだよ。まあ絶対じゃないから賭けになるけど……乗るか?」

「しっかし隠れ潜んでいる時間が長かったせいかな、もうすっかり漁師だな!」

「ああ。最初は一時的な仕事と思つていたが、案外才能が有つたのかもしれない。今ではシーフードスープを作らせたら船で一番だ」

明日香の人形を手渡された俺の軽口に、タイタンは朗らかに返す。

「ど、どうなつているの!?!」 タイタンは確かに契約不履行により闇の世界に堕ちた筈?!? あの時我が僕たるコウモリ達が寮に入る事が出来なかつたから現場こそ視ていないけど、反応は確かに消えていたっ!」

どうにか網を外したカミューラが、タイタンを見て酷く驚いている。まあ死んだと思われていた奴がこんな格好で来たら誰だつて驚くよな。

「な、簡単に簡単だ。私はあの時確かに闇の世界に堕ちた。しかし、そこから戻つて来ただけの事よ。これのおかげでな」

タイタンが取り出したのは、潮風に晒されやや汚れている空き缶。そう。ウエルチアースのジュースの缶だ。

仕掛けは単純。闇の世界に引き込まれた後、監視が消えたと判断した所でタイタンが事前に手渡ししておいた蓋の空いたウエルチアースのジュースを飲んだだけ。

「うちのウエルチアースの漁船は特殊でな。ジュースを飲んで意識を失つた奴の所に駆けつけて攫えるんだよ。例え異世界だろうが闇の世界だろうがな」

実際俺が墓守の異世界に行った時も、ジュースを飲んで眠つたらそこに駆け付けたく

らいだしな。直接は見えていなくて人づてだが。

あれが俺だから特別だったって可能性もあったので、タイタンにも適応されるかどうかは賭けだったが結果は無事成功だ。

こうして理事長の目から逃れたタイタンは、ほとぼりが冷めるまでウエルチアースの漁船で漁師として働いているという訳だ。ちなみにどこからかちゃんとお給金も出ているらしい。ディー辺りからかな？

「では balan サーよ。私は再び海に出てくる。丁度近くに魚群を捉えたのでな。……では、幸運を祈るぞ！」

「おう！ そつちも頑張れよ！」

タイタンは満足そうに頷くと、そのままエビ頭達と共に漁船で異界へと姿を消した。ほんの僅かに潮風の香りを残して。

「オノレエっ！ よくも私の人形をつっ！」

一杯食わされたことに歯をむき出しにして激昂するカミューラ。だが、ひとしきり怒り狂ったかと思うと、すぐにまた冷静を取り戻す。

「……まあ良いわ。どのみちあの人形は保険。この幻魔の扉さえあれば勝利は私の物に

変わりはないわっ！ さあ幻魔よ！ 私のこの魂を担保に、その強大な力を貸し与えなさいっ！」

そう。あくまで他の魂が担保に出来なくなっただけで、自分の魂を担保に出来る事に変わりはない。

「アナタの残りLPは2200。幻魔の扉で場を更地にして、アナタの自慢の魔法少女でトドメを刺してあげるわ。オッソッソッソッ！」

それがカミューラの描いた勝利へのプラン。だが……。

「つく。ククク。ハッハッハ！」

「何が可笑しいの？ 敗北を前におかしくなったのかしらあ」

「ハッハ……ああ悪い悪い。おかしいって言うかつい笑えてきてさ」

盤面を完全に読み違えているカミューラの様子に、ついつい笑いが漏れてしまった。我ながら少し悪趣味だと思うが、まあこれまで散々やられてきたので軽い仕返しだな。

「さつき明日香にも言われたらどう？ 高笑いしている暇があったらさつきと効果を使えって。まあ……その効果が使えるもんならなあ」

「何を言つて……なっ!？」

カミューラは背後に建つ扉を見て驚いた。何故なら、

「……ウソっ！ 何故扉がそのまま消え始めているのっ!? まだ対価すら支払っていな

いというのにつ!? ……何をしたバランサーっ!?」

「大したことはしてないさ。ただ俺は幻魔の扉の発動にチェーンしてカードを発動しただけ。この永続罠『業務終了』をな!」

俺はニヤツと笑ってネタばらし。

業務終了。場のPEカウンター5つをコストに、魔法・罠・モンスター効果の発動を無効にして破壊するカード。俺は場のロボトミーコーポレーションのPEカウンターを支払って発動していた。

ロボトミーコーポレーション PE8↓3

「まがりなりにも幻魔の力を宿した幻魔の扉。それを無効に出来るかどうかは少し不安だったが、無事上手く行ったようでホツとしたよ」

幻魔の扉。とにかくこのカードがこのデュエル中一番の脅威だった。何せ一枚だけで相手モンスター全滅及び一枚蘇生のチートカード。アドバンテージの塊みたいなこのカードはなんとしても発動させる訳にはいかない。

なら取れる手段は二つ。出される前にカミューラを倒すか、発動自体を無効にするかだ。

「発動を無効にしたんだから当然儀式の仕掛けも発動しない。お前の企みは、今ここに潰えたんだよ」

俺は静かにそう宣言する。これでカミューラの目的である三幻魔の復活はご破算だ。だが、

「いいえまだ。まだよ。ここで私が負けたとしても、何度だつて体勢を立て直して他の場所から設定をやり直せば」

「いいや。もうそういう問題じゃないな。他の鍵の守り手達が今頃ここ以外の部屋を抑えている筈だ」

「何を言つて……あの防衛システムを、アナタや精霊使いならまだしもただの人間が突破できる筈が」

「それはお前の推測だろ？ この学園の生徒を、教師を……そして、俺の仲間達を舐めるな！ どうしても信じられないって言うなら、調べてみるが良い。他の部屋の様子くらいここからでも分かるんだろう？」

カミューラはそれを聞き、よろよろとした動きで部屋の中央に浮かぶ球体に歩み寄り、何かの操作を行う。最悪俺をこの部屋の罠で排除するという展開もあり得たが、今の弱り切ったカミューラはそうしなかつた。

そして、球体から映し出されたのは、

『シャイニング・フレア・ウィングマンで、ヴァンパイア・ジエネシスに攻撃！ 吸血鬼は今光に消える！』 『シャイニング・シユート！』

『ギャアアアアッ!?!』

ハネクリボーと共に歩むヒーロー使いの主人公が、

『アームド・ドラゴンLV7の効果発動！ 手札の『仮面竜』を捨て、その攻撃力1400以下の相手モンスターを全て破壊する』

『ワーウルフトピラミッド・タートルガッ!?!』

『さっすがアニキ!』

『戦闘破壊でなければ後続を出せないのがこいつらの弱点だ。バトル！ アームド・ドラゴンでダイレクトアタック！』 『ジエノサイド・カッター』 つー!』

おジャマ達を率いる俺の推しが、

『古代の機械巨人の攻撃！』 『アルティメット・パウンド』!』

『畏発動！ 妖かしの紅月……何故発動シナイツ!?!』

『お勉強が足りませんノ。古代の機械巨人が攻撃する時、相手はダメージステップ終了時まで魔法・畏を発動できない。でもワタクシは使えるノ〜ネ！ 手札から速攻魔法

リミッター解除を発動！ 機械巨人の攻撃力が2倍になるノクネ！」
誇りある学園の実技担当最高責任者が、

『俺は儀式魔法エンド・オブ・ザ・ワールドを発動！ 手札の破滅の女神ルインを生け贄に、終焉の王デミスを儀式召喚する。降臨せよデミス！』

『ナツ!? ソンナカードオマエノデータニハツ!?』

『生憎だったな。俺は常にデツキを試作し続けている。これはその一つだ！ デミスの効果。LP2000を支払い、このカード以外の場のカードを全て破壊する。全体除去が自分の専売特許だと思っなっ！』

『がんばれ〜！ 三沢お兄ちゃんっ！』

レティシアに応援されるライエローのトップが、

ここ以外の部屋の防衛システムを次々と打ち破っている様子だった。

「そんな馬鹿な!? ありえないっ!？」

「カミューラ。確かにお前は策士としては有能だった。たった一人で情報を集め、儀式の場を整え、三幻魔の復活まであと一步の所まで行ってみせた。……だけど、一つだけ

ミスったな」

「私が、ミスですって!？」

「ああ。自分がやった事は相手も出来る事を想定しなかった。一度デュエルして手の内を晒した以上、それに対応されるのは当たり前だろ?」

明日香があれだけ苦戦したのは、カミューラが初見の相手だったからというのが大きい。情報の有る無しは戦いを大きく左右するからだ。

だが一度見せた以上、如何に強力な幻魔の扉やヘルヴァニアがあつたとしてもやりようはある。

「こんな単純な事も忘れて人間を過小評価した。結果として全防衛システムはこうして破られた。……それがお前の敗因だよ」

と言つても映像では何故か吹雪とカイザーの場面が出ていなかったが、まああの二人がガチの勝負で負ける筈もなし。おそらく映像が映る前に勝負が着いていたんだろう。

「そして、こつちもいよいよ大詰めだ。幻魔の扉は破られた。他に何かやる事はあるか?」

「……私はこれでターンエンド」

カミューラは力なくターンエンド宣言をする。サレンダーしないのは彼女なりの最後の意地か。

「なら、このターンで終わらせる。俺のターン……ドロー」

遊児 LP2200 手札3 モンスター 憎しみの女王 魔法・罠 ロボトミー
コーポレーション 調整の鏡 業務終了

カミュウラ LP500 手札1 モンスター 不死のワーウルフ 魔法・罠 なし

「ロボトミーコーポレーションの効果。デツキから3枚めぐり……対象は無かったのでそのままシャッフル。手札から『幻想体 宇宙の欠片』を攻撃表示で召喚」

宇宙の欠片 ATK1000

俺の場に子供の落書きをそのまま実体化させたような不定形のモンスターが出現する。

「バトルだ。宇宙の欠片でワーウルフに攻撃！ そしてそこで宇宙の欠片の効果発動！」

攻撃宣言と同時に、宇宙の欠片の不定形の姿の中で唯一形のしつかりとした場所。ぴよこんと上部に突き出ているハート形の付属物が微かに震えだす。

「このカードが攻撃する時、相手に500の効果ダメージを与える。わざわざワーウルフを戦闘破壊する事もない。これで終わりだ」

宇宙の欠片から放たれたどこか不気味な音波が、ワーウルフをすり抜けてカミューラのLPを削り切った。

カミューラ LP500↓0

デュエル終了。遊兎WIN！

扉は再び開かれる



それは、時間を少しだけ遡る。

『ワタシハ『ヴァンパイア・レディ』ヲ守備表示デ召喚。カードヲ一枚伏セテターンエンド』

ヴァンパイア・レディ DEF1550

そのカミュウラの分身体の一ターン目の動きは実に堅実だった。モンスターを守備表示で出し、伏せたのは罠カード『妖かしの紅月』。

素直に攻撃してくるなら罠でバトルフェイスを強制終了し、返しのターンで手札の『不死の王国―ヘルヴァニア』を発動しモンスターを一掃。コストとして捨てた『ヴァンパイア・ロード』を『死者蘇生』で復活させて攻めに出る。

もし守りに徹するのならそれでも良し。そのままヴァンパイア・レディを生け贄にヴァンパイア・ロードに繋げれば良いだけの事。攻撃力もそこそこで、効果破壊にも強いヴァンパイア・ロードなら少し強気に出しても問題はない。

手札も含めかなりの好スタートだった。だが、一つだけ誤算があるとすれば、俺のターン。ドロロー」

相手が友人二人を傷つけられて怒りに燃えるカイザーであつた事だ。

「俺は手札から魔法カード『パワー・ボンド』を発動！ 手札の『サイバー・ドラゴン』3体を融合し、『サイバー・エンド・ドラゴン』を融合召喚するっ！」

三つ首の機械竜が雄たけびを上げて場に出現する。

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000↓8000

「攻撃力8000ツ?!」

「パワー・ボンドの効果。このカードの効果で特殊召喚したモンスターは、その元々の攻撃力が追加される。そしてサイバー・エンドには貫通能力がある」

つまりサイバー・エンドの攻撃がヴァンパイア・レディに直撃すると、守備表示であっても分身体のLPは消し飛ぶ。だが分身体としてはそれも想定内。

むしろパワー・ボンドのデメリット。エンドフェイズに効果で上がった分のダメージをカイザーが受け自滅するのを冷静に処理しようとし、

「そして俺は手札から速攻魔法『サイクロン』を発動！ お前の伏せカードを破壊する」

『ナニツ!?!』

「やはり高攻撃力モンスター用の罠を伏せていたか。その手は明日香との戦いで一度見させてもらった。二度は通じない」

破壊される妖かしの紅月。それを見てカイザーは、普段より僅かに険のある表情で呟く。

「カミューラ本人ならまだしも、その動きを真似るだけの影に構っている暇はない。バトルっ！ サイバー・エンド・ドラゴンで、ヴァンパイア・レディに攻撃。『エターナル・エヴォリューション・バースト』っ！」

断末魔を上げる間もなく、そのままあっけなく分身体はヴァンパイア・レディを焼き尽くした熱線の余波で消し飛ばされた。

カミューラ（分身体） LP4000↓0

デュエル終了。カイザーWIN。

そして防衛システムが無くなった事で、部屋の中央に浮かぶ制御装置に目を向けるカイザー。

「さて。あとはこれをどうするか」

『悩む事はない。こちらで対処しよう』

次の瞬間。制御装置が炎に包み込まれる。カイザーがハッと振り返ると、そこにはデュエルが始まる前に周囲の罠を封じるべく別行動をとっていたアムナエルが立っていた。

「良いのか？ 壊してしまっても？」

『私はこの件を独自の判断で解決して良いと仰せつかつている。どのみちカミューラにしか使えない可能性が高い以上残しても害になるだけだろう』

なら破壊した方が手間もかからないと、アムナエルは淡々と語る。カイザーとしてもこれを残す事によつてまた今日のような事が起こるくらいならそのまま納得する。

「よし。では皆と合流するとしよう」

『……おやつ!? 一緒に居た精霊達はどうした?』

アムナエルはそこで途中まで一緒に居た二体。ネクとヘルパーの姿が無い事に気が付く。

「ああ。あの人形と機械のコンビなら、貴方が来る少し前に出て行った。何でも『ここはお前に任せる。あの吸血鬼に邪魔された分をしっかりとり返してやらんと気が済まん』らしい」

『……ふむ。まあ精霊がそう簡単に罠でどうにかなる筈もないか』

カイザーの言葉にアムナエルは一瞬考えるも、すぐにまずは生徒達の安全を確保するべきだと気持ちを切り替えた。

そして、時間は現在に戻る。



「ぐ、うろうう!？」

「……までだな」

LPが尽き、力なく膝を突くカミューラ。

闇のデュエルではあったが、最後のトドメはLPピツタリだったから少しは身体への負担も減っている筈だ。いくらなんでもダメージデカすぎで大怪我しましたってなったら後味悪いからな。すると、

「……んっ!? 明日香の人形がっ!？」

さつき皆の手助けで取り返した明日香の人形。それが強い光を放ち、慌てて床に置いて離れると見る見る内に元の姿に戻っていく。

「明日香っ!?! 大丈夫か!?!」

慌てて駆け寄ると大きな怪我はなさそうにホツとする。どうやら意識を失っているだけのようで寝息も規則正しい。良かった。そのままにいるのもアレなので、いったん

壁まで引つ張つて寄りかからせる。

さて。あとはカミューラだが、

「そんな……この、私が……」

ゆつくり歩み寄ると、カミューラは放心状態で俯いていた。まあ無理もない。

善悪はどうあれ、カミューラが今回の事にどれだけの労力をつぎ込んできたか想像もできない。しかしとんでもない苦勞をしたのは分かる。それが止められたんだからキツツイよな。だけど、こいつのやろうとした事を考えると簡単に許すことも出来ない。

「さあ。これで今回の一件は終わりだ。諦めて投降しな。そうすればアムナエルにとりなしくらいはしてやる」

契約違反という事でどんな罰が下るかは分からない。ダークネスのように魂が封印されるのかもしれないし、タイタンのように闇の世界に落とされるのかもしれない。まあ罰を受けるのは当然だが、あんまりとんでもない事なら少しくらいは口出しもしようと考えていると、

ズンッ！

突如カミューラの背後に見覚えのある扉が現れた。あれはっ!? 幻魔の扉っ!?

「……………えっ!？」

俯いていたカミューラは一瞬反応が遅れ、異変を感じて振り向いた瞬間扉がギギイと不気味な音を立てて開く。そして、

「カミューラっ! 逃げろっ!」

「何故扉が……………あぐっ!？」

扉の中から半透明の手が現れ、カミューラへと伸びてそのまま首元を掴んだ。

チクシヨウウっ! これが幻魔の扉の代償。使用者が負けたら魂が幻魔の物になるって奴かつ!?! しかし今回のデュエルでは扉の発動を無効にして終わらせたはず……………まさかつ!?! 場に出した時点で代償有りなのかよっ!?

「カミューラっ!」

俺は急いで駆け寄って、カミューラが連れていかれないよう身体を抱きかかえる。代償だか何だか知らんが、折角発動を止めたのにカミューラを持つてかれてたまるかつ! ……………だが、

「なっ!？」

突如カミューラの姿がまたブレたかと思うと、まるで幽体離脱でもするかのように身体から半透明の姿が浮き出る。これは前ネクがダーク・ネクロフィアの時に見た幽体と

同じ奴か？

そして俺が押さえているのが生身の方で、幽体の方が扉の手に掴まれているのだから非常にマズイ。

「クソっ！ このっ！ 罪善さんっ！」

カタカタ！

何とかもう片方の手で幽体のカミューラを掴もうとするが、俺の手を普通にすり抜けてしまつて掴めない。罪善さんが光を放つても、扉から伸びる手は一瞬怯んだだけですぐに復帰してカミューラを引っ張ろうとする。

どうする？ 幽体を弾いたり追っ払ったりなら俺のペンダントを翳せば何とかなるが、幽体に触るのは無理だ。罪善さんでも止めきれないしこのままじゃ。

「あっ!？」

そこで一気に扉の手の力が強くなり、ズルっとカミューラの幽体が肉体から抜け出る。同時にただでさえ体温の低かったカミューラの身体から、どんどん命の灯が消えていく。

ダメ。ダメだっ！ 手を伸ばすももう届かず、そのまま俺の目の前でカミューラの幽体は幻魔の扉に吸い込まれ、

『逃がさんぞこの吸血鬼がつ！』

突然バンつと部屋に響いた外の扉を開く音。聞き覚えのある声と共に、幻魔の扉に吸い込まれる直前カミューラの幽体が動きを止める。

カミューラの身体を抱えながら俺が見たものは、

『負けたからと幽体になって逃げようとは小癪な真似を。だが残念だったな。幽体なら私の得意分野よ。計画を邪魔した分キツチリお返しをさせてもらうからなっ！』

へぴぴっ！ レスキュープロセス実行中

カミューラの幽体までワイヤーを伸ばすヘルパーと、そのワイヤー越しに白い光を伝わせてカミューラを繋ぎとめる幽体使役が得意な人形ことネクの姿だった。ナイスネクっ！

扉の対価を払う時

『ふくはっはっは！ 変な扉に逃がしはせんぞ吸血鬼め。私だけ計画が失敗するなど冗談じゃない。おとなしくお前も捕まるが良いっ！』

ヘルパーから伸びるワイヤー。そしてそのワイヤー越しにネクが伝わらせる白い光によって、カミューラの幽体を繋ぎとめていた。だが、

ギシリ。ギシリ。

へっぴっ!?! ピっぴっ!?!

『ぐおっ!?! おのれっ!?! 逃がすかっ!』

ワイヤーが悲鳴を上げる程の強い力で、幻魔の扉から伸びる手はカミューラの幽体を引つ張り続ける。自信満々にやって来たネク達だったが、ズリズリと僅かずつ引きずられてあまり余裕はなさそうだ。

「良いぞネク！ もう少しこらえてくれ！」

俺もカミューラの身体を置いて急いで綱引きに加勢し、綱の端を罪善さんも啜えて一斉に引く。だが、

「くそっ！　なんて力だ。引きずり込まれないようにするだけで手いっぱいだぞっ！」
 『あ、そくれ。そくれ。頑張れ頑張れ久城君！』

「応援してる暇があつたらお前も引つ張れっ！」

音頭取りのつもりかデーが拍子をとるのが何とも言えない。しかしこのままじゃジリ貧だ。こうなつたら他の鍵の守り手なり幻想体達が来てくれるまで持ちこたえるくらいしか。

ズンッ！

んっ!?　何だ今の音は？

ズンッ！　ガラガラガラ。

気のせいかと思つたら、外から鈍い音と何かが崩れるような音が聞こえてくる。一体何が……そう思つた時、

『ギャオオオオンッ!!』

外からとんでもない咆哮が響き渡るのと同時に、魔法少女達が落つこちた壁の穴とはまた別の場所をぶち抜いて、何か巨大なモノが部屋に突入してきた。それは、

「……………デカい……………へび？」

それは青白い姿の巨大なヘビのような何かだった。

黒く落ち窪んだ眼窩。ピンク色の下顎と同色の蛇腹。そこまでなら軽く大の大人を丸呑みに出来るサイズ以外は普通のヘビと大差ないが違うのはその後。

ウロコと羽が混ざったような紫の翼を持ち、頭部の横には一見耳にも見える筋張った手。どこかハートのようにも見える背ビレを生やし、その胸元にはどこかアンバランスな可愛らしいピンクのリボンを付けている。

『な、何だこの化け物はっ!?!』

そうネクが驚きの声を上げる中、異形が突如こちらに向けて口を開き、

『危ないっ!?!』

「おわっ!?!」

その口からビームが飛んでくると、俺の目の前にどこかトランプのスペードのような紋章が盾のように拡がるのはほぼ同時。

極太の光線が紋章に受け止められ、どこかガラスが割れるような音を立てて消失した。

『無事……とも言いきれない状況ねコレは』

「セイさんっ!」

へビの空けた穴から、セイさんが飛び込んできて俺を庇うように立つ。しかしその姿はあちこち傷つき、綺麗だったドレスも少し焼け焦げている。

へビはビームを吐き終わると、様子を窺うように暗い瞳で周囲を見回している。

『今のでさつき私が与えた祝福が消し飛ばされた。次はもう防げないわよ』

「セイさんっ! 大丈夫かその格好っ!? それにこのデカイへビは一体」

『私の心配より自分の心配をしなさいっ! あれは……センパイよ』

「センパイって……えっ!? あれココロかよっ!」

俺の知ってるココロと大分違うんですけどあのへビ。……いや待てよ? よく見るとあの青とピンクの配色はココロの服に近いし、胸の辺りに付いているリボンも見覚えがある。

もしかしてあれ貪欲の王の化け魚バージョンと同じくクリフトカウンター0の暴走状態かっ!?

『何とか一対一で抑え込んだのは良いのだけれど、それまでに色々溜まっていた物が爆発して暴走したの。ああなつたらエネルギーを使い果たすか力尽くでおとなしくさせるかしか戻る方法はないわ。さつきまで外で駆けつけてきた大鳥と審判鳥と一緒に戦っていたのだけど、急に何かに反応してこっちに』

「それは多分……あれだ」

俺は真後ろの方にある実体化した幻魔の扉を指し示す。ココロが乱入しても尚ワイヤーを離していないのは、我ながらトラブル続きで正常な判断が出来なくなっているせいだ。

『……成程。強い闇の力を感じる。だからセンパイが引き寄せられたのね。審判鳥達も反応していたし。今ビームを撃つたのも、貴方ではなく貴方の後ろの扉を狙つてのこと。なら貴方がその射線から離れば』

「無理だ。今力を抜いたらカミューラが引つ張り込まれる。それにもし避けても扉ごとカミューラが吹っ飛ぶ」

『そんな事言ってる場合?!? 見なさいっ!』

セイさんに促されてへびと化したココロを見ると、大きく息を吸って第二射の準備を始めている。

『もう時間は無いわ。その女は敵だったのでしょう? 何ならこのまま扉に引き込まれてもよし。扉ごと吹き飛ばされようが知ったことですか。まさか私の仕える主は自分の命よりも他人の命を優先するようなバカではないでしょう?』

「いいや。そうじゃない。……そうじゃないんだセイさん」

セイさんはあくまで俺の身の安全を第一に考えてくれている。実際本当にどうしよ

うもなくなつたら俺も自分の命を優先するくらいには薄情者のつもりだ。だけど、
 「それじゃあ納得がいかない。俺も、ネクも、ヘルパーも、鍵の守り手達も、負け逃げな
 んて許さない。きちんと自分のやった事を謝罪させないと気が済まない。それに……」
 俺はそこで言葉を切り、どこまでも単純な答えを返す。

「見捨てたりしたら後味が悪いだろ？ 折角の祭りをそんな気分で過ごしたくないから
 俺はカミューラを見捨てない。それに、そんな騎士らしくない事をセイさんにさせるの
 は嫌だしな。だからだよ」

『……貴方って人は』

セイさんが呆れたような、それでいてどこか笑っているような顔でそう呟く中、
 『ぬおおっ!! そっちの化け物へビもそうだがこっちももう限界だっ!! 口惜しいがも
 う離す。離すぞ我が生遣け贄見よっ!!』

へビ、ピピッ! ワイヤーの耐久値減少中。推定一分後に破損する可能性87%。レス
 キュープロセスを中断しますか?<

げっ!! あっちももう限界だ! 前門の幻魔の扉に後門の暴走ココロ。一体どうし
 ろってんだこの状況っ!!

『……手はあるわ。その女を助けつつ扉を何とかする手は』

「本当か!!」

『ただしそれにはかなりの量の力が要る。周囲に満ちた力の流れから集めていたんじゃない間に合わないから、今の貴方から直接貰い受ける事になる。それこそ倒れるギリギリまでね。それでも良い?』

その言葉と共に、暴走ココロの口から淡い光が漏れ始める。向こうもいよいよぶつ放す気か。ならこんな状況で返せる言葉は一つ。

「頼む! 皆を護ってくれ! セイさん」

『……この身に懸けても。我が主様』

遂に溜まったエネルギーが目に見える程になり、あとはその口から放出するだけ。そんな暴走ココロの前に立ち、セイさんは静かに両手を組んで祈りを捧げる。

祈りと共に、細剣がどこからともなく現れる事十数本。ズラリと列を成して周囲に滞空するのはどこか壮観でもある。

『良い? チャンスは一度。タイミングを間違えないでよ』

「ああ。分かっている」

『良いからさっさとやれっ! もうホントに限界だっ!』

ネクの願いを聞き届けたのかどうか知らないが、

『ギャオオオオン』

暴走ココロはこれまでで最大級の光線を撃ち放った。

多分これまでのセイさんとの戦いでは、口では倒すだのなんだの言いながらもどこか仲間としての手加減があつたのだろう。しかし暴走中のココロにそんなものはなく、自らの狙う扉ごと俺達を飲み込むべくビームが伸び、

『……クツ!? ううううっ!』

セイさんの細剣が持ち主を護るように集まりビームを押し止めた。しかし、少しずつその勢いに負けて細剣からピシピシと嫌な音が響く。

このままじゃすぐに突破されるだろう。だけど、

『遊児っ! 今よっ!』

「ああっ! たっぷり持つてけっ!」

その瞬間。俺の身体から何かが抜け出ていく感覚があつた。それは俺の持つているデッキ。その中の絶望の騎士のカードに流れ込み、それを通してセイさんに力を与える。

『ハアアアアアッ!』

気合一閃。祈りを解いたセイさんは、空中で押し止められていたビームを真横から細剣を一本飛ばして刺し貫く。

当然それだけではビームを消し去ることは出来ない。しかし軌道を変えることは出来る。

その一本だけに制御を集中し、細剣に沿う様にビームの軌道を調整。結果、ビームは俺達の頭上に僅かに角度を変える。そして、

『もう……一回っ！』

一本だけ防衛に回さず滞空したままだった細剣。それを、更に上から飛来させることでさらに角度修正。

カミューラの幽体すれすれになるようビームは再度軌道を変え、そのまま扉へと向かう。そう。

「人一人の魂とまではいかないが、魔法少女達の全力の一撃だ。持つていくエネルギーとしては充分だろう！ だからさっさと扉よ閉まれえっ！」

吹雪や明日香の魂でカミューラが代用しようとした以上、扉は本人の魂以外でも支払いは効く。ならばそれと同価値程度のエネルギーを打ち込めば良い。そして、

ギギイ……バタン。

扉は、静かに閉じられた。

消えゆく後に残されたのは、力を使い果たし元の少女の姿に戻って眠るココロと、幽体が戻ったものの意識を失ったままのカミューラの姿だった。

崩壊する城から脱出せよ

「終わった……のか？」

『……のようね』

扉が消えるのを見届けると、俺は大きく息を吐いて座り込んだ。

カタカタ！

「ああ。罪善さんもお疲れ様。セブンスターズと幻想体の同時対応なんてもう二度とゴメンだぞ」

『一つずつでももうしたくないわね。特に暴走したセンパイの相手は』
「あつ!? そうだ!? ココロはもう大丈夫なのか？」

今は元の可愛らしい少女の姿で眠っているが、起きたらまたあの大蛇になつて暴れまわるんじゃないだろうな？ そう心配して尋ねると、セイさんは心配ないわと薄く微笑む。

『あれだけ派手に暴れたから、多少はストレスも落ち着いたでしょう。酔っ払いと同じで暴走の後は直近の記憶が飛んでいるでしょうけど、しばらくは落ち着くんじやないか』

しら』

セイさんがそういうなら信じるけど、記憶が無くなるっていうのは厄介だな。また俺悪党扱いされない？ 何かこれからもストレス発散の方法を考えないとヤバイぞ。

『お〜い。こっちの吸血鬼めはどうする？ 個人的にはこうキツ〜イ仕置きをしてもらえると多少は憂さも晴れるのだが』

へ。へ。へ。っ！ 生体反応やや微弱。休養を推奨します〜

ネクが悪〜い笑顔を見せながら、カミューラを指差す。ヘルパーも目を点滅させながら軽いメデイカルチェックを行っていた。

しかし本当にどうしたもんか。とりあえず一発かましてはやったし、闇のゲームで魔の扉が罰ゲームの代わりになったけど、その代価はエネルギーで支払われたから魂も無事だ。

しかしここまで大事を引き起こした以上何のお咎めも無しって訳にはいかない。アムナエルに引き渡すか学園側に引き渡すかは悩みどころだが、どっちにしても何らかの罰は降るだろう。

「まあその辺りはおいおい考えるところとして、少し休んだら他のメンバーと合流してさっさと撤収を……何だ!？」

ミシッ！ ミシッ！

その時周囲から何かイヤな音が聞こえてきた。まるで何かが崩れようとしているよ
うな。それと共に壁からも微かな振動が……まさかっ!?

『いけないっ!? 城が崩れるわっ!?!』

セイさんの言葉の瞬間、待つてましたと言わんばかりに天井からパラパラと細かい瓦
礫が落ち始める。

チクシヨウっ! 複雑な仕掛けが作動する中あれだけ城中で暴れまわったからな。
おまけに幻想体達も各所で実体化して戦っていたし、トドメとばかりに暴走ココロの乱
入。城の耐久値に限界が来たんだ。

『マズいぞ我が生見け贄よ。城が崩れる前にさっさと逃げるとしよう』

「いやちよつと待つてくれ。他の部屋の皆に逃げるように言わないとっ!?!」

『それならご心配なく』

そこにふわりと現れたのは急にさつきから姿を消していたディー。今までどこに居
たんだよ。

『こんな事もあるうかと、一足早く他の幻想体達を通じて避難を呼び掛けておいたよ。
もうこの城に残っているのは君達だけさ』

「ナイスだディー。なら後はそこで寝てる明日香とカミューラ、ココロを叩き起こして
……ぐっ!?!」

もうひと踏ん張りど気合を入れようとしたら、急に足がふらついてバランスを崩す。だが、

「……なっ?!? セイさんっ?!?」

『礼も文句も後で。あれだけ体内のエネルギーを流し込んだらこうなるのも当然よ。私が運ぶからジツとしてなさい』

倒れかけた所をセイさんに支えられ、何とそのままお姫様抱つこの体勢になる。だからこういふの普通逆だつてのっ?!? それにセイさんだつてまだ疲れがっ?!?

『センパイっ! いつまで寝てるのっ?!? さっさと起きなさいっ!』

カタカタ!

『すうすう………あらっ?!?』

セイさんが飛ばした細剣に頬をペチペチ叩かれ、おまけとばかりに罪善さんの光を受けて、大きな欠伸と背伸びを一つしてココロは目を覚ます。

『ふわ〜良く寝た! ……状況は?』

『もうすぐここは崩れる。悪党はそこで伸びてて向こうに要救助者一名。こつちの現管理人は私が運ぶから、その三体と協力して救助と捕獲及び脱出。いける?』

『OK! やっぱり人命救助は正義の味方の出番だよね!』

ココロが寝起きでぼ〜つとしていたのも一瞬の事。直近の記憶が無いという話だが、

セイさんの簡潔な説明にすぐにシャキツとして理解を示す。こちら辺はやはり付き合
いの長さ故だろう。

『その穴から外へ飛び出すのはどう?』

『高さを考えると、私達だけならともかく要救助者も一緒となると難しいわね』

『じゃあ僕と罪善さんで城内を先導しよう。なるべく崩落の少ない場所に行くけど、多
少の瓦礫は自分達で何とかしてほしいな』

『あつ!? アナタあの時の悪党つ!』

『センパイ。今は目の前の悪党より救助の方が先決よ』

ディーを見てココロは反応を見せるが、セイさんが咄嗟に止めて事なきを得る。記憶
は一体どこからどこまで残っているんだろうか?

『……仕方ない。その悪党さん。お仕置きは保留だからね』

『結構。じゃあ確認するわ。ディーと罪善が先頭。センパイは降ってくる瓦礫を弾きな
がらそれに続いて。ヘルパー達は中衛で二人の搬送に専念。私は最後尾で遊兎を運び
ながら全体をサポートするわ』

『むう。指図は気に入らんが、割り振りとしては的確か。またカミュラが逃げないよ
うに私が見張るのも納得だしな』

へぴぴっ! 要救助者固定完了! レスキュープロセス実行可能だよ!〜

意識の戻らない明日香とカミューラをワイヤーで固定し、その傍についたネクごとヘルパーがアームで持ち上げる。いやホントに家事ロボットの範疇越えてないかヘルパー？ 有能すぎじゃね？

『では久城君。号令を』

「いや何で俺っ!? ……じゃあこの格好で失礼して、皆！ 逃げるぞー！」

『『『お〜!』』』

一難去つてまた一難。城内脱出作戦が始まった。

ダツダツダツ!

デイーの先導の元、あちこちひび割れ崩落を始める城内を駆け抜ける（俺はお姫様抱っこのままだが）俺達。そんな中、

キイキイっ!

『うおっ?! 何だこのコウモリ達はっ?!』

城内にはあちこちにコウモリ達が飛び回っていた。カミューラが倒れた事で指揮系統が破壊され、おまけに城も崩壊寸前とあつてはパニックになっているのだろう。

『悪党の手下ね！ 任せて！ ここはワタシがっ!』

「わあ〜っ!! ちよつと待ったココロ! 今はそんな場合じゃないって!」

いきなりまたステッキからビームをぶつ放そうとするココロを必死に押し止める。こんな所でビームなんか出したらそれこそ城が完全に崩れるぞ!」

「見た所こいつらにもう敵意はない。なら邪魔さえしなきゃこつちから手を出さなくても問題ないだろう。それに……こいつらはあくまでカミューラが心配なだけのようだし」

実際カミューラの姿を見た途端、少しではあるがコウモリ達がおとなくなつた。光に対する盾代わりにされていたが、思いはどうあれ従つていたのは間違いないのだから。

そうしてコウモリ達をスルーして走つていたのだが、

『こいつら着いてくるぞっ!! 速度を上げて振り切れヘルパーっ!』

「ああもうほつとけネクっ! こうなつたらこいつらも一緒に脱出だ!」

どんどんカミューラ目当てに合流してくるコウモリ達。あくまで一緒に来ているだけなので邪魔になつていないし、なんと器用にもカミューラ目掛けて降つてくる瓦礫を魔法少女達と協力して弾くなんて事までしている。

『やるわね。流石カミューラの子飼ひ。パニックさえ落ち着けばここまで出来るか』

『ワタシとセイちゃんだけでも出来たけどね! さあ行くわよ!』

走る。走る。走る。

通路を駆け抜け、瓦礫を飛び越え、階段を駆け下りる。そして、

カタカタ!

『あつた! 出口だつ!』

前方に見えてきたのは城の正門。周囲を覆っていた霧も晴れつつあり、やや陽は傾いているものの夕暮れというにはまだ早い。その光が城の外を明るく照らしていた。

『もう少しだよ! 皆頑張つて!』

ココロの櫓とゴールが見えた事で全員が奮い立つ。あと残るはこのエントランスのみ。ここさえ抜ければ、

『……っ!? チイツ!? 各自頭上注意っ! 大きいのが来るわっ!』

あともう少しの所で、セイさんの警告に頭上に目を向ける。そこにはこちらに向かつて降ってくる一際デカイ瓦礫があつた。

『今こそワタシの出番ねっ! セイちゃんカバーよろしくっ! 喰らええっ!』

ココロがステッキから星形弾を乱発して瓦礫を迎撃する。瓦礫は爆砕し、掌大の無数の破片となって雨の様に降り注ぐ。だが、

『私が主人を……仲間を守れないような騎士だと思つて? 言われずとも守り切つてみせるわっ!』

俺を抱えているのはかつて誰かを守り続けた守護騎士。

たかだか飛んでくる瓦礫の破片程度何するものぞとばかりに十を超える細剣が宙を舞い、破片を更に中心を貫いて小さくしていく。俺達の所に届く頃にはすっかり粉々となり、ちよつと口に入ってじやりじやりする程度だった。

そして、

『出たぞっ！』

『まだよっ！ 城から出来るだけ離れてっ！ 崩れるわっ！』

ガラガラガラガラ。ズシャアアンツ！

俺が駆けるセイさんに抱えられながら背後を振り向くと、そこに見えたのは轟音を立ててカミューラの城が崩壊していく様子だった。

正義であろうとする少女と騎士の誓い

さて。崩壊する城からの脱出を果たした俺達だったが、そこからの事をざっくりと語ろうか。

まず十代達鍵の守り手と幻想体達、そしてアムナエルこと大徳寺先生は全員無事だった。

それぞれが自分の持ち場の部屋に突入し、その防衛システムをデュエルで撃破。機材を幻想体達の協力によって破壊する事に成功し、城の崩壊直前に幻想体経由でダイーの避難指示が届いて城から退避したという訳だ。

まあ元々消耗が激しかった吹雪は途中で意識を失い、黒蠍のクリフに背負われていたが。それ以外は全員大きな怪我が無くて良かった。

そして脱出した後で城の外でスタンバっていた大鳥と審判鳥に出くわし、あわや戦闘になりかけたとか。そう言えばさつきまで暴走ココロと外でやり合っていたから二人共気が立っていたんだよな。

ただそこは幻想体（主にレティシアと葬儀さん）の仲裁によって事なきを得たとか。

話し合いで済んで助かった。

そうしてバランサー状態で合流した俺達だが、そこでまたひと悶着。ココロがアムナエルを見て悪党認定したのだ。中身はともかく見た目は悪い魔法使いっぽいからな。結果また総出でココロを宥めてどうにか抑え、これからについて話し合う事になったのだが、

「先ほどの十代による提案の通りだ。我々セブンスターズは、本日はこれで引き揚げさせてもらう。独断とは言え元身内が発端だからな。これ以上約束を破るような事はしない。無論そちらから停戦を破って一戦交えようというのなら話は別だが」

『次回の日程はまた近日中に連絡させていただく。流星にもう今日のような俺審判役を通さない戦いはこりこりだ』

戦闘による疲労等もあって許可は取つてあるというアムナエルの一言。そして十代達に追い打ちをかける理由もなく、これ以上の戦いは無事避けられた。

そしてカミューラの身柄についてだが、いったん明日香や吹雪と一緒に学園側の医務室まで連れて行って預ける事に。アムナエルの見立てでは今回の騒動でカミューラの力は半分落ちているらしく、貸与されていた道具のサポート無しでは吸血鬼らしい芸当は回復するまでできないとか。

そして、城が崩落したことで力の流れは少しずつ正常に戻っていく。力が完全になく

なる訳ではないが、幻想体達もカミューラの企てが無くなった事で実体化が保てない（という建前）で姿を消し、黒蠍盗掘団は先に万丈目の部屋に精霊化して戻った。これで今回の一大騒動は終わりを迎えたのだった。

「……ただいま。ああああ。疲れた。ホントに疲れた。もう今日は動きたくねえ」

アムナエルの謎の移動法（カミューラの霧化とはまた違う、闇に包まれて瞬く間に移動する奴）に便乗し、一足先にオシリスレッド寮に戻ってきた俺は自室に戻るなりベッドにダイブする。

これは先に帰って遊兎として皆を出迎えないといけないからだ。決して城からここまで歩くのはしんどいからという訳ではない。なんであれだけ戦って皆普通に歩いて帰れるんだよ。

さつき見たらコスプレデュエル大会の方は今も盛況だった。俺が回ったイエローからも見知った顔が何人か来ていて、宣伝は無駄にならなかつたようだと少し安堵する。

流石に紅葉さんの姿はもう見えなかつたがそこは仕方ない。あとで十代にデュエルの内容を聞かせてもらおう。それじゃあ、

「あいつらが戻るまでもうしばらくかかるだろ？ それまで休む」

『どうぞどうぞ！ ゆっくり休みなよ。今回は忙しかったからねえ』

デーイーが珍しく労るように声をかける。それだけ今回はこいつにとつて見応えのある見世物だったという事なのだろう。

『本来アニメ版の流れで言うなら、学園祭編とカミューラとの一戦は別々の話。それを一日でまとめてやった上、幻想体達も巻き込んだ一大決戦だ。思った以上に面白い内容に十分楽しませてもらったよ！』

「楽しんでもらえたなら何よりだよこの野郎」

そのまましばらく休んでいると、

『ただいま〜！ 帰ってきたよお婆ちゃん！』

『おやおや。お帰り。何か物語を聴いていくかい？』

『それも良いけど、今日は私がお婆ちゃんにお祭りのお話を聴かせてあげるのっ！ はいつ！ このお土産にもらったプチシユーを食べながら聴いて聴いて』

コクコク。

『……そうかいそうかい。それは楽しみだねえ』

レティシアとオールドレディ（それと喋れないけどテディ）のなんかほっこりする会話が聞こえてきた。

カタカタ！

「……ああ。ありがとう罪善さん。こりや気持ち良いや」

罪善さんの光を受けながら、他の幻想体達について思い浮かべる。

まず葬儀さんと雪の女王、ヘルパーは今精霊化した状態で十代達に付いている。ないとは思いますが、万が一今の疲弊した状態で鍵の守り手が襲われでもしたら大問題だからな。

ネクは下手に放っておいてもまた厄介な事になりそうだし、護衛しつつ葬儀さんに見張ってもらっている。まさかどきくさで三幻魔の力を溜め込もうとしていたのは驚いたが、結局時間が無くてそんなに溜まっていなかったとか。

途中来てくれたウエルチアースは、今どこかの海でタイタンと一緒に漁の真っ最中。大漁だったら少し分けてくれないかね。

大鳥と審判鳥はまた森に帰っていった。だが罰鳥だけはクロノス先生が気に入った（或いは何かやらかしそうな気配がする）のか、皆を送り届けるまでは一緒に行くようだ。

そして一番肝心な、リスクレベル上から二番目WAWで今日実体化したばかりの二人の魔法少女なのだけど、

『なるほどなるほど。三幻魔の封印に七精門の鍵。そしてそれを狙って襲ってくるセブ

ンスターズ。そいつらが今回の敵って訳ね！ セイちゃん！』

『……まあそんな所。それで今の管理人こと遊児は、そこに潜入しているスパイって訳。だから見た目が多少悪党らしくても仕方ないわね』

どうにかこうにかココロを宥めつつ、セイさんが今の状況を説明していた。

セイさんが言うには、ココロは暴走する度に直近の記憶をなくすという。少し話した所、どうやらセイさんと戦った辺りから記憶がぼやけているらしい。

俺の悪党認定も少しあやふやだったのは不幸中の幸いで、どうにか落ち着いたという事でセイさんが辻褄を合わせるべく頑張ってくれている。もうちよつと休んだら俺も手伝うからな。……しかし、

『OKー。セイちゃん。その最後のセブンスターズ……アムナエルだっけ？ そいつの居場所が分かってるんなら、こっちから乗り込んでやつつけちゃえば良いんじゃない？ とりあえず部屋の外からワタシがアルカナ・スレイブを撃ち込んで、セイちゃんがバックアップしてくれれば』

『……はあ。このバカセンパイ。話を聞いていたの？ そのアムナエルは遊児の協力者。セブンスターズの真の黒幕は別に居るって。下手にアムナエルを倒しても逆効果。それどころか黒幕に余計警戒されるのよ。だからわざわざスパイとして潜り込んでい

るっていうのに』

『え〜っ!?』 面倒だなあ。正義の味方として拠点ごとまとめて吹き飛ばせれば楽なのに』

どうやらココロはいわゆる脳筋スタイルという奴らしい。搦め手なんか要らない。世の悪党はとりあえず力でぶっ飛ばせば全て解決と言わんばかりだ。

セイさんの口調が若干荒くなっているのは呆れているからか、それとも長い付き合い合い故の物だろうか。

少し休んで俺も説明に加わり、一応だがココロの中で今の状況に収まりがついたようだ。それは、

『まっ！ 要するにこれまで通り悪党をやっつけていけば良いのよね！ 大丈夫！ この魔法少女ココロちゃんに任せなさい!』

「全然細かい所は分かかってないじゃないかっ!？」

『……もうそれで良いわ。ただし悪党を見つけたら、いきなり有無を言わさず再起不能にするんじゃないかって私でも遊兎でも誰でも良いから仲間に連絡する事。……前の場所だっけそうだったでしょ?』

『分かっているって! 正義の味方には仲間が必要だもんね! 頼りにしてるよセイちゃん! 管理人さんも!』

ココロはそう言つてカラカラと笑い、セイさんはため息を吐きながらよろよろと椅子に座り込む。

『……悪いわね。ウチのバカセンパイがこれからも迷惑かけると思うわ。バカで歪んでいて自分の正義を否定されたり倒す悪党が居ないと暴走するような子だけど、少なくとも正義であろうとするその思いと実力は本物よ。……そして、私も』

そう言つてセイさんは俺の目の前までやつてくると、静かに両膝を突いて跪き頭を垂れた。そして一本の細剣がどこからともなく俺の前に浮かび上がる。

これは……映画とかで見た事があるな。確か騎士叙勲の作法だったか？ 詳しくは知らないけど、つまりは仕える人から騎士の任を受ける為の儀式だ。

『遊児。貴方は私の主君として自分を磨き、私を呼び出してみせた。なら……今度はこちらの番。騎士としての誓いと契約をここに』

『……やりたい事は何となく分かったけど、俺はこういう時の作法なんて知らないぞ？』
『そう思つて略式にしておいたわ。貴方はただ私の両肩をその剣の横で触れ、一言「許す」と言えば良い。細かな部分は私の方で代行するから』

何だ。それなら簡単だ。俺は細剣を手にとると、セイさんの両肩に一度ずつ軽く触れる。そして「許す」と一言述べた時、何故か胸のペンダントが強く光り輝いた。

『契約は完了したわ。これより私は貴方の騎士。あらゆる害意から貴方を護る剣にして

盾。騎士としてのこの力と誇り、存分に振るわせて頂くわ。我が主様』

「ああ。よろしく頼むよセイさん！」

そう言うときセイさんは静かに微笑む。そして一瞬だけ、閉じた隻眼から絶え間なく流れる黒い涙が止まったような気がした。

祭りの終わりはキャンプファイヤーで。

トントン。トントン。

「……………んっ!？」

外から聞こえるノックの音で、俺はハツと目を覚ます。まいったな。少し横になるだけの筈が、思いつきり眠ってしまったてらしい。

何故起こしてくれなかったのかと周囲を見ると、レティシアは爆睡しているしテディは枕代わりにされてる。オールドレディはレティシアに気を遣ってか珍しく静かだし、ココロは姿が見えない。デーがフラッと居なくなるのはいつもの事。そして、

『……………スウ……………スウ』

俺の隣、ベッドの縁に腰掛けたまま寝息を立てるセイさんというレアな様子を見て内心驚きながらも、

「は〜い」

寝ぼけた顔を軽く張つて目を覚まし、ノックされる扉を開けると、そこには十代の姿があつた。

「おう遊児っ！ そろそろキャンプファイヤーの時間だぜ！ 宣伝しまくつて疲れてんのかもしれないけど、これを逃したら悪いと思つてよ！」

「何？ もうそんな時間か。こうしちやいられない。身支度を整えるから数分待つてくれ」

断りを入れて部屋に戻り、他の面子を起こさぬよう静かに支度を整えて部屋を出る。そして祭りの締めであるキャンプファイヤーに向かう中、

「そういえば遊児。……助けてくれてありがとうな」

「何がだ？」

「何つて、幻想体達の援護の事だよ。お前が言ったから皆助けに来てくれたんだろ？」

一瞬バランサーの事がバレたかとビビつたが、城に助けに行つた幻想体達の事についてだつたので適当に話を合わせる。

あくまでカミューラの事については知らないが、幻想体達が不穏な動きを察知したので助けに向かわせたという筋書きだな。

「何っ!?! 明日香が倒れた!?!」

「ああ。さつき吹雪さん、それと捕まえたカミューラと一緒に保健室まで担ぎ込まれた。

命に別状はないらしいけど、しばらく安静が必要だつてさ」

明日香の事は俺も知っていたが、それを十代に言う訳にもいかないので知らないフリをする。しかし、やはり祭りには出れそうになかったか。……残念だ。

今はクロノス先生が傍に付いているらしい。本来なら十代や万丈目達も一緒に居たかったらしいが、クロノス先生の「ここはワタクシに任せて、貴方達は学園祭に戻りなさい」ノ。生徒の本分は学業ですが、今この瞬間にしか手に入らない思い出というものもあります」との言葉でこちらに戻ったとか。

「……それはクロノス先生が正しいな。明日香を心配するのは当然だけど、だからと言つてこつちをおざなりにしたらそれこそ明日香に怒られるつてもんだ。「後は頼むとは言つたけど、その為に学園祭をサボるなんて許さないわよっ」……つてさ」

「そっか。そうだよな! ……んっ!? 俺明日香がなんて言つたかまで話したっけ?」

「……ああ。幻想体達に聞いたんだ。それよりほらっ! キャンプファイヤーが派手に燃えてんな!」

やばっ!? ついバランサーとして聞いた事がポロっと出た。俺は何とか誤魔化しながらキャンプファイヤーに辿り着く。そこには、

「も〜。ほんと〜に大変だったんだからね万丈目君。コスプレデュエルが盛り上がって

いる所で実行委員長兼解説役が居なくなっちゃうんだから。途中でブラマジガールも消えちゃうし」

「そうなんだな！ でも十分それまでに場が温まっていたから、閑散とするなんてことも無く割と盛況のまま続いて大忙しだったんだな！」

「そうだったのか。俺が居ない間良く保たせた。お前らも少しはやるものだと言わされてやる」

疲れ切りながらもどこか充実した顔で愚痴る翔と隼人に、それを口が悪いながらも労る万丈目。

「ああ。またお逢い出来ましたわね葬儀様！ 蝶頭の君！ 私ずっと探しておりましたのですわ」

「まっ。待つてる間もそこそこ楽しめたけどね。他のコスプレも結構本格的だったし」
『おやつ!! 君達は昼間の！ 宣伝を見て来てくれたとは喜ばしい事だ』

明日香の取り巻きの……ジュンコともえだったか？ その二人と和やかに談笑する葬儀さん。

『ぬえええい。結局これだけ苦労して溜まったエネルギーは予定の五分の一程度とは情

けない。それもこれもあの吸血鬼めのせいだ。えらい今日は飲むぞ！ ヤケ酒だ！』
『おく良い飲みっぷりだネク！ さあもつと飲め飲め！ 今日とはとことん付き合うぜ
！』

『ミーネ……なんでこの人形こんな酔っぱらってるんだ？ それ祭りに配慮してノンアルコールなのに』

『場酔いつて奴でしょ。まあ気持ち良く飲める分には良いんじゃない？』
顔を真っ赤にして騒ぐネクと、一緒になって笑つてる黒蠍盗掘団。

『見つけたわよ悪党！ 今度こそ正義の味方としてお仕置きしてあげるっ！』

『どれ。妾も少し力を貸すでしょう。其の者には冷たい灸を据えねば思っていた所だ』

『ちよっ!? ちよつと待つて!? 話せば分かる！ 話し合おうよ!』

『問答無用!』

『ぎよえくっ!?』

精霊化しているとは言え、ココロと雪の女王に追い回されるデイー。

そして、催し物の成功を喜ぶ多くの生徒達の姿があった。

キャンプファイヤーに照らされ、思い思いに騒ぐ皆の顔は皆（ごく一部は除くが）とても楽しそうで、

「……なんか良いよな。こういうの」

「ああ。これぞ祭りって感じがするよな！ さあ。俺達も混ざろうぜ！ まだまだ祭りはこれからだ！」

クリクリ〜！

十代はそう言つて、精霊化したハネクリボーと一足先に走り出す。そして俺も駆け出そうとした時、

ガシツ！

「……あのお。何でこんな力強く俺を掴んで離さないのでしょうか皆さん」

『あら？ 騎士たる私を置いていくなんて、寂しい事をする主君を捕まえているだけだけど？』

『むう〜。ヒドイよ遊児お兄ちゃん。目を覚ましたら居ないんだもん。慌てて飛んできたんだよ？』

コクコク。ギユ〜。

薄く笑うセイさんに肩を、頬を膨らませるレイシアに手を、寂しがるテディに背中を掴まれ冷や汗ダラダラの俺。だつてしょうがないだろっ!? 皆気持ち良さそうに眠っていたんだもの！ だけど、

カタカタ!

「ああ。分かっているよ罪善さん。祭りはまだ終わっていない！ だから最後まで皆で盛り上がるう！ ……なのでもう少し力を緩めてくれると嬉しいなあ」

『ダクメ！』

ですよね〜！ ……ただこれこそが、このたった一日の愉快な大騒ぎが戦いの報酬だ
というのなら、それはそれで悪くはない。

そう思ってしまう俺が確かに居たのだ。

そうして、大成功で終了した学園祭の翌日。

俺は balanサーとして、急遽セブンスターズ（もうアムナエルこと大徳寺先生しかないが）の集会に呼び出された。そこで影丸理事長に告げられた言葉に、

『……何ですって？』

『いくら聞き返そうと無駄だ balanサーよ。これは決定事項。覆す事は叶わぬ』

『だからと言ってこれはないでしょうっ!?! 俺はあくまでアムナエルの代理にして
均衡を取る人
balanサー。審判役です。それが何で』

俺は心の底から理不尽な展開に怒鳴りつける。その内容ときたら、

『何でセブンス・スターズとして鍵の守り手と戦わなければならないんですかっ!?!』

友人達とガチでやり合えという、最悪の命令だったのだから。

怪しい教師は身を隠す

「……あんのクソ理事長っ!?!」

通信が切れるなり、仮面を取った俺の口から些か汚い言葉が出たのは許してほしい。何せ内容が内容な上、幻想体達には罪善さん以外留守番を頼んだので、この場には事情を知っているアムナエルこと大徳寺先生と罪善さんしか居ないのだから。まあ布で隠している下で、アムナエルが苦笑しているのは仕方ないが。

カタカタ。

「落ち着けつていうのは分かるけどさ罪善さん。なくにが『カミューラはセブンスターズを解任した後で敗北した。つまりその分の枠が一枠空いた訳だ。よってバランスーよ。お前をその代わりに任命する』……だっ!?! 俺はアムナエルの代理であつてカミューラの代理じゃないっての!?!」

「だが、多少こじつけではあるが筋は通っている。元々バランスーとしての君はこの戦いに最初からずっと関わってきた。あの方からすれば今更参加者としての立ち位置になつても変わらないという事だろう」

大徳寺先生はそう言うが、中々簡単には割り切れない。

それならカミューラに負けた明日香はノーカンではと反発したが、こちらはまだ除名する前だったからと普通に負け扱いだったし。

そして、最大の問題は、

「何で闇のデュエル前提なんだよ。俺そんなのやりたくないって」

この強制はおそらく、正直勝敗よりデュエルで得られるエナジーが狙いの理事長としては、闇のデュエルの方が得られる分が大きいからという事なのだろう。

普通のデュエルならまだ譲歩しても良い。手を抜くと勘づかれそうだから全力でいくが、残っている鍵の守り手は十代と万丈目、そしてクロノス先生だ。全力で行ったってまあ多分こつちが負けるだろう。アニメ的な大筋に影響があるとは思えない。

しかしだ。これが闇のデュエルとなると話が変わってくる。なにせ勝敗に関わらず、互いの肉体と精神にダイレクトアタックをかます戦いだ。おまけに敗者はもれなくともんでもない目に遭う。

タニヤやアビドス3世のように互いへのダメージを抑える事は可能だが、それにしただって普通のデュエルよりダメージはデカい。

俺が酷い目に遭うのは当然嫌だが、それを相手にするのも御免だ。幻想体達に頼めば多少は軽減も出来るだろうけど、闇のデュエル中に相手もとなると消耗が激しすぎる。どうしたもんか。そこに大徳寺先生からの提案が入る。

「ではこういうのはどうだろうか？ 指名されたのは君だが、特例として他のメンバーに協力を求めた場合そのメンバーも動くことが出来る。私が全員と戦おう」

「ですが……大徳寺先生。体調の方は？」

「心配することは無いさ。これまでの戦い。ずっと君に任せて身体の養生に努めてきたんだ。先のカミューラの件で多少消耗したとはいえ、今なら全力の闇のデュエルでも数度は耐えられる」

逆に言えば数度しか全力だと身体が保たないのか。これはマズいな。

「……それはいったん保留で。いくら何でも全員を相手取ったら大徳寺先生でもキツイでしょうからね。任せるにしても一人か二人。どうしても俺が一人は戦わないとマズいよなあ」

そうしてこれからの事を悩むこと暫く。どうにも妙案は浮かばず時間だけが過ぎていく。罪善さんが微妙に表情を変えて悩む様は少し愛嬌があつて良いが、今はそれどころではない。

「……つと。もうこんな時間か。そろそろ俺も部屋に戻らないと。大徳寺先生も明日の

授業の準備とかあるんじゃないんですか？」

ひとまず話を切り上げ、部屋に戻ろうとしてふとそんな事を尋ねる。だが、帰つてきた言葉はとんでもないものだった。

「ああ。それなら大丈夫。私は今日からしばらく身を隠す予定だからね」

「……はい？」

何故そんな事を？ その疑問は、その後少しして明らかになった。

「えっ!! 大徳寺先生が!!」

集会を終えて部屋に戻る途中、本棟の医務室に明日香や吹雪さん、そしてカミューラのお見舞いに足を運んだ時、部屋の中から十代の声が聞こえてきて咄嗟に中を窺う。

「ああ。僕が闇の世界に堕ちる事になったきっかけ。特待生寮の地下で行われたテストデュエル。あの時テストデュエルを企画したのは大徳寺先生だった。セブンスターズと何か繋がりがあるのかもしれない」

どうやら吹雪が正気に戻った事で、自分がセブンスターズになった経緯を思い出した

らしい。というか大徳寺先生の正体バレかけてるだけだ。……なるほど。だからさつきあんな事を。

「だけど……あの徳寺先生だよ？ 何かの間違いと、偶々企画したのが利用されたとかじゃない？」

「そうなんだなあ。どう見ても闇のデュエルに関係あるって感じじゃないんだなあ」

翔と隼人はそれぞれ疑問視している。これは普段の行いの結果だな。……まあ普段は割と情けない所が多い人だから、悪者だつて言われてもピンと来ないかもしれない。精々人に自分の嫌いなおかずを押し付けるくらいだな。

万丈目は何も言わず、静かに腕を組んで何か考え事をしている。そして十代はというと、

「吹雪さん。それはいくら何でも考え過ぎだつて。……よっしゃ！ じゃあ徳寺先生に直接聞いてみようぜ」

おっと。そういう流れになったか。ならここは、

コンコンコン。

「すいません。久城です。お見舞いにきました」

「んっ!? おお遊児っ！ 入れよ！ 今は鮎川先生出かけて留守番してんだ」

俺が中に入ると、そこにはベッドに横たわる吹雪に、横の椅子に腰掛ける十代、翔、隼

人のいつもの面々と万丈目。そして空いたベッドには、まだ目を覚まさない明日香とカミューラが横になっていた。

俺はさも今来ましたよという風に挨拶して空いた椅子に腰掛ける。

「吹雪さん。これお見舞いの品です。明日香の分も。……万丈目。皆の具合はどうだい？」

「ああ。天上院君は鮎川先生が言うにはじきに目を覚ますとよ。吹雪さんは少し疲れが溜まっているだけなので、一日休めば回復する。カミューラは……いつ目を覚ますか分からないらしい」

「そうか。十代に聞いたが激戦だったらしいな。……早く目を覚ますと良いな」

これだから闇のデュエルは嫌なんだ。明日香もそうだが仕掛けた側であるカミューラもこの有り様。失う物が多すぎるんだよな。

そのまましばらく世間話なんかをしていると、
ガララッ。

「ごめんなさいね。予想より会議が長引いちやって」

そこに鮎川先生が戻ってきた。なんだ会議だったのか。十代達はこれくらいなんでもないよと返し、そのまま席を立つ。

「さて。じゃあそろそろ行くか。吹雪さん。俺達ちよつと大徳寺先生の所まで行って、

直接事の次第を聞いてきますよ！」

「ああ。頼む。気を付けて行ってくれよ」

「お邪魔しました」

おっと。出発は良いが、先に手を打っておくぞ。

「ちよつと待った。大徳寺先生なら今居ないぞ」

「何だつて？」

「何でも、数日ほど出かけるつてよ。ここに来る前に会つてそんな事を言つていた」

嘘は言つていない。大徳寺先生は姿を隠すと言つていたからな。自分の部屋にはしばらく戻らないつもりだろう。まあ明日あの洞窟でまた会うんだけどな。

「げっ!? 数日つて……その間にセブンスターズが来たらどうすんだよ？」

「さあ。そこまではなんとも。今回こんな激戦だった訳だし、しばらくは襲つてこなくて踏んだんじゃないか？」

まあ正直今日明日で動こうとは思つていないしな。考える事もあるし、数日は少なくとも見積もつている。それがまとまったら鮫島校長経由で正式に挑戦状を送り付ける予定だ。

「マジかく。しかし困つたな。これじゃあ吹雪さんのことで話が聞けない」

「まあそこまで長くつて訳でもないだろうし、聞きたい事があるなら帰つてくるまで

待つたらどうだ？ それとも急用か？」

「急用つて言うか確認と言うか……仕方ない。という訳で吹雪さん。さっきの件を確かめるのは少し先になりそうです」

すみませんと頭を下げる十代だったが、吹雪は笑つて軽く手を振る。

「構わないさ。それにやはりこういうのは後輩任せではなく、自分で確かめるものだからね。大徳寺先生が戻り次第僕の方から問い質すよ」

その言葉を最後に、お見舞いもお開きとなつて皆で保健室を出た。この調子なら明日香も吹雪も問題なさそうだ。カミューラだけやや気にかかるが、こっちは気長に待つしかないな。

「だけど、セブンスターズもなんだかんだあと一人。対してこっちは出かけてる大徳寺先生を除いてもアニキ、万丈目君、それにクロノス先生の三人。もう楽勝じゃないっすか？」

「楽勝……とまではいかないだろうけど、こっちが有利つてのは間違いないんだな！」

レッド寮への帰り道。翔と隼人はそんな事を口にする。

そう思う気持ちは分からないでもない。俺が向こうに加わつたとしてもまだこちら

の優勢だ。だが、

「いいや。まだ分からないぜ。あのアムナエルつて奴。アイツ……間違いなくメチャクチャ強い」

十代はまるで油断していなかった。それは翔や隼人と違い、実際にカミューラの城でアムナエルを見たからだろう。

デュエルを見た訳じゃない。しかし佇まいやら錬金術師としての力諸々を見れば、デュエルの腕も相応のものである事は簡単に想像できる。

「勝つ氣でいるし、ワクワクもしてる。でもアイツからは何かそういうのとは違う凄みを感じた。なあ。お前もそう感じただろ万丈目……万丈目？」

そう歩きながら尋ねる十代だったが、万丈目は何か考え込んでいた。十代は少し不思議そうな顔をしたが、すぐに翔達との会話に戻る。そんな中、

「久城。ちよつと良いか？」

「んっ!! どうした万丈目？ 何かあったか？」

考え込んでいた万丈目が不意に俺に話しかけてきた。しかし、

「お前は………いや、何でもない」

一瞬何かを言おうとして、何かを躊躇う様に軽く首を振って先に行ってしまう。何な
んだ一体？ というか俺を置いていかないでくれよ!?

悩んだ後は立ち上がるのみ

さて。色々あつて部屋に戻つた俺なのだが、まだ妙案は浮かんでいない。それに、
キイキイ。キイキイ。

「……はあ。こいつらもいい加減どうにかしないとな」

俺の部屋に居座つている大量のコウモリ達。こいつらをどうするかも問題だった。

こいつらはカミューラの従えていた奴らで、城の崩壊を受けて行き場を失いこちらに流れ着いてきたのだ。その数は少なく見積もっても二十を超え、部屋の天井に逆さにぶら下がつて大いに圧迫している。

『しかもこれで全部じゃなくて、残りはカミューラの目覚めを交代制で待つているんだから泣かせるよね。忠犬ならぬ忠コウモリって奴？』

「その辺りは主人の教育の賜物つて奴なんだろうな。カミューラもアレはアレで残酷だけれど有能なタイプだったし」

しれっと出てきたディーに俺はそう返す。実際先ほど保健室に皆の見舞いに行つた時、こつそりと窓の外からコウモリが見張つていた。見えないだけで他にも沢山居た筈

だ。

しかしこの部屋のコウモリ達はよく躡けられていて、フンなんかはほぼ全て外でするし、飛ぶ時以外はあまり鳴かないから隣の部屋の迷惑にならない。

吸血コウモリだったらマズいなど不安だったが、意外な事にこいつらは果物なんかを好んで食べた。虫なんかも食べるし意外と雑食性らしい。まあ一斉に買って来たリングに群がってシナシナにしてしまったのはちよつとビビったが。

『しかし君もお人好しだねえ。コウモリ達なんか追い出してしまっても良いのに、わざわざ住まわせるなんてさ』

『ピカピカさん！ 追い出すなんて可哀そうだよ。遊児お兄ちゃんは優しい人だもん。追い出したりなんかしないんだよ！』

どこかからかうように言うディーに対し、精霊状態のレティシアが目をウルウルさせて止めに入る。

地味にレティシアこいつらを気に入っているんだよな。二、三羽優しく撫でたり、手ずから果物を食べさせたりと微笑ましく世話をしているぐらいだ。……抱えられているネクがコウモリから威嚇されるのはさておいて。

ただレティシアはそう言うけど、俺はそんな良い人間じゃないんだよな。

「悪いけどレティシア。いくら躡けられているからって、ずくつとこの部屋に置くわけ

にはいけないよ。それにこいつらもカミューラが目覚め次第そっちに戻るだろうしね」
正確に言えば、今ここに押しかけている事自体、主人の敵である俺を見張っているというのがメインだと思っただけだな。

下手に追い出すとこいつら外で何するか分からないし、全体の半分以下とは言えこっちに釘付けに出来るのならそれはそれでアリだ。まあレティシアに言っただけに、あまり長い間は置いておく気もないけど。

何故なら食費も馬鹿にならないからなっ！ あと部屋がこれ以上手狭になったらキツイし。

俺の言葉を聞いてレティシアもちよつぱり顔を俯かせる。……まいったな。こんな小さい子を悲しませるのはマズい。なので、

「なくに。心配は要らないさ。今日明日くらいはここに置いてもいいし、明日は大鳥達に話してどうにか森に住まわせてもらえないか頼んでみよう。侵入者でなく住人扱いになれば、森で自分達で暮らしていくのも楽勝だろうからねこのコウモリ達は」

『そう言つて、なんだかんだコウモリ達の世話を焼くのが遊児君なんだよねえ』
「うっさい」

軽くしつしと手を振ると、デーイーは笑い声を上げながら姿を消した。まったくもう。

……しかし本当にどうしたもんか。俺はどつかりと椅子に腰掛けて頬杖を突く。

今回の件。一番平和的な展開はそもそも俺がデュエルをしない事だ。闇のデュエル
断固反対。

だがそれは問屋が卸さない。理事長がわざわざ俺を指名した以上、おそらく俺がやらなければ何らかのペナルティが入る。これはアムナエルこと大徳寺先生に代わつてもらったとしてもおそらく同じだ。

タイタンの様に闇の世界に堕ちるだけなら脱出の手段はあるが、俺の知らないそれ以外の何かだったら大変な事になる。なので戦い自体は避けられない。

次に良いのはデュエルを開始してすぐ俺が降参する事。少なくともデュエルはした訳だし、やらないよりはペナルティも少ないだろう。

実際これまでのタニヤやアビドス3世、黒蠍盗掘団の例を見るに、負けただけならそこまで罰も酷くはなさそうだ。

皆消える時も落ち着いたものだつたし、苦しいという感じでもなかった。カードの精霊と死者なので生きている俺とは勝手が違うかもしれないが、そこはまあ良い方向に行くと考えよう。

だが、この二つの案には大きな問題がある。それは、

「……十代達の強化をどうするか。そこが問題なんだよなあ」

何せセブンスターズはぶっちゃけた話前座。全て終わった時点でおそらく理事長本人が出張ってくるのはほぼ確実だ。

これまでちよこちよこ聞き出してきたディーの反応。及び大徳寺先生の話やアニメの流れをメタ視点で推測すると、ほぼ間違いなく理事長が一年目のラスボスと言える。その実力は未知数だが、セブンスターズを従える者がまさかセブンスターズより弱いという事もないだろう。最低でもガチの大徳寺先生と同等以上と考えた方が良い。

その上これまでの事を考えるに、強い闇の力を有している事も間違いない。それこそ耐性の無い人間では戦いにすらならないというのが大徳寺先生の言だ。

そんなのが来るとなると、こちらも対抗できる人材をぶつける必要がある。そう。精霊使いである十代と万丈目だ。おそらくラストはどっちかのタイマンか、もしくはマンガ版のようにタッグを組んで戦うとかそんな流れだと勝手に予想する。

だが本来の流れが俺が居る事でどう変わっているか分からない。ずっと審判役に徹してきたから大丈夫だとは思いますが、大筋がどこかズレて最悪原作より弱くなっている可能性もある。

つまり下手をするとラスボスにまさかの敗北……というオチもあり得る訳だ。そうになると非常にマズイ。三幻魔なんてものが復活して、俺が生き残れる未来があまり想像

できない。

ならどうするかというと、一番手っ取り早いのはそれぞれに実戦を積ませる事。少しでも闇のデュエルに慣れさせる事だ。それも自力でギリギリ乗り越えられるのが一番良い。

俺がデュエルを放棄する事でその機会を奪うとなると、流星に少し考えてしまう。

そしてもう一つの大問題。大徳寺先生の身体のだ。

「全力のデュエルは数回まで。あの人の事だから、もう戦えないって意味じゃなくて本気で命を擦り減らして数回って意味そうなんだよな」

そもそも俺がバランサーとして入った理由。それは少しでも、いや……せめて今の一年生が進級するまで大徳寺先生に生きていてほしいからだ。

全力を出す度に擦り減らすホムンクルスとしての寿命。それも考えると下手に頼れない。かと言って大徳寺先生自身が最終的に、十代達が自分に勝って理事長に挑めるかどうか身体を張って確かめる気だつてのは分かる。となると大徳寺先生の負担を減らすには、

「やっぱ俺がその分やらなきゃダメか」

ちよびつとだけ、遊戯王世界らしからぬが警察などの国家権力に頼るという手も考えた。しかしこういう場合、権力者が裏から手を回しているというのはお約束。何か確た

る証拠があつてももみ消される可能性がある。

原作キャラでいう海馬社長クラスなら真つ向勝負でも何とかかなりそうだが、今の今まで動きを見せないという事は何かしら動けない理由でもあるか、或いは対処する気が無いかだ。

要するに外からの救済措置は無し。実力で何とかする正規ルートしか使えないという訳だ。

出来るのか？ 俺にそんな事が？

ずっとそこで悶々している。やるべき事とそれに向けて出来る事はもう頭の中にあるのだが、他にもっと良い方法があるんじゃないかと理由をつけて肝心のその一步を踏み出す決心が出来ない。

『まくた悩んでるね。考え過ぎは君の悪い癖じゃないかい？』

そんな時、またもやデーの光球が現れてどこか呆れたような口調で話しかけた。

「悩んじや悪いか?」

『君の場合答えが出ないんじやなくて、答えは出てるけどどうにかギリギリまで理由をつけて逃げたい派だからね。そろそろグチグチ言つてないで腹括つたら?』

「……やりたくないなあ」

普通に見抜かれてるから嫌なんだよこの自称“元”神様。

『しようがないな。じゃあまくた前みたいに、幻想体達に後押ししてもらおうかい?』

その言葉に、カードから次々幻想体達が精霊化して現れる。……そうだな。大徳寺先生からセブンスターズの事について尋ねるかどうか悩んだ時も、こんな風に皆に後押ししてもらったっけ。

『遊児お兄ちゃん! 笑顔! 笑顔だよ!』

『ふん。まあ辛気臭い顔をしているとレティシアが悲しんでこつちまでとぼつちりを食うのでな。出来れば笑っている。まあ私が完全復活した暁には笑えない状況にしてやるがなっ!』

『大丈夫だつて管理人さん! 管理人さんもし動けなかつたら、ワタシ達魔法少女が何とかしてみせるから! だつてそれが正義の味方の役目だもの! そうだよねセイちゃん?』

レティシアが、ネクが、ココロがそう口にする中、セイさんがゆつくりとこちらに実

体化して歩いてくる。

『まあ最悪の場合だけだね。けどどうしてもその場合力技になるから、アナタが望むような良い結末になるかは微妙な所。……それが嫌なら自分で立つ事ね。アナタの騎士が優しく言っている内に』

「優しい……のかなこれ？」

『優しいわよ。優しくなかつたらこうして待つていたりしないもの』

セイさんはそう言つて静かに笑い、他の幻想体達も何も言わずに待つていてくれる。

まいったな。ウチの幻想体達が頼りになり過ぎる。悩んでいたら後押ししてくれるし、最悪止まっても解決してくれそうな勢いだ。だからこそ、

「……よし。腹括つてやるとするか」

俺はしっかりと椅子から立ち上がる。あんまり頼り過ぎるとそれはそれで良くないからな。ここは幻想体達には後押しだけにしてもらつて、やはり自分で動かないと。とは言え、

『やつとやる気になつたね。それで？　まずはどう動くんだい？　早速また大徳寺君と打ち合わせでもするのかい？』

「ああ。それなんだがな。前々から考えていた手があつたんだ」
ただ考えてはいたけれど、やはり一人ではどうしても限界がある。なので、

「ちよつと正体バラして手を貸してもらつてくるよ」

『……ハイ?』

さあて。これから忙しくなるぞ。

話し合いは腹を割って



「じゃあ天上院君。本当に安静にしているんですよ」

「分かっていますよ！」

すつかり夜も更けた医務室。鮎川先生が去っていくのを見て、僕はふうと息を吐きながらベッドに再び横たわる。

ちらりと隣のベッドに目を向ければ、そこには僕の大切な妹明日香が。その更に奥にはつい先日死闘を演じた（正確には彼女の影だった）セブンスターズの一人、カミューラが横たわっている。

幸い二人共命に別状はなく、明日香に関しては明日には目を覚ますとの事。カミューラはしばらく目覚めないらしいが、こちらに関しては今会ってもどんな顔で会えばよいか分からないのである意味丁度良いのかもしれない。

僕自身も戦いで疲労し、今日一日はベッドで安静にするようにとの診察結果を受けた。と言ってもそれはこれまでの心神喪失状態の事もあってらしいが。

ここしばらく、僕は意識こそあれどこか夢の中に居たようだった。それがカミュー

ラの居城で襲撃を受けた時、ひよんなことから意識がはつきりとしだした。

友人のカイザーこと亮。そして鍵の守り手達や幻想アブノーマリテイ体と名乗るカードの精霊達。そして妙な話だけど他のセブンスターズ達の協力もあり、僕たちは戦いの末無事カミューラを倒して明日香を取り戻した。

しかし、こうして意識がはつきりした事で、これまでの自分に起きた事を少しずつ思ひ出してきた。

かつてあの特待生寮にて、大徳寺先生に呼び出されて行ったテストデュエルの最中、突如闇の世界に引きずり込まれた事。

そしてそこで行われた、まるで地獄のような闇のデュエルの日々。何があったのかは臆気ではつきりとは思いつき出せないが、その恐怖は今でもこの身に刻まれている。だが、

チャリツ。

僕は胸に掛けたペンダントをジッと眺める。

これをどうやって手に入れたのかはもう思い出せない。気が付いた時にはこれの半分を胸に提げている、カミューラの居城において鍵の守り手の一人十代君の持っていた分と重ねる事で一つに戻った。

闇のアイテムではあるがカミューラの力に対抗し、襲い来る罠からも何度か救われた。それに何より、何故かこれを見ると胸の奥が少し切なくなる。

何か大切な、大切な何かを忘れているような。誰かと何かを約束したような。そんな気が。」

「……ダメだ。思い出せない」

今覚えている事と言ったら、これまでのダークネスとして活動していた時の臍気なもの。

その中でも数少ないハッキリと覚えているものは、

『……!? 貴様っ!? まさか最初からこれを狙ってっ!?』

『悪いな。勝負はここまでだ。互いに降参という手が使えない以上、引き分けに持ち込むしかないだろう? ……かなり痛いと思うがそこは我慢しろよっ! 放てっ!』

バランスー。ダークネスだった自分と戦い引き分けてみせた男。

アムナエルの代理を名乗り、カムミューラとの戦いでは調整役として共に戦った。

掴み所がない奴だったが、仮面の奥から感じる熱さは間違いなく本物だった。……なので、

「誰かが僕とカムミューラの口を塞ぎに来るかもとは考えていたが、まさか君が来るとは

意外だったな。バランスー」

いつの間にか部屋の片隅で、薄ぼんやりとした闇を纏った調整役に、僕は油断なくそ
う尋ねた。

たえ何があろうとも、今度こそ明日香は必ず守つてみせる。

◆◆◆◆◆

うくん。困った。

俺はベッドから身を起こす吹雪に対し、どう切り出したものかと思ひ悩んでいた。

先程腹を括つて早速行動を開始した俺だが、やはりあまり人目につきたくないからと
は言え、鮎川先生が帰つたのを見計らつてこっそり乗り込んだのはまづかったか。

だつて吹雪物凄くこちらを警戒しているもの。

さり気なく明日香を庇うように体勢も変えているし、脇に置かれた机のデツキにチラ
チラと目が行っている。いざとなつたら応戦する気満々だ。

まずは口封じ云々という誤解を解かなくては。

『夜分遅くに失礼する。……そう警戒しないでほしい。この度は話し合いに来たのだ。
口封じなどという事は一切するつもりはない』

「この状態で警戒するなという方が無理な話だと思っけどね。ならその闇は何だい？」
尚も警戒を解かない吹雪。しまったな。さつき大徳寺先生に計画について話した時、この近くまで先生に跳ばしてもらったのが裏目に出た。

この能力移動には便利なのだが、出た直後は闇が身体にこびりついてとにかく見た目が悪いんだよな。放っておけば消えるけど。

『些か見た目が悪いのも許してほしい。しかし急な事のためそちらに回す余裕がなかったことは謝罪する』

俺が静かに頭を下げると、吹雪はほんの僅かに困惑しているようだった。

『重ねて言うが、口封じなどではなく話し合いに来たのだ。どうか話を聞いてもらえないだろうか？ 敵対心のない証として……』

俺は懐から自分のデツキケースを取り出すと、吹雪のデツキの前に置く。

『この通り。今の俺は丸腰だ。戦う気などない。だから頼む』

そのまま頭を下げ続けて少し。すると、

「……はあ。分かったよ。デツキがなくなるとも君なら精霊を呼び出す事も出来るだろうか
ら関係はないが、少しだけ話を聞くとしよう」

『ありがたい』

許可も得たので、俺は明日香達を起こさないように静かに椅子を持ってきて座る。

しかし精霊か。カミューラの時はあくまで別勢力として接していたので、俺が個人的に精霊に手を貸してもらえないのはわからないはず。つまり、

『やはり、ダークネスの時の記憶が』

「ああ。断片的にだけだね」

ダークネスと戦った時にバツチリ雪の女王を見られているからな。思い出してきたと考える方が自然だ。

だが、それが分かったという事は。

「話し合いの前に聞かせてほしい。バランサー。君は一体どちらの味方……いや、違うな。一体何をしようとしているんだい？」

まあそこが疑問として出るよな。

あの時雪の女王は、普通に幻想体という精霊の一団としてカミューラ戦に加勢していた。俺とは初対面として振る舞っていたがそれは不自然だ。

また、雪の女王がそうである以上、幻想体全員が俺と繋がりにあるという線もある。

それにしても幻想体はあの場にいた全員を助けた。既に鍵の守り手でもセブンスターズでもない吹雪さえもだ。

この行動は傍から見たら実によく分からないものだろう。

『俺は balanサー。この戦いがスムーズに進むよう動く調整役というだけの話。……しかしそれだけでは納得出来ないだろうから、その点も踏まえて話をさせてもらいたい』

『その通りだ。なので……貴方に誠意を見せるという意味合いも兼ねて、この長話に邪魔な仮面を外そうと思う』

「何だつて!?!」

驚く吹雪の前で、俺は balanサーとしてのペストマスクをゆつくりと外していく。そして、

「……ふう。やはり普通に話す時はこちらの方が気が楽だ。先程お見舞いに行った時以來ですね。吹雪さん」

「なっ!?! 君は!?!」

吹雪は俺の顔を見て驚いている。何だかんだセブンスターズの中で唯一俺の素顔を知らなかったからな。その前に負けたから。

さて。何から話すでしょうか。何せ協力者になってもらうのだから、こちらまでできる限り腹を割って話さないとな。

閑話 大体3000文字で分かるこれまでのあらすじ

やあ。俺の名前は久城遊児。中身24歳だが肉体年齢15歳にされたお兄さんだ。

俺はある時、仕事中に死にかけた所をデーという自称「元」神の胡散臭い奴に命を助けられた。

いや、正確に言えばまだ助かつてはいないか。デーは死ぬ直前で時間の流れをとんでもなく遅くしてこう聞いてきた。『君は異世界転生という奴を信じるかい?』と。

『君に、これから二つの選択肢を挙げよう。一つ目はこのまま流れに身を任せること。そのまま死んじやうけど、君の魂をちよつと弄つて別の世界に送る。今流行りの異世界転生つて奴だよ』

『二つ目は僕の暇つぶしに付き合つてもらおう事。課題を出すからクリアして欲しい。無事クリア出来たら……そうだね。この状況から君が死なないように上手いこと助ける。課題に失敗したらそれまでだ』

滅茶苦茶な二択を迫られたもんだが、まだ死んでないのに異世界転生というのも筋が違う。まずは今をしつかり生き抜いてからだ。

という事で二つ目を選んだら、何故か若返った状態で遊戯王GXの世界（ティードゥシミュレーション）に送り込まれ、デュエルアカデミアを卒業しろなんて課題を出される。

使えるデッキは俺の物ではなく、アブノーマリティ“幻想体”と呼ばれる別世界のキャラクターをモデルにしたデッキ。それ以外のカードは数枚の入れ替えしか許されない縛りプレイな上、カードの大半が精霊化出来るという問題まで抱えていた。

デッキに慣れるためティードゥとの百連戦デュエルを敢行し、餓別だと特製のペンダント（俺にこれから縁が出来る何枚かの幻想体をモデルにしたらしい）を受け取り、この世界への第一歩を踏み出す俺。

しかしこの学園での穏やかな卒業を目指すのだが、ここは毎日が刺激的過ぎた。

なにせ俺のクラスは原作主人公である遊城十代と同じオシリスレッド。さらにカードでイベントの席順から世界の命運まで決まる遊戯王世界だ。

肝試しで今は使われていない特待生寮に行ったら闇のデュエリストとの戦いに巻き込まれ、冬休みはカードの精霊と闇のデュエルをし、無印主人公武藤遊戯のデッキを盗んだ奴と戦ってデッキを取り戻したりもした。それに、

『ねえねえ遊児お兄ちゃん。誰とお話してるの?』

へぴへぴっ! あなたのお供、ヘルパーロボットだよ! 何をお手伝いしようかな?」

「ああ。あとで話すから、今はちよつと離れててなレティシア。ヘルパーも今は大丈夫だから待機だ。罪善さん。二人を頼む」

カタカタ!

この通り、原作では非常に珍しい筈のカードの精霊だが、俺のデッキからは割とちよくちよく出てくる。短時間であれば普通に実体化して物理的に干渉できるので、一歩間違えば大惨事だ。

幸い温厚かつ一応俺の言う事を聞いてくれる精霊が多いので何とかなっているが、これから何が出てくるかと思うと胃が痛い。

おまけにここは俺が知っているマンガ版ではなくアニメ版の世界。キャラクターの大まかなプロフィールは知っているが、これから何が起こるかまるで分からない。

だけど、先が分からないなんて人生では普通の事だと割り切り、俺はどうか危険だけどそれなりに楽しい学園生活を過ごしていた。

しかし当然アニメならではのイベントが起こる訳で、俺は厄介な事件に巻き込まれ

た。後にディーから聞いたが、通称セブンスターズ編という事件だ。

学園の地下にある七精門という七つのロック。そこに封印されているカードこそ、無印にある神のカードを明らかに意識したと思われる三幻魔と呼ばれるカード。

無闇に解き放つたら世界が大変な事になるといふ触れ込みのカードを、セブンスターズとかいふ集団が狙っているという。

学園側はそれに対抗して七人の七精門の鍵の守り手を選出し、迎え撃つという計画を立てた。我らが主人公十代や、俺の押しキャラである万丈目もその一人だ。

……えっ!? 俺はどうなんだって？

俺は………色々あつてセブンスターズ側に着くハメになつた。

だつてしょうがないだろ!? セブンスターズの一人、錬金術師アムナエルの正体がオシリスレッドの寮長大徳寺先生で、もうその身体は余命いくばくもなく。精神を自分の作つたホームクルスに移し替えて延命していたけどそれも限界。

しかしセブンスターズの黒幕であり自分の支援者であつた影丸理事長を諫めるべく、表向きは従いながらも理事長に対抗できるよう十代に試練を課して鍛えようとしていたのだから。……自分の残り僅かな余命を削つて。

流石に命を懸けた覚悟を止める訳にもいかないが、少しでも長生きしてほしいのも事実。仕方なく俺は正体を隠し、アムナエルの代理のバランスと名乗って学園側との戦いの調整役をすることとなった。ようするにスパイ活動だ。

個性豊かなセブンスターズの面々にはかなり振り回された。

何故かダークネスと言う名前の闇のデュエリストになっていた天上院吹雪とは、入団試験で闇のデュエルをさせられ酷い目に遭った。

三幻魔ではなく婿探しが目的だったアマゾネスのタニヤには、すっかり恋仲になった三沢とのイチヤイチャを見せつけられた。

腕は良いがどこか雑な黒蠍盗掘団は、デュエルではなく直接鍵を奪ったり七精門を爆破して壊そうとしたりとやりたい放題。

古代エジプトの生涯無敗とされた王アビドス3世は、実はデュエルの腕はあんまりだったので学園に短期留学させて一から鍛え直した。カイザーと引き分けまで行ったのはスパイとしてちよつとやり過ぎたかもしれないが。

自称から本物の闇のデュエリストになった仮面の巨漢タイタンは、何故か罪善さんに浄化されてすっかり真っ白の完璧体に。穏便にセブンスターズを辞めるべく、一か八か

の大芝居を打った時は苦勞したな。

そして、吸血鬼一族の末裔カミューラ。こいつがこの濃い面々の中でも一番の曲者だった。

なにせ決戦場に城を造った上、秘密裏にセブンスターズを裏切つて別ルートから三幻魔の力を独り占めしようとしたのだから。

おまけに決行は学園祭の日。祭りの中で幻想体達が普通に実体化し、マンガ版の重要人物である元世界チャンプ響紅葉がやってきたりとお祭り騒ぎ。

鍵の守り手、セブンスターズ、幻想体の一日限りの共同戦線により、どうにかカミューラを追い詰めたと思つたら、トドメは暴走する魔法少女の乱入と言う特大のハプニング。

……学園祭が無事に終わったのがもう奇跡レベルの激闘だった。

結果もうセブンスターズで残るはアムナエルのみ。後は最後に直接デュエルで十代の仕上がりを見届けるだけという所で、バランスーにとんでもないお達しが理事長から降った。

なんとカミューラの除名によって空いた席に座つてセブンスターズとなり、残った鍵

の守り手と戦えと言うのだ。それも闇のデュエルで。

前々から考えていた手はあるが、どうしても一人では限界がある。どうしたものかと頭を抱える俺だったが、幻想体達に背中を押されて遂に腹を括る。そして、

「ちよつと正体バラして手を貸してもらってくる」

という訳で、俺は早速その一人目である天上院吹雪の所に向かい、仮面を外して事の経緯を話すことになった。

『改めて書き出してみると、なんとも滅茶苦茶だね久城君』

「言うな。自分でもそう思ってるから」

打ち明け話と耐久実験

「……ああ。疲れた。一、二時間くらいのお筈なのに、体感で数か月くらい話し続けたみたい疲れた」

『まあ内容だけなら一年近い期間の話だった訳だからね。あながち間違つてはいないか。お疲れ様』

珍しく労わるようなディーの言葉を聞きながら、俺は吹雪との話し合いを終えて夜道を帰路に就いていた。ちなみに行きはアムナエルに跳ばしてもらったのだが帰りは徒歩だ。

結局吹雪には俺のこれまでの事、おおよそ十代や万丈目に話したものと同程度を説明した。幻想体の事とかな。そして……大徳寺先生の体調の事や、代理としてセブンスターズに参加していたという事も。

吹雪も色々と言いたいことはあつただろうが、そこはぐつとこらえて最後まで話を聞いてくれた。境遇を考えれば怒り狂つてもおかしくはなかつただけだな。そして、『だけど本当に良かったのかい？ 吹雪君への頼みはあれだけで？』

「ああ。体調如何ではいざという時の戦力に数えても良かったんだが、あの状態じゃ厳しい。ただでさえ完全に復調していない所にこの前のカミューラ戦だったからな」

正直吹雪は見た目以上に疲弊していた。本当ならこうして長い話をするのも避けた方が良くらいで、途中途中で休憩を挟んだくらいだ。

そんな俺が何を頼んだかと言えば、

チャリっ！

この吹雪が身に着けていたペンダント。これをしばらくの間貸してもらおうという事だった。

『しかし考えたね。闇のデュエルで発生するリアルダメージ。それを闇のアイテムであるそれで中和しようなんて』

「まだ試した訳じゃないから確証はないけどな。ただ、これは半分に分かれた状態でもカミューラ相手にそれなりに効果があった。なら完全な状態なら或いはって思っただけだ」

これで上手く行けば、懸念だった対戦相手へのリアルダメージも軽減できる。自分への分はこのバランス衣装と自前のペンダントで防げるからな。

話し終えて吹雪に頭を下げまくり、幾つかの条件付きで貸してもらえた。

簡単に言うとう、ペンダントは必ず返す事。半分は十代の物なのでそちらにも許可を取

る事。そして、近い内に大徳寺先生と腰を据えて話す機会を作る事の三つだ。

『大徳寺先生……ボコボコにされなきや良いんだだけどね!』

「楽しそうに言うなよな。……實際吹雪からしたら完全にアウトだし、大徳寺先生もそ

この所は分かっているだろうが、どっちにしてもそれはこの戦いが終わってからだ」

だから、戦いが終わっても長生きしてくれよな。大徳寺先生。そうじゃなきやわざわざ代理をかつて出た意味がないんだから。

「さあ。明日からも忙しいぞ! 決戦までにどれだけ準備を出来るかが勝負だ!」

諸々の根回しにデュエルの練習。いざという時の為の仕込み。やるべきことは沢山あるからな。

翌日。

「……別に僕は怒っていないよ。この寮から出られない僕において学園祭を楽しんできた事も、楽しみにしていたお土産もすっかり忘れていた事も、全然怒っていないからね」
「本当に申し訳ございませんでしたっ!」

俺は茂木の寮にやってきて平謝りしていた。

だって茂木の奴、いつもはふにやって顔してるのに今はちよっぴりキリツとしてるも

の。横に浮いているもけもけもカードの『怒れるもけもけ』みたいにしめつ面して居し。

「俺とした事が約束を忘れるとはとんでもない失態を。埋め合わせは必ずする。この通りだ」

『お祭りの屋台で買ったたこ焼きとか皆で食べちゃったの。ごめんなさい』

『何故私まで……まあこの奴らに悪印象を与えるのもマズいか。悪かったな』

ペコリ。

伏し拝むようにしばらく平身低頭し（レテイシアやネク、テデイもしょんぼりしながら謝って）、しばらくしてどうにか茂木も機嫌を直してくれる。

「まったくもう。……それで今日はどうしたの？ いつもなら十代や万丈目君と一緒に来るのに。またセブンスターズって人達と戦っているの？」

「ああ。その事なんだけどな」

茂木には、以前から大雑把にセブンスターズの事を話していた。まああくまで大雑把になので、茂木からしたら少々大規模かつ過激な道場破りを十代達が迎え撃っているぐらいにしか思っていないかもしれないが。

しかし、今回俺が単身来たのには当然理由がある。

「実を言うと……俺もセブンスターズなんだ」

「へえ。そうなんだ」

結構気合入れてぶつちやけたら、そんな風にゆるりと返された。気が抜けるなあ。

「という事があつて、数日中に俺はセブンスターズとして戦わなきゃならなくなった」

「なるほど。そんな事があつたんだねえ」

「本当に分かつてんのかな」

そうして俺は茂木にこれまでの事情を説明した。昨日の吹雪に続いてこれなので、何となく説明が上手くなっている気がする。……気がするだけかもしれないが。

ただ話してる間、レティシアや他の幻想体達が普通に茂木の所の精霊と遊んでいたの
で絵面だけ見ればほのぼののだ。

「それで？ 僕に何をさせたんだい？」

「話が早いな。実は……これの性能を試したいんだ」

俺は机の上に吹雪から借りたペンダントを取り出した。

「これは闇のアイテムで、持ち主を守る力がある。だけど実際どこまで防げるのかは確

かめていない。自分で持つにせよ誰かに使ってもらうにせよ、ぶつつけ本番って訳にはいかんだろ。だから、俺が実験台になる」

「それで僕のもけもけ達に協力してほしいって事？ それは良いけど……君がやるの？

大丈夫？」

何がだと聞くと、茂木はほんの少しだけ普段より真剣な視線を向ける。

「知ってるよね？ もけもけ達の力をまともに受けたらどうなるか。ペンダントの力を確かめるなら、受ける君はどうしても普段より自分から耐性を抑える必要がある。一つ間違ったら」

「心配してくれるのか？ ……ありがとうな。だけど大丈夫だ。抑えると言っても少しずつ下げて経過を見るっただけだし、本当にいざとなったら」

『私が力づくで正気に戻すから。安心なさい』

その言葉と共に、セイさんがフツと精霊化した状態で俺の横に立つ。それに、カタカタっ！

『大丈夫だよ！ 私もえいって遊児お兄ちゃんを立ち直らせてあげるのっ！』

『ふっふっふ！ これは合法的に正気をなくした我が生け贄遊からエネルギーを吸収するチャンスなのでは？ なので安心してもけもけになるが良……アイタタタっ!? 悪かった！ ちょびっつとしか吸わぬからレティシアよ。力を緩めるのだったっ!』

『ふむ。まあ普段から貢物を欠かさぬ臣下を労つてやるのも女王の務めか』

『私はカウンセリングは専門外だが、魂を静めるだけなら多少は役に立てるかもしれないな』

『うゝん。よく分からないけど、そういうのつてこのステッキで思いつきり叩いたら治るかな?』

罪善さんを始め、幻想体達が精霊化して最悪の場合に備えて待機してくれる。

「この通り。いくら脱力したつてすぐにシャキッとさせてくれる頼りになる皆が付いている」

「そうだね。そうだった。……分かったよ。友達の頼みだ」

茂木もこれなら大丈夫だと判断したのか、自分のデツキからもけもけのカードを取り出す。

『もけもけ〜!』

「もけもけも珍しくやる気を出しているみたい。じゃあ、始めようか」

「よろしく頼むぜ!」

30分後。

「本当に大丈夫かい久城君？」

「ああ。この調子ならまだまだ行けそうだもけ。もう少しもけもけの出力を上げてくれもけ」

『……ちよつと影響を受けてるわね』

『引つ叩いたら治るんじゃないセイちゃん？』

「この調子で、実験はしばらく続いたもけ。」

効果実証と夜の訪問者

「今日は付き合ってくれてありがとうな！ 茂木」

「いやいや。僕は大了たことはしてないよ。頑張ったのはもけもけ達の方だからね。お礼ならそっちに」

「大了た事さ。散々デュエルに付き合ってくれたじゃないか。それにもけもけ達も。皆本当にありがとうよ！」

吹雪から借りたペンダントの効果を試す実験も終わり、俺は茂木達に頭を下げた。

なにせ実験はかなりの時間続いたからな。普通に行っている時やデュエル中の効果の違い、出力の大小によってどの程度効き目が違うのか？ 時間経過による反動なんかも調べるとなるとどうしても時間が掛かる。今日が休日じゃなかったらとてもできなかった。

さらに言えば実験の仕様上、細かく数値にして測定できる機材の当てもないし、頼りになるのは基本的に俺の体感のみだ。

本来ならそれなりの人員を集めてやる事なんだが、精霊関係に耐性がある者自体限られているし防護服もそう多くない。

おまけに十代や万丈目には出来れば知らせたくない。もうすぐ決戦だつてのに、実験で下手に精霊の力を消耗されでもしたら困る。なのでどうしても人手は最低限になる。

実験中何度気分がふわ〜ツとなつたり、いつの間にか語尾がもけになつたか分からない。一度など出力を完全に間違えて、気が付いたら罪善さんの光を浴びながらセイさんに平手打ちを食らつて正気に戻されていたなんて事もあつた。

『まったく。私の加護まで一時的に外して実験をするのだもの。途中またあのだらけ切つた状態になるんじゃないかとひやひやしたわ』

「ゴメンつて。悪かつたよ」

ちなみの場合によつてはココロに引つ叩かれていたと聞いて青ざめたのは内緒だ。ココロの城での暴れっぷりは身をもつて知っているからな。まだセイさんの方が多分優しい。

『あつ?! もう終わったの? レティシアちゃん! そろそろ行くよ〜!』

『ちよつと待つてココロお姉ちゃん。じゃあ皆! またね!』

別の部屋でそろそろ終わると察したココロが、レティシアを連れてこつちにやつてきた。

実はレティシアとココロは結構仲が良い。相性が良いと言うべきか。

『ねえココロお姉ちゃん！ お姉ちゃんはセイお姉ちゃんと同じ魔法少女っていう人なんだよね？ 良いなあ。キラキラしててふわふわで、それでいて強くてカツコいいんだもの！ それにステッキからピカピカできれいなお星さまを出したりできるんですよ？ すごいなあ』

『ふふん！ そうでしよそうでしよ！ 魔法少女は愛と正義を守るすごい人なんだから！ ……レティシアちゃんも色々な魔法が使えるんだってね？ ちよつと一緒に練習してみない？ 簡単な技だったら教えてあげる』

『良いのっ!? やったあ！』

と、素直に相手を称賛するレティシアをココロもすっかり気に入って、別の部屋で一緒に簡単な魔法（手の平からハートの形の弾を出してお手玉したりとか）を他の精霊達に見せてほっこりさせたりしていた。

ちなみにネクは嫌そうな顔で練習に付き合わされていた。やりたくはないがココロにうっかり悪党認定されたらマズイと踏んだのだろう。そして失敗して光弾を頭にぶつけて叫んでた。

「しかし、これならなんとかなりそうだ」

俺はもう一度吹雪から借りたペンダントを見る。

その効果はかなりのもので、体感で言うところとデーターから貫つた物とほぼ同じか僅かに劣るくらい。これに関しては自称「元」神らしいデーターのお手製を相手にほぼ同じという効果の高さを評価すべきだろう。

これなら闇のデュエルでもしつかりリアルダメージを軽減してくれる筈だ。それに、実験中にこのペンダントには別の効果もあることが分かったしな。今すぐ色々出来る効果じゃなかったが、将来的には色々と応用が出来そうだ。

「じゃあ茂木。それにもけもけや他の精霊達。今日は本当にありがとうな。セブンスターズの件が粗方片付いたら今度こそお土産をきちんと持つてくるからな! では」

一つ用途は立ったがまだやることは多い。早速次に向かうべくここを立とうとした時、

「あつ!! ちよつと待つておくれよ久城君」

「ん? どうした?」

急に茂木に呼び止められた。何か忘れものでもしたかな?

「君がやろうとしている事はさつき聞いたよ。だけど、それには手が足りないんじゃないかい?」

「それは……」

正直茂木の言う通りだ。

ここがアニメ版の世界である以上、放っておいても最終的には主人公十代が解決するだろう。だが、その過程でどんな被害が出てもおかしくない。それが闇のデュエルだ。マンガで読んだだけではなく、実際に体験することですいぶんと思い知らされた。

俺の安全が第一なのは今でも変わらないが、俺の友人や学園の奴らも出来れば被害に遭わないのが一番だ。そのために色々と策を練って人を頼ってはいるが、それでもまだ万全とはまるで言えない。それを見透かしたように、

「ふわあく。……僕に、他にまだ何かできる事はあるかい？ 例えば……いざという時の戦力とかね」

大きな欠伸をしながら、いつものように気負いなく茂木は眠たげな眼をしてそう言った。



夜。十代達の部屋にて。

「『サンダー・ジャイアント』でダイレクトアタックっ！ ……にしても、どこ行っちゃったんだらうな？ 大徳寺先生」

夕食を終え腹ごなしにテーブルデュエルをする中、十代は同室の二人にそう口にした。

「つう〜っ!? LPが1000切っちゃった!? ……そうだよねえ。クロノス先生にも聞いてみたけど知らないって言ってたし」

「急な出張らしくて、先生達も詳しくは知らないって話だったんだな。もぐもぐ」

ピンチになりながらも翔は答え、隼人はスナック菓子を摘まみながら補足する。

「つまりは手詰まりって訳か。最後のセブンスターズの方もいつ攻めてくるか分からねえし、こっちはいつでも迎え撃てるように準備しておくくらいしか出来ねえんだよね」
「頑張つてねアニキ！ 力不足かもだけど、こうして僕もデュエルの相手になるっすよ！」

「それが終わったら今度は俺もやるんだな！」

二人からの友情を感じ取って十代はにっかりと笑い、

「ありがとよ二人共！ ……じゃあ手札から『融合解除』発動！ スパークマンとクレイマンに分離し、スパークマンでとどめだ」

「げえっ?! やくらくれくたくっ?!」

それはそれとして、きつちりデュエルには手を抜かずに勝利する十代だった。そんな中、

コンコンコン。

「んっ?! 珍しいな。こんな夜にお客さんか?」

突然扉から聞こえてきたノック音に、十代は不思議そうな顔をする。

「誰だろうね? 僕が出てくるっす! アニキ達は次のデュエルの準備でもしておいて」

「すまないんだな翔。じゃあ十代。今度は俺が相手なんだな。今回のデッキは前から少し改良してみたんだな」

「そりゃあ楽しみだな。ワクワクするな!」

翔が立ち上がって扉に向かう中、十代達は今の場を片付けて次の勝負の支度をする。と言つてもテーブルの上のカードをデッキに戻してシャッフルする程度の事だが。

「よーし! 準備できたぜ!」

「じゃあ早速始めるんだな」

「ああ。行くぜ！ デュエ」

「ア、アニキっ!? ちょっと来てっ!?」

デュエルを始めようとした時、翔の焦ったような声が響く。

「どうした翔？ 誰が来たんだ？」

「良いから早く来てよ!!? これはマズいつて!？」

翔のただならぬ雰囲気、十代も扉の方に向かう。そして、その先に待っていたのは、

「一体誰が来て……って!? 何でお前がここに居るんだよバランサー!？」

『夜分に失礼する。すまないが少々話があつてな、出来れば立ち話ではなく部屋にあげてもらいたいのだが、構わないだろうか?』

一応セブンスターズ側の審判役。ペストマスクを被った謎の男バランサーが、口をパククさせて何も言えない翔と共に所在なく入口に立っていた。

閑話 十代 決戦に向けて闘志を燃やす



「あのお……お茶です。どうぞ」

『ああ。ありがたい。頂こう。こちらお土産のクッキーだ。宜しければどうぞ』

翔がおっかなびっくり差し出したお茶を受け取ると、お土産を渡しつつペストマスクの口元だけを外してバランスサーがズズッと啜る。

突然バランスサーが訪ねてきたのには驚いたけど、結局扉の前で立ち話もあれだし中に入ってもらう事になった。

「おい十代。これは一体どういう事なんだな？」

隼人が不思議そうな顔をしているが、俺だって分からない。あとクッキー美味そう。……なら、こういう時は直接聞くに限るぜ。

「なあバランスサー。それで今日はどうしたんだ？ こんな夜に」

『ああ。その事なんだが』

バランスサーはお茶を飲み干すと、サツと背筋を正しマスクを付け直して俺達に向き直

る。

『今回はセブンスターズとしての活動とは別に十代。お前に個人的に話があつてやつてきたのだ』

「俺に？　もしかしてデュエルするのか？」

そういう事であれば大歓迎だ。デュエルじゃ誰も嘘は吐けないからな。互いに腹を割つて話すにはもつてこいだ。

俺が早速デュエルディスクを出そうとすると、バランスーが慌てて止めてくる。

『やらんやらんっ!!　何でもかんでもデュエルに結び付けるんじゃないっ!!　今回お邪魔したのは、これについて頼みがあつての事だ』

なんだ。デュエルしないのか。そう思っていると、バランスーが懐から何かを取り出してテーブルに置く。……これはっ!!?

「これっ!!　この前までアニキが付けてたペンダントっ!!?」

「……でもちよつと形が違うんだな」

「ああ。皆には話してなかつたけど、カミューラとの戦いの時に吹雪さんが持っていたペンダントと合わさつて形が変わつたんだ。でも何でこれがここに？」

確かこのペンダントは、あの時吹雪さんに渡してそのままになつていた筈だが。

「つて事は……もしかして吹雪さんからこれを奪つてきたんじゃないっ!!?」

「落ち着くんだな翔。もし奪ってきたんなら、こんな悠長に出すつていうのも不自然な
んだな」

「確かに……そうだよね」

一瞬翔が怯えたように balanサーを見たが、隼人の言葉に落ち着きを取り戻す。

対する balanサーはと言うと、ペストマスクのせいでもるで表情が読めなかった。

『まあいきなり見せられたらそんな反応をするのも仕方ない。だがこれは誓つて奪つた
のではなく、天上院吹雪と直接交渉して借り受けた物だ。信用できないというのなら、
明日吹雪に直接確かめてもらつても良い』

「いや。そんな事しなくても信じるぜ。それでこのペンダントがどうかしたのか？」

そこはもつと疑えよと balanサーがぼつりと呟いたが、疑うも何もなあ。

『こほん。それで今回の要件だが、このペンダントを一時的に貸してもらいたいのだ。
吹雪から借り受ける際の条件の一つが、半分の持ち主である十代にも許可を取るとい
う事だったからな。勿論ただで貸せとは』

「ああ。良いぜ」

『言わない。見返りとして……つて!?! 良いのか!?!』

なんか balanサーがペストマスクごしでも分かるくらいに驚いている。あと翔と隼
人も驚いている。なんでだ？

「アニキ。即答はないでしょっ!」

「そうなんだな。バランスはあくまでもセブンスターズ側の人間。ここはもう少し考えてからでも」

「別に良いじゃん! よこせとか言われたら俺も困るけどさ。あくまで貸してほしいっていうんだろ? 吹雪さんがOK出してるなら俺からこれ以上言う事はないさ。それに」

俺はバランスにかつと笑いかける。

「バランスはセブンスターズ側だけど敵じゃない。一緒にカミューラから学園祭を守るために戦った仲間だぜ! なっ?」

『あれはあくまで互いの利害が一致したからこそであって……はあ。幾つか交渉の道筋を考えてきたこつちがバカらしくなってくるな。お前は本当にもう少し相手を疑う事を覚えた方が良い』

「そりやあ俺でも疑う事はあるけどさあ。お前はどうか考えても悪い奴じゃねえだろ?」
「……そうだね。僕や隼人君も助けてもらったしね」

バランスがどこか呆れたような言葉を返すが、実際どう考えてもこいつは悪い奴じゃない。審判役としてはいつも公平だったし、これまでもこつちの事を気にかけてくれた。

カミューラとの戦いの時も、まだ相手がセブンスターズの一人で戦ったら責任を問われるっていうのに、 balanサーは処罰覚悟で戦おうとしたしな。

『……まったく。お前はそういう奴だったな。仲間を信じるだけならまだしも敵まで信じる。だからこそ、お前に惹かれる奴が増えるのかもしれないが』

balanサーは大きく一度ため息をついて仮面の上から額を押さえる。

おつかしいな。俺そんな頭が痛くなるようなこと言ったか？

『では、許可も取った事だしこのペンダントは借りていくぞ』

そう言ってまた懐にペンダントを仕舞い込むと、balanサーはゆっくりと立ち上がる。

「何だよ。もう帰るのか？ 折角だしデュエルしようぜ！ 闇のデュエルとかじゃなくて普通のをさ」

「なんなら俺達ともやるか？ 少しでも手の内を暴いてやるんだな！」

「そういう事なら僕も！」

みんなで引き留めようとするが、balanサーはふるふると首を横に振る。

『悪いが戦うつもりはない。今はまだな。夜の急な訪問失礼した。……ああ。忘れる所

だった』

そのまま部屋を出ようとした時、何かを思い出したように balanサーはこつちに振り返る。

『本来交渉のネタとして用意した見返り。俺としては隠す事でもないし、明日にでも正式に学園に通達される事だが、一足先に教えよう。次の戦いの時間と場所を』

「えっ!? それホントか!」

俺が詰め寄ると、balanサーは静かに頷く。

『戦いの場所は以前タイタンが待っていた特待生寮。日時は三日後……いや。もう数時間したら二日後になるな。その夜に行われる。戦いに備えて調子を整えておくことだ』

その言葉を最後に、balanサーは今度こそ部屋を出ていった。

「……三日後か」

「いよいよ決戦だね。アニキ」

「ああ! 相手は最後のセブンスターズアムナエル。くうくつ! 腕が鳴るぜ!」

カミューラとの戦いで見たあの姿。実際にデュエルを見た訳じゃないが、間違いなく強いって分かる風格があった。

だけどそれはそれとして、やっぱりワクワクもする。そんな強い相手と本気のデュエルで戦えるなんてな。……できれば闇のデュエルじゃなければもつと良い。

「よし！ 遊児と万丈目も呼んで知らせてやろうぜ」

「十代。さつきバランサーも言ってる？ もう夜だから明日にするんだな」

「そっか。それもそうだな」

隼人に止められて確かにと思う。話をしてもうそれなりに遅い時間だ。万丈目とか絶対機嫌を悪くするだろうし、遊児を無理やり引つ張ってくるのも悪いしな。

それにバランサーが言うには明日学園に通達されるらしいし、俺達だけちよつぴり早く知れてラッキーくらいに思えばいいか。

「じゃあ早速三日後に向けてデツキ調整だ！ 二人共付き合ってくれ！」

「了解!!」

さあ。燃えてきたぜ！

決戦当日。餞別に “怪物” はいかが？

「……はい。大徳寺先生はもう既に到着して準備している筈です。俺もこれから現地向かいます」

『そうか。くれぐれもよろしく頼む。……今更だが、君や十代君達生徒にこのような大役を押し付けてしまって大変申し訳なく思っている。本来ならこれは大人の問題だといふのにね』

「まあ、それを言ったらこっちは自分から首を突っ込んだ結果ですし、十代達も分かってくれるとは思いますが。ただ全てが終わったら、きつちりこれまでの事を謝罪する必要があるとも思いますがね。俺も含めて」

『ああ。その通りだとも。今日がおそらく大一番だ。こちらでも万が一に備えての準備を進めておく。……頑張ってくれ』

「はい……では失礼します。鮫島校長」

俺は静かに通信を切ると、ふうと大きくため息をついて椅子に座り込む。

十代にペンダントを借りに行つてからもう三日。今日がこちらから指定した戦いの

日だ。

あまり準備に時間をかけ過ぎる訳にはいかないが、かと言って何が起きても良いようにやれる事はやっておかないといけない。それで大徳寺先生とも相談した結果三日という期限に設定した訳だが、

「いやキッツいわっ!?! やる事多すぎだろっ!?!」

普段の学業に加え、バランスーとしてのスケジュール調整。ペンダントの能力チェックに大徳寺先生の体調チェック。不測の事態に備えての学園側とのすり合わせまでやった。

さらに言えば十代達のデッキ調整にも協力した。まず前提として、最終的には十代達に勝ってもらうのが理想なのだから当然だ。主人公だから放っておいても勝つだろうとは思うが、何かの間違いでこれまでの強化フラグが足りなかったとなったらシャレにならないからな。

あと明日香はどうか復調したのだが、カミューラはまだ眠り続けたままだ。毎日かわるがわる心配して見に行くコウモリ達が待っているというのにな。

そんなこんなで三日などすぐに経ち、こうして今は決戦に備えて支度を整えている。

『おやあ? お疲れかな? そんな調子で大丈夫かい?』

「心配するような言葉をそんなうきうきした調子で言うんじゃないよデー」

『ゴメンゴメン！ いやなに。いよいよクライマックスつてやつだからね。観客としてはつい胸が弾むという奴さ』

ふよふよと急に現れる光球をしつしと払いのけながら、俺は自分のデッキを確認する。

何度も何度も組みなおしたが、誰を主軸にするかで大動きが変わるのがこの幻想体デッキだ。デュエルの相手ごとに微妙な調整が必要なレベルと言えば良い。

そして、今回俺が戦うであろう相手の事を考えると、加減なんかしていられない。全力で行かなくては意味がないし、なにより向こうにも失礼だろう。……よし。これで行こう。

『デッキ構築が終わったようでは何よりだよ。じゃあ決戦前に幻想体達から何か激励の言葉でも貰っておいたら？』

『遊児お兄ちゃんっ！』

「おわっ!？」

ぎゅむっ！

ディーがそう言うや否や、急にレティシアとテデイが俺にしがみ付いてきた。

『ごめんなさい。今まで邪魔になるかもって我慢してたけど……遊児お兄ちゃん。頑張ってるね！ 皆を笑顔にしてあげて』

コクコク。カタカタ。

『ふん。私が復活する前に三幻魔に出てこられては事だからな。精々働くが良いさ。我が生け贄よ』

テデイとそつと出てきた罪善さんも追隨するように頷き、レテイシアに抱かれたままのネクもぶすつとした顔でひらひらと手を振る。

気が付けば他の幻想体達も、精霊化した状態で静かにこちらを見ていた。

「皆……ありがとう。そういえばセイさんとココロは？」

『呼んだかしら？』

『はいはい！』

急に壁からぬつと姿を現す二人に驚くも、まだこれくらいなら夜中のどアツプ罪善さんよりは大丈夫だ。

『先に三鳥達と話を付けて、道中の良くないモノを散らしておいたわ。カード無しでも大した手間ではなかったわね』

『楽勝だったね！ まあちよつとやり過ぎて怒られちゃったけど』

『だから森の中でビームを撃つなど言ったのよセンパイ。あれ以上やったら三鳥達とやり合う事になっていたのよ。反省なさい』

どうやらまた湧き出ていた良くないモノを撃退してくれていたらしい。もうすぐ十

代達も通るし、その辺りも大鳥達に説明しておいてくれたのだろう。だけどそれなら俺に言ってくれば手伝ったのに。

テヘツと舌を出して笑うココロを叱りながら、セイさんは俺に向き直ってまた口を開く。

『なんで自分に言わなかったのかって顔をしてるわね。良い？ アナタはこれからやるべき事が、アナタしか出来ない事があるでしょう？ ならそれ以外をこなすのがアナタの騎士の役目よ』

『あと悪を倒すのは正義の味方の役目だよ！』

……むう。ぐうの音も出ない正論だ。そしてここまでされちゃこっちも気合を入れない訳にはいかない。俺はありがとうと幻想体の皆に頭を下げると、静かに出発しようと扉に手をかけ、

『あつ!?! そういえば久城君。君に渡す物があつたんだ!』

デーの言葉に嫌々予感がしつつも振り返る。こいつがこうして白々しく話題を出すのは大抵厄介事の前触れなんだよなあ。

『そう警戒するものじゃないよ。これは単にクライマックスに向けた餞別って奴さ！』

という訳で……ほらっ!」

シユツと飛んできた何かを俺はパシツと掴み取る。これは……カードか。それも、「融合モンスター?」このデッキには「融合」のカードは入ってないぜ?」

『なぐに心配はいらないさ。それは条件を満たすことで融合召喚されるカード。そしてその素材になるカードが君のデッキに入っている事は今確認したとも』

「今確認つて……まあ良いけどさ。こういうのはせめてデッキを組む前に……っ!」

俺はそこで目を通したカードの内容に一瞬息をのむ。

「……おい。これはマズいだろ」

この幻想体の事は、オールドレデイの読み聞かせで少しだけ知っている。

曰く、その大きな目は光を閉ざした。

曰く、その長い腕は時を隠した。

曰く、その小さなくちばしは絶え間なく囁いた。

曰く、それは黒い森の怪物である。

『うん。レベル10。数ある幻想体の中でも最も管理難易度の高いリスクレベルA.L.E.P.H.の一枚さ』

どうせならこれくらいは準備しないとねと、デーはどこまでも他人事のようにニヤリと嗤った。

それからしばらくして、俺はぼつちりバランスの格好に着替え、アムナエルこと大徳寺先生と共に特待生寮の入り口に立っていた。以前タイタンが待機していた場所だな。

指定時間まであと十分。もうそろそろ所か。

『大徳寺先生。最後にもう一度確認しますが、体調の方はいかがですか？』

『君も心配性だな。君の尽力のおかげで、予想より身体の具合は良いよ。あと数度は全力のデュエルにも耐えられる。なんなら残っている鍵の守り手全員相手でも一人ずつであれば可能だろう』

『誤魔化さないでください。俺が聞きたいのはその後の事です。……デュエルした後、どれくらい生きてられるかと聞いているんです』

『それは……』

その言葉に大徳寺先生は少し言い淀む。

そもそも俺がアムナエルの代理として動いていたのは、少しでも彼の残り僅かな余命

を伸ばすため。

なにせ自分自身も生き残るためにこの世界に来たクチだし、近々死が迫ってる人を放っておくのも目覚めが悪くてここまで手伝ってきた訳だ。

せめて今の学年が進級するまでは長生きしてもらわないと、俺がここまで身体を張った意味がない。

それにこの人完全に自分が最後の試練になってデュエルで燃え尽きるつもりだったからな。そんな事されたら絶対相手（多分十代）のトラウマになるぞ。

『……ああ。そうだね。今の調子なら、何とか十代君達が進級するまではこの身体も保ってくれるだろう。その後は流石に無理だろうが』

『そう……ですか』

これは最低限伸ばすことが出来たというべきか、それともここまでしか出来なかったというべきか。

俺が何とも言えない表情をしていると、仮面越しで見えない筈なのに大徳寺先生がどこか苦笑いを浮かべた気がした。

『私が言うのもなんだけど、君はあまり背負い過ぎない方が良い。こう考えるんだ。進級するまでしか伸ばせなかったのではなく、進級するまで伸ばすことが出来たのだと。……これが教師のぼくから生徒への数少ないアドバイスだよ！』

ほんの少しだけ普段のおどけた態度に戻ってそう語る大徳寺先生。……まったく。まいったね。俺なんかとは年季が違う。

ああ。これじゃあまたレティシアに笑ってって注意されてしまうな。

『ふっ。そうですね。それじゃあアドバイスに従って、きちつとその時に向けて今を乗り切るとしますかっ！』

こちらへ向かってくる多くの足音に気づき、俺達はスイッチが切り替わるように雰囲気張りを詰める。

さあ。鍵の守り手達。今日が最後の決戦だ。この日のために準備した諸々。しっかりと味わってもらおうか！

閑話 役者は揃い、そして消える



『よく臆せずにやって来たな。鍵の守り手達よ』

「ああ！ 来たぜバランスサーっ！」

夜の7時。事前に通達された時間ピッタリに、俺達は特待生寮前に集結した。だが、
『……結局最後まで部外者なのについてきたな。翔に隼人よ』

「ナハハ。アニキやお兄さんの事が心配で」

「俺も同じなんだな。いよいよ決着とあつたら尚更気になるんだな」

二人共困った顔をしながら誤魔化すように笑う。まあそう言うなってバランスサー。
こいつらだつて最後の戦いを見届けたいんだよ。

『明日香はまだ寝ていた方が良いのではないか？』

「たとえ戦うことは出来なくとも、ここまで来たら最後まで見届けたいわ」

明日香は気丈にそう宣言するけど、俺も実を言えば休んでた方が良いんじゃないか
なって思う。まだ身体も治つたばっかだしな。だけど明日香がどうしても行くって聞

かなくて、吹雪さんもそれなら僕もってなし崩し的にこうなった。

『良いだろう。……では諸君。ここに最後のセブンスターズと鍵の守り手達が揃った。早速戦いを進めさせてもらおう。セブンスターズ側からはこの通り、アムナエルが出る』

その言葉に合わせ、バランスの後ろに立っていたアムナエルが何も言わずにゆっくりと前が出る。

やべえ。ただ立っているだけなのに肌がビリビリする。これが最後のセブンスターズ……でも負けねえぞ！

「おっしやあつ！ 勝負だアムナエル」

「ちよつと待て。ここはこの俺様の出番だろう」

「ノンノン！ これが最後の戦い。つまりこのワタクシの出番でス〜ノ！」

気合を入れて名乗り出たら、万丈目とクロノス先生も自分がやるって言いだした。いや待って二人共。ここは俺にやらせてくれよ！

『こほん。悪いが三人共。今回はアムナエルの方から対戦相手を指名したいとの要望があった』

「「なんだってっ!?!」」

『ああ。私は今回、遊城十代を対戦相手に指名する』

何だか分からないがラッキーっ！ 向こうからご指名なら堂々と戦える。俺は意気揚々と前に出た。

「おおっ！ それってさ？ この中で俺が一番強そうだからって事か!？」

「そんな訳ないノ〜ネ。多分一番やりやすそうな相手を先に倒しておこうって腹なノ〜ネ」

「つまり本命の俺様の前の準備運動という事だな。そういう事なら納得だ」

そう軽くおどけて他の面子から突っ込みを入れられている中、アムナエルはふるふると首を横に振る。

『いいや。私が十代を指名したのは別の理由だ。単純に互いに万全の状態。連戦の疲れもない状態で君と戦ってみたい。いや、戦わなければならぬのだ。来るべき災いに打ち勝つだけの力があるか見極めるために』

「それって……どういう」

『おっと。話はそこまでだ』

来るべき災い？ だってこれが最後のセブンスターズ戦だろ？ 俺が聞き返そうとするのをバランスサーが横から遮る。なんだよ一体？

『さて。早速戦いを始めたい所ではあるが、ここでは些か戦いの場所にふさわしくない。よつてふさわしい場所へ移動してもらいたいのだが、宜しいだろうか?』

балансиサーは大仰に両手を広げ、ここに集まった全員の視線を集める。まるで舞台役者みたいだな。それにしても、

「まあ……確かにここでやるよりも、まだボロボロだけど建物の中の方が良いかもな」

「以前タイタンとクロノス先生が戦った場所だな。……あまり良い思い出はないが仕方がないか」

「……正直、もうあそこには行きたくなかったノ〜ネ」

クロノス先生はそう言つてぼやく。……タイタンか。まさかあんな風に闇に飲み込まれちゃうなんてな。アイツも悪い奴だったけど、せめて無事だと良いんだが。

そうして皆で寮の中に入ろうとすると、

『ああ。少し待つてほしい。ギリギリで言うのはあれだが、ここで諸君らに謝らなければならぬ事がある』

急にбалансиサーがそんな事を言つて俺達を引き留めた。謝らなさいいけない事?

「謝らなくてはならない事とは……何?」

「うわっ!? いつの間に足元がつ!」

な、何だよこれ?! いつの間にか皆の足元に、黒いもやもやした闇が纏わりついて

いた。もしかしてこれ……タイタンの時みたいなのっ!?

『これもまたアムナエルの要望だが、十代との戦いはなるべく他者の居ない状態が望ましいとのこと。よって、それ以外はここで解散とさせてもらう』

闇は足元から一気に立ち上り、次々にここに居るメンバーを飲み込んでいく。

「なっ!?! ハネクリボーっ! 頼むっ!」

クリクリ〜!

ハネクリボーが精霊としての力で光を放ち闇を祓おうとする。だけど、

「あわわわっ!?! 痛っ!?!」

「アイタタタ。何だったんだな?」

間に合って転がり出たのは近くに居た翔と隼人だけだった。それ以外は皆闇に飲み込まれて姿を消してしまう。

『まったく。まさか翔と隼人が残るとは、少し予定が狂ったな』

「万丈目っ!?! 三沢っ!?! ……くっ。カイザーに明日香に吹雪さん。クロノス先生も。

……おいっ! 皆をどうするつもりだっ!?!」

『落ち着け十代。この闇は危害を加えるものじゃない。単に対象を別の場所に飛ばすだけのものだ。ちなみに飛ばした先はアカデミア本棟』

俺が食って掛かると、バランスは静かに一つずつ説明していく。

まず闇のデュエルの周囲への被害を考慮して、最初からこうするつもりだった事。ギリギリまでこの事を黙っていたのは、下手に他の面子に来るなど通達しても普通にやってくる可能性の方が高かったからという事なんかをだ。

実際翔や隼人、おまけに体調の悪さを押して明日香まで来ていたしな。間違つてはいないだろう。それに跳ばす先も本棟なら安全だ。だけど、

「だけど、これまでだつて闇のデュエルだつたけど皆居たじゃないか。何故今回だけ」

『ああ。これまでは俺がいざという時に備えてずつと一緒に居たからな。だが、今回は俺と一緒に居られない以上仕方ない』

「一緒に居られないって……えっ!？」

「アニキっ!? バランサーの足元にも今の奴がっ!？」

そう。いつの間にかバランサー自身にもきっきの闇が纏わりついていた。

『アムナエル。では予定通り、俺は俺の戦いに行く。審判役としてそちらを見届けられない事を許してほしい』

『いや。こちらこそ戦う相手を選ばせてもらつてすまない。それに、オシリスレッドの二人がこの場に残ったのもある意味丁度良いのだろう。君の代わりに見届け役を務めてもらう』

『……そうか』

何か気になる事を言いながら、バルンサーは少しずつ闇の中に沈んでいく。そして、

『では、さらばだアムナエル。ご武運を!』

『ああ。これまでの君の尽力に感謝する。さらばだ!』

もう胸まで闇に沈んでいく中バルンサーとアムナエルはそうやり取りし、

『それと十代。セブンススターズ側としては言うべきではないんだが……頑張れよ!』

最後に俺にそう言い残してバルンサーは闇に飲み込まれ、そのまま完全に姿を消した。

あとに残ったのは俺とアムナエル。そして翔と隼人の四人だけ。

「皆……皆、消えちゃった。どうしようアニキっ!? 隼人君っ!」

「どうするも何も、もうこうなったらやるしかないんだな!」

隼人の言う通りだ。俺はアムナエルに向けてキツと向き直る。

「もう一度確認させてくれ。皆に危害は加えてないんだよね?」

『ああ。一人を除いて今頃はアカデミアの本棟前で目を白黒させているだろう』

「ちよつと待ったっ!? 全員じゃないのか!」

『ああ。これはバルンサー自身の要望だな。私が君を指名したのと同じく、彼にも戦うべき相手が居ると言う事だ。……さあ。あとは言葉ではなく、デュエルで語るとしよう。ついてきたまえ』

アムナエルはそう言い残すと、しつかりとした足取りで特待生寮に入っていく。

「……アニキ」

「十代……」

二人が心配そうな目でこつちを見ている。そりやあこいつらからしたらいきなり闇に引きずり込まれかけて、なんだか分からない内に皆が居なくなつてたんだから心配にもなるよな。でも、

「なぐに心配すんなつて！ あいつらが言つてただろ？ 皆に危害は加えてないつて。ならばはこれまでとおんなじだろ？」

こういう時こそ明るく言う。まだ分かんねえ事は多い。アムナエルもバランスサーも意味深なことばつか言うしな。だからこそ、

「全力でデュエルするだけだ！ デュエルじゃ誰も嘘は吐けない。互いに本気でぶつかれば、それだけで分かる事もあるつてもんき。行こうぜ！」

「あつ!? 待つてよアニキ!?!」

俺が先陣を切り、二人は少し遅れて寮の中へ。待つてろよアムナエル！



「さて。そろそろ俺様だけをここに連れてきた理由を聞かせてもらおうか？ バランサー」

『理由……か。クククつ。そうだな。なに。ひどく簡単な理由だよ。万丈目サンダー』
そこはどことも知れぬ闇の中。

周囲も見渡せない暗闇なのに、互いの姿だけははっきりと見える不思議な場所。
一人だけそこに連れてこられた万丈目の問いに、バランサーはどこか悪役じみた笑い
で返した。

『俺も正式にセブンスターズになった。だから邪魔者を一人ずつ消す。ただそれだけだ。
さあ！ 闇のデュエルを始めようかつ！ フハハハハつ！』

「……ほお」

高笑いをするバランサーを、万丈目はどこか呆れたように見つめていた。

真名看破と決闘開始

『フハハハハっ！ これまで人畜無害な審判役として振る舞っていたが、何を隠そうこれまででの戦い全てが俺の計画の内よ。鍵の守り手とセブンスターズを潰し合わせ、双方消耗した所で最終的に俺が三幻魔の力を我が物にするというなあっ！』

暗闇の中で、万丈目へと語る俺の声が響き渡る。

『苦勞したぜえ。好き勝手に暴れようとするセブンスターズの面々をどうにか宥めすかし、俺にとつて都合の良い日取りをセッティング。実力差や相性を考慮して一進一退の状況を仕向けようとしたのに、全体で見れば鍵の守り手側が酷く優勢ときた』

万丈目は何も言わず沈黙で返し、俺は構わず前置きを続ける。

『カミューラが明日香を倒した時は、これで多少は釣り合いが取れると内心喜んだもんだ。だがその後が良くなかった。まさか俺とはまた別のやり方で三幻魔の力を奪おうとはなあ。流石にあの時は焦ったぜ。……だが、こうしてカミューラが除名処分になったのは好都合。その空いた席にまんまと座り、こうして俺が正式なセブンスターズになったという訳だ。カミューラを追い詰めてくれてありがとうよお』

「……へえ」

むう。ここまでペラペラと喋っているのに、万丈目からの反応がどうにも薄い。

『自分達が良いように使われていたと知って声も出ないか？ 安心しろよ。お前を始末した後はすぐに十代とクロノス教諭。そして三幻魔を従えた暁には、俺を邪魔する者全てにお前の後を追わせてやる。この闇のデュエルでなあっ！ フッフ。フハハ』

「……で？ 俺はいつまでこの下らん茶番に付き合えば良いんだバランスー……いや。久城」

俺の高笑いをぶった切るように、静かだが非常に不機嫌な声色で万丈目がそう言い放った。

『……何の事かな？ 俺はただのバランスーでありその久城某という者などまるで』

「知らないと？ ……良いだろう。しらばつくれるというのなら、一つずつ真相を明らかにするとしよう。そう」

ビシツと力強く俺に指を突き付けて万丈目が叫ぶ。

「この俺。名探偵万丈目サンダーの名にかけてっ！」

「俺がこれまでの戦いでお前の正体に疑問を覚えたのは、大きく分けて二度ある。一度目は俺と黒蠍盗掘団が戦った時だ」

コツコツと敢えて足音を大きく響かせながら、万丈目はゆっくりこちらに歩み寄りつつ推理を語る。

「思い出せ。ザルグが俺とデュエルをするべく審判役を呼び出した時、ものの数分でお前はやってきた。実に不思議な話だ。あの時デュエルすることになったのは半ば偶然だというのにな」

『何が言いたいんだ？』

「お前は最初からあの近くに居たって事さ」

グサツ！

探偵に追いつめられるというのはこういう感じなのか。言葉に物理的威力が伴うように、俺の身体に突き刺さる感じがする。

「あんな夜中に、イエローでもブルーでも本棟でもなく、俺が言うのもなんだが特に目ぼしい物もないレッド寮の近くに。一番しつくりくるのは、バランスーがレッド寮の関係者だという考えだ」

『そんな訳……そう！ 先ほどのように闇による空間移動で来たから時間もかからず』

「いいや。俺が見た時お前は寮の裏手の方から走つてきたぜ。ワープ出来るならわざわざあんな所から来る必要はない。それにこれまでもずつと使う素振りすら見せなかった。つまりは自分じゃ出来ないか、出来るようになったとしてもつい最近つて事だ」

苦し紛れに言い放つた言葉も、簡単に切り返される。ぐっ!?! 小説の犯人の気持ちがよく分かるぜ。

「次にカミューラとの城での一件。あの時幻想体達が途中から手助けに来たが、よくよく考えればおかしな点があつた。……久城が来なかつた事だ」

『それが何か問題でも? その久城某と幻想体達に関わりがある事は何となく理解したが、あれだけの激戦地だ。危険を避けて幻想体だけに行かせても何も不思議はないだろう?』

「それはないな。俺の知る久城は、口では自分の安全を優先すると言いながらも、自分の知り合いや何かに危害が及ぶ事を極端に嫌うし防ごうとする。いざとなつたら自分の身に危険が及ぼうともな。そういうタイプのバカだよ。……そんな奴が自分だけ安全地帯で高みの見物なんてしない」

うゝむ。一体俺は周りからどう思われてるんだか。

本当に一番大事なのは自分の身なんだがなあ。あくまで友人に何かあると俺の精神衛生上良くないから助けようとしているだけで。

まあそれはそれとして……着々と追い詰められているんだけど。

「間違いなく幻想体達を抑えられるようある程度近くに居た筈なのに、十代が聞いた話によると自分がどこに居たかは一切語らず、あくまで幻想体を送ったとだけ言っていたらしい。わざわざ隠すような事でもないのにだ。……だが、最初から久城があの場合に居たとしたら何の問題もない。」

『それで俺がその久城某だと？　いくら何でも状況証拠だけでそう断定するには無理があるな』

「ああ。確かにな。まだ幾つか小さな状況証拠を並べ立てることは出来るが、物的証拠までは流石の名探偵万丈目サンダー様でも揃えることは出来なかった」

おっと。これはもしやギリギリセーフか？　まだ正体確定までは行っていない？　と思つた瞬間、

「だが、そんな事はどうでも良いんだよ」

ズンツと音が響くかと思うほど強い踏み込みで、万丈目は俺の前に一気に近づき、そのまま胸倉を掴んでくる。

「声は微妙にエコーがかかり、姿形も僅かにぼやけて分かりづらい。だがなっ！　一度

久城だと仮定した時点で、俺様が自分のファンを見間違える訳ないだろうがっ!」
『なっ!?!』

「お前の事だ。ずっと黙っているのは何か理由があるのだろうか、俺様が珍しく気を遣って話すのを待ってあげればこの似非悪役ムーブの茶番かっ!?! ああんっ!?!」

「マズイっ!?! これ万丈目カンカンなんだがっ!?! いやまあ怒らせる事は予定通りなんだが、こういう物理的なお怒りモードとはちよつと予想が外れて……というか息がぐるぢいつ!?!」

そのまま身体をガクガク揺さぶられ、遂に俺が根負けするのはそれから十秒もしない内の事だった。

「……ふう。俺としたことが少々熱くなった」

『少々どころではなかったような気もするけどな。まあ良いが。……では、改めて名乗るとしようか』

流石にこれはいけないと互いに息を整えると、俺は仮面に手を掛ける。そしてゆつくりと仮面を横にずらしていき、

「この通り。バランスの正体はこの俺。久城遊児で間違いない。流石は名探偵万丈目

サンダー。良く見破った！　こちらとしてはもう少し引つ張ってからばらす予定だったんだがな」

俺は少しだけ残念そうにそう語る。

そう。これまでの言動は、ギリギリまで万丈目を揺さぶってヘイトを溜めつつデュエルを始めた時点で俺の方から正体暴露。

そして俺達の友情すら偽りだったのさムーブで躊躇なく万丈目に俺をぶつ倒してもらいレベルアップ。全て終わった所でネタばらしして皆で平身低頭謝って終わるという流れの為の物だったのだ。

……まあ普通に俺からばらす前に見透かされたけど。

「ふん。当然だ。俺を誰だと思ってる。そしてこの暗闇はどうせ」

「ああ。大鳥に協力してもらい、少し暗闇を調整してもらっている。ここは本棟近くの森の中だ」

大鳥の暗闇は、ただ何も見えない真つ暗闇にするだけじゃなくて少しだけ光量を調節できる。そもそもそうでもしないと他の三鳥もまともに動けないだろうしな。

「それよりもだ。何がどうしてこういう事になったのか話してもらおうぞ。下手な三下小悪党口調は無しで普通に話せ」

「それは良いんだがその前に……ほらっ！」

俺は万丈目に、今日の為に準備しておいた吹雪のペンダントを投げ渡す。

「これは……確か十代と吹雪さんが付けていた」

「ああ。それをしつかり首から提げておいてくれ。なにせこれから闇のデュエルをやるからな」

「何っ!?!」

よし。やつと唾然とする万丈目が見られて少し嬉しくなる。準備した甲斐があつた。

「おい少し待てっ?! お前そんな大事な事をサラッと」

「言つとくけどやらないという選択肢は無しだ。俺個人としてもやりたくはないがこれでもセブンススターズなもんでね。やらないと契約違反になる。……心配するな。そのペンダントを付けていればリアルダメージを軽減できるのは実証済みだ。そして」

俺はそう言いながら速やかにデュエルディスクを展開。デッキをセットし、さつきまで外していたペストマスクを被り直す。

『俺はこの格好自体が防護服の代わり。二、三発良いのを貰つても充分耐えられる。

……とまあ色々言つたが』

俺はそこで敢えておどけたように肩を竦めて見せる。

『極論すれば少々衝撃が強いだけのただのデュエルだ。話の続きはデュエルしながらするでしょう』

「……つたく。お前という奴は……良いだろう」

そう言つて万丈目もまたデュエルディスクを展開すると、キツとこちらを力強く見据えてくる。

そうだ。その目だ。相手が誰であろうと、どんな状況であろうと、いざ戦いになればそうして覚悟を決めた目を見せてくれる。

「生憎俺は、相手がファンだろうが何だろうが勝負に手加減はしない主義だ。完膚なきまでに叩きのめして話を聞かせてもらうからな」

『結構。それでこそ俺の推しだ。なら俺も一ファンとして……本気で行くか』

『デュエル!!』

バランサー対万丈目 その一 始まりのトランペット

バランサー LP4000 手札5

万丈目 LP4000 手札5

「先手は譲ってやる。ささやかなハンデとしてな」

『ではありがたく……俺のターン。ドロ』

万丈目は余裕綽々。だがくれるというなら貰っておこう。俺は引いたカードを確認する。さて、最初はどう動くか。

『まず俺は『幻想体 たった一つの罪と何百もの善』を守備表示で召喚。頼むぞ罪善さん』

たった一つの罪と何百もの善 DEF200

カタカタ！

俺の場に、見慣れた光り輝く頭蓋骨が出現する。

「罪善か。となると次の手は」

『当然罪善さんの効果発動。手札の数×300のLPを回復する。俺の手札は5枚。よって1500回復だ』

バランスー LP4000↓5500

『カードを1枚伏せ、ターンエンドだ』

「初手は回復しつつ様子見か。堅実な手だ……だが、ドロっ！」

万丈目は勢いよくカードを引くと、手札を見てニヤリと笑う。

「俺相手に、半端な回復など意味がない事を教えてやる。行くぜ！俺はまず手札から魔法カード『天使の施し』を発動！デッキから3枚ドロし、その後手札から2枚捨てる」

初手から手札交換か。手札消費無しで好きなカードを墓地へ送れるのはデカイ。

「俺は『アームド・ドラゴンLV3』を召喚。そして魔法カード『レベルアップ』を発動！レベル3を墓地に送り、デッキから『アームド・ドラゴンLV5』を攻撃表示で特殊召喚！」

アームド・ドラゴンLV5 ATK2400

むっ?! いきなりかよ。

召喚された幼竜は、一気に魔法カードの効果により成長し咆哮する。

「まだまだ行くぞ。レベル5の効果発動。手札から『Xーヘッド・キャノン』を墓地に送

り、その攻撃力1800以下の攻撃力のモンスターを破壊する。罪善を破壊だ。『デストロイド・パイル』っ!」

『罪善さんっ!?!』

アームド・ドラゴンの背中から放たれた棘のようなミサイルの群れが、罪善さんに殺到して爆発する。これで俺の場はがら空きか。

「これで終わると思うなよ。俺は装備魔法『早すぎた埋葬』を発動! 800LPを支払い、墓地のモンスターを蘇生させてこのカードを装備する。対象は今墓地に送ったXヘッド・キャノンだ」

万丈目 LP4000↓3200

Xヘッド・キャノン ATK1800

万丈目の場に、両肩にキャノン砲を備えた機械のモンスターが出現する。おいおいアームド・ドラゴンとXYZの併用かよ。かなりデッキ回しが難しいが、決まると相当ロマン溢れるデッキだな。

「バトルだ。Xヘッド・キャノンでダイレクトアタック」

『ぐうっ!?!』

バランサー LP5500↓3700

キャノン砲から放たれる砲撃が、爆風となって俺に襲いかかる。……よし。出力は弱

めてあるし、この服の効果もあってちよつと衝撃がキツイ程度だ。問題なさそうだな。「……成程。その様子だと本当に弱いとはいえ闇のデュエルらしいな。だが手は緩めんつ！ 追撃だアームド・ドラゴン。『アームド・バスター』っ！」

『ふっ！』

バランスー LP3700↓1300

腕をグルグルと高速回転して放たれるアームド・ドラゴンのアツパーが、俺を巻き込むようにすり抜けていく。耐えられるとは言え……痛みもんはやっぱり痛いな。

『つつ〜っ!? 流石万丈目と言うべきか。LPを回復していなかったらもう勝負がついていたぞ』

「当然だ。何が目的かは知らんが、これ以上痛い目に遭いたくなければさっさと降参しろ。それぐらいなら認めてやる」

『そうだなあ。いつもだつたらそれも良いんだが、これまでの準備を考えるとはいそうですかと頷く訳にもいかない。それに……こうして闇のデュエルとはいえ、精霊の力ありでぶつかりあうのもたまには良いかなつて思う俺も居る』

別に戦闘狂つて訳でもないが、ちよつと身体の負担が大きい程度なら前にタニヤとやったのと同じ。これくらいなら格闘技の試合と大差はなく、純粹に互いの力をぶつけ合うのも悪くない。

俺がそう言うのと、万丈目はニヤリと獰猛な笑みを見せて笑った。おっと!? これは、「気が合うな。正直俺も、これでお前が降参していたら少々拍子抜けしていた所だ。思えばなんだかんだ時折つるむが、本気で戦う事もなかった。こころで一つファンに俺の実力を見せつけてやろう。カードを2枚伏せてターンエンドだ」

『その瞬間を待つてたぜっ! エンドフェイズ時にリバースカードオープンっ! 速攻魔法『非常事態警報』発動!』

カードの発動と共に、どこからともなくトランペットのような音が響き渡る。

『このカードは、俺が一度で2000以上のダメージを受けたターン発動可能。デッキ・墓地から幻想体と名の付くカードを1枚選択し手札に加える。俺は魔法カード『幻想体再抽出』をデッキから手札に』

「ほう。道理でやけに簡単に削れると思っただらそのカードの為か。だがそれで罪善を蘇生させたとしても出来るのは回復のみ。防ぎきれるかな?」

万丈目は余裕の笑みを見せる。手札を全て使ったとはいえ、俺のLPを大幅に削った上場にはアームド・ドラゴンとX-ヘッド・キャノン。さらに伏せカード2枚とかなり布陣としては良い。……だがな、

『まあこれだけじゃ足りないな。攻め手もないと。……なので、非常事態警報の更なる効果発動! カードを手札に加えた後、俺の場に幻想体モンスターが居ない場合、手札

の幻想体を1体特殊召喚できる。俺が呼び出すのは『幻想体 三鳥 審判鳥!』

審判鳥 ATK2800 CC2

俺の場に、片手に釣り合いの取れた天秤を携えた鳥がゆらりと出現する。……あれ映像じゃなくて本物っぽいな。ここ森だし様子を見に来たってどこか。

「1枚で手札補充と上級モンスター展開。LPを大幅に削る必要があるカードだけの事はある。だがこの流れ、俺が初手から攻撃力2000以上のモンスターを出して攻め立てる事を読んでいたな?」

『まあな。万丈目なら、俺の推しなら初手で初期LPを消し飛ばすくらいはやってくるだろうなとは思っていた。だからこそ俺もこの手が使えた。……言つたろ? 本気で行くつて』

「……ふっ。確かに」

万丈目は軽く笑うと、お前の番だとばかりに顎をしゃくる。

さして。かなり手痛いダメージを受けたが、その甲斐あつて場と手札は悪くない。

『さあ。反撃開始と行くか。ドローっ!』



一方その頃。

「なんで……どういう事だよっ!? なんでアムナエルの正体がアンタなんだよっ!? 大徳寺先生っ!?!」

「何故も何も、私は最初からセブンスターズの一員だ。鍵の守り手に立候補したのも、勞せずして一つ分の鍵を確保するため。私自身が鍵の守り手であれば、適当な所で自分から敗北宣言をすれば済むからな」

特待生寮の奥深く。隠されていたアムナエルの実験室にて、フードを取って自ら正体を明かしたアムナエルに十代は驚きを隠せなかった。

「先生……先生はずつと僕達を、皆を騙っていたんすか!?!」

「……翔」

同行していた翔は僅かな怒りと裏切られたショックで顔色を変え、隼人もまた口にごそ出さないが酷くショックを受けていた。

「そうだ。これまで教師として学園に居たのも、以前カミューラとの戦いに協力したのも、全ては三幻魔の力を手にするため。……さあ十代。精霊使いにして融合使い。力を重ねて新たな力を生み出す錬金術師の素養を持つ者よ。鍵の守り手とセブンスターズ。最後の戦いを始めよう」

アムナエルがデュエルディスクを構える中、十代は顔を伏せたまま動かない。そし

て、

「……俺は信じないぜ。これまでの思い出。それらが全部打算だけの付き合いだったなんて、絶対に」

顔を勢い良く上げると、十代もまた勢いよくデュエルディスクを構える。

「デュエルだ先生。いや、アムナエルっ！ デュエルじゃ誰も、その心に嘘は吐けない。アンタの抱えている何か。その中で見つけてやるっ！」

「それで良い。……さあ。授業を始めよう」

「デュエルっ!!」

い バランサー対万丈目 その二 読み合い出し合い割り合

バランサー LP1300 手札5 モンスター 審判鳥

万丈目 LP3200 手札0 モンスター アームド・ドラゴンLV5 X―ヘッ

ド・キャノン 魔法・罠 早すぎた埋葬 伏せ2

『さて。万丈目。手札フルに使って布陣を万端にしたのは驚いたが、なら効果でまとめて吹き飛ばしてやる。審判鳥の効果発動!』

審判鳥が天秤を掲げると、そこから放たれる水色の光が周囲を照らす。

『審判鳥の効果。1ターンに1度、相手の場の守備表示モンスター、又は裏側表示のカードを全て破壊する。万丈目の伏せカード2枚を破壊だ!』

これが決まれば万丈目の守りは一気に手薄になる。後は審判鳥の効果で牽制しながら削っていけば、

「甘い! 俺が何の備えもしていないと思ったのか? 効果にチェインしてリバース

カードオープン。罫カード『ゲットライド』を発動！ 墓地のユニオンモンスターを1体選び、俺の場の装備可能なモンスターに装備する」

『ゲットライドだと？ だが墓地にモンスターなんていつ……天使の施しの時かつ!』

「その通り。俺は墓地から『Zーメタル・キャタピラー』を選択し、Xーヘッド・キャノンに装備する」

Xーヘッド・キャノン ATK1800↓2400

くっ?! 攻撃力が上がるのに加え、破壊される時身代わり出来るカードか。

『やるな。しかしもう一枚の破壊は防げない』

「ああ。確かにそうだな。だが……むしろその方が都合だ」

審判鳥の光がもう一枚のカードを破壊する……のだが、

「俺が伏せていたのは魔法カード『おジャマジック』。このカードが手札・フィールドから墓地に送られた時、デッキからおジャマ・グリーン、ブラック、イエローを手札に加える。来い雑魚共っ!」

『うつふくん! ようやくおいら達の出番なのねくん!』

『やったるぜ〜!』

『かかってこいや〜!』

手札に加わった瞬間、おジャマ達が精霊として万丈目の周囲に浮遊する。こいつら元

気だね。しかし、

『2枚とも躲されるとは……俺がまず伏せカードから潰しに来ることを読んでいたな』
「当たり前だ。お前が俺様の動きを読んでるように、俺様もお前の動きを読んでいる。全てが掌の上だと思うなよ」

万丈目が不敵に笑う。……そうだよな。ゲームつてのはこうじゃないと。

純粹に強いモンスターを出して殴り合うのも好きだが、こうして相手の手を読み合い裏をかき合うのもまたゲームの醍醐味だ。

『なら、今度はモンスター同士勝負と行こうか。俺は手札から『幻想体 三鳥 罰鳥』を攻撃表示で召喚。さらに装備魔法『幻想体 熱望する心臓』を発動して罰鳥に装備』

罰鳥 ATK100 CC4

俺の場に現れる罰鳥。そしてその胸の赤い模様の上に、小さなむき出しの心臓がくつついてどくどくと脈打つ。

『バトルだ。罰鳥の攻撃。罰鳥は効果により、相手に直接攻撃が出来る』

「ふっ。たかだが攻撃力100。避けるまでもない」

『それはどうかな？ 熱望する心臓の効果。このカードを装備したモンスターは攻撃可能であれば必ず攻撃しなければいけないデメリットがあるが、攻撃宣言を行う度に攻撃力を500アップする。よって』

罰鳥 ATK1000↓600

「何っ!? ぐあっ!?」

興奮した罰鳥のそれなりに痛いつつきが万丈目を襲い、たまらず腕を顔の前に翳して防ぐ。

万丈目 LP3200↓2600

『続けて行くぞ。審判鳥で』

そこで一瞬俺はどちらかを攻撃するか悩み、

『……X―ヘッド・キャノン~~を~~を攻撃する』

攻撃宣言と同時に、どこからともなくX―ヘッド・キャノンの全身に縄が絡みつく。そのまま勢いよく締め上げられるのだが、

「Z―メタル・キャタピラーの効果。装備しているこのカードを身代わりに、X―ヘッド・キャノンの破壊を防ぐ」

X―ヘッド・キャノン ATK2400↓1800

万丈目 LP2600↓2200

「……意外だな。アームド・ドラゴンを狙うと思っていたが」

『俺も最初はそう思った。アームド・ドラゴンなら効果で罰鳥を破壊できるからな。

……でも、それはきつくはあるが致命的じゃない』

本当にヤバい展開は、このままXYZまで届かれること。アームド・ドラゴンとは違って、XYZは手札を捨てる度に相手のカードを破壊する。

今の万丈目の手札はおジャマ3枚。最悪手札を全て使ってこちらの場を一掃されたらシャレにならない。

『メインフェイズ2に移行。俺はフィールド魔法『深く暗い森』を発動！ この森の中では、互いのプレイヤーは自分の攻撃力の低いモンスターからじゃないと攻撃宣言は行えない。また獣、鳥獣、獣戦士族以外のモンスターは攻撃宣言の度にエンドフェイズまで攻撃力が600ダウンする。……なお以上の効果は三鳥が味方に居る限りこちらは受けない。俺はこれでターンエンド』

審判鳥 CC2↓1 PE4

罰鳥 CC4↓3 PE2

周囲を黒くざわめく木々で覆い、相手にプレッシャーを掛けつつ自分の番を終える。万丈目の場にはアームド・ドラゴンとXヘッド・キャノン。手札はおジャマ3枚。仮にそのまま攻撃してきたとしても倒せるのは罰鳥のみ。しかも罰鳥には攻撃を仕掛けてきた相手を破壊する効果がある。

カードを伏せてもフリーチェーン以外なら審判鳥の効果で制圧。攻撃せずにそのまま壁とするなら、罰鳥で攻撃力を上げながらLPを削っていく。

全体の流れとしては悪くないんじゃないだろうか？ 並の相手ならこれで十分何とかなる布陣だろう、……だが、

「俺のターン。ドロ―っ！」

俺の推しは、こんな程度でどうにかなるような男じゃなかった。

「俺の引いたカードは『強欲な壺』。当然発動し、さらにカードを2枚ドロ―。……ククッ。久城よ。お前はさっきZ―メタル・キャタピラーを破壊したな？」

さらつと土壇場で強欲な壺を引いてきたのは良いとして、この流れはなんか嫌々な予感がする。

「良い勘をしている。おかげで完成が一步遠のいたぜ。だがな、それだけでは俺の攻めは止まらんっ！ 俺は魔法カード『おジャマ・ゲットライド！』を発動！」

おジャマ・ゲットライド？ 聞いた事がないカードだが……もしかやアニメ版カードか？

「これは手札からおジャマ・ブラック、グリーン、イエローを1枚ずつ捨てる事で発動。

デッキからレベル4以下の機械族ユニオンモンスターを3体まで選択し、自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。俺が選ぶのはこいつらだっ!」

『行くわよくん。あんちゃん達』

『おっっ!』

そう言つて精霊達がそれぞれ一枚ずつデッキから持つてきたのは……げっ!?

「現れるっ! 『Yードラゴン・ヘッド』っ! 『Wーウイング・カタパルト』っ! 『強化支援メカ・ヘビーウエポン』っ!」

Yードラゴン・ヘッド DEF1600

Wーウイング・カタパルト DEF1500

強化支援メカ・ヘビーウエポン DEF500

おいおいおいっ!? いきなり場にVと今壊したZ以外の奴が揃ったんだけどっ!? さっきZを破壊していなかったらヤバかったぞ。しかもコイツは、

「俺はヘビーウエポンの効果発動。このカードをXーヘッド・キャノンに装備。攻撃力を500アップする」

Xーヘッド・キャノン ATK1800↓2300

「バトルだ! Xーヘッド・キャノンで罰鳥に攻撃っ! 森の効果で攻撃力はダウンするが、それでもこちらの方がまだ上だ」

『むっ?!』 罰鳥は破壊されるが効果により俺にダメージは発生せず、逆に攻撃してきたモンスターを破壊する』

「ならばヘビーウエポンの効果。このカードを身代わりに破壊を免れる」

Xーヘッド・キャノンの砲撃を受け、ボロボロになりながらも自らを大きなクチバシと化した罰鳥の反撃は、分離したヘビーウエポンが代わりに受ける。

「やっと面倒な小鳥を追い払ったぜ。バトルフェイズを終了しメイソフエイズ2へ。……まだもう1体面倒な鳥が残っているんな。対抗できる奴を呼ぶとしよう」

『審判鳥に対抗……まさか!?!』

「俺は魔法カード『死者蘇生』を発動。墓地のZーメタル・キャタピラーを特殊召喚。そして場のX、Y、Zを除外し融合デッキからこいつを呼ぶ。変形合体っ! 来いっ!

『XYZードラゴン・キャノン』

XYZードラゴン・キャノン ATK2800

こいつは……まだ気が抜けそうにないな。

バランサー対万丈目 その三 審判鳥対XYZ そして突然の……

バランサー LP1300 手札2 モンスター 審判鳥 魔法・罨 深く暗い森
万丈目 LP2200 手札0 モンスター アームド・ドラゴンLV5 XYZ—
ドラゴン・キャノン W—ウイング・カタパルト 魔法・罨0

やってくれたな万丈目。まさかこれだけ相手の場を削つてなおXYZが出てくるとは予想外だった。

(次のターン。XYZを放つておけば、効果でこちらのカードが破壊される。ただ)正直な所、無理やり引き分けに持ち込む道筋ならもう出来ている。

審判鳥のクリフトカウンター0効果。自分のターン終了時、クリフトカウンターが乗っていない場合、場の守備表示モンスター、又は裏側表示のカードを全て破壊し、その数×800ダメージを互いに受ける。

手札の『幻想体再抽出』で罪善さんを復活させ、審判鳥共々守備表示にしてターン終

了。その瞬間効果により相手の場も含めて3枚破壊され、互いに800×3で2400ダメージを受けて引き分けた。

さらに言えば、場に出して罪善さんの回復効果を高めるカードがドローできればギリギリの差でこちらの勝ち……なのだが、

(今ここに居る審判鳥は本物。それがカードの効果とはいえ暴走なんかしたら)

俺は以前のココロの暴走や、審判鳥がクロノス先生を襲った時を思い出す。 magari なりにも闇のデュエルでそうなったら、周囲に被害が出る可能性が高い。

それに暴走とはいえ半分は自爆のような物。なりふり構わず絶対に勝たなきゃいけない勝負でもないのにそういう事はなるべくさせたくない。

俺は万丈目をちらりと見る。その顔はどこまでも真剣で、どこかまっすぐさのあるもの。そして、次に何をやってくるか分からない顔だ。

……まいったな。舐めていると取られるかもしれない。本気で倒しに行っていないと取られるかもしれない。それでも、

(俺にだつて気に入る勝ち方と気に入らない勝ち方はある。それに……もう少しだけ、この楽しいデュエルを長く続けたいんだから困ったもんだ)

『俺のターン。ドロ。俺は手札から永続魔法『幻想体 古い信念と約束』を発動！ 場のPEカウンターを3つ取り除く事で、カードを1枚ドロする。俺は審判鳥のカウンターを使いドロ』

審判鳥 PE4→1

引いたカードは『幻想体 小さな魔女 レティシア』。効果を使えばさらにドロできるが、相手もドロするので一つ間違うと逆転の可能性が出てきてしまう。

俺は少し悩んだ末、

『……俺は手札から幻想体 小さな魔女 レティシアを守備表示で召喚』

レティシア DEF600

『えへへ！ 黒っぽいお兄ちゃん！ こんばんわなの！』

『むう。どうして私まで』

場にレティシア（本人）と、抱えられたままのネクが出現する。悪いけどお話は後でな。

『レティシアの効果をアームド・ドラゴンを対象に発動！ 互いに1枚ドロする。そしてアームド・ドラゴンはこれから2度目のお前のターンまで、攻撃宣言した瞬間破壊される』

『プレゼントだよっ！ えい！』

レティシアが放ったハート形の物体がアームド・ドラゴンの頭上に停まり、互いのプレイヤーに恩恵を与える。

「おいおい。俺にわざわざ引かせて良いのか?」

『少々危険だが、多少のリスクを冒してでも今が攻め時だと思つてね』

俺の推しはまさかと思う状況からでも普通に逆転してくるからな。なら悠長に構えて待つよりも、こつちから動いて主導権を狙う方が良い。

そして、俺がリスク覚悟で引いたカードは、

『……来たぜ。まず審判鳥の効果発動。相手の場の守備表示モンスター、または裏側表示のカードを破壊する。俺は守備表示のWーウィング・カタパルトを破壊』

審判鳥の翳す天秤の光により、ウィング・カタパルトが爆散する。まず1体。

『次だ。俺は魔法カード『幻想体脱走』を発動! LPを1000コストに、俺の場の幻想体モンスターを1体選択。そのカードより2つまでレベルの高い幻想体をデッキから特殊召喚する。レベル4のレティシアを選択し、デッキからレベル5の『幻想体 魔弾の射手』を攻撃表示で特殊召喚!』

バランサー LP1300↓300

魔弾の射手 ATK2000 CC3

「くっ!? そのカードは!」

『さらに俺は魔法カード『幻想体再抽出』を発動。墓地より罪善さんを守備表示で特殊召喚。そして効果により、俺の場のカード×300LPを回復する。俺の場のカードは計6枚。よって1800回復』

罪善さん DEF200

バランサー LP300↓2100

『魔弾の射手の効果！ 場のPEカウンターを3つ。またはLPを1000払い、相手のカード1枚を破壊する。俺は1000LPを払いアームド・ドラゴンを破壊。その後乗っているクリフォトカウンターを1つ減らす』

バランサー LP2100↓1100

呼び出した魔弾の射手はニヤリと嗤い、肩にかけたマスケット銃をおもむろに一発撃ち放つ。弾丸はぎゅんぎゅんと軌道を変えつつアームド・ドラゴンに迫り、そのまま顎を撃ち抜いて撃破する。

魔弾の射手 CC3↓2

『行くぞ。バトルフェイズ。審判鳥でXYZに攻撃！』

「攻撃力はどちらも同じ2800。相打ち狙いか!？」

審判鳥のロープに全身縛り上げられるXYZだが、やられ際にキャノン砲の一撃で審判鳥を迎撃。そのまま両者破壊される。

『幻想体脱走の効果によりこのターン、相手に戦闘ダメージは与えられない。よつてこれで俺はターンエンド。そして魔弾の射手、及び古い信念と約束の効果発動』

魔弾の射手 CC2↓1

そこで俺は持っていたコインを指で軽く弾き、手の甲でパシツとキャッチして面を確認する。

『表だ。よつて破壊はされずこのまま場に残る。……さあ万丈目。どう出る?』

頼みのXYZもアームド・ドラゴンも破壊され万丈目の場はがら空き。対してこつちはLPをコストにカードを破壊する魔弾の射手に、LPを回復できる罪善さん。そして相手の攻撃を抑制できるレティシアが揃っている。

そして万丈目の手札はレティシアの効果で引いた1枚のみ。そんな絶望的な状況なのに、

「……ふっ。面白〜」

万丈目は笑って見せた。

勝負を投げた諦めの笑みではない。自暴自棄になつた顔でもない。

あくまで冷静に、この引きで逆転して見せるといふ闘志に満ちた笑みだ。

だからこそ、

「俺のターン。……ドローオッ」

諦めない男の下には奇跡が舞い降りる。

「久城。さつき攻めを焦って俺に追加ドローを許したのは失策だったな。そのおかげで逆転の手が来たぜ。……俺は魔法カード『おジャマンダラ』を発動！」

おジャマンダラ？ また聞いた事のない……さつきのおジャマ・ゲットライドのようにアニメオリジナルのおジャマサポートカードか？

「俺の墓地におジャマ三兄弟が揃っている時、LP1000を支払う事で、それぞれ1体ずつ俺の場に特殊召喚することが出来る。戻ってこいお前達」

万丈目 LP2200↓1200

『カムバックスクなのよん！』

おジャマ・イエロー DEF1000

おジャマ・グリーン DEF1000

おジャマ・ブラック DEF1000

万丈目の場におジャマ達が帰還する。この流れは嫌々な予感がするな。だがまあそれはそれとして、

『一気に壁モンスターを増やしたか。だがそれだけじゃ次のターンを防ぐだけで手いっ

ばい。逆転までは行かないな』

「心配するな。逆転はこれからだ。さらに俺は魔法カード発動！ 『おジャマ・デルタ・ハリケーン』！ 相手の場のカードを全て破壊するっ！」

げげっ!? これはマズい。

おジャマ達が揃っていないと使えない魔法カードによって、俺の場のカードが全て薙ぎ払われる。

『……驚いたな。たった2枚の手札で俺の布陣が壊滅したか』

『びっくりしたの!』

カードは破壊されても精霊としてのレティシアは健在。ネクを抱えながらふよふよと半透明になって俺の横に浮遊する。罪善さんや審判鳥も一緒だ。

「俺はこれでターンエンド。形勢逆転だな」

『確かに数の上ではな。だがおジャマ達自体は攻撃力0。そちらは手札を使い切り、LPも俺とほとんど差はない。再逆転は充分あり得るぞ』

もう一ファンとしてはここまでの逆転を見せてもらっただけで嬉しいのだが、ここまで来たら一プレイヤーとして勝負を楽しみたい。

「はっ! やらせんさ。ファンの前だからこそこの勝負、俺は負けんっ!」

『結構だ俺の推しよ。それでこそ、挑み甲斐があるっ!』

叩けば叩くほど、窮地に陥れば陥るほど強くなる。だからこそどこまで伸びるかその先をもう少し見てみたい。そのために、

「行くぞっ！ ド」

ズオオオオオンっ！

突如強烈な音と振動が周囲を襲った。そして何故か俺達を覆っていた大鳥の暗闇が晴れ、本来の学園本棟近くの森の中に戻る。

『な、何だっ!』

「おいっ!?! あれを見ろっ!?!」

困惑する俺に対し万丈目が指さしたのは、遠くから見える巨大な光の柱。

『アニキっ!?! こっちにもあるのよくんっ!?!』

『あつちにもあるよ遊見お兄ちゃんっ!?!』

グルア!

おジャマ・イエローやレティシア、大鳥が指すように、光の柱は一本ではない。その数合わせて四本。……んっ!?! 四本っ!?!

『どうやらピンときたようだな我が生け贄よ。……おそらくこれは七精門の封印が破

れ、三幻魔が復活する前兆だ』

「何をバカな。まだ半分近くも鍵が残っているんだぞ」

万丈目がネクの発言にそう返した瞬間、

ズオオオオオン！

また一つ新たな柱が空へと伸びあがった。

『これで五本。あと二つだ』

『……もし仮に誰か鍵の守り手が負けたとして、それでもまだここに一つある。勝負も着いていない以上、完全に封印が解ける筈は』

ピカアアンっ！

その瞬間、万丈目が首から提げていた鍵が光を放ち、そのまま首からするりと抜けて宙に浮く。

「何っ!？」

『マズイっ!?! 捕まえろっ!』

嫌な予感がして慌ててそう言ったが時すでに遅し。飛び掛かったレティシアとおジャマ・イエローの腕をすり抜けるように、鍵はそのままどこかへと飛んでいく。

何が何だか分からないが、どう考えても一つこれだけは言える。

『追いかけるぞ！ あれを放っておいたら三幻魔が復活するっ!?!』

「走れっ！」

俺は大鳥に頼んで背に乗り、万丈目達と一緒に空飛ぶ鍵を追いかけ始めた。

飛び去る鍵を追いかけろっ！



『E・HEROエリクシーラー』の攻撃っ！ 『フュージョニスト・マジスタリー』っ！』

「ぐおおおっ!？」

アムナエル L P O

十代WIN！

「大徳寺先生っ！」

俺は膝を突くアムナエル……大徳寺先生に駆け寄った。

特待生寮の奥深く。タイタンと戦った所のさらに奥。そこにあつたアムナエルの実
験室で、翔と隼人を立会人に俺達は戦った。

デュエルの中で、大徳寺先生は色々な事を話してくれた。自分の肉体はもうとつくに
滅んでいて、今の身体は自分が造ったホームンクルスにすぎない事。そしてその身体もも
う長くはない事を。

最初はそんな事信じられなかったけど、実際に実験室に安置されていた大徳寺先生の元の身体のミイラを見せられたら信じざるを得なかった。

あと俺には最高の錬金術師、類まれなる融合使いの才能があるとも言われたけれど、そっちは良く分からなかった。

「十代……最終試験は見事合格だ。錬金術が全てを金に変えるというのは表面の現象にすぎない。その真意は、人の心をより純粹で高貴なモノに変える事なのだ。……君は今その真実を知った」

「大徳寺先生っ!?! 身体がっ!?!」

そう言いながら、大徳寺先生の身体の表面がカラカラに干からび、一部に至っては砂みたいにさらさらと散っていく。一体どうなっただっ!?!

異常を察した翔と隼人も慌てて駆け寄ってくる。

「まだ……大丈夫だ。ぐうっ!?!」

大徳寺先生は苦し気な笑みを浮かべながら、デュエルの時も手放さなかったウジヤト眼を象った一冊の本を翳す。

するとウジヤト眼から光が放たれ、身体の崩壊が治まっていく。でも完全には治りきらなくて、腕にヒビのような痣が残ってしまった。

「ふふっ。これが、もう長くないと言った理由さ。どうしても今の身体と私の魂で拒絶

反応が起こってしまう。このエメラルド・タブレットで抑え込んでいるが、次かその次ぐらいにはこの身体は限界を迎えて崩れ去るだろうね」

「そんな……そんなのって」

翔が涙を流していた。隼人や俺だってそうだけどやるせなくて仕方ない。だって、大徳寺先生はこのままじゃ死んじまうって事だろ？

だってのに大徳寺先生は……穏やかに笑っていた。

「私の目的は達した。私の研究を支えてくれた人物は強大な力を手に入れんとし、その心をいつの間にか曇らせてしまった。十代……いずれこの島には更なる災いが起きる。私には、その災いに対抗する力を育てる必要があった」

「だから……先生はセブンスターズとして戦いに参加したんだな？ 俺達を鍛えるために」

俺の言葉に大徳寺先生は静かに頷く。

「強大な闇の力に対抗できるのは、強い精霊の力とデュエルの腕を兼ね備えた者が適格だからね。荒療治になるが、時間がない私にはこの手しかなかった。……今頃はバランスが万丈目君の最終試験として立ち塞がっている事だろう」

「……って事は、バランスも大徳寺先生の事を？」

「ああ。知っている。……彼にはすまない事をした。彼は最初にこの事を知って、自分

からセブンスターズ側に均衡をとる人に balanサーとして入ると言ってくれた。調整役として少しでも私の負担を減らそうと。……その尽力がなかったら、私の身体はとうに限界を迎えていたかもしれない」

そうだったのか。やっぱり balanサーは悪い奴じゃなかったんだな！ なら万丈目の勝負は、たとえ闇のデュエルだとしてもどっちが勝とうと酷い事にはならない筈だ。

何はともあれこれでセブンスターズとの戦いは終わる。先生の言う大きな災いってのはまだ分からねえけど、何が来たって俺が……いや。万丈目や遊兎、カイザーに三沢、明日香、学園の皆が居る。それに、

「さあ。戦いは終わった。一緒にレッド寮に帰ろうぜ大徳寺先生。その大きな災いって奴が来てても、当然手を貸してくれるんだろ？」

俺はそう言って膝を突いたままの大徳寺先生に手を伸ばす。

「……ああ。勿論だ」

大徳寺先生がその手を掴もうと手を伸ばし、

クリクリっ!?

ズオオオオオンっ!

ハネクリボーの警告とほぼ同時に、突如強烈な音と振動が周囲を襲った。衝撃で実験室にあった機材がガタガタと揺れ、倒れて割れた瓶があちこちに散乱する。

「わあああつ!!？」

「な、何なんだな!!？」

こんな時に地震か!? しかし地震にしちやあこの音は？

クリクリっ!!? クリクリっ!!?

「んっ!!? どうした相棒? 何か外にあるのか?」

どこか慌てたような動きのハネクリボーに、俺達は急いで特待生寮の外に出る。するとそこには、

「光の……柱?」

「一本だけじゃないんだな!!? あちこちから空に向けて柱が伸びてるんだなっ!!?」

島の外周を囲うように、光の柱が次々に空高く伸びていく。さらに、

ピカアアンっ!

「何だ? 突然俺の鍵が……うわっ!!?」

急に胸に提げていた鍵が光りだしたと思ったら、そのままひとりで首から外れてど

ここかへと飛び去って行く。一体何だっただんだ!?

「これは……まさかあの方がっ!？」

「あの方? どういうことだよ大徳寺先生?」

「話は後だ。もし私の予測が当たっていたら恐ろしい事になる。早く鍵を追……ぐうっ!？」

何かに気づいたのか、急いで追いかけてようとす大徳寺先生だったが、身体の消耗が激しいのかそのまま倒れこんでしまう。ここは、

「翔っ! 隼人っ! 二人は大徳寺先生に肩を貸して先に本棟へ戻っていてくれ!」

「それは良いけど……アニキはどうすんのっ!？」

「俺は鍵を追いかける。任せとけて!」

ここに大徳寺先生を置いていくわけにもいかない。だから行くのは俺だけだ。そうして早速走り出そうとした時、

「待つんだ十代っ! ……これを」

大徳寺先生が、咄嗟に持っていた本の中から取り出した一枚のカードをこっちに投げ渡す。

「それは究極の錬金術師だけが扱える伝説のカード『賢者の石―サバティエル』。最終試験合格の証だ。今の君ならきつと扱える。持って行ってくれ」

「賢者の石。そんなすげえカードを……ありがとよ大徳寺先生！ 行ってくるっ！」
さあ。何が待っているか知らねえが、やっと戦いが終わったんだ。最後の最後で邪魔なんてさせないからな！



『急げっ！ 急いでくれ大鳥っ！』

グルルルウ！

ズシンズシンと足音を響かせ、飛び去った鍵を追って森の中を大鳥が激走する。

その背中に乗りながら、俺は万丈目にこれまでの事を簡単に語っていた。

「なるほど。アムナエルが大徳寺先生で、余命いくばくもない先生の代わりにお前が動いていたと。それでセブンスターの裏で理事長が暗躍していて、そいつがいよいよ本格的に動き出した可能性がある。そういう事か」

『ああ。そもそも理事長は緊急用の開錠手段を持っていると以前大徳寺先生は言っていた。俺はそれを合鍵があると判断していたが、このように鍵だけなら操作できるって意味だったのかもしれない』

「つまりこれまでの戦い全てが理事長の掌の上だったって訳か。……ふざけやがって」

万丈目は怒気を隠そうともしない。そりゃ必死にこれまで皆で戦ってきたのに、最後

の最後でなかったことにされたら頭にも来る。

『俺も同じだ。二重スパイをやっていた俺が言うのもなんだが、このやり方は許せない』
セブンスターズは理事長にスカウトされて集まった言わば傭兵だ。理事長にしてみれば、勝とうが負けようがデュエリストの闘志さえ集まれば良かったのだろう。

しかしその思惑はどうあれ、皆勝利をもぎ取るべく全力で戦ってきた。ダークネス、タニヤ、黒蠍盗掘団、アビドス3世、タイタン。

カミューラもやり口こそあれだったが一族の復興の為に全身全霊で挑んでいたし、アムナエルこと大徳寺先生に至っては自分の残り少ない命を懸けてまでだ。

そいつらの思いも懸かった学園側との戦い。それを全て終わってからならまだしも、終わる前に横から割って入られたとあつてはバランスーとしても黙っていられない。

『仮にあの鍵を理事長が操っているのなら、向かうのは七精門。近いぞ』
「さっさと終わらせてやるとしよう。……お前との決着はその後だ」

『ああ。楽しみにしてる……見えてくるぞっ!』

グルアッ!

大鳥の雄叫びと共に、森を抜けて見えてきたもの。それは、

「アナタの思い通りにはさせませんノ！ 影丸理事長っ！」

「くくくつ。良かろう。精霊の力を手に入れ、完全に三幻魔を解き放つ前の肩慣らしだ。……実力を見せてみよクロノス教諭。デュエルアカデミア実技担当最高責任者よ」

地面の上までせり上がった七精門。その中央で向かい合うクロノス先生と、中のカプセルに老人の入った多脚ロボットの姿だった。

いや何これ？

閑話 語られる理事長の目的と、奮起するクロノス先生



それは十代とアムナエル、バランサーと万丈目が戦いを繰り広げる中でのこと。

アムナエルによってアカデミア本棟に跳ばされていた鍵の守り手達。彼らは自分達だけのけ者にされたと知るや、一旦鮫島校長に事のあらましを説明すべく校長室に集まっていた。

「まったく。ここまでキツテ、いざ戦いという所でむりやり解散だなンテ、ありえないノ〜ネっ！」

「まあ少し落ち着きたまえ。生徒達の事は心配だが、試合自体は正しく執り行われる筈だ。……それにバランサー君も居る。最悪の事態にはならないさ」

事情を説明しながらも、クロノス先生は酷く憤慨していた。それを宥める鮫島校長。そんな中、

ズオオオオオオンっ！

突如強烈な音と振動が外から響き渡る。

「なっ!!? 何事なノ〜ネっ!!?」

「…………見ろっ!!? なんだアレはっ!!?」

真っ先に外を見たカイザーが、驚きで表情を変える。それに続くようにそれぞれ外を見ると、

「光の…………柱?」

「一本だけじゃない…………あちこちから空に向けて柱が伸びてるぞっ!!?」

島を囲むように、外周部から一本ずつ光の柱が伸びていく。そして、

「…………ぬっ!!? クロノス教諭っ!!? 胸に提げている鍵がっ!!?」

「鍵? 鍵がどうかしまし…………何でス〜ノっ!!?」

ピカアアンっ!

突如クロノス先生の提げていた鍵が光を放ち、首からするりと抜けてそのままいずこかへと高速で飛び去って行く。

「まっ…………待つノ〜ネっ!!?」

「あの方角はまさか…………諸君っ!!? 追うのだっ!!?」

真っ先に追いかけるのは持ち主であるクロノス先生。そして何か気が付いたのか、一

拍遅れて青い顔をした鮫島校長が走り出す。

「俺達も行くこうっ！」

「明日香は今度こそ僕と一緒に留守番だ。流石にその状態で鍵を追って全力疾走とはいかないからね」

「私も……いえ。分かったわ。今回ばかりは仕方ないわね」

そして体調を気遣われた明日香と付き添いの吹雪を残し、カイザーと三沢も後を追って部屋を飛び出した。

空飛ぶ鍵を追いかける鍵の守り手達。そして、その終着点は、

「やはり七精門かっ!?!」

遠目に見えていた奇妙な七つの建造物。それが普段地底にある七精門がせり上がってきた姿であると、鮫島校長はすぐに看破した。

そして、そこに鍵がするりと入り込み、また一つ光の柱が島の外周から伸び上がる。

「これは……どうなっているのか不明だが、まだ負けていないクロノス先生の鍵が吸い込まれた事で柱が増えたという事は」

「デュエルの勝敗に関わらず、ここに鍵が揃った時点で封印が解けるといふ事かっ！」

そう言うカイザーの言葉を肯定するように、また一つどこから鍵が飛来して柱が増える。

「あわわズイノ〜ネっ!?! あと一つで封印がつ!?!」

「まだだ。最後の一つさえ死守できれば……来るっ!?!」

そこに飛んでくる最後の鍵。しかしそうはさせまいと、鯨島校長を始めとした面々が身体を張って掴み取ろうとする。

幸いここに居るのは、日々デュエリストとしてカードの実力、並びにそれを十全に扱うデュエルマッスルも鍛えている男達。いかに空飛ぶ鍵だろうと、四人も居れば誰か一人は捕まえられる。

そうして鍵に飛び掛かろうとした瞬間、

「させぬぞっ!」

空からロボットが降ってきた。

大質量の物体の落下。直撃こそしなかったものの、その衝撃で周囲に砂埃が巻き上がり鍵の守り手達は鍵を見失う。その一瞬の隙が、鍵を建造物へと到達させた。

そして現れる七本目の光の柱。それに呼応するように、七つの建造物の中心にあたる

場所がゴゴゴと地面からせり上がり、そこから三枚のカードが浮き上がる。

「むうっ!? 三幻魔の封印がっ!?」

鮫島校長が声を上げる中、ロボットから伸びたアームが三枚のカードを回収した。

「カードが奪われるぞっ!?」

「それよりもまず、あのロボットは一体何なノクネ?」

一同が慌てふためく中、突如ロボットの内部から声が聞こえてくる。それは、

「フッフ。鮫島校長。私の声を忘れたのかね?」

「その声は……影丸理事長っ!?」

「時は満ちた。今ここに、三幻魔復活の儀式を行う」

鮫島校長の理事長という発言にも驚いたが、その影丸の続けた言葉に一同はさらに驚愕する。

「どういう事だっ! まだセブンスターズとの戦いが終わっていないのに、何故封印が勝手にっ!?」

「最初からそういう仕掛けだからだ。三幻魔のカードをここに封印し、その鍵を鮫島に託したのはこの私自身なのだ」

その言葉は本当かと一同は鮫島校長を見とと、校長は無言で肯定しつつ影丸を睨みつける。

「七つの鍵はお前達とセブンスターズを戦わせ、この島にデュエリストの闘志を蔓延させるための道具に過ぎない」

影丸は語った。自分は数年前、永遠の命と世界の覇権を手にすると言われる伝説のカード三幻魔を手にした事。だがその力を覚醒させるには、デュエリストの闘志に満ちた空間が必要だった事。そのためにこの学園を創り上げ、三幻魔の復活に見合うデュエリストを育てていた事を。

「本来なら戦いが終わるまで私は動かぬ予定であつたが、予想外にデュエリストの闘志が島に蔓延するペースが早くてな。カミューラの反乱は少々驚いたが、それも踏まえてセブンスターズ達は思ったより良い働きをした。……だが、もう用済みだ」

「ならば、お前の野望を打ち砕くため俺が相手をしよう。このアカデミアのカイザー。丸藤亮がっ！」

「いいや。セブンスターズ達も利用されていただけという事であれば、俺も黙っていられない。タニヤの誇りも込めて、この三沢大地がお前と戦うっ！」

利用されていた怒りも込め、カイザーと三沢。二人の生徒が名乗りを上げる。だが、「いや、皆さん少々お待ちを。……影丸理事長。約束をお忘れですか？」

そこに鮫島校長が待ったをかける。

一歩前に進み出ると、どこからともなく出したデュエルディスクを構える。

「あくまで戦うのはセブンスターズと学園から選出したメンバーのみ。それが済むまで理事長本人は手を出さず、もし学園側が勝利すれば三幻魔を諦める。これが互いの折衷案だった筈。それを破るおつもりならば……私が相手になりましょう」

「鮫島か。確かにお前ならば、デュエルで多少は私にも対抗できよう。だが……残念だ。お前には資格がない」

ぶわっ！

「むおっ!?!」

その瞬間、三幻魔のカードから衝撃波が走り、構えていた鮫島校長を吹き飛ばした。

「今のは……三幻魔の力」

「その通り。まだ覚醒には至らぬが、この程度なら造作もない。この三幻魔に挑めるのは、最低限自らも何かの力を持つか、何かしらの精霊を従える者のみ。これにはデュエルの腕は関係がない。……どれ。見定めてやろう」

ぶわっ！

「ぐあっ!?!」

「ぐうっ!?!」

さらに理事長の周囲へと衝撃波が走り、カイザーと三沢を校長と同じく吹き飛ばす。

そして、

「ノノノ……アリアツ！」

何故かクロノス先生だけ無事だった。

「な、何がどうなってますノノ？」

そう呆然とするクロノス先生の頭上に、

パタパタッ！

一羽の小鳥が舞い降りた。

「わっ!? この鳥またワタシの頭の上につ!? しっしっ! ここは危ないからさっさ

とどつか行くノノネッ！」

クロノス先生は手をバタバタさせて追い払おうとするが、小鳥は器用に直撃を避けつつ離れようとしないう。

それでいて、その視線はずっと影丸の方向を向いていた。その相手こそ、まさしく自分が罰するべき相手だと言わんばかりに。

「精霊が力を貸すとは、この中で最低限戦う資格があるのはお前だけか」

「ガビッソッ!? ノンノンソッ!?」

クロノス先生は首をぶんぶんと振って否定する。

（精霊だのなんだのオカルトチックな話でス〜ガ、ワタ〜シにはまるで何が何やら。相手もこの学園の理事長との事でス〜シ、ここはいつたん撤退を）

「別に逃げて構わんぞ。お前は最低限戦う資格があるというだけ。これからここにやってくる遊城十代。或いは万丈目準に比べれば、精霊が味方しているだけで精霊の力はほとんど持っていない。力を奪うにしても大した足しにはならんだろうしな」

「……………何でス〜ト?」

どこか挑発するようなその言葉に、クロノス先生はたまらず聞き返す。

「言ったであろう? 三幻魔復活の儀式を行うと。三幻魔の力をフルに扱うには私の力だけでは足らぬ。強い精霊の力を持つ者から力を奪いプラスしなければ。……セブンスターズとの戦いはその者を見つけるためでもあったが、二人も候補が見つかったのは幸運だった」

フフフと笑いながら、理事長は言葉を続ける。

「あとは、ここで三幻魔を用い精霊の力を持つ者を倒す事で儀式は完成する。完全に覚醒した三幻魔を従え、私は永遠の若さを手に入れるのだっ! フハハハハ」

「……………ないノ〜ネ」

「ハハハ……………何だ?」

どうにか逃げようとしていたクロノス先生は、キツと顔を上げて理事長を睨みつけ

る。

「許さないと云ったノ〜ネっ！ ……ワタ〜シ達は教育者。生徒達のより良い未来の選択肢を増やすために居るノ〜ネ。それを力を奪って未来を閉ざそうなど……絶対に許すわけにはいかないノ〜ネっ！」

「ほお。ならばどうするっていうのだ？」

「決まってるノ〜ネ」

教師のみが纏える特注のデュエルコートをばさりとはためかせ、クロノス先生は戦う構えを見せる。

「……クロノス先生」

「クロノス……教諭」

倒れ伏す鮫島校長達が見守る中、

「このデュエルアカデミア実技担当最高責任者。クロノス・デ・メデイチ。未だ健在な鍵の守り手として理事長。アナ〜タにデュエルを申し込みます〜ノっ！」

そう啖呵を切ったクロノス先生の姿は、間違いなく誇りある教育者だった。

ただ、それはそれとして、

「アナタの思い通りにはさせません！ 影丸理事長っ！」

「くくくつ。良かろう。精霊の力を手に入れ、完全に三幻魔を解き放つ前の肩慣らしだ。

……実力を見せてみよクロノス教諭。デュエルアカデミア実技担当最高責任者よ」

(つ、つい勢いでやってしまったノッネ)

内心ビビりまくっているのも事実だったりする。

クロノス対影丸 第一の幻魔



森を抜けた先で俺達が見たのは、七精門の中央で睨み合うクロノス先生と妙な多脚型ロボットだった。

その周囲には怪我をしたのか、どこかよろよろとしている鮫島校長、カイザー、三沢の姿がある。……いやこれ一体どういう状況!?

「おっ!?! 皆っつ! 無事かつ!?!」

そこへ十代も駆け込んできた。いつも胸に提げている鍵が見当たらない所を見ると、どうやらあつちも鍵が飛んで行ったらしいな。

「ふふふ。来たか。精霊の力を強く宿した者達にバランスーよ」

「……むっ!?! 十代君っ! バランスー君っ! 万丈目君もっ!」

『鮫島校長っ!?! これは一体?』

真っ先にこちらに声をかけてきたのは鮫島校長だった。よろよろと歩いてくる鮫島校長から、事の次第を説明される。

「つまり、あのロボットのの中に居る影丸理事長が全ての黒幕って訳か」

「で、その影丸理事長が三幻魔の力を完全に操るためには強い精霊の力が必要で」

『そのために精霊の力を持つデュエリストを倒してその力を手に入れよう』

ざっくり説明を受けて俺達は呆然とする。前に大徳寺先生からも聞いてはいたが、あの理事長まさかここまでするとは。

「今はこうして、最低限戦う資格があるとみなされたクロノス先生が身体を張って理事長に戦いを挑んでいるといった具合です。……くう。肝心な時に戦えないとは校長として不甲斐ない」

『気を落とさずに。こればかりは適性がない事にはどうにもなりませんからね。しかしクロノス先生に適性があったとは知らなか……なぬっ!?!』

そうしてクロノス先生をよく見れば、なんと頭の上に罰鳥が悠々と乗っかっている。……そういうえばこの場所は森の近く。ぎりぎり縄張り判定で三鳥も手を貸す事態になつていた訳か。

『理事長っ！ これはどういう事です？ この戦いはあくまで学園側とセブンスターズの戦いのはず。まだ全て終わっていないのにこんな所に出張してくるとは明らかルール違反ですが?』

「ルール違反? そもそも最初から裏切る気だったのは貴様だろうに片腹痛いわバラ

サー。アムナエル、そしてそこに居る鯨島と手を組み、私の計画を潰すために動いていたことは知っている。表面上は従っていたので手を下すことはなかったが、事ここに至ればもう用済みよ」

ぐっ?! まあ当然バレてはいるわな。こちらとしては、理事長に介入される隙を作らずに今日一日で全ての戦いを終わらせる予定だったが、それを読んでこつちがデュエルしている真つ最中に乗り込んでくるとは。

「こっとなつたら……クロノス先生っ！ ホントは俺がやりたいけど仕方がない。そんなじいちゃんなんかデュエルでぶっ飛ばしてくれっ！」

十代が檄を飛ばすが、肝心のクロノス先生はどこか不安そうだ。まあ気持ちは分かる。今回の相手はどう見てもヤバイ。

アニメで言うなら間違いなくクライマックス。一年生編のラスボスか何かだろうな。そんな相手とデュエルはやりたくない。だが、

「ま、任せるノ〜ネ！」

そんな状態であっても、逃げることなくクロノス先生はしっかりとその両の足で立っていた。

「よかろう。では、闇のデュエルを始めようか」

「……ハッ。三幻魔だろうが何だろうが、デュエルとは青少年にとっての光。よって闇

のデュエルなど認めませぬっ！ それをたつぷり指導して差し上げるっネ」

「デュエルっ！」

こうして、全ての元凶との戦いが幕を上げた。

クロノス LP4000

影丸 LP4000

「先行はもうっネ。ワタシのターン。ドロっ！ 手札から『アンティーク・ギアソルジャー古代の機械兵士』を守備表示で召喚。カードを一枚伏せ、ターンエンドなっネ」

古代の機械兵士 DEF1300

始まりは静かな立ち上がり。クロノス先生は壁モンスターと伏せカード一枚で様子見と言った所か。

対して影丸理事長の動きは、

「私のターン。ドロ。……私は、罫カードを三枚伏せる」

理事長の操るロボット。そのアームが器用にデュエルに三枚のカードをセットしていく。だが、

「妙だな。アイツ。自分の伏せるカードの種類を宣言したぞ」

十代が言うように、本来伏せカードが魔法か罠かなんて宣言する必要はない。

勿論心理戦のブラフとして宣言する場合もあるが、それにしても三枚ともというのも妙な話。

「まさかデュエルの初心者って事は？」

「それはないよ。影丸理事長のデュエルの腕はかなりのものだ」

初心者によくある失敗かと万丈目が口にするが、鮫島校長がそれを否定する。しかし三枚の罠……うんっ!? 三枚っ!? 確か幻魔の召喚条件って!?

「そう。これこそが幻魔を呼び出すのに必要な条件なのだよ。さあ見るが良いっ! 第一の幻魔をつ! 私は三枚の罠を生け贄に、手札の『神炎皇ウリア』を攻撃表示で特殊召喚!」

その言葉と共に、場に伏せられていた三枚のカードがふわりと舞い上がり、その中心から巨大な火柱が吹き上がる。

そしてそれが収まった時、凄まじい咆哮と共に中から現れたのは、どことなく神のカードの一枚『オシリスの天空竜』に似た禍々しい赤竜。

神炎皇ウリア A T K O

「これが……幻魔」

クロノス先生がそう冷や汗をかきながらポツリと漏らす。

見ただけで分かるがあれはヤバイ。日頃から幻想体達と接している俺だから言えるが、これまで出たどの精霊、幻想体よりも格段に危険だ。

「ウリアの特殊効果発動。『トラップ・ディスプレイストラクション』」

「何ですくの？ ……うぎやつ!？」

ウリアの放つ波動が周囲に響き渡り、クロノス先生の伏せていたカードが破壊される。

「三幻魔に罠は通用しない。通用するのは発動ターンの魔法・モンスター効果のみ。また、ウリアは効果によりターンに1度、セットされた罠を破壊できる」

げっ!? マンガ版神のカードと同じ耐性持ちかよ。ただあくまで破壊されるのが罠だけなのはまだ救いか。

「そして、ウリアの攻撃力・守備力は自身の墓地の罠×1000ポイントとなる。墓地の罠は三枚。よってウリアの攻撃力は」

神炎皇ウリア ATK0↓3000

「いきなり攻撃力3000か」

「ウリアよ。その雑魚を焼き尽くせ。『ハイパーブレイズ』っ!」

ウリアの吐いた炎のブレスが機械兵士を包み込み、そのまま凄まじい火力で焼き尽く

してしまふ。そして、その余波はクロノス先生にも牙をむく。

「ぐぬ……アチチチっ!？」

「クロノス先生っ!？」

「ふふふ。熱いか? 闇のデュエルにより、プレイヤー自身もこうして痛みを受ける。今回はダメージがなかったことからこの程度で済んでいるが、ダメージが大きければ大きいほど当然……サレンダーするかね?」

コート裾にちよびり火の粉が飛んで慌てていたクロノス先生だったが、その言葉を聞いてすぐさま首をブンブンと横に振る。ついでに頭に乗っている罰鳥も同様だ。

「ならば、私はこれでターンエンド。さあ。お前のターンだ。クロノス教諭」

クロノス LP4000 手札4 モンスター0 魔法・罠0

影丸 LP4000 手札2 モンスター 神炎皇ウリア 魔法・罠0

「これは……クロノス先生の分が悪いな」

「ああ。相手は攻撃力3000。そして罠は問答無用で破壊され、魔法やモンスター効果も1ターンしか効かない。おまけに相手のデッキには、それと同格のカードがあと2体も」

カイザーと三沢は冷静に今の状況を分析する。

確かに今の流れは完全に理事長の方にある。おまけにアニメ版の強力な耐性持ちの幻魔がこれ以上出てきたらますます状況は不利になる。だが、

『どう思う十代？ クロノス先生がこのまま負けると思うか？』

「いーや。ちつとも。だってクロノス先生は強いからな！」

十代はそうにかつと笑う。ああ。俺も同意見だよ十代。

少なくとも、クロノス先生の眼はまだ幻魔相手に死んでいない。

とはいえ、闇のデュエルで消耗がこれから激しくなるのもまた事実。万丈目に渡したペンダントをクロノス先生にとも思ったが、もうデュエルが始まってしまった以上効果がどこまで望めるか。

ここは……いよいよアイツの出番かもな。

「ワタシのターンっ！ 手札から魔法カード『天使の施し』を発動！ 3枚ドローし、その後手札から2枚捨てるのーネ！ ……さらに永続魔法『古代の機械城』アンティーク・ギアキャッツルを発動！

このカードがある限り、全ての古代の機械の攻撃力は300アップするのーネ！」

クロノス先生は手札交換から、アンティーク・ギアの地力を上げるカードを発動。そして、

「行くのーネ！ 私はさらに装備魔法『早すぎた埋葬』を発動！ コスト800を支払

い、天使の施しで墓地に落とした『トロイホース』を特殊召喚！　そして、トロイホースを生け贄に『古代の機械巨人』^{アンティークギアゴレム}を攻撃表示で召喚するノッネっ！」

クロノスLP4000↓3200

古代の機械巨人 ATK3000↓3300

「ほお。攻撃力3300か」

「確かに幻魔の力は強大。しかし、決して無敵ではないノッネ。効果の効きが悪いのナッラ、真っ向から打ち破るのみ。バトルなノッネっ！　古代の機械巨人で、神炎皇ウリアを攻撃っ！『アルティメット・パウンド』っ！」

機械巨人の鉄拳が、三幻魔の一角を打ち砕いた。

クロノス対影丸 第二の幻魔

「ぬうっ?!」

影丸 LP4000↓3700

「言い忘れていましたら、古代の機械巨人が召喚された事で古代の機械城の効果発動。カウンターが一つ乗ります。ワタシはこれでターンエンド」

機械城 カウンター

「よっしや! クロノス先生が三幻魔の一体を倒したぜっ!」

「ああ。おまけに理事長は手札を大きく消耗している。畳みかけるなら今だ」

十代達はウリアを倒した事に歓声を上げる。クロノス先生と頭に乗る罰鳥もドヤ顔だ。しかし、

「ほう……まさか幻魔を倒して見せるとは少し驚いたぞ。流石は実技担当最高責任者と言っておこう。だが次のターン。お前は三幻魔の力に絶望を味わう事になる。私のターン。ドロー」

影丸理事長はまだ余裕の態度。油断するなよクロノス先生。

クロノス LP3200 手札2 モンスター 古代の機械巨人 魔法・罨 古代の機械城

影丸 LP3700 手札3 モンスター0 魔法・罨0

「神炎皇ウリアの効果発動。1ターンに1度、手札の罨カードを墓地に送る事で墓地より復活する！ 手札から『セメタリー・ボム』を墓地に送り、甦れウリアっ！」

「な、なんでス〜ツテ!？」

神炎皇ウリア ATK3000↓4000

「マズいな。罨を墓地に送った事で、ウリアの攻撃力も上昇している。古代の機械巨人を上回ったぞ?!」

おい嘘だろっ!? カイザーはさらっと言っているが、現実のウリアにそんな蘇生効果はない。これもアニメ版効果かよ!?! 毎ターン手札1蘇生で攻撃力アップの耐性持ちって強すぎるぞ!?!

「そしてウリアで攻撃……すると思うか?」

そこで、何故か影丸理事長はそのまま攻撃宣言を行わなかった。

「先ほどギャラリーがほざいていたな。手札を消耗していると……確かに三幻魔の唯

一の弱点はそのコストの高さだ。だがそれを補うカードも当然あるのだよ。私はフィールド魔法『失樂園』を発動っ！」

その瞬間、地鳴りと共にフィールドが展開されていく。

森の近くの開けた場所だったのが、中央に枯れ果てた一本の樹のそびえる荒野へと。そして、

“あなたのあらゆる病を治し、あなたを治療しましょう”。

トクンっ！

軽い鼓動の高鳴りと共に、どこからかそんな声が聞こえた気がした。

『……んっ!? 今、誰か何か言ったか?』

「どうしたバランサー? カードのエフェクトの音じゃないのか?」

『いや、何か言葉のようだったんだが……気のせいかな?』

俺は首をかしげながらもクロノス先生の試合を見守る。

しかし失樂園か。あれは確か三幻魔専用のドロウ加速カード。

「場に幻魔が居る限り、1ターンに1度デツキから2枚ドロウできる。効果により2枚ドロウ。そしてドロウした魔法カード『強欲な壺』の効果によりさらに2枚」

「くっつ!!」ここにきて連続ドローなの〜ネ?!

クロノス先生の頬を冷や汗が流れる。そして、

「……ふふふ。クロノスよ。一度幻魔を倒して見せた貴様への褒美だ。拜ませてやろう。2体目の幻魔をつ! 私は手札から魔法カードを3枚セット」

そう言つて影丸は場にカードを伏せていく。

「また伏せカードの種類を宣言した。……つて事は?!

「見るが良い。これが第二の幻魔つ! 3枚の魔法を生け贄に出でよつ! 『降雷皇ハモン』っ!」

そこからはウリアの時と同じ。場に伏せられていたカードが舞い上がり、今度は凍てつく氷塊がその中央から出現する。

そして空から落雷が氷塊に直撃したかと思うと、その中から禍々しいどことなく『ラーの翼神竜』を思わせる姿の黄色い悪魔が出現する。

降雷皇ハモン ATK4000

「これが……第二の幻魔」

「攻撃力4000のモンスターが2体つ!」

これは厳しいっ!?! おそらくこちらもウリアと同じくアニメ版効果持ち。

理事長め。手札の大量補充から全消費でこんな大型モンスターを揃えてきやがった。

これではクロノス先生のライフがっ!?

「行けハモン。古代の機械巨人に攻撃。『失楽の霹靂』っ!」

ハモンの咆哮と共に、空から落雷が列を成して荒野に叩きつけられる。

機械巨人は強烈な雷をその身に受け、ぷしゅくと音を立てて動きを止め、爆散した。

「ぐぬぬっ!」

クロノス LP3200↓2500

「まだだ。ハモンはモンスターを破壊した時、相手に1000のダメージを与える。受けるが良いっ! 『地獄の贖罪』っ!」

「ノオオオオオっ!」

「クロノス先生っ!」

クロノス LP2500↓1500

雷撃がクロノス先生を襲い、鍵の守り手達から悲鳴混じりの声上がる。これはヤバいっ!? ただできえこれは闇のデュエル。おまけに幻魔の効果ダメージなんて肉体にどれだけの負担をかけるか。

ぷすぷすと身体から煙が上がり、その場に膝を突くクロノス先生。そして、

……キッ! パタパタ!

先生ごと雷撃を受けた罰鳥が、身体を真っ赤に染めて翼をはばたかせ……そのままポ

トリと地に落ちた。

「……ぐう。し、しつかりするノ〜ネ。その鳥」

クロノス先生が、倒れながらも罰鳥に声をかける。しかし流石の罰鳥でも幻魔の一撃には耐えられ……んっ!?

よく目を凝らしてみれば、罰鳥から何か光の粒子のようなものが三幻魔に吸い込まれている。それだけじゃなく、俺達の持つているカードからも何か伸びている。これはまさかっ!?

『皆っ!? 自分のデツキを確認しろっ!? 何かおかしいっ!』

「今頃気が付いたかっ! 三幻魔が場に現れた瞬間から、お前達のモンスターを吸い上げている事に」

「何だっつてっ!」

この場の全員が慌ててデツキを確認する。するとそれぞれカードの絵柄が少しずつ薄くなっていた。

「まさか幻魔とは、他のモンスターの精気を吸い取り力を発揮するモンスターっ!」

「だからこそ封印されていたって事か」

「その通り。だがその力は私もまだ完全に制御しきれておらぬ。それに場に居る幻魔も未だ2体。これではこの七精門の結界内の者から吸い上げるだけが精々よ。だからこ

そつ！ 私にはより強い精霊を操る力が必要なのだつ！」

影丸はそう力強く宣言する。ただそれにしては俺の方のデッキはあまり変化がない。……それに十代や万丈目も無事そうだ。

『……遊児。油断しないで。今は私や罪善の加護とその服のおかげで影響が少ないだけ。長引けば徐々に影響が出てくるわ』

カタカタ！

バレないようにこつそりせいさんと罪善さんがそう教えてくれる。さらに、

クリクリ〜！

「おつ!? 相棒！ お前が助けてくれていたのか!」

半透明のハネクリボーが光を放って十代を守り、

『ねえ。万丈目のアニキ。さっきからそのペンダントが光ってるのよん?』

「なるほど。だからお前のような雑魚でもまだ元気な訳だ。これは使えるな」

万丈目はさつき持たせたペンダントに守られていた。幻魔の力もまったく防げないって訳でもないらしい。

「十代。そして万丈目よ。クロノスを倒した後はお前達を倒し、その精霊の力を我が物として見せる。その時こそ三幻魔の力は完全に制御され、世界中のデュエルマスターズの精霊の精気を食らい始める。そして……三幻魔は私に永遠の若さと命をもたらす

のだっ！　このようになって！」

その言葉と共にウリア、ハモンからカードの精霊の精気が理事長に向かって伸びていく。

「おおっ！　漲る。漲るぞっ！　力がっ！　うおおおおっ！」

バシャーンっ！

それは理事長の入ったカプセルが開き、中の培養液が外に排出された音。

そして中からニュッと手が伸びてロボットに装備されたデュエルディスクを掴み取り、そのまま何者かが飛び出してくる。

「り、理事長？」

鮫島校長がそうぼつりと呟く。だが、その声はどこか疑惑的だった。何故なら、

「……………ふむ。予想よりもまだ少々身体の張りが足りぬが、それでもこの自らの両の足で再び大地に立つ感覚。完全とはいかぬが遂に若さと肉体を取り戻した。素晴らしいぞ！　フハハハハ！」

そこで高笑いを上げるのはこれまでのよぼよぼの老人ではなく、初老と言った具合まで身体に張りが戻った長髪の男だった。

「こいつが……………影丸理事長？」

「ああ。だが影丸理事長はもう百歳を超える御高齢の筈。それがここまで若返るとは」

俺達は目の前の光景に唾然とする。話には聞いていたし、なんなら俺も別口とはいえない。そうなのだが、目の前で本当に若返ると驚く。

しかもまだ幻魔の力が不十分でこれだ。全て揃ったなら全盛期まで若返るんじゃないか？

「さあ。デュエルを続けよう。トドメと行きたい所だが、ウリアは効果で復活したターン場に自分のモンスターが他に居ると攻撃できない。私はこれでターンエンドだ。……と言っても、もう続行は不可能かもしれない。力を貸していた精霊の方がこの有り様では」

そう言つて影丸理事長はデュエルディスクを自らの腕に付け替える。そう。クロノス先生が今まで戦っていたのは、罰鳥が力を貸していたから。しかしクロノス先生はリアルダメージで膝を突き、罰鳥自身も精気を吸われてグロッキー。このままじゃ。

「ワ、私のターン」
クロノス先生が必死に立ち上がろうとするも、その足はブルブルと震えて力が入っていない。

それは身体へのダメージもあるだろうが、それに加えて2体の幻魔という圧倒的プレッシャーに潰されかけているからという風にも見えた。

「ふっ。もうよせ。そんなよれよれの身体で何が出来る？ 立つ事すらままならぬでは

ないか」

急にそこで理事長の口調が変わった。どこか今までより少しだけ優しげな声に。

「自分の足なのにまるで言う事を聞かぬもどかしさは私も良く分かる。それが痛みによるものか、老いによるものか、はたまた恐怖によるものかはさておいてだ。……お前はよく戦った。こうして幻魔を2体も引つ張り出させたのだ。面子も保てよう。……サレンダーするが良い」

クロノス先生はそれを聞いて、ちらりとこちらの方を見る。

「クロノス先生……」

「クロノス教諭」

鍵の守り手達の誰も、先生を咎めようという視線を向けなかった。

実際離れた所に居る俺達にまで、幻魔の威圧感はビシビシ伝わってくる。それを間近で受け続けるのにどれだけの負担が掛かる事か。

おまけに頼みの綱の罰鳥もこの有り様。この状態で次ダメージを受けたらただでは済まない。

なので、

「サレンダー……なんてしないノッネっ！ グヌアアっ！ ドローっ！」

そう言って歯を食いしばって立ち上がったクロノス先生に、ここに居る誰もが驚いた。

「……はあ……理事長。アナタは肝心な事を一つ忘れていますよ」

「何だ？」

「生徒に全部任せて自分だけ逃げる？ はっ！ ワタシは誇り高きメデイチ家の一員にして、デュエルアカデミア実技担当最高責任者っ！ デュエルで相手に背を向けて逃げるなんて……ありえませぬ」

そう言って、まだ震える足をパンつとはたいて強がって見せるクロノス先生。……それがアナタなりの答えか。

「……良かろう。ならばそのなけなしの誇りと勇氣も力で打ち砕くのみ。だがいかに虚勢を張ろうともうお前に戦う力はない。それをどのようにして……何っ!？」

そう言った理事長は何かに驚いたように幻魔を見る。すると、
「おい見ろっ！ 幻魔の精気を吸い上げる力が弱くなってるぞ!？」

三沢の言ったように、今までそれなりの量吸われていた精気が大分緩やかになっていった。それでもまだちびちびと吸われてはいるのだが。

……っ！ パタパタ！

罰鳥も僅かに精気を吸われる度合いが減ったのに気が付き、力強く羽ばたいてクロノス先生の頭の上に戻る。

「むう。不完全とはいえ幻魔に干渉できるとは……一体何者だっ!？」

「僕だけど気に障った?」

その聞き覚えのあるのんびりとした声は、ざわついていたこの場を落ち着かせた。

良かった。デュエル中こっそり連絡したからあとは間に合うかどうかだったが、上手く行っただみみたいだ。

「今の声……もしかしてっ!」

「ふん……そういう事か」

十代と万丈目は何かを察したように声のした方を見る。そこにはズシンズシンと足音を立てる大鳥。そしてその背に乗って、

「ふわあああつ。まさか寝ている最中に呼び出されるとは思ってたけど、友達のピンチに助けに来たよ!」

もけもけ!

大鳥に乗ってやってきたアカデミアの切り札。茂木もけ夫は、もけもけと共に寝ぼけ

眼を擦りながらそう言った。

クロノス対影丸 究極巨人対三幻魔

「茂木っ！ 助けに来てくれたのかっ!?」

「うん。久城君から連絡を貰って……ふわあ。眠たいけど助けに来たよー」

十代の嬉しそうな声に、茂木は眠そうにえへへと笑って見せる。

間に合ったか！ 俺は内心ホッとしていた。

このデュエルが始まって少しした時、俺は念のため茂木に連絡を取って大鳥に迎えに行かせていたんだ。

茂木の精霊の力は、自身の周囲の者を強制的に脱力させる物。それは三幻魔の周囲の精霊から精気を吸収する力と似た所がある。

ならそういう類同士が近くに居れば、多少ではあるが干渉しあえるのではないかと思っただが、

「おのれ……茂木もけ夫。精霊の力こそ強いが自身でコントロールできず、奪うには不適當と放置していたが、まさか僅かとはいえ幻魔の力に抗えるとはな。道理で想定よりもこの肉体の若返りが遅いと思っただわ」

「どうやら読みがドンピシャだったようだ。影丸理事長は少し苛立つようにそう吐き捨てる。」

「あはは……少し抗えるだけで、精気を吸う事を止める事は出来てないんだけどねえ。それにもけもけ達も精霊。結局の所幻魔に精気を吸われちゃうから、そう長くは保たなそう。その分他の人達が脱力する事態にはならなそうだけど」

もけ……もけえ。

茂木が困った顔で言うように、もけもけからも精気が僅かずつ幻魔に吸収されている。そして自身も周囲に影響を与え続けているためか、もけもけの表情は既にやや疲れ気味だ。だが、

「いや。それで充分なノ〜ネ。シニョール茂木」

クロノス先生はそう力強く口にし、罰鳥が頭の上でパタパタと羽ばたき追隨する。

「オカルトなノ〜テインチキ臭いと以前なら笑っていたでしょうが、以前アナ〜タを利用してシニョール十代を潰そうとした私が言えた義理じゃないノ〜ネ。細かい理屈は良く分かりませんが、あと数ターンだけで良いので持ちこたえてくださいイ〜ノ！」

「はあい。でも不思議な縁だねえ。あの時の先生が、今じゃ十代君達の為に戦っているんだから」

確かにな。あの頃のクロノス先生は酷い性格だった。自分の保身の為に生徒を追い

出そうとしたりとかな。

だが、今のクロノス先生は少し前とは違ってきた。相変わらず保身の事を考えるし強敵を前にしてビビったりもする。でも、最後には頑張つて生徒の為に身体を張る。教師として。

それを茂木も分かっているのだろう。相変わらずの眠そうな顔で、ふふつと穏やかにそう笑う。

「さあ。デュエルを再開するノ～ネ影丸理事長っ！ アナタの野望。ここで食い止めてみせませうっ！」

「来るが良いっ！ 捻り潰してくれよう。クロノス・デ・メデイチっ！」

クロノス LP1500 手札3 モンスター0 魔法・罫 古代の機械城

影丸 LP3700 手札0 モンスター 神炎皇ウリア 降雷皇ハモン 魔法・罫
失楽園

「しかし、影丸理事長の場には攻撃力4000の幻魔が2体。そして罫カードはウリアに問答無用で破壊され、壁モンスターを出してもハモンの効果ダメージが来る。厳しい

状況だぞ」

三沢は冷静に今の状況を分析する。実際今の状況は極めて不利だ。だが、
「でも、クロノス先生はまだ諦めてないみたいだぜ。頑張れクロノス先生っ！」

十代の言う通り、クロノス先生の顔はまったく勝算のない男の顔じゃなかった。

まだ勝ち筋はある筈だ。古代の機械デッキには、それだけのポテンシャルがある。

「ワタシは魔法カード『強欲な壺』を発動！ カードを2枚ドロ」

「よし。クロノス先生も手札増強が入ったぞ。まだ行けるっ！」

「魔法カード発動！ 『古代の整備場』^{アンティークギアガレージ}！ 墓地に存在する『アンティーク・ギア』モン

スターを手札に加える。古代の機械巨人を選択するノッネ」

そう来たか。場には必要な生け贄を減らす機械城もあるし、手札から出す方法もない訳じゃない。

しかしまだ攻撃力が足りないし、単に壁にするだけなら機械兵士の方が出しやすい。それでも機械巨人を選んだとなると次の一手は。

「これで準備は整いましたっノ。私は魔法カード『融合』を発動！ 手札の古代の機械巨人3枚を素材にしますっノ！」

「クロノス先生が……融合？」

誰かがそうポツリと呟く。

そう言えば、クロノス先生はこの一年、デュエルで一度も融合召喚を行っていないかった。情報も出なかったし、もしやまだ実装されていないのかと思っていたが、どうやら違ったみたいだ。

「生徒相手に見せる事はないと思っていたこのカード。しかし、幻魔相手なら話は別。アンティーク・ギアの奥の奥の手。今こそお見せするノ〜ネっ！ 融合召喚っ！

『アンティーク・ギアルタイムットゴレム
『古代の機械究極 巨人』っ！』

古代の機械究極 巨人 ATK4400 ↓ 4700

ウオオオオオン！

重厚な咆哮のような駆動音と共に出現したのは、まるで半人半馬ケンタウロスのような姿の機械仕掛けの巨人だった。

自慢の剛腕はさらに厳つくなり、左腕に至っては巨大なメタルクローを装着している。おまけに機械城の効果でさらに攻撃力を上げ、かの究極竜の4500をも超えている。

「攻撃力……4700だどっ!?」

これには流石の影丸理事長も驚きを隠せない。一度ウリアを力で突破された上、自慢の幻魔をさらに真つ向勝負で越えてくるとは予想できなかっただろう。

「覚悟するノ〜ネ幻魔。バトルなノ〜ネ！ 古代の機械究極巨人で降雷皇ハモンに攻

撃っ！」

「ヌアアアっ!?!」

前よりも強化された巨人の鉄拳が、今度はハモンを粉々に打ち砕く。

影丸 LP3700↓3000

「……すげえ。すげえぜクロノス先生っ！」

「ホッホッホ！ これくらい、このワタシにかかれば当然ですくノヨ。これでターンエンドなノ〜ネ」

十代が目をキラキラさせて憧れの視線を向けるのに対し、クロノス先生は満更でもないように笑う。なんだかんだこうストレートに褒められる事ってあんまりなかったかな。

さあ。互いの手札は0。

しかし攻撃力だけなら究極巨人の方が優れているが、失樂園によって向こうは手札補充が出来る。

このまま押し切れるか？ クロノス先生。

「私のターン。ドロー。そして失樂園の効果によりさらに2枚ドロー」

予想通りと言うか、影丸理事長は効果により手札を補充してくる。そして、

「実の所、ここままでやるとは思っていないかった。まさかウリアに続きハモンまで倒して見せるとはな」

「お褒めに預かり光栄なノ〜ネ。その辺り査定に反映してもらえると助かるノ〜ネ」

理事長の僅かに感心したような言葉に、クロノス先生は軽口を叩くようにそう返す。ただし、その言葉と裏腹に表情は真剣。冷や汗までかいている。

それもそのはず。

「何だ……このプレッシャーは!？」

影丸から……正確に言えばその手札からとんでもない圧が放たれていたからだ。

奴め。今のドローで最後の1枚を引き当てたな。

「謝罪してやろう。所詮前菜とお前を舐めていたことに。私はフィールド魔法失樂園を手札から発動!。そして効果によりさらに2枚ドロー」

ちよつと待て。いやまさか……そんなのアリかつ!?。こいつ手札からフィールド魔法を張り替えやがったつ!?。しかも現代じゃ同名カードのターン1制限があるのに普通にこつちは張り替えで使えてるしつ!?。これもアニメ版効果かつ!?。おまけに、

「私は新しい世界を歓迎するためにランタンを燃やした者。私はあなたを治す薬を

持つて来た医者。私は道をたどる巡礼者”。

トクンッ！

まだだ。またどこかから声がした。

酷く優しそうで、穏やかで、それでいて……どこか痛ましく恐ろしい。そんな声が。

きよるきよると見まわしてみるが、そんな奴は影も形もない。失樂園が発動する度に声が聞こえるのは一体どういう事だ？ ……まあ良い。今はデュエルの方が問題だ。

「私は魔法カード『死者蘇生』を発動。墓地のハモンを攻撃表示で特殊召喚する」

降雷皇ハモン ATK4000

やっぱりか。ハモンもウリアと同じく現代版とは効果が違ってる。本来なら自分の効果以外で特殊召喚出来ない筈だが。

「まだだ。私は手札から『幻銃士』を攻撃表示で召喚。召喚時効果により、場に2体の銃士トークンを守備表示で特殊召喚する」

幻銃士 ATK1100

銃士トークン×2 DEF500

影丸の場に、背中に二本の筒を背負った悪魔とそのトークンが出現する。……マズイ。生け贄も揃った。となれば次の流れは、いよいよアイツが来る。

「さあ。見るが良い。これこそが最強の幻魔っ！ 場の幻銃士と2体の銃士トークンを
生け贄に捧げ、現れろっ！ 『幻魔皇ラビエル』っ！」
地の底から、最後の幻魔がやってくる。

クロノス対影丸 絶望を与える魔拳

クロノス LP1500 手札0 モンスター 古代の機械究極巨人 魔法・罨 古代の機械城

影丸 LP3000 手札0 モンスター 神炎皇ウリア 降雷皇ハモン 幻魔皇ラビエル 魔法・罨 失楽園

幻魔皇ラビエル。

それは現実にはカード化した際、三幻魔の中ではやや不遇であるという認識だった。

幻魔の皇の名を冠す割には攻撃力はハモンと同じ4000。そして持っている効果も直接的なカードアドバンテージに繋がりがりづらい。

ウリアのように場に居るだけで制圧力がある訳でもなく、ハモンのように効果ダメーシが付属している訳でもない。

おまけにまだ比較的専用構築をすれば出しやすいハモンやウリアと違い、悪魔族モンスター3体という生け贄の縛りと重さ。どうしても他の二枚に使いやすさで劣っている

た。だが、

「これが……最後の幻魔」

「幻魔皇ラビエル。なんて圧だ」

現実はその威容を見せる、どこか三幻神の一角オベリスクに似た青い幻魔を目の前にして、そんな甘い考えは一瞬にして吹っ飛ぶ。

そのモンスターから放たれる圧は、間違いなくハモン・ウリアと同格……いや、下手するとそれ以上。まぎれもない怪物だった。

幻魔皇ラビエル ATK4000

「ハハハハハッ！ 見るが良いっ！ これこそが幻魔皇ラビエル。幻魔を束ねる最強の幻魔だっ！ ……そして、これで全ての幻魔が揃ったっ！」

ギョーンっ！

「うっ!?! ……これは!?!」

「茂木っ!?!」

三体の幻魔が揃った事で、周囲から精気を吸収する力が格段に跳ね上がる。

そしてそれを緩和していた茂木ともけもけは、その影響を受けて苦しそうな声を上げ

た。

慌てて駆け寄ろうとする十代だったが、それを茂木は手で制する。

「大丈夫。だけど……アハハ。困ったな。もうそんなに長くは保ちそうにないかな」

「ふんっ！ 当然だ。これまで幻魔二体に干渉出来ただけでも奇跡。三体の幻魔相手に抗えるものかつ！ そして……ああ。漲る。漲るぞおっ！」

そう吠える影丸理事長の姿は、幻魔から送られる精気を吸収してどんどん若々しくなっていた。

最初は百歳を超えたよぼよぼの老人。さつきは初老と言った程度の男性。そして遂に、今は筋骨隆々の四十代半ばほどまでになっている。

「良いぞっ！ これだっ！ この若さと肉体。遂に取り戻したぞっ！ ……どれ。ふぬぬぬぬっ！」

（げえっ!? 嘘だろっ!?）

そう言つて声まで大分若返った理事長は、なんとさつきまで自分が入っていたロボットの足を掴み、そのまま持ち上げたのだ。

「……ぬうっ。もう少しと言った所か。全盛期であればこの程度、軽く投げ飛ばしてやったものを」

影丸はそのまま二、三度確かめるように腕を上下させると、難しい顔をしてゆっくり

とロボットを地面に降ろす。

「……なんて奴だ。あの少なく見積もつても百キロはくだらないロボットを持ち上げやがった」

「そこまで驚く事でもない。全盛期の理事長のデュエルマツスルは、それこそモンスターのようだったという話だ。降ろしただけで投げ飛ばさなかつたのを見るとまだ本調子ではないのだろうか」

「あれで……ですか？」

滅茶苦茶な怪力に唾然とする万丈目やカイザーに、鮫島校長はそう説明する。……なんてこつた。ただでさえ闇の力と権力を持っていて、その上素の肉体も超人級つてか。

そうして身体の調子を確かめていた影丸理事長だが、思い出したかのようにクロノス先生に向き直る。

「準備運動はここまでとしよう。……さて。クロノスよ。デュエルの続きだ。もつとも、もう勝負は着いたようなものだがな」

「なっ!!? 何を言うノッネっ!!? いかにも幻魔が三体揃ったとはいえ、まだ勝負は着いていませんノッ!!?」

クロノス先生は必死にそう叫ぶ。だがその額から流れる汗が、それが虚勢交じりであると雄弁に語っていた。

「クロノスよ。お前は分かっている筈だ。幻魔が三体揃った以上、もう抵抗は無意味だと。……これが最後の忠告だ。サレンダーし、我が軍門に降れ」

影丸理事長はゆつくりと片手をクロノス先生に向けて差し出す。

「先ほどもそうだが、俺はお前を高く評価している。お前は小手先の技術に頼らず、幻魔に真つ向から立ち向かい、力でウリアとハモンをねじ伏せて見せた。同じ事が出来る者は多くあるまい。……はつきり言おう。お前が気に入った。ここでただ潰すのが少々惜しいくらいにな」

肉体に精神が引つ張られているのか、いつの間にか自分を俺と呼称している影丸理事長。

ああ。確かにこの人はアニメで言うならボスクラスだ。

態度も言葉も傲岸不遜。しかしそれは幻魔の力だけでなく、自らから発する確かな力とカリスマに裏打ちされたもの。これで全盛期じゃないってのが本気で恐ろしい。

そんな相手から降伏を促されれば、大抵のデュエリストなら心が折れ屈服するだろう。目の前に幻魔が勢揃いしている今なら尚更だ。だが、

「……お断りします」

クロノス先生は、それでも屈服しなかった。

頭の上に乗る罰鳥が、同意するとばかりに羽をパタパタと羽ばたかせる。

「理事長。アナタは今こう言いました。ワタクシが小手先の技術に頼らず、幻魔を力でねじ伏せたと。だから気に入ったのだと。ですが……そもそも幻魔を力でねじ伏せようなんて方法を選ぶ者自体が少数派。アナタの言う小手先の技術で戦うのが普通なの……ネ」

足は震え、冷や汗は止まらず、それでもクロノス先生は言葉を紡ぐ。

「デュエルとは、決してパワーとパワーのぶつかり合いだけでなく、互いの技術による手の読み合いや裏のかき合い。時には相手の動きを妨害し、時には自身の有利とする状況に持って行くため敢えて相手の手を許す。そういう小手先の技術も全て含めてデュエルのな……ネ」

顔色は悪く、息も荒い。それでも尚、クロノス先生は目の前の圧倒的強者に向けて語り続ける。

「理事長。ワタクシ達は教育者。生徒の模範となるべき者であり、生徒の将来の道を広げるのが務め。それがたった一つの戦い方のみを認め、生徒にその戦い方を押し付ける。ノンノン。それではいけません……」

理事長は黙ってその言葉を聞き続ける。語るまでもないと思っっているのか、それとも

何か胸に響くものがあつたのか、それは分からないが。

「だからこそっ！ 勧誘されるのは非常に光栄でスゝガ、ここでサレンダーする訳にはいきません。ノ。仮にワタクシが負けたとしても」

そう言つて、クロノス先生は鍵の守り手達の方をちらりと見て、強張りながらも無理やり笑みを浮かべて見せる。

「後にくる者達が居る。ならワタクシのやる事は、次に繋ぐために少しでも幻魔の情報を得る事。……さあ。かかってくるノゝネ幻魔っ！ そして理事長っ！ このデュエルアカデミア実技担当最高責任者。クロノス・デ・メデイチが居る限り、生徒達には指一本触れさせはしないノゝネっ！」

「……クロノス先生。君はそこまで」

「先生……そんな事言わないで、勝つてくれよっ！」

「そうだっ！ まだもつとも場で攻撃力が高いのはクロノス先生のモンスター。いかに幻魔が相手とてまだ勝機はあるっ！」

鮫島校長を始め、クロノス先生の言葉に胸を打たれたのか何人かの目に涙が浮かぶ。

俺は……久しぶりにこの仮面が有つて良かったと思つたよ。なかつたらきつと情けない顔を皆に晒していたから。

「……良からう。お前の意思は伝わった。なら少々残念だが……その信念ごと力で打ち

砕くのみっ!」

「それは無理な相談なノ〜ネっ! 場のどの幻魔より究極巨人の方が攻撃力は上」

「甘いな。確かにその究極巨人の力は認めよう。だが……幻魔の力には届かぬと知るが良いっ! 幻魔皇ラビエルの効果発動っ!」

ラビエルが理事長に呼応するように咆哮する。その瞬間、ハモンとウリアが粒子となつてラビエルに吸収された。

「なっ?! 何が起こつているノ〜ネっ?!」

「幻魔皇ラビエルの効果。それは自身の場のモンスター2体を生け贄に、その攻撃力をこのターンの終わりまで吸収するっ! 他の幻魔をも糧とするからこそその幻魔皇であるっ!」

そう。ラビエルにはウリアのような制圧力はない。ハモンのような追撃力もない。あるのは、純粹なまでの暴力のみ。

幻魔皇ラビエル ATK4000↓12000

「攻撃力……12000っ!?!」

「後悔するが良い。そして誇るが良いっ! 最強の幻魔の一撃を受ける事になっ! 幻魔皇ラビエルの攻撃っ!」

マズッ!? これは闇のデュエル。そしてLPへのダメージはそのままリアルダメージ

ジに繋がる。

ここまで攻撃力の膨れ上がった幻魔の戦闘ダメージをともに受けたらクロノス先生は……こうなったらっ!?

『万丈目っ！ 墓守のペンダントをつっ!』

「何? ……分かった。ほらよっ!」

駆け出した俺に対し、万丈目は一瞬の後すぐさま理解してペンダントを放り投げる。

そして、もうここまで来たら正体を隠す必要もない。

『罪善さんっ！ セイさんっ！ 俺に加護全開でっ！ デー!っ！ 聞こえてるんなら俺の溜まってる分のエネルギーを二人に回せっ!』

カタカタっ!

『遊児っ!? やめなさ……仕方ないっ!? ありったけの加護をつっ!』

俺の身体から力が僅かに抜けるのと同時に、半透明の罪善さんとセイさんが光を放って身体の表面に輝く膜を張る。

「罪善さんにセイ……って事はバランサーっ！ お前の正体はまさかっ!?!」

悪いな十代。今は悠長に話している暇がないんだ。

「ラビエルよ。究極巨人を粉碎せよっ！ 『天界蹂躞拳』っ!」

「迎え撃つノッネっ！ 究極巨人っ!」

そして俺は、二体の超重量級モンスターの戦闘の余波からクロノス先生を守るため、ガードをガツチガチに固めてデュエルの場に飛び込んだ。

クロノス対影丸 決着 そして顕現する黒翼

「なっ?! バランサーなノ〜ネっ?!」

「むう。だが、今更審判役の出る幕などないわっ!」

場に飛び込んできた俺に対して二人は驚くが、理事長の言う通り勝負に直接の介入は出来ない。

ラビエルと究極巨人の拳がぶつかり合い、火花を散らしたのは短い時間。ビシリと究極巨人の拳にヒビが入り、どんどんそれは腕から肩にかけて広がっていく。

(くっ?! そう長くは保たないか。ならっ?!)

『罰鳥っ! 反撃分のエネルギーはクロノス先生の防御に回せっ! 罪人を罰するよりもまず守るべき者を守れっ!』

その言葉に罰鳥が、その小柄な体で精いっぱい翼を広げたのを確認し、俺はクロノス先生の前に出て身に着けた外套を前面に広げる。

ディー曰く多少は闇に耐性があるというこの仮面と外套。そして幻想体達の加護とペンダント×2の防御。今できる限界まで上げたガードだが、これでどこまで耐えられ

るか。

そんな中、ついに巨人に入ったヒビは肩から身体に向けて進行し、

「これで……終わりだあつー！」

バキッ!? バアーン!?

身体の動力部に到達。巨人は目の光を点滅させて力なく崩れ落ちる。

クロノス LP1500↓0

影丸 WIN!

クロノス先生のLPが0になり、影丸理事長の勝利が確定する。だが、それだけでは終わらない。

ラビエルの魔拳の余波が物理的破壊力を伴ってクロノス先生に、さらにその前に立つ俺に向けて襲い掛かった。

ズシンっ!

目に見える衝撃波がこちらに到達する直前、身体にとんでもない圧が掛かる。これが本来クロノス先生が受ける筈だった一撃か。

だが、生身のクロノス先生に比べればまだ俺の方が少しは耐えられ、

パリーンっ！

何かが、砕ける音がした。

それが俺の身に纏った加護の一つだと理解した瞬間、

『……ぐぎっ!?!』

全身を激痛が駆け巡った。しかもそれは一瞬ではなく今も続けている。

(攻撃力10000を超えた幻魔による戦闘ダメージ。分かってはいたが直接攻撃でもないのにここまでかよっ!?)

「もう良いっ!? もう良いノくネバランサーっ!? これ以上喰らってはアナタの身がっ!?!」

「そうだと。幻魔の力をその程度に加護で防ぎきれれるものか。もう倒れて楽になるが
良い」

『いや……まだ……だ』

暴力の嵐はいっ止むかも分からず、俺は膝を屈しかける。さらに、

パリーンっ！

『遊児っ!?!』

セイさんの焦ったような声。今砕け散ったのはセイさんの加護か。実体化する分まで防御に回してくれたのか、罪善さんとセイさんが半透明のまま悲痛な顔をしている。残るは仮面と外套とペンダントのみ。しかしもう外套を広げる俺の腕はガクガクで、墓守のペンダントも光が弱まっている。

幸いクロノス先生の方は全体で見ればかなり防げていて、しかも罰鳥が本来真っ赤に染まって反撃モードになる所を、白のまままで防御に徹しているため先生は多少苦しい表情なだけで済んでいる。

しかし……このままじゃ、

「ぐう……古代の機械究極巨人の効果発動っ！」

クロノス先生の号令の下、崩れ落ちた究極巨人の目に再び光が灯る。

「このカードが破壊された時、墓地の『古代の機械巨人』を召喚条件を無視して特殊召喚するノッネっ！ 古の巨人はたとえ破壊されても舞い戻るっ！ このワタクシが、生徒に守られてばかりはいられないノッネっ！」

「クロノス……先生」

全身のもう動かない部品をパージし、巨人は再び立ち上がる。たとえもう勝敗は覆らなくても、せめて主人とその生徒を守るために。

「『アルティメット・パウンド』オっ！」

「小賢しいっー！」

拳を振りぬいた状態のラビエルに、横から巨人の鉄拳が直撃する。

倒すことは出来ず、大したダメージにもならない一撃。しかしそれによつて僅かに体勢がズレ、こちらへの負担が少し軽くなる。だが、

『…………ふっ!?!』

(ちくしょうっ!?! こつちも限界かよっ!?!)

仮面の奥で僅かに吐血し、少しぼんやりとしてきた視界の中でそんな事を考える。あと現実的には数秒耐えれば攻撃エフェクトは終わる。しかし今の俺にとつてはその数秒があまりにも長い。

いよいよ立っていられなくなり、気が付けばぐりと足がもつれて手の力も抜ける。

(あつ…………こりやダメだ)

無防備になった俺に向けて、最後に特大の衝撃が襲い掛かる。これを乗り切れば終わるのだが、直感的に防ぎきれないと悟る。

セイさんが半透明のまま必死に盾になろうとしているが、それすらも届かない。

これまで何度もピンチになってきたが、今回こそはまさしく絶体絶命の大ピンチ。もうまともに立つ力さえない。それでも、

ズンっ!

足りない分は気合でカバー。根性論が万能とは言わないが、最後の一押しになるのは確かだから。

『こんな所で……倒れてるわけにはいかないんだよっ！』

どうにか足に力を込めて踏み込み、せめて最後まで抗ってやると倒れこむのだけは防ぎ、

『ああ……やつと届いた』

ピカッ！

突如胸のペンダントが光を放ち、周囲の世界が灰色となって停止した。

『……これはず』

目の前の幻魔の一撃も、横目で見えるクロノス先生や鍵の守り手達も動かない。

音すらも大半が静まり、聞こえるのは自分の鼓動くらい。

(もしかして……デイーが何かしたのか?)

似た状況には覚えがある。この世界に来る前、死の直前でデイーが時間を限りなく

ゆっくりにしたアレだ。アイツが手助けにでも来たのかと思つたが、さつき聞こえた声は明らかに違つていた。

すると、どこかからまた優しく痛ましい声が響いてくる。

“あなたに洗礼を。あなたに祝福を。あなたに救済を。さあ……私を、受け入れて。”
ドクンっ！ ドクンっ！

どんどん鼓動が強くなり、俺のペンダントが強い熱を持つ。そして、俺はふらふらと返事を返した。

『えっ!? お断りだけど?』

“……何故?”

その声は不思議そうに聞いてくる。いやそんなに不思議な事でもないだろうに。

『いきなり姿を見せないまま名乗りもせず、良く分からない事を言つて私を受け入れろも何もないだろ? ……アンタが敵じゃないのは分かるけどさ』

そう。その声からはまるで悪意も敵意も感じなかつた。むしろ善意とか友好とかそういうったものが感じられた。

だけど、それでいてどこか致命的にズレている。こいつにとつての救済は、人にとつての救済にならないみたいだ。

俗な言い方をすれば、世界規模のありがた迷惑というか善意の押し売りというかそん

な感じだ。

『まずは姿を見せて名前を教えてほしい。話はそれからだ。勿論見せられない理由があるなら聞くが』

“……良いでしょう”

すると、目の前にふわりと朧げな光が現れる。デーの光球とは違い、あくまで人型のようなだが姿ははつきりしない。

“私の本体はここには居ない。しかし影ならそこに届く。そして、私の名前は”

『ペスト医師っ!? 遊児から離れてっ!』

ヒュンつと見覚えのある細剣が俺とそいつの前に突き立つ。この剣は……セイさんっ!

『大丈夫遊児!? ……ゴメン。私の加護で防ぎきれないなんて』

カタカタ!?

セイさんは半透明のまま俺を守るように割り込み、さらに罪善さんも俺の肩の上にくわりと浮かぶ。

『二人共っ! ……セイさんが気に病むことないつて。俺もまさか幻魔があそこまでとは思っていなかった。そう言えば二人はここでも動けるんだな?』

『ええ。これはあくまで貴方の思考が走馬灯のように高速化して、それにペンダントを

經由して私達が同調しているのよ』

なるほど。……って!? 走馬灯ってつまり死にかけて事じゃんっ!? まああれだけの一撃だもんな。死にかけるのは当然か。

『え〜つと、ペスト医師だっけか? 名前と姿を明かしてもらったから改めて聞くけどさ。さつき私を受け入れてって言ったけどどういう事?』

カタカタっ!?

『ダメっ!?! 奴の言葉に耳を貸してはっ!?!』

『いや。どうもヤバイ奴って事は分かるけどさ。一応話を聞くって言っちゃったし』

罪善さんとセイさんが慌てて止めるって事はよっほどだ。しかしこんな時にわざわざ話しかけてきたんだから、何かしら向こうも伝えたい事があるんだろう。

だからこつちも腹を括り、どんなぶつとんだ内容でもひとまず聞くだけは聞こうとしたのだが、

“いいえ。ここは一度退くとしましよう”

そう言つて、ペスト医師はその臍気だった姿をさらにぼやけさせていく。

『えっ!?! 良いのか?』

“はい。こう睨まれていてはどうにも。それに……そうですね。あなた達の言葉で言うのなら、縁は結ばれました。似た名前などというこじつけではなく、あなたとの縁

が

ペスト医師は一度罪善さんの方をちらりと見ると、

「では、元の時間軸でいざれお会いしましょう管理人。いえ、我が最初にして最後の使徒よ。せめてもの手助けに、あなたに我が祝福があらんことを」

最後に何か変な事を言っただけ消えて行っただけ。使徒？ 祝福？ なんのこつちや？

『祝福……まさかっ!? 罪善っ！ 今すぐ遊兎に加護を掛け直』

その瞬間、再び世界は色を取り戻して動き出した。

落ち着いていた身体の疲労や痛みも元通り。セイさんと罪善さんは半透明のまま。そんな限界ギリギリの状態が幻魔の最後の一撃が迫ってくる。

焼け石に水かもしれないが、俺は少しでもダメージを減らすべく外套を掴もうとして、

バサッ！

その前に、何か俺を包み込むように広がった。その何かは幻魔の一撃にぶつかるのと、受け流すように衝撃を空へと逃がしつつ自らも霧散していく。そして、

「……見事だ。バランスーよ。幻魔皇の渾身の一撃を受け、五体満足で耐え凌ぐとはな」

『……はあ……こちらも……耐え凌げるとは思ってたよ。……何だか分からないが、コイツに感謝しないと』

攻撃エフェクトが全て終了した時、俺は満身創痕ながらそこに立っていた。

何故か外套から新たに生えて俺を守った、二対の黒翼をポンポンと叩きながら。

戦うのは一人。しかし支えるのは皆で

バサツ！

突如として現れた二対四枚の黒翼は、まるで役目は果たしたとでもいうかのようによく一度羽ばたき、そのまま粒子となって消滅していく。

死ぬかと思った。咄嗟に準備できる全てを防御に回しても尚そう思えた幻魔の一撃。だけど、それを無事しのぎ切ったのは間違いなくコイツのおかげだ。

ペスト医師。さつき時が止まったような空間で、俺に話しかけてきたそいつの置き土産らしき黒翼。

罪善さんやセイさんがあれだけ警戒するとなると余程の奴らしいが、どうにも嫌いなれないし少なくとも借りが出来た。何か企んでいるのかもしれないが、いずれまた会う事があったら話くらいは聞いてみるか。

しかし、今はそれどころじゃない。

『……はあ……はあ……ぐっ!』

命は助かったとはいえ、ダメージは間違いなく甚大だ。俺はまともに立つ事すら出来

なくなり、そのままがつくりと膝を突く。

そしてその衝撃で、カランと音を立てて着けていた仮面が地面に落ちた。

『……………見っ!!? ……遊……………っ!!?』

……………カタ……………カタっ!!?

見れば、罪善さんとセイさんがこちらに声を掛けようとしているが、それすらままならないほどにすっかり半透明になって消えかけている。

今の一撃を防ぐのにありつただけの力を出し尽くしたからだろう。そこまでしてくれた事には本当に頭が上がらない。

「バランサーっ!!? アナゝタは……………どっちにしてもしっかりするノゝネっ!!?」

「……………はあ……………クロノス先生こそ……………無事ですか? 無事でなかったら……………こうして身体を張って防いだ意味がないもので」

俺のすぐ後ろからクロノス先生が近づいてくる。少し足元がふらついているが、目立った外傷は見当たらない。

パタパタっ!

そして、代わりに最後まで純白のままクロノス先生を守り切った罰鳥は、最後に大きく羽ばたいてフツと姿を消した。実体化が保てなくなっただろう。よく頑張ってくれた。

「遊児っ?! しっかりしろ遊児っ?!」

そこへ十代を始めとした皆も駆け寄ってくる。俺の素顔を見て皆大なり小なり驚いているようだが、今は深く説明している暇もない。

「ああ。黙ってて悪いな十代。だがまあ話は後だ。今は」

「そうだ。 balanサーよ。……いや、今更正体を隠すこともあるまい。久城遊児よ。いかにお前が幻魔皇の一撃を満身創痕ながらも凌いで見せたとはいえ、デュエルの勝敗は変わらぬ」

今も尚威風堂々と立つ影丸理事長は、ラビエルを従えたままそうはつきりと宣言する。

その言葉通り、肉体は無事だったもののクロノス先生のLPはもう尽きている。最後にラビエルに一撃打ち込んだ古代の機械巨人も、限界を迎えたのか既に消滅している。

むしろ勝負がついたのに顕現を続けているラビエルの方が異常というべきか。

「これにより……むんっ!」

「……くうっ!?!」

理事長が軽く気合を入れると、ぶわっと周囲に軽い波動のようなものが広がり、幻魔の力を中和していた茂木が苦し気な表情を浮かべる。

もけもけもふらふらだし、もう幻魔の力を中和するのは限界か。……仕方ない。な

ら、

「この通りだ。戦いの中で幻魔は力を蓄え、俺自身も完全ではないにせよ若さを取り戻し、操れる精霊の力も上昇している。クロノスとの戦いは丁度良い肩慣らしとなった。その実力も含め褒めてやろう」

「そこを褒められてもあんまり嬉しくないノ〜ネっ!」

どこまでも上から目線のその言葉に、クロノス先生はグヌヌと顔を歪める。

「だが、まだ精霊の力も若さも完全ではない。やはり当初の予定通り、強い精霊の力を持つデュエリストを倒して力を奪わねば。……さあ。遊城十代よ。万丈目準よ。どちらでも良い。俺と戦え。断るというのならまず手始めにこの結界内、そして次にこの島の全てのデュエルモンスターズの精霊の精気を喰らい尽くすのみだっ!」

理事長め。好き勝手言いやがる。

正直ここで十代と万丈目が勝負を受けなければ、被害は最悪この島のみで済むだろう。理事長も中途半端に若返るだけで終わり、三幻魔も完全覚醒までには至らない。

しかしそれでも被害はとんでもない事になるし、なにより、

「ああっ! やってやるぜ影丸理事長っ! クロノス先生や遊児をこんな目に遭わされて黙ってられねえっ! それにお前なんかデュエルモンスターズの精霊達を好き勝手させてたまるかよっ!」

十代^{主人公}はこんな時逃げたりしない。

ザッと一步前に踏み出し、デュエルディスクを構えて臨戦態勢をとる。それを見た理事長は、予定通りとばかりにニヤリと笑う。

「それで良い。理論上は一人分で充分だが……お前は どうする？ 万丈目よ。何なら二人がかりでも俺は一向に構わぬぞ」

それは自分の力。及び三幻魔の力に対する絶対の自信によるもの。言葉通り二人がかりでかかってきたとしても負けはしないという、おそらく一年生編のラスボスにふさわしい風格。

だが今の言葉で墓穴を掘ったな。漫画版GXでは、ラスボスことトラゴエディアに十代と万丈目のタッグで立ち向かい勝利している。

つまりタッグデュエルはラスボスに対する特攻が乗ると言っても良い。おまけに主人公^{十代}と推し^{万丈目}のタッグだ。

これで一気に有利になる。そう思ったのだが、

「当然受けて立つっ！ ……とやりたい所だが、十代。この勝負お前に譲ってやる」

万丈目は珍しく勝負を避けた。それには理事長も少し予想外だったのか、僅かに眉を上げる。

「おうっ！ でも良いのかよ万丈目？」

「ああ。たとえ一人でも俺様は負けるつもりはないが……コイツがこのザマでな」

不思議そうな顔をする十代に対し、万丈目は苛立ち混じりにデッキから一枚のカードを取り出して見せる。それは、

『アニキイ……タスケテエ』

さっきの波動で精気を吸われ、普段よりガリガリの絵柄になっただけのおジャマ・イエローの姿だった。姿こそ見えないが、おそらくグリーンやブラックも同じような目に遭っているのだろう。

「この通り。雑魚共がすっかりグロッキーだ。この調子では普段よりさらに雑魚に磨きがかかってしまう。よって俺様は少しでも力を温存する。もつとも」

そこで万丈目は十代、及び理事長に向けてニヤリと不敵に笑ってみせる。

「もしお前が負けて情けない姿を晒すようであれば、その時は俺様の出番だな」

「へっ！ 言ってくれるじゃんか。任せとけって！ 幻魔だろうが何だろうが、俺が勝つからよ！」

そこで十代が拳を突き出すと、万丈目は意図を理解したのか呆れたように、しかししっかりと自身の拳を合わせる。

うゝむ。実に良い。気のせいかさつきから、理事長までもが何か眩しくも感慨深いものを見るかのようにほんの少しだけ雰囲気や和らいでいる。……すぐに元に戻ったが。

しかしそれはそれとして、タッグデュエルの方が勝率が上がるのは事実。幻魔相手には少しでも勝ちの目を増やしておきたい。あと普通に主人公と推しのタッグが見たい。なので、

「……はあ……待て……待つんだ万丈目っ！ 三幻魔は強大だ。わざわざ向こうが二人がかりでも良いって言ってるんだし、精霊への負担なら多少ならこのペンダントを使えば軽減できる。ここはお前と十代のタッグで……うわっ!？」

「無理はそこまでにしておけ久城」

どうにか軌道修正しようと言っていたが、ガツと万丈目に纏っていた外套を掴まれそのまま引きずられていく。そしてかなり疲労している茂木の所まで連れてこられた。

「茂木。もけもけと一緒にあとどのくらい三幻魔を抑えられる？」

「正直もう限界かも。どれだけ頑張ってもあと一戦。下手するとデュエルの最中に限界を迎えるかも」

「やはりな。……それで久城よ。お前の事だ。そのズタボロの身体に鞭打って、茂木のサポートに回ろうと考えているだろう？」

「……鋭いな。流石名探偵」

普通にやる事を読まれてたよ。唯一この中で幻魔の力を中和できる茂木が途中で万が一倒れでもしたら、それこそ幻魔の影響がどれだけ広がるか分からないからな。

最悪に備えていざとなったらカバーに入るつもりだったんだが。

「それは止めといった方が良いんじゃないかな？ 僕もとつても疲れているけど、久城君も相当だよ」

「そうだ。お前は充分過ぎるほど良くやった。なので茂木のサポートは俺様に任せろ。お前は身体を休めながらやり方だけ指示すれば良い」

……まいったな。あのプライドの高い万丈目が十代に戦いを任せたのも驚きだったっていうのに、今度は俺様に任せると力強く言ってくれるとは。ファン冥利に尽きる。

ならファンとしては、ここはその決意を信じるとしようか。

そして、

「行くぜっ！ 影丸理事長っ！」

「来るが良いっ！ お前を倒し、その時こそ俺は永遠の若さと精霊の力を手に入れるのだっ！」

いよいよ、十代と影丸理事長のデュエルが始まる。



アカデミア本棟の医務室にて、二人の人物がそれぞれベッドに横たわっていた。

一人は今も尚意識が戻らないカミューラ。そしてもう一人は、極度の疲労状態でここに担ぎ込まれた大徳寺先生だった。

本来なら理事長を止めるべく、最後の力を振り絞ってでも乗り込んでいった可能性が高いが、幸か不幸か疲労により途中で意識を失い、こうして点滴を打たれて穏やかに眠っていた。

ベッドの横には、彼の所持品が一つにまとめられている。

キイキイ。

窓の外ではコウモリの群れが、自身の主と新たなる部屋の住人をそつと見守っていた。

そして今もまた、遊兎の部屋付近で見張り（という体の滞在）をしている少数のコウモリと群れの一部が定期交代をしようかという所で、

パチリ。

吸血鬼が、目を覚ました。

死闘の裏。 駆け付けた者達

それは、まさしく死闘だった。

「受けよ十代。幻魔の力をつ！ 『ハイパーブレイズ』っ！」

「くううっ!? テンペスターの特殊効果発動っ！ 場のカードを墓地に送る事で、バトルでの破壊を無効にする。伏せていた『進化する翼』を墓地へっ！」

専用構築が必要な幻魔を、むしろ向こうに選ばれたとも言わべき豪運でやすやすと召喚して猛攻を仕掛ける影丸に対し、十代はカードを消費しながらも必死に食らいついでいく。

そして、その周囲では、
カタカタっ！

「万丈目っ！ 罪善さんの所がちよつと手薄になっている。そちらに力を流してくれ」
「任せておけっ！」

もけもけっ！

「万丈目君。今度はもけもけの方が破られそう。こちらにもちよつと回して」
「分かつてるっ！」

幻魔の影響を少しでも減らすべく、万丈目を始めとした精霊使いが必死に奮戦していた。

幻魔の力は周囲の精霊の力を吸い上げるもの。しかしもけもけ等の一部の精霊であればある程度抵抗、中和が出来る。

そのため七精門の結界に沿うようにもけもけ、罪善さん、セイさんといった精霊を配置し、それぞれに万丈目が俺や茂木を経由して力を注ぎこみ、どうにか幻魔の力を抑えていた。だが、

「はあ……はあ」

「大丈夫か万丈目っ!? やはり俺もっ！」

「うるさいっ！ 久城は黙って少しでも休んでおけっ！」

「そうだよ久城君。この中じや一番消耗してるのは君なんだから……ふう」

この通り。全員が疲労困憊だった。

茂木はクロノス先生の戦いの時から抑え続けているし、俺も幻魔の本気の一撃でもうグロッキー状態。一番余力があるのは万丈目だが、それでもガス欠の俺の代わりに罪善

さんとセイさんに行動可能ラインまで力を注いでなお今もサポート中。その負担はとんでもない。

「フッフ。お前の残りのLPはもはや風前の灯火。どこまで耐えられるかな？ ゆけいハモンっ！ 『フレンドッグ』に攻撃っ！ 『地獄の贖罪』っ！ さらにハモンの効果により、モンスターを破壊した時1000の効果ダメージを与えるっ！」

「ぐあああつ!? けど……この瞬間、フレンドッグの効果が発動するぜっ！ 俺は墓地の『バブルマン』と『融合』のカードを手札に戻すっ！」

マズいな。どうにか手札を切らさないように立ちまわっているが、状況的には十代が劣勢だ。影丸理事長め。重量級の幻魔を普通にポンポン呼び出しやがって。

場に幻魔が増える度に、こっちの負担も大きくなっていく。普段なら皮肉の一つでも飛ばすセイさんが、何も言わずに集中して祈りを捧げているのがその証拠だ。

「くそっ！ 俺にも精霊の力があれば、少しでも手助けが出来るのにつ！」

「……無念だ」

その辺りの素養がない三沢とカイザーが、拳を握り締めて嘆いている。無力なのは俺も同じだ。この大一番に見てるしか出来ないとは。これならもう少し力を温存して置

けば良かった。

鮫島校長はさつき持っていた何かの機械を操作したつきり、険しい顔のまま戦況を見守っている。

「速攻魔法『クリボーを呼ぶ笛』っ！ ハネクリボーをデッキから守備表示で特殊召喚っ！」

「しぶといな。だがこれでもう壁も尽きる。ウリアよっ！ ハネクリボーを焼き払えっ！」

ハネクリボーが破壊され、遂に十代の場は完全に空きに。だが、ハネクリボーが破壊されたことにより、デッキから一枚のカードが十代の手に飛び込んでくる。

「これは……大徳寺先生がくれたカード!?」

一瞬だけ絵柄がちらつと見えたが、そこにあつたのは『賢者の石―サバティエル』のカード。

本来ならハネクリボーが墓地にある時だけ使えるという効果だった筈だが、アニメ版効果なのか破壊をトリガーにデッキから引つ張ってこれたらしい。

しかしあのカードは使えるぞ。LPを半分払う事で、融合かフュージョンと名の付く

魔法カードなら何でもデッキからサーチできる。これなら十代の引きと合わせて逆転の目が出てくる。そこへ、

「影丸理事長っ！ 大徳寺先生はアンタの事を心配していた。身体はもうボロボロだったのに、死んじまうかもしれない事も覚悟の上で俺を試し、アンタを止めてくれつつ頼んできた。それを何とも思わないのかよっ！」

十代はそう影丸に問いかける。少なくとも、他のセブンスターズに比べて大徳寺先生は影丸と多少深い付き合いがあつたと思えた。いわば腹心の部下だ。なら多少なりとも思う事がある筈だと。だが、

「大徳寺か……所詮奴も手駒の一つに過ぎん」

「何っ！」

「……その言葉は聞き捨てならねえな。影丸理事長おっ！」

すまないが十代。そこは俺も口を挟ませてもらう。

「おい久城っ！ 休んでいろと」

「ごめんな万丈目。だけどこれだけは言わなきゃいけない」

止める万丈目をよそに、俺は重たい身体に鞭を打って影丸に向けて叫ぶ。

「バランサーとして言わせてもらうぜ。あの人はどこまでも真剣だった。命を燃やし、魂を削り、アンタへの恩義と世界への倫理の板挟みになりながらも。それでもただの

手駒だと言うのかっ！」

「ならば何故裏切ったっ！」

そう返した理事長の言葉には、怒りとほんの少しだけの悲しみが感じられた。それを
感じ取ったのか、俺を含め周囲が一瞬静寂に包まれる。

「……裏切りさえしなければ、最後まで俺に付き従うというのなら、俺とて長年の部下を
無碍に扱うつもりはなかった。幻魔の力を完全に掌握した暁には、余剰分の力で多少な
りとも奴を延命させる算段もあつた。だが結果はこれだ。そんな男を手駒と呼んで何
が悪いつ！」

決して愛着がない訳ではなかったのだろう。だからこそ、理事長は自分に逆らつた事
に怒りだけではなく悲しみを覚えた。

だがそれは、あくまで裏切つたという一面だけを見ていてそれ以外を見ていない発言
だ。

「そうじゃねえだろがっ！ それはアンタのためを思つての行動だつた筈だ。言う事を
聞くだけが良い部下じゃないっ！ アンタ達はもつとその辺りを話し合うべきだつた
んだ」

「はっ。戯言をほざくなっ！ バランサーよ。十代よ。文句があるというなら、この俺
を倒してから言うが良いっ！ 勿論……倒せればの話だがな」

「上等だっ！」

そうバツサリと切り捨てる理事長に、十代は力強く吼える。そして俺も続こうとして、

クラっ！

（マズイっ!? 急に叫んだから立ち眩みが）

ガシッ！

少しよろめいて倒れかけた時、誰かが腕を掴んで支えてくれる。

「大丈夫か？」

「あとは私達に任せて。ゆっくり休みなさい」

「ありがとう……って、アナタ達はっ!?」

それは万丈目でもなく、茂木でもなく、罪善さんやセイさんでもなく、予想外だった
が俺もそれなりによく知っている人物。そう。

「気合入ってるねえみどり姉さん」

「それはそうよ。生徒を守るのも教師の務めだもの。紅葉も力を貸して」

マンガ版の重要人物である、響紅葉と響みどりの姉弟だった。何でこんな所に居るん

だ
よ
っ
!?

賢者の石が導く奇跡

「むう……貴様達は」

「紅葉さんっ!? それと……誰だ?」

デュエル中の影丸理事長と十代が少し驚いたような顔をしてデュエルを中断する。そりやそうだ。俺も驚いている。

「よう十代。学園祭ぶりだな。助太刀に来たぞ。こっちは俺の姉のみどり姉さんだ」

「初めまして。ふふっ。君の事は紅葉や鮫島校長から聞いているわよ。他の皆の事もね。……それと、助太刀は私達だけじゃないわよ」

紅葉さんが人好きのする笑顔を見せ、みどりさんは腕で後ろを指し示す。そこには、「大丈夫かい万丈目君? 茂木君はこちらでサポートするから、君は久城君の方に専念するんだ」

「アンタは……そうか。すまない。よろしく頼む」

「もう少し大人への言葉遣いには気を付けてほしいのだが、今はひとまず置いておこうか」

デュエル理論担当の佐藤先生が、全身青い鎧のような外殻に覆われた半獣半人の精霊を連れて幻魔の抑えに加勢していた。……佐藤先生も精霊使いだったのっ!?

「ふう。どうにか間に合ってくれましたか」

「……そうか。貴様の企みか。鮫島校長」

コホンと咳ばらいを一つすると、鮫島校長が一步前に踏み出して理事長を見据える。「理事長。セブンスターズの件が片付いたとしても、貴方がそのまま潔く諦めると思っ
てはいませんでした。なのでこちらも、幾つか対抗策を練る必要がありました。その一つがこの方々です」

校長先生に何か策があるというのは、以前大徳寺先生を交えた話し合いで聞かされていた。しかしこういう事だったとは。

「遅かれ早かれいつかは幻魔が解き放たれる。そしてそれを操る理事長相手では、普通のデュエリストでは太刀打ちできない。そう。そこに居る久城君や十代君、万丈目君のような精霊の力、或いは闇のデュエルに対抗出来る何かを持つ者でなければ。なので私はセブンスターズとの戦いの中、秘密裏に対抗出来る人材を集めていたのです」

そうか。みどり先生と紅葉さんは、マンガ版でもそうだったけど精霊を視認する力があつた。

そして佐藤先生の事は知らなかったが、精霊がついている所を見るとそれだけの力が

あるのだろう。これだけの面子が居れば少しは対抗できる。

「紅葉のマネージメントも落ち着いてきたし、そろそろ本業に戻ろうかと思っていた矢先、鮫島校長から呼び出しがかかったの。それで学園祭に合わせて学園に戻り、今回の件について知ったという訳」

「それで姉さんが微力ながら加勢するって言いだすからさ。そういう事なら俺も付き合おうかなって。丁度大会が一つ片付いてしばらく余裕があるし、十代ともまたデュエルしたかったしな」

「校長から依頼された時は驚きましたが、大人として子供を守るのは当然の事ですからね。……そう。当然の……事ですから」

響姉弟がこちらを安心させるようにそう話すのに対し、佐藤先生はどこか歯切れが悪い。だが何はともあれこれは心強い援軍だ。

「本来なら他にも依頼した方が居たのですが、まさかここまで早く理事長が乗り込んでくるとは予想外でした。しかし良く間に合ってくれましたね。先ほど場所を連絡したばかりなのに」

「ああ。彼がその少し前に知らせてくれたんですよ。理事長の手によって七精門の封印が解かれたと。なのでこうして間に合ったのです」

彼？ と不思議そうな顔をする鮫島校長に対し、みどりさんはそつと横を指差す。そ

こには、

「……吹雪君じゃないですかっ!？」

「ああ。皆の危機に居ても立ってもいられなくてね。こうして援軍に駆け付けたという訳さ」

少し顔色の悪い吹雪さんが、近くの茂みからそつと姿を現した。

それを見てカイザーや三沢が急いで駆け寄る。

「大丈夫か吹雪? 具合が良くなさそうに見える。それに明日香はどうした?」

「ああ。心配ない。急いできたから少し疲れただけさ。明日香は……あの状態だからね。置いてきた」

「……そうか」

「何にせよ助かりました吹雪さん!」

一瞬カイザーは何か考え込むような顔をするが、三沢の言葉にすぐ気を取り直してそうだなと頷く。

元デュエルチャンプに、それと対等に戦える姉。そして精霊使いのデュエルアカデミア教師。これだけの安心感漂う面子が揃えば百人力……なのだが、

「はっ! 有象無象が何人集まった所で無駄な事よっ!」

影丸理事長にはまるで焦る様子ではなかつた。

「なるほど。鮫島よ。確かにこれだけの人材を揃えたお前の手腕は認めよう。それこそ縛りさえなければ、生徒無しでセブンススターズを迎え撃てただろうとな。……しかし、事ここに至つては無意味っ！ この十代とのデュエルに俺が勝利した時点で、精霊の力と三幻魔の力は完全に我が物となるっ！ かつての若さを取り戻した俺に敵うと思ふか？」

その自信たつぷりの影丸の言葉に、鮫島校長も渋い顔をする。確かに今でさえ強大な影丸がさらに全盛期の力を取り戻したら、それこそ厄介極まりないだろう。

「それはどうか？」

だが、その絶望的な状況に紅葉さんが待ったをかける。

「影丸さん。アンタの言つてる事はまず前提が間違つてるぜ。……まだ十代は負けてない。なあ十代？ そうだろう？ お前はここで素直に負けるようなデュエリストか？」

「そんな訳ないだろ紅葉さんっ！」

それは疑問ではなく確認。紅葉さんの言葉に、十代はへへつと笑つて力強く腕を上げ

る。

「幻魔をこのままほつといたら、世界はあちこち滅茶苦茶になつちまう。なら勝つしかないだろっ！ それに……こんな強いモンスターと戦えてき。言つちやあ悪いんだけど、俺ワクワクが止まらねえっ！」

そう。これが十代の本質にして強み。どんな危機的状況であろうとも、デュエルを楽しんでむという精神。

間違いない辛く苦しいのに、それでいて尚不敵に、十代は笑みをこぼす。

「ああ。それで良いっ！ なら周りの事は俺達に任せて、お前は思いつきり理事長をぶっ倒せっ！ なくに心配するな！」

紅葉さんはそう言って、飄々と笑って見せる。

「最悪お前が負けたら俺達の出番。責任取って大人の力を見せてやるよ！」

「おうっ！ ……待たせたな影丸。デュエル再開だっ！」

「ほお。舐めた口を叩くものだ。ならばその蛮勇。その無謀さ。この力でへし折ってやらんとなあっ！」

そして、戦いは加速する。

「フハハハハハ！ 見るが良いっ！ これこそが幻魔を統べる者っ！ 『幻魔皇ラビエル』っ！ ああ漲る。……漲るぞおっ！」

激戦の中、再び三体の幻魔の場に揃えた影丸理事長は、全盛期の肉体を取り戻す。

精気漲る二十代の肉体。その溢れ出る威圧感は、もはやカードの精霊一步手前と言ってもおかしくはなかった。

「お前に分かるか十代。かつてはここまでの肉体を誇った俺が、どれだけ老いさらばえていく事に絶望を覚えたかっ!? 自分の足で地を駆ける事も歩く事も叶わず、機械に縋らねばならぬ事に屈辱を味わったかっ!？」

そうして理事長は、自分が先ほど両腕で持ち上げたロボットを今度は片腕で持ち上げて見せる。

「正直に言おう。俺はお前達が羨ましかった。妬ましかったっ！ 幻魔を復活させるべくこの学園を創り上げてからも、そこで友と語り日々を生きる生徒達の姿を見る度に、もう一度青春を謳歌したいという願いは強くなつていったっ！」

そう吠える理事長の姿は、見かけこそ若返った筈なのにどこか老いを感じさせるものだった。

超人ではなく、ただの人間として、理事長は思いの丈をぶちまける。

「ああそうとも。幻魔の力を最大解放し、世界中のデュエルモンスターズの精霊の精気

を吸収すれば、永遠不滅の若さと肉体が約束されるっ！ 故に……こんな物もう要らんっ！」

理事長はそのまま苦々しい顔をして腕を振りかぶる。そして今にも放り投げようという所で、

「理事長。アンタ可哀そうな奴だな」

「何だと？」

目の前で対する十代は、そう静かに語りかけた。予想外の反応だったのか、理事長はいったんロボットを地面に降ろす。

「俺にはまだ老いとかそういうのは良く分かんねえ。でもさ、デュエルモンスターズが無くなったら、誰もお前の事を仲間だなんて思わない。それは結局、若返っても孤独って事だろ？ いくら長生きしても、仲間が誰も居ないんじゃないに決まってる」

「仲間など必要ないっ！ 立てつく奴は全てねじ伏せるのみ」

「精霊達や、俺の仲間を酷い目に遭わせることは許さねえっ！ アンタを何が何でも止めてやるぜっ！」

「やれるものなら……やってみるが良いっ！ この三体の幻魔を倒せるというのならなっ！」

その後も激戦は続いた。

先ほどの『賢者の石―サバティエル』のアニメ版効果。三度までLPを半分にする度にカードをデッキからサーチするという滅茶苦茶な効果で幻魔に食い下がる十代。

切り札として出した『E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン』の効果でLPを削り切ろうとするが、影丸はハモンの「破壊されたターンダメージを0にする」効果で回避。

反撃に出る影丸の猛攻を、サバティエルの効果で持ってきた『融合解除』で凌ぐ十代だったが、またもや場はがら空きに。

「まだ足掻くか。いい加減諦めて楽になれ。場のカードは0。この状況で三幻魔相手に何が出来るというのだ？」

「LPが0になるまで、デッキが尽きるまで、俺は諦めないぜ。……俺のターン。ドロ―っ！」

そして、諦めない心が遂に奇跡を起こす。

「俺は『クレイマン』を攻撃表示で召喚。そして魔法カード『ミラクル・フュージョン』

を発動！」

サバティエル三度目の効果でデッキからサーチしたミラクル・フュージョン。場と墓地のヒーロー達を融合し、十代の場に現れたのは究極のヒーローと言わしめた『E・HEROエリクシーラー』。

そしてそこで手札のサバティエルの最後の効果。三度使ったこのカードを装備することで、相手の場のモンスターの数だけ装備モンスターの攻撃力を倍にするというアニメ版限定効果が発動する。

「ぐっ?! まさか、先ほどクレイマンを敢えて召喚してから融合したのは、ラビエルが効果でトークンを出すのを誘発するためだとかつ!?!」

「ああ。今のお前の場のモンスターは5体。よってエリクシーラーの攻撃力はっ!」

エリクシーラー ATK2900↓14500

「14500だどっ!?!」

ラビエルが他の幻魔を糧にした時の打点をさらに上回った事に、影丸は驚きを隠せなかった。そして、

「これで最後だっ! エリクシーラーでラビエルに攻撃っ! 『究極剣サバティエル』っ!」

「ぐわああああっ!?!」

劍の形を取ったサバティエルを振るい、エリクシーラーがラビエルを一刀両断。こうして、十代と影丸の死闘は、十代の勝利で幕を下ろしたのだった。

(……計画通り)

そう。十代と影丸の死闘は……。

夜はまだ終わらない

「……ふふ。情けない姿であろう？　これが儂の本来の姿じゃ」

「影丸……」

闇のデュエルを終え、倒れ伏して元の老人の姿に戻った理事長がそう自嘲するように笑う。

幻魔が打倒された以上、奪われていた精霊達の精気も元の持ち主に戻っていくか、大気中に霧散していくのだろうか。そして幻魔によって若さを取り戻していた影丸も元に戻るの当然で。

「見ての通り、幻魔の力がなければ自らの足で立つ事すらままならぬ。……儂は若さを取り戻すためあらゆるモノを利用し、犠牲にしてきた。これも当然の末路よな」

そう語る影丸の顔は、どこか憑き物が落ちたように穏やかだった。

これまでの悪行が悪行だが、好意的に解釈すれば幻魔の所有者という事もあり、前々から精神に影響を受けていたのかもしれない。

原作無印のペガサスやマリクも、千年アイテムによって邪心が増幅されたっぽい疑惑

もあるしな。やったこと自体は被害の大きさから擁護しづらいが。

「だが、幻魔の力を借りて僅かな間とは言え、再び若さを取り戻し立つことが出来た。その点だけは……悪と罵られようが後悔はない。もう立つ事が出来ないにしても」

「それは違うんじゃないかな？」

そこで十代は待ったをかける。

「やっちゃまった事は悪い事だけどさ。それと立てる立てないは話が別だろ？ ……爺さんはまだ元気だよ。もう立てないなんて弱気なこと言うな。幻魔なんか頼らずに、自分の力で、自分の足で立てる筈さ」

十代は倒れたままの影丸に向けて手を差し出す。

直に戦った十代だからこそ、影丸の強さを信じたのだと思う。幻魔に頼らずに一歩を踏み出せると。

他の皆はその事に対して何も言わなかった。皆の尽力があったとはいえ、勝利したのは十代だ。ならこの場をどう収めるのかを十代に任せるのは自然の流れだろう。

「儂が自分の力か。……これまで散々試して失敗し諦めていたが、お前に言われるともう一度試してみようと思えるわい。……ぐぬうっ！」

影丸は十代の手を取り、どうにか身体を起こす。

その後よろよろと頼りなく、しかし本人からすれば渾身の力を足に込めて奮闘する事

しばらく。

「信じられんっ!? ……儂が、立てたっ!?」

今にもまた倒れそうではあるが、影丸は確かに自分の足で立ったのだ。それを確認するや否や、影丸の目に涙が浮かぶ。

「おおっ! やったじゃねえか爺さんっ!」

「分からぬ。何故かは分からぬが、儂は君と戦い熱意と精気を取り戻せたのかもしれないっ!」

或いは幻魔の精気がほんの僅か残っていて、それが元で肉体が活性化したのかもしれない。そういう考えもちらつと浮かんだが……まあそれは野暮っという物だ。

涙を流して救われたように喜ぶ影丸と、我が事のように理事長にハグを決める十代を見て、わざわざ水を差す事もないと俺は休みながら頭を振る。

まあ影丸の腰がバキバキと音を立ててまた崩れ落ちていたのは見なかったことにする。これまでの悪行の報いにしては軽すぎるくらいだ。

しかし何はともあれこれでおしまい。あとはこんな事をやらかした影丸の身柄を警察に引き渡せば万事解決だ。

俺はそう気を抜いて……ほんの一瞬警戒を解いた。

グルルルルウ。

パタパタ。

カタン。

散々森を荒らされた上、幻魔によつて精気を吸われ手を出せずに怒り心頭だった森の守護者^三が近くに居た事を忘れて。

「……………えっ!？」

三鳥はいつの間にか、影丸の背後に佇んでいた。

周囲に居る皆に気配を悟られぬよう、ギリギリまで実体化せずに。

「止めろ大鳥っ!?! 罰鳥と審判鳥もっ!?! 殺すなっ!?!」

慌てて叫ぶがそこは既に射程内。大鳥は大きく嘴を開き、罰鳥はゆらりと羽ばたき、

審判鳥は天秤をゆつくりと掲げる。

そして、

ガブツ!

大鳥の嘴は、勢いよく罪人に向けて閉じられた。

さて。その後の事を少しだけ語るなら、鮫島校長が三幻魔のカードを再び七精門に封印。途中急に突風が吹いて一枚飛ばされるというアクシデントがあったものの、すばやく吹雪さんがキャッチしてくれて事なきを得た。

そしてもう夜遅いし、明日正式に諸々の事をやっていこうという方針の下、今は学園まで戻る所だ。

「……はあ〜」

『久城君。ため息ついていると幸せが逃げるよ』

「これはどつちかというと安堵の奴だから良いんだよ。なにせ、あれだけの戦いで死人が出なかつたからな。……怪我人は出たけど」

俺はこつそり声をかけてくるディーに対して静かに返す。

そう。結局三鳥は影丸を殺さなかつた。

ただ怒り自体は溜まっていたんだらう。大鳥は影丸の嵌めていたウジャト眼モチーフの指輪を（一部肉ごと）食い千切り、罰鳥は小さなハゲが出来て血が出るまで影丸の頭を突き、審判鳥は影丸の全身をロープで縛って痕が残るまで締め上げた。

しかし逆に言えば、怪我はともかく死ぬような事までは一切行っていない。それが俺

が制止したからなのか、他に理由があったのかは分からないが、三鳥なりのケジメだったのだと思う。

幸い三鳥はあの場の大半が俺のカードだと知っていたし、影丸もやった事がやった事なので甘んじて受け入れた。周囲からやりすぎないよう注意はされたが。

という訳で、今は全身ズタボロの影丸と戦いで疲労困憊のクロノス先生、妖魔を抑えるのに消耗した俺や万丈目、茂木を残りのメンバー（プラス大鳥と審判鳥）が支えつつ帰路に着いていた。

『あくあ。こっちも精気が吸われて疲れてなかったら、あの悪党を吹っ飛ばしてあげたのに』

『余計ややくしくなるからやめなさいセンパイ』

さりげなくステッキをブンブン振ってアピールするココロと、それを嗜めるセイさんも精霊化してふわふわと後ろを着いてきている。

妖魔に吸われた精気が少しずつ戻って回復してきた証だ。

カタカタ！

「むう。なんなノ〜ネこの光は？ 浴びているところ……心が落ち着くというか」

パタパタ！

大鳥の背に揺られ、罪善さんからおつかかなびつくりながらも光を受けて身体を休めるクロノス先生と、意識を失っている影丸理事長。そして二人から付かず離れずの距離を保つ罰鳥。

「えっ!? みどりさんも来年度から学園に来るのかっ!」

「来るといふより戻るかしらね。しばらく離れてはいたけど、元々私はこの教師だから。紅葉の事はまだちよっぴり不安だけど、そろそろ私も本職に戻らないとね」

「ひつどいな姉さん。入院生活が長かったとはいえ俺一応プロだぜ? 姉さんに頼らずともちやくんとやれるっての」

「そういういつまで経ってもどこか子供っぽい所が不安なのよ」

みどりと紅葉のそんなやりとりを聞きながら目を輝かせる十代。何で幻魔と戦ったばかりで普通に元気なんだよコイツ。……というかみどりさんも来年から来るのっ!?

『うつふくん! 幻魔に吸われてた精気も戻って、おいらも復活なのよくん! アニキったらおいら達の事を気遣ってデュエルの順番を譲ったのよね? 嬉しいのよくん!』

「え〜い。まとわりつくなうつとおしいつ！ ただでさえ役に立ちづらい雑魚が、さらによれよれになっては戦いづらいと思っただけの事だつ！」

「ふふつ！ 素直じゃないなあ万丈目君は。やっぱりイエローと仲が良いじゃないか！」

「いやど〜がだつ?!」

もけもけ〜！

すっかり元気になって飛び回るおジャマ・イエローと、それをシツシと払いのける万丈目。そしてその様子を見てくすくす笑う茂木ともけもけ。

（ああ。ようやく……終わっただよな）

それぞれの穏やかな会話を聞き、俺はどこか肩の荷が降りた感じがした。

例えば大徳寺先生の代役としてセブンスターズに入ってから、毎日が苦勞の連続だった。

全員が全員くせ者揃い。こっちは全体の調整もしなきゃならないし、おまけに学生としての本分も忘れちゃいけない。

しかし、それもようやく終わる。あとは大徳寺先生に悔いのないよう余生を過ごして

もらい、ウエルチアースの船で漁師をしているタイタンに事の顛末を伝えて……そうだし!?

「そう言えば、カミューラはそろそろ回復したんだろうか?」

『そうだねえ。いつ目覚めてもおかしくはないって話だったしね。それに彼女はもう少々原作とは違う流れに入っているみたいだし、僕も少しは興味があるかな。……おつ!? 噂をすれば』

俺がふと思いついて出かけてみると、デーは相槌を打ちながら何か気づいたように森の一点に視点を向けさせる。そこには、

キイ……キイ。

「おう! 医務室に詰めている筈のカミューラのコウモリじゃないか! さてはカミューラが起き……どうしたんだその怪我っ!」

ふらふらと力なく飛ぶコウモリが、弱々しい声を上げて俺の目の前で墜落しかけた。慌てて受け止めてみれば、その身体は傷だらけだ。

「おい久城。一体どうし……そいつは!」

「ああ。カミューラの部下のコウモリだ。……一体何があつたんだ?」

茂木から離れてやってきた万丈目が、俺の手のコウモリを目ざとく見つけて驚きの声を上げる。

どうやら、まだ肩の荷を下ろすつて訳にはいかないらしい。

対峙する者達

◇◆◆◆◆

「急げっ……急げっ！」

「……はあ……はあっ！」

十代を始めとした一行は、学園本棟の医務室に向けて駆けていた。

影丸操る幻魔との死闘。それが終わって疲労すれど和やかに帰路に就く途中、バランサーこと久城遊児の所に一匹のコウモリがよろよろと飛び込んできたのが事の始まりだった。

『どういう事だ？　なんでコイツがこんなボロボロに』

『分からない。だが急いで戻った方が良さそうだな』

遊児は慌てて全員に報告。カミューラが目を覚まして暴れだしたのか、或いは眠っているカミューラを誰かが襲撃したのか。どちらにしても非常事態であると。

それに今医務室には、先ほど翔と隼人に連れ込まれた大徳寺先生も居る。万全の状態ならともかく、今の疲労しきった状態では襲われればどうなるか。

こうして一行は疲労をおして全力ダッシュ。怪我人を乗せて爆走する大鳥と審判鳥の奮闘もあつて、そう時間もかからずに医務室にまで辿り着いた。

だが、そこで目の当たりにしたのは、

「これは……大丈夫か鮎川先生っ!?! 大徳寺先生もっ!?!」

薬品らしきものは散らばり、書類も滅茶苦茶に荒らされ、そんな中力なく横たわる鮎川先生と大徳寺先生の姿だった。

急いで駆け寄る十代達。幸いな事に、どちらも目に見える外傷は見当たらない。だが酷く斃されていて、何か余程の事が起きた事は分かる。そして、

「居ない。カミューラが居ないぞ」

今日までベッドで眠り続けていた女吸血鬼は、その姿を消していた。

「……うう」

「大徳寺先生っ!?! 意識が戻ったのか?」

うめき声をあげ、顔に手を当てながら身を起こそうとする大徳寺先生を、急いで十代が助け起こす。

「すまない。十代君。私とした事がこのザマだ」

「しつかりしてくれ先生。一体何があつたんだ!?! 先生達を襲つたのはカミューラなの

か?」

「……いや。少し違う」

十代の呼びかけに、大徳寺先生は力なく首を横に振る。

「ただカミューラが目を覚まして暴れただけなら、私もここまで後れを取る事はなかった。多少の対策もしていたしな。だが……カミューラの中から出てきた奴がまさかあんな力を持っているとは」

「なんだそりゃ？ 奴って一体何なんだよ!？」

◇◆◆◆◇

「……ふふふ。紆余曲折あったが、遂にここまで辿り着いた」

それは、誰も居なくなつた七精門の結界跡。たつた今まで十代と影丸が激闘を繰り広げていた場で、静かにほくそ笑んでいた。

その手には一枚のカード。先ほど封印される直前、さりげなくダミーとすり替えた本物の幻魔の一枚。

全てをすり替えては見破られる恐れがあつたため、敢えて一枚だけとしたが一枚あれば充分。

「いかな封印とて、外と内の両方から呼応すれば解く事は容易。まさかこんなにも上手

く運ぶとはな」

これまでで多くの邪魔が入った。幾重にも仕掛けた策はことごとく潰され、手酷いダメージを受けて寝込む事にもなった。

しかし、これでようやく終わる。いや、始まるのだ。

それは万感の思いを乗せ、封印をこじ開けるべく幻魔を天に掲げ、

「そこまでだ。吹雪っ！」

鋭く制止する声に、じろりとそちらを睨みつけた。

そこに立っていたのはカイザー。学園最強と呼び声の高い生徒が、息を切らして天上院吹雪を見据えていた。

「帰る途中から姿が見えないので気になって来てみれば、これはどういう事だ？」

「やあ。カイザー。そんなに息を切らしていったいどうしたんだい？ ああ。僕は少し落とし物をしてしまったね。今こうして見つけて確認していた所さ」

「……やはりな。見た目こそ吹雪だが、お前は吹雪ではない」

さも天上院吹雪本人のように振る舞うそれに、カイザーは確信を持ったように宣言する。

「アイツは俺の事をカイザーとは呼ばない。人前ではまだしも、親しい者だけの場所では名前の亮と呼ぶ。それにアイツは……俺の友人はっ！ 弱った妹を置いて一人だけこっちに来るような恥知らずではないっ！」

「……ククツ。つついっ気が逸り、どうせ短い間だけ邪魔をされなければ良いと雑な受け答えをしてみました。策を立てて推し進めるのは得意だが、最後の最後で詰めが甘くなる。これは前の依り代の事を笑えぬなあ」

クククとどこかバカにするように笑う吹雪の顔をした相手を前に、カイザーはデュエルディスプレイを構える。

「クク……何だ？ 我らに挑もうというのか？ 精霊の力も闇のアイテムも持たぬお前

が？ ……ふんっ！」

「ぐおっ!」

軽く腕を振るった。たったそれだけで、軽い波動と共にカイザーは数歩分ほど距離を取らされる。

「ふくむ。憎々しい人間の身体などと思っていたが、中々どうして相性が良い。この身体どうやら元々闇に対して親和性があったようだな。一時の依り代としては上々よ」

「なんだと……まさかその身体は本物のっ!」

「ああそうとも。本物の天上院吹雪の身体だとも」

その言葉にカイザーはギリギリと歯噛みする。単なる偽者ならただ倒せばいい話だが、何らかの理由で操られているというのであれば話が変わってくる。

「どのみち、お前に何が出来てもない。おとなしくそこで見ているが良い。今一度幻魔が封印を破って顕現する瞬間をなっ！」



「カミューラの中から出てきた黒っぽい霧が、ちょうど明日香用の薬を取りに来ていた吹雪さんに入り込んだ？」

「ああ。すると吹雪君がまるで人が変わったかのようになって襲ってきた。カミューラならまだしも、生徒を傷つける訳にもいかずそのまま私も鮎川先生も」

「それでやられちゃったのか」

ああと頷く大徳寺先生から事の次第を聞き、十代達は難しい顔をしていた。

事情は分かったが、予想以上にとんでもない状況だったからだ。

「カミューラ……と言つて良いのか分からないが、奴はこう言っていた。このままこの男のふりをして近づき、機を見て幻魔を頂くのだと。君達の見ただ吹雪君は、どさくさ紛れに幻魔のカードに触れたりしなかったかい？」

「幻魔に……あつ!? そう言えば確かに触ってた!?」

鮫島校長が幻魔を封印し直す際、急に突風が吹いてカードが一枚飛ばされかけた事を一同は思い出す。そして、それをキャッチしたのこそ天上院吹雪だった事も。

その突風が仕込みだったと考えれば、全ての辻褄が合ってくる。

「マズいぞ。つまり君達がここに居るといふ事は、七精門は今から空きだ。このままでは再び幻魔の封印がっ!？」

だが大徳寺先生が顔色をさらに悪くする中、十代はあまり顔色を変えていなかった。それもそのはず。

「心配すんなよ大徳寺先生っ！ そんな事もあろうかと、今ここに居ない奴がいるだろ？」

十代はそう言って、ここに来ていない男達を思い浮かべてニヤリと笑った。



「さあ幻魔よ。復活の時だ。今一度封印を破り我らの下へっ!」

それはまともに近寄る事の出来ないカイザーをしり目に、再び幻魔の内の一体を天に掲げる。

ゴゴゴと七精門が振動し、周囲の柱が一本ずつ内部からの干渉によって起動しようとしたその瞬間、

パーーンっ！

銃弾のような音が響き渡り、それが手に持っていた幻魔のカードを弾いて地へと落とす。

「むうっ!? 誰だっ!？」

二度も肝心な場面を邪魔されて怒り心頭なその前に、犯人は静かに現れる。そう。

「誰も何も、ただの通りすがりの balanサーと」

かつてディーが学園祭に向けて悪ふざけで作ったコスプレ衣装の小道具の一つ。死んだ蝶の葬儀をモデルにした二丁拳銃を構える balanサーこと久城遊児と、

「同じくただの鍵の守り手と」

それに肩を貸す鍵の守り手こと万丈目準。そして、

『ただの元セブンススターズの貴婦人にして、誇りあるヴァンパイア一族の末裔よ』

傷だらけではあるが力強く羽ばたき、カミューラの声で話すコウモリが、口々にそう名乗りを上げた。

閑話 女吸血鬼の回想



(……………は?)

私気が付いた時、そこはどこかの部屋のベッドの上だった。

(一体何が? 私はどうして……………うっ!?)

起き上がるうとした時、全身を襲う不快感に思わずうめき声をあげる。

例えるなら身体の中をごちやごちやにシエクして、強引に一度引つ張りだした挙句無理やり元に戻したような。

そしてそれと同じくして、

『一度デュエルして手の内を晒した以上、それに対応されるのは当たり前だろ? こんな単純な事も忘れて人間を過小評価した。結果として全防衛システムはこうして破られた。……………それがお前の敗因だよ』

『さあ。これで今回の一件は終わりだ。諦めて投降しな。そうすればアムナエルにとり

なしくらいはしてやる』

私の脳裏に奴の、あの忌々しいバランスの言葉が蘇る。

一つ思い出すと、あとは連鎖的に次々と浮き上がっていく。

幻魔を手に入れるため、大掛かりな準備を整えて始めた儀式。その中で邪魔をしてきた鍵の守り手達を分断した事。バランスーとのデュエル。

そして最後に思い出せたのは、敗北の後幻魔の扉が何故か発動し、私の魂を代償として奪おうとした事。

扉から伸びる半透明の手に首元を掴まれた辺りから記憶がない。しかしそれまでの記憶と今の状況をつなぎ合わせれば、ある程度の推測は出来る。つまり、

(負けたのね。私は。そしておそらく学園か、それに繋がりのある医療施設に連れ込まれた)

身体には包帯など治療の跡があった。少なくとも今すぐどうしようという訳ではない。

そしてさらに視線を巡らせれば、離れた所のもう一つのベッドに同じく包帯まみれの誰かが眠っているのも見えた。やはり医療施設で間違いない。ただ、

(ダメね。我慢すれば動けない事はないけれど、動けるだけで万全には程遠い。逃げる

のは難しいか。……んっ!?)

キイキイ。

弱っているので吸血鬼の能力もほとんど使えない。今は機会を待つしかないかと呼吸を整えていると、聞き覚えのある鳴き声^{しこ}が聞こえてくる。

すると窓の外から、私の僕^{しもべ}であるコウモリ達^{たち}がこちらを心配そうに見つめているのが見えた。

「アナタ達!? ……くっ!?!」

私は無理やり身体を起こし、どうにか窓を開けて僕達を招き入れる。

キイキイっ!

「見守っていてくれたのね。良い心がけよ。……そうよ! アナタ達。私が眠っている間に何があつたか見せて頂戴」

僕の一匹がその言葉を聞いてスツと前に出て、私と向き合って同期する。

そうして私が知つたのは、私が倒れた事でセブンスターズがアムナエルのみになった事。そして私が除名された事で、代わりにバランスが正式に任命された事。

最後のセブンスターズと鍵の守り手達が勢揃いした決戦の日。そして……そこに幻魔を我が物にしようとする理事長自身が乗り込んできた事。

「……チッ! 完全に出遅れたわね」

影丸が最終的にはセブンスターズの勝敗に関係なく、自ら動く事は予想していた。だから先んじて幻魔の力を我が物とすべくあれだけ手の込んだ仕掛けをしたのだ。

だがその策は破られ、私はこうしてベッドで横たわっている。

(なんてこと。肝心な時に動く事も出来ないなんて)

私はギリギリと歯噛みしながら今の状況とこれからを考える。

いかに影丸とは言え、残った鍵の守り手達を蹴散らして幻魔を完全覚醒させるには多少の時間と手間暇がかかる筈。

或いは鍵の守り手達が意地を見せ、被害を出しながらも防衛に成功する可能性も僅かにある。

最後に……私を追い込んだあのバランサーが何かしらの手を打つ可能性も。

今なら時間的にギリギリ割り込む事も出来るかもしれないけれど、それもこの身体がネックになる。

(見張りらしき者はいない。邪魔する者はいない。……少しでも良い。身体がまともに動きさえすれば。少しでも力が戻りさえすればっ!?)

『なら、喰らえば良いのだ』

「誰っ!？」

私は突然聞こえてきた声に辺りを見渡す。

ここに居るのはそのベッドで眠っている誰かと僕達だけ。しかし今の声はどちらからでもなく、敢えて言うなら私自身から聞こえてきたような。

『力が足らぬというのなら喰らえば良いのだ。血を啜り、贅を喰らい、力と成せば良い』
また聞こえた。しかしどうやら僕達には聞こえていないようで、心配そうに私の周りを飛び回る。

「贅ですって? そこに眠っている誰かの血でも吸えと?」

『その者は眠ってこそいるが、容易には贅にならぬであろう。抵抗されれば万が一という事もある。それよりも……もつと手ごろな贅が目の前にはいるではないか』

「目の前?」

私は軽く目を凝らす。しかしいくら見てもここに居るのはあと我が僕達ぐらいだ……まさかつ!？」

『そうだ。その僕達を喰らえ。一匹ずつでは少なくとも、これだけの数なら多少の足しにはなろう』

その声は、気づけば私自身から出ていた。

『何を躊躇う事がある? 僕達など所詮は替えの効く使用人。我らの大願の為の礎にな

れるのだ。むしろ光栄な事だろう?』

……そうだ。この胸に刻んだ大願。憎き人間達に迫害され、滅びを待つだけとなったヴァンパイア一族の復興。

幻魔さえ手に入ればそれが叶う。その為なら僕の犠牲など取るに足らない些事。私は内なる声に従い、僕達に手を伸ばし、

「ふざけないで」

ぎゅつとその手を握り締め、怒りを込めてそう叫ぶ。

「私は誇りあるヴァンパイア一族の末裔カミューラ。夜の貴族。敵の血を啜るならまだしも、自身の僕を喰らうなんて獣ケダモノのような品のない行為はお断りよ」

『そのような奇麗事を言っている場合か? 人間に虐げられた怒りを、恨みをつ! 忘れたというのか?! 我らはいかなる手段を使っても大願を』

「人間のよう手段を選ばず? それこそ本末転倒というものね」

この胸に宿る怒りも、恨みも、片時たりとも忘れた事はない。私は一生涯人間を憎み続ける。恨み続ける。……でも、

キイキイ!

コウモリの一匹を優しく撫でながら、私は力強く宣言する。

「私はその為に使用人を犠牲にするようなことはしない。どこの誰かは知らないけれど、当てが外れたわね。まあ幻魔を手に入れる手段はまた別の策を練るとして、今は体力の回復を」

『仕方ない。なら、実力行使と行こう』

何を？　と思った時にはもう手遅れだった。逃げてと命ずる暇もなかった。

次の瞬間私の身体から黒い靄のように広がり、室内に居たコウモリ達を飲み込んだ。それと同時に何かが身体に流れ込んでくる。これは!?

「止めて……止めてっ!?!　なんて事をつ!?!　があつ!?!」

『おとなしく全てを大願成就の為に捧げていれば良いものを、たかが使用人の命を惜しむ愚かな依り代め。無駄な手間を駆けさせる』

身体に力が漲ると共に、酷い嫌悪感が襲ってくる。

「ぐっ……おのれ。よくも……私の僕達をつ!?!　何者かは知らないが、私の身体から出ていけっ!?!」

『黙れ。もうお前などに任せておけぬ。かくなる上は自意識を破壊して操り人形に……』

むっ!？」

その時、外からコツコツと足音が聞こえてきた。誰かが部屋に入ってこようとしている。この忙しい時につ!？」

『……ほう。この気配覚えがある。……ふつ。良いことを思いついたぞ。どうせこの依り代にこだわる必要はもうなくなった。なら、あちらの身体の方が役に立ちそうだ』



『そうして私の身体から出た黒い霧は、私の力の大半を引きちぎって今度は天上院吹雪の身体に入り込んだという訳。酷い話よね』

「それはまた……ぶつとんだ話だなオイ」

俺と万丈目は、コウモリの姿のカミューラから話を聞きながら七精門への道を駆けていた。

傷だらけのコウモリを拾った時はまさかカミューラだとは気づかなかったが、この状態でも頭の中に直接語り掛ける事が出来るとは驚きだった。

『起きたアムナエルと操られた吹雪の戦いのどさくさで逃げ出せたは良いけれど、力の大半を持って行かれたためか人の姿も取れず。体調も万全でないから飛びながらあち

こちぶつけて傷だらけ。惨めなものね』

「その惨めさを交渉に役立てようとする強かな女が何を言う。……本当にコイツの言葉を信じる気か？ 全てでたらめで、七精門で罫を仕掛けているかもしれないぞ？」

万丈目の言葉ももつともだ。なにせカミューラには前科があるし、幻魔への執着も極めて高い。

話に信憑性を持たせるために、わざと自分の身体をぼろぼろにしたという場合もあり得る。だけど、

「俺も完全に信じている訳じゃないよ。だから医務室に行くメンバーとこつちの二手に分かれた訳だしな。でも……本当だったら本当だったでなんか納得できるっていうか」

本当は俺一人だけで見に行く予定だったが、一人で無茶をするなど万丈目に見とがめられて同行してもらう事にした。流石に向こうは怪我人も多いし、護衛も考えるとこれ以上は引き抜けないからな。

また、これまでもカミューラには妙な違和感があつた。特に大きかつたのは、明日香とのデュエルの時と俺とデュエルした時の事だ。

一度目は墓守の首飾り。二度目は罪善さんの光を浴びた時。どちらも一瞬だけカミューラの姿が二重にブレて見えた。

しかもどちらもその直後声にノイズがかかったようになり、カミューラとそれ以外の

誰かが同時に喋っている風だったしな。もう一人居たと言われたらそれはそれで納得する。

その場合操られた吹雪さんが敵という嫌な展開になるが。

「それに、あのコウモリ達の件が本当だったら世話してたレティシアが悲しむしな。確認ぐらいはしておこうかなと」

『世話……ねえ』

何故かそれを聞いてカミューラが少し考えこんでいたようだったが、「ならさつさと確認に行くぞ」と万丈目に急かされ先を急ぐ事に。そして、

「まさか本当だったとはな」

『アナタが信じていなかったのは勝手だけど、どうする？ まさかこのまま放っておくなんて事はないわよねえ？』

「まあ当然だな。俺の平和的な学園生活の為に、口車に乗せられるとするさ」

何か様子がおかしくなっている吹雪さんの手から幻魔のカードを弾き飛ばし、俺達は静かにその場に踏み出した。

覚悟と妥協　そして仕込まれた罠

さて。乗り込んだは良いものの、これからどうしたものか。

再び封印が解けかけている七精門の前で、俺は内心困っていた。

今ここに居るのは俺、万丈目、カミユール（コウモリの姿）、そして吹雪さんに取り憑いている何者かに、吹雪さんの事を追ってきたカイザー。

これだけならなんとかしようがある。何者かを吹雪さんの中からまず追い出す必要があるが、それには

は罪善さんの力が有効なのが以前の戦いから分かっている。

抵抗してきても幻想体の皆や万丈目に協力してもらえば抑え込む事も可能だろう。

だが、もつとも大きな問題が一つまだ残っている。

「貴様らあつ！　よくもまた我らの邪魔をつ！」

「それを言いたいのはこっちの方だつ！　何度も何度も幻魔を呼び出そうとしやがって。いい加減ワンパターンなんだよつ！」

激昂する何者かの言葉に万丈目が力強く返す。そこに関しては思いっきり同感だ。

「もうお前が吹雪さんじゃないって事は分かっているんだ。正体を明かしたらどうだ？
カミューラに潜んでいた誰かさん？」

『ええ。そこは私も同意見ね。どこの誰かは知らないけれど、よりによつて私を操つて可愛い僕達を取り込んだ罪は重いわっ！　名を名乗りなさいっ！』

「ふっ。依り代風情が生意気な事をほざく。……良いだろう。よく聞くが良いっ！　我らこそはっ！」

その何かは、吹雪さんの姿で大きく腕を広げて宣言する。

「貴様ら人間に貶められ、滅ぼされたヴァンパイア一族の化身っ！　恨み、怒り、憎んだ一族の思念そのものであるっ！」

『……ふ、ふぎけないでちょうだいっ！』

一瞬の間の後、怒りを露わにしてカミューラがパタパタと飛び掛かってくつてかかる。

『何を言うかと思えばそんな戯言をつ！　私こそが栄えあるヴァンパイア一族の末裔。人間達の迫害を生き延び、一族の再興のため永い眠りにつき、そして目覚めた者。アナ

タのような者は私は知らないっ!』

「はっ。貴様なぞ端から我らの依り代に過ぎぬ。いかに我らとて、依り代も何もなく長い時間を過ごすのは困難だったからな。でなければ貴様のような小娘に一族の復興を託すものか。え〜いうつとおしいっ!」

『きゃっ!?!』

まるで虫でも払うようにカミューラを地面にはたき落とす、その何かは吹雪さんの顔で嘲る様に嗤う。おいそのゲス顔止めろっ!

『……では、私は最初から期待されていなかったとでも? でも、影丸は私のヴァンパイア一族としての力を欲してセブンススターズにスカウトしたはずっ!?!』

「ふん。大方影丸も、真にセブンススターズとして欲していたのは貴様の中に居た我らの方だったのであろうよ。そのためにわざわざセブンススターズの中でも一人だけ、他の闇のアイテムのような敗北したら冥界や精霊世界、闇の世界への強制送還ではなく、所有者の魂……つまり我らごとと贄と出来る『幻魔の扉』のカードを貸与したのだから」

『そんな……嘘よ。そんなの嘘よおっ!?!』

心身ともに傷つけられ、地に伏したままカミューラは力なくコウモリの姿で慟哭する。

これにはほんの少しだけ同情する。カミューラのこれまでやった事はお世辞にも褒

められた事ではなく悪事ばかりだったが、少なくとも彼女なりに真剣だった。

真剣に策を練り、全力を尽くしていた。それを根本から否定されるというのは……。
「だがそれももう終わりだ。おとなしく貴様が最初のようにならぬ手段を持つて一族の復興を成そうとするのであればこれからも依り代として使つてやつても良かったがなあ。僕なんぞに半端な情を持ちおつて。僕を贄とする程度の覚悟も持てぬ者には依り代すら務まらんわつ！」

「……おい。いい加減にしろよ」

流石に腹が立つてきたのでこつちも口を出させてもらう。実際コイツの言い分は聞くに堪えず、カミューラだけでなく万丈目もカイザーも気分を害しまくっているからな。

「散々言いたい事を言ってくれたがな、これまで俺や鍵の守り手達が接してきたのはお前じゃない。カミューラの方だ。お前みたいになぼつと出の奴がごちやごちや言つてもそんなの知らんつ！」

俺はビシツと勢いよく指を吹雪さんの中の何かに向ける。

「僕を贄にする覚悟だと？　笑わせるな。仲間を安易に切り捨てようとする事のどこが覚悟だ？　ただの妥協だろうがっ!?　それよりも、今は捕まったままでも回復に努めて、仲間と一緒に次の機会を待とうとしたカミューラの方が余程覚悟が決まっているし

忍耐力があるってものだっ！」

『……バランサー』

カミューラが力なくそう呟く。何を傷心してんだよ。普段ならこの程度切れ味たっぷりの皮肉交じりに言い返すのにまったく。

「と、まあ本来ならカミューラ自身が言い返す所だが、今回は俺が代弁させてもらった。あとでその辺りはじっくり話し合ってくれ。そしてだ」

色々言っていたが、奴の名乗りが正しいなら話は簡単だ。

「詰まる所、お前はヴァンパイア一族全体の幽霊とか悪霊という事だろ？ それがかミューラにくつついてこれまで力を蓄えていたと。そうと分かれば……頼むぞ皆っ！」

俺の号令に合わせて、罪善さんと葬儀さん、そしてどさくさでレティシアに抱かれた状態のネクも実体化する。

「まだ万全じゃないが、こうして短時間幻想体呼び出せるぐらいには回復している。幽霊退治のプロならこっちにも揃っているんだっ！」

カタカタっ！

『ああ。奴こそ紛れもなく私が救^{救す}うべき迷える魂。ここでしつかりと祓つてみせよう』

『コウモリのお姉ちゃん。とつても悲しい顔してたの。だから……お姉ちゃんを苛める悪い人を懲らしめるよ！ ネクちゃん！』

『我が復活の為に駒は欲しい所だが……こういう怨念の塊は無理やり従わせるのも骨だ。ならここで潰しておくに限るな』

幻想体達もやる気充分。万丈目もおジャマ達を従えて臨戦態勢を取る。

「いかに悪霊だろうが、これだけの戦力相手ではどうにもならないだろう？　おとなしく降参して吹雪さんから出ていけ。……ちなみに弾き飛ばした幻魔は拾わせないぞ。下手に顕現させるわけにはいかないからな」

ジリツとカードの方に足を進めようとする悪霊に、俺は銃を向けながら先んじて宣言する。

そう。大問題なのは、そこに落ちている幻魔は封印されている訳でもないから呼び水さえあれば普通に実体化できるといふ事だ。

そして一回出てしまえば、周囲の精霊の精気を吸い取って実体化を続けるから戦闘以外で自身の力をほとんど消費しない燃費の良さ。

おまけに外側から幻魔に暴れられれば他の封印も解けかねない。つまり何が何でも顕現させちゃいけない。

なので落ちているカードにも最大限の集中をしつつ、少しずつ包囲を狭めていく。多分ギリギリになったら吹雪さんの身体で抵抗してくるだろうが、どうにか出来るだけ怪我をさせないように。

「……良いだろう。こうなつては仕方ない。そちらの要望通り、この身体を返すとしよう」

「何？」

それはある意味予想外の言葉だった。

その言葉通り、次の瞬間吹雪さんの身体からぶわつと黒い靄のような物が湧き出て宙に浮き、人型のような姿へと形を変えていく。

「ふん。やけに素直だな」

万丈目が訝しげな声を上げる。

そうだよな。こういうタイプの奴はネクと同じく、最後の最後で何か悪あがきをしてくると睨んでいたんだが。……おっと。その前に、

「吹雪さん。大丈夫ですか？」

俺は糸が切れた人形のようにがくりと膝を突いた吹雪さんを急いで受け止める。勿論その間も悪霊や幻魔への警戒を怠らずに。

それが奴の狙いだとも知らずに。

「……うっ!? うう……」

吹雪さんがうめき声をあげて目を開く。だがまだ意識がはつきりしていないようだ。

「確かに吹雪さんは返してもらった。じゃあこのまま諦めて降参し……うぐっ!」

突如喉元に強烈な圧迫感を感じる。俺は悪霊達に向けていた視線を下に向けると、そこには、

「久城っ!?!」

『ハハハハハハ! 確かにそいつの身体は返したぞ。何の仕込みもしていないとは言っていないがなあっ!』

血のように真っ赤な瞳の吹雪さんが、俺の喉を締め上げていた。

逃げる者と追う者 立ちはだかる者と挑む者

ギリギリと音を立てて、吹雪さんの手が俺の喉を締め上げる。どうかその手を外そうとするのだが、尋常じゃない力で中々外せない。

カタカタっ!?

「久城っ!? やめろ吹雪さんっ!?!」

「一体どうしたんだ吹雪っ!?!」

『正気を失っているのか? 早く引き剥がすんだっ!』

咄嗟に罪善さんと万丈目、カイザー、葬儀さんが吹雪さんを引き剥がそうと動く。

『大変っ!?! 大変だよっ!?!』

『落ち着け我が運び手よ。それより今は……うおっ!?!』

レティシアが慌てておろおろとこちらを心配そうに見、抱きかかえられたままのネックは何か気にかかるようだったが必然そっちに引っ張られる。

そう。つまり、この一瞬完全に周囲の視線は俺と吹雪さんに集中した。

『貰ったあつ!』

『させないわつ!』

幻魔を拾い上げようとした黒い霧と、それにいち早く気が付いたコウモリを除いて、拾い上げたのはタッチの差でカミューラが先。しかし、

『邪魔をするな小娘があつ!』

『きゃあつ!?!』

カミューラをはたき落とした黒い霧は、そのまま幻魔のカードを拾い上げる。

『ハハハハハハつ! 油断したなあ? 忘れたか? その男は以前私に噛まれた事を?』

変わらず掴まれたままの苦しい状況で、どうにか頭を回らせる。

確かに以前カミューラの城で、幽体に吹雪さんは首に噛みつかれた。あの時は魂を担保にするためだと思っていたが、考えてみれば吸血鬼が噛みついた相手を眷属に出来るというのには有名な話だ。

『正しい手順ではないので眷属とは行かぬが、軽く意識を奪って操る程度なら造作もない。魔よけのペンダントがあれば弾かれた可能性もあったが、今着けているのはそのバランス。なのでこうして囷に使わせてもらったという訳だ』

黒い霧は人型に寄り集まると、その姿を実体化させる。

だが、それはどちらかと言えば吸血鬼と言うより怪人か怪物。コウモリをむりやり擬人化したような格好をしていた。

『僕達のエネルギーだけではこの程度の姿で手いっぱいだが、それも仕方あるまい。あととは』

『させるかつ！』

『おっと。そうはいかん』

咄嗟に葬儀さんが射撃の構えを取るが、悪霊が軽く指を振ると、吹雪さんが俺から手を放して悪霊の盾になる様に立ち塞がる。

射線上に入られて、葬儀さんは僅かに射撃を躊躇った。

『ハハっ。そこでこの男ごと我らを撃たぬのが貴様の敗因よ。さあ幻魔よ！ 我らの力呼び水に、ここに顕現せよっ！』

その言葉と共に、悪霊の身体から手に持つ幻魔のカードに力が流れ込んでいく。そして、

「ゲホゲホ……これは?! みんな離れろっ?!」

呼吸を整えている所にカードから光が放たれ、眩しさに目を覆った直後、

『グオオオオオンっ！』

幻魔皇ラビエルが、その圧倒的な力を漲らせて顕現した。

深夜の森に、そびえ立つラビエルの咆哮が響き渡る。その声に怯えてか、森の生き物達が我先にとパニックになってラビエルから離れるのを何となく感じる。

「遂に……出てきやがったか」

『ま、マズイのよ〜ん!』

万丈目とおジャマ・イエローがそう呟くほど、実体化したラビエルの威容は凄まじかった。

くそっ!? 改めて見るとなんて圧だ。何でこんなのを十代は相手に出来たんだよっ!?! ……しかも、まだ封印されているとはいえこれと同格に近いのがあと二枚も。

俺はちらりと、七精門の封印を横目で見る。まだ解けている訳ではないが、ラビエルに攻撃されでもしたらどこまで保つか。

防ごうにも幻魔は精霊の精気を吸収するから長期戦は不利。さつきだって、十代や紅葉さん含めた面子でやつとどうにかした相手に今の戦力でどこまでやれるか。

『すまない管理人。私があそこで躊躇わなければ』

「いや。良いって。仕事人って感じの葬儀さんがあそこで躊躇ったのって、多分俺に気を遣ってだろ？ 寧ろありがとうだよ。それより今はこの状況をどうするか考えないと」

サツと俺の前に立って庇いながら葬儀さんが謝ってくるが、実際吹雪さんごと撃つたから撃つたで大変な事になっていたからな。

しかしこの最悪一歩手前な状況をホントにどうするか？

『アニキ〜っ!!? どぞどうしようっ!!?』

「喚くなっ！ せめてお前は邪魔にならんように隅に……ちよつと待て？ なんでお前そんなピンピンしているんだ？」

肩の後ろでプルプルと震えるイエローに、何かに気づいたように万丈目が声をかける。

そういえば、さつきクロノス先生が影丸と戦った時は、万丈目がペンダントを俺に渡してすぐ精気吸収でイエローはガリガリになっていた。

まだ出たばかりとは言え、それにしてもそこまで精気を吸われている様子もない。

見ると葬儀さんも罪善さんも、レティシアやネクもそんなに影響を受けていない。よく見れば精気がラビエルに流れ込んでいるのが分かるが、さつき影丸が使っていた時とは雲泥の差だ。一体なぜ？

『ねえ見てっ！ 悪い人の様子がおかしいのっ！』

その答えはすぐに出た。レティシアの指差す先では、悪霊が何故かカードを片手に苦しんでいたのだ。本来幻魔が吸収した精気は使い手にも流れる筈なのにそれもない。

『ぐううっ!? 動けっ！ 言う事を聞けえラビエルっ！ 我らがカードの持ち主だぞっ!?』

『ははくん。どうやら奴め。幻魔を呼び出したは良いがまともに制御出来ていないらしいぞ。これは傑作だな!』

ネクがその様子を見て揶揄うように嗤う。実際ラビエルも動くでもなくただ佇むのみ。自身の実体化の維持に使っているだけだから吸収する精気も控えめだ。

……そうか! 考えてみれば簡単な話だ! 元々三幻魔はイラスト的に三幻神を意識している。つまり神のカードと同じく取り扱う方にも資格が必要なんだ!

原作で神のカードの一つ『ラーの翼神竜』は、千年アイテム持ちか古代エジプト所縁の者でなければ真価を発揮出来なかった。

そしてさつき幻魔を使用した影丸は、大鳥に破壊されたが闇のアイテムらしき指輪を着けていた。あれで幻魔を従えていたと考えればこの状況にも筋が通る。

「これは……妙な話になってきたな」

『どうする管理人? 仕掛けるなら今が好機だが』

「……ちよつと様子を見よう。下手にラビエルを刺激して暴れだしたら危ないし、吹雪さんが操られたままなのもマズい。まずは罪善さんに手を貸してもらって」

こつそり吹雪さんを正気に戻そうと画策していると、苛立つた悪霊が何かを取り出す。あれは!!

『かくなる上は……これでどうだっ!』

取り出したのは以前カムイウラが付けていたチョーカーだった。その後大徳寺先生に預けていた筈だが、医務室でのどきくさで奪ってきたのかっ!?

慌てて止めようとしたのも束の間、チョーカーから出る波動にラビエルが少しだけ反応し、その巨腕を俺達と吹雪さん、そして悪霊を隔てるように地面に突き立てる。

「うわあああっ!」

比較的ゆつくりとだったが、それでも巨大質量の一撃が大地を叩いて周囲に大きく砂埃が舞う。衝撃でそれぞれ軽く吹き飛ばされ、悪霊から強制的に距離を取らされた。

『……はあ……そうだ。それで良い。……だが、やはりこれだけでは三幻魔を完全に従えるには心許ないか。仕方ない』

闇のアイテム自体の出力か、それとも単純な格の差か。影丸に比べて消耗が激しい悪霊は、息が上がりながらもそう口にしてラビエルの腕に飛び乗る。

「待てっ! どこへ行く気だっ!」

『知れた事。このチョーカーだけでは出力が足らぬというのなら、他の物を加えて底上げすれば良いだけの事。幻魔よっ！ アカデミア本棟へ向かうのだっ！』

チョーカーを翳す悪霊の言葉に、微妙に渋々と言った感じでラビエルはアカデミア本棟に向きを変えて歩き出す。底上げ？ 本棟に何が……。

『マズいぞっ!! 確か本棟には、これまでのセブンスターズが持っていた闇のアイテムが保管されているのではなかったかっ!!』

『えっ!!? そうなのネクちゃん?』

ネクとレティシアの言葉に俺達はハツとする。なんでネクが知っていたかはまあ悪だくみの一つや二つしていそうだから置いておいて、

『それらを合わせれば三幻魔をまとめて制御できるって訳かっ!!? ……行かせるかっ!!』

慌てて後を追おうとするが、その前にまだ操られたままの吹雪さんが立ちはだかる。「退いてくれ吹雪さんっ!!?」

『そいつにはお前達を足止めするよう暗示を追加しておいた。精々仲良くやるんだなっ! ハハハハハ』

高笑いを上げながら、ラビエルに乗って悪霊は去っていく。

どうするっ!!? 本棟には十代達が居るが、正直さつき戦ったばかりで連戦となったら

危ない。

というかそれ以外の教員とかも居る筈だ。そんな所にラビエルが着いたらどんな被害が出るかつ!?

かと言って追おうにも吹雪さんが邪魔して通してくれない。一体どうしたら、

「久城。先に行け。ここは俺様が引き受けた」

そこへ、万丈目がスツと前に出てデュエルディスクを構える。

「万丈目っ!？」

「ここで全員足止めされては相手の思う壺だ。なら二手に分かれた方が良い。……おい吹雪さん。デュエルを申し込ませてもらうぜ。いかに操られようが、アンタもデュエリストなら逃げはしないよなあ?」

万丈目の挑戦的な言葉に、催眠状態でありながらも吹雪さんも腕にデュエルディスクを出現させる。一体どこから出したのかと思えば、良く見ればさっきの黒い霧が一部まわりついている。

だが……操られているとはいえ相手は吹雪さんだ。ダークネスとして戦っていた時間も一筋縄じゃ行かなかった。いくら万丈目でも簡単には、

「ふん。心配するな。いずれアカデミアのトップに立つ俺が、万全ならともかく操られた状態の相手に後れを取るものか。それに」

「ああ。俺も居る」

そこにカイザーもデュエルディスクを片手に一步前が出る。

「吹雪は俺の友だ。友が前後不覚に陥ったのならそれを正すのが役目だろう。先に挑むのはこの頼もしい後輩に譲るがね」

「……と、いう訳だ。まあ俺は負けんので、カイザーには友人が完膚なきまでに叩きのめされるという残念なものを見せる結果になるだろうがな」

万丈目の闘志は燃え盛っていた。こんな危機的状況だというのに、それこそ俺と戦った時と同じくらいかそれ以上に。

ああ。これこそが俺の推しだ。

「……分かった。来いっ！ 大鳥っ！」

俺はデッキから大鳥のカードを取り出し強く念じる。すると、
グルア！

皆と共に本棟に行っていた大鳥が、即座にこちらに出現する。

「大鳥っ！ 幻魔がまた出現して森のピンチだ。追いかけるのに力を貸してくれっ！」

『私も行くわっ！』

森が関わりと決断が早く、大鳥は即座に了承。

肩に止まってきたカミューラと共に俺は素早く大鳥の背に乗り、万丈目に向けて墓守のペンダントを投げ渡す。

「隙が出来たらこれを吹雪さんにつ！ 暗示を弾けるかもしれない」

「ああー！」

他の幻想体達の実体化をいったん解き、最後にもう一度万丈目達を見る。

「……………は任せませ」

「そっちなもな」

それ以上の言葉はいらない。大鳥は一声鳴くと、遠目に見えるラビエルに追いつくべく全速力で走り出す。

さあ。待つてろよ悪霊め。夜が明ける前に全部まるっと終わらせてやるからな。

閑話 涉々進撃の幻魔とそれを阻む魔法少女

ズシン。ズシン。

一步ごとに森の木々をメキメキとなぎ倒し、ワツと恐慌状態になって離れていく動物達を尻目に、実体化した幻魔皇ラビエルはアカデミア本棟に向け前進する。だが、

(……ちつ。何故こう我らの思う通りにいかんのだっ!?)

その肩に乗った悪霊は、内心現状に歯噛みしていた。それと言うのも、

(遅いっ！ 遅々として進まぬ。予定ではとうに本棟に着いていてもおかしくないものを
っ！)

確かにラビエルは悪霊の指示を聞いて遊兎達を引き離し、アカデミア本棟に向かっていく。だがその歩みはどういひき目に見てもゆつたりとしたものだった。

その巨体故の歩幅の大きさもあつてそれなりに速度は出ているが、悪霊の想定していた物から考えると大分遅い。

率直に言つて……ラビエルは明らかに嫌がつていた。

ただ幻魔からすればそれも当然。なにせ幻魔の元々の持ち主は影丸である。

影丸は幻魔のカードを手に入れた後、完全に覚醒させるために数年かけて準備を整えた。覚醒の為の土壌としてアカデミアを創り、制御のための闇のアイテムを数多く準備。そして高齡の為衰えていたとはいえ、その肉体と精神は全盛期ならば超人級。

つまり精霊である幻魔の側からしても、影丸は自分達を扱うにふさわしい基準を満たしていた。

対してこの悪霊は幻魔からすればただのぽつと出。入手手段も堂々と鍵の守り手を破って封印を解いた訳でもなくただのカードのすり替えて、先ほどデュエルで自分達を打ち負かした十代のような強者でもない。

闇の力を有してはいるが絶大と言うほどでもなく、感じ取れる精神性も妄執や怨念が大半。影丸のような覇気も感じられない。

要するに、闇のアイテムの力で最低限従いこそするが、幻魔からすれば悪霊を持ち主として認めていないのだ。

それは幻魔固有の能力である、周囲の精霊からの精気吸収がほぼ自身にしか行っていない事からも明らかだった。

『えい抵抗するなっ！ おとなしく我らに従え幻魔よっ！』

業を煮やして再び悪霊がチャーカーを翳して波動を放つと、澁々ラビエルは歩みを早

める。

それで良いと少し満足げな顔をする悪霊だったが、

『アルカナ・スレイブっ！』

『食らいなさいっ！』

『何っ!? 防げラビエルっ!?』

突如森の中から放たれた極太のビームと、それに追隨する幾本もの細剣に、慌ててラビエルに防御させる。

その巨腕はビームと細剣をしつかりと受け止めるが、さしものラビエルも無傷とはいかなかった。

直撃した腕はぶすぶすと音を立てて焦げ、突き刺さった細剣はじわりとまるで毒のようにならびエルを蝕む。しかし、

『グオオオオオンっ！』

怒りを込めた咆哮と共に、ラビエルは周囲から現在進行形で吸収しつつある精気を腕に集中。突き立つ細剣を筋肉の隆起で弾き飛ばし、見る見る内に焼け焦げた皮膚も再生していく。

『何者だっ!? 我らの邪魔をする愚か者はっ!?』

幻魔にこれだけのダメージを通してみせた攻撃を、下手をすれば自分が受けていたと冷や汗をかきながら、悪霊は何者かに向けて叫ぶ。すると、

『そこまでよっ! 悪党達っ! ……やあっ!』

『待ってセンパ……仕方ない。はっ!』

二つの影が勢いよく森から飛び出し、幻魔の進行を妨げるように木々のてっぺんに飛び乗る。

『愛と正義の名の下に、魔法少女ココロここに参上っ! さあ悪党達。おしおきを受ける準備は良いっ?』

『……はあ。森の中に潜んで、遊兎が追いつくまで足止めに徹する算段だったでしょうにまったく。……良いわ。ここまで来たら、真正面からどこまで時間を稼げるかやってみましょう』

そう。魔法少女がやってきた。

「……はい……よろしくお願いします。では……ふう」

真つ暗な森の中を、ランタンの灯りを頼りに疾走する大鳥の背に乗ったまま、遊児は通信を切つて軽く息を吐く。

グルアアっ!?

「ああ。現地でも対処を急いでる。奴の狙いは本棟に仕舞つてある闇のアイテムだ。それが分かつているならやりようはある」

大鳥の唸り声に応えながら、遊児は必死に考えを巡らせていた。

（今顕現している幻魔はラビエルだけ。闇のアイテムを取られない限り幻魔の追加召喚は出来ない筈。なら闇のアイテムをどこかに移動させればいい）

先ほど大鳥がやったようにアイテムを破壊するという手もあるが、あれは本来危ない一手。下手に壊せばその時点で周囲に影響を与える可能性も0ではない。

なので現在本棟から離れた場所にアイテムの移送中であり、また一般生徒等は夜中の避難訓練の名目で現在退避中。

あと本棟に残っているのは、事情を知っている一部の教員や十代達鍵の守り手、紅葉さんといった実力者ばかりだ。

（この戦力なら撃退自体は可能だ。しかし十代でも連戦は消耗が激しすぎるし、ラビエルが本棟に到着したらそれだけで周囲に被害が出る。それに避難の事を考えると、少し

でもラビエルを足止めする必要がある)

今は十代達に同行させていたココロとセイさんが道を取って返して迎撃中。足止めに徹するよう遊児は指示を出していたが、それでも精霊特攻持ちの幻魔相手にどれだけ保つかは分からない。

そんな相手を従える悪霊に対して、追いついた後自分が出る時間稼ぎ。幾つか考えた上で、遊児は大きいため息を吐く。

「……やっぱ、デュエルしかないか。受けてくれたとして、デュエル中にラビエルを出される前に何とか出来れば良いんだけどな」

幻魔が出る前に勝つのが理想。幻魔が出ても勝つのが次点。最悪負けたとしても、時間さえ稼げればあとは仲間達に任せれば良い。

しかし先ほど感じた幻魔の圧、そしてクロノス先生を庇った時の一撃を思い出し、遊児は軽く身震いする。あれだけ防御をガチガチに固めたのにあのダメージ。それをもう一度と言われたらたまらない。

(正直全部十代達に丸投げして逃げたい。だけど今幻魔を放つておいて被害が拡大したら目覚めが悪すぎる。それに)

ちらつと遊児は肩に止まるコウモリ……カミューラを見る。

『……何かしらっ?』

「いや。別に」

『なら急ぎなさいな。奴にはしつかりと報いを受けさせてやるわ』

そう息巻くカミューラに怯えた様子は無い。……いや、恐怖はしつかりあるのだろう。しかしそれでも尚、僕達しもへの報復をせんと怒りに燃える姿を見て、

（元とはいえセブンスターズの一員と、その中に潜んでいた奴の因縁だ。ならば調整役バランスーとしては最後まで付き合わないとな）

一応の覚悟を決め、遊児は大鳥に乗って疾走を続けていた。

一方その頃。

「実を言うとな、俺はこの状況を丁度良い機会だと思っている。正直前々からカイザーとは別にアンタとも戦ってみたかったんだぜ？ 吹雪さん。かつて噂に聞いた、カイザーのライバルにしてアカデミアのブリザート・プリンスとな」

七精門の前。カイザーが見守る中で、万丈目と吹雪のデュエルが始まろうとしていた。

語り掛ける万丈目に対し、吹雪は何も言わずただデュエルディスクを構えるのみ。

「ふん。だんまりか。まあ良い。出来れば操られた状態じゃない万全のアンタを打ち負

かしたかったんだが、それは次の機会としてだ。……ファンに啖呵を切った手前、きつちり勝たせてもらうぜっ！俺がアカデミアのトップに立つ為にもなあっ！」

「デュエルっ!!」

今、万丈目は帝王カイザーの前で王キングに挑む。

万丈目対吹雪 その一 デッキから漂う闇

吹雪 LP4000 手札5

万丈目 LP4000 手札5

「私のターン。……ドロー。私は魔法カード『召喚師のスキル』を発動。デッキよりレベル5以上の通常モンスターを手札に加える。私が選ぶのはレベル7『真紅眼のブラックドラゴン黒竜』」

先手を取ったのは吹雪だった。どこか無感情な声色で、淡々と自身の代名詞というべきカードを手札に加える。

「早速レッドアイズを手札に加えてきたか」

「そして、吹雪さんなら当然」

万丈目が予想した通り、吹雪は更に手を進める。

「続けて魔法カード『古のルール』。これにより手札からレベル5以上の通常モンスター、今加えたレッドアイズを攻撃表示で特殊召喚する。そして『軍隊竜』アームードドラゴンを守備表

示で召喚。カードを一枚伏せ、ターンエンド」

真紅眼の黒竜 ATK2400

軍隊竜 DEF800

場に呼び出され咆哮するレッドアイズ。半ば予想していた事ではあったが、軍隊竜はまだしも初手から上級モンスターが場に現れた事によるプレッシャーに万丈目も気を引き締める。

「ならば俺のターン。ドローっ！」

『アニキ。アニキ』

「なんだ騒がしい。気が散るから黙っている」

さあこれからという所で、急におジャマ・イエローはふわりと肩に浮き上がってきたので冷たく追い払おうとする万丈目。

だが、イエローはどこか怯えている様子でさらに告げる。

『アニキ。なんかあの人のデツキから凄く嫌な感じがするのよ〜ん』

「デツキから？ 身体からじゃなくてか？」

『うん。幻魔とは違うけど、どっちかと言えば前にタイタンって人が使ってた『ダーク・

アリーナ』みたいな感じ』

操られているのだから、身体に何かしらの影響が出ているというのは分かる。しかし

イエローの言葉に、万丈目も少しだけ考え込む。

（確かあれは現実に影響を与えるレベルのカードだった。もしそれと同じような物が吹雪さんのデッキにもあるとしたら……ヤバいな）

側で見ているカイザーは精霊は見えないのだが、見えない何かが居るといふ事を察して口を挟む事なく静観する。

「なら使われる前にさっさと勝負を着けるまでだ。俺は魔法カード『魔の試着部屋』を發動。LPを800払い、デッキの上から四枚めくり、その中のレベル3以下の通常モンスターを場に特殊召喚する。それ以外はデッキに戻してシャッフルだ」

万丈目 LP4000↓3200

万丈目は身を削って四枚めくり、目当てのカードが来たとばかりにニヤリと笑う。

「ヒットだ。俺はこの中からレベル2『おジャマ・イエロー』を守備表示で特殊召喚！」

おジャマ・イエロー DEF1000

『参上なのよくん！……だけどアニキ。兄弟達が居ないとおいらちよつぱり不安なんだけど』

「なに。心配するな。一枚あれば充分だ」

不安そうに振り返るイエローに対し、万丈目はそうはつきりと断言する。

「生け贄は一体で充分。俺はおジャマ・イエローを生け贄に『アームド・ドラゴンLV5』

を攻撃表示で召喚！」

『え〜っ!? 折角出てきたのに〜っ!?』

アームド・ドラゴンLV5 ATK2400

泣き喚くイエローを生け贄に、アームド・ドラゴンLV5が場に現れ黒竜と睨み合う。緊迫する展開だというのに、相変わらず吹雪の顔には感情らしきものは伺えない。

「レッドアイズとアームド・ドラゴンの攻撃力は同じ。だがアームド・ドラゴンの効果はっ！」

「その通りだカイザー。アームド・ドラゴンの効果発動！ 手札のモンスターを墓地に送り、その攻撃力以下のモンスターを選択して破壊する。俺は手札のもう一枚のアームド・ドラゴンLV5を墓地へっ！」

その瞬間、アームド・ドラゴンの全身の棘が隆起し発射態勢を整える。狙いはもちろん相手の場の黒竜。

「吹き飛ぶが良い。『デストロイド・パイル』！」

号令と共に棘がミサイルのように雨あられと発射され、レッドアイズに突き刺さり爆発。粉碎する。

「これでアンタの場は軍隊竜のみ。行くぜっ！ バトルフェイズ。アームド・ドラゴンで軍隊竜に攻撃。『アームド・バスター』っ！」

グルグルと腕を高速回転させ、アームド・ドラゴンが軍隊竜へと突進する。だが、「軍隊竜の効果発動。このカードが戦闘で破壊され墓地に送られた時、デッキから軍隊竜を一体特殊召喚する」

そう軍隊竜はその名の通りリクルーター。攻撃に倒れる軍隊竜と入れ替わるように、新たな軍隊竜が出現して守りを固める。ただ、

「……ふっ。想定内だ。俺がそんな程度の事を考えていないと思っただかっ！ メインフェイズ2に移行し、俺はカードを一枚伏せてターンエンド。そこでアームド・ドラゴンの効果発動。LV5を生け贄に、デッキからLV7を攻撃表示で特殊召喚。進化しろアームド・ドラゴンっ！」

同名カードがまた出てくる事、相手の墓地を無駄に増やさせる事を差し引いても、アームド・ドラゴンの進化を優先させた方が良いと万丈目は判断した。

アームド・ドラゴンLV7 ATK2800

相手モンスターを戦闘で破壊する。条件を満たしたアームド・ドラゴンLV5は、LV7へと進化を遂げて力強く雄叫びを上げる。

「さあ。アンタのターンだ。……操られたまんまじゃ俺には勝てないって事を教えてやる」

そう吠える万丈目の瞳には、静かだが強烈な闘志が燃え盛っていた。



(え〜いうつとおしいっ!?)

一方森の中にて、ラビエルに乗った悪霊はイラついていた。それというのも、

キンツ!

『加護をあげたわ。一撃なら何としても防いでみせる。囀役は派手に行きなさいセンパイっ!』

『オツケー突つ込むよっ! やあああっ!』

ドドドドドっ!

足止めがとんでもなくうつとおしいからだ。

普通に戦えば、いくら幻想体の魔法少女だろうと二人では幻魔には及ばない。

しかし今回の目的は撃破よりもあくまで足止め。セイの祈りによる加護を受け、木々の上を飛び回りながらココロは愛用のステッキから速度の上がつた星形弾を乱射。

盛大にばらまかれるそれはラビエルにとっては痛手にならないが、四方八方から飛んできては悪霊としてはたまらない。

『何をしている。さっさと始末しろラビエルっ!』

悪霊の事は気に入らないが、自分もチクチクと攻撃を受けて腹立たしいのも事実。ラビエルも片手を悪霊の防御に回し、小癩な精霊を叩き潰してやろうともう片腕を振るうが、

『うわつと!? 危ない危ない』

ココロの方は最初から回避重視。一撃離脱を繰り返し、おまけに加護で各種能力も向上しているためヒラリヒラリと躲していく。

その度にラビエルの剛腕は空を切り、地面を叩き、木々をへし折っていく。それはまるで癩癩を起こした子供のようだが、破壊の規模はとんでもなかった。

ただ、それも長くは続かない。

グオオオオオン!

業を煮やしたラビエルが、周囲からの精气吸収を意図的に強めたのだ。

勿論三幻魔が揃っている時に比べれば弱く、格の高い精霊ならある程度は耐えられる。だが、

『う〜ん。ちよつときつくなってきたかも』

『……あまり、長くは保ちそうにないわね』

バリバリ戦闘中にこれでは消耗は一気に激しくなる。顔色が少し悪くなってきた魔法少女達を見て、悪霊もあとは時間の問題だとようやく少し留飲が下がった。

（これで闇のアイテムを手に入れ、三幻魔を全て制御下に置けば我らを阻める者はいない。影丸を破った十代も、それも先ほど消滅した賢者の石の力あつての事。おまけに体力を消耗している今なら赤子の手を捻る様なものよ）

やっとゴールが見えてきたと、悪霊は勝利に向けての道筋を改めて頭の中で思い描く。

（あと懸念があるとすればバランスー共が追いついてくる事だが……それはダークネスこと天上院吹雪がそう簡単には行かせまい。なにせ）

そこまで考えて、悪霊は自身の仕込んだ策に嫌らしい笑みを浮かべる。

（場合によっては我らが使う可能性もあつた故、奴のデッキには我らが少し手を加えてある。あのデッキにふさわしい、たっぷりと闇の力を注ぎこんだカードをな）

そのカードが出た瞬間、本人が望む望まぬに関わらず闇のデュエルが発動する。そうすれば勝敗に関係なく消耗は避けられない。

一対一では誰かの消耗が酷く、数人がかりなら足止めされてこちらに追いつくまで時間が掛かる。どちらにせよ悪霊にとっては好都合な展開。

『さあ。忌々しい人間共。我らの復讐の時はもうすぐだ』

万丈目対吹雪 その二 死者の世界 堕ちた黒竜

吹雪 LP4000 手札2 モンスター 軍隊竜 魔法・罾 伏せ1

万丈目 LP3200 手札2 モンスター アームド・ドラゴンLV7 魔法・罾

伏せ1

(さて。ここまではこっちが有利。……だが、仮にも吹雪さんは操られているとはいえ、カイザーと並び称されたデュエリスト。さあ。次はどう出る?)

上級モンスターが居るとはいえ、このくらいはすぐに逆転される可能性があるかと、万丈目は油断なく構える。

そしてカイザーもまた、吹雪ならこの程度で終わる筈がないと戦いを見守る中、「私のターン。ドロー。私は魔法カード『天使の施し』を発動。デッキから三枚ドロし、その後二枚を手札から捨てる」

吹雪が淡々とカードによる手札交換をした時、周囲にゾクツと悪寒のような何かがある。

『アニキ。今、多分引いたのよ。あのカード、何かヤバいっ!』
「ああ。分かってる」

万丈目は薄っすらと冷や汗をかきながら、吹雪の一挙手一投足を見逃さないよう中止する。

そんな中、吹雪が手札から発動したのは、この場の誰も予想だにしなかったカードだった。

「私はフィールド魔法『アンデットワールド』を発動する」

そのカードが発動した瞬間、カードからドロドロとした濃密な闇が周囲に溢れ出す。

「アンデットワールド? 何だコイツは……カイザーっ!」

「……知らない。吹雪がそんなカードを使った記憶はない。つまり」

「ちっ! あのコウモリ野郎の仕業か」

付き合いの長いカイザーが知らないという事実には、悪霊が勝手に吹雪さんのデッキを弄ったなど勘づき舌打ちする万丈目。

「ふん。どんな効果か知らないが、このアームド・ドラゴンLV7の前に妙な小細工は……むっ!」

並のモンスターでは突破出来る筈がないと、自身の自慢のモンスターを見る万丈目。しかしそこで万丈目はモンスターの異常に気付く。

アームド・ドラゴンの周囲に、まるで人魂のようなモノが纏わりついていた。

「どうなっている？ アームド・ドラゴンの種族がドラゴンからアンデット族に!」

「アンデットワールドの効果。このカードが場に出ている限り、墓地と場の表側表示モンスターは全てアンデット族になる。また、互いのプレイヤーはアンデット族しか生け贄召喚できない」

「互いのモンスターの種族変更には召喚制限だど？ 面倒な」

万丈目のデッキの大半はドラゴンや機械族。場のモンスターがアンデット化する以上、機械やドラゴンをサポートするカードは使えない。おまけに上級モンスターを呼ぶ方法がかなり削られた事に、万丈目は歯噛みする。

「慌てるなっ！ いくらデッキを弄られたとはいえ、吹雪の主体はあくまでドラゴン。無闇にデッキの内容を変え過ぎれば、それこそ使いこなせず弱体化する筈。縛りがあるのは向こうも同じだ」

カイザーの言うように、吹雪の場の軍隊竜も人魂が纏わりついてアンデット化している。これではドラゴンのサポートカードは使えない。しかし、吹雪が手札のカードを一枚手に取った事で状況は更に一変する。

「このカードはレベル7。本来生け贄が二体必要になるが、効果によりアンデット族を

生け贄とする場合一体で召喚できる。私はアンデットとなつた軍隊竜を生け贄に捧げ、現れるっ！ 『真紅眼の不死竜』っ！」

死霊の魂を喰らい、堕ちた黒竜が場に出現した。

真紅眼の不死竜 ATK2400

「レッドアイズ？ コイツも闇ダークネスドラゴン竜と同じレッドアイズの派生形か？」

基本の姿は原型である真紅眼の黒竜や派生の闇竜に近い。黒い外殻の表面に、幾筋も紅い線が葉脈のように伸びた姿。名前にもある真紅の瞳も健在だ。

ただ頭部から伸びる蒼い人魂と、翼を羽ばたかせる度に揺らめく同色の炎が、どこか幻想的な美しさと恐怖感を両立させていた。

闇竜のそれとはまた別の闇の力に、万丈目も驚きを隠せない。

「さらに私は手札から『黒鋼竜ブラックメタルドラゴン』の効果を発動。手札か場のこのカードを、場のレッドアイズモンスターに攻撃力600アップする装備カード扱いで装備できる。不死竜に装備」

鋼の外皮が装着され、強くなったのが分かったのか不死竜が咆哮する。

不死竜 ATK2400↓3000

「手札から直接装備出来るモンスターとは珍しいな。しかし攻撃力3000。アーム

ド・ドラゴンを上回ったかつ!？」

「バトルフェイズ。不死竜でアームド・ドラゴンを攻撃!」

万丈目 LP3200↓3000

吹雪の指示の下、不死竜は大きく息を吸い込んで口から青炎のブレスを放つ。アームド・ドラゴンは炎に包まれ、そのまま地面に崩れ落ちた。

さらに青炎はそのまま万丈目に襲い掛かり、映像の筈なのに急激な熱さを感じて万丈目は素早く腕で振り払う。すると、

「うおっ!？」

「万丈目っ!？」

『アニキっ!？』

本当に手の甲を火傷した。

見た目に比べれば些細。精々調理中に油が跳ねた程度の軽いもの。しかし間違いく実際にダメージを受けた事に万丈目は困惑する。

「リアルダメージ有りの闇のデュエルだ?!? まさかそのカードが出たからっ!？」

ふと万丈目が見ると、先ほど遊児から手渡されたペンダントが光を放っている。

(今のリアルダメージが軽く済んだのはコイツのおかげって訳か。助かったぜ久城)

「私はこれでターンエンド」

「……だが、こんな程度で屈する俺ではないっ！ これでアンタの手札は尽きた。あとはそのドラゴンを何とかすれば良い。俺のターンっ！」

万丈目は勢いよくカードを引く。引き当てたのは、

「俺は魔法カード『強欲な壺』を発動し二枚ドロ。さらに魔法カード『死者への手向け』を発動！ 手札を一枚捨て、場のモンスター一体を選択して破壊する。当然対象は不死竜だ。アンデットはあの世に帰るが良いっ！」

「効果で破壊するカードかつ！ これなら」

追加ドロからの逆転の一手。カードに描かれたミイラから包帯が凄まじい勢いで伸び、不死竜に絡みついてそのまま引きずりこんで破壊する。

「はっ。不死竜というからには破壊耐性が復活能力でもあるのかと思ったが拍子抜けだな」

「装備されていた黒鋼竜の効果発動。このカードが場から墓地に送られた時、デッキからレッドアイズと名の付くカードを一枚手札に加える。私は『真紅眼の飛竜』を手札に」「モンスターの補充をしてきたか。なら場がから空きの内に攻めるっ！ 俺は手札から『X―ヘッド・キャノン』を攻撃表示で召喚」

X―ヘッド・キャノン ATK1800

「良いぞ！ 畳みかけろっ！」

「言われずとも。バトルだ！ X―ヘッド・キャノンで直接攻撃！」

カイザーの言う通り今こそ攻め時。万丈目はモンスターに攻撃指示を出すのが、

「永続罨発動。『リビングゲッドの呼び声』。墓地の真紅眼の不死竜を攻撃表示で特殊召喚」

真紅眼の不死竜 ATK2400

「くっ……攻撃は中止だ。俺はこれでターンエンド」

再び墓地から蘇った不死竜を相手にするには攻撃力が足りないと、万丈目は仕方なく攻撃を中斷する。

（攻撃力が元に戻ったとはいえ、それでも2400。今の手札では突破は出来ん。耐えるしかない）

吹雪 LP4000 手札1 モンスター 真紅眼の不死竜 魔法・罨 アンデット

ワールド リビングゲッドの呼び声

万丈目 LP3000 手札1 モンスター X―ヘッド・キャノン 魔法・罨 伏

せ1

「私のターン。ドロー。私は真紅眼の飛竜を攻撃表示で召喚」

真紅眼の飛竜 ATK1800

「攻め手を増やしてきたか」

「バトルフェイズ。真紅眼の不死竜で、X―ヘッド・キャノンに攻撃」

万丈目 LP3000↓2400

「ぐううっ!!」

それは先ほどと同じ光景。

不死竜によってX―ヘッド・キャノンが焼き払われ、そのブレスの余波が実体となつて万丈目に襲い掛かる。

ダメージ量が増えれば当然リアルダメージも酷くなる。先ほど遊兎から渡されたペンドラントによつて大分カットされているが、それでも炎の熱気と息苦しさが僅かにふらつく万丈目。

『あ、アニキっ!!? しっかりしておくれよおっ!!?』

「うるたえるな。少しくらつとしただけだ。この程度のダメージどうという事はな……何?」

そう。同じ光景の筈だった。

倒されたX―ヘッド・キャノンの残骸が、炎を纏いゆらりと起き上がるという事を除けば。

「不死竜の効果。自身がアンデット族を戦闘で破壊し墓地に送った時、そのモンスターを私の場に特殊召喚する」

「何だと？ まさかアンデットワールドで場のモンスターを全てアンデットに変えたのは、この能力を活かすためっ!？」

驚愕する万丈目に対し、吹雪はやはり淡々と説明する。

「そう。先ほどのアームド・ドラゴンのように “進化以外で特殊召喚出来ない” 効果でもない限り、倒されたアンデットは全て不死竜に支配される」

不死竜がギャオオンと咆哮をあげると、X―ヘッド・キャノンはまさに幽鬼のような挙動で吹雪の場に移動した。

それを見て万丈目は、何故あのカードが再生能力も破壊耐性もないのに不死竜と呼ばれているのか理解する。つまり、

「不死となったカードを操るから不死竜って事か」
アンデット

「その通り。そして、今私の場に特殊召喚されたモンスターにも当然攻撃権がある。X―ヘッド・キャノンで直接攻撃だ」

「万丈目っ!？」

敵となったX―ヘッド・キャノンのキャノン砲がガシヤンと音を立てて装填され、そのまま万丈目に向けて放たれた。

万丈目対吹雪 その三 蘇る黒竜

「いかんっ?!」 この攻撃と残る飛竜の攻撃が通ったら万丈目のライフはっ?!」

カイザーの言う通り、敵となったX―ヘッド・キャノンと残る飛竜の攻撃が通れば、万丈目のライフは跡形もなく消し飛ぶだろう。

だが、それは攻撃が通ればの事。

「永続罨発動! 『ダイレクト・ボーダー』。互いのプレイヤーは、攻撃力1000以上のモンスターの直接攻撃を無効にする」

伏せられていたカードにより、砲撃はぐにやりと万丈目の直前で軌道を変えて空の彼方へ流れていく。

「まさか倒したカードを奪われるとは驚いたが、これでもう飛竜も攻撃できないぜ。さあどうする?」

「私はこのままターンエンドだ」

「だろっな」

そう余裕そうに見せる万丈目だったが、内心は少々焦っていた。

(ちっ。まさかダイレクト・ボーダーを使わされるとは思っていなかった。こいつは出来れば切りたくないカードだったんだがな)

ダイレクト・ボーダーは高い防御能力を持つ永続罫だが、欠点として互いに直接攻撃を阻害する効果がある。

あくまで緊急用の備えとしては役に立ったが、こちらもうかつに攻めれなくなったと万丈目は歯噛みする。

「だが、それならそれでやりようはある。俺のターンっ！俺はカードを場にセットしターンエンド」

悩んでも居られない。万丈目は即座に頭を切り替え、ドロートしたカードを見るやそのまま場にセットする。

『万丈目のアニキ。マズいよ。モンスターがなくて場がから空きに……あっ!? そっか！ダイレクト・ボーダー!』

「そういう事だ。むしろ今下手にモンスターを出した方が不死竜に取られて面倒な事になる。さあ。アンタのターンだぜ」

吹雪 LP4000 手札1 モンスター 真紅眼の不死竜 真紅眼の飛竜 X1

ヘッド・キャノン 魔法・罨 アンデットワールド リビングデッドの呼び声

万丈目 LP2400 手札1 モンスター0 魔法・罨 ダイレクト・ボーダー
伏せ1

「私のターン。ドロ。私は魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚ドロ」

『げえっ?! アイツこの状況でさらにドロしてきたっ?! これは本気でヤバいわよんっ!』

実際イエローの言うように、現状は盤面もLPも吹雪が有利。そこにさらに手札さえ増やされるとなれば、下手をすれば一気に押し切られる状況だった。

「私は『黒竜の雛』を攻撃表示で召喚。バトルフェイズ。黒竜の雛で直接攻撃」

黒竜の雛 ATK800

吹雪の場に現れたのは、まだ卵の殻を被った幼竜。しかしその小さな身体から放たれるブレスは、成竜に比べれば弱いものの万丈目に炎となって襲いかかる。

万丈目 LP2400↓1600

「ぐうっ!!」だが、ここでダイレクト・ボーダーのもう一つの効果を発動! 直接攻撃でダメージを受けたプレイヤーは、デッキから一枚ドロする。攻めを焦ったな」

場にモンスターを出さなかったのは、こうして敢えて攻撃をすり抜けさせるため。多少のダメージは必要経費。かつて戦った三沢ならそういうだろうと、万丈目は痛みに耐えながらも一枚引く。だが、

「メインフェイズ2。私は手札から魔法『闇の量産工場』を発動。墓地の通常モンスター二体を手札に加える。『ハウンド・ドラゴン』と真紅眼の黒竜を手札に」

「ハウンド・ドラゴンだと？ そんなカードいつ……さっきの天使の施しの時か」

「黒竜の雛の効果発動。このカードを墓地に送り、手札の黒竜を場に攻撃表示で特殊召喚。私はこれでターンエンドだ」

真紅眼の黒竜 ATK2400

「やるな。攻撃から上級モンスターへのつなぎ。操られているのにも関わらず、吹雪のプレイングには無駄がない。それにドロコそ許したが、元々吹雪のデッキはバーン軸寄り。これ以上万丈目がLPを減らすようであれば、それこそ効果ダメージが決め手になる」

カイザーが分析したように、バーン軸寄りのレッドアイズデッキには黒炎弾を始めとした効果ダメージを与える物が多い。吹雪は直接攻撃こそ封じられたが、このまま待つだけでいずればそれらのカードを引き当てる。

万丈目がモンスターを出して次に繋げようにも、吹雪の場にはモンスターを奪う不死

竜と同じく攻撃力2400の黒竜。そして奪われたXーヘッド・キャノンと、墓地にある事で真価を發揮する飛竜。

加えてアンデットワールドにより召喚制限までかかり、万丈目には極めて不利な状況だった。

だというのに、

「……ふっ」

笑っていた。

いかにも獰猛な獣の笑み。こんな状況だというのに向に衰えない闘志。十代の純粹にデュエルを楽しむ笑みとはまた少し違うその表情を見て、ほんの一瞬だけカイザーすらも驚愕に目を見開く。

「操られてこの強さ。それでこそ、いずれこの学園のトップに立つ俺様にふさわしい相手だ。俺のターンっ！」

万丈目は勢いよくドローし、そのままそのカードを見て少し思案する。そして、

「俺は手札から『Zーメタル・キャタピラー』を攻撃表示で召喚。さらにそこでリバーScardカードオープン。『レベル・ソウル』。俺の場のモンスターを一体生け贄に捧げ、墓地の

LVモンスターを選択して除外。そのカードに記されたモンスターを手札またはデッキから特殊召喚する」

召喚されるなり、すぐさま粒子となつて消えゆくメタル・キャタピラー。イエローが『ちよつと不憫なのよん』と言っているが万丈目は普通にスルー。

「俺が墓地から除外するのはアームド・ドラゴンLV5。よつて、その進化先であるLV7をデッキから攻撃表示で特殊召喚する！」

アームド・ドラゴンLV7 ATK2800

万丈目の場に、二枚目のLV7が呼び出されて雄叫びをあげる。

「バトルだ。アームド・ドラゴンLV7で、真紅眼の黒竜に攻撃！『アームド・バニツシャー』っ！」

万丈目の号令を受け、アームド・ドラゴンは黒竜に向けて突進っ！ 迎撃する黒竜のブレスをもとせせず近づき、その腕から伸びた刃で黒竜を斬り捨てる。

吹雪 LP4000↓3600

その余波が吹雪にも到達するが、衝撃波に僅かにぐらりと態勢が崩れただけですぐに立ち直つた。

『やった！ 初めてアニキが相手にダメージを与えたのよくん！』

「まだ終わりじゃないぜっ！ メインフェイズ2っ！」

万丈目はそこで、手札から一枚のカードを発動する。それは、

「魔法カード『死者蘇生』。生憎取られっぱなしってのは趣味じゃないんでな。そつちがX―ヘッド・キャノンを取るのなら、俺が復活させるのは吹雪さん。今倒したアンタの黒竜だっ！」

ギヤオオオオンっ！

万丈目の場に黒竜が現れ、並び立つアームド・ドラゴンに負けない勢いで咆哮する。

その姿は、どこか吹雪に向けて何かを伝えたいようにも見えて、

「レッド……アイズ」

そう、操られている筈の吹雪がポツリと呟いたのは偶然か、それとも自身の信頼するカードが敵に回った嘆きか。

「吹雪さんよ。このカードがアンタに物申したいようだけ。いつまでもたかだか闇のカードなんかには操られているんじゃないってよ。だから……覚悟しろ」

万丈目はぎゅっと握りしめた拳を吹雪に向けて宣言する。

「これからコイツの一撃で目を覚まさせてやる。多少のダメージは覚悟しろよ？」

◆◆◆◆◆
ちなみにその頃、

『いい加減にしろこの邪魔者共がつ！』

ラビエルの肩に乗る悪霊は、溜まりに溜まったイライラを爆発させるようにそう叫ぶ。何故なら、

『“人は死んだらどこへ行く？”』

先ほどから剛腕を振るおうとするラビエルに白い蝶の群れが纏わりつき、

『凍るが良い』

その足元は完全とまでは行かないが、地面から侵食する氷に捕まり動きが阻害されていた。

そう。悪霊達を追う遊児から先発してきた雪の女王と死んだ蝶の葬儀が、魔法少女達と合流して足止めに加わったのだ。

『ふん。いかにALEPH級とはいえ、所詮はまともな主も居ない力あるだけの怪物よの。……これで幼子への義理は果たした。近寄るだけで精気を吸われるのは不快だ。

あとは任せろぞ葬儀よ』

『ああ。充分だ。真つ向勝負で勝ち目は無いが、時間稼ぎなら請け負おう』

やるべき事はやったとすぐに実体化を解いて離脱する雪の女王に対し、怒るでもなく後を引き継ぐ葬儀。

『君達は今の内に少し身体を休めると良い。蝶達の目くらましもそう長くはもたないだろうがね』

『助かるわ。……いったん下がるわよセンパイ』

『うん！ 正義の味方も戦いつばなしはキツイもんね。少し休んだらすぐ戻るから、ちよこつとだけお願いっ！』

こうして持ちこたえる幻想体達だが、ラビエルを翻弄しているように見えて足止めが精いっぱい。

いつ突破されるかも分からないギリギリの状況に変わりはなかった。

遊児が追いつくまで残り……。

万丈目対吹雪 その四 目覚める意思

「俺はカードを一枚伏せ、ターンを終了する」

死者蘇生で真紅眼の黒竜を復活させた万丈目。しかしメインフェイズ2であったためこれ以上の追撃は出来ず、伏せカードを出して吹雪の手番へと回す。

「……私のターン。ドロ」

吹雪 LP3600 手札3 モンスター 真紅眼の不死竜 真紅眼の飛竜 X
 ヘッド・キャノン 魔法・罠 アンデットワールド リビングデッドの呼び声

万丈目 LP1600 手札0 モンスター アームド・ドラゴンLV7 真紅眼の黒竜 魔法・罠 ダイレクト・ポーター 伏せ1

（先ほどのターン。万丈目は黒竜を戦闘破壊し死者蘇生で復活させた。その事がどう戦局に影響するか）

二人の戦いを見守るカイザーは静かに思索する。

今の場面、不死竜を破壊して蘇生させるという手もあった。

二体の攻撃力は同じ。そしてアンデットワールドが健在な以上、そのまま奪われたX―ヘッド・キャノンを取り返す事も、墓地に居ると厄介な真紅眼の飛竜を戦闘破壊して引つ張り込む事も出来た。

勿論黒竜の方が吹雪にとってサポートカードが多く、残しておく危険という思惑もあったかもしれない。特に『黒炎弾』を引かれれば、一気に万丈目はLPを0にされるのでそれを嫌ったという可能性も。

だが、そんな事とは関係なく、

（黒竜と対峙させることで、吹雪の心呼び覚ます。もしやお前は……それを狙っているのか？）

「私は手札から『アタッチメント・ドラゴン』を召喚し効果発動。このカードは召喚、反転召喚、特殊召喚時に相手モンスターの装備カードとなり、表示形式を変更する。その後そのモンスターは表示形式を変更できない。アームド・ドラゴンを守備表示に変更」
「むっ!？」

アームド・ドラゴンLV7 ATK2800↓DEF1000

吹雪の場に現れた竜が、そのままアームド・ドラゴンに纏わりついてむりやり動きを封じる。

「バトルフェイズ。真紅眼の飛竜で、真紅眼の黒竜に攻撃」

「……そうきたか。迎え撃て黒竜！」

飛竜は主人の命で黒竜に突撃するが、攻撃力は黒竜の方が上。黒竜のプレスによって、その身に爪が届く前に焼き尽くされる。

吹雪 LP3600↓3000

『あれえ？ 何でこっちの方が攻撃力が上なのに攻撃してきたのかしらん？』

「分からんのか？ 飛竜は墓地に居る時、そのターンモンスターを召喚していなければ同じく墓地の真紅眼の黒竜を特殊召喚できる。多少ダメージを受けてでも、早めに墓地に送っておくことを優先したんだ。そして当然次は」

不思議がるイエローに簡単な解説をすると、万丈目は次の展開を予想して身構える。不死竜の効果はアームド・ドラゴンLV7には通用しない。つまり次の標的は、

「不死竜で、真紅眼の黒竜に攻撃。……私の下に戻れっ！ 黒竜」

向かい合う二体の攻撃力は直角。不死竜が青色の、黒竜が赤色の炎を口内に溜め、今にも敵に向けて吐き出そうとしたその瞬間、

「畏発動！ 『攻撃の無力化』。不死竜の攻撃を無効にし、その後バトルフェイズを終了

させる」

互いの中間にエネルギーを無力化する空間が出現。このままブレスを吐いても互いに届かないと分かったのか、二体のレッドアイズはそのままブレスを中断する。二体共どこことなく横槍を入れた万丈目にどこことなく不満そうだ。

「このままレッドアイズ同士で相打ちに持ち込み、残るX―ヘッド・キャノンでアームド・ドラゴンを破壊。次のターン飛竜の効果で黒竜を蘇生させる流れに持ち込みたかつたんだろが、当てが外れたな」

「……メインフェイズ2。私はX―ヘッド・キャノンを守備表示に変更。ターンエンド」

「俺のターン。さて。まだ目を覚めないのか？ なら……ここらで一つキツイのを見舞ってやろう」

そう言つて万丈目は、ニヤリと笑つてドロ―したカードを発動する。それは、

「魔法カード『大嵐』。効果は当然知つてるよな？ さあ。全てまとめて吹き飛ぶが良いっ！」

大嵐により、場の全ての魔法・罫が破壊されていく。万丈目の場のダイレクト・ボ―ダーも吹き飛ぶがそんな事は関係がない。何故なら、

「上手いっ！ これならアンデットワールドも、リビングデッドの呼び声もまとめて破壊される」

みると場のモンスター全てに纏わりついていた人魂がフィールド魔法ごとにはぎ取られ、モンスター達はアンデットから元の種族へと戻っていく。

そしてリビングデッドの呼び声で復活していた不死竜もまた、カードが無くなった事で再び墓地へと還った。

「おっとそれだけじゃないぜカイザー。アームド・ドラゴンに装備されたアタッチメント・ドラゴン。こいつは今装備魔法扱い。つまりそいつも破壊されることで、アームド・ドラゴンもまた解放される」

吹きすさぶ風はアームド・ドラゴンを拘束していた竜も吹き飛ばした。アームド・ドラゴンはいつでも攻撃に移れるぞとばかりにぶるりと一度大きく震える。

実質万丈目は大嵐とダイレクト・ボウダーの二枚消費に対し、吹雪はアンデットワールド、リビングデッドの呼び声、真紅眼の不死竜、アタッチメント・ドラゴンの四枚を消費させられた形となった。

そして、それは数の上だけでの消費に収まらない。

「……ぐっ?! あがつ?!」

『アニキっ!? なんか向こうの様子がおかしいのよん?』

突然これまで無表情だった吹雪が、頭を抱えて苦しみだした。

「やはりな。アンデットワールドと真紅眼の不死竜。闇のカードと思わしき物をまとめて破壊したんだ。少しは催眠なりなんんりの影響が弱まるのは必然。……一気に畳みかけるぞ！ アームド・ドラゴンを攻撃表示に変更し、バトルフェイズっ！」

待つてましたとばかりに攻撃態勢に移るアームド・ドラゴンと黒竜。そして、万丈目の指示は、

「アームド・ドラゴンでX―ヘッド・キャノンに攻撃。そして吹雪さん。黒竜でアンタに直接攻撃だっ！」

ダイレクト・ボーダーが無くなった以上、直接攻撃を阻む物はない。まず先駆けとして、アームド・ドラゴンの腕刃がX―ヘッド・キャノンを切り裂いて破壊する。

そして黒竜が先ほどまでよりも凄まじい勢いで、口内にプレスを溜め始めた。それは、どこか操られる主人に活を入れるべく奮い立っているようで、

「放て真紅眼の黒竜っ！ 目を……覚ませえっ！」

先のターンの宣言通り、黒竜の一撃が吹雪の目を覚まさせるべく叩きこまれた。

吹雪 LP3000↓600

単純にダメージのみを考えるなら、黒竜を先駆けにして攻撃力の高いアームド・ドラゴンで直接攻撃した方が良かった。だが万丈目はダメージよりも、吹雪の目を覚まさせる事を優先した。結果として、

「ぐおおおっ!!」

強烈なブレスを受け、吹雪はふらふらとバランスを崩し膝を地につける。だが、闇のデュエルにしては肉体へのリアルダメージは大分少なかった。

「吹雪っ!!」

急いで駆け寄ろうとするカイザーを、万丈目は手で制する。

「まだ勝負は終わってないぜカイザー。俺はこれでターンエンド。……立てよ吹雪さん」

膝を突いたまま動かない吹雪に、万丈目は発破をかけるように語り掛ける。

「アンタが噂で聞いていたカイザーのライバルなら、あのデュエル馬鹿代が苦戦し、久城の奴が認めるデュエリストならっ! ……そして」

そこで万丈目は少しだけ逡巡した後、どこか意を決したかのように叫ぶ。

「あの強く可憐な天上院君のお兄さんだというのなら、いつまでも操られてないで目を覚まして立ち上がって見せろっ!」

「……………ずるいなあ。君は」

その言葉に、ふらつきながらもゆっくりと吹雪は立ち上がる。

「明日香を引き合いに出されては、立ち上がらない訳にはいかないじゃないか」
その顔はもはや無表情ではなく、瞳にははつきりとした意思が満ちていた。

万丈目対吹雪　その五　爆炎の決着

「吹雪っ！　目を覚ましたんだなっ！」

「ああ。さつきまで半分夢うつつだったのが、レッドアイズのキツイ一撃と万丈目君の熱い言葉で目が覚めたよ。……それに亮。君の声も聞こえていた。目を覚ますのが遅れてすまなかつたね」

カイザーに軽くウインクして返す吹雪。だが、その顔色は微妙に良くない。

「それと君にも謝罪を。ダークネスの時から間もないというのに、またしても操られて怪我をさせてしまった。手の火傷は大丈夫かい？」

「ふん。こんな程度、ノース校の日々に比べれば怪我の内にも入らない。それに操られたのもそもそもアンタが前の後遺症で弱っていたからだ。気に病むような事はないぜ。吹雪さん」

「ありがとう。……うん。状況はぼんやりとだけど把握している。一応この一撃を考えろに、闇のデュエル自体はもうアンデットワールドと不死竜が壊された時点で解除、或いは弱まっていると見るべきか。でなければレッドアイズの炎を受けて、ここまで僕が

無事であるというのはおかしいからね」

どうって事ないとばかりに万丈目が手をひらひらさせるのを見て、吹雪は一度大きく頭を下げてから本題に入る。

実際吹雪は身体に痛みこそ感じているものの、先ほど万丈目が不死竜のブレスを受けた時は軽く火傷したのに対し、特に火傷を負ったとか服が焦げたという事は起きていない。

「となると後は、いったん僕が降参サレンダーでもしてデュエルを終わらせれば」

『させぬっ！』

吹雪がデツキの上に手を置いてサレンダーしようとした瞬間、デュエルディスクごと腕に纏わりついていた黒い靄から声が響き渡る。

「この声はさっきの悪霊かつ!? 本体が残しておいた分身つてどこか」

『降参などさせぬ。催眠が解けたのなら、また掛け直して我らの傀儡にしてくれるわっ！』

黒い靄は大きく伸び上がり、再び吹雪を絡め捕ろうとする。だが、

「吹雪さんっ！ これをつっ！」

咄嗟に万丈目が投げ渡したのは、遊兎から渡されていた墓守のペンダント。本体にも効いたこれならば、分身を退けることも可能だろうと。

吹雪はすぐ意図を理解して掴み取ろうとするが、

『させるか馬鹿めっ!』

黒い靄は鞭状に伸びてペンダントを弾く。いくら闇のアイテムとは言え、誰かが持つていなければ力は発動せずただの物。故に、

ガシッ!

「うおおおっ!」

弾き飛ばされたそれをキャッチしたカイザーが突進する事で、ペンダントは十全に力を発揮した。

「吹雪から……離れろっ!」

『うっ……ウギヤアアッ!』

身体の中に潜んでいる訳でも、僕^{しも}たるコウモリが光を防いでいる訳でもない状態では結果は明らか。翳されたペンダントから放たれる光に焼かれ、そのまま黒い靄は霧散、消滅する。

「亮っ?! こんな状況で飛び込んでくるとは無茶をする」

「……何。直接デュエルでお前を叩き起こす役目は万丈目に譲ったからな。友人にこの

「くらいはさせてくれ」

「ふふっ。ありがとう」

吹雪はそう言つて朗らかに笑うと、ペンダントを受け取つて身に着け万丈目に向き直る。

「さてと。操つていた靄も取り除かれ、もうデュエルを続ける意味はなくなった……のだけど、どうやら君はその限りじゃないみたいだね」

「……まあな」

万丈目からの闘志はまるで消えていかなかった。寧ろ先ほどよりも燃え盛つていていると言つても良かった。

「確かにデュエル自体はまだ途中だ。だが決着をつけたいというのであれば、僕が降参するのが一番早いんじゃないかい？」

『万丈目のアニキ。戦う意味はなくなつたんだし、さつさと止めちやおうよお。向こうも降参してくれるみたいだしさあ。状況だってアニキの圧倒的有利だし、もうこれで勝ちつて事で良いじゃん』

「いいや。やる意味はある。それにな……アンタは降参すると言つてこそいるが、負けたりは全然ないだろう？」

万丈目は見抜いていた。イエローの言う通り盤面は圧倒的に自分が有利だというの

に、吹雪はまるで動じていないという事に。

「あくまでこんな状況だから。迷惑をかけたのは自分の方だから降参するってか？ 勝ちを譲られるのはごめんだ。それならきっちり決着をつける」

（悪いな久城。本当なら早くお前を追って助太刀に行くのが筋なんだろうが、ここまで火が付いてしまったら止められない）

「……仕方ないな」

「吹雪。良いのか？ 正気に戻ったとはいえ、体力を消耗しているのは間違いないだろう？」

気を取り直してデュエルディスクを構える吹雪に対し、カイザーが少し心配するように声をかける。

「大丈夫と言いたい所だけど、やはり少々身体はキツイかな。しかし一デュエリストとしては、後輩の熱意に応えない訳にもいかない。それに……どうやら彼は明日香に惹かれているみたいだからね。少し兄としては試してみたくなったのさ」

そう言った瞬間、吹雪から発せられる圧の種類が微妙に変わったのを察してカイザーは苦笑する。普段の飄々とした態度からは読み取りづらいが、吹雪が本当に妹を大切に思っている事を知っているからだ。

「万丈目君っ！」

「何だ？」

万丈目に声をかけ、そのまま吹雪は指を一本空へと向けて伸ばす。

「ターンずつだ。次の僕と君のターンで決着がつかなければ、僕はそのまま降参する。それで良いかい？」

「面白い。それで行こう！」

こうして、二人のやる必要はないがやる意味はあるラストターンが幕を開ける。

吹雪 LP600 手札2 モンスター0 魔法・罫0

万丈目 LP1600 手札0 モンスター アームド・ドラゴンLV7 真紅眼の

黒竜 魔法・罫0

「では僕のターン。ドロ。僕は魔法カード『魔法石の採掘』を発動。手札を二枚捨て、自分の墓地の魔法カード一枚を手札に加える。僕は強欲な壺を手札に加え発動。カードを二枚ドロ」

「手札交換か」

「ああ。そして僕はドロしたカードを二枚とも伏せてターンエンド。……そして、エ

ンドフェイズに墓地の真紅眼の飛竜の効果を発動」
「なんだとっ!？」

飛竜の効果を知っている万丈目は驚く。蘇生対象である黒竜はまだこちらの場にあるからだ。だが、

「誰も黒竜がデツキに一枚しかないとは言っていないからね。さっきの魔法石の採掘は、ドローだけでなく手札を捨てるための物。飛竜を墓地から除外し、現れる黒竜っ！」

真紅眼の黒竜 ATK2400

ギャオオオオンっ！

二体の黒竜が敵味方で睨み合う。

「さあ万丈目君。どう攻める？」

「今見せてやる。俺のターンっ！」

このターンで勝負がつかなければ吹雪は自分から降参する。しかしそれは万丈目にとって勝ちとは言えない。

この盤面を突破すべく万丈目が気合を入れて引いたのは、

「装備魔法『ヘル・アライアンス』。このカードを俺の場の真紅眼の黒竜に装備」

カードの発動により、万丈目の黒竜は青黒いオーラを纏う。

「このカードを装備したモンスターは、場の同名モンスター一枚につき攻撃力が800

アツプする。本来同名カードを呼び出すリクルーター用のカードだが、ここには丁度相手の場にも同名カードが居るよなあっ！」

そう。このカードの範囲はあくまでフィールド全体。つまり相手の場のカードもカウントする。奇しくも黒竜同士が並んだ事で条件は満たしていた。

真紅眼の黒竜 ATK2400↓3200

「バトルフェイズっ！ 真紅眼の黒竜で、吹雪さんの黒竜に攻撃っ！ これで終わりだっ！」

号令を受け、互いの黒竜がブレスの準備に入る。装備カードの分、万丈目の黒竜の方が攻撃力は上。決まれば戦闘ダメージで吹雪のLPは尽きる。だが、

「攻撃宣言時に速攻魔法発動っ！ 『サイクロン』っ！ ヘル・アライアンスを破壊する」
「ぐっ!?!」

真紅眼の黒竜 ATK3200↓2400

伏せられていたサイクロンが装備カードを吹き飛ばし、黒竜の攻撃力を元に戻す。しかし攻撃はもう止まらない。

「『黒炎弾っ!!』」

二体の黒竜の放ったブレスは空中でぶつかり合う。陣営は違えど同じカード。そして攻撃力も同じ。つまり結果は当然……相打ちとなる。

ブレスの余波は双方のカードを破壊して地面の砂埃を巻き上げ、互いの姿を僅かな時間遮った。

(片方はサイクロンだったか。しかし相打ちに持ち込んだ所で、こちらにはまだアームド・ドラゴンが残っている。砂埃が止み次第この攻撃で)

万丈目が自分の勝利への道筋を組み立て終えたその時、

「畏発動。『レッドアイズ・バーン』。自分の場の表側表示のレッドアイズが戦闘・効果で破壊された時、そのモンスターの方々の攻撃力分のダメージを互いに受ける。真紅眼の黒竜の攻撃力は2400。よって、互いに2400のダメージを受ける」
「何っ!?! うおおおっ!?!」

そう聞こえてきたかと思うと、強烈な爆炎と閃光が砂埃越しに炸裂した。

吹雪 LP600↓0

万丈目 LP1600↓0

万丈目対吹雪 両者LP0によりドロ。

閑話 信頼された男

戦いは終わり、爆炎と砂埃が晴れてその場に残る者達の表情を露わにする。

しかし、片や疲労しながらも穏やかな顔を崩さないのに対し、もう片方は明らかに不機嫌だった。

『アニキ。大丈夫？』

「引つ付くな。……チツ！ まさかあの状況で引き分けに持ち込まれるとは」

イエローが目をウルウルさせて寄り添おうとするのを、万丈目はぴしゃりと苛立たし気に追い払う。勝敗だけで言えば引き分け。しかし万丈目からすれば負けに近いと感じていた。

「ふふつ。そうでもないさ万丈目君。この引き分けは、僕がこのターンで勝敗が付かなければ降参すると言ったから君が攻めを急いだ事も原因の一つ。それにもう一つ」

吹雪は指を一本立てて更に続ける。

「前のターン君は僕の目を覚まさせる事を優先し、敢えて攻撃力の高いアームド・ドラゴンではなくレッドアイズで直接攻撃した。そのダメージ分が通っていれば、今のターン

アームド・ドラゴンで先に攻撃する事でレッドアイズ・バーンを発動する前にLPを削り切られていたよ」

レッドアイズ・バーンの発動タイミングは破壊された時。つまりダメージ計算の後なので、戦闘ダメージでLPが0になっていけば当然使えない。

そう勝ち筋はあつた事を指摘したのだが、万丈目は余計に苦虫を噛み潰したような顔をする。

「ふんっ。どこまで行っても所詮たればだ。それを言うなら操られて万全でない状態の吹雪さんに勝ちきれなかった時点でこちらの不利。……はあ。まあ良い。悔しいが、俺様がこの学園のトップに立つ為に越えねばならん壁の一つを味わえただけ良しとするや」

「ハハハ。じゃあ壁としても先輩としても、もう少し頑張ってみようかな！ 早速あの黒い霧の本体を追いかけ……っ」と

笑いながら歩き出そうとした吹雪がぐらりと態勢を崩し、それをカイザーががっしりと支える。

「吹雪。ただでさえ消耗しているんだ。少し休め。お前もだ万丈目」

「すまないねえ。でも大丈夫。少し肩を貸してもらえれば平気さ。君もそうだろう万丈目君？」

吹雪が見た所、万丈目は自分ほどには消耗していないと判断していた。途中まで闇のデュエルだったというのに大した精神力だと感心しつつ、彼ならばさっさと一人で敵を追いかけるだろうと予想し、

「いや。カイザーの言う通りだ。俺様もここで少し休むので、吹雪さんも休むと良い」

そう言つて手ごろな石に腰かける万丈目に対し、少し驚いて目を見開いた。ちなみにカイザーやイエローも驚いていた。

「何だ？ 俺がここで休むのがそんなに不思議か？」

「まあね。少し戦った僕でもそう思えるほどに、君は……そう。闘志に満ち溢れていた。なんなら消耗していようが追いかけるんじゃないかというぐらいだったのに、ここで休むという選択肢が出るとはちょっと思いづらくて」

吹雪の言葉にイエローがうんうんと頷き、カイザーも目で同意を語っていた。

「追わんとは言っていない。少し休んでからというだけだ。それに……奴が言つたからな。ここは任せませと。そして俺はこう返した。そっちもな。なら、まず奴が一発かましてから苦戦するようであれば助太刀するのが筋だろう」

「まあ。久城は俺が認めた男。敵が幻魔だろうと助太刀も要らんかもしれんがな」と

ニヤリと笑う万丈目に対し、『ア、アニキの信頼が重いのよん』と少々引き気味のイエロー。

「という事らしい。万丈目もこう言っている事だし吹雪も休め。そんなよれよれではないざ戦いになってもどうにもならないだろう？」

「……仕方ないか。折角先輩として良い所を見せるチャンスだったんだけどねえ」

七精門のド真ん前というとんでもない場所ではあるが、吹雪も折れてその場に座り込む。

こうして決戦を終えた男達は、僅かながらの休息を取る事となったのだ。

「ところで、休んでいる間に君の明日香についての想いをもう少し詳しく聞かせてもらいたいなあ」

「聞いてくれますかっ！　まず天上院君の魅力は何と言ってもあのデュエル中に見せる凜とした横顔に……」

「お前達。休むんじやなかったのか？」

……僅かばかりにはならないかもしれない。



一方その頃。

バキバキバキ。

『くっ!? そろそろ限界か』

幻魔を抑える幻想体達の状況は、いよいよもって悪くなっていた。

死んだ蝶の葬儀の操る蝶の群れは大半を散らされ、足元を拘束していた雪の女王の氷は力づくで破られた。

葬儀自身も精気を大分吸われ、もう実体化を保つことが精いっぱい。だというのに、グオオオオオンっ!

肝心のラビエルはほとんど消耗していない。まったくの無傷とまでは言わないが、少しずつ吸収した精気によって回復しているのだ。

『そうだ。やれラビエルっ! そのまま我らにたてつく邪魔者共を蹴散らしてしまえっ!』

肩に乗る悪霊が騒ぎ立てる中、ラビエルは命令でというより散々自身の邪魔をした精霊を薙ぎ払うべく剛腕を振るう。だが、

『やああああっ!』

あわや腕が葬儀を叩き潰さんという所で、ココロの放つ無数の星形弾がそれを阻む。

『セイちゃんっ！ 今っ！』

『分かつてる』

致命傷には程遠く、すぐに精気吸収で治ってしまう程度の威力だが、それでも葬儀をセイが逃がす時間を稼ぐには充分。しかし、

『きゃあっ!!?』

『センパイっ!!?』

直撃こそしなくても幻魔の一撃が大地を叩き、その拳圧が衝撃となつてココロを襲つた。セイの加護で致命傷こそ負わないが、それでも吹き飛ばされてゴロゴロと地面を転がるその姿はもうボロボロだ。

皮膚はあちこち切れて血が滲み、髪もすっかり鮮やかさを失つた。服は土に塗れ、ステッキも取り落とした。だというのに、

『……はあ……はあ』

その瞳に諦めの色はない。落ちたステッキを拾い直し、ぎゅつと力強く握り直して力強く幻魔を見据える。

『……何故だ？ 何故だ何故だ何故だあっ!!? 何故そこまで立ち上がる。勝ち目などない事は分かるだろうっ!!?』

悪霊は苛立たしさと不可解さにそう叫ぶ。

本当ならとつくに目的地に辿り着いていた。ラビエルの進みの遅さを差し引いても、間違いない今頃は闇のアイテムを奪取し、三幻魔を操る力を手に行っている筈だった。

なのに現実はこちらだ。すぐに潰せると睨んでいた幻想体達は、互いに協力し合いどこまでもしぶとく食い下がってくる。その中でも極めつけがこの魔法少女だ。

『もしか……お前もラビエルと同じく闇のアイテムで従わされているのか？ もはやそうとしか考えられん。でなければここまで命を削って戦う理由はない筈だっ!』

正確にはラビエルにそこまで絶対の強制力が働いている訳ではないのだが、悪霊は闇のアイテムによる強制だと推測する。だが、

『……はあ……別にいい？ 一応……ある程度は管理人さんに従うけど、流星に……命が尽きるまでは頼まれてもしないかなあ』

『では何故だっ!？ 何がお前をそこまで駆り立てるっ!？』

ヒステリックに叫ぶ悪霊に対し、

『だって……今ワタシすっごく愛と正義の魔法少女じゃない!』

『……………はっ!』

そう目をキラキラさせて笑って見せるココロを見て、悪霊は理解できない言葉を聞い

たとばかりに呆けた声を漏らす。

『ワタシの目の前には強大無比な悪党。後ろには守るべき人達が居て、一緒に戦ってくれる心強い仲間達も居る。こんなどこからどう見ても愛と正義の魔法少女じゃないっ！ なら、ワタシはいくらだって戦える。どれだけ傷ついたって、どれだけポロポロになったってっ！ 正義は負けたりしないんだからっ！』

『……まったく。センパイって人は』

セイがそれを聞いて顔を押しさえて嘆息する中、悪霊はふと気が付いた。

目の前の何者かは、確かに笑っているのだ。心の底からこの状況を喜んでいる。そしてその瞳の奥底にあるのは、愛や正義という美しいモノ……の皮を被ったもつとおぞましい狂気信念であると。

『ひっ!? ……ラビエツルっ!』

目の前のコレは危険だ。精霊の力云々ではなく、もつと言葉にしづらい何かに悪霊は恐怖を感じ、パニックに陥りかけながらもラビエルに排除を命じた。

『センパイっ!? 避けてっ!?!』

セイが自分の加護が限界に近付いている事を察して叫ぶ。次の攻撃は直撃で即アウト。避けたとしても衝撃で加護は剥がれ落ちる。

葬儀もまだ体力が回復していない。そんな中幻魔の剛腕はココロめがけて突き進み、

シユルシユルシユル。ビシツ!

どこからともなく飛来した幾本ものロープが、ラビエルの腕を絡め捕った。

『言ったでしょ? ワタシには心強い仲間達が居るって』

『ふう。……ようやくね』

魔法少女達はどこまでも屈しなかった。よって、

「やっと追いついたぞ!」

グルア!

森^三の守護者^鳥達を引き連れ、久城遊児が間に合った。

誇りある夜の貴族は見上げない

足止めする吹雪さんを万丈目とカイザーに任せて大鳥に乗りかける事しばらく。

途中十代達の所から呼び戻した審判鳥と罰鳥を加え、やつと追いついたと思えばそこはまさに激戦地だった。

周囲の木々はへし折れ、地面は所々陥没し、まともな生物は周囲から姿を消している。そんな中、

ギリギリ。ギリギリ。

ラビエルの剛腕は、ココロに届く直前で審判鳥のロープに絡め捕られて止められている。だが、間に合った……とはちよつと言いくらい状況だな。

『……はあ……はあ』

『……ふう。やつとね。待ちくたびれたわ』

幻想体達は酷い有り様だった。

ココロは幻魔の拳を前に一步も退いていないものの全身傷だらけ。

セイさんは剣を構えてしっかりと立っているが、それはそれとして酷い疲労の色が見て

取れる。

葬儀さんに至っては近くの木に寄りかかってまともに動けずにいる。

雪の女王は姿が見えないが、ラビエルの足元に氷の破片が散らばっている事から間違いないと奮戦はしたのだろう。

「皆遅れてゴメンっ！ あとは……任せろっ！」

こんなボロボロになるまで皆が稼いでくれた時間だ。無駄には出来ない。俺は威風堂々と立つラビエル、そしてその肩に乗る悪霊をキツと見据える。

『バランサーか。……一人という事は、吹雪の相手は他の奴らに押し付けてきたという事か。良いのかあ？ 暗示をかけたとはいえ奴も元セブンススターズ。そして奴には我らの闇のカードも渡してある。今頃お仲間は今滅していなければ良いがなあ？』

悪霊は顔を歪めてイヤらしく嗤う。実際吹雪さんは操られていようが強敵だろう。おまけに闇のカードもあるとなれば苦戦は免れない。だがな、

「舐めるなっ！ あの二人がそんな簡単に負けるものかっ！ なんなら今頃無事吹雪さんを正気に戻してこっちへ向かっているかもな！」

俺は悪霊に向けてそう啖呵を切る。万丈目は自分が引き受けると言った。ならファンがそれを信じずしてどうするよ。

そして、こっちも任せられた以上止まっている暇はない。

「おい。自称ヴァンパイア一族の化身さんよ。俺はお前にデュエルを申し込むっ！」

俺はデュエルディスクを構えて悪霊にはつきりと宣言する。この世界ではデュエルは特別な意味を持つ。なにせ世界の命運もデュエルで左右される世界だ。こいつらを止める一番の正攻法だろう。しかし、

『はっ！ 何かと思えばデュエルだと？ それを受ける理由がどこにある？』

悪霊は鼻で笑ってそれを拒否。受けないか……まあその答えも予想していなかったわけじゃない。

重ねて言うが、この世界においてデュエルは特別な意味を持つ。正直な話、勝敗や内容によつてはカードの精霊だろうが邪神だろうが存在に関わるダメージを負うのだ。

悪霊からすれば必要もないのにわざわざそんな危険を冒す事もない。勢いで受ける可能性に期待したがそれは流石になかったか。なので、

「理由が要るのなら出してやるよ。ここでデュエルを受けないのなら、俺は全力でお前とラビエルを足止めする。勿論幻想体達と一緒にな」

グルアッ！ パタパタ。

俺に合わせるように大鳥が唸りを上げ、罰鳥はいつでも動けるように羽ばたいて滞空。審判鳥は何も言わずに天秤を持ち上げる。

『むっ！?』

それを聞いて悪霊が顔をしかめる。

あくまでコイツの目的は、本棟にあるこれまでのセブンスターズのアイテム。コイツにとつて一番困るのは、ここで手間取ってアイテムが島外に移送されてしまう事だ。

ただでさえここで幻想体相手に時間を掛けた以上、さらに足止めを喰らうのは困る筈。

『ちっ!? ならば……ラビエルっ!』

「おっとそうはさせるかっ! 審判鳥っ!」

ラビエルに命じ、俺達を無視して強引に出立しようとした悪霊だが、そこに審判鳥のロープがまた絡みつく。

「逃がさないぜ。いくらお前は幽霊だから実体を解いて逃げられるとしても、ラビエルの方はそう簡単にはいかないだろ?」

さつき幻魔が復活した時の事を考えるに、ラビエルのカードによる実体化と闇のアイテムによる制御はそれぞれ僅かなラグがある。

そして審判鳥のロープは対象の罪に応じて強度等が変動する。ここまで散々森を荒らした結果、悪霊とラビエルに対するロープの強度は非常に高い。俺の見立てではラビエルであっても引きちぎるのに多少の溜めが必要なレベルには。

無理やり拘束を解こうとするなら悪霊本体を狙うし、ラビエルをいったん戻して再実

体化させるなら、闇のアイテムで制御するその一瞬が隙になる。

「さあどうする？　そこから降りてデュエルを受けるのか、或いはこのままラビエルに命じて一戦交えるかっ！」

……と強気に一戦交えると言ったものの、これでは悪霊は何とか出来てもラビエルがそのまま残つてしまう。まがりなりにも制御している悪霊が消えると、ラビエルがどう動くか分からないので出来ればリアル大乱闘は避けたいのが本音だ。

『……むう』

悪霊は何故か、自分達を縛る審判鳥よりも満身創痍のココロをチラチラ見つつ思案し始める。自分でボロボロにしたくせにまるで何かを恐れているように。

『フフフ。情けない事』

『何だと？』

そこに俺の肩に乗ったコウモリ姿のカミューラが小さく噛い、耳聴く聞きつけた悪霊が声を上げる。

『これを情けないと言わずになんというのかしら？　いかに万全でないとはいえ、仮にも幻魔は一族の復興を果たす事も出来るだけの強大な力。それを従えたのに憎むべき

人間と戦おうともしないなんて』

『黙れ依り代風情がっ!? 貴様に何が』

『分かるわよ。アナタ程度の考えている事はね』

敢えて言葉を被せたかと思うと、カミューラはバサリと一度大きく羽ばたきわざわざ俺の頭に乗って悪霊を見上げる。……いや、見下す。まるで互いの立ち位置など関係がないと言わんばかりに。

『わざわざ私の身体に潜んで機を窺い、目的の為なら僕を平然と使い捨て、憎むべき人間の一人である天上院吹雪の身体すら依り代として使う節操のなさ。口では大願の為だのと言っておきながら、幻魔を従えて尚自身の保身の事ばかり。アナタのような者をなんて呼び習わすか知っているかしら? ……小者って言うのよ。少し賢くなつて良かったわねえ?』

うわあ。人の頭の上で盛大に煽つてらっしやるよカミューラ。微塵も力の大半を持って行かれたと感じさせないその態度は、どっちが優勢だか分からなくなる。

しかし、煽られた方にとってはたまったものじゃない。

『おのれ依り代の分際によくもっ!? 良いだろう。デュエルを受けてやろうではないかっ!』

『何ですってえ? よく聞こえないわねえ。そんな所でぼそぼそ喋ってないで、とつと

と降りてきなさいな。……あくなるほど。小者のくせに高い所に登ったから怖くて降りれないの？ 本来逆だけドエスコートしてあげましようか？」

『余計なお世話だつ！ 貴様もう許さん。無力な姿に成り下がったからと見逃してやればつけ上がりおつて。デュエルの後で八つ裂きにしてくれるつ！』

そう言つて青白い顔を真つ赤に染め、大きなコウモリの羽を広げてラビエルの肩から降りてくる悪霊。

『こんな所かしらね。あとは任せるわ』

「散々煽つて丸投げかよつ！ まあデュエルに持ち込んでくれたのは助かるけどさ」

『今の私で戦いになると思つて？ お膳立ては済ませたから、さつさとデュエルで奴を弱らせて。そうすれば多少は私も干渉出来るわ』

そう言い残してカミューラは、巻き添えを食わないよう離れた木に留まる。それと入れ替わるように悪霊は地面に降り立つと、腕から黒い靄と共にデュエルディスクを出現させる。

『さあ。さつさと始めるぞ。当然闇のデュエルでなあつ！』

闇のデュエルはやりたくないが、この状況では仕方ないか。

「その条件で受けて立つつ！ 罪善さんつ！」

カタカタつ！

俺の合図の下、罪善さんが実体化して周囲に光を放った。これで僅かではあるが、闇のデュエルのリアルダメージと幻魔の精气吸収を抑えられるはずだ。

『嫌な光だ。吐き気がする』

「悪いが幻魔の対策をさせてもらうぜ。……さあ。やろうかつー！」

俺は罪善さんとまだ体力充分の三鳥以外の幻想体達にカードに戻ってもらい、デイスクにデツキをセットする。

「『デュエルっ!!』」

こうして、この長い長い一日の最後のデュエルが始まった。

遊兎対悪霊 その一 死者と呪われた生者

遊兎 LP4000 手札5

悪霊 LP4000 手札5

『先攻は我らが頂く。ドロー』

じつと腕を拘束された状態で佇むラビエルを背に、悪霊はカードを引く。

『……クククつ。悪くない手札だ。我らはモンスターをセット。カードを二枚伏せ、ターンエンドだ』

『なら俺のターン。ドロー』

さて。どうするか。

悪霊の初手は無難で静かな立ち上がり。一切カードから読み取れる情報はない。カミュラのデツキを使っているとするならヴァンパイアをメインとしたアンデット主軸のデツキか？

まずは攻めてみない事には始まらないが、生憎今の手札に強めのアタッカーが居な

い。となると、

「俺は『幻想体 三鳥 罰鳥』を攻撃表示で召喚。召喚時にこのカードにクリフオートカウンターを四つ乗せる」

罰鳥 ATK100 CC4

俺の前に、実体化していた罰鳥がパタパタと飛んでくる。映像ではなく精霊自身が出るらしい。

「バトルだ。罰鳥は効果により相手に直接攻撃が出来る。行け罰鳥！」

『ぐっ!? この鳥風情がっ!』

悪霊 LP4000↓3900

罰鳥は悪霊に向かって行き、そのまま頭部を勢い良くつつく。悪霊はすぐに振り払うが、見ると僅かに黒ずんだ血が出ている。……やはり闇のデュエル。ダメージはそのままリアルに影響するか。

しかし罰鳥は初手のモンスターとしてはそこそこ悪くない。攻撃力自体は軽微だが、攻撃された時戦闘ダメージを0にし、相手を道連れに破壊する効果がある。地味に壁モンスターとして有能だ。まずはこれで出方を見る。

『俺はこれでバトルフェイズを終了。そしてそのタイミングで罰鳥の効果。戦闘を行ったバトルフェイズ終了時にPEカウンターを二つ乗せる』

『その瞬間を待っていたぞっ！ 永続罨発動。『血の代償』！』

罨鳥 PE2

このタイミングで血の代償か!? 血の代償はLPを500支払う事で、自分のメインフェイズか相手のバトルフェイズに通常召喚を可能にするカード。バトルフェイズ終了時という追撃しづらい瞬間を狙ってきたか。

『我らはLPを500払い、手札からモンスターをセットする』

悪霊 LP3900↓3400

またもセット。相変わらず正体は分からないか。しかし着実にモンスターを増やされていく。ちよつとマズイな。

「なら今度こそバトルフェイズを終了、メインフェイズ2に俺もカードを二枚伏せてターン終了だ。そしてターン終了時、罨鳥のクリフォトカウンターを一つ減らす」

罨鳥 CC4↓3

悪霊	LP3400	手札2	モンスター	伏せ2	魔法・罨	血の代償	伏せ1
遊児	LP4000	手札3	モンスター	罨鳥	魔法・罨	伏せ2	

『我らのターン。ドロロー。セットしたモンスターを反転召喚。二体共『デス・ラクーダだ』』

デス・ラクーダ ATK500

「これはまた厄介なカードを」

『デス・ラクーダの効果。このカードが反転召喚に成功した時、カードを一枚ドロローする。よって二枚ドロロー』

ラクダのゾンビがベロンと長い舌を伸ばし、デッキからカードを悪霊に届ける。

『血の代償もデス・ラクーダも、私のデッキには入っていないなかつた。勝手に私のデッキを弄ったわね?』

カミューラの怒りの滲む声に、悪霊はニヤニヤしながら答える事はない。この調子だと何が入っていてもおかしくないな。

しかしデス・ラクーダか。コイツの厄介な所は、自身の効果で裏側守備に変更する事で毎ターンドロロー可能な点にある。放っておけばおくほどドロローされてしまう訳だから、早めに対処しなくてはならない。

『我らは『ゴブリンゾンビ』を攻撃表示で召喚。バトルだ。ゴブリンゾンビで罰鳥に攻撃! その鳥の効果は知っている。破壊されても一向に構わんぞっ!』

ゴブリンゾンビ ATK1100

剣を持った異形が悪霊の場に召喚され、そのまま罰鳥に向けて駆けだす。ゴブリンゾンビは墓地に送られた時、守備力1200以下のアンデットを手札に加える効果がある。

おそらく悪霊の狙いは効果で加えたカードを血の代償で召喚に繋げる事。この調子でポンポンカードを増やされてはたまらない。なので、

「速攻魔法発動！ 『幻想体解放』。場の幻想体を任意の数墓地に送り、その数×3までのレベルの幻想体をデッキから特殊召喚する。罰鳥を墓地に送り、デッキから『幻想体美女と野獣』を守備表示で特殊召喚」

美女と野獣 DEF700

罰鳥がふわりと飛んで剣を躲したかと思うと、代わりにデッキからやってきたのは恐ろしい見た目のモンスターだった。

茶色の野牛のような胴体と前脚に対し、後ろ脚と腹の一部は昆虫のそれ。二本の捻じれた角からは紫の花が咲き乱れ、顔面には小さな数十の翡翠色の複眼がギョロギョロとせわしなく動き回っている。

控えめに言って精神を削る見た目の幻想体だった。……なんでこう幻想体は心臓に悪い奴ばっかなんだっ!? というか美女要素どこっ!?

『たかが守備力700で何が出来る。攻撃を続行。ゴブリンゾンビで美女と野獣に攻撃

だ』

「美女と野獣は戦闘で破壊されない。ただし攻撃を受けたこのモンスターは、エンドフェイズまで攻撃力0になって攻撃表示に変更されるがな」

美女と野獣 ATK1100↓0

ゴブリゾンビの剣で身体を傷つけられると、野獣はふらふらと前脚を折ってその場にうずくまる。

『フハハハハ。所詮人間の浅知恵よ。確かにゴブリゾンビは墓地に行かずサーチは出来なかった。だが攻撃力0のモンスターなど、戦闘破壊出来ないだけの置物も同じ。サンドバッグにしてやるわ。デス・ラクーダ一体で攻撃だ！』

遊兎 LP4000↓3500

追撃するデス・ラクーダが野獣に突進して角を叩き折り、その角が俺の頬を掠めて薄く裂く。

ああ痛い。だから闇のデュエルなんて嫌いなんだ。だが、当の野獣はそのまま嗤うような声を上げて地面に崩れ落ちた。

「ああ。言い忘れていたが、攻撃力0の状態の野獣はダメージ計算後に効果で破壊される。そして……呪いを一つ遺していくぞ」

『呪いだと……何だこれはっ!？』

そこには新たな野獣が立っていた。それはデス・ラクーダの成れの果て。

胴体と脚は牛と虫のそれに代わり、頭部からは角が生え、顔面にはぶつぶつと複眼が浮き上がる。ゾンビの身体は皮肉にも、内側から呪われし生きた身体へと作り変えられていた。

「野獣を殺めた者は次の野獣になる。デス・ラクーダのコントローラーはこちらに移り、幻想体 美女と野獣扱いとする。勿論効果も同じだ」

デス・ラクーダ（野獣）はよろよろと俺の場に移動し、そのまま反転して複眼を悪霊に向ける。

「さあどうする？ 残ったデス・ラクーダで攻撃するか？ 勿論美女と野獣の戦闘耐性が追加された以上、破壊されるのはそちらのみだな」

『おのれ……バトルフェイズを終了。メインフェイズ2にさらにカードを一枚セットし、デス・ラクーダを自身の効果で裏守備に変更。ターンを終了する』

鋭い牙をギリギリと噛みしめながら、悪霊はさらに守りを固めて布陣を整える。

実際デス・ラクーダ一体を奪ったとはいえ、カードアドバンテージだけならまだまだ向こうが有利。放つておいてもドロロー加速され、下手に攻めればゴブリンゾンビで次の手に繋げられる。面倒だな。

『あらあら。えげつないカードを使う事。どっちが悪役だか分からないくらい』

カミューラは離れた所からそう野次を飛ばす。どっちが悪党か分からないか。まあ間違っちゃいない。

幻想体はどう見たって清く正しいって見た目じゃない。実際の性格はともかく、見た目だけなら大半が十代のヒーロー達に倒される怪物側だろう。

なら……俺は敢えてこう言い返すとしようじゃないか。

痛みも苦しみも恐怖する物だが、今宵限りはそんなそぶりも見せずに悪党らしく。

「さて。ここからは大人の時間。未来ある青少年には見せたくない血みどろファイトだ。悪党同士仲良く削り合おうじゃないかっ！」

遊兎対悪霊 その二 扉と門

悪霊 LP3400 手札3 モンスター ゴブリンゾンビ デス・ラクーダ（裏側
 守備）魔法・毘 血の代償 伏せ2

遊兎 LP3500 手札3 モンスター デス・ラクーダ（幻想体 美女と野獣扱
 い）伏せ1

「さあ行くぞ。俺のターン。ドロっ！ ……俺はデス・ラクーダの効果を発動。裏守
 備に変更し、そのまま反転召喚。そっちばかりドロされるのもアレなんでね。使わせ
 てもらうぜ」

一度裏側になり、そのまま表に戻った事で、デス・ラクーダへの野獣の効果は消えて
 元の姿に戻る。 ……まあ実際の呪いはこんな簡単に解けないらしいけどな。

「ードロー。続けてデス・ラクーダを生け贄に、『幻想体 知恵を欲する案山子』を攻撃
 表示で召喚！ 召喚成功時、このカードにクリフフォトカウンターを一つ乗せる」

知恵を欲する案山子 星5 ATK1600 CC1

光となって消えるデス・ラクーダの代わりに俺の場に現れたのは、一体の案山子だった。

顔は深く被った麦わら帽子に隠れてよく見えず、服は赤と白のチェック柄の袖。青いオーバーオールに胸元の水玉模様の蝶ネクタイと、中々に洒落た格好の案山子だ。……両手が大きなクワと鎌で、衣類に点々と血がこびり付いてさえいなければ。

「さらに俺は装備魔法『幻想体 皮膚の予言』を案山子に装備する。バトルフェイズ。案山子でゴブリンゾンビに攻撃！」

追加で俺が出したのは、これまたおどろおどろしい人間の皮膚で装丁された本。それを案山子がペラペラと流し読みしたかのように思うと、そのままゴブリンゾンビに向けて疾走する。

『別に破壊されようが構わんが、あまりライフを削らせる訳にもいかな。永続罠発動！』『闇の呪縛』。その案山子を捕らえよ』

悪霊が使ったのは、対象の攻撃を封じ攻撃力を700下げる罠カード。黒い鎖が案山子を捕らえるべく殺到し、

「無駄だっ！ 皮膚の予言を装備したモンスターは、このカード以外の魔法・罠の効果を受けない。よって闇の呪縛は発動こそすれ攻撃は止まらず、攻撃力も下がらない」

案山子は鎖をするりと回避し、そのままゴブリンゾンビに到達。大きくクワを振り上

げ、ゴブリンゾンビに叩きつけて撃破する。

悪霊 LP3400↓2900

『チツ!!』だがゴブリンゾンビの効果発動。このカードが場から墓地に送られた時、デッキから守備力1200以下のアンデット族、つまり次のゴブリンゾンビを手札に『おつと待った。その前に案山子の効果発動。案山子は戦闘でモンスターを破壊した時、そのカードは墓地には行かずデッキに戻り、案山子の攻撃力は200アップを……げっ!!』

俺は場の様子を見て唾然とした。なんと案山子の帽子の奥からストローのような物が飛び出し、ゴブリンゾンビの頭に突き刺さって何かを吸い取っていたのだから。

そのまま完全に吸い取ってカラカラになった頭と身体は砕け、粒子となってデッキに戻る。このエグいやり方には流石の悪霊も言葉が出ない。……いや俺だつてそうだよ!!? こんな気の弱い人が見たらそれだけで卒倒するぞ!?

「あく。これでバトルフェイズを終了。終了時に案山子にはPEカウンターが3つ乗る」

知恵を欲する案山子 ATK1600↓1800 PE3

『そ、それに合わせて再び血の代償の効果。LPを500払い、手札からモンスターをセツトする』

悪霊 LP2900↓2400

どうにか放心状態から立ち直ったのか、悪霊は再びモンスターをセット。血の代償は相手ターンでも展開できるので厄介なんだよな。

ゴブリゾンゾビを生け贄に上級モンスターを出して迎撃してくるといふ手も一応考えていたが、そこまでは手が良くなかったか。

「メインフェイズ2。手札から永続魔法『エンサイクロペディア』を発動。案山子に乗ったPEカウンターを三つ使い効果発動。墓地よりレベル4以下の幻想体を攻撃表示で特殊召喚する。罰鳥を特殊召喚し、クリフォトカウンターを4つ乗せる」

罰鳥 ATK100 CC4

出現したタブレットを操作する事で、先ほど墓地に送られた罰鳥が場に舞い戻る。

「カードを一枚伏せてターン終了。そしてその瞬間、案山子と罰鳥のクリフォトカウンターがそれぞれ減り、案山子の効果発動。カウンターが0のため俺は500のダメージを受け、案山子の攻撃力が300アップ。その後再びカウンターは1に戻る」

罰鳥 CC4↓3

案山子 CC1↓0 ATK1800↓2100 CC0↓1

遊児 LP3500↓3000

案山子の効果が発動した瞬間、身体から急に力が抜ける感覚があった。さつきみたい

にストローで俺から吸い上げるのかと身構えていたが、既にカードを通して繋がっている。その心配はなかったらしい。

カタカタっ!?

「大丈夫だ罪善さん。……さあ。そっちのターンだ」

身体の疲れはそれなりであるが、罪善さんが心配して光を当ててくれているから少しは楽だ。ラビエルの精気吸収を緩和しながらこれなので、罪善さんには頭が上がりえない。

悪霊 LP2400 手札2 モンスター デス・ラクーダ（裏側守備） 伏せ1 魔

法・畏 血の代償 闇の呪縛 伏せ1

遊兎 LP3000 手札1 モンスター 知恵を欲する案山子 罰鳥 魔法・畏

皮膚の予言 エンサイクロペディア 伏せ2

『我らのターン………ククツ、ハハハハハ！ 遂に来たぞっ！』

ドローしたカードを見た悪霊が、笑いを堪えられないとばかりに大笑する。余程良いカードを引いたらしい。この状況でとなると……いよいよ来るか。

『ここです・ラクーンダを反転召喚してさらに一枚ドロ。そして……いざ開け勝利への門っ！ 我らは魔法カード『幻魔の扉』を発動！ 効果はもう語らずとも良いな？』
「ああ。だが残念だな。案山子は装備している皮膚の予言の効果により、魔法・罠の効果を受けない。よって幻魔の扉の全体破壊は効かないぜ」

やはり来たかつ！ 場にもう三度目となる使用者の魂を幻魔への質に入れる極悪カード。幻魔の扉が出現する。

こいつが幻魔の扉を使ってくる事は、カミュラのデッキを使っているので予想済み。だから案山子に皮膚の予言を着けたんだ。そしてこれにより、もう一枚の全体破壊カードであるフィールド魔法『不死の王国―ヘルヴァニア』も対策できる。

『だがもう一体の方はそうはいくまい。それに……我らが狙っているのもう一つの効果の方よ。罰鳥を破壊後、お前の墓地から美女と野獣を我らの場に特殊召喚』

幻魔の扉がバァンッと開き、凄まじい吸引力で抗おうとする罰鳥を飲み込む。そして、消えゆく扉と入れ替わるように俺の墓地に居た野獣が悪霊の場に特殊召喚された。

美女と野獣 ATK1100

……しかし妙だな？ まだ幻魔の扉を使ってくるには早い頃合いだ。

幻魔の扉の厄介な点は、モンスターの全体除去に加えて相手モンスターの蘇生にある。場ががら空きの所を強力モンスターで直接攻撃を決められるから強いんだ。

しかし今の状況はこの通り。場には魔法の効果を受けない案山子が残ったままだし、蘇生出来たのは攻撃力1100の野獣。単純な殴り合いでは案山子には届かない。

カードアドバンテージを見ても、実質罰鳥を破壊して幻魔の扉と野獣を交換しただけ。こちらとしてはそこまで損はしていない。やはり扉を使うならもう少し後の方が旨みがある。

あと考えられるのは上級モンスターに繋げる生け贄の補充くらいだが、それだったら既に向こうの場には二体も居るから三体は要らな……はっ!? 三体の生け贄っ!?

『その表情。今更気づいたようだがもう遅いっ! セットしていたモンスター『不死のワールフ』を反転召喚。その瞬間我らは永続罫『DNA改造手術』を発動! 悪魔族を選択する。』

場に出ている限り全てのモンスターの種族を宣言した物に変えるDNA改造手術により、デス・ラクーダと野獣、ワールフに悪魔のような角が生える。まあ野獣は元々角が生えているから増えたただけだが。

『これにて供物は出揃った。我らの場の三枚の悪魔族を生け贄に、さあ来るが良い!』

『幻魔皇ラビエル』っ!』

グオオオオオンっ!

幻魔皇ラビエル ATK4000

カードが場に出されたと同時に、拘束されていたラビエルがロープを一部引きちぎってそのまま場にやってきた。ここでお前本体が来るのかよっ!?

しかしミスった。影丸のように悪魔族の幻銃士か幻魔の殉教者で揃えてくるかと思っただが、まさか数を展開できるアンデットを無理やり種族変更してくるとは。完全に油断していた。

ブチっ! ブチっ!

「審判鳥っ!?!」

精霊状態の審判鳥が再度ロープを伸ばして絡め捕るが、動く端からロープがギリギリと嫌な音を立てて動きを緩めるのだけで精いっぱい。

『ハッ! そんな程度の拘束で、幻魔の皇を止められるものかっ! バトルだ。ラビエルで知恵を欲する案山子を攻撃! 『天界蹂躞拳』っ!』

動きを阻害されていようと構わず、ラビエルはその剛腕を案山子に叩きつけて粉碎する。そして、

「ぐあああああつ!?!」

『バランサーっ!?!』

遊児 LP3000↓1100

LPがゴリっつと減った瞬間、全身に例えようのない激痛が走りたまらず絶叫してその

場にうづくまる。

『ハハハハハっ！ これで良い。これこそが圧倒的な暴力の快感よっ！ 人間共が苦しみ悶える様は実に良いっ！』

『しつかりなさいブランサーっ！ 今アナタに倒れられたらこちらも困るのよ』
カミューラがうづくまる俺の肩に乗り、その羽でペしペしと俺の背を叩く。

『ふん。慌てているな依り代め。安心しろ。こいつを潰したら次はお前の番だ』
『くっ!?!』

「すまないが……はあ……人の頭の上で、話し合わないでくれるか？」

俺は痛みをこらえながらどうにか立ち上がる。さつきクロノス先生を庇った時の攻撃力100000越え状態に比べればまだ耐えられるが、それでもこんなのを何発も受けたら命に関わるぞ。

『その調子よブランサー。ここで負けるなんて許さないわ』

『ほう。存外頑丈だな。ラビエルの一撃を受ければ、LPが残っていようがそのままリアルダメージで倒れるかと思っていたが。我らはこれにてターンエンド』

「俺だつて倒れていたいよっ!? 全身ガタガタだし、もうこれ以上喰らいたくはない。

……けどな」

もしここでコイツを止められなければ、この矛先が学園の連中に向かう。

十代達ならなんだかんだ最終的には幻魔相手でも勝つだろう。しかし、こんな痛みをまだ学生のアイツらが受ける事になるのだ。

それだけじゃない。下手をすれば、それ以外の何人の生徒に被害が出るか分からない。なので、

「何が何でも……ここで止めさせてもらうぜ幻魔。俺はターン終了のタイミングでリバースカードオープンっ！ 永続罫『黒い森の入口』。発動っ！」

俺の場に、黒い木で縁取りされた赤く禍々しい門が出現する。

どこかの黒く、暗く、深い森の中で、
“怪物”が身じろぎする音がした。

遊兇対悪霊 その三 黒い森の怪物

『黒い森の入口』だど?』

俺の場に現れた門を見て、悪霊はどこか警戒するような素振りを見せる。それもそうか。幻魔の扉と見た目だけはどこか似ているからな。

これは今日、デイーから餞別として黒い森の怪物のカードと一緒に渡された物だ。なので使うのも映像で見るとも初めて。……予想より数段禍々しいのは俺だつて文句を言いたい。

「黒い森の入口。このカードは、場の幻想体と名の付くモンスターが破壊されたターンに発動可能。手札、デッキ、墓地から三鳥を一枚選びこのカードの下に重ねる。俺はデッキから『幻想体 三鳥 大鳥』を選択」

『カードを重ねる? 珍しい効果ね』

カミューラが少し驚いているが、こういう重ねる類のカードが出始めたのは確かエクスリーブ辺りからだっただか? なら確かに珍しいかもしれない。

大鳥のカードを黒い森の入口に重ねると、門の中に黒々とした空間が現れた。そこに

精霊化した大鳥自身がズシンズシンと入って行き、中の空間に黄色い光が灯る。

「黒い森の入口は、重ねた三鳥の種類に応じて効果が追加される。今一枚重なった事で、このカードは自身の効果以外で破壊されない効果を得る」

『何が来るかと思えば、ただの虚偽脅しか。こうしてラビエルが召喚された以上、我らの優位は動かんっ！ さあ。お前のターンだバランサーっ！』

「言われずともっ！ 俺のターン。ドロっっ！」

悪霊 LP2400 手札2 モンスター 幻魔皇ラビエル 魔法・罨 血の代償
闇の呪縛 DNA改造手術(悪魔族)

遊兇 LP1100 手札2 モンスター なし 魔法・罨 エンサイクロペディア
黒い森の入口 伏せ1

と言ったものの今の状況はすこぶる悪い。こちらにモンスターは0。LPも1100と下級モンスターの直接攻撃でも勝負が着く。

おまけに相手の場には、罨が効かず魔法とモンスター効果も発動ターンのみ有効という耐性のあるラビエルが鎮座している。今は耐えるだけで精一杯か。

「俺は『幻想体 小さな魔女 レティシア』を準備表示で召喚！」

小さな魔女 レティシア DEF600

『が、頑張るのっ!』

『おい我が生け贄よっ!?! こんなとんでもない奴相手に我が運び手を呼び出すんじゃないっ!?!』

抗議するネクを抱えながら、DNA改造手術の効果で小さな悪魔の羽が生えたレティシアがむんつとポーズを決める。

『その瞬間ラビエルの効果。相手がモンスターを場に出す度、同数の幻魔トークンを特殊召喚する』

幻魔トークン DEF1000

くっ!! トークンは攻撃宣言が行えないとはいえ、この調子で出されたらキリがない。おまけにターン数制限もない。しかし……今はこつちも出すしかない。

「レティシアの効果発動。ラビエルを選択し、互いにLPを1000回復するかカードを一枚ドロウする。俺はドロウ効果を選択」

『プレゼントだよっ! えっ!っ!』

レティシアは手から作り出した赤いハート型の何かを投げつけた。ハートはラビエルの頭上に停止し、そのまま互いの場に光を降り注がせる。

『ふん。こちらにも引かせるとは自棄になったか。精々震えてカードを引くが良い』

悪霊がそう嘲る様に言うが、こちらは自棄になったつもりはない。狙うは一つ勝利のみ。

「ドロー。……よし。俺は永続魔法『エンケファリン生成』を発動。一ターンに一度、場の幻想体を一体選び、そのレベルの半分のPEカウンターをこのカードに乗せる。レティシアのレベルは4。よって二つのPEカウンターが乗る」

エンケファリン生成 PE2

レティシアから小さな光が二つ浮かび上がり、そのまま俺の傍に滞空する。

「そして場のエンサイクロペディアの効果。PEカウンターを二つ使い、手札のレベル4以下の幻想体を特殊召喚する。『幻想体 オールアラウンドヘルパー』を守備表示で特殊召喚し、クリフトオトカウンターを二つ乗せてターン終了。そしてターン終了時にヘルパーのカウンターが一つ減る」

オールアラウンドヘルパー DEF1700 CC2↓1

へぴっ！ ガードプロセス実行中

『ハハハっ！ 実に涙ぐましい努力だ。必死に壁を増やす様は滑稽だな！ だがこちらもトークンを追加だ』

少し悪魔っぽくトゲトゲしくなったヘルパーが出現するのを見て、悪霊は嗤いながらもう一体トークンを特殊召喚する。

『だがそれらは全て、幻魔の力の前では無意味であると知るが良い。我らのターンっ！
ドロー』

悪霊 LP2400 手札4 モンスター 幻魔皇ラビエル 幻魔トークン×2

魔法・罫 血の代償 闇の呪縛 DNA改造手術（悪魔族）

遊児 LP1100 手札0 モンスター レティシア ヘルパー 魔法・罫 エン

サイクロペディア 黒い森の入口 エンケファリン生成 伏せ1

『幻魔に魔法・モンスター効果は発動ターンしか通用しない。よってレティシアの効果も打ち消されるっ！』

グオオオオオオンっ！

ラビエルが一声咆哮を上げると、レティシアの飛ばしたハートが中に居た何かごと破壊される。レティシアは少し悲しそうだ。

『我らは幻魔トークン一体を生け贄に、手札から『ヴァンパイア・ロード』を攻撃表示で召喚。そして血の代償の効果！ LPを500払い、さらに『ヴァンパイア・バツ』を攻撃表示で召喚！』

悪霊 LP2400↓1900

ヴァンパイア・ロード ATK2000

ヴァンパイア・バッツ ATK800

悪霊の場に現れるモンスター達。数を増やしてこつちを圧倒する気か。だが、

『おのれえっ！ よくも私の僕達しもをつ！』

カミューラが憤るのも無理はない。ヴァンパイア・バッツとして現れたのは、良く見れば馴染みのコウモリ達だった。しかしどのコウモリも精気がなく羽ばたきも弱々しい。

『何を言う。お前ではなく我らの僕である。……しかし情けない事よ。この身体を形作るために精気を吸ったがもう半死半生とは』

「僕扱いするならもつときちんと使ったらどうだ？ 自分のDNA改造手術のおかげでヴァンパイア・バッツの効果が空振ってるぜ」

『お前などこれで充分よ。バトルだ。まずはラビエル。その鉄くずを粉碎せよっ！』
ラビエルの剛腕が襲い掛かり、ヘルパーをガードの上から破壊して衝撃波を巻き起す。

「うおおおっ!？」

『次だ。ヴァンパイア・バッツでレティシアに攻撃っ！』

よろめく俺に対し追撃をかけるように、悪霊はコウモリ達にレティシアへの攻撃命令

を出す。しかし、

キイキイっ！

『……コウモリさん達』

コウモリ達はレティシアを見て、明らかに攻撃を躊躇っていた。

それも当然の事。カムイラが昏睡状態の間、一番コウモリ達を世話して可愛がっていたのはレティシアなのだから。

『何をしている。僕は僕らしく働かんかっ！』

キイキイっ！

業を煮やした悪霊が放つ黒い霧が、コウモリ達を蝕んで悲鳴を上げさせる。……野郎。

『コウモリさん達っ!? ……私は大丈夫だからっ！ 攻撃してきて良いんだよっ!?』

レティシアの悲痛な叫びに、コウモリ達は痛みにも苦しみながらもよろよろと向かって行き、

『痛っ!?!』

一羽が代表して、力なく羽でペしつとレティシアの額を引つ叩く。どれだけ力なく優しく気遣った一撃であろうとも、一撃は一撃。戦闘を行ったと見なされて、レティシアはそのまま退場する。

『アイテテテっ!? 何故我がっ!?』

代わりと言わんばかりにネクがたつぷり引つ叩かれていた。こつちには容赦はないらしい。

『それで良い。まったく使えぬ僕よ。要らぬ手間をかけさせる。さあバランスーよ。お前の場にモンスターはもう居ない。これで終わりだっ!』

悪霊はヴァンパイア・ロードに攻撃指令を出す。この攻撃が通れば俺のLPは尽きるだろう。……通ればの話だが。

「永続罨発動! 『幻想体 肉の灯籠』。相手の攻撃宣言時、このカードをモンスター扱いで攻撃表示で特殊召喚し、クリフォトカウンターを一つ乗せる。ヴァンパイア・ロードと攻撃力は同じだ。さあどうする?」

肉の灯籠 ATK2000 CC1

俺の場に地面から一輪の花が咲く。しかしその下に潜む巨大な何かは、やってくる獲物を虎視眈々と狙っていた。

以前カミューラと戦った時は、カミューラは相打ちを嫌って戦闘を取りやめた。対して悪霊は、

『構わん。攻撃を続行だ』

命を受けて突き進むヴァンパイア・ロードに、地面から巨大な口を開けた何か食ら

いつく。しかし捕食されながらもヴァンパイア・ロードは最期の抵抗で口の中から攻撃を加え、そのまま打ちちなって破壊された。

『我らはカードを一枚伏せてターンエンド。あくまで戦闘破壊なのでヴァンパイア・ロードは蘇生せぬが、今度こそお前のモンスターは0。手札も尽き、残ったのはカウナーがなければ使えぬカードと破壊されないだけの門。もうお前に打つ手はない。ハハハハハハっ!』

勝ちを確信したのでだろう。悪霊は余裕たつぷりに高笑いする。まあここまで来たらほぼ勝ち確と言えなくもないのでやる気持ちは分かる。……だがな。

『俺はターン終了に合わせて黒い森の入口の効果を発動。幻想体が破壊された事で、俺は墓地から罰鳥を選択し重ねる』

今度は墓地から精霊状態の罰鳥が現れ、パタパタと門の中に入っていき中に赤い光が灯る。

『ほお。まだ諦めんのか』

「当然だろう?」

少なくとも、十代や万丈目ならこんな状況であろうと、最後の最後まで諦めない。まだLPが残っている限り、次のドローに全てを賭ける。

『バランスー。私がアナタ相手に言うのもお門違いというものだけど……勝ってちょう

「だい。私がやるならまだしも、私以外が僕達をあんな目に遭わせるなんて絶対に許せない」

「……分かった。任せろ」

カミューラの多少ねじ曲がってはいるもののコウモリ達を心配する言葉に、俺は力強く頷く。

状況は最悪一步手前。絶対絶命大ピンチ。しかし、まだ手はある。逆転のピースはいつだってデッキの中にある。

「俺のターン。ドローっ！」

悪霊 LP1900 手札1 モンスター 幻魔皇ラビエル 幻魔トークン ヴァ
ンパイア・バツツ 魔法・罨 血の代償 闇の呪縛 DNA改造手術(悪魔族) 伏せ1
遊兇 LP1100 手札1 モンスター0 魔法・罨 エンサイクロペディア 黒
い森の入口 エンケファリン生成

「……俺は手札から『幻想体 たった一つの罪と何百もの善』を守備表示で召喚し効果発動！ 俺の場のカードの数×300のLPを回復する。俺の場のカードは四枚。よって1200回復」

遊児 LP1100↓2300

『今更その程度回復して何になる。次のターンラビエルの攻撃で終わりだ』

「俺の狙いは回復だけじゃない。黒い森の入口の効果を発動。三鳥が二種類以上重なっている時、一ターンに一度自身の幻想体を一枚破壊する事で、場の表側表示の魔法・罠カードを一枚破壊する。罪善さんと血の代償を破壊。頼むぞ罪善さん」

カタカタっ！

罪善さんは俺の合図で勢いよく光を放ちながら突撃し、血の代償を破壊してまた精霊状態に戻って帰還した。

『むおおおっ!? おのれ悪あがきを。だが今度こそ万策尽きたなっ!』

「罪善さんが破壊された事で、黒い森の入口に最後の三鳥が重ねられる。デッキから審判鳥を選択っ!」

これまで多少なりともロープでラビエルを拘束し続けていた審判鳥が、ゆらゆらと門に入り込み、門の内部で黄、赤、黒の輝きが渦を巻く。

「黒い森の入口に三鳥が全て揃った事により、最後の効果が発動する。それはこのカードを破壊する事で重なっている三鳥を場に特殊召喚し、その後デッキから『深く暗い森』を発動する効果っ! と言ってもこの効果で呼び出した三鳥は攻撃力0。効果も無効化されるがな」

大鳥 DEF0

罰鳥 DEF0

審判鳥 DEF0

門がガラガラと崩れ落ちる中俺の場に出現したのは、それぞれ三鳥の特徴を持った三つの卵だった。そして深く暗い森が展開される事で、周囲の空気がどこか深みを増す。『……は、ハハ、ハハハハっ！ 何が出るかと思えば、所詮はただ壁を増やしただけか！ どこまで行っても時間稼ぎよ。一度に三体出たためこちらはトークンを呼び出すスペースが足りないが、その程度すぐに蹴散らしてくれるっ！』

悪霊はまた高笑いをするが、まだ気が付いていないのだろうか？ さつきから命令以外で動こうとしなかったラビエルが、自分から拳を構えている事に。

拳を構える必要がある“怪物”が、これから現れる事を察したかのように。

「条件は整った。なにせコイツの召喚条件は、場に三鳥と深く暗い森全てが揃っている事なんですね。だが幻魔に真っ向から対抗できるとなると、正直今のデツキではコイツしか居ない」

そして俺は、黒い森の怪物にして最大の森の守護者を召喚する。

「融合召喚。現れる。『幻想体 三鳥合身 終末鳥』」

夜明けまであと……。

遊児対悪霊 その四 対峙する幻魔と怪物



『……そう。これは、ある深くて暗くて黒い森。その森を守ろうとした三匹の鳥。そして、その森で産まれた怪物の物語』

思い出すのは、かつてオールドレディの読み聞かせで知ったある物語。

『昔々、沢山の生き物達が住まう森の中に、とある三匹の鳥が居た。鳥達は森がずっと幸せで心穏やかに過ごせる場所であるよう願いつづけていたのさ』

しかし、とそう続けた瞬間オールドレディの言い回しが変わる。

『ある時、森に旅人であり予言者でもある者が現れこう告げた。 “やがてこの森に悲劇が訪れる。怪物が現れ全てを飲み込み、森は悪行と罪に染まるだろう” と。三匹の鳥達はその予言を聞き、いずれ来るかもしれない怪物に備え、各自で森を守るために動き出したのさ』

さらにオールドレディはその三匹の行いを語った。

ある鳥は森のあちこちを見回る事で秩序を乱す悪を監視し、ある鳥は手に持つ黄金の

天秤で罪を測り、ある鳥は罪人にそのくちばしで罰を与えたと。

『でも、始まりがどれだけ正しい思いでも、いつしかそれは捻じれ歪んでいく。監視によつて自由は無くなり、天秤は公平でなくなり、罰はより苛烈になっていく。そうして森はいつしか温かみを失い、争いと不和に染まっていった』

そんな中、遂に三匹の鳥達は決断する。

『僕達だけじゃ森を守り切れない』

『でも、自分達以外に森を守る者は居ない』

『なら、私達が力を合わせれば、もっと強くなれるだろう』

そして、森に怪物が現れた。



『ら、ラビエルの効果発動。相手がモンスターを場に出した事により、幻魔トークンを守備表示で特殊召喚。……化け物めっ!?!』

悪霊はどうか効果を発動しながらも、それを見て知らず知らずに怯えていた。

幻想体 三鳥合身 終末鳥 ATK3500 星10 鳥獣族↓悪魔族

幻魔ほどではないが、それに迫る黒々とした巨体。しかし実体化したその姿はとても尋常なものではなかった。

地を這う胴体と長い長い巨腕、そしてそこから伸びるかぎ爪は所々包帯に覆われ、頭部は逆に包帯の解けた審判鳥の物。

胸元辺りから真つ赤な罰鳥のくちばしがバクバクと開閉し、食い千切るべき罪人を今か今かと待ち構える。

そして背部に大きな黒い翼が生えているが、その表面には大鳥の複眼がびつしりと浮き出ている。

控えめに言っ、見る者の恐怖を煽りまくる合成獣めいた姿だった。誰だつて怯える。呼び出した俺だつて怖い。……ただ、狂乱の色はほとんど見えなかった。

怒りもある。敵意もある。しかしそれはけつして無差別ではなく、あくまで森の敵と見做したラビエルと悪霊にのみ向けられていた。

グオオオオオン。

まずは小手調べとばかりに、ラビエルが咆哮と共に精気吸収を終末鳥に仕掛ける。これまでの無差別に少しずつ吸収していくものではなく、たった一体に集中したものを。

罪善さんでも抑えきれず、並の精霊なら一分も持たずに干からびるようなそれを、

キユオオオオオンっ！

終末鳥は森中に響けとばかりの咆哮で返し、精気吸収を軽く弾き飛ばす。

「どうやら幻魔と言えど、同格以上やそれに近い相手からは精気吸収は出来ないらしい。」

「……ぐっつ!？」

だがその代わり、俺の身体から急激に力が抜けていくような感覚に襲われる。これは……以前セイさんが暴走したココロを止めようと全力全開で力を使った時と同じ。

なるほど。これがディーの言う所のリスクレベルALPHか。ただ実体化して軽く動いただけでこれだけの力を使うなんてな。長くは保ちそうにないぞ。

「終末鳥は融合モンスターだが通常の融合召喚ができない。代わりに場に深く暗い森と三鳥が揃っている時、融合召喚扱いで融合デッキから特殊召喚し、場の三鳥をこのカードに重ねる」

俺の前には、さっきの三鳥を模した三つの卵が鎮座している。これと森こそが終末鳥の要だ。

「終末鳥が場に出た時、手札を全て捨てなくてはならないが元々俺の手札は0。さあ行くぞー！ バトルだ。終末鳥でヴァンパイア・バッツに攻撃。当然だが深く暗い森のデバフは受け付けない」

森への侵入者の攻撃力を下げる効果は、元々の住人である終末鳥には通じない。終末鳥はその長い腕を大きく振り上げる。これが通れば悪霊のLPは0だ。

『ちよつとっ!? そんな高攻撃力で攻撃したら私の僕達がっ!?』

「分かつてる。終末鳥っ!」

カミューラが悲鳴じみた声を上げるが、終末鳥は振り上げた腕をその巨体に似合わずゆつたりとした動きでコウモリ達に伸ばしていった。短い間とはいえ、コウモリ達もこの森で過ごしたいわば住人だ。終末鳥からすれば手心を加えるべき相手だろう。

そしてその手がコウモリ達に届く直前、

『させるかっ! 毘発動! 『死のデツキ破壊ウイルス』。ヴァンパイア・バツツを生け贄に捧げ、お前の場と手札、そして相手のターンの間ドローした攻撃力1500以上のモンスターを破壊する!』

粒子となって消えるコウモリ達の身体から紫色の霧が噴き出し、周囲一帯にまき散らされる。これは……。

『本来は幻魔トークンを生け贄に想定していたが、サクリファイス・エスケープ代わりに僕達を使わせてもらった。ハハハハハ! 折角苦勞して呼び出した化け物もこれで一巻の終わり。無駄な努力をご苦勞だったなっ!』

『……アナタ。どこまで僕達を弄べば気が済むのっ!』

カミューラの怒声にも悪霊は素知らぬ顔。しかし死のデッキ破壊ウイルスか。しかも時代的にエラツタ前の物とはあげつない。だが、

「残念だったな。終末鳥は三鳥が重なっている限り破壊も除外もされない。バウンスは別だがね」

『ハハハ……は？』

高笑いしていた悪霊は、毒霧の中でも揺らぐ事のない終末鳥の姿を見て啞然とする。

「攻撃対象が消えた事で巻き戻しが発生。攻撃対象を幻魔トークンに変更して再度攻撃だっ！」

今度は手心を加える必要もなく、大きく振りかぶった腕を全力で叩きつけてトークンを粉碎する。そのパワーと来たらラビエルのそれと大差ない。

「バトルフェイズ終了時、戦闘を行った終末鳥にPEカウンターが5個乗る。そしてメインフェイズ2にエンケファリン生成の効果発動。終末鳥のレベルの半分である5個を乗せる」

終末鳥 PE5

エンケファリン生成 PE5

「エンサイクロペディアの効果発動！ エンケファリン生成のPEカウンターを5つ使い、デッキからレベル4以下の幻想体を特殊召喚する。俺は『幻想体 死んだ蝶の葬儀』

を守備表示で特殊召喚し、クリフォトカウンターを二つ乗せる」

『ならば、こちらもラビエルの効果により幻魔トークンを特殊召喚』

エンケファリン生成 PE5↓0

死んだ蝶の葬儀 DEF1300 CC2

葬儀さんが俺の場に現れた事により、悪霊も負けじとトークンを増やす。ターン数制限がないのは厄介だ。……だが、今この場においては悪手となる。

「俺はこのタイミングで終末鳥の効果発動。審判鳥。力を借りるぜ」

終末鳥の手に、審判鳥の黄金の天秤が握られる。

「一ターンに一度、相手の守備表示モンスターを全て破壊し、その数×400のダメージを与える。『ジャツジメント』っ！」

悪霊の場には守備表示のトークンが二体。それぞれのトークンが審判鳥のロープに縛り上げられそのまま破壊される。

『むおおっ!?!』

悪霊 LP1900↓1100

「俺はこれでターン終了。そこで葬儀さんと終末鳥がそれぞれ効果発動。葬儀さんはカウンターを減らすだけだが、終末鳥は互いのターン終了時に重なっている三鳥を一枚選び、墓地へ送らなければならない。俺は審判鳥のカードを墓地へ」

重なっていた審判鳥が離れた瞬間、三つの卵の一つにヒビが入る。

『なるほど。読めたぞその化け物の弱点が。つまりはあと二ターン持ちこたえれば、化け物は勝手に壊れていくという訳だ』

「……ああ。全ての三鳥が無くなった時、終末鳥は自壊する。深く暗い森が無くなっても同様だ」

バウンス以外まともに受け付けない終末鳥だが、この通り弱点ははっきりしている。地道に時間を掛けて三鳥を削るか森を破壊するかだ。

「さあ。そっちのターンだ」

悪霊 LP1100 手札1 モンスター 幻魔皇ラビエル 魔法・罫 闇の呪縛

DNA改造手術(悪魔族)

遊児 LP2300 手札0 モンスター 終末鳥 死んだ蝶の葬儀 魔法・罫 エンサイクロペディア エンケファリン生成 深く暗い森

『我らのターン。ドロ。……ククク。分かっているのだぞバランスーよ。貴様の小賢しい策の事はな』

悪霊は何が面白いのかそう言ってほくそ笑む。

『次のターン、その蝶男を放置すればラビエルの攻撃力は500ダウンする。そうすれば攻撃力はその化け物と並び、戦闘すれば破壊耐性を持つそいつが勝つ。なら蝶男を先に潰すのが定石。……だが、それこそが貴様の狙いよ』

「……へえ」

俺はそのまま続きを促す。

『先ほどの効果は墓地へ送った審判鳥のものに酷似していた。つまり終末鳥は重なっている三鳥の効果を疑似的に得ているという事。そう。大鳥の攻撃強制と、罰鳥の効果破壊能力もな』

流石に気づかれたか。普通に葬儀さんに攻撃するようであれば、そのまま攻撃を終末鳥に誘導してカウンターを決めていたんだがな。

『つまりこの場での最適解は……これだ。ラビエルを守備表示に変更してターンを終了する。何をしているラビエル。さっさと守備表示にならんかつ！』

幻魔皇ラビエル DEF4000

拳を構えて戦う気満々だったラビエルは、一瞬悪霊をちらりと見て防御の構えに変更する。……明らかに気分を害してるんだけど。

そしてターン終了宣言により、俺は終末鳥から罰鳥のカードを墓地へ。それによりまた別の卵にヒビが入る。さらに、

「……………くっ!? ……はあ……………はあ」

カタカタっ!?

「……………はあ……………大丈夫だ。罪善さん」

『どうやら終末鳥の実体化は相当な消費を伴うらしいな。ただ待っているだけで化け物もバランサーも弱っていくとは楽な物よ。審判鳥を最初に落としたのは失敗だったなあ?』

疲労でつい膝を突く俺を見て、悪霊はニヤニヤと嗤う。おろおろとする罪善さんだが、あくまでラビエルからの精気吸収を防ぎ続けるのに集中してくれていて助かる。

しかし悪霊の言う通り、俺が倒れるのが先かそれとも全ての卵が割れるのが先か。

「さて。根競べだな」

勝つにせよ負けるにせよ、決着の時は近いだろうが。

遊児対悪霊 その五 闇の黄昏を越えた者



それは、終末鳥が召喚される少し前の事。

「鮫島校長。避難訓練の名目で生徒達の避難完了いたしました。闇のアイテムの移送準備はあと十分で完了です」

「ありがとう。残るはその時間をどう稼ぐか」

デュエルアカデミア本棟において、鮫島校長は森を進撃しつつある幻魔の巨体を遠目に見ながら職員の一人にそう返した。

相手の狙いは久城からの連絡で明白。しかし闇のアイテムは移送するだけでも取り扱い注意の代物だ。厳重な封印の上で準備が必要であり、どうしても時間が掛かる。

しかしラビエルの速度を考えれば、あと十分あればギリギリ到達出来る。今は途中で進撃が止まっているようだが、それでも危険な事には変わりはない。

だが、まったく備えない訳ではない。

「大丈夫だ校長先生。ここには俺達が居る」

「紅葉ったらまた何の根拠もなく……でも、こういう時だからこそ頼もしいわね」

本棟で待機しているのは、精霊の力の素養がある元世界チャンプ響紅葉とその姉の響みどり。更に、

「そうだけ。俺もまだまだ元気だぜ！」

「ノンノン！　ここはワタクシ達大人に任せて、生徒はお休みの時間です〜ノヨ。いざととなつたらまた……ぐうっ!？」

「クロノス先生っ!?　まだ身体がキツイんだろ？　無理すんなー！」

十代やクロノス先生を始め、大徳寺や三沢、茂木等戦う意思を持つ者達が勢揃いしていた。

しかし敵は幻魔。負けるつもりはないが無傷で済むとも思えない。直に戦った十代やクロノス先生を始め、闘志を燃やしながらも覚悟を決めて待ち構えていたその時、

「……何だ？」

急にラビエルの姿が目視出来なくなった。あれだけの巨体なら、見逃すという事はあり得ない。

なのに見えない。それどころかラビエルが居た筈の周囲すら、巨大な暗闇に覆われた。

なんだなんだっ!?　新たな敵かつ!?　それぞれが慌ただしく動く中、一度似た暗闇の

中に入った事がある十代は、すぐにアレが大鳥の展開したものだと察した。

「そこで戦ってるんだな遊児。……頑張れよ！ いざとなったら俺達に任せて、ガツンとかましてやれっ！」



「俺のターン。ドローフ！ 死のデツキ破壊ウイルスの効果で互いにドローカードを確認。『幻想体 幸せなテディ』。攻撃力1500以上のためそのまま破壊される」

悪霊 LP1100 手札2 モンスター 幻魔皇ラビエル 魔法・罫 闇の呪縛

DNA改造手術(悪魔族)

遊児 LP2300 手札0 モンスター 終末鳥 死んだ蝶の葬儀 魔法・罫 エ

ンサイクロペディア エンケフアリン生成 深く暗い森

引いたばかりのテディが破壊されたが、ウイルスの効果はドローフのみ対象。つまりデツキからのサーチや特殊召喚は対象外だ。なので、

「エンケフアリン生成の効果発動！ 終末鳥を選択しレベルの半分、5個のPEカウンターを乗せる」

エンケファリン生成 PE5

「続けてエンサイクロペディアの効果を発動。終末鳥に残っているPEカウンターを五つ使い、デッキから『幻想体 妖精の祭典』を攻撃表示で特殊召喚」

終末鳥 PE5↓0

妖精の祭典 星1 ATK400

俺が場に呼び出したのは、薄緑色の肌をした発光して浮かぶ翅の生えた妖精だった。人型のようにも見えるが、多腕で翅がある事からどこか虫のようにも見える。

『何だその雑魚モンスターは？ モンスターが召喚された事で、幻魔トークンも特殊召喚される』

幻魔トークン DEF1000

悪霊は雑魚だと侮っているようだが、しかしこの見た目でコイツかなりヤバい奴なんだぞ。

「まず俺は葬儀さんの効果発動！ 相手の場の表側表示のモンスターの攻撃力、守備力をエンドフェイズまで500下げる」

葬儀さんの担ぐ棺から白い蝶の大群が飛び出し、ラビエルの目を眩ませて弱体化させる。

ラビエル DEF4000↓3500

幻魔トークン DEF1000↓500

『チッ?!』だがようやくラビエルと終末鳥の数値が同じになったに過ぎん。今のラビエルは守備表示。数値が同じでは破壊されない』

「なら、さらに足せば良いだけだ! 妖精の祭典の効果が発動! 『妖精のケア』」

俺の号令と同時に、妖精は手の平から小さな自身の分身を生み出し終末鳥の身体に飛ばした。すると淡い光が終末鳥の身体を覆う。

「妖精は一ターンに一度、場の表側表示モンスター一体の攻撃力、守備力を500アップ出来る。よって終末鳥の攻撃力は」

終末鳥 ATK3500↓4000

『ラビエルの攻撃力を上回っただどっ?!』

「バトルだっ! 終末鳥でラビエルに攻撃っ! なお妖精は効果で攻撃力を上げたモンスターが次の自分のターンまでに攻撃、表示形式の変更を行った場合、そのカードを破壊する効果があるのだが」

攻撃宣言時、それまでおとなしくくつついていたミニ妖精が獣の本性を曝け出す。可愛らしさなどかなぐり捨て、舌なめずりしながらくつついている終末鳥に対して牙をむく……のだが、

「終末鳥は三鳥が重なっているので破壊されない。よって攻撃は続行」

ぎよろぎよろと睨みつける黒翼の瞳に洩々動きを止める妖精。しかしその加護自体は本物で、終末鳥はラビエルに向かって攻撃を仕掛ける。

『迎え撃てラビエルっ！』

システム上ではただのモンスター同士の戦闘だが、今この場に至っては互いに実体化した最上級モンスター同士の激突。そう簡単には終わらない。

周囲へ衝撃波を巻き起こしながら、互いの巨腕ががっしりと組み合う。手四つの状態になりそのまま力比べをする事数秒間。

元々のステータスだけで見ればラビエルに分があるが、そこは葬儀さんのデバフと妖精のバフが効いていた。少しずつだが終末鳥の方が押し込んでいく。

ラビエルも負けじと精气吸収で蓄えた力を解放するが、そこへ大鳥の多数の瞳から放たれた光線が直撃して一瞬バランスを崩した。

「今だっ！」

そこを勝機と見た終末鳥は一気に腕に力を込め、勢いよくラビエルを身体ごと地面に叩きつけて破壊した。

キュオオオオオンっ！

森を荒らす怪物を打ち倒した事で、終末鳥は守護者として勝利の咆哮を上げる。

『ラ……ラビエルが……幻魔が、負けただど!』

「続けて行くぞっ！ 俺は葬儀さんで幻魔トークンに攻撃。そして妖精で直接攻撃だっ！」

放心しているなら今がチャンス。俺は追撃を指示し、葬儀さんが幻魔トークンを銃撃。

そして終末鳥を食べられないと判断したミニ妖精は、新たな餌と見做した悪霊に突撃して一噛み。親妖精の下に帰還、同化する。

……地味に怖いな妖精。餌を食った分身を取り込む事で自分の栄養にしてやがる。

悪霊 LP1100↓700

「俺はこれでバトルフェイズを終了。戦闘を行った幻想体達はそれぞれPEカウンターが乗る。……なあ？ そろそろ止めにしないか？」

死んだ蝶の葬儀 PE3

終末鳥 PE5

妖精の祭典 PE1

放心状態であるならこれ幸いと、俺はここでデュエルを終わりにしないかと持ち掛けしてみた。

『な、何を言うのバランサーっ!?!』

カミューラが思わぬ流れに食って掛かるが、俺は軽く目配せして口を閉じさせる。

奴がコウモリ達の精気を吸って今の身体になっている以上、一番穏便に終わるのはその精気をコウモリ達に返還する事だからな。カミューラもすぐに思い当たったのかそれ以上は何も言わない。

「最大の脅威である幻魔は消えた。再び呼び出すにしてもそつちには時間も力も足りない筈だ。……そしてそれはこつちも同じ。正直もう……立っているのもしんどいくらいだ」

むりやり気を張っているが、もうさつきから足がガクガクで倒れそうだ。それだけ終末鳥が実体化して暴れたのは力を消費したらしい。

「時間は充分に稼いだから、今からではもう移送は止められない。それに現地には十代や紅葉さんを始めとしたデュエリスト達が控えている。幻魔も呼び出せない今のお前じゃ勝ち目はほぼない」

悪霊が黙っている中、俺は淡々と事実を突きつける。

「そもそもだ。幻魔一体を従えるのにもこれだけ苦労しているのに、アイテムを使って無理やり三体従えようだなんて行き当たりばったりな計画。そう簡単に上手く行くわけないだろうがっ!? まだカミューラのようにデカイ城まで建てて準備した方が可能性があつたぞ」

その言葉に、悪霊だけでなくカミューラも少し反応した。実際あれだけの規模の舞台

があれば、闇のアイテムがなくても幻魔を従えられたかもしれない。あくまで可能性だが。

「お前達の願いを諦めろとは言えない。それだけの譲れない物なんだろう？　だがそれを他の人を傷つけて無理に押し通そうとするなら俺は邪魔するっ！　……今ならここで止めに出来る。ここで終わりにしようっ！」

俺は絞り出すように声を上げる。同時に降参すれば上手くすれば引き分けに持ち込める。たとえ失敗しても、終末鳥が実体化している今なら闇のデュエルであつてもペナルティを打ち破れるかもしれない。

そう一縷の望みにかけての交渉は、

『……は、ハハ、ハハハハハハっ！　何を戯言をつっ！』

悪霊の高笑いによって打ち切られた。……いや、最初から交渉の席にすら立てていなかった。

『我らは誇りあるヴァンパイア一族。その化身であり思念の総体であるっ！　こんな程度で屈しは……ギギッ!』

そこで悪霊は頭を押さえて呻きだす。

『ギッ……そう我らは大願を……人間の殲滅……いや違う。一族ノ復興を、違ウっ!』
我らはただ生キテいたくて……アアっ』

「……そうか。お前ももう限界だったのか」

考えてみれば当然の事だった。

コイツは最初から自身を我らと。人を恨み、怒り、憎むヴァンパイア一族の思念そのものだと言っていた。つまりは死に際の思念の集合体だ。

「そんなのがごちゃ混ぜになつて長い時を過ごした結果、いつの間にか一族の復興ではなく人へ恨みを晴らす事がメインになつていたのか。それじゃあ話を通じる訳もないか」

これまで残虐で小物ではあれどそれなりにまともな言動だったのは、カミューラや白雪さんのような依り代に入っていたからと、一応幻魔の力の影響もあったかもしれない。

しかし今はどれも失い、もう悪霊は精神すらあやふやになりつつあった。

「なら……もう終わらせないと。俺はこれでターンエンド。そして葬儀さんと終末鳥の効果がそれぞれ発動する」

葬儀さんのクリフォトカウンターが無くなり、場の攻撃力か守備力のどちらかが1000以下のモンスターを全て破壊する効果が発動。もう幻魔トークンは居ないため、引つかかったこちらの妖精だけが白い蝶に押し流される。そして、

「終末鳥に重なっている大鳥のカードを墓地へ。三鳥が全てなくなつたため、終末鳥は

自身の効果により破壊される」

最後の大鳥の卵にヒビが入り、三つの卵は全て砕け散る。終末鳥は最後に大きく一声鳴き、そのまま粒子となって消えて行った。

悪霊 LP700 手札2 モンスター0 魔法・罾 闇の呪縛 DNA改造手術

(悪魔族)

遊兇 LP2300 手札0 モンスター 死んだ蝶の葬儀 魔法・罾 エンサイク
ロペディア エンケファリン生成 深く暗い森

『我らのターン』

「待て!? まだ効果の説明が残って」

『まだだ。まだ我らは負けていないっ!』

悪霊の言葉は、もはやノイズが掛かったように震えていた。

しかしデュエリストとしての意地か吸血鬼としての執着故か、俺がストップをかけているのにデュエルを止めようとはしなかった。

……だが、ここまでだ。

“その長い腕は時を隠す”。

『我ラのターン。ドロ』

ビーっ！　ビーっ！

『何故だっ!?!　何故ドローしようとするかと警告音がっ!?!　……なら』

“その小さなくちばしは絶え間なく呟く”。

『我ラは魔法カード『死者への手向け』を発動！　コレでモンスターヲ破壊すれバマダ勝機が……何故発動しナイっ!?!』

悪霊は半狂乱になってカードをディスクに叩きつけるが、それでも反応はない。

『なら……ならばっ!?!』

“その大きな目は光を閉じ込める”。

『手札からモンスターを裏守備でセツ……これも出来ないというのかっ!?!　一体何だというのだっ!?!』

「これが、終末鳥が自壊した時の深く暗い森の効果だ」

力なく腕を下ろす悪霊に、俺は静かに種明かしをする。と言ってもさつきターン開始時に言おうとしたのに勝手に進められただけなんだがな。

『終末鳥が自壊した時、場に深く暗い森があれば次の相手ターンに幾つかの制限をかけることが出来る。つまり“ドローフェイズ” “魔法の発動” “モンスター通常召喚及びセット”の三点だ』

俺の言葉に呼応するように、三鳥達の幻影が砕け散った卵の残骸から浮かび上がる。終末鳥は時間経過で自壊するが、それこそが深く暗い森の最後の効果発動の条件でもある。

ただ終末鳥から身を守っているだけでは、最終的に森から拒絶されてまともに動けなくなるという嫌な仕掛けだ。

『……ターンエンド。……くそっ！ くそオオオオオっ!?!』

もうやれる事はないと悟ったのか、悪霊はぼつりと終了宣言をして吠える。

「相手のターン終了時に、最後の効果を使った深く暗い森も自壊する。……そして、俺のターン」

スツと周囲の深く暗い森の映像と三鳥達の幻影が消え去り、残るは本当の森の姿。そして、

サアっ！

「……そうか。もうこんな時間か」

いつの間にか夜が明けていた。大鳥や終末鳥の暗闇も消え、森を夜明けの光が照らし始める。

「葬儀さん。頼む」

『心得た』

モンスターもなく、防ぐ魔法も罠もない。つまり、

「バトルフェイズ。死んだ蝶の葬儀で直接攻撃」

“人は死んだらどこへ行く？”

「俺達の……勝ちだ」

悪霊 LP700↓0

デュエル終了。遊児WIN！

葬儀さんの一撃が、森の静寂の中で悪霊のLPを削り切った。

夜明けの別れ

『ああ……アアアアアアっ!』

デュエルが決着した瞬間、悪霊に異変が起き始めた。闇のデュエルの代償か、全身から闇が粒子のように放出・拡散して空間に溶けていく。

人型のコウモリのようなだった姿も次第に輪郭を失い、元の臃げな姿へと変わっていく。だが、

『………れない。このままで終われるものかあっ!』

悪霊は最後の手段とばかりに、幻魔を制御していたチョーカーを取り出して掲げる。するとチョーカーから出る光が身体の崩壊を押し留め、精神も抑制したのか口調も少しだけ落ち着いた物に戻った。

『この闇のアイテムに残る力を全て取り込めば、まだこの身体を保つことが』

『させると思ってた?』

その時、サツと黒い影が目の前を横切り、悪霊からチョーカーとディスクに入っていたデツキを奪い去る。今の今までずっと機を窺っていたカミューラだ。

カミューラはコウモリの姿で器用にチョーカーを首に引つ掛け、次の瞬間光り輝いて元の妖艶な美女の姿に戻る。

「確かに返してもらったわよ。ついでに今アナタが起動させるために注ぎ込んだ分の力も迷惑料にね」

『なっ!?! おのれ依り代風情があっ!?!』

「ふん。その依り代風情が居なくては精神を保てない無様な残骸に言われてもねえ?」

加速度的に崩壊の早まった悪霊を見て、カミューラはおほほと嘲る様に嗤う。そして、

「ところで、頼みの綱のチョーカーを手放して良かったの? 抑えを失った取り立て人が今か今かと待っているわよ?」

『何っ? ……があっ!?!』

一瞬呆けた悪霊を、どこからともなく巨大な手が掴み上げる。そう。これまでずっと嫌々従ってきたラビエルだった。

力を認めて従った訳でもなく、あくまで以前力を認めた影丸のアイテムを持っていたから義理で従っていただけ。

それがこれまで散々こき使われ、デュエルでも微妙に望まぬ運用をされ、おまけにぼろ負けする体たらく。ラビエルの怒りももつともだ。

もはや実体化して契魂の取り立て約を履行する事に微塵の躊躇も慈悲もなく、敗北者の後ろに幻魔の扉も出現して即座に開門。

あとは中に哀れな生け贄を放り込むだけという所で、悪霊は崩れゆきながらも声を上げる。

『ま、待てっ?! やめろっ?! 我ら以外に誰がヴァンパイア一族の復興を成すというのだっ?! 我らをこの時代まで保つための依り代ごときに出来るとでも』

「やるわよ。私は」

カミューラのその言葉には、見苦しく喚く悪霊すら黙らせるほどの気迫があった。

「確かに私はただの依り代としてしか期待されていなかったのかもしれない。けどね……少なくとも私はアナタとは違い、一族の復興を第一に考える」

『……っ?!』

「人間への怒りも恨みも忘れない。忘れられるものかつ! ……でも、一族の復興の為に本当に必要なならば、私はその怒りを飲み込んででも事を成し遂げる。それこそが我らヴァンパイア一族の誇り。私のやり方よっ!」

そう啖呵を切るカミューラの瞳は決意に燃えていた。これまで悪霊が取り憑いてい

た時とはまた違う力ある瞳。それを見て悪霊は、果たしてどう思ったのか。

グオオオオオオン。

それは結局想像する事しか出来ない。話はここまでと言わんばかりに、ラビエルが悪霊を扉の中に投げ込んだからだ。

扉がボタンと閉じる瞬間の悪霊の顔はなんとも言えない物だった。

まるでこの世の全てを恨むような、もしくはこの一瞬後に消え去る自分に絶望したかのような。或いは……。

「……だから、安心してまた穏やかに眠りなさい。遙かな過去、そして私が目覚めさせる未来まで」

或いは、自分達の願いを誰かに託せてホツとしたような、そんな幾つもの感情が混ぜ合わさったかのような不思議な顔だった。

扉の契約を履行した後、ラビエルは俺達を少し見てからそのまま消えて行った。

また実体化からの精気吸収で第二ラウンドを始められたらどうしたものかと思つたが、仮の持ち主であつた悪霊が消えた事で一応収まりがついたらしい。

「……終わつたな」

吸血鬼一族としての会話に口を挟めず見守っていた俺だが、区切りがついて大きく息を吐く。

「そのようなね。お人好しのバランサーならあの瞬間、奴も救おうとするかと思っただわ。もしそうならば私が直接扉に放り込むつもりだったのだけど、意外に薄情なのね」

「まさか。俺はそんなにお人好しじゃないんでね。敵も味方も助けるなんて器用な事出来るかよ。それに相手は元々悪霊。助ける道理はないね」

俺をどういふ風に見ているんだと、カミューラに対してニヤリと笑ってみせる。

俺はヒーローでも聖人でもない。特に今回みたいな負けたらヤバイ闇のデュエルで手加減できるものでもないし、その結果のペナルティから相手を助けようだなんて余力もない。これまでだってそうだ。

強いて言えばネクの一件はそれっぽい事をしたかもしれないが、アレはあくまで全て終わった後でネクが勝手に生還してきたから取引しただけだしな。助けようと思って助けた訳じゃない。

……まあ最低限デュエルの中断を提示するくらいが関の山だ。それも本人に断られたんじやどうしようもないしな。

「カミューラこそ良かったのか？ 一応あれもごちゃごちゃしてたけど一族の思念的な物だろ？」

「あんなのが誇りあるヴァンパイア一族の総意であるわけないじゃない。あれはただの妄念。自分達を一族だと思い込んだどこぞの悪霊よ。そうに違いないわ」

「へえ……それにしても別れの言葉はどこか切なげだったか？」

「さっきのは奴を言い包める為の方便よ。そんな事も見抜けないなんて、デュエルの腕はともかく嘘を見抜く目は節穴かしら？」

マズいな。軽く意趣返しで揶揄したら、普通に悪口も付けて返された。口喧嘩では勝てんな。

俺は降参とばかりにそれ以上は何も言わずに軽く両手を上げる。それを見て、これ以上この話題を続けるのを止めるカミューラ。それから少しの間互いに何も言わない時間が続く、

「……それで、これからどうする気だ？」

そろそろ聞いておかなければと、俺は本題を切り出した。何故なら、

「そうね。例えばこんなのはどう？ 丁度ここには幻魔のカードが有り、多少なりとも言う事を聞かせられるアイテムもある。ならばあの悪霊の計画を横取りして私が本棟まで攻め入る。或いは戦わずにこのまま幻魔のカードとアイテムを持ち逃げする……とか」

そう目の前のカミューラが悪い顔をして、デッキから一枚のカードを引き抜きつつ

語ったからだ。

実際今の時点でそれをされたらとても困る。本棟に向かうなら幻魔がまた十代達に猛威を振るうし、ここで逃げられるとそれはそれで後が怖い。

食い止めようにも俺の身体は限界。幻想体達も皆して幻魔との戦いで疲労困憊だ。さつきから三鳥や罪善さん、セイさんも出てこない事がその証拠だ。

俺達の間に僅かに緊迫した雰囲気が出る。あとは幻魔のカードに再び力を注ぎこめばまたラビエルが出てきてしまう。……だが、

「さあ僕達よ。我が下に戻りなさいっ！」

カミューラがデッキから取り出したのは、ラビエルではなくヴァンパイア・バツツのカード。

それに力を注ぎこむ事で、悪霊に取り込まれていたコウモリ達が群れを成して主人の下に帰還する。

キイキイっ！ キイキイっ！

「ふふっ。……何を呆けた顔をしているの？ もしかして今ここで幻魔をまた呼び出すとも思った？ これだから下等な人間は考えが浅いというのよ」

カミューラは柔らかない笑みをコウモリ達に向けた後、俺に向けてクスクスと笑う。

「そもそも今の私は幻魔を呼び出せても従えるだけの力は残っていない。それもチョーカーの補助があつてやつと。そんな状態で出してもさっきの悪霊の二の舞。やる訳がないじゃない。それに」

シュツ。

カミューラはまたデッキからカードを引いてこちらに投げ渡す。それは今度こそ幻魔皇ラビエルのカードと、何故か一緒に幻魔の扉のカードも。

「それも返すわ。持って行けば？」

「なんだ。えらく素直だな」

「どのみち今は持つていても使えないもの。おまけに持つて逃げたとすれば、当然鍵の守り手を始めとしたデュエリスト達が追いかけてくるでしょう？　今は戦いよりも回復が最優先。ならそれがない方が身軽というものよ。幻魔の扉はまあついでにね。……ああ。チョーカーは貰つていくわ。今外すと人の姿を保てないから」

サアッ！

さつきから少しずつ朝日が輝きを増し、光を嫌つてカミューラは一步森の中へ下がる。より暗く深い闇の中へと。

「そうか。じゃあ一応聞いておくが、これからおとなしく出頭するつもりはあるか？」

今なら悪霊に半分操られていたって事と、幻魔をおとなしく返したって事でそれなりに情状酌量されるかもだぜ？」

「はっ！ 冗談言わないで頂戴。多少の意識誘導はあつたにしても、これまでの事は私の意思でやった事。これまでも、これからも、私がいかなる手段を用いても一族の復興を目指すことに変わりはないわ。それに……」

そこでカミューラは一度言葉を切り、自身の身体を少しずつ黒い霧に変化させながら続けた。

「私は幻魔を完全に諦めた訳じゃない。一度回復するため身を隠し、幻魔以外の復興の方法も探ってみるつもりだけど、もしそれも見当たらずに幻魔を制御する力と手段が手に入ったその時は……また奪いに来るからそのつもりで」

「ああ。じゃあその別の方法が見つかったら教えてくれ。なるべく平和的に済む方法なら手を貸してやるよ。これでもバランサー調整役なんだね」

俺はそう言つてカミューラに手を振る。

……何でだろうな？ カミューラは敵なんだけど、何が何でも倒さなきゃいけないという風にはどうにも思えなかった。目的もあくまで一族の復興が第一で、人類への怒り諸々は後回しらしい。

なんだかんだバランサーとセブンスターズとして長い付き合いになったのもあるし、

一時的にとはいえ共闘したのもあるか。我ながら絆されやすいなど少し驚いている。

あとただでさえ回復が必要なのに、コウモリ達を優先して助けた事も理由かな？ あれにはレテイシアや三鳥もにっこりだろう。

「生意気な。でもまあ、利用できると思つたなら連絡してあげるわ。……じゃあねバランサー。精々その時まで無様に生き残っている事ね。行くわよ僕達」

キイキイっ！

完全に黒い霧となつて森の奥に消えていくカミューラと、こちらに一度礼をしてそれを追うコウモリ達。

俺はただ静かに、朝日が昇る中そいつらを見送つた。そして、

「久城っ！ 無事だったかっ！」

日に照らされながら、後から追つてきたのだろう万丈目。それにカイザーに肩を貸されて歩く吹雪さんがこちらに向かつてくるのを見ながら、

「よお！ 万丈目。無事……だった……か」

……あれ？

ばたっ!?

急に目の前が真っ暗になり、俺はその場で意識を失って崩れ落ちた。

閑話 傍観者との短き邂逅

「久城っ!？」

離れた所から真っ先に倒れた遊児に駆け寄ったのは万丈目だった。これはカイザーが吹雪に肩を貸していたから出遅れたという事もあつただろう。故に、

『安心しなよ。命に別状はない。ただ連戦の上、最上級幻想体の一角である終末鳥を顕現させて幻魔を真っ向から撃破するなんて事をやったんだ。しばらくは日常生活はともかく、精霊関係はほぼ扱えないだろうね』

万丈目だけが短い時間ではあるが、その存在と接触した。

「何者だっ!？」

万丈目は倒れ伏す遊児の上に浮かぶ光球に問いかける。しかし腕はデュエルディスクを構え、いつでも戦える構えだ。

『そうケンカ腰になるもんじゃない。まあ友人が急に目の前で倒れたんだ。分からなく

もないけどね』

「だから何者だと聞いている。……お前も幻想体なのか？」

万丈目はデツキからおジャマ達を呼び出して確認しようとするが、

「……………どうしたお前達？」

『アニキイ。コイツ……………なんというかよく分からないのよ。幻想体達もなんか普通の精霊とは少し違う感じだったけど、こつちはそれに輪をかけて変。強い弱いとかじゃなくて、本当に良く分かんない』

イエローは妙な顔をするし、他のおジャマ達も同じく首をかしげる。強大な相手だったら怯えるおジャマ達だが、分からないと判断するのは珍しい。

万丈目はその事から、目の前の存在により一層警戒を見せる。

『ハハハ。安心して良い。僕の名はディー。そこに居る久城君のファンさ。彼に幻想体のデツキを渡した者としても覚えてくれればいい』

「ファンだと？」

『ああ。僕の事は久城君にでも聞けば良いさ。こうして時折久城君の様子を見ていたのだけど……………彼は実に面白い。まさかここまで楽しませてくれるとはね』

「……………気に入らないな」

楽し気にくすくすと笑うディーに対し、万丈目は不快そうにそう返した。

「仮にフアンだというのなら、少なくとも傷ついた様を見て笑ってんじやない。さあそこをどけ。久城を早く医務室に運ぶ」

『おつと失敬。なにせこの通り今の状態ではまともに触る事も出来ないのですね。よろしく頼むよ。……ああ。忘れる所だった。君に一つちよつとした忠告があるんだ』

意識のない遊児をどうにか抱き起こそうとする万丈目に対し、そうデューはどこからかうように告げた。その忠告が、これからの流れにどう影響するのを楽しむように。

『以上だよ。この内容をどう受け取るかは君次第さ。じゃっ！ 久城君の事は任せたよ〜！』

忠告を言い残すと、デューはそのまま空気に溶けるように姿を消した。それと同時に、

「万丈目。久城は!?!」

「何かあつたのかい?」

吹雪に肩を貸しながら、カイザーが追いついてきた。終わってみれば、デューと万丈目の邂逅は一分にも満たないものだった。

「……分からない。この状況を見るにどうやら悪霊は倒したみたいだが、闇のデュエルの影響かも。なんにせよ急いで医務室に運ぼう」

万丈目はここであつた事を特に話すことなく、簡潔に状況を推察した後遊兎を引きずるように抱えて歩き出した。

『ねえねえアニキ。今の奴の事……伝えなくて良いのん？ あれ何だつたのかしらん？』

「……さあな。だが、他の奴に伝えても今はどうにもならん。ひとまずは久城が目覚ましてからだ」

おジャマ・イエローの問いかけに、万丈目はぶっきらぼうにそう答える。

短い邂逅ではあつたが、万丈目の感じたデーの第一印象はずばり胡散臭い奴だ。

（信用できるタイプじゃない。だが……奴が善悪はどうあれ久城に注目しているというのは察せられた。なら何かちよっかいをかけてくるつもりだとしても、久城が本調子になるまでは多分動かない）

仮に奴が言ったように（厄介な）ファンだったとしても、少なくとも今の時点では実害はないし情報も少ない。ならば今は精々軽く注意をしておくぐらいしかやれる事はないと、万丈目は考えを切り替える。

「まったく……ファンは良くも悪くも手が掛かるな。お互いに」

万丈目はそう独り言ちて苦笑しながら、カイザー達と共に朝日の中本棟へと帰還していくのだった。



「……はあ……はあ」

深く暗い森の中で、一人の美女が陽の当たらない木陰に座り込みながら荒い息を吐いていた。

そう。先ほど遊兎と別れたカミューラである。

あれだけ遊兎に散々啖呵を切って別れたカミューラだったが、実の所大半がブラフ。戦う力などほぼ残っていないかった。

チョーカーの補助があっても幻魔など呼び出せば一分保たずに倒れていただろうし、遊兎と戦っていたとしてもどちらが先に倒れるか分からない。

いわば見栄と気合と根性で華麗に立ち去っていただけだったりする。

キイキイっ!? キイキイっ!

「ふふっ……大丈夫よ。少し休んでいれば回復するわ」

心配そうに鳴くコウモリ達に、カミューラは心配するなとばかりに笑いかける。そこ

へ、

『ほお。中々どうして殊勝なものよ。己が臣下を慈しむとはな』

どこからともなく聞こえてきた声に、カミューラは咄嗟に疲れた身体に鞭打って立ち上がる。

「あら。疲れ切った女性を襲おうだなんて優雅ではないわね。姿を見せたらどう？」

カミューラはわざと少しおどけた様子で姿の見えない誰かに問いかけた。これでもだ余裕があると思わせられれば御の字だったが。

『虚勢を張るな。もう戦う力など残っていないかろうに』

「アナタ……確かバランスの使っていた幻想体の」

カミューラの前に姿を現したのは、以前城に攻め入って計画の邪魔をした幻想体の一体。雪の女王だった。

「そういえば……悪霊の足止めをしていたという話だった割には、悪霊に追いついた時アナタの姿は無く氷が残るだけだった。こっそり身を隠していたわね？」

『ああ。怪物の相手は怪物に任ずもの。女王たる妾の手を煩わすものではないのでな』

「……はあ……道理でバランスと二人で話している間、誰かに見られているような気

がしたわけね。あの時もし私が一か八か幻魔を呼び出そうとすれば、アナタが割って入る算段だったってこと。バランスも抜け目がないわね」

『いや。あの者は妾の事は知らなかった。本当に襲ってきたらと内心震えておっただろうよ』

あれも無茶をするものよと、雪の女王はクククと笑う。

「それで？ 私を捕まえにでも来たのかしら？ それともトドメを刺しに？」

そう言いながらも、カミューラは油断なく周囲に気を配っていた。

（まともな戦闘は力を振り絞ってもこちらはあと一回が限界。しかし見た所他の幻想体は居ない。途中で身を隠していたとはいえ、奴もそれなりに幻魔と戦って消耗している筈。ならこちらにも全く勝ち目がない訳じゃない）

状況は極めて不利。しかしこんな所で自分が死ねば、一族復興の大願は露と消える。

カミューラは静かに乾坤一擲の機会を探り、コウモリ達はたとえ一瞬一秒でも壁となつて主人を守るべくその翼をはためかせる。そんな一触即発の中で、

『別に？ 其方を捕らえようとも仕留めようとも思わぬが？』

「なんですつて？」

雪の女王のどうでもよいといわんばかりの言葉に、思わずカミューラは聞き返す。

『其方をどうしようと思つたのであれば、わざわざ声をかける事もあるまい？ 妾が気になつたのはそこなコウモリ達よ』

キイキイ？

自分達？ と困惑するコウモリ達に、雪の女王は少しだけ柔らかい口調でさらに続ける。

『其方達はあの幼子が気にかけていた故な。もしそこな吸血鬼の先ほどの態度がただの演技で、逃げのびる際に其方達をあゝの悪霊めのように贄とするのであれば遠慮なく氷漬けにする予定であつたが……ククッ。存外に臣下想いらしい』

「……チツ。さっきの事もずつと見ていたのね」

カミューラは舌打ちをしながら顔を背ける。

雪の女王からすれば、上に立つ者は窮地の時にこそその対応が重要視される。

先ほどから見張つていれば、カミューラは自身が酷く疲労しているというのにも拘らず、コウモリを贄にする所かむしろ労わる様子を見せていた。

そもそも先ほど久城と別れる時も、別にコウモリ達を無理に復活させて疲労する必要はなかつたのだ。

「ふんっ。誇り高いヴァンパイア一族が、従者の一羽も連れずに单身落ち延びるなんて

無様を晒せるわけないでしょう？ 必要だからしたまでよ」

『ほお？ それはすまぬな。妾はてつきり、一刻も早く苦しむ臣下を救わんと必死になつた結果と思つていたが。それこそ今のように力を振り絞つてへろへろの姿を他人に見せる無様を堪えてまでな』

「……………?!? アナタねえ?!?」

これは面白い物を見たとはばかりにクククと笑い続ける雪の女王に、カミューラが吸血鬼にしては珍しく顔を赤くして怒りに震える。そして、

『ククつ……………興が乗つたわ。ほれ。下賜してやろう』

「むっ?!? これは……………何?」

雪の女王は何かをカミューラに向けて投げ渡す。それは、

『ハーゲン○ツツ(マカデミアナツツ)だ。妾の力を少し含ませている。食べば急場程度はしのげるであろうよ』

「だ、誰が施しなど」

『ではこのまま臣下達に自らを心配させるか? ……一族の誇りを通すのも良い。だが時に上に立つ者は、恥を忍んでも成さねばならぬ事があるのではないか?』

その言葉に、投げ返そうとしたカミューラの手が止まる。そしてちらりとコウモリ達を見ると、数瞬間を俯かせてぶるぶると僅かに身体を振るさせた後、

「……いい、頂くわ。礼は言わないし借りとも思わないわよ」

『構わぬ。これもただの余興よ。この後は好きにするが良い。ではな』

そう言い残して、雪の女王はふつと実体化を解いて姿を消した。

「何だったのかしら？ アイツ」

カミューラは今度こそ周囲に気配が無くなった事を確認し、大きく息を吐いて木にもたれて座り込む。

キイキイっ！

「分かっているわ。……非常に癩に障るけど、補給は必要よね」

カミューラはカップを睨みつけながら、ご丁寧に備え付けられたスプーンを手に取り、そして

「……………悪くないわね」

一口ごとに身体に力が戻ってくるのを感じながら、我知らず笑みを浮かべつつスプーンを口元に動かした。

幻想体ドリームツアーによろこそ その一

そこはなんとも形容し難い場所だった。

どこまでも果てしなく広がっているように見えて、自分が思いっきり手を伸ばせば簡単に端まで手が届きそうな。

或いは自分がとてもちっぽけに感じられるくせに、それでいて周囲が大きいかと言われたらそうでもないような。

大きくて小さく、広くて狭い。有るようで無いし、在るようで亡い。そんな場所に、

「……どこだ？ へこは？」

俺は一人ぼっちで浮かんでいた。

歩こうにも地面がなく、ただ浮かんでいるだけ。水の中のようにでもあるが、それにしでは息が出来る。俺はいったん腕組みをして考えこみ、

「はくん。これは夢だな？」

すぐに考える事を止めた。

こういう訳の分からない場所は大概夢オチか何かだ。そう思っていないなければやってられない。

しかしどうしたものか。これが夢だとして、なにせ俺が最後に憶えているのは悪霊と戦って勝った辺り。その後カミューラと別れて、万丈目の姿を見て気が抜けた所から記憶がない。

あの後どうなったか心配なので早く目を覚ましたいのだが、こういうのはどうすれば起きれるのやら。

「………何だ？」

気が付くと、俺の周囲にはデカイシャボン玉のような幾つかの球体が浮かんでいた。

何だろうか？ 何の気もなしに手を伸ばし、軽く指で触れた瞬間パチンとそれらはま

とめて弾け、

「………うっ?!? ううゝっ?!?」

そこには、地獄があった。

咄嗟に口元を抑えて吐くのを我慢できたのが、この場で数少ない幸運だっただろう。

「な、なんだ今の……ううっ!?」

それは曖昧なイメージでしかなかったが、一瞬とはいえ俺の中に流れ込んできた。

一つは虚ろな化け物。自分に実体がないからと、誰かの皮を被ってそれを模倣する空白。

一つは静かなる楽団。狂乱する人々の前で、命なき終演に向けて演奏を続ける指揮者と演奏者。

一つは死体の集合体。死した者達を取り込んで、いずれ山となる腐肉の獣。

一つは名を告げられぬモノ。認識しただけで他者を恐れ狂わさせる盲愛様。

一つは蒼く輝く星。崇められ、讃えられ、人に生を捨てさせる吸生主。

一つは赤く蕩ける水。自身を愛した者を愛し、それ以外を愛で溶かす厄災。

一つ一つが幻魔に比肩、或いは凌駕する世界に対する災害。そして、

「あれは……終末鳥？」

一つは黒き森の怪物。歪んだ正義に囚われた、森の守護者ならざる孤独な破壊者。

イメージの中に、どこか見覚えがあるモノが混じっていたためついそう口走る。

しかし姿こそ似ていたが、イメージの中ではそいつは護るべき森の住人すら害していた。今の三鳥達がそんな事をする筈がないので、多分似ているだけで別の個体だろう。

そんな中、流れ込んだ最後のイメージに思いをはせようとして、

「……うう。ダメだっ!？」

これ以上思い出そうとすると、喉から酸っぱい物がせり上がってくる。曖昧なくせして一体何なんだこのイメージはっ!？

俺は強烈な吐き気にたまらずそのまま蹲り、

『落ち着いて。大丈夫。辛かったら無理に我慢しなくても良いのですよ』

そうゆつくりと言う誰かに、優しく背中を擦られる感触があった。

「誰だ？」

俺は吐き気を我慢しながら懸命に振り向く。そこに立っていたのは、

『失礼。驚かせてしまいましたか？ ……ですが私は医者です。辛そうにしている方を見るとつい声をかけずにはいられないもので』

首から下をすっぽりと覆う黒い外套に、首回りに巻かれた羽毛のファー。そして頭に乗せているのは外套と同じく真っ黒のつば広帽子。

背中から二対の黒翼をはためかせ、特徴的なペストマスクを被った者。そう。

「……ペスト医師？」

『はい。つい先ほどぶりの対面ですね。管理人』

俺のバランスシートとしての姿のモデル。あのセイさんや罪善さんがとんでもなく警戒する幻想体が、俺に穏やかに語り掛けてきた。

思わぬ遭遇に、俺は蹲ったまま固まる。そんな中、

『ああいえ。そう警戒しないで。別に危害を加えようと思つてゐる訳ではありません』
「こんな訳の分からない場所で、急に出てきた奴を警戒するなつてという方が難しくないか？」

そう言うと、ペスト医師は仮面に手を当てながらふむと頷く。

『確かにその通り。しかし言わせてもらえれば管理人。今回私達の世界に勝手に入つてきたのはあなたの方ですよ』

「私達の世界つて……ここは夢の中じゃないのか？」

『どう説明したものか。夢の中ではあるのです。ただ今回は非常に珍しい事例と申しましようか』

その後もペスト医師は、集合的無意識がどうか井戸と釣瓶がどうか用語らしいものを噛み砕いて説明しようとしてくれたのだが、

「ごめん。やっぱり良く分からない」

『……そうですね。では端的に結果だけ言うなら、現在夢の中同士で繋がつてしまつてゐるのです。管理人の夢と我々幻想体の夢が』

おそらく終末鳥と幻魔という強大な力同士の激突。そして管理人が力を限界まで絞り出して倒れたからこそその偶発的な事象でしょうねとペスト医師は考察するが、正直今はそれどころではない。

「つて事は……今見た奴皆幻想体達つて事っ!」

俺の言葉にペスト医師はゆっくりと頷く。

『付け加えるなら、ここは夢の中でも深層。つまり管理人が今見たのは幻想体の中でも上澄み。デイーが言う所のリスケレベル最上位A.L.E.P.Hの幻想体達ですね』

いや薄々そうなんじゃないかと思つてはいたよ。しかし俺が知らないだけで、幻魔や終末鳥級の奴がまだあんなに居るのかよっ!?! 一体でもまかり間違つて実体化したらとんでもない事になるぞっ!?!

俺が思わぬ所で発覚した大問題に頭を抱えていると、

『どうやらまだ気分が優れないようですね。無理ありません。やはりあなたは早く目を覚ました方が宜しいでしょうね』

「そ、そうだな。こういうややこしい夢はさっさと目覚めるに限る。……それでどうやって夢から覚めれば良いんだ?」

『夢の深層から上層に上がれば良いのです。そうすれば自然と目が覚めますよ』

さあ。とペスト医師は俺に手を差し出した。

『うっかりまた別の夢に迷い込んでは大変ですからね。ご案内しましょう。手を取つて』

……怪しい。とても怪しい。騙して悪いが臭がプンプンする。

なにせ罪善さんとセイさん。そしてあのデーが警戒するレベルとなると、どう考えでもコイツ自身が厄ネタだ。

さらに言えば、コイツは何故か一番最初に会った時から俺に対してやけに友好的だ。ちよつとおかしいレベルで。

おまけに、ここが夢の深層でヤバい幻想体のたまり場みたいなものだと仮定するなら、ここに居る時点でコイツはそのヤバい奴の一体であると言える。

「そう言えば聞いてなかったけど、ペスト医師はリスクレベルって奴はどの辺りなんだ？」

『フフフ。本体ならまだしも、この私はただの影。一番下のZAYINですよ』

そう穏やかにマスクごしに微笑むペスト医師。それって本体はヤバいレベルって事だよなっ!?

その時さつき見たイメージの中で、最後の一体の様子を断片的に思い出す。

一つは白き翼の救済者。人々の病を治し、癒し、救い、そして……最後に十一の使徒と一人の異端者を従え全てを滅ぼす者。

あの翼。ペスト医師の翼にちよつと似てたんだよなあ。しかしあの翼は純白なのに

対しこちらは純黒。明らかに印象は真逆だ。

『どうしました?』

手を差し出したまま、ペスト医師は首をかしげる。俺はそのまましばし考えて、

「ああ。すまないけど、夢から覚めるまで案内よろしく頼むよ」

がっしりと、その手を掴んだ。

ペスト医師が怪しいのは間違いないが、少なくとも今は俺をどうにかしようという感じはしない。

それになんだかんだ幻魔に立ち向かった時から助けてもらっているからな。今更これ以上疑っても仕方がない。

『それでこそ管理人。私の使徒。……では、参りましょうか』

そう言って手を握り返したペスト医師は、仮面の奥で少しだけ嬉しそうに感じられた。

幻想体ドリームツアーにようこそ その二

俺はペスト医師の案内の下、夢の上層へと移動を開始した。

最初は地面もないのにどうやって進むのかと思ったが、ペスト医師が言うには足元に地面があると思えば地面のような感じになるのだとか。

実際やってみると少々不安定だが足が着く感覚が有り、泳ぐ要領でも一応進めた。流石夢の中だ。

現在は深層を抜け、中層部分に入った辺り。

ここまでは言葉で言うのと実に簡単だが、その内容はまるで簡単じゃなかった。というのも、

『大丈夫ですか？ 管理人』

「……頭が痛い。なんでここら辺一帯はシャボン玉だらけなんだよっ!？」

そう。この世界は幻想体達の夢とも繋がっているとの話だが、その繋がりにあるシャボン玉がそこかしこに浮かんでいるのだ。

さつきとは比べ物にならない数のシャボンを見て、俺はやってられないと天を仰ぐ。

……上の方にもたつぷり浮かんでいるんだけどな。

『夢の世界は大きく深層、中層、上層の三段階に分けられます。先ほど居たのは深層で主にリスクレベルA L E P H級の住処。そして上に行けば行くほどリスクレベルは下がりますが、代わりに数自体は増えるのです』

「一部の滅茶苦茶危ない奴と、大多数のそこそこ危ない奴で棲み分けが出来てるって事か。……本当にここを通らなきゃダメ？」

どうせアレだろ？　こここのシャボンも、うっかり一つでも触ったら近くの奴もまとめて連鎖誘爆するタイプだろ？

いくらさっきのに比べてリスクレベルは低いと言っても、それでも一つ下のW A Wが大鳥とかココロ級だからな。絶対またイメージが流れ込んできて気持ち悪くなる奴だ。……気持ち悪くなる程度で済んでいるだけまだマシなのかもしれないが。

とはいえ、危険は避けられるならそれに越したことはない。シャボン玉を避けて迂回できないかと尋ねてみたのだが、

『迂回は可能ですが相当な遠回りになるかと。ここを突っ切るのが最短ルートです。あれを』

ペスト医師の指差した先を見ると、遠目だがこの辺りと雰囲気が違う光が見えた。どうやらあの辺りから上層に移るらしい。

「ちなみにどのくらい遠回りになるんだ？」

『一時間……で済めば良い方といった所でしようか。もつとも、この世界において時間の感覚は曖昧です。ここで数時間過ごしたただけであっても、現実世界では一体どれだけの時間が流れているのやら。同じく数時間か、はたまた数日という事もありえます』

プチ浦島太郎かよと、俺は小さな声で漏らす。

しかしそうになると時間を掛けて移動するのは悪手だ。多少危険を冒してでもさっさとここを抜けなくては後が怖い。ここは腹を括って、

「OK。ここを突っ切ろう。出来るだけ隙間を縫って触らない道を探れるか？」

『良い心意気です。……では、なるべく私から離れずびつたりとついてきてくださいね』

そう言ってペスト医師は、俺の手を取って前進を始めた。

特に意思もなくふわふわと浮かぶシャボンは、その分軌道を予測するのが難しい。

しかしペスト医師は的確にシャボンの薄い所を進み、時にはこちらの動きに合わせて止まったり、俺だけ先に行かせて自身は黒翼を羽ばたかせてシャボンを払ったりと大活躍。

少しずつ、しかし確実に、俺達は前へ前へと進んでいった。

そんな中、不意にぼっかりと空いたシャボンの空白と言うべき場所が見つかり、ペスト医師が休憩を進行。俺はまだ行けると言っただが、

『いけません。先はまだ長いのですから。休める時にしつかり休む。これは旅の鉄則ですよ』

そう力説され、俺は仕方なくその場で力を抜いてぶかぶかと漂う事に。すると、

「……ふう〜」

大きく息を吐き、びっくりするほど自分が疲れていた事に気が付く。

『そのまま力を抜いて、大きく深呼吸を三回。それだけで大分楽になりますよ』

「じゃあ、少しだけ」

試しにそのようにしてみると、実際少しだけ疲れが取れたような感じがしてきた。

『良い調子ですね。ではこのまま十分ほど休息に充てましょうか。その間シャボンが来ないように私が見張っておきますから、どうぞごゆっくり』

ありがとうと返すと、ペスト医師はどこか微笑んだような感じで黒翼を羽ばたかせ、近寄ってくるシャボンを散らし始めた。

(何というか……優しい人だな)

何故か、直感的にそう思えた。

罪善さんやセイさんが警戒しているし、実際どこがとは正確に言いきれないのだがヤ

バい奴であるというのは何となくわかる。

しかしそれはそれとして、罪善さんと似ているようで完全に別種の優しさを持つている。そんな風に思えた。まあ初対面で抱いた“世界規模のありがた迷惑”“善意の押し売り”というイメージも一切消えていないのだが。

そのまま深呼吸を繰り返しながら休む事数分、

「……なあ？ さつき旅の鉄則って言うてたけど、ペスト医師は旅行でもしていたのか？」

『私ですか？ そうですねえ……私は行った事はないのですが、私の本体はあちこち旅をしていました。長い長い巡礼の旅を』

やはりこういうのは一度きちんと話し合ってみるに限る。という訳で何気なく質問してみると、ペスト医師はどこか懐かしむように不思議な言い回しをする。妙に他人事みたいな言い方だな。

『ああ。今の私は影法師ですからね。少しだけ本体と乖離があるのです。同じ記憶や思考を持つてはいるけれど、僅かに差異のある分身のようなものですね』

本体より私の方が多分話し上手ですよ。試してみますかと、ペスト医師は自分の本体の旅の話を俺に語った。

どこそここの流行り病に襲われた村を救ったとか、旅の最中に祝福を授けた者達がどん

どん使徒として旅路に加わっていったとか。どこかの森で休もうとしたら大きな鳥に追い出されたとか。

何か気になるワードがごろごろ出てきたが、幻想体同士のややこしい話に発展しそうなので一部はスルー。

しかし実際自身で言うだけあって、オールドレディには及ばずともその語り口は見事なもの。あくまで本人としてではなく第三者として語っていたのもあり、俺はついつい聞き入ってしまった。

気が付けば十分をとうに過ぎ、マズいと慌てて動こうとする俺にペスト医師はクククと笑う。

『いや失礼。上手く策に嵌ったなど』

何っ!? まさか俺をここで足止めして、本当に浦島太郎状態にするつもりかと若干焦ったが、そこにペスト医師の言葉が続く。

『正直申しまして、管理人の疲労は思った以上に溜まっています。これは十分程度の休息ではとても足りませんが、そう訴えても休んでくれそうにない。なのでこうして昔話にかこつけて無理やり休んで頂いたという訳です。少しは休めましたか?』

そう言えば、さつきに比べて身体が大分軽くなった感じがする。ちよこちよこあつた頭痛もかなり治まっていた。

「うん。とても休めた。そこに関しては素直にありがとよ。でも上手く掌で転がされたのはなんか腹立つっ！」

『それは結構。腹を立てられるだけの精神の平静が戻ってきたという事ですからね。……さて。ではそろそろ行くとしましょうか』

「おうっ！」

さくでと。この中層を早い所抜けて、さっさと上層に向かうとするかっ！

ペスト医師が翼を羽ばたかせるのを一度止め、再びこちらに手を差し出す。しかし少々さつききの一件が気恥ずかしかったのもあって、俺は手を取らずにそのまま一歩大きく前に踏み出し、

『あっ!!? 管理人。その足元に』

「えっ!!」

パチンっ！

足元で何か弾けたような音がしたかと思うと、また何かのイメージが流れ込んできた。それは、

『アツハツハツハツハ！』

『消えろっ！ 死んでしまえっ！ アナタが世界を喰らわんとする化け物になり果てたのなら、私が引導を渡してあげるっ！』

狂った笑い声をあげて突撃する黄金の魚と、それと対峙して涙を流しながら修羅と化すセイさんの姿だった。

幻想体ドリームツアーにようこそ その三



周囲に人の居ない荒野にて行われるそれは、まさしく死闘だった。

『アツハツハツハツハ！』

片や満たされぬ渴望の赴くままに、世界を喰らわんとする黄金の魚。それは口の中から狂ったような笑い声を響かせながら進撃する。

普通なら止められる者などほとんど居ないその突撃だが、

『ハアアアアア！』

大地に無数に突き立てられた細剣の壁が、押し留めるのではなく少しずつ角度をずらす事で力を分散。

それを繰り返す事で、かろうじて生きた災厄を食い止めていた。

これを成したのは一人の魔法少女。悲しみを纏った青い騎士にして聖女である。

『……止まれっ！ 止まりなさいリーダーっ！』

じりじりと剣の壁を削られる中、青い騎士は必死に叫ぶが黄金の魚は止まる事はな

い。

一当たりする度に幾本もの剣は折られ、飛ばされ、或いは喰われていく。

『もう戦いは終わったっ!? 荒ぶる必要なんてないのっ!?』

『アツハツハツ……だからこそさ』

突如として笑い声は止み、僅かに見える黄金魚の口の中から金髪褐色の少女が顔だけ出して語りだす。

その言葉からは隠し切れぬ狂気が見え隠れしているが、ほんの僅かにだけ理性の光が残る姿に青い騎士は和解の可能性を見る。だが、それはすぐに誤りだと気が付いた。

『戦いは終わった。もう私ら魔法少女はお役御免さ。けどさあ……ならもう私らも好き勝手やっても良いよな? 平和。平和っ! ああ良いね平和っ! 最高だ! 世界が平和になったからこそ、次は私らの幸せを願わなくちやなあっ!』

『何を言ってる』

『分かってんだらう? 私ら魔法少女は皆世界の為に戦っていたんじゃない。自分の願いの、どうしようもない理の為に戦ってきたっ!』

ガツンっ!

剣が砕け散る。

『あの憎しみの女王は自分が正義であり続けるために。どつかの世界に行ったあの緑の』

良い子ちゃん。自分の信念を貫くために。……お前もそうだろうがよっ！ 誰かを護りたい。騎士として正しくありたい。その対象がたまたま世界だっただけ』

ガツンっ！

また一つ、剣が砕け散る。

『違っ……私は、そんな個人的な理由で』

『誤魔化すなよ。それに理由はどうあれそれはそれで立派な願いさ。でもさあ……私の願いはそんなご立派な物じゃない。ただ幸福になりたいだけさ。なのに……何をやっても何を手に入れても満たされない。それなりの地位も、名誉も、称賛も手に入れたのだ。終いにはこの通り、食っても食っても余計に腹が減ってくる』

『リーダー……アナタは』

そんな会話の最中であっても、ぎしぎしと剣の結界は嫌な音を立てる。少しでも青い騎士が気を抜けば、その瞬間全て食い散らかされてしまうかのように。

『なあ？ 分かるだろう？ もう世界を丸ごと平らげるぐらいじゃなきゃダメなんだよ。そこまですてやっど私は満たされる。幸福になれる。だから……命が惜しいんだら邪魔すんな』

ピシッ……バキンっ！

その言葉を最後に、遂に剣の結界は崩壊する。そして、

『ふざけないで』

砕けた剣の全ての破片が、そのまま刃の嵐となつて黄金の魚に襲い掛かった。これは黄金の魚もたまらず、僅かにだけ進撃が収まる。

『そんな手前勝手な理由で、世界を壊すというのなら……リーダー。もうアナタは私の敵よ』

『はっ！ そう来なくっちゃな』

そう敵対宣言する青い騎士の表情はどこか悲壮さを感じさせて、それに気づいた黄金の魚は対照的にどこか楽しそうに語る。

『世界を喰らおうとする私の貪欲と、たとえ元仲間を殺してでも世界を守ろうとするお前の願い。派手にぶつけ合うとしようや。……なあっ！』

それを最後に、黄金の魚は再び完全なる狂気にその身を委ねる。

『アツハツハツハツハ！』

『消えろっ！ 死んでしまえっ！ アナタが世界を喰らわんとする化け物になり果てたのなら、私が引導を渡してあげるっ！』

そうして二人の魔法少女……いや、一人の魔法少女と一体の怪物が交錯した。



『……………人。管理人っ!? 我が使徒っ!? しつかりするのです』

「……………んっ!? へぶっ!?」

気が付けば、俺はペスト医師に顔をピンタさされて叩き起こされていた。

今まで見ていたのは、どうやら食欲の王とセイさんこと絶望の騎士の夢だったらしい。同じ魔法少女だから何かしら関係があるとは思っていたが、あのワンシーンだけ見る限り非常に険悪だったな。

『ああ。良かった。幸い割れたシャボンも二つだけで済んだようですね。………まったく。いくら休めたからと言って、油断して一人進もうとするから足元を掬われるのですよ。管理人はもう少し周囲に気を配るべきです』

「……………ゴメン。これは本当にゴメン。完全に俺のミスだわ」

どこかホツとしながらも、少し怒ったように論すペスト医師に俺は何も言えない。

もしこれがさつきまでの深層だったら。もし割れたのが二つだけじゃなかったら。俺はもつと酷い目に遭っていただろう。

深層を抜け、中層もそれなりに進んでいた事から、俺は知らず知らずの内に油断して

いたらしい。ここはそんな甘い所じゃないのだ。

「もうここを出るまで油断しない。だから、もう一度力を貸してくれないか？」

『その意気です管理人。良いでしょう。では……また参りましょう』

そうしてペスト医師の差し出した手を掴むと、俺達は再び上層へ向けて歩み始めた。

上層。それは最も夢と現実の境が薄い場所。

ここまで来るとペスト医師曰く幻想体達もリスクレベルの低いモノが大半であり、深層や中層に比べれば危険度は格段に下がるといふ。

しかし補足するのなら、いくら危険度は低かろうが数は最も多いという。つまりシャボンがそれこそ壁のようにぎっちり詰まっている場所すらあり得るといふ事だ。

先ほど酷い目に遭ったばかりの俺は油断せず、たとえ大量のシャボンが立ちはだからうが絶対に突破して目を覚まして見せると強い覚悟を決め、

何故か普通に起きてる幻想体達に懐かれた。

最初上層に到達するなり複数体に飛び掛かれ、俺の人生もここで終わりかと一瞬死

を覚悟したのも束の間、実態は大歓迎である。

『ふむ。これは興味深いな』

いやそこっ!!? 何一步引いた所で観察してるのかなペスト医師っ!!?

「ちよっ!!? ちよっと離れてっ!!? 離してっのっ!!?」

とりあえずくつついてきた者達を引っぺがし、一体ずつ確認する。

「え〜つと。まず貴女は『幻想体 妖精の祭典』で」

『ええ。その通りよ私の愛しき管理人。私手ずから貴方の面倒を見てあげるから、心ゆくまで施しを受けなさい』

まずは穏やかに微笑んで愛らしく漂う人間大の妖精に声をかける。……今なんか俺の呼び名にとんでもないルビが振られた気がするんだけどっ!!?

「ホホホ。なんでもないわなんでも。それより怪我なんかしていないかしら? そういうのは早め早めに処置しなければ。肉は鮮度が命ですからね」

やっぱり俺の事食う気満々じゃないかコイツっ!!? 以前攻撃モーションを見たから、ケアしつつ相手を捕食しようとする事を知ってるんだぞ!

「次……『幻想体 キュートちゃん』。あはは。可愛いなコイツっ!」

『わんっ! わんっ! ……くう〜ん』

今度はさつきから足元にじゃれついてくるつぶらな瞳の小さな白い子犬キュート

ちゃん。がじがじとズボンの裾を齧っている所がまた愛らしい。

だがコイツもこう見えて危険生物。以前葬儀さんに聞いた所、一日に10kg以上の食事をする大喰らいで、腹ペコになると野獣になって大暴れするとか。

「そして『幻想体 空虚な夢』。コイツ夢の中でも寝てるぞ」

『……むにゃあ』

それは宙に浮かびながら眠る羊。身体の色が紫だったり毛の中から変な目玉が覗いてたりする点を除けば、まあわりかし怖そうには見えない。あととてもふわふわだ。

しかしディーが言うには、近くに居る奴を無差別に眠らせるらしい。茂木とどこか似た能力持ちで案外気が合うかもな。

ここまではまあ良い。実体化こそしていないが、なんとなく能力やらは見た事がある。でも……最後のコイツは一体何なんだ？

最後に居たのは、一言で表すなら兵隊だった。

宙に浮かぶ人間大のピンク色のハート。その中に、小柄な薄桃色の軍服を着てゴーグルを付けた兵隊が浮かんでいるのだ。

……何だろうコイツ？ カードでも見た事がないのでイマイチ良く分からない。ここに居るって事はZAYINかTETH級だとは思うんだけど。

「あゝ。君の名前は？」

『はっ！ 個体名『幻想体 ピンクの兵隊』でありますっ！ 管理人殿に敬礼っ！』
俺の呼びかけに、ピンクの兵隊はニコニコ笑いながらビシツとした敬礼でそう返した。

幻想体ドリームツアーによるこそ その四

さて。どうしたもののか。俺の前には何故か起きている数体の幻想体達。しかも一部下心有りとは言え、皆してこっちに友好的だ。

いやそもそもだ。なんで皆して起きているんだ？ それを言ったらペスト医師もだし、夢の世界なのに起きていて表現が正しいかは分からないが。そう尋ねると、

『おそらくだが管理人。ここが上層……最も夢と現実の境が薄い場所だからではないだろうか？ 君本体から力が流れ込みやすい場所と言い換えても良い。つまり』

「……精霊化しかけている奴らって事か」

ペスト医師の言葉に、俺は以前ウエルチアースや葬儀さんが精霊化した時の事を思い出す。あの時は知らない内にカードに力が溜まっていた結果だった。それと同じか。

今日俺は悪霊戦で力を限界まで絞り出した。しかしそれまでに既に流れ込んだ分の力は間違いないとあって、それに刺激されたのがこいつらと。

妖精の祭典は分かる。レベル1だから必要な力は少ない筈だ。

キユートちゃんと空虚な夢も分かる。こいつらは以前葬儀さん達が実体化した時も

候補になっていた。その時に溜まった分が少し残っていたとすれば辻褃も合う。しかし……。

「それにしちゃあペスト医師とピンクの兵隊のカードは俺持つてないよ?」

『ああ。正確に言えば、カードはディーがあなたに渡していないだけで存在するのです。そちらに流れ込んでいると考えてもらえれば。……もつとも、私や兵隊の完全な顕現をディーがそう簡単に許すとは思えません』

えっ!? 私や兵隊のつて……このニコニコして害のなさそうな兵隊もディーが警戒するくらいヤバい奴なのっ!? 俺はそつと兵隊の方に視線を向けるが、相変わらず兵隊はにつこり笑つて敬礼を続けている。

あからさまに食欲が根本にある妖精やキュートちゃん、睡眠欲が根本にある空虚な夢と違い、ペスト医師と同じく行動原理が見た目からは読みづらい。なので、軽くどんな奴かと尋ねてみると、

『はっ! 私たちの使命は、人間の優しきピンク色の心を守る事であります。その為にこうして同じくピンク色の服を纏い、人間の心に溶け込むのであります』

『人間の優しい心を守るためならば、私たちは喜んで悪い心に立ち向かい、代わりに暗く黒く汚れていくのであります』

……良く分からないが、人間に好意的なのは間違いないらしい。セイさんと同じく誰

かを守る系の幻想体のようだ。

しかし代わり汚れるというフレーズが少しだけ気になった。こういう場合のお約束として、最初は良いが頼りすぎると碌な目に遭わない。多分ディーが警戒しているのはその部分だろう。

まあ結論として、有用だがもしかしたら危ない奴という感じだな。君子危うきに近寄らず。という訳で、

「じゃー！俺はそろそろ失礼するよ。皆良い夢見ろよ！行こうペスト医師」
ガシッ。

『つれない事を言わないでちょうだい管理人。出口へ向かうのでしよう？一緒に行くわ』

げっ!? 自然に笑って別れようとしたら、普通に妖精に肩を掴まれたんだけど。それと妖精この見た目で力つよっ!?

見ればキュートちゃん服の裾に齧りついて離さないし、空虚な夢こと羊と兵隊はいつの間にか俺の両横に移動している。ほぼ全方位囲まれたんですけどっ!?

「い、いや。そんな悪いって。皆はこのままもうしばらくぐっすり」と

『それは寂しいわね。寂しくて寂しくて……とつてもお腹が空いてしまうわ』

そう言つて妖精はぺろりと舌なめずりをする。……これはガチだ。夢の中だろうが

何だろうが、もし今断ろうものなら物理的に食べられる。

助けを求めて他の面子を見るも、羊は寝ていて表情が分かりづらいし、キュートちゃんはむしろ連れてけとばかりに尻尾を振りながらつぶらな瞳を向けてくる。おまけに、

『管理人。折角ですので、出口まで彼ら彼女らに協力を頼んでは如何ですか?』

『管理人殿っ! ご命令をでありますっ!』

ペスト医師は何故か乗り気だし、兵隊なんか寧ろ命令待ち。いやお前らが暫定一番やばい奴らだからねっ!?

くっ……全員好意的なのに誰も味方が居ない。こうなったら、

「ああもうっ!? 分かったっ! 分かりましたっ! ……出口まで一緒に行こう」

『そうでなくてはね。安心なさい。貴方が食べ頃になるまで、大切にケアしてあげるから』

そう穏やかな顔で物騒な事を言う妖精。いやだから怖いんだってっ!?

こうしてペスト医師に加え、半ば脅されて妖精、キュートちゃんに羊、兵隊が同行する事となった。

するとどうだろう? 上層のシャボン玉の数は多いのだが、さつきから一つも俺の方

に寄ってこない。何故なら全部、届く前に幻想体達が散らしたり離れた所で割ったりしているからだ。

『お行きなさい』

『わんっ！ わふうっ！』

今もシャボンが近くまで寄る前に妖精が小さな妖精を生み出して突撃させ、遠くではキュートちゃんやシャボンに食らいつこうと飛び跳ねている。こっちは見た目だけならなんかほっこりするな。

『……むにゃ。ぐう』

羊はさつきから寝たままついてきている。しかし何故か羊の周囲のシャボンがまとまと動きが遅くなっていた。まるで眠っているかのように。……そこも無差別に眠るんかい。そして、

『優しい心を守るであります！ 悪い心をやっつけるであります！』

『さあこつちです。どんどん進んで』

暫定一番ヤバイタッグが、普通に道を切り開く大活躍。兵隊は長銃を構えてシャボンを銃撃しつつこちらの盾となり、その空いた隙間隙間をペスト医師が確保しつつ前進していく。

このように幻想体達の同行により、移動はすこぶる楽になった。時折妖精がこちらを

獲物を見る目で見ていたので胃が痛い、一応進みの速さという意味では大いにプラスだ。

そうして進み続ける事しばらく、

『おお！ 見てください管理人！ あれが出口。現実との境ですよ。あそこを通れば現実の管理人も目が覚めるでしょう』

ペスト医師が指さす先、そこには白い光の幕のような物が存在していた。しかし、何故かその周りにはシャボンが一つも飛んでいない。

いや、良く見れば近づいたシャボンは全て弾かれている。

『見て分かる通り、あそこはこちら側の幻想体は近づけません。デイーの施した世界の境を隔てるフィルターがあるからです。そして……どうやらお迎えのようですよ』

その言葉に良く光の幕の先を見ると、

『おおい！ どこだ我が生け贄よっ！』

何故かネクが、命綱のようなコードを付けたままこちらへふよふよ泳いで……浮かんで？ まあとにかくやってくるのが見えた。

「ネクっ!? なんでこんな所に？」

『なんでというのはこっちのセリフだっ!? いい加減早く目を覚ませっ！ もう何日も眠り続けてレティシアが曇りっぱなしなんだっ!?』

げえっ!? もう現実ではそんなに時間が経っていたのかっ!?

ネクモレティシアには少しだけ甘いからな。業を煮やしてこうやって迎えに来てくれたらしい。

『ほらっ! 早くこっちに來い。引つ張り上げる』

「分かったっ! 皆ごめん。俺急いで行かなきゃっ!」

俺は最後に羊の雲みたいな毛を軽く堪能し、すり寄ってきたキュートちゃんを優しく撫でると、ここまでついてきてくれた幻想体達に頭を下げる。

まあ非常に怪しかったり懐かれたり脅されたりと癖の強い面々だったが、ここまで助けてくれたのは間違いないからな。

『ホホホ。気にする事ないわ。これは言わば下準備。調理はじっくり時間を掛けるものだもの。……私が外に出るまで、誰にも食べられないでね。愛しき私の管理ごちそう人よ』

だから怖いってホントっ!? 何故かペスト医師を一瞬ちらりと見て、妖精は最後まで食欲のままにそう語った。

『御用とあらば、いつでも私たちをお呼びください。必ずやお役に立って見せるであります!』

「こちらは一応ディーに会ったらカードがないか聞いてくよ。その時はよろしく」

兵隊に合わせてこちらでも敬礼して返すと、兵隊はどこか嬉しそうな顔をする。こうい

うノリも好きなようで何よりだ。実はなんかヤバイ奴のようだが、どう危ないかディーかオールドレディ辺りに後で聞いてみようか。そして、

「ペスト医師。今回は最初から最後まで世話になったな。ありがとうよ」

今も胡散臭さは変わらないのだが、それでもペスト医師は一度たりともこちらを傷つけようとか害そうとかはしなかった。寧ろずっと協力的で、その分くらいは信用しても良いかなとは思っている。

『いえいえ。管理人が無事に帰還できるようでなによりです。……ああ！ 一応の忠告ですが、少々お耳を拝借』

ちよいちよいと手招きするので、なんだなんだと近づいて耳を貸す。すると、

『今回の一件は偶然とはいえ、ここへはあまり来ない方が良いかと。今回は偶々私がすぐ近くに居たから良いものの、管理人一人ではとても危険です。たとえば……そう。罪善辺りにでも頼めば、そう簡単に夢で繋がらぬよう防御も出来ましょう。良く頼み込んでおく事ですね』

「ああ。またこんな事になったら大変だしな。頼んでおくよ」

『よろしい。さあつ！ 迎えがさつきからお待ちかねですよ！』

ペスト医師は俺を送り出すように背中を軽く叩き、そのまま手をひらひらとさせる。

『別れは済んだか？ ならさつきと行くぞつ！ 掴まれつ！』

「おうっ！」

俺は最後に大きく手を振ると、ネクの方に向けて走り出した。

管理人が元の世界に戻ったのを理解したのか、羊とキュートちゃんも一声挙げてどこかへと消えていく。危険だろうが能力があるうが基本は動物。こういう時はあつさりだ。

『では、私たちも帰投するであります。今回は管理人殿をお守り出来て何よりでありました。お二人もケンカせず早く帰るのでありますよ！ 敬礼っ！』

そう言つて、ピンクの兵隊は相変わらずのニツコリ笑顔でどこか窺めるように敬礼して去つていった。

最後に残つたペスト医師と妖精の二人だったが、その間にはほんの僅かにだけ陰悪なムードが漂う。

『しかし意外でしたね。私はてつきり、あなたは管理人の帰還を阻もうと思つていたのですが。目の前で極上のご馳走が去つていくのを黙つて見届けるとはらしくない』

『失礼ね。私はこう見えて美食家グルメなの。極上の肉を素材そのままに食らいつくのも悪くはないけれど、下準備をしてより美味しくなるのを待つのも良い物よ。アナタに見張られるまでもなく、今は手を出すつもりはなかったわ』

『……だと良いのですが』

そう。同行してからずっと、ペスト医師は妖精の動きから目を離さなかった。それは

妖精もまた自身と同じく、ランク詐欺と言われる危険な存在である事を知っていたからだ。

『幻想体 妖精の祭典』はリスクレベルZAYIN^下である。だがそれは妖精本体が一切元居た世界の収容室から抜け出さず、専ら眷属のミニ妖精を目当ての職員^{食事}のケアに当てるだけだからである。

職員が肉体的にも精神的にも健康を保つていれば、ミニ妖精も慌てて食らいつくなんて不作法は働かない。それに妖精本体もわざわざ職員を喰らわずとも、収容室に職員が専用の食事を運んでご機嫌を取ってくるのだから問題はなかった。

しかし、いくら愛着を持たれやすいよう美しい姿に変じていようとも、いくら美食家を気取ろうとも、妖精の本性は食欲に忠実な獣^{ケダモノ}である。

滅多に起こり得る事ではないが、仮に長い期間世話もされず食事にもありつけないなどという事があつた場合、妖精は狂暴な獣の本性を曝け出して獲物を自ら探し出す。

その際のリスクレベルは単騎で推定HE以上。眷属のミニ妖精を指揮する事も考えると、場合によってはWAWまで届きかねない。つまりは精神状態で危険度の変動する、立派なランク詐欺幻想体である。……もつとも、先ほどまでこの場に居た幻想体も

大体そんなようなものだ。

『そんな事を言つて、そちらこそどうなのかしら？ 貴方が管理人に御執心なのは明白。わざわざ本体から影だけをこの上層に発生させ、手間暇かけて深層まで到達させて迷子の管理人を拾い上げるなんてね』

『医者が怪我人の下へ行くのを誰が咎めましょうか？ 少々労力が要る上遠い道のりでしたけどね』

その言葉を、ペスト医師は軽く肩を竦めて受け流す。

妖精が語つたように、ペスト医師が深層にて遊兎と出会つたのは決して偶々ではない。

いち早く夢の世界にやってきた事を察知し、それまでに少しずつ溜め込んでいた力をそれなりに消費してまで遊兎と合流したのだ。

『幸い管理人の精神安定は間に合いましたし、本人の精神耐性もそれなりにあるようでした。助かりました。それに短い時間ではありませんでしたが、二人で共に旅をするというのも中々に良い物でしたよ』

徹頭徹尾、ペスト医師は今回遊兎の側に立つて動いた。常にその身と心が傷つかぬよう案じ、その手を取つて進み続けた。

唯一危険要素である妖精の同行を敢えて認めしたのは、一緒にピンクの兵隊が同行を求

めたため。

黒ならざるピンクであれば管理人を害する可能性は非常に低く、その防衛性能は絶望の騎士にも劣らない。そんな兵隊と自分が居れば、仮に妖精が遊児を捕食しようと動いたとしてもどうにかなる。

残るキュートちゃんと羊は、ペスト医師が見た限り機嫌さえ損ねなければ無害なもの。つまり全て遊児の安全を最低限常に確保した上での行動だった。

ええ。実に有意義な時間でしたよと、探る様な妖精に対してペスト医師は穏やかに微笑む。

そう。既に今回の目的は果たされたのだから。

『……そう。まあ良いわ。でも心する事ね。あれは私の獲物。私のご馳走。さつき彼の背を押した時に何か仕込んだようだけど、それはこちらも同じ事。下手に人の獲物を横からかつさらって、飢えた獣に食い殺されないよう精々注意する事ね』

妖精はくるりと身を翻すと、最後に僅かにだけ目つきを鋭くさせながら言い残して消えていった。

『人の獲物……ですか。それはある意味こちらのセリフなのですがね』

近くに誰も居なくなつた出口の前で、ペスト医師は誰に聞かせる訳でもなくそう呟いて懐から何かを取り出す。

それは、古めかしい時計の文字盤のようなものだった。しかし時計にしては針が一つのみ。しかも針は動く事なく、現在二時の辺りを指している。

そして不思議な事に、盤には遊児の名前が刻まれていた。

それを見て、ペスト医師はどこか慈愛のような表情を浮かべる。

『ああ。どうかご無事で管理人。あなたに洗礼を。あなたに祝福を。あなたに救済を。

……そして』

その時、ペスト医師の黒翼が一瞬だけ純白に色を変える。

『いつの日か、目覚めて我を迎えるのだぞ。我が最初にして最後の使徒よ』

戦いの代償。そして事件の顛末 その一

目を覚ました俺が最初に目にしたのは、見知った保健室の天井と、

『やあー！ やくつとお目覚めかい？ 気分はどうだい？』

「……いきなりお前のドアップが顔面近くに来て驚いた以外はまあまあかな」

いつものように急に出てきて軽口を叩くデイーを手で払いながら、俺は自分の調子を確認する。

すこぶる身体が固く、あと喉も掠れている。まあ長く寝ていたようだからそこは仕方ないか。首だけ動かして周りを見ると、ベッドで横になっている俺の他には誰も居ないようだった。

『ほら。水でも飲みなよ。大丈夫。今回は特に仕掛けなんかしてないから』

「ああ。助かるよ」

いつもどさくさで蓋の空いた缶ジュースを薦めてくるようなデイーだったが、今回渡してきたのは普通のミネラルウォーター。ありがたく喉を潤す。

「ありがとうよ。ところで質問なんだが良いか？ ……ネクはどうした？ 皆は？」

夢の中の出来事は、些かぼんやりしているがそれなりに覚えている。

俺は幻想体達に連れられて夢の出口まで辿り着き、そこでネクに現実まで意識を引っ張り上げられた筈だ。

しかしここに居るのはデイーのみ。ネクの姿はなく……というより、誰も居ない。当然ネクと一緒に居る筈のレイシアや罪善さん、セイさんもだ。

俺がそう疑問を口にする、デイーは少しだけ困ったような声で言う。

『えっ!? ……ここに居るけど?』

結論から言うと、どうやら俺は幻想体の姿が視えなくなっただけらしい。

原因は精霊の力の使い過ぎ。デイーが言うには限界まで振り絞って無茶をした結果、その反動が来ているらしい。時間を掛ければまた元に戻るようだが、それもどのくらい掛かるか分からない。数日で戻るかもしれないし、数か月かかる可能性もあるという。

肉体はこの通り非常にだるくて力が入らず、さつきからベッドの周りで幻想体達が心配そうに声をかけているらしいがそれも聞こえない。なんとも申し訳ない事だ。……だが、

カタカタっ!?

「……いや罪善さん居るじゃんっ!? 普通に見えるし」

新たに現れた見慣れた頭蓋骨に、俺は突っ込みを入れると共にどこかホツとしていた。

そこでさらに詳しくデイーを問い詰めてみれば、自力で実体化出来る幻想体や精霊なら見る事も声を聞く事も出来るという。

しかし俺の体調も鑑みて、一度に実体化出来る幻想体は一体のみ。それも消費量が少ない低レベルの幻想体に限定されるという。

『いったん代表して罪善さんが出ているけど、それも長くは保たない。何か幻想体達に伝えたい事があるんなら今の内にね』

珍しくデイーが気遣うように言ってきた。……そうだな。俺は罪善さんに向き直ると、ゆっくりと頭を下げた。

「色々言いたい事も、聞かなきやいけない事もあると思う。でも、まずはこれだけ言わせてくれ。……ありがとうな。力を貸してくれて。皆が居なかつたらどうなっていたか分からない。本当にありがとう」

カタカタ。

罪善さんは少し歯を鳴らすだけで、ただ俺の言葉を待っているようだった。

「それと……全員にきちんと礼を言えない事にごめん。そして、できるなら……またこれからも力を貸してくれると助かる」

今回の件は一步間違えば世界の危機。まさに原作でもあったような、闇のデュエルなものが時折発生するとんでも展開だった。こうして一応無事に俺が戻ってこれたのは、運が良かったのと幻想体達が助けてくれたからだ。

そして、厄介な事に俺も主人公たる十代もまだ一年生。アニメ的に言えばやつと一年生編が終わったというだけで、おそらく二年生と三年生でまた別の大事件が起こる。

今のままじゃ間違いなく、頼りになる幻想体達の力を借りなきゃ俺一人じゃどうにもならない。

だから俺は頭を下げるしかない。皆の厚意に頼るしかない。

そんな俺を見て、罪善さん始め幻想体達はどう思っただろう？ 頼りにならない奴だと呆れただろうか？

そのまま頭を下げる事しばらく、

『……馬鹿ね。当たり前じゃない』

その声にハツとして顔を上げると、そこにはセイさんが罪善さんの横に立っていた。

実体化しているのに、まるでこっちの身体から力が抜けていく感じはない。そもそもまだ罪善さんが出ているのに見えている。それはつまり、完全に自分の力だけで実体化しているという事。

ほとんど力の余裕なんてないだろうに、直接俺と話すためだけに力を振り絞って、彼女はそこに立っていた。

『ここに居る皆が同意見よ。分かったら早く身体を治しなさい。我が主様』

セイさんはそう言うのと最後に微笑んでスッと姿を消した。入れ替わるように罪善さんが前に出てくる。

カタカタ?

「……………ふつ。こんな頼りになる皆が居てくれて、俺は幸せ者だよ」

『まったくだね。……………おつと。君にお客さんだ。僕達は引つ込んでいるとしようか』

そう言ってディーは姿を消し、罪善さんも実体化を解く。すると、

ガラガラガラ。

「遊児っ！ 目が覚めたんだなっ!？」

「久城君っ！ 良かった！ 気が付いたんっすね！」

「ちよつと貴方達。嬉しいのは分かるけど静かに」

部屋の扉を開け、入ってくるなりベッドに駆け寄ってくるのは十代と翔。そして二人

を嗜める鮎川先生と、

「……よお。ようやく起きたか。寝坊助なファンめ」

「ああ。俺としては体感でさつきぶりなんだけどな。おはようさん」

扉に背を預けてキザに指を振る推しに、俺は弱々しくもしつかりと腕を上げて返した。

さて。ここからは十代達から聞いた眠っていた間の話と、今回の事件の顛末を少し掻い摘んで語るとしよう。

俺は丸一週間も目を覚まさず眠りっぱなしだったという。幸い眠り続けている事以外は健康で、全身の疲労やケガも常人に比べてものすごい速さで治っていたので鮎川先生も驚いたのだとか。

しかしいくら何でも長すぎるため、もう一日遅ければここから本土の病院に移送する事も考えられていたとか。危なかった。

その一週間にも様々な事があつたというが、まずは今回の事件関係者達の事から話し

ていく。

最初に今回の事件の元凶、影丸理事長は現在どこかの病院で入院中らしい。いくら色々あつて再び自分の足で立てるようになったとはいへ、身体に負担が掛かった事に違いはない。精密検査やら何やらで長期入院コース。諸々の罪を償うのはその後になるとか。

同じく事件に関わったカミューラは現在逃亡中。元々二重三重に策を練るカミューラの事だ。非常用の脱出手段くらい用意していそうだし、なんならあの日に島を出る定期船もあった。そこに密航して脱出した可能性もあり、足取りを追うのは困難らしい。

ただ彼女が持ち出したラビエルと幻魔の扉のカードは俺の手持ちから見つかったため、至急何が何でも捕まえるとかそういう流れにはなっていないという。

ダークネスは現在カードに封印されて学園に保管されている……のだが、あれは実際なんだったのか今でも良く分かっていないらしい。遊戯王無印のように、仮面に何かしらの意思が宿っていてその部分だけ封印されたという考えも出来るが、下手に封印を解けない以上どこまで行っても推察に過ぎない。

タニヤ、アビドス3世は消息不明。そもそも片やアマゾネスにして精霊、片や遠き過去のフアラオなので消息を追うも何もないのかもしれないが。

ザルグを始めとした黒蠍盗掘団は、相変わらず万丈目の所に居る。どうも居心地自

体は悪くないらしく、時折他の精霊達と雑談したりゲームに興じたりして割と満喫しているらしい。

タイタンは……まだ漁師を続けている。すっかり他の船員達とも仲良くなったように、本人曰く『自首する事自体はいつでも良いのだが、出来れば船が次の寄港地に着くまで待つてくれ』との事。最終的に決めるのはタイタン自身だが、もうこの際あつちで罪を償いつつ第二の人生を送っても良いかもしれない。

そして、最後に俺がセブンスターズに潜入するきっかけとなった肝心要の大徳寺先生だが、

「やあやあ！ 元氣かになや久城君。無事目が覚めたようでホツとしたにや」

この通り、十代達に話を聞いている途中でやってきた時点でもまだ元氣である。少なくとも見た目だけは。

ただ後で聞いた所、本人曰くもう気合だけで無理やり保たせている状態であり、気を抜いたら身体が次の瞬間崩壊してもおかしくないのだとか。

「君には本当に苦勞を掛けたにや。でも……そのおかげで、こうしてまだ教師を続けられる。君には感謝してもしきれないにや！」

「いえ。俺が自分から首を突っ込んだ結果ですから。大徳寺先生がまた授業が出来て良かった」

いくら頑張つても精々今の学年が進級するまで。しかし、事件を乗り越えた先のその僅かな時間こそが大徳寺先生に一番必要な物だったのだと思う。

最後に三幻魔のカードだが、再び鮫島校長の監視の下で七精門に封印された。一緒に幻魔の扉もだ。

一応影丸理事長が使ったような合鍵もまだあるらしいが、そちらは鮫島校長が管理するらしい。鮫島校長が次の幻魔所有者になったら大ごとだが、それは流石にない事を信じた。

こうして、三幻魔を巡る長い長い戦いは、本当に終わりを迎えたのだった。……だが、

「えっ!? 俺が眠っている間に進級試験が終わった!? それに隼人が学園を辞めたって!?」

俺はどうやら大きく寝過ぎしてしまったらしい。……進級できるかな?・

戦いの代償。そして事件の顛末 その二

「バトルだ！ 『E・HEROフレイム・ウイングマン』で、翔にダイレクトアタック！」
「うわあああつ?!」

十代が召喚したモンスターの攻撃が翔に直撃する。これにてLPは0となり、翔はそのまま立っていられずに尻もちをついた。

「ガツチャ、楽しいデュエルだったぜ！ 翔」
「あいたたた。やつぱり強いっすよアニキは」

ああ。やはりデュエルはこうじゃなきや。闇のデュエルだのなんだのじゃない。純粋にゲームとして楽しみ、或いは競技として互いを磨く物でない。

レッド寮の二階から、俺はのんびりと二人のデュエルを眺めていた。そんな中、ふとこれまでの事を思い出す。

幻魔を巡る戦いが終わり、俺が目覚ましてからしばらく。こうして学園は穏やかな日常を取り戻しつつあった。

ただ、まるで何も起きなかったという訳ではない。物騒な展開がなかったというだけ

で、様々な事があつたんだ。

まず、俺が balanサーとして暗躍していた事を、鍵の守り手達や関係者に告白し謝罪した。二重スパイとは言え一応敵側であつたので、嫌われたり軽蔑されたりするかと覚悟していたのだが。

『えっ!? 何で俺達が嫌うんだ? 寧ろ助けてもらつて助かつたぜ』

『ああ。別に balanサーが何かしら悪さした訳でもないしな とうより聞く限りでは、未然にセブンスターズが暴走するのを防いでいたという感じだ』

『それに、審判役として貴方はいつも公正だった。そこに敵も味方もないわね』

『それを言つたら僕なんかそのままセブンスターズだったよ?』

これである。まったくこいつらはお人好し過ぎるぞ。……その内何か礼をしないと。な。

次に進級試験。学生にとって一年の総決算であり、ある意味十代にとっては幻魔より恐るべきものである。試験官と戦う実技試験はともかく、筆記試験では大いにリアルな

LPを削られたとは本人の談だ。

しかし終わってみれば、少なくとも俺の知り合いはほぼ全て進級できる事となってホツとしている。……翔曰く定期的にレッドの面子で集まってやっていた勉強会のおかげだとか。役に立ったのなら何度か誘った甲斐があった。

そして、意識不明で試験に不参加だった俺の処遇だが、

『特別枠で進級つ?! なんですかそれ?』

『にやにや! 何って君が以前ここに入学してきた時もその枠で入ってきたのにや!』

特殊な事情で進級試験を受けられなかった場合、それまでの成績や授業態度等を考慮して試験の代わりにするっていう制度にや』

という具合で、無事俺も進級となった。

ちなみに本来この制度、余程の成績優秀者でないと使われず俺はギリギリ対象外だったらしいが、そこは大徳寺先生やクロノス先生、鯨島校長等の推薦分の加点でOKとなつたらしい。……堂々とは言えないが、セブンスターズに対応していた事も加点に繋がったんじゃないかと思う。

次の大きな出来事は隼人について。なんと俺が眠っている間に、隼人が学園を去る事となった。

これはまた以前のような親子間トラブルかと身構えたが、よくよく聞いてみればあの遊戯王無印に登場したペガサス・J・クロフォードの会社、インダストリアル・イリユージョン社（長いのでI2社）に入社したというのだ。

この時点で俺はとんでもなく驚いた。何故つて隼人が学生から直接就職するのもそうだが、原作では死んでいる筈のペガサスがまだ存命だったからだ。どうやらマンガ版とは違い、アニメ版では戦いで大怪我こそしたものの生きていたようで、今でも会長としてバリバリ仕事をしているのだとか。

……確かペガサスが死んだことで彼を慕う天馬夜行が暴走し、三幻神と対を成す三邪神を引つ張り出してくる遊戯王Rという外伝があつた筈だが、その辺りは無かつたことになるのだろうか？ こつちにはもう三幻魔が出てるし、これ以上対抗馬が出てきたら厄介すぎるぞ。

話が逸れたが、元々隼人はデュエリストとは別にカードデザイナーの素質があつた。これは学園祭で隼人が書き上げたコスプレデュエルの看板の絵が、結構な人気を得ていた事からも明らかだ。

そして学園生活中に自分のデザインでI2社に応募した所、それがなんとペガサスの目に留まり、本人からカードデザイナーとして入社しませんかと推薦されたという。この辺りは人づてなので詳しい内容は分からない。しかしそこに待ったをかけたのはクロノス先生だ。

そして始まったのは隼人とクロノス先生のデュエル。勝つてデザイナーの道へ転向するか、負けてこのまま進級するか。……こうしてみると原作無印の戦いの儀を思い出すな。

クロノス先生が『アンティークギアゴレム古代の機械巨人』でもって隼人の覚悟を問うなら、一年間の成果を見せるべく隼人は『マスター・オブ・OG』を繰り出して立ち向かう。

結果、あと少しという所まで追い詰めたものの、リミッター解除で攻撃力を倍にした古代の機械巨人にクロスカウンターを決められマスター・オブ・OGはノックアウト。隼人の敗北となった。

しかしそこは割と人情派のクロノス先生。これだけの実力と覚悟があるのなら、デザイナーに転向してもやっていけるノ・ネとその背を押し、無事隼人はI2社に就職した……と言う話だ。くそう。何で俺はそんな時に寝込んでたんだっ!?

さて。もう一つ大きな出来事と言えば、カイザーの卒業記念模範デュエルだろうな。これはちやんと俺も生で見た。

カイザーが最後の対戦者に指名したのは十代だった。この辺りは流石主人公と思っただが、もう一つ気にかかったのは万丈目の事。なにせ居心地の良かったアカデミアノース校を離れてまでここに戻ってきたのは、この卒業デュエルでカイザーと戦うためなのだから。だが、

『正直に言つて、俺が戦う相手は十代にしようか、或いはお前にしようか、最後まで悩んだよ。どちらと戦つても、間違いなく新たな門出にふさわしい最高のデュエルになると考えたからだ』

『なら、何故俺じゃなく十代に？』

『最後の決め手になったのは……お前は俺より先に越えたい相手が居るのだろうか？ 万丈目。だから今回は十代を選んだ。……先にプロの世界で待っている。戦いたいのなら、上がってくる事だ』

『……ああ。待っている』

という二人の会話を偶然聞いてしまった俺はどうすれば良いのだろうか？

ちなみに万丈目の越えたい相手とは吹雪さんの事らしく、なんでも操られて普段よりキレがない吹雪さんに引き分けて相当悔しかったのだとか。今では時折デュエルを挑み、やや負け越しながらも少しずつ盛り返しているという。

……なお終わった後では二人で明日香談義をするのが通例だとか。明日香談義って何っ!?

そして肝心の十代対カイザーの卒業記念模範デュエルだったが、これまた凄まじく白熱した。

最初は以前負けた相手とあつて珍しく委縮していた十代だったが、途中で吹っ切れたのかなんとデュエル中に食事休憩を挟むという暴挙に出た。これが食事フェイズという奴なのだろうか？

トメさん特製の握り飯をたらふく頬張り、ついでにお茶で一服してからは完全にいつものデュエルを全力で楽しむ十代。

何度倒しても復活してくるカイザーのサイバー・エンドに真つ向勝負で立ち向かい、最後の最後で互いに繰り出したのはまさかの同カード『決闘融合ーバトル・フュージョン』。

双方攻撃力20000越えという滅茶苦茶な融合モンスター同士の殴り合いは、以前カイザーが使った『決戦融合ーファイナル・フュージョン』を十代が使用し、両方50

000を超える効果ダメージを受けて引き分けという壮絶な幕引きとなった。桁がおかしいレベルだが、一年の総決算ならこれくらい派手なものも有りかもしれない。

最後に……大徳寺先生の事を話すとしようか。

結論から言えば、大徳寺先生は見事十代達が進級試験に合格したのを見届け、この年度を最後に教職を退いた。表向きはだが。

実際は、その身体がいよいよ本当に限界を迎え、崩壊する様を誰かに見せたくはないから最後の旅に出るといふ事だった。

この事を知っているのは俺や鮫島校長等本当に一部の者のみ。生徒は勿論の事、顔に出るクロノス先生にも秘密だった。……まあ実際に戦った十代や、名探偵万丈目サンダーなら勤づいていたかもしれないが。

出発前日、最後にレッド寮生総出で準備した“さよなら大徳寺先生パーティー”は非常に盛り上がり、

『そう暗い顔をしないでほしいのにや！……君のおかげで、戦いの途中で終わる筈だった私がここまで来れた。君には感謝してもし足りない。本当にありがとう』

そんな言葉を俺に遺し、鍊金術師アムナエルこと大徳寺先生は学園を去った。

後日、大徳寺先生の秘密研究室にて、彼の生存の証である元の肉体のミイラが完全に風化していたのを確認。俺はそのまま何も言えずに研究室を出て、

『やあつ！戻ってきちゃったにや！』

『いや何魂だけで戻ってきてんですかっ!?』

しれつとデイーと同じ光球のような姿の幽霊になり、帰ってきた大徳寺先生に突っ込みを入れたのは悪くないよな？

そのまま通りすがりの愛猫フアラオに飲み込まれ、地縛霊ならぬ猫縛霊としてしばらく現世を謳歌する大徳寺先生であった。俺のしんみりした気分を返してほしい。

さて。大きな出来事は大まかにこんな所だろうか？

その間に俺のズタボロにされた身体もだいぶ良くなり、デイーによるとまだ完全ではないが、精霊関係の力も少しずつ戻りつつあるという。

二年生になったらまたアニメ版のトンでもない事件が発生するかもしれないが、それまでもうしばらくささやかな休息を楽しむのは問題ないだろう？

「おくい遊児！ そんなところで見てないで、お前もデュエルやろうぜ！」
「そうつすよ久城君。一緒にやりましょうよ」

おっと。そんな事を考えていたら、下の二人から声を掛けられた。いくら安静にしていた方が回復が早いとはいえ、やはりゲームは見てるだけでなく実際にやってこそだろう。なので、

「そうだな。それじゃあちよつとだけやるとするかっ！」

カタカタ。カタカタ。

「……ああ。分かっているよ罪善さん。羽目を外しすぎないようにするって」

俺は隣で心配そうに歯を鳴らす罪善さんに一声かけて、一步一步階段を下りていく。そして、

「待たせたな二人共。まだ病み上がりなので言わずとも分かると思うが」

「ああ！ 身体に活を入れるために全力で行くぜっ！」

「それなら僕も頑張るっす！」

「いやそこはお手柔らかにしろっ!!? ……まあ良いけどさ。手加減なんかお前らのガラじゃないだろうし」

俺は困りながらも少し笑ってしまおうという複雑な顔で、デッキをセットしたデュエルデイスクを展開する。それに合わせて、罪善さんがやれやれという雰囲気俺の隣に

そつと移動する。

さあ。久々にいつもの掛け声で行くぞつ！ せうのつ！

「「デュエルつ!!!」」